
女神異聞録～違術使いの召喚士～

白亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神異聞録〜違術使いの召喚士〜

【Nコード】

N7236R

【作者名】

白亜

【あらすじ】

前世の記憶を思い出し力に目覚めた彼が見つけたものは『悪魔召喚プログラム』

目的も無い、やることも無い。そんなどこにでもいる彼は異質な力を身につけ

どこに行くのか…

ある程度チート系ですが、彼自体は非常に弱いです。

動き出す時計

僕には前世の記憶がある。

といつても凄い偉人でもなければ悪党でもない。

簡単に言えばどこにでも居る普通の人間だ。少しばかり底辺に居るレベルの。

ただ唯一特技があるとすれば、凄い想像力豊かだったくらいだろう。色々な小説を見たり、書いたりして想像を膨らませていたらしい。

強力な魔法を使う勇者とか、あらゆる剣技を使う戦士とか。

まあ、所詮は想像の世界だったので、それを使える事が出来たわけじゃないけど。

普通の人間だった、そして普通に死んでいった。それだけの人生だったみたい。

そんな記憶に目覚めて何が嬉しいのだろう。ダメ人間の一人だった事を思い出しても何も嬉しくない。

ましてや、こんな『力』に目覚めるなんて…

僕の目の前には金色に輝くビーダマ位の大きさの珠がいくつも転がっている。

そしてタロットカード位の大きさの無地のカードが数枚並んでいる。前世の記憶に目覚めてから、行き成り出るようになったこの『力』前世での漫画で僕は知っている。

まあ、カードの方は良く知らないんだけど、何故か使い方が理解できる。珠もカードも色々滅茶苦茶な能力だった。

珠の方は『文珠』という、漫画の世界では神様さえも使いようによつては殺せるという凄まじいアイテムだ。

そしてこれは金色の文珠。通常の文珠は綺麗な碧色をしていて、主人公に近かった男性が作り出していた。

その威力は凄まじく、絶対零度に近い冷氣や相手を一撃で消滅させる事もでき、局地的に天候を操作し、コンクリートを毛布かなにかのように柔らかくする事も可能だ。

そして、この金色の文珠は神様が持っていた文珠と同質で、その効果は通常の文珠より数段階以上の威力を持っている。

数値に換算しようにも、普通の文珠の時点で威力が凄まじいので調べようが無い。

込められる文字は漢字と数字、そしてサンスクリット文字とルーン文字だ。ただ、これを使うには文字と同時にイメージも必要なので、

文字だけ込めても威力は低くなってしまるのが難点だろう、+10が+7〜9になる程度でしかないが。

恐ろしいのはこの文珠という代物は文字を連結する事で、威力を二乗倍に出来たりするというありえない一面もある。

ただの『火』よりも『火炎』の方が意味的にも強いだろうし『爆炎』なんて使おう物ならどうなるかなんて考えるまでも無い。

更にいうと、連結する数もどうやら無制限のようだ……………正直恐ろしい、できない事なんてほぼ無いのだから。

そして、こちらのカード。文珠と比べると見劣りするが能力的に便利だった。

どうやらこのカードは色々な物を収納できるらしい。大きさも何もかも無視してこのカードに封じる事が出来るのだ。

使わない服などで試したが綺麗に収納された。すると無地のカードに服の絵が現れたのだ。恐らく封じたものを表しているのかもしれない。

デメリットとして収納できる数は1枚につき1個に限定されているのだが、逃げ道があったりする。

1個に限定すればどんなものでも収納できるのだ…そう、それが例えば『家』とか言っても。

そして、家の中にある全ての物も『家』と認識して収納してしまえるのだ、袋に物を詰め込んでも『袋』をしまうのなら、それは1個として扱われる。

使いようによっては数多くの物を収納できたりするのだ。使い方を

考えればかなり便利だろう。

更にいうと、一度使うと消えてしまうカードと、何度使っても消えないカードの2種類があった。何度使っても消えない方は無地のカードで回りに金色の装飾がされている。

ちょっと豪華だなと思う……………まあ、それはいいのだ。便利な事は嬉しいものだ、文珠もこのカードも上手く使えば便利だろうし。

さて、僕の名前を言っておこう。

といっても凄い独特な名前とかではない、前世は日本人だったが、現世でも日本人だった。

名前は『佐藤 大樹』（さとう、たいき）だ、どこにでもある名前だろう。特に佐藤なんて苗字は日本ならどこにでもあるから。

年齢は18歳。高校3年なんだけど、今は最後の冬休み中だ。学校はあまり好きじゃない…僕は皆に無視されていたから。まあ、それはどうでもいい。

ちなみに兄妹はいない、両親は共働きで夫婦仲はあまり良くないみたいだ、お互い顔を合わせると喧嘩ばかりしている。

恐らく僕が卒業したら別れるのだろうな…前世でも両親は喧嘩ばかりしていた。せめて現世では幸せな家族になってほしかったな、と前世の自分の記憶からため息をつく。

色々アルバイトはしてきたので貯金はそれなりにある。もし両親から家を追い出されても暫くはやっていけるだろう。この能力もあるし。

しかし、こういう能力に目覚めて前世の記憶もあるという事はどこかの漫画かゲームの世界に飛ばされたのかなと考えたけど、そうじゃないらしい。

別段ヒーローになりたいとか、世界を救いたいとか痛い事は考えてないのでいいのだけど、ここまで変な能力があると少し勘ぐりたくなるというものだ。

まあいい…今日も適当にネットサーフィンでもしておこう。

普段家に一人で居るとこういうのが唯一の趣味になる、TVもあんまり好きな物はやってないし、ゲームはいい加減に飽きてきた。

最近は小説を見たり、色々なサイトを回るのが趣味のようになってる。

今日も適当に……………これ…は…？

そこには信じられないものが乗っていた。

悪魔召喚プログラム

知っている、これは前世で知っている。ゲームにあったものだ。いやまて…冗談に決まっているだろう、これはゲーム『女神転生』のネタサイトに違いない。

違わないはず、なのに。何故これが『本物』だと理解してしまうの
だろう。おかしい……

僕はすぐさま女神転生、ペルソナで検索をかけてみた。そういえば
ゲームなんて全然していなかった。前世で見た事のある漫画やゲー
ムはほぼ全てあったのだ。

無かったのはGS美神・極楽大作戦だけだ。それも前世の記憶が目
覚めて文珠を使えるようになるまで気にもしていなかった。

考えつつも検索をかける……すると……

「ない…女神転生もペルソナも…あるのは似た様な物だけ…」

ペルソナとは仮面の事だ、それに関するwikiならあったがゲー
ムのペルソナの事はどこにも乗ってない。

女神転生にしても同様だ…そもそもアト スというゲームメーカー
すら存在していない。

となると…この悪魔召喚プログラムは………

まずは色々調べてみたが、まったくわからない。現世でもあまり頭
は良くないのだ、プロでもないし理解なんて出来ない。

ダウンロードするしかこれが本物が調べる事はできないだろう。

しかしイタズラならPCをハッキングされる可能性が………
いや。そうだこういう時こそ文珠の出番だろう。

この場合は『進入阻止』だろうか、イメージとしてはウイルスなどを阻止すると考えればいいだろう。

文珠を4つ取り出しそれぞれに文字を込める………前世でみた二次創作での文珠の連結は難しいと言われてたが問題なく繋げられるようだ。

出来るんだから良しとしよう。後はイメージを込めて発動させる。使い方は脳内で銃の引き金を引くような感じだ。

他にもあるんだろうけど、これが一番やりやすい。リイインと優しい音を立てて文珠が起動した。

さて…悪魔召喚プログラム…果たして本物か否か。

僕としては高確率で本物だと睨んでいる、多分この世界は女神転生の世界を舞台にした地球なのかもしれない。

ただ、主人公などではなく僕は一般人なのだが。

容量は1ギガ程度、女神転生が出た時代のパソコンだとまず入りきらない容量だろう。500Mあれば結構何でも出来たというし。

今は1テラあっても足りないくらいなのだが………ああ、言い忘れていたけど今は平成23年だ。女神転生系のお約束である東京大破壊は起こっていない。

なので、真・女神転生の舞台ではないだろう。あれは1999年に東京にICBMが振ってくるから…主に神様のせいだ。

暫くどうでもいい事を考えているとダウンロードが完了した。すぐにウィルススキャンをかけるが問題はない。

文珠が効いているのかそれとも本物なのか。とりあえず展開してみるとリードミイがあったのでそれを読んでみる。

その結果は……………

『DDS-SYSTEM 取扱説明書。Digital Devil Summoning System(デジタル式悪魔召喚術システム)』

DDSを手に入れた者よ、私はスティーブン。このソフトは従来、物理的や魔術的に悪魔を従えるという本来の手間を簡略化し、機械的にする事を可能にしたソフトだ。

これから徐々に復活しつつある悪魔に対抗する為に私が開発した物である。

この先我ら人間達は未曾有の危機に陥るだろう。その先を安全に生き抜く為にもこのDDSを有効活用して欲しい。

詳しい使い方など、よく読んで理解してくれたまえ。君達が悪魔と共に生き抜いていく事を私は願っている』

どうやら…本物らしい。この世界が女神転生、もしくはペルソナの世界。あるいはその能力がある世界だと言う事は理解した。

悪魔か…恐らく暫く後に世界的に悪魔が蔓延る事になるんだろう。下手をすれば核ミサイルが振ってくる可能性もある。

あつて困る物じゃないな、使わせてもらおう事にしよう。

使えるのは…どうやらゲーム機や携帯、スマートフォンでも使用可能らしい。

一応携帯もスマートフォンも持っている（自分でお金をためて購入した）から、これに入れておこう。

問題は戦えるか、という事だ。勿論戦闘なんてした事がない、高校では無視されていただけで暴力沙汰とかはなかったし。

僕自身喧嘩が得意なほうじゃない。身体を鍛えて来た訳でもないし才能があるわけでもない。

レベルという概念があるのならば戦っていけばレベルが上がりますが…そういうえばDDSにはそういった機能があつたはずだ。

DDSを起動すると色々なツールが使えるようになっていた。

これは…【ハーモナイザー】か、普通の人間を生体マグネタイトを消費し続ける事によって身体強化し悪魔と戦えるようにするツール。

便利な機能がついていたものだ。何をするにしろ身体能力が上がる

という事は選択肢が増える事だろうから。

問題はその生体マグネタイトが0という点だけど…まあおいおい貯めて行くしかない。

後はステータスがあつた…早速見てみよう

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：1 「属性」：N-N

「所持金など」 MAG：0 ￥：250000 魔貨：0

「ステータス」

HP：21 MP：24

力：1 知：2 魔：1 体：1 速：1 運：1

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・文珠の素質？

・マジックカード？

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

「アイテム」

・文珠15個

・マジックカード10枚

…これは酷い。唯一高いステータスが知力の2しかない。せめてもう少し高いかと思っただけどやはり普通の現代日本人、しかたないか。

しかしまいった…文珠があるとはいえハーモナイザーも機動出来ない状態で悪魔と戦ったら多分死ぬ。いや、100%死ぬだろう。

文珠を上手く使えば攻撃力はあるかもしれないが、考えても埒が明かないな。今日は色々調べるだけ調べて休むとしよう。

時は2日ほど過ぎる。

あれから二日が過ぎた。

この時期は寒くて外に出る気にはならないけどそうも言ってもらえないだろう。

今日はアナライズ機能などを使って弱い悪魔を探しに行く事にした。倒せる悪魔は倒してしまつてマグネタイトを補充しないといけないからだ。

別段そんな事をする必要はないんだろうけど、こうして悪魔プログラムを手に入れた以上は使つてみたくなるのは人間のサガだろう。

人生は半分以上諦めているし、死ぬ時は痛くなければそれでもいいような気がする。まあ、黙つて死ぬつもりは到底無いが。

万が一のために文珠に【転移】といれてあるから、危険になったらためらわず使う予定だ。

ちなみに文珠でマグネタイトの補充は出来なかった。文珠とはいえ、出来ない事も多い。

両親は朝から仕事に出ている。テーブルには2000円がぽつんと置かれているだけだ…もう破局も近いんだろう。

そんな事ばかり気にしていても気が滅入るだけだ…さっさと出かけることにしよう。

2000円を財布に突っ込み食料と護身用のサバイバルナイフを持つて家を出た…

エネミーソナーを頼りに色々歩いているが、そうそう悪魔が居る場所なんて見つからない。

まあ、そんなにうじゃうじゃしていたら今頃自衛隊が動いているだろう、役に立つかは別として。

正直、ゾンビ程度でも下手をすると倒されそう。勿論それは僕にも言える事なのだが。

それにしても賑わっているな…人生を謳歌してる人は毎日が楽しいのだろう…妬んだって仕様がないとわかっていても…嫌な気分になる。

前世もたいして碌な人生じゃなかったが、やはり行動しないと人生なんて上手くいかないんだろうなと自嘲する。

事なかれ主義だった、痛いのも怖いのも嫌いだ、周りの蔑むような目や嫌悪の目、白い目が僕を傷つけた。

言い返せばよかったのだろう、戦えばよかったのだろう。まあ、今更だ。

いけないな、一人で歩いていると意味も無く鬱になる……………！？

エネミーソナーに反応があるっ！？

どこだ…辺りをきよろきよろと見回すとかなり前に潰れた店から反応があった。

微弱な為、上手くいけば弱い悪魔だろう。

「…怖いな…ああ、怖い…でも、このままずると意味の無いような人生を歩くよりは無謀な人生を歩くのもまた人生かな」

どうせ前世を知って一度死を知った身だ、これ以上の恐怖は…あるけど動けないほどじゃない。

ポケットにいれてある文珠を確認する。

あらかじめ文字は込めてある。【浄】が4個 【滅】が2個 【癒】が2個 【防】が4個だ、他には【脱出】の2個と何も込めてないのが1個。

悪霊程度なら浄で倒せるだろうし、防御が4回あるからどうにかならはらずだ。

ステータスが低くても文珠のおかげで戦えるだろう…というか僕はアイテムを使うだけなのだが。

さあ、行く前に勇気付けと行こう。無字の文珠に【勇】と込め発動させる。イメージも発動もこの2日でなれたものだ。

身体が暖かくなる、恐怖が薄らぎ平常心に保たれる……………本当に便利な力だ。

さて…行こう。

続く

動き出す時計（後書き）

適当に書いてみました。

のんびり更新の予定です。楽しんでもらえるといいのですが。

アンケートについて (前書き)

アンケートを投票する方は此方をご覧ください。

こちらにルールと、今現在の投票分を載せる事になりました。

11/07/09：アンケートの優先、最優先についての変更。

コミュキャラの投票に対する変更 4番目を見てください。

正しこれは『次回』から適用とします。

アンケートについて

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

〈125話時点〉現在アンケート中断中

再開予定：不良編終了後。

現在のアンケート総数

最優：かがみ：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後2）

最優：つかさ：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後2）

通常：みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダツキ：0票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

優先：パール：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

コミュイベント

1位＝自動的にメインコミュ

2位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位＝一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回＝1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュが切捨てになる。

通常＝1票に付き『1票』基本はこれ。

優先＝1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優＝1票に付き『3票』現在該当者無し

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
 - 2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く
 - 3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）
- 3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが
- 無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1～3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

- 3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。
- 4：優先、最優先のキャラが『50票』以上獲得した場合、それ以降の投票は全て『1票』として扱う。
- 5：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後「冗談

【COMP】Status (前書き)

ステータス表です。

あつたほうがいいかな？ と乗せておく事にしました。これからの参考にごうぞです。

4 / 0 1 人間にらき すたの かがみ、つかさ、みゆきを更新しました。

4 / 0 2 大樹のアイテム更新、ペルソナを4体追加しました。

4 / 0 3 大樹のペルソナなど更新、こなた、ピクシー、アメリカのステータス更新しました。

4 / 0 4 こなたのステータス更新、こなた仲魔更新、人間同士信頼度設置。

4 / 0 7 ステータス更新。

4 / 0 8 アイテムなど更新 ピクシー更新 仲魔必要MAG更新

4 / 1 2 主人公更新 アリス更新 モラクス追加 ダメージなど

の表記追加

4 / 1 4 色々更新

4 / 1 6 大樹と仲魔達更新

4 / 2 0 こなた更新 守護天使追加

4 / 2 1 守護天使技能追加、守護天使能力説明追加、他仲魔追加。

4 / 2 1 ステータス更新

4 / 2 2 信頼度 ステータス更新

4 / 2 3 文珠スキル更新

4 / 2 3 ステータスについて 一番下に記載

4 / 2 6 大樹、こなた更新。食料品などまとめ(下部記載)

5 / 0 4 大樹達更新、トビカトウ削除、又工追加

5 / 0 7 みゆき更新

5 / 0 9 大樹更新

- 5 / 1 1 こなた更新 こまこまと追記
- 5 / 1 3 色々更新
- 5 / 1 3 こなた、みゆき更新 仲魔更新
- 5 / 2 9 色々更新
- 6 / 3 0 色々更新
- 7 / 1 7 色々更新 大樹こなた「ハーモナイザー」発動時ステータス「」を作成
- 7 / 2 6 色々更新 スキルのレベル段階について追記
- 7 / 2 6 威力上昇系の効果変更。(スキル表構築予定)

【COMP】Status

Continue105 時点。各自ステータス表。

大樹信頼度

こなた：4（気になる異性）
かがみ：2（友人）
つかさ：2（友人）
みゆき：3（親友）
アリス：3（仲魔）
ダッキ：1（信用）

こなた信頼度

かがみ：3（親友）
つかさ：3（親友）
みゆき：2（友人）
大樹：4（恋愛）

かがみ信頼度

こなた：4（大親友）
つかさ：5（家族・親愛）
みゆき：4（大親友）
大樹：3（親友）

つかさ信頼度

こなた：3（親友）
かがみ：5（家族・親愛）
みゆき：3（親友）
大樹：2（友人）

みゆき信頼度

こなた：3（親友）
かがみ：3（親友）
つかさ：3（親友）
大樹：4（気になる異性）

アリス信頼度

大樹：4（熱愛）
こなた：2（友人）
かがみ：2（友人）
つかさ：2（友人）
みゆき：2（友人）
ダッキ：-1（不信）

ダッキ信頼度

大樹：4？（熱愛？）
こなた：0（無関心）
かがみ：0（無関心）
つかさ：0（無関心）
みゆき：0（無関心）
アリス：1（知人）

レベル上昇時のポイントについて (人間のみ 悪魔はランダムで上昇)

01~20レベル 1ポイント上昇
21~40レベル 2ポイント上昇
41~90レベル 3ポイント上昇
91~99レベル 4ポイント上昇
それ以降のレベル 3ポイント上昇

人間

ステータス上昇傾向：バランス型

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？ (覚醒者)

「現在LV」：39 「属性」：N・N

「所持金など」 MAG：60300 ￥：15354 魔

貨：20780

「ステータス」

HP：364 MP：297

「通常時」

力：14 知：14 魔：14 体：14 速：14 運：14

「ペルソナ降魔時・リユキツコウシユ」

力：18 知：20 魔：20 体：18 速：19 運：17

「ペルソナ+ハーモナイザー合計値」

力：38 知：36 魔：36 体：36 速：37 運：33

「相性」ペルソナ相性優先

剣： 物： 技： 火： 氷：+ 電： 風：

魔：x 心：x 禁：x 聖：x 呪：x 状：x 万：

「所持スキル」

防御

- ・文珠の素質？
- ・マジックカード？
- ・食いしばり
- ・知略？
- ・ペルソナ・愚者
- ・銃の素質？
- ・命運？
- ・悩殺

- ・魔界魔法の素質？
- ・魔銃の素質？

「所持ペルソナ」

- 剣・バクヤLv24
 - 剣・カンシヨウLv24
 - 戦車・オオミツ又Lv30
 - 太陽・ヤタガラスLv30
 - 愚者・ナナヤシキLv35
 - 女教皇・リュウキツコウシユLv39
 - 恋愛・はいよるこんとんLv40
 - 英雄・クー・フリーンLv40
 - 英雄・ヨコシマタダオLv63
- （特殊）

???

「所持技能」

- ・文珠
- 万能なる効果を持つアイテムを作り出す。
作成するために一日MPを50〜70消費する。

総合MPが80を超えた時に1個完成する。

- ・コピーマジック
- 対象のマジックカード1枚をコピーする
消費MP20

- ・マハ・ラギダイン？
 - ・マハ・ザンダイン？
 - ・マハ・ジオダイン？
 - ・マハ・ブフダイン？
 - ・火炎ガードキル？
 - ・メ・ディアラマ？
 - ・テンタラフー？
 - ・マカジャマ？
- 敵全体に火属性大ダメージ
敵全体に風属性大ダメージ
敵全体に雷属性大ダメージ
敵全体に氷属性大ダメージ
敵単体の火炎耐性を消去する
全体のHP中回復
敵全体を恐怖状態にする
敵単体を封魔状態にする

- ・シャツフラー？ 敵全体をカード状態にする
- ・ハ・キヨウ？ 敵全体を魔鏡状態にする
- ・ステラカーン 味方全体に状態異常反射のバリアを張る
- 1ターン持続
- ・エストマ 自分のレベル以下の悪魔の出現を抑える
- ・デサマン？ 敵単体を魔界に送還する 低命中率
- ・マグラ ?????
- ・シユア・シヨット？ 敵単体に物属性中ダメージ 高命中率
- ・レッグ・シヨット？ 敵単体に物属性中ダメージ 中確率で速
- を下げる。
- ・アーム・シヨット？ 敵単体に物属性中ダメージ 中確率で力を下げる。

武器や防具を持っている場合落とす確率

が発生。

- ・デスペラード？ 敵全体に物属性大ダメージ 要・二丁拳

銃。 現在使用不可

弾を一回で内蔵して

いる分全部消費。

- ・グレイトフルワン？ 敵単体に物属性特大ダメージ
- ・至高の魔弾コピー 敵単体に物属性極大ダメージ
- ・エレメンタルレイド 敵単体に火氷電風属性甚大ダメージ 1

日1回 消費MP全部

「装備」：装備一式は常にカードに収納済み

剣：大般若長光

銃：魔銃・スカアハ 弾数：12

弾：通常弾×50

頭：強化セラミック製プレートバンドナ 物属性ダメージ軽減

体：デモンズスキン 剣： 物理威力増加 魔法威力増加

腕：ガードエンジェル 呪殺無効 魔法防御増加

足：金剛の具足 物理威力増加

「ソフト」

・デビルアナライズ ・改造ハーモナイザー ・HPリカバー

MPリ

・MPリカバーSI ・百太郎 ・ネオ・クリア ・スキヤニ

ング・ゼロ

・ハニー・ビー ・キャプスロック ・Mr・サブライズ

・ナイチンゲラー ・ゲートサーチ ・シュセンドー

・DDR ・アルバート ・シュタイナー ・ダ・ヴィンチ

・オルフェウス ・ヘラクレス

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：390 判断力強化 バラン

スタイル

力：+20 知：+16 魔：+16 体：+18 速：+

18 運：+16

「アイテム」COMP収納可能

・金文珠×4

・文珠×2

・マジックカード 生成量：一日150枚

魔石袋『10個』収納 魔石袋『10個』収納

魔石袋『10個』収納 魔石袋『10個』収納

宝玉収納 ソーマ収納

ダイヤモンド収納 チャクラチップ袋『20

個』収納

・魔法封入マジックカード【各種】仲魔に配布済み

文珠の素質？：文珠を作成する事が出来るようになる。

ランクによって連結や作成スピードが上がる。

現在：最短で2日で1個作成可能。必要MP合計：80

連結個数：5個

マジックカード? : 色々なものを収納できるカードが作成できるようになる。

ランクによって強力概念なども収納できるようになる。

? ランクは特大威力までなら基本攻撃魔法や概念も封じる事ができる。

? ランクは大威力までなら【敵】の攻撃魔法や概念も封じる事ができる。

食いしばり : H P が 0 になっても一度だけ『H P 1』で復活する。

知略? : 様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス + 6 点

銃の素質? : 銃の技能を覚えるようになる。命中に補正

命運? : 命を繋ぐ幸運。レベル回数分致死ダメージを無効化する。

悩殺防御 : 魅了系のあらゆるスキルを無効化する。鈍感になるわけではない。

魔界魔法の素質? : 魔法の素質を持つ。レベルアップで魔法を覚えるようになる。

魔銃の素質? : 魔法を特殊な弾丸に封じる事ができるようになる。レベルが低い内は自分自身の魔法と低レベルの魔法しか封じる事ができない。

ステータス上昇傾向 : 速特化

「名前」 : 泉こなた 「性別」 : 女性 「覚醒段階」 : ? (異能者)

「現在 L V」 : 3 7 「属性」 : N - C

「所持金など」 M A G : 4 8 5 0 0 ￥ : 6 0 0 0 0 0 0

魔貨 : 4 0 0

「ステータス」

H P : 3 5 4

M P : 2 2 1

「通常時」

力：2 1 知：8 魔：1 1 体：1 7 速：4 1 運：1 0

「守護天使降臨後」

力：2 3 知：1 1 魔：1 4 体：2 0 速：4 3 運：1 3

「守護天使＋ハーモナイザー合計値」

力：3 8 知：2 4 魔：2 6 体：3 4 速：7 3 運：2 7

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：× 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

- ・格闘の素質？
- ・計略
- ・悪運？
- ・蛇の道は蛇？
- ・暗殺？
- ・狙撃？
- ・隠密
- ・銃の素質？
- ・守護天使
- ・???？
- ・チャネリング？
- ・守護天使の宿命1点（最大10まで）

「所持技能」

- ・双龍脚？ 敵1～2体に剣属性特大ダメージ 同じ相手を攻撃する場合は2回攻撃。

- ・菩薩掌？ 敵単体に技属性極大ダメージ 相手の防御を無視、高確率で気絶。

- ・首狩り？ 敵単体に剣属性大ダメージ 中確率で死亡。人間には高確率で死亡。

- ・音速拳？ 敵単体に剣属性極大ダメージ。回避にマイナス修正。
- ・回転袈裟蹴り？ 格闘攻撃を受けた時に超高確率で反撃 剣属性特大ダメージ。

- ・雷霆蹴り 敵単体に物属性極大ダメージ 絶対命中
- ・シユア・シヨット？ 敵単体に物属性大ダメージ 超高命中率
- ・レッグ・シヨット？ 敵単体に物属性大ダメージ 高確率で速を下げ。

- ・アーム・シヨット？ 敵単体に物属性大ダメージ 高確率で力を下げる。

が発生。

武器や防具を持っている場合落とす確率

・ヘッド・ショット?
死亡させる。

敵単体に物属性特大ダメージ 高確率で

・ヘルスナイプ?
クリティカル。

遠距離からの極大ダメージ。超高確率で

大幅に下がる。

但し、相手に気づかれると命中と威力が

・デスペラード?
内蔵している分全部消費。

敵全体に物属性大ダメージ 弾を一回で

・グレイトフルワン?
・至高の魔弾コピィ?
・守護天使降臨
くれる。

敵単体に物属性極大ダメージ
敵単体に物属性絶大ダメージ
守護天使の持つ技能を一度だけ使用して

・ヒーリング?
トル以内

MPの9割消費、宿命を1点追加。
味方単体のHP特大回復 要：10メー

・アストラル・サイト
悪魔を視認できる。

守護霊以下のレベルで実体化していない

・イミュニティ
/ + ♪ を一つ一定時間付与する

味方単体に守護天使の相性 ♪ / × /

・ゴースト・ガード
付与する。

一定時間守護天使の魔法防御力を対象に

・アストラル・ゲート
にテレポートする

自分、もしくは守護天使が関係する場所

命に2点

守護天使が召喚できる時に使用可能 宿

「ソフト」

- ・デビルアナライズ
- ・改造ハーモナイザー
- ・ネオ・クリア
- ・スキヤニング・ゼロ
- ・百太郎
- ・ハニー・ビー

・キャプスロツク
I M I I
・Mr. サプライズ
・HPリカバ

・ナイチンゲラー
・ゲートサーチ
・ハーモナイザー
・シュセンドー

1分間の起動 消費：MAG：370 判断力強化 恐怖心
軽減 速中心

力：+15 知：+13 魔：+12 体：+14 速：+
30 運：+14

「装備」：

剣：ダク・タ(D・K THAR)

銃：ロング・ショット 弾数：12 射程距離：4千M 命中率：
低

銃：クイック・シルバー 弾数：5 射程距離：2千5百M 命

中率：高

弾：通常弾×200

頭：月桂樹の冠 魔法防御極小上昇 精神力強化

体：天女の羽衣 心：× 風： MP10点でテラフリー使用

可能

腕：スナイパーアーム 電： 射撃命中大幅強化

足：セブン・リーグ・ブーツ 速+5

「アイテム」：COMP収納可能

・イルクストーン×4個
ズン×2個
・デイスティン×1個
・デイスポイ

・宝玉×2個
魔法カード各種20枚セット
×1個

格闘の素質？：格闘系の技能の奥義などを覚える。4の倍数毎に
力と体+5

計略：戦闘前に有効な作戦などを考え付く、戦闘時のあらゆる判

定に補正。

悪運? : 生き抜くための運がある。レベル回数分致死ダメージを無効化する。

蛇の道は蛇? : 情報に詳しい、一定の情報を確実に手に入れる。

暗殺? : 暗殺に特化している。奇襲や殺しなどに補正。特殊な技を覚える。

狙撃? : 遠距離からの攻撃に補正。レベル毎に飛距離と命中が大幅に上がる。

?だと次の命中率になる。(最大レベル)

1000メートル 命中100%

1500メートル 命中100%

2000メートル 命中100%

2500メートル 命中100%

3000メートル 命中98%

隠密 : 自分の存在感を極限まで薄めて、相手に見つけられないようにする。

銃の素質? : 銃の技能を覚えるようになる。命中に補正

守護天使 : 守護天使の加護を得る。ステータスに補正。

膨大なMPと引き換えに守護天使の能力を使用できる。

但し一度使用すると、一定期間(約一週間ほど)使用することが出来ない。

使いすぎると宿命が増え続け、一定量まで宿命が溜まると天界に連れて行かれる。

??????????

チャネリング? : 超能力系列の技を覚える。レベルが上がるほど技能を覚える。

「名前」 : 柊かがみ

「性別」 : 女性

「覚醒段階」 : ? (異

能者)

「現在LV」：20 (成長限界) 「属性」：D・C

「所持金など」 ￥：1000000 魔貨：50000

「ステータス」

HP：157 MP：265

「通常時」

力：7 知：13 魔：21 体：8 速：10 運：7

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪：+ 状： 万：

「所持スキル」

・魔界魔法の素質? ・知略 ・復讐者?

・起死回生 ・三分の魔脈 ・ロウキラー?

「所持技能」

・アギダイン? 敵単体に火属性大ダメージ

・ガルダイン? 敵単体に風属性大ダメージ

・マハ・ガルダイン? 敵全体に風属性大ダメージ

・マハ・ムドオン? 敵全体を呪殺する。高確率

・デ・カジヤ? 敵全体の強化魔法を必ず解除する。

・デク・ンダ? 味方全体の低下魔法を必ず解除する

・コンセントレイト 次のターンの魔法攻撃を2・5倍にする

・タル・カジヤ? 味方全体の物理攻撃力が3段階上昇。

・ラク・カジヤ? 味方全体の物理防御力が3段階上昇。

・マル・カジヤ? 味方全体の行動値が2段階上昇。

・リベリオン 3ターンの間敵味方共にクリティカル率

上昇

・憎悪真言 敵単体に呪属性特大ダメージ。相手に呪

いを掛ける。

・憎むべき正義 敵全体に呪属性大ダメージ。ロウの相手

には3倍の威力。

・呪われてあれ

敵単体に万能属性甚大ダメージ。使用後

『瀕死』

「装備」:

剣:ビームウィップ

銃:コルト・サンダー 弾数:10 相性無効 常に『呪い』

状態(現在無効)

弾:炸裂弾 200発 威力上昇、事故率上昇

頭:セラミックヘルム 電耐性

体:ガイア教特別ライダースーツ 剣・物耐性 聖弱点

腕:ラウリンの指輪 魔法威力2段階上昇 消費MP2倍

足:カラミティブーツ 射撃回避増加

「アイテム」:所持限界『力+10個』『19個

・宝玉×1個 ・トラポートストーン×2個 ・魔反鏡×2個

・呪殺ペーパー×3個 ・マハ・ブダイストーン×1個

・マハ・ラギダイストーン×1個 ・メ・ディアラマストーン

×1個

・マジックカード各種

魔界魔法の素質?:魔法の素質を持つ。レベルアップで魔法を覚えるようになる。

復讐者?:ダーク/カオス固定 呪吸収 専用のスキルが使える様になる。

全ステータスに1レベル毎に+3点 HPとMPにレベル毎に+30点

知略:様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点

起死回生:HPが10分の1以下の時、あらゆる判定に大幅に補

正。魔法威力2倍。

三分の魔脈:MPに補正。

ロウキラー：壊れた優しさが反転し善や正義を殺す。
ロウ属性の相手を物理攻撃する時、常に命中と威力が2倍になる。
レベルが上がると専用のスキルが使える様になる。

「名前」：柊つかさ 「性別」：女性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：12 「属性」：L-N

「所持金など」 ￥：1001000 魔貨：3000

「ステータス」

HP：45 MP：176

「通常時」

力：1 知：3 魔：24 体：1 速：1 運：6

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖： × 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・魔界魔法の素質？ ・マントラの素質？ ・超絶大魔力？
・ラッキースター？ ・五分の魔脈 ・巫女の素質？

「所持技能」

・マハンマオン？ 敵全体を聖なる力で高確率で即死させる。
・ディアラハン？ 味方単体のHP全回復。
・メ・ディアラマ？ 味方全体のHP中回復。
・メ・パトラ？ 味方全体の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖

状態を回復。

・ポズムディ 味方単体の毒を治療する。

・パララディ 味方単体の麻痺を治療する。

・ペトラディ 味方単体の石化を治療する。

・エストマ
抑える。
一定時間自分より低レベルの悪魔の出現を

・マカジャマ
敵単体を『封魔』にする。
味方全体を蘇生 + HP全回復、BST回復
の後自分は死亡する。

・般若心経
範囲内の全ての悪魔全体に聖属性中MPダメージ。
敵単体に聖属性小ダメージ。

・九字印
味方全体のHP小回復、低下魔法を1段階緩和。
範囲内のダーク系の悪魔を混乱させる。

・鎮魂歌
味方全体の魅了を解除し、一定時間魅了無効化する。
範囲内のダーク系の悪魔を混乱させる。

「装備」：

剣：無し

銃：無し

弾：無し

頭：無し

体：巫女服 禁耐性 剣弱点

腕：数珠 魔法威力上昇

足：安全靴

「アイテム」：所持限界『力+10個』||11個

・チャクラドロップ×3個

・破魔札×2個

・魔反鏡×1個

・魔石×1個

・巫女服×1個

・数珠×1個

・安全靴×1個

魔界魔法の素質? : 魔法の素質を持つ。レベルアップで魔法を覚えるようになる。

マントラの素質? : マントラ系の特技を覚えるようになる。ニュートラル固定になる。

超絶大魔力? : その身に恐るべき魔力をもつ。魔にボーナス+10点

ラッキースター? : とりあえず幸運になる。運にボーナス+10点
五分の魔脈 : MPに大幅な補正。

巫女の素質? : 巫女系列の特技を覚えるようになる。ニュートラル固定になる。

ステータス上昇傾向 力・知・速中心

「名前」 : 高良みゆき 「性別」 : 女性 「覚醒段階」 : ?
ザ・ヒロイン)

「現在LV」 : 36 「属性」 : L - N

「所持金など」 ￥ : 2000000 魔貨 : 32500

「ステータス」

HP : 537 MP : 286

「通常時」

力 : 34 知 : 24 魔 : 3 体 : 19 速 : 26 運 : 4

「魔神トート憑依状態」

力 : 34 知 : 24 魔 : 30 体 : 24 速 : 32 運 : 29

「相性」

剣 : 物 : 技 : 火 : 氷 : x 電 : x 風 : x

魔 : 心 : 禁 : 聖 : x 呪 : 状 : 万 :

「所持スキル」

- ・天才
- ・蛇の道は蛇？
- ・計略
- ・知略？
- ・知識の泉
- ・神算鬼謀
- ・ラーニング
- ・オートアナライズ・武具無双？
- ・シヤーマンの才能？
- ・剣の素質？
- ・銃の素質？
- ・英雄？

「所持技能」

- ・マハ・ラギダイン？ 敵全体に火属性大ダメージ
- ・ランダマイザ 敵単体の全ステータスを5段階減少させる
- ・三日月斬り？ 敵単体に剣属性特大ダメージ
- ・暴れまくり？ 敵全体に剣属性大ダメージ 3～9回攻撃
- ・牙折り？ 敵単体に剣属性大ダメージ 敵の攻撃力を2段階減少
- ・トリプルエッジ？ 敵単体に剣属性大ダメージ 攻撃回数+2
- ・月影？ 敵単体に剣属性特大ダメージ 満月時1

段階威力上昇

- ・デスバウンド？ 敵全体に剣属性特大ダメージ
- ・奥義一閃？ 敵全体に剣属性極大ダメージ 高確率で

即死

- ・手加減攻撃 敵単体に剣属性中ダメージ この攻撃では対象は死亡しない

- ・シユア・シヨット？ 敵単体に物属性大ダメージ 超高命中率
- ・レック・シヨット？ 敵単体に物属性大ダメージ 高確率で速

- ・アーム・シヨット？ 敵単体に物属性大ダメージ 高確率で力を下げる。

武器や防具を持っている場合落とす確率

が発生。

- ・グレイトフルワン？ 敵単体に物属性特大ダメージ。
- ・至高の魔弾コピー？ 敵単体に物属性極大ダメージ
- 「シヤーマン憑依スキル」現在『魔神』トート
- ・タル・カジャ？ 味方全体の物理威力が2段階上昇。

・タル・ンダ？ 敵全体の攻撃力が2段階減少。
・マカラカーン 味方全体に、魔法攻撃反射のバリアを張る。
1ターン持続

「装備」：

剣：和泉守兼定 副効果：スタン

剣：小竜姫の大剣 マグネタイト消費で一定時間ステータスに+5

銃：セブロ MN-23 弾数：60 射程距離：100メートル

弾：通常弾×200

頭：青龍の前立 氷：× 要：知20以上

体：デビルコルセット 呪： 禁： 魔法防御増加

腕：朱雀の籠手 風：× 要：速20以上

足：玄武の足甲 電：× 要：力20以上

「アイテム」：所持限界『力+10個』『37個

・ノートパソコン×1個 ・無線機×4個

・ノートパソコン用バッテリー×5個パック

・魔反鏡×2個 ・宝玉×4個 ・チャクラボトル×2

天才：持つて生まれて資質。あらゆる事を覚える事ができる。

知力にボーナス+5点

知略？：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+6点

計略：戦闘前に有効な作戦などを考え付く、戦闘時のあらゆる判

定に補正。

神算鬼謀：奇襲を受けない。敵との遭遇時、高確率で奇襲できる。

但し、奇襲に失敗するとそのターンはあらゆる行動が行えない。

蛇の道は蛇？：情報に詳しい、一定の情報を確実に手に入れる。

知識の泉：様々な情報に精通している。情報収集の判定に大幅な

補正 知力にボーナス+5点

オートアナライズ：戦闘開始時に知力×2レベル以下の悪魔を一体アナライズする。

ラーニング：特定の技能を視認した場合、そのスキルを覚える時がある。

武器無双？：武器を使った攻撃力を上昇する。

現在の上昇率：1.5倍 + (Lv + 0.25倍 || 1.0倍) || 2.5倍

シャーマンの才能？：一定レベルまでの悪魔を宿し特技が使用できる。

？の場合一定のスキルは憑依が解けても覚える事ができる。

？の場合戦闘時のみ宿している悪魔のステータスの恩恵を受ける事ができる。

悪魔より低いステータスは悪魔のステータスに高いステータスはそのままになる

但しターン毎にその悪魔のレベルの半分のMPを消費する。
消費できない場合はステータスは元に戻る

剣の素質？：剣の技能を覚えるようになる。命中に補正

銃の素質？：銃の技能を覚えるようになる。命中に補正

英雄？：レベル毎にHP + 50 特性値 + 5 真の英雄のみが所持する能力。

悪魔

アリス

合体順：進化 アリス

「名前」：アリス 「種族」：魔人（異端）

「現在LV」：50 「属性」：D・N 「召喚MAG」：

800

「LvUpに必要なMAG」：133000MAG

「ステータス」

HP：654 MP：765

力：30 知：49 魔：63 体：27 速：36 運：26

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：+ 風：

魔： 心：x 禁：x 聖：x 呪：x 状： 万：

「所持スキル」

・上級悪魔 ・魂の絆 ・本体 ・熱愛 ・制限解除

・電撃ハイブースタ ・魔法攻撃貫通・弱

・電撃無効 ・氷結無効 ・ムド防御 ・魔人

「スキル」

・メギドラオン？ 敵全体に万能属性絶大ダメージ。

・真理の雷？ 敵単体に電属性特大ダメージ。

・魅惑の雷撃？ 敵全体に電属性特大ダメージ。高確率で

魅了。

・金星の加護？ 敵複数に聖属性極大ダメージ。

・メ・パトラ？ 味方全体の混乱、眠り、至福、魅了、恐

怖状態を回復。

・ディアラハン？ 味方単体のHP全回復。

・メ・ディアラハン？ 味方全体のHP全回復。

・ラストキヤンディ？ 味方単体にラク・カジャ？スク・カジャ

？タル・カジャ？を発動

・妖精のキス？ 味方単体のMP特大回復。恋慕対象にの

み使用可能

・死んでくれる？ 敵全体に超高確率で呪殺。異性には効果

更に2段階上昇

・心捧げの夜伽 要・恋慕以上 恋慕対象のみに使用可能

一定期間対象に不動心、魔人の肉体を付

与する

間が延びる

要・最低1時間、経過時間により発動期

スキル粹現界解除

上級悪魔：本体を所持し尚且つ40レベル以上、種族が異端の悪魔が所持するスキル。

本来持つ特性を顕現させ、ステータスの大幅な補正。消滅しても蘇生可能

但し、合体してもランクアップのみで他の種族には変化しない、意思も此方が優先。

魂の絆：サマナーを心から信頼している。高確率でサマナーを攻撃からかばう。

本体：本体である。悪魔合体をしても姿が変わりにくい。ステータスが基本より高い。

熱愛：対象を強く愛している。確実に命令を聞き、高確率で対象を攻撃からかばう。特殊スキル取得

電撃ハイブースタ：『電』属性の威力を1.5倍する

魔法攻撃貫通・弱：魔法攻撃時、相手が無効、半減の場合。相性：として攻撃できる。

制限解除：サマナーのレベルを超えても扱う事ができ、他の悪魔になっても持続する。

電撃無効：相性などを無視されても電属性の攻撃を完全に無効化する

氷結無効：相性などを無視されても氷属性の攻撃を完全に無効化する

ムド防御：相性などを無視されてもムド系魔法を完全に無効化する
魔人：『心禁聖呪』完全無効 HPとMPが大幅に上昇する

魔銃・フォルトウナ

合体順：エンジェル　メルコム　魔銃・メルコム　魔銃・ミトラ
ス　魔銃・フォルトウナ

合体順：魔銃・スカアハ

「名前」：スカアハ　「種族」：女神（強化種・合体武器）

「現在LV」：44　「属性」：L-L

「威力」：137　回数：全体1回

「所持スキル」

・武器化　・忠誠　・Mっ気

・連続攻撃　・満月の会心　・????

「スキル」　スキル枠限界

・至高の魔弾　敵単体に物属性死亡級ダメージ

・刹那五月雨撃ち？　敵全体に物属性特大ダメージ。2～4回

攻撃

・アローシャワー？　敵全体に物属性大ダメージ。5～10回

攻撃

・メ・ディアラハン？　味方全体のHP全回復。

・タル・ンダ？　味方全体の攻撃力を3段階減少。

・スク・カジャ？　味方全体の命中が3段階上昇。

武器化：武器になっている。意思があり、装備者がMPを使えば魔法も使用可能。

忠誠：忠誠を誓っている。絶対に命令に背かず、高確率でサマナIを攻撃からかばう。

Mっ気：攻撃を受けても怯まなくなる、相性によってはMPが回復する。

連続攻撃：低確率で、連続で攻撃する。

満月の会心：満月時、高確率で攻撃がクリティカルになる。

??????????

コウモクテン

合体順：オニ アズミ モムノフ キンキ コウモクテン

「名前」：コウモクテン 「種族」：妖鬼

「現在LV」：47 「属性」：L-C 「召喚MAG」：

700

「LvUpに必要なMAG」：86030MAG

「ステータス」

HP：538 MP：224

力：52 知：32 魔：32 体：32 速：34 運：29

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：x 風：

魔： 心： 禁： 聖：x 呪：x 状： 万：

「所持スキル」

・不屈の闘志 ・連続攻撃? ・格闘ハイブースタ ・強力招来

・恐怖防御 ・怪力? ・信頼 ・全門耐性 ・勇者の精神

・戦神の加護

「スキル」

・狂気の暴虐? 敵全体に剣属性特大ダメージ 3~12回

攻撃

・マハ・スクカジャ 味方全体の命中が5段階上昇。

・忠義の一撃? 敵単体に万能属性絶大ダメージ。サマナー

との信頼度で補正

・雄叫び? 敵全体の攻撃力を3段階下げる。

・渾身脳天割り? 敵単体に物理属性極大ダメージ。

・猛反撃 近く遠距離物理攻撃時、高確率で威力2倍

で反撃。

・チャージ

次のターン、物理威力を3倍にする。

不屈の闘志：HPが0になっても一度だけ全回復して復活する。

連続攻撃？：超高確率で、連続で攻撃する。

格闘ハイブースタ：『技』属性の威力を1.5倍する

強力招来：物理ダメージが大幅に上昇する。

恐怖防御：絶対に恐怖状態にならない

怪力？：力に大幅な補正 レベル毎に力+4

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

全門耐性：『剣物技万能』を除く全ての相性を『半減』する無効などは其方を優先

勇者の精神：サマナーより有利な相性を持つ場合、代わりに攻撃を受ける

戦神の加護：クリティカル率が1.5倍上昇

サキュバス

合体順：リリム アメノウズメ パールヴァティ サキュバス

「名前」：サキュバス 「種族」：夜魔

「現在LV」：47 「属性」：L・L 「召喚MAG」：

680

「LVUpに必要なMAG」：95500MAG

「ステータス」

HP：455 MP：361

力：24 知：34 魔：52 体：26 速：35 運：32

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心：+ 禁： 聖： 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・魅了？ ・魅了ハイブースタ ・睡眠攻撃 ・信頼
・マカ・カジャオート ・回復ハイブースタ ・身体変化
・万能耐性 ・神経吸収

「スキル」

・メギドラオン？ 敵全体に万能属性絶大ダメージ。
・真理の雷？ 敵単体に電属性特大ダメージ。
・魅惑の雷撃？ 敵全体に電属性特大ダメージ。高確率で

魅了

・メ・ディアラハン？ 味方全体のHP全回復。
・静寂の祈り 敵味方全体の強化魔法を解除する。
・ファイナルヌード？ 敵全体を超高確率で魅了。女性には無効。
・淫欲の夢？ 敵全体を超高確率で魅了。人間は99%で

魅了。

・サバト？ 敵全体を超高確率で魅了。人間は高確率
で発狂。

・サバトマ COMP内の悪魔をコスト0で召喚でき
る。

魅了？：超高確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない。

魅了ハイブースタ：魅了の成功率を1.5倍する

睡眠攻撃：物理攻撃時、低確率で睡眠付与。

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からか
ばう。

マカ・カジャオート：戦闘開始時、自分にマカ・カジャをかける。

回復ハイブースタ：『回復』属性の威力を1.5倍する

身体変化：全身を自由自在に変化できる。
万能耐性：万能属性を半減する
神経吸収：心属性を吸収する

アメリカ

合体順：15レベルごとに素体強化 現在3回目

「名前」：アメリカ 「種族」：完全造魔

「現在LV」：46 「属性」：N-N 「召喚MAG」：

0

「LvUpに必要なMAG」：50500MAG

「ステータス」

HP：386 MP：827

力：19 知：35 魔：81 体：21 速：36 運：21

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：× 禁： 聖：× 呪： 状：× 万：

「所持スキル」

・純粹 ・永遠の親愛 ・魔界魔法の素質？

・不動心 ・素体強化？ ・超絶大魔力？ ・無邪気な残酷

・オールリセット

「スキル」 スキル枠20個 20個以上は入れ替えになる。

・ダムドラオン？ 敵全体に万能属性絶大ダメージ。超高確

率で恐怖付与

・万物流転？ 敵単体に風属性極大ダメージ

・ラグナロク？ 敵単体に火属性極大ダメージ

・コキュートスペイン？ 敵全体に氷属性特大ダメージ

・神空破？ 敵全体に風属性特大ダメージ

- ・ヒートライザ 味方単体の全ステータスを5段階上昇。
- ・タル・ンダ? 敵全体の攻撃力が3段階減少。
- ・ラク・ンダ? 敵全体の物理防御が3段階減少。
- ・マハ・ムドオン? 敵全体を呪殺する。超高確率
- ・サマリカーム? 対象の死亡、昏倒を回復。HP回復：特大
- ・アムリタ? 対象の死亡、昏倒を除く状態異常を回復
- ・グレイブ? 一定時間自分のレベル以下の屍鬼、幽鬼、悪霊を召喚して使役する。

グレイブのレベル×2体の悪魔を召還できる。

- ・ネクロマ? 死体を一定時間アンデッドとして使役する。

HPは3倍で使役可能。

純粹：何も染まっていない状態、これからによって変わっていく。
 永遠の親愛：所有者に無償の愛を捧げる。所有者の全ステータスを+3する（隠しステ）

高確率でサマナーと同時攻撃、高確率でサマナーをかばう。

魔界魔法の素質?：魔法の素質を持つ。レベルアップで魔法を覚えるようになる。

不動心：精神系状態異常にかからなくなる

素体強化?：全ステータスがレベル毎に+5される。

超絶大魔力?：その身に恐るべき魔力をもつ。魔にボーナス+20点

無邪気な残酷：黒魔術系魔界魔法の効果が1段階上昇。アライメント変動が無くなる

オールリセット：相手が強化、及び低下魔法を使用した場合即座に無効化する。

ダツキ

合体順：現在未合体

「名前」：ダツキ 「種族」：夜魔

「現在LV」：74 「属性」：N-C 「召喚MAG」：

2600

「LvUpに必要なMAG」：354000MAG

「ステータス」

HP：724 MP：534

力：43 知：55 魔：87 体：42 速：48 運：46

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：x 風：x

魔：x 心：x 禁：x 聖：x 呪：x 状：x 万：

「所持スキル」

・恐怖の糧 ・ホーリースター ・不動心 ・魔法攻撃貫通

・恐怖存在 ・超絶大魔力？ ・万能ハイブースタ

「スキル」

・メギドラダイブ？ 敵全体に万能属性超絶ダメージ

・メシアライザー 全体のHPと状態異常を完全回復

・ジハード？ 敵全体に万能属性超絶ダメージ、敵のステ

ータスを1段階減少

・招来の舞踏？ 死亡状態の仲魔を復活させ、更に召喚する。

・九尾の絶望？ 敵単体に万能属性極大ダメージ 9回連続

・純愛の接吻？ 味方単体のステータスを3段階上昇 異性

のみ。

恐怖の糧：相手の状態が恐怖の場合、1体につきステータスに1段階の補正。

ホーリースター：低下魔法を無効化する。但し新月時は無効。

不動心：精神系状態異常にかからなくなる

魔法攻撃貫通：魔法攻撃時、相手が吸収、反射、無効、半減の場合。

相性：として攻撃できる。

恐怖存在：あらゆる行動時、相手に『恐怖』を超高確率で付与する

超絶大魔力？：その身に恐るべき魔力をもつ。魔にボーナス+2

0点

万能ハイブースタ：『万能』属性の威力を1.5倍する

パチャカマク

合体順：モラクス モー・シヨボー バフオメット オーカス

パチャカマク

「名前」：パチャカマク 「種族」：邪神

「現在LV」：48 「属性」：D-L 「召喚MAG」：

650

「LvUpに必要なMAG」：65000MAG

「ステータス」

HP：437 MP：333

力：34 知：30 魔：44 体：30 速：33 運：36

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：x

魔： 心：x 禁：x 聖：x 呪：x 状： 万：

「所持スキル」

・高位分霊 ・魔王の魔力 ・先の先 ・心眼 ・身体変化

・呪殺無効 ・ムドブースタ ・憎悪の塊 ・吸魔 ・火炎ブ
ースタ

・信頼

「スキル」

・暴れまくり？ 敵全体に剣属性特大ダメージ 3～7回

攻撃

・羽ばたき？ 敵全体に風属性特大ダメージ 3～7回

攻撃

・ポパスマ？ 敵全体に恐怖を付与。超高確率。

・メルトダウン？ 敵全体に火属性極大ダメージ

・万物流転？ 敵単体に風属性特大ダメージ

・フォッグブレス？ 敵全体の命中・回避率を4段階下げる

・マハ・ムドオン？ 敵全体を呪殺する。高確率

・コンセントレイト 次のターンの魔法攻撃を2・5倍にする

必・ダークマター 敵単体に魔属性甚大ダメージ 一日二回

高位分霊：合体しても姿が変わりにくい。

魔王の魔力：巨大な魔力を所持している。魔+10

先の手：戦闘開始時のみ速に+10する

心眼：相手の奇襲攻撃を受けない。命中に大幅な補正

身体変化：全身を自由自在に変化できる。

呪殺無効：呪属性の攻撃を相性に関係なく無効化する

ムドブースタ：『呪』×ノを状態にする

憎悪の塊：ムド系のスキルの成功率を1割程度上昇させる

吸魔：攻撃時HPとMPを吸収する。

火炎ブースタ：『火』属性の威力を1・25倍する

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

マンティコア
合体順：ヌエ グクマッツ マンティコア

「名前」：マンティコア 「種族」：妖獣

「現在LV」：46 「属性」：D-N 「召喚MAG」：

760

「LvUpに必要なMAG」：21000MAG

「ステータス」

HP：428 MP：278

力：32 知：31 魔：36 体：27 速：34 運：30

「相性」

剣： 物： 技： 火：+ 氷：x 電：+ 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪：x 状： 万：

「所持スキル」

・本体 ・不動心 ・電撃ハイブースタ ・制限解除 ・電撃吸

収 ・蓄電

・同族の心得・防

「スキル」

・メギドラ？ 敵全体に万能属性極大ダメージ。

・放電？ 敵全体に電属性特大ダメージ、6～12回攻撃

・溶解プレス？ 敵全体の防御力を3段階減少させる

・雄叫び？ 敵全体の攻撃力を3段階減少させる

・麻痺引つ掻き？ 敵単体に剣属性特大ダメージ、超高確率で麻

痺させる

・毒ガスプレス？ 敵全体に猛毒を高確率で付与する。

本体：本体である。悪魔合体をしても姿が変わりにくい。ステータス

タスが基本より高い。

不動心：精神系状態異常にかからなくなる

電撃ハイブースタ：『電』属性の威力を1.5倍する

制限解除：サマナーのレベルを超えても扱う事ができ、他の悪魔になっても持続する

電撃吸収：電属性の攻撃を相性に関係なく吸収する。

蓄電：電属性の攻撃を受けると次のターン攻撃力が2倍になる。

同族の心得・防：同種族から受けるダメージを50%軽減する

こなた守護天使

「名前」：泉かなた（アムルタート） 「種族」：大天使

「現在LV」：52 「属性」：N・L

「LvUpに必要なEXP」：127500

「ステータス」

HP：487 MP：523

力：29 知：37 魔：43 体：35 速：31 運：36

「相性」

剣： 物：× 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・ 守護天使 ・ 継承分霊 ・ 慈愛の聖母 ・ 神聖ハイブースタ

「スキル」

・ メギドラオン？ 敵全体に万能属性絶大ダメージ。

・ 穢れなき威光 聖： / の敵全体を死亡させる。

・ デイアラハン？ 味方単体のHP全回復

・ サマリカーム？ 対象の死亡、昏倒を回復。HP回復：大。

・ アムリタ？ 味方単体の死亡以外の状態異常を回復する。

守護天使：対象者のステータスに自分のステータスの10分の1の補正。

致死ダメージを高確率で庇う。この時守護天使が死んだ場合、回復まで1ヶ月が必要。

継承分霊：種族などが代わっても、この姿のままになる。

慈愛の聖母：回復の効果を2倍にする。

神聖ハイブースタ：『聖』 / + / × / を 状態にする

こなた仲魔

ヴァルキリー

合体順：カハク ペレ フェニックス ヴァルキリー

「名前」：ヴァルキリー 「種族」：妖魔

「現在LV」：45 「属性」：N-L 「召喚MAG」：

560

「LvUpに必要なMAG」：37500MAG

「ステータス」

HP：400 MP：320

力：33 知：35 魔：45 体：30 速：34 運：30

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷：× 電： 風：×

魔： 心： 禁： 聖：× 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・ 火炎ハイブースタ ・ リジュネレーション？
・ マハ・タルカオート ・ 信頼 ・ 衝撃無効

「スキル」

- ・ トリスアギオン？ 敵単体に火属性極大ダメージ。 防御貫通
- ・ ラグナロク？ 敵単体に火属性極大ダメージ。
- ・ マハ・ラギダイン？ 敵全体に火属性大ダメージ。
- ・ ファイアブレス？ 敵複数に火属性特大ダメージ。 7〜12

回攻撃

- ・ マリンカリン？ 敵単体を超高確率で魅了。
- ・ サマリカーム？ 対象の死亡、昏倒を回復。 HP回復：特大

火炎ハイブースタ：『火』属性の威力を1.5倍する

マハ・タルカオート：戦闘開始時、味方全体にタルカジャ？をかける。

リジュネレーション？：一定時間毎にHPとMPが回復する。

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

衝撃無効：風属性を無効化する。

カイメイジユウ

合体順：ハンサ ？？ マカラ ユルング カイメイジユウ

「名前」：カイメイジユウ 「種族」：神獣

「現在LV」：43 「属性」：L・N 「召喚MAG」：

600

「LVUpに必要なMAG」：55050MAG

「ステータス」

HP：504 MP：287

力：35 知：30 魔：34 体：48 速：31 運：26

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖： × 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・ 氷結ブースタ ・ 防御の才能 ・ 達人の感 ・ 信頼 ・ 食いしばり

「スキル」

・ アイスブレス？ 敵複数に氷属性特大ダメージ。 7～12回
ランダム攻撃

・ 魅惑の雷撃？ 敵全体に電属性特大ダメージ。 高確率で魅了

・ 暴れまくり？ 敵全体に剣属性大ダメージ 3～9回攻撃

・ ポズムデイ 味方単体の毒を治療する。

・ デイアラハン？ 味方単体のHP全回復。

・ 火炎ガードキル？ 敵単体の火炎耐性を消去する

・ 氷結ガードキル？ 敵単体の氷結耐性を消去する

・ 電撃ガードキル？ 敵単体の電撃耐性を消去する

・ ステラカーン 味方全体に状態異常反射のバリアを張る

1ターン持続

氷結ブースタ：『氷』属性の威力を1.25倍する

防御の才能：通常の防御力の1.5倍になる

達人の感：あらゆる回避に大幅な補正

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。

トナティウ

合体順：ナーガ オリアス トナティウ

「名前」：トナテイウ 「種族」：破壊神

「現在LV」：45 「属性」：L-C 「召喚MAG」：

560

「LvUpに必要なMAG」：68400MAG

「ステータス」

HP：422 MP：265

力：40 知：36 魔：38 体：30 速：28 運：23

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・麻痺ハイブースタ ・斬撃ハイブースタ ・信頼 ・火炎反射

・真・斬撃見切り ・無限の闘志

「スキル」

・突撃？ 敵単体に剣属性特大ダメージ

・真理の雷？ 敵全体に電属性特大ダメージ

・メルトダウン？ 敵全体に火属性特大ダメージ

・妖華烈風？ 敵全体に風属性特大ダメージ

・マハ・タルンダ 敵全体の攻撃力を最下限にまで下げる。

・マハシバブー？ 敵全体を金縛りにする。

麻痺ハイブースタ：マヒの成功率を1.5倍する

斬撃ハイブースタ：『剣』属性の威力を1.5倍する

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

火炎反射：火属性攻撃を反射する

真・斬撃見切り：剣属性攻撃に対する回避率が大上昇

無限の闘志：HPが0になっても消滅していない限り『HP1』
で立ち上がる

キングフロスト

合体順：カクエン　??　ジャックフロスト　じゃあくフロスト
キングフロスト

「名前」：キングフロスト　「種族」：魔王

「現在LV」：40　「属性」：D-C　「召喚MAG」：

700

「LvUpに必要なMAG」：57270MAG

「ステータス」

HP：398　MP：303

力：28　知：32　魔：45　体：29　速：25　運：28

「相性」

剣：　物：　技：　火：　氷：+　電：+　風：

魔：　心：　禁：　聖：x　呪：x　状：　万：

「所持スキル」

・信頼　・氷結ハイブスタ　・食いしばり　・火炎耐性

・氷結吸収　・格闘ブースタ

「スキル」

・絶対零度？　敵単体に氷属性極大ダメージ。

・コキュートスペイン？　敵全体に氷属性極大ダメージ。

・爆砕拳？　敵単体を剣属性特大ダメージ。

・成仏の拳？　敵単体を剣属性特大ダメージ。高確率

で睡眠。

・メ・ディアラハン？　味方全体のHP全回復。

・マハ・ムドオン？　敵全体を呪殺する。超高確率

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

氷結ハイブースタ：『氷』属性の威力を1.5倍する

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。

火炎耐性：火属性の攻撃を半減する

氷結吸収：氷属性の攻撃を吸収する

格闘ブースタ：『技』属性の威力を1.25倍する

ラケシス

合体順：カタキラウワ イツマデ リヤナンシー シルキー ラケシス

「名前」：ラケシス 「種族」：鬼女

「現在LV」：43 「属性」：N-C 「召喚MAG」：

583

「LvUpに必要なMAG」：43200MAG

「ステータス」

HP：367 MP：258

力：24 知：32 魔：34 体：28 速：27 運：28

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖：× 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・信頼 ・マスタースキル ・氷結ハイブースタ ・回復ブースタ
「スキル」

・メルトダウン？ 敵全体に火属性極大ダメージ

- ・コキュートスペイン? 敵全体に氷属性特大ダメージ。
- ・メ・ディアラハン? 味方全体のHP全回復。
- ・ラストキヤンデイ? 味方単体にラク・カジャ?スク・カジヤ?タル・カジャ?を発動
- ・マリンカリン? 敵単体を高確率で魅了。
- ・クロスデイ? 味方単体の封魔を回復する。
- ・ボムデイ? 味方単体の爆弾状態を回復する。

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

マスタースキル：対象のスキルひとつの消費MPを1にする（現在マハ・ブフーラ）

氷結ハイブースタ：『氷』属性の威力を1.5倍する

回復ハイブースタ：『回復』属性の威力を1.5倍する

ハリテイー

合体順：アーシーズ アプサラス デイースハリテイー

「名前」：ハリテイー 「種族」：地母神

「現在LV」：44 「属性」：L-C 「召喚MAG」：

680

「LvUpに必要なMAG」：63500MAG

「ステータス」

HP：401 MP：310

力：33 知：30 魔：40 体：29 速：27 運：30

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖：× 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・信頼 ・ディフレクション？ ・リフレクション？ ・慈愛の

聖母

・地母神の祝福 ・氷結ブースタ ・マハスクカオート？

「スキル」

・絶対零度？ 敵単体に氷属性特大ダメージ。

・妖華烈風？ 敵全体に風属性特大ダメージ

・メ・ディアラハン？ 味方全体のHP全回復。

・マカジャマ？ 敵全体を封魔状態にする

・子守唄？ 敵全体を超高確率で3段階睡眠。

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

ディフレクション？：単体物理攻撃を反射する。レベル回数使用可能

リフレクション？：単体魔法攻撃を反射する。レベル回数使用可能
慈愛の聖母：回復の効果を2倍にする。

地母神の祝福：

氷結ブースタ：『氷』属性の威力を1.25倍する

マハスクカオート：戦闘開始時、全員にスクカジャマ？をかける。

地母神の祝福：存在している限り毎ターン味方全員のHPとMPを小回復

ペルソナ帰還履歴

愚者：トビカトウ

死神：ヘル

女教皇：テンセンニャンニャン

「名前」：ナナヤシキ 「アルカナ」：愚者

「LV」：35

「消費MP」：17

「ステータス」

力：28 知：21 魔：20 体：21 速：39 運：18

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・直死の魔眼

・不動心

・真・斬撃見切り

・真・射撃見切り

・封印

「スキル」

・月影？ 敵単体に剣属性大ダメージ 満月時1段階

威力上昇

・ベノンザツパー？ 敵全体に剣属性中ダメージ 高確率で毒。

・十七分割？ 敵単体に剣属性小ダメージ 超高確率で即

死。

・直死七夜？ 敵単体に万能属性中ダメージ 中確率でス

テータス3段階減少

直死の魔眼：相手の物理無効/反射を貫通する、中確率で物理攻撃時相手は【死亡】する、この死亡は回復できない。

不動心：精神系状態異常にかからなくなる。
真・斬撃見切り：剣属性攻撃に対する回避率が大上昇
真・射撃見切り：物属性攻撃に対する回避率が大上昇
封印：何かしらの封印がされている。

「名前」：ヨコシマタダオ 「アルカナ」：英雄

「LV」：63

「消費MP」：26

「ステータス」

力：43 知：37 魔：52 体：42 速：56 運：38

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状：x 万：x

「所持スキル」

・成長 ・文珠の素質？ ・霊能力 ・食いしばり

・文珠ハイブースタ ・愚かな計略

「スキル」

・栄光の手

敵単体に万能属性超絶ダメージ。

・双文珠

あらゆるスキル、特技を使用可能、

特技は戦闘中持続する。但し一戦闘3回まで

・マハ・イルシオ？

敵全員に幻術を掛ける

相手の回避と命中を3段階下げる 3ター

ンで解除。

・マハ・ムドオン？

敵全体を呪殺する。超高確率

・?????

・?????

・?????

・?????

成長：このペルソナは成長する。ペルソナ降魔時、レベルが上がった場合このペルソナのレベルも上昇する。

文珠の素質？：文珠を作り、使いこなす才能の最終段階。威力が上昇する。

霊能力：このペルソナが使用する攻撃は常に相性：魔にしてもよい。魔に補正

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。
文珠ハイブースタ：文珠の威力を大幅に増加する。文珠の連結数を2個増やす。

愚かな計略：奇襲を受けない。敵との遭遇時、中確率で奇襲できる。但し、奇襲に失敗するとそのターンはあらゆる行動、回避が行えない。

「名前」：カンシヨウ 「アルカナ」：剣

「LV」：24

「消費MP」：13

「ステータス」

力：25 知：16 魔：14 体：20 速：16 運：20

「相性」

剣：× 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・真・斬撃見切り ・斬撃ブースタ ・勝利の息吹
・ミックスレイド・バクヤ

「スキル」

- ・ 一文字切り？ 敵単体に剣属性中ダメージ。
 - ・ 秒剣乱舞？ 敵複数に剣属性小ダメージ 1〜5回攻撃
 - ・ デスバウンド？ 敵全体に剣属性中ダメージ
 - ・ テトラカーン 味方全体に、物理攻撃反射のバリアを張る。
- 1ターン持続
- ・ タル・カジャ？ 味方全体の物理威力が1段階上昇。
 - ・ スク・カジャ？ 味方全体の命中が1段階上昇。
- 必・干将莫耶 敵単体に剣属性極大ダメージ
- バクヤとのミックスレイド 一日1回まで。

真・斬撃見切り：剣属性攻撃に対する回避率が大上昇
 斬撃ブースタ：『剣』属性の威力を1.25倍する
 勝利の息吹：戦闘終了時、HPが自分のLv分回復する。
 ミックスレイド・バクヤ：ペルソナのストックに剣・バクヤが居る場合、必殺技使用可能。この時、消費MP無し。

「名前」：バクヤ 「アルカナ」：剣

「LV」：24

「消費MP」：13

「ステータス」

力：23 知：18 魔：20 体：14 速：19 運：12

「相性」

剣：× 物：× 技： 火： 氷： 電： 風：
 魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

- ・ 強化ブースタ
- ・ 勝利のチャクラ

・ミックスレイド・カンシヨウ

「スキル」

・刹那五月雨斬り？ 敵全体に剣属性中ダメージ。追加効果：恐怖

・マカラカーン 味方全体に、魔法攻撃反射のバリアを張る。

1ターン持続

・タル・カジャ？ 味方全体の物理威力が2段階上昇。

・ラク・カジャ？ 味方全体の物理防御が2段階上昇。

必・魂捧げの祈り 味方全体のHPとMPを特大回復。

カンシヨウとのミックスレイド 一日1回

まで。

強化ブースタ：強化魔法の効果を1段階上昇する

勝利のチャクラ：戦闘終了時、MPが自分のLv分回復する。

ミックスレイド・カンシヨウ：ペルソナのストックに剣・カンシ

ヨウが居る場合、必殺技使用可能。この時、消費MP無し。

「名前」：オオミツヌ 「アルカナ」：戦車

「LV」：30

「消費MP」：15

「ステータス」

力：35 知：18 魔：18 体：35 速：18 運：20

「相性」

剣： 物： 技：× 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・貫通見切り ・貫通耐性 ・ヤケクソ防御

・マハタルカオート ・斬撃ブースタ

「スキル」

・キルラツシュ？

敵全体に剣属性大威力ダメージ 2～8

回攻撃

・リベリオン？

味方全体をクリティカル率を3ターン上

昇させる。

・ギガンフィスト？

敵単体に剣属性特大ダメージ

・ヒートウェイブ？

敵全体に剣属性特大ダメージ

・カウンタ

常に15%の確率で物理攻撃を反射する。

必・巨神と女神の降臨

敵単体に万能属性甚大ダメージ、複数状

態異常

はいよるこんとんのミックスレイド

貫通見切り：物属性の回避を上昇させる。

貫通耐性：物属性の攻撃を常に半減する。相性より優先する

ヤケクソ防御：ヤケクソ状態を無効にする。

マハ・タルカオート：戦闘開始時、全員にタルカジャ？をかける。

斬撃ブースタ：『剣』属性の威力を1.25倍する

「名前」：ヤタガラス

「アルカナ」：太陽

「LV」：30

「消費MP」：15

「ステータス」

力：25 知：29 魔：29 体：19 速：30 運：18

「相性」

剣： 物： 技：× 火：× 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・気功・小 ・ミドルグロウ ・飛翔（特大）

「スキル」

・スク・カジャ？ 味方全体の命中が3段階上昇。

・マハ・スクンダ 敵全体の命中値を限界値まで減少。

・ディアラハン？ 味方単体のHP全回復

・終末の予言 敵全体を高確率で発狂させる。

・残影 敵単体に剣属性大ダメージ。新月時は極大ダ

メージに変更。

気功・小：一定時間毎にMPが10%回復する。

ミドルグロウ：戦闘に参加していなくても経験を50%ほど獲得できる。

（ペルソナなので、この経験値はペルソナ使いに適用される）

飛翔（特大）：人間5〜6人を乗せて飛行することが出来る。

「名前」：はいよるこんとん 「アルカナ」：恋愛

「LV」：40

「消費MP」：20

「ステータス」

力：27 知：38 魔：38 体：28 速：28 運：12

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・デュプリケイター ・身体変化 ・無貌の神・弱

・バステブースタ ・宇宙CCC

「スキル」

・人体実験 敵単体に万能属性中ダメージ 高確率で複数のバッドステータス付与

・原初の暗黒 敵全体に万能属性大ダメージ 使用毎に威力1段階上昇

必・インフィニティ 1ターンの間あらゆるダメージを無効。最速行動

必・巨神と女神の降臨 敵単体に万能属性甚大ダメージ、複数状態異常

オオミツヌとのミックスレイド

デユプリケイター：あらゆる鍵がかかった物を開ける事ができる。身体変化：自分の容姿性別などを好きなように変化させる事ができるようになる。

無貌の神・弱：所持者より低レベルの対象に常に全ステータス1段階減少

正し、身体変化で姿を変えている場合は効果無効。

バステブースタ：バッドステータスの成功率を1.25倍する

宇宙CQC：中確率で、本体を無視して2回行動する

「名前」：クー・フリーン 「アルカナ」：塔 英雄

「LV」：40

「消費MP」：20

「ステータス」

力：40 知：32 魔：32 体：34 速：50 運：26

「相性」

剣： 物：× 技：× 火： 氷： 電： 風：×
魔： 心：× 禁： 聖：× 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

- ・英霊
- ・斬撃ハイブースタ
- ・物理攻撃貫通
- ・達人の勘
- ・超人？

「スキル」

- ・デスバウンド？ 敵全体に剣属性極大ダメージ 高確率でクリティカル

- ・空間殺法？ 敵全体に剣属性極大ダメージ

- ・チャージ 次のターンの物理攻撃の威力を2.5倍にする。

- ・終末の予言 敵全体を高確率で発狂させる。

- 必・刺し穿つ死棘の槍 敵単体に剣属性超絶ダメージ 超高確率で即死

- 必・突き穿つ死翔の槍 敵全体に剣属性絶大ダメージ

英霊：常に全ステータスが1段階上昇。

斬撃ハイブースタ：『剣』属性の威力を1.5倍する

物理攻撃貫通：あらゆる相性を無視して物理ダメージを与える事が出来る。

達人の勘：あらゆる回避に補正。

超人？：好きなステータスをレベル毎に+5する

成長・低：このペルソナは成長する。正し成長率は低い

本来のリユウキツコウシュ：召喚不可能

「名前」：リユウキツコウシュ

「アルカナ」：女教皇

「LV」：55

「受胎」：レベル60：霧

露乾坤網

「消費MP」：27

「ステータス」

力：27 知：41 魔：58 体：21 速：31 運：27

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷：+ 電： 風：

魔：× 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・成長 ・黄泉の女王 ・ムドハイブスタ ・魅了？ ・魅了

ハイブスタ

・ムド防御 ・氷結無効

「スキル」

・マハ・ムドオン？ 敵全体を呪殺する。超高確率

・メギドラオン？ 敵全体に万能属性絶大ダメージ

・メールシュトローム？ 敵全体に氷属性特大ダメージ

・サマリカーム？ 対象の死亡、昏倒を回復。HP回復：

特大

・メ・ディアラハン？ 味方全体のHP全回復。

・ファイナルロード？ 敵全体を超高確率で魅了。女性には無効

・蜃気楼？ 敵全体に超高確率で幻影効果

必・ニヴルヘイム 敵全体に氷属性甚大ダメージ 一日二回

必・霧露乾坤網 味方全体に一日の間火・氷属性を吸収

一日二回

必・盤古旗 敵単体に3 - 6回の万能属性極大ダメ

ージ 一日一回

成長：このペルソナは成長する。ペルソナ降魔時、レベルが上がった場合このペルソナのレベルも上昇する。

黄泉の女王：ヘル専用のスキル。死の国の女王の力を振るう。ムド系のスキルの成功率を9割まで上昇させる：継承

ムドハイブスタ：『呪』 / + / × / を 状態にする：継承

魅了? : 超高確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない : 継承

魅了ハイブースタ : 魅了の成功率を1.5倍する : 継承

ムド防御 : 相性などを無視されてもムド系魔法を完全に無効化する

レベルを下げたリュウキツコウシュ : 召喚可能

「名前」 : リュウキツコウシュ 「アルカナ」 : 女教皇

「LV」 : 39 「受胎」 : レベル60 : 霧

露乾坤網

「消費MP」 : 19

「ステータス」

力 : 20 知 : 33 魔 : 40 体 : 20 速 : 28 運 : 18

「相性」

剣 : 物 : 技 : 火 : 氷 : x 電 : 風 :

魔 : x 心 : x 禁 : x 聖 : x 呪 : x 状 : x 万 :

「所持スキル」

・特殊成長 ・黄泉の女王 ・ムドブースタ ・魅了? ・魅了

ハイブースタ

・ムド防御 ・氷結無効

「スキル」

・マハ・ムドオン? 敵全体を呪殺する。超高確率

・メギドラ? 敵全体に万能属性極大ダメージ

・マハ・アクアダイン? 単全体に魔・氷属性大ダメージ

・サマリカーム? 対象の死亡、昏倒を回復。HP回復 : 大

・メ・ディアラハン? 味方全体のHP全回復。

・ファイナルヌード? 敵全体を超高確率で魅了。女性には無効

・蜃気楼? 敵全体に超高確率で幻影効果

必・ニヴルヘイム 敵全体に氷属性甚大ダメージ 一日一回

必・霧露乾坤網（弱）

味方全体に半日の間火・氷属性を無

効 一日一回

下部分は成長により取得。

・メギドラオン？ レベル：50

・メイルシユトローム レベル：48

・サマリカーム？ レベル：45

必・霧露乾坤網 通常召喚可能時

必・盤古旛 通常召喚可能時

特殊成長：ペルソナ使いのレベルが上がった時、このペルソナのレベルも上がる。

黄泉の女王：ヘル専用のスキル。死の国の女王の力を振るう。ムド系のスキルの成功率を9割まで上昇させる：継承

ムドブースタ：『呪』×ノを状態にする：継承

魅了？：超高確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない：

継承

魅了ハイブースタ：魅了の成功率を1.5倍する：継承

氷結無効：相性などを無視されても氷属性の攻撃を完全に無効化する

ムド防御：相性などを無視されてもムド系魔法を完全に無効化する

ミックススレイド 『巨神と女神の降臨』

オオミツヌ×はいよるこんとん

消費MP：50 使用後36時間のクールタイムが必要。

効果：敵単体に万能属性甚大ダメージ。

2ターンの間回復することができない睡眠、混乱、麻痺、シンク口、恐怖、発狂、金縛り、転倒、封魔、盲目、昏倒、HP回復無効、MP回復無効を与える。

これらのバッドステータスは相性を無効にして確実に効果を与える（スキルで無効は適用する）

ただし、この攻撃では相手のHPを0にする事ができず、相手は絶対に死亡しない。

解説：

オオミツヌの巨体を生かした攻撃力と、はいよるこんとんの様々なバッドステータスを合わせた効果を与える万能属性攻撃。

とりあえずはいよるこんとんは邪神系であり女神ではない。

オオミツヌはかなり恥ずかしいらしい。

時々女神役のはいよるこんとんが『パンチだロボー！』とか叫ぶらしい。ちなみに効果は変わらない。

カード収納の食料品など（個数割愛）多いものは100枚を超える為

米（10キロ）のカード

小麦粉など麺やパンを作る為の粉を収納したカード

肉類のカード

魚介類のカード

野菜類のカード

卵などを纏めた食料カード

調味料などを纏めた食料カード

水（大型ポリタンク1個分）のカード

ジュース類（1ケース分）のカード

野菜の種などのカード

自転車のカード

家具（電化含む）のカード

発電機のカード

防寒系のカード

薬品などを纏めたカード

寝具類のカード

衣服類のカード

エトセトラ

書ききれません…多すぎて。

基本日常生活で手に入るものは全てカードしてあると思っ
てください。
い。

10人前後の人数が1〜2年不自由なく暮らしていけるだけの水は
用意してあります。

食料品は数ヶ月程度なら大丈夫です。

お金の問題でそこまで食べ物が購入できないのが現状です。

しかし日々増やしてますので、崩壊しても暫くは大丈夫でしょう。

水の問題は文珠で解決できますが食料品は難しい所ですね。

ダメージなど簡易説明

小 中 大 特大 極大 絶大 超絶 甚大 死亡級

例) ジオ・ダイン=大ダメージ

副効果などの発動率

低確率 (10%前後)

中確率 (25%前後)

高確率 (50%前後)

超高確率 (80%前後)

必中 (100%)

スキルのレベルについて。

基本は『?』からスタート。最大レベルは『?』

ランクアップするスキルは『?』から『?』になる時変化する。同
時にレベルは『?』に戻る。

レベルが高くなると、攻撃回数や副効果の成功率が上昇する。

威力は『?』から奇数時に1段階上昇する。

偶数時はその前の段階の威力の1.5倍となる、但し『?』は『2倍』として扱う。

例) アギ『?』 アギラオ『?』

例) スク・カジャ『?』 スク・カジャ『?』

『?』：通常

『?』：1.5倍

『?』：威力一段階上昇

『?』：1.5倍

『?』：威力一段階上昇

『?』：1.5倍

『?』：威力一段階上昇

『?』：1.5倍

『?』：威力一段階上昇

『?』：2倍

各種相性

【】 || 反射 【+】 || 吸収 【×】 || 無効

【】 || 半減 【】 || 通常 【】 || 弱点

【】 || 以上から、その属性に関係する副効果などを遮断する（スキルによっては発動したり貫通する）

例) 電属性【】 の場合ジオンガの威力は半減、副効果のショックは無効化される。

ステータスについて

力：武器や素手の攻撃力や持てるアイテムの総数に関係する。

知：MP上昇に強く関係する。知が高いほどスキルを覚えやすくなる。MPが上がりやすい。

魔：魔法威力などに強く関係する。MP上昇には少し関係する。

体：物理防御力、魔法防御力が上昇する。HPに強く関係する
速：銃の威力、武器攻撃の命中、移動力、回避率に關係する。
運：状態異常の無効化や、クリティカルなどに關係する。悪運などの習得にも關係する。

大体的上昇率

力が1上がる度に所持限界量に+1 10上がる度に威力が1段階上昇する。

知が1上がる度にMPが通常に加え+3〜6上昇する。上昇率はキヤラによつて大幅に異なる。

魔が1上がる度にMPが通常に加え+1〜3上昇する。上昇率は職業や種族によつて異なる。

体が1上がる度に物理防御と魔法防御が上がる。HPが通常に加え3〜10上昇する。

速が1上がる度に銃の威力が上昇する。命中、移動力、回避率もそれに伴い上昇する。

運が1上がる度に数%程抵抗力が上昇する。5上がる度に各種ステータスに微量の補正がつく。

基本の数値が0の上昇について

基本は0から上昇させる事は出来ない。しかし覚醒してその部分が+された場合上昇が解禁される。

凡人（覚醒しないレベル1）のステータス

「覚醒段階」：-（一般人）

「現在LV」：1 「属性」：N・N

「ステータス」

HP：6 MP：0

「通常時」

力：1 知：1 魔：0 体：1 速：1 運：1

「相性」ペルソナ相性優先

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

「所持技能」

素質のある人間は何処かのステータスが1から2ある。

Continue01 〱初戦闘・初敗北・そして初仲魔〱(前書き)

短めです。

Continue 01 〱 初戦闘・初敗北・そして初仲魔〱

結論から言うと、死に掛けた。

というか文珠が無ければ一瞬で細切れだったのだろう。

舐めていた。文珠があるからなんともなる、そう思ったのが間違
いだったのだ。

〱回想〱

「よしっ！」

僕は意を決してドアを開けて中に入ると目の前で激しい衝撃が来た
とともに、いきなり文珠が発動した。

ポケットの中の【防】の文珠がビキビキと嫌な音を立てている。

この調子だとあと1分も持たないだろう。

漸く先ほどの衝撃から正気を取り戻して前を見ると……………

イタ

赤い目…牙…声…

見えるはずなのに其処には何も居ない。

在るはずなのに、其処には居ない。

『おおお…おおおおおおおん！！』

其処には悪霊が…そう、悪魔が居た。

人間以外の存在が、非日常の存在が其処にいた。

辺りを覆うその数は数え切れないほどだ。

それが無秩序に辺りを飛び回り…いや、あれは飛び回るなんて生易しい物じゃない。

雄たけびとともに辺りに突撃していく様は理性を失い狂った意識だけの状態になっているからなのだろう。

狂気という言葉が脳内を掠めていく。

そして…その中でも僕に気づいた悪魔達は僕に向かって嫌な笑顔を

浮かべ飛び込んで来た。

だが、文珠の結界のおかげか少し前で弾き飛ばされていく、でも悪魔達は諦める事もせず突撃してきた。

『おおおおおお！！　　UOおおおおおおっ！！』

『ぎひっ！　　ぎひひひっ！　　きしゃあああああ〜！』

漫画やゲームやホラーなどで見る悪魔などこれに比べたら子供だましでしかない。

ガチガチと歯が鳴り、文珠で得た勇気がまるで空気の抜けた風船のように萎んでいく。

「…あ……ひい……」

馬鹿みたいな声を出してしまう。

怖いなんて物じゃない…なんだコレは、何なんだこれはっ！

これが悪魔…悪霊なのか、化け物なのか…

僕の考えなど気にもせず、何体もの悪魔が僕を食い殺そうと文珠の結界を攻撃していく。

「…」っ、これでも食らえっ！！」

慌てて【浄】の文珠を投げつけるが、イメージを込めていない為に発動しても悪魔はほとんど消えない。

はっきり言ってしまうえば文珠とはイメージ増幅器のようなものだ。

イメージが整っていないければ、文珠は本来の力の十分の一も出す事ができない。

たった1分の悪魔の攻撃であっさり2つの【防】の文珠が破壊された。

凄まじい数の悪霊の軍団から30秒も持たせた【横島忠夫】は何のことはない文珠使いの天才だったのだ。

映画などで怯えて叫ぶ大人たちのように僕は恐怖で全身を竦ませながらも生きる為に文珠を投げつける。

1個2個3個4個…

悪魔は文珠が発動するたびに少しずつ消えていく。

それでもまるで湧き出してくるかのように悪魔は次々と生まれ僕に向かって突撃してくる。

「…」っわあああああっ！ はっ！？ も、文珠っ！？ 文珠は！

「？」

あるはずが無い、【浄】の文珠はさっき使い切ったのだ。

『うぎゃあああああああつ！！！！』

「あ、あああ……うわあああああああつ！！」

僕に出来る事は恥も外聞も無くなりふり構わず逃げる事だけだった。

悪魔は執拗に襲い掛かってくる為、【防】の文珠はそのたびに悲鳴をあげる。

逃げ切る頃には【防】の文珠は全て使い切り、残っているのは【滅】と【癒】と【脱出】だけだった。

走って僕は其処から逃げ出した、エネミーソナーの反応がなくなるまで逃げて逃げて逃げ切ったのだ。

息も絶え、今にも倒れそうになる足を無理やり動かし僕は逃げ切った。

落ち着いて考えれば悪魔達はあの店から出てきてないと気づいたのは300メートルくらい離れた後だったが。

一息ついた後で【脱出】を使えばよかったのだと気づいた僕は余程焦っていたのだろう。

恐ろしくて僕は家に駆け込み毛布に包まりながら一日を無駄に過したのだった。

く回想終了く

そして、今に至る。

短い回想しか出てこないほど僕はその時本当に何も出来なかった。

多分戦争なんかがあれば僕はまっさきに死ぬタイプだろう、そう思う。

一応というか、少なからず悪霊は倒せたようでマグネタイトは補充できている。

まあ、レベルは上がってないのだが…寧ろアレでレベルが上がるなら皆レベル高いだろう。

何といっても恐怖に負けて爆弾を投げつけて逃げたようなものなのだから。

「現実とゲームやファンタジーは違う…か」

当たり前だ。

不良たちが怖くて何も出来ないのに、それ以上に恐ろしい悪魔に対して勝てると思ったのが間違이었다。

強すぎる力を持つと増徴する。まさに今の僕の事だろう。

「確認できたのは悪魔が存在する事と、僕が弱いという事…か」

スマートフォンを弄りDDSを起動する。

アナライズとステータスを一応確認した。

どうやらあの短時間の攻防で悪魔の名前とこいつのもおこがましいがやステータスなどは取得できたようだ。

「名前」：ゴースト 「種族」：悪霊

「現在LV」：1 「属性」：D・C

「ステータス」

HP：21 MP：24

力：3 知：1 魔：2 体：4 速：3 運：1

「相性」

剣： 物：× 技：× 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

「スキル」

- ・突撃
- ・引つ掻き

本当にただの悪霊だった。

更に言うと僕よりステータス基本値が高いな：物理攻撃は無効化で、銃は効かないようだ。技は確か関節とかそういう系だったはずだ。火と聖に弱いという事は【浄】には確実に弱かったんだな。

僕がちゃんとイメージできていれば勝てたのかもしれない：恐怖は人間の判断力まで奪ってしまう物なのか。

じゃあ、次は今のステータスを見てみよう。何も変わっていないと思うが。

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：1 「属性」：N・N

「所持金など」 MAG : 163 ￥ : 250000 魔貨 :

0

「ステータス」

HP : 21 MP : 24

力 : 1 知 : 2 魔 : 1 体 : 1 速 : 1 運 : 1

「相性」

剣 : 物 : 技 : 火 : 氷 : 電 : 風 :

魔 : 心 : 禁 : 聖 : x 呪 : 状 : 万 :

「所持スキル」

・文珠の素質?

・マジックカード?

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費 : MAG 10 判断力強化 恐怖心軽減

力 : +2 知 : +1 魔 : +2 体 : +2 速 : +2 運 :

+1

「アイテム」

・文珠 x 8

文珠【癒】 x 2

文珠【滅】 x 4

文珠【脱】

文珠【出】

・マジックカード 10枚

マグネタイトが増えているな。

そのおかげか知らないけれどハーモナイザーの詳細なデータが載っている。

判断力強化、そして恐怖心軽減…か。成程な。

普通に悪魔に出会って余裕で倒せるゲームの主人公なんて居ないと思っただけど、これのおかげなのか。

でも、【勇】の文珠でもだめだったのに、機械の効果でいけるんだろうか。

「はあ……どうしたものか…」

『ふふっ、変な溜息ね』

「!?!? な、なんだっ!?!?」

変な声がどこからか聞こえてくる。

僕は持っていた【滅】の文珠2つを【浄】と【防】に変化させて壁に背をつけて辺りを見回していく。

心臓が激しく鳴り響く、痛いほどの鼓動が耳に聞こえるほどだ。

あまりに突然な出来事にハーモナイザーすら起動できていない。

またあの悪魔なら…僕は…

『酷いわね。折角あの時悪魔の足止めしてあげたのに』

「だ、誰だっ!?!? どこに居る!?!?」

『「うっよ、うっよ」』

パソコンの方から声が聞こえている。目を向けると其処には……

……

「ピ…ピクシー…?」

『当たりっ　なあんだわかってるじゃないの』

其処にいたのは小さな妖精、ピクシーだった。

女神転生で言うところの妖精ほどデビルサマナーに友好的な存在はいないだろう。

大抵の場合初めに仲間になるし、最近のゲームだとチュートリアルをしてくれたり、行き成り手助けしてくれたりするのがこのピクシーだ。

とはいえ勿論悪魔、下手な真似をすれば殺されてしまうのは間違いない。

確かピクシーには浄化は効かないはずだ…持っている【浄】の文珠を【縛】に変更する。何かあった場合はこれで足止めしよう。

上手くいくかはわからないが…

ある程度は友好的な感じだし、使わないかもしれないがあれだけの事が昨日あったのだ。神経過敏になっても仕方ないと思ってほしい。

『ねえねえ。貴方サマナーでしょ？』

「そ、そうだけど…」

『よかったあ やっぱり間違っただわね』

「それで…僕に何の用ですか…？」

『ぶーっ！ そんなに警戒しなくてもいいじゃない。あーんな凄く攻撃できるんだから』

どうやら昨日も文珠の事を言ってるらしい。

あまり殺気も恐怖心もないし…上手くいけば彼女を仲魔にできるかもしれない。

正直仲魔のいないデビルサマナーなんて、武器を持たない武器使いみたいなものだ。

相手も僕がサマナーだって知ってて友好的だしなんとかなるかもしれない。

「あれは切り札みたいなものなんだ。そうそう連発は出来ない、で…君は僕に何を望んでるの？」

『ふふっ 交渉ね ん、そうねえ。私最近魔界からこっちに来たのよね。それで全然マグネタイトが足りないの。このままじゃ折角来たのに魔界に強制送還されちゃうのよね。だから、サマナーの仲魔になる代わりに、マグネタイトがほしいなあって。』

貴方見た所なりたてでしょ？ 強い悪魔も居なさそうだし、私を仲魔にしない？』

「それだけでいいのかな…？ 他に望む事は…？」

『今はそれで十分よっ あー 前から興味あったのよね人間の娯楽とかっ！ ゲームって言うんでしょっ！ 楽しみーっ あ、勿論戦うから安心してね？ 合体してもいいけど、私本体だから見た目も代わらないし楽でいいわよ』

友好的というか、楽観的なピクシーだった。

文珠を構えてるのが馬鹿らしくなるほどに…これが狡猾な悪魔だったら見事にはまってしまいそうだけどピクシーがそんな事はしないだろう。

純粹にこの世界とゲームに興味があるに違いない。

僕としても仲魔が出来るのはとてもありがたいし、こうやって他の人…悪魔だけ…と話すのも久しぶりでなんだかとても嬉しい。

「わかった、契約しよう。僕は正直いって弱い。だから君の力を借りたい、いいかな？」

『もちつ　ゲームも興味あるけど強くもなりたいしね』　一緒に頑張りましょサマナーさん』

「あ、ああ、宜しく」

『あはっ！　それじゃ妖精ピクシー　コンゴトモヨロシク　サマナーさん』

こうして以後共についてきてくれる大事な仲魔・ピクシーがよくわからないうちに仲魔になったのだった。

大樹はレベルが上がった。

妖精：ピクシーが仲魔になった。

「名前」：ピクシー 「種族」：妖精

「現在LV」：3 「属性」：N-N 「召喚MAG」：2

3

「LvUpに必要なMAG」：50MAG

「ステータス」

HP：29 MP：32

力：2 知：4 魔：4 体：1 速：3 運：1

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：x 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪：x 状： 万：

「所持スキル」

「スキル」

・ジオ？ 対象に電属性小ダメージ。

・パトラ？ 対象の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖状態を回復。

復。

・ディア？ 対象のHP小回復。

・妖精のおせっかい。 対象を『至福』状態にする。

C o n t i n u e 0 1 　↳ 初戦闘・初敗北・そして初仲魔　↳ (後書き)

と言う訳で大樹君はピクシーを仲魔にしました。
そのおかげで経験が増えレベルアップです。

Continue02 〈混ぜり物の世界〉（前書き）

同じく短めです。

早くも微妙にクロスが始まります。

行き当たりばったりで書いてるのでどうなるのか不明です。

Continue 02 〈混ぜり物の世界〉

あれから一週間が過ぎた。

来週には冬休みも終わりました学校が始まる。

いつもはこの時期が来ると憂鬱になったものだが、今は対して思う事はない。

正直、高校は辞めてもいいかなと思いはじめてきたからだ。

今日も今日とて両親は仕事でいない、先週も両親と会話したのは一〇二言話した程度だ。

干渉されすぎると確かに今の僕はいろいろ危険なのだが、放置されるのもそれはそれできついものが…いや、今は無いか。

『ねえねえ？ 今日はどこに行くの？』

「そうだね。あの異界の悪魔はもう倒せるようになったし、少し強めの場所でも探してみようか？」

『だねえ〜。あつ、このっ！ ううこの敵強くない？』

「ピクシーがPSP持ってゲームしてるってなんか凄いな…やりにくくないか？」

『慣れたら楽だよ〜？ うう、このお！』

「とりあえず20時になったらでるから、それまでには終わらせておいてよ?」

『はーいつ!』

再びゲームに集中するピクシーを横目に僕は異界に向かう準備を始める。

未だに悪魔と出会うときは心臓が跳ね上がりそうになるが、ピクシーの励ましとハーモナイザーのおかげでなんとか戦ってこれた。

と言っても僕はまだまだ弱いのでピクシーの魔法と文珠頼みなのだが。

ピクシーは文珠を見て驚いていたけど、僕が湯水のように使いまくるのでたいした物じゃないと勘違いしている。

十分凄い効果を出しているのだけど、まあ深く突っ込まれてもどう説明していいかわからないのでこのままで居てもらいたい。

ステータスの欄にはMPが表示されていたけど、僕は魔法が使えないのでMPは正直言って意味が無い。

文珠やあの魔法のカードはMP以外の物で作っているらしく精神的に消耗もせず出し続けることが出来た。

まあ…限界はあったのだが。

どうやら文珠もカードも一日に一定個数しか作り出せないらしい。先ほど湯水の様にと言ったのは嘘か？　と言いたくなるかもしれないが。

それだけ使いまくっても大丈夫な程度は出せているので気にしないで欲しい。

後は保存、と言うか一定個数以上作り上げると文珠はそれ以上出せないようになってる。

僕が現在保持しておける文珠の数は20個まで、一日に作り出せる文珠は50個までだ。

これは僕が強くなれば増えるのかこのままなのかはまだわからないけど、多分増えるんじゃないかと睨んでいる。

カードのほうは持てる枚数に制限は無い、出せるのはやはり50枚までだが。

そしてこのカード、現実の世界で武器や防具を携帯するにはとても便利だった。

流石に街中で剣や槍を持ち出せば、あっという間に通報されて捕まるだろう。でもこのカードがあれば武器や防具をカードに収納できる。

重さもカード自体の重さはその辺のトランプ1枚程度しかない為、持ち運びもとても楽だ。

取り出すときも呪文や動作も必要なくて、取り出したいと願うだけ

で取り出せるようになっていた。

「……………ファンタジー。ここに極まれり、か」

2枚のカードを手に掴む。

そのカードには日本刀と拳銃のリアルな絵が描かれている。

この中には本物の日本刀と拳銃を収納しているのだ。日本刀はネット通販で購入したものだ、拳銃は違う。

この拳銃は異界で見つけたのだ。具体的にいうと異界の中で死んでいる警察から剥ぎ取った。

弾は残り3発しかないが十分だろう。文珠があるし、流石にこれを使うのは最終手段だから。

しかし人間の死体を見た時は流石に吐いてしまった。人間というのは死んだらあんな匂いがするとはね…下水の匂いがまだましに思える。

それも悪魔に所々食われたのか骨が見える場所が多かった。

万が一ゾンビになられても困るので【浄】の文珠で浄化はしておいた。

そういえばこの前テレビで警察官が行方不明になったというのを見た気がするけど、もしかしたらあの死体がそうだったのかもしいな

い。

死体はもう残っていないので見つからないのは諦めて欲しい。死んだのは彼の運が悪かったからだ、そう思っていて欲しい。

「悪魔が存在しても普通の人はやっぱり気づかないものなんだな」

『当たり前だよ。人間は都合の悪い事は忘れるでしょ？』

「…耳が痛いね。もうゲームは終わったのかい？」

『あ、あはは………』

ああ、多分死んだなこれは。

彼女の様子を見てみると、思わず苦笑してしまう

これだけの事でも嬉しいと感じてしまっ辺り相当のコミュ障なんだなど自嘲しそうになる。

まあ、どこかのダークヒーローでも正義の味方でもないの、何か格好いい事を言う訳でもないのだけど。

『サマナーさんは、あんまり人間とか好きじゃないの？』

「ん？ 急に何で？」

『だって、あんまり友達いないみたいだしねえ』

「グサつと来るよその言葉は、あとピクシーそれは少し間違ってる」

『？』

「僕はあんまり友達がいらないじゃない。そもそも友達がいらないんだ」

『…なんかゴメン』

「いや、こっちこそ自分で傷広げてなにやってるんだか…」

『あ、でもそれは間違ってるよサマナーさん』

「え？」

どこも間違っていないと言おうとすると頬に暖かい感触を感じた。

ピクシーの行き成りの行動に、思わず真赤になってしまう。

『確かに初めはマグネタイトの補給とか打算でサマナーさんに近づいたけど、私は結構サマナーさん好きだよ？ だから私達は友達、ね』

「……そうだね。僕達は友達だ。ありがとピクシー」

『さあて、行きましょ今日も沢山マグネタイト補給しないとね』

っ！』

「あつて困るものじゃないしね。出来ればもう少し戦力が欲しい所だし」

『流石に私一人じゃねえ。次行く異界にはゴーストやスライム以外のがいるといいよねえ』

「あれじゃ交渉なんてあつたもんじゃないからね。心臓にも悪いし」

『頼りないサマナーさんだなあ　ま、がんばりましょっ』

「そうだね…頑張ろうか。行くよピクシー」

『OKサマナーさんっ』

………

………

…

『ビリビリ痺れちゃいなさいっ！ ジオっ！！』

『ぎいいいっ！！ クアアアアアアアアアッ！！』

ピクシーの放つジオが空を飛ぶ悪魔を打ち落とす、だがすぐに体制を整えて此方に向かってくる。

「たあああああっ！！」

ハーモナイザーの効果で僕は恐怖心を軽減し、ステータスがアップしている。

そのおかげで悪魔の動きは何とか見切れるし、身体は自分の思う通りに、動くっ！

目標を定め渾身の力で日本刀を右から水平に凧ぐ。

悪魔はたやすくそれを回避するけど、それが致命的な隙を生み出した。

「ピクシー！ ジオっ！！」

『任せてっ！ これで止めよっジオおっ！！』

再び唸る電撃は回避していた悪魔に導かれるように叩きつけられる。

『ケエアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！？』

断末魔の絶叫を上げて悪魔は消滅していった。

補給されていくマグネタイトの量はそれなりにある、対して強い悪魔だけどマグネタイト保有量は良い感じかもしれないな。

辺りに悪魔の気配が無い事を確認してから僕はほっと一息つく。

『おつかれサマナーさんっ 流石に怯えなかったね』

「見た目鳥でしかないからね。恐怖度でいえばゴーストやスライムの方が数倍怖いよ。ゾンビも見た目が嫌だ」

『あははっ、確かにねっ』

「今のは：妖鳥・バーか。レベルは2で羽ばたきの攻撃は厳しいかもしれないね」

『私はその辺大丈夫だけどサマナーさんは？』

「防御用のアイテムは沢山あるよ。死にたくないからね」

『うんうん、良い考えだよっ』

今いる所は、町から少し外れたところに在る林が異界化した場所だ。結構強い力を感じたのでゴーストよりは強い悪魔がいるだろうと調べている途中なんだけど、今の所は散発的にバーが襲い掛かってくるだけだ。

でもバー自体結構なマグネタイトがあるので文句は無いんだけどね。まず見た目がただの鳥なので神経過敏にならなくて良い感じなのが良い。油断すると死ぬかもしれないけどね。

「でも流石にバーとは会話出来ないな…」

『出来ない事は無いと思うけどあいつら問答無用だしねえ。満月でもないのにさ』

「ああ、やっぱり満月の影響受けるんだ？」

『弱い悪魔はねえ。結構理性とか無くしちゃうの多いよ？ でも仲魔はCOMPで管理できるから満月の影響を無効化出来るんだけどね』

「便利だなあCOMP」

『人間は悪魔より怖いってのがよくわかるよねえ』

「確かに」

ゲームだと満月時の悪魔は『話にならない!』と言って会話できないのに仲魔は普通に動かさせたけど、それにはこういう訳があるのかもしれないな。

ステイブンは一体これほどの知識や技術をどこで覚えたんだろうな…って考えても仕方ないか。

便利な事は便利なんだ、考えるより有効活用させてもらおう。

「よし、休憩もこれくらいにして行こうか」

『だねー、今日はある程度の探索とバー撃破でいいかな?』

「本格的な狩りは明日からにしよう。まずは色々と調べ…」

誰かに見られている…?

ハーモナイザーはステータスの補助をしてくれる他聴覚や直感、視覚も強化してくれる。

それのおかげで今僕達が誰かに見られている事に気がつけた。

どうする…今日はこのまま逃げるか。ポケットには緊急用の【脱出】

の文珠が在る。

『どつたのサマナーさん？』

「あ、いや。なんでもないよ」

下手な真似をすれば攻撃されるかもしれない。バーしかいないと思っただけどうやら狡猾な悪魔がいる可能性が出てきたみたいだ。

どうする…確認してから逃げるかそのまま逃げるか。

次回からの探索をするならば調べておくのがベターだろうけど、死ぬ可能性がある。

勿論バーより弱かったりするかもしれないけど、相手が見えないという事と見られているという事で『相手が強い』かもしれない不安がある。

万が一の為に【防】をいつでも展開できるようにしている。

あっ！忘れていた…文珠を使えばピクシーと口で会話をしなくてもやり取りが出来たんだ。

早速【念】と文字を込めピクシーに話しかけるイメージを広げる。

《ピクシー、聞こえるかい？》

《！？ な…何コレ！？》

「ん、どうしたピクシー？」

『あ、あー…なんでもないよ。で、これからどうするの』

「そつだね、そろそろ行く事にしよう」

《助かったよピクシー》

《サマナーさんってテレパシー使えるんだ…弱いんだか強いんだかわからないよ》

《裏技みたいなものさ。それよりも誰かが僕達を見ている、どこにいるかはわからないけど強い悪魔の可能性があるんだ》

《え…？ マジで？ それでどうするの？》

《2つ考えてる。一つは安全策をとってここからすぐに脱出するか、もう一つは相手確かめてから脱出するか》

《そこで戦うってコマンドはないんだねサマナーさん》

《臆病者は生き残れるものだよ。でピクシーはどうするっ？》

《んー…逃げよっか？》

《わかった》

無駄に危ない橋を渡る必要は無い。そんな事ができるのはゲームにコンティニューがある主人公が、自分に自信を持っている奴か、ただの馬鹿だ。

ここで逃げても失うものは無いし、今日はここで撤退させてもらおう。

僕達は文珠を使いその場から逃げ出した。

- ??? ? 視点 -

「消えた……トラポート？ いや、魔力は感じなかったし。ピクシ
ーの魔法じゃないよね」

魔法じゃなかったらCOMPにそんな機能が……いやないな！。

もしかして超能力者かもしれない。というかその線が濃厚かな？

「どづしよつか？」

「んー…まさかデビルサマナーに鉢合わせするなんて思わなかった

からさあ、つい隠れちゃったけど相手は結構やり手かもね」

「え？ え？ でもすぐ逃げたのに？」

「あまいなー、ケーキよりも甘いよ？ あの場で此方に気づいてすぐ逃げられるだけの冷静な思考能力。そして魔法とも違う力。んー…普通に行けばよかったか」

「あうあう、もしかして次あったら戦う事になるのかなあ？」

「どうだろねー。その辺は交渉次第かな？ 見た所悪人っぽくは見えなかったしね」

「いい人だったら手伝ってくれるかもしれないね異界封じの事っ！」

「んー…サマナーだし、マグネタイト欲しがるだろうからお金とかでの雇われかなあ…ってかあの人、どこかで見た気がするんだよね…」

「あ、私もー。もしかしたら同級生だったりして」

「おおー、学校で鉢合わせて重なるストーリーだねっ！」

「そ、それはよくわからないけど…」

敵になるなら会わないように注意しなくちゃいけないけど。なんだからー、どこかでまた会いそうだよ。

「今日はどうしようっ..」

「かえろっか？ 英気を養えよ」

「そうだねこなちゃんっ！ 明日はおねえちゃんも着てくれるし大丈夫かもっ！」

「かがみんながいれば楽勝。んじやつかさ帰ろうか」

新しいデビルサマナー。要注意って所だねっ！

- 泉こなた視点解除 -

Continue02 〈混ぜり物の世界〉（後書き）

らき すたキャラがクロスです。

能力とかは特に決めてません、まあ暫くは仲間にならないのでその間に決めちゃう予定です。

Continues 3 〽変わりゆく現実、近寄る混沌〽 (前書き)

やはり短めです。

長々と書くより此方のほうが楽に思えてきました。

Continue 03 ￣変わりゆく現実、近寄る混沌￣

次の日、僕達はいつもの異界に来ていた。

あのゴースト達が沢山いる、精神的にダメージな異界だ。

流石に昨日あんな事があって直ぐに向かおうとするほど無策じゃないのでまずはここでマグネタイトを稼ぎ僕の恐怖心を抑える訓練をすることにした。

こいつらはバーよりは数段弱く、僕の攻撃でも - まあハーモナイザーがないと満足に戦えないけど - 倒せるが、視野的な問題でバーより強敵だ。

マグネタイトも数をこなせばある程度ためられるし、ピクシーの強化にもうってつけだろう。

とにもかくにも…

『ぐぎゃあああああああ!!?!?!?!?』

「っ!?! たあああっ!?!」

慣れなくちゃいけない…

『うーん、コレだけ倒せばマグネタイトも十分量確保だねっ』

「はあ、はあ…今日は肉食べられそうに無い」

『あー…ゾンビがいたしねえ。それも腐りすぎてスケルトンになりかけのやつ』

「あのゾンビと違ってどこから湧いてるんだろう…ゾンビである以上は人間だと思うけど。最近行方不明とかないしなあ」

『異界にいた人間じゃない？ ほら、異界で死んだ人間とか、大昔の人間とか。マグネタイトさえあればゾンビでも肉体は保持できるしね』

「つまり、ゾンビはすでに『屍鬼』という種族になってるって事かな？」

『多分ねー。その辺はゾンビ自身に聞けばいいんじゃないかな？』

「いや…発狂してるし多分無理じゃ…？」

『だよねえ。恨みとか食欲だけで動いてるもんだしゾンビって。で

もゾンビって弱いじゃん　首切れば一発で動けなくなるし』

「確かにそうだけどアイツに接近するのはまだ無理…さっきのは行き成りで驚きすぎてたせいだから」

一休みする前にゾンビに強襲されたのだ。

まさかここにゾンビがいるはずないとタカを括っていたのが間違이었다な、慣れてるとはいえ油断は禁物と言っ事を教えてもらった。

しかしこのゾンビ怖いし臭いし、気持ち悪いしで肉体的なダメージは無かったけど精神的に大ダメージを受けてしまった。

ステータスを見るとごっそりMPが減っているかもしれない。まあ、減っていないかったけど。

『うーんっ　これで私もまた強化かあ　目指すはティターニア様だねっ！』

「合体じゃなくて進化できるのかい？」

『かなりのマグネタイトと経験が必要だけどねえ。同種族からなら進化できる種は多いよ？　勿論私も』

「ゴーストがモウリヨウとかになるのと一緒にかな…見たくないけど」

『ゴーストと同じって、なんかヤだな』

「はは…」

『それにしても、サマナーさんも大分こ慣れて来たね』

「人間は『慣れる』生き物だからね。今でも気持ち悪いけどどうにか戦えるようになってきたよ。でも強い相手は逃げる」

『うんうん。妥当な選択だよ。あはっ　　いいサマナーさんに出会えてよかったっ』

恥ずかしがらずにすばすばと本音を言えるピクシーには頭が上がらない。

後ピクシー。出会えてよかったって言いたいのには僕の方だよ。面と向かって言うと恥ずかしくて言えないけど。有難う。

「よし、そろそろ再開しよう」

『うんっ　　MPもいい感じに回復してきたよっ…!』

僕達は再び狩りを始めた。

退治じゃない、これは『狩り』だ。敵対する物は全員倒して自分達の糧とする。

ゲームの世界じゃよくやっていたけど、まさか現実世界で、それもこの僕がやるとは思わなかったな。

現れるゴーストを日本刀で切る。

ハーモナイザーによって強化された僕の肉体は魔力を帯びゴースト程度の半物質の存在は攻撃できるようになっている。

そして基本的に攻撃される事のないゴーストは耐久力も低く、一撃さえ通れば倒す事ができた。

次はスライムだ、こいつは粘液状なので剣が通りにくい。何処かに核が存在しているらしく、其処を切ることができれば倒せるが、ピクシーのジオで一撃で倒せるので無駄な事はせず任せている。

基本的にこの異界にいるのはこの2種だけだ。さっきのゾンビはユニーク悪魔だと思っていいかもしれない。

一週間以上通い詰めて1匹だったから多分そうだろう。レベル的には2しかなくてバーよりは倒しやすいけどね、見た目以外。

ゴーストの狩りはまさに群がってくる蟻を退治するかのように倒し続けていける。

むちゃくちゃに振り回しても何処かにいるゴーストに必ず当たるからだ。

今ではこいつら程度には余程の大群で来られない限り文珠は使わない。【防】の文珠は使ってるけどね…

僕がなりふり構わずに攻撃できるのも【防】のおかげだ、コレがなかったらもう少し大人しい狩りになるだろう。

本当に…慣れてきたものだ。

人間の死体を見て、人の成れの果てを見て、人の妄執を見た。

僕も同じ物になるのかと思うと、そのときは一思いに消してもらいたいと思う、これには流石になりたくないからね。

「はあっ!! はあ…はあ…これで60っ!!」

『大丈夫サマナーさん？ 疲れてるっばいよ?』

「大丈夫だよ、アイテムはまだある」

『そういう事じゃないんだけどなあ…』

文珠【癒】によって疲れた身体を癒していく。回復の効果で僕の傷や疲労をたちどころに治していつてくれる。

傷自体は文珠のおかげで無いけど重い日本刀を振り回していたら疲労はがつつとやってくる。

疲れない振り方を現在模索中だ。

「よしっ！ あと40体ほど狩ったら戻ろっ」

『無理、しちゃだめだからね?』

「無理はしてないよ。でも心配してくれてありがとう、まだ大丈夫だからさ」

『~~~~! もう、そんな事言われたら何も言えないじゃないさ...
いよっし! じゃあさくさく倒して帰ってからゲームだねっ!』

「その意気だよピクシー、行こうっ!」

『らーさーっ!』

あまり苦戦する事も無く、大量の悪魔を倒した。

魔石をいくつか手に入れた。ゴーストカードを1枚、スライムカードを2枚手に入れた。

大樹はレベルが上がった。ピクシーはマグネタイトを消費してレベルが上がった。

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：5 「属性」：N-N

「所持金など」 MAG：883 ￥：127652 魔貨：

2000

「ステータス」

HP：29 MP：32

力：2 知：2 魔：1 体：1 速：3 運：2

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・文珠の素質？

・マジックカード？

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：50 判断力強化 恐怖心軽減

力：+3 知：+2 魔：+3 体：+3 速：+3 運：

+2

「アイテム」

・文珠×20 生成量：一日50個 所持限界量：21個

文珠【癒】×5

文珠【防】×5

文珠【浄】×4

文珠【火】×4

文珠【脱】

文珠【出】

・マジックカード50枚 生成量：一日50枚

日本刀収納

ニューナンプ収納（弾丸3発）

魔石収納

魔石収納

魔石収納

魔石収納

ゴーストカード収納

スライムカード収納

スライムカード収納

「名前」：ピクシー 「種族」：妖精
「現在LV」：6 「属性」：N-N 「召喚MAG」：6

5

「LvUpに必要なMAG」：600MAG

「ステータス」

HP：35 MP：39

力：2 知：4 魔：6 体：2 速：3 運：1

「相性」

剣：物： 技： 火： 氷： 電：x 風：

魔：心： 禁： 聖： 呪：x 状： 万：

「所持スキル」

「スキル」 スキル枠限界

- ・ジオ？ 対象に電属性小ダメージ。
- ・マハ・ジオ？ 全体に電属性小ダメージ。
- ・パトラ？ 対象の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖状態を回復。
- ・ディア？ 対象のHP小回復。
- ・メ・ディア？ 全体のHP小回復。
- ・妖精のおせっかい。 対象を『至福』状態にする。

粗方狩り終えて今は帰宅の途中だ。

ピクシーはいまはCOMPに戻っている、流石に街中で堂々と出すわけには行かないし。

人型なら、いやピクシーは人型だけど。小型過ぎるので流石にどうしようもない。

ゲームなどでは気にせず出したりしてるけど、あれはどうやって相手を誤魔化したりしているんだろうか？

僕としては心苦しいので、できれば普通に出しておきたいのだが。

そつえば今日は不思議なアイテムを手に入れたな…スライムとゴーストの絵が描かれているタロットカード大の札だ。

ピクシーによるとコレは悪魔合体時に使えるらしい、これらのカードには意思がないので合体時に本体の意識を保ったままで合体でき

るといふ。

本来の悪魔合体は悪魔同士の意思のぶつかり合いで、勝った方が総合的な意思を持つ事になるらしい。

らしい、というのはまだ合体もしたことが無いからだ。邪教の館がどこにあるかわからないからどうしようもない。

いやもしかしたら業魔殿かもしれないが、そんなのは見たことも聞いた事もないので探しようが無い。

デビルサマナーにとって邪教の館とマグネタイトを売買できる場所は必要不可欠だから近い内に探さないといけないな。

残念ながらピクシーは知らないようだ。そうそう人生上手くいくこととはない、か。

レベルが上がったおかげで文珠の所持限界が1個上がっていたので良い事にしよう。やはり力量が上がると増えるようだ。

作れる量は変わっていなかったが。

「今日は、ちょっと豪勢に牛丼でも買っていこうかな」

どうせ家に帰っても食事の用意なんてされてないからな…言ってる悲しくなってきた。

よしっ！ピクシーもこういふのは食べるみたいだし小さいのも同

時に頼んでおこう。

最近少しずつだけど明るくなれてきているような気がしてきた、これも仲魔の…ピクシーのおかげなのかもしれないな。

異能に目覚めて、悪魔使いになって、漸く僕は人並みの楽しさを味わってきたような気がする。

他の人から見れば、まあ引かれるだろうけど、だからと言ってやめる気はない。

死ぬのは怖いけど、前のような生きながら死んでる人生よりは数百倍も有意義だなあ、と思うから。

明日も頑張ろう。

Continue03 〽変わりゆく現実、近寄る混沌〽 (後書き)

ゾンビを見て肉が食べられないとかいいながら牛丼買って帰る彼も
順調に非日常に足を踏み入れてますね…

学校が始まるまではこんなんびりな感じで進む予定です。

始まるまでもう一体仲魔が欲しいなあと思いますがどんなのがい
いか悩みます。

無難に天使かなあ…

Continue04 〈悪意ある神聖〉(前書き)

短めです。

仲魔が増えました…？ うん、増えました(汗

文殊はやはり卑怯アイテムだと思います。

Continue 04 〈悪意ある神聖〉

あの日から更に2日ほど経った。

ゴーストの出る異界ではもう僕のレベルは上がらなくなっている。

自分より一定以下の悪魔からは経験が貰えないようになってきている様だ、ここまで来るとこの世界がゲームか何かのように感じてしまう。弱い敵を倒しても経験にはならないか、ドラゴンクエストなどなら此方がどんなに強くても経験は貰えるけど流石にそういう訳には行かないらしい。

と言う訳で、現在僕のレベルは5の状態です。頭打ちの状態だ。

ピクシーのレベルもあれから変わっていない。あまりレベルが離れすぎていけなないとピクシーに言われてしまったからだ。

強くなりたいはずなのに僕に合わせてくれたのが嬉しいと感じる。

と言う訳で現在、新しい異界を探している所だ。バーのいる異界はまだ行かないつもりでいる、こういうのは1〜2週間ほど置いておくのが基本だろう。

なので色々探しているのだが、そうそう異界なんて見つかるわけもなく……

《ねえねえ、あれ異界じゃない?》

「oh…いやにあつさり」と

《人生そんなものだよサマナーさん。見つかったんだしOKにして
おこ?》

「この世界やばいんじゃないかな…異界出来過ぎだと思う。探して
おいてなんだけど」

《まあねえ。ふふつ、でも何かあれば私が護つてあげるから大丈夫
だよつ》

「出来れば僕が護つてあげたいんだけどね…」

《じゃあ、早く強くならないとね》

COMPから通信で送られてくるピクシーに小声で返しつつ、空き
家と化している家を見つめる。

ゆらゆらと家の周りが揺らいで見えるのは、僕が異界という存在を
知りすぎてしまったせいらしい。

ピクシーが言うにはデビルサマナーや異能者などがここを察知でき、
異界に入れるという。

察知できなければこの中に入っても只の空き家の内部でしかないの
で一般人は異界に迷い込む事が滅多に無い。

滅多に無いというのは、運が悪いと異界に紛れ込んでしまうからだ。

そして大抵の場合は悪魔に食われるという。

運よく戻れば異能者になれるかもしれない、らしいけどね。

僕はすでに文珠が使える異能者だから、これ以上は覚醒する事はないだろう。文珠だけでも十分卑怯臭いのだけだね。

辺りに人がいないのを確認して僕は異界に侵入した。

「まあ、やっぱり家の中じゃないな。ここは平地？ 随分と澄んでるけど」

『よつと んー、妖精系がいるかもしれないねえ』

「ピクシーの住んでいた場所に似てるのかい？」

『少しね、異界ってのは私達の故郷の事で、一纏めで言われてるけど結構枝分かれしてる物なのよ。魔獣とかの獣が多い場所とか、私のような妖精が澄んでいる場所。』

性格の悪い墮天使とか、天使がいる場所とかね。』

「成程…ね」

『ここはわからないけど、悪霊系はいなさそうね。と言う事はちょっと強いかもしれないから気をつけていきましょ？ 異界の規模的にやばいのは少なさそうだし』

異界はその規模によって出てくる悪魔のレベルが変わるようだ。

ゴーストがいた場所の異界はとても狭く店の内部そのまま程度の大
きさしかなかった為、出てきてもゾンビが関の山だった。

バーのいる所は最低でもレベル2の悪魔が出てくる場所だと思う。

最大は：まだ探索してないからわからないけど5〜10程度だろう。

自分の身の丈にあつた異界を選ばなくてはあっさり死ぬから気をつ
けないといけないな。

まずはその辺を歩く事にした。エネミーソナーは常時起動中でまだ
その辺に悪魔はいなさそうだ。

『ん〜、最近は薄暗い異界ばかりだったから気分転換になりそ〜
だねっ 』

「気楽でいいなあ、ピクシーは。僕は心配でたまらないよ」

『結構強くなつたのに心配性だなあ、サマナーさんは』

「はは、損な性格だとは自分でも思うよ」

僕は基本本人の数倍心配性だ、危機管理機能が高いせいかもしれない。

上手く立ち回らないと苛められたりしてたからね、前世も現世も。
そして苛められたら、殴られたらなどと後の事を深く考えてしまう
タイプだ。

ポジティブな人がその時は羨ましいと思う。

『んー。サマナーさん？ 悪魔の反応ないの？』

「今の所はね。怖いくらいに何の反応も無いよ、これはもう少し奥に行かなきゃ行けないかな」

『もしかしたら奥で待ち構えてたりして』

「そんな頭の効く悪魔で数が多いと僕は一瞬で逃げる。もしくは一瞬で殺されるかな…後者は遠慮したい」

『今までの異界と違って辺りに清浄な空気が流れてるしねえ…ハズレかも』

「居たとしても天使、かもしれないな。となると逆に危険かも」

『あれ？ サマナーさんは天使嫌い？』

「個人個人の天使は見ないとわからないけど。大本の天使は法と秩序でしか動かないって聞いた事あるし。その前では人間なんて断罪される塵芥だよな」

『あはは…ほとんどまちがってない。天使って融通聞かないの多いしねえ』

「敵対してきて倒せるなら倒すとして、仲魔に出来るなら欲しい所だね。多分攻撃魔法や回復魔法使えるだろうし」

ピクシーだけに負担をかけてばかりだから、ここいらでもう1〜2
体仲魔が欲しい所。

問題は今までの悪魔は全部、問答無用で攻撃してきたから他の悪魔
も問答無用かもしれないという不安がある。

せめて話しになればいいんだけど…ね。

「…っ、反応だ奥に3体。ピクシー構えて」

『おっけっ！』

辺りはひらけていて隠れる場所は無いから奇襲をかけたり安全な場
所を探す意味が無い。

万が一の場合を考えて文珠はいつでもいけるようにしている。

油断無く構えていると上空から凄い勢いで何かが飛んできるのが見
えた。遠目からでもあれが人型だというのがわかる。

やはり天使系の悪魔のようだ。

彼等…いや彼女等はそれぞれ槍などを持って僕達を一瞥していた。

『人の子と妖精よ。何用でここにきましたか？』

『答えなさい人の子よ』

『虚偽は許しません』

行き成りの上から視線…天使だから仕方ないといえは仕方が無いか。別にやましい事をしにきた訳じゃないので素直に答える事にする。

「僕は現実世界からこの異界に來ただけです。用は特にありません、強いて言えば鍛錬でしようか」

『鍛錬、ですか？ 用も無いのにこの神聖な場所に人間が足を踏み入れたというのですか？』

『いや、ちょっと待ってよ。異界に入ってきたのは悪いけどこつちからしたらここがそんな神聖な場所だなんてわからないじゃないっ』

『口うるさい妖精ですね。私達は人間に聞いているのです。邪魔をすると神罰を与えますよ』

「…っ」

ピクシーに言われた言葉に一瞬で激昂しそうになる。

だめだ、怒るな…ここで怒ってしまえば戦闘になる可能性が高い。流石に恐怖心はおぞましいゴーストに比べると幾分かましだが、それでも天使で、数も多い。

対して此方は弱い人間と妖精でしかない。文珠を使えば何とかなるかもしれないが……

「わかりました、足を踏み入れてしまつて申し訳ありません。直ぐに立ち去るので許していただけないでしょうか？」

僕の言葉に天使は嫌な笑みを浮かべた。

ああ、あの顔は知っている。嗜虐の笑みだ。人を傷つけて喜ぶという最低な表情だ。

『おろかな人間よ。貴方の素直さに免じて、貴方の命だけで許しましょう。其処の妖精はどこへなりとも去りなさい』

『んなっ！？ 間違つて来ただけじゃない！ 行き成り出てきてその言い方無いんじゃないのっ！？』

『何という……何というおろかな妖精なのでしょう。神の慈悲を無碍にするなんて、その人間のおかげで貴方は神の慈悲に預かれるのですよ』

『あつたまきたっ！ サマナーさんっ！ こいつら殺しちやおう！ どっちにしたってここには狩りに来たんだし今更だよっ！』

『何というおぞましい考えをっ！ ここが神聖なる天使の世界と知つての言葉ですか！？』

『許されざる大罪です。おろかなる者達よ。法の名の下に地獄に落ちなさいっ!!』

勝手に話して、勝手に進める天使達。

ああ、そうだ。敵対するなら容赦はしない…アナライズは先ほどからしていた。レベルは4。今までの悪魔の2倍の悪魔だけだ。

「ピクシー、有難う。怒ってくれて…天使。僕は神様なんて信じてない、そしてあんた達の言うとおりに素直に死んでやるつもりも無い」

『愚か者があつ!!』

「死ねって言われて死ぬくらいなら愚か者でも構わないさっ！ 足掻かせて…いや狩らせてもらっつ！」

天使が弱いのは銃弾と呪い。

ならば話は簡単だ。それぞれ向かってくる天使に対して文珠を使う。

文字は2つ。

「のろわれろ、のろわれろ、のろわれろ…呪われて…死ねっ!!」

【呪】【殺】

イメージしたのは女神転生ではトラウマものの呪殺魔法『ムドオン』
相性は『呪』で相手にとっては弱点でしかない。

思いっきり掲げて発動させる。

文珠はイメージ通りに発動し『敵全体』へおぞましい死を投げかけ
ていく。

『あぐ…!?!? あぎゃああああああああつ!?!? うづつ
!?!? うげええええええつ!?!?』

『どうしたのです同胞よっ! かはっ!?!? い、いやっ!?!? 死が、
来る?!? やめて…やめてやめてっ!?!? 止め…いぎゃああああ
ああああつ!?!?』

『ま、まさか呪殺っ!?!? くっ…くああああああああつ!
?』

『うわー…私、出番無し? ってか呪殺って。ハンパないねーサマ
ナーさんの異能って』

天使が3体とも空から落ちて喉をかきむしったり芋虫のように這い
蹲っている。

助けて、助けてと絶叫を上げて、一体が事切れた。

『人の子よっ！ 貴方の罪を許しますっ！ だから、だからこの呪いを止めなさいっ！ いぎっ！？ ぎいいいい！？ 止め…てええええええっ！？ ……………』

「随分勝手な事を言うね。許さないと言って殺しにきたのはそっちだ…なら逆に殺されることも考えるものだろう？」

返事は無い、その天使もすでに死んでいたから。

人型の存在が死んでも恐怖がわからないのは慣れてきたからなんだろうか。それとも『悪魔』だから、と見ているせいだろうか？

ああ…そうか、殺されそうだから殺し返した。それだけの事だ。

『あぐっ…あぐう…し、死にたく…ない……………死にたく…』

ビクビクと震える最後の天使。どうやら呪殺を耐え切ったようだ。でも体力も精神力も使い果たしたようで動けるほどにはなっていない。

さて、どうしようか。

『動けないみたいだねえ。サマナーさんここは私にやらせてよ。こいつさつきから気に食わなかったんだよね。私のサマナーさんを馬鹿にしてや…』

「ひ…ひい……」

「心が折れてるみたいだね。待つてくれないかなピクシー」

「ふえ？ ま、まさか？ 私やだよこんなのと仲魔だなんて？」

「使える物は使うさ、まあピクシーと一緒にするのはないけどね」

僕は天使の前に立ち、自分ができる限りの蔑む瞳で見据える。

彼女はガクガクと震えて、その様子はまるで生まれたての小鹿を連想させた。

「選択肢をあげる。よく選んで決めてくれ。1.この場で死ぬ 2.僕の仲魔…いや下僕になる。選ぶ」

間違っても仲魔とは見れない。僕にとって仲魔とはピクシーのような存在だから。

「に…人間の僕…に…なんて……」

「なら、もう一度味わうかい？ あの呪いを？」

「~~~~~!? いやあ…いやです…!! わ、わかりましたっ！ 貴方に、貴方様に従いますっ！」

天使と言ってもこの世界ではこんな存在なんだな。命は惜しいのか
… 僕のようなだね。

じゃあ、せいぜい役に立ってもらおうとしよう。最終的には仲魔の合
体に使うのもいいかもしれない、その程度の価値しか見れないしね。

「なら契約だ。これ以降、僕に従え、僕の命令を聞いて、僕の為になれ。さもなければ待つのは絶望だ」

『わ、わかりました… 契約者よ… 我が主人よ… 私は天使・エンジェル。コンゴトモヨロシク… 』

その言葉と共にエンジェルをCOMPに収納する。

はあ…

「怖かった…」

『ええ！？ かつこいいなーって思ってたらそれっ！？』

「あのさ、昨日今日でそう簡単に変わるはず無いじゃないか」

実を言うと足がガクガクだ。あの時はハーモナイザーのおかげで精神的にハイになっていたおかげだろう。

後は出来る限り悪人の真似を試してみたけど、どうやら上手くいったみたいだ。

とはいえあのエンジェルの扱いは、さっきも言ったとおりだね。

「でもさ、僕だって大事な仲間をあそこまで言われて冷静じゃいられなかったんだよ」

『…んもう… サマナーさんは優しいんだね』

「そうかな？ あの天使達は自分でも驚くくらい殺せたんだけど」

『敵は敵だよ。そいつらにまで情なんて感じたら戦えないし、サマナーさんのその割り切り方は良いと思うよ。博愛主義者じゃ死んじやうしね』

「あははは…：そうだね。さて、これからどうしようか？」

『天使と戦うのは面倒だなあ。サマナーさんの呪殺があれば楽だけど、いける？』

「余裕を考えて使ったとしても10回がいい所かな。それ以上は危険だともつ」

『なら、ある程度誘いながら戦うのがいいかもね、よし、稼ぐぞお〜！』

「ならエンジェルには働いてもらおう事にしようか。折角の駒だしね」

『そこで仲魔と言わないサマナーさんに痺れて憧れるう』

「いや、憧れても困るな…」

さて、無理しない程度に戦うとしようか。

……

……

…

天使達と戦った、ある程度苦戦したが戦えない敵ではなかった！！

天使・エンジェルを仲魔にした。

魔石をいくつか手に入れた。合計数が10個になったので袋に入れてひとまとめにした。

エンジェルカードを2枚、アメジストを1個、エストックを1個、宝玉を1個手に入れた。全てマジックカードで収納した。

大樹はレベルが上がり、スキルを覚えた。ピクシーはマグネタイトを消費してレベルが上がり、スキルが進化した。

深い信頼により、ピクシーが本体だと判明しました。ステータスの変動が起こります。

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：7 「属性」：N-N

「所持金など」 MAG：1237 ￥：127652 魔

貨：2800

「ステータス」

HP：39 MP：38

力：2 知：2 魔：1 体：2 速：4 運：2

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： x 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・文珠の素質？

・マジックカード？

・食いしぼり

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：70 判断力強化 恐怖心軽減

力：+4 知：+3 魔：+3 体：+3 速：+4 運：

+2

「アイテム」

- ・文珠×20 生成量：一日51個 所持限界量：21個
- 文珠【癒】×5
- 文珠【防】×5
- 文珠【浄】×2
- 文珠【火】
- 文珠【風】
- 文珠【雷】
- 文珠【呪】×2
- 文珠【殺】×2
- 文珠【脱】
- 文珠【出】
- ・マジックカード51枚 生成量：一日50枚
- 日本刀収納
- エストック収納
- ニューナンプ収納（弾丸3発）
- 魔石袋『10個』収納
- 宝玉収納
- アメジスト収納
- ゴーストカード収納
- スライムカード収納
- スライムカード収納
- エンジェルカード収納
- エンジェルカード収納
- エンジェルカード収納

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。

「名前」：ピクシー 「種族」：妖精

「現在LV」：7 「属性」：N-N 「召喚MAG」：7

0

「LvUpに必要なMAG」：900MAG

「ステータス」

HP：39 MP：56

力：3 知：6 魔：8 体：3 速：4 運：5

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：× 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・信頼

・本体

「スキル」 スキル枠限界

・ジオ？ 対象に電属性小ダメージ。

・マハ・ジオ？ 全体に電属性小ダメージ。

・パトラ？ 対象の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖状態を

回復。

・ディア？ 対象のHP小回復。

・メ・ディア？ 全体のHP小回復。

・妖精のおせつかい。対象を『至福』状態にする。

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

本体：本体である。悪魔合体をしても姿が変わりにくい。ステータスが基本より高い。

「名前」：エンジェル 「種族」：天使
「現在LV」：4 「属性」：L-L 「召喚MAG」：4

0

「LvUpに必要なMAG」：900MAG

「ステータス」

HP：52 MP：32

力：3 知：7 魔：7 体：5 速：4 運：3

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・服従

・飛翔

「スキル」 スキル枠限界

・ハマ？ 対象を聖なる力で即死させる。

・ディア？ 対象のHP小回復。

・ファイント 対象に剣属性攻撃、中ダメージ。

服従：サマナーに服従している。絶対に命令に背かない。

飛翔：飛行が可能。自分と同程度の重さなら持ち運びができる。

Continue04 〈悪意ある神聖〉（後書き）

と言う訳で、天使エンジェルを恐怖で仲魔にしました。

後1〜3話で学校編になります。そこかららき すた勢とクロスし
そうですね。

Continuous く揺らぐ思い、揺らぐ思い、ユラグ重いく(前書き)

初の合体です。

エンジェルがおかしな感じになりました。

Continue05 く揺らぐ思い、揺らぐ思い、ユラグ重い、

『と言う訳で、現在戦力は3つて所だけどー…正直前衛が足りないね』

「エンジェルは中々後衛だからね」

『あ…あの…申し訳…』

「ああ、気にしてないから。出来ない事をやれだなんて言わないよ」

『あ、有難うございます』

エンジェルを部下に加えて翌日、作戦会議のようなものを開いている。

今のパーティ構成だと前衛が居ないのだ、ピクシーと二人だけの時は気にするほどじゃなかったけど、仲魔が増えたのだから陣形を整えるべきだと考えてみた。

そうなるに僕は中々後衛で、アナライズや攻撃支援、文珠による攻撃。

ピクシーは耐久力が少ないから完全に後衛火力。ジオが効かない敵には回復などの支援になってもらう。

エンジェルはこのレベルにしてはそこそこ体力はあるが、攻撃系の

スキルが中距離のフアーント程度しかない。

防御も並で銃弾に弱いのがネックな為、前衛に置くのは不安が残る。崩れたら直ぐ僕に来る事を考えると硬い前衛が欲しい所だ。

『となると、地霊とか魔獣とかかなあ…どんなのがいたっけ？』

「んー、流石にわからないなあ。僕はなりたてだしね」

ゲームの通りならこのレベル帯で使えそうな前衛悪魔といえば、タル・カジャが使って奇襲を持っている妖精・ゴブリンと、火反射でマハ・ラギを持ち、そこそこ耐久のあるメルコムかな。

オニはゲームだと8レベルなので仲魔にできるかどうかわからないけど、優秀な前衛だと思う。問題はその異界を探す事んだけどね。悪魔合体で作り上げるのもいいかもしれないけど、そもそも邪教の館がどこにあるかわから…

「エンジェル。邪教の館が、業魔殿。どちらに聞き覚えはないか？」

『後者は存じ上げませんが…前者は聞いたことがございます』

『おおお？ 合体フラグk t k r 』

「場所はわかるのかい？」

『は、はい。一度此方の世界に顕現したときに調べた事がございませ…あ、あの…わ、私は…その…』

「言う事さえ聞けばエンジェルの意見を無視して合体はしないさ。言う事さえ聞けばね」

『は、はいっ！ 勿論です、我が主よ』

エンジェルと話していると自分がダーク属性に傾いてるような感じがする。

威圧的な感じで部下に加えたし仕方ないといえば仕方がないけど…まあ、属性はニュートラルに落ち着いてるし大丈夫だろう。

よし、これで合体の問題は解決できた。上手くいけば邪教の館でも情報が得られるはずだ。

「じゃあ、早速向かうとしよう。合体素材のカードがあるし合体したいなら考えるけど？」

『そだねえ。最終的にティターニア様になれるなら合体してもいいかもねえ』

『カードでの合体でしたら…了承いたします』

『カードのレベルが高くて意識が乗っ取られないからねえ。便利だよ便利〜』

大事な仲魔の意識がそのまま置いて欲しい場合とかにはこのカードが有用だ。出来るだけ沢山集めておくのがいいかもしれないな。

と言う訳で出かける準備を整えて部屋を出る。

リビングには両親が珍しく揃っていた…会話も何もない状態だけだね。

二人とも此方に気づいたけど何も話す事はなく、寧ろわかりやすいくらいに目を逸らした。

僕も何も言う事もなく家を出て行った。

すでに家族の情というのはこの家にはないんだ、と改めて実感してしまうな。考えても無駄だな、近い内に高校も辞めて家を出よう。

視野が広がると色々価値観などが変わってくるというのは本当みたいだ。

前までは家から出るのも怖いと感じていたが、今は出て行けといわれたら直ぐに出て行っても構わないと思えるようになってる。

戸籍自体は残っているし、デビルサマナーになった今なら仕事などもどうにかできるだろう。

マグネタイトを現金に出来る施設があれば、悪魔を狩って生きていくのもありだろうし、生活もどうにかなりそうだ。

さて、邪教の館に向かうとしよう。

エンジェルのナビ通りに歩いていくと見慣れた雑貨屋にやってきた。今時の店にしては古風過ぎて若者はあまり通わない店だ。店主は気のいいおじいさんで僕は良くここを利用してはいるのだが。

「と言う訳でついたけど、というかこの雑貨屋が邪教の館だったなんて。世界は狭いというか何というか」

『ここって前にサマナーさんが小物買いに来た場所だよねえ。私でればよかったかもだね…』

「今更だよ、今更。さあ入ろうか」

早速中に入るとやはりというか人は見当たらない。

「おや…今日も来たのかい？」

出てきたのは人のよさそうなおじいさん。この店の店主さんだ。

奥さんは昔に亡くなったようで、この小さな雑貨屋を一人で切り盛りしている。

今では大型雑貨店などが幅を利かせているが、それでもこの店を畳まずに頑張っている人なのだ。

「あ、こんにちは。えーと今日は…」

「??? どうしたんだい？」

「その…これはわかりますか？」

「ふむ……!?!? ……………まさか君がねえ…そちらの用事でくるのは初めてだろう。こちらについてきなさい」

「あ、はい」

いつものニコニコ顔から一変して難しそうな表情になるおじいさんの後についていく。

奥に入っていくと地下があり、僕はそれを黙ってついていく。

そして階段を下りた先は、上の素朴ながらもちゃんとした雑貨屋から一変して、ゲームで見るような機械やいびつな魔方陣が並ぶ異質な部屋だった。

おじいさんはその中心まで行くとこちらを振り返り僕を見つめる。

「まさか坊やがね…時間は進むのが早いなあ。さて、邪教の館によ

うこそ。今日は何のようかね？」

「えと、ですな」

僕がまだ初心者のサマナーであること、ここ以外のサマナー関連や裏関連の店の場所がわからない事、僕に足りない情報が欲しい事を話した。

おじいさんは嫌な顔もせず僕に色々情報を只で渡してくれた。本当に頭が上がりそうにない。

おかげでマグネタイトの売買も容易に出来そうだ。ここでも買取や売却は行っているそうだけど、ここよりは専門的に買い取っている場所に行くほうがいいと言われたので、参考にする。

「成程のう…仲魔はピクシーとエンジェルだったかね？」

「あ、はい。それでなんですけどこのカードは使えますか？」

「ふむ、カードかね？ 勿論大丈夫じゃよ。これ以外のカードも色々取り扱っているし、必要なカードは買い取ってあげるからの、いつでも持ってきてきなさい」

「有難うございます。でだ…どうするピクシー？」

『そうだねえ…って。私合体しちゃうとサマナーさんのレベル確実にオーバーしちゃうんだよねえ…暫くはこのままでいいかも。ハイピクシーに進化って手もあるしねえ』

「となると、エンジェルか…地霊があればメルコムに出来るけどカードはありますか？」

「カハクならあるが、そうじゃの…坊やが持っているエンジェルのカードと交換なら渡しても良いぞ？」

「あ、ありがとうございます。さて、エンジェル。合体しようと思っがどうする？」

『…堕ちるのは…ですが、自意識をこのままにして下さるのですから。お受けいたします』

「わかったよ、約束しよう。じゃあ合体をお願いします」

そして僕はこの世界で異界に告ぐ神秘を見る……………

魔方阵に佇むエンジェルと、一枚のカードが光を放ち始める。隣ではおじいさんが見知らぬ機械を色々と弄っている。

魔法と科学が同調している世界か…今更ながらにこの世界は女神転生の世界か、それに類似した世界なのだと確信してしまう。

『いやー、どうなるか見物だねえ』

「ピクシーも楽しみなのかい？」

『そりゃあ勿論だよ。近い内に私もこうして合体するんだしねえ』

あ、精霊進化とか御霊進化でお願いね 後はカード 』

「勿論だよ。僕は君が居なくなったら悲しいからね」

『………… うん、私もサマナーさんと一緒にいいな。楽しいしねっ
』

さて、合体も佳境だ…すでに魔方陣はまぶしいくらいに輝き、視認する事ができない。

光は何度も激しく点滅し、ゆっくりと消えていく。

…其処には黒い羽を持つエンジェルが居た。前とは違い表面上は優しい表情をしているエンジェルの表情が、少しだけ悪人っぽい笑顔になっている。

髪の毛も黒く染まり、まさに堕天使と言った感じになっていた。

『…私は堕天使メルコム、エンジェルの姿より、ハマ、ディアを敬称しました。コンゴトモヨロシク。我が主よ 』

「成功じゃな。今回はおまけで継承できる能力を2つにしておいてあげたからの、大事にしてやるんじゃないよ?」

「有難うございます。では、これからも頼むよメルコム」

『わかりました。我が主よ 』

『なーんか、サマナーさんを見る目が熱っばいんだけど……もしかして天使ってMなのかな。いや今は墮天使だけど』

『な…なにをおっしゃるのですかピクシー。わ、私は服従し、忠誠を誓っているだけで、その…』

『まー、どっちにしても内では底辺の存在だけどねー』

「確かに」

『はう…酷い…でも…それも…その…』

『ヤバイ…マジもんだこれ………』

滝汗を流すピクシー。例に漏れず僕も少しばかり引いている。

部下にした時から、目つきがなんか変だったけど、もしかしてピクシーの言う通りMなのかもしれない。

…命令さえ聞いてくれるなら別に構わないけどね…うん。便利な部下だと思つことにしよう、それが建設的だ。

とりあえず僕はおじいさんに礼を言い、他の店を色々回った後、軽く異界を回る事にした。

エンジェルが墮天使メルコムに変化しました。 ハマ？ デイア？を継承しました。

4

「名前」：メルコム 「種族」：墮天使

「現在LV」：7 「属性」：N-C 「召喚MAG」：6

「LvUpに必要なMAG」：1250MAG

「ステータス」

HP：65 MP：43

力：5 知：8 魔：8 体：7 速：6 運：5

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・強服従

・Mっ気

・飛翔

・連続攻撃・弱

「スキル」 スキル枠限界

・ハマ？ 対象を聖なる力で即死させる。

・ディア？ 対象のHP小回復。

・マハ・ラギ？ 全体に火属性小ダメージ。

・タル・ンダ？ 全体の攻撃力を1段階減少させる。

強服従：サマナーに強く服従している。絶対に命令に背かず、中
確率でサマナーを攻撃からかばう。

飛翔：飛行が可能。自分と同程度の重さなら持ち運びができる。

Mっ気：攻撃を受けても怯まなくなる、相性によってはMPが回

復する。

連続攻撃・弱：低確率で、連続で攻撃する。

大樹は様々な店の情報を手に入れた！

邪教の館の情報を得た！

生体マグネタイト協会の情報を得た！

武器屋の情報を得た！

防具屋の情報を得た！

1～3レベル 3～6レベル 6～9レベルの異界の情報を得た！

スライムカード2枚が合体しアークカードに変化させた！

6～9レベルの異界を探索した！ 悪魔はかなり強敵で途中で撤退せざるをえなかった！

コッパテングカードを1個 カハクカードを1個を手に入れた！

悪魔を何体が倒した為、大樹はレベルが上がった！

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：8 「属性」：N - N

「所持金など」 MAG:1552 ¥:107652 魔
貨:3400

「ステータス」

HP:42 MP:40

力:2 知:2 魔:1 体:2 速:5 運:2

「相性」

剣: 物: 技: 火: 氷: 電: 風:
魔: 心: 禁: 聖: × 呪: 状: 万:

「所持スキル」

- ・文珠の素質?
- ・マジックカード?
- ・食いしぼり

「ソフト」

- ・デビルアナライズ
- ・エネミーソナー
- ・ハーモナイザー

1分間の起動 消費:MAG:80 判断力強化 恐怖心軽減

力:+4 知:+3 魔:+3 体:+4 速:+4 運:

+3

「アイテム」

・文珠×20 生成量:一日51個 所持限界量:21個

文珠【癒】 ×5

文珠【防】 ×5

文珠【浄】 ×2

文珠【火】

文珠【風】

文珠【雷】

文珠【呪】 ×2

文珠【殺】 ×2

文珠【脱】

文珠【出】

・マジックカード51枚 生成量：一日52枚

日本刀収納

エストック収納

ニューナンブ収納（弾丸3発）

魔石袋『10個』収納

宝玉収納

アメジスト収納

ゴーストカード収納

アイシーズカード収納

エンジェルカード収納

コッパテングカード収納

カハクカード収納

食いしぼり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。

Continuous く揺らぐ思い、揺らぐ想い、ユラグ重いく（後書き）

相変わらず短くて（汗）

合体はどんなのがいいかわかりませんね。

どんな悪魔を仲魔にしたいか皆さんのご意見などお待ちしてますね。

あと造魔は欲しいですか？

お話の内容は頂いたご意見などで色々変化しますので、よかったら色々ご意見お待ちしています。

Continue06 〈邂逅するクロスロード〉（前書き）

お気に入り登録が20件を超えました、有難うございます。

感想など頂けると、更にやる気が出ますので宜しくお願いしますね。

本格的なクロスオーバー開始？ です。

といっても主人公とはまだ絡みません、寧ろ下手すると敵対…？

どうなるか、ですね。

Continue 06 〈邂逅するクロスロード〉

「ピクシーはマハ・ジオ！ メルコムはマハ・ラギっ！ オニは暴れまくりで相手を翻弄してくれっ！」

目の前に居るのは5体のアークエンジェル。決して勝てない相手じゃないが、油断できる相手でもない。

弱点である電撃の魔法で相手を止めつつ、火炎で焼き払いダメージを受けた悪魔達に暴威が振るわれる。

僕は僕で銃を持って相手を牽制していく。

「効いてるねえ〜 もういつちよマハ・ジオっ！」

「えげつないな…本当にピクシーなのか？」

「ちよっ！？ こんな可愛い妖精捕まえて何言うかなっ！？」

「ピクシー様ですし…」

「いつの間にか墮天使に様付けられてる妖精です、妖精です…あ、3体死んだね？ で、どう元天使として今の状況は？」

「え？ カオスなのでざまあないですね？ としか」

「この2日で変わりすぎだよメルコム…」

『お褒めに預かり光栄です、我が主よ』

墮天使になってどこか吹っ切れたのか、従順だったのが更に輪をかけて従順になり、更に色々と容赦がなくなったメルコム。

性格もいい感じに矯正されてるらしく、初めて会ったときは別人のような変わりように僕も流石に驚いている。

そして昨日仲魔になったオニも加えて丁度良いパーティになったと思う。

『んで、残り3体だな』

『おのれ…!! 異教徒どもがあ! 我ら神の意思をつぐ天使にこのような振る舞い! 許されません!』

『…ほんの数日前まで、私はアレだったんですね…はあ…』

『ホンキで何があったかなメルコム。変わりすぎだよ』

『いえ、墮天つていいなあ、と思ひまして。天使に戻るときもこの想いは忘れないようにしなければ。彼等ってなんだか人形みたいですし』

『貴様らああ! マジメにやるつもりがああ!? あがががががががが…』

『勿論、殺るつもりだよ?』

談笑していると見せかけて再び弱点のマハ・ジオが飛んでくる、今ので3体とも殺せたらしい。

膨大な量のマグネタイトが補給される。これだけあればオニのレベルを上げるのにも使えそうだなあ。

運の良い事に宝石とアークエンジェルカードも落ちてるし、結構な稼ぎだと思う。

それにしても…この短い間に随分と僕も精神的に鍛え上げられたものだ、今ではゴーストを見ても、多少気持ち悪いだけだし、ゾンビは寧ろ倒しやすい敵でしかない。

匂いがいやなので消臭剤を持ってこないとなあと同でも良い事を考えられるほどだ。

慣れる生き物って、怖いなあと実感する。

《サマナー様あ。私は使ってくれないんですのお?》

「…ややこしい事になるから、また今度ね」

『寧ろ出てこなくていいよ? サマナーさんを性的に襲おうとするなんて1000年早いっ!』

《やあん ちよっとしたスキンシップなのにい》

COMPから聞こえてくるのはオニと同時期に仲魔になった夜魔・リリムだ。

淫魔に属されるだけあって、寝ているときに性的に襲われかけた……いや男としては嬉しい状況と言った感じだけど、流石に止めた。

とつかピクシーが止めてくれたんだけどね。いやあ……僕はまだ清い……うん。男がこの年で清いのも現代的に考えると古いのかも……だ。

リリムとしては好意で行って来ていただけなので強くも言えない。暫くは夜が大変そうだ。

「よし、一休みしたら狩りを再開しよう。オニ悪いけどシート引いてくれないか？」

『おう。メシの時間だな　人間の作るメシや酒は美味いからなあ』

『流石に今からお酒はやめておいたほうがよいかと？』

『おめえ、墮天使なのに硬えなあ。美味しい物は食いたい時に食う！飲みたい時に飲む！　醍醐味だぜ？』

『それはそうかもしれませんが。まだ戦闘中なのを忘れないで下さいね』

『あーあーわかってるよ。美味しい物と同じくオレは戦うのも好きだからなあ』

「リリムも食べるだろう？ 召喚するよ」

《 サマナー様って優しいわぁ 》

『でも、キスしよーとかしたらマハ・ジオね』

『なあ、それってオレらも巻き込まれねえか？』

『連帯責任って事で。勿論サマナーさんは大丈夫だけどね』

『安心できねえええ！？ メルコム盾になれっ！』

『え？ 痺れるのも最近はいいかな、と。出来れば軽めで』

『こいつ末期だっ！？』

仲魔が増えて随分賑やかになったものだと思う、今まで…というか前世も含めてこんなに賑やかで楽しい時間はなかったから、今はとても楽しい。

明日から学校だけど、陰鬱な気分にならないのは彼らのおかげなのかもしれないな。

学校かぁ…辞めようかなあ。正直今のようにな異界探索してるほうが現金も稼げるし、毎日が充実している。

強すぎる異界にさえいかなければ何とか戦えるようになってるし、普通に仕事をするよりよっぽどお金も稼げているから。

マグネタイトや魔貨は結構いい値段で売れるので、ある程度売れば数年はのんびりくらせるくらいのお金は貯められるのだ。

勿論、その分武器や防具、アイテムは高いんだけど。

GS美神の世界みたいに破魔札が1億円とか精霊石が1〜3億円とか言わないけど、100万を超える札やアイテムはざらにあった。

僕は接近より後列で銃を撃つほうが身の丈にあっているので銃器を買っただけでいいんだけど、それが高い事高い事：

力がないと上手く扱えない銃も多いし、まだまだ未熟だと感じる。

文珠のおかげで緊急時はどうにかなっているけど、この2日は使っていない。頼りすぎると後々に困る事になりそうな気がしてきたからだ。

便利すぎるせいで頼り切ってしまうと、緊急時に死ぬ可能性もあるから、使い時を考えるようになった。

こうやって考えられるのも、少しは強くなれたのと皆のおかげだと思う。

『ほらほら、サマナーさん 食べよっ?』

『口移しでもいいですよ、サマナー様あ?』

『言った傍からエロに走るなっ!?!』

『エロくない淫魔なんていませんからっ!』

『あー…うめえ。これも美味しいな』

『ですね、人間が羨ましいです。最近特にそう思います。あ、この煮物美味しい』

「賑やかだなあ…」

少し動けば殺し殺されの世界なのが夢に思えてしまっけど、これが現実。

今だ仲魔は殺されてないし、僕も死んでないけど。多分理不尽に仲魔が死ぬ事もあると思う。蘇生魔法は普通に存在してるそうだから実感がわきにくいけどね。

仲魔が死んだ時、僕は耐え切れるのか、精神的に暴走しないかまだわからない。

それもなれないといけないのかと、最近はそのだけが悩みだ。

異界を踏破した！ 異界の主を倒した為この異界を閉じる事に成功した！

ボス撃破ボーナス！ ソーマを手に入れた！

異界踏破ボーナス！ G-ラダーズを手に入れた！

魔石をいくつか獲得した！ 宝玉を1個手に入れた！ ベレッタ9
2Fを手に入れた！ 通常弾を20発手に入れた！

アークエンジェルカードを2個 アチエリカードを1個 ハーピー
カードを1個 オンモラキカードを1個

魔貨2000を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）3
000を手に入れた！

ピクシーは1500 メルコムは1300 オニは1400 リリ
ムは800のマグネタイトを補給した！

大樹はレベルが2上がった！ 仲魔達はレベルが上がった！

大樹はスキルを覚えた！

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：10 「属性」：N-N

「所持金など」 MAG：3252 ￥：378700 魔
貨：5400

「ステータス」

HP：48 MP：44

力：3 知：4 魔：1 体：2 速：6 運：2

「相性」

剣：物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔：心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・文珠の素質？ ・マジックカード？ ・食いしばり

知略

「装備」：装備一式は常にカードに収納済み

剣：グルカ・ナイフ

銃：ベレッタ92F(SA) 弾数：15

弾：通常弾×120

頭：プレートバンドナ 対物時防御上昇

体：ファイヤー・ガード 火炎耐性：

腕：G-ラダーズ 呪殺無効

足：ジエツトブーツ 速+1

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：100 判断力強化 恐怖心

軽減

力：+5 知：+5 魔：+4 体：+5 速：+6 運：

+4

「アイテム」

・文珠×20 生成量：一日52個 所持限界量：24個

文珠【癒】×5 文珠【防】×5 文珠【火】×1

文珠【浄】×2

文珠【風】×1

文珠【雷】×1

文珠【呪】×2

文珠【殺】×2

文珠【脱】×2

文珠【出】×2

文珠【蘇】×1

・マジックカード51枚 生成量：一日53枚

魔石袋『10個』収納

魔石袋『10個』収納

魔石収納

ソーマ収納

宝玉収納

宝玉収納

アメジスト収納

ゴーストカード収納

アーシーズカード収納

エンジェルカード収納

コッパテングカード収納

カハクカード収納

アークエンジェルカード収納

アークエンジェルカード収納

アチエリカード収納

オンモラキカード収納

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。
知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点

「名前」：ピクシー

「種族」：妖精

「現在LV」：8

「属性」：N-N

「召喚MAG」：7

4

「LVUPに必要なMAG」：800MAG

「ステータス」

HP：42 MP：62

力：3 知：6 魔：9 体：3 速：4 運：5

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：× 風：
魔： 心： 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

- ・ 信頼
- ・ 本体

「スキル」 スキル枠限界

- ・ ジオンガ？ 対象に電属性中ダメージ。
- ・ マハ・ジオ？ 全体に電属性小ダメージ。
- ・ パトラ？ 対象の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖状態を回復。

- ・ デイア？ 対象のHP小回復。
- ・ メ・デイア？ 全体のHP小回復。
- ・ 妖精のおせっかい。 対象を『至福』状態にする。

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

本体：本体である。悪魔合体をしても姿が変わりにくい。ステータスが基本より高い。

- 「名前」：メルコム 「種族」：墮天使
- 「現在LV」：8 「属性」：N・C 「召喚MAG」：6

8 「LvUpに必要なMAG」：1680MAG

「ステータス」

HP：69 MP：46

力：5 知：8 魔：8 体：7 速：7 運：5

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・強服従

・Mつ気

・飛翔

・連続攻撃・弱

「スキル」 スキル枠限界

・ハマ？ 対象を聖なる力で即死させる。

・ディア？ 対象のHP小回復。

・マハ・ラギ？ 全体に火属性小ダメージ。

・タル・ンダ？ 全体の攻撃力を1段階減少させる。

強服従：サマナーに強く服従している。絶対に命令に背かず、中確率でサマナーを攻撃からかばう。

飛翔：飛行が可能。自分と同程度の重さなら持ち運びができる。

Mつ気：攻撃を受けても怯まなくなる、相性によってはMPが回復する。

連続攻撃・弱：低確率で、連続で攻撃する。

「名前」：オニ 「種族」：妖鬼

「現在LV」：9 「属性」：N - C 「召喚MAG」：8

0

「LvUpに必要なMAG」：1300MAG

「ステータス」

HP：81 MP：24

力：11 知：6 魔：6 体：7 速：4 運：7

「相性」

剣：物：技：火：氷：電：風：

魔：心：禁：聖：呪：状：万：

「所持スキル」

・豪腕

・連続攻撃

「スキル」

・暴れまくり 敵全体に1～4回の剣属性、小威力ランダム

攻撃

・牙折り 敵単体に中威力剣属性ダメージ 低確率で1

段階攻撃力減少。

豪腕：物理ダメージに1段階の補正。

連続攻撃：中確率で、連続で攻撃する。

「名前」：リリム 「種族」：夜魔

「現在LV」：10 「属性」：N-C 「召喚MAG」：

100

「LvUpに必要なMAG」：1990MAG

「ステータス」

HP：62 MP：73

力：7 知：11 魔：13 体：5 速：7 運：6

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：× 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・魅了

・魅了ブースタ

・睡眠攻撃

「スキル」

・ジオンガ？ 対象に電属性中ダメージ。

・マハ・ジオ？ 全体に電属性小ダメージ。

・魅了突き 対象に物属性小ダメージ。 中確率で魅了を付

与。

魅了：一定確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない。

魅了ブースタ：魅了の成功値を上昇させる。

睡眠攻撃：物理攻撃時、低確率で睡眠付与。

- 翌日・泉こなた視点 -

うあーっ！ ついに学校が始まってしまったあああああ…あのゲームもやりたいし、あのアニメもまだ見足りないのにいい。

それだけでなくアルバイトのせいで時間が取れなかったからなあ。

でもま、おかげでホクホクだしいいけどねえ〜

とうかさー、まさか私が非現実の存在になるなんて思わなかったにやー。

そういうのは漫画やゲームの世界だと思ってたんだけどねえ。

神様あんまり信じてなそうながみんがマジものの巫女さんだって聞いた時には驚いたもんさ。

何だかんだあって私もその世界に足をつっこんじやったんだけどね。んまっ、友達の為だから仕方ないよね。

異界もこれで4つは潰したのかあ。結構頑張ったな〜

「相変わらず眠そうだなアンタは」

「おっと、かがみんおっはよ〜 いやあ、最後の日だからせめてゲームのやり収めでも、とね」

「アンタはそんなことなくても毎日やってるでしょうが。たく、無理してたら色々危険なんだから気をつけなさいよ〜」

「おおっ！ かがみんが心配してくれるだけで私のHPは完全回復

さっ!」

「あはは、こなちゃんは朝から元気だねえ」

「おはよつかさ。最後の3学期がはじまるぞい」

「受験やだなあ…お仕事があるから大変だよ」

確かつかさは料理の専門学校だったね。私はみさきちと一緒にその辺の軽い大学に行く事にしたけど。

「ていうかさ? かがみは大丈夫なの? 勉強とか」

「勿論そっちも両立してるわよ」

「流石かがみのスペックはとんでもないね!。あっちのお仕事でも一番頑張ってるのに」

「慣れよ慣れ。アンタも慣れてきたでしょ? 寧ろこなたの方が心配よ。手伝ってくれるのは嬉しいけど受験とか大丈夫なの? 無理してるんだっいたら直ぐに言いなさいよね」

かがみんは優しいね。こっちの受験の心配までしてくれるのがなんか嬉しいよ。

高校を卒業してもまた4人で仲良くしたいもんだよ。勿論私はそのつもりだけだね。

その為には、学校もアルバイトも頑張るとしよーかねえ」

「あ、ゆきちゃんだおはよー」

「皆さん、おはようございます」

「おはよ、みゆき」

「ぐっもーにんみゆきさーん」

と言う訳でいつもの4人が揃った。実を言うと異界を搜索する時も、大体はこの4人のメンバーなんだよねえ。

初めはかがみとつかさだけだったけど、その後に私が入って。最後にみゆきさんが異界に巻き込まれてーって感じですると。

いやあ、あの時は焦ったよ。みゆきさん自体はなんの異能も無い普通の人だからねえ。

それは今もなんだけどさ。異能が無くてもみゆきさんは指揮能力やその知識力を用いての悪魔の弱点や情報とかを調べてくれるから大事な戦力なんだよね。

んで、みゆきさんが巻き込まれて悪魔に殺されそうになった時は泣きそうになったよ。どーにかして助けられたけど、あの日ほど肝が冷えた日は無いねっ！

「そついえば今日はあるの?」

「ん? 他の場所は小康状態だし、ひとまずは様子見ね。というか少しは休まないと倒れるでしょうが。それでなくても学校が始まったんだし」

「だよー。んじゃ今日は家でネットゲ三昧だーっ」

「せめて少しでもいいから、嘘でもいいから勉強するって言ってくれないか?」

「そんなの私じゃないっ!」

「流石こなちゃんだね」

「泉さんですから」

「アンタ達まで…はあ。泣きついてきても助けないからね?」

でも最後には助けしてくれるかがみん萌えー。

………

………

…

「あつ……………というまに下校時間だーっ！」

「はいはい、少しは落ち着きなさいよ」

「いいじゃんいいじゃん。今日はのんびりする予定なんだから」

「はあ…まあいいわ。言っとくけど早めに寝るのよ？ 寝不足の状態だと色々あつちで差し支えるんだからね？」

「だーいじょうぶっ！ まかせたまへー……………つてあれ？」

と言う訳でいざ帰宅しようっ！ って時に何処かで見かけた顔を見つけた。

「どうしたのこなちゃん？」

「ん、ちょっとね」

なんの変哲もなさそうな男子……………だけど。あの顔は見覚えがある。

そう、あれは先週の……………

「やっぱり同じ学校だったかあ……………」

「え？ え？ 何？」

「何一人で納得してるのよ。何があったのか教えなさいよ」

「ほら、先週話したじゃん、アルバイト中に会ったDSの事」

「!?!」

驚いてるかがみん達。

ちなみにDSがデビルサマナーの略ね、私が勝手に決めただけだよ。

表の方でおおっぴらにデビルサマナーなんて言えないしね。こつこつ隠語は大事なのさ

何処かで見たとある気がしてたけど、まさか同じ高校の同級生とはねえ、世間は狭いねえ。

「まさか同じ学校に居るとはね……」

「どつしよつお姉ちゃん……」

「まだ、悪い奴って決まってるわけじゃないし……暫くは監視が必要かもね」

「いやー、それなんだけど。彼って私の隠密見破ったんだよね、だからちよいと難しいかも」

「っ、そうだったわね……とりあえず今日は私の家で相談しましょ。

「こなたも悪いけど」

「んーん。大丈夫大丈夫、んじゃ急いで帰るねー」

「私も先に帰りますね、直ぐに向かいますので」

「うんっ」

「気をつけなさいよ？」

と言う訳でゲームの予定をくりあげてかがみの家にいく事になりました。

さてさて、何でここまでデビルサマナーを危惧するかというのだね… 答えは簡単なんだけど、大抵のデビルサマナーって悪い奴が多いんだよねえ。

ほら、悪魔の力が使えるでしょ？ だから大抵のサマナーってその力を使ってあくどいお金稼ぎとか、殺しとかしてるそうなんだよ。

これはかがみから聞いた話とみゆきさんがどこからか（ホンキでどこからなんだろね…）手に入れてきたかなり信憑性のある情報なんだ。

だから、デビルサマナー＝悪人っていうイメージが強いだよね、私達って。

更に言うと最近ネットを介して悪魔召喚プログラムとかいうのが蔓延してて、デビルサマナーが量産されてるっていう話もあるんだよ。

勿論私のほうでも調べてみたら、ドンピシャで悪魔召喚プログラムがうpされてました。

とは言ってもダウンロードできなかったんだけどね…何かパスワードとか資格とかでもあるのかねえ。

てなわけで、とりあえずは彼が悪いデビルサマナーなのか良いデビルサマナーなのかを確かめなくちゃいけないって訳さ。

万が一敵だとして異界で鉢合わせになれば、戦いは必至だからね。

いやいや、初日から大変な事になりそうだし。

- 泉こなた視点解除 -

Continue06 〈邂逅するクロスロード〉（後書き）

デビルサマナー 悪人な世界。

まあ、クズノハとかもありそうなので全てが全てそうではありませんが、大多数はそんな感じですよ。そういう人は1〜4レベル程度の人でしょうけど。

次回はどうしようかな…造魔のお話にするか、適当にお茶を濁すか

…

Continue07 魂無き者は愚かな夢を見るか？（前書き）

コメントを頂きました、とても嬉しいですね。

もっと頑張って書こうと思います。

と言う訳で造魔作成編に進みます2〜4話予定です。覚醒イベントも兼ねるかも知れません。

Continue07 〈魂無き者は愚かな夢を見るか?〉

「ドリー・カドモン…ですか?」

「うむ。わし等邪教の館の人間達の中でも生涯に1〜2度しか見たこと無いといわれる物じゃよ」

「それを取ってきて欲しいと、言う事ですね」

「そうなんじゃ。坊やは信用できるし、成功報酬としてそれを素体に造魔を作ってやる事にしよう」

「いいんですか? 造魔素体なんですよね?」

「はっは、わし等はそれを研究するより、その後の造魔を作り上げる事に興味を示しているんじゃないよ。それ自体の研究は研究者に任せおけば良い」

「確かにそう、ですね」

今日は溜まった魔貨やカードを売買しに邪教に館に来ている。

やはり元々表で仲の良かったおじいさんなので、僕は来てもあまり嫌な顔はしていなかった。それだけなのにとっても嬉しく感じてしま

しかし…ドリー・カドモンか。やはりごちゃまぜの世界なんだろうな…そのうちペルソナでも出てきそうだ。

人修羅が出てきたら、直ぐに逃げる準備は出来ている。あんなのは勝てる気がしないし、そもそも戦う気も起きないけどね。

「ドリー・カドモン。ドリーは確か【人形】の意味があつて【カドモン】は人間の意味でしたよね、錬金術用語で」

「そうじゃな。人間を作る人形、それがドリー・カドモンじゃよ」

『ふんふん。ま、なんにせよサマナーさんの戦力になるならやっておくべきだよね』

「そうだね。戦力的に魅力があるし、好きなようにカスタマイズできるらしいから異界によってスキルが入れ替えられるのもいいかもしれない」

『何でもいいけどよ。酒とかも頼むぜサマナー？ 報酬が現金や物じゃねえとやる気がでねえよ』

「わかったよ。上手く終えたら良いの買って上げるぞ」

『いよっし！ 燃えてきたぜ！』

『じゃあ私は、サマナー様との熱い一夜で構いませんわあ』

『はい、却下ー』

『しくしく。悲しいですよ、少し位いいじゃありませんか』

『私は我が主の思うままに』

「賑やかになったのう」

「そう、ですね」

「坊や、余計なお世話かもしれないが、眼が良くなったな」

「眼…ですか？」

確かに変わったかもしれない、いや変わったのだらう。彼女達に出会えて。良い意味で。

非日常を知って、戦いを知って、死を垣間見た。

およそ普通に生きていく上では味わう事のできない、この感情、この思い、この高鳴り。

下手をすれば死ぬとわかっているとしても、僕はこの人生を止めようとは思わないし、思えない。すでにこの生活が僕の中で基本になっているから。

家に帰って話す回数が増えた、といっても両親とは相変わらず冷めたままだけど、仲魔との会話は楽しい。

学校はつまらないけど、どうせ無視されるだけだから気にはしていない。早めに辞めようと思っているがタイミングが掴めないのが現状だ。

残り数ヶ月を我慢して残って、一応の高卒資格を取るか、もうデビルサマナーだけで生きていくか少し迷っている。

高卒資格は最低でも持っていたほうがいいかと思えるから。表での情報操作に使えるかもしれないし。

いや…お金があれば良い所の戸籍が買えるから、いつその事死んだ事にして戸籍を買って名前を変えろという手もあるかな。

「そうですね、僕もそう思います。それも…彼女達のおかげなんですけどね」

「その気持ちを忘れてはならんよ？ 悪魔使いに必要な素養とは。悪魔を思い、悪魔に慕われる事から始まる。力だけで押さえつけられればいいかはそれが帰ってくるし、優しさだけでは食いつぶされる。殺す覚悟と躊躇わない覚悟。そして悪魔を信頼し、信頼される覚悟を持つのが優秀なデビルサマナーじゃ」

「はいっ」

「ほっほっ。少々長くしゃべりすぎてしまったの、坊やは表でもお得意様じゃから特別じゃよ？」

「はは、商売上手ですね。後で小物も買わせて貰います」

「毎度のう」

さて、行くところか。初めての依頼だ。

会話を切り上げて僕達は目的の異界に向かった。

……

……

……

・ミッションが開始されました。

異界レベル7〜12 出現予想悪魔、女神、霊鳥、怪異、妖精、
魔獣、妖獣、邪鬼を確認。

依頼ナンバー01、『ドリー・カドモン搜索』 報酬：造魔一体
の無料作成

「流石に敵が強いな……」

『勝てないほどじゃないけど、うざったいよねえ。おかげでマグネ
タイトはホクホクだけ』

今までの異界の中ではかなりの高レベルの悪魔がいた。

僕達が今まで潜ってきたのは最大でも9レベルの悪魔しかいなかったから2桁台の悪魔と戦うのはこれが初めてだ。

文珠はあるので、ある程度の無理は利くのが僕達の唯一の利点か。

現在は【索敵】の文珠で悪魔の奇襲に備えている。

先ほどの戦闘では、相手の数が多すぎたので【幻惑】と【翻弄】の文珠で相手の攻撃を逸らしつつ戦った。

直積的な文珠も【爆】などで使っている。

この短時間で7個も使っているので少しは控えないといけないな…

『しかしサマナーのその異能は便利だな。限界が決められてなかったら2〜3段階上の悪魔も倒せるんじゃないかねえか？』

「どうだろう。イメージ通りに使えて、相手の弱点をつければいけるかもしれないけど。態々無謀な戦いはしないよ。寧ろ逃げる」

『そうそう。戦う時は磐石に、逃げる時には完璧につ、てね』

『まあ、リカム持ちがいねえし仕方ねえと言えはしかたねえな』

『ハトホルを仲魔に迎えるのはどうでしょう、我が主よ』

「ハトホルか…さっきのアナライズの通りだとマハ・ガルとメ・デ

イア持ちだね。風系の魔法は便利だし、メ・ディア持ちが増えるのは楽で良いか。よし次からは会話を中心で行こう」

『うー…また女の子かあ、サマナーさんの仲魔って女比率高いよね…私にメルコムにオニにリリムって…あれ、全部女じゃん…』

『オレは自分が女だなんて思ってねえよ。つーかオレを混ぜるな』

『くっ…隠れてデレる気だねオレっ娘っ!!』

『阿呆かお前は…』

「順調にアニメやゲームに毒されてるねピクシー…」

ゲームやアニメが大好きなピクシーって珍しいんじゃないかと思う…あれ？ 本来ピクシーはイタズラ好きで奔放だから間違っていないのだろうか？

別にいいかそれも個性だし、僕としては今のピクシーの方が好ましい。

命令だけを聞く人形は、便利かもしれないけど味気ないしね。

『我が主よ、お飲み物ですどうぞ』

「ああ、ありがとうメルコム」

メルコムは僕に良く尽くしてくれる。あの時であったあの天使が良
くここまで変わったものだ。

率先して動いてくれるし、僕の命令に従順なおかげで戦闘時はとて
も楽で良い。

少しは僕のほうでも態度を改めないといけないかもしれない…あ
の時は色々と余裕が無かったし…

『どうかなさいましたか我が主よ？』

「いや、そろそろ行く。今日直ぐに見つかるとは思わないけど、
探索はしておくべきだからね」

『はあい 行きましょサマナー様あ』

『ちよっ！？ ひつつき過ぎっ！ ひつつき過ぎだって！！』

『ピクシーさんは可哀想ねえ、小さいからお相手も出来ないんでし
よっっっ』

『ムカツ……よし、サマナーさんこいつ合体事故でスライムにする
べきだよ、そうするべきだ。もしくは私を進化させて人型にしてお
願いぷりーっ』

「落ち着いて、落ち着いてねピクシー。青筋が少し怖いよ」

『はあ、殺し合いの途中だったのに何桃色空間だしてるんだか…サ
マナーも大変だな、おい』

「わかる？」

休んだはずなのに精神的に少し疲れた休憩だった。

さあ、再開しようか。ハトホルは出来る限り仲魔にしておきたい所だな。

悪魔達を倒した！ 相性があまり良くないと、敵の数が多くて2時間ほどで撤退する事になった！

魔貨700を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）1000を手に入れた！

悪魔はそれぞれ500のマグネタイトを補給した！

大樹はレベルが上がった！

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（愚者）

「現在LV」：11 「属性」：N・N

「所持金など」 MAG:4252 ￥:378700 魔
貨:6100

「ステータス」

HP:51 MP:46

力:3 知:4 魔:1 体:2 速:7 運:2

「相性」

剣: 物: 技: 火: 氷: 電: 風:

魔: 心: 禁: 聖: × 呪: 状: 万:

「所持スキル」

・文珠の素質? ・マジックカード? ・食いしばり

知略

「装備」: 装備一式は常にカードに収納済み

剣: グルカ・ナイフ

銃: ベレッタ92F(SA) 弾数: 15

弾: 通常弾 × 84

頭: プレートバンドナ 対物時防御上昇

体: ファイヤー・ガード 火炎耐性:

腕: G-ラダーズ 呪殺無効

足: ジェットブーツ 速+1

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費: MAG:110 判断力強化 恐怖心

軽減

力: +6 知: +5 魔: +5 体: +5 速: +7 運:

+5

「アイテム」

・文珠 × 20 生成量: 一日53個 所持限界量: 25個

文珠【癒】 × 5 文珠【防】 × 5 文珠【火】 × 1

文珠【浄】×1
 文珠【風】×1
 文珠【雷】×1
 文珠【呪】×2
 文珠【殺】×2
 文珠【出】×2
 文珠【蘇】×1
 文珠【探】×1
 文珠【索】×1
 ・マジックカード51枚 生成量：一日54枚
 魔石袋『10個』収納 魔石袋『10個』収納
 魔石収納 ソーマ収納
 宝玉収納 宝玉収納
 アメジスト収納 ゴーストカード収納
 アーシーズカード収納 エンジェルカード収納
 コッパテングカード収納 カハクカード収納
 アークエンジェルカード収納 アークエンジェルカード
 収納
 アチエリカード収納 オンモラキカード収納
 ハーピーカード収納

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。
 知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点

「疲れた…というか死ぬかと思った。女神って言う事聞かないの多

いなあ」

『所詮女神だよっ！ うんうん。と言う訳で慰めてあげるから元気だしなよサマナーさん』

「ありがとうピクシー。ああー…面倒だ、明日は学校休んで異界に行く事にしよう」

『おう。なら今の内に準備しておこうぜ？』

『明日のお昼はサンドウィッチがいいでしょうか。食べやすいです』

『サンドイッチにされたくても殿方が一人足りませんの…残念ですわあ』

『自重しろオープンエロ娘』

流石に今日一日であるレベルの異界を踏破は出来なかった、ドリー・カモドンのドの字も見つからなかったしこれは暫くあそこに厄介になりそうだな…

悪魔が強いおかげで戦闘判断力などは鍛えられてるけど、一歩間違えたら死、は正直精神的に辛い。

文珠がなければ僕はまだあのクラスの異界は行きたくないな…

明日はとりあえず魔貨を売って装備やアイテムを整えたほうがいいのかもしれないな。正直MPが足りないと感じたからチャクラ系のア

アイテムが必要になるはずだ。

文珠で回復するのは最終手段にしておこう。ほぼ全回復できるだろうけどそれに使うなら攻撃や防御に回したほうが良いし。

死なない為には最大限の準備をしないとイケないな。

『いよっし！　そこまで言うならどっちがサマナーさんを悩殺できるか勝負だっ！』

『あら？　いいんですの？　私は体には自信ありますけど妖精のピクシーさんには辛いんじゃない？』

『うぐっ…！　小さいけど体はナイスバディだよっ！　淫魔にも負けないねっ！』

『でも、出来ませんよねえ』

『露骨な表現禁止ーっ！』

「えーと、あの二人は何を？」

『避難したほうがいいぞサマナー。明日足腰立たなくて動けない、なんて事あったら流石に馬鹿すぎる』

『ピクシー様…ふぁいとっ！』

『てか、煽るなよ』

「…僕今すぐ邪教の館行ってくる、オニだけついてきて」

『あいよー』

「わーわー！ ぎゃーぎゃー！！」

好かれてるのは嬉しいけど、何だろう凄く心労が…

将来ストレスで禿げそうな僕です。

Continue07 〈魂無き者は愚かな夢を見るか?〉(後書き)

流石はリリム、えっちい関係は自重しません。いつそ合体してもこの性格でいいんじゃないかと思えます。

今回は再び探索、少しだけ重大なイベントが挟まる予定です。

具体的には…ごほんごほん。

ちなみに大樹君、ステータスは速中心で伸ばしていますが、他にどんな伸ばし方がいいかなーと考え中です。

皆さんはどんな育て方がいいと思いますか？ 希望があればそのステータス振り中心でいこうかなーと思います。

無ければ速中心の回避型で、当たると死ぬかもですが(笑

Continue08 くそれはあまりにも残酷な揺り籠く(前書き)

重大なイベントが立ちます。

でも短いです。

Continue08 くそれはあまりにも残酷な揺り籠く

- 泉こなた視点 -

ふむむむむ。こっちが監視してるのばれちゃってるのかな、あれから二日くらい彼、学校に来てないみたいだよ。

流石に露骨に調べると足が付きそうだから断念してたけど、強行で調べるべきかなあ。

やる気になれば同じ学校なんだし色々調べられるんだけどね。

えーと、名前は確か佐藤大樹だったかな。年齢は私達と勿論同じで、身長は167センチと平均よりちょっと下かな。

前々から不登校の経歴あり、と。んー…暴力は無いけど無視されるというイジメがあったみたいだね。

ここからどうしてデビルサマナーになったかだけど。さっぱりわからないなあ。

家も監視するべきなんだろうか。

「手詰まりだなあ。怪しい所が逆に多すぎ取捨選択が大変すぎるよ」

「困ったわね…ダークサマナーなら最悪捕まえないとヤバイし。みゆきの方は情報とれた？」

「いえ…お役に立てず申し訳ありません」

「いつその事普通に聞いてみるとかつ！」

「盲点過ぎるけど、だめでしょうそれは」

「ですよー」

敵がどうかかわからない相手と異界で会うのは遠慮こつむりたいけど、どうしたものかねえ。

「暫くはこのまま様子見ね…あ、そうだとあなたにみゆき。活性化してる異界があるんだけど手伝ってくれない？」

「そりやまた突然。小康状態じゃなかったの？」

「急によ急に。出てくる悪魔もスライムとかゴースト程度なんだけどね、放っておいたら大変だから」

「ほいほい。今日は特にやることないしOKだよ」

「私の方も問題ありません」

いや、家はともかくみゆきさん所お金持ちなのに大丈夫なのかな？
いつも思うんだけど。

あー、でもみゆきさんのお母さんはみゆきさんの10倍くらい天然さんだからなあ、あっさり誤魔化せるのかもしれない。

家は家でお父さんが煩いけど、かがみの所に行ってるって言えばどこにかこーにか納得してくれてるけどね。

初めの内は「男か!? 男なのかこなたああああ!? かなたあ! こなたがとられちゃうよおおお!!」とか騒いでたけどね。

正直イラっ としたので蹴ったのは内緒。

「でも、スライムって神聖系の魔法あまり効かないんだよねえ…おねえちゃんみたいに火炎や風も使えるようにならないとなあ」

「その分つかさはハマの威力が高いじゃない。この前だってオンモラキを一撃で払ったんだから」

「ほへーやるねえ、つかさ」

「え、えへへ。ゆきちゃんが弱点を教えてくださいからだよー」

「いえ、私はそれくらいしか出来ませんから。実際に悪魔と戦う皆さんの為に少しでもお役に立たなくては」

皆頑張りやだねえ。ん? 私? 私はまあそこそこかなあ。

私がかがみやつかさみたいに魔法でズバババーツ! って出来る訳じゃないからね。

私は所謂ドラクエでいう盗賊のようなものだよ。

身軽ですばしっこくて、それなりの攻撃で敵を翻弄するっ！ ってタイプのね。

辺りの探索とかも私がやってるから、強いて言うならエクスペローラー（探検家）って所かな。そこであえて忍者って言わない私は謙虚なのさあ。

裸になると強くなったりしないしね。こう、首を切った！ とか出来ないし。

逆にかがみんは完全魔法特化。聖呪の属性は使えないけど、火、風とかかなりの威力を持つ魔法が使えるんだよね。

たしか、アギラオとガルーラだったかな。あの威力は凄いやー？
何と言っても私の攻撃が無駄になるくらいオーバーキルするからさ。
弱点をつけばだけど。

後は敏捷強化のマル・カジャとか、防御強化のラク・カジャがとても助かります。タンクの貯蔵率は低いのが難点だけどね。

そして聖属性の魔法しか使えないけど威力がかがみの数倍っていうつかさかな。

ハマとかディアとかありがたいよ。ゾンビとかなら一撃だしねっ！

「じゃあ、今日は何時に集まる？」

「そうね…時間も考えて18時からにしましょ。言っとくけど前みたいゲーム持つてくるんじゃないよ？」

「や、やだなあ、かがみんは。流石に懲りたよ。うん」

前にゲーム持つて異界に行ったらゲームに夢中になりすぎて奇襲されました。

あははは…笑えないねっ！あの頃は少し調子に乗ってたなあ、反省しないと。

それじゃあ、まあアルバイトーあなた出陣っ！といきますかー！

- 泉こなた視点解除 -

「流石に3日目ともなると慣れてきたなあ。でも未だにドリー・カ

ドモンは見つからず…か、もしかして主が持つてるとかかもしれないな」

『可能性としては高いよねえ。この敵も楽勝ムードになってきたし、そろそろ主に行ってみようかサマナーさん』

『だな。こいつらじゃもう手ごたえがねえしよ』

『オニはほんとに戦うの好きだねー…疲れない？』

『オイオイ。ピクシーよ、そりやお前がゲームやってて疲れないか？ っって言ってるのと同じだぜ？』

『つまり疲れないと言う事ですね。心強いといいますが、未恐ろしいといえますか…』

『あら、男女の営みは結構疲れる人もいますわよ？』

「自重しような、リリム」

『あはっ サマナー様につっこまれちゃいましたあ 違う意味の突っ込みの方が好きですのにい』

何というかりリムは朝からテンション高いなあと思う。

と言う訳でドリー・カドモン探索3日目になるんだけど、成果はまだ上がっていない。

マグネタイトや魔貨はそれこそウハウハと言ってしまえそうなくら

い溜まってきているけど、それだけでしかない。

レベルもある程度上がってきたので、奇襲さえされなければこの辺の悪魔にはそう苦戦する事も無いだろう。

あ、後ハトホルは仲魔にならなかった。僕は交渉が下手なのかもしれない…メルコムは脅したし、オニとリリムはなし崩し的に仲魔になったから。

あれ…サマナーとして一番大事な部分が足りてないんだろうか…いつその事文珠を…いや、まてまて本末転倒というかそれは阿呆の考えだ。

とりあえず今必要な事は仲魔探しよりドリー・カドモンの搜索なんだからしっかりとしなければならぬ。

『こついつのつて大抵ボスとかが後生大事に持っていたりするのがゲームではデフォだよねえ』

『あん？ おいおいゲームと現実を一緒にすんなよピクシー。染まりすぎて抜けられねえんじゃねえのか？』

『一般的な感覚でも大抵そうだってば。レアって感じのするアイテムとか持ってそうじゃない？』

「言われれば確かに…龍とかも金品を集めるって良く聞くしね」

『流石サマナーさんっ！ 信じてくれるのはもうサマナーさんだけだよっ！ 愛してるっ！』

『軽い愛ですわねえ。こっ、愛というのはドロドロでぐちよぐちよ
で、いやあんな』

『今日も朝から絶好調ですわ、リリムは』

「このテンションはどこから来るんだろう。分けて貰いたい気もす
るけど移りそうじゃ嫌だな」

結構長い時間を過ごせば皆、ある程度は軽口を叩き合える仲になっ
ている。

その様子がまるで、友達同士のような気軽さを感じて僕は只それだ
けの事なのに嬉しいと感じてしまう。

一人の時間が断然多かった人生だから、こんな時が一番楽しいって思
うのは仕方の無い事だよな。

…と、そろそろ気を引き締めていかないな。

「はい、おしゃべりはそこまで。奥から4体エネミーソナーに反応
してる。邪鬼イッポンドラと、地母神ペレが2体ずつだ。どっち
も二桁レベルだから引き締めていこっ」

『あらら。朝からハードワークだねっ。いよーし。頑張ろっつっ！』

『はいっピクシー様っ！』

『へっ、漸くかよ。腕がなるぜっ!』

『亀甲縛りがいいかしら…それとも合掌縛り…見物ですわねえ』

「…それ、マジでやる気がいりリム…?」

『え? 当たり前ですわぁ』

「そ、そう…まあ、戦ってくれるならいいんだ。うん」

リリムは考えちゃいけないだろう、多分。というかこれ本当にリリムなんだろうか。いや淫魔なんだけど、こんなのなんだろうか淫魔って。

さ、さてっ! 気を取り直して戦闘だ!!

僕は銃を構えて相手を注意深く見つめた……………

……………

……………

……………

戦闘描写は省かせてもらった。流石にあの数程度なら苦も無くこなせるようになったから。

恐怖心は…ないなあ。ペレは見た感じ綺麗な女性だし怖いというか、男として言うなら役得的な服装だから。

イッポングダラは怖いというより寧ろあれでどうやって簡単に動いてるんだろぅという興味が湧いてくるほどだ。

足が一本しかないのり器用に蹴りとかしてくるのが微妙に憎たらしい。そして当たると痛いのがからやっつてられない。

といつてもあの後、数回戦闘したが特に大ダメージを受ける事はなかったから問題ないけど。

後はここのボスだけだろぅか強敵なのは。

マッピング死ながら進み続けていたおかげで、この異界の大体9割は踏破した事を確認できた。

今向かっているのが最後の1割に該当する場所だ。恐らく其処に異界の主が居るんだろぅ、そしてドリー・カモドンはこの奥にあるんだろぅな。

ここまで来てありませんとかだったら正直笑うしかない。おじいさんもショック受けそうだけど…まあ、なるようにしかならないな。

ああ……あっさりしすぎな人生だった……な……

ザアアー

W a k e T i m e N E X T S c e n e

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

いじゅん

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

Continue08 くそれはあまりにも残酷な揺り籠く（後書き）

という訳で。初即死です。

文殊などがあっても、一瞬で頭や心臓打ちぬかれたら即死ですね。

という訳で、初死亡での覚醒フラグが入ります。

ちなみに何を覚えさせるか悩み中ですので、見ている皆さんに決めてもらおうかなー…と考えています（わー

という訳でして、この技能の中から好きなのを選んでコメントしてください。

大樹君の能力はこうやって決めていく予定です。

ちなみに何も無ければ無難に女神転生のゲームから地味な技能を引っ張る予定です。

- 1．ペルソナ ペルソナ獲得。アルカナは決めてください。
- 2．魔界魔法 魔法を覚えます。属性はお任せです。魔が増えます、急激に。
- 3．皆さんが望む漫画やゲームなどに出てくる技能。ある程度ならチートでもOKです。

Continue09 〈弄ばれるは愚者の行進〉（前書き）

覚醒イベントです。ある意味これもクロスオーバーでしょうか？

色々意味深な事を言ったりしてますが、書いている私は何も考えていません（マテ

覚醒技能のコメントを沢山頂きました。ありがとうございます。

多分この覚醒は後2回ほどあるので、その時はまたお願いしますね。

Continue09 く弄ばれるは愚者の行進く

暗い。

真っ暗だ…僕はどうなったんだろうか。

皆は上手く逃げられたのだろうか…まあ、何にしろもう遅い。

なんだか凄く眠くて…

…きる……る…

次も転生するのだろうか…まあ、なんでも…いいか…

ただ…眠い…

…お……って…る！

…

…何か…聞こえ…

「起きろってんだろっがっ！ このポケリア充野郎があああっ！」

「うわっ！？ な……なんだ行き成りっ！」

「まったく、漸く起きたかよ。何で俺が可愛い女の子じゃなくて男なんか起こさなきゃならんのだか……」

「あ……え？ 僕は、死んだんじゃ」

「死んだな。これ以上無いくらい即死だろ？ 俺の前世も頭パーンされた時は一瞬だったしなあ」

其処には男性が居た。それも僕が良く知る、そして現実では見た事の無い男性が。

僕の異能を本当の意味で使いこなす霊能力者が。

「横島……忠夫……？」

「んだよ？ 俺が来たら悪いのか？ 俺だつてなあ！ 会うならきれいなねーちゃんの方がええんじゃっ！ 何が悲しくてお前みたいなモテモテ野郎の所になんかつ！」

「……え……ええっ！？」

「ちちっ！ しりっ！ ふとももーっ！！」

意味がわからない……これはどうなってるんだ？

僕は確かに死んだ。心臓突き破られて生きていられるほど人間辞めてない。あの時僕は一瞬にして悪魔に殺されたんだ。

それなのに此処はどこだ？ 地獄？ 天国？ 三途の川…？ そのどれでもない。何も見えない真つ暗な空間だ…

唯一見えるのは僕と横島忠夫だけ。

「まあ、なんだ。お前はまだ生きてるよ。いや言い方が変だな、なんてーかだな…そう、お前は生き返れるんだ」

「僕が…？」

「つーか生き返ってもらわねえとあそこに居る美人達が死ぬじゃろがっ！ 大事な仲間なら助けてから死ぬっ！ 寧ろ死ぬっ！ 俺に寄越せっ！」

「は…ははは………とりあえず断る」

「ちくしょーっ！！ なんでやああ！ 顔の造形なんて俺とどっこいどっこいやんかあっ！ それなのに何故モテるんじゃ！？ せめてリムちゃんは俺に寄越せっ！」

「欲望に忠実だな…僕の知ってる横島そのままだ」

「当たり前だろ？ 俺がそんな簡単に変わってたまるか」

ニカッと笑う横島忠夫、それはどこにでもいる普通の高校生の顔だ

った。

漫画や二次創作などで見る、英雄や暗い表情じゃなく。どこまでも明るい笑顔。

「ほれっ、受け取れ」

そういつと横島忠夫は僕に何かを投げて寄越す。

それは蝶をもじった青色の鍵だった。

「これは…?」

「ついて来い。鼻の長いじいさんがお前に力をくれるってよ」

「僕に…力を?」

「こっちだ」

「わ、わかったよ」

僕は横島に言われるまま暗闇の中を歩いていく。

何というか…無言だ。

僕は何を話していいかわからないし、横島は横島で男に振るネタな

んでないんだろう。

「なあ」

「？ 何？」

「いや…なんつーか。なんでもねえよ、どうせ直ぐわかるしな」

横島はそういうと再び前を歩いていく、何を言いたかったんだろう。

そんな事を考えながら歩いていくと、奥の方が徐々に明るくなってきた。

そのまま歩く事数分、其処には青色の巨大な扉が暗闇の中に立っていた。

なんだろう…この扉はどこかで…

「ほれ、その鍵つかって扉を開けろや」

「あ、ああ…」

言われるままに鍵を差し込み扉を開けた。重厚な扉に見えたが以外にもあっさりと開いていく。

奥からは何処かで聞いたような歌が流れてきた…これはまさか。

『ようこそいらっしゃいました新しいお客様。私めはイゴールと申します。これから暫くの間、お客様のサポートをさせて頂くものでございます。どうかお見知りおきを』

「周防達哉だ。お前のサポートをするように言われて来た」

そこには、ペルソナシリーズに必ずと言っていいほど出てくるイゴールと、ペルソナ2の主人公、周防達哉がいた。

とりあえず初見で見るとかなりびっくりしてしまいそんな顔をしている…サマナーに成り立てだった頃に見ると錯乱していたかもしれない。

何と言ってもあの鼻が色々とありえない。某学園の学園長の頭とどっちが理不尽なんだろうか。

場所は見た感じどうやら、ペルソナ3の時に見た部屋のようなのだ。

奥のガラスの奥でエレベーターが動くように景色が変わっている。

しかし…エリザベスの代わりに周防達哉とは…一体どういうことなんだろうか、でだ、横島…君はそこで何で涙を流しながら地面を叩いてるんだ。

「ちくしょう…ちくしょう！　なんでや！？　なんでエリザベス

ちゃんがおらんのやつ!?!? ここはエレベーターガールのエリザベスちゃんがいるのが基本だろうがああっ!」

「そんな事俺が知るか」

すかさず周防が突っ込む、いい突込みだ。

いや、僕もそう思う。横島の都合は考える必要なんて無いしね。

「…あー…えーと」

『申し訳ございませんお客様、ただいま説明させて頂きます』

「あ…はい」

イゴールさん こう呼ぶことにした。見た目以外は紳士的で優しそうな人だから が言うには、僕は限りなく死に掛けた仮死状態らしい。

心臓が吹き飛んだのに仮死とか言われても、と思ったがどうやらここで力を貰えば瞬時に再生するそうだ。理不尽だけどこんな事が出来るのは後1〜2回らしい。

それも僕がかなり強くならなければ、それさえも不可能なのだそう
だ。

普通に死亡程度なら反魂香や地返玉で蘇生できるらしい。でそれら

のアイテムはここでマグネタイトか魔貨で売ってくれるらしい。至れり尽くせりだ。

それにしても…力が…ここに来たということは多分。

「ペルソナ…ですか？」

『その通りでございます。貴方様はこの度人々の願いにより『愚者のアルカナに目覚めました。愚者は自由なる者、あらゆるペルソナを被りその力を振るうものです』

「あの…僕コミュ障なんですけど、その辺大丈夫なんでしょうか？」

『ご心配めされますな。貴方様はコミュの能力は必要ではありません…必要なのは強き心。受け入れる心、共存する心でございますれば』

「強き…心？」

「つまりだ、お前は人と交流をしてアルカナに力を蓄えるんじゃない、強くなればいい」

「あれだろ？ ゲーム的に言えばレベル上げろって事だな？」

「あからさま過ぎだが其処にいる横島の言う通りだな。佐藤大樹、お前は俺や俺の友達と同じく力ある言葉だけでペルソナを呼び出せるようになった」

「召喚機がいらぬのか…便利といえば便利だけど。それって1や2…」

「言つな。俺は自分の世界がゲームだと言われて納得なんて出来な
いからな」

「1、2、3…」

それはそうだ。自分達の人生がゲームや話の中の存在だと言われて
冷静で居られる人間はいないよな。

僕も同じ事を言われたら、怒るか無視するだろうし。

『さて…どうぞお受け取りください。これが貴方様の新しき力に
ございます』

そうイゴールさんが言った瞬間、僕の心の奥がドクン…と震えた。

凄い力が僕の中にある…だけど、これは…

『まだその力は貴方様には扱いこなすことは出来ませんでしょう…
しかし、願いはそのペルソナを貴方様を選んだ…そこで』

「俺の出番という訳だ。これを持っていけ」

そういつて手渡されたのは一枚のカード。

凄く強い力を感じる…これは。

「これはペルソナ…？」

「愚者・トビカトウ。今のお前ならぎりぎり扱えるはずだ。俺達は仲魔にペルソナを分け与えられる能力がある」

そういえば…ペルソナ2はペルソナをプールしてそれぞれ装備できたはず。違ったかな…？

別にいいか、こうして借りれた以上は使わせてもらう。

「んでだ、正直言つてトビカトウでもあの悪魔にゃ勝てん。多分戻つて来た所で直ぐ死亡だな」

「なっ！？ それじゃ意味が！？」

「だから俺がいるんだろうが」

「横島…？」

「自分で言うのは恥ずかしいし、性にも合わないが…英雄・ヨコシマタダオ。今日よりお前のペルソナとなる…って所だな」

なっ……………！？

横島がペルソナ…だって…？ ど、どうなってるのかもっ僕にはさっぱりだ…

「今は知る必要はねえよ。ただ、これだけは覚えておけや。俺はお前で、お前は癩な事に俺だって事だ…ちくしょう、可愛い女の子ならともかく…」

「血の涙まで流すほどか…」

「周防っ！ わからないのかこの俺の慟哭がっ！ 男なら！ 男なら合体するなら女性だろうが！ お姉さまなら尚良しっ！！」

「……………」

「いや…白い目すんなや…」

誰のせいだと…

「あー、言っておくが俺も俺で今のお前じゃ扱えない。手を貸すのはこの一回だけで、後はもう少し強くならなきゃ無理だな」

「…なるほど…」

「さっき言ったことだが、俺を御せるようになったら教えてやるよ。ほれいくぞっ！ 綺麗な女性を護るんじやっ！」

「そつだ…ね。今は戻つて戦わないと。ありがとう周防君、イゴールさん」

「気にするな。サポートするのが俺の役目だ」

『ベルベツトルームはいつでも貴方様をお待ちしております。では、暫くの間…ごきげんよう』

僕はその言葉を背に横島と二人で扉を出た。

……

……

…

大樹は覚醒段階が？になつた！

新規技能・ペルソナを手に入れた！

注意1・ペルソナはレベルアップしません。強くする場合はペルソナ合体かカード合体で作り出してください。

注意2・英雄はこの条件に当てはまりません。戦えば戦うほど強くなります。

注意3・ペルソナ憑依時、ステータスはペルソナのステータスの5分の1分プラスされます。

愚者・トビカトウ 15レベルを獲得した！

愚者・ナナヤシキ 35レベルを獲得した！
英雄・ヨコシマタダオ 63レベルを獲得した！

ナナヤシキは装備できない！ 30レベルになるまで降魔不可能
ヨコシマタダオは装備できない！ 58レベルになるまで降魔不
可能

特例発動！ 一度だけヨコシマタダオが顕現する！

覚醒段階？時『氣』か『魔界魔法及びデバイス』か『ガーディアン』
に目覚める可能性が増えた！（次回覚醒時、何も無ければこの3つ
が優先されます）

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（異能者）

「現在LV」：11 「属性」：N-N

「所持金など」 MAG：4252 ￥：378700 魔

貨：6100

「ステータス」

HP：51 MP：46

「通常時」

力：3 知：4 魔：1 体：2 速：7 運：2

「ペルソナ降魔時・ヨコシマタダオ」

力：10 知：11 魔：11 体：10 速：18 運：9

「相性」

剣：物：技：火：氷：電：風：
魔：心：禁：聖：× 呪：状：万：

「所持スキル」

・文珠の素質？
知略
・マジックカード？
・食いしばり
・

・ペルソナ・愚者

「所持ペルソナ」

愚者・トビカトウLv15

愚者・ナナヤシキLv35 x

英雄・ヨコシマタダオLv63 x

「装備」：装備一式は常にカードに収納済み

剣：グルカ・ナイフ

銃：ベレッタ92F(SA) 弾数：15

弾：通常弾x84

頭：プレートバンダナ 対物時防御上昇

体：ファイヤー・ガード 火炎耐性：

腕：G-ラダース 呪殺無効

足：ジエツトブーツ 速+1

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：110 判断力強化 恐怖心
軽減

力：+6 知：+5 魔：+5 体：+5 速：+7 運：

+5

「アイテム」

・文珠x20 生成量：一日53個 所持限界量：25個

文珠【癒】x5 文珠【防】x5 文珠【火】x1

文珠【浄】x1

文珠【風】x1 文珠【雷】x1 文珠【呪】x2

文珠【殺】x2

文珠【脱】×2 文珠【出】×2 文珠【蘇】×1
文珠【探】×1

文珠【索】×1

・マジックカード51枚 生成量：一日54枚

魔石袋『10個』収納 魔石袋『10個』収納

魔石収納 ソーマ収納

宝玉収納 宝玉収納

アメジスト収納 ゴーストカード収納

アーシーズカード収納 エンジェルカード収納

コッパテングカード収納 カハクカード収納

アークエンジェルカード収納 アークエンジェルカード

収納

アチエリカード収納 オンモラキカード収納

ハーピーカード収納

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。
知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点

「名前」：トビカトウ 「アルカナ」：愚者

「LV」：15

「消費MP」：7

「ステータス」

力：13 知：11 魔：11 体：11 速：17 運：5

「相性」

剣： 物： 技：× 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・ 斬撃ブースタ

・ 衝撃ブースタ

「スキル」

・ マハ・ガルラ

敵全体に風属性中ダメージ

・ 飛孔針

敵単体に物属性小ダメージ

低確率で即死。

・ アギラオ

敵単体に火属性中ダメージ

・ 烈風乱舞

敵全体に剣属性中ダメージ

斬撃ブースタ：剣属性の物理攻撃の威力を上昇する。
衝撃ブースタ：風属性の魔法攻撃の威力を上昇する。

「名前」：ナナヤシキ

「アルカナ」：愚者

「LV」：35

「消費MP」：17

「ステータス」

力：28 知：21 魔：20 体：21 速：39 運：18

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・ 直死の魔眼

・ 不動心

・ 真・斬撃見切り

・ 真・射撃見切り

・封印

「スキル」

・月影

大ダメージに変更。

敵単体に剣属性大ダメージ。満月時は極

・ベノンザツパー

敵全体に剣属性中ダメージ 高確率で毒。

・十七分割

敵単体に剣属性小ダメージ 超高確率で即

死。

・直死七夜

敵単体に万能属性中ダメージ 中確率でス

テータス3段階減少

直死の魔眼：相手の物理無効／反射を貫通する、中確率で物理攻撃時相手は【死亡】する、この死亡は回復できない。

不動心：精神系状態異常にかからなくなる。

真・斬撃見切り：剣属性攻撃に対する回避率が大上昇

真・射撃見切り：物属性攻撃に対する回避率が大上昇

封印：何かしらの封印がされている。

「名前」：ヨコシマタダオ

「アルカナ」：英雄

「LV」：63

「消費MP」：26

「ステータス」

力：43 知：37 魔：52 体：42 速：56 運：38

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状：x 万：x

「所持スキル」

・成長

・文珠の素質？

・霊能力

・食いしぼり

・文珠ハイブースタ

・愚かな計略

「スキル」

・栄光の手

敵単体に万能属性中ダメージ。

・双文珠

あらゆるスキル、特技を使用可能、特技は

戦闘中持続する。但し一戦闘3回まで

・マハイルシオ

強力な幻術を敵全員に見せる。相手の回避

と命中を3段階下げるが、3ターンで解除される。

・マハムドオン

敵全体に呪殺

成長：このペルソナは成長する。ペルソナ降魔時、レベルが上がった場合このペルソナのレベルも上昇する。

文珠の素質？：文珠を作り、使いこなす才能の最終段階。威力が上昇する。

霊能力：このペルソナが使用する攻撃は常に相性：魔にしてもよい。魔に補正

食いしぼり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。
文珠ハイブースタ：文珠の威力を大幅に増加する。文珠の連結数を2個増やす。

愚かな計略：奇襲を受けない。敵との遭遇時、中確率で奇襲できる。但し、奇襲に失敗するとそのターンはあらゆる行動、回避が行えない。

ザ
ア
ー

Handwriting practice lines consisting of 20 vertical dotted lines for tracing and writing.

ブ
ウ
ン

- ピクシー視点 -

殺す、殺す、殺す、殺してやるっ！ サマナーさんを！ サマナー
さんを殺したお前は殺してやるっ！

いい人だったのに、優しい人だったのに、一緒に居て嬉しかった人
なのに。

私を仲魔にしてくれた人なのにっ！

『ジオンガアっ！！』

稲妻が悪魔に突き刺さる、でも。悪魔はまるで意にも返していない。
勝てない…勝てるわけが無い。なんでこんな所に…こんな所にいる
のよ…

『オルクスうううっ！！』

死神・オルクス。

本来はもつと…ずーっと強い異界に出てくる上級の悪魔。

普通はこんな低レベルの異界になんてやって来るはずがない、来れるはずが無い。

そもそも存在する為のマグネタイトの量が足りないのだ。

それなのに、悪魔は現界していた。

所々が溶けまさにスライムのような状態になりながら、意識が発狂しながらも。

マグネタイトを得るといふ本能だけで彷徨っていた。

『ちくしょうがあっ！ 仇もとれねえのかよオレはっ！ 何が強い奴と戦うだ！ ちくしょう、ちくしょおおお…』

メルコムもリリムも死んだ。オニはぎりぎり生きてるけどもうだめみたい。

私は後列で魔法を売ってたから生きてるけど…もう無理かな。

横にあるサマナーさんの死体を見る…

心臓の部分だけが綺麗にくり貫かれている…さっきまで賑やかに話してたのに。

優しくて面白いサマナーさんだったのになあ…

『オoooooooooooo…！！』

マグネタイトが足りない以上、多分こいつは今日も持たずに自分の世界に戻されるはず。

運が悪かった、サマナーさんも私達もただ、運が悪かったんだ。

はあああ…

『だからって…逃げられないのよ。憎いの、アンタが憎いのよ…逃げればいいのに逃げる気が起きないの。怖いのに怖くない…寧ろ怒りで…憎しみで焼ききれそうな程にっ！！』

『oooooooooooooooooooooooooooo！！』

『せめて…せめて傷だけは与えて見せる！ピクシーなめるなああああっ！ジォ……ダインー！！』

私のレベルで使えるはずが無いクラスの魔法。

でも、自分が存在する為のマグネタイトを限界まで使えば一度くらいなら撃てるのよっ！

伊達にここまで強くなった訳じゃ…ないっ！！

オルクスの攻撃が私を……貫……

「させるかあつ！ 来いつ！ 横島あ！！」

『おうよっ！ とつとと極楽に行きやがれやあ！ ハンズ・オブ・グロリーっ！！』

何……かな……あれ……夢なのかな……？

悪魔でも夢が見れるのかな……

『おいおい……マジか……よ……心臓が無かったん……だぜ……？ ははっ……家のサマナーは……異常だな』

「僕は異常じゃない、寧ろこいつが異常だと思つよ」

『なんでじゃあつ！？ 俺のような好青年が異常な訳ないだろうがっ！』

「世界中の好青年に謝れ。土下座して」

『ちくしょーっ！！ この怒りと、きれーなねーちゃん達を甚振つてくれた礼はお前でさせてもらっぜっ！ 往生せいやーっ！』

サマナー……さん。

サマナーさんが……………

生きて…る……………嬉しい…な。

……………

……………

…

- ピクシー視点解除 -

『終わったな。んじゃ戻るぜ俺は』

悪魔は横島のおかげで倒すことが出来た。それにしてもオルクスか… レベル50台の大悪魔じゃないか。

マグネタイト不足で弱っていたとしても僕達が相手になるレベルを遙に超えている。

なんでこの悪魔がこんな以下に現れたかといえば… 答えは僕が今持つて居る『ドリー・カドモン』のせいだという。

異界に放置され続けたドリー・カドモンが誤作用を起こしたらしく、その辺の悪魔と一緒に擬似的な悪魔合体をなしてしまったらしい。らしい、というのは横島でもよくわからないからだそう。寧ろ女神転生の世界の人間じゃない横島が何故知ってるんだらうと突っ込みたい。

戦いが終わった後、横島は死んでいたメルコムとリリスを蘇生させ、オニと今にも消滅しそうなピクシーを回復させてくれた。

僕の文珠よりも精錬されたそれは、流石に文珠使いと言わしめるほどだった。

オニ以外は全員意識を失っているのでCOMPに戻している。

今日一日はゆっくり休ませて上げないといけないな…オニが言うには逃げずに僕の仇を討とうとしていてくれたのだから。

あのメルコムまで…ね。

「ありがとう横島…なんて礼を言ったらいいか」

『ならねーちゃんを』

「断る」

『あつそ。んじゃ早く俺を呼び出せるようになれ。それが俺に対す

る礼だと思つとけ』

『アンタ、強いんだな…今度あつたときはオレの修行に付き合ってくれよ』

『勿論っ！ この男横島っ！ 貴方のような美人の為なら手取り脚取り腰取りでっ！』

「強制解除」

『あつ！？ てめえ！？ このやろっ！ おーぼーえーてーろおおおおっ！！！！？』

なんとも締まらない英雄だね、横島。

でも、感謝してるよ。

『もう平気なのかサマナー？』

「うん。迷惑をかけたね、僕はもう大丈夫だ」

『…ならいいんだ。今日みたいなことは事故だからな。サマナーが気にすることじゃねえぞ？』

「ありがとう。後で皆目が覚めたら礼を言わないとな」

『そうしてやれ。特にピクシーは尋常じゃなかったからな。どうよ悪魔に惚れられた気分は？』

「そうだね……悪くない……いや、嬉しいかな」

『はっ！ 世はいつも狂ってるなっ！ だけどそれがいいっ！ サ
マナー、オレはもつと強くなる！ お前を護る為につ！ 誰にも負
けない為につ！ これからも宜しく頼むぜ！』

僕は頼りになるオニの言葉に頷き異界を脱出した。

依頼ナンバー01、『ドリー・カドモン搜索』 報酬：造魔一体
の無料作成 - CLEAR!!

異界を踏破した！ 異界の主を倒した為この異界を閉じる事に成
功した！

ボス撃破ボーナス！ 5000MAGを手に入れた！

異界踏破ボーナス！ 2000魔貨を手に入れた！

アイテムは大樹の死亡により消滅した！

魔貨3000を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）5
000を手に入れた！

大樹はレベルが4上がった！ 手持ちのマグネタイトを使い仲魔達

は4レベルが上がった！

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（異能者）

「現在LV」：15 「属性」：N・N

「所持金など」 MAG：1880 ￥：378700 魔

貨：11100

「ステータス」

HP：80 MP：54

「通常時」

力：4 知：4 魔：1 体：3 速：8 運：3

「ペルソナ降魔時・トビカトウ」

力：6 知：6 魔：3 体：5 速：11 運：4

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： x 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・文珠の素質？ ・マジックカード？ ・食いしぼり

知略

・ペルソナ・愚者

「所持ペルソナ」

愚者・トビカトウLV15

愚者・ナナヤシキLV35 x

英雄・ヨコシマタダオLV63 x

「装備」：装備一式は常にカードに収納済み

剣：グルカ・ナイフ

銃：ベレッタ92F（SA） 弾数：15

弾：通常弾×84

頭：プレートバンダナ 対物時防御上昇

体：ファイヤー・ガード 火炎耐性：

腕：G-ラダーズ 呪殺無効

足：ジェットブーツ 速+1

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：150 判断力強化 恐怖心

軽減

力：+8 知：+6 魔：+6 体：+7 速：+9 運：

+6

「アイテム」

・文珠×20 生成量：一日55個 所持限界量：27個

文珠【癒】×5 文珠【防】×5 文珠【火】×1

文珠【浄】×1

文珠【風】×1 文珠【雷】×1 文珠【呪】×2

文珠【殺】×2

文珠【脱】×2 文珠【出】×2 文珠【蘇】×1

文珠【探】×1

文珠【索】×1

・マジックカード54枚 生成量：一日57枚

魔石袋『10個』収納 魔石袋『10個』収納

魔石収納 ソーマ収納

宝玉収納 宝玉収納

アメジスト収納 ゴーストカード収納

アーシースカード収納 エンジェルカード収納

コッパテングカード収納 カハクカード収納

アークエンジェルカード収納 アークエンジェルカード

収納

アチエリカード収納
ハーピーカード収納

オンモラキカード収納

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。
知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点

「名前」：ピクシー 「種族」：妖精
「現在LV」：12 「属性」：N-N 「召喚MAG」：
126

「LvUpに必要なMAG」：3500MAG

「ステータス」

HP：55 MP：89

力：3 知：6 魔：13 体：3 速：4 運：5

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：× 風：
魔： 心： 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・信頼

・本体

「スキル」

・ジオンガ?

対象に電属性中ダメージ。

・マハ・ジオ?

全体に電属性小ダメージ。

・パトラ?

対象の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖状態を

回復。

- ・ディア？ 対象のHP小回復。
- ・メ・ディア？ 全体のHP小回復。
- ・妖精のおせっかい。対象を『至福』状態にする。
- ・ジオダイン？ 対象に電属性大ダメージ。

- 進化の兆しが見られる…???

ジオダイン？を習得

スキル枠現界解除

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

本体：本体である。悪魔合体をしても姿が変わりにくい。ステータスが基本より高い。

「名前」：メルコム

「種族」：墮天使

「現在LV」：12

「属性」：N-C

「召喚MAG」：

141

「LvUpに必要なMAG」：4200MAG

「ステータス」

HP：86 MP：73

力：5 知：10 魔：10 体：7 速：7 運：5

「相性」

剣：物：技：火：氷：電：風：

魔：心：禁：聖：呪：状：万：

「所持スキル」

・強服従

・ Mつ気

・ 飛翔

・ 連続攻撃・弱

「スキル」 スキル枠限界

・ マハンマ？ 敵全体を聖なる力で即死させる。

・ デイア？ 対象のHP小回復。

・ マハ・ラギオン？ 全体に火属性中ダメージ。

・ タル・ンダ？ 全体の攻撃力を1段階減少させる。

強服従：サマナーに強く服従している。絶対に命令に背かず、中確率でサマナーを攻撃からかばう。

飛翔：飛行が可能。自分と同程度の重さなら持ち運びができる。

Mつ気：攻撃を受けても怯まなくなる、相性によってはMPが回復する。

連続攻撃・弱：低確率で、連続で攻撃する。

「名前」：オニ 「種族」：妖鬼

「現在LV」：13 「属性」：N-C 「召喚MAG」：

154

「LvUpに必要なMAG」：4950MAG

「ステータス」

HP：102 MP：34

力：13 知：6 魔：6 体：9 速：4 運：7

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

- ・豪腕
- ・連続攻撃

「スキル」

- ・暴れまくり

敵全体に1〜4回の剣属性、小威力ランダム

攻撃

- ・牙折り

敵単体に中威力剣属性ダメージ 低確率で1

段階攻撃力減少。

- ・雄叫び

敵全体の攻撃力を2段階下げる。

豪腕：物理ダメージに1段階の補正。

連続攻撃：中確率で、連続で攻撃する。

「名前」：リリム 「種族」：夜魔

「現在LV」：14 「属性」：N・C 「召喚MAG」：

157

「LvUpに必要なMAG」：1990MAG

「ステータス」

HP：79 MP：95

力：7 知：11 魔：15 体：5 速：9 運：6

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心：× 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

- ・魅了
- ・魅了ブースタ
- ・睡眠攻撃

「スキル」

- ・ジオンガ？ 対象に電属性中ダメージ。
- ・マハ・ジオンガ？ 全体に電属性中ダメージ。
- ・魅了突き 対象に物属性小ダメージ。 中確率で魅了を付与。

魅了：一定確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない。
魅了ブースタ：魅了の成功値を上昇させる。
睡眠攻撃：物理攻撃時、低確率で睡眠付与。

Continue09 く弄ばれるは愚者の行進く (後書き)

ほんの少しだけ長い気がします。多分ステータスのせいです(汗
という訳でコメントの結果、一番多いペルソナに決定しました。

愚者でトビカトウはいいとして、七夜君と横島君がペルソナにつ！

まだ使えませんがね(笑

さて、次回はついに造魔の作成です。どっちがいいかなあ…悩みま
す。

Continue10 く産声を上げるは歪みある純心く（前書き）

短めです、楽しんで貰えたら嬉しいですね。

造魔爆誕です。どんな子になるかは見てからどうぞなのですよ。

3 / 3 1 文珠の連結個数を2個から4個に変更です。

矛盾が多いのは、その場の勢いで書いてるせいですね（汗

Continue 10 〈産声を上げるは歪みある純心〉

とりあえず結果から言つと、皆に泣かれた。

理不尽な事故で死んだとはいえ、大事な仲魔に泣かれるのは辛くて、そして凄く嬉しかった。

両親は泣くどころか面倒が無くなったと言って喜ぶのだろうか、それとも葬式が面倒だといつて機嫌が悪くなるのだろうか。いや、どうでもいいか。

あれから直ぐ家に戻ったのでドリー・カドモンはまだ手元にある状態だ。明日手渡そうと思う。

「で、もう大丈夫だから。ね？ ピクシー」

『ううう…やだ』

『はっ、女を泣かしたんだ。黙って抱かれとけやサマナー』

『というか、引っ付いてるといのが素直な表現ですわねえ』

『ううう、うっさいっ！ うっさいよあんたらっ！』

『それにしても…良かったです我が主よ』

「皆もありがとう。逃げても良かったのに、最後まで戦うなんて普通出来ないよ」

『あー…なんだ。気にするなよ』

照れた表情のオニ。そっぽを向いて頭を掻いているのが様になっているというか何というか。

『それにしてもペルソナでしたか…凄まじい力ですね。あの悪魔を倒せるほどの力ですか。文珠と合わされば我が主は無敵なのでは？』

「ああ、それなんだけど」

実際にその力を体験してる僕からいうと。正直文珠もペルソナも強力すぎて振り回されているのが現状だ。

更に言えばトビカトウしか今の所ペルソナは使えないし、4〜5回呼び出すと直ぐにMPが枯渇してしまう。

その分威力は申し分ないのだが、やはり僕自身が強くならなければ上手く活用は出来ないだろう。おおよそ戦闘にはまだ不安が残る。

連戦の場合は直ぐに枯渇してしまうので使えないのだ。正直後ろから銃を撃つほうが戦力になる場合がある。魔が足りないせいなんだろっけどね。

とはいえ、魔を上げててもそもそもが1程度しかないからそれをあげるなら体か速を上げる方がこの先を見通すと楽でいい。アナライズを早くできるのはそれだけダメージが少なくて済むから。

文珠は文珠で便利だけど、頼りすぎてしまつとこんな結果になる。今回は【防】の文珠が働いてるだろうとタカをくくつてしまった為にこうなつたんだ。

万能だけどそれゆえに弱点がある文珠。連結すれば勿論強いけど僕ではどうやら4つまでしか連結できないようだ、普通に4つまで連結できたから無制限だと思つていただけでそうではなかったらしい。

多分素質のレベルが低いんだろう、どちらにしても強すぎるがゆえに、それが弱点となつている。

4つ連結できる時点で十分な気もするけど、熟練としてはまだまだだ、

危機管理を覚える為にも文珠はここぞと言う所で使うのがいいだろう。一日に何個も作れるから湯水のように使う、と言うのは初期の頃だけでいい。

僕には仲魔がいるし、ペルソナも使えるようになった。切り札は切り札だからこそ強い。暫くは使うのは自重した方がいいだろうな。

僕は所謂司令塔要員であつて、主に支援をするのが役目だ。ペルソナも文珠もあらゆる情報を得た後に漸く使う事になる。

『なるほどな。当然だと思つぜサマナー。文珠つてのはつきり言えば道具だろ？ 道具が強くて本人が弱くちや意味ねえしな』

『能力だからー…って訳にもいかないかー。だね、私達もサマナーさんだから大丈夫って考えてた節があるよ。気をつけないう』

「僕も使い所は考えないといけないと思う。その分皆に負担をかけるけど頼むよ」

『ご安心ください我が主よ。今の私達は貴方様の下僕…あ、それは私だけでしたが。仲魔がいますから』

『サマナー様の意向なら従いますわあ』

「ありがとう皆。後、もう下僕だなんて思ってないよメルコム、君も大事な仲魔だ。この前のことは水に流してもらえないかな？ 勝手すぎるのは承知してるけど」

その言葉にメルコムは嬉しそうな表情をしながら抱きついてきた。

ちよ…む、胸が当たるのですよ…

『ありがとうございます我が主よ。でも、私は此方の方が好きですからどうぞ今までの通りに』

「あ…あー…うん。ありがとう…」

『なななっ！？ なにひっついてるのさメルコムっ！ はーなーれーろーっ！…！』

『まあ…でもピクシー様だって同じではないですか。これも役得と

いっ事です』

『なら私もいいですかあ？ うふふ』

『まー…なんだ？ あきらめろや』

「オニツ！？ ペルプツ！？ ……って見捨てられたっ！？ ちよっ
！？ やめっ！？」

あー……………！？

……

……

…

「酷い目にあつた」

『あははは、ごめん。ちょっと暴走しすぎたね』

『ふふふ…サマナーさんの遅しかったですわねえ』

「何もしてないっ！ 何もしてないからっ！？ 肉体だよねっ！？」

『くすくすくす』

『やかましい奴らだな…まあいいや、そろそろ休もうぜ？ オレも流石に疲れた』

『そうですね。では我が主よ、また明日お呼びくださいませ』

「あ、ああ、ありがとう。今日はゆっくり休んでほしい」

『ねえねえ？ サマナーさん。今日は一緒に寝たいな…だめ？』

「んー…別にいいけど。潰さない自信が無い」

『おーい…大丈夫っ！ こう見えても頑丈頑丈っ！』

やっぱり怖かったんだろうな、人のぬくもりが欲しい時は僕もある。それに自惚れてるつもりはないけどピクシーには好意を持たれてるみたいだし、僕としては吝かでもない。

一緒に寝る事をOKすると輝くような笑顔を見せてくれた。それだけなのに凄く嬉しいと思える。

で、お約束としてリリムと一緒に寝るとかやり始めて、本格的に寝る事になったのはそれから1時間後の事だった。

『ねえ…サマナーさん？ 起きてる』

「……まだ眠れないの？」

『うん…あのね。ありがとう…』

「えーと…？」

『生きててくれて、ありがとって言いたいんだよ。凄く、凄く怖かったんだからね？ だからこれは罰なんだからっ』

頬に暖かい感触を感じた。

思わず振り向くとピクシーが赤い顔をしてこっちを見ている。それは僕が知るどんな女性よりも綺麗に見えたと思う。

『はああ、ハイピクシーになれたらもう少し大きくなれるのになあ。さっ、早く寝よ？ さっさと依頼こなして一緒にゲームやらないとっ』

「そっだね。お休みピクシー」

『お休みサマナーさん』

僕は近年まれに見るほどの幸せを感じながら眠りについた。

ピクシーが【恋慕】になりました。

「なるほどのう…いやすまない。わしも流石に其処までになってい
るとはおもわなんだよ」

「いや、気にしないで下さい。不注意だったのは僕のほうだったの
で」

邪教の館で依頼の件について話している。

勿論僕が死んだのは内緒で、色々苦戦してなんとか倒した事にした。
実際倒したのは横島なのだが流石に言う訳には行かないし。

「では、合体をすることにしよう。造魔からでいいかね？」

『あ、それなんだけどよサマナー。オレをアズミにランクアップで
きねえかな？ 正直今のオレじゃあ火力に欠けるんだわ』

『んー、アズミになると弱点増えるんじゃない？ このままあげて

くか止めて違う悪魔の方がいい気がするんだけど?』

『弱点も考えたんだけどよ。アレだ。アズミになると速さが上がるからな。正直オレが動く頃には魔法で終わりかけなんだわ』

「確かに…速がネックだねオニは。精霊のカードはあるし、やってみようか」

『感謝するぜサマナー！ これで更に強くなれるっ!』

『私はハイピクシーになりたいからこのままかなあ。おっきい事はいい事だよねっ!』

『豊満な方が殿方も喜びますしねえ。くすくす』

『……………格差社会なんて嫌いです』

まあ、メルコムは少し控えめだからなあ。僕としてはそれはそれでいい気がするけど。

と、喧々諤々しながらもオニの合体が始まった。

これで合体は2回目だけど合体事故も考えるとやはり怖い物がある。見た目は幻想的な光景なんだけどね。

1分近く魔方陣が点滅した後、姿の変わっていないオニが其処にいた。あれ???

「ふむ、パーソナリティーがそれで統一されているのか。珍しい形の悪魔といえいいかな。しかしアズミとしての力は宿っておるようじゃな」

「そうなんですか…?」

『一部進化してますわねえ…ええ、一部』

『なにあれ…許していいのかな？ あれ？ ちくしょう』

『シクシク…オニさんは仲間だと思ってましたのに』

『妖鬼・アズミだ、これからも宜しくって…なんだその裏切られたみたいな視線はよ?』

『『自分の胸に聞いてみるおっ!?!?』』

『巨乳ですわねえ。胸で致す時は参加させてくださいなあ』

『あん? ……なんだこりゃ…邪魔でしかたねえ』

見た目は変わらず、オニのままんだけど胸が大きいです。あれは…Gかな、Hかもしれないな。いや、何を言ってるんだ僕は。落ち着け。

ま、まあ合体には成功したし良い事にしておこう。

『我が主よ…我が主よっ！ わ、私も合体を！ 胸をつ!?!? バス

トレヴォーリユーションをつっ!?!?」

「いや、合体は胸を大きくする物じゃないからね……」

『ガツデム！　なんて時代ですかっ!』

「どっちにしろ、メルコムから進化したらレベルが高くて扱いきれんのか」

『大きくなれば…そう、大きくなれば…』

『くすくすくす』

「悪魔も人間も女性は悩む物が一緒なのかのう」

「ですね……」

- 閑話休題

「ごほんっ。では造魔合体にしようかのう」

「ええ、お願いします」

色々合ったけど気にしないで欲しい。メルコム強く生きてくれ、レベルが上がったら合体するからそれで今の所は…うん。

という訳でついに造魔合体の時間がやってきた。

デビルサマナーに造魔か、ソウルハッカーズも混ぜてるんだろうなあ。ファントムソサエティとかあったら嫌だな…

造魔素である、ドリー・カドモンを魔方陣に設置して悪魔のカードを1枚使い合体する事になった。

「さて、行くぞ。どのような造魔になるかは坊やにかかっておるからの。大事にしてやってくれ」

「わかりました」

合体が始まった、一体どのような造魔が出来るんだろうか？ やはり見た目グレイ的な悪魔になるのかもしれない。

そうなると上手くいけば英雄か猛将にできるかもしれないな。そうになると戦略の幅も増えるし頑張つて強くなるかもしれないといけないか。

造魔は基本存在するのにマグネタイトは使わないのが利点だ。勿論マグネタイトを使えば造魔を強化する事もできる。

スキルなども覚えるんじゃないかとマグネタイトを消費して覚えさせ…いや、組み込むらしい。

英雄などになればそのスキルや技能も覚えるらしいから、ある意味
自分用の造魔が作れると思っただけいいかもしれない。

問題は人形のような感じで自分の意思が無い所だろうか、それも一
緒に暮らしていけば克服できるから大丈夫か。

『そろそろだねえ』 どんなのになるか楽しみだねっ、サマナー
さん』

「そうだね。今はマグネタイトも足りないから暫くは異界探索にな
りそうだけど」

『主を殺さなければ異界は徐々に広がりますから、そこで集めると
いう手もありますね我が主よ』

『あー…成程な。でかくなり過ぎない程度に放置しておけば良いっ
て訳か。強くなれるなら問題ねえな。そっちの方が』

「オルクスクラスが出てこない程度ならいいかもだなあ。じゃあ明
日からはそうしてみよう。僕達はまだまだ弱いからね」

『賛成ですわあ』

「さて…どんな造魔になるか……………」

造魔が出来た瞬間に僕は止まってしまった。というか僕を含め皆止
まっている。合体したおじいさんすら止まっている。

えーと…何と言ったらいいだろうか。合体には成功したようだ。とりあえず人型な事には間違いない。

銀色宇宙人のグレイ型でもないが…ある意味困った姿をしていた。

「造魔なのです。ご主人様、宜しく願いますなのです」

「……………おじいさん…?」

「わしに言われてものう…」

「??? どうしたのですか? 造魔に何か至らない点でもあるのですか?」

「いや…何も無いよ。うん、宜しく」

「はいなのです」

目の前にいたのは造魔というか…幼女がいた。

幼女として言えない位目の前の造魔は普通の小さい女の子だった…年齢的には8〜10歳程度だろうか。大きなお友達が喜びそうな子だ。

黒色の綺麗な髪の毛がストレートに靡いて…ってというか普通に女の子なんだけど、この辺どうなんでしょうか。

「合体したドリー・カドモンのせいかのう。まさか完全造魔になるとは…多分見た目はドリー・カドモンの方で何かあったのじゃろう。機械で調べてみたが問題はなさそうじゃな」

「ご主人様。これから何をすればいいのですか？ 何でもいいつけて下さいです」

「あー…そうだねまずは…」

色々大変な事になりそうだ…僕は強めの溜息をつけてこの後の話を続けるのだった。

妖鬼オニが妖鬼アズミに進化した！ 雄たけびを継承した！
完全造魔を仲魔にした！

「名前」：アズミ 「種族」：妖鬼

「現在LV」：13 「属性」：N-C 「召喚MAG」：

184

「LvUpに必要なMAG」：4950MAG

「ステータス」

HP：128 MP：68

力：14 知：8 魔：8 体：9 速：12 運：8

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・豪腕

・連続攻撃

・格闘ブースタ

「スキル」

・暴れまくり

敵全体に1〜4回の剣属性、小威力ランダム

攻撃

・スクカジヤ?

味方全体の1段階命中が上昇。

・雄叫び

敵全体の攻撃力を2段階下げる。

豪腕：物理ダメージに1段階の補正。

連続攻撃：中確率で、連続で攻撃する。

「名前」：無し 「種族」：完全造魔
「現在LV」：1 「属性」：N-N 「召喚MAG」：

0

「LvUpに必要なMAG」：100MAG

「ステータス」

HP：17 MP：30

力：2 知：2 魔：5 体：2 速：2 運：1

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心：x 禁： 聖：x 呪： 状：x 万：

「所持スキル」

・虚心

・純粹

・魔界魔法の素質？

「スキル」

・ザン？

単体に風属性小ダメージ

・ポズムディ

単体の毒を治療する。

・グレイブ

一定時間ゾンビ、またはゴーストを召喚して使

役する。

虚心：虚ろな心を持っている。命令されれば動くがそれ以外だと何もしない。主人には忠実になる。

純粹：何も染まっていない状態、これからによって変わっていく。

魔界魔法の素質？：魔法の素質を持つ。レベルアップで魔法を覚えるようになる。

Continue 10 〈産声を上げるは歪みある純心〉（後書き）

という訳で何故か幼女になりました。

実は普通の女性か幼女か少女かをサイコロで決めて適当に振ったら
幼女に…

一度やり直してまた振っても幼女になったのでまあ、いいや！と
いう事になりました。

とても純粹な子ですが、これからどうなるやらですね。

チート系に関しては彼なりに悩んでいるようです。

本人はまだまだ未熟ですから強すぎる力なので扱えるように熟練が
必要ですね。

さて、次回は再び学校編です。らき すた勢の出番でもありますね。

Continue 11 〈空想を超える空想は現実の中の真実〉（前書き）

PVが2万を超えました、ありがたい事です。これからも頑張らな
いとですね。

今回は幕間のような物です、と言うわけで短いです。

次回は再び異界の予定ですな。

Continue 11 〈空想を超える空想は現実の中の真実〉

- 泉こなた視点 -

さあて…どうしたもんかなあ。

いやね？ こんな簡単に接近するつもりは無かったんだよ。でもね、今日は珍しく寝坊しちゃってさあ。ゆーちゃんと二人で学食に来てたんだよね。

そこからかがみんとつかさ、みゆきさんが加わって、ついでにゆーちゃんがいるからみなみんなも加わった、計6人という結構な大所帯になったんだけど。

なぜか今こんな事になってます。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…えーと…？ お姉ちゃん？」

「????」

きまずっ!?!? 気まずいよ!?!? 気まずすぎるよ!?!? なんでこんな事になっ たかな私っ!

目の前の席には彼のターゲット、佐藤大樹君がいるではないですかっ! コンタクト取るつもりは無かつ たんだよ。

適当に席を選んでたら真向かいだったんですよ彼っ! ちくしょ〜。こんな所に伏兵がっ!?! とかやってる場合じゃないよね。

まあ、まだあつちには私達が能力者だつてばれてないだろうし、彼もダークサマナーかどうかわからないんだけどさ、緊張するよねえ… 助けてジョナサンっ!?!? いねえよジョナサン。

「あー…と、邪魔だつ たかな?」

恐る恐るいう私、こうなつてしまったものはしょうがないので、こついつときこそ同じ学年という立場を利用して会話に巻き込んで情報をゲット!

「別に…寧ろ僕が邪魔だと思つから退こうか?」

「んや、別にいいけどねえ」

「そっ…」

反応薄いなっ!?!? こういうとき美人に囲まれたら男ならドキマギしないかいつ!?!? あ? 私? 私はまあ口リっ娘系列ですよ。

美人ってのみゆきさんの事を言うのさっ! で、可愛い系はつかさとゆーちゃん。ツンデレはかがみんね。

無口系のみなみんも揃ってるよ!

「お前今ろくでもないこと考えてなかったか?」

「な、なんの事やら。か、かがみんやその拳骨は怖いので収納プリーズ」

「かがみ…?」

「およ、どしたの?」

「あ、いや…何でもないんだ…邪魔そうだから僕はあっちに行くよ」

「別に邪魔じゃないし、いいわよ別に。同級生でしょ?」

「そうだけど…」

「ナイスかがみんっ! このまま止めておいて情報げっちゅーっ!

「そういえば3年生の方ですね。あ、私1年の小早川ゆたかです。そして隣の子が友達の…」

「岩崎みなみです」

んーと？ どしたのかな？ めちゃくちゃ驚いてる表情なんだけど？ もしかして女性が苦手かな…？

あ、そうか彼苛められてたんだったね。いきなり仲よさそうに話し掛けてきたから驚いたのかもしれないな。

イジメかあ……ろくでもないことする人もいるもんだよね。正直、人間の悪意の方が悪魔より怖い時があるよ。

軽い言葉だけで人間あっさり傷つくもんだからねえ…かくいう私も昔はそんな経験あったし、でも私はやられたらやり返す方だったの
で直ぐ沈下したけどさ。

高校じゃそんな事一つもないから気にしてなかったけど。どの学校にもやつぱりあるんだなあ…

そんな経験してたらやつぱ、ダークサマナーとかになっちゃうのかもしれないけど。見た目から見るとそんな気配は見られないんだよねえ。

って、まだダークサマナーって決まったわけじゃないから、決め付けイクナイ。よし、私反省だっ！

.....反省終わりっとな。

とりあえず皆自己紹介終了。

私も途中で参加したよ。で、皆で楽しく会話してます。彼…佐藤君ね、佐藤君。砂糖は甘いぜ？ え？ 関係ない？ サーセン。

どうやら色々聞き上手みたいだねえ。相槌が上手いって言うのかな？ 凄く話しやすい感じがする。

見た感じ苛められそうなひ弱なイメージは無いんだけど、何で苛められてるのかねえ。

ととと、ではではこっそりミッションスタートしようかね。

「ねえねえ。佐藤君はゲームとかやる？」

「やるけど…？」

「そかそかつ！ じゃあさ、どんなゲームが好きかな？」

「そうだね、僕はRPGが好きかな」

「ほうほう。オンゲとか好き？」

「おい、行き成り不思議世界に巻き込むな。佐藤君も困ってるじゃないの」

「いいじゃんっ！ 楽しいものは楽しいでファイナルアンサーだよっ！」

まずはどうでもいい所から話を混ぜていくのがセオリー。

こういう会話は気づかれたら終わりだからね、9のダミーの中につのウィルスを紛れ込ませるのがミソなのだっ！

と言っても悪魔関係の事を濁して会話するのは難しいよねえ。

という訳で時々みゆきさんが会話に乗ってくれます。いやあくこういう時に大活躍だなあみゆきさんっ！

かがみとつかさはこういうのは苦手だから残念ながら9のダミー話に付き合ってもらいます。というかいつもの日常会話ね。

ゆーちゃんとみなみも居るから虚実を混ぜるのが楽チンでいいよ。

ちなみに、ゆーちゃん達は一般人ね。流石に連れ出せないよこのい子達は、あんな悪魔と出会ったらゆーちゃんなら心臓止まるかもしれないし…ありうる。

さーて、どれだけ情報を搾り取れるかなあ……………

……………

……………

…

「そろそろ時間ですね。とても有意義な時間でした。またよければお話しませんか？」

「流石に難しいかな。皆美人なので視線が痛いから」

「おおっ!?! ナチュラルにほめ殺しが来ましたよ？ さあさあ、どうするかがみん？」

「アンタはそういうの好きねえ…とりあえずまたね佐藤君」

「またね」

「うん…それじゃ」

そう言っとさささーっと戻っていく佐藤君。

さてさて…

「じゃあ私達も戻るねお姉ちゃん」

「失礼します」

「ん、またねゆーちゃん」

「頑張つてね二人とも」

そしてゆーちゃん達も戻っていきました、と。

「で、どう思ったかな？」

「難しい所ね。性格的には今感じただけじゃ悪い奴には見えなかったわ。でも、サマナーなのは間違いなさそうね」

「そうですね…後は少し、人間不信の感じが見受けられましたね…やはり色々あったのかもしれないね。出来るのならお力になってあげたいと思うのですが」

「だね…まあ、それは今は無理だからしかたないよ」

「私なら学校来れなくなりそうで怖いのに、佐藤君って偉いんだね。少し尊敬しちゃうかも」

「うんうん。あ、それにしても、みゆきさんは誘導上手いねえ」

みゆきさんの巧みな話術で、彼がサマナーである確信が取れました。

勿論こっちは疑われてないはず。恐るべしみゆきさんっ！そこに痺れる憧れるうっ！

「そうね、私達じゃそう上手く会話を繋げられなかったし。みゆきが居てくれて本当に助かったわ」

「そ、そんな…」

「うんうん、私もかがみんと同じ意見かな。まあ、流石に初対面に全部話すとは思わないけど…でさ、気づいた？」

「ん？ 何が？」

「彼って、私達が自己紹介したらめちゃくちや驚いてたんだよね。もしかして私達って彼と何処かで会った事あるのかな？」

「それはないんじゃない？ 1〜3年通して佐藤君に会ったのは今日が初めてだし」

「私も同じかな」

「私もです」

「むー…きゃわいい子に自己紹介されて吃驚したーって感じの驚きようじゃなかったんだよねえ…」

何て言っていていいかわからないけど…こっ…「何で？」みたいな驚きようって言うか。

あー、わかんないなーっ！

「このままじゃ埒があかないなあ…どうしよみゆきさん」

「強攻策はありますが、それは最後の方にとっておきたいですね。今はまだ様子見しかないかもしれません」

「いつその事私が彼に異界でコンタクトとるとかつ!？」

「だめよ、危険すぎるわ! とうかアンタは魔法使えないんだし、物理耐性の悪魔が来たらどうする気よ」

「むー。いい考えだと思ったんじゃがなあ」

でもこのままじゃどうしようもないし…いよっ! 今度フリーの時につけてみようっ。ほらほら、もう初対面じゃないし上手く誤魔化せるかもだしね。

え? 死亡フラグ? ふっふっふ、甘いよエリー。いとしのエリー…はどうでも良いとして。万が一の為の逃走アイテムなどは持っているのさっ!..

盗賊系舐めるなよう それに、気になるじゃん? あの時の表情がね。

もし普通のデビルサマナーだったら協力してもらえるかもしれないし、それに話してるところ。庇護欲をそそるっていうか。うん、まあよくわかんないけどさ。

強いて言えば。面白そう、かな。

という訳で近い内に会ってみようかなーってね

- 泉こなた視点解除 -

現実には小説より奇なり…か。まさにその通りだったな。

女神転生、GS美神、ペルソナ、月姫。この数週間で確認したクロ
スした世界。後の3つはペルソナの定義にしてもいいかもだけど。

ゲームや漫画の世界がこの世界には普通に存在してた。だから他に
も何かあるかもしれないとは思っていたけど。

まさからき すたとは予想外もいい所だ。あの漫画のキャラクター
達がこの世界に存在してるとは流石に思わなかった。

なぜなら…あまりにもらき すたの世界とはかけ離れた、ある意味
血みどろの世界なのだから。

彼女達は普通の人間なんだろうか？ 流石にあの状況でアナライズ
なんて出来なかった。

もし、彼女達がこちら側の人間だったら………はて、それの何が困るんだろう。

大して変わらないな。別に僕の邪魔をしなければどうでもいい気がする。

それにしても流石にメインキャラクター達の自己紹介を受けた時は驚いてしまった…漫画やアニメで見た通り、確かに凄く可愛かったと思う。

でもそれだけだったな。だからと言って心が動かされる事もなかったし、実を言えばさっさと離れたかったのが現状だったりする。

暫くは教室に引きこもったほうが…いや、屋上か、もしくは学校を休むかだな。

もう直ぐ学校も終わるし、週に2〜3回くらいで来てれば卒業もできそう。学歴を気にしないなら直ぐやめてもいいし、そうすれば縁も切れるだろう。

一般人だった場合は巻き込んでしまうかもしれないし。こちら側の人間だったらややこしいことになりそうだ。

まあ…それはおいて置こう。今日は異界でマグネタイトの補給をしなくちゃいけないしな。

レベルアップに使いすぎてしまったから補充しないといけない。新しい仲魔の、と言うか造魔である『アメリカ』の成長もさせたいけない。

あ、名前は実は結構考えた。デビルサマナー・ソウルハツカーズの業魔殿に出てくる完全造魔の女の子が『メアリ』と言うんだけど、そこからもじらせてもらった。

メアリの順序をばらばらにさせてもらって、其処に+してアを足せばアメリカになる。

見た目日本人だからアメリカって言うのはおかしいので、誰かが居るときにアメリカが居た場合はカバーネームとして『春奈』と言う名前にしておいた。

じゃあ春奈でいいじゃないか？ と言う突っ込みあるだろうけど、アメリカ本人からこっちの方が良いと言われたのでこうしている。

「さっさと教室に戻るかな」

また無視される時間がやってくるけど、大して苦痛にもならない。

正直悪魔達と戦い続けてきたせいかな、こんな幼稚な事で精神的にダメージを受ける事がなくなってきた。

寧ろ、暴力で来られた時の事を考えている。下手したら殺してしまいうような鬼がするんだよね。色々レベル上がってきて…

残念ながら手加減なんてした事ないから、軽くても病院送りにしそいうな気がするのでもらいたいところだ。

それにしても、僕もこの1〜2週間で変わったと思う。なんというか凶太くなってきたなあ…そうでもしないと悪魔と戦う時は死ぬからかもしれないけど。

どうでもいいか。今日は深夜まで狩りをして、明日の昼は寝てよう。そしてまた異界がいいかな。

武器や防具もそろそろ新調したいし、頑張らないといけない。

あ、そうそう。僕の武器や防具は傷んでなかったりする。答えは…文珠だったり。

戦闘には使わないようにしようと思ってるけど、これに使うのは別にいいかなと思って、【補修】とか【強化】とか使ってたりする。

後は【修復】とかも便利だ、物を大事にする事はいい事だと思う。これでメンテナンスの必要が無いのが楽だ。

さてさて、いくとするかな。

Continue 11 〈空想を超える空想は現実の中の真実〉（後書き）

造魔の名前はアメリカになりました。

見た目和风なのにアメリカとはこれいかに（笑

こなたが大樹君に近寄るフラグが立ちましたが、あまり関わる気のない大樹君とはどうなることやらです。

Continue 12 〈非現実+非日常〓今の日常〉(前書き)

再び異界での生活です。∴生活？ 生活です。

どんなものでも発想の転換で色々変わる、というのが今回のお話です。

Continue 12 〈非現実+非日常〓今の日常〉

さて、考えると悪魔とは何なのだろう？ 異世界の種族？ 人間の空想や想像の産物の実体化？ 神話や歴史どおりの生命体？

考えれば考えるほど、訳がわからなくなる。創造主でもないのに、
というか他の人間の事すらわからない僕には到底わからない問題だ。
わかっているのは、襲ってくれば敵で、助けてくれるなら仲魔ではない…その程度の物だろう。

哲学的な事はどうでもいい、という訳で今僕に必要なのは。

「アナライズができないーっ!？」

『うわちゃちゃ!？ マハ・ラギオン反対っ!？ にゃあああっ!』

『ちいっ! こいつ強いぞっ!?!』

「ザンっ! ザンっ!! まったく効かないのです。これは死亡フラグなのかもです」

『ああ…アメリカちゃんが生まれて数日で遠い目を獲得してます』

「いやっ!？ 戦おうねっ!？ アナライズ成功っ! 弱点は…銃っ!？ 僕じゃないかっ! うわあああああっ!?!」

うん。あれだ…アナライズは重要だねと言いたい訳だ。

最近悪魔が強い気がします。勿論それ相当の異界に潜ってる僕達のせいなんだけど…いや。普通なら遠くからアナライズしたり、狙撃したりして戦うんだけど、

行き成り背後からのバツクアタックはどうしようもない訳で…奇襲警戒のスキルが欲しい今日この頃です。

「よしっ！ 怯んだっ！ アズミ暴れまわりっ！ ピクシーとリリムはジオンガ！ メルコムはタル・ンダで攻撃力を下げて！ アメリアはこっちで防御っ！」

悪魔の動きを僕の銃弾とアズミの物理攻撃で押さえ込みつつ、ジオンガで麻痺とダメージを蓄積させる。

物理攻撃が痛いのと、火炎吸収を持つのでメルコムにはタル・ンダを頼み、一撃で死にそうなアメリアは後方に待機させて防御専念。

やはり情報があるというのは便利だ…わからないままマハ・ラギオンなんて撃つてたら僕達はこんがりローストだっただろう。

相手のHPはかなり高く僕達が全力で攻撃しても、まだ余力を残しているようだ。

不意に立ち上がり口から燃え滾る炎を吐き出そうと…さて…あのモーションはまずいっ！

「マハ・ラギオンがくるっ！メルコム以外全員退避ーっ！！」
なりふり構わず逃げるのも得意になった。文珠を使わずに戦う方法は色々戦略を僕に与えてくれる。

一つ間違えると死ぬけどね…実は死に掛け程度にはなっていたり。あの時はディアのありがたみを感じたよ。

『はああああああっ！！』

『熱いのはロウソクの蠟だけで十分ですわあ〜！！』

『余裕だねアンタっ！？逃げろおおおっ！！』

『あれ…私は…?! あ、私は火反射でしたね…って!? それでも怖い物は怖いですっ!? 退避っ！！』

何とか全員がマハ・ラギオンを回避。ゲームだと魔法はほぼ絶対命中だけど、現実は何論違う。

範囲数キロに雷とか言わない限りは避けられる物だ。モーションや相手の攻撃する方向を見ればだけどね。

こういうとき指揮官役はとて役に立つポジションだろう。被害を最小限にできるのだから。

「よしっ！ 隙が出たっ！ 全員さっきと同じパターンでオートっ
っ！」

『おおよっ！！ 食らいやがれデカブツっ！！』

アズムの持つ鋭利な斧が悪魔の肉体をそぎ落とす様に切り付けてい
く。

その傷跡を狙って僕も同時に銃を乱射していく…けど、そんな簡単
には当たる訳も無く、10回撃って2〜4回当たれば御の字だ。

でも弱点なのも相まってかなりのダメージだろう。

その開いた傷口に電撃がもぐりこむ様に叩きつけられる。よし、相
手はそろそろ瀕死のようだ。

僕は今もっている銃をカードに収納し、新しいカードを取り出す。

出てきたのは、重厚なショットガン。名称はたしかC A W S。軍用
のショット・ガンで威力が高く、弾数が多く扱いやすいため僕のお
気に入りだ。

勿論ショット・ガンなので近寄らないと威力は激減するのが難点だ
が止めを刺す場合などにはかなり使える。特に銃が弱点なら尚更だ。

「止めだっ！ 食らえっ！！」

『ああ。オレはそんなに消耗してないからな…しかし強い奴だったな…』

『サマナー様あゝ カードと宝玉がありましたわあ』

「おおー。頑張った甲斐があるよ。マグネタイトもかなり集まったし、暫くはここが拠点になりそうだね」

『多分あの悪魔はユニークでしょ。カードゲットは儲けものだねっ』

『あ、あんまり会いたくないですが…』

この異界のレベルは10〜15だ。今の僕達のレベルだと丁度いい場所だと思う。

居る悪魔は、流石にこのレベルになると一癖も二癖もあるためにアナライズや戦略がものを言うようになってきた。

正直、所見の悪魔に対してはペルソナも文珠も使っている暇など無い。まずは相手の特性などを調べないと此方が危険なので僕の役目は総じて補助になる。

仲魔のおかげで攻撃力や回復力には困っていないし、これはこれで十分やりくりできている。

通常のデビルサマナーは大体こんな感じだろうし、僕も少しはなれてきたのかもしれないな。

勿論使えるときはペルソナも文珠も有効利用させてもらっているが。

ペルソナに関してだけ……はっきり言う并使用いづらい。

一度使うだけで精神力をこっさり持っていかれるのだ……確かに威力も僕が普通に攻撃するよりは数倍強いが、僕がへロへロになっつまう。

一戦二戦程度ならそれでいいかもだけど、狩りをしているのだからそんなに直ぐへばっつていては役に立たない。

2〜4回戦うごとにチャクラドロップなんてしてたらお金がいくらあっても足りないしね……1個10万円は正直厳しいです。

僕にそんな重要な回復アイテム使うなら魔法メインの皆に回したほうが便利だ。

やはり、ペルソナはこごぞ！ という時の切り札として使うのがいいだろうな。

ハイコスト・ハイリターンだ。リスクも兼ねてるけどね。

『はい。サマナーさん　お茶だよっ』

「ありがとピクシー。丁度喉が乾いてたんだ………うん、冷たくて美味しいや」

『このカード便利だな、あれだろ？　ほぼ何でも収納できるんだか

ら楽で良い。重いものとかもカードにしちまえばカード自体は軽いしな』

『食べ物や、かさばる武器や弾丸などもカードにしちまえば楽ですしね』

文珠やペルソナの影に隠れてしまうマジックカードだけど、これも便利なアイテムだ。

何と言ってもカードにしてしまえば銃刀法違反だつてばれないっ！
ここが現代社会で一番問題のある所だから、僕は其処を軽くクリアできる。

武器や防具、アイテムと区別さえしておけば更に便利なのだ。

上手くやれば裏で一財産稼げるかもしれないけど、同時に命の危険も考えられるので、この意見は却下。

その気になれば『家』とか『船』まで1個と判断すれば収納できるのだ、この怖さがわかってもらえるだろうか。

簡単に言つと…中に人間がいようが、何があるうが収納できてしまうのだ…多分。まだ悪魔や人間に対して使っていないのでわからないが。

「…なんでも入るです？ ご主人様？」

「ん、そうだね。基本的に1個に限定できればなんでも収納できる

と思うよ」

「…凄いですっ！ なら魔法も入るのですねっ！」

「!?!」

『……………おいおい。そりゃあマジかよ』

アメリカが言ったのはまさに盲点だった。何でも収納できるという点で考えれば、1個と限定すれば物質は収納出来た…ならば現象や概念は収納できるかもしれない。

もし魔法などが収納できるようになれば、更に戦略のバリエーションが取れるはずだ。

魔法の威力などは、使った本人の者なのだからそれが威力が高い魔法ならば……

「アメリカは天才だね」

「?? アメリカは天才です？ ご主人様の方が凄いです」

「いや、アメリカのおかげだよ。上手くいけば僕達の生存確率はとても跳ね上がるっ！」

『そっか、回復魔法とか攻撃魔法、補助魔法を沢山作ればMPの節約にもなるし皆が使えるから誰でも同じ攻撃力が出せるんだねっ

凄いやサマナーさんっ』

「よし…早速試してみよう。ピクシー。ディアをこのカードに頼めるかい？」

『らじゃー　　ディアっ！！』

上手くいけば…このカードにディアが収納されるはず。

ピクシーの癒しの光が輝くことなくカードに収納されていく…数秒も立たない内にディアの光は消えていった。

カードには絵ではなく、暖かそうな白い光が描かれている。

『上手くいったんですね？』

「試してみよう…アズミこっちへ」

『あいよ』

アズミにさっそくディアを封じ込めたカードを使ってみる。カードを使う時は文珠のように起動をイメージするだけだ。

後はいつも武器やアイテムを取り出すようにカードを使うだけ…するとカードから暖かい光が立ち上りアズミを囲んでいく。

『お…こりゃ良い感じだぜ』

「発動した…やった、やったっ！」

『わー、凄いねっサマナーさんっ！ さっすがあっ！』

「便利です。ご主人様は凄いのですよ！」

こうして僕達は新たに戦える為の方法を見つけた、これからの狩りなどにも大いに活用できそうだ。

異界で悪魔達と戦った！ かなり苦戦したが沢山の悪魔達を狩る事ができた！

マジックカードをスキルカードに出来るようになった！

いくつかのマジックカードをスキルカードに変化させた！！

マジックカード？がランクアップしてマジックカード？になった！

1回使用で消滅するマジックカードを作成できるようになった！

魔貨1000を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）2000を手に入れた！

アメリカは1000マグネタイト補充した！

魔石をいくつか手に入れた！ 宝玉を1個 ビフロンスカードを1個
スバルナカードを1個獲得した！

大樹はレベルが上がった！

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（異能者）

「現在LV」：16 「属性」：N-N

「所持金など」 MAG：3880 ¥：143650 魔
貨：12100

「ステータス」

HP：83 MP：56

「通常時」

力：4 知：4 魔：1 体：3 速：9 運：3

「ペルソナ降魔時・トビカトウ」

力：6 知：6 魔：3 体：5 速：12 運：4

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・文珠の素質？ ・マジックカード？ ・食いしばり
知略

・ペルソナ・愚者

「所持ペルソナ」

愚者・トビカトウLV15

愚者・ナナヤシキLV35 x

英雄・ヨコシマタダオLV63 x

「装備」：装備一式は常にカードに収納済み

剣：トライデント

銃：CAWS 弾数：20

弾：スラッグ弾x40

頭：ドラゴンヘルム

体：ロックベスト 火：銃：

腕：G-ラダーズ 呪殺無効

足：ジエツトブーツ 速+1

「ソフト」

・デビルアナライズ

・エネミーソナー

・ハーマナイザー

1分間の起動 消費：MAG：160 判断力強化 恐怖心

軽減

力：+8 知：+6 魔：+6 体：+8 速：+9 運：

+6

「アイテム」

・文珠x20 生成量：一日55個 所持限界量：27個

文珠【癒】x5 文珠【防】x5 文珠【火】x1

文珠【浄】x1

文珠【風】x1 文珠【雷】x1 文珠【呪】x2

文珠【殺】x2

文珠【脱】x2 文珠【出】x2 文珠【蘇】x1

文珠【探】x1

文珠【索】x1

・マジックカード54枚 生成量：一日57枚

魔石袋『10個』収納

魔石袋『10個』収納

魔石袋 『10個』 収納

ソーマ収納

魔石収納

宝玉収納

宝玉収納

宝玉収納

アメジスト収納

ゴーストカード収納

アーシーズカード収納

エンジェルカード収納

コッパテングカード収納

カハクカード収納

アークエンジェルカード収納

アークエンジェルカード

収納

アチエリカード収納

オンモラキカード収納

ハーピーカード収納

ビフロンスカード収納

スパルナカード収納

・マジックカード【消費】

ディアカード

マハ・ラギオンカード

ディアカード

マハ・ジオンガカード

ディアカード

マハンマカード

タル・ンダカード

マハ・ラギオンカード

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。

知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点

Continue 12 〈非現実+非日常〉今の日常〉（後書き）

地味だった能力。マジックカードが輝いたお話でした。

マカラカーンやテトラカーンが沢山作れば鬼パーティになりそうですね。

さてて…アメリカですが。どのような感じでステータスを上げていこうか悩みます。

Continue 13 く甘い甘い甘露のような毒を賣方にく (前書き)

PVが3万を超えました、とても嬉しいです。

コメントなども沢山頂けて…感謝のしよつもないのですよ。

頑張って書かないとすねー。

今回はオールこなた視点です。

何も考えずに書くのは…楽でいいです。うん、皆さんにもお勧めです。

最後にはこなたのステータスがあります。

Continue 13 く甘い甘い甘露のような毒を賣方に

- 泉こなた視点 -

こちらスネーク。ターゲットを確認した、これより追跡する。

まてスネーク。ダンボールは用意したか？

肯定だ。ちゃんと愛媛みかんのダンボールを用意してきている、これがあれば誰にも見つかる事は無いだろう。

流石だなスネーク。ではスニーキングミッションを開始せよ。ターゲットは佐藤大樹。確認項目は必要かね？

否定だ。確認項目、佐藤大樹の危険性の確認。敵対の場合の情報収集と、非敵対の場合の交渉は脳内にインプット済みだ。

悪かったなスネーク。では幸運を祈る。オーバー。

ラジャー。良い酒を期待している、オーバー。

と、一人メタル ア・ソリ のものまねをしてる泉こなたです。ダンボールは持ってきてないよ。かさばるし異界にあるとバレバレだしね。

現在はかのターゲット佐藤大樹君をスニークしているのであります。今回はばれないように虎の子のイルクストーンも用意してるからねっ！

ん？ イルクストーンって何ぞや？ って？ 甘いなあ私のように実戦での耐久力が低いスピードや攪乱系の職業には喉から手が出るほど欲しいアイテムなのさっ！

これはね魔法石って言って、この石の中に魔法使いが魔法を封じ込めてるんだよ。後は適当に割ると発動します。攻撃系の魔法石は投げつけてねっ！

自爆したら最悪だし…うんうん。で、このイルクストーンは魔界魔法【イルク】が封じ込められています。

効果は幻影をまとして周囲から自分を見えなくするって魔法なのさあ！ あれだね！ きえさり草だねっ！ ドラクエ乙。

実際には見えなくなるっていうか、相手の意識を自分から無意識的に逸らすって魔法らしいけどね！。どうでも良いさその辺はっ！

本当は戦闘用の魔法で、奇襲などに使うのが本来の使い方なんです。ど、こつやって相手を追跡するのにも使えます。

更に言うとして私って魔力のかけらもないから、魔力で気づかれる心配もナッシング！ 追跡の鬼だねっ！ 捕まらないぜっ！

そのせいで攻撃用の魔法石は使っても弱いので役に立たないんだけどねー…あれかな？ 普段からPCとかで遊んでるせいで魔力にげたかな？

と…わき道にそれたね。今現在佐藤君を追跡中なのさー。今日はバイトも無いし確認するには丁度良い日だよね。

それにしてもさ…イジメって嫌だなあ。全員が全員、まるで佐藤君が居ないみたいに無視してるし、先生までも事なかれ主義みたいに無視してた。

あれが黒井センサーとかだったら騒いでること間違い無しだね。うん…

でも佐藤君が全然気にしてる様子がなかったのが凄い、私だったら学校行かなくなりそうだなあ…あれかなそろそろ卒業だし我慢してるのかも。

高校資格はあって損は無いしね。

おっとと、ここが佐藤君のハウス…ね！？ いかんいかん自重しろ私。

ふつーの家だねー。さーて後は警察官のごとく張り込みだー！！

- 一時間経過……………

ふわああ…眠くなってきた。流石にゲームを持ってくるわけにはいかないしねえ。

今日は出ないのかな…？ まさかばれてるとは思わないし。

ん…？ 出てきたっ！ 普段の格好だなあ。なんていうかどこにでも居る普通の人って感じ。

んじゃまあ、追跡再開だねー……………

…って思ってた時が私にもありました……………

ちよっ！？ マジで！？ マジでこの異界いくのっ！？ っていうかなんでかがみんこの異界に気づかないかなっ！？

あきらかにヤバイって！？ ちよっえええっ！？ 普通に入って行っただしっ！？ 死ぬよっ！？ 危険危険っ！

うっう…流石に命に関わるのは……………

「うー……………うー…えーいままよっ！！ 何かあっても助けを求めろっ！ もしくは逃げるっ！！」

女は度胸っ！ という訳でも私も異界に飛び込んだっ！！

いやー…あきらかに空気が違うよ。佐藤君ってそんな強いデビルサ

マナーなのかねえ…

このレベル…多分10レベルクラスの悪魔が出る場所でしょ？ 雰囲気にはわかるよ。こう何ていうか頭に警鐘がガンガン鳴り響くって言うかね？

多分悪魔に見つかったら殺されるねっ一瞬で！！ 私は前衛攪乱か、遠方狙撃タイプなんだよおおおお。

イルクストーンは後4つあるから、逃げるには大丈夫だけど…あ、いたいた佐藤君だ…って？ 何あの装備！？ いつのまに着替えたのっ！？ ってかもってたの！？

【！？】使いまくりますねサーセン。って、そんな事言ってる場合じゃないよ。これはますます謎が深まってきたね。

んー？ 何か話してる…聞き耳立ててみよう。

ーよし、今日も頑張ろうか。5時間くらいでいいかな？

ーうんっ！ サマナーさん今日も頑張ろうねっ！

ー明日は休んで、今日は出来る限り狩りをしねえか？ 二こいらの敵じゃそろそろまずつてきてよお

ーあー…それもいいかもだけど、その辺は余力と相談かな。魔法力ードは皆に手渡すから、いつでも使ってね。

ーマハ・ジオンガの補給は大変でしたわあ…でも、役得もありまし

たけどお

- んなっ!?! ちょっ! サマナーさんっ! 私には!?! 私には無いの!?! ご褒美っ!?!

- いや、僕何もしてないから、というか途中で疲れて眠ったし……
………って何かされたっ!?!?

- うふふふふ 可愛い寝顔でしたわぁ

- 写真にも収めました

- メルコムううう!?! それ頂戴っ! いくら!?!

- 500魔貨ですね。

- たかつ!?! 高いよ! 200に負けて!!

………ばーどうん?

何あのハーレムパーティー。いやいやいや、それもそうだけど。アズミにメルコムにリリムって!?! 高レベル悪魔ばかりじゃないかっ!?!

あっちの子は悪魔……? なのかな? ピクシーもなんか凄く強そうだし!?! うわぁ……正面からは戦えないなぁ……

どうしても戦うって言うなら、今から彼の家に行って爆弾仕掛けるとか、遠くからライフルで狙撃するとか、呪殺得意な人に呪いかけ

てもらうかだよねえ…

正面からだと余裕で死ねるね！！ かがみんとつかさが居てもやばいよあれは。

でも…ダークサマナーって感じはしないなあ…どちらかという普通のサマナーだよ。あれは素なのか、演技なのかわからないけど。しかし…幼女型の悪魔とはやるねっ！ 彼はわかっている！ 上手くいけば同志になれるかもしれない！ ロリは素晴らしい！ 貧乳は希少価値だからねっ！

という訳で追跡さいかい。

………
………
………

うん…レベルが違う。

まずはそう思ったね…だつてさ、アレ見てよ？

- ピクシーとリリムはマハ・ジオンガで牽制っ！ アメリアはザンマで転ばせてっ！ 僕とアズミの道を作っ欲しいっ！ メルコムっ！ マハ・ラギオンで雑魚を掃討！

ーらじゃーっ！！ いっけえ！ マハ・ジオンガアっ！

稲光が8体もいる悪魔に降り注ぐ。それも2回連続で…

ダメージや麻痺を受けてる所に、容赦無く火炎が襲い掛かって悪魔を消滅させていく。

逃げようとした悪魔は少女の放つ風の魔法が動きをせき止めて、その悪魔に対してアズミが武器を振るい、佐藤君が銃で確実に蹴散らしていく。

凄い連携、凄い攻撃：私とかがみとつかさも連携じゃ負けないと思うけど、地力が違いすぎる。

とうかさ：なんで普通の人間があんなに速く動けるのさ？ あ、そうか。あれがデビルサマナーが持っているって言うハーモナイザーのお陰なのかな。

それにしたって、あんな器用に動き回るなんて私でも流石に出来ないよ。攪乱系を自負してる私が大ダメージだね。すこし羨ましい。

ーサマナーさん。怪我してるよ？ ディアっ！

ー助かるよピクシー。

ーまだまだだなサマナー。ハーモナイザーの強化にまだ体が追いついてないって所か？

・だね。ブーストは強いんだけど、行き成り強化される分、どうしても初動が鈍ったりするから…

・それでも並の悪魔より切れが良いと思います、我が主よ。少しづつ慣れていくべきですね。

仲魔との仲は良さそうだねえ。ますますもってダークサマナーの疑いは消えて行ってる。

普通のデビルサマナーなら、これだけ強かったらかがみんに言っただけで雇ってもらうのもありかもね。凄く強いよ、粗は目立つけどね。

って、あれ？ 幼女がこっち見てる…

うそっ！？ バレタ！？

・ご主人様、ご主人様。新手です。ユニークです。ビフロンスです。

にゃああっ！？

・連日で会うなんて予想してないよっ！？

・ユニークの癖にまた出てきたあああ！？

恐る恐る振り向くと…其処には、かなりやばげの悪魔が居た。

マズイ…マズイマズイ!? あれは死ぬ。完全に死ぬ、殺される!?
? 違う、次元が違う!?

「あ……………あああ……………」

…ご主人様、あそこに誰か居ます

…えっ!? …どこに…………と、とりあえず! ジオンガカード発動!!

爪が振り下ろされて、私を…………!?

「いやあああああっ!?!」

『ぐおおおんっ!?!』

雷が悪魔に突き刺さる。今の内に逃げ出さないといけないのに、あ、
足が震えて動かないっ!

「誰か其処につ!? ………………泉…こなた…!? くっ! ア
メリアは彼女を後方に下げて! 皆前回と同じパターンで行くぞっ
! 奴の弱点は銃だっ!」

『はいっ！！ タル・ンダ！！』

『物理はあんまり効かなかったからなあ…魔法は性にあわねえが…マハ・ジオンガカードっ！！』

あの悪魔と佐藤君たちが戦ってる…嘘でしょ！？ だって、間違いなくあの悪魔の方が数倍くらい強いのに。

でも、昨日って言ってたから…こいつを倒した事があるんだ。

正面から？ マジで！？

「じつとして下さいです。どこの誰だか知りませんが邪魔です」

「あ…うん。ありがとう」

「礼はご主人様に言ってくださいです。アメリカは命令に従っただけなのです。そうだ…ご主人様っ！ スクカジャカードを使うのです！」

「わかった！ 頼むよアメリカ！」

「はいなのですっ！ スクカジャカード発動っ！」

幼女、アメリカちゃんが懐からカードを取り出すと緑色の魔法が佐藤君達を保護していく。あれってたしか命中力上昇の魔法じゃ。

『マハ・ラギオンが来ますっ！！ 我が主よっ！』

悪魔の口から業火が漏れ出してる。うわ…あれは受けたら骨も残らない自信があるよっ…ってこっち向いてるー！？

「まずいつ！メルコムアメリカ達をカバーっ！反射するんだっ！ピクシー、アズミっ！3人でジオンが行くよっ！」

『あいあいさーっ！』

『食らいやがれっ！墮天使がっ！！ジオンガカードっ！』

『ぐはあああああっ！！！！』

吐き出した炎を3方向から流れる雷が進行方向を狭めて誘導していく。そこにはメルコムが居て…

『炎は効きませんっ！でも怖いものは怖いですっ！！』

メルコムに業火が！？って跳ね返ったあ！？魔法反射！？

「うそ…でしょ？魔法で魔法の進行方向歪めるなんて…」

「現実です。ご主人様のとっさの判断は凄いです。えっへんなのですよ」

なんか凄い自慢げな幼女がいる。佐藤君が凄いのを自慢したいみたいだね。

んー…悪魔には見えないんだけど…なんだろうこの子は。

戦いは激しくてすでに10分も戦い続けている。

佐藤君はどこから取り出したサブ・マシンガンで悪魔の体を撃ち抜き、ピクシーとリリムが四方八方に動きながら雷を叩き落とす。

でも、流石にノーダメージとは行かず、メルコムとアズミが吹き飛ばされて戦闘不能になってた…

直ぐにCOMPかな…？それに収納される悪魔達に苦虫を噛み潰したような表情になる佐藤君。

そして…

「埒が明かない…か。もう少しなのに…こつなれば」

『あっちを使うの！？』

あっち！？

「いや…トビカトウを呼ぶ！ こいつ！ ペルソナアっ！！」

ペルソナ…って何？ 魔法…？

答えは直ぐに出た、佐藤君の背後から誰かが飛び出して来たから。

よく時代劇などでみる忍者の服装に身を包んだ大人の男性が…あれ…なにさっ！？

『我は汝、汝は我。拙者は御身の絆より現れし、主君を護りし忍！
加藤段蔵こと…飛び加藤なりっ！』

「トビカトウっ！ 飛行針っ！！」

『御意っ！ はあああああっ！！』

トビカトウって確か昔の忍者じゃなかったっけ？

と、とりあえず…そのトビカトウが佐藤君が言う飛行針とかを悪魔に投げつけ…ちよっと！？ 針じゃない！？ 針じゃないよそれっ！

でっかい鉄の先が尖ってるだけだよ！？ 針じゃないって！！

『逃がさないよおっ！ マハ・ジオンガっ！』

『逃げ道はありませんわあ 痺れる程の愛…受け取ってくださいまし 死の甘露ほど甘いものはないですわよあ 』

飛行針とは名ばかりの何十本もの鉄の棒から逃げようとした悪魔…
ビフロンスだね…だけど、周りを雷でふさがれて逃げ道が完全に無
くなった。

其処に降りかかる鉄棒の雨。鈍い音や耳障りな音を立てて、何本も
ビフロンスに突き刺さる。

絶叫を上げるビフロンスの口にも突き刺さり、もはや声を上げる事
も出来なくなっていた。ま…まじ容赦ないっすね、容赦したら死ぬの
はこっちだから仕方ないけど。

手をバタバタ動かしてるのは痛みで転がりたいけど、全身を針とい
う名の棒に接ぎ止められてるからで…うん、想像したくない痛さだ。
でも死んでないのがまた凄い…

「止めだっ！ 消える悪魔っ！！」

佐藤君がいつの間にか手に持ってたショット・ガンを連発する。

ガウンツ、ガウンツって、よく銃撃シーンのあるアニメとかで鳴る

音が何発も響き渡り、悪魔が木つ端微塵になった所で銃声は途絶えた。

「倒しちゃった…あのレベルの悪魔を」

「ご主人様っ　　凄いですっ！！」

きゃいきゃい喜んでる幼女。普段なら萌える光景なんだけど、あれを見た後じゃ流石にそんな余裕はないよ。

さて…どうしよう。あの悪魔が倒された瞬間に、プレッシャーが解けてある程度、考えが回りだしたけど…うん。やばいよね今の私。

ダークサマナーだったら…殺されるか…下手すりゃ…犯されちゃうかも…

「ふう…アズミとメルコムも大丈夫だね。再召喚」

ばあーっとCOMPが光ったかと思うと倒されたはずのアズミとメルコムが元気な様子で出てきた。

『ちい。まだまだ力が足りねえか。あそこでやられちまうとはな』

『炎だけなら私の独壇場なのですが…ですよ、叩いてきますよね。痛かったです』

「無事でよかったよ二人とも」

『よくやったなサマナー。あっちを使ったのか？』

「いや、ペルソナを使ったよ。流石に疲れるねあれは…でだ…なん
でここに居るのかな泉さん」

「あ…あはははは…道に迷った…とかは流石にダメだよな」

「だね、だめだ。ついてきたのか、それともこの異界に用があった
か。だけど、ビフロンズで動けなくなるようじゃ後者じゃないね。
僕に何か用かな？」

バレテラ。

これはやばいかもね…うん。私死んだっ！？ 死んだよっ！？

かなり怖い目つきをしてる佐藤君…うん、流石にねこの状況じゃ逃
げられないし。まずったなあ…

「用…というか、ほらね。あの、気になっちゃってさあ」

「気になる…って？」

うわー…すっごい白い目。仲魔に見せてた笑顔とは違うなあ。やっ
ぱり苛められてたせいで人間とか嫌いなのかな。

しかし、どうしよう。ダークサマナーかもしれないから隠れて調べてましたー、なんて馬鹿正直に言う訳にも行かないし。

どっちにしてもさ、悪い人じゃないと思うよ。さっきも助けてくれたからね、打算とかがあったとしても助けられた事には変わりないし。

あーあ、やっぱり入るの辞めておけばよかったかなあ。

まーいいやつ！ なるようになれっ！！

とりあえず、ダークサマナー云々は濁したりして、出来る限りの事を話して見た。

私も異界にアルバイトなどで関わってる事や、それなりに異界を封じてきた事、前の異界の時に佐藤君を見つけた事。

デビルサマナーということ流石に、行き成りは話し掛けられなかった事。

佐藤君が異界に入ってたので、興味本位で入ってとんでもない事になった事ってね。

嘘などは幾分かの実を混ぜるとそれっぽくなるのです。とはどこかのセリフから頂いた名言だね。

「泉さんが…ね」

「やっぱり信じられない？」

「いや、信じるよ。姿が僕達にも見つけられなかったし、隠密系とかの役目なのかな？」

「前衛攪乱とかかなー。攻撃力が無いからね」

「でも、無謀すぎると思う。僕が助けなかったら死んでるよ？」

「いやー面目ない。逃げれる自信はあったんだけどね、あれは流石にだめだったよ。危機管理が足りなかった…ごめんね」

「謝る必要は無いよ。それで死ぬのは泉さんだし」

「グサッと来るね…あははは」

まるで興味なしっ！　って所だね、うん。

でも、どうやら最悪の場面は切り抜けられたかなあ。

「でね…話は変わるんだけど…」

あの後10分くらい談笑して、ある程度気を許した感じになってくれたから、ここから本題という事に。

「ほら、私アルバイトで異界封鎖とかしてるじゃん？　そこで佐藤君もよかったらアルバイトってか、雇われて見る気はない？」

「バイトで…？　僕が？」

「そうそうっ！　さっきの実力からして絶対に直ぐ採用だよっ！」

「凄く裏がありそうだけど…」

『うんうんっ！　急に言われてもサマナーさんだっけ困るよねっ！』

「いやあ…私も楽になるし、佐藤君も異界に居る以上はお金稼ぎとか仲魔のマグネタイトとか欲しいじゃん？　ならバイトとかで更に貰えたら一石二鳥。」

私も戦闘中楽になるし一石三鳥って感じでっ！」

悩んでるっばい、上手くいけばいい感じになるかもっ！

よしっ！　ここで後一押しだっ！

「かわいい所が揃ってるよっ！」

「いや、そこはどっつてもいいけど」

「んなっ！？ きゃわいいんだよっ！？ 男なら飛びつくところじゃないかなっ！？」

「見た目で言えば、ピクシー達も十分可愛いと思うし」

「ちくせうっ！ 流石にその美人達は勝てそうにないっ！」

勝てそうなのはみゆきさんくらいかなあ…うん。私はロリ系としていけそうだけどね。

くそう、手ごわいぜ…でもこれだけの戦力は敵に回すのはヤダし、味方ならとても助かるから…せめて不戦協定だけでも組んでおきたい所だっ！！

敵にまわるとなるとゾっとするね。広範囲の火力魔法に、佐藤君の特殊能力が合わさるとなると、正面からじゃ勝てる可能性は0だね。

罨にはめて罨にはめて、更にアウトレンジからの威力砲撃とかじゃないと勝てる気がしません。毒とかも有効。

てか、流石に同級生相手にそんな外道な手は使いたくないし。寧ろこの考えはダークサマナーとか悪人寄りだね、毒とか。

遠距離からの攻撃とか、罨とかは普通だよな普通。勝てない相手に正面から戦うのはお馬鹿さんか、どこかの主人公のやる仕事だよ。私には無理無理。

「でもまあ…報酬によっては考えてもいいけど、ね」

「マジっ!?! いや〜 助かるよっ!」

「安すぎたら手伝わないから、その辺は交渉だね」

「うんうん。宜しく宜しく〜 あ、じゃあさ。電話番号交換しようよっ! これ私の〜」

……

……

…

とまあ、そんな訳で2回目のコンタクトは色々騒動を巻き起こしたのでしたっ!

翌日かがみんに怒鳴られたけどね…悪魔も怖かったけどかがみんも怖いねっ!!

者) 「名前」：泉こなた 「性別」：女性 「覚醒段階」：? (愚

「現在LV」：7 「属性」：L・C

「所持金など」 ￥：250000 魔貨：50000

「ステータス」

HP：32 MP：24

「通常時」

力：4 知：1 魔：0 体：1 速：10 運：4

「相性」

剣：物：技：火：氷：電：風：

魔：心：禁：聖：× 呪：状：万：

「所持スキル」

・格闘の素質？ ・計略 ・悪運？ ・蛇の道は蛇？

・暗殺 ・狙撃？ ・隠密

「所持技能」

・回転蹴り 敵単体に剣属性小ダメージ 相手の回避にマイナス

ス補正

・双龍脚 敵1〜2体に剣属性小ダメージ 同じ相手を攻撃

する場合は2回攻撃。

・菩薩掌 敵単体に技属性大ダメージ 相手の防御無視で攻

撃、低確率で気絶。

・首狩り 敵単体に剣属性小ダメージ 低確率で死亡。人

間には中確率で死亡。

・砂掛け 敵単体に中確率で盲目攻撃。

・交差法 格闘攻撃を受けた時に中確率で反撃 剣属性中ダ

メージ。

「装備」：

剣：グラディウス

銃：MSG90 スナイパー・ライフル 弾数：20 射程距

離：1000メートル

弾：通常弾×50

頭：無し

体：サンダー・ガード 電耐性：

腕：カイザー・ナツクル 格闘威力上昇

足：ジャングルブーツ

「アイテム」：所持限界『力+10個』=14個

・イルクストーン×4個

・ディアストーン×1個

・デイスポイズン×2個

・魔石×1個

・グラディウス×1個

・カイザー・ナツクル×1個

・サンダー・ガード×1個

・ジャングルブーツ×1個

・MSG90 スナイパー・ライフル×1個

・通常弾×50・1パック

格闘の素質？：格闘系の技能を覚える。

計略：戦闘前に有効な作戦などを考え付く、戦闘時のあらゆる判定に補正。

悪運？：生き抜くための運がある。レベル回数分致死ダメージを無効化する。

蛇の道は蛇？：情報に詳しい、一定の情報を確実に手に入れる。

暗殺：暗殺に特化している。奇襲や殺しなどに補正。特殊な技を覚える。

狙撃？：遠距離からの攻撃に補正。レベル毎に飛距離と命中が大幅に上がる。？だと500メートルほどで命中80%程度

隠密：自分の存在感を極限まで薄めて、相手に見つけられないようにする。

Continue 13 く甘い甘い甘露のような毒を貴方にく（後書き）

という訳で、大樹君を雇うのに成功したこなたでした。

自分でも後で無謀だなーと思っていました。逃げる自信はあったのみたいですけどね…

こなた：敵に回すと厄介です。正面からなら弱いかもしれませんが、ええ。暗殺に狙撃と、こんなのに目を付けられたら毎日が地獄ですね。いつ死ぬかわかったものじゃありません。

今回は、幕間程度でいいかなーと、考えてます。

Continue 14 〈休息とは次の戦いへの準備の事〉(前書き)

眠れません…たまにそういう時ありませんか？

という訳で暇を持て余したので、適当に幕間を書いてみました。

お互いにまだ信頼度は底辺あたりを彷徨ってますね…

Continue 14 〈休息とは次の戦いへの準備の事〉

「で、命からがら助けてもらったと。そう言いたい訳ね」

「あ、あはははは。ほ、ほら後悔先に立たずって言うじゃない？」

「それを言うなら。終わり良ければ全て良しだろうが…ごめんね佐藤君、うちの馬鹿が」

「馬鹿って！？ 酷いやかがみんっ！」

「かがみん言うなっ！」

はて、僕は何故またこのメンバーに囲まれているのだろうか。

心なしがCOMPがガタガタ震えてる気がするし…COMPの中で何が起きてるか興味が尽きない。

先日の泉こなたから受けたアルバイトの話の続きを、という事で僕は屋上に連れてこられた。

そこで待ってたのは柊姉妹と高良みゆき、そして泉こなただった。呼び捨てで呼んでるのは脳内だけである。

僕の中では未だに彼女達は漫画『らきすた』のキャラクターからぶれてないからとも言えるけど。

世界変われば中身が変わるとはたまに聞くけど、まさか彼女達が非日常の存在とは思わなかったな…強いて言えば泉こなたの母親が幽霊で出てきたくらいかな。オカルト系は。

泉こなた…いや、いい加減に泉さんにしておこう。彼女が言うにはこの3人も異界に関係してるらしい。

「という訳で凄かったよー。私やかがみんじゃ相手に出来ないような悪魔をこっ、ずばばばとね」

「いつも死ぬか死なないかだけどね。僕はまだ弱いし」

「それはイヤミかつ!? あんな凄いスピードと攻撃力は私にはだせないよっ!」

「ハーモナイザーのお陰だよ。僕本来の力はあの半分以下もないしね、超人とかじゃあるまいし銃弾であっさり死ぬ人間だよ僕は」

「でも、凄いのねそのハーモナイザーって…」

「デビルサマナーになった時におまけでついてきたけど、便利だと思っよ」

「…マジで言ってる? それ」

「事実だけど?」

「oh…デビルサマナー、ぱないね。どうしようかがみん。私達もデビルサマナーになるっか…」

「やめてよね。今までの苦勞が泣けてくるから」

そうか、デビルサマナーじゃないしCOMPも持ってないからハーモナイザーがないのか彼女達は。

と言う事は今まで地力だけで戦ってきたという訳か：普通に戦ったら負けるのはこっちだな：まさか敵対するとは思わないけど、注意だけはしておこう。

「更に言うと、かがみさんとつかさんは、神童系ですからCOMPと相性が悪いかと思えますね。ハーモナイザーというもので強化されても逆に戦えなくなるかもしれません」

「そっかー。残念だねお姉ちゃん」

「別にいいわよ。インチキみたいなものでしょ？：あ、ごめん佐藤君」

「いや、インチキには間違いないよ。素人の僕でも達人並に戦闘力が高くなる点に置いてはね」

「チートだねチートっ！ 私は使えるかもしれないな。ダウンロードしてみたいけど、出来ないんだよねー」

「？ 僕は普通に出来たけど？」

「其処なのよ其処、データ自体はえーと、なんだったっけ？」

「デビルサマナーとしての必須アイテム。悪魔召喚プログラムですね。これ自体は少し裏側を検索すれば直ぐに見つかるのですが、何故かダウンロードが出来ません」

「そうそう、私も見つけたんだけどどうしてもダウンロードだけは出来ないんだよねー。回数制限とかじゃなさそうだし、パスワードとかも無いしー」

「僕は普通にダウンロードできたけど…?」

最初はウィルスかとおもって文珠でファイアーウォールの代わりはしたけど、問題も無くダウンロードは出来た。

それを今はスマートフォンに移してCOMPにしているけど。

強いて問題点をあげるなら、他のソフトがまったく無い所だ。COMPの店だけはどうしても見つからないのでどうしたものかと思っっている。

「そこなんだよねー。あれば私も戦力あーっぶって所なのに」

「こなちゃんは強いよ。いつつも助けられてるもんっ!」

「確かにね…優秀な前衛だわ」

ハーモナイザーも無い状態で其処まで動けるんだから、僕からすれ

ば泉さんは脅威でしかない。

これでCOMPも手に入れたら独壇場じゃないだろうか。

そういえば、ハーモナイザーは改造すれば味方にも、適用できたはずだけど…まあ、対象は人間に限られるし、同時にマグネタイトも倍以上消費するから使いにくいけどね。

あれば便利といえれば便利だろう。

「COMPのソフトを売ってる場所があればいいんだけどな…」

「あれ？ 佐藤君ってCOMPのソフト持ってないの？」

「あ、ああうん。僕は情報集めが苦手だね。邪教の館や武器防具の店なら知ってるんだけど」

「ふっふっふーん 実はソフトだけなら売ってる場所を知ってるんだなあこれがっ！」

なんとご都合主義的な…しかし只じゃないだろうなあ。あまりお金は無いんだけど、どうにか情報を買えないだろうか。

簡単に教えてもらえるとは思ってない。こうして集まっているけどそれは学校の同級生ではなくて、依頼主と雇われ者という定義になっているからだ。

「そーだなあ…あのカードの事教えてくれたら、教えちゃうよ」

「自分で探すからいいよ」

「はやっ!？」

マジックカードも文珠と同じであればたら厄介な能力だ。彼女達がいふらすとは思えないけど、情報はどこから流れるかわかったもんじゃない。

カード自体を売ってあげたりするのはいいかもしれないけど、それだけだ。

情報は残念だけど諦めるしかないな…彼女が知ってるんだからこの町の何処かにあるんだろう。邪教の館とかで情報集めをするしかないなあ。

「あ、あのね? ちよろつと教えてくれるだけでもいいんだよ?」

「あれは僕の切り札だ。そう簡単に人に教えられる訳が無い」

「あうう…」

「佐藤君の言う通りよ。こなたは情報とかを欲しがりすぎっ! そりゃ役立つのはわかるけどね」

柊かがみ…柊さんと妹さんでいいか。柊さんはその辺わかってい

ようだ。こつちを見る目も時々厳しい感じがする。

信用はしてても信頼はしないって感じたな。僕達向きだろう、ギブアンドテイクなら裏切りは少ないしね。

泉さんはちよつと難しい所かな、漫画通りのお調子者って感じがする。これが普通の日常だったら、僕も好ましいと思うかもしれないけど。ここじゃ用心しすぎて越した事はない。

僕も彼女達を完全に信頼も信用もしていない。はあ…まるで人間嫌いの考え方だな…苛められてる弊害かな。

「んー。仕方ないなあ…じゃあサービスで教えちゃうよっ！ このこなた様が普通に情報をあげるんだから喜んで拜聴したまへっ！」

「いや…只より高いものは無いし入らないよ。もしくは買おうか？ 5000魔貨なら出せるけど」

「そりゃ魅力的…じゅるり」

「そつちの方が後腐れなくていいんじゃないの？ あと流石に5000魔貨は高いと思うわよ佐藤君」

「そつか…こういう情報とかは売買した事なくて、大体どれくらいが相場なのかな？」

「そうですね。裏の世界での情報料金はそれぞれ変わりますが、お店などの簡単な情報なら5〜10万円程度ですね。魔貨は現在は1魔貨300〜500円でやり取りされていますから、200〜250

魔貨ほどでしょうか」

意外に高いな…邪教の館だと1魔貨100円程度だったのに…まあ、あそこは正式な交換所じゃないから仕方ないか。おじいさんは色々おまけもしてくれるし、気にしないようにしよう。

という訳でCOMPから300魔貨取り出して泉さんに渡した。勿論袋がないと嵩張るので同時に取り出してよ。

「便利だなーCOMP…ってそれスマートフォンだよねっ！ それも最新型っ！ いいなあ〜！」

「電話としてもモバイルとしても便利だよ。と言っても最近は悪魔召喚かアイテムのタンス程度にしか使ってないけど」

「其処まで来るともう訳がわからないわね…てかさ、指で画面押して操作するんでしょ？ 誤作動とか怖くない？」

「慣れれば楽だよ。寧ろこれで慣れなきゃスマートフォンは買わない方がいい」

「私には無理かなー。ぶるぶる震えちゃいそうだもん」

「かがみんなも苦手かもね〜」

「決め付けるなっ！ いや、まあ…ありえるけど」

仲がいい事で羨ましいね。まあ、僕にも仲魔はいるし…羨ましくないようん。

黄昏てても仕方ない、前向きに行こう、前向きに。

「で、だ。手伝う時の依頼料金なただけ。どれくらい出せるのかな？ こういつちゃんただけど高校生だから難しいんじゃない？」

「まー…一回1億とか言われたら流石にどうしようもないわね。でも安心していいわよ。ある程度なら出せるから」

「君達はボランティアじゃないんだろう？ どこかの組織の一員って訳じゃないよね？」

「んー…組織っていうか組合らしいよ？ 巫女さんの」

「巫女じゃないって！！ 一応法的機関なのよ。と言っても裏のオカルト系列なんだけどね。私達は其処から仕事を請けてる、所謂フリーって所かしら」

「結構昔からやってるから、この町では顔効きなんだよー」

「ちなみに私とみゆきさんは、後付でバイトって感じね。あ、そうそうみゆきさんは能力とかないし戦えないから。その代わり戦闘指揮とか管理とか凄いいけどねっ」

「お恥ずかしながら…」

成程…つまり小型のギルドみたいな感じが、ゲームで言う。

国から出てきた依頼を個別で受けてこなしていくってタイプかな。

彼女達は末端の、上の情報を知らない人って訳だ。よかった上の人間だったら目を付けられたらたまったものじゃないからね。

勿論これからそうなる可能性もあるけど、高校を卒業したらいつでもこの町を出られるし、最悪直ぐ逃げる手もある。

文珠を使えば逃げるのだけはわけない。即死さえしなければだけど。

「仕事にもよるけど、最低でも100万とかの仕事とかだから、2〜3割は出せるわ。場所に寄ったら半々とかそっちが6〜7でもいいし」

「妥当だね。でもさ、異界なんてのを正直高校生に封じさせてるって危険じゃないのかな？ 大人はこれを知ってるの？」

「お父さんは知らないね、みゆきさんの所も知らないんじゃないかな」

それでいいのか…まあ、他人がどうなろうと知った事じゃないか。それでいいならそれでいいさ、死ぬのは自分の勝手だし。

泉さん達もその辺わかってやってるんだろっしね。

「うちはお父さんがそつちの人だったから公認よ。だからやばすぎる所はいけないんだけどね」

「お父さんは引退してるから。凄い強い異界とかはベテランの人物が潰してるらしいね」

「で、肝心の佐藤君の所はどんじゃらほい？」

「別に、僕の事なんて気にもされてないよ」

「あ…」

「気にしないでいいって。さて、交渉を始めようか」

両親の事はとつくに諦めてるし、かしこまられても困るな。

というか言葉を濁しておけばよかったかもしれないな、久々にこんなに他の人と話してたから口がすべったのかもしれない。

仲魔？ 仲魔と彼女達は根本的に信頼度の差が違うよ。

こっちは今なら簡単に切り捨てられるしね。漫画のキャラクターとか、そういうのはどうでもいいんだ。確かに漫画は好きだったけど、だからって妄信的にキャラクターまで好きになる事はないよ。

まあ、嫌いじゃないけどね彼女達の事は。

漫画を信じるなら皆良い子だって事はわかってるから。まあ、漫画通りな訳じゃない事は十分知ってるけど。

…
…
…

- COMPソフトを販売している店の情報を買取った!! 30
0 魔貨支払った!!

- らき すたパーティと協力関係を結んだっ!!

- 高良みゆき視点 -

泉さんが連れてこられた方、佐藤大樹さん。

彼を見てまず思った事は…瞳が私を完全に見ていなかった事でした。
どこか、一つ私達から離れている、そんな雰囲気に見受けられました。
た。

「はああ…疲れたわね。つかさお茶もらえる?」

「はいっ」

「でもでもこれで戦力あーっぷ! じゃない? デビルサマナー

としての実力は確実に私達を超えてるし」

「それはそうかもしれないけど…」

そうですね。確かにあの方の御力を借りる事ができれば、これからの泉さん達の異界捜査はとても安全な物になるでしょう。

私としては一安心と言った所です。私だけは皆さんと一緒に戦う事は出来ませんから、いつも歯がゆい思いをしています。

出来る限りの情報や戦う為の戦略などを皆さんにお話しするだけしか出来ないのはとても辛い時がありますから。

「で、どんな感じだった佐藤君」

「んー…普通かなあ。見た目はどこにでも居る男子生徒だよな。振る舞いとかは大人しめの」

「隙は無かった感じはするわね。後は、こう敵対的って感じじゃないけど友好的って感じもなかったわ。協力者としては問題ないけど仲間には…考えるわね」

「そうですね…佐藤さんは此方を信用してないようですよし」

「うえ…そっかあ」

やはりイジメによる不信感のせいなのでしょうが。

泉さんからの情報や私が調べた情報によると、彼は小中高とイジメを受けているらしいです…というか今も無視などが続いているようですね。

その上、先ほどの両親に対する明らかな侮蔑の声…根が深そうです。佐藤さんにとって心から信頼できるのは、仲魔だけなのかもしれませんが…

「あまり深く立ち入らない方が、いいのかもしれないね」

「んー…もつたいたい気がするなあ。そりゃあ、ずけずけ入り込むのはダメだと思うけど、なんていうかさ、寂しいじゃん？ そう言うの。私はヤダな」

「そうだね…友達が居ないのは寂しいよ」

「その辺は彼次第じゃないの？ 私達がどうこういってもしようがないし、逆に迷惑になるだけよ。こなたもあまり入り込まない事っ！ いいわねっ！」

「ほーい」

泉さんの優しさはとても好ましいのですが、それが彼を更に傷つける事になったら大変ですしね。

こういうのは根が深い上に繊細ですから…

これからギブアンドテイクとは言え協力していく以上、仲が良くないれたら素晴らしいとは思いますが。

「んで？ 今日仕事あるの？」

「無いわね…ってかさ、あんたと佐藤君が行った異界ってまだあるの？」

「あるけどやめたほうがいいよ。私達じゃ返り討ちだね…うん」

「わああ…こなちゃんが其処まで言うほどって、凄く危ないんじゃない？」

「佐藤君に聞いたけど、あそこの平均レベルって10〜15なんだから。で、ユニークっていうレア悪魔も居るんだけど、レベル30って言うってた」

「レベル30っ！？ 大悪魔クラスじゃないっ！ 一流でも倒せるかわからないわよっ！？ それに勝ったの彼っ！？」

「仲魔が二人ほど戦闘不能になったけど、ぎりぎりね。出会った時『またっ！？』とかいつてたから、最低でも2戦はしてる事になるよねー」

「そ…そんなレベルの人が100万の2〜3割で動いてくれるのかなあ…」

凄まじいレベルなのです。仲間の援護とハーモナイザーというアイテムの効果が在るとは言え、大悪魔相手に引く所か勝ち抜いてしまう手腕。

私達と同じ年なのに、どうしてそこまで強くなれたのでしょうか…

反対に私は…戦う事もできなくて…少しだけ、悔しいと感じてしまふのは仕方ないのかもしれない。

「OKくれたんだし、最悪半々でもいいんじゃない？ 普段は私達で動けばいいんだからさ。どーしよーもない時だけ手伝ってもらえばいいっしょ？」

「それもそうね、四六時中一緒に居るわけじゃないんだし、そう考えると気が楽だわ」

これから…色々と何かが変わって行きそうです。

卒業をもう直ぐ迎える私達に…新しい何か…何かそんな予感がしてしまふのは。気のせいなのでしょう。それも…

- 高良みゆき視点解除 -

Continue 14 〈休息とは次の戦いへの準備の事〉(後書き)

書き終えても眠気が来ません…どうしましょう…まあ、今日は休みだから良いのですが(汗)

ここから、どうやって信頼度を上げていくかですねー。

お互いに嫌いあってはいないので、コミュニケーションを取れば仲良くなれるかもしれません。

という訳でこの辺で…無理やり寝てきます。

今日の夜にまた書けたら…頑張りますね。まあ、異界探索なのですが。

Continue15 く小さき悪意すら踏みにじる虚無の貌く（前書き）

お気に入り登録が100件を超えました…

本当にありがとうございます、これからも頑張りますね。

コメントなどいつもありがとうございます。本当に嬉しいです。

稚拙な文章ですが、楽しんでもらえるように頑張りますね。

苛めはエスカレートすると、殺意に跳ね上がるといいます。

今回はそんなお話です。

Continue 15 く小さき悪意すら踏みにじる虚無の貌く

「お前さ、最近調子に乗りすぎじゃねえの？」

「佐藤の癖に、可愛い女の子と楽しく会話だあ？　おいおい、女子が可哀想だろ？」

「やめてよね。こんなキモチワルイ奴と私達だって話したくないわよ」

あれから数日、異界での力量上げなどをしている僕なのだけど、何故かこうして今イジメグループに捕まっている。

どうやら、最近びくともせずに学校に通っているのが癪に障るらしい。

更に言えばらき　すたメンバーとたまに会話するのが決め手のようだ。

しかし…

「おい、聞いているのかよ佐藤よお！？　ああん？　あまりふざけると痛い目見せるぞ？」

「あははははっ！　やめとけよ。どうせ、イタイイタイって泣くだけなんだからさっ！」

「いいじゃん、そろそろ自覚させてあげた方がいいんじゃないの？
高校も卒業間近なんだし、痛い目見た方がいいってうんうんっ」

これのどこが怖いのだろう、昔の僕はかなり臆病者だったんだなあと思う。

口だけは達者だなあ…うん。悪魔との会話とかできそうじゃないかな？ まあ、下手すれば殺されるんだろうけど。

「で、話はそれだけかい？ 僕はこれから用事があるんだけど」

「…………… テメエ…俺達を余程怒らせたみたいだな…いい加減にしないと殺すぞコラっ!？」

「はあ…で、君達は僕にどうして欲しいんだ？」

「ここで土下座しろ。そして持つてる金品を全部俺たちに寄越せ、そうすれば優しい俺達は助けてやらないでもないぜ？」

「最近欲しいものがあるのよねえ。お財布になってもいいでしょ？」

テンプレって知ってるだろうか？

小説などによくある、同じ道筋をそのまま書くというものだ。テンプレートの事を訳した造語みたいなものなだけだね。

彼らの行動がまさにそのまま不良とかそういう系のテンプレそのまま

まなのが…こつ…やるせないといつかなんといつか…

実力をわかってないって、こついうのを言うんだろうか。正直相手にしてられない、無駄に相手にしたり痛めつけるとそこからまた面倒な事が起こるから…

さて、どうやり過ごすか。ここでお金を渡すのは却下だ、そんなことすればまたせびりに来るだろうし、今日は買い物のために少しばかり多めに入れてきたから。

暴力で脅す？ これも却下だ、高校を卒業だけはしておこつと最近思ったのでくだらない争いはしたくないし、下手すれば殺してしま

う。

逃げようにも囲まれてるし、うーん強行突破するかな。押し倒す程度ならダメージも…ってああ、それすら脅しの材料に使ってくるか彼らなら。

押し倒されて怪我しました、なんて先生に言われたらこつちの事も考えずに先生は僕を責めるだろう。

ある意味先生ですら僕を助けようとしていないし…八方塞りだなあ…

「はやくしねえと、そろそろブチぎれるぞこら？」

いつその事あえてダメージを受け…いやいや、ハーモナイザーも使って無い状態で殴られたら大怪我間違い無しだ。

寧ろこんな程度の奴ら相手にマグネタイト消費って馬鹿馬鹿し過ぎる。別に人間向かって無双したくて強くなつたわけじゃない、強くなつてる実感はないけど…

さてさて。どうしたものか…

「お前らっ！　そこで何してるんやっ！！」

「やべっ！？」

おや…？　凜とした声が響くと同時に彼らが蜘蛛の子散らすように逃げていく。

よくわからないが助かったみたいだ、しかし誰だろう。

「無事やったみたいやな。怪我ないか？」

「あ…はい。大丈夫です」

其処に居たのは黒井ななこ先生だった。担当科目は世界史で、だれど世界史を教える先生が実は二人居て僕の所の教室には来た事が無い。

もし彼女の存在をもっと早く知ってたら、らき　すたメンバーの事も早く知り合えたかもしれないな。

黒井先生は辺りをキョロキョロと見回した後、僕を見ていた。

「すまんなあ、先生がもう少し早く来れたらこないな事には」

「いえ、助かりました。まさか助けが来るなんて思いませんでしたから」

「さよか……信用はないんやな、佐藤にとってうちのガツコの奴らは」

「まあ、うちの担任がそうでしたし……って、何で僕が佐藤って知ってるんですか？」

「んー、うちのクラスの奴がな、お前が複数の生徒に囲まれてるって教えてくれたんや。名前もそいつから聞いてなあ」

泉さんだろうか。確かに、生徒が助けにくるよりは先生が来たほうが色々早いし助かる。

感謝はしておこう、停学か退学沙汰にはならずにすんだから。

「じゃあ、僕は帰ります。来週まで来ない予定です。出席日数は足りてますし、後は卒業するだけですから」

「そか……わかった。うちのほうでなんとか誤魔化したるさかい、ゆっくり休みや」

「はい、ありがとうございます」

先生が皆こんな人ばかりだったら、僕はここまでひねくれなかったのかもしれないな。

しかし、来週からどうするか。多分完全に目を付けられたら……いつその事異界に放り込んで……いやいやまてまて。どんな外道の考えだ。

それなら記憶がなくなるまで殴り続けた方がまだ優しいと思う。

《うー…今の奴殺してもよかつたんじゃない？ サマナーさんっ！》

「いやいや、そんな事ばかりしてたら直ぐ捕まるから。世の中そんなに甘くないよ」

《でもお…悔しいよっ！》

「あれくらいしか出来ない可哀想な人種だと思えば、気にもならないよ」

《だな。所詮口だけの奴らだ、サマナーとは世界が違いすぎる。現実を見せてやっても発狂するか死ぬかのどっちかだろうしな》

《うー……アメリカもザンマが使いたいと思ったです》

「やめてね、バラバラ死体なんて掃除したくないよ僕は」

まあ、どうしようもなくなったら戦うさ。殺さない程度にはね、最悪町から逃げるし。裏の世界で生きる以上、殺しさえしなければ逃げ切れるだろう。

さて、COMP屋に行ってみるかな。実はまだ向かってなかったりする、色々ゴタゴタしてたせいもあるけどね。

戦力増強にはとてもいいし、早速行って見るとしよう。

僕は先ほどまで絡まれていた事などあっさり忘れてCOMP屋へ向かうのだった…

……

……

…

COMPソフトショップに向かった！ 色々なソフトを購入しインストールした！！

改造ハーモナイザー を購入、インストールした！ 1000魔貨消費
消費

HPリカバードームを購入、インストールした！ 2000魔貨消費
百太郎を購入、インストールした！ 3500魔貨消費 エネミー
ソナー売却により500魔貨分修正

ネオ・クリアを購入、インストールした！ 300魔貨消費
スキヤニング・ゼロを購入、インストールした！ 600魔貨消費
ハニー・ビーを購入、インストールした！ 1000魔貨消費
キャプスロツクを購入、インストールした！ 800魔貨消費

Mr・サブライズを購入、インストールした！ 1200魔貨消費
ナイチンゲラーを購入、インストールした！ 1600魔貨消費

総計：12000魔貨

以下詳細

改造ハーモナイザー : ハーモナイザーの対象をこのソフトをイン
ストールした数+二人に適用させる。マグネタイトは人数によって
倍加する。

HPリカバーME : 移動時に仲魔を含む全体のHPを一定値ずつ回
復する。

百太郎 : エネミーソナーの強化型、範囲内の悪魔を索敵する。同時
に奇襲対策も可能になる。

ネオ・クリア : 特殊衛星式、マップナビゲーションシステム。電波
が届きにくい場所でもマップが表示される。

スキヤニング・ゼロ : 暗視装置、暗闇などでも、全体がよく見える
ようになりペナルティを受けない。

ハニー・ビー : 小型ビデオカメラを装着したドローンを動かす事で、
偵察可能。およそ20キロ四方を偵察する事が出来る。

キャプスロック : 銃器支援システム。銃の命中率に中補正
Mr・サブライズ : 戦術支援システム。速に補正。

ナイチンゲラー : 仲魔及びCOMP所持者がバッドステータスを
受けた時、内蔵している回復アイテムを自動的に使用する。

「名前」 : 大樹 「性別」 : 男性 「覚醒段階」 : ? (異能者)

「現在LV」 : 18 「属性」 : N-N

「所持金など」 M A G : 7 3 0 0 ¥ : 1 8 5 2 0 0 魔
貨 : 1 8 0 0

「ステータス」

H P : 9 2 M P : 6 0

「通常時」

力 : 4 知 : 4 魔 : 1 体 : 4 速 : 1 1 運 : 3

「ペルソナ降魔時・トビカトウ」

力 : 6 知 : 6 魔 : 3 体 : 6 速 : 1 4 運 : 4

「相性」

剣 : 物 : 技 : 火 : 氷 : 電 : 風 :
魔 : 心 : 禁 : 聖 : x 呪 : 状 : 万 :

「所持スキル」

・文珠の素質？ ・マジックカード？ ・食いしぼり ・

知略

・ペルソナ・愚者 ・銃の素質？ ・命運？

「所持ペルソナ」

愚者・トビカトウ L V 1 5

愚者・ナナヤシキ L V 3 5 x

英雄・ヨコシマタダオ L V 6 3 x

「所持技能」

・シユア・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 高命中率

・レグ・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 中確率で速

を下げる。

・アーム・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 中確率で力
を下げる。武器や防具を持っている場合落とす確率が発生。

・デスペラード 敵全体に物属性中ダメージ 弾を一回で内蔵
している分、全部消費。要・二丁拳銃。現在使用不可能

「装備」：装備一式は常にカードに収納済み

剣：トライデント

銃：C A W S 弾数：20
弾：スラッグ弾×40
頭：ドラゴンヘルム
体：ロツクベスト 火：銃：
腕：G - ラダーズ 呪殺無効
足：ジエツトブーツ 速+1

「ソフト」

- ・デビルアナライズ
- ・改造ハーモナイザー
- ・HPリカバIMI
- ・百太郎
- ・ネオ・クリア
- ・スキヤニング・ゼロ
- ・ハニー・ビー
- ・キャプスロツク
- ・Mr. サプライズ
- ・ナイチンゲラー
- ・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：180 判断力強化 恐怖心

軽減

力：+9 知：+7 魔：+7 体：+9 速：+10 運：
+7

「アイテム」

・文珠×20 生成量：一日58個 所持限界量：29個

文珠【癒】×5 文珠【防】×5 文珠【火】×1

文珠【浄】×1

文珠【風】×1 文珠【雷】×1 文珠【呪】×2

文珠【殺】×2

文珠【脱】×2 文珠【出】×2 文珠【蘇】×1

文珠【探】×1

文珠【索】×1

・マジックカード57枚 生成量：一日60枚

魔石袋『10個』収納

魔石袋『10個』収納

魔石袋『10個』収納

ソーマ収納

魔石収納

宝玉収納

宝玉収納

宝玉収納

アメジスト収納

ゴーストカード収納

アーシーズカード収納

エンジェルカード収納

コッパテングカード収納

カハクカード収納

アークエンジェルカード収納

アークエンジェルカード

収納

アチエリカード収納

オンモラキカード収納

ハーピーカード収納

ビフロンスカード収納

スパルナカード収納

・マジックカード【消費】

ディアカード

マハ・ラギオンカード

ディアカード

マハ・ジオンガカード

ディアカード

マハンマカード

タル・ンダカード

マハ・ラギオンカード

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。

知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点

銃の素質？：銃の技能を覚えるようになる。命中に補正

命運？：命を繋ぐ幸運。レベル回数分致死ダメージを無効化する。

- 不良視点 -

「ちいっ！ 誰だよあそこで先公なんて呼んだのはっ！」

折角のストレス解消相手だったのに、余計な真似を…ゆるさねえ。こつなりや、佐藤の野郎、意地でもぶっ殺してやる…

「あーあ、つまんない。無視だけじゃ全然効かないから今日は楽しもうと思ってたのに」

まったくだ、あいつの無視されて落ち込んだ表情を見るのが俺たちの毎日の楽しみだったのに。

冬休み以降、佐藤は変わってやがった。俺たちが無視しようが何しようがまったく堪えやがらねえ。

少し手を加えて、物をぶっ壊したり机に落書きしたりという手も使ってみたがそれも気にすらしねえのが更にむかついた。

苛められっ子はよ、黙って俺たちのために苛められればいいのに、何様だあいつはよっ！

お陰で俺の気分は底辺をうろついてやがる。

「へっ、まあいいさ。面白いものも見つけたからな」

「面白いもの？ へえ、何々見せてよ？」

「これだよこれ」

そう言っただけで見たのは俺がつい先日みつけた、面白いもの。

誰も信用しないうちかもしれない、まるでゲームのようなものだけどよ、これがまた現実だったときの高揚感は堪えきれないぜ？

「え？ モバイル？ これが何よ？」

「まあ、みてるよ。これだこれ」

其処には悪魔召喚プログラムと書いてある。

俺はパソコンとかも趣味でネットダイブが好きなんだが、色々漁ってたら見つけたものだ。

色々噂になっている都市伝説のネタの一つだ。

「ええ？ アンタってオタクだったの？」

「普通に引くぜそれはよ？」

おいおい、酷いぞ友人？

「おいおい、本物かどうかも試さずに言うのは辞めてくれよ。俺は超常の力を手に入れたんだからな。流石にけしかけるのは俺の良心が働いてやめてやったんだが、もう我慢の限界だね」

俺はそのままこのモバイルに封印された者呼び出す。

見ろっ！ これが俺のっ！ 俺の！ 俺の力だっ！！

「出てこいっ！ ゴースト！！ スライムっ！！」

COMPがガタガタと唸り光を放つ。

そしてそこには、おぞましい化け物が現れた。

「きゃあああああっ！？ 何っ！？ 何よこれえ！？」

「ばばば…化け物っ！？」

「まあまあ、落ち着けて。こいつは俺の言う事なら何でも聞くからよ。お前ら待機っ！」

『おおおおお…おおおおおおお…』

『ずじゆる…じゅ…る』

こいつを手に入れたとき俺はピーンと来たねっ！　世界は俺を中心に回り始めたって。

この力があれば、人知れず人間を脅す事も、犯す事も、殺す事も可能だっ！

流石に今までは自重してたけど、あのくそ野郎のせいで腸煮えくり返ってるからな、殺す一歩手前くらいはいいだろ。けけけけっ

「こいつを使えば俺達は手を出さずにあのむかつく佐藤を半殺しに出来る。どうせ警察なんぞオカルトなんて信用しねえから、俺たちに足がつく事もねえよ」

「あわわわ……だ、大丈夫なのかよ…こ、これっ!？」

「う、噂じゃ聞いたことあるけど…ほ、本物なんだ…すごおいつ！」

「だろ？　あいつも馬鹿だなあ。俺たちの言う事をハイハイって素直に聞いてりゃこんな目にあうこともなかったのによお」

「あははははっ！　そうよねっ！　最後には警察が何とかしてくれ

るって思ってる奴の顔を歪ませるの楽しそうっ！！」

こいつらも乗り気だ。いわばこれは俺の道の為の前哨戦、ここで俺の力を見せ付けて、佐藤を膝つかせてやる。

この力があれば、金も女も自由自在だっ！ 笑いがとまらねえなっ！

今回の事で完全に吹っ切れた。力は使ってこそ力だっ！

見てやがれ、佐藤。普通に苛められてたほうが幸せだったって思えるくらい痛めつけてやる。

ゲロ吐いた場所に這い蹲って土下座してもゆるさねえよ。お前は俺たちの楽しみを奪ったんだからなっ。

いいか？ この世の中強いものが勝つんだよ。てめえみたいな雑魚は俺達強者の前に脅えるしかないって事を見せ付けてやるぜっ！

- 不良視点解除 -

Continue 15 く小さき悪意すら踏みにじる虚無の貌く（後書き）

まったく気にしてない大樹君は不良に目を付けられました。

更に言うとダークサマナー見習いっばいです。はてさて…どうなるのでしょうか。

悪意はのめり込むと、全てが自分の思い通りにならないと嫌になるらしいですね…

次回は気を取り直して、普通に異界探索にする予定です。

もしくははらき すた勢との共同作業、どちらがいいでしょうか？

Continue16 く染みる想いと拒絶する心と委ねる意味く（前書き）

短めです。

久しぶりのミッション、共同作戦です。

お互いの事を良く知り始めてきているようですね。

不良君の出番はありません。

Continue16 〈染みる想いと拒絶する心と委ねる意味〉

・ミッションが開始されました。

異界レベル6〜10 出現予想悪魔、屍鬼、悪霊、外道、怪異、
幽鬼を確認。 ユニーク：マッドガツサー確認。
依頼ナンバー02、『屍鬼掃討作戦』 報酬：50万円、異界に
存在する全マグネタイト、及びアイテムを全て 魔貨のみ半々

『来ました…私のステージです。独壇場ですっ！ 私の目立つとき
ですねっ！ マハンマっ！！！！』

「うっわー…あの墮天使めちやくちや輝いてるんだけど…ってかつ
よっ！？ つかさの破魔よりつよっ！？」

「えうう。自信なくなっちやうなあ…」

「まあ、そもそもレベルの離れた悪魔と人間を比べるのはおかしい
けどね」

「いやいやいや。佐藤君も十分規格外だから」

失礼だな。僕が早いのは単純にハーモナイザーのお陰であって、それが無いなら僕は君達以下に成り下がる自信がある。

そう思いつつ、群れてくるアンデッドの大群をサブ・マシンガンで掃討しつつ少しずつ空間を掌握している。

それにしても…

「正直、気持ち悪すぎてそっちの方面が辛い…リアルバイオハザードってこんなに怖いんだね」

「そだねー。やっぱり佐藤君もそう思う？」

「好き好んでこの場面が好きって言う人はあまり居ないと思う。僕ははつきり言って仕事以外で直視したくないね…お昼ご飯が戻ってきそつだ…」

と言う訳で、今更だけど今回はらきすたメンバーから仕事の依頼があったので受けてみた。

今回は異界を閉じる為に其処に物凄く沸いたゾンビ系の悪魔を蹴散らす事が仕事だ。

ここら辺の悪魔は、そもそも大して強くもないので、僕とメルコム

だけで戦っている。ピクシーは屍鬼は好きじゃないし、アズミは弱い者イジメが嫌いだからね。

リリムは単純にやる気がないようだ。アメリカはまだ強化が完全に済んでないので待機となっている。

まあ、予想通りレベルは低くても泉さん達は僕達以上に経験豊富で、敵をひとまとめにしたりとかは全てお世話になっている。

僕らは単純に、雑魚散らしだね。

「ハーモナイザーっていいねーっ。私も欲しいなあ」

「最近泉さんから買った情報で、ソフトが充実出来たから、余分にマグネタイトをくれるんなら対象にしてみようか？」

「うえっ！？ そんな事できるのっ！？ バフだねっバフっ！」

バフというのは強化の事だ、逆に相手の低下はデバフね。オンラインのRPGなどをやっているとか良く耳にする言葉らしいけど、僕はそこまで興味ないせいで耳慣れない。

「やめときなさいってこなた。急にスピードとか大幅にアップしたら多分、感覚つかめないわよ？」

「あー…成程ね。やめたほうがいいかも泉さん」

「ガーン…リアルバフk t k rとか思ったのに…ちくしょーっ！
八つ当たり気味に手榴弾をくらへーっ！！」

とかいいつつ、屍鬼・ゾンビ・アーミーの群れに手榴弾を何個も連続で投げつける泉さん。

途端に大爆発が起きて、並み居る屍鬼を爆風と衝撃で焼き払っていく。ああ、あれは即死かな。そもそも死んでるから即死って言うのも変だけど。

うん、泉さんは前衛と言うか傭兵かアサシンで良いと思う。

初めに銃を使って狙撃してた時は、彼女は敵に回したら厄介だと心の其処から思わせてくれるものがあつた。

とりあえず、何の問題も無くさくさくと掃討が続けられている。

一匹一匹はとても弱くて、近づく前に銃やマハンマで消滅していくので、特筆する戦闘描写もない。

例えるとこんな感じだろう。敵発見 狙撃 ある程度減る 此方に気づき向かってくる メルコムマハンマ ほぼ消滅 僕と泉さん達でハマヤ銃 全滅。

この単調な繰り返しなので、危険はまったく無い。

勿論これが出るのはメルコムのお陰なので、ゾンビ・アーミーに普通に囲まれたら此方がとても危険だ。

アーミーと言う位なので、普通に銃器を持つてるのが曲者。発狂してる為かその辺構わず撃ってる性で、銃弾が無い時がほとんどで、銃弾があっても狙わずに撃つので危険性は低い。

でも、あたればやはり銃弾、致命傷な訳で、ゾンビ・アーミーは出来る限りスピード除去に回っている。

悪霊はポルター・ガイストが時々襲ってくるくらいだ。

此方は銃が効かないので、マジックカードの出番になる。やはり使った時は驚かれてたけど、魔法石のカード版だと言葉を濁しておいた。

「なににせよ。マグネタイトと魔貨が沢山溜まって良い感じだよ」

「こつちも凄く楽できてるよ。ね、かがみんっ」

「確かにね。話には聞いてたけど想像以上だわ」

「それでもないよ。僕は所詮ドーピングだしね。ハーモナイザー無しであそこまで動ける泉さん達の方が凄いと思う時がある」

「えへへ。褒められちゃったね」

煽てる訳でも、下出に出てるわけでもない。これが僕のらきすたメンバーに対する正直な感想だ。

泉さんの前衛及び、狙撃などでの除去能力。柊さんの魔法火力に、妹さんの支援及びハマ系の魔法。更に高良さんの作戦指揮が合さればレベル以上の働きをするだろう。

僕がハーモナイザーを使っても、同じレベルに合わせたら多分仲魔が居てもギリギリ勝てるか、逃げる事になるだろう。

魔法カードや文珠を使えば簡単に状況はひっくり返せるけど、それは実力じゃないから意味が無い。

僕はたまたま文珠に目覚めて、デビルサマナーになってハーモナイザーを手に入れた、運よく勝ち進んで、そして一度死んだ事によりペルソナを覚えた。

こんな単純に直ぐ熟練者である彼女達を経験で勝てるとは思っていない。レベルは高くても、仲魔が強くても。

死ぬ時はあんな簡単だって知ってしまった以上、どんな相手にも万全で望む事にしたからだ。

前日の不良…？ ん、流石に一般人を殺そうとは思わないよ、相手が此方を殺しに来ない限りは。やられるまえにはやるけどね。

「この辺の悪魔も少なくなってきたみたいだ。封印の基点ってまだ遠いの？」

「そうね…多分あと少しだと思うんだけど。みゆきに聞いてみるわね」

異界で電波が届くのか、と思ったんだけどこれが意外と届いているらしい。

余程変な場所じゃない限りは、問題ないようだ。

ちなみに高良さんは異界の外にいる。流石に護りながら戦うのは面倒だし邪魔にしなければならないから。

広範囲に届くハンスフリーの無線を普段は使っているけど、やはり其処は無線なので普通に会話する点に置いてはノイズなどが酷くて無理らしい。

なので、落ち着いて話す場合は携帯を活用するそうだ。

オカルトな世界なのに電子の力が役に立つとはね……ってCOMPはその最先端だった。

「そいえばさ。昨日大丈夫だった？」

「昨日？ ああ、もしかして先生を呼んでくれたの泉さん？」

「うん。私が行っても、面倒になるだけだからさ先生に頼んだんだけど。迷惑だったかなーって」

「いや、困ってたから助かったよ。流石に停学か退学沙汰にするのは面倒だし」

「無事でよかったねっ佐藤君っ」

やはり、基本的には彼女達は良い人なんだろうな。

もう少し早くに出会えてたら、僕も少しはコミュ障が抑えられてたと思う。

今は普通に話せてるように見えるけど、実はそうでもなかったりする。出来るだけ彼女達の目を見ないようにしないと精神的に圧迫されるんだ。

『我が主よ。奥の方から悪魔の気配がします』

「…屍鬼かな？」

『いえ…怪異かもしれません』

「怪異かあ…面倒だなあ」

「うええ。赤いちゃんちゃんことかでしょ？ あいつらって耐性とか色々変わってるから敵に混ざってるって厄介なんだよねえ」

「まったくだよな。仕方ない。妹さんと泉さんはかがみさんが戻ってくるまでここで。泉さんは狙撃できそうなのを適当に狙って欲しい」

「らじゃーっ！」

「えと、佐藤君っ、スク・カジャいるかなっ？」

「いや、それはよりは戻ってきたときのハマに力を入れて欲しい。
ピクシー召喚っ！」

『あう、サマナーさん私もやるの？』

「悪いけど怪異が出たから我慢してほしい。メルコムは屍鬼の掃討。
僕はアナライズで怪異を調べる。ピクシーはその間援護してくれっ
っ！」

『ぐちゃぐちゃは嫌いだけど…サマナーさんのためだし、頑張ろう
かなあ』

『拝命いたしました、我が主よっ！』

「行くよっ！！」

さて、来る前にどれだけ減らせるかな。

- 泉こなた視点 -

強かった、すっごく強かった。

いやー、本当にデビルサマナーって強いねえ。

そう思いながらスナイパー・ライフルを連続で撃ち出していく私。
射撃にはちよろんと自信があるよ。

今回の依頼はさ、流石に最大レベルが10なのやユニークが出る可能性があるから、佐藤君に手伝ってもらおう事にしたんだよね。

最初は少し渋ってたかがみとみゆきさんだけど、自分達だけじゃバイってのも理解してたから急遽採用となりました。

マグネタイトは私達じゃ集められないし、アイテムは其処まで欲しいの無いからねえ。

魔貨だけは半々になったけど、それでもこれだけ倒せば確実に溜まるよ。

正直、バイト報酬より魔貨のほうが多い気がするねっ！

それにしても佐藤君は陣頭指揮が上手いねえ。やっぱりあれかな？
サマナーになるとその辺の力がつくのかな。

とっさの判断はみゆきさんにせまるものがあるよー。

「ねえ、こなちゃん？」

「ん？ なーに？ 近くに居ると薬莖当たるから気をつけてね」

つかさはどじっごさんなので、当たり前そうな気がする。流石だぜつかさ。

「う、うん。少し離れるね。でね、佐藤君ってどんな感じに思えたかなーって」

「佐藤君？ おっしや、クリティカルだねっ！ んー…そうだねえ。ちなみにつかさは？」

「わ、私はその…少し怖いなって…思っちゃった」

怖いね。確かにあんまり表情変わってないからねえ。多分出来る限り無表情でいようとしてるんじゃないかな。

私達に気を許さないようにしてるのは、流石に私でもわかるよ。

こんなヤクザな商売、むしろそれ位の方がデフォルトだよな。私達が寧ろ異常なだけだと思うよ？ 仲良しパーティって滅多に無いからねえ。

佐藤君は多分、人間の怖さを知ってるんじゃないかな。だから、必要以上に近寄ってこない、近寄らせない。

こういう仕事をする点で言えば、私達より彼の方が合格かな。

「否定はしないよ。でもさ、知って数日の相手に、それもこんな世

界で直ぐ仲良くなるなんて出来ないよ。寧ろ下出に出てきたら怪しい奴だと思わないとね」

「こなちゃんは…凄いな」

「そかな？ つと。はずした…：…いよっし。凄くないよ私なんて、つかさやかがみやみゆきさんが居るから何とか戦える程度の美少女でしかないのさっ！」

「あはは、そだね」

「自分で美少女って…自信過剰って言われるわよ？」

「おっ、おつかえりーかがみんっ！ んで、どうだった？」

「ここから北に300メートル地点が基点ね。で、凄いなんだけど、あれって怪異？」

「オフコースっ あっちは佐藤君が相手にしてくれてるから私達は屍鬼を片付けようかねー」

まあ、何だかんだ言っても。こうして一緒に戦っている以上は仲良くなってみたいもんだよね。

そっちの方が楽しいしねー！

んじゃまっ！ あと少し頑張りますかっ！！ 唸るぜ私のレールガンっ！！ あ、いや、電属性はないけどねー。

……
……
……

この後1時間ほどで今回の異界封じは終了したのだったー！

次回の約束も取り付けたよ。

今度はどんな風になるやらだねえ。

- 泉こなた視点解除 -

依頼ナンバー02、『屍鬼掃討作戦』 - CLEAR!!
報酬：50万円、異界に存在する全マグネタイト、及びアイテムを
全て 魔貨のみ半々

異界を踏破した！ 巫女の力によって異界を封鎖したっ！

異界踏破ボーナス！ プラズマソードを手に入れた！

魔石をいくつか手に入れた！ UZエを4個、サバイバルベストを2個、ゾンビ・アーミーカードを2個、

宝玉を1個 アメジストを1個、デイスパライズを3個手に入れた！

魔貨2500を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）4000を手に入れた！

敵のレベルが低すぎる為、経験値は得られなかった！

Continue16 〈染みる想いと拒絶する心と委ねる意味〉（後書き）

という訳で、沢山の人数によるフルボッコが始まりました。

レベルが高いのと弱点を攻めまくりなお陰であっさりと攻略できたようです。

でも、敵が弱すぎて経験になりませんでしたね。

今回の件で互いに信頼度+1と言った所かも知れません。

さて、次回は不良君を動かそうかと思えます。

Continue17 〈澁む悪意と殺意を糧に産声を上げる大罪〉（前書き）

VS不良君です。

でも、直ぐ終わって、そこから急展開になります。

しかし文章的には短めなのですよ（汗

3 / 3 1 題名が長すぎたので縮小（汗

昨日はそれなりにハードだった。

ユニーク悪魔は現れなかったため、別段苦勞する事はなかったけど、数だけは多かった。

その分多くのアイテムやマグネタイトが入ったので幸運だと思おう。

現金がそのまま貰えたのも嬉しかったな。50万か…手伝いだけとはいえかなりのお金が手に入った。

これを続けていけばある程度の貯金が貯められそうだなあ。車や免許は必要になるし、小さくてもいいから家も必要だ、デビルサマナーになる前からある程度の貯金はあるけど、それだけじゃまだまだ足りないから、頑張って貯めないといけない。

宝石なども邪教の館などに持っていけばそれなりのお金になるし、暫く続ければ直ぐに溜まるだろう。

ある意味では泉さん達との共闘は僕に大幅なプラスになったと言えるだろう。

「せめて2千万くらいは貯めないといけないなあ…」

《人間も人間で大変なんだな、サマナーよ》

COMPからアズミの声が聞こえてくる、小さい声なのと辺りの喧騒で周りには気づかれてない。

「まったくだね。色々やこしいよ世の中は」

《はっ！ そこから更にややこしい世界に飛び込んでるんだからサマナーも酔狂だな》

「あはは…」

《ですが、そのお陰で我が主にお会いできましたから。出会いは色々ありましたけど》

メルコムも随分と丸くなったというかなんと言っか。

始めてであった頃の面影がまったく無いのが凄いな。勿論僕としてはこっちの方が好みなので気にしないけど。

しかし仲魔はあれ以降まったくいいほど増えやしな…才能が無いのかもしれないあ。

最近が悪魔が出てきたら見敵必殺なのも仲魔が出来ない一因かも知れない。

《あんまり増えなくてもいいよ。サマナーさんには私がついてるか

らねっ
》

「そう、だね。ありがとうピクシー」

《
》

「それにしても…」

先ほどから誰かに付けられているようだ。

あいにくと僕は気配で誰かがわかる、なんていう超人じゃないので百太郎が役に立っているだけなのだが。

街中なので、誰がつけているかは流石にわからないけど、泉さん達ではないことだけはわかる。

彼女なら多分直ぐに回り込んでくることだろう。何かした覚えもないし、昨日異界封じの手伝いをしたのだから、いまさらコソコソとつける訳が無い。

身なりも普通でお金を持っているようにも見えないし、特別顔がいわけでもない…寧ろあまり良くないだろう。前世でもそんな感じだし少しダメージがあるな。

となると、可能性として出てくるのは前回の不良たちんだけど…イジメで其処までするんだろうか？

もしイジメの延長上だと思っているならそろそろ痛い目に合わせたほうがいいのかも、いやそうなると面倒が増える。

はあ、それにしても面倒だな…撒いた方が楽かもしれない。

《サマナーさん。いい加減に殺しちゃえば？ 流石にやりすぎだと思っし》

《ピクシーさんに賛成ですわあ。邪魔するんですから仕方ないですわよねえ？》

殺すか、それが簡単なのは一番わかってるんだけど…別に人殺しが怖いわけじゃない、悪魔を散々殺してきて怖い云々なんてないしね。ただ、日本はそういうのが面倒なんだよ。一人の証拠消すだけで何百何千万も必要になるし非効率的だ。

さらに、泉さん達に目を付けられる可能背が在るのが痛い。

やれやれ、世間は面倒くさい事ばかりだな。

んー、どうしようか…

「別に悩む必要は無いな、助ける必要も無ければ彼らがどうなるかと知った事じゃない」

《ん？ 無視して異界に行くの？》

「そうだね、彼がそこで死のうと知った事じゃないさ。僕はつげら

れていた、つまり彼らが居たなんて知らなかった。ってね」

《おー。流石ご主人様です》

はつきり言ってしまうえば僕の考えは人間にとっては異端だろう。でも、多くの人間はえてして似たような事を考ええると思う。

正直、他の国の誰が死んだ、殺されたと言われてピンと来る人間の方が少数だ。それに義憤を燃やし立ち上がるものの方は更に少数だろう。

勿論僕は他の人がどうなるのが知った事ではない。僕は僕の仲魔だけ無事なら他は容赦なく切り捨てられる。

別に僕は聖人でも善人でもないからなんと言われても気にしない。更に悪意を向けてくる相手にまで善意で相手をするような主人公でもない。

それに彼らも危険に合間見えれば、普通の人間なら本能的恐怖で逃げるだろう、其処を見誤って死ぬのは彼ら自身が悪いだけだ。

「今日もいつもの異界でマグネタイトなどを稼ごう。今はまず経験とお金が必要だし」

《一心不乱のマグネタイト狩りだねっ　　一番槍は任せろ》

《おいおい、ピクシーよ。それはオレのセリフだったっ》

「はは、期待してるよ二人とも」

《アメリカもご主人様の為に狩るのです。狩るのですよ》

《我が主のお役に立てるなら、この力全力で振るいませう》

《うふふ サマナー様のお望みのままに、ですわあ》

仲魔との会話はとても楽しい。色々ささくれ立つ心が穏やかになっ
ていくのがわかる。

彼女達がいるから僕はデビルサマナーをやっつけられるんだな、と
感じられる。

他の仲魔は暫くは要らないかな、僕達はこれで理想のパーティにな
っていると思えるから。

よし、それじゃあ今日も頑張ろうか。出来ればビフロンスにはあま
り会いたくないなあ…

……

……

…

異界に到着した。

後は入るだけなんだけど、まだ気配がある、というか近づいてきた。やれやれ…：人気が少なくなったらこれか。

「ひひっ。自分から態々人気がなくなる場所に来るとはなあ、手間が省けたぜ」

「よお佐藤。ご機嫌うるわしゅうってかつ！ あはははははっ」

「前はよくもスカした真似してくれたわねえ。ここなら誰にもばれないし、アンタも逃げられないわよお？」

学校で僕を囲んでたあの3人だった。やっぱりとは思ってたけど、いじめと言うのは根が深いというかなんと言うか。

彼らの言う通り、ここなら誰も見ていないし。軽く痛めつけるのもいいかもしれないな。

正直僕も少し苛立って来ている、足腰立たなくなるくらいまでなら許されるだろう。ついでに脅しておけば二度とこんな馬鹿なちょっかいもしないだろうし。

「おいおい、スマした顔しやがってよお？ けけっ！ 今からその顔が恐怖に歪むのが楽しみだなあっ！」

「ほらほらっ、さっさと見せてあげなさいよおっ！」

「？」

何かを持っている…まさか武器でも持っているのだろうか。あの話し方からして鉄パイプやそんな物じゃない事は確かだろう。

銃は流石に持ってないだろうけど…今の世の中何があるかわからない。もし万が一銃を向けたらハーモナイザーを起動して速攻責めるべきだな。

不良のリーダー格が手を懐に伸ばす。右手を後ろに回しカードから拳銃を取り出しておく。

しかし、男が取り出したのは銃でも武器でも無く、一台のモバイルだった。

…モバイル！？ まさか…

「それは…」

「へへっ！ 見せてやるぜ、俺の力をおおっ！」

あれはまさか、悪魔召喚プログラム。

まずいつ…こんな所で悪魔を呼び出されたら…ちい、余裕を出して暇は無いか。銃を用意しつつ僕もスマートフォンを操作する。

いつでも仲魔を呼び出せるようにしておく。

「こいつ！ 俺の力あああああつー！！」

「くっ！え？」

『ぎゃあああああつー！』

『じゅる...る...』

「ひやははははっ！！ これが俺の力！ 俺の悪魔だつ！ 脅えろ泣き叫べっ！！ 許しなんかしないけどなあつー！」

..... なんとはいいだろうか。

不良が持っていたのは間違いなく悪魔召喚プログラム。あのモバイルがCOMPか...

あの様子ではハーモナイザーのことは知らないのかもしれないなあ...

寧ろ...

「スライム...ゴースト...」

「けけっ！ 見るよっ！ あいつの顔っ！ 引きつってちががるぜっ！ さっさとやっちまえよっ！」

「まあまあ、待てよ。少しはアイツが脅えて泣き叫ぶのを見てからのほうがいいだろ?」

たしかに驚いてはいる。

彼がデビルサマナー云々ではなくて、どうやって外道と悪霊を仲魔にできたんだろうなあ、と言う所だ。

ついでにアナライズしてみたんだけど彼はレベル1らしい。元々入っていたのだろうか? ピクシーのように自分から仲魔になりに来たにしては正常な判断はしてなさそうだし。

「どうよ? これは現実だぜ? お前が見る悪夢のなあっ! いけっ!」

『じゅるる...』

とりあえず。

「邪魔」

流石に今更ゴーストやスライムごときに負ける僕ではない。この程度ならハーモナイザー無しでも倒せる。

パン、パンと連続で銃を撃つ、この反動にも慣れてきた。今では軽

い反動がないと銃を撃った気にならない。

寸分変わらず銃弾はスライムとゴーストを貫いていく。対霊体用の銀の銃弾だ。威力自体は上がらないけどダメージは当たるようになるのが利点だ。

一瞬で消滅していく悪魔達。恐らくCOMPに戻ったんだろう。死亡を回復するのはCOMPでも時間がかかる。リカームが欲しいな僕も。

「あ……え？ 銃……」

「ひっ…ひい?!?」

目の前の現実が信じられずに立ちすくむ不良と腰が抜けたらしく動けなくなっている二人。

まあ、目の前で悪魔とはいえ銃で殺されたらこつなるだろうなあ。

僕はゆっくりと歩み寄る。勿論銃は構えたままだ。下手な真似をしたら直ぐに撃つ気である。

あのCOMPは取り上げた方がいいだろう。

「う、嘘だっ…嘘だっ!?! うそだあ!?! 悪魔だぞっ! なんてお前なんかにつ!?!?」

「悪魔だろつとなんだろつと、只弱かったただけだろつ？ さて…動かないで貰おうか？ 一步でもへんな真似をしたら撃ち殺す」

「あ…あひ…こ、殺す気かよお！？ お、お前本気でっ？！」

「たたた…たすっ…たすけて…たすけてえ…」

「殺される可能性も考えないで来たのかい？ あまりにも無謀だ。僕を殺そうとしたんだろつ？ なら逆に殺される事も考えるべきじゃないのか？」

精神的にまだ子供なんだろつ。自分がやっていた事がどれだけの事を理解していない。

態々殺すのが無駄に思えてきたな…リリムならデフォルトの能力で操って記憶を消せないだろつか。

「召喚。リリム」

『あらん？ 私ですのサマナー様あ？』

「な…な……………お、お前…も？」

『うふふ。流石に貴方とサマナー様を比べないで貰いたいですわねえ。少しばかり不愉快ですの』

「リリム。彼らの記憶を操作とかできるかな？」

『淫夢を見せておかしくするならできますわあ。多分精神的におかしくなるかもしれないけど、記憶は消せますわよお』

「た…たすけ…違うんだっ！俺はこいつに連れてこられてっ！」

「そ、そうなのっ！私達は違うのよっ！ゆるしてえっ！」

見苦しいといつかなんといつか。この後異界で狩りだからさっさと終わらせよう。

「ちくしょう…ちくしょう…ちくしょう…俺が、俺がっ！俺が貴様なんかにいっ！」

駆け出して逃げていこうとする彼。逃がすわけには行かない。デビルサマナーである以上、ここで逃がせばろくな事にならないのはわかっている。

「リリム、足止めをっ！」

『はあい おいたはだめよお坊や？』

「うあ…うわああああああああっ！？」

不良の目の前に現れて軽く顔面を殴りつけるリリム。

女性タイプで力も無いとは言え、やはり悪魔、面白いくらいに簡単に吹き飛んで僕の場所まで戻ってくる。

転がっているCOMPを奪いとり、軽く蹴飛ばして一纏めにした。

「がああああつ!? 返せつ! 俺のつ!? 俺の力ああああつ!?」

「断るよ、これは君には過ぎた玩具だ。リリム後は任せるよ」

『はあいサマナー様あ。うふふ。丁度男女ですし、快楽に染まる夢を見せてあげますわあ。お互いに望んで望んで望んで、求めて墮ちて、染まってくさいな。うふふふふ』

「ああああつ!? いやっ!? いやあああああつ!?」

もだえ始める不良たち。目が白眼になってビクビクと震えだしている。

どんな夢を見ているのか…あ、淫夢か。少しだけ興味があるな…僕も男だし。

『くすくす。サマナー様には夢より、実体験で私を食べてもらいますからご安心くださいな』

《ちよっ!? だめだからねっ!? サマナーさんっ! えっちな事禁止っ! 禁止だからっ!》

「あはは…変わらないなあ。本当に」

すっかり気絶した彼らを尻目に僕は異界に向かう事にした。

これで彼らとの因縁も終わりだろう。色々驚かされることがあったけど、大したことがなくてよかったよ。

このCOMPも後で調べさせてもらおうか。使えるなら誰かに売って言う手もあるしね。

………

………

…

COMPを獲得した！ しかしゴーストとスライムは消滅していた！ ハーモナイザーとエネミーソナーがインストールされていた！！

- 不良視点?? -

「あ…う…」

俺は…何を…？

「あははははっ

あひゃひゃひゃひゃ
」

「うひひっ、うひひひっ
りだめだったね」

しくじった、しくじった

やっぱ

な、何だお前ら…なんなんだよお！？

「あはははっ！ さっきまで呼び出してたじゃないかっ！ サマナ
ーちゃんよお」

「かよわいかよわいサマナーさん。一瞬で負けたサマナーさん。か
わいそかわいそ。うひひひひ」

呼び出してた…？ 俺が、お前らを？

スライムにゴーストかっ！？ ちくしょっ！ お前らが弱すぎた

せいでっ!!

「あははははっ! 自分の力不足を私のせいにしないでよねえでも、其処がすきっ! 可愛い可愛い人間ちゃんっ」

「認められない、自分が一番いい、自分が可愛い、全てがほしい、他は全員ゴミクズ うひひひっ 素敵だね、素敵だよお 感じて感じてイっちゃいそうなくらいにい」

なんだよ…お前ら…なんなんだよっ!?

「さてさてっ! 一回目の絶望おめでとっ! 君はこうして目覚める事ができたねっ! 覚醒だっ 覚醒だっ! あはははははっ!

「こんぐらつちゅえーしょーんっ ゴミクズからクズに大進化っ 見つけた価値があつたよねっ! うひひひっ!

なんなんだよお前らはよおっ!?

「なんなんだ? なんなんだ? なんなんだ? なんなんだ? なんなんだ? 悪魔、悪魔だよ? 悪魔悪魔っ! そう悪魔! デビルっ! 人に仇なす者っ!

「恨み、憎み、犯し、殺し、堕ちて、砕けて、憎んで憎んで憎んでっ それは私達 悪魔ああひゃひゃひゃひゃ!」

「我が名は狂神テスカトリポカ」

「あたしは魔王ツイツイミトル」

「生贄を探しにきた者」

「世界を犯しにきた者」

「君は、選ばれたっ 私達に選ばれたっ！ あひゃはっ その負の想い、渴望、欲望、憎悪っ！ それが欲しかったの」

ま…おっ…？ か…み…

「さあしようっ！　すぐしようっ！　合体合体、さいきょーの3体合体っ！」

「人間、人間、人間の3体合体っ！　そして選ばれたのは君っ！　私達の加護を得た魔人になるべき人間よっ　うひひひっ」

お…おい！？　ケンジ…？　マドカツ！？

なんで、裸なんだよ…なんで笑ってるんだよ…？　おいっ！？　なあ！？　話聞きやがれよおっ！？

「無理無理無理無理、もう無理だっ　狂神の力で、狂っちゃった

「 彼らは只のニクノカタマリッ　オイシイオイシイ君のご飯っ

「 気持ちいいよ？　たのしいよ？　おいしいよ？　そしてこの子達は君の肉体になってとけあって、犯しあって、混ざり合っのっ　」

「 やめるよ…なあ！？　やめてくれよっ！　ダチなんだよっ！　そいつらはそれでも俺のっ！！　」

「 「復讐しないの？」　」

復……讐……？

「 COMP取られちゃった取られちゃった　あはははははっ！　君が弱いから弱すぎるから負けちゃった！　無残にボコボコにっ！　」

「 悔しいよう、悔しいよう、悔しいよう　復讐してやる、してやるしてやるやややるうるるあやゆゆあ　力が手に入るよっ　」

「 大好きな友達と一つにっ　カも手に入れて、もーっっとハッピ―だあ　君の望む世界が来るよ　」

「 あひゃひゃひゃひゃ　そうそうそうそうそうそうそうそうそう　そうそうそう　力が、力が手に入る！　私達も手伝っよ　」

「 復讐を遂げた後は世界をこの手にっ　」

「自分だけの世界も作れるっ　欲望のままに、欲しいものは全部
っ！　女は犯し放題、欲しいものは想うがままっ」

「傲慢　強欲　飽食　嫉妬　怠惰　姦淫　憤怒　そ
れが貴方の力の元　さあさあさあさあ。合体して強くなるっよお
」

強く…なる…復讐する。

佐藤のやろっ…悪魔をつれてやがった…俺の悪魔より強くて、美人
で…ちくしょう…なんでだ。俺のほうが凄いのに。

ためえごときに、こんなはずねえんだ。俺は強いんだ、最強なんだ、
世界を統べるんだっ！！

合体…してやらああああっ！！

「選んだな？」

「選んだね？」

選んだよ、これが…俺の道だ。俺は強くなるっ！　そして復讐を遂
げて！　世界を全部飲み込んでやるっ！

この世界は…俺のものだっ！！

Continue17 〈澁む悪意と殺意を糧に産声を上げる大罪〉（後書き）

という訳で不良君、一時撤退です。

でも合体でパワーアップフラグが立ったようですね、無駄に覚醒してますし。

まあ、暫くは出てくる予定はありません。地味に世界崩壊フラグが立ってますがどうなる事やら、ですね。

でもそれが女神転生っぽいところですよ。

Continue 18 く無意識の中の思惑と誘導く(前書き)

という訳で、前回の答え合わせ？ のようなものです。

大樹君の考えはほぼ正解と言った所ですね。

やはり所詮幕間なので短めです。

「……………おかしい」

悪魔を狩りながら僕は先ほどの事について考えていた。

COMPを手に入れたのは良かったけど、あれでよかったのだろうか。

他に方法は無かったのか？ 気絶させてから文珠を使ったの記憶操作をするべきじゃなかったんだろうか。

いやいや、それよりも僕はなぜ『COMPの中の悪魔がない事に気にしなかった』??

『サマナーさん？ どうしたの？』

「いや…」

怒っていたから？ 違う。あの時はそれ以上に冷静だった。

急いでいたから？ 違う。異界には用はあるけどそれでミスするほど浮かれてもいない。

文珠の出し渋り？ 違う。使う所は弁えている。

- 何故 - 僕は - 文珠を使わなかった？ -

何故あそこで僕はリリムに頼った？ 普通に気絶させるだけでよかったはずだ。 何で呼び出したんだ？ 勝負はもう決まっていた。

COMPだって普通の人間にしてみれば切り札以上の物だ、文珠もマジックカードも普段見せない僕が…何故？

『そういえばさっきのサマナーさん、らしくなかったね。 やっぱり少しイラついてたとか？』

「僕らしく…ない？」

『そういや、そうだな。 まあ機嫌が悪い時つてのは、悪魔でも人間でも時々あるもんだ。 そんな時に力を振るいたくなるってのもあるけどな』

『私としては、そんなサマナー様も好きですわあ』

「ただ、機嫌が悪かっただけ…？」

「ご主人様？ ご主人様？」

「ん、どうしたのアメリカ」

「さっきからご主人様を覆ってた嫌な色のふわふわが消えてるです。 やっぱりご主人様はそっこのほうが素敵なのです」

嫌な色の…ふわふわ…？

「アメリカ。その変なのはいつから僕を？」

「んーと、んーと。あの不良達に会ったときくらいからなのです。そして悪魔達を倒した時にふわふわわわってなつてたのです。アメリカはご主人様に言おうとしたのですが、何故か私の声が届きませんでしたよ」

『どういう、事なのでしょう？ 私には見えませんでした』

『右に同じくですわあ？』

『私もだけど、そんなのあったの？ ってサマナーさん？ そっちは帰る道だよっ？』

僕はアメリカの言葉を聞いて直ぐに異界を出る事にした。

幸い少しの時間しか潜っていないので、そのまま数分もしないうちに異界を出る。

僕の子感が、想像が正しければ…外にはっ！！

「は…はは…………やられたっ！！」

『えーと…サマナーさん？』

『餓鬼どもがいねえな。気がついて逃げたのか？』

『それはありませんわあ？ 念入りに夢を見させてあげましたもの
お。そんな数時間もしない内に眼が覚めたら淫魔失格ですわあ』

「成程、そういう事か。僕とした事が…浅はか過ぎたっ」

「ご主人様…？」

つまりネタはこうだ。

彼らかどうかは知らないけれど僕らは誰かの掌で弄ばれていたと言
う事になる。

今回の事に意味はわからない。でも誰かにとっては重要な事だった
のだろう、それだけはわかる。

その【何者か】は、彼を僕に倒して欲しかった。完膚なきまでに倒
してプライドなどを折らせたかった。

更には僕の力を彼に見せ付けなければいけなかった。

そして最後にその記憶を操作して、消去して欲しくなかったという
事だ。

そういう訳だ。COMPに悪魔が入っていないという事はそういう
事か。元々その悪魔なんてCOMPに【入っていないかった】という

事だ。

あの悪魔達は何らかの理由があつて僕をダシにつかい、彼を貶めさせたということだ。

今回の事はあのゴーストとスライムの判断、もしくはそれを操っている誰かの策略か何かだろう。

ご丁寧に僕の心理まで誘導させて、僕に取らせたい方法へと誘導させた。

全ては僕の浅はかな考えすぎかもしれない。でも……そう。この【聡明】の文珠を使って出た答えだ。ほぼ、間違いないだろう。

あの不良を絶望に落とす意味があつた、単にイジメや復讐のタネにするにはお粗末過ぎる。

ならば必要だつた事なはず。

「ピクシー、アズミ、メルコム、リリム辺りの警戒。アメリカは僕の傍で警護を頼む。僕はここで何があつたか調べてみる」

『う、うん。わかったよサマナーさん』

皆がそれぞれ辺りを警戒してくれている。

さて……調べる前にもう少し考えてみよう……人間の心理を一瞬であそこまで歪めて移動させる事ができるのか。

そんなのは洗脳と一緒にだ。しかし今の僕は冷静だし、意識もはつきりしている。

万が一の為に【洗脳解除】の文珠も使った。今日は大判振る舞いだと思うな…

「アメリカ。僕がおかしかった時間は彼と出会った時から、異界に入るまでかい？」

「そうです。後その間は何故かご主人様にお話できなかったのです。何か強い力で抑えられてるみたい、そんな感じがしたので」

アメリカは造魔だ。悪魔や人間と違って、精神操作などの能力は通用しない。

つまり、アメリカは僕がおかしくなっていたのを初めから気づいていた。しかし僕に伝えようとする強制的に会話が出来なくなった。当たり前…だな。今回の事は人間じゃなくて悪魔の仕業…それも僕達に気づかれずにここまでやり遂げたという事は僕らでは勝つ事もできない悪魔の可能性がある。

何でこんなまどろっこしい事をしたのかはわからないが。これがその悪魔達にとって必要不可欠だったことだけは理解できる。

文珠やマジックカードを使わせなかったのは、多分悪魔がそれを知らないせいだろう。

もし、それを知っていたら僕はどうなっていたか……

「……よし……」

文珠に込める文字は【記憶操作】イメージ的にはサイコメトリーを考えている。

この場所で何が起きたか、それだけでも知っておかなくては後々危険な気がする。

さあ……何が見えるっ!!

おぼろげに場面が脳内に映し出される、其処に見えるのは3人の姿……そして、その後どうなったんだ。

? 何かが僕の目の前に……な、なんだアレはっ!?

《うひひひひひひひひひひひ　だあめ。だあめだよお　誰が見
てるのかなあ　あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ　》

「うっ、うわあああああっ!?!」

「ご主人様っ!?! どうしたのですかっ!?!」

『何今のっ!?! サマナーさんっ、大丈夫っ!?!』

なんだ今のは…何か凄く恐ろしいものがいたのに…『理解できない』
何かがいたはずなのに、思いだせない。

残留思念？ 防衛プロテクト？ わからない…ただ…あれは『理解
しちやいけない』何かだ。

何が起きたかすら覗き見ることができないなんて…文珠は効果を発
動している。見ようと思えば見えるんだろうけど、多分その前に精
神が侵される。

荒い息をつき、僕はその場でうずくまる。

『ねえ、大丈夫？ 大丈夫サマナーさんっ』

「だ、大丈夫だよ…でも、少しこのままで…」

暫くたって落ち着くことが出来た。情けないけど仕方ない。そもそ
も僕は怖いのは苦手だ。ここまで凶太く慣れただけでも褒めてもら
いたいものだと思って欲しい。

さて…今回の事は完全に僕の失態だ。恐らく僕は巻き込まれただけ
だろう。

今回の事で起こる被害は、僕に向けてのものじゃない事がわかる。もしかしたら僕どころか世界中の人間に迷惑かもしれないけどね…さし当たって念入りに警戒する必要は無いだろう。って、それじゃよくあるフラグみたいだから、やはり警戒だけはしておくべきか。犯人が何をしたいのかはさっぱりわからない。こうして簡単にCOPも手に入れた以上、デビルサマナー関連の事じゃな事は確かだ。要らなくなった僕を殺さなかったのも、恐らくはもう、回でもいいと感じたからだろう。

さっきのサイコメトリーで見た、ナニカ？ は簡単に僕を殺せるだけの力があった。それは確信できる。

つまり用済みの駒には、もう用はないと言う事だ。

「貧乏くじを引かされたな…迷惑だよ本当に…」

『悪魔の仕業…ね。考えりやおかしい所丸出したったからな。思考誘導されたって思えばある程度は納得できる』

『でも、そうなりますと。其処までできるのは魔王や邪神となりますね…正直私達でどうこうできる相手では…』

『うええ…そんなのは他の場所で勝手にやって欲しいよね。サマナーさんを巻き込まないでよっ！』

『運が悪かった。つまりサマナーの言ってる事の通りだな。ったく、

サマナーについてると上限のねえやつばかりが出てくるぜ。おもしれえ」

『あんまり面白くないですわあ。つまり私もサマナー様もあの時操られていたのでしょうか？ 私ならともかくサマナー様までなんてえ』

「何気にリリムのご主人様への信頼度が高いです。アメリカ吃驚です」

『何気に傷つきますわあ。アメリカさんは私の事なんだと思つてらっしゃるのお？』

「えっちな淫魔です」

『正解ですわあ』

『漫才は他所でやれや』

これから、どうするかが問題だなあ。

今回の事は運が悪かったと思って無視するのが一番なのかもしれないけど、こうして迷惑を被った以上、これから先も何かがあると思つたほうがいいだろう。

文珠があれば勝てる。なんていうレベルの悪魔じゃない事だけは確かだ。どうにかするにしてもレベル上げが急務かもしれないなあ…

せめて横島が呼び出せるくらいにレベルを上げないと、向かった所で殺されるだけだろう。いや、60レベルあったとしても勝てるか

どうか。

『サマナーさん。元気出してね、私がついてるから。一緒に頑張ろうよ？ ねっ』

ピクシーが僕の頬に顔を擦り付けながら、応援してくれる。

そうだね…僕一人で戦うんじゃないだし、僕が弱くても仲魔が強ければいけるかもしれない。

そもそも戦わないかもしれない、今の内から悩んでもどうしようもないって事は確かだ。

なら、今を頑張るしかないか。

「ありがとうピクシー。いつも本当に」

『ん 私はサマナーさんの仲魔だから当然だよっ あはっ、サマナーさんのほっぺやわらかーい』

『シユールな光景だな』

『んなっ!?! 幻想的っていつてよねっ!?!』

『サマナーの顔がもう少し男前ならなあ…そう言ってももいいかもだけだよ』

「顔がよくないのは自覚してるよ…うん。へこむからやめてくれアズミ」

僕はお約束のように顔がいい訳じゃないんだよ。寧ろ普通か、普通以下だ。

あれ…なんか涙が出てくるよ。ちくしょう。

「顔が普通でもご主人様は素敵なのですっ！」

『アメリカちゃんそれは止めですわぁ…』

『あつ！？ 我が主が塩の柱にっ！？ だ、だれか！ デイアを！
？ 衛生兵っ、衛生兵っ！！ って私も使えました！！』

喧々諤々の末に、まあ、僕は異界に戻る事にした。

このやるせない怒りは悪魔達にぶつけてやるっ…うん、男性型の悪魔の友人が欲しい今日この頃だ…

異界を探索した！ 沢山の悪魔がいたが、微妙に切れ気味なお陰で寧ろ蹂躪した！！

ユニーク悪魔と出会い、パーティが半壊した！！ 4時間で撤退す

る事になった！！

魔石をいくつか手に入れた！ 数が多いので一纏めにした！

ジャックフロストカード1個 カタキラウワカード1個 ナーガカードを1個

チャクラチップを2個手に入れた！

魔貨3000を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）4500を手に入れた！

注）前回のアイテムはほぼ売却し、80万円になった。ゾンビカードは合成でエアロスカードになった！

大樹はレベルが2上がった！ 成長限界に到達した！ これ以降レベルは上がらないっ！

マグネタイトを消費して仲魔のレベルが上がった！！

「名前」：大樹 「性別」：男性 「覚醒段階」：？（異能者）

「現在LV」：20 「属性」：N・N

「所持金など」 MAG：2800 ￥：1485200
魔貨：7300

「ステータス」

HP：101

MP：64

「通常時」

力：5 知：4 魔：1 体：5 速：1 1 運：3

「ペルソナ降魔時・トビカトウ」

力：7 知：6 魔：3 体：7 速：1 4 運：4

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： x 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・文珠の素質？ ・マジックカード？ ・食いしばり

知略

・ペルソナ・患者 ・銃の素質？ ・命運？

「所持ペルソナ」

患者・トビカトウLv15

患者・ナナヤシキLv35 x

英雄・ヨコシマタダオLv63 x

「所持技能」

・シユア・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 高命中率

・レッグ・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 中確率で速

を下げる。

・アーム・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 中確率で力

を下げる。武器や防具を持っている場合落とす確率が発生。

・デスペラード 敵全体に物属性中ダメージ 弾を一回で内蔵

している分、全部消費。要・二丁拳銃。現在使用不可能

「装備」：装備一式は常にカードに収納済み

剣：プラズマソード

銃：CAWS 弾数：20

弾：スラッグ弾x40

頭：ドラゴンヘルム

体：ロックベスト 火：銃：
腕：G-ラダース 呪殺無効
足：ジェットブーツ 速+1

「ソフト」

- ・デビルアナライズ
- ・改造ハーモナイザー
- ・HPリカバIMI
- ・百太郎

- ・ネオ・クリア
- ・スキヤニング・ゼロ
- ・ハニー・ビー
- ・キャプスロック
- ・Mr. サプライズ
- ・ナイチンゲラー
- ・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：200 判断力強化 恐怖心

軽減

力：+10 知：+8 魔：+8 体：+10 速：+10
運：+8

「アイテム」

・文珠×20 生成量：一日60個 所持限界量：30個

文珠【癒】×5 文珠【防】×5 文珠【火】×1

文珠【浄】×1

文珠【風】×1 文珠【雷】×1 文珠【呪】×2

文珠【殺】×2

文珠【脱】×2 文珠【出】×2 文珠【蘇】×1

文珠【探】×1

文珠【索】×1

・マジックカード59枚 生成量：一日63枚

魔石袋『10個』収納 魔石袋『10個』収納

魔石袋『10個』収納

魔石袋『10個』収納

魔石収納

宝玉収納

宝玉収納

宝玉収納

宝玉収納

ソーマ収納

アメジスト収納

チャクラチップ収納

アメジスト収納

チャクラチップ収納

アーシーズカード収納

エンジェルカード収納

コッパテングカード収納

カハクカード収納

アークエンジェルカード収納

アークエンジェルカード

収納

アチエリカード収納

オンモラキカード収納

ハーピーカード収納

ビフロンスカード収納

ナーガカード収納

カタキラウワカード収納

エアロスカード収納

ジャックフロストカード

収納

スパルナカード収納

ゴーストカード収納

・マジックカード【消費】

ディアカード

マハ・ラギオンカード

ディアカード

マハ・ジオンガカード

ディアカード

マハンマカード

タル・ンダカード

マハ・ラギオンカード

食いしばり：HPが0になっても一度だけ『HP1』で復活する。
知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点
銃の素質？：銃の技能を覚えるようになる。命中に補正
命運？：命を繋ぐ幸運。レベル回数分致死ダメージを無効化する。

「名前」：ピクシー 「種族」：妖精
「現在LV」：15 「属性」：N-N 「召喚MAG」：
130

「LvUpに必要なMAG」：2950MAG

「ステータス」

HP：62 MP：114

力：3 知：6 魔：14 体：3 速：6 運：5

「相性」

剣：物：技：火：氷：電：× 風：

魔：心：禁：聖：呪：× 状：万：

「所持スキル」

・信頼

・本体

・恋慕

「スキル」

・ジオンガ？ 対象に電属性中ダメージ。

・マハ・ジオンガ？ 全体に電属性中ダメージ。

・パトラ？ 対象の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖状態を

回復。

・ディアラマ？ 対象のHP中回復。

・メ・ディア？ 全体のHP小回復。

・妖精のおせっかい。 対象を『至福』状態にする。

・ジオダイン？ 対象に電属性大ダメージ。 一日2回使用可能

- 進化の兆しが見られる…???

ジオダイン？を習得

スキル枠現界解除

信頼：サマナーを信頼している。低確率でサマナーを攻撃からかばう。

本体：本体である。悪魔合体をしても姿が変わりにくい。ステータスが基本より高い。

恋慕：サマナーに恋をしている。確実に命令を聞き、中確率でサマナーを攻撃からかばう。

「名前」：メルコム 「種族」：堕天使

「現在LV」：15 「属性」：N-C 「召喚MAG」：

153

「LVUpに必要なMAG」：6500MAG

「ステータス」

HP：92 MP：88

力：5 知：10 魔：12 体：7 速：7 運：5

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・強服従

・Mつ気

・飛翔

・連続攻撃・弱

「スキル」 スキル枠限界

・マハンマ？ 敵全体を聖なる力で即死させる。

・ディア？ 対象のHP小回復。

・マハ・ラギオン？ 全体に火属性中ダメージ。

・タル・ンダ？ 全体の攻撃力を1段階減少させる。

強服従：サマナーに強く服従している。絶対に命令に背かず、中確率でサマナーを攻撃からかばう。

飛翔：飛行が可能。自分と同程度の重さなら持ち運びができる。

Mつ気：攻撃を受けても怯まなくなる、相性によってはMPが回復する。

連続攻撃・弱：低確率で、連続で攻撃する。

「名前」：アズミ 「種族」：妖鬼

「現在LV」：15 「属性」：N・C 「召喚MAG」：

203

「LVUpに必要なMAG」：5000MAG

「ステータス」

HP：148 MP：78

力：15 知：8 魔：8 体：10 速：12 運：8

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・豪腕

・連続攻撃

・格闘ブースタ

「スキル」

・暴れまくり

敵全体に1〜4回の剣属性、小威力ランダム

攻撃

- ・スクカジヤ？ 味方全体の命中が1段階上昇。
- ・忠義の一撃 敵単体に万能属性中ダメージ。サマナーとの信頼度で補正
- ・雄叫び 敵全体の攻撃力を2段階下げる。

豪腕：物理ダメージに1段階の補正。
連続攻撃：中確率で、連続で攻撃する。

「名前」：リリム 「種族」：夜魔
「現在LV」：15 「属性」：N・C 「召喚MAG」：
162
「LVUpに必要なMAG」：1990MAG

「ステータス」

HP：84 MP：121
力：7 知：11 魔：16 体：5 速：9 運：6

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心：× 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

- ・魅了
- ・魅了ブースタ
- ・睡眠攻撃

「スキル」

- ・ジオンガ？

対象に電属性中ダメージ。

・マハ・ジオンガ？ 全体に電属性小ダメージ。
・魅了突き 対象に物属性小ダメージ。 中確率で魅了を付与。

・マリンカリン 対象を中確率で魅了。
・淫欲の夢 全体を低確率で魅了。人間には高確率で魅了。

魅了：一定確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない。
魅了ブースタ：魅了の成功値を上昇させる。
睡眠攻撃：物理攻撃時、低確率で睡眠付与。

0
「名前」：アメリカ 「種族」：完全造魔
「現在LV」：12 「属性」：N-N 「召喚MAG」：

「LvUpに必要なMAG」：2500MAG

「ステータス」

HP：55 MP：90
力：2 知：7 魔：10 体：2 速：3 運：1

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心：x 禁： 聖：x 呪： 状：x 万：

「所持スキル」

- ・虚心
- ・純粹
- ・忠誠
- ・魔界魔法の素質？

「スキル」 スキル枠20個 20個以上は入れ替えになる。

・ザンマ? 単体に風属性中ダメージ

・マハ・ブフ? 敵全体に氷属性小ダメージ

・タル・カジャ? 味方全体の物理威力が1段階上昇。

・スク・カジャ? 味方全体の命が1段階上昇。

・デ・カジャ? 敵全体の強化魔法を解除する。

・デク・ンダ? 味方全体の低下魔法を解除する

・ポズムディ 単体の毒を治療する。

・ムド? 敵単体を呪殺する。

・グレイブ 一定時間ゾンビ、またはゴーストを召喚して使役する。

・ネクロマ 死体を一定時間アンデッドとして使役する。H

Pは2倍だがステータスは2段階ランクダウンする。

虚心：虚ろな心を持っている。命令されれば動くがそれ以外だと何もしない。主人には忠実になる。

純粹：何も染まっていない状態、これからによって変わっていく。

忠誠：サマナーを敬愛し、忠誠を誓っている。高確率でサマナーと同時攻撃、高確率でサマナーをかばう。

魔界魔法の素質?：魔法の素質を持つ。レベルアップで魔法を覚えるようになる。

Continue 18 〈無意識の中の思惑と誘導〉(後書き)

と、思考誘導されていた、が答えでした。

簡易洗脳とかなら魔王や邪神、狂神のお手の物です。

レベルも違いすぎるので抵抗も何も出来ず、ですね。敵に回れば直ぐ即死でしょう(汗)

さて、大樹君が成長限界になりました。暫くはこのままの予定です。後は仲魔の合体時期、ですね。

どんな悪魔がいいか、わからないのでよかつたら合体案を下さいね。

後：ステータス表と乗せておこうと思います。出来れば常時更新…
難しいなあ…

Continue19 〈錯綜する思想と欲望と絶望と絶望〉（前書き）

色々な感想を頂いています。

本当にありがたい事です（涙

稚拙な文章で恥ずかしいですが、頑張りますね。

物語は少しずつ動き、軋み、ひび割れてきています、これからどうなるやらです。

- 2月某日・不良達撃退から数日後 -

「成程…それですか」

「学校にも来てないみたいだねえ。何があつたんだか？」

「碌でもないことは確かだね。で、佐藤君他に情報は？」

「いや。僕が知ってるのは其処までだ」

前回の事を泉さん達に伝える事にした。自分でどうにかできる範囲を大いに超えているので泣きついたとも言つ。

泉さん達の上は政府の組織なので若干以上に不安なのだけど、このままだと大変な事になるといふ【予知】の文珠の結果でそう決めた。予知が見せてくれたのは、おぼろげだったけどこのままこの件を放置しておく、世界中がとつともない事に襲われるといふ事。

異界から悪魔が湧き出して世界中に現れ始めるといふ事。

流石にこれは伝えてはいないけど、彼がデビルサマナーで、何かに操られているかもしれないという事を伝えておいた。

やはりというかなんと言うか、あの3人は学校に来ていない。

搜索依頼とかは未だに出てないらしい。流石に数日じゃ両親も探す気が起きないのか、それともそれがいつもなのか。

クラスメイト達も気にしてないようだ。不良達もないお陰で、陰湿なイジメもなく僕は大助かりだったけど。

「流石にその辺まで来ると私達じゃ処理しきれないわね…デビルサマナーの事なら政府より他の場所がいいかも知れないわ」

「他の場所と言うと…?」

「デビルサマナーにはデビルサマナー専用の組織や情報があるってことさあ たしかデビルバスターズだっけ?」

「他にもクズノハ、ヤタガラスなどが確認されておりますね。そのどちらも裏の裏と言う暗部の存在なので普通ではコンタクトできませんが」

デビルバスターズに、クズノハ、ヤタガラスか。あるかもしれないとは思っていたけど、やっぱりあったらしい。

クズノハがあると言う事はファントム・ソサエティもあるのかもしれないなあ…そのうちガイア教やメシア教が出てきそうで怖い。

それより、クズノハとコンタクトが取ればレイ・レイホウやキヨウジがいる可能性もある。彼らなら僕の数倍レベルが高いはずだし、魔王も倒した事があるだろう。

もし今回の事が高レベル悪魔の関係する事なら、彼らにうつってつけの捜査はずだ。僕のような一般人がでしゃばるものじゃない。

デビルバスターズは政府管轄のサマナーの集まりだけど、ゲームではたいした組織じゃなかったはずだ。

下手すれば目を付けられる可能性のほうが高いな…組織お抱えになると休む時間もなさそうだし。こちらはパスかな。

「デビルバスターズは同じく政府管理の組織なので、上手くすればコンタクトは取れそうですが…」

「ん、もう少し考えるよ。僕としてはクズノハやヤタガラスの方に興味があるし」

「おおっ。裏の組織に憧れるっ！ やっぱ男の子は厨二の心を忘れちゃいけないよっ！！ くっ！ 俺の右腕がつ！ 皆離れるっ！！」

「一人でやってろ」

「白い眼って何気にダメージ受けるんだけどかがみん…ほろほろ。みゆきさあーん。そのふくよかな胸で慰めておくれえええ」

「あ、あのっ？ あのあのっ！？」

「こなちゃんは元気だね」

「ありあまつてるわよね。受験も終わったし気が楽なんですよ。合否がまだだから未だに少し憂鬱だわ」

そういえばそんな時期ももう過ぎたのか、今は2月だから合格発表は3月の初め頃かな。

僕はそもそも高卒で終わるから受験なんかしてないし、何処かで働くつもりも無いので気楽なものだ。

じゃあニート？ と普通言われるかもしれないけど。悪魔を狩ってお金を稼いでるのでニートではない。断じてニートではない。

それなりにお金を稼いで楽になったらゆったりするつもりではいるけど。今のご時勢何が起きるかわからないし、保存食とか買いだめしないとだなあ。

それにしても卒業までほんとに僅かだ、これは普通に高卒の資格をもらえるかもしれない。色々面倒だったけど無駄じゃなかったと言う事か。

「高校を卒業してしまうと、こうして皆さんとお話できる時間も少なくなってしまうんですね」

「流石にねえ。このお仕事は辞められないから、時々ヘルプも頼むかもしれないけど、今みたいに簡単に呼び出すのも難しくなるでし

「ようね」

「私は普通の大学だから平気」。というか家から通うし大して変わらないね。みさきちも同じ学校だし」

「私も平気かな。って私もお仕事だったよ」

「何かあれば直ぐに飛んできますので、いつでも言ってくださいね」

「頼りにしてるわよみゆき」

「佐藤君は進学しないんだっけ？」

「ん。そうだね、別に稼ぎ口なら悪魔を狩ってお金稼げるし、今更
勉強に勤しもうとは思わないな」

「凄い発言ね…でも実力を見ればそれを出来るだけの力量があるか
らなんともいえないわ」

力量…ね。

残念だけど、僕はこれ以上は強くなれないらしい。前回の異界狩り
でどうやら僕の成長限界が来てしまったのだ。

あの後数回異界で狩りをしたけど、全然レベルが上がらなかった。

流石に少し焦ってるよ。というか僕はやっぱり普通の人間なんだな、
と再認識させられたけどね。

横島には悪いけど、もしかしたら一生呼び出す事はできないかもしれない…可能性があるといえば、もう一度死ぬか、それ以上のシヨツクが必要かだけど。

下手すれば死ぬのだからそんなバクチ、やりたくても出来るわけがない。文珠があるから安心だ、とか自分の命を軽くベツトなんて出来るわけないよ。

「僕はまあ自分が戦える異界で、それなりに稼ぐさ。1ヶ月でも籠ればその辺のサラリーマンより多く稼げるし」

「後ほかがみんなの所のバイトもあるしねえ。いいんじゃない？ 私はそついうの結構好きだよ」

「人の人生だもの、何も言うつもりは無いわ。でも無理してたら流石に止めるけど」

「無理なんかしてない。できる事をやってるだけだよ。無理な場所は初めから行かない、死にたくないし」

「至言ね」

レベル20でストップと言う事はぎりぎり凡人という枠組みだ。

ハーモナイザーがあるからレベル以上の働きも出来るし、文珠やペルソナのお陰で力量的にするとレベル30〜40はあるのかもしれない。

但し、それがなければ僕はただの雑魚だ、同じレベルの悪魔にだって簡単に鬺り殺されるだろう。

超人やヒーローじゃない。あくまでも僕は普通の人間なのだから、やれる事とやれない事はちゃんと把握している。

これからも今までのようなレベルの異界しか潜る事はないだろう。あの不良達と、悪魔が何をしようとしているか知らないけど、僕は止められそうもない。

早めにクズノハかヤタガラスとコンタクトを取って、後は全部丸投げだ。手伝いくらいなら出来そうだけど、成長見込みの無い僕だと邪魔なだけだろう。

そうになると…問題なのはアズミかな。彼女は強さを渴望してる。

最悪は、仲魔解除をしなくちゃいけないかもしれない…いつも頼りになる悪魔だけど信頼関係で成り立っている以上、これ以上繋ぎ止めるには僕が成長しなければ無理だ。

レベル20なんて、悪魔としてはまだまだ小物。彼女が目指す先は魔王などの高レベル悪魔だから、僕では扱いきれなくなる。

はあ…悩みが多すぎて禿が心配だ…【育毛】の文珠でも使おうかな。

…
…
…

-!!!? ~~~~~!!!?!?!?!

-! つ!!! !!! !?!

学校から帰ってくるはず聞こえてくるのは、お帰りの言葉の代わりの罵詈雑言。

別れる1歩手前、いやもう足を踏み入れてるのか。どうでもいいさ、好きにして欲しい。

両親を無視してさっさと自分の部屋に戻る。後は部屋に鍵を掛けて誰も入れなくすれば、いつもの通りだ。

「召喚、ピクシー」

『はあ〜い って、下でまだやってるよ。人間の親って、変なのばかりだね』

「だね。僕もそう思うよ」

『あ、サマナーさんは別だからねっ！ サマナーさんはえっと、そのっ』

「あははは。気にしてないよ、さあて。今日は異界も行かないしゲーム三昧と洒落込もうか」

『 やったねっ！ 今日はこっちのゲームやるっよっ！ あの素材欲しいんだよねっ！』

「成程ね。それじゃ早速用意しよう」

『らじゃっ』

《私もまざりたいですわあ〜》

《リリムはゲームしているんじゃないで、我が主に過剰スキンシップしたいだけなのでは…？》

《過剰だなんてえ、まだソフトですよお？》

《あれでっ！？》

《アメリカにはよくわかりませんか？？》

《いや、わからなくていいんだ。お前は染まるな》

《アズミさんがそういうなら、気にしないのです》

最近は何魔という時間のほうがとても気楽だ。

アズミの問題があるとはいえ、それでもまだ、此方の方がね。

ピクシーとこうやってゲームで遊んでいる時や、皆と談笑しているときが一番落ち着く。

狩りも狩りで、ある意味充実してるけど、精神はやっぱり普通の人間なので常に緊張してたらプツリと行きそうで怖い。

『くのっ!?!? くのくのっ! サマナーさんっタル爆弾いけるっ!』

「うん。今おくよ…これさ、悪魔にしたら何レベルなんだろうね。少なくとも僕は戦いたくない」

『40くらいじゃないのかなあ? よっしっ! 私の大剣が火を噴くよっ!?!』

縦横無尽に空を飛びまくる巨体。口から火を吐いたりとか、その巨体で攻撃とか。実際見たらやってられないね。

銃が効きそうにないし、剣なんて余程良い武器じゃないと当てた瞬間にポキリと行きそうさ。

まあ、こんな悪魔がいるわけも…いそうだなあ。凶鳥とか邪龍とかその辺りで。

でもそんな高レベルな場所行くと確実に死ぬるので行く事は無いだろう、安全第一、安全第一。

『やったねっ！ 倒したあ さーて剥ぎ取り剥ぎ取り』

ほんとに嬉しそうなピクシーを見ると、それだけで僕も楽しくなってくる。

らき すたのメンバーも友達同士でいる時はこんな感覚なのかもしれないな。

『いよっしっ！ 欲しかった素材ゲットッ！！ これで新しい武器が作れるよっ！』

「おめでと、ピクシー」

『うんうんっ！ それじゃ作ってくるねっ！ 武器ぐぐぐき』

「それじゃ僕はその間ネットサーフィンでもしてようかな…最近のニュース…と……………え？」

其処には信じられないニュースが書かれていた。

頭がガンガンする。この現実を受け入れられない、嘘だろうと何度も眼を凝らして見続けるけど、文字は無情にも変わる事は無い。

「メシア教会の設立についての…速報…」

物語は加速していく。

どンドン、崩壊へと、崩壊へと…

Continue 19 〈錯綜する思想と欲望と絶望と絶望〉（後書き）

メシア教があることが発覚しました。

と言う事はやはりガイア教もあるわけで。大樹君は無意識な焦りが募ってきている状態ですね。

でも自分じゃ何も出来ないのも知ってるのでどうしようかと悩んでる途中です。

不良の事もなんとかしないとなので、そのうち心労で倒れそうです
ねえ（汗）

Continue20 〱錯〱 (前書き)

幕間のようなものです。

微妙にいつもより長くなりましたが、半分寝たまま書いたものなのでおかしいのはご容赦を。

初めの内は三人称で進みます。 少しずつ何かが始まっていますね。

・クラブ『クレティシヤス』・

人も疎らになった、午前の時間。

だからこそこの店はゆっくりと動き続ける。

其処には二人の女性がいた。妙齡ながら、今でもその美しさに陰りは見られない、クラブのオーナー『マダム銀子』

クズノハとの深いパイプを持つと言われている女性。

彼女は基本新月の夜にしか店に現れる事が無いと言う。そして今日はその新月の夜。

出迎えるべき客はただ一人、今では友人であり、同胞であり、そして…

「こんな時間に呼び出すなんて、珍しいじゃない。それも貴女がね。マダム」

「ごめんなさいね。こうでもしないと貴女は捕まらないから」

「全然悪びれてる様子に見えないんだけど…まあ、いいわ、ここ座つていい？」

「今日のお客は貴女だけ、貴女の好き場所を選んでくださいな」

店に入ってきたのは一人の女性。

マダムと比べても謙遜ないほどの美しさを持ちつつ、マダムが静ならば彼女は動というべき活動的な美しさを持っていた。

チャーミングなツリ目が特徴的なショートカットの女性、年齢は30前後くらいだろうか。まだまだ女盛りに見えた。

マダムが待っていた女性であり、ある業界では伝説とも言われてる彼女。

「貴女に依頼よ。レイ・レイホウ麗鈴舫」

「私に？ 珍しいじゃない。クズノハが私に直接依頼だなんて」

「貴女じゃないと無理とわかっているからじゃないかしら」

「またそれね。上の人って自分でどうにかしようという気合が足りないんじゃないの？」

「動くだけまじと思ったほうがいいわね。はいこれ、今回の資料よ」

そういつとマダム銀子はレイに、資料を手渡す。

苦虫を噛み潰した表情をしつつ受け取る彼女、何枚詰め込んでいる

のだろうかズツシリとした重みを感じた。

「また分厚いわねえ…よくこれだけ書けるものだわ。とりあえず後で読んで置くわね」

「そうして頂戴。で、何か飲むかしら？」

「そうね…キツイの一つお願い」

「ええ、わかったわ」

こうしたやりとりもすでに何回目になるだろう。パートナーを失ってから10を数えているだろうか。

レイはそんな取りとめの無い事を考えながら資料をぶらぶらさせる。

最近ではデビルバスターズや有志の異界討伐隊が政府などで組まれはじめ、クズノハが影から動く事も少なくなってきた。

時代は変わってきているのだろう、彼女はそう自嘲する。

昔のように暴れたいという気持ちは無いではないが、それをするほど今の立場は軽くは無かった。

「お待たせ」

「ありがと…ってダイナマイトね…」

「今の貴女の心情を題材に、ね」

「大きなお世話よ。ったく」

友人のようなやり取り、本当は横にぶつぶつ文句を言いながらも付き合っもう一人がいた筈だが、それはもう遠い過去。

軽く口付け、舌で転がす。キツイ味が喉を焦がし、喉を焼いていく。それを見つめるマダム銀子、何かを懐かしむように口を開く。

「変わったわね」

「変わるわよ、どれだけ時がたったと思ってるの？」

「代わり映えしないのは、私とこのお店くらいかしら。でも、それも仕方ないのかもしれないわね」

「光陰矢の如しってね。流石におばさんと言われたくは無いわねえ」

「あら、貴女はまだ十分素敵だと思っわよ？」

「随分な褒め言葉ありがと。それって自分に帰ってきてるでしょ」

「当たり前」

「調子いいんだから」

時代は流れた。

でも、それを後悔するつもりは二人には無い。だが、それでも昔を思い出してしまうのだ。それだけ過去は光り輝いていた。

今できるのは過去を想い、過去を惜しみ、ゆく未来を歩くだけ。

所詮は時代の裏方。そう思えばこそ、彼女達は今を生きている。

「ありがと。また来るわね」

「依頼を終えたら、いつでも来なさいな。それまではツケにおいてあげるわよ」

「珍しい。なら尚更頑張らないといけないわね」

立ち上がり、別れを済ませます。

これから始まるのは、世界を揺るがす混沌を沈める為の仕事。

彼女が動くと言う事は、それだけに値する。

『クズノハの切り札』いつしかそう呼ばれた彼女が動き出す。

「さーて、やりますか。さっさと終わらせて美味しいお酒をキュー

つと行きたいわね」

彼女が彼と出会う時は近い。

それが彼女と彼に何を齎すのか、今は誰にもわからない。

わかっているのは、時が近づいていると言っ事だけ。

……

……

…

-メシア教-

ミサが行われている。

ミサが行われている。

どこにでもありふれたミサが、どこまでも狂っているミサが。

集まった人間は絶望し、渴望し、希望と、狂信を持って、耳を傾ける。

その数、優に100、1000、10000。

神父の静粛な声が静かな教会に響き渡る。

静かにミサが始まり、信徒達は耳を傾けていく。どこにでもある普通のミサの光景だ。

だが…終わりに差し掛かり、少しずつ神父の言葉が変わっていく。

そして合間見えるのはメシア教の本来の姿。

「世界の終わりの時まで刻は近づいています。このままではこの世界は邪悪な炎と水で押し流されてしまう事でしょう。何故か!? それは天が我々を見放したもつたからです」

仰々しい手振りで語りかける神父の言葉、誰もが呼吸すら忘れたようにその様を、声を静かに拝聴している。

「何故ならば! 人間は愚かにも地球を傷つけ! 動物をむやみに殺し! 木々を破壊し! さらに同胞までも私利私欲で傷つけるからっ!」

神父は信者達を見つめ、満足そうに頷き言葉を続ける。

「このままでは我々は地獄に落ちるでしょう。神に見捨てられ、天使に見放された我々は、哀れな子羊は助かる術がありません……ですが、ここに希望が、一抹の希望が現れました。そうっ！メシアの救世主の降臨ですっ！メシアの愛は天に届き、天使も神もそれを見届け再び我らに愛を、助けを齎してくれるのですっ！」

拳を振り上げると、信者達はそれぞれ祈り、祈り、祈る。

世界が愛に満たされる事を信じ、救世主による世界の救いを求めている。

この絶望しかない世界に残された唯一の希望に彼らは縋り付く。

「世界は崩壊の一步手前まで来ています、天使は我らに滅びの時を示してくださいました。そして、その滅びから神の子達を救う方法もっ！」

声は更に高まる、熱狂に辺りが染まり、全てがシンクロしていく。

それはまるで、想いの凝縮。人の願いが集う事により力となり、その力は聖なる者達の力と変わる。

「メシアの御力により、我々は邪悪な力から護られ、導かれるでしょう。そして邪悪なる者を滅ぼす神の火が世界を覆います。ですが安心してください。神は天使は我々を再び見てくださいる事になりましたっ！そう、それもメシアのお陰なのです！世界を神の火が

焼き尽くし、我々神の信徒達がその後の樂園を平和に過ごす事が出来るのです！」

彼らは信じる。それが真実だと、嘘偽りのない現実だと信じている。何故ならば。

彼らは『天使』を見たからだ。

「ガブリエル様はおっしゃいました。『神を信ぜよ』と！ 神を信じ、神を敬愛し、世界を想いましょう！ あらゆるものに愛を！ 清き心をもって世界を救うのです！ その思いがあれば樂園への道は開かれる事でしょう！ さあ！ 皆さん祈りましょう！ 時は近づいています！ 神の火が下るまであと僅か！ 祈り、信じ、分かち合いましょう！」

彼らはメシアを信じる。

彼らは天使を信じる。

彼らは神を信じる。

そして彼らは、その邪魔立てをするものを一切許す事はないだろう。

信徒には愛を、異教徒には死の制裁を。

世界は神の愛に満ちている、見放された我々を再び護ってくれる神に深い愛情を抱き、それでも神を信じない愚か者に怒りと軽蔑の念

を抱きつつ。

神父のもはやミサではなく演説と貸した神とメシアへの言葉が続く。彼らは一体となり、神の愛とメシアへの希望を胸に抱き、その言葉に酔いしれていった。

「お疲れ様でした神父様」

「いえいえ、つい力が入ってしまいました。恥ずかしい事ですね」

「いいえっ！ そんな事はありませんっ！ 素晴らしいミサでしたっ」

「ふふ、ありがとうございます。メシアの生誕ももう間もなくでしょう。メシアが生まれた時、我々は初めて神に許され、天の国行道が開けるのです」

「天の国…素晴らしい世界になるのでしょうかね」

「そうですね…ですがその為にはこの世界に蔓延る邪悪な悪魔や神

を信じない異教徒共を排除しなくてはなりません」

笑顔で言う神父の表情はとても優しくみえる。

だが、気づく人がいれば気づくだろう、その表情には狂気が張り付いている事を。

「勿論です神父様。すでに我々『メシア教団』の精鋭は準備を整えております。後はいつでも」

「素晴らしいっ！ きつと神は貴女を見ているでしょう」

「ありがとうございます。世界を救う為に、邪悪な者を排除することのお役目…きつと完遂してみますっ！」

「ですが、無理をはいけませんよ。邪悪なる者達と異教徒はとも狡猾です。くれぐれも体に気をつけてくださいね」

無償の愛を説く神父。

彼にとって信徒は愛すべき家族であり、同胞であり、娘であり、息子なのだ。

その愛はどこまでも深く、そして溢れている。

だが、その愛は信徒以外には一切注がれる事はない。

「愚かしい異教徒共が…その存在一片にいたるまで灰燼に帰してくれよう。邪悪なる者には断罪を、断罪を、断罪を…！」

「はいつ、神父様っ…！」

世界が狂っているのか、それとも…人間が狂っているのか。

わかっているのは、時が近づいていることだけ。

……

……

…

- 大樹視点 -

『ねえ、どうしたのサマナーさん？』

「ん、いや。なんでもないよ」

『なんでもないって顔じゃないよ…？ 大丈夫』

「心配してくれてありがと、でもなんでもないよ。それより武器は出来たのかい？」

『ん、ならいいけど…… うんっほらほら、強いんだよっ！』

メシア教……冗談なら良かったけどまさかあるとは思わなかった。

僕の予想通りだとしたら、この世界は真・女神転生？の世界観もかねている可能性がある。

となると、考えられるのは……………

【東京大破壊】

あれはゲーム世界で1999年だった、ゲームではロウ側に属する鬼神トールの転生体のトールマンが東京に核弾頭入りのICBMを打ち込もうとしてた。

それに対するのはカオス側に属するゴトウ陸将が悪魔達を使ってトールマンを倒そうとしてた、だな。

ゴトウも昭和次期の転生者で、今の世の中に嘆いてクーデターを起こそうとしてたはずだ。昔の帝国のような日本を作り上げようとしてたらしい。

ゲームではどちらかの協力をすることも、どちらにも協力しないと出来て、それによって自分の属性が変わったはずだ。

ロウになりたいならトールマンについて、カオスになりたいならゴ

トウにつく。どちらもいやならどちらも倒すと言つ手があった。

ただ、どちらにしても東京にICBMは打ち込まれて東京は破壊されたんだ。

それ以外の世界がどうなってるかはわからないけど、世界が海の底に沈んだのは覚えている。

ゲームを進めればロウ側の神が世界を水で押し流すはずだったから。

今の世の中は東京が破壊された位じゃ、世界が滅亡とかはないだろうけどまず戦争が起こる事は間違いないだろう。

東京に照準をあわせてるなら北海道か沖縄に逃げればいいけど、そんな単純じゃなさそうだし。

いや、この世界じゃそもそもトールマンなんていないし、ゴトウもない。世界崩壊は無いかもしれないのが現状だ。

だけど、メシア教会がある以上何かが起こる可能性のほつが高い。

正直他の誰が死のうが知った事じゃないけど、それで自分まで死ぬのはゴメンだ。

でも、さし当たってどうすればいいんだろう。

東京大破壊が起こる可能性は、所詮可能性でしかない。寧ろ起きない可能性のほつが高いんだから誰かに協力を頼むにしても無視されるだけだろう。

らき すたメンバーに助力？ 無理だ、彼女達は能力を持って一般人と変わらない。寧ろ感性は常識的なんだから一笑に付されるだけだ。

いつその事何処かに逃げるのが一番だなあ…

候補としては沖縄、北海道、外国って手もある。アメリカに逃げたしまえば大丈夫な気がしないでもないけど、多分無理だなあ…

未成年が一人で外国？ 止められるのが落ちだ。

最悪密航って手段もあるけどバレたら死ぬる自信がある。

「んー……気持ち重い」

そもそも僕はただの一般人なんだ。なんでこんな事を考えなくちゃいけないんだろう。

前世があるから主人公？ 笑えない冗談だ。主人公ならレベル20で成長が止まらないさ、所詮僕はその辺のモブでしかない。

……

「ベルベットルームに行ってみようかな…」

考えても答えなんか出る訳がない、なら今は考えを置いておこう。

気分転換にベルベットルームで談笑やペルソナ合体をしておくのもいいかもしれない。下手に考えすぎて迷走するのもアレだから。

「ピクシー。ちょっと出てくるよ。直ぐ戻るから」

『え？ 私も一緒に行くよっ！？ まつてて直ぐゲームセーブするからっ！』

「いや、多分ついてきても無駄だし、直ぐ帰ってくるからさ」

『でもいくのっ！ 私はサマナーさんの仲魔なんだから、ずーっと一緒だよっ！』

《萌えますわねえ》

《自重しろ淫魔》

でもベルベットルームにピクシーがこれるんだろうか。

試してみるのもいいかもしれないな、だめでもどうせ直ぐ戻るんだしその時は諦めてもらおう。

一応COMPを持ってと。鍵はすでに用意してある。正直鍵穴さえあればどこからでもいけるから便利だ。

「じゃあ、行こうか。一応僕に捕まっておいてね」

『らーさー』

僕の肩にしがみつくピクシーを見ながら僕は部屋の鍵穴に鍵を差し込んだ。

すると徐々に意識が遠くなる……………

……………

……………

…

「ついた…な」

『えっ！？ どこここっ！？』

「ピクシー来たんだ」

『サマナーさんっ！ ねえ…ここ何処なの？』

「ベルベットルームって所だよ。お邪魔しますイゴールさん」

『いらっしやいませ大樹様。お久しぶりでございますな』

「来るのが遅かったな」

『悪魔と…人間？』

『ようこそいらっしやいましたピクシー様。私この主をしておりますイゴールと申すものです。お見知りおきを』

『あ、よ、よろしくー』

何だかんだでピクシーはこれたみたいだ。

COMPは持ってきているけど反応がない。外に出さないとついでこれないのかもしれないな。

ピクシーは驚いたようにあたりをキョロキョロしながら飛び回っている。

『時が近づいてきております。大樹様と誰かが交わるその時が。そして大きな意思も動き始めているようでございますな』

「やはり、何か知っているのですか？」

『いえ…私めはただ漠然と理解しているだけにございます。お教えするにしてもまだまだ足りない事ばかりでございます』

「イゴールに情報を求めないほうがいいぞ。ここは単にペルソナ能力者の力の支援だけをする場所だ」

腕を組みながら言う周防達哉。

髪型は特殊だけど、やはりカッコいい男はそれだけで絵になるな。

確かに：ゲームでもイゴールは意味深な事は言うけど本編のヒントになる事は一言も言ってくれなかったな。

『ペルソナって、サマナーさんのつかうトビカトウの事？』

「ああ。ここはそのペルソナを作り上げる場所だ」

『へえ〜。じゃあ強いのがいいねサマナーさんっ』

「だね、そろそろトビカトウだけじゃ辛いと思ってきたところだ。ナナヤも横島も呼べないしね」

「成長限界か…」

「色々期待させたけど、僕はこの辺がカウンターストップって所だね」

『成長限界…？ どういう事サマナーさん？』

聞きなれない言葉に首をかしげるピクシー。

そういえばまだ誰にも言っていなかったなと頭をかきつつ答える事にした。

できれば…ピクシーには嫌われたくないな。

『これ以上…レベル上がらないんだ。そか…』

「ごめんピクシー。黙ってるつもりはなかったんだけど」

『ううん。大丈夫だよサマナーさん。少し吃驚したけど…私はサマナーさんがこれ以上強くなれなくても気にしないからっ　寧ろ私が強くなってサマナーさんを護ってあげるっ　』

「でも、限界レベルを超えると…」

『それは信頼関係が甘いからじゃないの？　私はサマナーさんを信頼してるし…その…好き…だから…えと…いいのっ！　私がサマナーさんを護るんだから！　これ決定ねっ！　口答えはノーセンキューだからっ！！』

ピシッと指を突きつけて言うピクシー。

なんだろう、凄く気恥ずかしくて…物凄く嬉しい。

「いちやつくのは外でやってくれ」

「ち、ちがっ!?!」

心なしか怒ってないか達也君…そりゃここにイゴールさんと二人だ

けでいれば怒るかもしれないな…せめてエリザベスでもいければ話は違うんだろっけど。

大してイゴールさんは優しそうな瞳をして此方を見ている。多分優しい瞳なんだろう、滅茶苦茶怖いけど。

『という訳で愛も深め終わったからペルソナを強くしよっ、サマナーさんのペルソナかあ、強いになるといいねっ』

「今あるカードで出来るのはどんなのがあります?」

『そうですね……………これと、これと、これ…そしてこれ、といくつか候補が出来上がりましたな』

今作れるのはこのペルソナらしい。

レベル27 召喚 テンセンニヤンニヤン アルカナ・女教皇

レベル20 召喚 アイゼンミョウオウ アルカナ・法王

レベル21 召喚 オトヒメ アルカナ・力

レベル22 召喚 ヘル アルカナ・死神

レベル23 召喚 ニケイ アルカナ・正義

レベル24 召喚 カンシヨウ アルカナ・剣

随分とあるな…というか最後の二つはあれだろうか。干将、莫耶の事なんだから…ペルソナ帰還させると二振りの夫婦剣になるんだろうか。

後、テンセンニャンニャンはレベルが足りないのに召喚 とはこれいかに…？

どれもそれなりに使えそうなペルソナだけど…カードの都合で、呼び出せるのはいい所4体までだ。

となると平均的に行ったほうが強いのかもしいな。

「あの、この召喚 ってなんですか？ レベル的には呼び出せないはずなんです」

『名前からして女の子っぽいけど…むうう…』

『それはすな、其処に居られるピクシー様のお力によるものでございます。本来ペルソナは絆の力によって強くなっていくものなのですが。貴方様にはそれがありません。ですが、必要ないだけでありまして絆の恩恵は受けるのでございませう。そして、その絆が深ければ深いほど強いペルソナも扱えるようになるのです』

「と言う事は…絆を深めるとこのレベルでも横島を呼べると言う事ですか？」

「可能かもしれないが、まず無理だろうな。そこまでお前に甲斐性があるとは思えないし、時間がかかりすぎる」

「でも、正直レベルはカスタムだからそれ以上の手立てはないんだけどね…」

絆ね…最近はずっと普通に泉さん達と話せてると思うけど、それは僕が歩引いてはなししてるからだ。

正直、他の人と話す時はつい、高圧的になったりそっけなくなる。基本的に対人が怖いんだよ僕は。

もし人間との絆が必要だったら…無理っばいな…うん。

「とりあえずレベルが高いのは助かる。一つはテンセンニヤンニヤンで確定として…あと3つか。ピクシーはどれがいいと思う?」

『んー…オトヒメとニケーは嫌っ!』

「嫌って…ああ、女性タイプだからかな」

『ふーんだっ』

「ははは…」

「苦労してるんだな、あんたも」

「わかる？」

何となく達也君と分かり合えた気がする。そういえばいたよね、リサ・シルバーマンとか、お姉さんとか。

女性は難しいというのは全国共通、種族共通と見た。

オトヒメはともかく、ニケーは回復もありそうだから欲しいけど…うん、外しておこう。テンセンニヤンニヤンに回復があると願って。となると残りは、アイゼンミヨウオウ、ヘル、カンショウ、バクヤだな。

カンショウとバクヤは取得するなら同時がいいだろうし、となるとアイゼンかヘルのどちらかを捨てることになるのか。

確かアイゼンミヨウオウは、ヤマ…閻魔王の事だな。ペルソナ1では南条君が初めに使ってたペルソナだ。

ハンマ…つまりハマが得意技だったのを覚えている。

たいしてヘルは死神だ、得意技は多分ムドだろう。神聖でいくか呪殺でいくか…だな。

レベル的にはヘルのほうが強いし、ハマよりはムドの方が使うときが多いだろう。最悪文珠もあるし、メルコムはマハンマが使えるし。

よし、これで決まったな。

「じゃあ、テンセンニャンニャン、ヘル、カンシヨウ、バクヤをお願いします。カードはえーと」

『ここにあるもののほぼ全てを使いますが宜しいですか？』

「はい、また集めればいいのでお願いします」

合体素材用のカードがいくつか残る程度だけど、これで十分だ。

後はペルソナが出来るのを待とう。そういえばペルソナ合体は初めてだな、少しだけわくわくする。

『楽しみだねサマナーさん』

「だね、どついう風になるのか僕も興味があるよ」

イゴールさんがカードを混ぜ合わせていく。そこから少しずつ魔力があふれ出していくのがわかる。

多分悪魔合体と同じで融合中か召喚中なのだろう。

暫くすると上空に魔方陣が4つ浮かび上がってきた、あそこからペルソナが生まれるのかな。

「来るぞ。ペルソナの具現だ」

達也君がそう言った瞬間、凄まじい魔力の本流が辺りを包む。

流石に眼を開けていることも出来ず、ピクシーが飛ばされないように両手で抱きしめておく。

少し恥ずかしいかもしれないけど我慢して欲しい、正直僕も恥ずかしい。

『はう…めがくらくら…』

「どつなつたんだ…ろ…?」

魔力が収まりふと上を見ると、そこには4体のペルソナが…

『我が名は天仙聖母碧霞元君。この世を憐む貴方に光差す道を記しましょう、さあ、我が半身よ。我が手を取りて進むのです』

『我が名はヘル。災神ロキの娘にしてニヴルヘイムの女王。自分の欲望満たすだけの愚かな神を滅ぼす為に、共に参りましょうっ!』

『干将と莫耶、共に参りました。我が担い手よ、我が半身よ汝が敵を我らが剣となりて悉く切り捨てましょうっ!』

其処に現れたのは美しい女性が2人と、勇ましい男性、そして寄り

添う女性がの一組。

その誰もが気圧されそうなほどの力と魔力、そして心を持っていた。正直彼らが僕の心の産物とは思えないくらい伝説の存在だろう。

僕の胸にいるピクシーも驚いたように動かない。

トビカトウに威嚇も力もないとは言わないけど、というかトビカトウも十分凄まじいけど、このペルソナ達は更に強い力を持っていた。彼らの力を振るうのは僕自身だ。つまり、僕が成長しなければ彼らの力を上手く振るえない事になる。

レベルではなく、経験と心構え…それが必要なだろうな、ペルソナは。

『ペルソナ合体は成功のようですね。このカードをどうぞ。付け替えなどは理解しておられますか？』

「あ、はい。横島と変える時にやりましたので」

『サマナーさんって…ほんとに凄いね…レベルなんか関係なく、強いと思うよっ。』

「まだまださ…僕は弱い、レベルも在り方も」

強いのはペルソナであって僕じゃないからね。

精神的にも弱いし、まだまだ僕は成長できる余地があると思う、達也君が言うには成長限界もどうにかする方法があるんだろう。

ベルベットルームに来てよかった、少しは悩みが解決できたしね。

あ…そうだ、もし世界が崩壊するとかになったらベルベットルームに逃げるといふ最終手段も…流石に無理か。

「では、また来ます。ありがとございました」

『おじゃましましたーっ』

まだまだ悩みも尽きないけど、悩みすぎて潰れちゃうのは本末転倒だし。ゆっくり考えていこう。

さし当たっては…クズノハかヤタガラスとのコンタクトかな。

そんな事を考えつつ僕達はベルベットルームを後にした。

余談だが、ベルベットルームに居た間の時間は現実世界では数秒にも満たなかったらしい。

アズミ達が色々聞いてきたのでそれに答えるのが大変だった。

もろくも移住作戦はものの数秒で頓挫したと言っておこう。

ペルソナ合体によりペルソナを獲得した！！

ピクシーの合体レベル制限、基本レベル制限が解除された！ 信

頼度が固定になった！ 通常以外の進化の兆しが見られる……

COMP ステータス更新……

Continue 20 (錯) (後書き)

新しいペルソナが4体増えました。

ピクシー恋慕により、レベルが大樹君超えても大丈夫につ！

更に通常以外の進化予定です。どんな種族がいいでしょうか…？

カンショウとバクヤは…ペルソナ2のペルソナにカンショウがあったので適当にバクヤをでっ上げました。

ピクシーに名前を上げたほうがいいかなと思う今日です。

後、今日の夜の投稿はありません。夜は女神転生のTRPGのマスターをしています。楽しみだー。

Continue 21 〈移ろい霞む日常〉（前書き）

今回はコミュニケーションパートです。

4面サイコロふってらき すたメンバーを選びました。

誰が出たかはお話をご覧ください。

追記…1万ユニークを超えました、本当にありがとございます。

コメントなどもとても嬉しいです。これからも頑張りますね。

僕が基本的に戦闘中にやる事は2パターンに確立されている。

一つは未確認の悪魔の場合、仲魔の攻撃を最小限、もしくは待機させてのアナライズ。成功して相手の相性を見てからの全力攻撃。

もう一つは確認した悪魔の場合は、武器やペルソナ、もしもの為の文珠などを使つての掃討だ。

ペルソナが変わってもこれらは特に代わり映えはしない。

更に言えばこの辺りの悪魔はユニークにいたるまで完全に網羅している、つまり、この異界は僕の庭のようなものだ。

新しく呼び出せるようになったペルソナの練習の舞台でもあるというわけだね。

基本的な戦闘中のペルソナチェンジも冷静に行えるようになったし、相手の攻撃方法や弱点に応じてペルソナを入れ替えるのも楽になった。

ペルソナの中でとりわけ使いやすいのは消費MPが少なく、さらに馴染むトビカトウだろう。

同じフルに属しているかららしいけど、取り回しや相性などを考えても普通に使えるペルソナだ。

忍者の為か忠義も熱く、僕が危険な時には強制的に現れて攻撃を防

いでくれたりするのありがたい。

もう一つはレベルが高くて扱えないはずのテンセンニャンニャンだろう。攻撃方法は極端に少ないが上昇するステータスは馬鹿に出来ない。

とりわけ弱点もないし、状態異常系は反射までするといった有能さに加えて、回復魔法やリカームがあるのが強い。

ビフロンス…つまりユニークと戦った時に雇気楼はとても役に立ってくれた。幻影というのはゲームじゃ弱く感じたけど現実で使うとここまで脅威なのだと愕然としたしね。

消費MPが激しいせいで、連続じゃ使えないけどとても助かるペルソナだ。

ファイナルヌードを使って彼女が全裸になった時はみんなの目が痛かった。リリムは輝いてたけど。まさか覚える気はないよね？

全体魅了はいいけど、僕が後で怒られると思うと緊急時にしかつかえない必殺技だと思う。……………眼福だったのは言うまでもない、所詮青い青春の中の男子だよっ！

ヘルとカンシヨウ、バクヤはまだ振り回されてる感じた。必殺技があるけど、ヘルのニヴルヘイムは範囲がでか過ぎて辺りが広くないと使えない。

仲魔にまで被害が及びそうなのが難点だろう。特にアズミは前線に出てくるしね。

威力は申し分無いけど、使い時が難しい技だ。切り札的な感覚で所有しておくのがベストかもしれない。

カンシヨウとバクヤは降ろすと基本的に僕が前衛に立つ事になる。物理攻撃が無効という恩恵とステータス上昇の恩恵があるとはいえ、僕は只の素人であって剣の達人じゃない。

つまり、以上にステータスの高い素人が前に出てきたただけ、雑魚悪魔とか強くても戦いを知らない悪魔には対等以上に戦えるけど、相手がアズミの様に戦いに詳しくかったり、極めてたりすると、途端に劣勢になる。僕はやはり後ろから銃を撃つのが性に合っているな。

ペルソナの攻撃自体は余程離れてない限りは物理攻撃でも届くし、この辺は要訓練という感じだろう。

基本的にレベルはこれ以上上がらないので僕が出来る事は戦い方を知る事、戦場に慣れる事、マグネタイトやお金を稼ぐ事。これにつきる。

後、僕のレベル云々に関しては皆に話した。皆流石に困惑してたけど、色々話している内に答えを決めてくれた。

アズミは…僕には成長の芽があるって事で残ってくれた、もしそれも駄目だった場合には悪いけど離れると言われたけどね。

メルコムとリリムは僕についてきてくれるらしい。アメリカは僕の造魔なのでこれからも傍にいる事になる。

ピクシーは言わずもがな…かな。レベル上限が開放されたので、僕のレベルが低くても一緒にいてくれる様になっているのが助かる。そろそろハイピクシーに進化するかもしれないと言ってたから、優先的にマグネタイトを振り分けようと思ってる。

これが僕の今の現状だ。

何をするにしても、まずは高良さんの情報待ちなのが痛い。

店屋からじゃ情報は得られないし、邪教の館のおじいさんもそこは守秘義務という事で、教えてもらう事はできなかつたしね。まあ、当たり前なんだけど。

流石に文珠で記憶を覗く事は出来なかつた。まだ常識的だったんだなと自分で笑ってしまいそうになる。

切羽詰ってきたら容赦なくやるけどね。

メシア教の動きはさっぱりわからない、此方はネットから手に入る多分隠蔽された情報だけしか集まらない。

後、外国の大統領や、主要な政治関係者を全部洗ってみた。この程度なら僕でも出来るから。

もしトールマン、それが類似する名前があれば即座に目をつけられるんだけど、あんなまんまな名前が乗っているはずも無くこれも空振りだ。

気になった政治家とかはその時期の新聞などを図書館で捜せるだけ探したり、ネットで調べてみた。結果は思うようにはいかず、二の足を踏んでいるような状態だ。

思想家、とかなら区別が付けやすいんだけどそんな政治家はあんまりいる訳も無く。

僕一人では限界がある……そう実感してしまった。

あの手伝い以降は泉さん達に呼ばれてはいない。

報酬は得難いが、まだ人には慣れないので…これはこれでいいかなと思っっている。

このまま縁が途切れれば、所詮その程度の出会いだったなと思えるから。

「なんか勝手に自己完結してない？」

「……………え？」

「いやいや、まさかお約束のように屋上でゴロ寝とは…主人公ポジションを理解してるねっ佐藤君っ！」

屋上で色々考えてせいで泉さんがいることになったく気づかなかつた。

戦闘中なら即死だな…しかしここまで気取らせないと…狙撃主であり、アサシンっぽい前衛の面目躍如と言った所だろうか。

彼女は掌を口に当てて、くしししつと笑っている。イタズラが成功して嬉しいと言わんばかりの表情だ。少し悔しい。

「だめだなー、そこは腕を頭の後ろで組んで、タバコを燻らせないとっ！ まだまだ威厳が足りないよ？」

「この次期に停学になりたくないよ。卒業式に間に合わない」

「ですよー」

「で、泉さんは？ まだ授業中でしょ？」

「すでにサボってる佐藤君には言われたくないねー。んしょつと。横座らせてね」
「いや、この次期はまだ寒いねえ」

まるで気軽い友達のような感覚で僕に話しかけてくる泉さん。

らき すたメンバーと出会うきつかけも泉さんだったな。そのお陰で仕事が出来るようになった点、高良さんとコンタクトできるようになった点は助かっている。

けど、やはりまだコミュ障が直ぐ治るわけもなく、緊張が高まり、会話が淡白になり、声質は低くなる。

嫌いと言う訳じゃないさ、彼女達はいい人だ。でも…長年のイジメ

や両親のせいで、どう接していいか分からないだけだ。

仲魔と人間は違う…僕はそう考えているから。

「で、不良の泉さんは何の用かな？」

「グサッと来るけど、それは自分に帰ってきている！！　なーんてね」

「出席だけとつておけば担任もクラスメイトも僕の事を無視してる気にしないよ。いないほうが賑やかなんじゃないのかな」

「…うー、ごめん」

「……いや、言いすぎたよ。こっちもゴメン。それで用件は？　新しい異界でも出来てそのヘルプかな？」

「別にそっちはまだないよ。ってか単純に話したいから来ただけだし」

「そうか……」

あまりにストレートに言われたのでどう返していいかわからない。

こうして他人と親密に会話するのは、正直初めてじゃないだろうか。

現世も前世も、僕は苛められっこな上に両親は子供である僕に構わない、せめて現世は幸せになりたいとは思ってたけどね。前世を思

い出した現在は。

気弱だったのがそもそも原因だろうな、イジメをする人種はそういうものからターゲットにしていく。

ならば強気で立ち向かえばいい、何ていうけど数の暴力や、そもそも弱い人間はどうやっても強くなれないもんだ。

僕はデビルサマナーやペルソナ、文珠に目覚めて多少は物理的に強くなれたから平気だけど、そんなのが無い人達は、絶望して自殺したり人を殺したり、自分の殻に閉じこもる。

前世の僕は閉じこもった方だ、情けないけどね。でもそれが一番心の安寧を齎してくれたのが、悲しい所か。

僕が仲魔を会話で増やせないのも、その点が関係しているのかもわからないな…

「〜でさ、その時お父さんが」

「はは、大変だね泉さんは」

「いや〜、その時はゆーちゃん分を補給するんだけどねっ」

「しがみ付かれて可哀想に小早川さん」

「ちよっ!?!? そこは百合だねっ　　って突っ込まないよ!」

「残念ながら僕はそこまでオタクにはなれないよ」

「えー、同士になるっよ」

思わず、会話に流されてしまう僕。

彼女の話はとても賑やかで、楽しいと感じてしまう。流石オタク系の女子と言った所だろうか。

なんで僕なんかに話しかけてくるのかはわからない、好かれてるって感じじゃないのは目を見ればわかる。

単純に僕も友達のカテゴリーに登録されているんだらう、彼女の中では。

だから、僕にも話しかけてくる。そんな所か。

友達つてのは、そういうものなのかもしれないな。打算もあるけど、それだけじゃなくて友達だから一緒にいる、助ける、助けられる。

僕には正直まぶしい間柄だ。

「おや、チャイムなったね。ねねっ、皆で学食いかない？ 親睦を深め合うべきだとわたしや思うのだよっ！ ワトソン君っ！」

「僕は誰かの助手じゃないよ。いや、やめておく。泉さんもそろそろ戻らないと怒られるんじゃないのかい？ 柊さんとか妹さんとか高良さんに」

「うおう… 厳しいっすね。そか、でも佐藤君もけっこう面白いね。よかつたらさ、仕事とかじゃなくてもプライベートで会おうよ、一人くらい男がいたっていいージャマイカ」

「それは苦行かい…？ いやまあ高校を卒業すれば僕はフリーだからその辺気にしなくてもいいけどさ」

「ハレームだとおもいたまへっ！ 大中小全部取り揃えてるよっ！身長と胸的にね！」

「その言葉は自分のダメージになると思うけど…」

「言ってから気づきました… ちくしょう。貧乳はステータスなんだ… 希少価値なんだ… えっぐえっぐ」

泣く位なら言わなければいいのに、自爆しないとやってられないのはオタクのサガなんだろうか。

あ、そうだ… 別にこれくらい、いいかもしれないな。

僕を友達だといってくれる希少な人物なんだから、これの程度は。

「泉さん」

「あい… ダメージ大きいぜ…………… ふっかーっ！！ で、何々？ おわっと… これ、なに？」

「悪魔召喚プログラム。COMPだね」

「へー、そっかー……………ってなんですとおおお！？」

お約束のようにのけぞる泉さん。いや、見てて飽きないね。

「在るツテ、というか色々合って手に入れてね。僕はすでに持っているし、売るにはもったいない。という訳で君に売ろうかと」

「はえっ！？ マジでっ！？ いいのっ！？ いくらっ！？」

「そっだな……………高いよ？」

「おおー、やはりっスか」

これだけの事を言うのに、凄く心臓がドキドキ言っただけど…

告白するわけでもないし、異性として意識してるわけでもないのに…

まあ、がんばれ僕。やってしまったからには後には引けないさ、後は信頼を裏切ってくれないようにね泉さん。

裏切られたら、僕は君を殺すと思う。

「友人価格、として。次の異界探査に連れて行ってもらおうかな。マグネタイトは君と半々でいいよ」

「え…ええっ!? 友人って…ほんとに?」

「僕の勘違い、だったかな? 友人みたいに会話してたから僕が調子に乗ったのかな」

「あややつ!? ち、違うって! 友達! 友達だよっ! …ありがと。嬉しいよ」

「そのCOMPの所有権はすでに君だ。それをどう扱おうと君の自由だよ、泉さん。危険なものと思うなら柘さん達に渡して処分しても良いし、使っても構わない、ただ…僕は君を信頼した。それだけは裏切つて欲しくない、って所かな」

「そこだけ聞くと告白フラグに聞こえるねっ …おおう、目が白いよサーセン。うん、任せてよ悪いようにはしないから!」

「少しくらいは歩み寄るのもいいだろう。」

彼女なら漠然とだけど、信頼しても良さそうだしね。まあ、四六時中なれあうつもりはないけど…

それに泉さんと信頼を深めていけば、高良さんとも仲良くなれる…つまり情報は得やすくなる訳だ、ある意味合理的だろう。

あの情報収集力は侮れない、信頼を得ておいて間違いは無いはずだ。

彼女は、いや泉さんを除く3人は僕を完全には信用もしてなければ、信頼もしてないだろう。情報を得るにしても改竄されるかもしれない…なんて腹黒く考えてみたけど。

単純に答えは…友達が欲しかった…かな。

それが可愛い女の子なら尚更だ。それだけでいい、それだけで。

「それじゃ、ね。僕はもう少しここで考え事してるよ」

「うん。何かあったらメールするね」。これ、大事にさせてもらうよ」

「使わないと意味無いよ。あ、ハーモナイザーとエネミーソナーは基本で入ってるから。わからない場所は有料で教えるよ」

「世知辛い世の中じゃあ……うん、ありがとね佐藤君」

「どういたしまして、かな。それじゃあね泉さん」

「またねっ！」

去っていく彼女を見送る。

馬鹿なことしたんじゃないかなーと少し後悔してるけど、これが吉とでるか凶とでるか…楽しみでも在る。

何かあれば逃げるさ、でも。少しは信用してみたいな友達っていうのを。

「友達…ね。こそばゆい気分だよ…まさか卒業間近でそんなのが出来るなんて」

まあ…悪くは無いと思う。

泉こなたをコミュニケーションをとった！（半ば強制
泉こなたとの信頼度が上がり、友人関係になった！
泉こなたは大樹を少し意識している…

COMP ステータス更新……

Continue 21 〈移ろい霞む日常〉（後書き）

1がこなた 2がかがみ 3がつかさ 4がみゆき でした。

という訳で今回はこなたの番になりましたね。大樹君からの信頼の証としてCOMPを貰ったこなた、少し意識し始めたようです。

次回のコミュニケーションは誰がいいでしょう？ まあ数話かかるので、そのときまでにコメントに多い子を選ぶ予定です。なければまたサイコロで。

こなたinCOMPは予定調和でした。多分大樹君追い抜くと…（ガクガク

Continue22 く神聖という邪悪なる胎動く(前書き)

こつこつお話が進んでいます。

メシア教が動いています、まだまだ邂逅しそつにありませんが暗躍してそつです。

Continue 22 〈神聖という邪悪なる胎動〉

- 男視点 -

「じよっ、冗談じゃ…ねえぞっ!? こいつ! トウビヨウ! オ
ーガ! チョトンダ! ヤマチチ!」

簡単な仕事かと思えば…ふざけんなよっ!? なんでシスターごと
きがこんなに強いんだっ!?

とりあえず仲魔と連携して逃げる道を作るしかねえ…このままじゃ
蹴り殺されちまう!

501

『さまなー、仕事、スルノ力?』

『ひやははははっ! 随分焦ってるなあサマナーよっ!』

「う、うるせえ! 呼び出されたんならマグネタイト分働きやがれ
!」

『グルルルル…働ク…まぐねたいと…補給…』

こいつらがどうなるうと知った事じゃねえ。仲間なんてのは金さえ
あれば直ぐ補給できる存在だ。

今はこいつらの命をすり潰しても逃げ切るしかねえ！

こんな所で、死ねるかっ！！

「Kyrie eleison、Christe eleison、
Kyrie eleison - 主よ憐れみたまえ、キリストよ憐れ
みたまえ、主よ憐れみたまえ - 」

「き…きやがった…お前ら全力攻撃の準備！ 絶対にあの女を殺すぞっ！」

『女ゴトキニ…全力カ…？』

『カカカツ！ 世の中女が強いのは真理みてーなもんだよ。気持ちいいねえ、この殺気っ！ ゾクゾクするぜえ』

『殺した後に血を吸っても構わぬかな？ サマナー』

「好きにしる。とりあえず…殺せ！！」

俺はいつでも逃げれるように準備をする。

勝負つてのは生き残れば勝ちよ。死ねば誰だって肉の塊だ、男でも女でも、生きてる限りは皆平等にな。

俺はそんなくだらねえ物になりたくはねえ。好き勝手に仕事をして、好き勝手に女を犯し、好き勝手に人を、悪魔を皆殺しにして、酒を

次にオーガのブフーラで相手を氷結させたら、ヤマチチのザンマで氷の氷像の輪切りの完成よ。

これを食らって耐えられた人間は今だかつていねえ！

これでダメならケツまくって逃げるだけさっ！！

「神は言った。『善をもって悪に勝ちなさい』罪深き異教徒よ。存在するのも害悪な生き物以外の存在よ。せめてこの言葉を送りましょう『罪の報いは死なり』」

「あ……があっ！？」

『さまなー！？』

下腹部に鋭い痛みが……なんだこれはよ……け……剣っ！？

こんなもん……どこから。

いてえ……いてええ……死ぬ……ヤバイ……やばいやばいやばいやばい！！

「土は土に、塵は塵に、灰は灰に。いと愚かしき邪教の者に、救い無き滅びを。神の愛を信じぬ愚かものには血の粛清を、我らは神の代行者。」

ただ救い無き命を屠殺し、この不浄なる大地に清めの光を照らす個人とならん」

剣が飛んでくる。

剣が飛んでくる。

雨のように、塗りつぶすように、黒い、黒い雨が。

仲魔が穿たれ消滅した。

仲魔が逃げ遅れて消滅した。

仲魔が修道女を殺そうとして串刺しにされた。

仲魔が…仲魔が…

痛みで引きつる体を必死に動かして俺は…俺は…逃げるんだ。

「あぎっ！？ いぎゃあああああああっ！？ 腕っ！？ 俺の腕
があああっ！？」

至極あっさりと俺の腕は黒い剣で斬り飛ばされる。

もう片方の腕も、足も、脚も、足も…

まるで生きてる達磨のようになりながらも、血をこぼし、涙を流しても俺は…死にたくない…

「た、すけて…くれっ…俺は頼まれて…やっただけ…なんだ…頼む…金はやる…好きなだけ…教会だって…金は欲しいだろ…だから…」

「我が使命は、汝ら穢れしものどもの肉片一つにいたるまで切り刻み、世界より駆逐する事。それが貴方達、異教徒に対するせめてもの慈悲と心得よ。エイメン」

頭部に衝撃音を感じ、俺の意識は永久に途絶えた。

俺は死んだのだろう、神の使徒によって殺された俺の魂はどこに行くのだろうか。

地獄？ 天国？ それともただの無か。

最後に思ったのはそんな事だった。ああ……………生きて居たかった。こんな仕事請けなければ…良かった。

- 男視点解除 -

- 修道女視点 -

「愚かな異教徒、こつなると哀れなものですね」

とは言えども、其処に何の感慨もありませんが。

それにしても我らがメシア教に敵対する組織があるとは…怒りよりも先に哀れだと思えます。

我々は世界を救う為に日々戦っているというのに、私利私欲に飲まれた異教徒にはそれがわからないのでしょうかね。

ああ…神父様。貴方の愛は無限なれど、この地を覆うには異教徒達の罪の心が深すぎるようです。

一刻も早くメシアの降臨を願ひ、この世界に安寧を齎せなければいけませんね。

このままでは世界は邪悪に飲み込まれてしまうことでしょうか…なんて恐ろしい…狡猾で傲慢な悪魔が蔓延る世界…それら害悪から我らメシア教が信者を救わなければいけません。

そうする事こそが我らがメシア教の使命なれば、私はそれを忠実にこなすのみです。

「シスター。ここにおいででしたか」

「あら…テンプルナイト様ではありませんか。このような所に、折角の鎧が穢れてしまいますよ?」

「そんな事をおっしゃいますな。貴女のように敬虔深き方がおられるのでしたら、この不浄の地も清く染められる事でしょう」

「ふふ、買い被りすぎですわ。それで、次はどのような」

「ええ…再び悪しき異界が出現したとのことです。我々は違つ異界を封じなければなりませんので、シスターに勅命をと神父様が」

神父様がっ!？

ああ…そのような使命を私に…頼られている、期待されている。

このような幸せは他にありません。ああ、見ていてくださいますし神父様。貴方様の望みやその優しき思想、全て、全て理解しています。

世界を救い、信者を救い、神の御許への道を示してくださいました神父様のお言葉ならば、私は全力を持って…そう。いかなる方法をとってでも。

508

「ありがとうございます。それでは私は参りますわね。皆さんもお気をつけて…神の祝福があらんことを」

「シスターも。神の祝福があらん事を」

去っていくテンブルナイト様達を見送り、姿が見えなくなった後、私は歡喜に身をよじった。

ああ、なんて不淨な。私の体が神父様を求めているのがわかる…いけません、我が身は神に捧げたものなのに。

す神とメシアと神父様にそれが私のあり方ならばあり方で在り方で有り方で！！」

神父様のお役に立つ…それだけで体が蕩けてしまつような快感に全身が染まる。

さて…そろそろ行きましようか。

このまま酔っついても仕方ないですし、神父様のお役立てなくなつてしまいそうです。

そうなれば世界の破滅、世界を救おうとしている神父様の為にもシスターである私が全てを支えなくては。

「はあ…はあ…はあ…。うふふ、うふふふふふ。参りましようか。でもその前に…マハ・ラギダイン」

指を鳴らして目の前の汚物を焼却する。

このような不浄をそのままにしておく信徒達が汚されてしまつかもしれないしね。

地獄の炎より熱いといわれる私の炎は、肉を焼き骨を溶かし存在を消し去る。そして対象以外を焼く事はありません。

私が燃やすのは不浄だけであつて、世界を焼くなんて恐れ多い事はできませんから。

数秒もしない内に炎は全てを焼き尽くした、これでいいでしょう。

向かわなくては、ですね。

「不浄なる世界、不浄なる悪魔、不浄なる者どもに、神の鉄槌を与えん」

その存在、我が神の名の下に消去しましょう。

- 修道女視点解除 -

- 場所は、大きく変わる……………

- 泉こなた視点 -

「うん、ハーモナイザーはチートだチート」

『私からすればサマナーも十分規格外だけど？』

「そかな？　こんなの訓練すれば女子高生にも出来る事なのだよ。ほいパーン」

500メートル先からの狙撃。うん、悪魔一体倒したねっ！

いやあ、佐藤君からCOMP貰って早速低レベルの異界に来てみたんだけど、これは凄いね。

自分のステータスとか見れるようになったし、ハーモナイザーは強いし。うはうはだよっ

お陰で命中精度が伸びました。今の私輝いてるねっ！　皆みているかい

あ、ちなみに隣にいる子は新しくできた仲魔で地霊力ハクね。他はまだいないなあ、早めに戦力を充実させたい所だね。

COMPソフトは結構充実してるよー？　お金は結構余ってたしね。いやあ、私がゲーム以外のものを買うとは感慨深いよ。

え？　銃とか？　試供品だよ試供品、武器屋さんとかとはご贖罪な感じだしねえ。

『折角仲魔になったのに、やる事が警戒とか…必要なくない？』

「いいじゃん。辺りの警戒してくれるだけでも助かるよ。」

このCOMPってさ。敵を倒すと相手がどこにいてもマグネタイト補給してくれるから便利なんだよね。

どいう理屈でそうなるかわかんないけど、出来るんだから出来るでいいよ、便利だしね。

おーっと、エンジェル発見。という訳で。

「祈る時間は…与えないっ！ てねっ！！」

パンツ、て軽い乾いた音が響くと同時に遠くでエンジェルを撃破。

初めは人型を殺すには抵抗があったけど、あいつら普通に人間を見下して殺しに来るからいい加減に慣れました。

天使って言う位だから良い人なのかなあって思ってたけど騙されたよ。

それにしても…本当に便利だねハーモナイザー。佐藤君が強いのもわかるよ。これはあるとないじゃ凄く違うね。

最初使った時は振り回されたけど、今は問題なく扱えるし。

今頃は私みたいに異界で頑張ってるのかな…？ 異界探索終わったら電話…は迷惑そうだからメールしてみようかな。

そうそう、まだ私がCOMP持つてるってかがみんなには伝えてないんだよね、言うタイミング逃したって言うかさ、そんな感じで。

『この辺りの悪魔だとサマナーに勝てるのいないんじゃない？』

「かもねー。多分真正面から向かってても相手が5〜10体とか言わない限りは倒せると思うよ？」

『ならレベルにあってないんじゃないの？ まあ、私はこの辺りで適正だけどさ』

「だからって行き成りハイレベルの場所に行くには仲魔も準備も足りないよ。それにまずは腕慣らしがメインだしね。強い所はバイトで行くくらいだし」

『なるほどね。まあサマナーの言う事には従うわよ。マグネタイト欲しいしね』

「ねえねえ。マグネタイトって美味しいの？ 悪魔って良くそれ欲しがるけどさ。純粋な存在エネルギーだよな？」

『味って言うか、体が漲るって感じよ。充実するって言うかそんな感じだし。人間で言えばセーフストーリーップ！』…はあ…？』

だめだめだめ、ここは健全板健全板ね、いい所15禁が限界だよ。

私もエロゲーとかはよくやるけど、そっちの言葉は自重しているの

だよ、うんづん。

興味は…あるけどねっ！！

相手はいないけどねー…少し気になる人は最近出来たけどさ。

「だから沢山あると強くなれるのかあ、ハーモナイザーにもマグネタイトが必要だし色々使いそうだね。集まらないわけだー」

『私達は強くなる為にマグネタイトが必要なんだけども、サマナーについて行くとそういうのが集めやすいんだ。普段の私達は存在するだけでマグネタイト使うし集めるのもかなり面倒なのよ。そこで人間を食べたりとか悪魔を殺したりとかして少しばかりのマグネタイトを集めるんだけど、供給率が悪すぎて生きていくだけが精一杯』

「だから仲魔になる悪魔が居るって事なんだねえ、よく出来てる仕組みだよ」

『持ちつ持たれつって所よね。私達はマグネタイトなどを貰って強くなれる、サマナーはその為に悪魔の力をローコストで借りれるってこと』

「ふむふむふむ。勉強になるよー」

『だから警戒しかしてないと手持ち無沙汰なのよ…たまには戦わせね？ 仲魔になった以上手助けするのは当然なんだから』

「生真面目さんだねえ、私なんて楽しんでお金もらえるならそうするよっー」

『あんなね…』

微妙にかがみんが傍にいるみたいです。良い子なんだけどねー。

でも気安いつていうかやりやすいんだよね彼女と会話するのは、佐藤君も同じなのかもねー。

つて、メール着てる。だれだろ。

「おお、佐藤君だ。あっちから来てくれるなんて、フラグたったかなっ!」

『はあ…? よくわからないけど何かあったの?』

「ん、メールきたのさ。ちょっとその辺見ててー」

『はいはい。さっさと済ませてよ?』

えーと…何々?

あはは、なるほどねー 早く帰ってTV見ないとだよ。

? 内容? おにゃのこのメールを覗き見ようなんて10年早いよっ! なーんてね、他愛もない適当な内容だよ。

今やってるTVが面白いなんていう内容。

なんだかこんな事だけでも嬉しいって思えるよねえ、友達になれたって感じがするよ。

「それじゃ、そろそろ帰宅の準備だねー。マグネタイトも結構集まってきたし時間もそろそろでしょー」

『急にだなあ…もしかして男？』

「あはは、そんなのいたら私はここにいないよー」

『そうよねえ』

彼氏ねえ、そんなロマンス私達にはないよー。

紅一点のみゆきさんですらフリーなのに。そう考えるとひよりんはつわものですねっ！ みさきちのお兄さんって良い男なのかねえ。

つかさはこわーいお姉ちゃんガードしてるし、かがみん自体は求めてるっばいけど出会いがないよねえ。

修学旅行のときはご愁傷様でした、はい。

私はねえ……

「すこーし、気になる人はいるかな」

少しだけね。

さーて、帰りますか〜！

- 泉こなた視点解除 -

泉こなたは異界を探索した！

地霊力ハクを仲魔にした！ いくつかのアイテムを獲得した！ レベルが2上がった！ マグネタイトと魔貨を手に入れた！

泉こなたは大樹を少し意識している…

COMP ステータス更新…

Continue 22 〈神聖という邪悪なる胎動〉（後書き）

メシア教の幹部って狂ってそうかなーと思いこんな方になりました。名前はまだ不明ですがいつか立ち塞がりそうな方ですね。

そしてメールでしか登場しない大樹君、次回頑張れ。

でも、今回は一気に時間が飛びそうです。具体的には卒業くらいまで。

大樹君の育成計画について。

大樹君のレベル制限が解除されたら、どのようなステータスにしましょうか？

良かったらコメントなどで育成計画を決めてくださいね。

ちなみに現在のデフォルトは
速中心、まれに力、体です

- 1、力中心
- 2、知魔中心
- 3、体中心
- 4、運中心
- 5、平均的に振り分け。

よかったですらどうぞです。

Continue 23 〈黙示録へのカウントダウン〉(前書き)

今まで非日常の生活でしたが、まだ日常に戻れました。

でも今回のお話で、ついに本格的に物語が始動します。

らき すたメンバーも巻き込んで、のですね。

Continue 23 〈黙示録へのカウントダウン〉

- 柊かがみ視点 -

「自由登校になった途端にこなくなったわねーこなたのやつ」

「あ、あはは。こなちゃんも色々あると思うよお姉ちゃん」

「まあねえ…頑張ってるんでしょあいつなりに」

でも、いつも居る煩い奴がいないと、少しだけ寂しい感じがするのよ。

そりゃあ、毎日のようにメールや電話も来るし、元気なのはわかってるけど…やっぱり一人で異界に行ってるのかしら。

まさかこなたもデビルサマナーになるなんて予想もしてなかったわよ。

それも佐藤君からCOMPを貰ったって言うじゃない。それを聞いたときは素で「はあっ!？」って言うっちゃったわよ。

行き成り仲魔を見せてきて、初めは悪魔かもしれないって思ったじゃないの。

「そついえば佐藤さんも来られてないみたいですね」

「成程ね…そつちは大体理由はわかるわ」

「うん…」

普段から苛められてるのに、自由登校になつたら来るはずないじゃない。

寧ろ今まで良く来てたなあって感心しちゃうほどよ。私なら……まあ全力で交戦するからそもそもイジメの問題がないかもしれないけど。

よく考えるとこなたが佐藤君と出会ってから、色々変わってきたと思う。

時々私達の中に男性が、そう…佐藤君が混じるようになってきたのも、異界封じの時に手を借りるようになったのも。

こんな事言うのは…考え違いにも程があるけど、私達って彼のせいで色々変わってきたと思う。

直接的に関わってるわけじゃないから、私達の、いや私の思い過ごしかもしれないけど、何かが変わってる気がするわ。

良い意味でも、悪い意味でも。

これから高校を卒業して、本格的にそれぞれの道歩く事になる。

私は法学部に行くしつかさは料理系の専門学校、みゆきは医学部でこなたが普通学科…頻繁に学校で会う、何てもう出来ない。

それ以外の時間はいつもの通りだとしても、夜に手伝いという事でみゆきとこなたが手伝ってくれるとしても。

私達が交わる時間は徐々に減っていく、それは仕方ない事だっわかってるけど…寂しいと感じるのは仕方ないじゃない。

もし、彼がいなかったら。佐藤君が居なかったら、こなたは今も学校に来てたのかしらね…

「人生、何があるかわからないわね」

「どうかなさいましたか？」

「ああ、なんでもないわよ。時間が立つのが早いわねって事」

「そうだねー…昔を思い出しちゃっよー。こなちゃんが私を助けてくれた時の事とか」

「あれは助けたんじゃないで、逆に困った事になったんじゃないのか…」

「あははー」

「そうですね…2年生の頃、お昼ごはんの時に食べ物の食べ方で取りとめのないお話をしたりとかもありましたね」

「うんうんっ。シュークリームとかだねー」

「あー… だんばらね…」

こなたのギャグはシニールすぎて笑えないのよ。

やめてよね、段腹のコロナ体型とか滅茶苦茶笑えないんだから。今だって少し節制してるのに。

あーっ！ やっぱりおもちのせいかしらねえ。

「おーす。お前らまだのこつとるんか？」

「あ、先生。これから帰る所ですよー」

「さよか。早めに帰りいや？ 最近妙に物騒やからなあ」

「そうですね… 行方不明事件でしたか。今月ですでに10人も居なくなっているのでしたね」

「せや。うちのガッコでも幾人かそんな話になつとるさかい。お前は見た目がええからな、浚われるんやないでー？」

「あははは。その時は叩きのめして上げますよ」

行方不明事件か… 佐藤君を襲ったって言う不良達も居なくなったよ。うだし、本当に最近物騒よね。

悪魔の仕業なのか、人間の仕業なのか… どちらにしてもそっちの事

件方面は私達の管轄じゃないか。

何かあれば抵抗するだけだし、知り合いが危険なら助けるだけよね。でも妙よね…学校でもそんな話になってるのにマスコミもこなければ学校側でそんな話も出てきてないし。

情報規制されてるのかしら…それとも、一般人には理解できてない？ 思考を誘導させればこの件の事の興味を逸らす事位ならできそうだし。

そうになると、陰陽寮とかそういう系の大きな場所が動いてる事になるわよね。

認識阻害とか凶悪な魔法とか使える場所だし。うーん、考えすぎかしら。

「怖いねお姉ちゃん…」

「そうねえ、特につかさだと一人ならあっさり浚われそうだし」

「はうう」

「でも普段からかがみさんと一緒になのでから安心ですね」

「あ、そか。えへへ」

「はいはい。お姫様を護りますわよ。あんたもねみゆき。なにかあれば直ぐに頼りなさいよね？ アンタって結構自分で抱えがちなし」

「あ……はい。その時はお願いしますね」

・おうつ さっすがかがみんっナイト様だねえ〜！

「誰がっナイトかつ〜！」

「え？ どしたのお姉ちゃん？」

「ナイト…ですか？」

「あ、いや。なんでもないわよ」

「変なお姉ちゃん」

馬鹿みたい…こなたは今いないじゃないの。

はあ…何となく、ほんとに少しだけど、何となく寂しいわね。あの馬鹿がいないと。

今何やってるのかしらね…メールでも送ってみるか。

今日はお仕事もないし、久しぶりにゆっくりするのもいいしね。体も休めないとこの次期に壊したら元も子も無いし。

ついでだから、来なかったこなたのヤツには生贄になってもらおうかしら。

ほんとに…変わってきたわね何もかも…

漠然とした不安がある。これから何か起きそうな気がするし…その思いは徐々に強くなってきた。

私には先見も予知の能力も無いはずなのに、なんでこんなにこの先の事が不安になるのかしら。

佐藤君と出会った時から、その思いはどんどん強くなる。

あ、いや彼を意識してるわけじゃないわよ？ 彼は単純に協力関係なだけだし…こなたはなんだか違うみたいだけど。

見た目は…普通よね、ちょっとそれより下くらいかしら。見て不快にはならない程度の顔つきよね。うん、可もなく不可もなくだね。

将来性は…未定かしら。デビルサマナーとしては大成してるっぽいけど高卒で終わるから表向きの学歴や仕事はレベルが低そうよね。

性格は…矯正が必要よね。まず何にしてもあの人間不信をどうにかしないと、誰も近寄ってこないわ。それがイジメの弊害だとしてもね、私も知り合いじゃなかったら話しかけないと思う位だし。

「さて、そろそろ行きましょ」

「うん」

「そうですね」

とりあえずは…考えてもしょうがないわね。

今日はこなたを弄って遊ぶとしましょうか。

- 柊かがみ視点解除 -

さて…どこから突っ込めばいいんだろう。

『うーっ…』

「ふふふん」

『うーっ！』

「甘いよピクしっちゃんっ！　これで止めだっ！」

『お　また負けたあああっ！　うえええんサマナーさん慰めてよお』

「私の大勝利〜　ふふん、まだまだクンフーが足りないよピク
しゅちゃんっ」

『実戦なら負けないもんっ！　ジオンガの連発で！』

「それはリアルで死ぬから遠慮〜」

「あかさ」

「ん？　なに佐藤君」

とりあえずいいだろうか。いいだろう、言わせて貰おう。

「何で居るの？」

「遊びに来たからっ！！」

「いや、学校は？」

「自由登校じゃんっ！　なら有意義に使わないとねっ！」

「ゲームが有意義と言われると僕は非常に納得いかないんだけど」

「親睦を深め合ってるんだよ。好感度が＋１されるんじゃないかなっ！？」

『マイナスっ！　マイナスだからっ！　ギャルゲー持ち込んでもダメーっ！』

ピクシーと泉さんって根っこが似てる気がする。

いや、まあどうでもいいんだけどさ。

彼女って漫画の本編では学校に通ってたと思うんだけど、なんでもりにもよって僕の家に来ているんだろう。

遊びに来たって言われた時は流石に焦ったよ。

両親はいないから煩いゴタゴタも聞かれずにすんだけどね。

初めはCOMPの事や新しく出来た仲魔について先輩の意見を聞きたいって言われたんだけど、いつの間にかピクシーVS泉さんのゲーム大会になっていた。

格闘ゲームは泉さん持参だ、蒼い魔導書を巡って戦う話の2D格闘ゲームらしい。

ちなみに僕は格闘ゲームはやらない。一人でやって何が楽しいのさと言いたいからね…どうせ友達なんて居なかったさ。

『サマナーさあ。私の仇をとってよお』

「開始直後数秒で倒された僕に言うセリフかなそれは」

「いや、ゴメン。まさかあそこまで弱いとは思わなかったよ」

『鬼っ！ 悪魔っ！』

『呼んだか？』

『いえ、アズミさん。今の貴女はオニじゃなくてアズミですから。悪魔な事は間違いありませんけど』

「アメリカは造魔なので見当違いなのです。あ、モノメイトが切れたのです。デイ・ラガンが強いのです。ザンマがあれば…」

『ゲーム機に使用したら壊れますわよお』

『いやいや、止めなさいよアンタ…』

中々にカオスだ…こんな時に男性型の仲魔でも居れば僕の肩身は狭くないんだけど…もの見事に全員女性。

異界で男性型の仲魔を仲間にしようと頑張ったけどこれまた全部ダメだった。

しまいには『リア充氏ねやつ！ 寧ろ死ねっ！』と言われて襲い掛かられた…僕だって別に女性ばかりを選んだわけじゃないよ…寧ろ皆なし崩しのなのに。

アズミは唯一、思考が男性っぽいから助かっているけどね。胸さえ見なければ…ああ、胸さえ…

「それにしても早速使いこなしてるねCOMP。ハーモナイザーの

ほうは大丈夫だったかい？」

「最初は少し変な感じだったけど、今はもう慣れたかな。いやいや佐藤君様様だよ。足向けて寝られないねっ！」

「それは何よりだね、具体的に言うつと電話もメールもなく家に突撃されるのは遠慮してもらいたいけど」

「実はさあ、異界行こうと思ったんだけど。誰かが潰してたみたいでアテが外れちゃってさあ。という訳で急遽来て見ましたっ！」

『うー。なら学校にいけばいいじゃないっ』

「学校は苦行です。うんっ！」

『サマナーさんは私と愛を深めるんだからだめっ！』

「それ昼間っから言うセリフじゃないよピクシー…」

「愛されてるね〜」

くししと笑う泉さん。なんだかもう、何しても彼女のネタになつてしまうようだ。

とつか普通に男性の家に來てるのに緊張のかけらもないのはどんなもんだろう…父親で慣れているんだらうか。

「ふっふっふ。しかし甘いよピクシーちゃんっ！君のその幻想を

ぶち壊すっ!」

「そげぶかい?」

「おー。ネタ知ってたかあ　　佐藤君も染まってますなあ」

「有名だからね。本編見たことないけど」

『その『げ』んそつを『ぶ』ちこわすで『そげぶ』果てしなくどうでもいいけど、ネットではよく不思議なアスキーアートと共に見る文字だ。』

だからなんだと言われてもどうしようもない無駄知識なだけだね…うん。

僕だって、ネットサーフィンしてるからその程度の知識はあるよ。無駄にね…

「そついえば、佐藤君は大学行かないんだよね。卒業したらどうする予定なの?」

「行き成り話題が変更したね…特には考えてないな。仕事するよりは異界で悪魔を狩ってたほうがお金になるし、それで稼いで適当な場所に部屋を借りて過すくらいかな」

『うんうん。サマナーさんはデビルサマナーだしねっ　　勿論私も手伝つよっ』

1ヶ月くらい狩りをして魔貨などを売却すれば、下手なサラリーマンの月の給料の数倍は手に入る。

僕達の場合、武器の劣化は気にしなくてもいいので買い替えの必要は特に無いのが利点だ。

文珠で【新品】とやるだけで、購入時と同じに戻るので壊れても再利用が可能なので同じ武器や防具を買い換える必要が無い。

ゲームと違ってダメージを受けたり武器を使えばどんどん痛んでいく。銃も銃身が焼け付いてくるし弾も無くなる。

でもその点を文珠で補正できるから余分なお金はかからないのだ。文珠自体は僕的能力なので費用も0円、なんともリーズナブルというかなんというか。

唯一銃弾だけは買い直さないといけないけど、弾自体はかなり安く買えるからその点をマイナスにしても、問題ないほどのお金になる。特に欲しいものはないし、強いて必要といえど車とバイクの免許証くらいだろうか。その程度が集まれば必要なものは特に無い。

質素に暮らしていく程度なら問題なく生活が出来るというわけだ。

「なんか考え方が主婦だね…」

「言わないでくれないか。僕もそう思ったから」

「普通の狩り以外にもこつちから仕事回すだろうし、現金収入はまああるからパーっと使うのもいいんじゃないの？」

「パーっとって言われてもね。欲しいのは特に無いよ、生活器具はリサイクルショップとかで格安で手に入るだろうし、それで十分だから」

『流石サマナーさん。その辺もすっかりと対応済みね』

『主夫だな』

『主夫よねえ』

「しゅふってなんですかご主人様？」

「…気にしないでいいよアメリカ。うん、まだ必要な知識だから」

主夫なデビルサマナー…なんとも平和的というか殺伐とした世界観を真正面からぶち壊しというか…まさに『そげぶ』だね、うん。

武器がお玉とエプロン…凄く想像したくないな。正直ゾンビとかと似た感じのダメージを受けそうだ、主に僕が。

ちなみにゾンビやゴーストが雑魚になったからといって、恐怖が完全に無くなったと思ったら間違いだ。

怖いものは勿論今でも怖い。ゴーストやゾンビなんて行き成り真後ろから現れたらハーモナイザー無しだったら騒いで逃げると思う。

未だに恐怖系の番組とかは見たいと思わないしね。何が悲しくてリアルでそういうのと戦っているのにTVとかで見なくちゃいけないのかと小一時間。

『サマナーって。こんなに強いデビルサマナーの知り合いだったなんてね、結構噂になってるわよ貴方の事』

「え、僕が？ 悪魔に？」

『勿論。ある異界で悪魔を狩り続けてるデビルサマナーって言えばちよっとしたものよ？ 出会えば即殺。デッドオアアライブってね』

「寧ろ僕からすると悪魔の方から先制されるんだけど…」

「あー…多分やられる前にやれって感じなんじゃないのかな、玉砕覚悟ってどうか」

いやな方向で有名になっているみたいだ…通りで話しかけても無視されるし仲魔も全然出来ない訳だ。

というかそういう情報はどこから手に入れてるんだろう、悪魔同士にもそういう情報ネットワークみたいなものがあるんだろうか。

ペルソナ2とかだと噂システムというものがあって、流すと悪魔達もその情報を持っている時があったけど、それと似たようなものなのだろうか。

少し狩り方を変えたほうがいいのかな、出会う悪魔が全部そうだと後々面倒くさそうな事になりそうだし。

バトルマニア系の悪魔が来たら面倒だ…それでなくてもビフロンスとはもう5回以上戦ってるし…

あのビフロンスって同一悪魔なんだろうか…見た目も同じだし絶対にこっち狙ってくるし…明らかに目の敵にされてるよね僕ら。

「ありがとうカハク。嬉しい情報だよ、少しは狩り方を変えたほうがいいかもしれないな」

「あのさ、今度行く時そっちに付き合ってもいいかな？ 私もそろそろ次の段階の異界に行きたいんだよね」

「カハクだけだと死ぬんじゃないかな…？ 僕も未だにユニーク相手だと半死半生だし」

「他にも仲魔はいるよ。呼んでないのはちょっと大きいからなんだよね。えーと霊鳥ハンサと魔獣カタキラウワと妖獣カクエン、最後に精霊アーシーズがいるよ」

「……いつの間に」

「んー。異界探索してたらいつの間にか、かな。結構皆気さくでいい悪魔達だね。戦闘中は大助かりだよ」

『サマナーって基本後方射撃しかしないのよねえ。凄く助かるんだけど下手したら戦う前に終わるのよ…』

アサシンかと思ったけどスナイパーの適正の方が強いんだな泉さん。絶対に敵対したくないな…敵に回すと厄介すぎる。

「ハーモナイザーのお陰で正確に撃てるようになったし、今度は1500スナイプに挑戦する予定だよっ！ 1000は95%行くようになったからねっ！」

「凄まじいね。僕も銃は使うけどスナイプなんて出来ないよ。命中率もたいしてよくないからショット・ガンを使ってるくらいだし」

『でもサマナーさんは色々出来るもの、万能系なのよっ』

「そだねー。ペルソナだっけ？ あれと魔石みたいなカードとか、私から見ても佐藤君は脅威だよ」

互いに隣の芝生は青いって訳か。

用は戦い方の違いかな。僕は戦いの才能は無い、戦術の才能も高良さんに比べると平凡だし魔法は基本使えない。

でも文珠やペルソナ、マジックカードがあるからそれを有効活用して戦える。

泉さんは前衛では素早い動きと巧みな武器さばきで急所を狙う一撃離脱タイプになり、遠距離では凄まじく遠い位置からの狙撃主とし

ても戦える。

僕がオールラウンドなら、彼女は遠近攻撃型って所だろう。

「タダじゃ無理だけど、そうだな…勉強をかねて4：6での取り分ならいいでしょうか」

「え…？ 本気でそれでいいの？ 多分迷惑掛けるかもだし」

「泉さんが使えるようになれば、僕が面倒な仕事を請けたとき格安で使えるかもしれないしね」

「おおう、流石目ざといね」

「サマナーさんから色々教えてもらえるんだからお礼言いなさいよねっ。私も色々教えてあげるわ。色々と、ね」

「あ、あのー。妙に眼が白いんですが…？」

『やれやれだな。女ってのはよくわかんねーわ』

『いえ…アズミさんも女性ですよねー応』

「アズミは女性というか姉御という感じなのです。本に書いてたのです」

やれやれ…賑やかだなあ。

と、電話だ一体誰からだろう、僕に電話を掛けてくる人間なんてそんなに居るわけないんだけど。

手元のCOMPを見てみると邪教の館のおじいさんから電話が来ていた。おじいさんからの電話なんて初めてじゃないだろうか…

一応電話番号は教えていたんだけどね。

「ちょっと静かにしてて。電話が来た」

『はい』

「もしもし…あ、はい」

これが僕の日常の終わりの第一歩だった。

ついに始まる非日常と日常の境目、僕が本格的に裏の世界に足を踏み入れる事になった電話だった…

Continue23 〈黙示録へのカウントダウン〉(後書き)

次回はミッションです。

どんなミッションにしようか悩みますね。

どのキャラクターと鉢合わせるか、サイコロでも振って決めるので
すよー。

Continue24 〈黙示録へのカウントダウン〉〈前書き〉

お気に入りか200件を超えました…本当にありがとうございます。

今回は短めです。

そして最後とんでもない事になります。

あとがきにそれについての簡易アンケートと次回コミュ及びステータスの纏め表を乗せています。

「よく来てくれたのう。助かったわい」

「いえ。おじいさんから直接電話が来るのは何かがあったのかと思
いまして。それで今日はどんな依頼なんですか？」

あの後泉さんには悪いけど帰ってもらった。

流石に仕事の事に口出すつもりは無いようで、少し残念そうにしな
がらも彼女はそのまま帰宅したようだ。

もしかしたら何処かの異界に居る可能性もあるかもだけど、その辺
は泉さんの自由という事で。

「最近、異常なほどに活性化している異界があるのじゃが、その異
界を沈めて欲しいんじゃよ」

「異界…ですか？ 邪教の館にとっては大して意味が無いようない？」

「いや、それが大有りなんじゃよ。あそこは霊的磁場が強い場所で
の、悪魔合体の時には電気や魔力を使うんじゃが、異界が大きくな
ってきたせいでその磁場が合体を阻害してしまうのじゃ。それだけ
でも厄介なのじゃが…その異界はこの邪教の館の直ぐ近くにある
んじゃよ」

「なるほど…それは厄介ですね」

異界のせいで邪教の館が運営できないというのは初めて聞くけど、たしかにそうかもしれないな。

あの世界はこの世界とは何もかもが違う、色々悪影響があっても不思議じゃない。さらにこの辺に住んでるおじいさんにとっては気が休まる事もないだろう。

依頼という形を通してならば僕も何の問題も無く力を奮えるし、僕が戦える程度の場所ならマグネタイト集めなどにも最適かもしれない。

異界封じを行わなくても、主を滅ぼせば異界は閉じられるしね。

「わかりました。それで報酬などはどうなります?」

「うむ…現金とそれ以外の報酬があるのじゃがどちらがよいかの?」

「現金以外ですか…?」

「そうじゃな…具体的には合体時に使う悪魔カードの低価格配布、もしくは低レベル悪魔なら無料配布。最後に真・悪魔全書の閲覧なんてどうじゃ?」

「カードは確かにありがたいですね。手に入るカードじゃランダム性が高いし、ここならある程度のカードは揃ってますから」

あと真・悪魔全書というのは真・女神転生やペルソナ3などで出てきた奴だろう。

一度仲魔にした悪魔を再度お金を払って買い戻すというデビルサマナーにとっては垂涎の品だ。

お金さえあれば無限に合体用素材悪魔と前衛や後衛ように戦闘用悪魔が呼び出せるようになると言う禁断の書だ。

勿論呼び出される悪魔は合体の時に消えた悪魔じゃなくて同種族の悪魔が擬似的に召喚されるだけらしいけど、これは便利なほうだろう。

問題は僕はそれほど仲魔がないから全書で呼び出せる仲魔が非常に少ない事なだけだね。

「悪魔全書ですか…それで呼び出した悪魔って従ってくれるんですか？」

「その辺は坊や次第、じゃな。信頼を受ける為には色々あるじゃろうし。いつそ合体用と割り切るのもええじゃろ」

「そうですね。低レベル悪魔なら意思が勝る事もないでしょうし」

可哀想とかは今更思うことは無い。

殺し殺されの世界にいらんだし、合体して強くなりたい悪魔も少なからず…いや多いほうだろう。

強くなれるんだし、合体に対する考え方も人間とは大きく違う事だろう。

難しい事を考える必要は無い。勿論僕の今の仲魔に対してはそんな事はひとかけらも思うことは無いけどね。

寧ろ合体はカード任せでいいと思う。楽だし危険性もないしね。

「この真・悪魔全書はな。特殊な呪術で作られておつての。使用者が今までに倒した、仲魔にした悪魔が全て乗るようになっておる。前者の場合は勿論乗らない悪魔も多いけどのう。

呼び出す時には多量のマグネタイトなどが必要になるのじゃが、それでも自分が扱えるレベルの悪魔が呼び出せるようになるのはメリツトじゃろう。本来なら一端のサマナーには見せる事はないのじゃが、坊やがこれを望むのなら使用を許可するぞ？ 勿論その時にかかる現金はタダにしておこう」

呼び出しの時のマグネタイトは此方持ちだとしても、現金が0円になるのは凄く魅力だ。

現金報酬に比べてこれからも邪教の館を利用するならば絶対に後者がいいだろう。

でもそうになると…其処までしてくれる以上、これから向かう異界はとんでもない可能性がある、と言う事なんだけど。

「では、現金よりそちらで。でも其処までしてくれるんですから、ただの異界…じゃないんですね？」

「ほほつ。流石に気づくか…坊や以外のサマナーなら現金だけで向かわせたんじゃないが、色々昔から見ってきたからの…勿論危険だと思っなら辞めるなり仲間を呼ぶなりしてよもいぞ？」

後者の場合の報酬は坊やに任せる事になるけどのう」

「わかりました。ではどんな場所なんでしょう」

「…うむ。異界を調べてもらった結果…あそこの主は英雄らしくての。生半可な力量では返り討ちになる事がわかった」

英雄…か。

そのものずばり英雄だ、古代に名を残した人間が人々の願いにより英雄になった存在。

Feteというゲームを参考にすると、クー・フリーンとかアーサー王、ヘラクレスなどが有名だろう。

女神転生でもその強さは折り紙つきだ。下手すれば魔人と同格、それ以上の能力を有している時がある。

ラリオウオウやジャンヌ・ダルク、ジークフリート。手が付けられないレベルまで行くとカンテイセイクン、コウテイ、マサカドなどどうしようもないのがでてくる。

どれもこれでも最低レベルが30以上ときたものだ。さらに普通の悪魔と違ってステータスが2倍以上高い時もある。

ビフロンスで苦戦している僕達にとっては…倒すことが出来るか曖昧だ。

これは…報酬は魅力的だけど受けない方がいいかもしれない…バクチすぎる。文珠でどうにかなるレベルならともかくだけど。

一応どんな英雄なのか聞いてみる事にしよう。倒せるレベルなら、受けるのも吝かじゃない。

「どんな英雄かはわかりますか？ 僕達でどうにかなるなら行きますけど、無理なら死ぬだけですし」

「うむ。一応主探索の依頼は出しておったのでな、名前だけはわかってるのじゃが。今まで確認されてきた英雄とはどうやら違うよ。うなのじゃよ。種族は英雄に間違いないんじゃが、その固体は確認された事がなくてのう…」

「未確認…新種の英雄ですか？ それは流石に…」

「異界のレベル自体は今の所12〜17レベルじゃからな、居たとしても25〜27レベルの英雄だとは思うのじゃ。おぬしはレベル20と聞いておるし上手く戦えばいけるかもしれんと、依頼をもちかけたんじゃよ」

信頼してもらえるのは嬉しいけど、27レベルとしたら…最悪を考えると54レベル相当にステータスを保持している可能性もある。

前回僕が一瞬で即死したのはレベル50台の上、更に弱体化していた死神・オルクスだ。

ピクシーの切り札であるジオ・ダインすら大してダメージにならなかったらしいし、下手すれば全滅するだろう。

手伝いと言っても泉さんのレベルはまだ10にも満たない。人間が相手なら狙撃で勝てるかもしれないけど、相手は悪魔で僕達より確実に強いはずだ。

連れて行っても死ぬだけだろう。

しかし受けなければ、この先邪教の館が使えない…下手すれば死んでしまう可能性もある。それは困るんだけど…

「僕以上に強いデビルサマナーや異能者にコネはないんですか？
正直僕の手に残りそうです」

「この辺で一番強いのがおぬしなんじゃよ…他のサマナーはいい所レベル1〜5程度だな。この前来た新米のお嬢ちゃんがある程度強い程度だった位じゃ」

恐らく泉さんだろう。

彼女のレベルで強いという事はやはりレベル20の僕はそれなりに

強いレベルだということだ。

あるゲームでも5レベルあれば一人前、10レベルで達人、15以上は一流と聞いたことがある…僕は20でストップしてるけどその考えで行けば一流に称されるんだろう。

でも所詮ただの人間だから、それ以上の悪魔が出たら逃げ惑うしかないわけで…

《なあ、サマナー。そろそろ合体次期じゃねえのか?》

《そうですね…私達がレベル20台になればいける可能性があるかもしれないません》

《私もあ、サマナー様が望むならいいですわよあ》

《アメリカは合体しても大して変わらないので残念なのです》

「皆…」

《正直私は参加しない方がいいかなーって思うけど、その辺はサマナーさんに任せるよ? サマナーさんが動くなら私も頑張るから、ね》

「今の内ならば、まだ合体は出来る。おぬしがやってくれるというならばカードなどは此方で無償で支払おう。このままでは邪教の館が機能しなくなってしまうからの…」

僕が支配できるレベルはいい所24レベルまでだ。ゲームとかだと自分よりレベルの高い悪魔は支配できないけど、僕は+5程度までなら問題ないらしい。

「というか寧ろ皆善意で付き合ってくれているのでレベルは関係ない可能性も多々あるけど…」

皆が20台前半程度のレベルになってくれれば、確かに勝てる可能性はあるだろう。文珠の大判振る舞いなどでいけば可能性はある。

「それに……上手く行けば再び覚醒できる可能性が出てくるかもしれない。」

「ハイリスク・ハイリターン…か。現実で死を感じ取って考えると悩んでしまうな…」

「駄目だった場合は直ぐに逃げます。それでもいいのでしたら」

「仕方あるまいな…英雄クラスを相手にするのじゃし、その場合の金の支払いも無しにしよう。最悪は政府の頼む事になりそうじゃが」

「出来る限りはして見ます。ここが使えなくなると僕達も困りますし、放置しておいても広がり続けたら大変な事になるでしょうから」

「はあ…女神転生の主人公でもフラリとやってきてクリアしてくれないものだろうか。」

「報酬とか全部あげるからやってほしいくらいだ。」

とりあえずは、ピクシーを除く皆の合体強化を行う事にした…

そして……初めての合体事故が起こってしまっう。

それが僕達にとって、希望になるかはまだ…わからない。

悪魔合体を行った!!

メルコムは……………!!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?

アズミは……………妖鬼・モムノフになった

リリムは……………天女・アメノウズメになった

アメリカは合体しレベルが上がり、スキルなどを覚えた

Continue 24 〈黙示録へのカウントダウン?〉 (後書き)

という訳でメルコムに合体事故発生です。

一応悪魔を6体選んでいます。うち一つはスライムです。

1、2、3、4、5、6の内好きなものをお選びください。

スライム及び、強い悪魔になってしまった場合はメルコム撤収のお知らせになります。

彼女の意思が残る可能性は34%ほどです。

選ばれなかった場合はサイコロを振りますのでご安心を。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：1票

かがみ：1票

つかさ：0票

みゆき：1票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票

知魔特化：1票

体特化：0票

速特化：1票

運特化：0票

バランス：2票

Continue 25 〈黙示録へのカウントダウン?〉 (前書き)

今回は5番目となりました。予想していた中である意味大幅にプラスな状況…

皆予知能力者なのでしょうか… (汗)

- | | | |
|-------------|-------|---------------|
| 1・龍王・ヴィーブル | レベル33 | 意思消滅 |
| 2・外道・スライム | レベル1 | 意思消滅 |
| 3・妖精・シルキー | レベル23 | 意思持続 |
| 4・魔人・アリス | レベル39 | 意思消滅 |
| 5・夜魔・ダツキ | レベル73 | 意思消滅?
特典有り |
| 6・天使・ヴァーチャー | レベル25 | 意思持続 |

Continue 25 〈黙示録へのカウントダウン〉

-メルコム視点-

真つ黒な世界に私は居るようです。

この世界に来るのは2回目…でしょうか？ 一度目は合体した時、
そして2回目は同じく合体した時。

前回と違うのは…世界がさらに黒く染まっているという事、いやな
音が聞こえているという事。

そして…自分という存在が希薄になってきている事。

私はメルコム、墮天使であり、元はエンジェル。

とはいえ、私は分霊。本来の存在である本体から派遣された微弱な
意思の霊体。

ならば合体時に自分が揺らぐのは当然という事なのでしょうか。

でも、前回の合体とは何もかもが違う…もしかして私はもう、我が
主の前に戻れないのかもしれませんがね。

カードによる合体では意思は消えないとは聞きましたので、これは
恐らく事故でもあったのでしょうか。

となると…私は……

・そこに居るのは誰かしらん？

声が…聞こえる。

怖い、声に言霊が乗って私を襲う。怖い…これは…この恐怖は!？

オルクス…いえ、そんな死神すら超越するような恐怖と…同時に感じる歓喜。精神がぐるぐると回って破壊されていくよう。

ダメ…ダメです、ここから逃げないと。直ぐに逃げないと！私のような脆弱な存在はその声の主の前には塵芥でしかない！

全力で翼をはためかせ声が聞こえた方向とは間逆に飛んでいく。

ただ、ただ、ひたすら恐怖で飛び出した。

・やあねん。妾の事、そんなに怖いだなんてえん。

「あ……………うう……………」

イタ…

居てしまった。

存在していた。

悪魔が…私達以上の存在が…

妖艶な姿、男性ならば恐らく見たただけでその肢体に酔いしれてしま
うほどの完成された肉体。

金色の髪の毛がさらさらと流れる度に、甘い匂いが流れて私の思考
能力を奪う…彼女の為になら死んでもいいとさえおもってしまう。

彼女の前では神も悪魔も全てひれ伏してしまいそうだと思えるほど、
其処には完璧な存在がいた。

白面九尾の大化生……

「夜魔……ダツキ」

「正解よん……………ごめん、いい加減さぶい
ぼでてきたわ」

「ひっ!?!? ……え?」

「いや、演出もかねて前世の口調で話しかけてたんだけど、話すた
び話すたびごとく、ぞわぞわ〜って来ない? ころ〜皆しんじやえ
っ!』って感じに」

彼女が口調を変えた途端に私を覆っていたプレッシャーが解除され
る。

とはいえ、彼女自体はなんら変わっていないのですが。それでも体を縛る恐怖心は消えています。

これは一体どういうことなのでしょう。

「あの…つかぬ事をお聞きますが…本当にダツキなのですか？」

「あー…そうね。ダツキな事に間違いは無いわ。ダツキはダツキでも転生体で、更に言うとな下級の分霊なんだけど。孫悟空って知ってる？ そいつが使う身外身の法みたいなものよ。」

帰っても本体に戻る事のない、本体からしたらゴミのような分霊ね。それでも雑魚よりは強いんだけど」

これで…最下級だということでしょうか…

彼女から感じる力は間違いなく死神オルクスを軽く超え…下手をすると魔王級だということに…

これで最下級だということは本体が降臨したら世界は直ぐに終わってしまいそうです。

「でさ、なんだか知らないけど呼ばれてるみたいなのよねえ。生贄はアンタみたいよ？」

「はう…やっぱり合体事故ですか…はかない人生でした」

合体事故は合体事故なのです…なんと…事でしょう。劇的ビフォーア　ターも真つ青な進化です。

とはいえ私ではどうしようもありませんし…我が主達とお別れなのは仕方ないですね。

でも……やっぱり残念です。

最初は恐怖だけで従いましたが、でも今は敬愛をもって尽くしていた。皆さんと共に戦うのが楽しくなっていました。

「いやいやいやいや。そんな絶望したみたいな顔されても私が困るじゃないの」

「いいんですいいんです。どうせ私はこういうオチキャラなんです、どうせ天使から堕ちて墮天使になりましたし墮ちるのは慣れてます」

「誰が上手い事言えと。あーもうっ！　プレッシャー無くなったら暴走一直線ねアンタ…」

「寧ろダツキ様も変わりすぎでは…？　というかダツキ様なら前者の話し方が普通では」

「アンタ…いつまでも私にあんな羞恥プレイしろって…？　あの格好も今の世の中出てみなさいよ、痴女扱いよ」

たしかにあんな恥ずかしい姿で外に出るくらいなら私は引きこもりますね。

天使の姿も似たようなものなので他の方の事はいえませんでした、今は墮天使なのでいいんです。過ぎた事はいいいんですよ。

というか何故ダツキ様は今の世の中知ってるんでしょうか。一度呼び出されたのかもしれないね。

これから哀れに消えていく私には関係ないことですが。

「ああ…我が主よ。お力になれない私をお許してください。具体的にはお隣に居るダツキ様がお役に立ってくれるでしょう。多分私分も入っているのできつとお役に…」

「何消えること前提にしてるのよアンタは…というか私は自分より弱いやつには従わないわよ？ 殺すつもりはないけど」

「そんなっ！？ ひとでなしっ！！」

「いや、私人じゃないし…というかさつきから随分と変わってない…？」

「ここは『わかった、私に任せておきなさい。貴女の仇は私が取るわ』とか言うのがお約束だと思いますよ！ ピクシー様が読んだ本とかでっ！」

「……………どこから突っ込んだら良いのかしらねこの子。自分が消えるっていうのに微妙に余裕があるというかなんというか」

「いえ、どうせ消えるのですから今の内にはっちゃけようかと思

まして。恐怖も消えましたし私今回主人公ポジションっばいですがらギリギリまで」

「ストローップ！ アンタそのセリフギリギリだからっ！ 落ち着くのよ！ 落ち着きなさい！！」

はあ…ダッキ様はその辺のフリーダムに慣れていらっしやらないのですね。

ピクシー様や泉さんを見てみるとその辺に結構影響されますよ？ これからはお仲間になると思いますから色々教えてもらおうといいですね。

「何その、『頑張りなさい』みたいな優しい瞳は…えーいつ！ 話が進まないから続けるわよっ！ アンタは消えないわ。というか多分違うのになるんじゃないの？」

「え？ というと何か武器になったりするのでしょうか？ となると私は我が主の銃になりたいですね。具体的にはピストルがいいかもしれません。こうインテリジェンス・ガンなんて響きがいいと思いませんか？」

「前向きね…アンタ…」

「人生諦めた者勝ちだと最近よく思います。こんなご時世ですし。それにいいじゃないですか、緊急時には堕天使が真実の姿を現して『我が主は私がお守りします！』とか出来そうですね」

最近ピクシー様から色々な漫画の本などを見せてもらいましたので、その辺の情報に詳しくなりました。

え？ 元天使がそんなもの読むな、ですか？

今の私は墮天使だからいいんですよ。墮ちてますから、えつちな事だつてやろうと思えば出来ますよ。あ…銃なので出来ませんね…狙つてたのですが…

「よよよよよ」

「今度は行き成り泣き出すし…」

「ダツキ様にはわからないんです、この悲しい気持ち」

「あ…ごめん…って何で私が謝らなくちゃいけないのよっ！」

「まあ、その辺は仕方ないので諦めます。長い人生銃になる事だつてありますよ」

「銃になるとは一言もいつてないんだけどね…まあ、想いは力になるって言うしそれでいいんじゃないの」

「想いは力に…と言う事は…この寂しい胸も大きくっ！！ 我が主よ！ きつと私はやってみせますっ！！」

「突っ込まない…私はもう突っ込まないわよ」

「つつこむ、つつこむと…ダツキ様って実はえっちなんですね？」

「うがああああああっ！？ 違うでしょ！！ はっ！？」

実は弄ると面白い方だという事がわかりました。

なんだか私が知っているダツキ様と違ってお優しいそうですし、きっと我が主のお力になってくれるでしょう。

私もナイスボディな銃になって我が主をお守りしますっ！

「はぁ…ほら合体が終わりそうよ」

「くれぐれも、ダツキ様くれぐれも我が主を苛めないで下さいませね？ お願いですから」

「はいはい。わかったわかったわよ」

私の体が変わっていくのを感じる……意思是消えませぬ。今しばらくはこの姿で我が主をお守りいたしますね。

………

………

…

合体する場所が物凄く揺れている。

これは…一体どうなっているんだ？

「おじいさんっ、これは!?!」

「むう……まさかここで合体事故とはのう……」

「合体事故!?!」

ゲームでも偶にあるシステムの一つ、それが合体事故だ。

本来出来るがる悪魔が違う悪魔に変わってしまうという特殊システム。

大抵の場合は失敗扱いとなつて、意思も何もないスライムになってしまうのがデフォルトだけど、運が良ければ自分より強い悪魔を仲魔にすることが出来るというバクチのようなシステム。

どちらの場合にしても、本来の悪魔の意思は塗りつぶされてまったくの新しい悪魔が登場する。

ゲームなどでは現れたらそのまま従えることが出来るけど、この世界ではどうなるかわからない。

メルコム……………

消してなるものかつ!!

『サマナーさんっ!?!』

「メルコムっ! 戻ってこいっ!!」

文珠に力を込めて合体魔方陣に投げ込む。

投げた物は【生還】と【意識固定】と【幸運】の合計8個、意識固定によって彼女の意思を固定させて、【幸運】と【生還】の文珠で帰還させるつもりだ。

大事な仲魔を事故かなんかで消させてたまるものか。強い仲魔なら僕が頑張って強くなればいい。

「なんとなっ!?! 波長が安定してきておる!?! こんなことが……………」

おじいさんは丁度良く機械の方を見ていたので文珠には気づいていない。

良かった、見られてたら色々面倒な事になるし…メルコム。ここで勝手に消えるのはやめてくれ。

『出てくるぞ…鬼が出るか蛇が出るか…だな』

『メルコム…大丈夫かな』

光が収まると其処には…

『随分と荒っぽい歓迎ね。とりあえずアンタがサマナー？ 締まらない顔ねえ。夜魔ダツキ、降臨したわ。コンゴトモヨロシク』

『メルコム…？ じゃないわよねえ』

『当然よ、私は私。白面金毛九尾、妖怪の女王と呼ばれたもの。何を何度も滅ぼした大化生よ』

ダツキ…蘇・妲己かっ！？

封神演戯などで有名な九尾の狐。日本では玉藻御前として国を滅ぼしかけて殺されたという、邪悪とされる存在。

漫画ではGS美神ではタマモという玉藻御前の転生体で、ある漫画では恐怖を糧に強くなる大妖怪…

僕なんか扱える悪魔じゃないことだけはわかる。

それより、それよりもだ。

「メルコムは…どこだ」

「坊や…多分その悪魔はな…」

『あ、はい呼びましたか我が主よ』

「え…?」

今間違はなくメルコムの声が。見回してもメルコムの姿は無い。

『我が主よ、ここです。私はここに居ます』

『これね』

そついうとダツキが持っていたものを見せる。

其処には、彼女が持つには不釣り合いな拳銃があった。

黒い色の重厚なタイプの拳銃…ハンド・ガンだ。メルコムの声は間

違いなくこの拳銃から聞こえてきた。

『我が主よ、こんな姿になってしまいました。が墮天使・メルコム帰還しました。これより先は貴方様を護る銃として我が力お使いくださいませ』

『…ご都合主義だねえ…でも、良かったよ』

『ピクシーさん、泣いてますわよお？』

『な、泣いてないもんっ！これは水が流れてるだけでっ！！』

『大丈夫、とは言えねえが。意思がある限りは存在してんだろ？合体事故だったって言うし、残ってるだけ御の字だと思えや』

『そうだね…お帰りメルコム』

『はい、我が主よ』

姿こそ変わり果ててしまったけど…彼女は戻ってきた。それだけでも嬉しい。

もしかして銃になったのって、僕が意識固定しかしてなかったからだろうか…姿固定とかも投げておけばよかったかもしれない…今更か。

『感動の再開はいいんだけどさ、私を無視しないでよね…これでも

魔王級なのよ、私』

「あ、ごめん…で君はダツキでいいんだよね」

『そうよ。合体事故で呼ばれたからアンタじゃ扱えないけどね』

くすりと笑うダツキ。

もし戦うとか言ったら…異界の英雄など目じゃない戦闘力で虐殺されそうな気配なただけど…

従ってくれるといいなあ…

『まあ、見た目からして弱そうだし、そんな事はしないわよ。アンタの仲魔になってあげる。但し、私は基本なにもしないから、そこは宜しくね』

「え…ああ、うん。それでも助かるけど」

『アンタが私を御せるようになれば、動いてあげなくも無いわよ。多分まだまだ無理だろうけどね』

『え。ダツキ様手伝ってくれるってさっき言ってませんでしたか？』

『んなこと一言もいってないでしょーが。苛めないとは言ったから戦って勝てたらとか言わないんだから感謝しなさいよ？』

そついで捨てる彼女が直ぐにCOMPに入ってしまった。

召喚欄を見るとダツキは召喚不可能になっている。レベルは……

……

「レベル73…見た感じじゃさっぱりわからなかったけど、僕は魔王クラスと普通に話してたのか…」

『うわぁ…サマナーさん無事でよかったよお』

『結構賑やかなお方でしたよ。からかいやすいと言いますか』

メルコムがなんかアレな方向に進化してる気がする。

微妙にMっぽくなったし銃になったし、破天荒になったし…彼女はどこに進化するんだろうか。

というかメルコムだ。これは俗に言う剣合体の状態なんじゃないだろうか。

ある一定の悪魔と特殊な武器を合体させると、合体武器になる。

大抵の場合、それらの武器は悪魔に関連する有名どころの武器になる。Feteで言うと宝具の事だろう。

セイテンタイセイと合体させれば如意棒、シヴァと合体させるとピナーカ。ヴィシユヌと合体させるとスダルサナという武器になったりするけど。

メルコムの場合は其処まで有名じゃないので、オリジナル的な武器
なはずだ。

重さも大して感じないし、これからも役に立ってくれるかもしれない。
い。

でも、とりあえず。

「お帰り、メルコム」

… 『ただいま戻りました我が主よ』

彼女が戻って来た事を喜ぶことにしよう。

後は、異界か。ある意味イレギュラーが増えたけど使えないみたい
だし、メルコムという戦力が無くなってしまったのが痛いけど、行
くしかない。

文珠の個数はまだ余裕があるし、防御などに力を入れて戦うことに
しよう。

『後は異界だな。メルコムの分はオレがカバーしてやるよ』

『私も頑張りますわあ。』という訳で、終わったたらご褒美が欲しい
ですのサマナー様あ。具体的には…うふふふ』

『淫魔から変身しても中身が淫魔だったっ！?』

「アメノウズメはえっちゃんなのです。そして何気に今回初セリフなのです。放置は寂しいのです」

『あははは…アメリカちゃんも一緒だからね?』

『この身は銃になりましたが、それでも我が主のお役に立ちます。存分にお使いくださいまし』

いつものように戻る僕達。

やはり、この雰囲気が一番好きだな。だから…この面倒な依頼もさっさと終わらせよう。

魔銃・メルコムを獲得した。

夜魔・ダツキが仲魔になった。レベル制限により、召喚できない。命令を聞かない。

・ミッションが開始されました。

異界レベル12～17 出現予想悪魔、魔獣、妖獣、怪異、夜魔
墮天使、魔王を確認。 ボス：英雄確認。

依頼ナンバー03、『突然変異の異界を封鎖しろ』 報酬：邪教

の館での合体時のカードの都合、真・魔界全書を現金0円で使用可能。

COMP ステータス更新・・・

Continue25 〈黙示録へのカウントダウン?〉 (後書き)

という訳で、意思是消滅しませんでした。武器になったメルコムでした。

夜魔ダツキの元ネタは自作のオリジナルSSの妖狐・魅姫から来ています。

関連性は…分霊なので分身だと思ってください、あとその辺まで詳しく考えてないので気にしないで下さい。どちらにしてもそちらとクロスはないので。

どちらにしても暫くは何もしてくれませんので居るだけのキャラになりそうです。

出てくるとしても中盤か後半頃になりそうですね…

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：2票
かがみ：5票
つかさ：0票
みゆき：2票

覚醒時ステータス成長表

力特化：2票
知魔特化：1票
体特化：0票
速特化：2票
運特化：0票

バランス：4票

Continue26 〱黙示録へのカウントダウン〱〱 (前書き)

探索一回目です。

雑魚相手には早々負けることはなぞぞつですね。

簡単な幕間な感じですよ。

Continue 26 〈黙示録へのカウントダウン〉

アイテムなどを沢山買い込み僕らは今、件の異界に来ていた。

今回は即死対策の為に物反鏡や魔反鏡をいくつか持ってきている、それなりに魔貨が痛いけど命には代えられない。

即死魔法対策用のサクリファイスも用意している。宝石で済んだのはありがたかった。

購入品での対策アイテムはこのくらいで、次は文珠で【身代人形】と入れて常に所持している。

スケープドール、俗に言う身代わり人形そのままの意味だ。僕がイメージしているのは、僕が受けた全てのダメージを代わりに肩代わりしてくれる呪具を想像している。

これで万が一にも即死したとしてこれが1回だけは護ってくれるだろう。

沢山作ろうと思ったけど、仕様かなにかわからないが1個分だけしか発動してくれなかった。

1回だけでも護ってくれるのだから御の字としておこう。

ペルソナをつかってリカームのカードも複数枚作っておいたので配っておく、チャクラドロップが湯水のように消えて行ったよ。おじいさんが安値で譲ってくれたので助かった。

というわけで…

「行こうか皆」

『おーっ』

『参りましょう、我が主よ』

『さて、どんな悪魔がいるかな。腕がなるぜ』

元気に言うピクシーと僕の手から聞こえるメルコムの声、モムノフが斧を肩に担ぎ不敵な笑みを見せつつ辺りを見回している。

『くすくす。ご褒美のために頑張りますわあ』

「にゅーばーぢょん、アメリカの出番なのです。頑張ってください主人様のお役に立つのです」

合体しても中身の変わらないアメノウズメに戦慄する…アメリカはある意味僕達の清涼剤と言ってもいいかもしれない。

ちなみにダツキは寝ている、興味ないから寝るそうだ。

彼女の力を借りられれば楽なんだろうけど、レベル20じゃレベル73なんて使いこなせる訳が無い、殺されないだけ御の字と思わない

と。

「しかし、登場予定悪魔に魔王って……色々おかしいよね」

『だよねえ〜。エンカウントしない事願いましよ、サマナーさん』

『はっ。どうせこのレベル帯で出てくる魔王なんぞ高がしれてらあ、それに魔王ごときに震えてたら英雄なんて勝てやしねえ。気楽にとはいわねえが考えすぎは毒だぜ?』

「それは、そうだね。戦うのはどうせ変わらないんだし、そこまで突出して強い訳でもないからいつも通りに行こう」

まずは百太郎で辺りを警戒しつつ歩いていく。

常に黄色なので油断は許されなさそうだ、これが無くても僕自身で気配が濃い事くらい理解できている。

やれやれ、いつものあの異界に慣れすぎたかもしれないな。

あの異界は早めに閉じて、もう少しレベルの高い異界を探すのかもしれないかもしれない、僕の頭打ちの状態を何とかしてくれるかもしれないしね。

「…百太郎に反応っ！ 皆応戦準備！ 行動パターンは1で！」

『はーいつー』

行動パターン1、つまり初見の相手に対する威力偵察及びガードポジションだ。

無効ならまだしも、吸収や反射されたら目も当てられないのでアナライズや軽い攻撃などで相手の相性を確かめるのが、この世界で生き抜く基本中の基本と言えるだろう。

犬の首だけのような悪魔3体と全身から雷を放電している悪魔が2体、いきなり数が多いな…やれやれだ。

アナライズするまでもなく雷を放電している悪魔は電撃の耐性がそれ以上があるだろう。

「全員、モムノフは雷を放ってる悪魔を牽制！ ピクシーとアメリカは僕の後ろで待機、アメノウズメは犬の首の悪魔を牽制して欲しい！」

『あいよっ！ 食らいなっ！』

『犬の首だけじゃそりませんわねえ…』

襲い掛かる悪魔を牽制し始める二人、数では押されているけどレベルが上がり強くなった二人には十分抑えられる悪魔のようだ。

二人とも軽く攻撃を放ち、物理耐性を調べる。普通にダメージが通っている所を見ると通常攻撃は有効なようだ。

すかさずモムノフは全力攻撃にシフトする。攻撃が通るなら遠慮は
いらなからだ。

『ジオンガッ！！』

『うがつ！？ てめえ…やるじゃねえか！！』

「！ ピクシーはモムノフにディアラマを！ 解析：完了！ アメ
ノウズメが相手をしてるのはイヌガミだ！ 弱点は破魔系！ モム
ノフの方はライジユウだっ！ マハ・ジオとジオンガを所持して
るっ！ 電撃吸収の破魔弱点だ！ 二人ともマハンマカードを！ ア
メリアはマハ・ムドを全体に！」

いつせいに動き出す仲魔達。

ピクシーの癒しの魔法が電撃を受けたモムノフを癒していく、かな
りの痛手のはずなのに、一瞬で回復する様はいつ見ても不可思議に
見える。

アメリアのマハ・ムドが敵全体を呪詛で取り巻いていく、ムド系の
全体魔法でムドオンの弱体化だけど、それでも彼女の魔力で使えば
侮れない。

殺せなくても動きを止めることには成功しているようだ、イヌガミ
の1体は上手い具合に即死したらしい。絶叫を上げて崩れていく。

僕も同時にメルコムから力を借りてやっかないライジユウにターゲ

ットをあわせる。

どうやら再びジオンガがマハ・ジオを撃とうとしている様だけど、甘い。

「メルコムっ！ 僕に力を！ マハンマアっ！！」

『おら、逝っちまいなっ！！ マハンマカード！』

二重の光の螺旋が今まさに雷撃を放とうとしていたライジユウ二体に降り注ぐ。

『うぎゃああああっ！？』

『あぎぎぎぎっ！？ いいいいいいっ！？』

雷を撃つ事すら忘れてのた打ち回り消滅していく。反対側ではアメノウズメがマハンマカードを使ってイヌガミを消滅させていた。

辺りにはとりあえず悪魔の強い反応は無い、それにしても行き成り5体か。まだ勝てそうな相手とはいえ気が滅入るな。

前衛役のメルコムが居ない分前衛が足りないのがネックかもしれないな。

「行き成り大歓迎だね。この先が思いやられるよ」

『でもマグネタイトは美味しいね。ほらほらカードと…宝玉もあつたよ』

『こちらでもカードがありましたわ』

「宝玉は嬉しいです。回復魔法が慢性的に不足してるですし、アメリアもディア系を覚えなくてはいけないです」

「確かにね…アメリアにはメ・ディアとリカームは覚えてもらいたい。マグネタイトは暫くアメリアに回る事になるかな」

『カードも便利だが枚数に限りがあるしな。というかオレはカード使うより普通に戦いてえ』

「それもいいんだけど、ライジウのマハ・ジオは危険だったからね。殲滅策をとらせてもらったよ」

『ああ、まあいいんだ。オレの独断で危険になったら元も子もねえしな。でもその危険が無いならオレを戦わせてくれよ?』

「勿論だよ、モムノフの戦力はアテにしてる」

さて、そろそろ進もうかな、ぐだぐだしても仕方が無いしね。

今日中に全部を回るのは無理だし、調べられるだけ調べてみよう。

「よし、皆行いようっ！」

……

……

……

- モムノフ視点 -

オレの斧が悪魔の首を跳ね飛ばす。

びしゃああっと血が噴出してオレの体を真赤に染めていく。

この時が、この時こそがオレが生きていると実感できる時間だ。

『死、ねええええええっ！』

『はっ！ あめえよっ！！』

墮天使の剣を斧で軽く受け止める。力はオレの方が上回ってるから

この程度の芸当は軽いものだ。

そのまま軽く剣を逸らして回転する勢いで右薙ぎで斧を払う。

避けることもできずにズブリと首からなぞるように、斧が体を切り崩していく。

肉を削ぎ骨を絶つこの感じが手に伝わる。

『ぎっ!?! いぎっ!?! うっうっうぎゃあああっ?! い、痛いっ!?! 痛い痛い!?! あびゅっ!?!』

ぱあん、と風船でも割ったような間抜けな音を出して目の前の墮天使の頭が爆ぜた。

ふと後ろを振り向くとサマナーが銃…いやメルコムだな。それを構えていた。あの一瞬で頭を打ち抜いたのか、中々やるじゃねえの。

残心はしないって感じだな。悪魔の中には真つ二つになっても動き出すやつがいるくらいだ、アレくらいが当然だしな。

『おのれえええっ! 雑魚どもがあっ!』

『うふふふ、その雑魚に負けてる皆さんは何かしらねえ。ああ、貴方達では体も疼きませんわあ。この熱い痺れ…サマナー様に溶かしてもらわないとお…』という訳で死んでくださいなあ』

天女だよな、今のアメノウズメの奴は…なんだか前のリリムの時よりおかしくなってる気がするんだが。

その分強くなってるから文句はねえんだが、なんつーかあれとオレが同じ女性つてのが信じられねえな…まあオレ自身は自分が女だなんて思ってるねえけど。

オレは性別云々より、戦うことが好きなんだ。それ以外はとりわけどうでもいい。

仲魔とサマナーは護り、共に共闘して。敵は殺すだけだ、それでいいし、これからもかわらねえ。

自分より強い奴はごまんと居るからな、最強をなのもりはねえけど、強さにはまだ憧れている。

サマナーがこれ以上強くなれないと聞いた時は、流石に少しショックだったぜ。オレはこれ以上強くなれねえのかってな。

でもよ、だからって見捨てる気はねえんだ。あの時はついサマナーが弱いままだったら外れるって言ったけどな。

「アメリカ、ザンマを！」

「はいなのですっ！ ザンマっ！」

アメリカの風の魔法が飛び回っている悪魔に命中し地面に叩き落さ

れる。

そこにオレは直ぐに駆け寄って首向かって全力で斧を振り下ろす。タル・カジヤも貰ってるからな、尋常じゃねえぞ？ 今のオレはよ。

斧が砕けそうになるくらいに振り下ろし悪魔の首をあっさりと跳ね飛ばす。

大体の悪魔は首さえ飛ばしてしまえば死ぬからな、簡単な除去法としては一番最適だ。

もちろん自分達がそれをされる可能性もあるけどな、その時は自分が弱いだけだし仕方ねえと諦めるさ。全滅さえしなければリカームで蘇生できるしな。

「いいタイミングだよモムノフ」

『へつ。まだ終わってねえぞ？』

「だね。ディアラマはいるかい？」

オレの血まみれの姿をみて微妙に青くなりつつも心配しているサマナー。

慣れたと言っても、怖いもんは怖いだろうに：変わったサマナーだ。オレがどこまでも付き合っつてやりたいと思う程度にはな。

今のサマナーならオレがこれ以上強くなっても大丈夫だろう。オレ

も強くなったからと言ってサマナーを殺すほど毛嫌いはしてねえしな。

やれやれ、甘い人間と悪魔にほだされてオレも甘くなったのかも知れねえな。

だが…悪くない甘さだ。全員敵つても戦う自身としては歓迎できる状況だが、疲れるのもわかってる。

少しだけでも味方が居るのは、助かるしな。

それにオレは信じてるんだ、このサマナーの凄まじい力を。

あの時見せたペルソナを、あれをいつか御して戦っているサマナーを見てみたい、オレはそう思っている。

今すぐ見捨ててそれが見れなくなるのはもったいないだろう？

だからな…

『てめえらは邪魔なんだよ。出てくるなら出てくるで、せめてサマナーの覚醒の糧になれや。出来ねえなら弱えんだからでしゃばるんじゃないやねえっ!!』

全力で暴れまわり辺りの悪魔を駆逐していく。

まだまだだな、無駄が多いし威力が弱い…オレはまだまだ強くなれる。いや強くなるぞ。

強くなったサマナーが背中に居るってのは仲魔冥利に尽きるってもんだ。

『きやがれや三下がっ！ このモムノフの斧でミンチにしてやるぜっ！！』

『きゃ〜、かつこいいですわ〜。濡れちゃいますのお〜』

『よるな変態がっ！？ オレはノーマルだっ！！』

『ええっ！？ サマナー様に対する反応から百合の人かと思いましたがのにい』

「ご主人様、百合ってお花ですよ？ なんでモムノフは百合の人なのですか？ モムノフの種族は妖鬼じゃなくて妖樹です？」

「いや…アメリカは覚えなくていいからね、永遠に」

『なんでもいいから、戦ってよ〜。マハ・ジオンガアっ！！ ふう〜…百合は百合でいいけどサマナーさんはダメだからねっ！！』

何でこいつらは戦闘中でもくだらねえことが好きかな…

後、オレがサマナーとなんてありえねえよ。オレはそもそも色恋に興味なんざねえしな。

そういうのはお前らでやってくれ、サマナーの腰がガクガクいわね

えくらいなら何もいわねえからよ。

やれやれ、色ボケ相手は大変だな。サマナーも苦勞するぜ。

『休む時間はなさそうだな、ホレ奴さんきやがったぜ。見慣れないのもいるしパターンは1か？』

「そうだね。この辺で物理反射はいないだろうけど気をつけて」

『はっ、オレがそうそう同レベルの悪魔に負けるかよっ！ 砕いて潰してミンチにしてやるさ』

「味方だから頼もしいけど、敵だと怖いセリフだよね」

『どうみてもモムノフさんは悪役側ですわよねえ。私はヒロイン枠で』

『寧ろヒロインだよね、というかヒロインは私ねっ！ 私！』

『ヒロインどころか無機物になった私に対するあてつけですか！？ うっう、バストレヴォリューション期待してましたのに…』

「皆元気です。さてさて戦闘開始なのですよ」

おっしや、殺せば殺すだけマグネタイトが手に入る。そうすりゃまだまだ強くなれるからな。

てめえらはオレ達のエサになってくれや。

くくっ、笑いが止まらねえのは勘弁してくれ、楽しいことは楽しいしな、こいつらとのじゃれ合いも、これからの殺し合いも。

英雄との戦いも楽しみだ。サマナーを護りつつ、オレが楽しむ…中々難しいがどつちもこなすのが仲魔としての使命ってやつだしな。

『はっはーっ！！ おらおらっ全員逃がさねえぞっ！！』

勿論この後もマグネタイトを稼がせてもらった。

流石に時間が過ぎたんで撤退したけどな、時間もあまり無いようだし、明日が本番になりそうだ。

英雄さんよ、オレとアンタどつちが強いか楽しみだぜ。

- モムノフ視点解除 -

異界を探索した！

いくつかのアイテムを獲得した！ マグネタイトと魔貨を手に入れた！ 成長限界によりレベルは上がらない！

ピクシーはマグネタイトを使いレベルが上がった！！

進化の兆しが見られる……

COMP
ステータス更新
・
・
・
・

Continue 26 〈黙示録へのカウントダウン〉〈後書き〉

モムノフ視点からでした。

なかなかグロイ視点が多いのが特徴です。

戦闘好きですしねえ：戦闘描写はほぼ飛ばしました、あれを懇切丁寧に書ける人はプロだと思うのです。私には無理です。

まだまだアンケートは受付中です、良かったらお答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：2票

かがみ：5票

つかさ：0票

みゆき：2票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票

知魔特化：1票

体特化：0票

速特化：3票

運特化：0票

バランス：4票

Continue27 〱黙示録へのカウントダウン〱〱 (前書き)

そろそろミッションの後半です。

後?〱2話で終わらせる予定なのですよ。

それでは、短いですが楽しんでもらえると嬉しいです。

Continue 27 〈黙示録へのカウントダウン〉

- ??? -

『メギドの炎はすでに用意された』

『神の悲しみの涙も全てを覆いつくすだろう』

『人は愚かにも、世界を喰らい欲望に溺れている』

『傷つけ、傷つけ、傷つけ、人間はお互いを愛するといいつつ、憎み、嫉妬し、滅んでいく』

『意味もなく殺し、犯し、すでに人間は神の声の届かない所まで来た』

『同胞さえ殺し、神の愛を忘れている』

『哀れな人間よ…汝らは裁かれなくてはならない』

『本来人間は終末の日に暗黒の大王によって滅びるはずだった』

『其処に我々も赴き、邪悪を廃し世界を救済するはずだった』

『だが終末の日…我らの神は慈悲をもって暗黒の大王を退けた』

『ただ、人を愛しているというそれだけで、神は世界の終末を退け

た』

『人を無心に愛する為に、神は人間を救いたもうた』

『いと心深き我らが神は、その御力で人間を、世界を、星を救いたもうた』

『だが』

『だが…』

『だが……』

『だが………！』

『人間は神の愛に感謝することもなく、そして気づくこともなく情性に生き続けている』

『神に感謝することもせず、日々欲望に愛欲に浸るだけの人間に最早情けなど不要』

『人間はその上神を侮蔑の言葉で罵り、自分達こそが世界の頂点だと憚りのたまう』

『すでに世界は終末を超え、破滅に近づき行き着く所まで来てしまった』

『世界を汚し、あまつさえ他の星すらも自分達の欲望のはけ口にしようとしている』

『愚かにも世界を傷つけたのは人間だというのに、それでもまだ足りないと言っ』

『最早人は滅ぶしかない』

『それが神の愛』

『それが神の慈悲』

『それこそが神の嘆き』

『しかし…それでも尚神は人を信じようとしている』

『救世主の生誕』

『人間を導き神の愛を知らしめる為に』

『神は人を愛している』

『神は人を信じている』

『神は人を求めている』

『我々はただ、それに従うのみ』

『救世主の生態を祝福し、今一度人間に機会を与えよう』

『神を信じ、敬愛し、祈るものには、深き愛を授けよう』

『我々は救世主とその使徒を救おう』

『我々は救世主とその使徒を愛そう』

『我々は救世主とその使徒を許そう』

『それが神の意思ならば』

『我々はそれに従うのみ』

『だが、それ以外の愚かしい人間は滅ぼさなければいけない』

『傲慢に染まり、淫欲に染まり、強欲に染まる人間』

『憤怒に染まり、怠惰に染まり、嫉妬に染まる人間』

『飽食に染まり、七つの大罪に犯された愚かな人間』

『世界は滅び、新しい命を求めている』

『神の裁きの日は近づいている』

『メギドの炎と神の涙が世界を焼き尽くし洗い流す』

『残りしものは救世主と神の子のみ』

『我々は告知しよう。人間に終わりの日を』

『我々は断罪しよう。人間の原罪全てを』

『神の涙はもう必要ない』

『神は微笑をもって人間を救し、新たな楽園を作り出す』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に』

『その為に、悪魔を滅ぼし、人間を滅ぼし、この世の全ての悪を滅ぼそう』

『我ら3億165万5722体の天使の力を持って』

『断罪を』

『救済を』

『終末を』

『新生を』

『世界の終末の時はここにきたれり、人々よ心せよ。神の愛の終わりがやってくる』

……

……

……

二日目。卒業式も後僅かと言った所まで来ている。

もう直ぐ僕は高校卒業の資格を取れると言う訳だ、恐らくそれと同じ時に僕は家を追い出されるか両親があの家を残して出て行くかするだろう。

すでに離婚の準備は整っているらしい、僕としてはどちらでもいいのでさっさとして欲しいと思っているけど。

家を追い出されてもお金に余裕があるので安いアパートでも借りようと思っている。幸いすでに1室良い場所を見つけているので安心だ。

家財道具はカードに纏められるし、必要ないものはすでにカードにしている。

洗濯機などはリサイクルショップで購入+カード化済みだ。引越し代金がかからないという点でマジックカードは僕的能力でとても重要な割合を占めている。

それはそれとして今日も依頼の続きだ、この前死んだ時は丁度こういう感じの時だったので警戒だけは怠っていない。

【索敵】 【警戒】 【絶対防御】 【究極防御】とやりすぎと言った位に文珠を防御に回しているけど、相手は英雄。これでも足りないか

もしれない。

文珠は万能で強いけど無敵じゃないのは漫画を見ても明らかだ。

横島が文珠でアシユタロスに【粉碎】を使ってほぼノーダメージだったと言う事もあるし、自分の数十倍、数百倍の相手には効果が薄いと考えていいだろう。

【模写】という手も考えたけど、どうせ自分にだけダメージが帰ってくるはずだ、一撃で殺せばノーリスクかもしれないけど多分無理だろう。

攻撃に回すよりは防御に回したほうが文珠は強い気がする。戦闘時になったら【】（エイワズ）と【】（アルジズ）のルーン文字を使う予定だ。

どちらも一文字だけで強い意味と魔力を持つルーン文字を使っている。【】は防御のルーンで攻撃の回避、危機の回避を意味している。

【回避】の文珠でも構わないが2つも文字を使うし、ルーンと漢字ではやはり魔力を持つルーンに軍配が上がる。

そして【】は保護のルーンだ。防御的な意味もあるがこれはおまじないといっていいかもしれない。

このルーンの意味は大切な対象を護ったり、逆に護られたりするという意味合いがある文字だ。

能力的には自然や仲魔の援護能力を上げたり、僕自身が仲魔に対す

る援護能力を発揮することになる。

他にも色々なルーン文字があるけど、直ぐに覚えられて使えそうだったのがこの2文字だけだったりする。

「大体予想される悪魔は全部倒し終えたかな、未確認なのは魔王と主である英雄くらいだね」

『二人並んでたら嫌だよねぇ』

『魔王と英雄が組むのって…正直見たくありませんね』

「どっちも倒すのですから意味ないです」

『はっ！ アメリアの言う通りだぜ。どっちにしろ殺すんだ気にすんなって』

『うふふ、とかいいながら警戒を止めないモムノフさんに痺れて憧れて濡れちゃいますわあ〜。ああ〜ん。サマナー様あこの火照りを沈めてくださいなあ』

「絶対それ僕巻き込まれてるだけだよね」

正直魅力的過ぎる身体で迫られたら理性を保つ自身がないのでやめてもらいたい。

アメウノズメはその辺よくわかってないのか、わざとなのか本気なのかよく誘惑してくるので大変だ。

勿論男としては嬉しい状況なんだろうけど…物凄い泣きそうな目でピクシーに見られるから、そう言った事はやってない。

女神転生の主人公達って、こついつときどつしててるんだろうな…もしくは普通のサマナーは。

あ、そうか普通に致してるのかも…しれないな…

『ううう…おつきくなれば…おつきくなればあ…あんなことやそんなことや…激しい大人のキスとか…くすん』

『ファイトですピクシー様。ほらほら私なんて無機物ですよ』

『そこで自虐ネタを取り出すメルコムさんも遅くなりましたわねえ』

『好きで自虐ってる訳じゃないんですけどね。あ、でも我が主がグリップ部分を持つ時結構気持ちよかったり…きゃっ』

『私も銃になるううー！！』

『それって本末転倒っていわねえか？』

『ピクシーは元気なのです』

どうにも時々緊張感がなくなる僕達のパーティ。緊張しすぎよりはいいけどね。

僕もこの雰囲気のお陰で恐怖心が和らいでるし。普段からずーっとハーモナイザーを起動してるわけじゃないからね、怖いものは怖いんだよ。

そんな四六時中起動してたら一日持たずにマグネタイトが消え去るしね。

1分間で200も消えるんだから10分で2000だ、1時間ぶっ続けてたら12000も消えてしまうからもったいなくて使えない。

これでもある程度は恐怖心も軽減されてきたと思うけど、人間怖いものはやはり怖いので、どうしようもないのは諦めてもらいたい。

恐怖心を克服した、とか良く聞くけど、それって多分克服したんじやなくて麻痺してるんだと思う。

一歩間違えたら直ぐ恐怖で動けなくなると思うんだ。その証拠に絶対勝てない相手に対しては動けなくなったりするしね。それもまた恐怖だ。

克服したってダメな時はダメなので、まだまだこの辺は心構えが足りないんだろっな。

「さて、そろそろ行くこうか。どっちにしても今日中に終わらせたいからね」

『うんっ。早く帰ってゲームしたいよ〜』

僕の周りをパタパタ飛び回っているピクシー。

なんだか癒されそうだな。

と、和んでる所で文珠が強い反応を示す。百太郎も同時に強いアラームを鳴り響かせた。

こっちに向かってくる悪魔がいるようだな。

「皆戦闘準備。悪魔がこっちに向かってきてる。場所はあっちだ、隊列はいつもの通りで」

『あいよ』

『はーいっ！ んもう、せっかくサマナーさんといい感じだったのにい』

さて…いつの悪魔かそれとも魔王か…英雄って事はなさそうだな。

僕はメルコムをいつでも使えるようにしつつ戦えるように構える。

その数秒後悪魔がやってきた。

『あらあ。顔が牛ですわねえ。下半身が馬並の方が好きですのにい』

『はじめての悪魔だな。で、このプレッシャーは…へっ、当たり前で

も来たか？」

アメノウズメの言う通り出てきた悪魔は顔が牛の悪魔だった。

牛顔の悪魔で有名なところといえば牛頭天王だろうか…とりあえずはアナライズで調べ上げないと。

『偶さかに顕現してみれば面白い余興よな。人間と悪魔が手を組み戦うとは面白い余興よな、くははははははっ』

『魔王級…ですわねえ。その割にはあまり力は感じられませんの』

『他の悪魔よりは強そうだけどねえ…』

『我が名は魔王モラクス。偉大なるソロモン72柱が一柱。牛頭総裁モラクス也っ！！』

確かにアナライズの結果も魔王モラクスで合っている。今までの悪魔に比べると確かにとても強いし強いのだろう。

その威圧感は、威圧感は…威圧感は……………

「ごめん正直負ける要素がない」

『何…？』

『すごく偉そうな態度してるけどこの中でアンタより低いレベルの仲間魔って誰もいないのよね〜』

『15レベル魔王…くすくす。ごめんなさい。ちよつと憐れでえ、もう少しまともな分霊がいてくれたらよかったですけどねえ〜』

『弱くはねえな、弱くは。けどよこの人数相手にてめえ一人で勝てるとか、流石に思っただねえよな？』

少し前の僕たちならばこの魔王1体だけでも確実に苦戦しただろう。文珠もいくつ使うかわかったものじゃない、けど今の僕達ならば即死魔法も強力な範囲魔法も持たないこの魔王に負ける要素はどこにもない。

モラクスが他に下僕を何体も連れてきていたなら、まだわからなかったかもしれないが余裕を持ちすぎたようだね。

そちらは慢心してくれているようだし、僕らは余裕を持って全力で罾を張りつつ攻撃させてもらおう。

『吼えたな…雑魚共がっ！！ いいだろう！ 魔王モラクスの力特と見るがいいっ…！！』

そっちこそ、僕達の力を見るといいよ。

「いくぞっ!!」

……
……
……

『よ…よええ…ライジュウの方がまだ強かったぞ…』

『典型的なステータスだけ高くてほかはダメタイプよね。分霊としても最下級なんじゃないのかな?』

『でも、座り心地はいいですわ。でもどうせなら私はサマナー様に私に乗っかってもらいたいですの』

『えっちな話禁止ーっ!!』

「とりあえず、どうしようかコレ」

戦闘は2分と持たずに終了した。

暴れまわろうとしたモラク스에ピクシーとアメノウズメがジオンガで痺れさせて足を止め、そこにモムノフと僕が斧と銃で削っていく。

動き出そうとしたらアメリカのブフリーラで弱点をついてからまたジオンガ×2 動けなくなったら攻撃、ザンマ、ジオンガ、攻撃と以下ループ。

結局モラクスは何も出来ないまま撃破された。

正直力はかなり高いし、魔法なども継承してたら厄介なステータスではあるけど。それを有効利用できるスキルがなければ流石にどうしようもないという事だ。

まだ死んではいなくらくウゴゴゴとか言いながらプルプル震えている。

「とりあえず死んでもらおうかな」

『ま、待て人間よっ！！ お前らの団結力はとても素晴らしかったぞ！ そこで我を仲魔に加えるが良い！ きつと役に立つであろうっ！』

『何て上から目線な命乞いだろっねえ……』

「ご主人様、ブフリーラの用意は完成なのです。いつでも消去可能なのですよ」

『ままままっ！？ 待つのだ幼子よっ！ 我はこう見えて結構役に立つのだぞ！？ そう！ 魔王の力を持つ我が力を貸せば千人力だっ！』

「でもあっさり負けたですよ？」

『純真が胸に痛いっ！？ に、人間よっ！ 悪い話ではあるまい！
今ならカードとこの先にいる主の情報も話そうではないかっ！』

主の情報か、それは確かに欲しい情報だね。上手くいけば対策も立てられそうだし、仲魔が減っていて丁度良く前衛の盾にするには使えそうな悪魔だ。

魔王という特性上、基礎は強いし上手く合体させればこれから先も使っていけるだろう。

アイテムもくれるというし、仲魔になったら基本は裏切れないしね。

「いいよ。仲魔になる事を認める。但し僕と仲魔には従ってもらおうし、偉そうな事ばかりいっていると都合を無視して合体するから宜しく」

『わ、わかった！ サマナーよ我が名は魔王モラクス。コンゴトモヨロシク…』

『初の男性形態の仲魔だな、ヘタレっばいが』

『触られたら孕みそうだから寄らないでねっ。私はサマナーさん子しか孕まない予定だからっ！』

「異種族で子供とか出来るのかな…」

『其処は気合でっ！ 私も大きくなるから待っててねサマナーさん』

っ！！」

『その時は混ぜてくださいませ〜』

『混ぜるかっ！！」』

『貴女はいつでもフリーダムですね…我が主とですか…銃の私には遠い世界ですね…ふっ』

「おー…なにかメルコムが悟ってるようですご主人様」

英雄もこんな感じなら楽なんだけど、そつもいくわけ無いか。

「とりあえず、情報を教えてもらおうかモラクス」

『う。うむ、この主である英雄はほぼ英霊になりけておる人間だ』

英霊になりかけの人間…か。

其処だけ聞いているとFeteの赤い髪的主人公を思い出すけど、流石にFeteまではクロスして欲しくないと願ってる。

すでにペルソナで関連のナナヤがいるからこれっぽっちも希望が持てないのが悲しいけど。

「と言う事はまだ人間なのかな？」

『いや、違うな。あれは人間でありながら人間ではない。まさに英雄と言った所であろうよ。いやさ…反英雄かもしれんな』

『英雄でも反英雄でもいいからとつとと教えるや。ん？』

『そ、そんな顔で睨むでないっ！ まったく女子はその辺の所わかって、ぶるおわっ!?!?』

斧でどつかれるモラクス。うん、フォローできない。

その辺事はモムノフにとってあんまり指摘して欲しくない部分だしね。

「おおー、流れるようなストンピングの連打です。あ、四の字固めになりました」

『あ、あれ知ってる。プロレスでしょ？ 流石に慣れてるねえ』

『大人の夜に行うプロレス… サマナー様としたいですわあ』

『我が主よ、寝る時は念入りにCOMPにロックをかけておかないと性的に食べられますっ!?!?』

「うん、全力でロックするよ」

『しょぼあん。言わなければ良かったですわあ』

『うつかり属性持ちの工口娘とか…くっ！？ サマナーさんっ！ 私もそういう属性必要かなっ！？』

「やめてね。常識ある子が消えるのは損失だと思う。モムノフ、モラクスがピクピクしてるからその辺で止めてくれないか？ 情報聞かないといけないし」

「なんだか戦闘前というか仲魔になってから死に掛けるのも珍しいな…このまま放置しても話が進まないし続けてもらわないと。」

『助かった…サマナーよ。お前は我の命の恩人だっ！！』

「うん、その辺はどうでもいいから英雄の情報教えてくれないかな」

『うむ…見た目は小さな男だったな。サマナーより少し小さい程度だが』

「古代の英雄かな…僕より小さいだけじゃよくわからないけど」

『とりあえず戦うのが好きだようだ。辺りの悪魔に悉く戦いを吹っかけていたからな。我はまあ、狙われる事などなかったがな！』

『弱いからスルーされたとか？』

『何気に傷つくから言わないでもらえるかピクシーっ！？ おほんっ！ 後はだな、悪魔が数多くなって襲ってきた時に黒い鎧を纏っていたな』

「黒い鎧…か。確かに聞いたことないタイプの英雄だね」

戦闘が好きで背が小さくて、いざとなると黒い鎧を纏う英雄…

あまり聞いたことがないなあ…

「耐性とかはわかるかい？」

『鎧を纏っている時に限るが、恐らく万能系以外はほぼ全て耐性があると思たほうが良さそうだ。通常攻撃はほぼ通じていなかったし、あらゆる魔界魔法もほぼ利かない上に偶に弾き返してきたからな』

万能以外耐性持ちでもしかしたらマカラカーンまであるのか…聞くだけだと物凄く遠慮したい相手だ。

これがおじいさんからの依頼じゃなければすっぱかしても良いかも知れないと思うほど。

でも倒さないと邪教の館が使えなくなるし、これ以上放置していたらどこまで広がるかわかったものじゃない。

広がるだけならまだしも悪魔が其処から湧き出てきたら目も当てられないからね…

『困りましたね…流石に万能系のスキルなどは持ち合わせていませ

ん…』

『私もジオンガが限界だよ。ジオダインは切り札に取ってるけど耐性があるみたいだしねえ』

「唯一あるのはモムノフの物理スキルが万能系か…ダッキは多分動いてくれないしね」

異界から帰ってきて家でのおんびりしてる突然現れたけどね…

あの自由気ままさには参ったよ。こっちをどうにかするつもりがないのが唯一の利点かな、ちなみに現在はCOMPで寝てる模様。

なんてフリーダムな狐様なのだろうか。

となると僕の文珠やペルソナが攻撃時の鍵になるかもしれないな。

耐性だけならばダメージは通るかもしれないしごり押して行く事も出来るけど、果たして上手くいくだろうか。

相手は単体で何体もの悪魔を相手に勝てる英雄だ。

『なんにしてもいくしかねえな。丁度良い盾も出来たことだし行くこ
うぜサマナー』

『そうですわねえ。タフネスな壁は役に立ちますわあ』

『我すでにそんな役っ!?!?』

「まあ、リカームもあるし最悪死亡しても復活するから頑張っ
て欲しいモラクス」

『おおお…我著しく選択肢間違えたのでは…』

『送還される死か、よく死ぬけど何度も生き返れる死か。よね、
がんばってっ！ 少しでもだけ応援してるから。あ、でもあまり近づか
ないでね？』

『これが巷で言うイジメなのかあああっ！？』

「いや、多分違うと思う…弄り甲斐があるというヤツじゃないかな、
よくわからないけど」

「弄られて「美味しい」というヤツですね。アメリカはちゃんと覚
えているのです。えっへんなのですよ」

『色々違いますけどアメリカちゃんが健気で可愛いですわあゝ
食べちゃいたいくらいですの、性的に』

『自重しやがってくださいエロ淫魔というかエセ天女』

やはり緊張感がないパーティだとおもっ。

とりあえず…英雄を拝みに行くのでしょうか、行き成り即殺されない
事を祈るばかりだよ。

Continue27 〱黙示録へのカウントダウン〱 (後書き)

なんともまあ戦闘描写すら省かれた魔王モラクス。

いともあっさり仲魔になりました。かなりヘタレ臭がしますがやる時はやってくれる…はず？

初めての男性型悪魔なので、きつと佐藤君の負担の肩代わりを…弄られまくりですが。

今回は英雄登場です。どんな英雄か…何となくわかっちゃうかもしれませんね(汗)

まだまだアンケートは受付中です、良かったらお答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：4票

かがみ：5票

つかさ：0票

みゆき：2票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票

知魔特化：1票

体特化：0票

速特化：3票

運特化：0票

バランス：5票

Continue28 〱黙示録へのカウントダウン〱〱 (前書き)

異界別視点からです。

サイコロを振った結果、どちらも介入とかなりました。

中身は見てからの楽しみです。楽しいかどうかは微妙ですが(汗

Continue 28 〈黙示録へのカウントダウン?〉

大樹がモラクスを仲魔に加えて奥に進んでいる頃……

「邪魔よっ！ マハ・ザンダインっ！！」

指を鳴らすように衝撃を飛ばすとまるでボーリングのピンのように倒れていく悪魔達。

このレベル帯じゃどうしようもないのはわかってるけどねえ。

ん？ 反射？ 無効？ どれだけ弱い話してるのよ。私くらいになると魔法一つ一つに貫通が入ってるのは当然でしょ。

ましてやこんな低レベル悪魔にダメージを受けるなんてないわよ。

銀子、っていうかクズノハも耄碌したのかしら…？ この程度の異界で何で私を超越すのよ？ あれかしらね、たまには動かさないとさびるって。私は機械じゃないわよっ！

「まあ、それでも実入りは良いみたいだけど。カードとかなら邪教で売れば小遣いにはなるしね」

資料ではここに沢山の構成員が潜って行ったけど、誰もが全滅して帰ってきたって話。

全滅って所で眉を寄せたけど、帰ってきたって所がもつと吃驚よ。

普通殺されるでしょ、普通。余程気の良い妖精とかじゃない限り、ここまでしておいて殺さないってのがおかしいわ。

構成員は軒並み自信を無くしてダメになったらしいけどね。

この辺りの悪魔は関係無さそうね、となるとユニークか異界の主よねえ。

あれにも異界の主の可能性が高いって話だし。

『ぐおおおおんっ！！』

『げっげっげっげっ！！』

「ライジュウとカクエンね、はいはい邪魔邪魔。マハ・ザンダイン
！！」

一蹴、と。戦闘描写もいらなくらい雑魚だし、のた打ち回るのを見てほくそ笑むほど病んでないわよ私は。

さて、さくさく行きましょうか。

「それにしても悪魔が散発的ね。誰かが既に来てるのかしら、ダイクサマナーだったら面倒だわ、処理がアレだし」

普通の探索してる子とか、この辺りを浄化してる組織のメンバーでも面倒よね。

前者はそれとなく逃がさないといけないし、後者は関わるとかなり面倒だし。

「困まれないだけ楽でいいけど、ややこしそうな事に……………」
「はあ。やっぱりね」

其処には確実に争った痕があった。それなりに激しい戦いだったみたいね、あちこち削れてるし血もたれてるみたい。

極めつけは、飲み物の缶が落ちてるし…ダークサマナーはその辺徹底してるから足跡は残さないはず。

ここにジューズを持ってきている以上、それなりに腕にあるヤツで間違っていないでしょ。となるとデビルバスターズ…も規律があるし除外ね。

無名のフリーサマナー。もしくは異能者が妥当な所かしら。

数で考えるとしても1〜4人、サマナーなら一人で確定ね。

敵対はしないと思うけど、はあ…

「憂鬱だわ」

「あら、私は嬉しいですけどね。異教徒」

ようやく来たわね。

この異界に入った瞬間から嫌な気配、というか真っ白すぎる気配を感じてたけど。

態々待つてあげたんだから、さっさと終わらせたいものだわ。

「ここそとさっきからついてきたでしょ。悟られずにここまで来るなんて、ここそこの腕があるようね」

隠行は凄まじいわね、あそこまで自分を消してここまで近づくんだから。

「あら、貴女に其処まで言われると照れてしまいますね。レイ・レイホウ？」

「やっぱわかるか。で、メシア教の狂信者さんがここに何の用？」

「目的がありましたの、でも神とメシアは信心深き私に新たな目的と喜びをお与え下さいましたわ…貴女を葬れると言っつ…!!」

私向かって剣を飛んでくる、やばっ!?! かなり早いっ!

素早く印を組んで魔法を紡ぐ。

「テトラカーンッ！！」

貫通効果があったとしてもこの魔法はあらゆる物理攻撃を弾き返す、さあお手並み拝見と行きましようか？

寸分変わらず戻ってきた剣は彼女に当たる瞬間に霞むように消えていく、流石にその辺の雑魚とは違うようね。

「テトラカーン（物理反射）ですか…異教徒は恐ろしい魔法を使うのですね。そうそう連発は出来ないみたいですけど」

「あら、それはどうかしら…ねっ！！」

牽制の意味をこめてアルミ・ダーツを両手に構えて投げつける。

悪魔に対してはあまり意味のない武器だけど、人間には十分致命傷になる武器。

でもあっさりかわされるけどね…レベル30〜40クラスかしら。見た感じからして超人ね、面倒な。

逃げた場所に照準を合わせて、全力で行かせて貰うわよ！？

「ノウマク・サマング・バザラダン・センダマカロ・シャダ・ソワ
タヤ・ウン・タラタ・カン・マン！ アチャラナータよ、その御力を今こそっ！ 不動明王呪の法！」

速攻で印を組み、アチャナータ、つまり不動明王の炎の力を顕現させる。

邪悪な心を焼き尽くし、天に浄化させるといふ聖なる炎。あんた達は神様を崇拜してるようだけど、私からすれば神に縋り付く狂った人間でしかないわ。

炎が辺りを取り巻いて、目の前のシスター姿の狂信者を襲う。言っとくけど魔法じゃないからマカラカーンじゃ反射しないわよ？

「異教徒め…不浄の炎なぞ私には効きませんっ！！ はあああああ
あっ！！」

炎がシスターを包もうとした瞬間凄まじい跳躍力で飛び上がった。ちよつと、そりゃないでしょうよ？ 防ぐんじゃなくて避けるなんて随分人外ね。

ついでに剣を雨のように投げってくるし…

私はね、其処まで人間やめてないのよねっ！

「オン・アロリキヤ・ソワカ！」

真言で防御壁を張って攻撃を逸らす。あいつの言った通りテトラカ

ーンは消費が激しいのよね。

物反鏡もあるけど、切り札って事で。

しっかしあつさり貫通する剣、これは確か聖書とかを魔術などで変化した魔術剣だったわね。

防御壁を張りつつ動き回り相手を見据える。生半可な魔法や魔術は効きそうにないわね…

「取ったと思ったのですが、そう簡単にはいきませんか。ならば全力で殺すまでです、異教徒が存在する事は赦されませんか」

「異教徒異教徒って、頭沸いてるんじゃないの？ 人間は人間でしように」

「愚かな、神を信じない存在が同じ人間の訳がないでしょう。異教徒は日々欲望にまみれ墮落する畜生以下の存在です。私達が浄化せねばならない可哀想な存在なのですよ」

「私はアンタの頭が可哀想に思えるわ…」

だから狂信者は嫌なのよ、頭沸いてるって言うか見境ないって言うか、人間として違う方面で完成しちゃってるからどうしようもないのよね。

それも、ここまで力をつけてるお馬鹿さんは。

それにしても厄介ね、お互いに中々遠距離が得意みたいだし、更にあっちは悪魔級にステータスが高いと来てる。

私もそれなりに強いけどまだ人間の範疇なのよ、元相棒とか悪魔と比べないで欲しいわ。

真正面から戦うのは、不利か。なら絡め手で行くだけよね。

「そろそろ死んで貰えませんか？ 私はこの奥にいるという英雄を捕獲しなくてはいけませんので」

「それが目的？ 随分あっさり話すのね」

「別に貴女はここで殺しますし、ばれて困る事ありませんから」

「ふうん…小娘がいつちよまえに吼えるわねっ」と！

「くっ！？」

閃光弾を投げつけて距離を取る、すかさず剣が飛んでくるけど目視も出来ない程度の投擲なんて見切るのは容易いのよね。

「さあて…終わらせますか。『イルシオ』！ 『ノエルエム』！ 『イルク』！」

連続で魔界魔法を唱える。やっぱり消費MPがきついわね…まあ、

マハ・ダイン系の魔法に比べたら流石に楽だけど。

イルシオで相手に幻術をかけて、私の分身を見せ、ノエルエムで辺りを闇の幻術で包み込む。

その間にイルクの魔法で私自身は姿を消して、と。

さあて、どんな風になってるやら。

「ふざけた真似をしてくれますね、この程度で私を止められるとでもっ！？ 喰らいなさいっ！ー！」

明後日の方向に剣を投げつけてるシスター。どうやらあっちの方向に幻術の私が見えるみたいね。

辺りを闇で包んでるのに良くまあ見つけ出すわ。って寧ろそうさせてるんだけどね。

シスターには『私が闇の幻術で隠れつつ攻撃しよう』と考えさせてる。とはいえ幻術は攻撃できてもダメージはないから態と当たらないように調整させてるんだけどね。

ちなみに私はよく見えてるわよ？ 自分まで見えなくなったら無意味な魔法でしょ？

というわけで、小細工させてもらいましょうか。

「避けてばかりでは勝てませんよ？ 何か考えているようですが…
ねっ！！！」

物凄く騙されてるけどね。

いつもながら幻術の魔法は怖いわね、面白いように決まるし、気づく頃にはこっちの勝利が決まるしね。

特に相手が人間の場合はこれほど有利な魔法はないわよ？

直接的に攻撃魔法や阻害魔法を使うより優位に立てるしね。

相手が強い場合には罨を張って戦う、どうもあの脳筋シスターは直線一直線のようだけどだからこそあっさり幻術にひっかかるのよねえ。

いい感じに立ち回ってくれてるわね…悪いけどさっさと封じさせてもらっわよっ！

「オン・バザラ・タラマ・キリク・ソワカ…千手観音よ、あまねく衆生全てを救うその御手で封じ捕らえ束ねたまえ！ 不動金縛りの法！」

「っ！？ きゃあああっ！？」

「いよっし、フィッシュ！」

「なっ！？ そんなモーションはどこにも…しかしこんな金縛りく

らい数秒でっ…！」

「そんな時間赦すと思うっ？」

「！？ どこから…くっ、成程。まさかこの私が幻術ごときに騙されるとは…」

「自信過剰なやつほど騙されやすくって助かるわ。という訳で眠ってもらっわよっ！ ダラビス…！」

「あぐ…くうう…！」

足から徐々に石化していく。魔界魔法でも黒魔術に指定されてる魔法、ダラビス。

殺さないで無効化するにはコレが一番楽よね。石化じゃ死亡と変わらないっていうけど、今のご時世ディストーンもあるくらいだし其処まで脅威じゃないのよねえ。

でも、一人だけで石化されたら動けないでしょ。悪いけど黙って石化されないさいな。

「レイ・レイハウ…これで勝ったと思わないで下さいね…私は絶対に貴女を殺します…！」

「はいはい、とつとつ石になりなさいよ」

「異教徒めっ…！」

そういつとどこから取り出したかわからないけど石を叩き割った。
まずっ!？

シスターを取り囲むように光が…ってトラポートストーンかっ!!

「この屈辱…忘れませんっ!！」

その言葉と共にシスターは消えていった。

あー、持ってると思ってたけど随分冷静だったわねあのシスター…

「やられた…か。とりあえず相手の目標は邪魔できたし良いとしま
しょうか」

持ち帰ってクズノハに売ろうと思ったけど、してやられたわね。情
報持ってそうだったのに。

でもまあ、脅威は取り除かれたから良しとするしかないわね。

それにしても英雄確保ねえ、メシアの護衛とか考えてるのかしら？
確かに救世主の部下に英雄がいたら信心はより深まりそうね。

宗教団体のやる事ってこすいつていつか何ていうか。

「はあ…どんな英雄だか知らないけど、モテモテで羨ましいわね」

とつとと終わらせて美味しいお酒が飲みたいわ。

そういう訳で再び進もうと思ったんだけど。

同時に奥の方からズンツ、と言う重低音が鳴り響いた。かなり遠い所だと思っただけどこここまで地響きが来るって…

「この辺りの適正レベルじゃないって事ね。多分先行してる誰かだと思っけど、死んでないでしょうねえ」

別に死んでも構わないけど、英雄を暴走させないでよねっ！

『ぐろろろろろっ！?』

『んぎいっ！?』

「で、悪魔が逃げてくると。で、私を見つけたから逃げるために殺しにかかる…あーもう！ 私はスマートに終わらせたいタイプなのっ！」

物凄い数で攻めてくる、というか逃げてくる悪魔達。

あー、戦争での足軽って多分こんな感じよねー、と少し呆けちゃいそうになるけど、そんなことしてたら死ぬわね。

「奥にいる誰かが生きてたら文句言わないと…ねっ！ 八つ当たりだけどっ！！」

まずは目の前の雑魚を散らすとしましょうかっ！！

- レイ・レイホウ視点解除 -

Continue 28 〈黙示録へのカウントダウン?〉 (後書き)

という訳でシスターVSレイ・レイホウ。勝者はレイ・レイホウになりました。

シスターは超人クラスで、レイは導師クラスで同時にレベル50オーバーです。

魔力に偏ってる為に直線では弱いですが長年の経験や魔法で見事に撃退しました。

俗に言うエリートですね二人とも…うん。

今回は佐藤君VS英雄さんです。

頑張りますねー。

まだまだアンケートは受付中です、良かったらお答えくださいね。

つかさ…(ほろり)

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：5票

かがみ：7票

つかさ：0票

みゆき：3票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票

知魔特化：2票

体特化：0票

速特化：4票
運特化：1票
バランス：5票

Continue29 〱黙示録へのカウントダウン〱〱 (前書き)

という訳で佐藤君のターンです。

苦手な戦闘描写は色々変な部分がありますが、その辺は優しい瞳で見えてあげてください(汗)

VS英雄 ご覧下さいです。

Continue 29 〈黙示録へのカウントダウン〉

段々と百太郎のセンサーが警報を高く鳴らしていく。恐らく異界の主が近いんだろう。

実を言うと一歩歩くたびにかなり危険な気配を感じている。

僕の常識的な部分が、この先に進むなと警告を発している。素直に応じれば恐らく死なずに済むんだろう。

だからと言ってそうそう簡単に命を捨てるつもりは無いけどね、それで死んだら本末転倒だし。生き残って依頼を終わらせるさ。

「ご主人様。気配が強くなってるのです」

「そうだね。そろそろ皆準備を頼むよ」

『任せてサマナーさん。全力でいけるわよっ』

サムズアップするピクシーと手をふらふらと振って答えるモムノフ、アメノウズメはにっこりと笑いながらも警戒は解かずに辺りを見回している。

アメリカはいつでも魔法の準備を整えているし、先ほど仲魔にしたモラクスも問題無さそうだ。

出た瞬間殺されない事を祈ろうか。前はあっさり死んだからなあ…。

でも今回はリカムカードもあるし、木っ端微塵とか頭が潰されたとか言わない限りは死んでも蘇生できる。

欲を言えばサマリカムが欲しいけど、このレベルで溢れるくらいリカムが使えるんだから欲張りといえるかもしれない。

リカムドラという手もあるけどカードに封じる度に死なれても困るから無理だろう。

一步一步警戒しつつ歩いていく、文珠での警戒も問題なく起動しているし奇襲は受けないだろう。

英雄が奇襲？　とか思うかもしれないけど勝つためにはなんだったってする英雄だつて居たかも知れないし無いとは言い切れないしね。

モラクスの話を信じるなら正面から戦う事を良しとする英雄らしいから、可能性は低いかもしれないけどね。

取り越し苦労ならそれでいいさ、死ぬよりはましだ。

僕たちはまだまだ弱いんだから臆病になりすぎて困る事はない、と
いうか臆病なのは僕だけなんだけどね。

『そろそろだぞサマナー。英雄の居る場所は』

「わかったよ。モラクスも前衛任せるからね？　君が倒れたら前線が崩されるかもしれないから、危険なら防御に徹してくれ」

『この魔王が防御だけとは…』

『だって魔王（笑）だし』

『（笑）をつけるなあああっ！？ 鬼かお前はっ！？』

『しつれーなっ！ こんな可愛い妖精を捕まえてっ！』

『可愛い妖精には間違いないんですがピクシー様は色々と、アレですし』

『ほうほうメルコム…銃って水につけておくと壊れるよねえ』

『ひいひい…』

『そろそろボス戦だから漫才は後でやれや』

『漫才ではなあああいつ！！』

いや、漫才だよ誰がどう見ても。

「と、遊んでる時間はもう終わりのようだね」

誰かが近づいてくる…同時に感じるプレッシャー…来た…か。

『今度は少しは骨のありそうな奴が来たじゃねえか。少しは楽しめそうだな』

「な……」

嘘…だらう？

何故だ…何故この男がここに居るんだっ！？

其処にいたのは少しばかり背の小さい男性、特徴的な髪型と着ている黒いコートがその存在感を更に強くしていた。

猛禽類のような…いや戦闘狂といった感じの瞳が特徴的だ。

知っている。当たり前だ、彼を知らなければ僕はこの能力を知らない事になる。

彼は『伊達雪之丞』GS美神で現れた横島の親友で元敵だった男。悪魔と契約する事で扱うことが出来る『魔装術』を使いこなし、横島のライバルを自称している男性だ。

その戦闘力はあるのGS勢の中でもトップに立つと言っても良い…絡め手ではなく正面から挑めばあるの美神令子とて勝てる可能性は低いだらう。

純粋な攻撃力は下級魔族に匹敵すると聞いた事がある。

それがなぜ…英雄に！？そもそも何故この世界に存在するんだ…居たとしてもペルソナか何かかと考えていたのに。

まずい…彼に対して文珠は危険だ。彼は横島の親友であり文珠につ

いてもとても詳しいだろう。

『デビルサマナーか。そんな変な機械で悪魔を召喚できるとはな、そのせいで本人はカスみたいに弱いんだが、出してくる悪魔はそれなりに楽しめたぜ』

『なんか英雄のセリフじゃないよ…』

『けつ。俺は英雄のガラじゃねえよ。まあ…こうして存在している以上は気にしてねえけどな』

『なんで…ここに居るんだ…？』

『あん？ 知りたいなら俺を倒していけよ、そっちの方が手っ取り早いだろう？』

指を鳴らして挑発的な目でこちらを見てくる伊達雪之丞。

勝てるか…いや、勝たないといけない。勝てなければ死ぬだけだ。

相手が伊達雪之丞だろうと、あの時の死神戦を思い出せ。

「皆行くぞっ！ パターン1 散開っ！」

『せいぜい楽しませてくれよっ！』

僕が皆に指示を出すのと伊達が動いたのはほぼ同時だった。

まっすぐ向かっていく先はモムノフがいる、彼女もまた不敵な笑顔でそれに応戦し始めた。

斧が縦横無尽に振り回される、だがそれを軽々といなしに行く。

『ちっ…強いなてめえ』

『そっちこそな、中々やるじゃねえか！ここに居た雑魚や攻めて来た雑魚に比べたら雲泥の差だぜっ！だがまだまだ甘えっ！』

『ぐっ！？流石は英雄つて所：かよっ、ぜりゃあああっ！』

モムノフのスキル忠義の一撃が放たれる。彼女の持つ唯一の万能攻撃だ。攻撃力が僕との絆によって変動するらしいけど、それでもかなり強いはず。

彼女が相手をしてきている間に僕はアナライズを開始する。

「スク・カジャですっ！」

『こっちもスク・カジャカードっ！』

『再度、ですわあ〜』

アメリカ、ピクシー、アメノウズメが同時にスク・カジヤを使い命
中力を底上げする。

相手の回避が高くてもこれで、当てる事が出来るようになるはず
だ。

『モラクスっ！ モムノムの援護っ！』

『おうよっ！ くらええええっ！』

苦戦しているモムノムのカバーに入るモラクス。

1メートルくらいまで伸びている爪を振りかざしての暴れまわりが
唸る…が。

『雑魚は邪魔するんじゃないよっ！』

『ぎゃあああっ！？』

たった一撃…たった一撃でモラクスが吹き飛ばされた。

あっという間に瀕死状態になっているモラクス。くそっ今のモラク
スじゃ壁にもならないのかっ！

アナライズはまだ続いている。解析まではもう少し時間が掛かりそ
うだ…このままじゃモムノムまで落ちてしまっ。

「アメノウズメはリカムカードをモラクスに！ 同時にピクシーがモラクスにディアラマ！ アメリカはグレイブで悪霊を召喚して英雄の行動を阻害だっ！」

『オラオラオラオラオラオラオラッ！！』

行動している間も伊達の動きは止まらない。

ザンに似ている衝撃…恐らく彼が得意とする連続での霊波砲がモムノフに振りそぞぐ。

彼女も全力で防御しているがそれでもダメージは蓄積されているようで、苦痛に歯を食いしばって耐えている。だが限界は近いようだ。解析中な僕は動くことが出来ない…くそっ…メルコムが動けばディアラマを彼女に頼むのにつ。

『防御だけか！？ 最初の勢いはどこにいったあ！！』

『うぐあっ！？ ち…くしょうがっ！ 喰らいやがれっ！』

「まずい！ だめだモムノフっ！」

伊達の挑発に乗ってしまったモムノフが全力で斧を振りかざす。

それを見てニヤリと笑い受けようとする伊達に容赦なく斧が叩き込まれる…が。

『なんだ…と…ガフツ!?!』

『中々強い一撃じゃねえか。俺にコレを使わせたんだ。誇っていいぜ女にしては中々やる。がもう寝てなっ!?!』

其処にはモムノフの全力を受け止めた全身を黒い鎧に身を包んだ伊達が居た。

あれが…魔装術…横薙ぎに蹴り飛ばされてモムノフも戦闘不能になっている、それと同タイミングでモラクスがりカームとディアラマで復活し、アナライズが完了した。

其処には、はっきりいって見たくもないステータスが表示されていた。

「名前」：ダテユキノジョウ 「種族」：英雄

「現在LV」：25 「属性」：N-C 「召喚MAG」：

?????

「LvUpに必要なMAG」：??????MAG

「ステータス」

HP：327 MP：158

力：32 知：12 魔：16 体：22 速：25 運：17

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・弱体化

・格闘ハイブースタ

・斬撃ハイブースタ

・真・達人の感

・怪力乱神

・物理攻撃貫通

「スキル」

・霊波砲 敵単体に万能属性中ダメージ

・連続霊波砲 敵単体に万能属性小ダメージ 3～7回攻撃

・霊波盾 あらゆるダメージを軽減する。

・モータージハード 敵全体に剣属性特大ダメージ

・狂気の粉砕 敵全体に技属性大ダメージ 1～4回攻撃

・魔装術 自分のHPが2倍 全ステータスを+10

上昇。

受けるダメージを全て半減 攻撃力が常に

1.5倍

弱体化：顕現するのに必要なマグネタイト分が足りない為

あらゆるレベルやステータスが軒並みランクダウンしている。

格闘ハイブースタ：技属性の威力を上昇させる。

斬撃ハイブースタ：技属性の威力を上昇させる。

真・達人の感：あらゆる攻撃などに対する回避率を大上昇させる。

怪力乱神：通常物理攻撃、格闘系のスキルの威力を1段階常に上昇させる。

物理攻撃貫通：剣、物、技の相性が【】【+】【×】【】でもそれを無効化して

通常に物理ダメージを与えることが出来る。

率直に言おう：勝てる相手じゃない。

モムノフすら相手にされないほどのレベルだ：レベル25と云っているがその能力は天と地ほどの差がある。

更に言えばオルクスと同じでマグネタイトが足りない為に弱体化しているのに、これほどの戦力：どうすればいいんだ。

文珠で攻撃するか：【縛】なら動きを止められるかもしれないけど。

『さて、次は誰だ？ 掛かってこいや、何なら全員でもいいぜ？ それくらいしないと楽しく無さそうだしな』

『言ってくれるじゃない：喰らいなさいっ！ ジオ・ダインっ！』
ピクシーの切り札であるジオ・ダインが直撃する、がそれすらも意に返していないようだ。

そもそも半減な上に其処から更に魔装術で軽減しているせいでダメージにもなっていない。

『嘘でしょ…？ どれだけ化け物なのよ…』

「ほぼ全ての耐性を持つてる上に魔装術で軽減してる。まともな効きそうなのは心属性と万能属性だけみたいだ」

『ふん、弱点なんざとくに克服したぜ。今の俺に付け入る隙なんざあるとおもつか？』

『オルクスの時を思い出しますわあ…でもお、ここで引けませんの。サマナー様のためにも…ねえ』

『へっ、今度はてめえか？ 殴り合いは得意そうじゃねえがいいのかい？』

『SMは好きですけど、お断りしますわあ。さあさ、貴方も快楽に溺れましょう？ とても…気持ちいいですわよお』

『んなっ！？ 急に服を脱ぎだしやがった！？』

伊達のセリフの通りに服を脱ぎ始めその綺麗な裸体を惜しげもなく披露するアメノウズメ。

スキル、ファイナルヌードで魅了を狙ったか、確かに効けば勝てる可能性があがりそうだけど、英雄に効果があるのかそれが問題だ：

『マ…ママに似ている…ちいっ！ 魅了系のスキルなんざ俺にはきかねえぞっ！』

物凄く目を逸らしているが効いてはいないようだ。

誘うように甘い言葉で誘っているアメノウズメのお陰で隙が出来た！

僕はすかさず【縛】の文珠を発動して動きを阻害させる。それと同時に驚愕の顔で此方を見る伊達、どうやら動けなくなった事に驚いているらしい。

だが構ってなんかいられない、彼女がくれたチャンスは最大限に利用させてもらおう！

「ペルソナチェンジ…カンショウ！ こいつ！！」

力ある言葉を紡ぎカンショウを呼び出す。

使うスキルは決まっている、折角のミックススライド全力で使わせてもらおう。

「干将莫耶っ！ いけえええええっ！！」

『承知した、我が半身よ。いくぞっ莫耶っ！』

その言葉と同時に呼び出されるバクヤ。お互いにショートソードほどの剣を取り伊達を切り刻んで行く。

『ぐああああっ!?!? ちいっ!』

『あなた…行きますっ!』

『応!』

共に自分の名前を模する剣を構え縦横無尽に斬り付けていく、その様子はまさに一つの美というものが感じられた。

縛の文珠が効いているのか動くことの出来ない英雄はその攻撃を甘んじて受け続ける。

貫通がないのが痛い、それでも僕達の攻撃の中で最大級の威力を誇っている。

それでもあの魔装の鎧を貫くことが出来なideいた。

『おおおおっ! うりゃああああああああっ!』

『!?!?』

けたたましい雄叫びと共にオーラのようなものが伊達から吹き荒れる。

同時に弾き飛ばされているペルソナ達。僕にもそのダメージのフィ

ードバックが来たのか全身を押し付けられたようなダメージが襲ってくる。

あまりの痛みに膝をついてしまいそうになるけど、このままだと全滅してしまつう。

直ぐにペルソナをテンセンニャンニャンに入れ替えて呼び出す。

「こい！ テンセンニャンニャン！ 塵気楼！」

同時に呼び出される美しい天女、テンセンニャンニャンが掌から淡くも濃い霧を呼び出していく。

『惑いなさい…っ！』

辺りを深い霧が覆い、伊達の視界を奪う。

幻術の効果もあるこの霧があれば、少しは時間が稼げるはず。

『きゃああああっ！？』

「なっ！？ アメノウズメっ！？」

突如降り注いだ光線がアメノウズメを包み込み一撃で死亡させてし

まった。

存在する事ができずにCOMPに強制送還されてしまう。

流石にこの状況じゃリカムは使えない、COMPに戻されたという事は彼女を構成するマグネタイトにまで深いダメージがあったからだ。

ここまで来たら自然回復まで待つか、サマリカムしかない。

『やってくれるじゃねえか…おもしれえ！ 面白すぎるぜお前ら！』

まったくダメージを受けているようには見えない、それでも伊達は嬉しそうに笑っていた。ここまで出来とは思ってなかったんだろう。

それにしても、幻術を張っているはずなのに此方を普通に見つめている…何故だ…

『幻術を出したのに何で見えるのかって顔してるな。簡単だぜ、俺はよ人間と霊体の区別がつくんだ。生前霊能力者だったからな』

「くっ！！」

あまりにも盲点過ぎる…しかし多分それだけじゃない。

それだけだったらタマモが使った幻術に横島が掛かる訳無いのだから、恐らく英雄になった為に心眼に属する能力などがあるのだろう。此方の攻撃はほとんど通用しない…逆に伊達の攻撃は僕たちをほぼ一瞬で倒すことが出来る。

絶対防御と究極防御の文珠は僕しか対応せず、あつたとしてもどこまで効くかわからない。

ここは逃げるか…いや。まだある、勝てる可能性が一つだけ。

「アメリカはザンマ！ ピクシーはもう一度ジオ・ダインを！ モラクス動けるなら僕のカバー！」

『何かするつもりだろうけどよ、てめえは俺の生涯のライバルに何処か似てやがる。そういう奴は大抵とんでもない切り札を持つてるからなっ！ 潰させてもらっぜ！』

「ご主人様の邪魔はさせないですっ！ ザン…あぐ…」

ザンマを撃とうとしたアメリカの胸を伊達の腕が貫通する。

ぼたぼたと血が滴り、腕にたれていく。

『悪いな、お前らは強い…だから殺すぜ？ 生かして返すなんてお前らにとっては侮辱だろうっ？』

「…げぼっ…ぞ…ざんまああああああっ！」

『ゼロ距離かよっ!?! ぐおおおっ!?!』

胸を貫かれても尚、アメリカは敵だけを見据えてザンマを唱え弾き飛ばす。

流石に耐性があるといってもゼロ距離でフルパワーで放たれば衝撃の魔法、弾き飛ばされるのは当然かもしれない。

「じゅ…じんさま…のお役…げぼっ…に立つ…の…で……」

役目を果たしたとばかりににこりと笑みを見せてから事切れるアメリカ。ごめん…後で直ぐ蘇生するからね。

『よくやった小娘っ! 捕まえたぞっ!!!』

『てめっ!?! 離しやがれっ!!!』

『我ごと撃てっピクシーっ!』

『よくやったわモラクスっ! よくもアメリカちゃんをつ! 死ねっ! ジオ・ダインっ!!!』

雷撃が唸りモラクス事伊達に降り注いでいく。

コレで倒せるなんて思ってないし、少しの足止めにしかならないだろう。

だから切り札を切らせてもらう。信用しているよ…ヘル！！

「ペルソナチェンジ…来いっ！ ヘルっ！！」

呼び出すは死の国ニヴルヘイムの女王ヘル。

同時に16個の文珠を取り出しイメージと文字を込める、込めた時は【威力増幅】【匹敵必中】【完全即死】【限界突破】

連続で合計16個の文珠を使うのははじめての試みだけど、出来なきゃ死ぬだけだ。

各種4文字に制限しているし、今の僕でもやろうと思えば出来るだろう。

問題はコレを使ってしまえば直ぐに使える残りの文珠は後1個だけとなる。

一日60個作れて使えるとはいえ、新たに作り出すにはそれなりの時間が掛かる為、戦闘中に作り出すのは不可能。

なので残るのはたった1個だけだ、でもこれで決めてみせる。

「これで、止めだあつ！ ヘル…ムド！」

『わかりました、私の力を貸しましょう…さあ、死の国に来るといい、稀代の英雄よっ！ ニヴルヘイムにて汝を迎えようっ！』

伊達には呪の属性は通常効かない…が、ヘルはムドブースタと黄泉の女王という技能がある。

反射や吸収でなければ無効や半減を貫通する能力があり、更にその即死の成功率を9割にまで上昇させるという極悪なコンボだ。

今まで使わなかったのは、消費MPが激しいのが上げられるのと、切り札と言ってもいいスキルだからだ。

これだけでも十分な気がするけど、それすらも跳ね除けてしまいうなのが英雄と言う存在、そして伊達雪之丞という存在だ。

味方ならこれ以上頼もしい仲間には居ないと思うけど、彼は敵で、この異界の主だ。

威力を増幅して絶対に命中するという文珠も付け加えた…これで死ななきゃ化け物だ。

強大な呪詛が伊達に襲い掛かり、僕の元に戻って…来た…

……

……

…

- ピクシー視点 -

やった！ サマナーさんの能力とムドのコンボっ！ 前に一回見たけど凶悪としか言えなかった。

完全に足止めさせないと使うのは怖かったけどジオ・ダインをまとも喰らってる今なら。

つて…あれ？ なんで戻ってくるの…なんでサマナーさんに呪詛が来るの…

ドサリ、と嫌な音を立てて倒れるサマナーさん。慌てて駆け寄って心臓の音確かめるけど…

『サマナーさんっ！？ サマナーさんっ！！』

死んでた、どうしようもないくらいに即死してた。

強化したムドだもの…サマナーさんが耐え切れる訳無い。でもでもっ！ 反射されない限りは大丈夫だって！ 反射…？

まさか…

『やべえ…あれは俺でも死んだな。ここに来た人間からアイテム拾って置いてよかったぜ』

そういうと英雄が掌に持っていた石がパキリ、と割れた。

後ろにいるモラクスはバラバラにされて死んでる。

『魔反鏡か、便利なアイテムがこの世にはあるんだな。あの旦那ら目から星が出るくらい欲しがりそうだが。で、全力は尽くしたよ。うだな？』

『あ…ああ…』

『悲観すんな、直ぐ送ってやるよ。お前らは強かった、俺が認めてやる正直ライバルと戦ってる感じだったぜ』

サマナーさんを連れてリカムカードを…でも、どうやって逃げたら良いの？

私じゃサマナーさんを運べない。COMPに戻ってるのはアメノウズメだけで後は皆その場で死んでる。

逃げられないよお…

『ま、なんだ。悪く思わないや、敵同士だったんだからこうなる事も

想像してたんだろ？』

『ちく…しょう…』

私に力があれば…

『せめて痛みがないように殺してやるよ。じゃあな』

力が…あれば…

力が欲しいよ…

妖精じゃなくてもいい、なんでもいい、サマナーさんを助けられる力を。

約束したんだもん、サマナーさんは私が護るって。

約束したんだもん…

好きな人を…愛してる人を…また死なせて…このままで居られるわけなんて…

出来るわけがない！

『ジオ・ダインっ！…！』

『ちっ!?!』

飛び跳ねて避ける英雄、私が見える最強魔法もこの程度…強くなりたい。

強くなりたい! 今強くないで、いつ強くなるのよ私っ!

『諦めない、か。いいぜ、とことんまで付き合っつてやらあっ!』

『お前なんか、負けるものかあっ!?!』

サマナーさん…私に…力を貸してっ!!!

『んなっ!?! なんだっ!?!』

『あ…あああ……うわあああああああっ!?!?』

体が……熱いつ!?!?

何かが溢れてくる…

- 汝、新たなる力を得たり。

- あまねく者達の願いにより、汝は新たな力を得る。

力が…手に入る…？

サマナーさんを助けられる、力が…

Continue 29 〱 黙示録へのカウントダウン？〱 (後書き)

英雄はお約束通り、GS美神での横島君のライバルキャラ伊達雪之丞君でした。

ダッキは助けてくれないのかーという感想があるかもしれませんが、ここで先に。

彼女は佐藤君のレベルでは扱いきれない上に、信頼度もまだまだ足りません。

ということとで召喚も出来なければ自分から出てきて助けようという情もないのです。

悪魔はその辺けっこうドライだと思つのですよ。

死んだら死んだで、多分何処かに行くでしょう彼女は。たんまりあるマグネタイトを手土産に、ですね。

という訳でピクシー以外全員死亡と半壊以上の状態になりました。

佐藤君2回目の死亡です、いやあ…あつさり死にましたね。

敵が魔反鏡を持っていないなんて言っていないのですよっ(えー

頭の悪い悪魔ならともかく伊達君ですしねえ、使えるものは使うお人です。

文珠の【絶対防御】と【究極防御】は貫通されました。使った文珠

が攻撃時に使った時の方が多かったせいですね。

矛盾の状態になるので、数が多いほうが勝利したと言うことになってあげてください。

伊達君が追い返さないで殺しに掛かってきたのは、佐藤君達を強者と認めたからですね、それ以外の戻ってきた人たちは、相手にすらされてな勝ったという事です。

なまじ中途半端に強いと大変ですね…

という訳で、最後に軽いアンケートをとらせてもらおうです！

次回ピクシーが進化します、で、何が良いか思いつかなかったですよ（汗

という訳で3つほど用意しましたので、どれか好きなのを選んでください！

- 1、妖精のまま進化
- 2、上位種族への進化
- 3、改造チルノ（具体的に言うと頭が良いチルノ）

お好きなのをどうぞですー

いつもの通り、何もなければサイコロ振りますのでご安心を。

まだまだアンケートは受付中です、良かったらお答えくださいね。

次回コミコ話対象キャラ表

こなた：5票

かがみ：7票
つかさ：0票
みゆき：3票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票
知魔特化：2票
体特化：0票
速特化：4票
運特化：1票
バランス：5票

Continue30 〱黙示録へのカウントダウン〱〱 (前書き)

沢山のアンケートありがとうございます。

接戦の結果上位種族への進化になりました。

それではご覧下さいなですよ。

ちなみに結果 (1〱2 や2〱3 などは計算が大変なので両方にカウントしました)

1 : 1 票

2 : 9 票

3 : 7 票

Continue30 〈黙示録へのカウントダウン〉

・その願い、聞き届けられたり。

- ピクシー？視点 -

その言葉が聞こえたと同時に身体が弾けた。

全身が快感で染まり、力が同時に満ち溢れてくるのがわかる。

私という存在が作りかえられ、変わり、構築されていく。

ピクシーと言う妖精から、新たな何かに私が変わっていく。

溢れてくる力、魔力、知識。今までとは大違いな強大な力が私の全身を歓喜で覆っていく。

これは単純にハイピクシーに進化したんじゃない…もっと何か別の高次元の存在に私はなれたのかもしれない。

光が収まると、私は直ぐに気を取り直し英雄を見つめた…憎たらしい表情…かどつかはマスクに覆われてるのでわからないけど、ニヤリと笑っているのはわかる。

でも、今なら…アイツに、あの英雄に勝てないまでもダメージを負わせて撤退させる事だ…出来るはず。

『おおおっ！？　なんだ、ありゃっ！？　そんな隠し種があったの

かよっ！』

英雄が驚いてる、私も驚いてるけど…ね。

でも、今がチャンスっ！ 喰らい…なさいっ！

魔力を限界まで練り上げて、頭に浮かんだ魔法を解き放つ。

・メギド！！

両手から放たれた極光がそのまま英雄を中心に天高くまでそびえる光の柱となって、包んでいく。

メギド…って。自分でも何で撃てたのかわからないけど、でも。

悩んでいる暇なんて…ないっ！

『これで、死んじゃええええええっ！！』

立て続けにジオ・ダインを連打。

今の私ならこれも連続して使えるようになってるみたい。今までのジオ・ダインとは確実に違う野太い雷撃が何発も降り注ぐ。

手なんか抜かない。跳ね返ってこない以上、あの魔反鏡はもう無い

って事だから、それなら叩き込むのは今の内。

軽減されてるはずだから、この程度じゃ倒れないのは承知の上だけど、だつたら撤退させるまでダメージを与えれば私の勝利っ！

後はサマナーさんにリカームを使って、改めて向かうか、放置するだけっ。

『まだまだまだああああっ！』

『がっ…！？　しゃら…くせええええっ…！』

あの雷撃の中、英雄が飛び出てきたっ、しまった…避けられないっ！？

腕をクロスさせて英雄の攻撃に備えると同時に鈍い痛みが走り、私はゴムボールの様に簡単に吹き飛ばされた。

咄嗟に羽で姿勢を維持しようとしたけど…まったく感覚がない…っ
て背中が無いっ！

『きゃああああっ！？』

為す術も無く吹き飛ばされる私。もしかして私妖精以外に進化したのかしら…強くなるのは嬉しいんだけど、飛べなくなると厄介だなあ…

そんなどうでもいい事を考えてたら、同時に強い殺気を感じて飛ばされながらも魔法を使う。

『金星の…加護っ！ 私を護って!!』

私の全身から溢れ出す金色の聖なる光が、私を護るようにつねり周囲に解き放たれる。

直ぐ目の前には英雄が飛び込んできていたけど、金色の光がその動きを止めてくれた。

無理やり姿勢を整えて、地面に足をつけるけど。さっきのダメージが酷くて体中がボロボロになってる。

直ぐにディアラマを唱えて応急措置するけど、焼け石に水…かな。

『がはっ…まさか魔装術の防御を突き抜けてくるとはな…やるじゃねえか。それ以外はお粗末だが、その攻撃魔法ってのはあなどれねえ』

『そんなボロボロなのに、まだ戦う気？ この辺で「けっ、こんなヤツの事なんざ知らねーやっ」って逃げるべきじゃないの?』

『俺は少年漫画に出てくる不良かっ!?!』

少年漫画知ってるんだ…どうでもいいけど。

さっきのメギドが効いたのか、体を覆ってる黒い鎧がボロボロと壊れて中身が見えてる。

もう一度メギドを使えば倒せるかもしれないけど…正直そんな簡単に当たってくれる気がしないわ…

さっきの攻撃が面白いように当たったのは、相手の虚をつけたただけだし…

進化…したのよね私。それでもあの英雄には届いてない。

仲魔がいれば…勝てるかもしれないのにつ。

『ちびっこい妖精がまさか急にガキになるとは思わなかったぜ…それもアイツと似たような威力の攻撃をしてきやがる。ゾクゾクするぜ…なあ！』

『煩いバトルジャンキーっ！ 私はねサマナーさんと熱い一夜を過ごす為に戦ってるのっ！ 戦いならその辺の死神とかと戦いなさいよっ！』

『おいおい、そういうなよ。攻めてきたのはそっちだぜ？ まあ、そんな事はどうでもいいんだ。要は…お前らが強い奴だって事さっ』

そついうと纏っていた鎧が再び完全に再構成される。

まだ…戦えるって言うの。こっちはそろそろ限界だっというのに…
進化したのに負けるって、普通こっいつ場面じゃ覚醒したら勝てる
もんじゃないのっ!?

『さあっ！ 最後の喧嘩始めようぜっ!』

『っ…!?!』

だめっ!?

『おいおい…オレを…忘れんじゃ…ねえよっ!』

『んなっ!?! てめえっ!?!』

横から叩きつけられる斧の一撃が、深く相手の肩に突き刺さる、鎧
で大幅に防御力が上がっているはずなのに、ずぶずぶと斧が食い込
んだ。

ぶしゅつと、赤い血が迸っていきたまらず英雄は距離を取って攻撃
してきた相手を見つめてた。

死んだんじゃ…無かったんだ…

『モムノフっ!』

『あー… 良い感じに眠っちまった様だな、わりい。サマナーをまた死なせるとか。全然強くなれてねえオレにムカついてくるぜ』

『殺ったと思っただがな』

『オレも死んだと思っただけどよ… ぎりぎり生きてたみたいだわ。暫く動けなくてディアラマカードを使うのすらぎりぎりだったけど』
『よ』

コキコキと首を鳴らしつつも英雄をしつかりと見据えて構えてるモムノフ。

その様子は凄く頼もしくて… とても嬉しかった。

『泣くんじゃねえよ。まだ敵は倒れてないんだからな』

『な… 泣いてないもんっ！ さっさと倒してサマナーさんを蘇生するんだからっ！』

『…………… へっ。随分と、もう少し待てばもっと強くなりそうだな』

『何……？』

そういつと構えを解く英雄。

流れていた血は既に止まって、鎧も再構築されてる。致命傷に見

えたのに全然その威圧感は衰えてない…

それにしても…隙だらけなはずなのに、攻撃したらそこで『終わってしまふ』と私の中で何かが告げてる。

どういつつもり…なの？

『てめえ…なんのつもりだ？ アンタなら今更オレが増えた所で大してかわらねえんだろ？』

『まさか。決死の覚悟でくるやつを相手に雑魚だと認識するようじや死んじまうよ。お前らは十分強者だったぜ』

『で…命乞い…な、訳ないわよね』

『たりめえだ。あのメギドとかいうやつも十分脅威だが、あの程度なら3〜4発はまだ耐えられるしな』

口だけ…じゃない。多分確実にこの英雄なら耐え切れるんでしょ
うね…

逆に私とモムノフだけじゃ、どうやって後1回メギドを直撃させるのがやっとでしょうし。うー…こいつ何がしたいのよ。

『話に聞いたんだが、デビルサマナーには悪魔を強く出来る才能だか能力があるんだろ？』

『まさかてめえを仲魔にしろってか？』

『おいおい、それこそまさかだぜ。俺より強いなら手伝ってやるのは吝かじゃねえが、俺は強くなるなら自分の手で強くなる』

これ以上強くなってどうする気よ、化け物…

『今回は見逃してやらあ。もっと強くなって俺を倒しにきやがれ、美味しい魚は逃がしておいて肥えさせた方が美味いだろ』

『っ！？ 後悔するぞてめえ…』

『はっ！ ここで殺される時は俺が弱かったただけだっ！ 俺が死んでも求めるのは俺と同格以上に戦える奴だ！ お前ならそこそこ骨があるからな、潰しちまうのはもったいねえ』

『…この異界はどうする気なの？』

『異界？ ああ、この空間か。好きにすればいいじゃねえか、潰そうと構わないぜ。但しマグネタイトは貰うがな』

サマナーさんの依頼はこの異界の消去。

消去方法は主を倒す事だけ…それ以外でも消せる…よねそういえば。基点を見つけて封印だっけ。

正直、この英雄にはまだまだ届かない。倒せる力があっても、当て

られないのが…避けきれないのが致命傷かあ…

『ちっ…好きにしゃがれオレ達は所詮敗者だからな…ピクシー…つて見た目が全然違うけどピクシーだよな』

『うん。COMPでしょ、今取り出すね』

ごめんなサマナーさん。直ぐ蘇生するから…待っててね。

握ってるCOMPをそつと借りて、マグネタイトを取り出す…こんなヤツにサマナーさんの集めたマグネタイトを渡すなんて癪だけど、これしか方法が無いなら…

サマナーさんがいつもしてくれるようにマグネタイトを英雄に送信する。

途端に強く光り輝く英雄。今狙われたら一瞬で殺されそうよね、私達。

『ほう、力が漲ってくるぜ。これだけあれば1年は余裕そつだ。後は悪魔でも狩れば存在はし続けられるみたいだしな』

『なんで、こんな場所に異界を作ったの？』

『場所って言われてもな、気づいたらここに居ただけだよ。よくわからねえがな』

『あつそう。じゃあとつと何処か行きなさいよっ！ 人を殺そうが悪魔を殺そうがどうでもいいけど、私とサマナーさんの近くには来ないでよねっ！』

『おいおい、連れねえな。お前らが強くなるのを待ってるんだから、暫くしたらまた来るぜ』

『今度はオレがめえを倒してやるよ。覚悟しておきな』

『はっ！ いい氣勢だ。やっぱり今殺さなくて正解だったな！ じゃまた会おうぜ。あばよ』

いつの間にか鎧を解除して黒いコートと帽子に身を包んだ英雄は、何処かに歩いていった。

多分、異界からでるのかもれないけど…どうしようもないし諦めてもらうしかないわよね。異界はこれから封じるんだし、諦めてもらいましょ。

あの感じからして、雑魚や一般人は殺されなさそうだしね。

『モムノフはアメリカちゃんとおうちのバラバラ死体お願いね、私はサマナーさんを愛の力で蘇生させるからっ！』

『愛の力ってなあ…やれやれ。あのクラスになるにはまだまだ時間が掛かりそうだな…バラバラにも程があるだろお前よ…もうすこし頑張れや魔王…』

サマナーさんっ今蘇生するねっ！

- ピクシー？視点解除 -

暖かい…なんだろう頬にとても暖かくて気持ちいい何かの感触がある。

僕はどうなったんだ…？

僕は…

『…サマナーさん…サマナーさん』

この声はピクシーの声…

そうだ、僕は伊達と戦って…死んだんだ。

「！？ 伊達はっ！？ 英雄は！？」

『サマナーさんっ！ 大丈夫、大丈夫だよ…』

錯乱しかけた僕にぎゅっと抱きつく彼女。

ふわっとした柔らかさと、甘い匂いが僕を落ち着かせていく。

「え……と……ピクシー……？」

『うんっ、今は進化してるみたいだけどね』

にこりと笑う少女が居た。

アメリカより背が高い… 15〜16歳程度の美少女が居た。

顔こそピクシーそっくりなんだけど、羽も無いし、来ているゴシツクロリータのようなドレスからしてどうみても妖精には見えない。

『あの英雄は居なくなったから大丈夫よ、心配しないでね』

「ま、まさか倒したのかい？」

『いや、見逃された。今度はもっと強くなった頃に来るってよ』

「そうか…」

彼は強い敵と戦いたいっていう重度のバトルジャンキーだったしね。恐らくピクシーが進化したのを見て、僕たちの成長の余地があると

見たのか。

二人の話によると、既に異界から出ているようで、基点さえ潰してしまえば異界は封じられる事がわかった。

僕の依頼は彼を殺す事ではなくて、異界を消す事だから特に問題は無いだろう。

逆に伊達を倒さずに異界を潰せるのだから楽に済んだと思うことにしよう…ほぼ全滅だったけどね。

「ご主人様ー。無事蘇生してよかったですよー」

両手をぱたぱたしているアメリカが僕を心配そうな表情で見ている。

胸の部分が貫かれたせいで破けているが、傷はほとんど無いようだ…胸？ 流石に幼女に欲情する特殊な性癖はしていない。

「アメリカ…大丈夫だったかい？」

「大丈夫なのです。アメリカはこう見えてもタフなのですよ。えっへんなのです」

『アメノウズメはCOMPで再構築中みたいね。サマリカムはな
いから蘇生には明日まで掛かりそうなの』

「そうか…彼女のお陰で隙が出来たからな…跳ね返ったけど…ムド

で死ぬとあんな感じなのかあ」

全てが凍りついたようになって意識が途絶えた。

死ぬ感覚はやはりなれないな…というかなんでスケープドールが効かなかったんだろ…と文珠の力に打ち消されたせいかもしれないな。完全即死とか入れたしなあ…まさかマカラカーンされるとは思わなかったよ。

魔法としては持ってなかったし、魔反鏡でも持っていたに違いない。

『英雄とは理不尽すぎるっ！ 我のような魔王すら手も足も出ないとは…』

『お前は弱すぎだ、もう少し強くなれや。次回は直ぐ合体したほうがいいぜ？』

『んなっ！？ 我に魔王を辞めろと言うかつ！ そ、そんなの嫌だぞっ！？』

『最終的に魔王に戻ればいいでしょ、いまのモラクスじゃ壁が精一杯で、時々それも出来なさそうだしねえ…』

「蹴りで一瞬で戦闘不能です。だめだめです」

『がああああんっ！？』

オーバーアクションでうなだれるモラクス。

いや、正直スキルもほとんどないし、暴れまわりだけじゃ魔王の威
圧も何もないよ。せめてダイン系の魔法が欲しいと思う。

とりあえず…

「ピクシー、アナライズしていいかい？」

『ん、はい 脱だごごつか？』

「いや、それはいいよ」

『ちえ…折角等身大になれたから…できるかなーって思ったのに…』

そこはかたなくアメノウズメのような気配があったのは内緒にした
ほうがいいだろうか…

とりあえずアナライズをさせてもらおう。

………

「…………マジで…？」

『ん？ 私って何になったのかなー？ 天女？ 地母神？ まさか
女神とかっ！』

『さあな、なんにしても今のオレよりは強いだろうよ』

二人して覗き込むとピシッと止まった。

かく言う僕もいい感じにフリーズしている…いやまさかこれになるとは…ね。

「名前」：アリス 「種族」：魔人（異端）

「現在LV」：39 「属性」：D-N 「召喚MAG」：

350

「LvUpに必要なMAG」：39700MAG

「ステータス」

HP：328 MP：204

力：25 知：37 魔：37 体：23 速：25 運：22

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電：+ 風：

魔： 心：x 禁： 聖： 呪：x 状： 万：

「所持スキル」

・信頼

・本体

・熱愛

・電撃ハイブスタ

・魔法攻撃貫通・弱

・制限解除

「スキル」

- ・メギド？ 敵全体に万能属性特大ダメージ。
- ・ジオダイン？ 敵単体に電属性大ダメージ。
- ・魅惑の雷撃？ 敵全体に電属性中ダメージ。 中確率で魅了了。

- ・金星の加護 敵前列に聖属性大ダメージ。
- ・メ・パトラ？ 味方全体の混乱、眠り、至福、魅了、恐怖状態を回復。

- ・ディアラマ？ 味方単体のHP中回復。
- ・メ・ディアラマ？ 味方全体のHP中回復。
- ・妖精のキス 味方単体のMP中回復。 恋慕対象にのみ使用可能

- ・死んでくれる？ 敵全体に呪殺。 異性には効果特大
- ・心捧げの夜伽 要・恋慕以上 ??? ??? ? ?

スキル枠現界解除

信頼：サマナーを信頼している。 低確率でサマナーを攻撃からかばう。

本体：本体である。 悪魔合体をしても姿が変わりにくい。 ステータスが基本より高い。

熱愛：対象を強く愛している。 確実に命令を聞き、高確率で対象を攻撃からかばう。 特殊スキル取得

電撃ハイブースタ：電撃魔法に2段階の補正

魔法攻撃貫通・弱：魔法攻撃時、相手が無効、半減の場合。 相性：として攻撃できる。

制限解除：サマナーのレベルを超えても扱う事ができ、他の悪魔になっても持続する。

魔人…英雄や猛将とならぶ、超高位の種族だ。

それもアリスといえは女神転生シリーズだとほぼ皆勤賞と言っても過言ではないくらい有名所の種族。

軒並みステータスが高い上に、メギドまであるのか。

とても心強くなってくれたな。僕のレベルより大幅に高いのに僕に信頼を寄せてくれるのがとても嬉しい。

それにしても死んでくれる？ があるのが脅威だな…ムドブースタ覚えたらヘル以上の恐怖になりそうだ…

黄泉の女王は無いから成功率は低そうだけど…

心捧げの夜伽つてのが非常に怖い、効果がわからない上に、要、恋慕以上って凄く嫌な予感しかしない。

『アリスかあ…なんか強そうね』

『魔人か…魔神とは違うのか？』

「二人とも魔人に会った事は無いのかい？」

『流石にしらねえな、モラクスはどうよ？』

『話には聞いたことがあるが…生きながらにして人間以上の存在、人間と悪魔の合体した姿、魔界の人種、色々聞いたが見たのは初めてだ』

『でも、可愛い名前だから好きかもっ
今度からアリスって呼んでねサマナーさん』

「わかったよ、これから宜しくアリス」

『コンゴトモヨロシクっ　なーんてね』

「さて…そろそろ異界を封じてしまおう。主が居なくなっても大きくなったら新しく違う悪魔が主になりそうぞ怖い」

次は鎌田勘九郎とか来そうぞ凄くいやだ、更に言うとあれはオカマだから精神的にもダメージが来そうなのが怖いし。

さっさと終わらせてベッドで休みたいし、急ぐとしよう。

「はい、あなた達そこ動かないで」

……………どうやらまだ帰れそうにない……………

Continue 30 〈黙示録へのカウントダウン〉〈後書き〉

という訳で今回の進化でピクシーがアリスになりました。

真・女神転生1やペルソナをやっていると有名な悪魔ですね。

無邪気に「死んでくれる？」と言うのは怖いです（汗

アリスのスキルの代名詞ともいう「死んでくれる？」は真・女神転生？でのセリフが元ネタだと思うですよ。

最後のスキルに関してはまあ、気にしないで下さい（えー

昨夜はお楽しみでしたね…なスキルですよええ…（遠い目

地味に生きてたモムノフ。そういえば唯一死亡したという表記はしてなかったたので、登場してもらいました（でもほぼ死亡で全滅と言った私。赦してっ!？

雪之丞君が引いてくれて一安心、と言った所で終わるわけがないのがメガテックオリティだと思うのです。

進化しても勝てない敵は勝てませんしねえ…（ほろほろ

次回で異界ミッション編はラストの予定です、カウントダウン…長かったなあ。

その次がコミュパート、日常のお話ですよー。

そして卒業で、イベント…かなあ。

まだまだアンケートは受付中です、良かったらお答えくださいね。
アンケート受付は次のお話のコメントまでとなります。どうなるで
しょうか！

次回コミュニケーション対象キャラ表

こなた：6票

かがみ：8票

つかさ：2票

みゆき：5票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票

知魔特化：4票

体特化：0票

速特化：7票

運特化：1票

バランス：7票

おお…速とバランスが並んだ…

Continue 31 〱 黙示録へのカウントダウン〱〱 (前書き)

黙示録へのカウントダウンはこれで終了です。

9 回も続いた……吃驚ですよ。

そして微妙に熱っぽい私があります……でも頑張って書きました！

短いですが、よかったですらどうぞです。

Continue 31 〈黙示録へのカウントダウン〉

- レイ視点 -

「はい、あんた達そこ動かないで」

銃を突きつけてとりあえず先制は奪ったって所ね。

ある程度のレベルのサマナーはいるかもって思ったけど、まさかアリスを仲魔にしてるなんてとんでもなく高位のサマナーじゃない。

辺りを見ると色々挟れてるし、血の色もまばらに見えるからさっきまで戦闘があつた訳ね。

恐らくはこの英雄を退治しに来たって所かしら。

どうみてもまだ未成年にしか見えないんだけど、警戒だけはしておかないと。

「変な真似はしないでね。するとズドンと行くわよ?」

「一難去つてまた一難…か」

「泣きっ面に鉢とも言つわね。で、ここにいた英雄を倒したのは貴方で合ってるかしら?」

「YESともNOとも言えない…かな。見逃してもらったようなものだし」

目は…うん、嘘はついてないようね。後は銃を見て脅えてるくらいかしら。

ここまで来れたサマナーにしては度胸が足りなさそうねえ、流されてサマナーになったのかもね。

アリスを連れてサマナーなら有名だろうし、何処かに所属してるなら噂くらい聞くからフリーって所ね。

『……………』

「そんな怖い顔しないで。折角の可愛い顔が台無しよ？」

『あんたに見せる必要なんてないわ。銃を退けないと…殺すわよ？』

「こっちの質問にいくらか答えてくれたら…かしらね。私もここに用事があったてきたのよ、それに答えてくれたら別に傷つけはしないわ」

随分と懐かれてるわね、凄い殺気。

あっちの子供は造魔みただし、魔王も使役してるなんて将来有望だわ。

こんなのがダークサマナーになったら色々手が付けられそうにないわね。

「私が質問するのは2つ。貴方はどこの所属でここに何しに来たのつてのが一つ。もう一つは英雄はどうなったのというのが一つね。答えてくれるかしら」

「…僕はフリーです。ある場所の依頼でここを潰しに来ただけ。もう一つは…」

『異界を出てったわよ。ほらこれでいい?』

「…主が異界を出た…ですって? 信じられない」

異界の鍵である主は自分のマグネタイトを補給する為に好んでその場所にとどまる性質があるって聞いた事あるんだけど。

そして、今だかつて主が自ら異界を捨てて外に出るなんて聞いた事もないわ…

でも嘘はついてなさそうだし…って、悪魔が外に出たら一大事じゃないの。

『一般人は襲われねえだろうよ。あいつは強い奴と戦うつてのが目的みたいだからな』

『また私達が強くなったら来るって行ってたし…サマナーさん、変

なのに目を付けられちゃった』

『今度こそは我が魔王の力を見せてやるっ！』

悪魔に気に入られた…ね。特別凄いマグネタイト保有量がある訳じゃないし、見た目はイマイチだし…うーん、わからないわ。

強い…事は確かね。クズノハの中堅所なら一線を画す事は出来るけど、上位にはまだまだ及ばないってレベルかしら。

アリスも強いけど、他の悪魔はそれなりだし。随分とバラバラね。

「ダークサマナー、じゃなさそうね」

「僕はその辺の痛い妄想などをこじらせてませんが…」

「そういう意味のサマナーじゃないんだけど。まあいいわ…とりあえずごめんなさいね、まずは威嚇したほうが安全かと思って思ったのよ」

銃をしまって彼を見つめる。

彼は…私を見てないわね、無視してるとかじゃなくて面向かって人を見れないってやつかしら。

「改めて自己紹介するわ。私は麗鈴^{レイ・レイホウ}クズノハに所属してるシャー

マンよ」

「……………！？ ……佐藤大樹、高校3年でそろそろ卒業です。サマナーとしてはフリーで動いてました」

「あらま、学生さんなんだ」

私の名前を言った瞬間驚いてた顔してたわね。多分彼は私の事を知ってるみたい。

私位になると噂が漏れるのも当然かあ…有名になりすぎるのも厄介よね、さっきの狂信者とか出てくるくらいだし。

とりあえず私の事を知ってるなら好都合。

このレベルの子をフリーにしておくのはもったいないし、丁度卒業する年代ならクズノハに誘うのもいいかもしれないわね。

あーあ、昔の私ならそんな腹黒い事考えなかったのに、歳は取りたくないわよねえ。

「フリーかあ、それじゃあウチに来ない？」

「クズノハに…ですか？」

「そうよ。見た感じそれなりに強いし、君なら大歓迎よ。お給料とかも普通に働くより高いし、命がけの仕事は…まあ半年に1回あればいい方かしら。なりたての子はそんなのないし、まずは下積みか

らはじまるから安心よ?」

「……………貴方に何のメリットがあるんですか?」

「私にメリット…? ああ、何で誘うのかわからないって事ね」

「善意じゃないのは何となくわかりますので。僕をクズノ八に入れることに貴方がメリットがあるのなら納得できますから」

な、なんか色々現実的っていうか冷めた子ね。

この歳でデビルサマナーになるとこんな感じになるのかしら、時代は色々変わってきてるわね。

「単純に紹介料が貰えたりするわね。後は…貴方がフリーを続けるのはいいんだけど、それでダークサマナーに転向されたら厄介なよ。高位の悪魔を使役するダークサマナーはクズノ八としても厄介なのよね」

『成程な…危険な目は早めに摘んで自分の所で子飼いにするって訳か』

「辛辣な言葉だけど…まあ正解よ。別に忠実になれって言うてる訳じゃないし、敵にならなければ力強いしね」

「……………少し考えさせてもらえませんか? 今日は色々あったので混乱してるんです」

「OK。まだ時間もあるし考える事もあるわよね。それじゃ携帯の番号教えてくれないかしら、これからのやり取りに必要でしょ?」
強制させて逃げられても困るしね、選択肢の一つにはこれで入れてもらえるでしょ。

別にクズノハに入らなくてもそれはそれで構わない。ダークサマナーにならなければそれでOKよ、将来有望そうなデビルサマナーを殺すのは流石にもつたいないわ。

彼もこれでクズノハにコネも出来た事でしょうし、無下にはしないでしょ。

「じゃあ、後は帰っていいわよ? この異界は私が封じておくから」

「…それは助かります。僕も色々限界なので」

「あ、そうだ。近い内に会いましょ? 電話するから、今度はプライベートで、ね?」

「考えておきます…では失礼します。帰ろう皆」

『はい』

そう言って帰っていく佐藤君。

英雄の事もあるし、色々面倒な事になったわね…

本当にややこしい事ばかりだわ。異界は連続で現れるし、メシア教はきな臭いし、世界終末とか謳いだす宗教も増えてきたし。

ねえ、キョウジ。貴方が今ここに居たどうしてたかしらね。

つて、貴方ならまず彼を殺すか痛めつけて情報でも取るうとするかしらね、仕事の為なら何でもするし…

「私も早く終わらせてお酒でも楽しむとしましょうか、ね」

- レイ視点解除 -

居るとは思ってたけどこんな所で会うとは思わなかったな。

レイ・レイホウ。初代デビルサマナーの葛葉キョウジの相方でヒロインポジションのキャラクター。

シャーマンという特殊クラスで、神を降ろす事により様々な恩恵や魔法を使えるようになる主人公格。

クズノハの属している有名所と言えばまず彼女があげられるだろう。

キョウジが居ないと言う事は単独で来たのか、デビルサマナーのク

リア後の話なのか…わからない事だらけだ。

伊達雪之丞といい、レイ・レイハウといい。レアキャラクターばかりに遭遇している気がする。

全然嬉しくないけどね。

それにしてもクズノハへの勧誘か…確かにクズノハに入れば色々融通も聞きそうだ、あくどい組織って訳じゃないし、表向きは正義の集団だろう。

裏の事はよくわからないけど、僕程度の腕だとそんな暗部にたどり着く事はないし、いいコネが出来たと思えばラッキーかもしれない。行き成り銃を突きつけられた時の威圧感が凄まじかったけどね…正直、生きた心地がしなかった。

多分レベルも50とか60の状態なんだろうな…僕が10人居ても勝てそうにない。

『ねえねえサマナーさん。あの女の話に乗るの？』

「いや…魅力的な話だけどまだ考え中だよ。組織とのコネは欲しかったけど組織の一員になりたいとは思わないし」

フリーはとても動きやすいし、他の敵対組織に狙われる事も無いだろう。

勿論入ったほうが凄くメリットなどもありそうだけど、秘密主義のクズノハの事だ、絶対ややこしい事になりそうだ。

門は開いてるんだし、いつでも入社OKな職場だとおもえばいいさ。今はもう少しフリーでいようと思う、精神的に気楽だしね。

ダークサマナーにはなるつもりはない。あんなレベルの超人相手に勝てる気しないしね。暗殺とかは僕には無理だし。

狙撃でも泉さんから習うべきなんだろうか…その場合お金がいくら掛かるか想像もできないな。

「まずは邪教の館で依頼の完遂報告に行こう。その後は泥のように眠りたいよ」

『だね。私も魔法の使いすぎてクタクタだよ』

「アメリカは元気ですっ！」

『まあ、あまり動いてないしな。オレも早めに休ませて貰うぜ』

『我は先にCOMPに戻っておくぞ。何かあれば直ぐに呼ぶがいい』

モラクスはそのままCOMPに戻っていく。

まだ異界の中なんだから出ていてもらいたかったけど、百太郎はズーッと静かになってるので近くに悪魔が居ない事がわかる。

恐らく彼女が潰して回ったんだろうな…戦わなくてすんでよかったよ。

戻る間に戦闘もなかったお陰で直ぐに外に出る事ができた。

異界の気配は徐々に薄れてきてるみたいだ、恐らく基点を封じてるんだろう。

また彼女と鉢合わせるのは御免被りたいので、さっさと邪教の館に向かう事にしようか。

今日は…疲れた。

依頼ナンバー03、『突然変異の異界を封鎖しろ』 - CLEAR
R!!!

報酬：邪教の館での合体時のカードの都合、真・魔界全書を現金0円で使用可能。

異界を踏破した！ 強大な力で異界は封鎖される！

異界踏破ボーナス！ オリハルコンアーマーを手に入れた！

ボスに敗北！ 10000MAGを奪い取られた！

宿命：何れ訪れる強者を獲得した！

宿命：クズノ八とのコネクションを獲得した！

魔石をいくつか手に入れた！

ライジユウカードを2個、カクエンカードを1個、アカマントカードを2個、イヌガミカードを2個、フォーモリアカード3個

ビフロンス（弱）カードを1個、ルビーを2個、ダイヤモンドを1個、パールを1個手に入れた！！

魔貨6000を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）6000を手に入れた！

大樹に覚醒に兆候がみられる……………

Continue 31 〈黙示録へのカウントダウン?〉 (後書き)

レイ・レイホウと出会って勧誘を受けた佐藤君でした。

とりあえず今すぐ縛られるのは困る、とお茶を濁す感じになりましたね。

フリーのままにしようか、クズノハにいれようか、まだまだ未定です。

異界はあの後直ぐに封じられましたので安心を、です。

ようは異界がなくなればいいので、これでもクリアーなですよー(ずるい)

さて、今回はコミュパート2回目です。

アンケートは明日の午前6時まで受付中なのですよ、それはで…寝ますっ！

なんだかふわふわしますよー…

まだまだアンケートは受付中です、良かったらお答えくださいね。このままかがみ独走でしょうか。

あ、アンケート投票ですが、1話更新時のコメントにつき1回投票してもOKです。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：8票

かがみ：10票

つかさ：2票
みゆき：7票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票

知魔特化：4票

体特化：0票

速特化：10票

運特化：1票

バランス：11票

今回のコミュ結果です。

こなた：13票

かがみ：13票

つかさ：2票

みゆき：10票

同値っ！？ どうすれば…どうすればいいんでしょう…

そっだ！ 同じなら二人とも出せばいいんだっ！ と言う事で急遽二人とも参戦です。

信頼度が上がるかはサイコロで決めました。

下手すると下がりますし、上がらない時もあります。

さらに二人なので下がる可能性が高かったのですが…運がいいというか何と言うか。

ではご覧下さいです。

「卒業パーティー？」

「そうそうっ と言う訳で誘いの来たのだよワトソン君っ」

『だれがワトソン君よっ！』

「いやあ、ピクシっちゃん。数日見ない間にワープ進化したんだねえ。一瞬誰かと思ったよ」

あの雪之丞の戦いから更に数日、僕は卒業までの時間をのんびり家で過していた。

異界は近場にあるいつもの場所で狩りつつ、マグネタイトなどを稼いだり、カードをかき集めたりしながら過している。

家であらだらしてるのもいいけど、此方の方が後々楽になるになるんだからと言う訳だ。

相変わらず僕のレベルはうんともすんとも言わないけれど、少しだけ何かが変わってきているように思えた。

あ、ちなみにあのユニークビフロンズに一回殺されかけた。というか食いしぱりがなければ死んでた…普通に戦うとこれらのスキルがありがたい。

仲魔達だけど、皆元気だ。アメノウズメも回復して今ではいつもの通り禁止用語を連発したり、いきなり脱ごうとして変わらない…嫌な変わりなさだ。

モラクスも合体して少しだけスキルなどが強化された、魔王以外になつた時は全力で落ち込んでたけど、また魔王になれる時には強くなるんだから諦めて欲しい。

「男性は例のごとく僕しかいないんじゃない？」

「まあねえ。というかあんまり男子に知り合いなんて居ないんだよねっ。いてもセバスチャンかな」

「…外人？」

「いんや、クラスメイトの日本人だよ」

白石君：君はどうしても名前と呼ばれないようだね。

しかし、卒業パーティーか：参加するのは別にいいけど、他の人は果たして僕が参加して何かを言わないだろうか？

いつものように泉さんだけの独断専行のような気がするんだよなあ。

「で、この事は誰が知ってるの？」

「ん？ かがみんもつかさも知ってるよ。勿論みゆきさんも。いいじゃんいいじゃん、暇でしょ？」

「暇と言えば暇だけど」

『行って来ればいいんじゃないの？』

「ダツキ…？」

『折角女子が誘ってるんだし、男色でもないなら行くべきでしょ』

『サマナーさんは普通だもんっ！ そんな事ばかり言っと御揚げ禁止ねっ！』

『そんなっ！？ 私に飢えて死ねというのっ！？』

『それだけで死に至るなら昔の人は困ってませんね』

『メルコム、あんたどっちの味方！？』

「相変わらず賑やかだねえ、大半が女子だから羨ましいよ」

くししと笑う泉さん。オタクにとっては垂涎のシーンなんだとか、いやまったくもってわからない。眼福なのは確かだけどね。

折角誘ってもらえたんだし行ったほうが良いかも知れないな。あまりにもあれなら帰ればいいんだし。

クズノハとのコネクションが出来たから無理して高良さんと会わな

くても済むようにはなっただけど、信頼を得ておいて問題はない…か。

「わかったよ。でもあまりにも場違いそうだったり雰囲気が悪くなるようだったら帰るけど、それでもいいかな？」

「おっけー　いやあ。応じてくれてよかったよ、実はこれから皆でどういった場所で開いたりするか相談する事になってね」

「大変だね幹事は」

「え？　佐藤君も参加ですよ？」

「え、うん。パーティーには参加するけど？」

「……………」

「……………って僕も相談に参加？」

「当たり前っ！　ほらほら、貴重な男子の意見も欲しいからねっ！
と言う訳でさっそく準備だっ」

「早まったかもしれない…」

「今かがみに電話するから待っててね。あ、かがみー？　OKだつて、それで集まる場所なだけど…うん…うん…へー…うん、わかった」

用意周到というか直ぐに電話を始める泉さん。

まさか僕まで相談に駆り出されるとは…彼女と話すとどうも、こつ巻き込まれると言うかなんと言うか。

悪い気はしないんだけど、ね。彼女なりに此方の事を考えて言ってくれているんだろうし。

「じゃ、向かうね、また後でね」

「アメリカ達はCOMPに戻ったほうがいいですか？」

「そうだね、頼むよ」

「あーっと、ごめん佐藤君。つかさとみゆきさんが外せない用事があったみたいで、かがみと3人で相談になるんだけどいいかな？」

高良さんとはかく、柊さんが居るのに妹さんが居ないのは珍しいな。

まあ、この時期は色々忙しいから誰かに呼び出されたりしているんだろう…僕？ ハブかれ者は基本誘われないよ。泉さんが希少なんだ。

僕がどこまで役に立つのかは知らないけど、向かう以上はがんばる事にしようか。

「それじゃ行くかうか」

「はいはい　お客様ごあんない」

いつも思うけど本当にテンション高いな彼女は。

『サマナーさんっ、私は普通に行きたいなあ……』

「んー…確かにアリスは普通に服に着替えればいけるけど。どうだろう泉さん」

「ん、いいけど…ね」

『　じゃあ着替えてくるねっ　』

COMPの中に戻るアリス。彼女が基本人間の少女の姿なのと、普通の人間大まで大きくなった為に彼女用の服などを購入しておいた。これで普段から外に出てもばれにくいだろう、偵察や尾行なども出来るかもしれないしね。

他の仲魔はまあ、女性なんだけど悪魔の部分も見られるので流石に無理だった。

アメノウズメは…人型だけど、普通の服は脱ぎにくくて嫌だそうだし…ボンデージ服が欲しいと普通に言われた時は流石に引きそうになったけどね。

3分もしない内にアリスがまたCOMPから出てきた、いつものゴシックロリータ服じゃなくて、どこにでもある普通の服だ。

彼女に似合う清楚っぽさが見える、清楚かどうかは小一時間問い詰めた所だけど。

「いやあ。いつも思うけど女性って化けるねえ」

『あんたも女性でしょ…』

「あっはっはっは。私はそんなに変わらないからねっ」

「それはそれでいいんじゃないかな？ 素のままの泉さんも十分魅力的だと思うよ」

リップサービスも籠ってるけど、ある意味本心だ。

彼女は十分可愛いという範疇に入ってるしね、微妙に自信がないのは背と胸と自分がオタクだと言う事を気にしているせいだと思う。

「そ、そかな…えへへ…」

微妙に好感度を上げてしまったかもしれない。

変な雰囲気になる前にさっさと準備を整えていくとしようか。

泉さん達には外に出てもらって僕もさっさと着替えて行く事になった。

それにしても柊さんか……………こうして会うのも数日振りだな。

……………

……………

……………

「やつほー。来たよかがみーん」

「漸く来たわね。えーっと…あれ？ 佐藤君だけじゃないの？」

近場の喫茶店の前に到着した僕たちを出迎えてくれた柊さん、ここで待つててくれたようだ。

驚いてるのは恐らくアリスを見ているからだろうな。

「アリス、自己紹介を、と言っても実は会ってるけどね」

『はい。久しぶりね。元ピクシーの魔人アリスよ。今日は楽しそうだから参加しちゃった』

「え…ええっ!?! 悪魔…なの？」

『悪魔が参加しちゃいけないの?』

「そんな事は…ないけど。ちょっとこなたこっち、こっちっ」

「おおぅ、かがみん服が伸びるよ〜」

やはりアリスを普通に連れてきたのは間違いだっただろうか。それとも普通の人間と偽るべき…いや、そうしたら連れてくる理由がないしなあ。

奥でぼそぼそ話してるのは恐らく、なんで悪魔まで普通に連れてきたのかっ、て話なんだろうな。

まあ、信用されてないんだろうけど。僕もまさか往来で人を殺したり、悪魔をけしかけたりする気はないよ。

どこの狂気犯罪者だと言いたい。

彼女からしてみれば、悪魔を出してるだけでそう認識してしまうのかもしれないけど…ね。

もし、アリスがダメなら参加はやめることにしよう、そこまで参加したい訳じゃないし。

「あー…帰ろうか?」

「ちょっと、ちょっと待って!」

「いや、迷惑そうみたいだし」

『私がCOMPに戻ればいいのか？』

「ご、ごめんなさい。いきなり悪魔だつて言われたから驚いただけなの、問題ないわ安全みたいだし」

「それならいいけど、無理はしないほうがいいよ。他にも数人来るのだろうし、迷惑なら参加はしないから」

「大丈夫だつて！ こっちが悪かつたわ。ごめんねアリスちゃん…この通りっ」

『別に気にしてないわよ。皆が皆サマナーさんみたいな人間じゃなあってわかってるし。ほらほら、さっさと決めましょ。面白いの大歓迎よっ』

「そだね〜。カラオケとかさ、ボーリングとかもいいね〜」

「とりあえずは店に入ろうか」

喫茶店に入って軽い物を頼みながら、卒業パーティーの内容を掛け合わせ詰め合わせていく。

柊さんも初めはアリスが悪魔だと知って少し怖がっていたみたいだけど、暫くすると普通に帰っていた。順応性が高いというか。

「ここは皆で夜の遊園地につ！」

『大きな観覧車で二人きり……チャンスよねっ！ これって！』

「流石乙女の心理解してるねアリスっち！」

「あんたら黙れ…カラオケにゲームセンターに遊園地って、ハードスケジュール以外の何者でもないでしょうがっ！…！」

『この超絶叫フリーフォールとか面白そうっ！』

「いやいや、ここは乙女らしくお化け屋敷で」

『きゃーっ って飛びつくのねっ！』

「踏みにじるわよ？」

『「サーセン」』

女3人集まれば姦しいというけど、アリスと泉さんだけどその数倍やかましかつたりする。

どうにも脱線しがちな二人を置いて、僕と柊さんで話を詰めていくのがなんともはや…

「料理とかはつかさと峰岸が作るって言うんだけど、どうしようかしら」

「それなら皆で作ったほうがいいんじゃないかな。でも遠出するならどこかのレストランなんかもいいかもしれないな。お金は僕の方で出すし」

「それは流石に悪いわよ、私達もだすから割り勘でいいんじゃない?」

「男の甲斐性といわれるのもアレだしね、そうしようか。じゃあカラオケは入れるとして、他はどうしようか?」

「開放感とかあると思うし、体を動かすのもいいかもしれないわね。となると…やっぱりボーリングとかかしら」

「やったことないなあ…」

「え、ないの?」

「普段ハブられてる僕に団体行動するような場所合わないだろう?」

「あー…じゃあこれにしましょうよ。団体行動って事でっ!」

「成程…僕がへタなのを笑う気だね」

「私はどれだけ悪女なのよ」

「冗談だよ冗談」

「まったく、佐藤君って結構そういう冗談好きね。こなたが男性になった感じみたい」

え…僕はそこまでオタクじゃないよ。

ゲームとかネットサーフィンとかはしてるから、あながち間違いともいえないけどさ。

フィギュアとかは流石に持ってないしな…あれって完成品を並べてるのか、作ってるのかよくわからないしね。

あんな丁寧に色を塗るなんて僕には無理な作業だ。職人ってどこか絶対人外じみていると思う。

それにしてもアリスと泉さんが緩急財になったのか、柊さんと普通に話している自分に驚いている。

コミュ障も少しは和らいで来たのかも知れないな…だからと言って普通に他の人と好んで話したいとは思わないけど。

うーん…何処かの組織に入るならここを何とかしないとイケないし、色々前途多難だ。

人間関係ってのは本当に難しいと思う。

よく見る二次創作や普通の異世界転移系の主人公達は、どうやってあんな簡単に皆の輪に入れるんだろう。

勿論無理やり入っていく、豪気な人もいるから人其々なんだろうけど、僕には無理っぽい。

「うーい。私も混ぜておくれい」

『脱線しすぎちゃった。サマナーさん、今どんな風になってるの?』

正気を取り戻ったっぽい二人に集られる僕達。

柊さんもやれやれと言った表情で溜息をついてから泉さんに色々説明していく。

うん、やはり苦勞人のポジションだな彼女は。

アリスも本格的に説明に参加してきたし、内容を詰めて行くとうか。

- 柊かがみ視点 -

こなたの奴が佐藤君を誘ったまではよかったんだけど、まさか悪魔を普通に外に出して連れてくるとは思わなかったわよ。

それも見た感じ私じゃどうやっても歯が立たないクラスの大悪魔なんでもすもの、普通に警戒したわ。

多分彼には悪気はないんでしょうね、此方を警戒させるにはお粗末過ぎるし見た目がそのまま人間だから連れてきたって感じがバリバ

りするもの。

流石にこなたを引っ張って色々聞いたのはまずかったかも、だけどさ。

それにしても、普通の男子よね。少しばかり対人が苦手な男性と言えはいいかしら、デビルサマナーという点を除けばどこにでもいる男子よ。

自分から話しかけたりはしないでしょね、絶対に。

そもそも今回の卒業パーティーも彼を抜いた皆でやる予定だったんだけど、こなたが彼を入れようって言うからこうなった訳で。

もしかしてこなたの奴、佐藤君に気でもあるのかしら…COMPとかも貰ってたし、仲が良いのかしらね。

でも、こなた。相手はデビルサマナーなのよ？ その辺わかってるのかしら。

強大な悪魔を使役して戦う異端の召喚士、私が知ってるデビルサマナーは大金を貰ってやりたい事をやってるっていう典型的な嫌な奴だったから、その分認識もきつくなってるのかしらね。

今はこなたもデビルサマナーだし、偏見と言ってしまうえばそうなんだろうけど。

私はやっぱりあんまり好きじゃないわ、デビルサマナーは。

こなたは友達だし、大事な仲間だからそんな事思わないけど、佐藤

君はまだ其処まで信用できる相手じゃないのよね。

つかさは良い人って言うてるけど、多分あの子は誰でも良い人なんじゃないかなって思う。

そしてみゆきは警戒してるしね…私もだけど。みゆきはCOMPをこなたに渡してから更に不信感を持つてるし。

こなたをデビルサマナーに仕立て上げようとしてるんじゃないってね。ダークサマナーの部下って大体ダークサマナーだし、こなたも騙されてるかもしれないってみゆきは深読みしてるけど…

多分それはないわね、そういう事出来そうなほど神経図太くなさそうだし。

というかさ…あのアリスって子。なんだかこなたが二人居るような気にさせてくれるわね…

さつきから意見あいまくりだし、話は直ぐ脱線するしよくわかんない言語使い出すし。

というか煩いわよあんた達っ！

「ここは皆で夜の遊園地につ！」

『大きな観覧車で二人きり……チャンスよねっ！これっ！』

「流石乙女の心理解してるねアリスっち！」

「あんたら黙れ…カラオケにゲームセンターに遊園地って、ハードスケジュール以外の何者でもないでしょうがっ…!!」

『この超絶叫フリーフォールとか面白そうっ!』

「いやいや、ここは乙女らしくお化け屋敷で」

『きゃーっ　　って飛びつくのねっ!』

「踏みにじるわよ?」

『「サーセン」「サーセン」』

全然反省しているように見えないっ!!　サーセンって何よっ!

まったく、こなたは時々手が付けられないのに、2倍に面倒臭くなってるじゃない。

悪魔って恐ろしい者、凶悪な者って認識してたのに崩れそうよこのアリス見てると。

こう、こちらの力が抜けるって言うか、ビクビクしてるのも疲れたからもう普段どおりに行くわよ。

「まあ、僕たちで続けようか」

「そうね…」

みゆきが居たらスムーズに行くんでしょうけど外せない用事じゃ仕方ないわね。

つかさもこれなくなっちゃうし…まあ、つかさは流されやすいから別にいいけど。

てな訳で彼と話を詰めて行くんだけど、これがまた話しやすいのよね、的確に指摘してくれるし彼も自分の意思を出してくれるし。

どうしてこれで苛められてたのかしらね…COMP持つ前は臆病だった、つてのが正解かもしれないわね。

分かったのは表向きは悪い人じゃないって所かしら、寧ろ良い人って感じがするわ。

これならこなたも話しかけたりするはずよね。でもそこから先には進まないって感じだけ。

彼氏とかは無理よねえ、まず彼の事知らなすぎるし色々不安なものあるわ。

これで格好良いとかいえば靡く女性も多いんでしょうけど、残念ながらその辺は普通程度かそれ以下なのよね。

愛嬌はあるかもしれないけど、一目ぼれするのは無理な表情だわ。うん。

内面はまだわからないけど、多分人間不信で冷静、戦闘中の容赦の

無さを見ると冷酷って感じもするわ。

優しいかもしれないけど、知り合い以外には冷酷になれるタイプって所ね。

流石に私の周りの男子こんな人はいないわよ。

「うっしやー　これで決まりだねっ」

「そうね。後はつかさ達に伝えて、色々調整するだけか。ありがとう佐藤君助かったわ」

「いや、早めに終われてよかったよ。じゃあ僕達はこれで」

「あ、送ってくよ。誘ったのはこっちだしねっ」

「それさ、普通僕が言うセリフじゃないのかな」

「気にしてはいかぬ、いかぬのじゃ。ほれはよう行くのじゃよ」

『どこの老人なのよ…』

「ほっほっほ。あ、かがみは大丈夫？」

「別に大丈夫よ」

普段ならここで彼じゃなくて私と一緒に帰るはずなんだけど…こんな
たも変わってきてるのかしらね…色々。

「あなたを頼むわね佐藤君、色々お馬鹿なことしだす変な奴だけど…
さ。」

- 柊かがみ視点解除 -

柊かがみの信頼度が+1されました。

- 泉こなた視点 -

「時間も余ったからカラオケでも行こうか？」

「カラオケ…か。実は行った事ないんだよね、でもそうなら柊さんも誘えばよかつたんじゃないかな？」

「行き成り人が増えても佐藤君にはストレスにしかならないかもつてね。まずは私で慣れるといいのさっ！ おーけい？」

「まったく持つてその通りだから言い返せない…」

『面白そうだねサマナーさんっ』

「そうだね。じゃあ行って見ようか」

と言う訳で3人でカラオケに行く事になったよ。

本当はかがみも誘う予定だったんだけど…なんで候補から外したかな私。

うーん、最近情緒不安定と言うかなんと言うか、こつ…もやもやするんだよねえ。

もしかして…これが恋という奴なのくわっ!? おおう、ごめん自分で考えてサバイボ出てきそうになったよ。

ないなー。佐藤君は確かに良い人だけど、そのつもりは全然なさそうだしねえ…

少し残念というかなんというか…

「はて、何が残念なんじゃろなあ」

「何が？」

「!? え、いやあくなんでもないよっ!」

いけないいけない、口に出てたよなんてベタな。

とりあえずこういう時は歌ってストレス発散であ〜

……

……

…

「と言うわけでやってきましたカラオケボックスです」

「どこ向かって話してるの泉さん」

「いやあ、お約束だよねお約束」

『わかるわかる』

「わかってくれるかアリスちゃんっ！」

進化したアリスちゃんを見たときは吃驚したけど、趣味が前々から合うし気軽な友達が増えたような感じだよー。

でもダツキっていう悪魔はかなりやばかったね。足が竦んだもの。

佐藤君が言うには合体事故で現れた悪魔らしくて、レベル73とかいう凄まじい悪魔だと言う事がわかったのです。

流石に使役できないらしいけどね。

いやいや、佐藤君は相変わらずパナいね…後輩サマナーとしては尊

敬する所かもしれないよ。

私も頑張って戦ってるからそれなりにレベル上がったよー。かがみ達も一緒に戦ったりしてるから少し強化されたしね。

みゆきさんはどうしようもないんだけど、さ。

そうそう、みゆきさんと言えば最近佐藤君を警戒してるっばいんだよね。

確かに強いしデビルサマナーとして凄い優秀だけど、悪人じゃないよ彼は、って言っても笑ってはぐらかしちゃうんだよねえ。

お陰で最近、あんまり話してない。

学校行かないで異界に行ってるせいもあるんだけど、さ。

みゆきさんは優しい上に、心配性だから多分私を心配してくれてるんだろっけど…

「泉さんは何が得意なの？」

「アニソンだねっ！ 100曲以上歌えるよっ！」

「なんともまあ…予想通りな返し…でも僕もアニメの歌は嫌いじゃないよ」

「おお、同士よっ…！」

彼は大丈夫だと思うよみゆきさん。

きつと此方から裏切らない限りは佐藤君は友人で居てくれると思う。

彼って色々隠してるように見えるけど、結構バレバレなんだよね。

さっきもかがみと話してる時は初めの内凄く緊張してたし、だからお互いの緊張を和らげる為に一芝居打ったけどさ。

いやあ、アリスちゃんは乗りやすくて助かるよ。

今度暇があればコミケに一緒に行きたいくらいだねっ！

と言う事で佐藤君も強制拉致と言う事になります。いやあ、男手があるって素晴らしいなあ。沢山もてるしねっ！

今年の夏は大忙しだっ！

「目指せ有明っ！..!」

「.....」

「うおう、目が白いよ...よ、よしっ気を取り直して歌うかーっ!」

『さんせーっ!』

《私も歌いたいんだけど》

《楽しそうなのです》

佐藤君のCOMPから声がしてる、多分ダツキちゃんとアメリカちやんかな。

私のCOMPはこうやって声とかでないんだよねえ。近い内に改造してもらうべきかな。

皆で歌うのも楽しいんだけど、今日は3人で勘弁してね。

「よし佐藤君、デュエットしようっ!」

「いきなりか…で、どれを歌うのかな？」

「これなんてどう？」

「いや…古すぎてわからないんだけど」

「むむむっ、ハイレベルすぎたかっ!」

なんかさ、こうやって男の人と話すのってワクワクしてこないかな？

ちなみに私はワクワクしてるよ。なにかがこう、ほわあってなってさ…もしかしたら顔赤いのばれちゃうかもね。

もしかして私って佐藤君の事…意識してるのかな。

最近よく気になるし。色々話してると楽しいしね。

自分のミスで死にそうな所を、助けてくれて、COMPなんて凄いものまで貰っちゃって、最近はよく遊ぶようになって。

この1〜2週間はかがみ達と居るより、佐藤君と会ったりするのが多くなってきたけど。

メールも毎日してるし…あははは…やばい、私ってもしかしてかなり傾いてる？

オタクなせいでこれから先もロマンスなんてないかなって自分で思ってたけどさ、まさかこんな不器用な感じで始まるとはねえ。

なんてベタなシーンだろうかつ！！ いやいやいや、でもさ違うかもしれないよね。単純に熱くて顔が火照ってるだけかもしれないし。

心臓なんてドキドキしてないし、さ。

「はい泉さんマイク」

「あ、ありがとう……………」

う、うわぁ…何これ何これ？ 心臓がバクバクいい始めて来たんですけどっ！？ 少し意識したらこれかーっ！？

お、おちつけ、モチツケ私っ！ れーせーに、れーせーにだ…ふう。

とりあえず歌うことにしよう、それがいいそれがいいよ。

「よし、いっくぞー 俺達の歌を聴けーっ!!」

「テンション高いな…」

とりあえず、今のこの心臓の高鳴りが消えるまで響け私の歌あああ
あっ!

……

……

…

「の、喉が枯れたよ…」

「いやまあ、あれだけ歌えばそうなるよ」

『ハイテンションだったしね。アニソンメドレーがずーっと続いてたもん』

「ふっふっふ。私のアニソンの持ちネタはまだ108もあるぞ」

『な、なんだってーっ!?!?』

「本当にノリがいいね二人とも」

「でもでも、佐藤君も結構歌上手いよね。驚いたよー」

『うんうん、流石サマナーさんだよねっ』

「声が掠れないようにするのが大変だったけどね」

現在カラオケを後にしてる所ね。

いやあ、一時はどうなる事かと思ったよ、ばれてないようので安心と言った所かな。

こういうのって自分で認識すると、あふれ出すようになるって何処かで聞いた事あるけど、まさにその状態だったしねえ。

いやいやまさか私にこんな乙女 ミ な所があるなんて思わなかったよ。

今はある程度落ち着いてるけどね。

いやー…しかし惚れた腫れたのなんて私には無縁だと思ってたけど…さ。こういう感情もけっこういいもんだね。

なんだか世界がぱーって変わった気がするっていつかさ。

「泉さん」

「ん？ どっかの佐藤君」

「今日はありがとう、とても楽しかったよ」

「……そか、そいつは良かったよっ！　と言うわけで次回の異界探索は付き合ってもらえるかなっ！」

「別にいいよ、取り分はどうしようか？」

「そっちが6でいいよー。私はまだまだだしねっ」

「了解したよ。行く時はメールが何かで連絡して欲しい」

「らじゃー」

とりあえずは……このまま佐藤君の信頼度を上げていくしかないねえ。

アンジエ　ークでもやって、フラグの立て方での勉強するべきかな
……いや！　いまは携帯で彼氏が作れるゲームがあるっ！　いよしっ
！　勉強だねっ。

今の所ライバルっぽいのはアリスちゃんだけかー。むむむ、常日頃からいるから強敵以上の強敵だね。

ピクシーのままだったら、勝率が増えたと言うのに。いやいやまてまて、どうみても佐藤君がアリスちゃんに向けている感情は家族愛っぽいから。其処を狙えばっ！

ふふふ、ハンターこなたの底力見せてやるうではないか。

それにしても人が人に惚れるって、意外と単純なんだね。私として

は色々なアニメとかエロゲー見てたせいで初めから好感度高いとかクリア済みとか見てきたせいでいまいちだったけど、こういう感じの恋愛ってなさそうだよね！。

ゲームっぽいと言えばゲームっぽいよね。

悪魔を倒す召喚士と、バイトの戦士…ありかもしれないね。ゲームにすると売れそうじゃない？

召喚悪魔も皆可愛い所揃ってるし、エロゲーでもいけそうな気がするよ。人間のヒロインは1〜4人かなっおお…それらしくなってきた。

「さて、ここまでだね。異界に行く時は連絡頼むよ」

『それじゃあね〜』

「あ、うん。ばいばい」

帰っていく佐藤君達…なんだろ、今凄くアリスちゃんが羨ましかった。

ま、いいか。障害があれば萌えるのがゲーマーの心意気ってもんだよっ！

このルート確実にクリアしてみせるぜっ！

「ふっふっふ。萌えてきたね、それじゃさくつと家に帰りますかっ
！」

スタートは高校卒業してからになりそうだねっ

泉こなたの信頼度が+1されました

こなたのみゆきに対する信頼度が-1されました

大樹の泉こなたに対する信頼度が+1されました

泉こなたは恋慕になりました

COMP ステータス更新……………

Continue32 移ろい霞む日常?? (後書き)

と言う訳で

こなたかがみ共に信頼度が+1されました。サイコロで5〜6が出たら上がって1〜2なら下がるようにしたのに、一切1〜2が出ず…よよよ…

3〜4は変動なしですね、佐藤君のかがみに対する信頼度は増えませんでした。

次回も同値になった場合、二人とも信頼度下げるかっ！とか考えてます。喧嘩とかですね…

そして、こなたは信頼度が3になったので恋慕獲得です。このままこなたで行けばこなたルートになりそうですね。

はてさてどうなるやらです。

緊急報告

明日から仕事が忙しくなりますので、毎日更新が厳しくなりました。1〜4日を目安にしてもらえると助かります。時間があれば書きますが!!

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

新規キャラクター、アリス、ダツキを追加しました。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：0票

かがみ：0票
つかさ：0票
みゆき：1票
ダッキ：0票
アリス：0票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票
知魔特化：4票
体特化：0票
速特化：15票
運特化：1票
バランス：19票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

Continue33 〈崩壊への七日間・月曜日〉(前書き)

大きなイベントスタートです。

でも今回は幕間なので軽く終わります(汗)

重要

コミュパートのサイコロについて。

コミュパートでの信頼度上下サイコロを中止しました。

コミュパートでは確実に対象の信頼度が+1されるように設定しました。

但し佐藤君から他の皆への信頼度は、その都度によって変化させる予定です。

アリス、ダツキのコミュについて。

メインストーリーに深く関わる事はありません、サブイベントの様なものだと考えてもらえると嬉しいです。新スキル獲得とか、そんな所ですね。

ダツキは上がれば偶に動いてくれるかも……みたいな感じですね。

崩壊への七日間について。

重要な選択肢が出る時があります、よければアンケートに答えてもらえると嬉しいです。

このアンケートは一日一話ではなく、一人一回に限定されます。

これによって、佐藤君が進むルートが決まります。

・ラブホテルの一室・

「……ねえ。奥さんとはいつ別れるの？」

「ああ、もうすぐだよ。もうすぐ全部終わるからね、息子もあつちに任せる予定だし、後は君と楽しい生活が待ってるさ」

「…悪い人ね　でも、そういう所も好きよ」

全てが終わった後のトークに盛り上がる二人。

40台ほどの男性に寄り添うようにして、甘い声を上げる女性。見た目はまだ20台位だろうか、妖艶な雰囲気醸しつつその様子はまだ少女のそれに見える。

男性は彼女を全力で抱きしめ、その感触に酔いしれている。

思えば碌な人生ではなかった。好きでもない女と結婚し、望まない子供を育て上げる事がこんなに苦痛だとは思わなかった。

だが、そんな日々も彼女との出会いで大いに一変した。

彼女の肉体に溺れ、安らぎを得て、快楽を得る。今までの人生を取り戻すかのように、彼は彼女を抱いて、抱いて、抱いてきた。

妻と息子、そんなものはどうでもいいしこれからの人生には必要ない。

それに息子はもう直ぐ高校を卒業するし、これで父親としての最低限の事は果たした事になるだろう。あとはどうなるうと構わない。

自分はこれからこの美しい彼女と幸せを謳歌しなければならぬのだ。

「君を愛する事が罪になるのだったら、俺は喜んで罪人になるさ。俺の渴きを癒してくれた君のためにも…ね」

「ふふっ、クサイセリフ。でも…じゅんってキちゃった…　ねえ、もう一回…シよ?」

「お望みとあらば…なんてね」

漸く掴める新たな幸せ、その為にはいらぬ物は容赦なく捨てよう。愛してもいない妻など必要じゃない。

薄気味悪い息子に対する愛情などかけらもない。無口でひきこもりな愚図など俺の子供であつてたまるかと頭の中で考える。

初めから愛してなど居なかつたのだ、生きる為に必要だからただ我慢していただけ。

世間体を考えてせめて子供が高校を卒業するまでは養ってやろうと

いう。それが自分なりの優しさだと彼は思っている。

妻に対する風評も流しているし、息子にも色々犠牲になってもらう予定だ。

これも、そう。

「俺達のために……だな」

「うふふ……ねえ、は・や・く」

「そうだな、楽しもうか時間はまだまだあるし」

「」

今は何も考えず、快樂にふけよう。

男性は力強く彼女を抱きしめた……………

……………

……………

……

彼女と別れ、自宅に戻ろうとしている時に、ソレは現れた。

行き成り、何の前触れも無く、ソレはただ、其処に立っていた。

子供にも見えるし、大人にも見える。

ただ、酷く…気味が悪かった。

「な、なんだお前は」

「……佐藤大樹の父親だな？」

「!？ そ、それがどうしたというんだ…まさかアイツが何かしでかしたのか…」

「くききき…違うよ、違う。アンタに良い情報を持ってきてやったんだ」

不気味に笑うその様子に怖気が止まらず足早に去ろうとした時に、良い情報と言つ言葉に耳を傾けてしまった。

よくわからないが、こいつの言っている事は正しいと思ってしまう。

こいつが言う事は俺にとって利益になると勝手に脳で認識してしまい、足を止めてしまう。

まるで、甘い蜜に吸い寄せられる虫のように。

「そうだ、それでいいんだ。なあ、アンタ。息子が邪魔だろう？」

そして金が欲しいだろう？　なあ法的に安全に金が、大金が欲しくないか？」

「ど、どうということなんだ…息子と金がどう繋がって…」

大金という言葉に目がくらみそうになる。

しかし体は動かずに無意識にソレを見続けてしまう。聞こえてくるのはまだ若々しさが残る男性の声。

一体何者なのだろうか…そんな事すら思考も出来ず、彼はただ次の言葉を待つ。

「上手くいけば一生遊んで暮らせるだけの金が手に入るぜえ。きひひ　　なあに簡単だ、簡単だよ」

「あ、危なくないのか…？　俺は捕まりたくなんてない…ぞ」

理性的に考えれば逃げてしまえばいいのはわかっている、わかっているのに動けない。

まるで身体が動く事を拒否しているかのように、釘付けになり耳はソレの発する声だけを確実に聞き取っていく。

彼が普通の人間でなければもしくは気づけたかもしれない…

「安全さあ。寧ろ世界中から褒め称えられるだろうよ、邪悪な人間を滅ぼした英雄ってなあ」

「えい…ゆう…？」

「そうさっ！ 英雄だ！ アンタは英雄になる！ この腐った世界で人間に称えられる！ そして一生遊べるほどの金が入る。どうだ？ 良い話だろ？」

そんな事が現実的にある訳が無い、彼の中の理性的な部分が騒ぐが彼の大幅な部分は既に自分が英雄になり幸せに生きていく姿を夢想し始めている。

それは素晴らしいほどの充実感。金に溢れ、女は掃いて捨てるほどやってくる。

誰からも尊敬され、まさに幸せの絶頂だろう。

それが現実になるのならば…

だから聞いてしまっ、この先の事を。この先の悪夢を。

「メシア教。それがアンタを英雄にのし上げる場所だ。そして手土産は悪魔の子供であるアンタの息子」

「英雄…俺の子供が…悪魔だと…？」

「悪魔も悪魔。大悪魔だ、色々な手先を操り殺し、殺し、殺しの限

りを尽くしてる。そのうちに人間すらも楽しんで殺す事になる。だからよ、そうなる前にメシア教にプレゼントしちまえばいいのさ。そうすりゃあんたは世界を救った英雄だ、メシア教からも金がたんまりと手に入るし褒め称えられるだろうよ」

「だ、だがそんな事をして金になったり、有名になるはずが…」

「なる」

声が一段と低くなった。

喉がカラカラと渴き、水分を欲している。呼吸をしているはずなのに息苦しくて、今自分は呼吸をしていないんじゃないかと錯覚してしまうほどだ。

ソレの雰囲気が変わり、怖気は恐怖に変わり始める。だが、それでも彼は動かずに言葉を待った。

「後7日：世界を滅び作りかえられるまで、後7日だ。そしてその間に世界は悪魔の蔓延る終末の日を迎える。原因はアンタの息子さ」

「俺の…息子が…だと？」

「そう、アンタの嫌いな嫌いな息子ちゃんがやっちゃまうのよ、世界崩壊の引き金を引いちまうのよ。かくして世界は完全に崩壊し死の大地となりました、とき。いけねえな、そりゃあいけねえなあ。救うしかないだろう自分のために、大事な者のために、これからも安寧に生きていく為に。アンタだけがソレをできる、いや、アンタしか出

来ない。父親であるアンタの話なら、真摯に話せば騙されてくれるさ。そうしてメシア教と手を組んであいつを殺せば…目出度くあんたは救世主！ 英雄の完成だ！ 金も女も全てがアンタのものさあ
っ！ きひっ！ きひひっ！ きひひひひっ！…！

「俺が…英雄…俺が救世主…俺が…俺が…」

「どうだい？ 少しの勇氣だけあれば出来るんだぜ？ 具体的には今から5日後。アイツが学校を卒業して気が緩んだその時が狙い目さあ」

「ほ、本当なんだな…？ それで俺は金を…手に入れられるんだなっ！？」

「おやあ？ 名声はいらないのか？」

「金と女…それだけあれば十分だっ！」

先ほどまでの恋人…あれも困おう、こいつの言う事が本当ならば俺はあらゆる金を自在に使えて女にも不自由しない。

まさにハーレムを築く事ができる！ 更に言えばそれも世界公認だ…誰にも文句は言わせないし、言えないだろう。

普通に考えてありえない事…そのはずなのに、ソレの言う事は【正しい】と認識してしまう。

今の彼にとって、ソレの言う言葉絶対だった。

どちらにしても元々迷惑だった息子だ、こんな事で親孝行できるのだからせいぜい俺のための礎になってくれれば良いとまで考えた。

「やる…やってやるっ！ お、俺はどうすればいい…？ 教えてくれっ！」

「きひひひっ！ そうさ、その意気だっ！ あいつは絶望して死んでいきアンタは世界の英雄だっ！ さあちゃんと聞けよ？ 楽しい楽しい会話のはじまりさあ」

狂った。

元々人として歪だった彼はこのとき完全に狂った。

そのせいで、これからどうなるのかは…まだわからない。

……

……

…

- ??? ? 視点 -

『いやいやいやいやいやいや。面白いね、面白いっ！ 愉快痛快千回万回っ！ 意味も無く意味も無くなーにがしたいのかなあ』

』

「別に？ これはよ、タダのイジメだよ、イ・ジ・メ。わかるか？ わかんねえよな悪魔にはさ。こういう陰湿なイジメってのが一番楽しいんだよ」

洗脳に思考誘導に軽い精神汚染。まあもうまっとうな人生は歩めないわなあ。

きひひひっ、でもよそれがどうしたって感じだぜ。楽しければそれでいいのよ、なあ佐藤？

「世界の崩壊？ 悪魔の子供？ ンな訳ねえ。あいつはタダの人間だぜ、小さい小さいタダの人間だっ。あはははははっ！ どうなるか楽しみだなあ！」

世界はどっちにしる壊れるんだよ。

俺が壊すんだ、俺が壊して壊して、ゼーんぶまっさらにして作り直してやるんだよ。

メシア教？ クソ喰らえだ。面白そうだから利用しただけさ、面白い事になりそうだぜ。

『意味意味意味ないよねえ〜 きゃははははは』

「意味のある行動？ ソレに何の意味があるんだよ。どうせ世界は消えてなくなる。俺が消すんだ、神が消すんじゃねえ、俺が、俺達が好きなように壊すんだよっ！」

神と信徒の王国？ そんなクソ忌々しいものはイラねえよ。

俺が欲望を満たすだけの世界を壊して作ってやるからよお、じゃますんじやねえや。

でもよ、その前にだ、その前にその前に。俺を痛めつけてくれた礼をしなきゃだろっ？ なあ？ 佐藤君よお？

てめえのせいで俺のプライドはズタズタだぜ、百回殺しても飽きたらねえ。

今回の事が上手くいって絶望して死んでくれや、死ななくても俺が殺すけどよ？ 簡単には殺さないから安心しろや。

肉体を一分ずつ切り刻んだり、全身を絶対に死ねない激痛だけが走る針で刺してやったり、ああ、眼球を食わせてやるのも良いなあ。

はっはっ！ お前の大事な友達や仲魔を目の前で壊したり寝取るのもおもしれえ、なあ？ 嬉しいだろ？ 俺は絶頂しそうなほど楽しいぜえ！

魂もとことんまで苛め倒してやるよ、消滅しそうになっても回復させて永遠に、永遠に痛めつけてやるぜえ。

Continue33 〈崩壊への七日間・月曜日〉(後書き)

書き始め：17時20分 終了：18時15分

あれ…一時間掛かってない…だからしょぼいのか(涙 特に後半は電波まっしぐらです。

佐藤君パパがおかしいのは不良君?のせいでした、元々駄目な人っばいですけどね…(えー

さて…悩んでいる事があります。それは…大破壊についてです。

お話的にシビアなので大破壊が起きたら多分、主要キャラクターといえど容赦なく死ぬと思うのですよ…

例えばそうじろつさんとか、ゆい姉さんとかですね…多分普通に死ぬと思われます。

そのこの描写をするのが悩み所ですね、どうしようかなあと考え中です。

一応破壊されないルートと破壊されるルートでエンディングなども考えてますが、もう少し詰めが必要ですね。

誰も皆ハッピーは女神転生にはないので、その辺を考える時期が来ました。頑張れ私…

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

新規キャラクター、アリス、ダッキを追加しました。

次回コミュ対象キャラ表

こなた：1票

かがみ：3票

つかさ：0票

みゆき：6票

ダッキ：1票

アリス：1票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票

知魔特化：5票

体特化：0票

速特化：21票

運特化：1票

バランス：23票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue34 崩壊への七日間・月曜日? (前書き)

月曜日、他の方はなにをしてるのかー話です (えー

なんだか…物凄く眠いです、思わず書きながら眠ってしまつてくる
でした。

誤字がいつもの数倍多いような気がして怖いです (汗

短いですが、楽しんで貰えると嬉しいです。

-メシア教-

その日メシア教会はいつにもまして騒然としていた。

神父の普段過している一室に正装した僧侶らしき男性が高揚したような表情をしながら駆け込んできた。

「こちら、ダメではないですか。あまり騒いではいけませんよ？」

にこりと笑う神父の表情はとても優しげで、まさに神の使徒と言った様な様子を醸しだしている。

指摘された男性は直ぐにペコペコと頭を下げるが興奮はまだ収まらずには居ないようで、手に持っていた資料を神父に手渡すと同時にまくし立てた。

「も、申し訳ありません神父様。 ですが！ 吉報です！ 聖母が！ 聖母候補が見つかりました！」

「それは本当なのですか！？ もしそうならばこれほど素晴らしいことは無い……」

神父：いやメシア教全ての人間にとっての吉報が送られてきた。

メシアを生む『母体』が見つかったと言う情報を。

降臨する事は予言によって知っている、だが肝心の聖母が見つからなかったのだ。

それゆえにメシア教は聖母を探し続けた、何年も何年も…候補が見つければそれを探し当て、聖母ではなかった事に落胆する。

しかし、男性から手渡された資料にはほぼ100%という高確率で聖母であること、直ぐに連れ出す事が出来るという事が書かれていた。

「ついに我々の悲願が…神よありがとうございます」

救世主…メシアは無から生まれる訳でも、神や天使から授かる訳でもない。

メシアは処女懐妊した聖母から生まれてくるのが習わしなのだ。

「はい、間違い無く彼女達のどちらかがメシア様を御産みになられる聖母様でしょう」

「天使様の信託通り…ですね。非常に喜ばしい事です」

滅びた世界より弱き我々信徒を救うとされるメシア…

崩壊の日が迫っていた為に、焦っていた事は確かだったが必ず見つかると思ってきたのだ。

その苦勞がついに報われると神父は胸を撫で下ろす。

世界は確実に神の火によって滅ぶ、それは人間が愚かな罪を重ねてきた為であり、これは贖罪である。

我々は崩壊の世界に生き残り、メシアの導く元、世界を神の愛と優しさに満ちた世界に変えていく責務があると考えている。

勿論、その後の幸福は約束され、死したとしても天の国に進み愛に満ちた世界を謳歌する事ができる。

それは我々が神の使徒であり、天使の代弁者であるからだ。

「急いで聖母様をお連れするのです。その間我々も出来る事をしておきましょう」

「いえ…少しばかり問題が」

「問題…ですか？」

ピクリと神父の動きが止まる。発せられるのは怒気、まるで全てを破壊してしまうようなほどの怒りを感じて男は動けなくなりながら

も言葉が続けた。

「どうやら聖母様の周りに邪悪なデビルサマナーの影があるとの事です」

「デビルサマナーっ!! あのくそつたれな世界の塵がつ!!? あ、いえ。失礼しました…しかしデビルサマナーですか、それは危険です」

メシア教は基本COMPを使用しない。

己の持つ神の信仰により術と、天使の御力を借りて邪悪なるモノどもを退治し信徒を助けてきた。

彼らにとって邪悪極まりない悪魔を使役し戦うと言うデビルサマナーは邪教徒そのものだった。

何れ必ずメシアに牙を向くだろう、愚かしい存在。それがメシア教にとつてのデビルサマナーなのだ。

しかし…何事にも例外は存在している…

テンプルナイトと名乗るメシア教の強硬派はその多くがデビルサマナーなのだ。しかし呼び出す悪魔は全て天使に限られるが。

改心したデビルサマナーに神の教義を伝え、世界を守る為の使徒として同胞と認める事もある。

だがそれはデビルサマナーではなく、すでにテンプルナイトとして見る事になるのだが。

「直ぐにテンプルナイトを…いやシスターを送りましょう。連絡は出来ますか？」

「それが…シスター・アンナは現在連絡が取れず…異界に向かって以降の足跡も掴めていない状況です」

「なんとっ！？ あのシスターに…無事だとよいのですが…わかりましたシスターの検索もお願いします。テンプルナイトは動かせますか？」

「シスターを搜索するとなると出せても5人ほどになります。最近メシア教をよく思わない異教徒達が信徒を誑かそうとしていまして、その護衛に」

「神聖なるテンプルナイトが5人も揃えば大丈夫でしょう…ですが万が一と言う事があります。全員に『神の怒り』を配布して置いてください」

「神の怒りを！？ わかりました。かならずや聖母様をお連れ致します」

「宜しく願いますね。けっして手荒に扱わぬように…大切な聖母様なのですから。そして邪悪なデビルサマナーは確実に抹殺してください」

「わかりましたっ！ 神の御心のままにっ！」

消えていく男を満足そうに見つめ、神父は手元にある資料を見る。

其処には聖母候補と書かれていた。

聖母候補 N 0 , 1 0 2 5 柊つかさ 確率 9 7 . 3 % 確認項目：
巨大な魔力を所持 所持魔法、聖属性 その属性と適合率ゆえ聖母
になる可能性が高い。

聖母候補 N 0 , 1 3 1 2 高良みゆき 確率 9 9 . 8 % 確認項目：
覚醒前 覚醒後 聖母になる可能性が高い。

……
……
……

……
……
……

- 異界

「アリス！ メギド！」

『おーけー』

その言葉と共に爆音響き渡る。

回りに居た他の悪魔たちを巻き添えにして、巨大な爆発が唸りを上げた。

周りには悪魔の様子は見られない。どうやら今ので倒しきったのだろう。

今日も今日とていつもの異界に来ていた。今日の目的はメギドなどの威力を確かめたり、新たな戦略を考えたりなどだ。

後は魔法を収納したマジックカードの量産、だったのだけど最後で少し躓いてしまった。

どうやらマジックカードに新たな限界が見つかったのだ。

それは強すぎる魔法などはカードに収納できない…ということだった。

マジックカードにメギドなどを入れようと思ったのだけど、どうも

上手くいかず、メギドにいたっては折角のカードが消滅してしまう
と言う結果になってしまった。

多分なのだが、この辺は僕の技量が関係しているのかもしれない…
もしくは覚醒段階によって変わるのかも…だ。

これらが上がれば強い魔法なども封じ込められるかもしれないと睨
んでいる、現に一度だけメギドが収納できかけたのだ、結局はダメ
なってしまうが

更に言うとニヴル Heim やムドブースタなどで強化されたムドも同
じ結果になった。

いや、ムドは収納できたのだけど、発動するとただのムドになって
いた。恐らくあの効果はヘルが使うからこそ意味があるのだと思う。

僕がジオンガカードを使うのとアリスがジオンガを使うのでは威力
がかなり変わるのだ。

本来アリスの魔力で強化されているのだから、誰が使っても同じに
なるはずなのだけど、ブースタなどはどうやら本人にしか効果が無
いらしい。

つまり普段収納できている魔法カードは、対応するブースタの技能
を持てば本人以上に強い魔法に出来るという事がわかったのだ。

ブースタは対応する魔法の威力を一段階上昇させる。

つまりただのアギを使ったとしても威力的にはアギラオと同等なの
だ。

アギラオならアギダイン、アギダインなら…更に威力上昇となる。属性が沢山あったりするため決まったブースタは狙えないけど覚えておいた方がいいだろう。

ちなみにジオダインはカードに出来たので、これを暫くの間主力にしようと思う。

僕のレベルでダイン系の魔法が連打できるのは、かなりのアドバンテージになるだろう。ジオ系だけでも十分使える。

作成出来ないものは仕方がないと言う事で気を取り直して今は悪魔を倒したりしている所だ。

そろそろこの辺りの悪魔では相手にならなくなってきた。ニユークのビフロンスも今のパーティだと楽勝で勝てるようになってる。

ほんの少し前までゴーストの姿をみて逃げていた僕とはえらい違いだな、と笑ってしまいそうだ。

『くはははははっ！ 見たかっ！ このモラクスの力！ これこそが魔王の力だっ！』

『今は凶鳥モー・シヨボーだけどね』

『見ため女だしな。漸く男性が増えたと思ったたらこれかよ。呪いでも受けてるのかサマナー？』

『ちくしょおおおっ！？ 魔王なんだぞっ！？ 我は魔王だっ！！』

そして女ではないいいっ！！」

「巷で人気の男の娘って奴だねっ　こなたが喜びそうだねサマナ
ーさん」

「…あんまりにも憐れだから言わないで上げようよ」

なんだか物凄く落ち込んでいるモー・シヨボー。

高位分霊なので見た目は『変身しにくい』はずなのにもの見事に
モー・シヨボー特有の少女の姿になっている。

とはいえ彼曰くちゃんと男性らしい、その辺だけ変身しにくいと言
われても僕はどうしていいかわからないんだけどね。

ま、まあ。近い内にまた合体するし今度は見た目も男子っぽくなる
よ。うん。

僕としても男性の仲魔が居るのは気が楽だしね。

「まあまあ、落ち着いてくださいモー・シヨボー。そういつ時もある
りますよ」

「お：お前に言われたくないわああっ！？　銃の癖に魔王ってなん
だあああっ！？」

「種族：魔王　形状：銃　って新しいと思いますわあ」

『わ、私も合体しただけですのでなんと…それに銃のままですし』

そう、実はメルコムも悪魔合体をして強化した為、魔王ミトラスの銃に変化していた。

邪教の館のおじいさんが、サービスということで破壊神アレスのカードを譲ってくれたのだ。

あまりに強くて、合体すると皆26レベルをオーバーしそうになっていた中、メルコムだけは25レベルぎりぎり魔王に出来たので合体させてみたのだ。

結果大成功で、大幅に威力とスキルが強化される事になった。

見た目も黒っぽくなって、何とか悪役の人が持つてそうなダーク属性まっしぐら、な銃に変身したのだ。

残念ながら姿を表すことはできないらしいけど、メルコム…いやミトラス曰く、もう少し強化されたら分身として現身が作れそうとの事。

戦うとかは出来ないけど、普段道理に動けるのは喜ぶべき事だろう。

『その時には…きつと胸を…我が主よっ！ その時はご奉仕させて頂きますねっ！』

「はは…た、頼むよ」

どう答えると…アリスはギラついた瞳でミトラスを見てるし……うん、かなり怖い。

後アメノウズメ、其処嬉しそうに舌なめずりしないでくれないか？
僕の貞操が危険だ…大事にしてるつもりは無いけどせめて高校を卒業するまではクリーンでいようと思う。

特に意味は無いけど、気分的なものだろうか。

「ご主人様。奥のほうから悪魔が沢山湧いてきたのです、迎撃するですか？」

「そうだね。ついでに、そろそろこの異界は封じてしまおう。もっと良さそうな異界を泉さんから聞いたし、明日は泉さんを誘って行ってみようと思う」

『そかー。結構長い事いたよねこの異界』

『ビフロンズが最初出て来た時は流石に焦ったぜ。ま、いまはいい練習相手だけだよ。いよっし、派手に暴れるかっ！』

『我もまた魔王に…目指せベル・ゼブブ！』

『私もサキユバスあたり目指したいですわあ』

『アメノウズメはさ、種族的というか中身的にサキユバスで間違っ
てないよね。うん』

「否定できる要素がどこにも無いね」

『あはあ　照れちゃいますのお』

「『いや、褒めてないから』」

思わずアリスと二人で突っ込んでしまう。

まったく同じタイミングで話してしまい、顔を見合わせる僕とアリス。どちらとも無くクスッと笑いあった後、向かってきた悪魔に全力で向かう事にした。

さあ、さっさとこなしてしまおうか。

明日はどうなるやら。

異界を踏破した！

異界踏破ポーンナス！　　アギダインストーンを手に入れた！

ボスに撃破ポーンナス！　　7000魔貨を手に入れた！

魔石をいくつか手に入れた！

宝玉をいくつか手に入れた！

手に入れたアイテムを全部売却した！

手に入れたカードを全部合体させて新しいカードを手に入れた！

魔貨10000を手に入れた！ マグネタイト総計（消費分込み）
15000を手に入れた！

大樹に覚醒に兆候がみられる……………

アリスはマグネタイトを補給した。

モムノフ、アメノウズメ、アメリア、モー・ショボーはレベルが上がった！

COMP ステータス更新……………

Continue 34 〈崩壊への七日間・月曜日?〉 (後書き)

今回はこなたと共に異界に探索? ? となりました。

モラクスことモー・ショボー色々としヨックなお話に。

自分は男の娘になるし、メルコムは銃のくせに魔王になるしと…大丈夫いつか報われます…多分(えー)

強すぎる魔法量産は、インフレになりそうなのでレベルか覚醒段階によつての制限をつけました。メギドはまだまだ切り札でいいレベルですしねえ。

ジオダインは切り札じゃないのか!? という突っ込みはスルーの方向で(えー)

ほら…半減とか反射とかありますし…と逃げて見ます。

今日は夜からTRPGなのですよ、プレイヤーが出来る日なので楽しみなのですっ! ではでは頑張ってくださいね。

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

みゆきさんが逃げ馬のように凄いペースで突き進んでいます。

そしてつかさ、君は泣いていいと思うのです。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：2票

かがみ：7票

つかさ：0票

みゆき：11票
ダッキ：3票
アリス：3票

覚醒時ステータス成長表

力特化：1票
知魔特化：6票
体特化：0票
速特化：29票
運特化：1票
バランス：27票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue35 〈崩壊への七日間・火曜日〉（前書き）

お気に入りが入りが500件 PVが35万 ユニークが3万を超えました。

未熟なお話ですが、沢山の方に見ただけでとても嬉しいです。

これからも頑張りますね。

火曜日です、あと1〜3回火曜日が続く予定です（それは火曜日なのかな…？

一番最後に重要な選択肢があります。

よければ投票してみてくださいね。

Continue35 崩壊への七日間・火曜日

・ミッションが開始されました。

異界レベル12～18 出現予想悪魔 屍鬼、天使、霊鳥、珍獣、
怪異、幽鬼を確認。 ユニーク：狂神オグン確認。
依頼ナンバー04、『狂神オグン討伐』 報酬：100万円、異
界に存在するマグネタイト、及びアイテム 魔貨を半々

さて、僕は今パーティを組んで新しい異界にきている。

今回は柊さん達の仕事の手伝いと言う事になったのだ、本当は違う
異界に泉さんを誘おうと思ったけど、これはこれでいいだろう。

報酬の100万円はとても魅力的だし、ね。

卒業も明々後日に控えているし、いつ追い出されても大丈夫なよう
にお金はそれなりに貯めておかなくてはいけないから渡りに船だっ
た。

今日僕がやる事は、全体の支援及び対象の悪魔が出たときに前衛を
張って皆と共闘すると言う事だ。

泉さんが14レベルに上がっていたのは吃驚したけど、やはり皆レ
ベルが上がるのが早いな。

彼女達の限界レベルは僕と同じ20なのだろうか…？ 高良さんが3レベルだったから、どの辺りで成長限界が来るのかよくわからない。

まあ、スキルを見るからに僕より才能もあるだろうからレベルは超えられそうな気がしないでもないけどね。

「マハンマツ！！」

「ナイスつかさっ！ 吹き飛びなさいっガルーラっ！！」

ホラー映画さながらに沸いて出てくるゾンビ達を妹さんのマハンマが叩きつけられ消滅していく。

その奥の方で微妙に踏ん反り帰っていた悪魔が、ゾンビが消えた為に無防備になり其処目掛けてガルーラが放たれる。

慢心していたのかこちらを見てなかったのか分からないが悪魔は綺麗に疾風に切り刻まれマグネタイトに返還されていく。

この辺りのレベルの悪魔はまだ弱いけど、でもガルーラ一撃で倒されるとは、柊さんはかなり魔力が高いのだろう。

妹さんが使うマハンマもミトラスが使っていたマハンマの威力より大幅に高い。ハーモナイザーによる強化も無いのに凄まじい威力だと思っ。

「いやあ、いつみても爽快だねえ」

「そう見えるでしょうけど、魔法って結構大変なのよ？ 集中しなくちゃいけないし、ごっそり精神力持っていられるので連発なんて出来ないんだから」

「私は結構大丈夫だけど」

「つかさは特別よ。最近更に威力も上がってるしね」

「確かにさっきのマハンマはミトラスのマハンマより強かったね。かなりの威力だと思うよ」

「そ、そうかな、えへへありがとう」

「おっと？ みゆきさんから連絡だ。もしもーし、うん…うん。こっちは平気だよ。成程」

異界の外に居る高良さんからの定時連絡が来た。

外からのサポートとはいえ凄いの確な指示をしてくれるし、僕たちでは風潰しに探すしかないユニーク悪魔の居場所なども調べてあげてくれている。

どうやら能力とCOMPのエネミーツナーに近いソフトを持っているようで、それで調べているらしい。

改善したい点は、ペルソナ3などにいる情報を逐一渡す能力が無い

為に、緊急時には必ず後手に回ってしまう事と、直ぐに情報を送れないことだろうか。

携帯電話でのやりとりなども、戦闘中じゃ上手く行かないしね。

そう考えるとペルソナによる情報の伝達は素晴らしいものがあると思える。女神転生…というかこの世界では情報こそが巨大な武器になる。

相手の弱点や相性を見極められないと全滅してしまうのは此方だから、だからデビルサマナーは戦闘時の要になるのだろう。

アナライズによる相性などのアナライズがなければ僕も軽く二桁は死んでいるだろう。2回ほど実際に死んだけど。

後、彼女は一人ではない。

泉さんがデビルサマナーになったおかげで、戦力に余裕が出来た為に泉さんの仲魔が1体高良さんを護衛してくれているのだ。

たしか、天女アブラサスだったはずだ。ブフ、ディアが使える上に子守唄での相手の障害も出来る為にその辺の相手なら十分以上の護衛になってくれているらしい。

今までは外に一人だったので、危険と隣りあわせだったらしいけどこれからは最低限の安全は保障されているとの事だ。

「うん。ありがとー、みゆきさんも気をつけてね？ はい。ターゲットが移動したって、こっから西に大体5キロって言ってたよ」

「これが主なら探し回る時間も短縮できるのに…それも狂神って」

「強そうだよね…大丈夫かなあ」

「まあ、その時は僕も全力で戦うよ。でも勝てる何て言えないから危険そうなら逃げる事にしよう」

「そだねー、死んだら意味なくなっちゃうし」

今回の依頼は彼女達に宛てに送られた政府以外からの仕事らしい。

ここのユニーク悪魔に殺された知り合いの仇討ちなのだそう。自分じゃ逆立ちしても勝てないので柀さん達にお鉢が回ったらしい。

とはいえ、今回の相手は狂神。種族的には魔王や邪神系に並ぶ上位の種族だ、ちなみにアリスもこの中に入る。

その辺の悪魔とはレベルが似てたとしても能力やステータスに差があるのが難点だろう。耐性が多い事も上げられる。

平均レベルが11の泉さんのパーティじゃ全滅する可能性のほうが高いだろう。

まあ、泉さんもデビルサマナーで多くの仲魔がいるし、狙撃も可能で魔法も威力が高い。上手く立ち回れば勝てるのだろうけどゲームじゃないんだから一か八かなんてする訳が無い。

折角僕が居るのだから、という事で呼ばれているのだ。

ちなみに仲魔はまだ出してない。出してしまえば戦闘中に少なからず消耗してしまうので、対ユニークの事を考えて収納していた方が良いと言われたのだ。

それに、皆の力量上げにもなるというので、僕は襲われたらミトラスで迎撃するものの、基本は傍観の態勢をとっている。

「それじゃ行きましょ、佐藤君もいつでも戦えるようにしておいて？」

「わかったよ」

「頑張ろっねこなちゃんっ」

「だねえ、そろそろこっちも仲魔呼び出しておくかな」

「そうね…頼むわ、こなた」

「あいあい。ペレにリヤナンシー、マカラとナーガとジャックフロスト召喚っとな」

泉さんのCOMPから呼び出された悪魔達。

前言っていた悪魔と違って強化されてるのがわかる。あのペレはたしか前はカハクだったはずだ。

『ヒーホーっ　こなたこなたボクを呼んでくれてありがとうだホー』

「あ、フロストちゃんだ」

『つかさーっ！　お菓子欲しいホっ！　つかさのお菓子大好物だホっ』

「うん。用意してあるから後で食べようね」

『わーいわーい』

「おおう、我が家の癒し系が買収されているぞなもし。どう思うかねマカラさんや？」

『実ニドウデモイイ。サテ、さまなーヨ？　俺八前衛デイイノカナ？』

「うん、マカラとナーガは前衛を頼むね。ペレとリヤナンシーは援護で」

『へいへい。お任せっとな』

『じゃありヤナンシーはつかさの援護をしてて？　私はかがみの援護に入るから』

『ええ、わかったわ』

最近よく思うんだけど。女神転生の悪魔って微妙に女性系多くないだろうか？

それだけ神話の物語などに女性が多いということだけど、低レベルの内はどうしてもそういう系が多いのは仕方ないのかもしれない。多くは望まないけど、せめてもう少し男性が欲しい所だ。ナーガはどうやら男性系のようだけど、マカラは性別云々の前に龍だからどうしようもない。

いつかは僕もケルベロスのような上位悪魔を仲魔に出来るといいのだけど…まずは20台の壁を抜けることからはじめないといけないな。

横島もそうだけど七夜は出来るなら早めに呼び出したい、あの即死能力は凄く魅力的だ。

テトラカーンされたら真っ先に死にそうだけど…

所で食いしばりは、絶対なる即死に通用するんだろうか…？

例えば、死がもう確定してるのに食いしばりをして、所詮死んでいくという訳で…やはりこの辺は矛盾が多いな。

多分、概念の強さによって変わるのかもしれない。

この辺まで来ると女神転生というよりは月姫寄りなのかもしれないな…今度検証してみよう。生き残るためにはどんな事でも覚えておかないといけないし。

『我が主よ。どうされました？』

「あ、いや。ただの考え事だよ、僕たちも行くこうか」

『はい』

……

……

…

5キロと言葉にすれば簡単にあらわされる数字だけど、実際歩くと
なると結構大変だ。

更には警戒したり、悪魔と戦ったりなどを絡めて行くとその疲労度
は半端ではない。

戦いも、倒せば終わりではなくてお互いに殺し合いだ。殺しが出来
ない云々はとうに過ぎた話だけど、その場の殺気と緊張感はやはり
消えたりはしない。

戦闘が終わればかなり疲労が残るし、虚脱感も来る。

回復魔法やアイテムはHPやMPを回復してくれたりはあるが、疲
労や磨り減った精神力までは回復してくれない。

精神力＝MPと思ったけどそうでもないようだ。現実、少し疲れた

と思っけていてもMPは1も減っけていない。

ペルソナを使わない限りはMPは減らないようだ。

ちなみに今降ろしているのはテンセンニャンニャンではなくてバクヤの方だったりする。

理由は結構簡単で、バクヤは剣と物の相性が×なのだ。普通の物理攻撃や銃撃はあっさりとな効化してくれる。

実際に攻撃されると、目の前に膜？ のようなものが現れる感じで攻撃がその場で止まるのだ。

同時についてくる衝撃なども、魔法ではない限り無効化してくれるのでありがたい。

攻撃を防いでも、後に来る衝撃破に吹き飛ばされました、じゃ笑うに笑えないしね。

バクヤ自体の攻撃力はとても弱いんだけど、特筆すべきはその支援能力だろう。

強化ブースタとタル・カジヤ、ラク・カジヤのコンボは凶悪の一言だ。僕自身が非力でも一度のタルカジヤだけで攻撃力が跳ね上がるのは驚愕ものだろう。

ラク・カジヤは防御力上昇の為にバクヤを降ろしてる時は意味が無いけどそれ以外のペルソナにチェンジすると恩恵のありがたさがよくわかる。

受けるダメージがかなり軽減されるのは助かるからね。

とはいえ、僕のMP的に連発できないし、それを使うならヘルのムドやニヴルヘイム。テンセンニヤンニヤンの回復魔法を多用する事が多い。

アメリカも強化魔法は使えるから、必然的に使用回数は減ってしまっただけだね。

でもマカラカーンは脅威だと思う。

相手が魔法系の悪魔ならこれで完封できるからね。時間がたてば勝利のチャクラでMPがある程度回復するし。

やはりペルソナはどれもこれも強力な存在だと思えてくる。

後は僕が自由自在に使えればいいだけだ。まだまだ使っているといふよりは振り回されているほうが正しいしね。

戦略の一つに上げるには僕自身の力量が足りなさ過ぎる。

「百太郎はっど…うん。近づいてるっばいね」

「所でなんで百太郎なの？ エネミーソナーの上位種ならもっとそっついう系の名前じゃないの？」

「いやあ…それは私に聞かれても困るなあ…」

「便利だから気にした事も無いけど…確かに百太郎って名前のセ

ンスは変わってると思うけど」

普段から使ってきて気にしなかったけど、そう言われればなんで百太郎なんだろう。

エネミーソナーから百太郎になるまでに何かしらのドラマがあったのだろうか…興味があるといえばあるなあ。

2時間ドキュメンタリーになりそうな名前の変化だと思う。

すべからくどうでもいいけど。

「肉眼でも見えてきたね…多分天使が4体と霊鳥かな…？」

「狙撃準備よし。あ、佐藤君スク・カジヤ使えない？」

「出来るよ、今使う」

直ぐに持っていた銃を構えて天使を狙いだす泉さん。

狙撃の能力はかなり高く、いまでは1000メートルでの狙撃も成功させているらしい。

1000メートルって…流石にそんな遠い所で狙われたら大所のしようが無いよね。つねづね思う、彼女が敵でなくてよかったと。

さて、バクヤを使うのもアレだからカードにスク・カジヤがあるの

でそれを使う。

カードの事は勿論誰にも教えていないし、これからも教える事は無いと思う。でも泉さんは色々誘ったりしてくれるし、教える事はできないけど魔法を封じたカードを有料で売るのはいいかなと思いつめてる。試供品でディアラマカードでもプレゼントしてみようかな。

早速スク・カジャカードを使って命中率を上昇させる。感覚的に言えば、集中しやすくなって狙いやすくなるといった感じかな。

冷静に相手を見極められるようになる魔法と言った感じだ。

微動だにせず、じつくりと相手に狙いをつける銃口、柊さんも妹さんもその様子を真剣に見つめている。

「ターゲット・インサイト……………シューッ！」

パンツ！ と乾いた音が響き薬莢が飛び出す。

奥の方では上空でつんのめった状態になった天使が消えていくのが見えた。

相変わらずの命中率というかなんというか。

天使は銃が弱点なので、威力も倍に跳ね上がっている為に一撃で即死したのだろう。

仲魔が行き成り死んだ為に混乱し始める悪魔達、どこから来たのかまだ分かってない為に辺りをキョロキョロと見回っているようだ。

そんなことをしている暇があれば逃げるか身を隠せばいいのに……って混乱してるから仕方ないか。

「第二射、いえーい」

乾いた音と、消えていく天使。

「第三射、ふおーえーばー」

再び乾いた音と、またしても消えていく天使。

霊鳥は恐怖を抱いたのか反対方向に凄まじいスピードで逃げていくけど、耳横でまた銃声がしたと思った瞬間に撃ち落されて消えていく。

外れることなく100%といった感じでどんどんと悪魔が倒されていく様子は、某シューティングゲームを髣髴とさせる。

まあ、現実とゲームという違いはあるにせよ、だけどね。

「いよっし。全滅だね」

「こなたって、クレー射撃の選手になればオリンピックとかに出られそうよね。」

「あれはあれで集中力が必要らしいよ？ それに天使とか悪魔って動くスピードとかがよく見るとパターンのなんだよね。だからその辺のコツを掴むと当てられるんだよ〜」

「わ、私には無理かなあ…」

「安心しなさいつかさ。私も同じだから」

僕も同じくと言った所だ。

つくづく彼女達は才能の塊だと認識してしまうな、少し…というかかなり羨ましいと思える。

文珠やマジックカードが使って何嫉妬しているんだ、と言われるかもしれないが、羨ましいものは羨ましいものなのだ、どうしようもない。

泉さんは泉さんで、彼女達は彼女達で、僕の能力に思う所が無いといえは何か有るだろうし。人間というのはこんな所もあるのだと思わなくちゃいけないだろう。

その辺を口にしないだけまだ、成長したんだなと思えるし、ね。

「さーて、さくさくいこっかつ」

『サマナーほど、護る意味ってなんだっけ？ とか思わせてくれる人間もいないわよね』

『来る前に死なれたら俺でもどうしようもねえからなあ』

『こなたは凄いだホっ！』

「それに関しちゃ同意ね。いつも助かってるわ」

「いやいや、それぞれ得意分野で頑張ってるだけだよ」 かがみ
「にもつかさにも佐藤君にももっちゃん期待してるからね？」 仲魔の
「みんなにもねっ」

『契約ダカラナ…任せてオクガイイ』

さて、目的の悪魔までもう少し。

ここからは更に気合を入れていこう。

……

……

…

・高良みゆき視点・

皆さんが異界に入られてから1時間ほど立とうとしています。

今回の仕事は、とても危険な為に佐藤さんにも来て貰っているのですが…

だめ、ですね。最近の私はどうにも情緒不安定なようです、少しとはいえ佐藤さんを疑ってしまうとは。

確かに、行き成り現れたといっても過言ではない佐藤さん。ダークサマーでない事は既に分かっているのですが、その…泉さんにCOMPを渡した意図がよくわかりません。

そのおかげで泉さんの戦闘力は大きく上がりましたし、異界での戦いも楽になったといっても過言ではないでしょう。

私の隣にも悪魔、天女アプサラスさんが私を護衛してくださっていますし、助かっています。

だからこそ、よくわからないのです。

なぜあの佐藤さんが泉さんにCOMPを渡したのかが…何かしらの理由があったのでしょうか、別段お金を取られたわけでも何かされたわけでもなく純粹に譲り受けたいらしいですが、そこがわかりません。

泉さんは友達になったからと言っていましたが、そんな簡単な事なのでしょうか？

「…!? だめですね、こんな事ばかり考えていても」

『どづか…なさいまして?』

「あ、いえ。なんでもありません。マーカーによるとターゲットとの戦闘も近いようですね」

狂神オグン。

主にヴードウ教に伝わる神様であるとされています。

その性質は、強さと暴力、激怒と破壊と言ったように、過剰なまでの破壊神とも言われている神様です。

他にも火、鉄、政治、戦争を司るとされているとされ、信奉されている所もあります。

狂神と言われるのは恐らく、その凄まじい力ゆえに狂った、もしくはその分霊ゆえに精神が歪んでしまった為というのが濃厚でしょう。

本来の神々が降りてきているわけではなく、分霊、つまり本体の別身ですから人間でも手段を講じれば倒せる可能性もある悪魔ですね。

とはいえ、その攻撃力は知っている情報だけでも同レベルの悪魔以上という認識です。

詳しいデータが取れないために相性などがまだ分かっていないのが辛い所ですね…

「皆さん無事で戻られるとよいのですが…」

『大丈夫ですよ。サマナーは引き際は良く知っておいでですし、あのもう一人のデビルサマナーの方にはかなりの力が秘められていました。勝てずとも負けて全滅するような事はないでしょう』

「力…ですか」

私には皆さんと一緒に戦う力がありません。

こうして、皆さんの無事を祈る事くらいしか…勿論情報が力にならないと言う事はありません。

寧ろこの世界では情報こそがまさに力でしょう…でも…それでも…

私は皆さんと一緒に、同じ場所に立って居たかった。

でも、あそこにいるのは私ではありません……………佐藤さん。

このもやもやとした鬱屈な感情、本当にままならないものですね…
きっと彼は良い人はずなのに、私はどこかでそれを認めたくない
と思っっている。

- 私の場所が…取られた

浅ましい考えです。

私は多分佐藤さんに嫉妬しているのでしょう。

皆さんと一緒に戦う事のできる佐藤さんの事を、まだまだ私は子供なのかもしれませんね。

彼は何も悪くないのに、でも、どうしてもそう思う事を止められない。

私も、一緒に戦う事ができたら。彼への認識は変わっていたのでしようか？

『どうしたのです…？ 顔色が悪いですよ』

「いえ。本当に何でもありませんので」

私に出来る事をしましょう。

ここに居るだけだとしても、皆さんはきっと私と一緒に戦っていると思ってくれていると信じて。

私に出来るのは、これだけですから。

そしてここが私の戦場です。表向きに守る事が、戦う事ができなくても。

この知識と情報を使って、私は皆さんを裏側から守ります。

Continue35 〈崩壊への七日間・火曜日〉（後書き）

という訳でミッションです。

世界崩壊が近いのにミッション。でもやっている本人達は知りませ
んからこんなものですね。

みゆきさんの佐藤君への不審の正体は少なからずの嫉妬が含まれて
いたようです。

人間である以上、他人が羨ましいと考えるのは仕方ないですね。

生きている以上、全部が綺麗なままではいられないのが寂しいとこ
ろです。

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお
答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：7票

かがみ：11票

つかさ：1票

みゆき：16票

ダツキ：4票

アリス：4票

覚醒時ステータス成長表

力特化：2票

知魔特化：7票

体特化：0票

速特化：37票

運特化：1票

バランス：35票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

Continue36 崩壊への七日間・火曜日? (前書き)

火曜日はまだ続きそうです、長いなあ…

今日は急遽お休みになってしまったのでつつい書いてしまいました。

最後の選択肢は継続で乗ってます。

内容は内緒ですね、属性変換かルート固定か…? はてさて、です。

Continue36 崩壊への七日間・火曜日？

- 終つかさ視点 -

充実してる瞬間って、皆どんな時なのかなあ。

私はこうやって皆と一緒にいる時が一番充実してるって思う、例えそれが戦場だとしても。

私ってドンくさいから、一杯お姉ちゃんや皆に迷惑かけちゃうけど、頑張ってるんだ。

私も皆もこの瞬間だけは一生懸命頑張ってる。

戦わないとこの町が大変な事になっちゃうし、皆が困っちゃうから… 出来る事があるから、今を頑張ってるんだ。

一人じゃ怖くてそんなことできないけど、お姉ちゃんやこなちゃん、ゆきちゃん。そして最近加わった佐藤君も居てくれるから、怖くないんだ。

このお役目は私にしか出来ないし、他の人には危なすぎるからこんな事させられない、だから私は……

「魔力よ…取り巻いて…渦巻いて…昇華してっ！ マハンマッ！！」

印を組んで魔力を練り上げて破魔の魔法を立ち上げる。

聖なる属性の魔法はね、相手に怒りを持つちゃいけないんだって、お父さんが言ってた。

お父さんは私と同じ破魔系の魔法使だから、そういう事を沢山知ってて私に教えてくれるんだよ？

『が……ああああ………ああ………』

『ぐえ……ぐあ………ああああ………』

沢山のゾンビさん達、凄く怖いけど、きっとあの人達も苦しいんだね。

私にはこんな強制的な成仏しか出来ないけど、でもそれで助けられるなら、躊躇わないんだ。

躊躇ってしまえば私も皆も死んじゃうし、皆を助けられないものね。魔力を全力で高めて破魔を唱えると、ゾンビさん達は心なしが安らいだ顔をして消えていく。

魂がどうなるのかは、私にはさっぱりだけど今度は普通に人生を送れるといいな。

「ふう。お姉ちゃん今手伝つよっ」

「サンキュッつかさっ！」

「ちよっ！？ このゾンビの大群はノーサンキューだってっ！？
撃つても撃つても減らないよっ！？」

『その分漸く私達の出番だけどね。私の炎は優しくないわよっ！
死にたい奴から掛かってきなさいっ！ マハ・ラギオン！』

まだまだ沢山出てくる悪魔達、まるでここから先には進ませないぞ
ーって感じで一杯現れる。

私は持ってた独鈷しじじを辺りに投げつけてお経を唱える。

「カンジザイホサツ観自在菩薩、キョウジンハンニヤハラミツタジ行深般若波羅蜜多時、ショウケンゴウシカイクウ照見五蘊皆空、ドイッサイムヤク度一切苦厄、
シヤリン舍利子、シキフイクウ色不異空、クウフイシキ空不異色、シキソクゼクウ色即是空、クウソクゼシキ空即是色」

私を中心に暖かい力が満ち溢れる。

私は更に更にお祈りを続ける。

私から溢れた聖なる波動が悪魔達に降り注いでいく。

その言葉を辺りに届く度に、悪魔達は私に眼を向けてそして動けなくなる。

印を組み替え一字一句に破魔の魔力を込めて祈り奉る。

一つ一つの意味は弱くても、それらを積み重ねて、意味を込めて、魔力を込めて、優しさを込める事によって、お祈りは力を増すんだよ。

「ソクセツシュワ即説呪日、ギャテイ羯諦、ギャテイ羯諦、ハラギャテイ波羅羯諦、ハラソウギャテイ波羅僧羯諦、ホシソワカ菩提薩婆訶、ハンニヤンギョウ般若心経!!!」

それが、私の力だから。

気づけば悪魔は苦しむようにもがきながら動きを止めている。般若心経は悪魔の精神力を削ってダメージを与える事が出来るんだ。

お父さんが言うにはダメージじゃなくて、心に良心の呵責とかを与えて存在を不安定にさせるとか、成仏を促すとか言ってた。

弱い悪魔とか、この世に未練がある悪霊などには凄く効果があるの。

「皆、今だよっ!」

「まったく…同じ術が使えるのにこっち方面はつかさに勝てる気がしないわ。燃えなさいっ! アギラオ!」

「仏教チートk t k r って感じだねっ! いやっしゃーっ! 皆、蹂躪! 蹂躪! 蹂躪せよっ! だよっ!」

『任せヨツ！！　グオオオオオツ！！』

動けなくなってる悪魔達を皆が一斉に倒していく。

私は悪魔達が再び動き出さないようにずーっとお祈り…というか真言を唱え続けてる。

初めはよく間違えたけど、今はそんなミスはしないよー？　一文字でも間違えたら効果が一瞬で消えちゃうしそんな事になったら大変だもんね。

その辺の重圧があるせいで印と言葉を紡ぐ度に汗が流れるのが止まらない。

「…数が多いな。温存なんて言ってもらえないか。召喚！　アメリカ、アメノウズメ、モー・シヨボー！」

『待つてましたわあゝ　派手な歓迎ですねえ、でも。今の私はサマナー様以外はお断りですの』

「おー、沢山です。ご主人様ご命令を」

『はっはっはっはっ！　魔王の力を見せてやろう！』

「アメリカはダムドで辺りの敵を掃討っ！　アメノウズメはマハ・ジオンガで奥の敵を牽制してくれ。モー・シヨボーは羽ばたきで屍鬼を弾き飛ばすんだ！」

「らじゃ、なのですっ！ 闇の衝撃…受け取るですよ。ダムド！」
アメリカちゃんっていう造魔の子が黒い魔力の塊を悪魔に投げつけた。

凄い衝撃と共に大きなクレーターみたいのが出来てるよう。やっぱり佐藤君と仲魔達って私達より強いよね。

佐藤君が銃を撃つたびに確実に悪魔が倒されていって、その間を縫うようにモー・シヨボーさんが風を巻き起こして悪魔を吹き飛ばしちゃう。

奥の方に居る悪魔は凄い雷がぴかぴかーって鳴り響いたと同時に絶叫を上げて消えていくし、これなら何とかかなりそうだね。

私ももう一頑張りかな。

「これで…ラストオっ！ 刈り取らせてもらおうよっ！」

こなちゃんが残りの悪魔に飛び掛ってナイフを煌かせたと思うと、悪魔の首がしゅぱって切れちゃった。

はう、夜中に出てきそうなシーンだよ。

「流石に暗殺の能力は強いな」

「はっはっは。もっと褒めてくれていいんだよ？」

「これが必要ねえ」

「これ見よがしに溜息つかれてるっ!？」

「あはは、皆お疲れ様ー」

結界の役目を果たしてた独鈷を回収して私も会話に混ぜられていく。

「妹さんの般若心経だっけ？ アレだけの数の動きを止められるなんてとんでもないね。仏教の力も侮れないな」

「えへへへ。私攻撃とか苦手だけどこういうのなら得意なんだ」

「寧ろこれで攻撃力があつたら私の出る幕消えるけどね」

「はう、でも私お姉ちゃんが居ないとダメダメだから」

私一人じゃ、直ぐ諦めちゃうよ。

私が頑張れるのはお姉ちゃん達が一緒にいてくれるからだもん。

「うむうむ、私達はパーティだからね。足りない部分は補つのさっ」

「僕はアルバイトだけどね」

「ふふっ、頼りにしてるわよつかや」

「うんっ
」

……

……

…

辺りを警戒した後は少し休憩を取る事になったの。

今はレジャーシートを引いてお茶とか出してる途中、今日の為に軽い食べ物を作ってきたんだよ。

ゆきちゃんにはあらかじめ手渡してるから食べてもらえてるといいな。

仲魔が沢山居るから、私も頑張っちゃった。喜んでくれるといいな
！。

『うっ、美味いつ！？ 人間はこのような美味しい物を作れるのかっ
！？ これも美味いぞっ！？』

『あまりがつつくと子供っばいですわよおっ。』

「魔王の威厳（笑）になりそうです」

『ぐがっ！？ み……………みず…』

「おお…昇天しかけてる。悪魔って喉つまりで死ぬのになって、水飲んで水」

「こなたの仲魔もそうだけど佐藤君の仲魔もやっぱり個性的ね」

「アリスちゃんは私とも気が合うしねえ」

《まあねー あ、サマナーさん私の分も取っておいてねー？》

「大丈夫だよ、そもそもそんなに食べられないし」

「あはは。まだ沢山あるからお仕事が終わったら一緒に食べようね？」

《ホントッ！？ よーし。頑張るわよーっ》

佐藤君のCOMPっていう携帯からアリスちゃんの声が聞こえる。

前にあったときはピクシーだったんだけど、進化して人間っぽくなっただって。こなちゃんとお姉ちゃんは先に会ってるらしいけど、人間と変わらないって言ってた。

悪魔の人型って、人間そっくりに見えるけど顔つきとか体つきがやっぱり普通の人間と違うし、そもそもオーラみたいなのが違うから分かるんだけど、アリスちゃんはそのオーラも人間っぽいからお姉ちゃんも初めて会った時は人間だと思ってたんだって。

種族は魔人って言うんだけど、聞いた事ないなあ…佐藤君が言うに

は最大戦力って言ってたから凄く強いんだろうなあ。

これからオグンを倒しに行くから凄く頼もしいよ。

「でも、珍しいよね普通の政府からのお仕事じゃなくて、其処に来てた普通の依頼なんでしょ？」

「そうなのよ。どちらにしてもこの異界は封じなくちゃって思ってたから受けざるをえなかったんだけどね」

「敵討ちか。こういう仕事をしている以上そういう仕事も舞い込んだりするんだね」

「そうね…ゾっとしないわ」

敵討ち…つまりそのオグンっていう悪魔に誰かが殺されちゃったんだよね。

普通に日本で暮らしてたら縁遠い言葉だと思うけど、私達の暮らす世界じゃこれが当たり前の事なんだよね。

もし…もしもこの中で誰かが死んじゃったら、私はきつと立ち直れないと思う。

柊家に生まれてきて、退魔士として育てられてきた私達だけど、私はそこまで心が強くなれなかったから。

お姉ちゃんはいつでも強いから羨ましいし、凄く安心できる。

こなちゃんはいつもハラハラしてたけど、今は凄く安定してるし仲魔も沢山居るからそうそう危険なんて無いかな。

ゆきちゃんは異界に入らないけど…でも心配だった。今はこなちゃんの仲魔が護衛してくれてるからその辺はもう心配しなくていいと思ってる。

佐藤君は私が心配するほど弱くないし、逆に護ってもらってばかりで恐縮だよ。

「なーに、まかせたまへ。危険な時はこの私が助けてしんぜようっ

」

「ありがとこなちゃんっ

」

「だから私が危険な時は助けてねー？」

「そこで落ちを持ってくるかアンタは」

「ここが異界って事を除いたら、学校で話してるなんて錯覚しちゃいそうなほど皆リラックスしてる。」

戦闘中ならともかく、それ以外でも過度に緊張してたら倒れちゃうから、こっやって少しでも平常な状態にしないかちゃいけないんだ。

私ももう慣れたから大丈夫だよ。

微妙に佐藤君が辛そうな表情をしてるのが気になるけど…

「大丈夫佐藤君？」

「ん…ああ、大丈夫だよ。さっきの屍鬼の大群が来たときに気持ち悪くてね、思い出すだけで寒気がする」

「ジ　とかそんな気持ちだったのかなー」

「バイオハ　ードはこれ以上にゾンビがいるから精神的ダメージが高そうだ…僕なら逃げるか引きこもるね」

「佐藤君ってそこだけ聞いてると強い感じがしないわねえ」

「僕が強く見えるのはハーモナイザーとミトラスのおかげだよ。なかつたら所詮その辺の一般人に毛が生えた程度だしね」

そうかなあ？　レベルが20もあるし凄く強いと思うけど。

20って言ったたら一流の世界だよー。私達も漸く10レベル台になって一人前になれたけど全然まだまだし。

こなちゃんが14レベルって聞いた時は吃驚しちゃった。デビルサマナーって普通に戦うより強くなれるのかなあ。

でも、異界の悪魔はもつともつと強い悪魔が沢山居るんだよね。

そんな悪魔にはまだ会った事ないけど、そんなのが異界の外に出て

きたら、私達どうなるのかな。

最近凄く心配な事が多いよ。

メシア教会って言う所が色々何かしてるらしいし、それに対抗して
ガイア教会っていう所があるって聞いた事があるし…

日本は、世界はこれからどうなっちゃうのかな。

異界が開く頻度も凄く早くなってるし、悪魔もドンドン強くなつて
る。正直私達だけじゃ追いつかないよ。

何事もなければいいな…もう少しで高校も卒業だし、こつやって皆
で居る時間が減っちゃうし、何かが変わりだしてる気がするよ。

…ダメダメっ！ こんな事じゃこの後の悪魔との戦いで邪魔になっ
ちゃうから元気出さないっ！

「よしっ。そろそろ行きましょ、多分移動してなければこの先に居
るはずよ」

「それじゃ、今の内に召喚しておこうか」

「腕になるねえ。オグンはデータが無いし狙撃はやめといたほうが
いいね。反射されたら私の頭がパンだよ」

「こ、怖い事言っちゃダメだよお」

「あはは、ゴメンゴメン」

よし、頑張つて終わらせて暖かいお布団で休もうっと。

がんばるぞー

- 柊つかさ視点解除 -

- 異界

「隊長、これでいいのでしょうか？」

「ああ、多分来るだろう。オグンが勝てばよし。負けたとしてもダメージは免れまい。それに死んでも実験体が一体破棄されるだけだ」

「洗脳悪魔…ですか。科学と言うのは凄まじいですね」

「魔法を組み合わせた魔導学だったか？ 正直俺にはよくわからんが、こしやくな悪魔達をこつやって手足に出来る事を考えると科学も馬鹿に出来ないな」

其処にはパワードスーツのようなものや重火器で武装をした男達が数人居た。

直ぐ傍では狂神オグンがまるで機能停止した機械のように動きを止めていた。

よく見ると後頭部に小さな機械がついているのが見えるだろう。

「聖女候補だったか？ メシアなんぞ生まれてもらっては困る…か。まさかこんな簡単な手に引つかかるとは思わなかったが、釣れたものはせいぜい利用させてもらおう」

「外ではもう一人の聖女候補を捕まえる為の部隊が待機中です！しかしデビルサマナーが二人とも居るとは誤算でした…これでは此方のほうは辛いかも知れませんが」

「確かに…普通に一人になった所を攫えば良かったんじゃないでしょうか？」

「周りでは変装しているメシア教の奴らがうるちよろしてる。普通に攫う事ができれば初めからそうしているさ。それに洗脳悪魔の初実戦もかねているからな」

彼らにとって正直聖母候補がどうなるうと関係ないらしい。

捕まえられれば良し、もしダメだとしてもどうせメシア教は潰すのだ、その時に聖母を捕まえれば良いと考えていた。

今回の事はまったくの偶然だった。洗脳悪魔の性能を試す為に適当に依頼を配布し来た能力者を相手に戦わせる事を目的としたから。

しかし今回の依頼を受けたのが、此方で最近情報を手に入れた聖母候補が混ざっている事に気づいた上の方からの指示で誘拐、出来なければ殺害を命じられているだけだ。

勿論、メインは洗脳悪魔に偏っているので聖母云々は其処まで重要視はされていない。

上の方でも、出来ればいいと言われているので彼らはそこまで焦っても居なかった。

と言うよりも隊長と呼ばれた男があまり気乗りしていないというのもあったが、

唯一の誤算といえば、デビルサマナーが二人も居るとい事だろうか。

能力者が二人にデビルサマナーが二人、過剰戦力と言っても過言ではないだろう。

強大な力を持つ悪魔が物量で攻めてくる事を考えるとそれだけで恐ろしい。

などと考えていると伝令兵が焦ったように走ってきた。

「隊長！ 送り込んだ洗脳ゾンビが全滅しました！！」

「ふむ、やはりな。だがその程度で死んでもらってはオグンが試せないからな、どっちが幸せだったろうかね、ゾンビに殺されるかオグンに殺されるか」

仕事とはいえつくづくやってられないと心の中で呟く男。

直ぐ傍では男の言葉を待っているように隊員達が立っていた。

「あー、まさかこれから士気高揚の演説でもしろってか？」

「隊長なんですからそれ位して下さい。どっちにしても相手は子供という事で士気が下がってるのですから」

「へえへえ。つただから上に上がるのは面倒なんだよ。ってかよ、こついうのは普通軍隊がやる事であって、俺達は違うと思うんだがね」

「やったほうが効果があるのですからいいでしょう。というより早めにお願ひします。ターゲットが近づいてて高揚してるときの声を聞かれたらオジャンですし」

「じゃあ、やめとこつちや」

「隊長……？」

「へいへい……と。……………メシア教の考えでは信徒しか残らない。かといってこのままでは人間は緩やかに破滅していくだけだ。」

我々は警鐘を鳴らさねばならない」

男は周りの隊員達に染み入るように話していく。

彼らはそれをじっと構えながら聞き入っていた。

そして更に、言葉が紡がれる。

「我々は人間だ。ただの弱い人間だ。だが、けっして非力ではない。我々には科学力が魔力が、先を作り上げる力がある。世界は破滅するだろう、文明は廃れ悪魔が蔓延り、弱い人間は傷つき死んでいくだろう。ならばどうする？ 我々は黙って死ぬのか？ 神にすがって家畜のように生きるのか？ 否、否だっ！ 我々には人間としての誇りがある！ この世界を支配しているのは神でも悪魔でも動物でもない！ そう！ 我々人類だ！ 神や悪魔ではなく我々のような非力な人類だ！ なら俺達はなんだ！ ただ殺されるべき弱き人間か！？ 違う！ 我々は人間であり修羅である！ 魔法を使い、科学を使い、この世界を生き抜こう！ 神の支配などいらぬ、悪魔による恐怖に怯える事はない！ 我々はただ自由に！ 自由に生き抜くのだ！ それこそが我々ガイア教の教義であり、求めるものだっ！」

・おおおおおおおおおおおおおーーーーー！！！！

彼らの声が木霊する。

「お疲れ様でした隊長」

「ん？ ああ、ああいう士気高揚の言葉が肩が凝ってしょうがない」

「確かに似合ってますね」

「言ってる。さて…人間の英知はどこまで役に立ってくれるかな。どちらでもいいさ、我々の力はこれだけではないからな」

「隊長」

「どうした？」

「世界はやはり滅んでしまうのでしょうか…」

「さあな。どちらにしても神の炎なんてふざけたものは降らせはせんさ。つまりは核爆弾だろう？ やってられんよ、天使とか神とか言う割にはやるのが俗っぽい。自分達の力で出来ないのかね」

「核…ですか」

「なあに。核という事は人間の作り出したものだ。神の御業とか言われたらどうしようもないと感じるかもしれないが、人の手で創られたものが人の手で止められない訳ないだろう？」

「隊長はけっこう楽観的なんですね…俺はまだ怖いですよ」

「なら戦うしかないだろうな。俺達が天使をメシア教を滅ぼさない」

Continue 36 〈崩壊への七日間・火曜日?〉 (後書き)

何気に今日で一ヶ月目です。

まさかここまで書くとは思いませんでした。頑張ってるなあ… (遠い目)

そしてはじめてのつかさ視点、彼女も一杯考えたり不安を持ってたりするようです。

やはり裏があつた今回の依頼。初ガイア教登場です。

隊長さんは渋い人を想像しながら書きました。無精ひげがあつてタバコを吸ってるダンディなおじ様を想像して頂けると嬉しいです。

重要な選択肢 (属性かルートかは内緒です (汗))

- 1 : 神の炎 : 0 票
- 2 : 邪悪の念 : 2 票
- 3 : 無心の心 : 17 票

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた : 13 票

かがみ : 14 票

つかさ : 2 票

みゆき : 27 票

ダッキ：6票
アリス：6票

覚醒時ステータス成長表

力特化：3票
知魔特化：8票
体特化：0票
速特化：45票
運特化：2票
バランス：49票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。
この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。
基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue37 崩壊への七日間・火曜日? (前書き)

最近、微妙にゲームブックっぽくなってきているような気がします
(笑)

今日は5時ごろ目が冴えてしまって…今まで書いてました。

戦闘描写は苦手ですよ…はっ。

最後にいつもの重要な選択肢と、もう一つ結構重要な選択肢があります。

もう一つのほうは次回のお話に直接関係があるので、良かったら投票してくださいね。

という訳で、これを乗せ終わったらお仕事言ってくる来ます。帰りは17時かなあ…

Continue37 崩壊への七日間・火曜日??

更に奥に進むとソレは居た。

身が竦みあがってしまうような咆哮に重過ぎるプレッシャー！。

ただのユニークとはまるで違うその威圧感ほまさに狂神の面目躍如と言った所だろうか。

- 狂神オグン

今回のターゲットは僕達を見つけると斧を構えて突撃してきた。

その様子は重戦車を思わせる。

「う、わ…これ相手にするの」

「は、はうう…」

「し、しっかりしなさい二人ともっ！ 飲まれたら殺されるわよっ
」！

驚き竦みあがっている泉さんと妹さんを激励する柊さん、その言葉に正気を取り戻し各自直ぐに戦闘態勢を取り始める。

僕もすかさずハーモナイザーとアナライズを起動した。

「全員パターン1つ！ 防御を中心に！ オグンと言えば破壊神だ！ 攻撃力が高いから注意してっ」

『おつよっ！ いくぜモー・シヨボーっ！』

『くっ…狂神ごときが魔王に勝てると思っているのかあっ！』

オグンが僕達の所に来る前にモムノフとモー・シヨボーが前衛を張り牽制攻撃を仕掛ける。

威力を最低限にまで落として攻撃するのが基本だ。無効ならともかく反射だと自分の攻撃で倒れかねない。

モムノフは斧で切るのではなく平たい部分を肩部分にたたき付ける。オグンは避けようともせずに攻撃を受け止めた。

ゴソツ、という鈍い音がするがダメージには至ってない。

『反射はしねえな…っ！かなんて硬さだっっの。…いくぜえっ！』

攻撃が通じると分かり、烈火のごとく切りつけていくモムノフとモー・シヨボー。今の内に調べ上げなくては。

「泉さんっ！ アナライズできたかいつ！？」

「まだっ！ な、なんかこいつおかしいよっ！？」

確かにおかしい…通常の悪魔ならアナライズしている最中にどんどんデータが詳細になっていくはずなのに、オゲンに対しては未だに何も調べられていない。

このまま時間を潰してしまうのは悪手だ、出来る限りの戦略をとって置くべきだろう。

「アメリカはラク・カジャを！ アメノウズメは妹さんの援護に回ってくれ！ アリスは僕の援護っ！ アナライズ完成次第攻撃だ！」

『了解だよサマナーさんっ！』

『分かりましたわあ』

「ラク・カジャなのですっ！」

アメノウズメのHPは高いし攻撃力も中々高い、アメリカのラク・カジャがあれば防御力も大幅に上がるから壁としては優秀だ。

アリスのメギドは万能系なので通常効くかもしれないが、稀に…ごく稀に万能系を反射するとんでもないやつが存在する。

そのため未確認のユニーク系にはうかつに使用できない。メギドは

威力が高すぎる分反射されたら全滅するのは此方だ。

「私も行くわよっ！ マル・カジャツ！」

「うう、補助魔法と攻撃魔法がないよ…援護するねっ！ 不動金縛りの法っ！！」

「タル・ンダカードっ！」

泉さんのほうでも仲魔の命令が始まっている。

正直これだけの戦力があれば、全滅する事はないはずだが…なんだろう…凄く嫌な予感がする。

『こいつ…痛みってもん知らねえのか…？』

『ぐうううう…ぐおおおおおんっ！ テ…テテ…天驚地爆断ッ！』

「まずいつ！？ モムノフ下がるんだっ！」

『う、うおおおっ！？』

オグンが持っていた巨大な斧を一閃する。横薙ぎに払われた斧はモムノフを一瞬で一刀両断してしまった。

COMPに戻る事はなく、半分になった状態で吹き飛ばされていく。食いしぼりが発動しているようで、その状態でもまだぎりぎり生きているが時間の問題だろう。なんて攻撃力だ…

『おのれえっ！？ よくも仲魔を』

「下がるんだモー・シヨボー！ いったん距離をとるっ！」

激昂したモー・シヨボーが爪を剣のように伸ばして連続で振るう、しかしほとんどの攻撃を斧で受け止められるし、切りつけられた部分は大してダメージにもなっていないようだ。

それ所か傷が回復しているようにも見える、もしかして自動回復持ちなのか。

オグンもモー・シヨボーの隙を突いて斧を振りかざすが、飛び回りがつつ攻撃するモー・シヨボーを上手く狙えないで居た。

ただこのままではモー・シヨボーも直ぐに倒されてしまう。くそっ…攻撃力が高いとは思っていたけどこれは誤算だった。

とりあえずは現在フリーのアリスにリカムカードを手渡してモムノフの回復に回ってもらう事にする。

「アリス、モムノフの蘇生を。急いでっ！」

『うんっ！』

「うっ…嘘でしょ…？ あんな強い悪魔を一撃で…」

「金縛りが、効いてないよう！」

「マカラッ！ 代わりに前衛お願いっ！」

『任せヨッ！』

モムノフの代わりに今度は泉さんを援護していたマカラが前衛に躍り出た。

オグンのターゲットがモー・シヨボーからマカラに変わったようので、絶叫を上げながら襲い掛かっていく。

くそっ…まだアナライズが完成しないのか…一秒も惜しいこの状況で、このままじゃジリ貧だ。

「うっう、まだアナライズが終わらないよっ！ こんな事めつたにないのに」

「こっちもだ、一か八か攻撃にするにも博打すぎる」

アリスが持っている魔法攻撃貫通は無効、半減の相性を貫通するだけで、反射は貫通してくれない。

早くアナライズが終了してくれないと攻めようにも攻められない。
苛立ちだけが募っていく。

「数が足りないかな…フロストとナーガも前衛に回って！ 攪乱して相手の動きを阻害だよっ！」

『オオオオオオッ！ コノ先へ八進マセンゾオッ！！』

『ヒーホーツ！ こなたとつかさを護るんだホツ！』

『あいよつとね。今度はこっちから行くぜえっ！』

躍り出たマカラ達がオグンの攻撃を器用に避けつつ攻撃を加えていく。

ジャックフロストに至ってはまだ弱点も判明していないのにブフーラを唱えていた。

反射も無効もされなかったようでダメージにはなっているが微々たるものようだ。

一体だけで戦っていたモー・シヨボーも前衛が増えたおかげで回避より攻撃に回る事が出来る為に全力で攻撃していく。しかし…

『又ウ…』

『ぜ、全然効いてないホ…理不尽だホ』

まったく言っていないほど何の痛痒も感じていないようだ。

それ所か攻撃の切れは更に増しているようで、4人で戦っているのに劣勢に回り始めている。

『おおおおおおっ！？』

『ちい！？ 魔王の我がこんな雑魚ごときに…ふざけるなああああ
っ！』

『オイオイ落ち着けてお嬢ちゃんよっ』

『我は男だあああああっ！！』

怒るモー・シヨボーの激しい攻撃が続く、だがこのままでは押し切られてしまっだろう。

だれもまだ決定打を当たえる事すら出来ていない。

『何も出来ないのが、一番辛いわね…もう一度行くわよっ！ マル・カジャツ！』

『皆っ、頑張つてーっ！』

再び柇さんのマル・カジャによって行動スピードが上がる。

・ピコンッ！

そして、ソレと同時に僕と泉さんのCOMPがアナライズ成功の音を鳴らした。

すかさず相手を調べ上げる…そしてとんでもない事を発見してしまった。

「アナライズ成功っ！ な…っ！？ 全員下がれえーっ！！」

「皆逃げてっ！ やばいよーっ！！」

『があああああっ！？ おおおおおおおおおおおお
おおっっ！…！』

僕の言葉に反応できたのは数人だけだった。

前衛に居た仲魔全員はその言葉に反応できても下がる事が出来ない。

そして振るわれるのは、圧倒的な殺戮劇。

まるで暴風のように暴れ、斧を振り回し切り刻む様はまさに狂神だった。

仲魔達がまるで豆腐を潰すかのように切り倒され薙ぎ払われ、叩き

潰されていく。

上がる絶叫もその生きる暴風の前に飲み込まれていった。

同時に此方に降り注ぐ衝撃破が僕達すら襲う、泉さん達は耐え切る事が出来ずに後方に吹き飛ばされたけど、ある意味幸運だろう。あいつから距離を取れたのだから。

僕はバクヤのおかげで物理に抵抗があるために防ぎきる事ができた、だがこの場合は幸運だったのか、不幸だったのか。

「なんだ…なんなんだこのステータスは!？」

そこには信じられないステータスが表示されていた。

「名前」：オグン 「種族」：狂神

「現在LV」：24 「属性」：D-C

「ステータス」

HP：428 MP：230

力：48 知：0 魔：0 体：15 速：22 運：17

「相性」

剣：物：技：火：× 氷：電：風：
魔：心：× 禁：× 聖：× 呪：状：× 万：

「所持スキル」

- ・暴走
- ・物理攻撃貫通
- ・斬撃ハイブースタ
- ・魔神の肉体
- ・自動再生

「スキル」

- ・天驚地爆断 敵単体に剣属性超絶ダメージ。
- ・狂気の粉砕 敵全体に剣属性大ダメージ。 1 - 4回攻撃
- ・荒れ狂う暴乱 敵全体に剣属性特大ダメージ。

暴走：理性を失い本能だけで動き回る状態。知魔を0にしてその分を力に付与

物理攻撃貫通：物理攻撃時、相手が無効、反射、吸収の場合。相性： として攻撃できる。

斬撃ハイブースタ：物理攻撃が2段階上昇する

魔神の肉体：HPとMPが2倍になる。

自動再生：一定時間でHPが回復する。

物理攻撃貫通に、攻撃力の大幅増強。HPとMPが2倍になっている上に自動再生まで持ち合わせている。

メギドに至っては予感していたけど反射持ちだった。

スキルはどれもこれも凶悪で、一瞬の内に仲魔のほとんどを死亡させてしまうほどだ。

一撃でも貰ったら、僕以外ほぼ死んでしまう、いや食いしばり程度じゃ流石にどうしようもないか。

どうする、接近戦ははっきり言って無謀だ。

今ので死んだ仲魔はモー・シヨボー、マカラ、ナーガ、ジャックフロスト。

残っている仲魔はどれも皆後衛系の仲魔だけ。

貫通さえ持っていないければバクヤを降ろしている僕が前に立つという荒業も出来たけど…

皆がいる手前使いたくなかったけど、文珠も使わなければ死ぬのは此方だ。

ヘルのムドも反射されてしまうし…何にしても、とりあえずは。

「一手巻き返すっ！ ペルソナチェンジ・テンセンニャンニャン。来いっ！ 屋気楼っ！」

『無限に現れる霧の中に…惑いなさいっ！…！』

現れる幻術が込められた霧。伊達にはあっさりと破られたけど、相手はどうやら発狂しているしこれでどうにかなるはず。

まずは体勢を整えないと。

「皆大丈夫かいつ!？」

『私は大丈夫ですわあ、サマナー様の方が心配ですの』

「い、生きてるよ…:…:…:というか洒落になってない。何あの強さチー
トすら霞んで見えるよ。圧倒的な力の前じゃ小技は意味ないって感
じだね…:」

「こなちゃんと佐藤君の仲魔が一杯死んじゃった…:…:…:どうしよう」

「大丈夫だよ、死んでいるとは言えCOMPには戻ってる、時間が
たてば再生するから…:…:…:問題は」

「悠長に蘇生を待つてる時間が無いって事ね。こいつは放置してた
ら厄介だけど…:…:勝てる手段が全然見つからないわ…:」

『どう致しましょう我が主よ。タル・ンダで攻撃力を下げても正直
すずめの涙かと思われませす』

「確かにね…:」

ミトラスの言う通り、あの攻撃力の前じゃタル・ンダもあまり効果
が無いだろう。

まったくふざけてる攻撃力だ、これだとまだ伊達の攻撃力が可愛く
見える。いやアレも十分脅威だったけどね。

しかし、やれるだけやっておこう。

タル・ンダカードを使ってオグンの攻撃力を下げた…けど正直どれだけ落ちてるのか想像もつかない。

「ふう…佐藤君が居て助かったよ。このままじゃ死んでたね間違いない」

「ペルソナかあ…なんだか凄いね」

「まったくね…デビルサマナーだけでも十分なのに、どこまで出来るんだか」

「色々出来ても、勝てなければ意味無いけどね」

幻影を攻撃しているのだろう、オグンが相変わらず斧をぶんぶんと振り回している。

今はまだ誤魔化せているけど、屋気楼は時間がたてば消えてしまう、MPを考えてあと2〜3回が限界だ。その間に倒す手段を講じないと。

『わりい。助かったぜサマナー』

『蘇生間に合ったよっ！』

「モムノフっ！ 良かった」

アリスとモムノフが戻ってきた。前衛が一人でも居てくれるのはありがたい。とはいえあの攻撃を防ぐには防御力も何も足りないだろう。

なんと言ってもラク・カジヤをかけた彼女達があっさり殺されてしまったのだから。

『あいつ、ただのユニークじゃねえな…なんつうか異質だ。それに、あいつ生きてるのか？』

「どゆことモムノフちゃん？」

『ちゃんづけするな。さっき攻撃してた時に気づいたんだが、あいつ意識みたいなもんがまったく感じられなかった。人形か死んでるようなもん相手にしてるようだったぜ』

「暴走して理性が無いから…という訳じゃないと？」

『暴走してんのかよ…あの時のオルクスと同じじゃねえか…いや、でもあれも意識はあったな』

どういうことだ？ あそこに存在している以上生きているだろう。屍鬼にも少なからず自意識があるし、暴走しているとはいえまったく意識が感じられないというのも変だ。

いや、今はそれより勝つ方法を考えなくては…

寧ろ逃げるのも有りかもしれない。幸い殺された仲魔は全部COM Pに戻っているし、蜃気楼が発動している今なら逃げ切れるはずだ。次回対策を練って戦ったほうが安全に倒せるだろう。

狙撃がある分こちらが有利だ。

「どうしよ佐藤君」

「正直、アナライズが遅れたのが痛い。見た感じ並の攻撃じゃ通用しそうにないし、更に言えば回復持ちだ。今は蜃気楼が通用しているからこうして話す時間があるけど、アイツがこっちに気づけば死ぬ可能性も高い。切り札は：反射されるから使えない」

正直言うとこの状態じゃ、泉さん以外は邪魔にしかない。

レベル的にアイツの防御力を抜けるか心配だし、有効な攻撃はアリス達の魔法攻撃位なものだろう。

泉さんはハーモナイザーがあるし、あのスピードと悪運も持って攪乱すればオグンを止める事は可能だろう。

妹さんは魔力が高いけどあいつに効く魔法を持ってないのが難点だ。柊さんは純粹に魔力が弱い、このレベルとしては規格外に高いとはいえ、ガルーラ程度じゃ牽制にしかないだろう。

ハーモナイザー があるから適用させる手もあるけど、土壇場で上

手くいくかどうか。

「逃げるのも手だと思う。相手は射撃に耐性はないから次回までに装備を整えて遠くから射撃が一番安全性が高い」

「アリスちゃん達の魔法でいけないのかな？」

「ダメージは当てられるだろうけど、正直攻撃されたら一撃で死ぬ相手にぶつかりたくないよ」

「そだね…悔しいけどにげよっか、かがみ、つかさ」

「意地張っててもしょうがないわね。今の内に逃げましょ」

「う、うんっ…って、アレ見てっ!?!」

妹さんが指を刺した方向を見ると…

『おいおい、マジかよ…こんなタイミングで来るかね?』

『うわぁ…沢山居るよ。逃げるにも一苦労しそう』

「数が多いです…ご主人様どうしましょう」

其処には先ほど相手にした屍鬼の数倍といえる悪魔が居た。

オグンを囲むようにはらばらに存在しているせいで突破するのは困難だろう。

文珠での脱出をつかうか…この際四の五の言ってられない。

「んなっ！？ いつの間につ！？」

「なっ…オグンっ！？」

『サマナー様っ、危ないですわっ』

僕達が悪魔に少しだけ気を取られている間にオグンがいつの間にか此方まで来ていた。

あまりの出来事に一瞬動けなくなった僕に斧が迫る。

避けきれないと思った瞬間に横から衝撃を受け飛ばされた。

直ぐに其処を見ると切り倒されたアメノウズメが見える。致命傷のようでCOMPに戻っていくアメノウズメ。

彼女がいなければ死んでたか、食いしほりがあっても致命傷は免れなかっただろう。

「アメノウズメさんがっ！？」

『あの一瞬でここまできやがっただとっ！？ ありえねえっ！？』

「厩気楼がまだ続いてたんだぞっ!?!」

その通りだ。厩気楼はまだ途絶えてないはず。それも音も立てないでこっちに来るなんて事ができる訳が。

あまりにも出来すぎている…。

急に現れた悪魔と、暴走しているはずのオグンが悪魔が来た瞬間にこちらに気取られずに襲い掛かってくるなんて。

まるで、誰かが指示しているかのように。

「きゃああああつ!?!」

「まず…あ、これ死んだ…?」

「皆っ!?!」

思考は中断された。

振るわれる巨大な斧が唸りを上げて僕達に迫るっ!!!

『うがあああああああああああああつ!?!』

荒れ狂う暴乱が解き放たれる、縦横無尽に襲い掛かってくる斧の攻

撃。

僕と泉さんは悪運や命運の力でぎりぎり避ける事に成功した。当たってたら問答無用でミンチだったな…これは。

命からがら避けたという感じで逃げたため、僕だけ皆と反対側に飛ばされてしまう。距離はオグンをはさんで5メートル位だろうか。

ハツとして柊さんと妹さんを見る、まずい彼女達は悪運も命運も持っていない。

「え、えーいつ！ 物反鏡っ！」

「とつときよっ、反射しなさいっ！」

柊さん達の方は物理攻撃を1度だけ反射できるアイテムで攻撃を防ぎきる事に成功していた。

反射された攻撃がオグン自身を切り刻んでいく、流石にダメージがあつたようでぐらついているようだ。

ちなみにモムノフとアリスはぎりぎり射程から外れていた為風圧で吹き飛ばされただけだ。

『サマナーさんっ！ 直ぐ助けるからっ！ ジオ・ダインっ！』

『おおおおっ！ これ以上はさせねえっ！』

再度攻撃しようとするオグンにジオ・ダインが降り注ぐ、ダメージ自体は与えているようだが、動きを阻害する事ができない。

再び突進し始めるオグンにモムノフが挑みかかるが、その勢いを止める事が出来なかった。

僕はいつでも逃げられるように文珠を取り出し【脱出】と込める、直ぐに泉さん達と合流して逃げなくては。

これ以上オグンに攻撃されてしまえば僕達は確実に全滅してしまう。依頼も大事だけど命には代えられない。

「うわわわっ…洒落になってないよーっ！」

「あれでまだ動けるのっ!? このっ! ガルーラっ!！」

「モムノフさんっ! 危ないから避けてっ!」

泉さんが銃を連射し、柊さんがガルーラを唱える。

弾丸や疾風がオグンに命中する…が、ソレすらも無視したようにオグンは突っ込んでいく。

モムノフが懸命に押さえつけようとするけど、持っていた斧に弾き飛ばされてしまった。

僕も彼女達に追いつこうとするが、それよりもオグンの方が速い。

『うおおおおおおおっ！！！！』

振り上げられる斧……どうやらオグンは泉さん達だけを狙っているようだ、このままじゃあの3人は直ぐに殺されてしまう。

一撃目は再び泉さんを狙う。ギリギリ回避するが躓いて転んでしまう、其処に再び振り下ろされる斧。しかし斧が自ら避けるように外れてしまう。

恐らく彼女の悪運が効果を為しているんだろう、だけど今ので多分最後だ、もう次は無い。

ぎりぎり僕はアイツの射程から外れている、どうする？ 確実にこのままじゃ彼女達は助からない。

【脱出】の文珠はこのままじゃ僕とアリスとモムノフだけしか効果を発動しないが、僕達は確実に助かる。

【加速】の文珠を使えば、彼女達の元に直ぐ行く事が出来るけど、ほぼ同じタイミングで脱出が使えるのか？

このまま彼女達を見殺しにすれば、最低でも僕と仲魔達はこの場は切り抜けられる。

どうするっ……………！！

Continue37 〈崩壊への七日間・火曜日?〉(後書き)

命運と悪運、食いしばりを頑張って使い切ってみました。

という訳でかなり絶体絶命です。佐藤君は誰をかばうのか、もしくは逃げるのか。

次回をお楽しみにですよ、果たしてアンケートの末、どうなるかです
ね。

重要な選択肢(属性かルートかは内緒です(汗))

- 1：神の炎：0票
- 2：邪悪の念：3票
- 3：無心の心：30票

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお
答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

- こなた：16票
- かがみ：18票
- つかさ：5票
- みゆき：32票
- ダッキ：7票
- アリス：7票

覚醒時ステータス成長表

力特化：4票
知魔特化：9票
体特化：0票
速特化：53票
運特化：2票
バランス：57票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue38 崩壊への七日間・火曜日? (前書き)

4/21 こなたスタータス守護天使の説明変更。コストが厳しくなっています。

前回アンケート結果

こなた：13

かがみ：6

つかさ：11

逃げる：1

こなたとつかさが接戦でした。

という訳で今回はこなた視点で進みますね。

驚いてもらえると嬉しいのですが…。

火曜日はまだまだ続きますが一応オグン戦終了です。

まだまだ上手く書ききれませんが、こういうのはやはり難しいです。

センスのある方が羨ましいですよ…

Continue38 崩壊への七日間・火曜日？

- 泉こなた視点 -

いやあ… 儂い人生だったなあって諦めながらオグンの攻撃を見てた。あの攻撃は間違いなく避けきれないし、確実に私を殺すって嫌でも理解できたから。

佐藤君はオグンの後ろにいるし、流石にもうどうしようもないし、ね。こうなるともう色々諦めがつくって言うか、人生スローモーションになるって言うか…

心配なのはかがみとつかさかな。逃げ切れるといいけど、あと、お父さん、ゆーちゃんごめんね。

『おおおおおおおおおおおっ！！！』

私に死を運ぶ悪魔が吼えた。

後ろではかがみとつかさが逃げてって言うてるのが分かる。

でも、もう遅い… かな。

そう思うと同時にオグンの巨大な斧が私を…

赤い血が私に降り注ぐ、生暖かくて、そして… 私のじゃない赤い血

が…

「え…？ あれ…あれれ…」

同時に私に掛かる重さと、服を濡らす暖かい感触が。

訳が分からなくて…信じたくなくて私は思考を放棄したくて、でもその重さと急激に冷えていくその体温が真実だと告げてた。

「あ…ああ……うわあああああああああああああああああ
っ！！」

「佐藤君っ！！」

「ち、血があんなにつ！？」

『サマナーさああんっ！！』

嘘だ、嘘だよ。嘘だつて言つてよ…佐藤君強かったじゃん。私達よ
り色々な能力があつて、こんな簡単に、こんな簡単にし…

動けない、信じられない、認められない。

おかしいよ、さっきまで笑ってたんだよ彼？ 最近漸く少しは笑う
ようになったのに、その笑顔を見るのが嬉しかったのに。

『オグンツ！ てめえええええつ！！』

『まだリカームが間に合うよっ！ モムノフ動きを止めてっ！』

『私も手伝わっ！！』

誰かが話してる、叫んでる。

どっかで誰かが動いてる、でも…私は其処から動けなかった。

ぎゅっと私は倒れこんできた佐藤君を抱きしめてる、目を閉じて意識を失っている佐藤君。

心臓の音がまだトクン、トクンとなっているはずなのに、生きている感じがなくて、まるで夢の中の出来事のように。

「こなたっ！ しっかりしなさいっ！ 佐藤君をこっちに下げるのっ！ つかさ回復魔法をっ！」

「やってるけど、全然傷が塞がらなくてっ！ しっかりして佐藤君っ！」

「かがみ…つかさ……」

「いつまで呆けてる気よっ！ あんたを助けようとしてくれた佐藤君の意思を無駄にする気っ！？」

助けてくれた…佐藤君が私を…？

そうか…助けてくれたんだ、助けてくれたんだよあの悪魔から。

でも、佐藤君が冷たくなつて。私はこうして無事で、代わりにこんな事になつて…

「……………ない…」

「こ…なた…？」

「こなちゃん…？」

「……………るさ……………ない…」

どうしてかな、頭がぐらぐらする、ガンガンする。一つの事しか考えられない。

たった一つだけ、それだけだ。

持っているナイフに力が籠る、赦すなつて、殺せつて、頭の中で鳴り響いてる。

そして、それを黙らせるつもりは……………無いよっ！

「かがみ、つかさ。佐藤君お願い」

「ちよっ、どつする気よっ!?!」

「決まってるじゃん。あの…化け物を……………」

あの化け物を…

「殺すっ!?!」

弾け飛ぶように体を躍らせてオグンに飛び掛った。

ペレやモムノフさん、アリスちゃんが一生懸命戦っているのが見える、勝負は一瞬…全力で殺してやる。

皆が驚いてたけどどうでもいい、ただ頭の中にあるのは憎悪と怒りだけだったから。

「死ねえええええええつ!」

ナイフを首に叩きつけようとして。

私は衝撃と共に吹き飛ばされた。

……………

……………

…

「あれ…？ 私オグンに突撃して」

気がついたら私は変な花畑にいた、おかしいなあ…オグンや皆は何処行つたんだろ？

あれだけあつた憎悪とか無くなってるし…どうなってるのかな？

とりあえず奥の方から水の音が聞こえるから歩いてみようつと。

「んー…もしかしなくても私って死んだかな」

歩いていくと遠くを見渡す事ができないほど大きな海を見つけた。

これってさ、もしかしなくても三途の川だよね。

うあああ…佐藤君がせつかく庇ってくれたのに逆上して返り討ちつて…佐藤君無駄死にじゃん。いや、まだ生きてるぽかったけど。

リカムカードだっけ？ あれ使えば蘇生の可能性高かったんだよね、うわああ、冷静に佐藤君から拝借して使っておくべきだった！？

いやまあ、そこまで冷静になれなかったっていうかね？ こう、冷静さより怒りが湧いてきたのだよ。け、決して厨二病じゃないからねっ！！

「んー…佐藤君は来てないよねー。という事は生きてるのかな？」

『客人よ…よくここに来た』

「って、うわわっ！？ 悪魔っ！？」

ぼけーっとしてたら行き成り声を掛けられた。慌てて声のした方を見るとひげもじやおじいさんが杖を持ちながら海の上に立ってた。まず間違いなく悪魔なんだろうけど、何というか優しい表情をしているね。もしかして仲魔になってくれたりとか？

「えーと、どちら様？」

『この川を渡ってはならん。御身の上には未だ光があり、汝を護らんとおる』

「うおう、ガン無視ですか」

どこかのNPCみたいにこっちのセリフをあっさり無視して下さい
たおじいさん。

渡るなつて事はここは間違いなく三途の川ね、OKOK。渡らなく
ていいなら渡らないよっ！ 死にたくないしねっ！

しかし、そういう事を教えてくれるつて事はいい悪魔なのかな、N
PCっぽいけどとりあえず感謝しておこう。

「渡らないのはいいんだけど、ここからどうすればいいですか？
ぶつちやけ帰り道が分かりません」

だつてさ、ここに来るまでずーーと花畑だつたしさ、目の前
は川なんてちつぽけな存在じゃない海のような三途の川しかありま
せんよ。

地平線ずーっと水しか見えないから泳いでいけつて言われたら逃げ
るね私。

そんな事考えてるとおじいさんが再び口を開きましたー。もしかし
てただの進行役とかないよね？

『汝の力とならんがため、この岸に姿を現す…見るがよい』

ふわーっとおじいさんが少し動くとき光る玉がふわふわと川の辺りに浮かんでるのが見えた。

えーっと、人魂ですか？ 未だかつてゾンビやゴーストは見たことあるけど人魂は見たこと無いなあ。これが力になってくれるのかな？

おおっ！？ ついに私にも覚醒フラグk t k rっ！ そか、一度臨死体験しなくちゃ覚醒しないのかあ。なんて面倒なんだ覚醒能力っ！！

なーんて馬鹿な事考えてたら、ふわふわ動いてた人魂が徐々にその姿を現してきた。

羽がある所を見ると…あれかな？ 守護天使とかそういうのかなー？ おお…私アークエンジェルとかばんばん撃ち殺してきたんだけど、OKなのかな。

どんだんはつきり見えてきた……………あれ？ どこかで見たことあるよーな。

具体的には毎日見てるような…それで居て初めて会うような…あれ…？

『我が名は大天使アルムタート…貴女を幼少の頃から見つめ護り続ける存在…こうしてお話できるのははじめてかしらね。こなた』

「え…おかあ…さん？」

『正確には貴女のガーディアンになった大天使に私の意志が取り付

いた感じなのだけどね』

知ってる…知ってるよ。当たり前だよ。

写真で何度も見てた、小さい頃から何度も見てた。私にそっくりで、でも儂げな印象のお父さんが一番愛していた人。

一度でいいから会いたかった、私の…

「お母さんっ！…！」

『こなたっ！…！』

私が抱きつくくと優しく受け止めてくれるお母さん。

あつたかい、暖かいよ。これがお母さんの温もりなんだ…私が一度だけでもいいから感じたかった温もりなんだ。

涙が止まらない、もう死んでもいいくらい幸せだよ。

『こらこら。折角戻れるんだからそついう事を思っではダメよ？
それに大事な友達がまだあそこに居るんでしょっ？』

「そだったっ！？ 佐藤君やかがみ達がっ！」

『だから私が来たの。今度はお母さんも一緒に戦っわ、だからもう

あんな真似はしないでね?』

「あー…あれは反省しまくりです、はい」

『あまり反省の念が見られないわね?』

「ひゃひっ!? いふあいいふあいつ!? ごめんなふあいつ!
もうひまへんっ!」

ほっぺを引つ張られる私、あの、滅茶苦茶痛いんですがっ!? 勘弁をっ!

『よしっ』

「お母さん、実は結構スパルタ?」

『そうかしら? んー、こなたったら随分そう君に染まってしまっ
て。ちよつと残念だったけど、教育は今からでも間に合っかしら…』

「おお。もうそろそろ大学生なのでノーセンキューという事で」

『あらあら…』

『さあ、陸へ戻られい。再び立ち上がった時 汝は光の力もて生まれ変わるのだ』

『有難うございます、カロン様』

「カロン様…カロンっていうとあの三途の川の船の人だよ、六文
銭で有名な」

死んだらカロンにお金を払って乗せてもらうらしいね、そうすると
苦労なく天国にいけるんだっけ？

で、払えなかったら溺れながら苦しみを味わうと…うわ、ぞっとし
ないね。

んー、なんか違うような気がするけど、まあいいか。

それより、折角生き返れるんだから皆を助けに行かないとね。

今は凄く冷静だし、佐藤君の蘇生も大丈夫だっ！

「いっつ！ お母さんっ！」

『行きましよう、こなた。お母さんは今度こそ貴女の力になるわ』

意識が薄れていく。多分現実の世界に戻るのかな。

待っててね皆、直ぐに助けるから。

……
……
……

泉こなたは覚醒し守護天使を手に入れた。 知が+4 魔が+8
速が+3された。

泉こなたはレベルが4上がった。

守護天使：泉こなた（アルムタート）を手に入れた。

「名前」：泉こなた（アルムタート） 「種族」：大天使

「現在LV」：50 「属性」：N-L

「LvUpに必要なEXP」：100000

「ステータス」

HP：446 MP：458

力：29 知：37 魔：37 体：35 速：31 運：36

「相性」

剣： 物：x 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・ 守護天使

・ 継承分霊

・ 慈愛の聖母

・ 神聖ブースタ

「スキル」

・ メギド

敵全体に万能属性特大ダメージ。

・ 穢れなき威光

聖： / の敵全体を死亡させる。

・ デイアラハン？

味方単体のHP全回復

・ サマリカーム？

対象の死亡、昏倒を回復。HP回復：大。

・アムリタ

味方単体の死亡以外の状態異常を回復する。

守護天使：対象者のステータスに自分のステータスの10分の1の補正。

致死ダメージを高確率で庇う。この時守護天使が死んだ場合、回復まで1ヶ月が必要。

継承分霊：種族などが代わっても、この姿のままになる。

慈愛の聖母：回復の効果を2倍にする。

神聖ブースタ：聖属性無効、半減の相手にも聖属性の特技が通用するようになる。

但し、呪の属性に非常に弱くなる。聖： 呪： を得る。

「名前」：泉こなた 「性別」：女性 「覚醒段階」：? (異能者)

「現在LV」：18

「属性」：L-C

「所持金など」

MAG：6340

¥：1870000

魔貨：10000

「ステータス」

HP：90

MP：113

「通常時」

力：6 知：5

魔：10

体：4

速：18

運：4

「守護天使降臨後」

力：8 知：8

魔：13

体：7

速：21

運：7

「相性」

剣：物：

技：

火：

氷：

電：

風：

魔：心：

禁：

聖：×

呪：

状：

万：

「所持スキル」

- ・格闘の素質？
- ・計略
- ・悪運？
- ・蛇の道は蛇？
- ・暗殺
- ・狙撃？
- ・隠密
- ・銃の素質？
- ・守護天使
- ・守護天使の宿命1点（最大10まで）

「所持技能」

・双龍脚 敵1〜2体に剣属性中ダメージ 同じ相手を攻撃する場合2回攻撃。

・菩薩掌 敵単体に技属性特大ダメージ 相手の防御を無視して攻撃、低確率で気絶。

・首狩り？ 敵単体に剣属性中ダメージ 中確率で死亡。
人間には高確率で死亡。

・音速拳 敵単体に剣属性特大ダメージ。回避にマイナス修正。

・回転袈裟蹴り 格闘攻撃を受けた時に高確率で反撃 剣属性特大ダメージ。

・シユア・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 高命中率

・レッグ・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 中確率で速を

下げる。

・アーム・シヨット 敵単体に物属性小ダメージ 中確率で力を下げる。

武器や防具を持っている場合落とす確率が発生。

・ヘルスナイプ 遠距離からの特大ダメージ。超高確率でク

リティカル。

但し、相手に気づかれると命中と威力が大

幅に下がる。

・デスペラード 敵全体に物属性中ダメージ 要・二丁拳銃。

現在使用不可

弾を一回で内蔵している分全部消費。

・グレイトフルワン 敵単体に物属性特大ダメージ。

・守護天使降臨
守護天使の持つ技能を一度だけ使用して
れる。

MPの9割消費、宿命を1点追加。

「ソフト」

- ・デビルアナライズ
- ・百太郎
- ・ネオ・クリア
- ・スキヤニング・ゼロ
- ・ハニー・ビー
- ・キャプスロック
- ・Mr. サプライズ
- ・ハーモナイザー

1分間の起動 消費：MAG：180 判断力強化 恐怖心

軽減 速中心

力：+9 知：+6 魔：+5 体：+8 速：+15 運：
+7

「装備」：

剣：虎鉄

銃：MSG90 スナイパー・ライフル 弾数：20 射程距

離：1000メートル

弾：通常弾×50

頭：ドラゴンヘルム

体：ロックベスト 火：銃：

腕：強力の腕輪 格闘威力大幅上昇

足：ジェットブーツ 速+1

「アイテム」：所持限界『力+10個』||18個

・イルクストーン×4個

・デイストーン×1個

・デイスポイズン×2個

・宝玉×1個

- ・虎鉄×1個
- ・強力の腕輪×1個
- ・ロックベスト×1個
- ・ジェットブーツ×1個
- ・MSG90 スナイパー・ライフル×1個
- ・通常弾×50・1パック

格闘の素質? : 格闘系の技能の奥義などを覚える。

計略 : 戦闘前に有効な作戦などを考え付く、戦闘時のあらゆる判定に補正。

悪運? : 生き抜くための運がある。レベル回数分致死ダメージを無効化する。

蛇の道は蛇? : 情報に詳しい、一定の情報を確実に手に入れる。

暗殺 : 暗殺に特化している。奇襲や殺しなどに補正。特殊な技を覚える。

狙撃? : 遠距離からの攻撃に補正。レベル毎に飛距離と命中が大幅に上がる。

?だと1000メートルほどで命中90%程度

隠密 : 自分の存在感を極限まで薄めて、相手に見つけられないようにする。

銃の素質? : 銃の技能を覚えるようになる。命中に補正

守護天使 : 守護天使の加護を得る。ステータスに補正。

膨大なMPと引き換えに守護天使の能力を使用できる。

但し一度使用すると、一定期間(約一週間ほど)使用することが出来ない。

使いすぎると宿命が増え続け、一定量まで宿命が溜まると天界に連れて行かれる。

…
…
…

目が覚めると全身が痛かったです。

おおう、ちょっと奥ではペレ達が奮闘してたし、周りの悪魔を抑える為にかがみとつかさが一生懸命般若心経を唱えてる。

佐藤君は死んでないみたいだね、よかった。

でもオグンの方はやばそうだ…アリスちゃん達が戦ってるけど旗色
は凄く悪そうだし。

「うつくっ…お母さん…いける？」

うつすらと見えるお母さん、にこりと笑っていてくれた。

これならいけるね。よし、早速力を貸してもらおうよ。ガクガクする
体を無理やり起き上がらせる。

「こなたっ！」

「……………」

つかさは詠唱に集中しているようで此方を向いている暇は無いみたい。

こんな絶望的な状態でも、諦めなかったんだね。さっきの私反省しないだよ。

「いよっしゃーっ！！ 泉こなた、大・復・活っ！！ じっくりお母さんっ！ 穢れなき威光っ！！」

なんか、佐藤君のペルソナに似てるなーと思いつつ、それがちょっと嬉しかったり。

私のMPをぐんぐん吸い取って顕現するお母さん。あの…正直かなり搾り取られてるんですが…？

一度呼び出しただけでへろへろですけどっ！？

「憐れな死者と狂いし者達よ……………我が威光によりて浄化しなさいっ！…！」

おお、かつこいつ!? 厨二セリフだねっ! 私も右手がっ!?
とかやるべきかな。

急遽放たれる優しい光が辺りを覆っていく…すると…

「あ、悪魔が…消えていく?」

「わ…わあ…」

アレだけ周りに居た悪魔が何も無かったかのように消えていった。

すごっ…こりゃ私のMP全部持っていつてもOKなくらいの切り札だよ。お母さんばねえ…いやアルムタートの力なのかな?

どっちにしても周りの雑魚は倒せたみたいだね…オグンは…?

『ぐおおおおおっ!? おごおおおおおっ!?』

『こいつ、行き成り弱くなったぞ? 何にせよチャンスだっ! い
くぜアリスっ!』

『任せてっ! ジオ・ダイソっ!』

モムノフさんの斧がオグンの胸に深々と食い込む。直ぐに手を離して飛びのくと其処に狙っていたように雷が落ちて斧に叩き付けられ

る。

そっかつ！ 斧を触媒にして内部に電撃を与えてるのかっ…えげつな…

ガクガクと踊ってるかのように暴れるオグンに雨のように降り注ぐジオ・ダインの連打。

耳が痛くなるくらいに雷音が響き渡った。

『いい加減に…死にやがれえっ！！』

電撃で痺れているオグンが手から落とした斧をモムノフさんはそのまま振り被った。

凄まじく鈍い音と共に勿ね飛ぶオグンの首。しゅって首から血の噴水が溢れ出す、グロっ…いやぁホラー映画なんて目じゃないねあれは。

地響きを立てて倒れこむオグンは粒子に代わって私と佐藤君のＣＯＭＰに収納されていく。

あの、終始ペレがポツンだったんだけど…まあいいか。

とりあえず勝った…のかな。と、今はソレより佐藤君の蘇生だよっ！

「アリスちゃんっ、リカムカードってのを早く!」

『うんっ！ わかったっ！』

倒れている佐藤君の懐からカードを取り出すアリスちゃん。

直ぐにそれを押し当てるようにして発動させてる。間に合ってくれ
るよね…

「ふう…」

守護天使召喚はかなりきつついよ。佐藤君が呼び出すペルソナもこ
んなに疲れるのかな…

とりあえず座り込ませてもらおう。頑張ったしこれくらいいいよね。

「いたっ！ ん…なんだろこれ…」

座ったらお尻の部分に違和感を感じたから退けてみるとなんだか小
さいビーダマみたいなのが2つ落ちてた。

魔石？ にしては小さいし綺麗だねー。金色に輝いてるし、とりあ
えず手にとって見ると何か文字が書いてあった。

「脱と出？ なんだろこれ…」

もしかして佐藤君のかな？ 彼ならこつこついつの持っでそうだし。と
りあえず預かっておこつと。

「う…く…」

『サマナーさああんっ！』

『つたく、心配掛けやがって…』

「佐藤君っ！」

よかったあ…無事だったんだね。

ちょっと力が入らないけど私も立ち上がって佐藤君の所まで歩いて
いく。

彼も混乱しているようでオグンの事を心配してた。

アリスちゃんやかがみとつかさが色々説明していくと漸く理解して
くれたみたい。

「そうか…あまり役に立てなかったみたいだね」

「いやいや。佐藤君居なかったら死んでるから私達。ね、かがみん」

「こんな時までかがみんいうなつ。そうね…正直あんな悪魔は私達の手に余るわ。それよりもよっ！ こなたさっきの一体何っ!？」

「こなちゃん凄かったねー。あんな力あったんだ、佐藤君のペルソナみたいだね」

「ペルソナ…？ 泉さんも？」

「あ、なんか違うみたい。お母さんは守護天使って言ってたし」

「「「お母さん?」「」」

おっと、まずは其処から説明しなくちゃいけないのか。

とりあえず臨死体験した事を語ってから、お母さんと出会うというスーパーспекタクルな事を尾びれに背びれと胸びれをつけてレヴオリューションさせたお話にしてみた。

途中からかがみが白い目見てたのはご愛嬌だねっ！

「なんとも凄まじい話しただけど…なんにしても…二人とも無事ですよかったですわ」

「だねえ〜。あ、ゆきちゃんに電話しないと」

「そうだねえ、早く家に帰ってやすみたーいっ！」

「確かにね。僕も色々疲れたよ」

つかさがみゆきさんに電話をしてる。さて…今の内に倒されちゃった仲魔の情報でも見ておかないとなあ。

結構皆倒されちゃったし、えーと。ナーガにマカラにフロストにアプサラスと。

え…？ アプサラス？ なんで？

「あ、ゆきちゃんこっちはー…ど、どうしたのっ！？」

「なにかあったのつかさ？」

「大変だよっお姉ちゃんっ！ 変な人達が外でゆきちゃん攫おうとしてるっ！」

「何ですって！？」

「やばいよっ！ 今からじゃ戻ってる時間が無いってっ！」

まずい…アプサラスまで戻されてるって事はかなり危険な状態じゃないかっ。

うう、何で次から次にこんな事ばかりおきるのさっ！

「…四の五の言ってられないか…皆アリスとモムノフに捕まってく

ね。直ぐにここを出るっ！ 急げばまだ間に合っはずだっ！」

「わ、わかったっ！」

佐藤君が出来るっっていうなら出来ると思っし、私は直ぐ信じて隣に居たモムノフさんを掴む。

かがみ達も、急いでアリスちゃんを掴んでいた。

「行くぞっ！ 皆いつでも戦える用意をっ！ 【脱出】！！！」

みゆきさん…今助けに行くからっ！？

- 泉こなた視点解除 -

- ガイア教隊長視点 -

「おいおい…あれは反則だろうっ…？」

遠隔操作していたオグンからの情報を見ていた。

あんな子供を殺すのは流石に気が引けるが、こんな所に来ている以上は死ぬ覚悟があるはずだ。悪いが死んでもらおう、そう思っていたのだが。

「本気でデビルサマナーかねあれは」

「た、隊長…オグンと追手用に用意させた悪魔が…全滅しました…」

「ああ、みりや分かる。蛇だと思ってみれば相手は龍だったって事かね。引くぞ、もう一人の聖母候補の方はどうなってる？」

「はっ！ 聖母を拉致しようとしていたメシア教と交戦っ！ メシア教と護衛の悪魔を殺し此方で確保に成功しましたっ！」

「成程な、急いで撤退するぞ。あの坊主ども舐めて掛かると痛い目を見るのはこっちのようだ。下手すりゃ嗅ぎ付けられるな」

あの坊主が何をしたか知らんが、オグンを超えるスピードで回り込んだ事も、もう一人のお嬢ちゃんが凄まじい悪魔を呼び出してあの状態から危機を脱出したのも。恐らく偶然じゃねえな。

何か強い力が坊主達を覆っているのが分かる。やれやれだ、ああ言う輩は敵に回すと厄介だというのに。

聖母候補は最悪の時の切り札にさせてもらっしかなさそうだな。

確保には成功しているし、とっとと撤退させてもらおうとするかね。

「悪いな坊主ども。今回は痛み分けだ」

「なっ！？ 隊長っ！ あそこに居たデビルサマナー達が外に出て
いますっ！ 我が精鋭部隊と交戦開始っ！」

「なんだって…？ 何処まで規格外かねアイツらは…」

理不尽にも程があるだろう？

やはりあの坊主達の能力なのか、魔界魔法の中には一瞬で外に移動する魔法も存在するし、悪魔の能力かもしれんがな。

俺にも切り札という事でいくつか持つてるが、あいつらは逃げなかつた所をみると持ってないと思ってたんだがね。

それにしてもまずいな。洗脳オグンさえ下した奴らだ、うちの奴らがある程度育っているとはいえ勝てる可能性は低い。

寧ろあれだけの実力の悪魔が居るんだ、殺される可能性のほうが高いだろう。

「全員に伝える。自分の身を守る事を最優先。ここで死ぬ事も相手に情報を渡す事も赦さんと」

「はいっ！」

「あいつらは今死ぬ時じゃねえ。最悪聖母は無視しても構わん、なんと少しでも逃げ切るんだ」

「宜しいので…？」

「聖母を確保した所で褒め言葉を貰うだけだろう？ そんなものよ
りアイツラの身の安全のほつが大事だ。情報も取られたらやばいし
な」

洗脳悪魔とかはばれたらかなりやばいだろう？

「分かりました。直ぐに通達しますっ！」

「ああ、誰一人死なせるなよ？」

「了解っ！」

用意していた洗脳悪魔は全滅、聖母候補は確保失敗、と。

戦力的にも十分なんだろうが、素直に報告すりゃ怒鳴られるだろう
ねこりゃ。

やれやれ上司のお小言は嫌いなんだがねえ。

「…ふう。ああ、タバコがまずいな」

「こちらにも撤退準備完了です」

「お前らは先に行け。俺は最悪の事考えて坊主達が居る所まで行って来る」

「しかし…」

「おいおい。死に行くつもりはねえよ。なあに俺の悪運を信じろ」

「わかりました…無事の帰還をお待ちしていますっ！」

「へいへい、お前らも重々気をつけろや？」

さて、行きますか。

「トラポートストーン、虎の子なんだがな。さあてお礼に行くとしようじゃないか。問題は出口が違う事か…間に合うかねえ」

- ガイア教隊長視点解除 -

Continue38 崩壊への七日間・火曜日? (後書き)

書き終えて一言…

主人公補正は凄まじいですね…佐藤君涙目です。

こなた初死亡ですけど、即座にガーディアンに入れて復活です。

さらにガーディアンはかなたさんでした、守護天使というところかならこれかなーと。こなたの覚醒能力自体はこれしか考えてませんでした。

つかさとかがみも既に考えてあります。あれも卑怯だともう…

佐藤君頑張れー。

佐藤君は単純に戦闘不能ですねー。食いしばりのおかげで生きてましたが昏倒してるばかりだったのでリカームで復活です。

そして全然危機は終わらず…なんとも今度はお約束の通りにみゆきさんが確保されました。

重要な選択肢(属性かルートかは内緒です(汗))

1: 神の炎: 0票

2: 邪悪の念: 6票

3: 無心の心: 53票

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：20票
かがみ：23票
つかさ：10票
みゆき：42票
ダツキ：12票
アリス：10票

覚醒時ステータス成長表

正直、体特化は消してもいい気がしてきました。

力特化：5票
知魔特化：10票
体特化：0票
速特化：62票
運特化：3票
バランス：75票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue39 〈崩壊への七日間・火曜日?〉（前書き）

今回はオール三人称です。

出来るだけ戦闘描写を長くしてみました。これしか無理だった…
切ないです。

まだまだ上手く書けませんね…練習しないとですよ。

前回のアルムタートが強すぎないか？ という点ですが色々デメリ
ットなどを加えました詳しくはCOMPステータスのこなたの欄を
見てください。

- 現実世界・数十分前

メシア教の偵察部隊が聖女候補を見つけたのは、単に運がよかっただけだろう。素直にテンプルナイトに連絡しておけばあのような運命をたどる事はなかったかもしれない。

彼らは後の幸福と今の欲望に飲まれ、動き出してしまった。

其処に居るのは1体の悪魔と聖女候補だけ、偵察部隊とはいえある程度の情報は知っている。

それゆえに戦闘能力があるのはあの悪魔一体だけだという事を既に理解していた。

このまま聖女を教会に連れ帰る事が出来れば自分達は更に昇格する事ができるだろう、そうなれば天使にも目をかけてもらえるかもしれない、天の国にいけるかもしれないと考えた。

狂信者の多いメシア教だが、末端にいたるまで須らく欲が無いと言えれば人間である以上ありえない。

彼らは単に自分の欲だけで動き出したのだ。

悪魔は一体だけ、此方は偵察部隊とはいえそれなりに腕の立つ人間が数人居た。信仰心がもう少し高ければテンプルナイトにすらなれ

る力量の者も居る。

あの悪魔だけならば苦戦する事はないだろう、そう認識し彼らは動き始めた。

アプサラスは感じる悪意と気配に気づき辺りを強く警戒し始める、すると物陰から何人もの人間が武器を持って現れた。

間違いなく此方に悪意を持っているだろう事に気づいたアプサラスはみゆきに声をかける。

『…！？ みゆきっ！ 急いでここを離れなさいっ』

「アプサラスさん…？ っ！ あの人は…！」

『分かりません。ですが並の者ではないでしょう、ここは私が防ぎますのであなたは逃げるのです』

「わ、わかりましたっ！」

「逃すかつ！ 行くぞ同胞よっ！」

「おおっ！ 不浄なる悪魔よ！ 我らが聖女を誑かそうとしたその罪は重いっ！ 死を持って悔い改めよっ！」

『聖女…？ 最近噂になつていいるメシア教ですか。みゆきが聖女とは…貴方達が何を望んでいるか知りませんが、彼女には指一本触れさせはしませんっ！ 行きなさいみゆきっ』

「は、はいっ！ アプサラスさんも気をつけてっ！」

自分が居ては邪魔にしかならないと嫌でも知っているみゆき、言われるままにもっているモバイルパソコンなどを纏めて逃げる用意を始めた。

元々そこまで物を用意している訳ではないので、十秒もしないうちに用意は整い誰も居ないほうに走っていく。

感じる気配はこの二人と、この二人の奥にあるのでみゆきが逃げた方向ならば捕まる事は無いだろうと考え、早くサマナーに伝えようと彼女は戦闘態勢をとった。

『人間は愚かですね、信仰故に自分を潰してしまっている事に気づきませんか』

「煩いっ！ 死ねえっ！！」

数人のメシア教の剣使いと銃使いの男達がアプサラスに斬りかかる。

人間達は普通の人間にしてはなかなかレベルだった。とはいえ回避専念をする必要は無く、時折格闘攻撃を混ぜながら攻撃をいなしていく。

厄介なのは銃だろうか。避けられない事はないが、あの威力とスピードは凄まじく彼女が悪魔とは言え何度も受けてしまって死んでしまうことは確実だった。

「不浄なる悪魔よっ！ お前のような存在を我々メシア教は赦すわけには行かないっ！ 今この場で潔く断罪されるっ！」

「よしっ！ 第二班は回り道をして聖母をお助けするのだっ！ このままではこの悪魔に殺されてしまっただろっ」

『よくもまあ、ある事無い事…狂信者というのは昔からよくみますが…どちらかといえば欲に狂っているようにも見えますね。後…この先には行かせませんよ。我が声を持って眠りなさい』

「なっ！？ 全員耳を塞げえええーっ！」

高らかに歌い始めるアプサラス。

聞こえてくるのは心まで安らいでしまうような、優しい歌。彼女の持つスキルの一つで子守唄だった。

魔力が込められた歌は、歌に力を宿しメシア教の耳から脳を揺さぶっていく。

何人もの人間が耐え切る事ができずに眠りについていくが、彼女の目の前で戦っている人間達は彼女が想像もしない方法でその眠りを断ち切った。

腰に装備していたナイフを逆手に持ち、自分の足を貫いた激痛で睡眠を防いだのだ。

流石に驚愕するアプサラス、そしてこの人間達は目的の為にはなんでもするという意思を垣間見る。

「邪悪なる悪魔の歌に我々は惑わされんっ！ 行け同胞よっ！」

「おおっ！」

『行かせませんっ！』

みゆきを追いかけてしようとしたメシア教を止めようとした時に、自分の反対側から剣が襲い掛かる。

そちらに気を取られすぎたために注意が少し遅れてしまい、腕を切り落とされる彼女。

激痛が襲い掛かるが、尚も男達は激しい攻撃を続けていく、この場を護りきるには流石に数が多すぎた。

「取ったっ！」

『あぐっ……………ディアツッ！』

もう一人の銃を持つ男が発砲し、それが足に命中したが慌てずに急いで回復魔法で癒していく。

じくじくと感じる痛みが癒されていくが、全開には程遠いだろう。

更には今の攻防のせいで数人を逃してしまった。

このまま目の前の人間を相手にしてしまえば、彼女は捕まってしまうだろう。

殺さないで止められる相手では無くなったと認識し、直ぐに必須条件を変更し魔力を練り上げる。

『死んでも…恨まないで下さいね、ブフーラツ！！』

「う、うわああああああああっ！？」

「同胞よっ！？」

放たれる氷の吹雪に吹き飛ばされる銃を持つ男、吹雪によって吹き飛ばされて壁に叩き付けられる。

くぐもった唸りを上げて動かなくなるが、死んでは居ないようだ。下半身が完全に凍り付いていたのであれでは動く事はできないだろう。

欲を言えば全体攻撃でもう一人も巻き込みたかったのだが、彼女はまだ其処までの能力をもっていない。

直ぐに身を翻しみゆきを助ける為に動きはじめる。

『時間が惜しい、ですね。この場は預けますっ！』

「おのれえええ…逃すかあっ！ 喰らえっ！」

目の前の剣使いを無視して掛けていくアプサラス、男の剣が襲い掛かるが前を走るメシア教の人間を追いかけるために全力で走っている為に、簡単に避けきった。

これは彼女が考えた判断だろう、剣と銃では危険度言えば確かに銃のほうが危険だからだ。

後ろから剣で攻撃されても、奥の方に逃げている為に攻撃が通らない。男が自分より早ければ致命傷になる行動でしかないが、人間である彼が彼女を速さで負けているのは先ほどの戦いで感じていた。

その為にもう一人の銃を持っている男をブフーラで戦闘不能に追い込んだのだ。後ろから撃たれてしまえば流石に彼女とて致命傷は免れない。

アプサラスは銃撃に弱点は無いが耐性は無い為、ここで動きを止めて安全なのは剣使いより銃使いだった。そしてそれは間違いではなかったが、この時点においては悪手だった。

同胞達を追いかけるアプサラスを見据えた剣使いが懐から大きめの石を取り出しアプサラス向かって投げつける。

パンツとはじけ飛ぶ音と共にアプサラスは、自分の体がまったく動かなくなった事に驚愕した。

後ろを振り向く事も出来ず、襲い掛かってくる殺気に身構える事もできない。

『なっ！？ 金縛りの魔法ですかっ！？ で、ですがこのようなものの…数秒でっ！』

「異教徒がっ！ 俺が貴様にそんな時間を与えると思ったかあっ！」

投げつけられたのはシバブーストーン、相手を金縛りにする魔法石だった。比較的安価で手に入る魔法石だがその効力は大して強い。

強大な魔力の持ち主が使わなければそれこそ5秒も動きを止める事ができないのだ、そしてアップサラスも数秒あれば動く事ができるだろう。

しかし、数秒あれば男には十分すぎた。

ニヤリと笑いながら男は持っていた剣を何度も何度も突き刺している。

『あぐっ……ごぼっ…サマ…ナ……みゆ……ぎい……い……いっ！？』

「消える不浄な悪魔めっ！ その薄汚い口で我らが聖女を呼ぶことは赦されないっ！ ひっひひひっ！」

体を動かす事もできず、ただ激痛を耐えることしかできないアプサラスに、容赦なく男は剣を突き刺していく。

滅多刺しと言った感じに男はアプサラスの体を突き刺していく。更には後頭部を全力で突き刺し、口内を剣が貫通していく。

激痛のせいか、それとも単に反応しているだけか。聞くに堪えない声を漏らした後も男は笑いながらアプサラスを突き殺した。

剣から垂れる赤い血を見ながら勝利を確認した男、そして彼女が消える間際まで彼は頭を何度も何度も貫いていった。

完全にその姿が消えるとその奥では同胞に捕まり、逃げようと暴れているみゆきの姿があった。

「落ち着いてください聖母様っ！ 私達は貴方様を迎えに来たのですっ！」

「は、離してっ、離してくださいっ！」

「錯乱されているようだ、とりあえず睡眠薬でお眠りいただく」

そついうと駆け寄ってきた剣使いの男が再び懐から睡眠薬と取り出してみゆきにむりやりのませていく。

飲まないように抵抗していたみゆきだが、大の大人数人には力で勝てる事も出来ず睡眠薬を飲まされてしまう。

途端に襲い掛かる強烈な睡魔、抗おうとするも耐え切れずみゆきは意識を失ってしまった。

「流石メシア教で作り上げられた強力な睡眠薬だな。すっかりお休みになってしまわれた」

「しかしよかった。これで聖母さまも安全なメシア教会にお連れすることが出来る。神父様もお喜びになるだろう。」

「ああ、これでまた一步神の楽園に近づいたんだなっ！ 神よ我々にこのような幸運をお授け下さりまことに有難うございます。」

「急ごう。あちらでは悪魔に倒されてしまった同胞が居る、助けなくては」

「そうだな……………」

剣使いが急ぎ走ろうとすると直ぐ傍で倒れる音がする。

「どっし…」

其処から先、彼が言葉を紡ぐ事は永遠になかった。

感じたのは何かはげげ飛ぶ音、そして消えていく意識。自分が死んだという事に彼は気づく事も無くその意識を埋没させていった。

奥のほうでも銃声が響く、氷付けにされていた銃使いの男も殺されたのだろう。

地面に倒れこんだみゆきは深く寝入っているために動く事がない。そして数秒後、メシア教の人間が全滅した事を確認すると、全身を特殊な鎧で覆っている人間が油断なく銃を構えて近づいてきた。

「クリアーツ！ 他にはもう誰も居ないぜ」

「ったく。面倒な真似してくれるぜメシアのやつら」

「どうせ末端だろ？ やる事なす事全部行き当たりばったり過ぎる」

彼らはガイア教の人間だった。

本来はもう少し後に行く予定だった聖女候補の確保のために待機していたのだが、急遽現れたメシア教の来襲によって直ぐには動けなかったのだ。

お陰で危険の高かった悪魔は倒され安全に聖女候補を確保できたので、助かったといえば助かったのだがと愚痴る彼ら。

「しっかし…処女懐胎だったか？ 馬鹿らしいな」

「でも天使が本気でやるらしいから、あながち馬鹿に出来ないらしいぜ？ 迷惑だよなほんとに」

「ってかよ…このお嬢ちゃん、俺の娘と似たくらい歳の娘なんだよな…娘を持つ父親としてはよ、こんな事したくねえぜ」

「仕方ねえだろ。どっちにしてもこのままじゃ危険なんだ。なあにこつちじゃ捕まっても阿呆な事はしないしいいだろ。すこしばかり窮屈かもしれないがな」

「上が上だからなあ…隊長みたいな人ならともかく、過激派だったら…慰み者だろうな」

「処女じゃなければ聖女じゃねえってか？ 世知辛いな」

「おいつ！ お前らそこでぼけつとしてないで急いで聖女候補を連れてこいつて！」

確かにこのままだと人に見つかったら事だ。

一人がみゆきを背負うと残りのガイア教の人間達はメシア教の死体を一箇所に纏めていく。

異界の傍で死んだ人間は放置しておけば高確率で屍鬼になる可能性があるし、一般人に見つかったら厄介な為に始末する事にしたのだ。ちなみに警察自体は圧力で抑えてあるので、おおっぴらな事件沙汰にはならない。

寧ろ一部の警察官は世界を護るといふ名目でガイア教に入っている人間も多いほどだったりする。

とは言えメシア教とは違い世間に大々的に告知などはせず、あくまで裏方として動いているのが彼らガイア教団だった。

「よし、隊長に連絡しておこう」

「今日は飲み会かも知れねえなあ。仕事の後の一杯が美味いんだよなあ」

「お前は飲みすぎだっつものっ！ そのうち肝硬変で倒れるぞ？」

「本望だねっ！」

「んじゃ死んでこいっ！」

「ひでえっ!?!？」

「はいはい、静かにしろお前ら。あ、副長、実はですね聖母候補を確保成功しました…はい、待機しておきます」

のんびりしていた彼らだが、そのゆったりとした時間は直ぐに終わりを告げた。

それから数分もしないうちにそこに異界に入ってしまったデビルサマナー達が行き成り現れたからだ。

それも運の悪い事に自分達の直ぐ近くに。

「みゆきさんっ！ どっっ！ うくっ…」

「こなたっ、あんたは少し休んでなさい。後は私達が探すから」

「…皆探す必要はなさそうだ」

「ゆきちゃんっ！ と、誰？」

現れたデビルサマナーたちを見て緊張が走るガイア教の人間。

此方が最新装備を装備しているとはいえ、あちらは強力な悪魔を支配している。戦えば間違いなく不利なのはこちらだろう。

人質のようにみゆきを使う手もあるが、それよりも早く悪魔達が此方を見据えていた。

「おいおい…こいつはまずいんじゃないのか…」

「しっかりしろ。死なずに酒が飲みたきゃ、戦うしか…ないだろ」

「まじかよ…逃げても良いか？」

戦闘の構えをとるデビルサマナーの少年達。

彼らとの距離はおよそ50メートルと言った位だろう、銃で応戦するのでもいいがそれがどれだけ通用するかと彼らは考えていた。

すると隣で通信をしていた仲間が怒鳴りあげる。

「全員撤退準備っ！ 聖母候補は置いてでも全員逃げ切れとの隊長の命令だっ！」

その言葉に苦笑してしまう男達。

普通は死んでも聖母候補を確保しろというのが普通なはずなのに、
我らが隊長はどこまでも人が良いと言うかなんと言うか。

しかし…其処まで言われてしまったては命令をこなすしかないだろう。
どちらにしても今の彼らの戦力ではあのデビルサマナー達を押さえ
つける事は不可能だろう。

ここに戻ってきたという事は異界の奥で実験中だった洗脳悪魔を倒
してきたという事に他ならないのだから。

そして命令を受けてからの彼らは早かった。

『下手に動くはずどんって行くよっ！』

少女の姿をした悪魔がニヤリと笑いながら飛び込んでくる。

感じるのは絶対的な死の気配、下手な真似をすれば容赦なく殺され
てしまうだろう。しかし、それでは命令違反になってしまう。

「悪いが…死んでられないんだよっ！」

ピンを引き抜いてフラッシュグレネードを投げつける隊員。

少女姿の悪魔、アリスが飛んできたフラッシュグレネードを弾き飛ばそうとすると強烈な光が辺りを覆う。

『わきゃっ!?!? まぶしっ!?!?』

「全員目を閉じるフラッシュグレネードだっ!! ペルソナチエンジ…バクヤッ！」

盲目の効果があるフラッシュグレネードだが彼らが装備しているヘルメットは光を遮断する能力があるために普通に行動が出来る。

直ぐに聖母候補をつれて撤退しようとしたが、一人デビルサマナーが突っ込んできたのを確認した。

サングラスをつけていないのにもかかわらず、こちらに向かって確実に向かって来ている事に驚きを感じつつも隊員たちは落ち着いて対処し始めていた。

いくらアレだけの悪魔を従えているとはいえ、蛮勇ともいえるその無謀さに呆れてしまう隊員たち。

逃げる前に少年だけでも撃ち殺そうと持っている拳銃を構える。

「この娘が大事なのはわかるが…無謀だぜ？　じゃあなガキッ！！」

奥の少女達は何体かの悪魔がいるせいで銃は届かないだろうが、目の前の少年は完全に無防備だった。

悪魔であろうとも当たりさえすれば殺せる銃弾を込めている、脆弱な人間では耐え切れるわけが無いだろう、流石に殺すのは気が引けたがそうしなければ死ぬのは自分達なので有無を言わず銃を連射する…だが。

「ば…ばかなっ!?!」

驚愕する隊員。

本来悪魔でも殺せるはずの銃弾が、少年に当たる事も無く目の前で完全に動きを止めて落ちて行ったのだ。

魔法か何かで反射された様子も無い、しかし弾丸は確実に目の前で止まっていた。その現実を信じる事が出来ず彼はその場を動く事ができなかつた。

「メルコムッ！　足を止めるっ！！」

『承知いたしましたっ！』

少年…大樹のレッグショットが寸分変わらず彼の足を貫通する。

装備している強化装甲すら簡単に貫く弾丸は足の骨を粉碎し、彼の動きを完全に止めた。

湧き上がる激痛に身をよじりながらも持っている銃を連打するが、それもやはり通らない。

他の隊員も目の前の現実を信じる事が出来ず、動きを止めてしま
う。

「モムノフツ弾き飛ばせっ！ アリスは高良さんを救出っ！」

『随分ものものしい鎧じゃねえか…だがよ、その程度じゃオレの一撃は防げねえぞっ！』

『任せてっ！！』

一瞬の内にガイア教を吹き飛ばし、アリスはみゆきを救出し下がっ
ていく。

何故ここまで思うように大樹が動けたかというと、答えはやはりペ
ルソナと文珠だった。

フラッシュグレネードによる閃光を防いだのは【防光】による防御。

銃弾を無効化したのはペルソナの基本的な相性変化によってだ。

降ろしたバクヤは貫通の能力でもついていない限りはあらゆる剣属性と物属性の攻撃を無力化する。これにより彼らの持つ銃弾を無効化したのだ。

勿論、貫通の能力を危惧し【逸】の文珠を掌で使用して攻撃をそらす準備も出来ていた。オグンの時に使えなかったのは彼女達がいる前で堂々と使えなかった為だ。

しかし、それによって今回再びピンチに陥り、ほぼ役に立たず最後はこなたに救われてしまう始末。

思えば文珠は色々な幅広い使い方が存在する、それを漫画などで知っているはずなのに使う事もしなければ思いつきもしなかったことに腹を立てていた。

ちなみに彼らが動けないのは【現実逃避】という文珠の発動させているからである。【捕縛】や【金縛】でもよかったのだが、それでは皆に力を使った事がばれてしまう。

文珠を使う事に躊躇いは捨てた大樹だが、だからと言って大っぴらに能力を使う事は良しとしなかった。

ならば、現状に沿ったように効果を使えばいいと考えたのだ。

銃弾が効かないと言う非現実な状況による恐慌…つまり信じられないという感情を更に強くさせるために【現実逃避】を使ったのだ。

効果は見ての通り、彼はほとんど動く事ができずにモムノフに吹き

飛ばされる。

後は彼らを縛り上げ、何処の組織のものか調べるべきだろうと考えた。

「よし、アリス彼らを…」

「おっと、悪いが…動くなよ？」

乾いた声が奥の方から聞こえてきた。

「!?!」

「うえええっ!?! いつの間につ!?!」

音も立てずその男はこなた達の後ろにいた。

持っているのはサブ・マシンガン、大樹が何かアクションを起こせばあの男は確実に死を撒き散らすだろう。

目の前にペレがいようと、サブ・マシンガンを連射されれば残り
は人間なのだ、耐え切れるわけが無い。

更に言うところあなたは先ほどのガーディアンの召喚によってほとんど
の力を使い切っているために動く事すら億劫な状態になっている。

「あんた誰よっ！　なんでこんな事っ！」

「悪いな、言えねえんだわ。なあに俺からあんた達に頼むのは一つだけだ」

「え…え…？」

「……」

文珠の加速、いや時間停止を使うかと考えるが、それを見越したように彼女達の足元にサブ・マシンガンを打ち込む男。

牽制のつもりだろうが、かがみ達は腰が抜けてしまったかのようにへたへたと座り込んでしまう。

「何が…目的ですか…」

「多くは望まんよ。聞いてくれるなら彼女達も傷つけないし、見逃してやるぞ」

「こつちには強力な悪魔もいる」

「だが、動く前にこつちは彼女達を殺せるな」

一触即発と言った状況。誰一人として動く事ができなかった。

ゆっくりと大樹を見た後、彼は口をひらいた。

「こつちから出す条件は一つ、其処にいるやつらの解放だ。そこのお嬢ちゃんはメシア教に襲われてたんでこつちで安全を確保してた所だな」

「白々しい…ね」

「たはは、やっぱりバレるわな。まあ見逃してやってくれや。なら俺達も今回は手を引く」

「……………」

大樹は考える。

恐らく彼らはメシア教ではないのだろう、だが確実に一般人や普通の軍隊ではない。

考えが正しければ彼らはガイア教団の人間で間違いないはずだ。となると今回の異界の件も彼らが絡んでいる可能性が高いと見た。

となると、これからも絡んでくる可能性は高い。ここで禍根を断つことは可能だが…そうなれば…

(泉さん……………)

友達である彼女を見殺しにしてまで彼らを殺す意味があるのかと考
える。

死んでもリカムカードがあるから、となんて考える事はできない。
人間と悪魔は根本的に違うためにリカムカードが通用する限界が
決まっているのだ。

バラバラになろうが悪魔ならCOMPにいれば蘇生するし、どれだ
け悲惨な状態でも悪魔であればリカムで蘇生する事が出来る。

それは彼女達が肉体ではなく、マグネタイトでその姿を形作ってい
るからだ。リカムとはそのマグネタイトを補修、補強する魔法な
のだと思う。

人間も生体マグネタイトで構成されている為に、リカムなどの魔
法で蘇生できるのだろう…だが、人間は肉や血を持って存在してい
る。

リカム程度ではそれを何処まで修復できるのか分からないのだ。

ミンチになってもリカムが効くかと言えば否だろう。

サマリカムだろうとリカムドラだろうと、どうしようもない死
は蘇生できないのだ。

「少しでもへんな真似をすれば…彼女達を傷つけようとするならば。
僕はお前達を絶対に殺す」

「当然だな。だが坊主、もうすこし殺気を抑えたほうがいい、それ

「じゃ大事な場面で転ぶぞ？　今みたいにな」

「あんに言われたくない…早くしてくれ銃を向けられると精神的に消耗するんだ」

「交渉成立だな。お前らしゃきつとしてとつとと撤退しろ」

「あ…はいっ！」

【現実逃避】の文珠は効果を消した、直ぐに自分を取り戻した隊員達はそのまま直ぐに撤退を始める。

完全に全員いなくなるまでに2分も掛かる事は無かった。【索敵】と【警戒】の文珠をズボンの両ポケットに作っておきいつでも使用できるようにしておく。

「約束は守ったよ。次はあんだだ」

「はいはい。それじゃあな坊主ども、今回は完全に俺達の負けだがまた近いうちに会うかもな」

「僕は御免被りたいね」

「はっはっ。俺もだよ、それじゃあな」

一瞬も油断することなく男は何処からか取り出した石を上空に放り投げると消えていった。

誰もいなくなると其処には静寂が残る。

彼女達のいる場所に歩きつつ、厄介な奴らに目を付けられたと、大樹は自嘲していた。

「ふいー…死ぬかと思ったよ」

「こ、怖かったよう…」

「現実の世界で目の前で銃撃たれたのは始めてよ…流石に死ぬかと思っただわ」

『ごめんサマナー。私動けなくて』

「仕方ないよ。あれはどうしようもなかったしね、しっかし佐藤君が凄かったねえ。銃弾効かないって、それもペルソナ効果？」

「まあね。詳しい事は今度教えるよ、それよりアリス。高良さんは？」

『寝てるみたい。薬か何かかなって思うんだけど』

かがみが眠っているみゆきの髪を優しく撫でる。

辛い目にあわせてしまったと、心の中で強く後悔している彼女。自分が誘わなければみゆきはこんな危険な目に会うことはなかった。

そう考えるだけで気が沈んでしまう。

「あのさ…上手く言えないんだけど…高良さんは後悔してないと思う」

「…何が…わかるのよ佐藤君にっ！」

「お、お姉ちゃんっ？」

「か、かがみん落ち着いて、ね？」

「僕は…少なくとも、僕は。友達が危険な目にあっているなら、出来る事があれば力になりたいと思うから。それで自分が危険な目にあうのは分かっても…さ。でも…助けたいと思うんじゃないかな」

オグンが彼女達を殺そうとした時、大樹は思えば逃げようと思えば直ぐに逃げられた。

でも、気がつけば大樹はこなたを庇っていたのだ、死ぬ可能性のほうが高かったのに。

そしてそれはこなたも同じ気持ちだった。

大樹が自分を庇って死にかけた時、何よりもまず友達がいなくなってしまう事を恐れた。最近はその以上の感じになっているがそれは置いておくとして、一瞬で激昂してしまうほどの怒りを感じたのだ。

他人なら別にどうなろうと知った事ではない。勿論目の前で大変な

目にあっていたらこなた達は助けるだろうが。

みゆきも同じなのだろう。自分は役に立てなくても大事な友人が戦場に行くのをただ見守る事ができなかった、それだけだ。

「寧ろ突き放したりすれば…逆に意地になるかもしれない。こんなのは言葉じゃ言い表せる感情じゃないと思うし、人間ってのはそんなもんだと思うよ」

「そう…ね。……………ごめん佐藤君怒鳴りかけたりして…」

「いいよ。別に、それだけ高良さんのことが大事だったんだろうし、ね」

「とりあえず今日は帰ろう？ ゆきちちゃんも送らないといけないし」

「そうね…明日皆家に来て。報酬の事もあるし」

「わかったよー」

ちゃんとした答えはまだ全員、出てきそうにない。

だから、彼女も眠った振りをしつつ、聞いていたのだ彼の言葉を。

実は大樹達が来た時から意識だけは覚醒していたのだった。但し、薬が強くて言葉を話す事も出来なければ眼を開けるのすら辛い状態で、気を抜くと意識を失いかけてしまいそうだったが。

それでも、気づいていた。彼が自分を助けようとしてくれた事を。

勝手に不信任を募らせ、嫉妬していたのに。

彼は普通の人間だった。悪いダークサマナーでもなく、強いデビルサマナーでもなく、おずおずと彼女達に話す様子は普通の男子高校生にしか見えなかったのだ。

（佐藤さんは…私達と同じなのかもしれない…明日は…謝つて、そしてお礼を言わなければ…）

気を失いかけつつもみゆきは見ていた、大樹が自分を助けに無謀な真似をした事を。

こなた達を助けるために、男と一歩も引かず話し続けた事を。

どんどん沈んでいく意識の中、みゆきは明日の事を考え続けていた。

……

……

…

Continue 39 崩壊への七日間・火曜日? (後書き)

みゆきさんの信頼度が+2されました、そのほか全員信頼度上昇ですね。

少しどもりつつもみゆきさんが頑張ってる事を擁護する佐藤君の図です。

前回役に立たなかった分、今回突っ込んで行った佐藤君。

文珠などが綺麗に決まれば流石に負けはしませんね、前回のことを教訓に文珠の出し惜しみをやめただけでここまで有利とは…うん。

さて、今回はコミュパートです。

このままいけばみゆきさんがメインになりそうですね。

木曜日と金曜日が再び長くなりそうな予感…特に金曜日の卒業式が…うん…

色々小説の内容がしょぼすぎて凹みがちになりそうですが…皆さんのコメントなどを見て頑張ってます！

次回も頑張りますねー。

ガーディアンについて説明を。

これは女神転生ifというスーパーファミコンで出てきたシリーズ

の能力ですね。

恐らくペルソナの前身になったシステムです。

主人公とヒロイン達は死亡することにより、自分の力量に応じた守護天使が取り付いてステータスがアップしたり魔法を覚えたりします。

主人公はサマナーなので魔法は覚えませんがステータスが上がるんですよー。

自分が強ければ強いほど、負けなければ負けないほど死んだ時のガーディアンは協力になります。

そしてここからがTRPGでの追加能力ですね。

守護天使は宿命を3点増加する事により攻撃をカバーしてくれたり、スキルを使ってくれます。

これらは色々制約も高いのですが物凄く強いのです。但し、使いすぎると守護天使が「約定を果たしてもらおう」とプレイヤーをNPCというかロストさせてしまうと言うハイリスクハイリターンな能力なのです。

今回はMPを9割消費して宿命を1点増加と少しばかり優しいですが、それでも制限がついています。例えば強いけどペルソナのように連打とかは出来ないシステムですね。

どうでもいいこと

それにしても…私の休暇はいつまで続くんだろう…？ いやまあ1

「3月はデスワークだったので良いのですが…
朝4時に起きて仕事に行って帰ってくるのが夜19時以降…でほぼ
休みなし、辛かったです…よよよよ。」

重要な選択肢（属性かルートかは内緒です（汗））

- 1：神の炎：0票
- 2：邪悪の念：7票
- 3：無心の心：63票

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお
答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

- こなた：20票
- かがみ：26票
- つかさ：14票
- みゆき：46票
- ダッキ：16票
- アリス：10票

覚醒時ステータス成長表

正直、体特化は消してもいい気がしてきました。

- 力特化：5票
- 知魔特化：11票
- 体特化：1票
- 速特化：67票
- 運特化：3票
- バランス：85票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue 40 〈崩壊への七日間・水曜日〉(前書き)

コミュパートです。色々大変な中の日常ほど、大切なものはないと思います。

今回は大幅リードでみゆきさんとなりました。

あれ…みゆきさんのはずなのに…短い気がする…

だ、大丈夫ですっ！ちゃんと信頼度増えました！（逃げた

いつも頂けるコメント、ありがとうございます。

まだまだ…本当にまだまだ未熟ですけど、楽しんでもらえるように頑張りたいです。

Continue40 崩壊への七日間・水曜日

Continue40 崩壊への七日間・水曜日

- 柊家・かがみの部屋

昨夜の依頼の報酬受け取りと反省会なども兼ねて現在僕達は柊さんの家に来ている。

流石にこの時間は皆仕事などに出ている様で居たのは柊さんのお母さんだけだったが。それにしても娘が4人居るとは思えないほど若々しい。

まあ、アニメや漫画と違いありえないくらいに若々しいと言った事はなかったが、どうみても30代程度にしか見えなかったのはどう言う事だろうか。

マグネタイトの効果なのかもしれないな…体に力が漲ってくるし、そのせいなのかもしれない。

僕達は挨拶もそこそこに柊さんの自室に招かれる事になった。何気に、そう何気に女性の部屋に入るのは初めてだったりする。

というか他人の家に入るのが始めてだったりするのだが…やはり女

性の部屋って色々違うんだなあと思いつつ、ついキョロキョロしてしまう僕だった。

はっと気づいて回りをみると皆が微妙に優しい目をしていた、心に大ダメージだ。

「ほっほっほ。佐藤君やおにゃのこの部屋は初めてかねえ、今まさにその気分っ！ 気分はいかにっ！？」

「うん、今まさに泉さんのせいでその気分が霧散したけどね」

「しいまったあああっ！？」

「こなちゃんの部屋は凄かったけどねー」

「おうよ。普通に入ったらここは『男子の部屋ですか？』って言われる事間違いないねっ！」

「はいはい、コントは他所でやりなさいよー。とりあえず皆も集まったし、報酬の話に入るわね」

報酬か、多分昨日の依頼は昨日の連中が用意したタミーだと思っただけ報酬は手に入ったんだろうか。

「その辺は問題ないわ。振込みでお金は来ていたみたいだし、その辺何も考えていないのか、後々の事を考えていたのか…ね」

「まーまー。お金があるならいーじゃん」

「そだねえ〜」

「あんたらは軽いわね…とりあえずまずみゆきからだけど、振り込んでおくのと手渡しどっちがいい？」

「振込みの方でお願いしますね。でも宜しいのでしょうか、昨日は役に立つところか…」

「なーに言ってるの。みゆきがいなければオグンを探すなんて難しかったわよ」

「確かに、ユニークを此方から追跡できるのは凄まじいと思うよ」

レアな悪魔を此方から探せると言う手腕。色々な組織から引つ張りだこな能力だろう。

逆に言えばそれらから逃げられるという事でもあるから、居て迷惑になるなんて一つもない。という事で報酬が貰えないと言うのは謙遜だ。

どちらかと言うと前回オグン戦闘で役に立たなかった僕がそうなんだけどね。という訳で僕が貰った金額は通常の半額にもらった。アイテムなどは全部あつちに回したから、これでいいだろう。

「別に気にしなくてもいいのに。それに色々助けてくれたんだから

報酬は貰うべきよ?」

「僕の依頼はオグンの討伐だからね。最後に止めを刺したのがアリス達とはいえ、僕はあまり役に立てなかったし当然だよ」

「えー…? 塵気楼とか役に立ってたじゃん」

「それだと私とお姉ちゃんなんて、どうしようもないけど…」

「まあ、次回はきつちりこなしてもらおう事にするさ。今回は色々僕もためになったし、踏ん切りがつく依頼だったからね。そっちの方が重要だよ」

皆やはり人がいいな、本来なら無償になるのも覚悟していたというのに。

この後も僕は手渡して貰ったり、皆は振り込んでもらったり、と報酬とアイテムの話は直ぐに終わった。

その後はのんびり雑談だ、流石に僕も報酬を貰ったら直ぐに帰る訳にもいかず、色々話に参加したりしている。

最近は特に人前にいるからと言って極端に緊張する事も少なくなってきたし、この辺でコミュ障も何とか落ち着きたいものだ。

まあ、彼女達は良い人だからその分話しやすいのかもしれないけど。

「いやー、アルバイトも終わったし明後日は卒業だしと、イベント

盛りだくさんだねえ」

「そうね…卒業かあ」

「これからは皆で集まって遊ぶ回数も減っちゃうんだよねえ…少し寂しいな」

「そうですね。でもそれでも私達は友達ですから、これからも沢山思い出は作れると思いますよ」

「みゆきの言う通りね。しんみりした話はまた今度よ、今日は昨日疲れた分のんびりしましょっ」

「僕も賛成だね、それは」

明後日は卒業式を控えている。

何だかんだ言いながら僕もぎりぎりとはいえ卒業できるのだから、自分で頑張ったものだと思うよ。

こんな能力に目覚めていなければ僕はどうなっていたらろうか…多分引き籠もってるかも知れないな…すごくありありと想像できた。

それにしても昨日は疲れた、ただの戦闘じゃなかった上に相手は人間だったから…悪魔と違い、人間は頭脳を使ってくるからやっかいだ。

なんで知能が高い悪魔が力任せに来てそれに劣る人間が頭脳を使って戦うのかとよく思っていたけど、何のことはない。

答えは人間が弱いからだ。

悪魔は人間なんて相手にならないくらい基礎のステータスや能力が強い。だから小賢しく戦略を立てる事もないし、力をただ振るえばいいだけだ。

だから持っているアイテムも使ってこないし、何も考えずに魔法や攻撃しかしてこないのが大半だ。

恐らく相手が人間だから、と言う事で慢心しているんだろう。

僕らは其処につけこむ。相手が油断してくれているなら此方はそれに対して知能を使い罫を張り対抗する。だから格上の悪魔にだって勝てる。

でも人間が相手だと違う。戦争じゃない限りは大人数対大人数で戦う事は稀だ。

人間も所詮物量で押ししまえば被害を考えなければ負けることはない。でも相手も此方も少数ならば、腕の良い方が、戦略を整えたほうが勝つ。

だからこそ人間との戦いは厄介で、そして面倒なんだ。

その分色々経験にはなるんだけどね。できればあの連中にはもう会いたくない…けどやっぱり会うんだろうな。

奴ら、高良さんの事を聖女候補とか言っていた気がする…となると相手がガイア教だろう。メシア教みたいな人間には見えなかったか

ら。

彼女もややこしい奴らに目を付けられたものだ…近い内にクスノハに連絡を取るべきかもしれない。

流石に見知った人間が連れて行かれるのは僕としても御免被りたい。彼女がいなくなれば多分この3人は落ち込むだろうしね。

正直組織と関わるのは御免被りたいけど、そうも言ってもらえないか…明日は暇だしクスノハと連絡を取ってみる事にしよう。

「んー？ どつたの佐藤君？」

「あ、いや。なんでもないよ」

「それにしても昨日のこなたは凄まじかったわね。アレだけいた悪魔を全部浄化しちゃうなんて」

「ああ、そういえば僕は気絶してたから良く分からないんだけど、一体どうなったのかな？」

「あー、えつとね。ガーディアンっていう能力なんだって」

「ガー…ディアン…」

まさかここで女神転生ifの能力が来るとは…ってつまり…

「もしかして泉さん、一度死んだ…？」

「あ、やっぱあれ死んでたんだ。いやあ、ちょっと錯乱しちゃってね。オグンに突っ込んだらどうやらねえ…」

「それってさ…僕無駄死にだったんじゃない？ いや、死んでないけどね僕」

食いしばりのお陰で死にはしなかった模様。リカームが必要なくらい死にかけてたらしいけどね。

「はっはっは…サーセン。でもお陰で会いたかった人にも会えたりオールオッケーだよ。かなり強いしねっ！」

「佐藤君のペルソナに似てたけど、随分苦しそうだったじゃない。何度も使えるものじゃないでしょあれ？」

「大丈夫なのですか泉さん…？」

「ん、まーね。かなりクールタイムが必要そうだけど暫くしたらまた使えるよ。使うとごっさりMP持つてかれるから気をつけないといけないけどさ」

「ガーディアンとペルソナは基本的に違うからね。泉さん、できればガーディアンは多用しないほうが良い」

「ほえ…？ 知ってるの佐藤君？」

「実は色々耳に挟んだことがあるんだ。クズノ八経由から色々だね」

「佐藤君ってクズノ八とコンタクトとれたんだ…ここ最近の話よね？」

「まあね、つい最近の事なんだけどさ」

僕が知ってるのはおかしいだろうし、この前であったクズノ八の人から聞いた事にしておこう。

なら無理がないしね。ペルソナとガーディアンは似てたから話を聞いたという事で誤魔化しておいた。

「ペルソナとガーディアンはさっきも言ったように根本的に異なるんだ。ペルソナというのは言わばもう一人の自分を呼び出すという能力だからね」

「と言う事は佐藤君は実はおにゃの…」

「それはない、それはないよ。自重しようか泉さん」

「ら、らじゃ…目が怖いっスよ」

「自業自得よ」

「ペルソナの事自体、僕も何から何まで分かっているという訳じゃないけど、いわば昔の英雄や悪魔を自分のかりそめの人格として呼び出して戦うのがペルソナなんだ。つまり必要なのは自分のMPと

かだけで他にあまりデメリットは存在しない。強いて言えば攻撃に対する相性が変化すると、強すぎるペルソナは使えないという所かな」

「成程ねー。佐藤君が使った、テンセンニヤンニヤンって凄く強かつたけど大丈夫なの？」

「ああ、問題ないよ。ペルソナについてはこの辺でいいかな？」

「はい。大変興味深いですので、よければまた今度教えて頂けませんか？」

「わかった、とはいえ僕の切り札みたいなものだから奥の方までは無理だけどね」

やはり知らない情報は欲しがる傾向にあるな高良さんは。

当たり障りのない所までなら教えてもいいか、流石に横島とかは教えられないけどね。

さて次はガーディアンの説明に入る事にしよう。

「次はガーディアンだ。その名前の通りペルソナとは違い、本人の意思をもって対象者を守るのがガーディアン。守護天使とも言うね」

「そっかー成程成程」

「そういえばこなちゃん、お母さんって言ってたけどもしかして…」

「？」

「おや、聞こえてた？ うんうん。私のガーディアンはお母さんなんだよ。どうやら一度力を使っちゃうと暫く見えなくなっちゃうみたいなんだけどね」

母親がガーディアン…ってそれ、役に立つんだろうか…いや、悪魔を倒しているだから神格化しているのかもしれないな。

「続けるよ？ ガーディアンというのは前世の結びつきや、信仰、もしくは気に入った相手を守護する存在。よく言うだろう守護霊って。それみたいなものだよ。ただ、それと違うのは自分が望めば力を貸してくれるという点があるけど」

「其処だけ聞いていればデメリットは無いように思えますが…？」

「そうだね、本来は泉さんが言っていたようなMPを吸い取ると言う事もないし、お願いすれば何度でも使えるのがガーディアンとしての特性なんだけど…勿論裏もある」

「う、裏って…？」

「守護天使が先ほど言っていたように気に入ったから、守るべき存在だからって無償で動く訳じゃない。勿論その分の代価は貰っているんだ」

「で、でもお母さんに限って…」

「泉さんのお母さんとの面識は勿論ないけど、これは契約だからね。多分使いすぎると…守護天使の住む世界に強制的に連れて行かれる。天使ならば天界の戦士にされるし、悪魔なら地獄の使者か、魂を食われるか弄ばれるか、色々かな」

ゲームでは基本そういう事は無いのだけど、女神転生には他にも違うデータでガーディアンが存在する。

そこでの守護天使は呼び出して力を借りる代わりに、宿命というものを代償として深めていくんだ。

それが一定値まで高まれば、契約と言う事で守護天使に連れて行かれる。名目上は死と同意義だろう。

泉さんのお母さんといえば、多分泉かなたさんだと思うけど、この場合は死の国に連れて行かれるのだろうか…

「とはいえ、泉さんの言う通り泉さんのお母さんなのだとすればそれを緩和しようとしているはず。MPを吸い尽くされかけたり、暫く使えなくなったりしているのは多分…その契約を出来るだけ遅くするためなんじゃないかな」

「………そっか…お母さん……」

「出来るだけ使わない方がいいと思う。それでなくても守護天使は守ってもらえる間は強くなれるという利点もあるしね」

「そっいえば昨日より体が動かしやすいけど、そかあ…うん。あり

かと佐藤君」

「まだまだ、私が知らない事も多いのですね。色々為になります」

「そだね、佐藤君は物知りだよー」

まあ、女神転生やペルソナの話が実はゲームだったとは言えないしね。信用してもらえないだろうし、信用されても逆に色々と困るから。

高良さんがこれからも色々と聞いてきそうだから、その辺の事考えっておかなくては、かな。

「よーっし！ それじゃ気を取り直して遊ぶかーっ！」

《あ、サマナーさーんっ。私もナニカして遊びたいんだけどっ！》

「おっと、アリスちゃん。それじゃスブラでもして遊ぼうじゃないかっ！ かがみんとつかさもどうー？」

「あ、やるやるー。お姉ちゃんもいこっ！」

「はいはい。なんか逆に目を酷使しそうだけどね……」

柊さんの言う事は至極もつともだと思つ。ちなみに僕は不参加だ、また瞬殺されるのを危惧している訳ではない、そうではない……

という訳で泉さんと柊さん姉妹とアリスでの4人でゲームが始まった。

見る分には勝てそうな気もするんだけど、実際やるのと見るのでは色々違うんだよねあ…やはりイメージでの操作は実際とは大違いというか何というか。

色々話をするのも疲れたし、ここら辺でのんびりさせてもらおう。

「ふっふっふっ！ 私のカー イに勝てるかねっ！」

「ほう？ 言うじゃない。3人ともこなたを集中よっ！」

「はい」

『おっけー』

「ちよっ！？ 3人でよってたかってとかつ！？」

仲がいいな4人とも、初めはアリスも悪魔って事で少し一歩引かれてた気がするけど、今は普通に馴染んでいる。

こんな様子を見てみると僕も頑張らなければいけないんだろうなって思わせられるな。いまだに人と話すのは少し苦手だ。

となりの高良さんをふと見てみるとにこにこしながら皆を見ていた、きつとこつという時間が好きなんだろっ。僕もこつという感じは嫌いじゃないし。

「皆さん、楽しそうですね」

「そうだね。アリスもかなりはしゃいでるようだし」

「アリスさんも、こうしてみると私には普通の女性の方にしか見えませんね。とても悪魔とは思えません」

「確かにね、普通の服を着てたら町を歩いてても気づかないと思うよ」

アリスは種族的に一番人間に近いと思う。

それが魔人としての特性なのか、アリスの存在として特性なのか分からないけど、ここぞという時には色々便利だ。

普通に外に出しておいても気づかれる心配は低いからね。とはいえやはり悪魔なので相手がデビルサマナーだとばれる心配があったりするけど、そこまでデビルサマナーは多くない。

この町にも10人居るかいないか位だろう。とはいえわざわざ出て外に出る必要はあまり無いからしないんだけどね。

「あの、佐藤さん…」

「何か？」

「いえ…先日は助けて頂き、本当に有難うございました」

ぺこりと頭を下げる高良さん、礼儀正しいという典型的な見本だなと思う。

「気にしないでいいよ。助けるのも僕の仕事の内だ、寧ろ高良さんに怪我が無くて良かったよ」

つつい言葉が尖ってしまうのは…もはや癖なのかもしれないな。

苛められっ子は大人になると極端に優しくなるか、極端に嫌な奴になるかと二通りって聞いた事があるけど、僕は後者なのかもしれない。

コミュ障のせいも混ざっているかもしれないけど。あまり人を真正面から見れないのが僕の難点だ。

今もアリス達を見ながらでしか話せていない。特にあまり親しい間柄じゃない無い人は特に。

これが泉さんなら僕も普通に話せているような気がするな…

そしてアリス達はゲームに夢中になりすぎて此方にまったくと言っていいほど気づいていない。凄まじく賑やかだ…うん。

女性は三人集まれば姦しいというけど四人に増えるとその数倍元気だと思う。

「ありがとうございます。あの…差し出がましいとは思っていますが、よければ佐藤さんのお話、聞かせてもらってもいいですか？」

「僕の話？ 別にいいけど？」

「いえ…ただ、これからも一緒に行動すると思いますし、佐藤さんの事をもう少し知りたいと言っつか…その…」

なんだろう、すごくあちら側とこちら側の空気が違うような気がする。

後高良さん？ その言い方だと男性は凄く誤解すると思うので、もう少し言葉を選んだほうがいいと思う。

僕？ いやまあ彼女は単純に僕がどうしてサマナーになったか聞きたいんだろうし、好意を持って言ってきたる訳じゃないと自信を持っていえるので冷静だ。

ただ、それを表現できないだけで、うん。

まあ、当たり障りのない事から話していくことにしよう。

………

………

………

「〜と言う事があつただけど…ね」

「まあ…よく無事でしたね」

「無事とは言い切れなかったけど、まあこうして生きてはいるよ」

「無理はなさらないで下さいね？ 皆さん心配してしまいますから」

「…そうだね、気をつけるよ」

佐藤さんのお話は色々為になる事ばかりでした。

そして、今までどれだけ大変だったのかも…それを口にする事はありませんでしたけど、恐らくとても辛い体験ばかりしてきたのは想像に難くありません。

色々聞いていく内に分かったのは、やはり彼もただの普通の人だと言う事でした。

楽しければ笑い、辛ければ苦悩する。何処にでもいる普通の高校生。ただ、デビルサマナーと言う能力を持っているだけの、普通の人でした。人はまず先入観や第一印象から人を決めてしまいがちです、

そして私も愚かにもその典型的でした。

デビルサマナーはダークサマナーであるかもしれないと、彼もまた悪人なのかもしれないと。

今思えばこうやって話してみればよかったのですね、相手のことも良く知らずに勝手に警戒して、勝手に不審に思って…私とした事が、凄く愚かでした。

恐らく決定的だったのは、泉さんがCOMPを持ち始めたときでしょうか…

その時に私は嫉妬してしまった…

…どうして私がデビルサマナーになれないの

と…私は皆さんのように戦う才能はありません、それは恐らくこれから先もでしょう。

だから、佐藤さんの事を羨ましいと思ってしまうた。

彼の事を良く知りもしないで、私は勝手に想像して、勝手に嫉妬して、勝手に嫌な気持ちを持っていたのです。

今思えばなんて浅ましい考えだったのでしょうか…人からよく、私は人が良いと言われますが、そんな事はありません。

私も疑いますし、不審に思いますし、嫌な事だって勿論あります。

負の部分…そのせいで私は勝手に佐藤さんを悪い人間だと思い込んでしまいました。

でも、今はそう思う事はありません…やはり泉さんは慧眼だったのだなと思います。

純粹に彼を心配して、彼を信賴して…その信賴を勝ち取った泉さん。私にはとても眩しく見えてしまいます。

そして佐藤さん…

彼ははともいい人だと思います。もちろんそれこそ聖人君子と言ふ訳ではありませんし、善人と言ふ訳でもないでしょう。

嫌いなものには容赦はしないでしようし、戦闘時の佐藤さんはとても強く、怖かった。

それでも佐藤さんは、恩には恩で返してくれる人だと思います。

だからこそ、泉さんにCOMPを渡したのだろうと。

だからこそ、今私達と一緒に行動してくれているのだろうと。

例えそれが、報酬を貰うためのアルバイトという間柄だとしても。

「ふふっ、そうなのですか」

「まあね。あの時というか…アメノウズメはそのうちやばい事にな

りそんな気がする」

「あらあらまあまあ……」

佐藤さんのお話は飽きる事がありませんね、次から次へと吃驚箱のように沢山のためになるお話や面白いお話が聞けてしまいます。

ついつい時間を忘れて聞き入ってしまいそうです。

それにしてもアメウノズメさんでしたか…随分解放的な方なのですね、一度お会いしてみたいかもしれません。

近い内に佐藤さんに頼んでみることにしましょう。

「ちよちよちよちよーっつと。いいふいんき、何故か変換できない。ですねお二人さああん？」

『うーっー』

「あ、あら…泉さんにアリスさん…」

「うわっ!?! アリスに泉さん…何時の間につ!?!」

「いや、さっきから居たわよ」

「だよー」。ゆきちゃんと佐藤君、仲良さそうにお話してたね」

慌てている佐藤さん、と言いますか私も気づきもしませんでした。
会話に集中しすぎていましたね。

心なしか泉さんとアリスさんの目がジト目になっている気しないで
ありませんが。

も、もしかして危険ですか…？

「流石はみwikiさん。その様々な知識を持って佐藤君を情報漬
けにするとわっ！」

「え…え…？」

「みwikiって何よあんだ…」

「まあ…泉さんだし。うん」

「こなちゃんだしねー」

『はいはい。サマナーさん連行。こなた手伝ってー』

「ぶ・らじャーっ！」

「ちよっ…ちよっど？ 腕、腕が痛いんだけど…き、聞いてないっ
！ この二人聞いてないっ！！」

ずるずると連れて行かれる佐藤さん。奥の方で3人でゲームをやる
事になったようです。

ちよつとだけ、残念と思つてしまつたのは内緒です。

「で、どうだつたのみゆき？」

「あ…はい。そうですね…」

かがみさんが笑顔で私に問いかけてきました。

大丈夫です。伝えたい事は全部伝えて、聞いたかつた事は全部聞けました。

その上での私の出す答えは、一つしかありません。

「佐藤さんはきつと、これからも私達と一緒に行動してくれるはず
です」

「そう…ね。居てくれると助かるしね」

「?? どうしたの二人とも？」

「いえ。何でもありませんよつかささん」

「何ていうか、色々あつたけどそれが終わつたつて事よ。ほらほら
みゆきも行きましょう」

「あ、私こつというゲームはあまり遊んだ事がなくて…」

「大丈夫だよ。私がゆきちゃんに教えてあげるねっ」

過ぎた時間は戻りませんが、それでもこれから迎える時間を充実させることは出来ます。

今までの分をこれから取り戻していく事にしましょう。

それが私の見つけたこれからへの答えですから。

「よっしやーっ!」

『勝利ーっ!』

「これってある意味イジメだと僕は思う…」

佐藤さん…私は貴方を信用して信頼します。

そして私も佐藤さんに信用して信頼されるように頑張りますね、少しずつでもいいですから、こつやっつて気軽に話し合えるようになる為に。

まだまだ時間が掛かりそうですけど、それでもきつといつかは。そのなれると信じて。

だから、これからも宜しくお願いいたします。

「みゆき」

「はい？」

「いい表情、してるわよ」

「ふふつ。ありがとうございます」

「ほらほら、ゆきちゃんもまぞろっ」

「ええ、お手柔らかに」

「みゆきさんっ！ さあ、みゆきさんのその凄まじいテクニクを見せる時がきたっ！」

楽しい時間…ですね、本当に。

こんな日がずっと続けばいいと思います、これからずっと。

「はいっ 頑張りますねっ」

- 高良みゆき視点解除 -

みゆきの大樹に対する信頼度が+2された！ 大樹（信頼）

佐藤君報酬減額を望む

ガーディアンの説明

みゆきさんから信頼ゲットの3本でお送りしました。

漸く佐藤君もらき すたメンバーを友人と思えるようになってきた
ようです。

これからどうなるか、ですね。

ガーディアンは危険だから多用しないようにと佐藤君から釘が入り
ました。

多分余程絶望状態にならないと使わないと思います。まあ、この一
週間の間はどうしようもなく使えないのですけどね(えー

どうでもいいこと

頭が泣きそうなほど痛いです…何故でしょうか…？

うーん、風邪を引いたわけでもないのですが…

こういう時はオンラインゲームでもしながらのんびりしてしましょ
うか。

ラグナロクオンラインは大好きですっ！ いたたたた…(涙

重要な選択肢（属性かルートかは内緒です（汗）

- 1：神の炎：0票
- 2：邪悪の念：8票
- 3：無心の心：73票

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

- こなた：0票
- かがみ：0票
- つかさ：0票
- みゆき：0票
- ダッキ：0票
- アリス：0票

覚醒時ステータス成長表

正直、体特化は消してもいい気がしてきました。

- 力特化：5票
- 知魔特化：12票
- 体特化：1票
- 速特化：76票
- 運特化：3票
- バランス：91票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue 41 崩壊への七日間・水曜日? (前書き)

目が冴えて起きてしまいました。

という訳で6時半から執筆開始なのです。短いので結構直ぐ終わりました。

頭痛は…消えているのですっ！ いやあ…爽快な朝はいいなあ。そして今日は休みと…な、なんだか休みが続いている気がします…後が怖い。

水曜日後編と言った感じです。

文珠の秘密がついにーと言った感じです。

Continue 41 崩壊への七日間・水曜日??

.....きろ...

.....お.....って.....が

声が聞こえる.....なんだろう、僕は今...何を...

.....いい...ん.....

今日は疲れた。流石に女性が沢山いると話に付き合っただけでも相当疲れる。

今は夢の中でまどろんでいたい。

『いい加減に起きろっ！ このリア充があっ！
っ！』 【爆】叩き込むぞ

「痛っ！？ だ、誰だっ！って横島...!？」

『まったく漸く起きたかよ。このリア充が、けっ』

「何で出会って早々そんな目で見られなくちゃいけないんだろうか
僕は.....」

目の前には横島がいた。辺りを見回すとあの時の真っ暗な空間で、毛布も何もここにはなかった。勿論COMPもない。

久しぶりに出会って、行き成り親の仇を見るような目で見られるのは滅多に無いんじゃないだろうか。

というかりア充というフレーズは僕には合わないぞ…？

『ほほう？ 可愛い女性4人+ に囲まれてるだけではなく、家に御呼ばれしたのがリア充じゃないと…リア充じゃないといいやがるかてめえっ！ 俺なんか！ 俺なんか！ 俺なんか！ そんな羨ましい状態になった事なんてほぼ一度もないんだぞおおっ！？』

「ダウトと言わせて貰おう」

『何でだよっ！？』

いや、それこそ何でだよ、と言り返したい。

とりあえずくだらない話はどうでもいいとして、恐らくここは夢の中だろう。自我を保ち続けられている以上夢ではないのかもしれないが、ここに横島が来ている以上は何かがあったのかもしれない。

「で、用件はなんだい？ 僕はまだレベル20から上がらないから降ろせないんだけど」

「ああ、それについて話しに来た。つたくよ、何で俺がお前みたいな…」

「何とかする方法が…あるのかな？」

「まあな。所でどうだ？ 文珠の使い心地は」

「文珠…？ ああ、とても役に立つ能力だけど、どうして僕がこれを使えるのかよくわからないんだけど？ 前世は普通の人間だしね、マジックカードも同じだけど」

「まあ、その辺は俺を降ろせるようになってからだな。何でほぼデメリットなしで使えるかだけ答えてやるよ」

「何で僕の事を僕以上に横島が知っているんだろう。いくらペルソナと言っても横島は僕自身ではない。」

「確かに文珠の能力者である横島だから知っているのかもしれないが、微妙に腑に落ちないな。」

「答えは単純だ、【お前の力じゃなくて俺の力を使って文珠を作ってる】からな」

「…なっ!？」

「俺はまがりなりにも英雄だぜ？ 人間の力テグリーから外れてんだよ。つまり普通に文珠を作る為の霊力を過剰に持つてる訳だ、お前はそれを使って文珠を使ってたって訳さ」

「い、意味が分からないっ！ 文珠は僕が作っているんじゃないのかっ！？」

『ああ、お前が作ってるよ？ 文珠の能力自体はお前のもんだ。だけれどよ、お前自分で不思議に思った事ないか？ なんて霊力が減らないんだって』

…それは僕も思っていた。

霊力…この場合は僕のMPを指しているんだろう。文珠もマジックカードを作る時もMPは1も減る事はなかった。

作る数ともてる数に制限はあるものの、何のデメリットもなく4つまで連結する事が出来るし、その威力は折り紙つきだ。

でも、おかしい…横島がペルソナになる前から僕は文珠を作れた、金色の強化された文珠を。その説明はどうなるんだ？

『簡単だ、俺はお前に降りる前から居たって事だよ。なんつーかお前だと直ぐ死にそうだったんでな』

「そこがわからない。何で横島が僕を助けるんだ？ 確かに僕の知っている横島はいい奴だって事は知っているけど無関係な僕を助ける理由がないはずだ」

『……俺を降ろせるようになったら教えてやる。そう簡単なもんじやねえんだよ、これはな』

「…今は言えないって事が…そういえば、伊達が」

『雪之丞だろ？ あいつはペルソナじゃねえぞ？ ちゃんと神格をもつて存在してやがる。あーなつても修行とか頭沸いてるんじゃないかあいつ…？ まあ、それもおいおい教えてやる。ただな、一つだけ言っておくぞ？ 俺もあいつもお前に出会ったのは『偶然』じゃない、まあ雪之丞の場合は少し唐突だったけどな』

「わからない事だらけだ…横島は一体僕に何を望んでるんだ…？」

『美人のねーちゃん』

「よし、分かった死んで来い」

『…お前さ…俺にだけは辛口だよな？』

そうさせてるのは横島だ。

とりあえず文珠の事を聞かせてもらおう…それが僕の覚醒とどう繋がっているのかも。

「文珠の事はわかった…いや、まったく分かってないけど横島が力を貸してくれてる事はね。でもそれで現在の頭打ちとどう重なっているかわからない。」

『んだよ、まだわからねえのか？ 簡単だろうが…お前はよ』日々平凡に生きてて『覚醒できるとでも思ってたのか？』

「…は？」

『つまりだな、お前は文珠が足かせになって覚醒できないんだよ。文珠は強い、俺が霊力を払ってる分、通常の文珠よりもな。お前のイメージが悪いせいで威力も効果も弱まってるけど普通の文珠に比べたら月とスッポんだ。だからお前はそいつがあれば『なんとでもなる』とどこかで安心しきってる。文珠があれば何とかなるってな』

「……………確かに、少なからずそう思ってる節はある。なら何である無制限に使えるようにしたんだっ！？」

『それでもしないとお前直ぐ死ぬだろうが…霊力も仲魔も力だつて無いお前が素手で悪魔を殺せるか？ 少々反則でもなお前には力が必要だったんだよ』

確かに横島の言う通りかもしれない。

COMPのハーモナイザーがあつても僕はゴースト相手に逃げ出した。文珠がなければあそこであっさり死んでただろう。

寧ろ文珠がなければ…戦おうとも思わなかったはずだ、今では色々戦う術があるから文珠に頼り切る事は無くなったけど、それでも最後には文珠に頼っている。

つまり…僕が覚醒できないのは文珠に依存しているせい…なのか？

『サルのじーさんが言ってたけどな。人間ってのは殻を破かねえと

成長できないんだと、お前は文珠っていう固い殻に覆われてるからそれ以上成長できねえんだよ』

「成程……」

『という訳で、だ。俺からの霊力供給はこれから無しにする。どうしても文珠が欲しけりゃ自分で作れ』

「出来るのか…僕に？」

『文珠の生成能力自体はお前のもんだ、霊力…お前の場合はえむぴーだったか？ マゾポイントだな』

「殴りたい…これほど殴りたいと思ったのは久しぶりだ」

『はっ！ お前じゃ俺に勝てる訳がないっ！ と、そうだなお前の力でも2〜3日に1個くらいなら普通の文珠は作れるんじゃないかねえか？』

「やっぱり人間が文珠を作るとそうなるのか…」

『緊急時にやっぱり俺に力を貸してくれとか言うなよ？ 今の今までは優しい優しいチュートリアル時間だったんだ。お前が強くなれば今までみたいに造れるようになる。今持つてる分の文珠は取り上げないから感謝しとけよ？ 一個くらいならあの子達に上げておけや。誤魔化すのはいくらでも出来るだろ？ 可愛い女の子が死ぬのは世界の損失じゃっ！』

マジックカードは数枚あげる予定でいたけど…文珠はな……いや、

泉さんになら上げてもいいか。最近お世話になってるし。

他の皆は、まあその内と言う事にしよう。

それにしてもわからない事だらけだ、文珠を作る為の力を貸していた横島の事や、僕自身の事。

何故僕が文珠を使えるのか、何故横島がここまで僕にしてくれるのか。全ては僕が強くなってから…か。なんだろう、聞かなければいい気もする…

『これでよしと…まあ、お前が俺を降ろせるようになったら解禁してやるよ。文珠が無いと困る時は多いしな』

「それは助かるよ。所でマジックカードの方は横島の能力じゃないはずだけど、こっちはどうなのかな」

『知らんっ！ そっちは真正銘お前の能力なんじゃねえの？』

「でも、こっちもMPはまったく使わないんだけど」

『さてな…俺だって知らない事が一杯あるんだよ。そっちは特に制限にもなっていないだろ、便利だけど文珠ほど頼り切ってるようにも見えないしな』

「マジックカード自体は攻撃力もないし、魔法を入れてもそれは魔法石みたいなものだからね。便利だけど文珠と比べると重視はしていない」

『まあ、その辺は自分で考える。男に懇切丁寧に教えるほど俺は優しくないっ！ 後は死ぬ気で戦えば覚醒もするだろうな、さっさと強くなりやがれ』

「言われなくても。最近は色々キナ臭いし、そろそろ限界を突破しないといけないと思ってたんだ。文珠が増産できなくなったのは辛いけど…僕には仲魔と仲間がいるからね」

『お前一人で何とかできるほど世界は甘くねえよ。でも美人が力を貸してくれるなら世界もどうにかできるだろうさ。美人に感謝しておけよっ！』

「確かに…感謝しなくちゃいけない人もいるけどね」

『くそっ…なんでこんな奴がモテるんじゃ、とつとと帰りやがれ、そして死ねっ！』

「僕は横島を埋めてもいい気がする…」

悪い奴じゃない、悪い奴じゃないんだけど、こう色々と疲れるな横島は。

まあ、覚醒が出来るかもしれないただでも御の字だ、文珠はこれからの事を考えると痛いけど、このまま弱いままにいるよりは強くなった方が良くに決まっている。

せめてダッキを普通に呼べるようになる位にはならないとこの先生きていくのは難しいから。

このまま世界はどうなるのかも分からない、メシア教とガイア教が出てきた以上、ここに核がふつてくる可能性もあるんだ。地下シェルターを探す事も考えないといけないな。

そうなると取捨選択もしなくてはいけない…らき すたの皆を全員救う事なんて出来ないかもしれないし、考えてもいない。

でも、友達だけは…僕に出来た友人だけは助けたいと思う。

横島も見捨てて逃げたら僕を殺しに来るかもしれないな…それはどうでもいいけど。

明日はクズノハとコンタクトを取って、高良さんの話を話してみるか…流石にクズノハまで高良さんをどうにかしようとはしないだろう。

ゲームを信じるなら…だけどね。

「それじゃ僕は戻るよ」

『へいへい、とつとと帰りやがれ』

手を無造作にピラピラさせる横島を尻目に僕は意識を深く沈めていった。

明日からは色々大変そうだ……

……

…
…

大樹の文珠の作成に封印が課せられた。
大樹に覚醒がかなり近づいている…

COMP ステータス更新……………

- 泉こなた視点 -

「なあ、こなた？ 最近色々外に出ているようだけど、変な事はしてないよな？」

「嫌だなあお父さん。バイトって言うてるでしょ？ かがみん達に聞けば直ぐわかるよー」

「そつだよなあ…なんだか最近妙に不安になってなあ…気をつけるんだぞ？」

「うん、ありがとうお父さん。所でゆーちゃんは？」

「ん、今日はもう寝てるんじゃないか？ 少しばかり体調が良くなさそうだったんでな」

「そか…うん。それじゃ私も部屋に戻るね」

「……………こなた」

お父さんがこっちを真剣に見てた。

「んー、何？」

「いや……………なんでもないよお休み」

「う、うん」

何か言いたそうにしてたけどお父さんはそのまま部屋に戻っていった。

変な様子だったなあ。お父さんが変なのはいつもだけど、その変な感じとはまたちよっと違ったし。

とりあえず部屋に戻ろうかな。

……………

…

「今日は疲れたなー」と

昨日の事や、色々皆で騒いでたのもあってか凄い疲れがきてる。

気を抜くとこのまま寝ちゃいそうだね。

流石にゲームをするほど気力も残ってないし、TVでも見てのんびりしてようかな。

「んー。そうだった!」

佐藤君にメールでもしてみようかな。でもこの時間だと寝てそうだなあ…どうしよう。

とりあえず送るだけ送ってみようかな。

そーれ送信つと。

「そついえばこれ、返し忘れちゃったな」

ポケットから取り出した金色の玉、ビーダマとは違う重さがあるし文字も書かれてるからきつとマジックアイテムだよな。

多分佐藤君の物だと思うけど、こんなアイテムは見たことも聞いた事もないなあ。

「【脱】と【出】…普通に読めば脱出だよな。これってもしかして

連結して使うのかな？」

発動すると其処から逃げられるアイテム…なのかな？ となると便利そうだけど。

とりあえず【脱】の方の玉を色々見てみる。んー、正直言ってよくわかんないなあ…どういうアイテムなんだろ。

「このまま【脱】だけ相手に投げつけると服が脱げたりとか…ないなー」

他にも色々な文字の玉があるのかなー。

火とかさ、炎とかだったら攻撃アイテムっぽいよね。

「【脱】じゃねえ…って…え…ええっ！？ 何これ…【脱】が【炎】になってる、どう言う事？」

さっきまで【脱】って書いてた文字が【炎】に書き換わってた。これってもしかして…

私はその玉を持ちながら次は水を想像してみた……

「【水】になった…もしかしてこれって、想像した文字が玉の中に

はいる…のかな」

だとすると、これが実際使えるとするとかなりチートなのでは？

うーん、佐藤君って色々不思議な能力があるんだなあ…え？ 不審に思ったりとか、怖いとか思う事はないよ？

だって、使ってるの佐藤君だもん。それくらいできそうだしねえ…多分ペルソナの追加効果とかそんなのかもしれないし。

今の人となりを知ってる状態なら、凄いとかがチートk t k rとか思うけど、負の感情はないかなあ…でもみゆきさんやかがみ達には教えられない…ね。

「となると、これを知ってるのは私だけかな…ふふっ」

どーしよ、なんだか秘密を共有できたみたいですよっごい嬉しいんだけど。

このアイテムの効果がわかったって、バレたら嫌われるかなあ…でも、皆が知らない佐藤君を知ってるって…なんか嬉しいよ。

私ってもしかしくなくても…佐藤君の事…好きになったのかもしれないね。

「いやあ、惚れっぽい女だねい」
「なーんてなっ！ あっはっは

っはっは」

返信はーっと…こないなあ。流石に寝てるかなあ、今日は色々騒いだしね。

明日はどうせ暇だし、佐藤君の家に突撃となりの晩 飯でもかましてみようかしらっ！ アリスちゃん達とも遊びたいしねえ。

アリスちゃん…かあ。とりあえずこうなると強大なライバルだよな。見た目はロリっぽいけどかなり美人だし、ロリっぽさは私も同じだけど美貌という点では…負けてるな！。

私が有利な点って、どこだろ？

んー、オタク知識はマイナスだよな、貧乳はステータスだけど効果なさそう。強いてあげるといえば。

「佐藤君と同じ人間って所かな」

アリスちゃんは仲魔だけど人間じゃなくて悪魔だからね。人間とは同じ時間を歩んでられないはず。

そこにしか今の所付け入る隙はなさそうだなあ…とりあえずガンガン行くっきゃないよね。人間のライバルは今の所いないし、アリスちゃんが最強かな。

しかし、私がこんな事考えるようになるとはねえ…ほんの一ヶ月前まではオタク街道まっしぐらだったのに。

ま、こんな自分が嫌いかと言われたら、これもいいかなって思うけどね。

「とりあえずは明日かなー。となると善は急げとも言っし寝よ寝よっ！」

ねえ、お母さん。多分其処にいるよね？

なんだか色々大変な事になってきてるけどさ、一緒にがんばろ？

このまま大学いつてかがみ達の仕事を手伝って、色々遊んだりして。

佐藤君ともいい感じになって……いつまでも賑やかな日常がいいな。

こんなバイトをしてると日常ってのが凄く大事だと思えてくる、だから…

「明日もいい日でありますように、っとな。おやすみー」

最後にお母さんが微笑んだ気がしたよ。

Continue 41 崩壊への七日間・水曜日?? (後書き)

文珠封印の巻でした。

とはいえ今もっている文珠は使えますし、普通の文珠なら作れます。無尽蔵に作れると…ええ、コメントなどでも頂いたように、手がつけられなくなるからです…暫くは封印ですね。

出来るだけ無理のないようにしましたが、所詮浅知恵、どこか矛盾があるのは赦してあげてください。私にはこの辺が限界です(涙
意味深な事ばかり言ってますが、実はちゃんとこの辺は設定があったり。

一体佐藤君と横島君の関係は…ですね。

どうでもいいこと

今日はTRPGの日なので、頑張ってきますよー
それまではラグナロクオンラインでもしてきます！ アサシン起動
ですよっ！

多分井戸鯖で頭にひよこ乗っけてる漢字二文字の女アサシンは私です(えー

崑崙大好きっ！！

重要な選択肢(属性かルートかは内緒です(汗)

1：消してもいいような気がしてきました…

1：神の炎：0票

2：邪悪の念：8票

3：無心の心：83票

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：3票

かがみ：3票

つかさ：3票

みゆき：2票

ダッキ：3票

アリス：1票

覚醒時ステータス成長表

正直、体特化は消してもいい気がしてきました。

バランスVS速な感じですねえ…追いつけるかっ!!

力特化：6票

知魔特化：13票

体特化：1票

速特化：81票

運特化：3票

バランス：99票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効

となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

Continue 42 〈崩壊への七日間・木曜日〉(前書き)

重要？ COMPステータスの一番下にステータスについて。を追加しました、これからのご参考に、です。

木曜日午前のターンです。

木曜日は小出しにしてぼつぼつやる予定ですよー。

戦闘とかはないので、ある意味日常パートっばいです。

物凄く短いですが…少しでも楽しんでもらえると嬉しいです。

目が覚めた。

目覚めは特に爽快ともいえず普通と言った感じだ。すぐに身だしなみなどを全て整えて部屋に戻る。

両親は既にいらない…というか父親は帰ってきて居ないようだ。何をしてるのか…まあどうでもいい。

母親も母親で何処かに行っている様だ、彼らも明日に控えているのかもしれないな…やれやれだ。

とりあえず先ほど見た夢は夢であって夢ではないのだろう。

試しにいつものように文珠を作ろうとしたが、がくつと精神力が奪われていくのが分かる。やはり文珠作成の封印がされているらしい。後は僕が地道に強くなって行くかなさそうだな、文珠を沢山使いたいなら知力や魔力をメインで上げていかなくてはいけないかもしれない。

問題があるとすれば、僕自身は魔界魔法が使えないからMPは文珠とペルソナ程度にしか使えないと言う所か。

何にしても今日はクズノハと連絡を取ったり、武器防具を揃えたり忙しい日になりそうだ。

レイ・レイホウには昨日寝る前に連絡を取る事に成功した。今日の夜18時にとある場所で待ち合わせになっている。

それまでに装備などを整えたりする予定だ。

《何？ また出かけるの？ ゆっくりさせなさいよね？ お陰で遊べないじゃない》

「そうでもしないと僕が死ぬんだよ。悪いけど我慢してくれダツキ」

《仕方ないわねえ…今日の昼食と夕食を御揚げ三昧にするというなら、考えないでもないわよ？》

「狐って本当に揚げが好きなんだな…」

《当たり前よっ！ 人間って雑魚とかどうしようもないものばかりだけど油揚げを作る人間だけは評価してもいいわっ》

《なんて極端なんだろ…ダツキって》

『まあ、ダツキ様ですし…と、お早うございます我が主よ。昨日は魘されておりましたが夢見が悪かったのでしょうか…？』

心配そう…なのかは声色でしかわからないけどミトラスが僕を案じてくれている。

問題ないと告げて皆に文珠の事を伝えておいた。流石に驚いていた

ようだけど、覚醒の事を考えるとどうにか納得してくれたようだ。

モムノフは弱くなったはずなのに少し嬉しそうだった。やはり僕自身が強くなれるのが彼女の望む事なのだろう。

《ならさつさと強くならねえとな。文珠は強いがそれ以前にサマナーが強くならなきゃいけねえし》

《その通りだっ！早く強くなって我をモー・シヨボーから違つ悪魔にしてくれっ！ 具体的には魔王にっ！！》

《その姿も可愛いですわよお？》

《私は可愛いより威厳が欲しいのだっ！ ちくしょう…魔王なのに…魔王なのがいいい》

《がんばれ、ですよ》

《ほんの少しも誠意が伝わってこんのだが…》

「ははは…頑張るよ」

この数日は泉さん達と行動する事が多かったから仲魔とのんびり会話する事もなかったから、今の時間がとても楽しい。

最近は漸く彼女達ならば普通に話せるようになってきたけど、それでも気安く…とはいかないものだ。人間と悪魔では色々違うのかもしれないな。

泉さんとは結構気安く話せるようになってきたけど、それでもまだまだ目を見て話す事が出来ない。

まあ…その辺はおいおい改善していく事にしよう。さて、メールなどを調べてから出かけるか。

COMPからメールが来ているか見てみると、1件来ている様だ。

「夜中か…泉さんらしいな」

件名：やほーおつかれー

佐藤君まだ起きてるー？

私も今日は騒ぎすぎて疲れたよ。そっちも早めに休むんだじえ？
つてこの時間じゃもう寝てそうだけどねー。

そうそう、改めてだけど異界の件はありがとうね。

結局佐藤君が庇ってくれたの無駄にしちゃったけど嬉しかったZ E
なんとなーく男気を感じたよ。かっこいいねっ！ ひゅーひゅー

とまあ、本気でありがとね。

でも無理はダメだよー？ やばそうだったら逃げてもいいからね。

ととと、その辺の事はもう終わりで。明日また遊びにいくぜー
クズノハって所とコンタクトするんでしょ？ みゆきさんの事につ
いて相談するんだし私も参加したいな。

OKだったらメールか電話頂戴ねー。ではあぢゅー。あいしてるぜ
ー なんてなっ！

これまたなんとも独創的なメールだな。

顔文字までは自重してるのかもしれないけど、はっちゃけてる文章だなと思う。

ま、でもなんというか嬉しいな、そう思うよ。

それにしてもクズノハとコンタクトの時ついていきたい…か。どうするかな、特に問題はなさそうだけど。

《ん？ サマナーさんこなた誘うの？》

「どうしようかな。彼女も仲間だしコネを繋げさせるのもいいかもしれない。高良さんの事もかかっているしね」

『あちらの少女は呼ばないのですか我が主よ？』

「それも考えたけど…実際どうしていいかそこまでわからないんだ。会わせた方がいいのか、まずは情報だけ渡したほうがいいのか…クズノハが僕の知っているような組織ならば全力で守ってくれるんだろうけど、そこまで信用していいかもわからない」

レイ・レイホウは信用しても大丈夫だろう。デビルサマナーでのヒロインでもあるし、ね。

あの時は吃驚したけど、まさか女神転生でも有名なキャラクターに会えるとは思わなかったよ。

彼女なら高良さんの事を伝えても大丈夫だと思うけど、直接会わせるのは色々面倒かもしれない。

「とりあえず泉さんだけを呼ぶ事にしよう。多分他の3人は学校に行ってるかも知れないしね」

《そかー。ねえサマナーさんそろそろ召喚してー》

「分かった、ちょっと待ってて」

アリスとダツキを召喚する。アメリカやモムノフ、アメノウズメは基本用がなければ外に出たいと言わないので何もなければ通常はCOMPの中だ。

中が一体どのようになっているのか多少興味があるけど、アリス曰く存在がデータ化してるから実体とかそういうものはないといわれた。

狭いと言う感覚や広いと言う感覚はないらしい。どんな感じなのか興味が尽きないな。

二人を呼び出した後、電話を掛けてみる。流石に起きているだろう、でなければ学校かまだ寝ているか…かな。

「うん。それに合わせる様にしよう、あ、後泉さん達に渡したい物があるから小物入れでも持ってきて来てくれると嬉しい」

《?? はい、それじゃまた後でねっ》

電話を切り色々と用意を始める。

そういえば、こうやって他の人と外に買い物などに出るのは初めての気がする。つくづく僕はボツチだったのだなあと思ってしまうな。前世でもこうやって誰かと遊びに行く事は皆無だった、どれだけ奇められっこだったのかと。

一応成人はしていたけど、それでも付き合いも何もなくずーっと一人だった。ある意味奇跡なんじゃないだろうか。

流石に成人してからは無視されたりとかは無かったけどね…でも友達はおろか仕事場で親しい知り合いが出来ることもなかった。

嫌われては居なかったかもしれないけど、好かれていなかったのも確かだろう。

恐らく…というか確実に僕自身のせいでもあるんだけどね…他の人と話せなかったり、話題が無くて入り込めなかったりとダメ人間まっさかりだった。

今は目を合わせなければ普通…とは言いがたいけど話せるようになってきたし、先ほどの泉さんとの会話のように話しやすい人となら

それなりに話せるようになって来た。

少しずつ、ほんの少しずつ改善されてきたのだろつ。今ならもう少しまでもに話せると思う。

この後のレイ・レイハウとの会話などでも色々やらないといけない事が多いから、頑張らなければいけない。

『ふーん。行ってらっしゃい、私は遊んでるわここで』

「え…それは困るんだけど…流石に入ってこないと思うけど両親がきたら」

『その時は幻術でもかけるわよ。それとも何？ 私に命令する気？』

『ちょっと、ダツキそれ以上言うのは許さないよ…？』

『まあまあ、お二人とも落ち着いてください。我が主よ、ダツキ様ならば悪し様には致しませんでしょう。もし心配でしたら私も残りますので』

『ちょっと…それってあんまり信用無いつて事じゃないの』

まいったな…正直ダツキが暴れだしたらどうしようもない。

普通に戦っても恐らくオグンや雪之丞より強いんだから手の出しようもないし…やっぱり自分より強い悪魔は難しいな…

悪い悪魔じゃないと思うけど、どうしたのか。

『それに、何かしたら御揚げが食べられませんでしょうし、ダッキ様も其処は考えてらっしゃるでしょう』

『まあ…御揚げが来るのは分かっているしここで大人しくしててあげるわよ、他にもまだ何かある？』

「いや…それじゃゆっくりしててよ。出来る限りこの部屋から出ないでくれ、其処だけは留意してほしい」

『あー、はいはい。ゆっくり遊んできなさいよ』

「遊びに行くんじゃないんだけどね…まあ行くつか皆」

『はいいつ　あーあでもCOMPに戻らなくちゃかあ』

ガイア教やメシア教が動いている以上、これからはうかつに仲魔を外に出しておくわけには行かない。

エネミーソナーは奴らも持っている可能性は高いし、できるだけ慎重に動かなくちゃいけないからね。

問題はあの時のガイア教の奴らだな…ほぼ間違いなく顔を見られるし、下手すれば家も割れてそうだし…その辺りの話は勿論しておいたけど今は現状維持という話になった。

高良さんは彼女も家族も一般人だから、うかつに関われない所があ

Continue 42 〈崩壊への七日間・木曜日〉（後書き）

と言う訳で次回はこなたとデート？編です。

行く場所が武器屋とか防具屋とかCOMP屋と言う事を除けば、確かにデートと言えなくも無いかも…

木曜日はもう少し続きますよ〜。

そして考えた事…

名前までばれてるんだから家に襲撃されないのだった！？　と言う点ですな。

色々ありますが、メシア教とガイア教が牽制しあって動けないのがあげられます。

というかそういう事にしてあげてください…そうしないと家族皆殺しとか誘拐とかありそうなので…そちらを書くと言展開バンザイになります。

一応みゆきの方で個別に警備員を雇ったり、かがみんなの方で知り合いの能力者とかが護衛してくれている状態になってます。

うん…名前バレって怖いですよな。現実世界だと直ぐ特定できて襲えますし…

メシアも両親殺して拉致するのは流石に母体に良い影響がないと思っっているようですね。でも誘拐はOKらしい…ちくしょう過激派ど

もめ…面倒です、本当に面倒です。

感想返し、遅れてます…少し休んでから返信させていただきませうね
っ！

全部読んでますっ！ ありがとうございます。

どうでもいいこと

寝てませんっ！ 徹夜ですっ！（えー

寝ちゃうと起きれなさそうなので今書きました…誤字多そうだ…

あ、短いのは眠いからではなく、パート分けなのです

重要な選択肢（属性かルートかは内緒です（汗）

1…消してもいいような気がしてきました…

1：神の炎：0票

2：邪悪の念：10票

3：無心の心：92票

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお
答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：7票

かがみ：6票

つかさ：9票

みゆき：3票

ダッキ：7票

アリス：2票

覚醒時ステータス成長表

正直、体特化は消してもいい気がしてきました。

バランスVS速な感じですねえ…追いつけるかっ!!

力特化：6票

知魔特化：14票

体特化：1票

速特化：86票

運特化：4票

バランス：110票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

日常パートその2っ！ と言っかイベントです。
こなたの信頼度が4になったのでリーチイベントですねー。

このまま行けば素直にこなたがヒロインになりそうです。どうなる
事やら…
それにしても書きやすいです…こなた視点。

重要な選択肢について【重要】

一人一票だったのですが、本人が素で忘れてましたっ！（えー
も、申し訳ありません。

とりあえず、あまりの票差もありますし。『無心』のルートに確定
しました。

これからはこの選択肢を基点にお話を進めていく事になります。
ふ…一番大変な話になりそうです…だれか私に表現力と構想力を下
さいです。

感想返しについて

いまだに返信できなくて申し訳ありませんっ！

でもでも全部読ませてもらってますよー、今日はお昼に外食にでる
ので、その間に色々やらなくてはいいのです…夜に頑張っ返信す
るですよっ！

Continue 3 ～崩壊への七日間・木曜日～

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

特別イベントが発生しました 対象：泉こなた

信頼度4（恋愛フラグ）イベント

ヒロイン確定まで…『信頼度：5』 『MAX時選択肢有り』  
が必要

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

Ready.....
Ready.....
Ready.....
Ready.....
Ready.....
Ready.....

特別イベント』彼女の想い彼女の願い彼女の希望』

Start.....

- 泉こなた視点 -

そこで佐藤君は待ってた。

いやあ…私とした事が着て行く服なんて悠長に選んでたら少し遅れちゃったよ。

まさか私が外行きの服にここまで悩む事になるなんてねえ…最終的には可もなく不可もなくな服装になったし。

彼はぼけーっとしながら携帯を、というかCOMPを弄ってた。

「はるろー、遅れてごめんねー」

「あ、いやいいよ。時間はまだあるし」

「おおっ！ 優しさフラグが立ちそうだよっ！」

「朝から元気だね泉さんは」

「そかなー。あははは、それがとりえみたいなものだしね。それで今日はどこから回るのかな？」

回る場所が例え武器屋とか防具屋とかでもこれって十分デートだね。

すこーしドキドキしてるのは内緒ね。

佐藤君の事を意識して以来、私どんどん乙女化してないかね。かがみの事からかえそうにないや。

《やっほーこなたっ》

「あ、アリスちゃんおっはー。今日は宜しくね〜」

《私もほんとは一緒に外に出たいのになあ…こっいつ時は少し人間がづらやましいと思うわ》

「ふっふっふ。人間のいい所ですからっ」

「とりあえず、武器屋から行くか」

「ん、OKOK。何買い換える予定なのかな？」

「とりあえずは銃かな。ミトラスは強いけど牽制用も必要だし、二丁拳銃用にもう一つ用意するのもいいかなってね」

「二丁拳銃かあ。私はスナイパータイプだから特に其処まで考えた事がないなあ。」

「接近戦はナイフを使うしね。小型のナイフは結構取り回しが楽でいいんだよ。特に私みたいな小柄なタイプはスピードもあймаってナイフは有利だしね。」

「ゲームもマロン…じゃなくてロマンとも言えるちっこい体型に巨大な斧とか剣は憧れないでもないけど、実際にあんな事できませんよ、うんうん。」

「私はWIZという盗賊と忍者の中間だしねえ。」

「ガーディアンのお陰でちょこつと強くなれたし、前衛も後衛もなんでもござれって所さ」

「そかそか、私も興味あるし早速行ってみよう」

「そつだね、行くかうか」

ここで恋人同士なら腕とか組んじやったりして…うー、流石にまだ其処まで勇気が出ないな。

でもいつかはそうしたいよねやっぱりさ。

とりあえず今は横に一緒に歩いていくだけで満足としておこう。

「そういえば」

「ほえ？」

「そういえば明日は卒業式だね」

「そうだねえ。高校生活もこれで明日で最後かあ、といいつつも自主登校になった瞬間に遊んでいた私だけだね」

「泉さんはそのへん真面目そうだから学校に行くと思ったけどね」

「たははは。勉強は大学生になったらその辺でどうにかするよー。みさきちも居るし。あ、みさきちって言うのはね…」

学校か…私も本当は最後まで学校行く予定だったんだけどね。

できれば友達と…かがみん達と最後の時まで一緒に居たかったし、皆との時間が楽しかったからねえ。

私が学校行かないで異界に行ったり遊びに行ってたのは、単純に君

の事を意識していたからなのだよ。

とか言っても自覚したのはつい最近なんだけどね。

「成程、僕は大学に行かないから分からないけど、楽しいといいね」

「佐藤君頭良さそうだし、受ければよかったのに」

《えー、そしたらサマナーさんと遊ぶ時間なくなるしっ！》

《おいおい…まあ、異界に行く時間は減るわな確かに》

「大学ね、まあ興味が無いとは言わないけど、僕にも色々あるからさ」

「そか。まあこれからもアルバイトとかで一緒になるんだし、大して変わらないよね」

「そうだね」

佐藤君は人が苦手だ。

苛められてた弊害か人と話す時に凄く緊張してるのが分かる。時々会話が途切れるのは言葉を選んでるせいだと思うし、此方を見てないのは他人が怖いから…かな。

前は威圧的な会話だったし、多分人間ってのをあんまり好きじゃないのかもしれない。

その分仲魔とかに見せる表情や軽い口調が凄く印象的だ。

もし佐藤君がイケメンだったらその寡黙さも相まってモテモテだったりするのかもしれないな！。

でも残念な事に佐藤君は顔が良くないけどね。私は其処まで顔に拘らないし結構愛嬌のある顔だと思ってるけど、やっぱり普通は格好いい人が好きなのかな！。

私としてはラッキーだよ。そこまでライバルが居ないって事だから。アリスちゃんと言う究極のライバルがいるけどさ。

「暖かくなってきたねえ、春もそろそろ近づいてきたかな！。直ぐに夏になって色々忙しくなるかもねっ」

「暑いのは好きじゃないな…引き籠っていたい。クーラーは人間の利器だよ」

「おおぅ…私と似たような事考えてる。どうだい？ 今からオタクに転向とかっ！」

「コミケとかは地獄らしいから遠慮するよ」

「おおぅ…折角の同志が。楽しいよー？」

《《コミケって何？ こなた？》》

「うんうん。教えてしんぜよう、コミケってのはね…」

歩きながら適当な会話をしつつ歩いていく。

身長的には男子である佐藤君は小柄なほうだけど、私よりは大きい。でも歩くスピードは私と変わらない。もしかして合わせてくれるのかな、そうだったら何となく嬉しいかも。

ぽかぽかと良い陽気に良い天気、絶好のデート日和と言う奴なのかもね。

まさか私がこんな風に出歩くななんて想像もできなかったよ。

「免許とって車買うべきかな…移動が面倒だ」

「お、佐藤君も取る予定なんだ？」

「まあね。どちらかと言うとバイクの方が欲しいけど、どちらを先にとるべきか…お金はあるけど無駄遣いは出来ないからねこれからの事を考えると」

「結構稼げてるみたいだし、佐藤君ならマグネタイトや魔貨で儲けてない？」

「卒業したら一人暮らしするからさ。色々必要なんだ、良さそうなアパートは見つけたから卒業と同時に出て行こうと思ってる」

「おおっ！ 憧れの一人暮らしですなっ！ 家教えて〜？」

「教えたら直ぐ乗り込んできそうだ…お土産があるならいいよ？」

「おぶす…流石にすっかりなさってらっしゃる」

出来るだけ明るく会話してるけど、佐藤君は両親と仲がよくないのは知ってる。

佐藤君をダークサマナーだと疑ってた頃に色々調べたし、実際遊びに行った時にも何となくそういう感じがしてるなーってのが分かってた。

でも、そういうのは口出しし難いから、出来る限り触らないでおくのがベターかなって思ってたけどね。

佐藤君の人間不信っぽさは両親のせいもあるんだろうな。

私はお父さんがちゃんと愛して育ててくれた。そりゃ確かに行き過ぎた愛情な時を感じるし、オタクだし犯罪予備軍っぽいけどちゃんと尊敬してる。

お母さんはガーディアンとして会ったのが初めてだけど、お父さんのように私を愛してくれてたのがよくわかった。

私は満たされて生きてきたんだなって思う。

でも佐藤君はそういう愛情も…友情もなかったんだよね。同情なんでするべきじゃないのは分かってるけど、辛いよ。

もし私自身そんな人生送ってきたら…自殺してるかもしれないもん。彼は強いと思うよ。

強くなってもそれを振り翳さないしね。

「ふう、漸く見えてきた」

「武器屋〜武器屋〜。破邪の剣は買い取ってくれませんか？」

「ドラク？か…3章は確かに大好きだったなあ」

「各キャラで唯一単独ゲームになるほどのキャラだったしねえ。実は強いし」

「レベルが上がるの早いし、種をメインで使つてあげると1章の戦士よりHPが高くて防御も高い。更には攻撃力もそこそこある万能キャラになるしね」

「おー、よくわかつてるね佐藤君っ！ 私もやったよっ！」

「最終章でメタルな液状生命体から最強防具をよく掠め取ってくれたり、会心で止めを刺してくれる良キャラだと思う」

そんな事を話しながら武器屋に到着。

表向きは普通のミリタリーショップだけど、裏は本気で銃などを売ってる武器屋さんだったりする。

流石に表には本物は置けないから裏に回るんだけどね。とはいえ表のお客さんは閑古鳥が鳴いてるらしいよ、専門店には勝てないからねえ。

「この武器屋はよく利用させてもらってるよ、銃弾とか私よく使し、このナイフは凄く使いやすいの置いてるから。」

時々掘り出し物があつたりするのがコツを掴んでる感じだと思う。

ちなみに店主の事を私はおっちゃんと呼んでます。いやあ、なかなか良い人でねおまけしてくれたりとかするんだよねえ。

「いらつしやい」

「はい。銃と弾丸をお願いします」

「あ、私はナイフも追加でー」

普通に高校生が言うセリフじゃないよなーと武器屋とかに来る度思う私。

佐藤君は色々銃を矯めつ眇めつしながら真剣に銃を選んでる。と言う事で私もいいナイフを探そうかねえ。

「ねねっ、おっちゃんおっちゃん。今日はいいナイフの掘り出し物ないの？」

「嬢ちゃんは本当にそっち方面は目ざといなあ。ちょっと待つてな良いの手に入ったんだよ」

そう言うって取り出したのは見た事も無いナイフ。取っ手の部分が少しづつとしてるけど、これのどこら辺がいい武器なのかな？

「軍からの横流し品なんだが、高周波ナイフって奴でな。刀身が振動で高速でぶれる事で切れ味を凶悪に高めてるもんだ。威力は申し分ないぜ？」

「おおぅ、近代兵器k t k rっ！ 実際に作るところなってるのかあ…ちなみに振動させるためのエネルギーってやっぱり電力？」

「高周波ナイフか…力が無くても扱えそうだね。手が痺れそうだけど」

「出来るだけ軽くしてるバッテリーで大体1時間は持つ。バッテリー自体は安いしあんまり嵩張らないのが利点だな」

「何となく玩具の域を出ないような…壊れやすそうだね」

「まあな。命を預けるには軽すぎる武器だが、攻撃力だけ見ればその辺のナイフよりはよっぽど上だよ。どうする？ 今ならバッテリー110個つけて30万で譲るけど」

「30万かあ…うーん」

攻撃力は確かに魅力的だけど…30万はちょっと高いなあ。

普通に使ってるナイフが10〜15万円くらいだから、ほぼ2倍だしね。壊れる点とバッテリーがある事を考えると…でもあると緊急時に…

とかうんうん唸っていると佐藤君がナイフを見てた。

「30万でいいなら買います」

「おっ、毎度っ」

「おおっ、佐藤君買ったんだ？」

「あ、うん」

微妙に言葉を濁してる佐藤君。はて？

直ぐに現金でお金を手渡してナイフを入れた袋を貰うと、スッと差し出してきた。

「え…えっ…？」

「まあ、これくらいはさせて欲しい。と、特に意味は無いよ、オグンとの戦いの時泉さんが居なければ全滅してたから、その時の礼と言っ事で」

「あ……ありがとう……くししっ　もしかして佐藤君私に惚れたかにゃ〜」

「いや、それはない」

「おう、ズッシリ来るブローだぜ……」

一瞬完全に呆けちゃったよ。

これってさ、プ…プレゼントだね、武器って所で色気は無いけどさ、命を守るって点ではこれ以上ない贈り物だと思う。

つつい誤魔化す為に茶化しちゃったけど、どうしよ…凄く嬉しいよ。

「ふっふっふ。これでニュー新生ごなたんが登場だよ。ありがとうね佐藤君っ」

「……ああ……うん」

実は彼自身も凄く恥ずかしかったらしい。こっちを見れないのか銃を一生懸命見てるよ。

やあやあ…何かねこの初心なカップルはっ！　砂糖吐きそうだよっ！　って顔でおっちゃんが見てやがります。

はっはっは。羨ましいだろう。　って私が言うのは何か違うか。

後は暫く佐藤君の銃選びを手伝う事にしたよ。銃に関しては私に一日の長があるしね。

およそ1時間くらいかな、良さそうな銃2丁と弾丸を選び終わって武器屋での買い物は終わったよ。

そろそろ時間もいい感じなので、防具屋に行く前に軽く食事を取る事になりましたっ！

……

……

…

「うんっ。この味が良いよねえ」

「僕はそれよりもこっちのナゲットのほうが好みかもしれない」

近場のファーストフード店で軽い食事を取ってる私達。

こついう場所はやっぱり便利だよねえ。平日の日中と言う事もあってか人はあんまり居ないし良い感じだよ。

「後回る場所は二軒だったっけ？」

「そうだね。そろそろCOMPの方も良いソフトが欲しいし。魔貨も集まってきたから買い時だと思う」

「私も選ぶのかなー。なにか良いソフトとかある？」

「そうだね……」

COMPの会話とかしてるけど大丈夫か？　とお思いの人、安心してね。

実はここも裏関連の店だったりするんだよね。主に回復剤とかそういうの取り扱ったりとかするよ。

それ以前に周りに誰も居ないんだけどね。良い時間に来れたよ、うんうん。

「そうだ…小物入れは持ってきてる？」

「あ、うん。持ってきてるよ」

小物入れを持ってきて欲しいって言われたから持ってきたけど、何かもらえるのかなあ。

私としてはさっきもらったナイフでお腹一杯だけだね

私が小物入れを取り出すと佐藤君はいつも使っている、あの魔法の

カードをかなりの枚数とりだした。

おおぅ…あの魔法石より便利なカードですか、もしかしてもらってもいいのかなあ。佐藤君って秘密主義だったからこういうのは譲る所か売ってもらえないと思ってたけど。

「これを泉さん達に渡そうと思ってね。マジックカードっていう特殊なカードだ」

「凄く便利だね、魔法とか」

「うん。僕も重宝してるよ、色々攻撃魔法や支援魔法、回復魔法のカードを用意してあるから4人で分けてくれないか？」

「本当にいいの？ 秘密にしておきたかったんじゃない？」

「この先、ああいう奴らに出会った時に必要だろうし秘密を守ってくれるなら問題ないよ」

「あ、うん。そこは任せてよっ。絶対言わないから」

信用…してもらってるんだよね。

その信用を裏切らないようにしないとねっ！ 私はカードの説明を受けてからまとめて小物入れに収納していく。

しかし、ジオダインとかディアラマとかマハ・ラギオンとか凶悪な魔法ばかり揃ってるなあ。

一体佐藤君ってこのカードどこから用意してるんだろう。

「不思議かい？ やっぱりこのカードの事」

「あ、あははは。少し」

「泉さんなら他の人には言い触らさないだろうし、後で教えてあげるよ。ただ絶対に秘密にして欲しい、ばれたら色々厄介だからね」

「う、うんっ」

泉さんなら…かぁ…えへへ。

どうしよ、思わずにやけそうになっちゃっよ。

任せてよっ、私の口の堅さは折り紙つきだからねっ、絶対にばらさないさっ！

さーて、後は談笑しながらのんびりしようかな。

「〜でかがみんがさあ〜」

「ははっ…そりゃ大変だ」

まだまだ続くこのデート。

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
人よ死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死
人の子よ死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死
死死死死死死死死死死
汝が進む道は血塗られている死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死
汝が進む先は呪われている死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
汝が思うままに生きよ死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死
汝が思うままに動け死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死

Continue 43 〈崩壊への七日間・木曜日?〉（後書き）

と言う訳でデート前半、こなた視点をお送りいたしました。

やはり彼女も普通の少女、ちょっとした事に一喜一憂しているようです。

でも日常が終わりを告げる事を知ったら…どうなるでしょうか。

信頼度が3だったら、もう少し冷静に動いていたかもですねー。

コミュ…このままこなただとこなたルートに入りそうです。

ハーレムとかは出来ませんねえ。ヒロインは一人だからヒロインかと思うですよ女神転生の場合。

まあ、仲魔の方はどうだっ!? と言われると色々困るですが。

世界が崩壊したら…そうでもないかもしれない…うーん、色々悩みます。

どうでもいいこと

そつえばHPの方の小説書いてません…あちらはスランプなのですよ…

頑張らないと頑張らないと…えうう…

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：10票

かがみ：9票

つかさ：12票

みゆき：4票

ダッキ：11票

アリス：2票

覚醒時ステータス成長表

正直、体特化は消してもいい気がしてきました。

バランスVS速な感じですねえ…追いつけるかっ!!

力特化：6票

知魔特化：15票

体特化：1票

速特化：91票

運特化：4票

バランス：118票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

ついったーで読了宣言！

Continue 4 く崩壊への七日間・木曜日? (前書き)

と言うわけでデート編 佐藤君パートです。

のんびりしているように見える佐藤君ですが、ひそかに色々準備は整えているようです。

と言う訳でどうぞですっ！

感想返しについて

昨日…というか今日の午前0時ごろに9割ほど返信させてもらいました！

色々ありがとうございます。

Continue44 崩壊への七日間・木曜日??

~~~~~  
~~~~~

特別イベント継続中

~~~~~  
~~~~~

Ready
Ready
Ready

Ready……
Ready……
Ready……

特別イベント『彼女の想い彼女の願い彼女の希望』 - 後編 -
NEXT Start……

漸く第一関門クリアと言った所かな。

マジックカードの束を泉さんに手渡してほつとしている。これから色々大変な事になるだろうからこれでも危険な事には変わりはない。

現在確実にメシア教とガイア教が僕達……というか彼女達を狙っている可能性がある以上、最低限の事はしておかなければいけないだろう。

とはいえ、個人が組織の人間にどうにかできるほどこの世界は甘くはない。というかそういうのはゲームや小説だけの話で実際に物量で押されたら勝てるはずもなく……

恐らく今現在も彼女達が無事なのは何か別の力が働いているか、お互いに牽制しあっているかだろう。

現実、表立って行動できるほど彼らは其処まで認知されていないし、日本でそんな事をしてしまえば本格的に警察などが動き出す。

彼らにとって警察は敵にはなりはしないだろうが、問題はマスコミや一般市民だろう。

それらが動くとき彼らにとっても動きにくくなる。この世界で一番強い勢力といえは…恐らく何も知らない一般市民の集まりなんだと思うから。

ガイア教は高良さんの事を聖女候補と言っていた。つまり高良さんはメシアを作る母体の候補なのだろう。

ガイア教が聖母候補を欲しがるとは思えない、恐らくは拉致して聖母としての力を削ぐか監禁するつもりだったのだろうと僕は思っている。

その彼らが言っていた事…『メシア教に襲われていた』という言葉から、あの場にはメシア教もいたのだろう。事態はますます深刻化しているな。

だからと言って僕がなにか出来るはずもない、勇者や超人じゃないんだから『今から組織を潰してくる』なんて口が裂けても言えないし出来もしない。

僕に出来るのは、彼女達にマジックカードなどを渡したり、これから会うクズノハに助けを求めるくらいだ。

本当に…女神転生の世界に近いんだからザ・ヒーローでも出てきて助けてくれないのだろうか。やれやれだ。

「色々な防具があるなあ…どれがいいのかさっぱりだよ」

「防具は一長一短だよねえ、特に鎧部分が。耐性と弱点がほぼ同時についてるし」

現在は防具屋に来ている。

実際の所、今の防具は一番最適だと思っているがこれよりもいいのがあれば取り替えておくのが一番だ。

「おつ、G-ラダーズだ。うーんでもなあ今装備してる方が格闘威力上がるし…とはいえムド系無効は強いし…即死怖いねっ！」

「僕は今装備してるけどね、とはいえ相性はペルソナで変更されるから防御力くらいしか意味ないんだけど」

「装備も相性もペルソナのほうが優先なんだ。楽かもしれないけど大変そうだねえ」

「まあね。強い奴ほど相性がデタラメな時があるから大変だよ」

特にヘルがそのデタラメな相性の持ち主だろう。

物理攻撃系が全部弱点なのはある意味きつすぎる。装備などで相性変更出来ないのが尚更だ。

相手が魔法系ならばこれほど優秀なペルソナもないけどね、ほぼ

耐性もってるし。

バクヤは前回もそうだったけど物理と銃弾が無効化されるのが強い。でも関節系には耐性しか持っていないので其処だけ注意が必要だけども。

見た所防具はそこまで新調する必要がなさそうだな。

「おおつ。無駄にでかいパワードスーツハケン！ うわっ…これさどつやって持ち運ぶの？」

「もの見事にパワードスーツだねこれは…値段は……2億って、誰が買うんだろうこれ」

「軍事組織とかデビルバスターじゃない？ 政府からお金でてるし」

「これ一着の為に国民の税金が消えるのは泣けるんだけど」

「ですよー」

女神転生の代名詞？？ とも言えるパワードスーツまで売りに出されていた。

どうやって作っているのかはわからないけど、これが出てきたと言う事は世界がもうそろそろやばいと言う事に他ならないんだろつな。

地下シエルターを探しておく段階なのかもしれない、レイ・レイホウにその辺の事も聞き出しておこうと思う。

万が一世界が崩壊した場合の後についてだけど、実は既にほぼ準備は整えてあったりする。

食料や水、色々な雑貨、発電機や冷蔵庫などの近代家具など、靴や服、防寒着、毛布などは既に取り揃えてある。

文珠がほぼ無制限で使えたのと、マジックカードが物を収納できる事、家をそろそろ追い出されるかもしれない事を考えて、隠れて色々やっておいた。

米やカップ麺などは既に大量購入してカードに収納してあるので、大事に使えば1年は持つだろう。

いっぺんに大量購入すると怪しまれるので色々回りながらだけど、それでもどうにか10人は楽に1年〜頑張って2年は生きていけるだけの食料はそろえている。

次に野菜などの種などもまとめて一つのカードに収納済みだ。世界が滅んだとしても土が生きていれば野菜は育つし、これがあれば食糧難にはならないはずだろう。

やっかいだったのは水だろうか。物質なら何でも収納できるのでそのままカードに収納してみたが、それがまずかった。

発動すると水が駄々漏れになって辺りが水浸しになったのは参ったよ。

今はポリタンクなどを購入してそれに水を収納した後にカードにしている。水自体は家から拝借させてもらった。

後でどんな請求がこようが知った事ではない、どうせ明日には出て行くので最後に色々と利用させてもらおう予定だ。

ミネラルウォーターや牛乳、各種ジュースなどもケース購入してはカード化しているので備蓄に関しては問題ないだろう。

カードに収納している間は時が止まっているようなので、腐る心配は一切ない。

まあ…水などにかぎっては最終手段で文珠に頼る手もあるので、そこまで集めなくても問題ないが、カードは毎日沢山作れるのだから色々利用している。

ちなみに現代っ子でもあるのでゲームや漫画とかも収納済みだ。もし泉さんにアイテム収納の事を教えたら、目が光りそうな気がする…

情報なども武器やこれから生きていく上での武器になる。

様々な情報などをネットから引き出しUSBメモリーやメモリーカードなどに収納していたりする、文珠を使って【暗記】とかやってみただけ効果が切れたらほぼ全て霧散した。

発電機とパソコンは収納しているので最悪でもパソコンがCOMPで情報は調べられる。

集めた情報は、畑の作り方や家畜の育成方法。簡単な家の作り方や真水の生成方法、肥料の作成と効果的な扱い方。鉄の生成方法など様々だ。

やりすぎな気がしないでもないが、やりすぎじゃないだろう。あつて困る事じゃないしね。

「特に必要なものはない、か」

「それじゃ次はCOMP屋だねえ」

「サマナーさんっ。COMP内部が爽快になりそうなソフト買ってー」

《買ってくださいますし》

「内部がどうなってるのかよくわからないし、あるのか分からないけど聞いてみるよ」

「あー、私は佐藤君のみたいに会話できるシステムにしてもらおうかなあ」

「そつえば出来ないみたいだね。使うモバイルとかで変わるのかな」

「かもねえ」

談笑などを交えながら買い物するのは初めてだ、初めは少し緊張していたけど泉さんはその辺話しやすかったりするから直ぐに慣れた。

今は結構普通に話せているんじゃないかと思う。僕も少しは進歩し

てきているのだろうか？ コミュ障も落ち着いてきているし万々歳と言った感じかな。

防具屋で不必要なアイテムを売りさばいたので次はCOMP屋に向かう事にした。

こうやって普通に話しながら歩くのも中々いいかもしれないが、これからの事を考えるとやはりバイクか車が欲しい所だ。

世界が崩壊するもしないも、どちらにしても足はあったほうが便利だしね。

「車とかは流石に高いからなあ…」

「だねえ。高いと数百万軽く吹き飛ばし私達みたいな仕事してても暫くは早々買えるものじゃないよー」

「車税やガソリン代を考えると頭痛くなってくるし…うーん」

「あ、でも買ったら乗せてねっ」

「コミケにはいかないよ？」

「はっはっは。とらの なんかならOKかなっ!？」

「その時によるね…」

「くっ、流石に手ごわいなっ！ 流石佐藤君ばねえ…」

「ははっ、食べ物で転びそうかもね」

「何気に食べ物できたかぁ…手作りとかはどうかねお客さんっ！」

「ふむ…美味しければかな？」

「ほっほーう。佐藤君、君は今私に勝負を挑んだっ！ みていたまへ、ぎゃふんと言わせて見せようぞっ！」

…いつの間にか手作り料理の話になってしまった。

これは、何とか期待してもいいのだろうか…？ 鈍感な主人公じゃあるまいし相手の好意くらいはその仕草等で気づくものだ。

どうやら泉さんは僕に好意を寄せてくれているらしい。かといってそういう体験などした事も無いので、それがどこまでなのかも分からないのは悩み所だ。

僕としても泉さんは一緒に居て楽しい人だと思うし、もし好かれていたのなら…嬉しいと思う。

僕は見た目がよくない。ブサイクまでは行かないが鼻屑目に見ても良い男じゃないし、見た目でモテた事は無いだろう。泉さんはブサメン好きじゃなさそうだし。

となると…どうしてここまで仲良くなれたのかはよくわからない、まあ今更考える事じゃないのでこれからの事を考えよう。

どちらにしろ今はそっち方面に現を抜かしている場合じゃないし、

現在は進行形でいいかもしれない。僕もどうしていいかわからないしね。

「むむむっ、あまり信用してない顔ですね、ですね、ですねですね？」

「な、何かの真似かな？」

「某歌の真似ねー。昔人気あつたし」

「その辺の歌よく覚えてるね。僕は流石に忘れてたよ」

「はっはっは。ネタには困らないよ。と、逃がさんぞっ！ ふっふっふ。私の手作り 料理を食べて悶絶するがよいわっ！」

「それはまずいんじゃない？」

「おうちっ」

《料理…料理かあ…私も覚えるべきかな…》

《ピクシーさん、其処はちゃんと媚薬も入れるべきですわあ》

「《入れないよ普通》」

僕とアリスのダブル突っ込みが発動する。

アメノウズメはどうしてこうもそっち方面に話を持って行きたがる

のか…君はもう夜魔、というか淫魔じゃないはずなんだが…そもそも性格、なんだろうなあ。

後泉さん、『その手があったかつ！』みたいな表情はやめてほしい、本気でやりそうで怖いよ。

とまあ、賑やかに談笑している内にCOMP屋に到着した。

ここは表向きネットカフェを経営しているので騒ぐのは厳禁だ。一定の個室を店員に伝える事でCOMP屋としての顔を見せてくれる。

ここに来るのはまだ2度目だが、ここはいつも盛況だと思う。

「一昔前にはネットカフェ難民とかも流行ったよねえ。この辺りには居なかったけど」

「ホームレスとかだっけ…日々の暮らしすら困難になるのは辛いね」

「だよねえ。仕事したくても出来ない、つまり働けない、お金ない、家に住めない、浮浪者って辛いよね」

「その辺は生活保護とかもあるんだろうけど、それじゃ足りないのも確かか…」

世界崩壊後だとそういう人はたくましく生きるか真っ先に殺されそうだな。

かといってだから助けるとは言わないけど。

正直知り合い以外がどうなるうが知った事ではないし、自分一人でなんでもできるなんて思っていない。

そもそも現在でも彼女達がピンチで何もできないと言つのに他の無関係な人を助けるなんて無謀な真似は出来ないし、しようとも思わないが。

店員の案内で普通の部屋とは隔絶されている部屋に招かれる僕達。

奥のドアには【関係者以外立ち入り禁止】のマークが張られている、この奥がこの店の裏の顔COMPソフト販売店となっているんだ。

必要なソフトなどは基本現金か魔貨のどちらでも買える様になっている。

他の場所は基本現金だけなので、魔貨を現金に換金しなければならぬが、ここは元々魔貨も集めているようでもどちらでも買える様になっているのだ。

奥にはこちら専用の店員が僕達の相手をしてくれる。

「いらっしやいませ。本日はどのような御用向きで？」

「んー、最新のソフトとか見せてくれませんか？ 後はCOMPから仲魔の声が聞こえるように出来ませんか？」

「少々お待ちを」

そう言って引っ込む店員。

小さい一室なので基本的にソフトなどのお品書きが用意されているが、最新のソフトや修理などは頼まないとやってくれないし、持ってきてくれない。

僕も初めてここに来た時は色々大変だった…特に店員と会話するのが一番大変だった。

泉さんや妹さんのように普通に話せるようになりたいものだ。

「もう少し部屋を大きくしてもいい気がするけどねえ」

「店側の都合なんじゃないのかな？ 表向きは人気のネットカフェだしね」

「うーん。こっちも本業なんだから拡張すべきだよ拡張っ！」

「その辺は僕にはどうしようもないなあ」

「んまあ…別にこれはこれでいいけどねえ」

《むむむっ…》

《青春です、青春ですな》

《羨ましいですわあ〜》

喧々譁々。実際に居るのは僕と泉さんだけなんだがCOMPから聞こえてくる皆の声も聞こえてくるので良い感じに賑やかだ。

こういう日常っぽい会話は気が休まっていと思う。内容の方向はスルーだ。

「お待たせしました。こちらが最近出たばかりのソフトになります。後COMPの仲魔との会話ですが1時間ほどお時間をいただければ改造できますね。御代はこちらに……」

「おー、結構安いね。それじゃお願いしやーす。あ、魔貨の方でいいんでー」

「毎度ありがとうございます、それはお預かりさせて頂きますね」

「はーいっとな」

COMPを手渡すともう一人の店員が預かって奥に入っていく。

さて、それよりもこれが新しいソフトか…色々あるな。

【数字は魔貨。現金の場合は数字×300円】

2000 改造ハーモナイザー

自分と選んだ対象3人にハーモナイザーを起動する。マグネタイ
ト消費は4倍になる。

3000 ナースコール

召喚時、仲魔のHPとMPを20%回復する。一度起動すると6

時間のクールタイムが必要。

3000 ゲートサーチ

自分のレベル+5のランクまでの異界をサーチする事が出来るようになる。

3000 エネミーサーチ

アナライズが完成している悪魔を選んで探せるようになる。

5000 HPリカバースII

一定時間ごとにCOMP所持者のHPが中回復する。

8000 HPリカバームII

一定時間ごとにCOMP所持者と仲魔のHPが中回復する。

4000 MPリカバースI

一定時間ごとにCOMP所持者のMPが小回復する。

1500 シュセンドー

悪魔が持っているマグネタイトが多く確保できるようになる。

5000 DDR

悪魔合体をCOMPで行えるようになる。但し事故率が高い。

2000 アルバート

DDRの合体事故率を下げる事ができる。

2000 シュタイナー

COMPで精霊、御霊合体が行えるようになる。

2000 ダ・ヴィンチ

COMPで造魔合体、強化が行えるようになる。

2000 ヘラクレス

合体時、一定確率で力に追加で+1

2000 オルフエウス

合体時、一定確率で知魔に追加で+1

2000 オライオン

合体時、一定確率で体に追加で+1

2000 アキレス

合体時、一定確率で速に追加で+1

2000 テセウス

合体時、一定確率で運に追加で+1

「うわっ…凄いあるねえ」

「確かに、色とりどりだね。ゲートサーチとHPMPリカバーが欲しいかな僕は」

「私もかな、悪魔合体が出来るっていうけど。邪教の館と何が違うのかな？」

「多分、其処まで行くのが面倒、とか近場に邪教が無い人が合体させたい時に使うんじゃないかな」

《へえ…便利じゃねえか。サマナーいつちよ買ってみたいなか？》

《我也押すぞっ！ いい加減にこの姿を脱却したいっ！》

《邪教のおじいさん結構好きなんだけどなあ…あ、私は合体しないからねサマナーさんっ。折角人っぽいしティターニア様は諦めるよ》

「どっちにしても暫くアリスはどうしようもないけどね。レベル高すぎるし」

「そういえば30台なんだもんねえ、アリスちゃん」

僕が使える魔貨は今32500。ゲートサーチとHPリカバリーM IとMPリカバリーSIだけで15000程か。

特に魔貨が入用って訳じゃないし、散財するのもありだろう。悪魔合体は：モムノフの言う通り便利かも知れないな。

問題はカード合体が出来ないから、レベルの高い悪魔と合体させると意思が飲み込まれる点だろう、其処は注意しないと。

となると20000魔貨かかる訳だ。アルバートが必要だし、シュタイナーとダ・ヴィンチはアリスとアメリカに必要だろう。

後6500魔貨しか残らないから：シュセンドーを購入してヘラクレスとオルフェウスを購入だな。

丁度1000魔貨集まるし、必要になったらまた買ってくればいいしこれで大丈夫と言う事にしておこう。

泉さんのほうでも色々悩んでるっぽいな。どれもこれもあつて困ることのないソフトばかりだし、目移りするのも仕方ないだろう。

容量の問題はマイクロSDカードであっさりクリアできているので全部設置可能だ。スマートフォンが便利だという一面が垣間見れた。

「うーん、足りない分は現金から出すかなあ」

「僕の方は丁度1000魔貨残ったよ。足りなければ貸すけど?」

「おおっ、持つべきものは親友っ！ ありがとうー。丁度1000足

りなかつたんだよ」

暫く泉さんと色々談笑しながらここでの時間を潰す事にした。

この後はレイ・レイハウとのコンタクトだ…果たしてどうなるか、出来る限り僕達に都合の良い方に持っていきたいけど、相手は熟練者…僕のような素人がどこまでいけるか…だな。

どちらにしてもこれで問題が一つ片付くと思えば気が楽だ、今はまだこののんびりとした時間を満喫させてもらおう事にしよう。

……

……

…

COMPステータス更新……………

NEXT……………error!! error!! err

Or!!

NEXT……………??????

Continue 4 崩壊への七日間・木曜日? (後書き)

こなたからの好意をちゃんと認識できている佐藤君。

でも、いままでの事やこれからの事を考えると、今すぐ答えるわけにはいかないようです。

更に言うと恋慕じゃないので、現在はこなたの片思い中ですね。

ここからどう転ぶか：それとも他の子の逆転はあるか：というかその前に色々崩壊しそうで怖いというか：

頑張れ佐藤君っ！ 私は適当に逃げます(マテ

さて今回はそのまま繋がりません。

一体誰の場面なのでしょう！ まだ考えてませんっ！(えー

と言う訳なので明日書く時に考えます(ダメ思考

木曜日はまだまだ続くのですよー

どうでもいいこと

なんだかお腹がすきました：今日は何を食べようかなあ：

シチューなんていいかもしれませぬっ！ コラーゲンたっぷり肉じゃがとかも：

うう…カロリーに気をつけてっ!? 気をつけて私っ!?

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか
次回コミュ話対象キャラ表

こなた：15票

かがみ：12票

つかさ：18票

みゆき：6票

ダツキ：17票

アリス：5票

覚醒時ステータス成長表

正直、体特化は消してもいい気がしてきました。

バランスVS速な感じですねえ…追いつけるかっ!!

力特化：6票

知魔特化：17票

体特化：1票

速特化：95票

運特化：4票

バランス：133票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue45 崩壊への七日間・木曜日?? (前書き)

所変わって、ダツキのパートとかがみ達の日常パートです。

ダツキの秘密が少し明かされて、更に謎が深まります。

彼女は何者なんでしょう……多分お話が進めばわかります。今現在は謎キャラそのものですね。

Continue 45 〈崩壊への七日間・木曜日〉

- 大樹の部屋 -

「暇ねえ…」

気だるげな表情でベッドに横たわる美しい女性。

かつて世界を滅ぼしたと言われる大妖怪であり、この世界では魔王と呼ばれる大悪魔、ダツキ。

しかしベッドでごろごろしているその姿はとても傾国の美女、白面金毛九尾とはかけ離れていた。

「と言っても、あいつじゃその辺の機微分からないだろうし、どうしようもないわね。はあ…私ってばこんなに甘かったかしら」

大樹は…いや仲魔も全員知らないのだが、彼女は大樹を気に入っている。

・・・

わざと合体事故を起こさせて召喚に紛れ込んだのもその辺が関係しているのだ、自然な感じを出させたので誰も気づいていないようだ

が。

「しっかし、いつでもどこでも大変な目に合う奴ね。呪われてるんじゃないのかしらあいつ…」

まるで大樹の事をあらかじめ知っているかのような口調で愚痴るダツキ。その口調とは裏腹に表情はとても明るかった。

「ま、分霊とはいえ力もある程度はあるし、あいつが平身低頭でお願いしてきたら聞いてあげるのも吝かじゃないわね。というか少しは強くなってもらわないと」

COMPを通してダツキは外の世界を見れる。

だから大樹が何度か死んだ事も知っているし、彼なりに試行錯誤しながら頑張っているのも知っている。

死んだ時は蘇生できると分かっているても飛び出しそうになったし、彼なりに頑張っているのを見た時は微笑ましいと思ったものだ。

だが、今すぐ彼女が動く訳には行かない。

恐らくこの世界はこの後地獄になるだろう。慈悲も何もなく知り合いいも、大切な人も何もかも死んでしまいかもしれないのだ。

空想や妄想ではない、だがこの先ろくでもないことになる事は既に

理解している。

だからこそ今すぐに力を見せ付けて甘えさせる訳には行かない。この先の地獄を自分なしでも生き残れる程度にまでは強くなってもらわなくてはいけないと思っっている。

「良妻って奴かしらね。ふふんっ」

その表情はまさに恋する女性の表情だった。

大樹は何故ダツキが知らぬ所でここまで好かれているのか分からないだろう。

もし知ってしまったら混乱するかもしれないほど今のダツキは可愛らしく見える。

「とはいえ、まだまだ動く訳には行かないわね…ってか【横島】も【横島】よ。もう少し低レベルなら直ぐに降ろせるってのに、もう少し役に立ちなさいよね」

のんびりTVを見ながら無理な事を言っただけは愚痴る、実を言っただけは不機嫌なせいもあるが。

ここに居なければならぬ理由があった。恐らく人間や普通の悪魔では気づかないだろう…この【嫌な匂い】は。

強く感じる大樹と似た匂いなのに、吐き気を催しそうなほど外道さを感じてしまう匂い。

それも二つ…間違いないく両親二人から発せられている匂いだろう。

この匂いはダメだ。確実に大樹にとって不利益な事をしでかす可能性がある、そしてその芽を摘むのはイレギュラーの存在である自分だけだと思っている。

「人間ってのはいつまでたっても進歩しないわね…自分の欲の為に子供でも容赦なく食いものにするなんて、ね。吐き気がするわ」

殺してしまうのは容易いが、それでは大樹が動きにくくなるだろう。操るのもいいが、それはそれで大樹が気づくかもしれないし…と色々彼女も悩んでいた。

「ま、何かしでかそうものなら精神操作すばれいいかと、誰か帰ってきたわね。うわっ、このすえた臭い…吐きそう…父親の方かしら」

普通は気づかない程度の臭いに吐き気を催しながらも、大樹以外の誰かが帰ってきた為いつでも動けるようにしているダツキ。

足音はどんどん近づいてくる。TVを消して自分は幻術によって姿を消し、来るのを待ち構える。

やや暫くしてドアを無造作に開き大樹の父親が入ってきた。

目的の人物がいないと知るや嫌悪感を丸出しにして辺りの物に八つ当たりを始める。

「ちっ！ 肝心な時に居ないとはな…くそっ！ やはり金曜日にするべきか…」

目の前でぶつぶつ呟きだす男を見て微妙に引くダツキ。

(明らかに何かしでかすって感じね…それにこの臭い…悪魔が関係してる可能性もあり…か。どう転ぶか知らないけどまずは様子見が必要かしらね)

このまま記憶操作で何を考えていたかを消すのもいいが、それが大樹にとって試練となるのなら活用させてもらおうとも考えている。

色々手助けをしようとは思っているが甘やかすつもりもない。1度2度死ぬ程度では助けなかったのも其処に関係する。

今のダツキは大樹にとって、警戒しなければいけない相手でありいつかは支配しないとイケない存在でなければならぬ。

絶望的な状況からは救うつもりだが、ある程度の事ならば大樹の成長になると言う事で何もするつもりはない。

悪魔の臭いがすると言う事は十中八九、誰かに唆されたのだろう。ならばそれも大樹の成長の糧にしてやろう、お膳立てするつもりはないがこの人間には踊ってもらおう事にしよう結論付けた。

「くそっ！ 役にも立たないクズ息子の癖にまたこんな時も役に立たないなんてっ！ 畜生っ…とつとと死ねば俺のハーレムが…」

(うつわ…こいつ殺したい)

精神操作でも受けている感じがする表情で痛い事柄を延々と呟く父親。

ハーレムがどうだの、英雄がどうだの、女は全部自分の物だの何か勘違いしているような事ばかりを叫び続けている。

とりあえず女性としてはここで殺したほうが禍根も残らないんじゃないかと物騒な思考になりつつあるダッキだったが、どうにかして落ち着く事に成功した。

「クズ息子がっ！ お前のお陰で俺は幸せになれるっ！ だからとつとと死んでくれよっ！ あっはっはっはっはっ！」

(……………)

「うぎゃっ!? な…なんだ今の…? 急に頭が痛く…ちっ…飲みすぎたか。とりあえずどうやって明日あのガキを丸め込むか考えな

いとな…」

流石にムカつと来たのか後頭部をピシッと指打ちするダツキ。

行き成りの痛みに驚いている父親だったが、酔いのせいで頭が痛んだのだろうと自分の部屋に戻っていった。

不快な臭いを撒き散らしつつ戻っていく男に辟易しながらも幻術を解き姿を現す。

「えーつと…たしかああいうのを厨二病って言うのよね。大樹も可哀想に父親がアレだと恥ずかしくて外出られないじゃない。出てるけど」

部屋にある空気清浄機をフル起動させて臭いを消していく…が暫くはこの嫌な匂いが続きそうだった。

臭いを誤魔化すために大樹の布団に潜り込むダツキ、そこで暫く考えながらごろごろする事にしたらしい。

（何はともあれ明日ね。これが覚醒の鍵になればいいんだけど…やりすぎな場合は出るしかないか。普通に死ぬ程度ならサマリカームすればいいし…ああ、でも今動いたら面倒よね…）

動きたくても動けないジレンマに悩むダツキ、この辺りはいくら強

くなくても変わる事はない。

縦横無尽に蹂躪すればどうにかなる問題でもないのだ。ダツキがいから強くてもこの世界全てを相手にして勝てるはずもない。

（普通に生きる事も出来ないって、結構辛いわよね。この先を生き残るには強くなるしかない…世界がどうなるうが知った事じゃないけど面倒な事になるのは確かだね）

ダツキも世界の行く末に興味は無い。

自分の大事な人や大好きな食べ物があればそれでいいと思っている。分霊であるがゆえ、存在が抹消されたとしても本体に戻るだけだし死に関しても疎い。

この世界に来たのは目的があるからだ、その目的も半分は達したし後はもう半分をこなしてこの世界でのんびり生きるだけだった。

（強くなりなさい大樹。私を蹂躪できるくらい…それが男の甲斐性って物よ。貴方が私を従えられるようになれば全て教えてあげる…私の知っている全てをね）

大樹の知らない事を知っているダツキ。

彼女にしてみればまだ大樹の運命は序章にも達していない、横島を

降ろせる様になり、自分を従えられたその時こそが本格的なスタートだと思っている。

その為には妥協はしない。それまでは唯我独尊を演じ、人間を人間とも思わぬ悪魔として大樹に接するつもりだ。

世界が減ぼうとも滅ばなくても大樹にはこの先試練が残っている。教える訳にはいかないし、自分も全て把握しているわけじゃない。

唯一知ってそうなのは横島とイゴールと名乗る悪魔位だろうか。

(とりあえずは……大樹の匂いに包まれながら眠ってましようか。戻ってきたらからかってあげるのもいいわね)

部屋には認識阻害を掛けておいた。後は彼が帰ってくるまでのんびり寝かせてもらおうと、目を閉じるダツキ。

いまだに彼女の謎は深まるばかりで解けそうにはない……………

……………

……………

……………

- 学校 - P M : 1 2 : 3 0

「で、今日も来てないと…明日が卒業式だったのに悠長なものねあの二人も」

「そうかもしれないね。でも自主登校ですからその辺は自由ですし」

「お姉ちゃんはこなちゃんいないから寂しいんだよねー」

「だっ、誰がっ!」

反射的に反論するかがみだったが、実際はその通りで寂しさを感じていた。

この所一緒に遊ぶ事も少なくなって来ているので、できれば学校などで会いたいと心の奥底では思っているのだがそれを素直に出す事が出来ないようだ。

明日は卒業式も控えている。確かに明日の夜には皆で色々騒ぐ予定なのだが、これから其々違う道を歩むと思うと一抹の寂しさを感じてしまうのも無理はないだろう。

「佐藤さんも来られてないみたいですね」

「まあ、彼は普通来ないわよね…うん」

「佐藤君良い人なのになあ…」

「その点は同意ですね。話してみるととても優しい方だと思いましたが」

「おーい、柊？ 何の話してんの？」

「こんにちは皆」

「あれ？ めずらしいじゃないあんた達がこっちに来るなんて」

いつものようにつかさ達の教室で昼食を取っていたが、そこに日下部と峰岸の二人もやってきた。

開いている机を借りてかがみ達に混ざる二人。

「ん？ 明日で卒業じゃん？ なら最後の昼食くらい一緒にでもいいっしょ」

「まあ、別に問題は無いけど」

「ごめんね急に」

「気にしなくてもいいわよ。ほらほら一緒に食べましょっ」

「うー。あやのとあたしに対する対応が違っ」

「まあまあ。日下部さんも一緒に私も楽しいですよ」

「おおっ！ 見る見る柗っ！ こういうのが友達の優しさだよなっ！ 柗は嬉しいぜ」

「あーはいはい。悪かったわよ」

いつも通りのやり取りを踏まえながら楽しく昼食を取っている5人。本来ならばここにこなたが混ざっているんだけどな、とかがみは思いつつもそれを振り払って楽しむ事にした。

多分彼女は知り合いの男性と一緒に居るのだと思うから。

「うめえ〜 やっぱミートボールだよなあ」

「うんうん、美味しいよね 私も偶に作るんだ」

「おおっ！ 流石柗の妹だなっ！ 今度あたしにも作ってくれよ」

「うんっ 峰岸さんも一緒に作るうね」

「楽しそう、うん。一緒にがんばる」

「料理ねえ…まあそのうち覚えるわよ。みゆきはどんな感じ？」

「そうですね、料理はまだまだ慣れませんがね。泉さんやつかささんの様になるにはまだまだです」

「柗の料理も期待してるぜっ？」

「あんだ…知ってて言ってるだろ」

ジト目で見るかがみに対してあからさまに顔を背けて口笛を吹くみさお。

やれやれといった表情をしながらもこういうやり取りは実はまんざらでもなかったりする、この先こうして頻繁に会うことは出来なくなるのだからこの瞬間を大事にしようと思っていた。

それはみさおやあやのも同じ気持ちのようだ。学園祭で一緒にチアを練習し、披露した友人達とできる限り一緒に居たいと思うのは自然な事だろう。

だから少し気になる事もあった。

「なーなー柗？　ちびっこはきてねーの？」

「見ての通りよ。多分家でゲームしているか外に出てるんじゃない？」

「そっかー。ちびっこの弁当も期待してたのになあ」

「こなたの場合普通にチヨココロネ食べてそうだけどね」

「こなちゃん、チヨココロネ好きだもんね」

「へー。あたしのミートボールみたいなもんか。なかなかやるなあ
ちびっ子の奴…」

「何よくわからない対抗心燃やしてるのよあんたは…」

何故か燃え上がっているみさおを見て溜息をつくかがみ。皆はそれ
を見て苦笑していた。

「それにしても…明日でこの校舎ともお別れなのです。そう考
えるとこの一時がとても大切に感じます」

「そうだね。私も少し寂しいって思えるなあ」

「あやのも高良もしんみりし過ぎだった。どうせ休みの日とかに皆
で遊んだりするんだし、これからも一緒に騒ぐってば」

「そうだねー、私もまた皆で遊びたいなあ」

しんみりしそうになっていたが、みさおがいつもの明るさを発揮し
て皆のセンチな気分を散らしていく。

折角の昼食の時間と、最後の高校生活をそんな気分で終わらせたく
ないという気持ちが見れていた。

その後も楽しく会話をしながら最後の食事の時間を楽しんでいった。

.....
.....
.....

だが…彼女達は気づかない。

だが…彼女達は気づけない。

そんな小さな希望すら掻き消されてしまう事に。

これからの地獄のような現実に。

気づく事はない…

そして気づいた時には全てが遅いのだろう。

これが彼女達にとって唯一安らかなる日々になるかもしれない…

未来は示されたが、確定はしていない。

絶望し血の惨劇をみるか。

希望が彼女達を支えるか。

どちらにしても残りの時間は少ない。

非現実な日常が終わるまで後3日……………

という訳でダツキさんパートでした。

何故か行き成り好感度高すぎ? なダツキさん。彼女は何者なんでしょうね。

アンケートで出てきた時に適当に設定作りましたが、実は重要なキャラになった…

とりあえず暫くは伏線のようなものです。

そして学校パートは最後の日常…って感じがしますねえ…金曜日からは大変な事になりそうです。

どうでもいいこと

雨が降ると憂鬱です。

洗濯物が乾きませんよっ!? ちくしょう…これは私に対する挑戦ですね…

いいでしょうっ! 全力でいじけてやりますっ!(えー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：18票
かがみ：15票
つかさ：20票
みゆき：7票
ダツキ：21票
アリス：5票

覚醒時ステータス成長表

力特化：6票
知魔特化：18票
体特化：1票
速特化：100票
運特化：4票
バランス：139票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

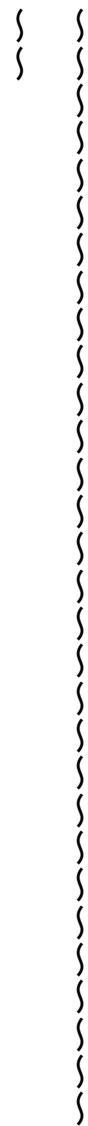
Continue46 崩壊への七日間・木曜日(?) (前書き)

木曜日ラストです。

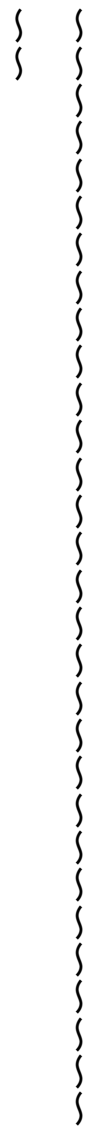
レイ・レイホウとの話し合いターンですね。

そして告げられる危険の兆候…果たしてどうなるやらです。

Continue46 崩壊への七日間・木曜日??



特別イベント継続中



Ready
Ready
Ready

Ready……
Ready……
Ready……

特別イベント』彼女の想い彼女の願い彼女の希望』 - 後編？ -
NEXT Start ……

「約束の時間って18時だったよね」

「うん、そろそろ来ると思うけど…」

COMP屋を回った後は色々とその辺を回る事にした。

時間が余っていたし、暇を潰すには丁度よかったからね。アリス達
が欲しいと言っていた物やダツキ用に高級いなりも確保しておいた。

これで何か言われる事もないだろう…それにしても自分よりレベル
が高くて此方の言う事を聞いてくれない仲魔は扱いづらいな…

早く強くならなくちゃいけないけど、焦ってもどうしようもないか。

さて…時間は18時10分前だ、そろそろ彼女も来るだろう…さて
ここからが僕にとって本格的な勝負の時間だ。

如何に此方の情報を隠蔽しつつ話を持っていけるか…果たして僕にできるかな。

「それにしてもクスノハかあ。噂しか聞いた事ないからどんな組織か詳しく分からないんだよねえ」

「僕が知っている限りで言えば…末端はお人好し集団かな」

「やっぱ上はグチャグチャかあ」

「だろうね。人間だし組織がずっと澱まないなんてありえないよ」

「そうなのよねえ。嘆かわしい限りだわ」

「「?!」「」

いきなり横から聞こえてきた声にいつせいに振り向く僕達。

其処には珈琲を美味しそうに飲んでいるレイ・レイホウがイタズラが成功した子供のような表情で笑っていた。

まさか気づく事もできないなんて…初手は譲ってしまったかもしれないな。

「御足労ありがとうございます。その節はどうも」

「やーねえ。そんな堅苦しくなくても良いわよ？」

「そりゃ助かりますー」

「あらま　可愛い彼女さんも連れ添ってなんて、やるわね」

「あ…いや彼女は」

「ふっふっふ。実はそうなのですよ、ね？　ダーリン」

「…で、今回の話なんですけど」

「おうふ。スルー力高いぜ佐藤君…」

泉さん、そのニンマリした表情じゃ流石にスルーするよ。後レイさん、貴方はそんな性格でしたか？　もしかして酒でも飲んでいいるだろうか。

さて…冗談はともかく本題に入る事にしよう、クズノハとしても聖母の情報くらいはある程度掴んでいるはず。もしかしたらバレている可能性もあるが、それはそれで構わないか。

メシア教じゃあるまいし、救世主を生む母体をどうにかしようなんて思わないはずだ…上はどうだか知らないけど。

「もしかして家に来てくれるとか？」

「今はまだ考え中ですな、まだ色々やりたい事もありますしフリーー

のほうが気楽ですから」

「私もバイトですねー。でも良い仕事なら手伝いとかしますよー」

「嬉しいわね。見た所二人ともサマナーでしょうし、優秀なデビルサマナーは何人居ても困らないわ。んー、と言う事は違う用件よね？ 例えば……」

- 聖母候補の事とか

「……………！ 貴方はやはり侮れませんね。その通りです」

「やーっぱ動いてるんだ、でも人が悪いなあ。先に突きつけてくるなんて」

「ふふつ ごめんなさいね、でもメシアとガイアの動きは私達も気になって色々動いてるのよ。そうすれば感づくのも仕方ないわよね」

「なら…僕達が言いたい事も分かりますよね」

やっぱり知っていたか。当事者ではあるけど、やはり個人より世界中に散らばる組織力の方が断然そういう情報戦略に強いと言う訳か。

この調子だとデビルバスターズも知っている可能性もあるな…でも政府はまずい。

あちらはクズノハ以上に一枚岩じゃない、下手すればメシア教がガイア教が潜んでいる可能性もあるし、聖母が居なければ救世主は生まれにくいと言う事で殺される可能性もある。

僕も知り合いじゃなければ殺したほうが早いと思うけど、流石に今更高良さんを殺そうとは思わない。

なら彼女やその親類達を守る方法は一つ…クズノハに護衛を頼むくらいだろう。

ヤタガラスは正直良く知らないし、そもそもコンタクトはとれない。クズノハのレイ・レイホウならば上手くいけば彼女達を守ってくれるはずだ。

「それは依頼かしら？」

「聖母候補を守るのは世界をよくわからない宗教から守る常套手段だと思いますけど」

「確かにそれはそうだけど、人一人動かすだけでも結構お金がかかるものなのよね。私としては助けたいけど」

「クズノハは何時から営利団体になったのでしょうか…？ このままだと聖母候補がメシア教に捕まる可能性もありますよ？」

「え、えーっと、お二人さん？」

彼女は金が欲しくて言ってる訳じゃないだろう。恐らく僕が持って

いる札を使うのを待っている。

はあ…僕はそもそも会話が苦手でコミュ障だと言つのに…見た目平然としているように見えるかもしれないけど、正直心臓がバクバク言ってるしかなり怖い。

彼女は彼女で僕の目をじっと見つめている、はっきり言おう。滅茶苦茶しんどい。

さあ、何を切るか。僕が持っている札は限りなく少ない。

文珠の提供…？ 捕まって人体実験されるのがオチだ。あんな万能道具が見つければこの世界はある意味で荒れるだろう。

ペルソナは言った所で彼女達にとって利益にはならないし、マジックカードもある意味危険だ。

初めから魔法を入れておけば魔法札と勘違いしてくれるかもしれないけど、生産元を聞かれたら厄介だ。

僕が力を貸す…というのが一番のメインになりそうだが、彼女はアリスを見て目の色を多少変えていたから僕を少し評価している可能性がある。

組織に入るのは流石に御免被りたいが何かあれば無償で手伝うくらいなら構わないだろう。

「あ、あのお金なら私も少し出せますけど…1000〜2000じゃ動いてくれませんかよねえ…？」

「簡単な仕事ならそれで十分というか50万位でも動く子はいるんだけどね。流石に聖母候補の親類縁者全てを期間未定でガードするには色々とかかるのよ」

「ですよー。あれ…行き成り難航ですか？」

「いや、そうでもないかな、多分今現在もある程度は動いているんでしょう？ レイ・レイホウさん」

「ふふっ、どうかしらね」

「貴方は此方が情報を出す前に聖母候補に気づいてた。となると聖母候補がメシア教に奪われるのは悪手なはず。今の今まで僕達の知っている聖母候補と関係者がどうにもなっていないのは最低限でも動いてくれている…ですよー？」

「少し考えれば分かつちゃうか、答えは半分正解よ。実際の所はメシアとガイアが小競り合いしてるのをこっちでちよっかいをかけてるからって所ね。流石に候補一人にかまけてる時間はないから」

「んじゃプラスしてついでに護衛なんかもおく？」

「それとこれとは話が別、ね」

「ちくせう手ごわい…」

成程、メシアとガイアが牽制しあっているのか。高良さんが聖母候補だと分かっているのにもあの後も何もなかったのはそれもあるのか

もしれないな。

一応終さんの方の伝手で数人動いているようだけど、やつらが本格的に動いたらどうしようもない。

二大勢力がお互いに上手く動けないのなら、それはそれで助かるな。僕もどうにかして動くべきなのだろうけど、はっきり言えば数で押されればどうしようもない。1から10まで見ていられるほど僕も自由なんてないし、そもそも無理だ。

薄情かも知れないけど、高良さんを守り続けるのは無理があるからね。

「そろそろ腹の探り合いはやめませんか？ 僕に何を求めています？ 僕から出す条件は聖母候補である高良みゆきとその親類の保護、それだけです」

空気が冷える。にこやかだったレイさん…いやレイ・レイホウの瞳がまっすぐ此方を捉えているのが分かる。

泉さんも流石に気づいたようでそわそわしながらこちらを見ていた。

「仕事を手伝ってもらいたいわ。それを飲んでくれるんなら聖母候補とその知り合いもクスノハが責任をもって守ってみせる。アリスという上位の悪魔を仲魔にしている貴方の力を借りたいの」

「アリスは僕のレベルを大きく超えている。僕自体はその辺の二流程度ですが…それでもいいのですか？」

「ええ。今必要なのは即戦力。二流でもなんでもね…それにアレだけの仲魔が居るなら十分強力な戦力よ」

「あ…でも佐藤君は…」

「貴方も手伝つてくれるかしら？ 勿論報酬は出すし、追加で貴方の家族の方も手は回しておくわよ」

「え…あ、そか…みゆきさんが狙われるって事は家も狙われる可能性があるんだ…」

「泉さんは無関係だ、何をさせるつもりか知りませんがそこまでは…」

「いいつて佐藤君」

「泉さん…」

真剣な表情で此方を見ている泉さん。その意思を今更覆すのは無理みたいだ。

クズノハが戦力を集めていると言う事は、この町か、下手すれば世界に何か起き掛けていると言う事だろう。

予想しか出来ないがもしかしたらメシア教が核を持ち出してきたとか、巨大な異界が現れたとかその辺かもしれない…どちらにしても

とんでもないな。

でもある意味好都合だ、最終的にはマジックカードまでなら切るつもりでいたし切り札を伏せて置けるならこれでも構わない。

問題は泉さんだけど、彼女はすでに僕と近いレベルだし正面から戦っても僕だと勝てる気がしない。仲魔が居れば別だけど…それだけ優秀な人だ、今更止められないだろうしね。

「クズノハに入れとか、魔王を倒せとか無理難題を言っつもりはないわ。でも受けて欲しいのは本当よ？ この件はこの町…いや世界中に関係する事だから」

「せ、世界中つか…規模がはんばないね」

「受けてくれるなら最低限の家族の安全を保障するし、報酬もかなりだせるわよ？ 貴方の言う聖母候補も此方でどうにかするし悪くないでしょ？」

「それだけ聞けば確かに魅力的ですね…でも、裏はありますよね勿論？」

「……………神の炎って分かるかしら」

彼女の言った言葉は僕の脳を全力で殴りつけたよな衝撃を与える。

神の炎…多分メギドの火の事だろう。そして女神転生でそれが関係するといえば…

「聖火つて訳じゃないですよー?」

「神の炎が世界を焼く……核……ですか? 恐らくメシア教が保存している」

「かつ、核っ!?!? ちょ……この国非核三原則あるのにつ!?!?」

「残念ながらね。後、核を所持してるのはメシア教じゃなくて、その上司である天使達よ」

「メシアが生まれたら落とすつもりですか……?」

「3日後」

「……は?」

「奴らが言う運命の日は3日後よ。天使達が持つ核ミサイルが世界中に降り注ぐのはね」

3日後だなんて、いくら何でも事態が急すぎる。クズノハでもその間に止める事ができなかったのか。

たった3日で天使達を倒して核ミサイルを保有している場所を占拠するのは不可能に近い。

世界が減びるかもしれないとは思っていたけど、流石に1年2年先だとタカを括っていただけあって彼女の突きつけてきた期日に僕は

何も言う事ができなかった。

寧ろ正気を取り戻して噛み付いてきたのは泉さんのほうだった。

「そんなのっ！ 後3日って時間ないじゃんっ！ そんな事になつたら…お父さんも皆も先生も…全員死んじゃうよっ!？」

「そうね…私達が守り抜けなかつたら多分世界は滅びるわ。それを危惧してヤタガラスやデビルバスターズが秘密裏に動いているけど、其処まで功を為してないのも現実ね」

「3日後に現実でアポーンって…そりゃないよ…どうすりゃいいんだよお…」

「一定人数までなら地下シェルターは用意できてるわ。最悪私達が失敗しても保護した人間は核の被害から逃れられるけどね」

「じゃ…じゃあ私の知り合いは全員…」

「貴方達が手伝ってくれるのなら…考慮するわ」

「僕は其処までして助きたい親類はいない。その分を泉さんの親類縁者に回してもらいたい」

「さ、佐藤君…」

「恐らくたった3日で世界を守るなんて不可能だ。いくらクズノ八達が連合しているとはいえ、相手は天使。下手すれば上級天使がいるはずだ。寧ろそうなる前に情報は得られなかったんですか？ 流

石に時間がなさ過ぎる」

「耳が痛いわね…これでも結構前からその情報は得ていたのよ。妨害とか上の方のゴタゴタもあつたらしくてね…私も流石にここまで時間がないなんて…今からメシア教に転向でもしようかしら」

彼女がそこまで切羽詰るまで動かないのは確かに変だ…となるとクズノハの方で情報規制をしてたか何か、か。

地下シエルターさえ入ることが出来れば生き抜く事は可能だ、そのための食料や水なども既に用意してある。

これからのことを考えると現金を使い切るほどの食料を買い込むべきだろうな…

「でも、ただで負けるほどこちらも弱くはないわ。現実いくつかの場所は占拠間近だしね…この町をターゲットしている基地も把握済み。あいつらは馬鹿正直だから攻められても決められた日以外には核を打ち込まないでしょうし、其処に付け入る隙はあるわ」

「そか…其処さえ潰せば最低でもこの町は守れるんですねっ！」

「そうね。でもここだけが残っても主要都市が壊されたり、核の余波もあるだろうから地下シエルターは必須だけだね。恐らく世界が崩壊したら異界も開放されるわ。その先にある未来は悪魔が地上を闊歩するという未来。一般人は生きていく事さえも難しくなるでしょうね」

「問題は食料と水。核汚染された世界は暫く作物も育たない、水も飲む事ができない世界になるはず。死んだほうが楽かもしれませんね…メシア教はなんでそんな世界を…あ、いや…そうか」

メシア教の人間だけは用意されている地下シェルターがあるのかもしれない。天使も自分達を崇拜する人間まで殺そうとは思ってないはずだ。

そして世界が滅んだ後にメシアが生まれれば人間達はそれに縋るだろう。まさに真・女神転生？そのままの話だな。

ゲームと違うのはアメリカから振って来るんじゃないかと既に核が用意されている所か…確かに遠隔操作でミサイルがふって来たとしてもあんな数秒で崩壊するわけないし。

どちらにしてもこれは受けざるをえないだろう。逃げるにしてもメシアもガイアも邪魔だ…

「でも、あまり緊張感なさそうですね。何か起死回生の手段でも…？」

「ふふ、そんなのあれば頼んでないわよ？ 正直半分くらい諦めの気持ちだし」

「うわあ…クズノハの人まで焦ってるよ。政府の人たちとか逃げ出さないかなあ」

「今の所変わったニュースもないし、裏に関わっていない限りは気

づかないんじゃないかな」

「そんな所ね。で、どう？ 受けてもらえないかしら」

「逃げ道塞いでおいてよく言いますね…受けますよ。その代わり泉さんの頼み宜しく願います」

「ええわかったわ。動くのは土曜日、前日の夜に連絡するから今の内に英気を養っておいて頂戴。必要なものがあれば融通するわ」

その後僕達は、彼女からこれからの事や色々な事について話し合った………

………
………
………

「大変な事になっちゃったね…」

「世界の終末が後3日とはね。まさにゲームのような空想話みたいだよ」

「あはは。それを救うのが少年少女だもんねえ」

気丈に振舞っている泉さん。本当は色々悩んでいるだろうに…

「高校卒業しても、意味無くなっちゃったね…」

「それでもないさ。僕達が依頼をきっちりこなせば4日目だってやってくるよ」

「でも…できるかな…？ メシア教は敵だし、ガイア教はよくわからない。敵は天使で一歩間違えたらアボン…コンティニューも無いよ」

「現実だからね。でもやらなくちゃいけないのは確かだ、僕はまだ死にたくないし知り合いを死なせたくも無いよ」

「佐藤君…ふふっ。そういう所かっこいーよ 惚れちゃうかも」

「…それは嬉しいかもしれないね」

「あ……………」

僕が切り返すと恥ずかしそうに俯く泉さん。少しストレート過ぎたかも知れないな…まあ、彼女を嫌っているわけじゃないし別にいいか。

暫く無言で歩いていく僕達、僕が考えているのは世界を救った後じやなくて世界が崩壊した後の事だ。

多分…いやほぼ確実に世界は滅ぶだろう。レイ・レイホウも天使が

自分が死にそうになっても苦し紛れに核を打ち込まないなんて考えてない。

世界は滅びるだろう、それこそメシアでも出てこない限り。

「あの…さ、佐藤君…わ、私…」

「今はまだ、聞かないよ」

「あ…あう…」

「お互い色々混乱してるしね。だから明日、明日でいいかな？」

「明日…？」

「土曜日は死ぬ気で戦いに行くんだし、その前に聞かせてもらいたい。僕もその間に色々整理するよ」

「う…うん、ありがとう」

「そうだ。これを渡しておくよ」

金文珠を4つ取り出して泉さんに手渡す。

少し驚いていたみたいだけど、彼女はそのまま大事そうに受け取ってくれた。

「これは…?」

「文珠って言う、まあお守りみたいなものさ。他の3人にも1個ずつ渡して欲しい、きつと皆を守ってくれる」

【防】の文字を既に埋め込んである、何かあった場合は彼女達を守ってくれるだろう。

流石に核の直撃の余波は分からないが地下シェルターにいらなくてもある程度の時間までなら放射能なども無効化してくれるはずだ。

「あ、ありがと…これほんとは見せちゃいけないんでしょ?」

「気にしないでいいよ。泉さん達は僕の友人だからね、せめてそれくらいはさせてもらいたいし」

「そか…うん。ありがとっ！ クラっときちゃっねっ ニクイよ
おにいさんっ!」

「はは、テンションも戻ってきたみたいだね」

「むー。それはあれかね？ 私が暴走特急娘だと言う気かねえ?」

「寧ろ否定する要素が無い」

「おふっ…ナイスガゼルパンチ…容赦ないっすね」

両手をぱたぱたしながら歩き回る泉さん。少しは元気が出てくれたようだ。

世界が崩壊したとしても、彼女達と仲魔だけは一緒に居て欲しいな。今になって強く、そう思う。

さて…そろそろ分かれ道か、明日は卒業式だ。恐らく最後の日常の日、柊さん達にも色々相談しなくてはいけないし、今日は体を休めておこつ。

「……………大樹君っ！」

「…は？」

「あ、いや、ほらね？ 友達なんだしいつまでも苗字で呼び合つてのは…変でしょ？ だから、名前で呼び合おうよっ！」

「唐突な…」

「いーじゃんいーじゃん。友情を深め合おうぜ」

まったく本当に唐突だ…

こうやって名前を人に呼んで貰うのは何時振りだろうか…

まさかそれだけの事がここまで涙腺に響くなんてね。

「まったく…それじゃまた明日ね。……………こなた」

「…うんっ！ 明日は精一杯騒ごうねっ！」

「柘さん達にも相談があるんだからハメは外し過ぎないようにね」

「うう、真面目さんだなぁ大樹君は」

「命かかってるからね」

「あいさーっ！ また明日ねっ！」

「またね」

走っていく泉さんを見送ってから僕は家を目指していく。

直ぐにCOMPから声が聞こえてきた、あの間は黙っていてくれたようだけど、彼女達も世界の崩壊については考える所もあるだろうな。

《世界の崩壊かよ…オレは別に問題ねえが、サマナーが危険だな》

《さ、サマナーさぁん…異界に逃げるって手は…だめだよな？》

「その場凌ぎにしかないね。どちらにしても最悪でも核の衝撃や放射能は文珠で無効化できるし、地下シェルターさえ見つけておけば、緊急時に文珠で【転移】も出来るから死ぬ可能性は薄いよ」

《ご主人様…でも声が震えてるです…》

はは…やっぱりばれてるみたいだね。

泉さんが居る手前色々我慢してたけど、正直震えがくるほど怖い。僕一人だけならば今すぐにも食料品などを買いあさって地下シェルターに籠りたい気分だ。

でも、そういう訳にもいかないだろう。依頼は依頼だしこなせれば最低でもこの町は救える可能性がある。

人間が死のうが行きようがどうだっていいけど、町としての機能が残っていればこの後の崩壊した未来を生き抜くのは格段に楽になるだろう。

《サマナー様あ。心苦しいのでしたら慰めてあげますわあ。こういう時は素直に女体に溺れるのも一つの手ですわよあ》

《ちよつとアメノウズメっ！》

『いえ、アリス様。こういう時は確かに気を紛らわせるのは確かです…それにしても天使による世界崩壊ですか…元天使としては肩身が狭いですね』

《てめえのせいじゃねえよ。どっちにしろこの後が地獄って事だ。サマナーよ、オレはアンタの行く末見守ってやるぜ。正直この後どうなるのが気になるからな》

《わ、私はずーつとサマナーさんと一緒だもんっ！ うっ…そっい
えばこなたがサマナーさんを名前で呼んでた…ずるいっ》

「はは…別にサマナーと呼ばなくてもいいよ」

《ほんとっ!?!》

《アメリカにとってご主人様はご主人様なので、これでいいのです
》

『我が主は私にとって神のような存在なので、私もこのままです』

《ダーリンは…だめですわよねえ?》

「却下」

《自重しないエロ娘だな…オレは変わらんぜ。今まで通りサマナー
と呼ばせてもらっ》

《我はサマナーの呼び名などに興味はないな。どちらにしても早く
違っ悪魔に…》

《えへへ…大樹…さん。大樹さんっ》

唐突に告げられた世界の終末…か。

今の今まで非現実を歩いてきたようだけど、どうしようもない現実
を突きつけられた気分だ。

どちらにしても僕がやる事は決まっている、僕と仲魔、そして友達だけは死なせないつもりだ。

それしか、出来ないからね。

特別イベント終了

大樹 こなた信頼度+1（気になる異性）
こなたは『????』を覚えた。

大樹はこなたを少し意識している…

こなたは大樹に強い恋心を抱いている…

こなた最終選択肢が開放されました。

信頼度が【5】の時にデートイベントかコミュパート時に選ぶ事が
出来ます。

一度決定すると二度と変更する事が出来ません。

ついに告げられたタイムリミットの巻でした。

見ている分には後数日って言うのが分かりますけど。

現実だと、実際問題後3日で世界が滅びますって言われたら絶望しますよねえ…

佐藤君は多分崩壊すると考えているようです。逃げ道は色々あるので死ぬつもりはないようですが。

こなた達にも文珠を手渡して最低限の防御はOK。

みゆきさん援護のつもりがそれ所じゃなかったでござる、という奴ですね。

上手くいけばガイアとの共闘もあるかもないかも…？

そしてもってついにこなたが一步を踏み出しましたっ！ 名前呼びですよー。

明日告白みたいな事言ってますが、多分金曜日は…ねえ…

恐らくコミュパート後になりそうです…あるのかっ！？ とお思いかもですが、

実は【あります】

無心ルートの為に少し寄り道する事になりそうなのですよー。

という訳で詳しい事は金曜日の後半パートなのですっ！

ああ…ながくなるな…頑張れ私っ！ 応援してあげてください…

応援してもらえらるとはっちゃけて頑張る人です（えー

どうでもいいこと

うー…なんだか体がだるいです。

風邪は引いてないんですけどねえ、そのせいで書く時間が遅くて遅

くて…

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：22票

かがみ：17票

つかさ：21票

みゆき：9票

ダッキ：27票

アリス：5票

覚醒時ステータス成長表

力特化：6票

知魔特化：20票

体特化：1票

速特化：105票

運特化：4票

バランス：147票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで

५.

Continue47 〈崩壊への七日間・金曜日〉(前書き)

金曜日ついにスタートです。

初回なので短いです…ほろほろ。次回は多分パーティー部分ですねえ。

それが終われば日常の最後です、次回が終われば暫くほのぼのはなくなっちゃうので頑張らないとですね。

再び返信が遅れてます、申し訳ないのです。

風邪引いたようなので、早めに寝ます！。おのれ…急に寒くなったり暑くなったりと…

明日はTRPGも控えているので早めに寝るのですよ。皆さんも気をつけてくださいね。

落ち着いたら返信させてもらいますね。

全部読んでるのです、とても嬉しいですよ！！

高校生としての最後の日は特に何事もなく終了した。

こなた達ならば感動するワンシーンなどもあったかもしれないが、僕にそんなものがある訳もなく淡々と時間が過ぎるのを待っただけだった。

実を言えばこんな事でいちいち感動している暇など無いと言う事なんだけどね…

日曜日に世界が崩壊しますと言われてのんびり卒業式に出ている僕も僕なんだが…

でも昨日の内に最低限のお金以外は全部食料や薬品購入に使いつつておいた。泉さんも残っている貯金を叩いて食料などを購入するそつだ。

四の五の言つてられないので帰った後メールなどでこなたにマジックカードの本来の使い方を教えておいたし卒業パーティーが終われば柊さん達にも動いてもらう予定だ。

それにしても味気ない卒業式だったな。結局あの不良3人組は学校に来ることなく終わってしまった。

嫌な予感しかしないが、どうなっている事やら。

「おーいつ。卒業写真取るつよ」

「…と？ こなたか。いきなりだから驚いたよ」

「いや、全然驚いたように見えないけどね」

いや、十分驚いてるよ。他の皆が。

僕にまさか知り合いが居るだなんて思いもよらなかったんだろうな。

こなたは十分魅力的だし、小柄な分も交えて余計に驚いていそつだ。

「ほら早くこつちこつち」

ずるずるとこなたに手を引っ張られながらこなたの教室に連れて行かれる僕。

其処には既にいつものらきすたメンバーが勢揃いしていた。

「連れてきたよー」

「やっと来たわね、いらつしゃい」

「佐藤君も一緒に撮ろつよ」

柘さんの近くに居るの活発そうな子と大人しそうな子は日下部さんと峰岸さんだろうな。

その隣に高良さんと妹さんが既にスタンバイを完了させている。

まずは日下部さん達に軽い自己紹介をした後一緒に写真を撮ることになった。

この一場面だけみれば、とても平和な時間なんだけどな……

「しゅーりょーっ」

「この後は卒業パーティーだったよな。くう、たのしみだぜっ」

「まずは家に帰ってからねみさちゃん」

「あっはっはっは。流石にあたしもそこまで慌ててねーよ」

「それじゃ、待ち合わせは にしましょ？」

「さんせい」

「では、急いで向かいますね」

「じゃ、私達も帰ろっか」

「そっだね」

其々一度戻ってから行く事になったが、僕の家は微妙に遠い上に今から家に帰るとややこしい事になりそうなので全部終えてから戻るつもりでいる。

服など…というか自分の部屋にあった全てのものは既にカード化させているし、万が一誰かが入ってきててもいいように塵気楼も使っている。

威力を最低限にして持続の方に時間をかければ10時間以上は持つらしいので、万が一誰が入ってきてても普通の部屋だと誤認してくれるはずだ。

日下部さんと峰岸さんは急いで戻っていったので僕達と一緒に帰っておらず、ゆっくりと電車に向かって歩いていく途中だ。

「あー。ついに終わったわねえ、なんか感慨深いわ」

「そうですね。本当にあつという間の時間でした」

「これからは一緒になる事も少なくなるんだよねえ…少し寂しいな」

「……………そだねえ……………」

「こなた…？ どうしたのよ一瞬でテンション下がってるわよ？

ははあん？ 実は寂しいとか？」

「まあ、それもあるけどさ…んー。パーティー終わってから話すよ。すっごい大事な事だから」

やっぱり昨日の今日で完全に落ち着く訳も無く、やはり無理にテンションを上げていたようだ。

こなたらしいと言えはらしいけど…ね。

本当は今すぐ言って行動を起こすべきなんだろうけど、せめて最後の一日位はゆっくりらせてあげたいとも思う。

今からがむしろに戦ってもレベルが上がるわけじゃないし、寧ろ疲労が残ってしまうだけだから無駄に戦う訳にも行かない。

色々後手に回る、本当に命を懸けているならばふざけた行動かもしれないけど、それでもこれが最後になるのかもしれないなら友人達と騒ぎたいって僕でも思うよ。

幸いレイさんから地下シエルターの場所は聞くことが出来たし、最悪の場合はクスノハのメンバーが彼女達の家族達を保護してくれるはずだ。

食料などは僕がある程度どうにかできるし、明日一日あれば柊さんの家の方でも食料などを集められるはずだ。

その時はマジックカードを手渡す事も考えている。

「そう。あえて深くは聞かないわよ、なんとなく想像つくし」

「高校最後のパーティーだし、僕も楽しませてもらうよ」

とつか初めてのパーティーとも言っけどね。

こう言う事をするのは生まれて初めてだし、少しばかり緊張してしまっな。

「そだねー…よっしっ一緒に楽しもうじゃないか大樹君っ！」

「騒ぎに関しては色々と教えてもらっ事になりそうだね」

「大…」

「樹…」

「君ですってえ〜？ おやおやあなたさん。何時の間にそんな親密な間柄にい〜」

「うおう。かがみ目が変わだよっ！？ ま、まあ昨日色々あってね、そんなこんなで名前で呼ぶ事に、うんうん」

「ほっほーう。色々って何かしらね、佐藤君？」

「お姉ちゃん楽しそう…とつか目が変」

「あらあらまあまあ」

面白いネタを見つけたと言う表情で詰め寄ってくる柊さん。しまっ

た：彼女達はそういう話が大好きだったはずだ。

こなたの方もやってしまったみたいなお表情でこちらを見ているし。

とはいえ名前で呼んでいるだけだしね、特別何か変わっている訳でもない。あるとすれば今日の夜位だろうけど。

「そろそろ良い時期だしね、名前で呼ぶのもいいかなと思ってさ」

「そうそうっ。深い意味は無いのだよー」

「ふーん。今はそういう事にしてあげるわ　　後で色々聞かせてもらうけどねえ」

「お姉ちゃんが絶賛暴走中…」

「かがみさん、かがみさん落ち着いて」

この後も柘さんのちよっかいなどでこなたが珍しくやり込められると言っ、珍しい場面を見たりしながらそれぞれ帰路についた。

僕はそのまま家に帰らず、隠れられる場所で普段着に着替えて目的の場所に向かう事にする。

《大樹さん。一杯楽しんできてね》

《美女ばかりですし、サマナー様が羨ましいですわあ》

「最後の時間になるかもしれないしね、精一杯英気を養ってくるよ」

《世界の終末か：我には特に関係も無いがそれでサマナーが死んでしまつと我が永久にこのままだからな、絶対に生き残るんだぞ？》

《その辺の心配はいらねえだろ。最悪文珠などで逃げれるしなうちのサマナーは》

「気づく事ができれば、だけどね。せめてこの町にだけは核が降るのを防ぎたいかな。最低限の文明があるのは助かるし」

《ゲームとかできなくなつちゃうんだよね…一応電池とかは購入しておいたけど…》

「水の方は過剰に手に入れてきましたし、節約すれば10〜15人で1年ほど持つ計算です我が主よ」

「今日も柊さん達に話した後集める予定だよ。消耗品は集めて困る事は無いからね。問題はお金だけど…そろそろ辛いのも現状だな」

崩壊する事がわかつているし今から集めればいいと思うけど、今現在にはそんな事もなく平和な世の中だ。

つまり買い物するにはお金が居る、僕はお金持ちの家系でもないし無限にお金を持っているわけでもない。

悪魔を退治したり依頼をこなしたりしてお金は普通の人より持つてはいたが、それでも限界はあるからね。

100円ショップなどで大量購入なども行ってきたけど、やはりお金は直ぐ尽きるものだから思うように集められていないのも事実。

コネなどがあれば安く取引できたのかもしれないけど、そんなもの僕にある訳も無く自分で出来る限りの事だけしか出来なかった。

《でもでも、沢山の食料などは用意できたです。ご主人様は頑張ったのですよ》

「ありがとアメリカ。水自体は文珠でどうとでもなるし、食料に關しても一応当てはあるから大丈夫だよ」

《ほえ…ご主人様は凄いんですねー アメリカは嬉しいのですっ》

文珠をいくつか使ってしまう事になるが、もしかしたらノーコスト（文珠除く）で増やす方法は考えている。

結構誰でも思いつくかもしれないが、簡単な事だ。文珠で【量産】や【模写】【複写】してしまえばいいのだ。

こうすれば中身の入っているカードを量産できる可能性がある、試したことは無いのでやってみないとわからないが、イメージさえ整っていれば僕が作れる文珠でも可能だろう。

そういえば僕が作ることが出来る普通の文珠は昨日完成した。淡い碧色の珠という基本的…かどうかわからないけど横島が扱っていた文珠だ。

金文珠との連結は威力が違うのか種類が違うのか出来ないみたいだけど、同種類の文珠同士なら問題なく扱えると認識できている。

《フーかき。とつとと行かないの？ こんな狭い所御免被りたいんだけど》

《ダツキはまた…COMPに居るんだから別にいいじゃない》

「まあまあ、とりあえず今から向かうよ」

《あ、そつだ。お稲荷さん忘れるんじゃないわよ？ 忘れてたら酷いから覚えておきなさい》

僕の命は多分稲荷寿司より安い…そう考えると何か凄くやるせないな…

……

……

…

異界から出た俺は直ぐにその辺の裏っぱい奴から金を巻き上げて、住処を探しつつ修行を始めた。

マグネタイトが少ないせいで本来の実力の半分も出せなかったが、雑魚の悪魔を異界に行ってはぶっ飛ばしているのでそれなりに集まってきた。

とはいえまだまだ本調子には程遠いかな。良い所7割つてとこか、COMPとか言う奴があれば効率よくマグネタイトを手に入れられるらしいが流石に機械にや疎いし持ってないからな…

ま、体に枷があるほうが修行にはなるからこれはこれでいいけどよ。少しでも強くなれるなら俺はどんな事でもするつもりだからな。

そしてそんな時に突然襲ってきたふざけた気配に俺は苛立ちを隠せなかった。

『ちっ…なんだこの気配はよ』

嫌な気配が辺りを覆ってやがる、それも吐き気がするような悪魔の気配だ。

俺自身もすでに人間のカテゴリーから外れてるが、それでもここまですりきつてはいねえ。

この感じからしてこの町全てを覆ってる可能性がありそうだな…

『誰が何のつもりか知らねえが…ふざけた真似してやがるよつだな』
この気配が完全にこの町を覆えば準異界化するだろうな、そうなりや悪魔が普通に現実世界に入り浸ってくるだろう。

俺としてはそれはそれで良い修行になるんだが…他の無関係な奴らを無視してまで強くなりたいとは思えなくてな。

もしかしたらいずれ俺を超えるかもしれないねえ奴がこれから生まれるかもしれない、既に成長中かもしれない。その芽を摘むかも知れねえのは…赦せないだろう？

『なあ、テメエが生きていればどうしたんだろうな？ 何だかんだ言いながら最後には全部を救っちゃまったお前なら…』

俺の最高の親友で最大のライバル。

結局俺はお前を超えることは出来なかったけどよ…だからと言って俺はお前より格下って訳じゃねえ。

いつか必ずお前の到達点を…追い抜いてやるからな。

その為に面白い奴も見つけた、あいつはどことなくお前に似てる。見た目は弱そうに見えたけどお前と同じで奥の手をいくつも隠し持ってるって所がな。

折角美味しそうに育ってるって言うのにこんなふざけた真似で死なせるのも勿体ねえからな。

『誰がやってるんだかしらねえが…落とし前だけはつけさせてもらうか』

魔装術を解いて俺は気配が強く感じる所に歩いて行く。

どこの阿呆か知らねえけどよ、馬鹿な事をやればその分しっぺ返しが来る事を忘れるんじゃないやねえぞ？

『少しは齒ごたえがあるといいんだがな』

俺らしくはないと思うが、せいぜいヒーローっぽく動いてやるか。るか。

せめて俺の鍛錬になる程度の奴だといいいんだがな…

- 伊達雪之丞視点解除 -

Continue 47 〈崩壊への七日間・金曜日〉（後書き）

卒業式のシーンを飛ばす私っ！ まあ、似たようなシーンになりそうですしねえ…

一緒に撮った卒業写真は多分佐藤君の大事な宝物になりそうです。

そして再び出てきた雪之丞君とこの町を覆い始めた不快な気配と準異界化…

核をどうにかする前に何かがおきそうです。

無心ルート…は大変だ…（無心ルートなので起きました）

今回はパーティーとその後の相談…そしてという感じですよ。
お父さんはどうなるかなー。

どうでもいいこと

ココアが美味しいです。皆さんはどのココアが好きですか？
私はバンホーテンのミルクココアが一番ホッとして大好きですよ。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：30票

かがみ：19票

つかさ：22票
みゆき：9票
ダツキ：34票
アリス：5票

覚醒時ステータス成長表

力特化：6票
知魔特化：21票
体特化：1票
速特化：111票
運特化：5票
バランス：155票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue48 ～崩壊への七日間・金曜日?～(前書き)

金曜日?です。

最後に重要な選択肢があります。
好きなものを選んでください。

コメント返信終了しました
遅くなって申し訳ありませんでしたっ！

・カラオケボックス・

「~~~~」

「すげーなちびっ子の奴、あんな歌あたししらねーや」

「そつね、昔のアニソンって言う奴かな」

「こいつにマイク持たせると9割くらいアニソンよ…ってか何時まで独占するつもりかっ！」

僕も知らないようなアニメソングを延々と歌い続けているあなた。

流石にオタクと言っただけあってそつち方面のレパトリーは凄いな、そして何気なく上手いのがなんとかも。

聞いてて不快にはならないし、聞いているだけで十分楽しいかもしれないな。

「佐藤君は何か歌わないの？」

「音痴だからね…聞いているだけでも楽しいよ、更に言えばお菓子が美味しいからそつちに気をとられそつだ」

「あははっ、私もー それにこなちゃんの歌って私結構好きだし」
「そうですね。とても深い音楽性だと思います」

歌い終わったのをきっかけに次は柘さんがマイクを奪取に成功したようだ。

最近の歌を熱唱する柘さん。僕も知っている歌だから良し悪しが分かる音楽だ、うん、中々上手いと思う。

「いやー、歌った歌った。あ、つかさーそっちのジューズ取って」

「はい。お疲れ様こなちゃん。凄い上手だったよー」

「いんや、途中でキー外しちゃってさ、いやいやまだまだ修練が足りぬわ」

「次はあたしも歌おっと。あやのーデュエットしようぜー」

「いいよ、何歌おうか」

「そだなー…これなんていいんじゃない？」

隣では日下部さんと峰岸さんがデュエット用の歌を選んでいるようだ。こうしていると日曜日に世界が終わるかもしれないなんて本当に夢見たいに感じるよ。

でも、これは目の逸らし様もない現実でどうしようもない事はわかってる。

もしかしたらここにいる日下部さんと峰岸さんには会えなくなるかもしれないんだな…

ゲームや漫画とは違うこの現実世界。

真・女神転生？に似てはいるけどとても違うこの世界、ご都合主義やゲーム的展開なんてものは存在しない。

そもそも女神転生はそういう都合のいい未来なんてほぼないしね。

どちらにしても何かを捨てて何かを捨ててはいけないんだろくな。

僕が拾うものは既に決まっている、それ以上、それ以上と手を伸ばして肝心な所でこぼしてしまうような事はしない。

守るものは仲魔とこの4人だけだ、それ以上は僕の手に残る。

僕ができる事は、クズノ八達のお陰で彼女達が救われる事を祈っておく位だろうな。

「どつたの大樹君？」

「あ、いや。僕も何か歌おうかなくてさ」

「おおっ！じゃあみさきち達もデュエットするみたいだし私達も

行くつぜっ！ アニソンにはデュエットだってあるよっ！ ブルー
シーとかっ！ 3×3E ESとかっ！」

「どうしてそんな古いもの覚えてるかな…」

「ふふん、それを知っている大樹君もなかなかのものですよ」

「????? 知ってる？ ゆきちゃん」

「あ、いえ存じ上げませんね」

どちらもかなり前のアニメと漫画だからね。僕が知っているのは単
純に昔本屋さんで読んで気に入ったからなんだけど。

「獣魔術が好きでした。いでよっ！ って今思えば厨二なセリフだ
よねえ」

「ゲームや漫画アニメに出てくる技とかは大抵そんなものだと思う
よ。かっこいいものは別にかっこいいで良いと思うけどね。流石に
真似したりとかは出来ないけど」

「厨二病ですねわかります。私も影羅まではいかないけどねえ。あ
れはやばいと思うよ、うん」

「えいら…?」

「気にしないほうが良い、そして覚えないうほうが良いよ二人とも」

「うんうん。つかさとみゆきさんは純粹なままでいてっ」

俗に言う『アイタタタ』な状態の事を言うからね、彼女達が染まる事はないだろう。というか染まっている暇なんてなさそうだしね。

何にせよ、卒業パーティーは始まったばかりだ、この後には地獄が待っているんだから精一杯楽しませてもらおう。

「じゃあ、これにしようか」

「おっ、ナイスチョイスっ！ いいねっ」

「はあっ、久しぶりにスッキリしたわ。あ、次は日下部達のデュエットか、頑張りなさいよー」

「おっっ！ あたし達の歌を聞けーっ！」

「ふふ、みさちゃんったら」

歌いだした二人に合わせて手拍子しつつ、色々な話題で盛り上がる僕達。

強いて言えばもう一人ほど男性が欲しかったけど、そもそも友達がない僕にはこれだけでも十分な出来事だと思う。

昨日の事や明日以降の話、こなたが振って来るアニメの話には皆困りつつも受け答えしたり、柊さん達がこれからの事を話し合ったり

ととても賑やかだ。

カラオケが終われば次は高良さんの家で本格的なパーティーが始まるし、まだまだ始まったばかりと言った所かな。

「二人とも中々上手いじゃないの、結構驚いたわよ」

「へへんっ、あたしの美声に酔いしれたか柾っ？」

「いや、そこまではいかないけど」

「うっ、普通に返されると他に何を言っているかわからない」

「突っ込み待ちだったんかい」

「さあさ、次は私と大樹君で歌うよ。あ、前行って歌うから、ほらほらいこいこっ？」

「僕は別にここでも」

「はいはい、強制連行」

「ふふ、頑張ってくださいね」

「頑張って佐藤君」

何だかんだであなたと一緒に前のほうに来てしまったけど…正直凄く恥ずかしいなこれは。

タレントとかはこれの何十倍もの人間の前であがらずに漫才や会話が出来るんだから、それは凄い才能だと思う。

と、思考を逸らしてみただけだからと言って逃げ道はなく、諦めて歌うしかない訳だ。

「さ、がんばろっ」

「そっだね…歌おうか…」

「~~~~」

歌いだす僕達。

せめてほんの数時間だけでも、この先の未来を忘れないから。

今の気持ちを歌詞に乗せて精一杯歌おうと思う。

……

……

…

・時間はゆつくりとだけど、確実に進んでいく。

「この料理うめえなっ！」

「あんたね、もう少し落ち着いて食べなさいよ」

「ゆきちゃん、これ凄いね」

「っ」

「あ、これ前TVで見た事ある料理だ……」

「おおっ、フォアグラとかっ！？ 流石みゆきさん家……ばないね」

「みさちゃん、はいお水」

「皆さん、まだまだありますから沢山食べてくださいね」

・前世を含めて、生まれて初めて体験する……幸せだと思える時間。

「うーん……これだっ！ うあう……ジョーカ」

「……」

「ふふーん、これで私は後2枚ね」

あるよう」

「私まだ沢山札が

「すでに上がったのでやる事がないな…この調子だと次は…峰岸さんがあがれそうかな？」

「がれたわ」

「そうかな…あ、上

「うそっ！？ くっ、残りはこの4人って訳ね」

「罰ゲーム怖いよぉ〜」

「いよっし！ こうなったらちびっ子にだけは負けられねえぜっ！」

「その意気や良しっ！ 最後まで抗わせてもらっようっ」

「例え直ぐに消えてなくなってしまう現実だとしても。」

「そかあ、みさきも同じ大学ならレポートとか色々楽できるかもねえ」

「あんたは…やっぱりそれか、それなのか。日下部？ あんまりこなたを甘やかすんじゃないわよ？」

「うえ…？ 寧ろ頼るつとしてたあ
たしがいる」

「あははっ ゆきちちゃんもそう思っただっ」

「ふふ、そうなんで

すよね」

「私もそう思っとな、佐藤君は？」

「ノーコメントで」

「残しておける最後の思い出にはしたくないから。」

「そんじゃな」 何かあったらいつでも電

話くれよ」

「またね、皆。今日は凄く楽しかった」

「僕達は明日を生き残る。」

……
……
……

「どういう…事…それ。う、嘘よね？ 流石に笑えないわよこなた、佐藤君」

「核…ミサイル…って。本当なの…？」

「もし、それが事実だとしたら…世界は確実に滅びますね、よしんば生き残れたとしても地上は死の大地と化し、悪魔蔓延る世界になる…」

「クズノハから聞いた確実な情報だよ、私も信じたくないけどさ…というか普通誰も信じないね」

「日曜日の昼頃、正確な日時は分かっているけどそれを目安に世界中に核が落ちる。僕達を守りきれなければ、ここにもね」

高良さんの部屋に集まって明日以降の事を話している僕達。

信じらないと言った表情で僕とこなたを見ている3人だけど、僕達が嘘をついていないのは分かっているのだろう、その言葉に力は無

かった。

「一応最低限の保護はされているよ。聖母候補と言われている高良さんと親類縁者の保護、柊さん達を地下シェルターに保護する約定もしてある」

「それって、もしかして」

「私達がこの町に核を打ち込む基地を潰す代わりに家族や知り合いを地下シェルターに保護してくれるようになったんだよ。私と大樹君と、数人かなそれで基地を攻めるんだってさ」

「そんなっ！ そんな事したらこなちゃん達がっ！」

「それについては問題ない。僕の間があれば核着弾前にシェルターに逃げる事は可能だよ、他の仲間は無理かもしれないけどこなたと僕だけは確実に逃げられる」

「本当に…それしかないんですか…？」

「正直言えば僕も地下シェルターに籠ってたいけどね、せめてここだけでも核が落ちなければ最低限の土地を確保できるし生き残りも増える」

シェルターに入れる人数なんて多くても1箇所数百人が関の山だろっ。

数万なんていう人間は流石にどうにもできない、誰かが必ず死ぬん

だ。それはどうしようもない。

まあ、誰が死のうとどうでもいいんだけど、せめて知り合いだけは生きててもらいたいと思う。

「わ、私も手伝わっ！ 二人にはかり任せてられるわけないじゃないっ！ し…死ぬ時は一緒よっ！」

「…ありがとねかがみ。でも、かがみ達じゃ正直辛いんだよレベル的に」

いきり立つ柊さんを止めるこなた。

正直この3人のレベルじゃ足手まといにしかならない、厳しいかもしれないが流石にこれはどうしようもない。

「……私に至っては力もありませんしね……」

「それにかがみ達にはやってもらいたい事もあるんだよっ！ ね、大樹君っ」

「うん。これは皆にしか出来ない。大人は多分信じてくれないだろう。柊さんの両親は裏に携わっているからもしかしたら大丈夫かもしれないけどね」

僕は何も収納していないマジックカードを数百枚単位で取り出す。

驚きに目を見張る3人。このカードは普段魔法しか入れてないから魔法カードだと思っっているのだろう。

「これって、佐藤君が普段使ってる魔法カードだよな」

「あのマハ・ラギオンとか使えるカードでしょ？　もしかしてこれと一緒に…とかじゃないわよね」

「出来れば最低限の人にしか教えないで欲しい。この力がばれたらややこしい事になりそうだからね」

マジックカードについての説明をしていく。

説明をしていく度に皆の目が丸くなったり白くなりかけたりと、こんな所で言うのもなんだけど微妙に面白かった。

「佐藤君って…本当にとんでもないわね」

「アイテム収納箱の簡易版だしねえ。これがあれば食料や生活必需品を沢山収納できるよ」

「1個という限定がありますけど、その制約も矛盾でどうにか出来ますし、上手くいけば暫くの間の食料などが用意できそうですね」

「日本円が使えなくなるかもしれないんだよね…最低限だけ希望を持って残しておくとしても…かなりの物が買えるかも」

「お父さん達に相談するべきね、これは…確かにもし世界が滅んだとしたら必要になるのは食料などよね。これは私達にしかできないわ」

「私は既にある程度纏めちゃったし、後は基地破壊ミッションだけなんだよね。食料が足りない場合は助けておくれ皆」

「お二人の分もどうにかして確保しておきますので…だから無事に戻ってきてくださいね」

「大丈夫大丈夫、仲魔も居るし大樹君も居るからねえ」 結構気楽なもんだよ、買い物で飛び回らない分楽かもね。ニシシシ」

「ほほう。最近随分と乙女化してきているあなたさんは言う事が違いますなあ」

「うぐつ…そこを突っ込むか、かがみんや」

完全とまでは行かないがどうにかして核を回避する方法、もしくは核を未然に防ぐ方法を知ったお陰で少しは気分も楽になっていると見える3人。

世界の終末が後わずかだと知ってしまったのに、彼女達は強いな。逃げ切れないから諦めている…とは違う。

示された道を全力で走りぬくほどの心の強さがある。僕なら多分逃げていくか現実逃避していたかもしれないな。もしくは死んでも構わないと諦めているか。

本当なら直ぐにでも教えておくべきだったのかもしれないけど、せめて少しだけは今を楽しんで欲しかった、今を楽しみたかった。

「クズノハが助けしてくれる家族や人間は決まってる。どうしても他に助けたい人が居るなら、それこそ気絶させてでも地下シエルターに連れ込んだほうが良い。後で何を言われようと死なれるよりはましだと思っならね」

「…そうするわ」

「こつちの方だとゆーちゃんとお父さんは保護してくれるらしいし、ゆい姉さんと旦那さんもOKらしいから何とかなつたよ」

「取捨選択…か。とりあえず動かなくちゃね」

「私もみなみに連絡しないと行けませんね…時間が本当に少ないです…」

「私達も昨日聞いたからね…もう少し早く教えて欲しかったけど、寧ろ後1日余裕があると思わなくちゃいけないんだろっね」

「佐藤さんが居なかったら何もしないまま死んで居たかもしれないですね…佐藤さん、有難うございます」

「そうね、ありがと佐藤君。貴方のおかげで最低限でも生き残る術が見つかったわ」

「そだね…佐藤君ありがとう」

感謝…されても嬉しくないな。

僕は道しか示せない。彼女達を自分で守るなどとは口が裂けても言えないから。

こんな時に、何でもできるチート主人公などを期待してしまう…僕にもその力があれば…もしくは彼女達を助けてくれる主人公が居れば…と思う。

でも、そんな人間はいない。この町を核から守るのも何をするのも僕達が自分でやるしかないのだ。

「さて、伝えたい事は全部伝え終わっただし僕達も帰るよ。明日が本番だ、皆…頑張っって欲しい」

「あいよっ」

「ええ…絶対に生き残って見せるわっ！」

「うんっ！ 頑張るよっ！」

「私のほうでも出来る限りの事はしてみますね」

さて…僕の方は最後の…仕事があるな、両親が僕をどう扱うかだ。

とはいえこっちは別段どうでもいい、世界が滅びるなら二人は死ぬ

賑やかながらも、この後を考えるとほかないパーティーの様子。告げられたタイムリミット、終わりを告げてしまう世界。残った希望、という奴ですね。

誰も彼も取捨選択しなければいけない時がありますが、彼らにとつてはそれが今だったようです。

軽い返信について

邪教の館のおじいさんには既に告げてあるようですので大丈夫のようですね。

地下に居れば死なないでしょう。

薬品などは既に集めてるようです。食料も沢山ありますし崩壊しても暫くは平気ですねー。

どうでもいいこと

今日はTRPGの日です。楽しみですよー。

でもその前にやる事が沢山です…い、生き抜け私っ！！

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：30票
かがみ：22票
つかさ：24票
みゆき：9票
ダツキ：41票
アリス：5票

覚醒時ステータス成長表

力特化：6票
知魔特化：22票
体特化：1票
速特化：116票
運特化：5票
バランス：159票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue 49 〈崩壊への七日間・金曜日〉〈前書き〉

アンケート結果です。10:00までの全アンケートを頂きました。
本当に有難うございます。

一人で：0票

こなた：9票

3人で：8票

電話が：6票

かがみと帰る、など選択肢と違うものは全部『3人で』に入れさせてもらいました、ご容赦くださいませ。

こなたと一緒に帰るルートになりました。

なので、先に柊姉妹の視点からになります。

シリアス…というか少々辛い話になりそうです、よかったらどうぞ。

帰り道・柊姉妹視点

「世界崩壊…か。現実味があまり無いわね」

「そうだね…」

途中で大樹達と別れたかがみ達は、先程の事を考えながら悩み歩いていた。

突然突きつけられた世界大破壊。嘘や冗談でも無く突きつけられたどうしようもない現実に二人は困惑する。

明後日世界が崩壊しますと言われても今の現代を生きている人間の何人が信用するだろうか。

月が落ちて来る訳でも、大地震や火山の噴火などが起きた訳ではないのに明後日等しく人間は死に至ると言われても到底信じられる訳が無い。

大樹とこなたが告げた事に関しても、あまりに現実味にかけ離れているせいで逆に怯える事も無かったのは不幸中の幸いだろうかと思っていた。

お陰で、理性的に動けるのだから。

「沢山死ぬのよね…佐藤君達が上手くやったとしても」

「天使…か。お姉ちゃん、天使つて…神様つて何なんだろうね。人を救ってくれたり、勝手に殺したり…分からないよ…全然分からない」

「自分勝手、としか言えないわね。人間も十分自分勝手な生き物だけど、普通の人間が思っているほど神様や天使つてのは優しい存在じゃないわ」

「仏様とかなら…助けてくれるのかな」

「居る事はわかってるけど、流石に無理でしょうね。そんな事できるなら世界なんて滅びないし戦争だって無いわよ」

「……………皆…死んじゃうのかな、やだよ…そんなのやだよ…やだよ…」

「泣くんじゃないのっ！ 私達で出来る限りの事はするのよ。助けられる人は皆助ける、それが私達に出来る事よ」

かがみも泣けるなら泣き叫びたい、辺りに騒ぎ散らして両親に甘えたい逃げ出したいと心の其処では思っている。

だが、そんな事をして誰も助からない、誰も救えない。今動けるのは自分達しか居ないのだ、クズノ八が助けてくれるといっても限

界がある。

助けられない人も出てくるだろう。その中には知人だっているはず、つい先日まで一緒に話していた友人も、教師も、知り合いも、家族も無くなってしまうかも知れないのだ。

「とりあえずお父さんに達に話しましょ。そして明日動くのよ、それが私たちに出来る事なんだから」

「…うん……私達にしか出来ないんだよね……なら、頑張るっ！だって皆死ぬのは嫌だもんっ！」

「そうよ。それにこなたと佐藤君を信じましょ。きっとここを救ってくれるわよ、他の場所だってクズノ八が動いてるんだし…ね」

気休めでしかないが、それで少しでも前向きになれるのならと、つかさを励ます。

同時にそれは自分への激励となり、ほんの少しの勇気を与えてくれるようだった。

「それにしても凄いカードよねえ。佐藤君って本気で何者なのかしら、こんな魔法カードを作れるってことは並大抵の術者じゃないだろうし」

「だねえ。どんな物でも収納できるアイテムカード、なんだかゲームみたいだね」

「そうね、世界終末をどうやって生き残るか…ってこなたなら喜んで遊びそうなシチュエーションのゲームよね。現実じゃなければ」

「あつう」

「みゆきの方でも明日は買取とかしてくれるみたいだし、これからの事を考えるなら食料や生活必需品の収集は急務よね」

「後は助けられる人を地下シェルターにだねっ！」

「その地下シェルターってどこにあるのかしらね…明日クズノハの人が来るらしいけど。出来れば早めに知りたかったわよ。時間が無いってのに…」

「でも、二人が教えてくれなかったら分からなかったし、一日だけでも猶予があるよっ」

「そうねえ…せめて一月…いや半月でもあれば出来る限りの事は万端用意できたのに」

「人生は思うように行かないね」

「ほんとにね」

かがみもつかさも高校を卒業して大学で頑張るつもりだった。

時間が空けばみんなが集まって海に行くのもよかっただろう、こなたの家でゲーム三昧するのもよかっただろう。

自分達の誰かが車の免許を取って何処かに行く事も出来たかもしれないし、大人の恋愛とかも出来たかもしれない。

退魔士として名を馳せる事もできたかもしれないし、実家の巫女をやるのもよかったかもしれない。

未来はあった、確かに今日の朝までは。

未来があった、確かに今日の夜までは。

だが、今は無い。あるのは全てを覆うような絶望と破壊、神に縋ろうにもその神々が人間を粛清しようとしているのだ、誰にも縋る事なんて出来なかった。

二人ともこれが夢ならばよかったと思いたかった。実際は手の込んだジョークで明日になったらこなたが二人をからかって、共犯にさせられた大樹が謝る姿があつて、と。

だが…そんな淡い期待を持つ事はできない、真実はいつも唐突で容赦が無いものなのだから。

そう………何の容赦も無い。

まさかこんな所で誰かに襲われる事など無いと、考えていた油断もあった。

そして…渡されていた金色の珠は、【直接的な攻撃】以外には…反応しなかった。

「…でね、明日は、むっっ!!? んうっ!!?!!?」

「な、何っ!?!」

突然二人は何者かに羽交い絞められる、同時に口元に当てられる白い布。

えも知れぬ異臭が喉と鼻をつき、意識を混濁させていく。

危険を感じたかがみは護身用に持っていたスタンガンを相手に押し付ける。

「ガッ!?! …あぐっ…!?!がああっ!?!」

ばちっというスタンガンの音が響き渡ると同時に相手の力が緩んだ、その隙を狙って鏡は素早く魔力を練り上げる。

「がっ…!?! ガルーラッ!?!」

意識を失わないように唇を噛み切り即座に呪文を紡ぎ疾風魔法を形成した。

魔法は渦を巻き切り刻む風となつて後ろに居た誰かを弾き飛ばす、壁に突き飛ばされて小さく呻く何者か、動かない所を見ると気絶し

たのдарろつ。

ぐら付く視界を無理やり保たせると其処には数人の法衣姿の人間達を確認する。それはかがみでも知っている、メシア教のテンブルナイト達だった。

「メ…メシア…教…くっ…」

「聖母様は確保しました、このまま撤退しますっ!」

「こちらはどうしましょう…?」

「彼女は聖母様の姉君のようですが、適性は無い。ばれるのも困りますしここで神の慈悲を与えるのも一興かと」

「…な…舐めるんじゃ………ない…わよ…つかさを…離しなさいよっ! マハ・ガルーラッ!」

気絶しているつかさを運び出すメシア教の人間を庇うように道を阻むテンブルナイト達に全力の疾風魔法をしかける。

この時点ですでに、相手の命の事などがみは考えていなかった。

このまま連れて行かれれば絶対にろくな目に合わないと言っ事を嫌でも認識しているからだ。

「我らが守護天使よっ! お守りくださいっ!」

テンプルナイトの一人がそう言うと手に持っていた何かを翳す。

それは光を放ち、一瞬の内に数体のアークエンジェルが召喚された。

迫り来る暴風を天使達はテンプルナイトを守るように疾風を受け止める。

ある程度ダメージを与える事には成功したようだが、それは決定打にすらなっていない。

思考する、どうすればこの天使と人間達の隙をついてつかさの元まで辿り着けるかと。

魔法は恐らく天使達のカバーで散らされてしまうし、持っているカルトマジックでは悪霊程度しか動きを止める事はできない。

格闘など以ての外だし、緊急時でもなかったので持っているのはスタンガン一丁だけだった。

焦りばかりが募る。

「なんでつかさを攫うのよっ！ 私達があんた達に何したって言うのよっ！」

「攫ったのではない、本来あるべき場所までお送りするだけだ。あなたの方は聖母となるべき御方、世界が荒廃した後には救世主を御産みになる御方なのだっ！」

『その通りです人の子よ。手荒くなってしまいましたがこのままでは、聖母まで神の火に焼かれてしまう可能性があった。なのでこの時を待っていたのです』

「貴方には残念ながら死んで頂こう。何安心しなさい、聖母様の双子の妹ならばきっと天の国に向かう事ができるでしょう」

「ふざっ……けるんじゃ…ないわよっ！ マハ・ガルーラッ！」

怒りを叩きつける様に疾風魔法を放ち、それと同時にどうやって彼らを出し抜く事が出来るかを考える。

しかし帰ってくるのは全て不可能だという答え。

戦力が圧倒的に足りず、また時間が立ち過ぎている、街中で争っているというのに騒ぎも無いと言う事は進入阻止の魔法も掛けてあるのだろう。

流石にここまでではかがみも予想していなかった。聖母候補と言われているのはみゆきであってつかさではないと気が緩んでいた所もあるにはある。

世界の崩壊のせいでもここまで気が回らなかったのもある、だがこのままではつかさがどう言う目にあわされるか分かったものではない。

直ぐに携帯を片手で扱いこなたにコールする、流石に話している時間はないので繋がったら今の状況だけでも叫んで伝えるしかないだろう。

『無駄です人の子よ。これ以上罪を重ねる事はなりません』

「人の妹攫っておいて罪を重ねるなですって…？ あんた達の方が十分罪深いじゃないのっ！」

「天使様を愚弄するかっ！ 聖母様の姉だと言う事で安らかに聖地に送ってやろうと思っていたが…赦さんっ！ 貴様を異教徒と断じ抹殺するっ！」

「やれるもんなら…やってみなさいよっ！ 私を舐めるんじゃないわよっ！」

天使と一緒に襲い掛かってくるテンプルナイト。

それぞれが巨大なメイスなどを振り被り襲い掛かってくる、一人一人はどうかやら其処まで接近戦が得意な様ではない為避けるのは容易いが、問題は天使の方だった。

人間以上のスピードと空を自由に飛び回るそのアクロバットな動きで剣を振りかざしながら襲ってくる。

テンプルナイトは3人、天使は4体。そして此方は後衛火力が一人、どう見ても絶望的だった。

火力も弱点をつけていないので大ダメージにならない上、奴らは回復の魔石を多用しているようだった。

(詰み…か。まさか世界が滅ぶ前にこんな所で死ぬなんて…ね。つかさも助けられないし…幸せから急転直下って、こつ言つ事言つのかしら)

諦めるつもりはない、だが今の状況が正しく絶望的だと言つ事をかがみは嫌でも認識するしかない。

「あぐつ!? アギラオツ!」

『無駄ですつ! 神の裁きを受けなさいつ!』

「何が…何が神よつ! 誰も助けられない神なんて、私は信じないつ!」

天使の剣がかがみの胸に突き刺さろうとするその瞬間、天使達は弾き飛ばされた。

あまりの出来事にきよとんとしてしまっかがみ。よく見ると自分の周りに金色の膜が張られている事に気づいた。

「これって…結界!? なんて強度なの…? それに、私が移動すると結界も同時に動くなんて…なんてデタラメ!」

『おのれつ! 異教徒でありながら神聖なる結界を形成するとは…恥を知りなさいつ!』

「くっ！　メイスが通らないっ！」

「これ…は、こなたがくれた…佐藤君のアイテムって」

「大樹君印のすーぱーあいてむだよっ！　何かあったら護ってくれ
るから絶対に手放さないでねっ　　後大樹君にはお礼言っておいて
ね。」

「礼…なんかじゃ足りないわよ。これならっ！　あんたたちっどき
なさいよっ！！」

此方から放出する魔法は結界をすり抜けるらしく、疾風魔法が動揺
している天使達を数体COMPに送り返す。

地上に居るテンプルナイト達も巻き込んだ風の魔法は、彼らを弾き
飛ばしつかさの元に続く道を開く。

隙を逃さずに走り抜けるかがみ。だがテンプルナイト達も直ぐに体
勢を立て直しかがみを追い始めた。

「魔法とか使っていない限りは、まだそんなに遠くに行っていない筈。
つかさ、待ってなさいよっ！」

「逃がすかっ！　聖母様の下へは行かせんっ！」

テンブルナイトの一人が懐から銃を取り出しかがみ目掛けて乱射する、しかしそれすらも文珠によって形成された結界は撓むことなく全てを無効化させた。

霊的な攻撃も、物理攻撃も射撃攻撃も効かない結界など個人で、それも一瞬で形成できるものではない。

それは既に神の御技か悪魔の魔法のようなものだ。

「くっ……さっきの薬品、多分睡眠薬か何かね…今頃になって意識が…」

全力で体を動かさせば動かすほど、全身がダルく言う事を利かなくなってくる。

回復魔法などを得意としているのはつかさなので、かがみは今の状態を治す方法が無い、今は結界が護ってくれているがこれも永遠に持続するものではないだろうし、予断は許されない。

自分の頬を強く張り、意識を保たせながら走り続ける。

「つかさっ！ 目を覚ましなさいっ！ どこに居るのよーっ！！」

ありったけの声を出して叫ぶ、今更人目など気にしている余裕はないし、寧ろこの場合は誰かが気づいてくれたほうがかかみにとって

有利だった。

しかし、認識阻害や進入阻止の魔法によって封じ込められた空間では一人が叫んだ所で何の意味も無い。

「急がないと…こんなのないわよ…こんなのもって…ないわよっ！
メシア教も神々も…全員ふざけてるっ！」

それは憎悪だろう、強く深い憎悪。

かがみ自身、多少怒りっぽい節があり、普段から怒ったりはするが、それはその比では無かった。

メシア教が行う事理不尽に対する純粹な怒り、自分達の都合だけで世界を破壊しようとしている神々に対する怒りがつかさを攫われた事によって憎悪となって噴き出した。

もつかがみに彼らを殺さないでという考えは抜け落ちている。

つかさを護れるのなら、助けられるのなら人を殺めるのも致し方ない…まるでそれは混沌の様な思考。

奥の方に人影が見えた、紛れも無いつかさを攫ったテンプルナイトだった。かがみはニヤリと笑みを浮かべながら魔力を高める。

「…！ 見つけた…逃がさないわよっ！ ガルーラッ！」

足を切断するつもりで放つ疾風魔法が、その役目をきっちり果たしその男の足を両断した。

ぐらりと倒れこみ絶叫するテンプルナイトの男。気を失っているつかさはその場に無造作に倒される。

「つかさっ！」

あと少し手を伸ばせばこの手が届く、後はこの結界が続く限り魔法を使い攻撃をしながら逃げるだけだ。

つかさも同じアイテムを貰っているから、攻撃を受けたら同じ結界が形成される可能性が高い為逃げ切るのは容易だと考えた。

・今助けてあげるからねっ！！

その言葉を紡ぐ事は…出来なかった。

「え……あ……れ……つか……さ……」

その剣は文珠の結界すら無効化しかがみを貫いた。

天使の一斉攻撃すら意に返さない強度を持つ結界をあっさりと破り、

その剣はかがみの心臓を確実に捉える。

全身の力が一瞬で抜け去り、膝から倒れ落ちる。

『中々の強度……普通の天使ではダメだったでしょう……』

「ヴィクター様っ！ おお……上位天使様がこちらに来ているとはっ
っ！」

掠れて行く意識の中、テンプルナイト達の声が聞こえたが、そんなものはどうでもよかった。

目の前につかさの居る、だから助けなければいけない。姉である自分が……だから必死に手を伸ばし……

つかさの手に自分の掌を重ね……かがみは息を引き取った……

……

……

……

電話はいつまでもこなたの携帯をコールし続けている……

いっまでも...

いっまでも...

「厄介な事になったなあ……こりゃ。ああ、そうだ至急部隊を用意してくれ、ん？ 大丈夫だ多分力を貸してくれるさこの状況ならな。………しかし、本当にタバコがまずくなるなこれは、よ」

だが、彼女の物語はまだ終わらない。

どんな事があっても、時間は進む、どれだけ取り返しのつかないことが起きたとしても、時間は……続くのだ。

コミュパートからつかさが一時的に除外されました

コミュパートからかがみが一時的？に除外されました

つかさメシア教に拉致される。
かがみ死亡の回でした。

とは言え、多分皆さんが予想されている通りっぽい感じになりそうです。

今回は佐藤君+こなたのシーン。なんで電話に出れなかったのかがわかります。

メシアとガイア教にマジックカードが渡ったかと思いますが安心を。

ケースに入れてますし、使い道が分からなければただの札です。使い方も一応あるので、ばらさなければ大丈夫です。

今回でかがみとつかさがアンケートに投票できなくなりました。進み方によったら復活するかもしれませんが。

どうでもいいこと

お話を書く時はよく音楽を聴きます。

私の最近のお気に入りはカレンデュラレクイエムですね。

皆さんは何か集中する時何か歌を聴きますか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお

答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：35票

みゆき：10票

ダツキ：49票

アリス：6票

覚醒時ステータス成長表

力特化：6票

知魔特化：23票

体特化：1票

速特化：120票

運特化：6票

バランス：170票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue50 ～崩壊への七日間・金曜日～（前書き）

金曜日？なのですよ。

今回は最後への繋ぎですね。そろそろ漸く序章が終了しそうです。

50話で序章って…終わる気あるのか私…（汗

途中で止まらないか自分で戦々恐々としています。

二人で帰り道を歩いて行く。

柊さん達と一緒に帰るのもよかったが、ずっと一緒に居ると逆に辛くなるかもしれないとこなたから言われて途中で別れる事にした。

どっちにしても死ぬつもりはないし、世界が崩壊したとしても知り合いは生きていると信じているから僕はそこまで心配はしていないと思いつむ。まあ、気休めなのだけ。

「明日は世界を救うスーパーミッションだねえ。ダンボールいるかな？」

「どうしてあれで見つからないのか僕には不思議でならない…皆目が節穴なんだろうか」

「ゲームに突っ込んだじゃだめだよー。私も思ったけど」

《きつとダンボールに認識障害の魔法がかかっていると思うわっ！》

「いやいや、あの世界は魔法ないから」

「…いい感じにいつものテンションだね。これなら明日も大丈夫かな」

「うんうんっ 任せてよスーパーこなたんの底力見せてくれよう

ぞっ　でもお母さんはまだ召喚できません、無念」

《あー、あのすっごい奴でしょ？　確かに使えたら楽だけどね》

《オレもいつかはそこまでのクラスになってやるさ。今は力を借りるしか出来ねえけどな》

守護天使の力か…ゲームではステータス上昇と魔法の取得で、違うルールではいつか守護天使に連れて行かれる代わりに巨大な力を使えるという能力。

対象の守護天使はアムルタートと聞いているから大天使なのだろうけど、こなたが言うにはお母さんがその力を振るっているらしい。

確かに使えれば逆行もどうにかできるかもしれないけど、あまり使わせたくはないな。

「とりあえずは…明日か。高校を卒業した次の日が下手すれば最後の戦いになるって、ゲームでも滅多にないな」

「そだね。現実ってのはゲームや漫画より理不尽って事はよくわかったけどさ」

《所詮この世界はそんなものよ。神々は人間や悪魔を自分の力を高める家畜としか考えておらん。我ら魔王も似たようなものだが、滅ぼすという阿呆な事はせんよ》

「フィクションとかでは普通逆だけど、魔王や邪神はそう言う事考

えないのかい？」

《当たり前だ。確かにそんな破壊的な事を考える悪魔がいないとは言わんがな。大多数の我ら魔王や魔神は人間を生かさず殺さず存在させるのが必要だと考える。よく考えれば簡単だろう？ 人間が居るから妖怪が居る、人間が恐怖するから強くなる者も存在するのだ。人間と交流を持つ悪魔や恋仲になる悪魔さえいる。思想の違いはあるにせよ我ら悪魔は人間とは切っても切れない関係なのだ。それを自分を崇拜しないという理由だけで皆殺しなど狂気の沙汰だ》

《人間も馬鹿が多いけど神々も馬鹿が多いってことよ。そういう口ウ側の悪魔ってのは固定観念が崩せないからそうなりがちなのよね》
「要は、それぞれ自分勝手に動いた結果って事か。やるせないね現実ってのは」

「大樹：君」

「僕は神を崇拜なんてしないし、悪魔に媚びるつもりもない。単純に知り合いとそれなりに満足に暮らせればそれでいいさ」

「そうだね、他の場所で誰が死んでも私達にはどうしようもないし、どうにかする義務もない。けれど大事な人と自分が幸せに生きていけるくらいには…幸せになりたいよ」

今もこの世界が日曜日以降も普通に過ぎると思っている人間が大多数だろう。

夢を持って今を頑張っている人間もいれば、絶望して日曜日を待た

ずに自殺する人間だって居る。

多かれ少なかれ人間はそれぞれ自由に生きてるし、色々考えているのだろう。

僕達が成功しようと失敗しようと誰かが死んで、誰かが生き残る。

人間同士で醜い争いでもしてお互いに死ぬのなら、自業自得だといいたいけど。自分達の都合だけで超常の存在が僕達を滅ぼすのは許容できないししたくない。

信仰しないから、崇拜しないから、お前達は死に耐えろというのは子供のわがままと何が違うんだろっか。僕からすればどちらも変わらないし神のほうが悪いのと思う。

「難しい事は考えても答えは出ないよ、哲学者や神様自身じゃないからね。だから僕はやりたいようにやるだけさ。僕は仲魔やこなた達に死んでもらいたくない、僕も死にたくない。だからその為で生きることをして生き残る」

「私も、皆で一緒に過したいよ、これからも。だって…それが私の幸せだもん」

《死にたくなければ戦って生き残るだけだ、これから先もな。サマナー、お前が戦うというならオレは力を貸す。オレ自身が強くなるためにもな》

『そうですね。我が主をお守りするのが我が使命です。銃に身を賣した今でもそれは変わりありません』

《おやおやおやく？ 元々人間は死ねーって言ってたミトラスちゃん
んが可愛くなつたねえ》

『あ、アリス様っ、そんな昔の事は忘れてくださいっ！』

「ほー、そこんところkws k」

《おー、アメリカも聴きたいです。確か黒歴史という奴ですね！》

《あはは、楽しそうですわあ》

『ひえええええ。我が主よアリス様をお止め下さいませええええ』

諦めたほうがいい、今のアリスは止められないよ。

『何か悟ったような顔していらっしやるっ！？』

《ま、諦めて弄られてるや》

『酷いつ！？』

「やれやれ、明日は大変なのに緊張感がな…電話？」

皆の会話で和んでいる所に電話がかかってきた。

僕に電話をしてくる人間といえば高良さんや柊さん、もしくは邪教の館のおじいさんが稀に依頼で掛けてくるだけだが。

とりあえずCOMPを取り出すと信じられない人からかかってきていた。

「……………」

「ん？ 大樹君電話？ 誰から？」

「父親からだ」

「え…？」

まさかあの父親から電話がかかってくるとは思わなかった。恐らく未だに帰ってこないから気にしてたんだろう。

いい意味ではなく、ほぼ100%悪い意味で。

とはいえ一向に鳴り止む気配もないし、仕方ないから出るとしようか。どうせ家に戻っても出て行くとか離婚とかの話になるのだろうし。

とりあえず電話に出ると、珍しく切羽詰ったような父親の声が聞こえてきた

『だ、大樹かつ！？ 今どこに居るんだっ！？』

「家に帰る途中ですが？ 何かありましたか？」

僕は両親に対する時は常に敬語で話している。

尊敬しているとかではない、単純に他人と考えているから気安く話しかけるといふ考えがないだけだ。

小さい頃はこうすることで両親が少しでも僕の事を気に掛けてくれるかもと、子供らしい事を考えたものだけだね、直ぐ諦めたけど。

『母さんを見なかったか？ 連絡もないし帰ってこないんだよ』

「さあ…？ 流石に知りませんが？ その内帰ってくるのでは？」

『そういう訳にも行かない、お前も含めて大事な話があるんだよ。どうか一緒に探してくれないか？ 頼むっ』

はっきり言おう、物凄く胡散臭い。

普段は話しかけもしないくせに、今日はおかしいくらいに饒舌に話しているのもあれだが、母親が居ないから一緒に探してくれというのも珍しい話だ。

母親が居ないというのも多少は気になったが、最近はや夜出かける事も多いし気にする事でもないはずだ。

やはり卒業したのが関係しているのかもしれないな。それほど早く別れたのかどうなのかしらないが。

「申し訳ありませんが、人を待たせていますので。先ほども言いましたけど、その内帰ってくると思いますよ?」

『母さんが心配じゃないのか…?』

「心配するほどのものではないと思いますが、いつもそうでしたし。何で今日に限って?」

心配そうにこちらを見ているあなたも居る事だし早く電話を切ってしまいたい気持ちに駆られる。

最早僕の心に貴方達は存在していないし、明後日万が一核が落ちたら死ぬ人達だ興味もない。

だというのに、今更絆がどうだのこれからの事を話したいだのやかましい事を続けてくる父親にいい加減にうんざりして口だけ探すのを手伝うと告げる。

余程嬉しいのか直ぐに声色が変わる父親にうんざりしつつも待ち合わせをする事になり電話切った。

「えっと…どこかのバイトの上司?」

「いや、父親だよ」

「うえ…？ で、でもいつもの大樹君とは思えないくらい馬鹿丁寧な口調だったから」

「凄いいわれようだね。両親はまあ…僕にとってはどうでもいい存在だからね、悪意を込めて敬語になっている部分はあるけど」

「あ、悪意ですか…大樹君に敬語で話しかけられないようにしなきゃ…」

「そうだね、オタク論議でノンストップになったらならないでもない」

「あはは…で、何があったの？」

「母親が居なくなつたから探して欲しいって言われたよ。最近毎日夜は居ないのに今日に限って何のつもりだろうね」

「なるほどねえ…」

「こなたも僕の両親についてはある程度想像がついているのだろう、僕が悪し様に言っても特に何も言う事はないらしい。」

僕としては彼女の態度はとても助かる。これで両親なんだから大事にしないと、などと言われたら逆にショックだから。

「それでどうするの？」

「どちらにしろ解決しなくちゃいけないしね、行くだけ行ってみるさ」

「そんじゃ私も手伝おうかな」

「いや、流石にそれは」

「ほら、色々お話したいじゃん？ 大樹君に関する事とかね。それにまだ聞いてないよ？」

「え…？」

「答えてくれるって、昨日言ってくれたじゃん。女の子はその辺敏感ですよ？ 大樹君？」

そうやって笑うこなたの表情は、いつもみせる元気な笑顔ではなく、女性の微笑みに見えた。

ほんとに…

「それじゃあ、さつさと終わらせようか。僕もこの問題はさつさと切り上げて本題に入りたいからね」

「おっ。ふふふー」

《むー。ま、まあ人間の一人くらいなら許容しないで…》

《私は3号でいいですわあ》

《自重しろてめえは》

《やれやれ、明日は戦争だというのに色ボケだな。サマナーよ》

「好きなだけ言ってくれモー・シヨボー。さ、行こうかこなた」

「おつよっ」

これで両親とのしがらみも最後にしよう。

どっちにしても僕達にはこれ以上そんなどうでもいい事にかまけて
いる時間は無いのだから。

……

……

…

- 父親視点 -

「これでよし」と

後は待ち構えているメシア教の人達に任せておけば晴れて俺は英雄
って訳だ。

金もたんまりもらえるし、女も好き放題にできるっ。 いやぁこれほ
ど簡単でいいのかな。

「なあ、そう思うだろお前も」

横で倒れている妻に話しかける。

あ、いやもう妻じゃないな。ただの肉の塊だったか。

「本当にこいつにも困ったものだ。何が『大樹の為にやり直さない
?』だ、そんなつもりは毛頭無かったくせに。知ってるぞ? お前
が他の男に貢いでる事くらいな。俺と暮らして金を集める算段だっ
たんだらう? あわよくばあいつからも搾り取るつもりでなあ」

馬鹿な女だ、なまじ見てくれがいいせいでチャホヤされやがって。

「あぶぶぶぶぶ…に…ぐ…にぐうう…」

事もあるうちにこいつは俺の足首を噛んで来やがった、それも生半可な力じゃない噛み千切られそうなほどの力だ。

あまりの激痛に力を入れる事ができない、足を振って弾き飛ばそうとしてもこいつはまるで石の様に動きやしねえ…なんだよ、なんなんだこれは。

『…おーおー。仲のいい夫婦だなあ、きひひひひっ』

「あ、あんたはっ！ た、助けてくれっ！ こいつおかしくなっつやがるっ！」

俺に金になる話を教えてくれた男がいつの間にか家に入ってきていた。

このままでは足を食い千切られるかもしれない、こいつに助けを求めなければ。

「お、俺は英雄になれるんだろっ！？ 金は手に入ったんだっ！ あんたにも分けてやるからこのキチガイをっ！」

『おいおい、可哀想な事言つなよお。せつかく死んでも相手にしてくれてるんだぜ？ 男冥利につきるんじゃないかねえの？ ひひひひっ』

「し、死んで…？ そりゃ確かにさつきは死んだと思ったけど生きてるじゃないかっ！？」

『いんや、死んでるぜ？ 死んでる死んでる。今はもう立派なゾンビになってるさあ』

「ぞ…ゾンビ…ゾンビッ？！ そ、そんな馬鹿なっ！ 空想話じゃあるまいしっ！ そんな事がっ！？」

『きひひひっ まあゾンビになったのは俺の瘴気のせいだけだな

あ 安心しろよ？ ゾンビに殺されたら立派な仲間になれるからよお』

「ひ…人の話を聞けよっ！ 助けてくれっ！ 何でもするからっ！」

ホラー映画じゃあるまいしそんな馬鹿な話がある訳がない。こいつはまだ生きて…生きて…

な、なんだあの顔は…？ 青白くなって目が澱みながら俺の足首を噛んでいるこの女は…？

まるで発狂したような表情で俺の足を噛んでいるこの女は…

ゾンビだと…じゃ、じゃあ俺も…こいつみたいになるっのかよ…い、嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だっ、金は手に入れたんだこれからは女を自由にしてハーレムを築いて自由に生きて行くはずなのにっ

『運が悪かったんじゃねえの？ きひひひっ、きひやひやひやひや

ひゃ！ 助けてやってもいいぜ？ ゾンビになりたくないんだろ？
なりたくないよなあ？』

「な、なりたくない…なりたくねえよお…た、助けてくれえ…」

『あるぜえ？ ゾンビにならなくても済む方法がさあ？』

その男は笑っていた、嗤っていた、晒っていた、ワラッテイタ。

まるで、これから起こる事を待ち望んでるように…だけど俺が死な
ないためにはこれしかないんだ。

「そ、それでいいっ！ なんでもいいから俺をっ！」

…
『それでいい、ねOKOKじゃあ直ぐに終わらせてやるよお。きひ
っ、きひひひひひっ』

そういうと男は俺の首を掴んできた、同時に何かが抜け落ちて行く
…あ…これは…？

「な…にを…？」

『マグネタイトが無くなって消滅しまえばゾンビにはならねえよ
？ よかったなあ！ ゾンビにならずに済むぜっ！ きひひひひひ
っ』

「話が…ちが…」

『それでいいって言ったじゃねえか？ 他にも色々方法はあるのに、アンタは『それでいい』といった、だから俺は言われた通りにしてやってるだけだぜえ？ 自分で決めた事には責任持てよお』

こいつ…初めからそのつもりで…畜生っ、金も女もこいつに奪われるのか。

騙されるなんて…俺が何をしたって言うんだ。畜生、畜生、畜生、畜生…

ちくしょ…

……

……

…

- 父親視点解除 -

「大した足しにもならねえなあ。人間とゾンビじゃ、さーて復讐のスタートって所だな」

メシア教の奴らも十分集まってくれてたから、そいつらを生贄にし

て異界を作る準備ができたからなあ。

核ミサイルで世界を浄化ってか？ ご苦労様な事だな天使ちゃん達よお？

俺はそんな無粋なことはしねえぜ？ 早々早々そうそうそう
うそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

もっと派手に壊してやろうや？ なあ？ それじゃ悪魔も人間も限りなく滅つちまうだろうが？ なあ？

だからよ、だからよ、もっと簡単に破壊するべきじゃねえの？

具体的にはっ！

「この世界を、異界で塗りつぶすってなあっ！ あひやひやひやひやひや！ 鍵は俺だ！ 生贄は君だ！ 揃った！ 俺がいるっ！ 適当に選んだ生贄もいる！ 俺が選んだ主賓もいるっ！」

『来たよ、きたよきたよきたよきたたたたたたたたたた 崩壊の時がっ！ さあ鍵よ？ 神より早い絶望を届ける時が来た』

『うふうふうふうふうふうふうふう！ 悔しがる神様、悔しがる天使泣き叫ぶ人間に、喜ぶ悪魔っ 絶望がスパイスのメインディッシュユがきちゃうわねっ 鍵よ、貴方が決めるのです』

「世界の崩壊と俺のイジメが一緒にできるってのは嬉しいねえっ！ さあ始めようやっ！ フェスティバルの開催だっ！！」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

・その日、何十人の人間が世界より消える事になる。

天に仕え神を愛する代行者達と、優しき心をもつ聖母

世界の混沌を望む人間達と、堕ち掛けた少女

未だ覚醒を見せぬ聖母

そして、ただの人間とただの少女

物語は始まったばかり。

これより先、彼が彼女達がどのように生き抜き、関係しあい、殺しあうのかは…全て、貴方様次第でございます。

それは神の炎を奪い取り世界を止め、邪悪なる者達の悪意を潰し、ただ無心に走り続ける一人の少年の物語。

長く短い序章を終え、ついに物語は動き始める時が訪れました。

だが、もう一幕お待ち頂きたい。

最後の、最後の、最後の序章、感動とはいえないフィナーレをお客様にお見せいたしましたしょう。

NEXT……日常編最終話

Continue50 ～崩壊への七日間・金曜日??～（後書き）

と、核が振る前に何か起きるっぽいですね。

まあ、無心ルートに突入と言う事なのですが…。

とりあえず次回で序章終了なのです。52話からは本編スタートなのですよ。

とはいえ行き当たりバッタリなのは変わらないので、大して変わらないかも…

土曜日は暫くお預け…かな？

世界大破壊が近づいている上に、上乘せで世界崩壊フラグ…

どれだけ世界壊したのかと神様と邪神に問い詰めたいです（書いてるのは私

えーと前回の選択肢によってどう変わるかをここでネタバレなのですよ。

一人で帰る…

これは単純にこなたを含めた皆が襲われるフラグですね。

信頼度の一番高いキャラが逃げ残って佐藤君に電話をして…って感じで進める予定でした。序章終了が遅くなりそうですね。

3人で帰る…

こっちは全員生存+かがみつかさも同時に来るフラグでした。

とはいえテンプルナイトじゃなくてシスターが来る予定でしたが…争っている内に

おかしくなった…というか操られた父親が生贄のメシア教の方連れ

てきて異界にぱーんとされる予定でした。

電話がかかってくる：

あるいみ序章終了に一番近くて、みゆきも含めた全員が佐藤君と一緒に異界に巻き込まれるフラグでした。ちなみにお父さんからの電話ですよー。

どうでもいいこと

寒いですが、かなり寒いです。布団や炬燵が恋しいですよ。

北海道は寒いからいやです…でも熱いのもいやです…

生きる事は修行…よく言ったものですね。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：38票

みゆき：11票

ダッキ：53票

アリス：8票

覚醒時ステータス成長表

力特化：7票

知魔特化：23票

体特化：1票

速特化：122票

運特化：6票

バランス：175票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue 51 〈序章の終幕と絶望の開幕〉(前書き)

序幕終了なのですよー。

いろいろはっちゃけた気がします。

51話：いつのまにか結構書いてますねえ…全然レベルアップしませんが(涙)

そういえばPVが75万 ユニークが8万を超えていました。

いつも見て頂いて本当に有難うございます。

なんだか物凄く最終回っぽくなりましたが、明日も普通続きます
(えー)

Continue 51 〈序章の終幕と絶望の開幕〉

異変は直ぐに分かった。

理由は簡単で百太郎が反応し始めたからだ、同じくCOMPを持っているあなたも警戒態勢を取りつつ目的の場所まで歩いて行く。

多分この先にあるのは異界だろう、どんな規模の異界かは分からないが碌でもない事が起きそうで正直頭が痛い。

となるとこの奥に居ると思われる父親は色々な意味で怪しくなる。

まさか裏に関わっているとは思わないので、異界に巻き込まれただけの可能性もあるが、もしかしたら裏に関わっていて僕をどうにかしようところに連れてきた可能性もある。

「なんかすつごく嫌な予感するんだけど…」

「奇遇だね、僕もだ」

「反転して逃げちゃおっか？」

「僕もそうしたい所だけど、そうも行かないようだよ」

百太郎がレッドを示している、近くに悪魔が居る可能性がとても高い。

マジックカードを起動して武器だけは取り出しておく、防具は流石に着ている時間はなさそうだ。

武器を用意した後、直ぐに僕達はCOMPを取り出して仲魔を召喚する準備を始める。

「召喚、アリス、モムノフ、アメノウズメ、アメリカ、モー・シヨボー」

「召喚っ、皆出ておいでっ！」

僕達が悪魔を召喚するのと、誰かが襲ってきたのはほぼ同時だった。

『ぐろおおおおおっ！』

『ほいほいつとねっ！』

「こっちはアメリカと二人で行くのです」

全身から雷を放出している悪魔にアリスとアメリカのコンビが相手をしてくれる。

ライジユウとは違いかなり強そうな悪魔だ。人の顔をしている獣で雷と言えば恐らく妖獣・ヌエだろう。かなりの強敵だけどアリスが居るなら大丈夫だな。

「こなたっ！ 後ろは頼むよっ！」

「おっけーっ！ さあさ、フルボッコにしてやんよっ！」

同じくマジックカードから取り出した銃を乱射するこなたに後ろを任せて、僕は目の前の悪魔を相手にする。

アメノウズメとモー・シヨボーが前衛になってくれているので僕も銃で応戦する。

こなたの方も後衛は彼女自身が行い、仲魔達がそれぞれの役目を果たしてくれているようだ。

『ヒュー 随分な歓迎じゃねえか。サマナーの父親のせいなのかしらねえけどなっ！ おらあっ！！』

『ぐげえっええっ！？』

ほとんどが一度以上相手にした事のある悪魔ばかりなので、単騎で集団の悪魔を薙ぎ払っているモムノフ。

強そうな悪魔は数体位しか居ないようで、この場では彼女の独壇場のようにだ。

見た所問題ないようだし、僕は僕で戦うしかないようだ。

目の前に居る悪魔数対…見た感じは獣の悪魔のようだけど、見た事は無いな。仲魔が牽制してくれている間にアナライズを終了させる。オグンの時とは違い直ぐにアナライズが完成する。

「邪鬼ウエンディゴか…厄介だな、だけど火と電属性に弱いか…。アメノウズメ、マハ・ジオンガ！ モー・シヨボーはポパスマで相手を恐怖漬けにしてくれ！」

『はい さあさ、快樂の痺れ…受け取ってくださいなあ』

『小技か…仕方あるまいっ！ 恐怖に…脅える雑魚どもがっ！！』

ブフーラを唱えようとしているウエンディゴ達が急に脅えだす。

恐怖付着の魔法・ポパスマは威力こそは無いが乱戦や頭の悪い悪魔などには特に有効だ。

火力だけで押し切れるならそれに越した事はないが、搦め手を使うのもまた戦術だ。おかげで彼らの動きは止まり、弱点であるマハ・ジオンガが直撃して行く。

流石にタフなようで、その一撃だけでは死なないが痺れによって動きを阻害されていた。

「まだだっ！ 追撃する！ モー・シヨボーは羽ばたいて相手の動きを阻害！ 抵抗を持っているけど動きを止めるだけで良いっ！」

『ふんっ、従ってやるっ！ 喰らえっ！！』

上空に飛び上がりその翼を団扇のように振り下ろす事でザン系の魔法に似た疾風を作り出す。

奴等は風に耐性を持っているが…これは動きを止める繋ぎでしかない。

精神を集中し、僕は自分の中の自分呼び出す。

「ペルソナチェンジ…ヘルツ！ 来いっ！ ファイアストームだっ
！！」

ペルソナ・ヘルを呼び出してニヴルヘイムにある凍れる炎を顕現させる。

美しい容姿を持つその姿から想像できないほどの無慈悲な炎が両手を広げたヘルの手に集まって行く。

『凍れし世界に延々と燃え続ける地獄の業火…味わいなさい下郎どもっ！！』

青色の炎がウエンディゴ達を包み込むように燃え続けて行く。

聞こえてくる絶叫が凄く耳障りだ、少し前の僕ならこの声だけで脅えていたかもしれない。

というよりハーモナイザーを起動してなければ今でも竦みあがりそうだけど…

多分これで倒しきれるはずだ…と考えていたら巨大な氷の槍が複数混じった吹雪が此方に向かってくる。苦し紛れにブフーラを詠唱したようだ。

相性通常のアメノウズメはともかく、モー・シヨボーは氷が弱点だ。僕は彼に魔法が来る前に躍り出た。

『なっ！？ サマナーっ！？』

「無駄っ！」

襲い掛かってきた吹雪は僕の目の前で障壁に弾かれたように炎の中に突っ込んで行く。

ブフーラがくる事を見越してヘルにチェンジしていた甲斐があった。物理にはひたすら弱いヘルだけど死者の国の女王だけあり、氷の相性は全反射してくれる。

ウエンディゴ自身も氷は無効だけど、吸収の相性じゃない限り、反射してくれるのはありがたい。

暫く燃え続けた炎が消え去るとマグネタイトに変換されていくウエ

ンディゴが見えた。

『礼は言わんぞ？ あれくらい我なら避けられたのだからなっ！
本当だぞっ！』

『最近流行りのツンデレですわねえ 男の娘のツンデレはポイン
ト高いですわよお』

『我は普通の男だああああ…魔王の威厳…魔王の威厳が…』

「ド…ドンマイ…」

さて、のんびりしている暇は無い。

辺りにはまだ沢山の悪魔が居るし、ここは異界の中ではないからこのまま騒ぎ続ければ誰かが来てしまうだろう。そうなたら厄介だ。警察なんて来たら目も当てられない。

「いよつとっ！ 雑魚ばかりだけど数が多いね。そっちはどう？」

「厄介なのは潰したよ、後はモムノフの方とアリス達の方かな」

助けに行きたいけどまずは目の前の悪魔達をどうにかしないといけない。

マジックカードを取り出して、戦闘を続行する。

「とりあえず…父親が居たら殴るかな、八つ当たりかもしれないけど。というか犯人っぽいなあ」

マハ・ジオンガを詰め込んだカードを起動しながら僕は嘆息する。

・アリス視点・

『ヒョーヒョーヒョー。こんな強い嬢ちゃんが居るとはのう、異界から出てきた甲斐があったわい』

「顔が気持ち悪いです」

『同意』

『ヒョーヒョー。酷いのう、ワシはこついう悪魔じゃかなあ勘弁してくれんかの?』

飄々としている目の前の悪魔。

多分いつも行ってた異界に居るユニークのビフロンス位の実力はあ

りそうね。

昔は梃子摺ったけど、今の私とアメリカちゃんが居ればどうとでもなるクラスの相手かな。

問題は見た感じからして得意技のジオ系が効かなさそうな所ね。早く大樹さんを助けに行きたいのになあ。

『なんでもいいわよ…とりあえず』

魔力を込めてできるだけ無邪気にそれでいて妖艶に言葉を紡ぐ。

- 死んでくれる？

途端に悪魔の表情が無表情になり、自分の首を前足で搔つ切ろうとする。

けど……………

『ああああああっ！！ ヒョー…嬢ちゃん、凄まじい技を使うのう。正直ワシでなければそっくり首を切り落としていたかもしれん』

『ちっ…効くとは思ってなかったけどね。一筋縄じゃいかないか』

「なら、これはどうですか？ 質量を持つ闇なのですっ！ ダムド

っ！」

アメリカちゃんのダムドが襲い掛かる。範囲は狭いけど威力だけならメギドにも迫る万能魔法が悪魔目掛けて凄まじいスピードで飛んで行く。

でも、悪魔もくるのが分かっていたのか急上昇してダムドを避けきってしまっ。

下手に魔法を撃っても当たりそうにないわね。

『ヒョー！ 今のは肝が冷えたわい。ならば次はワシの番じゃなっ！
ケエエエエエエエエエエエエッ！』

上空に居る悪魔が息を大きく吸い込むと嫌な色のブレスを吐き出してきた。

流石に距離があったので私もアメリカちゃんも横に飛ぶ事でそのブレスを回避できた。

「酸性のブレスなのですよ…まずいです」

『直撃したらスライムの出来上がりって所ね…こいつ…多分強いわ』

「でも、この前のオグンに比べればまだマシなのですよ」

『そうね…さっさと倒して大樹さんを手伝いに行きましょう？』

「賛成なのですっ！ ご主人様をお助けするのですよっ。まずは積むのです！ グレイブツ！」

アメリカちゃんが魔法を唱えると、何も無い所から何体もの幽鬼モウリヨウと屍鬼コープスが現れる。

何時見ても純粹っぽいアメリカちゃんが使う魔法じゃないよね…これ。

「貴方達はアメリカ達のカバーなのですっ！ ブレスは任せましたですよ」

『あああああ…うあああああ…』

『ぐけけけけけっ！？ けーけーけっけっけっ！』

『痛い…痛い痛い痛い…！』

うんごめん…凄くこっちが悪役っぽい。でも有効なんだよねえ。

『嬢ちゃん…見た目と違ってえげつないのう』

「そういう魔法なのです、という訳でいざ覚悟なのですよっ！ ザ

ンダインッ！」

『ヒョー！ーっ！？』

あれ？ さっきと違う勢いで逃げたわねあいつ……あ、そっか、そう言う事かあ。

『アメリカちゃん！ ザンダイン連打してっ！ あいつ多分風に弱いわっ！』

「らじゃなのですよっ！ ザンダインッ！」

『ヒョーっ！？ わ、ワシ詰んでないかのう……？ その前に反撃じやあっ！ ワシの名は雷獣・災厄の悪魔又エ！ 全てを劈く雷を食らうがよいっ！』

悪魔……又エがそう叫ぶと凄惨な音と共に雷が降り注ぐ。確かにこれは当たれば普通はただじゃ済みそうにないわね。

でも……甘いわっ！ 私はそのままアメリカちゃんの壁になる。驚いている表情の又エだけど次はもっと驚くかもね

『ばかなっ！？ 何故避けぬっ！？ まさかっ！』

『そのまさかっ 雷撃なんて私には効かないわっ！』

電撃が私を襲うけど、同時に体中の力が溢れてくる。これが吸収の効果かあ、回復魔法と違ってなんか変な感じだけど体力とかは回復してくれるわ。

『む…う…雷の悪魔であるワシの力が効かないのであれば…ワシの負けじゃな』

『あのブレスがあるくせによく言うわ。さあて続けましょう』

『いや…ワシにも雷獣のプライドがあるからう。雷を無効化された時点でワシの負けじゃよ。疾く殺すがよい』

なんか急に諦めたっばい又エが降りてきて跪ついた。畏って事はなさそうね…こいつ結構強いし上手く行けば大樹さんの戦力になるかも

『じゃ、生殺与奪は私のもつて事で』

「おお…流石なのです」

『じゃ殺すね…と言いたい所だけど、アンタには大樹さんの仲魔になってもらうわ』

『ワシに生き恥を晒せ…と?』

『生殺与奪は私に委ねられてるんでしょ? 従ってよね?』

『むう… やられたわい… 良かろう。嬢ちゃん… いやお主が主人と慕う人間ならば従うのもまた良いかもしれんな』

『じゃ、決まりね。他にも悪魔が沢山居るんだし、早速役立ってもらうわよ』

「おー… アリスがご主人様みたいなのです」

『そ、そうかなっ　　えへへへ』

『ふむ、色ボケかのう』

「色ボケなのです」

『アメリカちゃんに変な事教えないでよっ！　ととっ！　大樹さん直ぐ行きますねっ！』

今も戦っている大樹さんの所に向かう私達。えへへ、大樹さん喜んでくれるかな

- ピクシー視点解除 -

……
……
……

又エを連れてきたアリスのお陰で戦況は更に一変した。

ここに又エ以上に強い悪魔は居らず、その上で又エまで僕の仲魔になつてくれたので悪魔達を掃討するのに其処まで時間は掛からなかつた。

今は警戒しつつも奥に進んでいる、まだ百太郎の反応が消えていないからだ。

「それにしても…又エが仲魔になつてくれるとはね…それもレベル27とか、僕は一切交渉してないとか…実はアリスの方がサマナーの素質がある気がしてきた」

「どんまい」

『あ、あははは。ま、まあ結果オーライって事で』

『そうじゃよ？ サマナーもまだまだ若い、その内に必要な技量が手に入るじゃろう、日々精進じゃな』

「そうだね、頑張るよ」

そういえば完全に人型以外の悪魔が仲魔になつたのはこれが初めてだな。

アリスもピクシーとはいえ人の姿してたし、ミトラスは今は銃だけ

ど元は天使：人型だし。アメノウズメはそもそも淫靡リリムだし。

モムノフは頭に角がある以外は人間と大して変わらない、アメリカはそもそも人型でモー・シヨボーは羽の生えた人間って所だ。

こなたの方にはジャックフロストとか人外系も居ただけだね。

「うーん。もし下手人が大樹君のお父さんだとしても、随分無駄が多くない？　というか悪魔を支配できるなんて情報知らないけど…」

「僕もそう思う。単純に異界に巻き込まれたのか、それとも僕を殺そうとしているのか：電話の胡散臭さからして凄く後者の予感がするよ」

『どっちにしてもいけば分かるだろ？』

『そうだよ　　わかるよ』

「この癒される感じがたまらないと思う今日この頃」

『こなたも癒されるよ』

そういえば：アレだけ派手に戦っていたのに誰も来なかったな、やはり罠の可能性がある。

COMPに内蔵したゲートサーチも先ほどから奥を示しているし、異界もあることは間違いないだろう。

明日には天使達の基地を攻めないといけないのに、面倒くさい事ばかりしてくれるな…

『…さてサマナー』

「ん？ どうしたのモムノフ」

『死臭がする。それも沢山だな…この臭いからして死んでまだ時間は経ってねえようだ』

「悪魔に殺されたのかな…」

「あれだけ居たんだから可能性は高いね、厄介な事ばかりだよ」

『どうする？ この調子だとサマナーの親父が居ても死んでると思っせっ』

ここにおびき寄せたのなら、生きている可能性はあるけど本当に待っているのなら、殺されている可能性はあるかな。

だからと言って心動かされる事はまったくなかつたけどね…ああ、僕の中では完全に両親と言う存在はどうでもいいものなんだと改めて感じるよ。

「！？ だ、大樹君っ！ 百太郎見てみてっ！」

「ん？ わかつ…な…なんだこのスピードはっ！」

エネミーソナーとは違って百太郎は近場にある悪魔の存在をマーカ―である程度示してくれる。

その中で一つのマーカーが突然現れて異界があると思われる中心に凄まじいスピードで突っ込んでいった。

何か違う悪魔が文字通り飛んできたと言う事なのだろうか。

「ねえ、又エはあの異界から来たんでしょ？ 何があったのか知らないの？」

「ふむ…恐らくワシらが来た異界は作られたものじゃろつな」

「作られた…、いや今それが何の関係が？」

「大樹さん、これって確実に畏だと思う…逃げたほうがいいよ。それに今来たって言う悪魔って…一つだけ心当たりあるし」

「え…アリスちゃん今来たっばい悪魔知ってるの…？」

アリスが逃げると言っつて、彼女が知っている悪魔といえば僕にも一人しか思い浮かばない。

見逃してもらったあの英雄、ペルソナである横島の親友でありライバルの…

「伊達…雪之丞か」

「え？ 人間？」

「いや、そういう名前の英雄だよ。凄まじく強い悪魔でね、アレに比べたらオグンはスライムみたいなものだよ」

「なにそのチート…うーん、どうしよっか？」

「正直来たのが伊達なら逃げたほうが利口だよ、異界に關しても任せておけばいいさ。何かあればクスノハが動くだろうし。父親はまあ、この際無視しよう」

『ヒョー。父親とはのう…しかしあそこに居ったのは人間の娘だけじゃったがな』

「…は？ そ、それどう言う事？」

父親じゃなくて女性が居るのか…こんな所に居ると言う事は巻き込まれたか、この異界を作ったという張本人か。

『うむ。凄い力を持っているようだなあ、基点として使われて居った。恐らく死んでは居らんじやろ。そうなれば奥の異界の気配も消えて居るしのう』

『つまり何か？ 人間を殺してそれを生贄にして女を使って異界を開いたって事かよ？』

『その通りじゃな。まあ、ワシらは外に出てきただけでその辺どうでも良かったので無視したがのう。眼鏡の可愛いお嬢ちゃんじゃったよ、意識は無かったようじゃがな』

「ちなみにどんな感じの子だったの？」

『ふむ…そうさのう…先ほども言ったようにどうでも良かったので気にしなかったんじゃが…長い甘栗色の髪の毛が特徴的だったかの…年は恐らく20前位の娘さんじゃろっ』

「どうしよ大樹君…嫌な予感が止まらないんだけど」

「…僕もだ」

「とりあえず電話掛けてみるね………」

………携帯はだめ………じゃ次は家に………」

僕とこなたの予想が正しければ…暫くコールをし続けているとどうやら繋がったらしい。かけた場所は高良さんの家だ。

眼鏡で長い尼栗色の髪の毛、そして20前の女性と言えば容易く想像できる。

まさかそんな事はないと思うけど…一体全体何があったって言うんだろっ今日は。

「そ、それ本当ですかっ!? あ、あの怪我はしてませんかっ!?
あ、はい…はい…わ、分かりましたっ! はいっ! ……大樹君
…当たっちゃったよ…」

「高良さんが攫われた…か。でも文珠が効かなかったのか…」

「何か不思議な事が起こって少し大丈夫だったらしいけど…直ぐに攫われたんだって。みゆきさんのお母さんが止めようとして気絶させられたって。警察に知らせるって言うてたけど…」

「行くしかないな。奥に居る異界の基点は多分高良さんだろう、一体何の目的でこんな…父親の事といいまるで狙って……………」

其処まで考えた時に背中がゾクつとする。

そういえば、前に僕にちょっかいを出してきた不良達はどうなったんだろう…COMPはこなたにあげたからもうサマナーではないはずだけど。

あの時文珠でサイコメトリーの真似をしようとした時に邪魔をした、あの恐怖を僕に与えてきたナニカ。

父親が僕をここに誘い、悪魔が襲ってきた。奥には生贄で作られた異界があつて、基点として恐らく高良さんが居る。

まるで僕を狙ったかのような今回の出来事、そしていまだに行方不明のあの不良…もしかしたら繋がっているのかもしれない。

残り少ない文珠を取り出して【防】【脱出】を作っておく。

これで金色の文珠は残り5個だ。通常文珠は一つだけあるけど、これは万が一のためにとっておこう。威力は金文珠の方が強いしあって困る事はない。

恐らく奥には雪之丞も居る…あいつは曲がった事が嫌いな性質があるから、上手くいけばこちらに引き寄せられるかもしれない。

なんにせよ、奥に友達が居るかもしれない以上進まない訳には行かない、か。

『大樹さん、どうするの…?』

「行こう。流石に今から柊さん達を呼んでいる時間は無い」

文珠で召喚するのでもいいかもしれないが、そもそもイメージがわからないのでどうしようもない。

文字数的にも無理があるだろうし、彼女達のレベルじゃ足手まといになる可能性のほぅが高い、それなら文珠を攻撃か防御に使ったほぅがいいだろう。

「うん…待っててみゆきさんっ！ 直ぐに助けるからねっ！」

『明日は明日で大変なのに…なんでこんな事ばかり起きるのかなあ…』

『愚痴つてもしょうがねえだろ。何にしてもサマナーが行くんだ、オレ達も行くだけさ』

僕達は先を急ぐ……………

そして、そこで僕達はどうしようもない現実遭遇した。

……………

……………

…

一言で言い表すなら、それは暴風だろうか。

辺りの物を薙ぎ払い、吹き飛ばし、破壊して行く。

あの二体の悪魔が何なのか分からないし、なんで伊達が戦っているのかも分からないけど今は丁度いい。お陰でこの男一人だけを相手にすればいいのだから。

「何のつもり？ そうだなあ。単純に言えばアレよ、アレ。イジメの延長？ そうそうっ、苛めの延長だよ、え・ん・ちょ・う　ど　うよっ！　驚いただろっ！」

「……ああ、驚いたよ。君の馬鹿さ加減にね……」

見た目からしてまともにも正気にも見えない。百太郎は不良が居る場所に悪魔のマーカを示している。

つまりアイツはもう人間じゃないと言う事だ。別に種族なんて気にしてないけど、悪魔ならかなりの強化をされている可能性がある。

悪魔と合体したのだろうこの不良は。

真・女神転生？でもそのような場面がある。主人公の友人……とか同行者の一人・カオス・ヒーローと言う存在が一体の悪魔と合体し強靱な肉体を手に入れるという話だ。

つまりこの男はそれと同じ真似をしたんだろう。ただ強くなるために全てを捨てたカオス・ヒーローとは違い、単純に自分の欲望だけで合体したのかもしれないが。

奇妙なのはあの変な文様だ……悪魔と合体した時に付いたのかもしれないが変な刺青が施されている……

「ああんっ！？ スカしてんじゃねえよ！ 昔は苛められるたびに下向いて逃げてた奴がよおっ！ てめえのそのデビルサマナーになつてからの態度！ 気に入らねえんだよっ！」

「そんな理由でここまでするのっ！？ 頭おかしいんじゃない！？ 世界がどうなってるかわかんないの！？」

「ひひっ！ 核が落ちてくるんだらうっ？」

「知ってて…こんな真似してるのか…お前は…」

『狂ってる…おかしいよこいつ…』

「なあに、俺も考えて今回の事を起こしてるんだぜえ？ ある意味核から救おうとしてるんだ。褒められるべきじゃね？ おい？ きひひひひひ」

『ほう？ 貴様ごとき矮小な存在がどうやってだ？』

「うっせーよ三下あつ！ 殺すぞ？ おい？ 俺が今会話してるのは佐藤なんだよお、膾炙りにするぞオラアっ！」

そついうと同時に不良から凄まじいほどの魔力が吹き上がる。

あまりの風圧に吹き飛ばされそうになるのを懸命に耐え、魔力が収まるのを待った。

ややあつて風が落ち着くと不良はやれやれと言った表情でこちらを見ている。

「おつとつと、悪い悪い　　ついつい少しばかり本気をなあ。んじや、話を続けんぞ？　核から身を守るためにはどうするか。どつかの変な奴等は基地を全部叩くとか言ってたけど、正直無謀じゃねえの？　無理無理無理無理力タツムリって所だぜ。どつか討ちもらすに決まってるんだろ？　その点この俺の考えた案なら完全安心っ！　老後も心配いらねえよって所だ！」

興が乗った様にしゃべり続ける不良。

こいつが色々しゃべっている間にどうやって高良さんを助けてこの場から逃げ出すかを考えていた。

あの悪魔二体は恐らくこの不良の仲魔なんだろう、伊達が負ければこちらに向かつてくるはず。

こいつの戦闘能力も今は分からない上、あの二体まで加わったら僕達に勝機なんてない。ならば如何に高良さんを助けてここから逃げ出すかだけど、やはり文珠しかないだろうか。

明日の事を考えるとムダ使いもしてられないのだが、今ここを何とかしないと明日所の騒ぎじゃない。

どうにかしなければ…

「要はよ？ 核がなくなりやいいんだよ。核が無い世界を作ればいいんじゃない？ という訳で考えましたっ！ 世界を俺が望む異界で塗りつぶすっていうなあ！ きひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ どうよ！ 悪魔が蔓延る世界になるけど人間は普通に暮らしているぜっ！？ 核も落ちねえし安全だろう！？ ま、そんなかわり悪魔の家畜だけどな人間はよおっ！ きひひひひひ！」

「そ、そんな事できる訳無いじゃないかっ！ 変な事言わないでよっ！」

「いやいや、これがまた出きるんだよなあ。だから其処の英雄も俺を止めに来たんだろうよ？」

そう言うつと未だに戦っている3人のほうを向く。

『くそがっ！ いい加減にくたばりやがれっ！』

『うひひひひひっ！ その程度じゃ死ねないなあっ！ ほあら虚空爪激しい』

物凄い勢いで爪が振るわれると幾つもの爪の残像が伊達を切り刻んでいく、向かってくる攻撃をクロスガードで防ぐ伊達だけど、衝撃までは防げなかったように簡単に吹き飛ばされる。

其処にもう一体の悪魔が飛び込みつつ、両手を目の前に突き出した。

『おらおらおらっ メギドラッ！ メギドラッ！ メギドラアア
アッー!!』

『ぐ、ぐおおおおおっ!?!?』

メギドラ…メギドの上位魔法をあんなに簡単に乱れ撃つなんて…ど
れだけ上位の悪魔なんだあいつらは。

この悪魔を使役している不良…この数日で一体何があったんだ、悪
魔になったからと言ってこんな理不尽な状況になる訳がない。

『嘘だろ…あの男が押されてるだと…』

「メギドラ…アリスの魔法の上位ですね。アメリアには使えない魔
法です」

『どっなってるの…これ』

「おいおい、こっちに戻ってこいよ とまあ。続けるぜえ？ 簡
単に言うとなあ。俺は鍵って奴なんだよ、鍵。このクソうぜえ世界
を俺好みの世界に変える事ができる鍵な。

あいつらは単に自分の趣味で俺を見つけ出して、力を貸してくれて
るって訳だ。あいつらもいい感じに狂ってるからなあ。理由なんて
ねえそうだぜ？ 面白いから世界崩壊が見たいんだよっ!」

「面白いから…って…」

「神さまのいいなりってのはいやだろ？ 俺もあいつらもいやなん

だよ。という訳でやられるなら先にやっちまおうって事さあつ！
で、お前は単純に巻き込まれたただだよ佐藤。俺が無理やり巻き込
んだけどよっ！ 苛められっ子が黙って苛められてれば何も考えず
に死ねたのになあ？ きひひひひっ！ 絶望しろ、泣き叫べ、その
ためだけにここまでやってきたんだ」

「……」

「そうっ！ その眼だっ！ その眼が見たかった！ 赦せません！
でも自分じゃ何も出来ません！ 無力ですって顔がなあっ！ き
ひひひひっ！ 特等席で見せてやるよっ！ この世界が異界に飲み
込まれるのをなあっ！ 丁度いい生贄もあるし、直ぐ変わるぜっ！
さあっ！ 念仏でも唱えろやっ！」

「…呆れるよ、君には」

色々御託を並べてるけど、要は単純に無視されたのが気に食わない
から苛めている、というだけなんだろう。

力を手に入れてもやってる事がその辺の子供と変わらない。ただ、
範囲が広すぎるだけだ。

このまま逃げても日曜日を待たずに世界崩壊か…とことんまでふざ
けてるなこの世界は…そろそろお腹一杯だよ。

僕は無言でミトラスを不良に突きつける。

「呆れる…だあ？ おい、今なんだった？」

「呆れるって言ったんだよ。やってる事はご大層だけど中身はてんでしょぼすぎる。子供の癩癩と同じだ、君はそれでも高校生じゃなかったのかい？ 小学生や幼稚園児でもあるまいし… 厨二病でも患ってるのかもしれないけどね」

「だねえ…正直イタタタって感じたよ。はっきり言って悪役の魅力を感じないね。色々最後にバラす所も小物臭バリバリだしね」

『ゲームで言うところ中ボス？ あ、この場合はイントネーションを変えて厨ボスかな』

「高良さんを生贄…？ 馬鹿も休み休み言え…そんな事させる訳ないだろう？」

「…てめえら…俺をこれ以上怒らせるなよ…殺すぞこの女をっ！」

「殺したら生贄にならないじゃん、安い挑発だね」

「それに…もう遅い」

「な…なあっ!？」

僕の横には高良さんが居る、気絶はしているが問題なく生きているようだ。

驚愕の表情を浮かべる不良、何が起きたか分かってないんだろう。答えは言うまでも無く文珠だ。

時間を止めた訳でも無い、単純に一番簡単な文字を使った。

【高良召喚】これだけだ。召喚については難しいと思ったけど、目の前に彼女が見えて自分の横を到着地点とイメージを強く深めたお陰で上手く行った。

先ほど不良を挑発したのは文珠を使う隙を見せない為だ、予想外に上手くいったな。

さて…ここからが問題だ。あの不良が言う事が確かなら、高良さんが居なくてもこの世界を異界で飲み込む事が可能なだろう。

もしそうなってしまえば核が振る前に世界はある意味で消滅する…つまり逃げられないと言う事だ。

倒すにしても…倒せるかが問題だな。

「舐めた真似しやがって…舐めた真似しやがって…舐めた真似…
…しやがってええええええええっ！！いいぜ、こうなれば世界全て
なんて言わねえ！今すぐこの町だけでも異界に飲み込ませてやる
」！

「させるかっ！皆行くぞっ！！」

・おおっ！！

「舐めるなよ…この人修羅を…舐めるんじゃないぞおっ！」

『ま、まずいよっ！？世界じゃなくてここだけ切り離すのお？

行でしょ。

とりあえず…生きてるし、これまた修

がんばりなさいよ…

貴方が強くなるの…待って

るからね。

その声と共に僕達は光に飲み込まれた。

時だった。

これが僕達の序章の終わりで、全てが始まった

になる。

変わる世界の中で、僕は色々なものを見る事

れない。

道歩く僕は僕自身であり、僕ではないかもし

僕は色々知ったけど、色々体験したけど、それが現実になるとは限らない。

幸せな人生を送ったかもしれないし。

不幸な人生を送ったかもしれない。

自分の謎が分かったかもしれないし。

永遠に分からなかったかもしれない。

過去は一つしかないけど、未来は沢山あると

いう理不尽。

僕が進む道は…どこなんだろう。

誰を愛し、誰を憎み、誰と共に戦い、誰と敵対

するのか。

未来はここから始まるのだと思う。

事になる。

理不尽な世界で僕は更に理不尽な運命を見る

けない。

だけど、僕は歩いていかなくてはい

それしか僕には出来ないから。

う。

さあ……………そろそろ目覚めよ

本当の僕の運命が始まりを告げる。

物語が。

この世界から逸脱した能力を使う僕だけの

終幕

S
e
e
Y
o
u
N
e
x
t
C
o
n
t
i
n
u
e

Continue 51 〈序章の終幕と絶望の開幕〉（後書き）

と、不良君がブチ切れてナニカが起こってしまったようです。

今回は違う場所からスタートなのですよ。

目覚めた佐藤君、はたして其処はどこなのでしょう。

そして不良君、貴方人修羅だったんですね…随分俗っぽい人修羅さんです。

世界中の人修羅に謝れですよっ！（だから書いてるの私

どうでもいいこと

ごーるでんうーいーくなのですよっ！ でもどこにも行きません。

出る時はお買い物くらいですかねえ…あ、でも食べ歩きするかも…
ケーキバイキングとか近くにあればなあ…物凄い勢いで食べますよ
きつと！

ビバ甘味ですっ！

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお
答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：41票

みゆき：12票

ダッキ：56票

アリス：9票

覚醒時ステータス成長表

力特化：7票

知魔特化：23票

体特化：1票

速特化：124票

運特化：6票

バランス：180票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

Continue52 〈停滞する世界〉(前書き)

という訳で幕間のようなものです。

物凄く短いですよー。

次回から本編スタートですねっ！

感想返し、もう少しお待ちくださいなですよ。

全部読ませてもらってますー！ 誤字…直さないとなあ…感想返し
の時に同時にやっています。もう少しお待ちくださいな。

ベルベツトルム

『お久しぶりでございますな』

目の前にはイゴールさんが居た。確か先ほどまで僕は…あれ？ 何をしていた？

「お前達は世界から切り離されたんだ」

「達哉君…ごめん、よく思い出せない」

先ほどまで何をしていたんだ僕は？ 一体何時の間にベルベツトルムに来ていたんだ？

分からない、この年で痴呆でも始まったのかと思うと戦々恐々してしまうな…

『ご安心下さいませ。今回は特別にお呼びしただけ、記憶の混乱もそのせいでございましょう。ここから戻られたら落ち着きますゆえ』

「そ、そうなんですか。で、どうして僕がここに呼ばれたんですか

「？」

「道が決まったからだ。お前が進む道がな」

「僕の進む道…？」

『はい、お客様のお役に立つために存在するのが我らでございます。今回はこの先の事をお客様にお教えしようかと』

「成程…」

イゴールさんに言われてソファに座る僕、其処には紅茶が置いてあり、飲むように進められた。

一口、口をつけ飲んでみる。仄かな甘みが効く美味しい紅茶だと思う。心なしか精神も落ち着いてきたようだ。

『宜しいですか？』

「あ、はい」

『では…今貴方は地球には存在しておりません。滅びの鍵が暴走し、お客様方を世界より吹き飛ばしてしまわれました』

「え…と…？」

『眼が覚めたら完全にご理解頂けるでしょう。其処には貴方様の仲間もご友人もいるはず、そしてお客様はこの後の未来を知る事にな』

ります』

「出来事の差異あれど、ここまでは予定調和だった。だがここからは違う。お前は知る事になるだろうな、自分が何なのかどうして生まれ変わったのか。知らなければ良かったと嘆くかもしれないし、その逆かもしれない。生きていて絶望するかもしれないし、希望を持てるかもしれない。知り合いと殺し合いをするかもしれないし、愛し合うかもしれない。すべて、お前が決めるんだ」

二人は何が言いたいのだろう。

予定調和：僕の生まれた意味…そうだ。僕にはまだ僕の事が全然分からない。

どうして横島が助けしてくれるのか、前世は普通の人間だったのにどうして不思議な力を持っているのか。

漫画やアニメのキャラクターがどうして普通に存在しているのか。

強くなれば分かると聞いたけど、それを知った時僕はどうなるんだろうな…考えると少し怖い。

『今現在、お客様が住んでいた場所は世界より切り離され、一つの異界として存在しております。悪魔が存在し、マグネタイトに満ちた完全なる異界にへと』

「異界っ!？　そ、そう言えば…そうだ僕達はあの時…」

そつだ、思い出してきた。僕達は不良と戦おうとしてそれでそのまま気を失ったんだ。

核が降る前に自分の思い通りの世界にする為に異界を使って世界を塗り替えようとしていたあの不良と。

全員で攻撃する指令を出した瞬間に気を失って…そこから気が付いたら僕はここにいたんだ。

どうやら僕自身はいまだに気を失っているみたいだな。イゴールさんが言っていた事を信じるなら近くにこなた達も居るんだろう。

それにしても町一つ世界から切り離されたか…真・女神転生？を思い出すな、あまり遊んだ事が無いからよくわからないのが悔やまれる。

「こなた達は大丈夫なんですか？」

「無事と言われれば無事だな。ただ、お前達はその異界化した町にはいないんだが」

「どういふ…意味なんだ達哉君？」

『そのままの意味でございます。不完全な鍵になった人修羅が放った光の衝撃で貴方様方は地球とも異界化した町とも違う場所に弾き飛ばされました』

「っ！？」

あまりの内容につい立ち上がりそうになるが無理やり抑えてできるだけ冷静を保つ。今更騒いだ所で、叫んだ所で意味なんて無いからだ。

それに彼らがこなた達の事を無事と言っているんだから今すぐどうにかするとう場所には居ないんだろう。

死んではないようだから、どこに飛ばされたんだろう。異世界か…？ それともまったく別の世界なのか。今更他の漫画やゲームの世界に飛ばされたとなったら僕はおかしくなる自信がある。

『場所は金剛神界。世界より隔絶されし異世界、あるものは楽園と呼び、またあるものは無価値な世界と呼ぶものも御座いますな』

「金剛神界だつて…それじゃ、もし其処から元の町に戻れても…」

金剛神界といえば真・女神転生？と？に存在する世界が一番理解できやすいだろう。

？ではトールマン…いや鬼神トールを倒した時に核が降り注ぎ死ぬ間にヒロインに助けられて送り込まれた異世界。

エンノオツヌが存在し、主人公達に試練を与えたりこの世界に留まる事を示唆してくれたはず。

そしてそれを断り元の世界に戻ったら、其処はすでに何十年も時間

が経過していたという話になっている。

もし僕が知っている金剛神界ならば…どう足掻いた所で世界はすでに何十年も過ぎているんだろう、世界は滅びたのか分からないが…

「不幸中の幸いと言う奴だな。確かに金剛神界は元の世界と時間の流れが違うが、切り離された世界もまた元の世界とは時間の流れが違うようだ」

『何の因果かは分かりませぬが、お客様が金剛神界より元の町…異界化した町に戻ったとしてもあまり時間は過ぎていない事でしょうな…恐らくは長くても1年2年程度で御座いませうか』

「いや…1、2年も十分長いんですが…まあ、何十年と言われなだけでまだ助かりますよ」

「確かにな。戻ってきて知り合いが老人になっていたら、俺でも流石にシヨックを受ける」

「はは…では、そろそろ戻ります。色々ありすぎてよくわからないのが現状ですけど、動かなければどうしようもありませんから」

一番心配なのは近くに居なかった柊さん達姉妹だ、恐らく仲魔達とこなた、高良さんは近くに居るとしてもあの二人はあの場所から離れていたから…多分金剛神界には来ていないだろう。

異界化しているあの町で…恐らく心配は要らないだろうけどメシア教とガイア教の動きも心配だ。クズノハが混ざっている可能性もあ

るから大丈夫だとは思いたいけど。

『お待ちを…我が半身よ』

「…ト、トビカトウ？ いつのまに其処に」

イゴールさん達に別れを告げて戻ろうとした時、呼び出しても居ないのに目の前にトビカトウが現れていた。

ここは心の海に近いから召喚無しで表れたのだろうか…でも現れる理由が分からない。

『いつも我が主君でもある貴方様の心の中より見て参りました…恐らくこの先、拙者程度の腕ではお役に立つこと罷りならぬと思い、参上した次第でございます』

「いや、そんな事は無い。トビカトウのお陰で助かった場面も多いよ」

最近ではヘルやテンセンニヤンニヤンなど新しく呼び出したペルソナを使う事も多いけど、トビカトウも呼び出して戦ったりする事も多い。

消費MPが少ないのもあるし、その上で攻撃力などは色々優秀だ。他のペルソナに比べ攻撃力が低いのがやや目立つけどそれでも最初のペルソナで達哉君から譲り受けたのもあり重用している。

『これからの事を考え、拙者この日をもって暇を頂こうと思う所存に』

「……………そう…か」

「トビカトウ自体は確かに強いが、これから先はそれ以上に強い悪魔とかも戦う可能性があるだろうな。あの人修羅とか言ったか？中身はペラペラだったが力は本物だ」

「人修羅か…まさか彼がね」

真・女神転生？の主人公にして、悪魔となった存在・人修羅。

その戦闘能力は様々な女神転生シリーズを通して最強と言える存在かもしれない。個人で魔法を使いデビルサマナーと同じく仲魔を従え自分はマガタマの力で強くなって行く。

最強のマサカドウスさえ手に入れれば万能魔法以外は全て無効化してしまうというとんでもなさだ。

あの人修羅とは何があっても戦いたいとは思わないな。

不良：名前なんだっけ…覚えてないな。不良で良いか…彼も人修羅らしいけど、多分量産されたタイプの人修羅だと思う。

どちらにしてもまだ僕が勝てるか分からない存在かもしれないけどね。僕はただの人間だし、いまだにレベル20だし。

ああ、覚醒が遠いな…

『ペルソナの帰還…で、御座いますな。確かに今のトビカトウならば帰還時にお客様の御力になれるやもしれませんな』

「ああ…そうか。鍛えたペルソナ達が帰還すれば、その時アイテムなどをくれたりするんだっけ…」

ランクが最大になったペルソナを帰還させるとアイテムを貰える時がある。

大抵はステータスアップ系のインセンスとかだけど、特殊な悪魔はそれぞれに由来したアイテムや武器をくれる時があったはずだ。

シヴァならピナーカという伝説の槍、セイテンタイセイならば如意棒と言った感じだ。

トビカトウは…なんだろう。

「僕としては、アイテムなんかよりトビカトウが助けしてくれるほうが嬉しいんだけどね」

『そのお言葉だけで拙者は十分で御座います。これからのお役目を果たす事が出来ず申し訳御座いません』

「いや、今までありがとう。いつも助かっていたよ」

トビカトウ…いや加藤段蔵はほんの少し笑みを浮かべたまま虚空に消えていった。

暫くすると僕の目の前に見た事も無いカードがゆっくりと落ちてくる。

タロットカードより一回り小さいそのカードには見た事もない一本の槍が描かれていた。

『ふむ…どうやらマテリアルカードで御座いますな。新しいペルソナを作るために必要な触媒で御座いますよ』

「…マテリアルカードですか、でも今は使いこなせないような気がしますね」

『おそらくはそうでしょうな。それもどうやらかなりのイレギュラーのようで御座います。トビカトウはどうやらお客様に余程の忠誠を抱いていたのかもしれないな』

「別段彼に特別何かした覚えはないんですけどね…でも、大事にしようと思います。僕が強くなった時これを使うつもりです」

「今のお前は殻を被っている雛だ。それもあと少しでその殻もとれるくらいだな。早く強くなれ、謎を知りたいのならな」

「そうするよ、それじゃ今度こそ失礼します」

『お客様の進む道に、影がささない事をお祈りしています』

意識がまた徐々に薄れて行く。

これからどうなるかわからないけど…まずは、皆が無事が確かめな
いといけないな……………

……………

……………

…

マテリアルカード『英雄の槍』を手に入れた。

ペルソナ・トビカトウが帰還した……………特別ボーナス！

力+2 魔+2 速+1

COMPステータス更新

Continue52 〈停滞する世界〉（後書き）

次向かう場所は大体の方の予想通り金剛神界になりました。多分ここで佐藤君覚醒の巻になりそうです。

そしてさよならトビカトウ。あまり出てない割には忠誠心高かったようです。

そしてこんにちはマテリアルカード。ネタは知っててもいっちゃだめですよー（えー

どっちにしても暫く使えませんが、持ってるだけですけどねえ。

どうでもいいこと

書いている途中で意識を失いかけてました…おお…ちゃんと寝たのになあ…

なんだろう…微妙にクラクラします。風邪引いたわけじゃないんですけど…

あ…も…だめ（ぱたり

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：44票
みゆき：14票
ダッキ：59票
アリス：10票

覚醒時ステータス成長表

そろそろ此方は終了になりそうです。具体的には後2〜5話で、バランスが抜किन出てますね、このままバランスかなー？

力特化：7票

知魔特化：23票

体特化：1票

速特化：127票

運特化：6票

バランス：185票

投票について

一人一回、キャラクターとステータスに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue53 〈ハジメノイッポ ハジマリヘノ二本〉(前書き)

金剛神界編なのですよー。

ここで暫く修行の予定です。再びCOMPすてーたすの変動が沢山起きるよっ！

やったね大樹ちゃんっ！

……いやぁ…地味に大変な作業なんですよねえ。あれ(笑)

佐藤君ステータスアンケートついに終了。結果発表なのです。

力特化：7票

知魔特化：23票

体特化：1票

速特化：129票

運特化：6票

バランス：188票

という訳で【バランス型】に決定しました！

これからの大樹君は平均に上げていくことになります！

長らくのアンケート真に有難う御座いました！

再びカンストしたときは…またアンケートとるかもしれません…とらないかもしれません(どっち!?)

- 金剛神界

大樹は少しずつ意識を覚醒させていく。

…きて…よ…く…て…

…お…て…や…よ…

…さん…し…て…い…

…主…無…か…

近くから声が聞こえてくる。

どの声もとても綺麗な音で、しかしそのどれも切羽詰ったような苦しそうな、そして悲しそうな声だった。

少しずつ、そして確実に声が聞こえてくる。

…しっか…り…して…寝ちや…ダメッ！

…我が主…気を…かに…

意識は徐々に覚醒して行く、そしてはつきりと聞こえてくる彼女達の声。

聞き覚えがある、いつも聞いている仲魔の声。大事な友達の声。

そして…気になる彼女の声。

(ああ…こんな声は…聞きたくないな)

自我もおぼろげな状態だが、彼女達の今の悲鳴のような声は聞きたくなかった。

綺麗な声ならともかく、それが悲しい声はそちらの気はないので辛く感じる。

この声はアリス、ミトラス、こなたとみゆきの四人の声だ、ならば起きないといけないなと目を開き大樹はゆっくりと起き上がった。

目の前には涙を流しているアリスとこなた。そして心配そうに見つめているみゆきが居た。

大樹が眼を覚ましたのを見ると全員が嬉しそうな表情で見つめていた。

「みんな…」

大樹が何かを言おうとした時に黒い影が横切り…というかアリスが物凄いスピードで抱きついてきた。

咄嗟の事で反応できない大樹は何の抵抗も出来ずにそれを受け止め、再び組み敷かれた。

胸に何度も顔を摺り寄せ喜びの声を上げるアリスに、流石に少々戸惑うもののされるがままになっておく。

『よかったよおおお。大樹さんっ！ 大樹さああんっ！…！』

「ちよっ！？ 復活して再び倒されたんですがっ！？ ちくせう、私がやるうと思っていたのに…」

『ま、まあまあ』

「あー…とりあえずアリス。どいてくれないかな」

「余程心配されていましたが、少しはそのままでも良いかも知れませんかね」

「おお。みゆきさんのお墨付きが来たよ…」

『うええええん』

ベルベットルームに居た時間は予想以上に長かったらしく、彼女達

にかなりの心配をさせてしまったようだ。

特にアリスはその中でも特別心配していたようで、いまだに延々と泣き続けている。

流石に大樹もこの状態を無視する訳にはいかないの、暫くはアリスの好きなようにさせる。こなたが人差し指を唇に当て大樹をじっと見てるのが微笑ましい。

『大樹さあぁん…』

「ハイ、濃厚スキンシップ禁止ー」

『あいたあつ!? な、何するのよこなたっ!』

「ふっ…甘いぜアリスちゃん。それ以上は問屋が卸しても私が卸せないねっ!」

そのまま甘えモード、というか妖艶モードに入ろうとした所にこなたから強めのチョップが入った

邪魔されたと怒り出すアリスだが、こなたもやりたかった事なので妥協せず言い返していた。頬に手を当てつつみゆきが困った表情で見つめているのが印象的だ。

そのまま喧嘩譁々と喧嘩が始まるが、お互いに気心の知れている同士なので喧嘩というよりはじゃれあいに見えない。

その間に漸く開放された大樹はゆっくりと立ち上がり体の調子を確かめる。

問題なく体も動くし、ペルソナもトピカトウが帰還した為居ない以外は何の問題もなさそうだ。武器としてのミトラスもちゃんと存在している。

「ごめん、一人だけ長く気絶してたみたいだね」

「ご無事で何よりです。何処か痛む場所はありませんか？」

『そ、そうですねっ！ 我が主よ。どこか怪我でもしたのではっ！？
ずっと眼が覚めなくて心配していたのですっ』

「いや。問題ないよ。心配かけたねミトラス」

『い、いえ…ご無事ならよいのです…』

「私も心配してたんだけどー」

『私もー』

「ははは…ありがとうアリスにこなた。僕は大丈夫だよ」

放置されたとばかりにむくれるアリスとこなた。彼女達が気が付いた時、大樹だけがずっと気絶していたらしい。

数分もすれば眼が覚めると思っていたらしいが、その予想は直ぐに

裏切られ数時間もこのままだったという。

ダメージか何かを受けたのかもしれないとパトラやディアラマなどを掛け捲ったのだが何の反応も無く、医師を屈指しているみゆきが色々調べても何も分からず困惑していたらしい。

実際は意識がベルベットルームに向かっていただけで何でも無かったのだが、それを知らない彼女達は心配し過ぎてしまったようだった。

近い内にベルベットルームの事を教えておかなければと思い、今度話す事にした。

ある程度落ち着いてきたので辺りを見回すが、アリス達以外の仲魔は何処にもいない事に気づく。

「所でアリス以外の仲魔は…」

「あ、うん。皆COMPみたいだね。他には誰もいないよ、なんか変な場所に飛ばされたみたいだね私達」

「家で不審な方に襲われて以降記憶が曖昧なのですが、ここで泉さんに起こして頂いてからは他の何方ともお会いしておりませんね」

「そうか…」

「あの変態も強そうな悪魔も鎧ヒーローも居なくなってるし、今すぐどうこうって事はなさそだね」

「良かったよ。正直あいつらと戦つと僕達が負ける可能性のほうが高い」

『あの悪魔はオルクスとかそういうクラス…ううん、それ以上のランクよね。メギドラまで使えるみたいだし、今の私達じゃ向かっても殺されるだけかな』

「そうなのですか…そうになると私が更に足手まといになってしまうかもしれないね…」

「いや、この場合誰が居ても勝てないからそれ以前の問題だよ」

落ち込むみゆきにそれとなくフォローする大樹。

実際に戦えば間違いなく勝てる気がしないのでフォローではないかもしれないが。

不良相手ならばどうにかなるかもしれないが、あの悪魔はとても遠慮したかった。雪之丞が居なければ皆殺しにされていた事だろう、大樹達は運が良かったのだ。

「それにしてもここどこだろうねえ…日本…ってか地球じゃないよねえ、どうみても？」

辺りを見回すと明るくも暗くもない不思議な空間だった、恐らくここが金剛神界なのだろうと大樹は当たりをつける。

大樹にも分かるくらいこの場所はとて澄んでいる、自分自身がここに来るとは思っていなかったがいざ来てみると、他の異界と似たような感じにしか見えない。

「やはりここは異界…でしょうか？」

『まあ…なんでもいいわよ。とりあえず大樹さんが無事でよかった…本当に良かった、心配してたん…だからあ』

「私も、みゆきさんもミトラスちゃんもだけどね」

再び振り返ってきたのかアリスが大樹の傍で心配そうに見つめている。

こなたもそうだったが、意識の無い大樹を見続けているのはかなりの心労だったようだ。

「大丈夫だよ。アリスそろそろ落ち着いたかい？」

『う、うん……大樹さん』

「まあ、死んでてもリカムカードがあるし、何とかなるよ」

『うん…』

「くっ、甘えんぼポジションを使うとは中々やるねっ！」

すでにいつもの調子のこなたを見て苦笑をしつつも百太郎を起動させる。

この辺りに悪魔の反応は無いようだが、油断はできないだろう。大樹の知っているゲームの金剛神界でも悪魔は出てきていたのだから。

「とりあえず無くなっているものは無いね。こなた、柊さんに連絡は付いた？」

「うんにゃ。ダメだったよ…多分私達だけここに吹き飛ばされたっぼいね」

「そうか…」

「ご無事だと良いのですが…」

「あの変態が何をしたか知らないけど、碌でもない事になってきたよ」

ベルベットルームですでに粗方の情報は得ているが、それを今告げて混乱させるのは逆に大変な事になりそうなので大樹は自粛していた。

ある程度纏まってきたら伝えようと思っている。

「まずは仲魔を召喚しておこう。異界である以上悪魔がいる可能性

が高いからね。召喚」

いつもの通りに召喚プログラムを起動すると、ダツキを除く全ての仲魔が召喚される。

こなたの方でも全悪魔を召喚していた。全てが集まると10名を軽く超えているのでちょっとした大所帯だろう。

『おう、無事だったようだなサマナー、正直今回はやばいと思ったぞ』

『ご無事で何よりですわあ』

「確かにモー・シヨボーの言う通りだね。今回は吃驚したよ…後アメノウズメもありがとう」

『

』ヒョーヒョーヒョー。仲魔になってから行き成りの惨事じゃったのう。やれやれじゃわい』

「ご主人様が大丈夫で嬉しいのです。今度はアメリカももっと頑張らなくちゃなのですよっ！」

仲魔は何の問題もない様だ、モムノフも近くで斧を大地に下ろして手をピラピラしながら大樹に無事を告げていた。

こなたの方でも賑やかな仲魔達の声が響いていた。

『ムウ……コノママデ八役二立テナサソウダナ…ソロソロ合体時期
カモシレヌ』

『そうね…ペレになれたのは嬉しかったけど、そろそろ強くならな
いとサマナーの足かせにしなければならないわ』

「そかー…悪魔のカードは沢山あるから邪教の館見つけたら合体し
てみる？」

『ヒーホー　こなたこなたっ！　僕も合体するホー』

『まつ、あつちの姐さん達の比べたらこっちは戦力的に低いわな。
サマナーここらで一発可愛い子と合体させてくれや』

「ほほう、おにゃの子を所望ですかね」

『あたぼっよっ』

『やれやれナーガはその辺がなければ優秀ですのに』

『まあ、それも悪魔それぞれですよ。………みゆき、あの時
はすみませんでした』

「あ、いえ。アップサラスさんのお陰でこうしていられますので。本
当にあの時はお世話になりました」

みゆきとアプサラスが前回の事で礼や謝罪をしたり、合体の事で色々騒いだり、大樹達の方でも仲魔達との会話が色々盛り上がって行く。

悪魔も不良達も居ない為、休憩という名目で暫くは仲魔達との微笑ましいやり取りがあった……………

……………

……………

……………

カードに収納していた菓子パンなどを食べて英気を養った後、この異界を探索する事にした。

大樹はここが金剛神界だと知っているので、目標はエンノオツヌを探す事だ。

百太郎などを頼りに仲魔が一丸となって進んで行く様はまるで百鬼夜行のようにも見える。

『ねえ、サマナー様あ？　ここ何か不思議な感じが致しません？』

『ふむ、確かにのう。力が溢れてくるような感じがするわい。この中ならばマグネタイトも特に必要なさそうじゃのう』

「へー。そうなんだ、ペレ達も同じ?」

『そうね、マグネタイトとは違うけど凄い満ち足りた感じがしてるわ、何なのかしらここ…魔界じゃなさそうだし、神界でもないわよね』

「とりあえず進んでみればわかるかもしれない。食料などは全部カードにしてるし暫くは問題ないよ」

「おおっ！ 流石大樹君っ」

「あ、私まだカード預かっているのですが。お返しした方がいいでしょうか?」

「いや、これからの事もあるし持ってきてくれないかな。あとこれ。魔法カードだから危険になったら直ぐ使って欲しい」

「あ、有難う御座います」

数枚の魔法カードを大事そうにしまいこむみゆき。

自分自身には攻撃力がないので、このアイテムはとても助かると感謝しながら微笑む。

そうなるのと地味にこなたがむくれそうになるのだが、みゆきは一般人なので仕方ないとあきらめる事にしたようだ。

現在は又エとアプサラス、リヤナンシーにジャックフロストがみゆきのカバーに回っている。

特にアプサラスは前回みゆきを護りきれなかった事を悔やんでいるようで、事あることにみゆきの役に立とうとしているようだった。

未だに百太郎に反応は無く、談笑しつつ道なき道を進んで行く。

『むう…見渡す限りなにもないな』

『焦ッテモ仕方アルマイ。アソコデ待機シテイテモ無駄ナノダシ進ムダケダロウ？』

『むっ…龍王に言われるまでもないっ』

『いやー、マカラは龍神だけどね』

『うぐっ！ ま、魔王とはいえ偶には間違えるのだっ！』

『まあまあお二人とも』

『賑やかなのです。いい事ですねっ』

『そだねえ』

「これだけ仲魔や人がいると会話に統一性が無いなあ…まあ静か過ぎるよりは良いかもしれなけど」

仲魔と人間のやりとりをみつつ、少しだけ嬉しいと感じる大樹。

ほんの一月前にはありえなかった光景が今普通に起きている事が彼にとっては何となく奇妙にも似ていて、こんな時だというのに少しだけ涙腺が潤んでしまいそうになる。

柊姉妹が心配だし、これからの事を考えると不安が溢れそうになるが、この賑やかな仲魔達がいればどうにかなりそうだなと大樹は心の中だけで呟いた。

その様子を見ながらモムノフは彼女にしか分からない位に笑みを浮かべている。

《ちょっと、あんた達止まりなさい》

その喧騒を止めたのは唯一COMPの中に居るダツキの一声だった。突然の事に誰もが止まり大樹を…いや、大樹のCOMPを見つめる。

「今のって、ダツキだったよね？」

「そうだけど…急にどうしたんだいダツキ？ 会話に混ぜてくるなんて珍しい」

《そんな事どうでもいいわ。あんた達気づかないの？》

『え、えと…何が？』

《はあ…アリスも気づいてないようじゃどうしようもないわね》

『ちよっ！　ちよっどどど言っ事よっ！』

『まあまあ。落ち着かんかいお嬢ちゃん。で、どど言っ事かいのう？』

《やれやれ。これで相手がその気だったら全滅よね。前の気配探つて見なさいよ、そうすれば気づくんじゃない？》

やれやれと嘆息するダッキ。これ以上はヒントは出さないとばかりに黙り込んでしまう。

言われるままに大樹達は百太郎を覗き込むが、相変わらず何の反応も無い。つまり悪魔は居ない訳なので二人揃って？マークを浮かべている。

そんな中モムノフとヌエ、マカラだけは厳しい表情をしつつ前を見つめていた。

『ったく。どうみても戦闘系じゃねえダッキにレベルが負けてるとは言え、ここまで言われるとはな。サマナー注意しな、前に何か居るぜ』

『ふむ。限りなく薄い気配じゃが、何かあるのう。お嬢ちゃんや。ワシの後ろにおるんじゃぞ？』

「あ、はいっ！」

言われるままに又エの後ろに回るみゆき。

『姿ヲ見セヨ…サモナクバ敵対行動ト見ナシ攻撃スルツ…！』

その言葉と同時に全員が戦闘態勢を取る。

そして同時に男性とも女性ともつかない不思議な声が聞こえてきた。

【ふむ…中々の気概だな。武器を収めよ、私は敵ではない】

目の前で何かがあぐにゃんと歪んだかと思うと、其処には一人の老人が立っていた。

何の覇気も気配も感じる事が出来ないため仲魔達はそれぞれ戸惑っている。

ダッキが言っていたのはこれかと大樹は老人を見続けていた、恐らくあの老人がエンノオツヌだろうと確信を持ちながら。

【私の名はエンノオツヌ。汝がここに来るのを長き時に渡り、待っていた者。ついに来たか…強き魂を持つ者よ】

そういうとエンノオツ又は強き魂を持つ者と呼んだ相手に向かって杖を差し向けた。

「え……」

「うえええっ!?!」

「え……あ、あの……私……ですか?」

其処にはただ戸惑うみゆきが居た。

エンノオツ又登場！ 指名されたのはなんとまあみゆきさんでした。そこで佐藤君じゃないのかっ！？ というつつこみが来そうです。

ザ・ヒーローならぬザ・ヒロインの誕生の予感です！

佐藤君？…まあ佐藤君ですよ。

いやあ…三人称は難しいです、どの変で切るかとか、どこまでスムーズにそして説明口調じゃない程度に説明できるか…が難しいです。プロの人は地の文がちゃんとかけてるから凄いですよねえ…

最近は結構会話だけというのも多いですが、ちゃんと地の文を入れないと分かりにくいですし…頑張らないとなあ。

どうでもいいこと

寒いです…東京とかはもう暖かそうですね…

北海道は今現在もストーブが欠かせないですよっ！
でも灯油が高いんです…えうう…寒い嫌いだあ…

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：46票
みゆき：14票
ダッキ：62票
アリス：11票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

Continue54 〈歩みだす蛮勇、留まる勇氣〉（前書き）

金剛神界編はどれくらいにしようか悩み中です。

10話位で終われるかなあ…

今回もいつもの通り短いです。

微妙に忙しいのとなんだか疲労が溜まっているせいかコメント返信が未だに出来ていません（汗
うう、感想などはいつも全部見てます。本当に有難う御座います。
こんなへなちよこな私ですが、よかつたら見てあげてください。

5 / 0 6 追記 感想返し終了しました！

Continue 54 〈歩みだす蛮勇、留まる勇氣〉

「みゆきさん大丈夫かなあ…」

「分からない。でも彼女が自分で選んだ事だし、僕達には止められないよ」

「うん…そだね」

「それに僕達は僕達でやる事がある。お互い頑張ろう」

「だね、みゆきさんなら大丈夫だって思わないと。早くここから出なくちゃいけないし！」

僕達は今それぞれエンノオツヌから試練を与えられている。

あの後直ぐエンノオツヌは高良さんをメインとして話し始めてきた。彼の話によると、僕の予想通りどうやら現在僕達が住んでいた場所は完全に異界化しているらしい。

金剛神界ここんはそもそも現実とも異界とも違う特殊な空間でここで流れている時間はあちらとは違う事も指摘された。

となるとやはり皆が心配な二人が色々騒ぎ出したけど、こればかりはどうしようもない。

たとえ今すぐ戻ったとしても数ヶ月は余裕で過ぎている事になるし、そもそも金剛神界には出口がないと言われたのだ。

どうしてもここから出て行きたい場合はエンノオヅヌに認められなければならぬという。

その為には、彼の言う強き魂を持つ者と言われた高良さんが覚醒する必要があった。

エンノオヅヌはどうかやら予知の力を持っているらしく、異界化した世界を元に戻すためには高良さんの力が必要になるのだという。

はつきりいつて眉唾にしか聞こえない話なのだが、それを告げて居るのがエンノオヅヌだと言う事で信憑性が高まっていた。

しかし高良さんはデビルサマナーでもなければ能力者でもないただの一般人だ、一人で戦闘が出来るという訳でもない。

だが、その試練とは単純に戦ったりするものではないらしいのだが、下手すれば命に関わる可能性もあるという、いや寧ろ死ぬ可能性のほうが高いようだ。

だけど覚醒さえすれば、彼女は単独で悪魔を倒せるようになるし、異界を元に戻すための力も手に入れられるようになるというのだが…

僕は何も言う事が出来なかったがこなたがそれを止めようとした、命に関わる試練はさせられないと。高良さんがそういう目に合うくらいならば自分が戦うと。

それでも高良さんは静かに首を振りそれを受け入れてしまった。

-これで漸く皆さんと同じ位置に立てるのですから。だから私は喜んでその試練を受けさせて頂きます。

勇気がある、単純にそう思った。

そして同時に無謀だとも思った。

彼女は単純に強くなれるから、どこかのヒーローの様に強くなれるから試練を軽々しく受けるという考えは全然持っていなかった。

こなた達と同じ場所に立ちたい、護られ続けるより一緒に戦いたい。そんな感情が高良さんから感じられた。

確かに彼女の索敵能力や様々な知識は頼りになる。でも大事な友人が戦っているのに一人だけ安全な場所に居るのは嫌だったのだろう。

そんな彼女に後方支援も戦力だとは口が裂けてもいえなかった。

蛮勇かもしれない、でも決めるのは全て高良さん自身だ、僕達が口出す問題じゃない。

ならばこなたにも僕にも止める権利はない、自分で決めた事を僕らが勝手に辞めさせるわけには行かないのだから。

「かがみ達無事かなあ…まあかがみ達ならどうとでも出来そうだけど…問題はお父さん達だよな」

『こなたのお父さんは賑やかだったホっ！』

「多分異界化しているし、あの町に居たクズノハの人達がどうにかしてくれていると思いたいね。後は柊さんの両親が動いてくれるんじゃないかな」

「そうだよな…うんっ、そうだねっ！ ネガティブじゃだめだよ、うんうん」

最低でも数ヶ月はあの場所に戻る事ができない。

かなりのストレスやプレッシャーがあるはずだ。いくら強いと言ってもこなたや高良さんはまだ18歳の子供なのだから。

僕はあの場所に残してきたものはないし、強いて言えば柊さん達が心配なだけなのでそこまで辛いとは思っていない。薄情かもしれないが僕はそんな人間だ。

『レイ・レイハウだったよね。多分あの人も動いてるはずだし大丈夫だよ』

「うん、ありがとアリスちゃん。いよっし！ そう考えたら気分も晴れてきたよー。ってか改めて辺りを見ると本当に不思議な場所だよねえ」

気分も幾分か落ち着いてきたらしく周りを見る余裕が出来た。こなたが金剛神界を見回してそう呟く。

辺りは薄い霧で覆われた草原のような場所だ、暑くもなく寒くも無く丁度いい感じの温度だし過しやすいかもしれないな。

ゲームでの金剛神界は3Dダンジョンの都合上、壁みたいなのがあったし、青色っぽい世界だったけど実際この目で見ると薄暗いだけの草原にしか見えない。

あの青色は多分、この薄暗さを現していたのかもしれないな。

具体的に言うと、日が昇る少し前の草原を思い出せばいいかもしれない。あの何となく寂しい気持ちになるような場所だ。

一人で居ると気が滅入りそうになる感じだなあと思う。仲魔達が居てよかったよ。

「でも、良かったのかい？ わざわざ自分も試練を受けるなんて」

「それはこつちのセリフだよ大樹君。まあ…何ていうか力不足だなあって思っちゃったからさ…あの変態より強ければこんな事起きなかつたんだしね」

『確力ニナ…我等モさまなーモマダマダタイウコトダ。強クナレルナラソレニコシタコトハアルマイ』

『その意見にや賛成だ。オレもそろそろ強くないといけねえし』

な。このまま燻ってるのは性にあわねえ』

「そうだね。あの場にダツキを召喚できたらもつと違う展開になっていたかもしれない、僕も強くなるしかないよ。これからの事を考えるかね」

「それにしても試練があゝ。こういうのってゲームだとよくあるシチュだよねえゝ。で、パワーアップフラグがたつて。最初の敵は強くてボコられるというっ！」

『あ、わかるわかるっ！ 後で強くなつて敵を蹂躪するっ！ ああいうのにカタルシスを感じるよねえゝ』

「でしょー。一昔前はそういうの多かつたらしいよ」

『成程ねゝ』

「人生はそう甘くないけどね」

僕の場合は覚醒しても微妙だったからね…

それはともかく、僕達も同時に違う試練を受けられる事になったからこれをきっかけに覚醒できるように頑張ろう。

ただ待っているのは流石にアレだしね。

ちなみに僕とこなたは別々に動く事になっている、それぞれどんな試練なのやら…ゲームだとソーマを持ってくるといふイベントだったなあ。

とは言えそのソーマはすでに持っているから違う試練になりそうだけれど。

「大樹君も頑張ってるね。早く戻ってかがみ達に会いに行かないとだし」

「そうだね。時間を掛けすぎると1年以上経ってしまう可能性もあるし、出来るだけ急いで」

「うんっ！ それじゃ行ってくるねっ！」

『がんばれあなたーっ！』

こなたが自分用に作られた空間に入って行くのを確認した後、僕は近くを感じた気配に対して振り向いた。

其処には消えたと思っていたエンノオツヌが音も無く立っている。

【暫し待て、外れし者よ】

「外れし者…僕の事ですか？」

【そうだ、外れし者よ。汝には伝えねばならぬ事がある】

高良さんは強き魂を持つ者で、僕は外れし者か。

確かに色々と本来ありえない情報を持っている時点で外れていると言われても仕方ないかもしれないが。

【言伝のようなものだ。この世界にもし外れし者が来た場合、この言葉を届けて欲しいとさる御方から頼まれていた】

『言伝…？ でもなんでその人大樹さんがここに来るって知ってたんだろ…？』

『ここにきたのは偶然じゃねえって事なのかも知れねえな』

そう言えば言っていたな…ここまでは予定調和だったと。

どんな理由でここに来るかまでは分からないけど、ベルベットルームで聞いたことが確かならば僕はここに確実に来る運命だったという訳だ。

誰かに仕組まれているのか…そもそも仕組んだとしても僕にそんな事をして何の意味があるのかわからないが。

それにしても謎だけがどんどん増えて行くな…僕はどこその名探偵じゃないんだから推理とかそういうのはまったくダメなんだけどね…

【魔法の札を鍛えよ。そうすればもう一つの謎が解ける、との事だ。努々忘れるでないぞ？】

「魔法の札……マジックカードの事か」

『ふむ、サマナーが使ってる魔法やアイテムを封じ込められるカードだろうな？ それを鍛えるとはどういう意味だ？』

『単純にレベルアップしろって言う意味じゃねえのか？ それで謎が解けるとか言われても、そもそもその謎がなんの事やらただけだなオレは』

「鍛える…か」

マジックカードは横島の金文珠と同じく作るのにMPをまったく必要としない。

と言う事は横島のほかに誰かが僕に力を貸してくれているのだろうか、何の為に…いや、今考えても意味の無い事なんだろう。

モムノフの言う通り僕が強くなれば次第に分かることなのだろうし、今は心に留めておくだけにしよう。

「有難う御座います、言伝は確かに」

【そうか…ならば行くがいい。己の殻を破く事が出来るのは己だけだ、とはいえ忘れるな？ 力とは自分のものであって自分の意思の通りにならぬことを。それを忘れてしまった時力あるものは歪み滅びて行くだろう】

『ヒューヒューヒュー。成程のう』

『難しい、ですね』

「ふむむ?? よくわからないのです」

「要は力に振り回されちゃいけないって言う意味だよ。強くなればなるほどそうなりやすいからね」

『ふんっ、言われなくてもわかってらあ。行こうぜサマナー』

『力は力であろうに。なんでもいい早く強くなれサマナー。いい加減にモー・シヨボーから変えてくれ、この姿は流石になさけない…』

「が、頑張るよ」

『結構可愛いと思うのですが?』

『ミトラスちゃんの言う通りよねえ』

『ぐがあああああっ!?! 我は魔王! 魔王なのだっ! 恐れられこそすれ可愛いと言われる訳にはいかんのだあああっ!?!』

そのままおいおい泣き出すモー・シヨボー…うん、ごめん君は現時点でどうしようもなく可愛いという存在になっているよ。

流石に可哀想なので、早めに違う悪魔に合体させてあげるのがいいかもしれない。彼の精神衛生上のに。

『本当に頼むぞっ!?! マジで頼むぞっ!?! これでネコマタとかにされたら我は泣くからなっ!?!』

『すでに泣いてるじゃん。というかその感じ可愛いよ? 萌えを感じてるって奴かなこなた的に』

ピシィと固まるモー・シヨボー。

「あ、塩の柱になったです。モー・シヨボーは色々多彩なのですよ」

「いや、そういう問題じゃないからね?」

『ヒョー…流石に哀れじゃのう』

いつの間にかエンノオツヌも居なくなってるし僕達もそろそろ試練に向かう事にしようか。

悪魔と戦う試練なのか、それもと違う試練なのか。

流石に内容なんて分からないからぶつつけ本番しかないけどね…恐らく簡単なものにはならないだろう、それじゃ試練でもなんでもないから。

死ぬ可能性も考慮して全力で立ち向かう事にしようか。

「まさか現実世界に生きてきて試練何ていうものに立ち会うとは思

わなかったよ。こなたじゃないけどゲームと現実世界は違ったからね」

『なんでもいいさ、強くなれるならな。期待してるぜサマナー？
ここいらでちゃんと強くなってくれよ？』

「頑張るよ、見捨てられたくは無いからね」

「アメリカも頑張るのですよ！ ご主人様とずっと一緒なのですっ
！」

『そこん所は私も同じね 一緒に強くなりましょ大樹さん』

『我が主ならば、殻さえ破れば直ぐに強くなれましょう。私も微力ながら力になりますので』

『そうよねえ。まだサマナー様との濃厚なえっちも出来てません
しい、それが叶うまでは絶対サマナー様は死なせませんわあ』

「本当にストレートだよねアメノウズメは……」

これから試練を受けるといつものような感じで話して行く僕達。

日々ずっと緊張していても逆に疲れるだけだし、これはこれでいいのかもしれないな。

ある意味僕達に合っている雰囲気とも言えるしね。

折角の試練なんだ、全力で鍛え上げなくては…目標はナナヤシキを
使えるようになるまでレベルを上げたいものだね。

ある意味で横島よりも謎の存在なナナヤシキ。

僕の本来のメインペルソナであり、未だに召喚すら出来ていない特
殊なペルソナ。

横島にナナヤにマジックカード…世界も大変な事になっているけど、
僕自身も随分面倒な事になっている気がするよ。

「何にせよ…行くしかないか。皆基本はパターン1で行くよ。又エ
には今から説明するからね」

さあ、行くところか。

異界の試練開始……………対象：高良みゆき／泉
こなた／佐藤大樹

試練内容

- 『ヴィジョンクエスト』
- 『無の空間』
- 『蟲毒』

Continue54 〈歩みだす蛮勇、留まる勇氣〉（後書き）

どうでもいいこと

御寿司が食べたいなあ…と思う今日この頃です。

皆さんはどんなネタが好きですか？

私はトビっこといくらが大好きですっ！ 子供っぽいと言われるすが（笑

あ、ウニは食べられません（汗 でも私以外は皆ウニ大好きなんですよねえ…

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：48票

みゆき：15票

ダツキ：65票

アリス：12票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

C o n t i n u e 5 5 　↳ 追想、追走、終葬　↳ (前書き)

ヴィジョン・クエストなのですー

うわぁ…センスのかけらもないなぁと思う今日この頃です。

もう少し深みのあるお話がかけたらなぁ…

Continue55 〈追想、追走、終葬〉

- 高良みゆき視点 -

私は今、何も無い空間に居ます。

先ほどまでの草原とは打って変わり、一面が真っ黒の闇の世界のようですね。

光さえも消え去ってしまいそうなほどの漆黒は、これからの事を示唆しているようで少し恐ろしいと感じてしまいます。

ここは私がこれから行く試練の間なのだそうです。

金剛神界と言うこの不思議な異界で出会った、エンノオツ又様が私に課してくれた私のこれからの未来を自分で掴み取るための試練。

あの方は仰いました、私が強き魂を持つ者だと。

それが何を意味するのかはまだわかりませんが、ですがこの試練を行わなくては元の世界に帰れませんし、帰ったとしても私はまたお荷物になってしまいます。

【今一度聞くが。本当に良いのだな？】

「はい、宜しく願います」

【これから行う事は、如何に強き魂を心を持っていても辛い出来事になるだろう。特にお前のような優しい心を持つものには特に…な】

気が付けば目の前にエンノオツヌ様が立っていました。

修行僧が着ている袈裟のようなものを身に纏い、その姿はまるで昔の僧正様を思い浮かべてしまいます。

あまり声色は変わっている感じが致しますけど、どうやらエンノオツヌ様は私を心配して下さっているようです。

エンノオツヌ：間違いなく役子角えんのましの様の事でしょう。

実在した人物で、修験道の開祖とされている有名な方です。役行者えんたごうじやと言った方が名が知れているかもしれませんね。

色々な逸話がありますが、特に有名なのは鬼神を使役できるほどの法力を持つとされ、前鬼（善童鬼）と後鬼（妙童鬼）を従えていたとされる所でしょうか。

兎にも角にもとても有名な存在です。

何故そのような方がこの金剛神界に居るのかはわかりませんが、今私達を導いてくださっているのですから理解する必要は無いのかもしれないですね。

「あの…エンノオツヌ様。お一っだけ聞かせてもらってもいいでしょうか？」

【…良いだろう。聞きたいのは恐らく何故自分が強き魂を持つ者なのか、と言う事だろう?】

「! はい、その通りです。私はこなたさんの様に強くもありませんし、かがみさんやつかさんの様に魔法を使える訳でもありません。それ所か一時期は力が足りない事で人を勝手に疑い、嫉妬した事もある普通の人間です。そんな何処にでもいる私が、何故強き魂を持つ者なのでしょうか…?」

私の言葉にエンノオツヌ様はゆっくりと目を閉じて、口を開きました。

【それは、口で言って理解できる事ではない。だが、お前が生きて行く上で必ずその意味を知り理解する事になるだろう。それが幸か不幸かは今の時点では分からぬがな】

「そうですね…分かりました。確かに行き成り答えを知ってしまうのは私もあまり好きではありません。こういうものは自分で調べ、知っていくものですね」

【探究心が…それもまた良いだろう。だが、必要以上に識り過ぎるな、のめり込んでしまえば戻れなくなる時もある】

「分かりました、色々ありがとうございます」

【…では、行くとするか。今からお前が体験するのは一人の男の人生。それを追体験し何を理解し、何を知るのか。それはお前にかか

っている】

「人生を体験…分かりました。行って参りますね」

カラカラカラカラと、何かが回る音が少しずつ聞こえてきました。

そしてそれと同時にゆっくりとゆっくりと意識が朦朧としてきます、
今から行う他の方の人生を追体験する事が何の試練になるか分かり
ませんが、精一杯頑張ろうと思います。

………

………

…

そこで知ったのは一人の男性の幸福と絶望。

どんな人間にも理由があり、戦う意味があり、敵が居て味方が居る。理不尽に奪われる事に絶望し、護れない事に絶望し、裏切られた事に絶望した。

救いを齎してくれる筈の神々が敵で、自分を助けてくれるものは何処にもいない。

そんなよくある不幸の話。

ただ、それは実際に体験しなければ分からないでしょう。どれだけでも自分を無力に感じ、絶望を感じ、憎悪が身を焦がす体感と言うものを。

『ははっ。俺も遂に年貢の納め時かね』

『もう、そんな事ばかり言って、折角の子供なのに』

『冗談だって、冗談。そんな怖い顔しないでくれよ洋子』

『はああ、だめなお父さんですね。悠太はこんなだらしないお父さんになつたらだめですよ？』

『酷いなあ』

何処にでもあつた幸せな家庭。

私（俺）は確かに今幸せを感じ、これからもこの家族を護って
う、養っていかうと思っていたのです。

私（俺）はしががない自衛隊の隊員でした。昔から持っていた気安さ
と、仕事は完璧に行くその姿勢でそれなりの立場にあったようです。
妻は普通の一般家庭の女性。私（俺）のような仕事以外はダメな人
間を色々世話してくれた頭の上がない人でした。

『ねえ。今度のお休みどこかにいかない？』

『ん？ ああ、そりゃいいかもな。偶には家族サービスでもしないと息子に忘れられそうだし』

『とーちゃんつとーちゃん遊べーっ』

『おおっ！ 重くなったなあ悠太っ！ その内とうちゃん追い抜かれそうだなあ』

『えへへー』

『ないない。それはないわよ悠太はおとうさんが大好きですもの、
ねー？』

『うんっ！ とーちゃん大好きだっ！』

仕事の都合もあってあまり息子に構ってやれない点がありましたけ

ど。

それでも家族仲は良好で、順風満帆でした。

小学校に上がった息子を見て涙を流した事もあります。

買ってあげたランドセルを皆に見せびらかしている様子がとても可愛かったです。

妻との逢瀬も…その、素晴らしいものでした。

悠太が小学校2年生に上がる頃には妹も生まれて幸せの絶頂期でしたね。

『こらっ、安奈を見るのはいいけど苛めちゃだめよ？』

『うんっ！へー。赤ちゃんって変なのー』

『お前も赤ちゃんの頃はこんなもんだっただんどぞ？』

『えーっ！？俺がこんなのだっただんど？』

『写真見てみるか？ほれほれ』

『わー！すげー、俺も安奈そっくりなんだー』

『もう、貴方は遊んでないで少しは手伝ってくださいな』

『悪い悪い。ほーら悠太、遊びに行ってこい。気をつけるんだぞ？』

『うんっ！』

息子は元気に逞しく、そして良い子に育ってくれている。

娘も生まれ、妻は産後も良好でした。

私（俺）もそれなりに昇進し、生活は困ることなくこれからも人並みの幸せが来ると……………

そう思っていたのです。

そう思って……………いたのです。

やめる…

やめてくれ…

やめてくれよ…

息子なんだよ…もうすぐ…もうすぐ中学生になるんだよ。中学にあ
がったら野球をやるって…プロ野球選手になるって言ってたんだよ。

それが俺の楽しみで、自慢で…可愛い息子で…

娘も漸く幼稚園に入って…俺の事をパパって呼んでくれてるんだよ…

部下にも自慢の息子と娘だったんだ…なあ…なああ…

『何してるんだよおおおお!! 貴様らああああああああつ

!!』

血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血

血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血

血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血

血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血

血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血

血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血血

其処には笑顔の耐えないドジが玉に瑕の妻だったものが散乱していた。

隣には息子が銃弾に撃たれ事切れていました。

そして娘を奪い去ろうとしている法衣姿の男数人と、羽の生えた人間の様なものがそこにいたのです。

彼らは口々に訳のわからない事を呟き、叫んでいました。

- この娘はメシアの母体になるべき方なのだ。

- おろかにもここに居る人間はその重大さを理解することなく、娘の明け渡しを拒否した。

- 世界が滅びさる瀬戸際だと言うのにそのような事も理解できない愚図どもに天使様による制裁を行っただけだ。

- この子供は何れ聖母を脅かす暗愚に変わるかもしれない、だから粛清したまで。

- 貴様も同じ所に送ってやろう。

『殺してやる…殺してやる…殺して…やるつうつうつうつう！…！』

包丁を取り出し、メシア教を名乗る人間向かって特攻しました。

それでも自衛隊員、戦闘力には自信があったのです。

ですが、結果はいうまでも無いでしょう。

私（俺）は完膚なきまでに叩きのめされました。死ななかったのは単純に運が良かっただけ。

彼らも浮かれていたのでしょうか…聖母候補を手に入れたことに。

『あああ…うう…何で…だ…なんでだよ…俺達がなにか…したのかよ…神様よお…普通に生きてちゃいけないのかよ…なあっ！なあああっ！！』

パチパチと燃え行く家の中で絶叫を上げる私（俺）。

幸せだった生活が一瞬にして理不尽に壊され、燃やされ、殺された。

悪魔に殺されたのなら、神に縋り付いて祈っただろう。

復讐を糧に生きたのだろう。

だけど…神様の使徒に殺された私（俺）の家族はどうなるのだ？
罪なんて犯したことの無い妻が、息子が何故殺されなければならぬのだ。

娘も訳の分からない理由で連れて行かれ、自分もまた燃える家の中

でただ死ぬだけなのでしょう。

ああ…神よ。

これが人間にする事なのですか？

貴方は祈りを捧げない人間は死ぬと言うのでしょうか？ それは悪魔と何が違うのですか？

私（俺）は叫びます、叫ぶことしか出来ないから。

もう…それしかできないから。

憎むことしか、出来ないから。

………

………

…

場面が切り替わります。

私（俺）はどうやら生きていたようです。

全身が酷く痛み、引きつるのを感じました。恐らくは火傷のせいでしょう。

痛む体に鞭を打ち起き上がると其処は病院とは違った場所でした。

『起きたか？ まだ動かない方がいいぞ？』

『…ここは…俺は…死んでないのか…？』

『運が良かったな。お前はメシア教を調べていた俺達の部下に救われたんだ』

『どういう…事だ？ あんたらは誰なんだ！？ 俺の家族は！？ 娘はどうなったんだっ！！』

『落ち着け…と言っても無理だろうな。とりあえず娘さんだが、メシア教に捕らえられた。俺達が動く前に速攻で動くとはな…やられたよ』

『意味がわからない…娘はどうなるんだっ！！』

『…恐らくは聖母としての適正を調べられた後、聖母ならば隔離されてメシアを生む母体として育てられる、だが適性が無ければ…』

『ど、どうなるって…言うんだよ…なあ！？ おいつ！ 俺の娘はどうなるんだよっ！』

『生体マグネタイトに変換され、天使のエネルギーにされる』

『は…はは…なんだよそれ…なあ？ 天使とかマグネタイトとか…訳がわからねえよ？ 俺はただの自衛隊員なんだよ…オカルト集団なんてしらねえよっ！！』

頭が回りませんでした。

妻も息子も殺され、娘は攫われた。

勝手に拉致されて、上手く行けば孕まされ子供を生む道具にされ、下手をすれば殺されるという現実に、頭が真っ白になりました。

なんで自分がこんな目にあるのだろうと、やり場の無い怒りだけが全身を駆け巡ります。

目の前にあいつらがいたら、縊り殺したいと思うほどに憎悪だけが…延々と。

『信じられないだろうな…とりあえず今は休め、今のアンタじゃどうしようもない』

『ふざけるなっ！ 俺は娘をつ！ 娘をつ！ うぐっ……』

激痛が体中を苛み、再び私（俺）は意識を閉ざしました。

そして…ここから彼の…私（俺）の復讐劇が始まったのです。

命を救ってくれたのは、メシア教と対立する天使や神による法の下に生きる生活を良しとしない集団。『ガイア教団』

総合理念は悪魔を含めたあらゆる人種が、それぞれ平等に生きる事ができる世界を創造するという壮大な、そして馬鹿げた話を真面目

に取り組むカルト集団でした。

力こそが正義、弱ければ死に、強ければ生きていける。それはある意味今の世の中と大して代わりの無い、寧ろ今の世界を示すような考え。

そしてその為には神の統治の下家畜のように生きるというメシア教の考えは理解する事が出来ず対立していたのです。

メシアもガイアも簡単に言えば過激派テロリスト集団や異端宗教の集まりでしょう。

私（俺）はガイア教団に身を置き、復讐心を糧にして戦っていきました。

いつか娘を助ける事を夢見て。

娘は運よく生きていて、今もメシア教に捕まっていると言う直ぐに壊れてしまうような希望を頼りに。

戦い続け、仲間が出来ました。

戦い続け、魔法も不思議な力もなしに天使を殺せるようになりました。

戦い続け、いつの間にか自衛隊の頃のように部下が出来ました。

戦い続け、いつしか希望は薄れ、絶望も薄れていきました。

ただ漠然とロボットの様に戦い続け、何時しか10年という歳月が

過ぎていました。

『隊長っ！ 俺やっとデビルサマナーになれました！』

『ふむ。お前がねえ、来た当時は悪魔が怖い怖いって脅えてたお前が一丁前にデビルサマナーか』

『そ、それは昔の話ですよっ！ 今の俺はスーパーデビルサマナーですよっ！』

『やれやれ。その程度で喜んでるようじゃ近い内に足元を掬われるぞ？ いつも冷静に、教えておいただろう？』

『は、はいっ！ 反省します』

『おーおー。また絞られてるのか隊長に？』

『う、うっせ！』

娘の事はすでに諦めていました。

メシア教は今でも聖母候補を探しているからです、つまり娘は適格者じゃなかったのでしょうか。

悲しむ涙は数年前に全て消えました。

憎悪は下火になり、情性で生きているようなものです。

メシアの事は今でも憎んでいます、もう表立って動く事は命令されない限りないでしょう。

今は自分も役割があり、新しく出来た可愛い部下達が居ます。

妻は息子はこんな私（俺）を見て笑うのでしょうか？ それとも憎むのでしょうか？ それとも悲しんでいるのでしょうか？ もうわかりません。

ガイア教の上の方も色々きな臭いですし、もはや何が良くて何が悪いのかは私（俺）にはわからなくなりました。

『隊長？ どうしたんですか？』

『ん？ あーいや。最近タバコがどんどん高くなってなあ、色々厳しいんだよ。世を憐みたくなるな』

『タバコで世を憐むって…情けなくありません？』

『いいんだよ。俺は俺の持論があるのさ』

『隊長を見ると俺達本当にガイア教なのか疑わしくなりますよね
え』

『おい待て、それは少し酷くないか？ 俺ほど隊長してる男は居ないだろう？』

『隊長みたいなのがガイア教の上司に沢山居たら今頃上は慈善事業してそうっすよっ！』

『ほづほづ……つまりお前は俺に喧嘩を売っていると』

『あ、やば……死んだ』

『骨は拾ってやるぞー』

『助けるやてめえらっ!?!? ほらっ! 今こそデビルサマナーの出番じゃねえのっ!?!?』

『いや、まだピクシーしかないし諦めてくれ』

『さあ、逝こっか?』

『爽やかに字が違う気がしますっ!?!? のおおおおおっ!?!?』

非日常の中の平和な日常。

だが、私（俺）達は日々戦い続けているのです。こっぴやって笑っている皆も、いつかは死ぬのでしょうか。

そう………

『しほっ………た、隊長……俺……やりました……よね……へへ………天使と相打ち……なら………上出来……しほっ』

『ああ、よくやったよ。いつもヘタレだったお前には上出来だ』

『嬉しいっスよ……はぁ……ぐぶっ……俺……先に……行ってます……から……隊長は……まだ……来ないで……下さい……よ……』

そう言っただけで動かなくなる部下。

開いたままの目を閉じてやり、ゆっくりと眠らせてやる。

こいつが死んだのは私（俺）のせい……護りきれなかった私（俺）のせい。

これからも何人も部下の死体を踏みしめ歩くのでしよう。

その度に心を碎きながら、血の涙を流しながら。

それでも私（俺）は止められない。

『……洗脳悪魔計画か。何でもいいさ、俺の部下が死ななければな上もメシアも知った事か。馬鹿な部下を護るのは隊長の使命みたいなもんだろっ？』

なあ、洋子。俺はさ、きっとだめな人間なのかもしれないな。

なあ、悠太。とうちゃんは頑張ってるぞ……でも、お前が生きてても俺にみたいにはなっただけで欲しくないな。

なあ、安奈。生きているのか死んでいるのか……分からないけど。お前は俺を憎んでいるのだろうか……

ただど…私（俺）は死ぬまで、足掻いて足掻いて生き続けると決めました。

信じるものは自分と自分が信じた者のみ、それが命を削りながら生きてきた私（俺）の見つけた答え。

…

…

…

高良みゆきが覚醒した！

力+3 魔+3 体+3 速+3 運+3された！

オートアナライズを覚えた！

ラーニングを覚えた！
銃の素質を覚えた！
剣の素質を覚えた！
シャーマンの才能を覚えた！
妖鬼・オニを憑依させた！
彼女に才能の限界は……………無い

「……………これは…これが天使の行うことなのですかっ！？
あまりにも…あまりにも彼が救われません…」

【戻ったか。それもまた一つの側面だ】

「エンノオツヌ様…私がこれを体験する意味は、あったのですか」

【ある。お前がお前の世界を救うと言っのならばな…お前がここに
残るのならば意味の無い記憶だ、しかし。お前が地上に戻り世界を
救いたいと言っのならば必要な記憶になる】

「天使と神は…敵なのでしょうか」

【お前次第だ】

「私次第……」

【天使や神もそれぞれ意味があつて存在している。悪魔も人間も然り。それぞれに抱える正義があり、目的があり善がある。見方を変えれば変わるものがある。お前が体験するヴィジョン・クエストはまだ存在する…が、今はこれだけを覚えておくといい】

見方を変えれば天使も神も違うように見える…ですか。

確かにメシア教の方達からすれば、世界を救い自分達を救ってくれる救いの天使や神様なのでしょう。

ですが…これだけの事を見て、そして世界中に核を落とそうとしている神を、諸手をあげて奉りたいと、信用したいとは思えません。

「私は…皆さんを救えるでしょうか…」

【……分からぬ。全てはお前達次第だろう……だが、どうしても護りたいものがあれば、他を捨てても護る事を考える。人間には…いや、あらゆる存在でも。一人で救えるものには限りがある。この世のどこかで死んでいる者を助ける事ができないように、過ぎた時間を元に戻せないように、出来る事と出来ない事を覚えておくのだ】

「出来る事と出来ない事………はいっ」

私が少量の力を身に付けたと言っても、それで世界を全て救える訳がない。

それ所か、こなたさん達すら護れないかもしれない。

無力ですね、私は……でも、それでも、私は…私は。

「また…皆で楽しくパーティーがしたいです」

その為にも、エンノオツ又さんが言った事を理解し、ヴィジョン・クエストでの体験を覚え、理解しなくてはいけませんね。

【持っていけ。今のお前に必要な物だ】

エンノオツ又様が私に一振りの小太刀と拳銃を手渡してくれました。

今まで重くて扱えないと思っていた武器なのに、何故かよく手に馴染みました。

【強くなれ。例えそれで救えない者が居ようとも、お前が強くならなければ護れるものも護れない。強き魂を持つ者よ…これが私がお前に出来る最後の力添えだ】

「ありがとうございます…きっと強くなってまた皆でっ！」

特別な体験によりレベルが15上がった!!
COMPステータス更新。

答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：53票

みゆき：16票

ダツキ：69票

アリス：13票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue56 無理、無茶、無謀も策にするのが策士（前書き）

という訳で試練2号こなターンです（略するな）

やはりこなたをメインで進めると所々賑やかになってしまいますね
！。

ひと時の清涼剤のようです。

- 泉こなた視点 -

「白い空っ！ 白い大地っ！ 白い世界！ そう！ ここが伝説の精神と時の あべしっ!？」

『はいっ！ 危険ワード禁止っ!!!』

私の頭からスベシッ！ と小気味良い？ 音が響き渡る。

そんで持って同時に悶絶してるところ転がる私。うん、めっちゃ痛い。これってHP減ってるよね確実に

「おお…スナップが効きすぎて痛いんですが…ね？ ペレさんペレさんそれ紙のハリセンだよね？ なんか鈍い音したんですが」

『紙に決まってるでしょ。全力込めたけど』

「鬼がいるっ!?!？」

『残念、女神よ』

「くそう、あーいえばことう子だ」

という訳で試練と言う事になったんだけど、行き成りはっちゃけてみました。

いや、あれだよ。シリアスばかり続けるとさ頬の筋肉がおかしい感じになるんだよねえ…ってまあ半分冗談で怖いのとこれからの鬱展開考えるとちょっとねー。

話によればここから早く戻れたとしても数ヶ月余裕で過ぎてるらしいしさ。ぶっちゃけかがみとつかさがどうなってるか…予想もしたくないけど出来ちゃうんだよねあ。

町ひとつままる全部異界になってる。そんな中に一般市民がいて何が出来るのさ？ って話になるでしょ？

で、もしかがみとつかさが無事だとしても、そうなたらあの子達なら動くよねえ。うん…動かない所が想像できないぜ。だって私も動きそうだもんそういう時は。

正義感っ！ とかそういうのじゃなくて、単純に無意識的に動いちゃうかもなんだよねえ。

そして異界と言うことは悪魔がそこかしこに蔓延って……詰んでるよね色々。

核もそうだけどさ、どうしてこつも鬱展開ばかり展開するんだかも…神様とか馬鹿じゃないのっ！？ ねえ、馬鹿じゃないのっ！

あの変態のせいで大変な事になるし、本当に勘弁してほしいよ。

『デ…ココデ八何ヲスレバイイノダ？ さまなーヨ？』

「ごめん、ぜんぜんわかんない。見渡す限り真っ白な空間だけどさ。何するんだらうね？ 修行？」

某超野菜人になれっというのかな、あのエンノ君は。私は残念ながら普通の一般市民ですよ。デビルサマナーだけどさ。

何にしても、まずはこの世界に入ってびっくりしたよ。

見渡す限り何にもない、まさに某時の部屋って感じだよ著作権で訴えられないかなエンノ君。で、ついでに言うところ情け容赦ない事に休む場所すらありませんときたもんだ。

これはあれだ…死ねと、死ねと仰いますかエンノ君。畜生、名前がエンノ君だと某魚に足の生えた不思議生物に認定してやるぞ？

とりあえずは…重力とかはかかってないみたいだけどね。でも、どこもかしこも真っ白いし先すらも見渡せないよ。どうなってるのかねこれ…

実はまだパーツ設置してませんでしたとかいっただらボコにする自信があるよ、うん。

んー…修行すればいいのかなあ。でも修行って何すればいいんだらうね？ 普通に筋トレとか格闘技の訓練した所で意味なさそうだし。

デビルサマナーは修行して強くなるもんじゃないしねえ…こうい
うのはなにより経験が必要だから。

銃の練習とか、違うなあ。

『よくわからないけど頑張るホツ！ こなたも一緒に頑張るホ
』

「いやあ、元気だねえフロストちゃんは」

『それが取り得たホ
』

ぴこぴこ動く可愛い雪だるマン。いやあ癒されるねえ。夏場に一体
は欲しい仲魔だよ。冬は残念ながらノーセンキューですが。

冬は暖かい毛皮を持つ仲魔とか欲しいかもしない。

『とりあえずよ？ どうするんだサマナー？ だまーってても腹減
るだけだぜ？』

「うーん。一応食料とかは大樹君からカードにして渡してもらって
るから暫くは大丈夫だけど、そうだよねえ…」

大樹君がくれた食料を収納したマジックカードの束を再確認する。

水とかパンとかご飯とかね。流石に材料から貰うには作る場所がな
いので即座に食べれるものばかり貰っちゃったよ。

それでも枚数見る限り、節約するなら仲魔の分を含めて1ヶ月は余裕で持ちそうなの所ありがたいよね。

タダじゃないよ？ って言ってたけど微妙に笑ってたのが印象的だったな。何ていうか可愛いって感じがしてね、おうノロケノロケ。

「んじゃ、とりあえずマーカーでもつけて移動してみようか。COM Pで場所把握は…OKと、試練って言うくらいだから悪魔も出てくるかもしれないんで皆宜しくね」

『任せておきなさいよ。偶には動かないと存在感なくなっちゃいそうだしね』

『ふふ…そういえばそうですね』

『リヤナンシーもがんばるホっ！』

『そうねえ。強くならなくちゃいけないのは私達もですし』

『…デハ行コウ。さまなーヨ。出来ルダケ後口ニ居ルトイイ』

「うん、さーんきゅ」

『んじゃ、行こうや。鬼が出るか蛇がでるか出てきたら悪魔だろうけどな』

という訳で、試練と言う名の大冒険が幕を開けたのであったっ！！

……

……

…

「旅をしてきてすでに30年……お互い歳をとったもんだねい…ペ
レばあさんや…」

『何処から突っ込めばいいのよ…歩いてまだ30分しか立ってない
でしょうが』

「もうっ、其処はちゃんと乗らないとダメだよっ！」

『あーはいはい』

「くそっ…日に日にかがみん化してきよるなこのペレ様は」

絶賛真つ白い道を歩いている私達だよ。

悪魔と遭遇する事もなく淡々と真つ白な道を歩くのって、微妙に疲れるよね。一人だけだったら精神的に辛いかも。

もしかして精神を強くする試練とかなのかな？ エンノ君ってばここで何をしろって言わないもんだから何をしたいいかさっぱりだよ。

『敵ハ……居ナイヨウダナ。コレダケ動イテイルノニ遭遇シナイト
ハ……悪魔ハイナイ可能性モ有ル……カ』

『かもな。折角気を張り詰めてたって言うのに拍子抜けだぜ』

『ハイハイまだ30分しかたつてないんだから、これが畏だったらあつさりかかっているわよアンタ達……まあ、でもそんな感じはするけどね』

百太郎の反応は相変わらず無し。

悪魔は近くに居ないようだねえ、ちなみにマーカーつけてるので戻る気になればいつでも戻れるよ。

それにしても……本気で何をすればいいんだろう。訳が分からなくなつて来たよ。

実際仲魔と話しながら淡々と歩いているだけだしね。

悪魔と戦う！ とか自分自身の鏡像と戦う！ とかだったらまだ試

練っばいんどけどさ。

『……訳が分かりませんわね。もしかしてエンノオツ又は試練内容を伝え忘れたとか……』

『おじいさんは物忘れが激しいホー』

『いや、流石にそれはないでしょ。でも「試練だ」とか言っておきながら何も伝えないのはおかしいわよね……もしかしたら、それをひっくるめて試練……?』

『あん? どう言う事なんだ?』

『あ、いや。まだ予測の域を出てないわ、確信が持てるまでは待っててくれない?』

「寧ろ何かに気づきかけてるペレがばないね」

あれ? 私の試練なのにペレが代表格っぽくなってきたんですが……あれあれあれー? 私の試練だよな??

むう……流石に遊んでられないぞ。ここから出られなきゃ閉じ込められてると一緒だし。無為に時間を潰すのは不本意だよ。

出来るなら、早めに元の世界に戻りたいしね。ダメっぽいとわかってても期待してしまうのが人間のサガなのだよ。

ペレが言ってた「試練と言いながら何も伝えないのはおかしい」と

言うセリフを考えてみようかな。

みゆきさんが試練を受けると言っただけ黙ってられなかったから私も試練を受けると言っちゃったんだよね。

だってさ、みゆきさんが頑張るって言っただけに私が何もしないなんて…それなんか違うなって思っちゃったから。

大樹君の件で最近少し変な感じだったけど、それでもみゆきさんは大事な友達で、護りたい人だったんだよね。

みゆきさんは自分も戦いたいって思ってたみたいだけど、知ってるかなみゆきさん。

私はね、みゆきさんを出来るなら戦わせたくなかったよ。ハブにしてる訳じゃない…そういう意味で戦わせなくなかったんじゃない。

私にとってさ、みゆきさんは『日常であり、帰るべき場所』だったんだと思う。

アルバイトで異界とかに潜ったりしてた私、非日常に転がり込んで普段とは違う、殺し殺されの世界になってさ。色々殺伐としちゃう世界だよ、悪魔と関係しあう世界って。

でもさ、それが終わればニコニコ笑うみゆきさんがいて、その笑顔を見ると『ああ、日常に帰ってきたんだなあ』って心のどこかで思ってたんだよ。

だけどそれってさ、つまるところ私の勝手な思い込みとみゆきさんに対する重圧にしかないよね。

『どうしたホ？ どうしたホ？ こなた？』

「んあ…あ、うん。少し考え事してたよ」

『フム…思考ニ耽ルノモマタイイダロウ。幸イニシテ時間ダケハアルヨウダシナ』

『あつちじゃペレが考えこんでるし、こっちはサマナーか？ ま、いいけどな楽でさ』

『何を言っていますかナーガ。こついう時こそ警戒を続けるのが私達でしょうっ！』

『おおう、悪い悪いって怒るなよアップサラス』

仲魔達のやりとりを見ると、本当に仲がいいなあって思う。

デビルサマナーになるまでは悪魔ってずーっと話の通じない存在だっ
つてずーっと思ってたよ。

大樹君からCOMPを貰って、初めてペレ…あの時はカハクだった
けど。彼女を仲魔にして悪魔にも話を通じる相手もいるんだなって
思っ

「話を通じる…か。そういえばそうかな…私は結構何も知らなかつ
たんだよねえ」

『サマナー？』

「あはは。なんでもないよ」

何もただ考える事がどんどん多くなってくるね。

もしかしたら、ここってそういう試練のかな。単純に強くなるんじゃないくて、色々知る事、理解する事、受け止める事がメインなのかもなあ。

こうして、何にも捕らわれずに考えるって滅多になかったしね。普段は遊んでたりしてこんなに悩んだり考えた事なかったから。

つまりこれはあれかね？ 普段から落ち着きのない私に落ち着けっ！ という凶悪の試練なのだろうか。

むー、自分じゃ結構冷静な気がしなくてもなかったけど……あ、それはないか。

大樹君が死んじやった時切れて錯乱して返り討ちにあったくらいだしねえ。少しばかり力を手に入れても精神落ち着けなきゃ宝の持ち腐れって事かな。

『悪魔が居ない、理由はない……つまりこの試練は……自分で自分の試練を見つける……』

「ペレ？」

『うーん、何となくだけど把握できた気がするわ。多分サマナーは試されてるわね』

「ふうむ…自分で自分の至らない場所を探してそれを克服しろっ！
って言いたい訳だねっ！ エンノ君はあれかなツンデレかな」

『いや、あの顔でそりゃねえだろ』

『サマナー…あんたって…本当にあんたって…』

『ペレが最近苦勞性になっている気がしますね』

『トイウカソノママダナ』

「つまりペレはこなたんパーティーのおかんの存在っ！」

『それが女神に言うセリフっ！？ すっごく遠慮したいんだけどっ
！っ？』

「おお、冴え渡るっっこみっ！ これはもっかがみんの再来という
しかないっ！」

『…ほほう、つまりああなって欲しい訳ね？ 最近サマナーには色々
お仕置きが足りないと思ってたのよ。ふっふっふっふ』

「あ、あれ…私地雷踏んだ？」

『踏み抜いたなあ…まあ、イ？』

「ちよまつ!?! あっ!?!」

……

……

…

こなたです。素晴らしい笑顔でお仕置きされたです。

こなたです。可愛い顔して情け容赦がないとです。

こなたです。かがみんの再来と言うより彼女は超えた気がするそうです。

こなたです。こなたです。こなたです………

『はい、遊んでないでこれからの事を考えるわよ』

「らじやー」

『で、実際どうする訳よ姐さん』

『誰が姐さんかつ!! とりあえず、そうね。ここはサマナーの精神を鍛える場所って所だと思っのよ。つまり今回の試練は精神修行

『つて事ね』

「つまりここで私が何らかの答えを見つけないと戻れないと言う奴です。ね分かります。下手すりゃここでお陀仏とか…エンノ君って地味にみゆきさんにしか優しくくないよね」

『そのエンノ君って言い方が悪いんじゃないの？』

「そんなっ！？ 親しみを込めて言ってるのにつ！」

『デダ。大体ノ事ハワカタガ、コレカラドウスルノダ？ コノ場合我等ハ役ニタツマイ』

「いやあ、居てくれて助かってるよ。一人でこんな所に放置されたら私あ泣き叫ぶ自信があるしね」

延々と真つ白な空間で、何処まで言っても代わり映えしない。出口無いって発狂ものだと思うよ。

とりあえず心の制御か…それで何が変わるのかなあ。

んまあ、仲魔のお陰もあって何をすればいいのか大体わかったし、色々考えてみようかねえ。

『んじゃ俺等は各々適当に護衛したりするか』

『ソレガイイカモ知レヌナ。さまなーヨ。時間ハマダアル、ユックリト考エルトイイダロウ』

「うん、ありがとね皆」

『じゃあ僕はこなたの傍で安心させてあげるホッ！ こなたがんばるホ！』

『あまり邪魔になつてはいけませんよ？』

『そんな事ないホッ！ 僕はちゃんといい子にしてるホッ！』

「うんうん。ありがとねフロストちゃん」

そいじゃ、答えのようなものが見つかるまでひたすら考えとしま
すかね。

大樹君、みゆきさん：二人とも頑張つてね、私も早く試練をこな
してスーパーパワーアップして戻ってくるからさ。

そしてお母さん、私達を見守つてね。

そんな事を考えながら、私は思考を奥の奥へと進めていった……

……

Continue56 無理、無茶、無謀も策にするのが策士（後書き）

ペレが苦労性のお姉さんポジになりつつある今日この頃。

マカラが何気にいい味出しています…私的に（えー

エンノオツ又さん、試練の内容すら教えてくれないの巻でした。

何を持って試練なんだーっ！ と叫びたくなりますがそれさえもきつと試練なのでしょうね。みゅー、奥が深いです（書いてるのは私

今回はこの続きからかあえて飛ばして佐藤くんターンにして、終わったら全て終了とか…そんなこすい手も（えー

どつでもいいこと

今日は暖かいです…ストーブが要らないって幸せですよねえ…
そろそろ5月の半ばになりそうですし、徐々に暖かくなってくれると嬉しいのですけどね。

あ、でも暑いのは苦手なので、そこそこにして欲しいです（えー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるのでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：55票

みゆき：17票
ダッキ：72票
アリス：14票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue57 〈恐怖と存在と普遍なる事〉(前書き)

佐藤君のターンです。

蟲毒って…動物でもやるんですね…犬とか…怖いですね。

では、どうぞなのですよ。

最近私とアメリカの口調が似てると知り合いに指摘されました…お
おう、そういえば…(汗)

追記

一部に自作小説(18歳未満禁止)の設定部分が混ざっています。
そちらを確認する場合はご注意くださいね。

地獄、と言つものをよく耳にしたことがあるだろう。

大抵は死後の世界で生前に悪行を行つた人間がそれを悔い改めるために、ほぼ永遠に責め苦を受ける世界とされているのが一般的だろう。

実際にそんな世界があるのかわからないし、死後の事まで考えられないのだが、生憎と僕は死んでも地獄にも天国にも行っていない。強いて言えば、絶対の虚無というのが感想だろう。眠っているように意思も自我も思考する事もない永遠の闇と言えいいだろうか。有体に言えばそんな所だろう。

だけど地獄とは他に違つ意味で使われる事がある。

よく言つたろう、地獄のような光景、地獄のような世界、地獄のよ
うな場所と。

僕達が居るのはそういう意味で言えば地獄だった。

辺りには何十体もの悪魔の死体が散乱している。

死んでもマグネタイトに変わることなく、ただ放置されたり、他の

悪魔に食われたりと色々だ。

今までは悪魔を殺したとしても直ぐにマグネタイトに変換されて消滅していた為に、視覚的な問題は無かったのだがこうやって死体が残るとそれだけ精神的に圧迫されるものがある。

自分が殺したという現実をまざまざと見せ付けられているような感じがするからだ。

罪悪感というものはない、悪魔は此方を殺そうとかかかってきているのだから殺されても文句は言えないし言わせるつもりもないが、精神的には死体が残るのが辛い。

臭いもあるし、恐怖が僕の動きを阻害してしまうからだ。

ハーモナイザーが無ければ僕は恐怖で動けなくなっていると言っても過言じゃないだろう。

こんな血みどろの戦いがすでに1時間を過ぎ去ろうとしていた。

『はあ…はあ…一体何時まで沸いてくるんだろう。大樹さん大丈夫？』

「なんとかね。それにしても数が減らないな」

『一体一体は弱いが、集まってくると邪魔で仕方ねえな…』

倒しても倒しても違う悪魔が次々と現れては僕らの前に立ちふさが

り、死体の山を築き上げる。

辺りはすでに悪魔達の血で染まりあがり、血の水溜りが出来ている場所さえある。

屍山血河、まさにそれを表しているようだ。

『鬱陶しいわっ！！ ガルダインツ！！』

再び襲い掛かってくる悪魔をモー・シヨボーが風の魔法で薙ぎ払う。切り刻まれバラバラになっていく悪魔を見ていると吐き気を催しそうになった。出来るだけ呼吸を落ち着かせて僕もミトラスを握り悪魔を撃ち殺して行く。

殺しては悪魔が増えてそれをまた殺して行く、そんな作業のような状態がすでに一時間過ぎていた。

試練とは言っけど、これは何を元に試練としているんだろう。

悪魔自体は弱すぎる、強くてもレベル10の悪魔が単体でくるくらいだ。大抵の悪魔はアリスや又エの攻撃力の前にあっさり死んで行く。

「死体が沢山なのです。感染症があるかもなのでご主人様は気を付けてくださいね」

「はは…ありがとうアメリカ。それにしてもほぼ休む時間無しで戦い続けるのがここまで辛いとは思わなかったよ…マグネタイトの消費も激しいしこれはかなり面倒だ」

『ハーモナイザー切っちゃったら大樹さんが危険だし、こいつらマグネタイトにならないし…ジリ貧だよね』

すでに12000以上のマグネタイトを消費している。

普段は悪魔が来たときに起動させているけど、この状態でハーモナイザーを切ったら僕は即座に錯乱する自信がある。

ただでさえ精神的な苦痛に吐きそうになっているのに、そうやってしまつと目も当てられない。

『これが試練ですのお？ 流石に味気無いですわぁ…血みどろなのは破瓜の血だけで十分ですのにい』

『この状態でもそつち方面で考えられるアメノウズメが凄いと思うわ、私』

『同意ですアリス様』

『ほのぼのした会話は後じゃな。ほれ、また来よつたぞい』

「っ…また違う悪魔か。一体何をしたいんだこの試練はっ！ 行くぞ皆っ！」

とりあえず今は戦い続けるしかない。

何を持って試練終了なのか、消えない悪魔には何の意味があるのか
… 考えてる時間はまだなさそうだ。

…

…

…

- 更に1時間後……………

『つくしよおがつ!! …… はあ… はあ… そろそろ… やばいな…
流石に押されてきやがった』

斧を振りかざし悪魔を切り殺すモムノフ、その表情は先ほどまでとは
違い余裕がない。

当たり前だろう、既に2時間もこのようにほぼ休み無しで戦い続け
ているのだから。

僕は比較的安全な所で銃を撃つたりしているので、まだそれほどもないが、精神的に辛いのとハーモナイザーを使いすぎた事によるマグネタイトの消費が痛い。

まだ続くようなら試練が終わる前に死んでしまっただろう。

『もしかして、エンノオツ又って私達殺す気なのかな…これは酷いよ流石に』

「アメノウズメが倒されて、アメリカとモー・シヨボーが限界か…
兎に角このままじゃ全滅する」

『我はまだいけるっ！ っ…！ 魔王である我がこのような雑魚どもに…』

『暫し休むが良い。後はワシとお嬢ちゃんでき何かするからもう、早く休んでまたでてきておくれ』

『くっ！ 10分だ！ サマナー10分経ったら直ぐに呼べっ！』

そういつとCOMPに戻って行くモー・シヨボー。

モムノムもそろそろ限界だし、アリスと又エも流石に疲労がたまってきた。

この試練は僕に何の意味があるんだろう。

絶えずやって来る悪魔達、そのどれもこれも死んでマグネタイトになることなくずっと死体のままだ。

鼻をつく死臭や血の匂いが僕の精神を根こそぎ削り、目を開けば惨劇の様子が嫌になるくらい広がっている。

全身はすでに悪魔の血で濡れそぼり、まるで殺人鬼にでもなったかのようなようだ。

そして不思議なのはどの悪魔もほぼ見た事のない悪魔ばかりで、耐性も何もないただの雑魚ばかり。

更に言えば、同じ悪魔はほとんど見ていないのが現状だ。

恐らくはこの辺に試練の内容を紐解く鍵があるのだろう。

エンノオツヌが何の意味もなくこのような試練を課す訳がない、突き放したような口調に見えたがその実彼は僕達を心配しているような節があった。

僕達が試練を乗り越えて強くなるためにはここまでする必要があると言っ事なのだろう。

出来なければ死ぬだけ…それは予め分かっていたことでもある。

エンノオツヌは無心に全てに愛を説いている聖人ではないのだから…自分達で選んだ事には責任を持つしかない。

「はあ…はあ…」

呼吸をするたびに死臭が鼻を突き吐きそうになる。

血の匂いが混じった空気は澀んでいる感じがして、背筋が寒くなるような気がする。

『何かに似てるな…こいつは』

『ほう…嬢ちゃんも気づいたか』

『オレをお嬢扱いするな。名前で呼べ又エ』

『ヒョーヒョー。悪かったのう、でこれがなんだか分かるかの？』

『ああ、多分な。それだとするとエンノオヅ又は外道なのかと言いたくなるけどな』

「これと同じ試練があるのかい…モムノフ」

『試練じゃねえよ、これはな…』

『なんだか…無作為に殺し合わせてるみたいだね。悪魔も偶に同士討ちとかしてるし』

悪魔の全てが全て此方を狙っている訳ではない。

偶に悪魔同士で殺しあったり、喰らいあったりすることもある。戦

う事を放棄して悪魔を喰らい続けているだけの悪魔も居た。

それらも殺し合い、僕達に目を付けたら襲い掛かってくる。

知識が無いのか仲間意識が無いのか不思議だったけど、全部を相手にしなくて助かっていた時もある。

『蟲毒に近いのうこれは』

「蟲毒…！？」

『うえ？ なにそれ？ 毒のスキルかなにか？』

蟲毒…昔から中国辺りで存在している呪術の一つに数えられる邪術の事だ。

蛇、犬、蜥蜴^{とかげ}、蠅螂^{かまきり}、百足^{むかで}、蝗^{いなご}、蝦蟇^{がま}、などの生き物を一つの容器に何匹も押し込めて一匹になるまで共食いをさせる。

そして残った最後の一匹はあらゆる毒と負の力を持ち、それを使う事で呪いなどを行うと言う儀式の一つでもある。

人間で例えると、世界各国から強い人間をかき集めて狭い場所に閉じ込めて殺し合わせると言う感じだろうか。

生き残った人間は他の人間の呪詛や血を浴びて強くなる…と言うよ
うなものだ。

「つまり勝ち残って怨念などを浴びて覚醒しろと…僕はダーク寄りにはなりたくないんだけど…」

「いや、有り様が蟲毒には似ておるがそれとは少し違つかもしれんな」

「なんにせよ、エンノオツ又の野郎が仕組んだ事だろ？ 殺すかあの野郎、オレ等は呪術用の蟲じゃねえつつの」

「意味が分かってても現状は変わらないんだけどね…どうしよ大樹さん？ いっそ文珠で逃げるとか」

「最悪はそれしかないよね。転移すればどうにかなりそうだし」

エンノオツ又が何を考えてこの試練にしたか分からないけど、このままじゃ碌でもない事になりそうだし諦めるのも視野に入れないといけないな。

・ニクイ

「え？」

今何かが聞こえた…確かに誰かが発した言葉だ。

辺りをキョロキョロと見回すが今の所他の悪魔は出てきていない。

「う、うわああああああああああああっ！？」

憎い、憎いと何処からともなく声が聞こえる。

あまりにも憎悪の込められた声に僕は耳を塞ぎ膝を付きそうになる。仲魔達には聞こえていないようで、終始僕の心配だけをし続けたが、僕はそれ所ではなくどうにかしてこの怨嗟の声を防ごうと耳を寄り強く押さえつけた。

それでも聞こえてくる声、お前が憎い、お前が憎いと聞こえる度に足がガチガチと震え、恐怖に身が竦んでしまう。

『しっかりと大樹さんっ！　もしかして悪魔の攻撃っ！？』

『分からぬっ！　お嬢ちゃんにはサマナーを見ているのじゃ！　モムノフ警戒を絶やすでないぞっ！　けええええええええええっ！！』

耳を塞いでいても聞こえてくる雷鳴と、変わらず聞こえてくる怨嗟の声。

怖い…怖い…怖い…ハーモナイザーを使ってもこの恐怖には耐えられない、何なんだこれは…この身の毛もよだつこの声は。

- 痛い助けて死にたくない怖い憎い殺す死ね助けて死ね助けて痛い

…
…

- 【汝に科した試練は蟲毒の様に戦い続ける事ではなく、自分本来の心を強く保つことだった】

- 【汝は愚かにも他の力を頼り恐ろしいものを恐ろしいと感じないまま戦い心を歪めている】

- 【道具に頼りきり己が心を騙し戦い続けられぬ今回のようになる。そしてそれは汝の成長を阻害する原因でもあった】

- 【自らの心を騙し戦う…それもまた生きる道の一つであろう…しかしそれを続けてしまえばいずれ心の軋みを生み歪む事になる】

- 【汝は知る必要があった、自分が本来得るべき感情を、恐怖を知る必要があった】

- 【このままでは全てを知る前に汝は壊れるか、蛮勇によって死ぬかのどちらかだっただろう】

- 【無意識に自分を偽ったままでは覚醒する事もない、汝はあるがまます受け入れなくてはいけないのだ、外れし者よ】

- 【枷は今回の事でまた一つ外された。汝が目が覚めたとき全てが終わっているだろう…そして恐怖を忘れるな。それを忘れてしまった時人は、人ではなくなる】

- 【外れし者よ…汝が進むべき道は茨より酷い針の地獄だろう。汝が運命はほぼ一つの道に繋がっている…それを回避できるかできないかは汝自身だ】

・ 【願わくば…汝に安らぎが与えられん事を……】

・ 【さあ…垣間見よ汝のあるべき姿を、汝の意味を、汝は……何者なりや】

声が…聞こえた気がする。

ここは…どこなのだろうか、まるで夢を見ているように体中がふわふわしている気がする。

先ほどまで何をしていたか覚えていない…何か凄く恐ろしい事があった気がするけど…何も思い出せない。

「いつまで…寝てるのよっ！ とりゃっ！…！」

「じぶっ！？ じほっ…じほっ……行き成り酷いじゃないですか

」

「あんたが起きないのが悪いのよ。こんな美少女に起こされてたんだからもう少し泣いて喜びなさいよ」

「はは…そうですね。ありがとうございます」

「ま、まあいいわよ。ほら行きましょ。皆アンタを待ってるわよ？」

其処には誰かが居た。

人の良さそうな顔をした男性と、様々な仲魔達。

天使や悪魔、妖精や妖怪や人間が楽しそうに笑い、暮らしていた。

平和…まさにその一言につきる。

その空間は誰も手出ししようがないくらいに幸せで、とても楽しそうだった。

男性が皆のために料理を振る舞い、日々をのんびりと暮らし、逢瀬を交わす。

「ねえ……いいかしら……？」

「？ どうしたのですか？」

「うん……ちょっとね」

どうしてだろうか、男性と会話をしている少女に見覚えがある気がするのは……？

どこかで見たような、あったような……それでいてとても美しい女性だった。

人間ではなかったが。

「幸せよね、今って……凄く幸せだね。いつの間にか色々馴染んで楽しく馬鹿やって、日々が毎日ぐるぐる回っちゃうくらいに幸せで……」

……だから……怖い……」

「……」

「もしかしたらいつか壊れちゃうんじゃないかって……アンタがみんなが居なくなっちゃうんじゃないかって……そう思うと……凄く怖い……」

「……私も、似たようなものですよ」

「……アンタも……？」

「ええ、毎日が幸せで時々怖くなる時があります。だから、日々を頑張って生きようと思うのですよ、悔いを残さないように」

「悔いを残さないように…か…」

「…そうだ、これを渡しておきますね」

そういつて男性が取り出したのは一枚のカード。

僕も良く知っている…魔法のカードだった。

「これを貴方に。一度だけですけど私の全力の魔法を封じ込めてあります。何かあったときに使ってくださいね」

「行き成り物騒になったわね…ま、でも貰っておくわ。アンタだから色気が無いって思ってたけど本当に色気がないわねえ…ここはキスとかじゃないの？」

「そういうのは…苦手です」

そっぽを向く男性を見て少女がクスッと笑った後、両手で顔を無理やり向かせて意地悪そうな表情をする。

「ばあか…女からさせるなんて…タラシの証拠なんだからね…ん…

……………」

そのキスの感触は柔らかくて甘い感じがした。

……

……

……

一人の老人が死にかけている。

安らかそうに笑顔で…周りには沢山の神人魔妖が悲しそうな表情で見つめていた。

軍服姿の黒い羽を持つ悪魔。角が生えている和装束の女性。

銀色の髪の毛の妖怪とどこかで見たような妖怪の女性達。

そして沢山の、本当に沢山の人間達。

そのどれもが悲しげに俯き涙を流し彼の最後を見守っていた。

老人は既に耳もほとんど聞こえなくなっているようだったけど、そ

れでも満足そうに笑みを浮かべていた。

「…ありがとう」

その言葉は老人と僕の口から漏れた……………

そしてそれが最後の言葉となり、老人は旅立っていった。

縋り付く女性達、涙を流す男性達。

きっと彼は幸せだったのだろう、そしてきっと彼らも彼がいて幸せだったのだろう。

僕も…こんな風に看取られる時がくるのだろうか。

その老人がとても羨ましいと思ひ…僕は再び目を閉じた。

……………

……………

……………

- これらはどこかで起きた現実の一つ、あらゆる事象で起こった現実の事です。

- あらゆる可能性の中の一つ、ってか、てめえ美味しい思いをしてるじゃねえかコンチクショーっ!?

- まだ分からない部分も多いでしょう。ですけど、忘れないで下さい。

- 色々知りすぎるにはまだまだお前は弱すぎるんだよ、とつと強くなりやがれ。まだ見てないシーンもあるんだ、出来るだけ急げよ？

- 貴方は外れし者です、それを忘れないで下さい。

- ハブられてるって意味じゃねえぞ?。お前は完全にイレギュラーなんだ、好きなように生きな。どんな運命を辿るのもてめえ自身だ。

・ヒントを一つ……普遍的無意識と無限に存在する可能性。これを覚えておくといいかもしれません

・ってそりゃほとんど答えだろうがっ!? おまえやつば過保護すぎるわっ!

・ははは…

・ったくよ。まあ…生き抜け。その手伝いだけはしてやるからよ、どうせ死ぬなら大往生だろう? そうしろ、んじやなきや色々困るんでな。

最後にそんな声が聞こえた気がする。

そろそろ起きないと…皆が心配しているかもしれないな。

佐藤大樹が覚醒し覚醒者になった!

力+1 知+1 魔+2 体+2 速+1 運+1された!

レベル制限が一定のレベルまで解除された。
マジックカードのレベルが上がった！！
マジックカード専用のスキルを覚えた！
　　悩殺防御を覚えた！
　　魔界魔法の素質を覚えた！
　　魔銃の素質を覚えた！

COMPステータス更新

Continue57 〈恐怖と存在と普遍なる事〉（後書き）

蟲毒であると見せかけて、必要だったのは恐怖を感じ取る事だったという試練でした。

そういえば佐藤君基本ハーモナイザー使って恐怖軽減してましたからねえ。

いつそ実際に生の恐怖を味わわないと覚醒できなかつたと言う事らしいです。

そのままだと歪む…ふむ、微妙に奥が深いかもしれません（そんな訳ない

そして出てきたヴィジョンクエストに近い何か。

片方の方はマジックカードが出てきて、もう片方はネタバレさんですな。

微妙に謎が増えていきます…だれか助けてください（えー

どうでもいいこと

この時期北海道は山菜のシーズンですっ！

フキとかギョウジャニンニクとか沢山取れるのですよー。

タラの芽とかクレソンとかが凄く美味しいんですよえ。

皆さんは山菜好きですか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか
次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダッキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：57票

みゆき：17票

ダッキ：75票

アリス：15票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue58 く気づく時は一瞬、気づかなければ永遠く（前書き）

こなたーんその2です。

こなたの微妙な心情が描けたかなあ…と心配しきりです。

Continue58 く気づく時は一瞬、気づかなければ永遠く

- 泉こなた視点 -

「天は我等を見放したー！ー！ー！ー！ー！ー！」

『…何やってるの？』

「遭難じっし」

『そう…どついていいかしら？』

「予想の斜め上っ！？」

『いや、その切り返しの方がよっぽど予想の斜め上なんだけど』

『まあ、そういつてやるなよ。かれこれ数時間無駄に迷走してたんだからよ』

「なーんか字面が違う気がする…瞑想してたんだからね？ 迷走はしてないぞっ！ 多分」

アレから数時間経ったけど未だにこれだーって感覚がつかめないんだよねえ。

そもそも集中するってのが苦手だから尚更なのかなあ…ゲームとか

だと物凄い集中できるんだけどさ。

仲魔の皆も敵の悪魔とか出てこないから微妙にダレ気味だったりするしね。

悪魔はマグネタイト消費しないと強くないから、修行しても仕方ないしやる事ないんだよねえ。

『とー やったホッ ついに連続前転ができる様になったホッ！』

「何あの可愛い生き物。抱きしめていいかな？」

『まずは試練を乗り越えてからですね』

「けちー」

『シカシ、手詰マリナノ八否メナイナ。コウ事態ガ好転スルモノデモアレバイイノダガ』

「そうなんだよねえ…実際の所本当にこれでいいのかなーって思ってたきちゃったし…まさか悟りを開けとか言ってるわけじゃないだろうしなあ…悟り 書でもあれば一発だけど」

『何にしてもこのままじゃ埒が明かないわ。ヒントでもあればいいのじ』

ヒントねえ…それがあつたら苦労しないけど、そんなものがあつた

らとつくに見つけてるよね。

私がここで何をすればいいのか、まるで訳わかんないよ。

実を言うとさっきから無駄に焦ってきてるしね…トイレ行きたくな
ったらやばいんじゃないかなーって気がしてるんだけどそっちの兆
候は今の所無いよ。

焦ってるせいで心の制御が上手く言っていないのかな、さっきからギ
ヤグに逃げてる部分もあるし正直疲れてきたよ。

とりあえず、色々考えてみようかな。

えーと、昔の事昔の事……………

……………

……………

…

そつだ、3年生になってからふと気づいた事があったんだよ、あれ
が思えば私が裏の世界に足を突っ込む切っ掛けになったんだよね。

普段は気にしてなかったけどさ、2年生の時からかがみとつかさが

二人だけで居なくなる時が稀にあったよ。

大体月に1〜2回位かな、初めの内は全然気にしてなかったけど、3年生になるとそれが結構顕著になってきてたんだよね。

1ヶ月に4〜5回、何かアルバイトしてる訳じゃないのに、用事があるからって言われてさ実はハブられちゃったのかなって少し寂しかった。

普段オタクっぽい所見せてるからさ、皆気にしてないし、思わせなようにしてたけど、私実は結構寂しがり屋だったりするんだよね。中学の時も仲の良い友達はそんなにいなかったし、高校生になったらその子とも離れちゃったからね。

でも、友達を作るのって結構大変なんだよね。特に私ってオタク趣味があるから、敬遠されちゃいそうだしこれでも実は繊細なのだよ、うんうん。

そこにつかさって言う友達が出来て、双子つながりでかがみと仲良くなった。

ちよつとした切っ掛けもあってみゆきさんみたいな綺麗な人と友達になれたし、実は凄く嬉しかったんだよね。

ああ、これで高校生活も楽しめるなってさ。

実際に4人で色々遊んだり騒いだり、時には喧嘩もしちゃったけど、最終的には元鞘って感じだった。

面と向かって言うのは恥ずかしいけど、私にとって大事な親友で、かけがえの無い存在になったのがあの3人だったんだよ。

だから、二人が少し不審に思える行動を取ってたから、心配したり、不安になった。

嫌われたんじゃないか、もしかして何かに巻き込まれたんじゃないかってね。

前者だったら…凄く怖かったし、後者なら何があっても絶対に力になろうって思ってた。

そしてその所はみゆきさんもそうだったみたいだけどね。

初めに行動したのが私…二人で直ぐ帰宅する時は顔が凄く真剣だったから直ぐにわかったよ。

一緒に帰れないって言われて、適当に挨拶をしてから…尾行したんだよね。

人ってさ、色々躊躇する時の方が多いけど、一度決めたら凄く行動力を見せるものなのだよ、まさにその時の私がそうね。

気づかれないように付いて行くのは骨が折れたよー。

因みに遅くなってもいいようにお父さんに友達の家に行くから遅くなるーって言ったなら「男なのかーっ！？」って言われて呆れたのは内緒ね。

そしてかがみ達を追いかけたら真っ直ぐに家に向かったからさ、ち

よつとその時は拍子抜けしちゃったよ。

家の用事で急いでたのかなあってね…でも、なんていうかな、こう…胸がざわざわする感じがしてさ、ここで帰るなって私を何か引き止めたんだよ。

で、某張り込み警察官の如く監視してたら…ってかここまで来るとストーカーなんじゃないかって自分に引きつつ待ってたらありえない格好って言うか巫女のコスプレした二人が外に出てきたんだよ。

流石に焦ったね。もしかして二人とも実は隠れオタクだったのかわ！…って、まあ巫女のお仕事かな…って軽く考えてたけど表情はやけに真剣だったから何かあるなって思ったよ。

そして、付いて行って私は日常に隠れた非日常を見た……………

その後は大変だったよ、死ぬかと思ったし、つかさには泣かれるし、かがみには滅茶苦茶怒鳴られたしね。

そして二人がこういった異界を封じる仕事を引き受けてたと知ったんだ。

初めはさ、流石に私も疑ったよ。目の前で起きた事が信じられなくて…だってさゲームや漫画で出てくる話しじゃん？ 悪魔とかそういうのはね。

現実には小説より奇なりってよく言うけど、奇所の騒ぎじゃなかったよ。

でもさ、そんな命がけの仕事をなんで二人がやるのさっ！ って怒鳴っちゃったんだよね。普通大人がやるもんでしょって、なんで両親が止めないのさってね。

心配で、凄く心配で…もしかしたら二人が死んじゃうかもって思うと止められなかったんだよね感情が。

そしたらさ…困った顔して、言われちゃったよ。

- 自分で選んだ道だから、大人も子供も関係ないわ。私が自分で決めて戦ってるのよ。

- 私達が戦わないと、世界がおかしくなっちゃうから。そしたらこなちゃんやゆきちゃんと遊べなくなるし、世界がとんでもない事になっちゃうし…

- だから戦ってるのよ。

- だから戦ってるんだ。

凄いと思った。

私と同じ年の子がここまで先を見据えて、自分の命さえ顧みずに自分の道を選んだのが凄いと思った。

かがみだけじゃなくて、つかさまで未来を見据えてた。

・勿論、大学も行くし弁護士になる夢も諦めてないわよ、ま、これも両立よね。

・えへへ…私もいつかはお料理屋さんとかになりたいなあって思うよ。でも、こっちも大事だから。

私にはそんなの無かった、日々を楽しく生きられればいいなって感じで日々ゆるく生きてきた。

大事な友達とのんびり楽しく生きていければいいなって思ってたくらいだった。

でも、そんなのんびりとした生活は、こうやって誰かが日々護ってくれているものと初めて知ったんだよ。

それも身近に、大事な友達が、それも命をかけて。

だから、私も決めただよね、後悔しない様に、お父さんとお母さんにあなた達の娘は何処に出しても恥ずかしくないよって思わせたくて。

友達を傍で護りたくて、一緒に戦っていきたくて。

ゲームとかの世界じゃない、非日常に私は飛び込んだ。

私は元々格闘技もやってたし身軽だから、前衛としてはそれなりに

優秀だった。

初めは流石に色々怖かったけど、後ろに頼りになる友達が居たから戦ってこれたんだよ。

銃も覚えて、悪魔を初めて殺した時は流石に眠れ無かったよ。

あの時はゆうちゃんにもお父さんにも心配かけちゃったなあって、反省してる。

ちゃんと直ぐ元気になって、戦えるようになったけどね。慣れるのは早いのだよ私は。

かがみが流石に驚いてたけどねー。ちょっとしてやつたりな感じだったよ

でも、そうする事でもっと心配する人を忘れてたんだ…私も、かがみ達も失念していた。

いや、そこまでしないって考えてた。

みゆきさんが私の真似みたいな事するなんて…さ。

でも、よく考えたらみゆきさんって実は結構熱血なんだよね、あのお母さんに似てて普段はぼやぼやしてるけど、ここぞという時は誰よりもしっかりしてたから。

そして心の機微にも凄く聡い人だったからねえ。

だから、みゆきさんを危険に晒してしまった。

みゆきさんが色々調べている事に私達は気づけなかったのが原因だ。

みゆきさんの情報力とかを侮りすぎてた…私達が異界を封じている事をみゆきさんは知ってしまった。

そして、私達を手伝おうとして…異界に巻き込まれた。

簡単に言うと、異界の基点にされちゃったんだよ。あの変態がやらかした事が前も起きたって事なんだけどね。

あの事件は単純にみゆきさんの運が悪かったただけなんだけど…でも、ちゃんと教えてればあんな事にはならなかったんだ。

その日の私達は普段より小さな異界と言う事で安心してたんだ、でもいざ行ってみるとかなり凶悪な場所になっていた異界。

更には色々な悪魔が沢山居て、そいつらを苦戦しながら倒して中心まで行くと悪魔の樹に捕らわれたみゆきさんがいた。

流石に吃驚したよ。何でここにみゆきさんがっ!？ ってね。

悪魔は悪魔でみゆきさんを盾にしながら襲ってくるので、下手したら死んでたかも知れないよ。

そこはまあ、つかさのマントラの力でなんとかなたけど私達は揃って意気消沈してた。みゆきさんまでまきこんじゃったってね。

目が覚めたみゆきさんは一生懸命私達に謝って…そして怒って、最後に泣いた。

私達は友達だったんじゃないのですかって。出来る事が少なくてもお役に立ちたかった、貴方達だけを戦わせたくは無かったって。

まさにあの時の私の言葉そのままだったよ…その後は四人でわんわん泣いちゃった。ちよつと青春過ぎたかもだけどね。

そこから私達4人での非日常の中の日常が始まった…って訳だね。

そんな日が続いて、ある日に私達が見つけた異界に居るデビルサマナー。

そう…大樹君との初遭遇。

初めは警戒しかしてなかったなあ、私達にとってデビルサマナーってのははつきり言って碌なイメージが無かったからねえ。

ダークサマナーとかそういうのだね、裏に関わるとそういう系の情報が良い集まる訳さ。特にみゆきさんがメンバーになってからの情報収集力は侮れないものがあつたしね。

えーっとアルゴンソフトだけ？ こことは違う遠い場所でダークサマナー達が暗躍してたとかそういうのばかり聞いてたから。

デビルサマナー…悪人ってのが刷り込まれちゃったんだよねえ。

でも、大樹君は悪い人じゃなかった、勿論良い人って訳でもない。端的に言えば中立ってのが一番あってるかな。

普段から冷静でちょっと冷たくて、どこか一步引いてる感じの同級生。

学校では苛められてて、家では家族仲が完全に冷え切って…友達もいなかった彼。

私はオタクだけど、こうやって友達が出来たし高校生活は凄く楽しかった。ゆーちゃんとかみなみちゃんとかひよりんとか可愛い後輩も出来たし、みさきち達も良い感じに友達になれた。

黒井先生も厳しいけど、ゲーム仲間で楽しくやっていけた…でも彼は私達に出会うまでそんな事なかったんだよね。

家でも学校でも地獄…か、想像できないししたくないな。

私は片親だけとお父さんが愛情を持って接してくれた、今ではガーディアンという存在だけとお母さんも居る。

そのどちらも優しくて…凄く嬉しかった。

でも、彼は…両親に嫌われて、最後には騙されて……………

私って彼に何が出来るのかな。

一緒に戦うのは今では当たり前前になった、今では親友みたいなものになって、大樹君もそう思ってくれていると思う。

最近は凄く気になって…今は、彼の事……………好きになった。

告白云々は流石にこんな時期に出来るわけもないし、そのまま放置だけど、結構イイ線行くんじゃないかなって思いたい。

でも、それって私の都合だけだよね。

私は大樹君に何が出来るのかな？

私がかみに何が出来るのかな？

私はつかさに何が出来るのかな？

私はみゆきさんに何が出来るのかな？

一緒に戦うしか…できない。

つかさみたいに人の心を護るなんて事は出来ないし、かがみのように相手を叱りながら導くなんて出来ない。

みゆきさんのようにその知識を活かして何かをする…事もできない。

私には、色々足りないな。

あ、そっか……………

そう言う事なんだ。

「あははっ、そう言う事かあ…成程ねえ」

『さ、サマナー？ どうしたの行き成り…？』

『ずーっと考えてたホ…こなたどうなったホ？』

「私に足りなかったのは、出来ない事を出来ないって『自覚』する事だったんだ。そこから新しい道を掴まなくちゃいけない。出来ないから諦めるんじゃない、出来ないって理解して自覚して、其処から新しい道を見つける！ だよねお母さん、そしてエンノオツヌ」

カチン、と頭の中で何かが填まる音がした。

同時に見えてくるお母さんとエンノ君…いや、エンノオツヌの姿。

お母さんはよくやったね、といわんばかりの表情で私を見ていて、エンノオツヌはゆっくりとこっちに近づいてきた。

【答えは出たようだな。今回の事に関しては、導く事は出来なかった。汝は自分を全て知らなければならなかったのだ。それに関しては助言する事も手助けすることも出来ない。ヒントを出す事もな、そうしてしまえばこれらは全て意味がなくなる】

「まあねえ…普通試験って言ったら何かを乗り越える！ とか全ての先に何かがあるっ！ とか言うもんだしねえ。まさか自分の出来ないことは出来ないって自覚しろってというのが試験の内容だと誰にも言えないよねえ」

『何よそれ…出来ない事は出来ないって、普通当たり前の事じゃない…それが覚醒に繋がるの?』

【それを理解して、その先に進む事のできる者など何人も居ない。大抵は諦めるか絶望するか…それを認めないかだ。まずは全てを白にして自分を省みる必要があった。そして先に進む必要があったのだ】

『よくわかんねえけど。試練は合格って事だよな? やったじゃねえかサマナー』

「まあねっ! 私に出来ない事はないのだよっ!」

ヒントはほとんど大樹君だったとは言えぬ…ばれたらからかわれるからねえ。

ただがむしやらに強くなりたいたいじゃ、だめなんだよね。

自分が出来る事を全部理解して、出来ない事は出来ないと認めて、その上で新たな道を模索する。

言うのは簡単だけど、それを実践するのはエンノオツヌが言う通り簡単なことじゃない。

誰だって、自分に出来ない事があるっ! っていうのは我慢できない事もあるしね…特に強くなったりするとそれが顕著かな。

自分の部分を認めないから、成長できないし、覚醒できない…人間

つてのは自分で自分の首を絞めることが多いよねえ。

いやいや、まさに試練だよ。下手すりゃ永遠ループもあつた事だしね。

【少女…いや、違術に近づきし者よ。汝が歩む先は明るいものではない。誰かが傷つくだらう、誰かが死ぬだらう。誰かが裏切るだらう。それでも汝は前に進むか？】

「勿論だよ、助けなくちゃいけない友達も居るし、大事な家族もいる。紹介したい男性だっているんだし、私は前に進むのさっ！」

【そうか…ならばこれを持っていけ、そして手放すな。大事なものほど手から離れやすいものは無い】

手渡されたのは歪な短剣だった、なんだか戦闘用ってよりは儀式用って感じがするなあ。

とりあえず大事にしまっておく事にしよう。折角貰つた物だしね。

【何れ必要になる時が来る。それを使うかどうかは汝自身だ…しかし努々忘れるな、それを使う時…汝は究極の選択を迫られる事になる】

「それって…予知？」

【然り…絶望するかも知れぬ、憎悪に身を焦がすかも知れぬ…だが

覚えておくといい、それは汝にしか出来ない事だ】

「なあーに　私はハッピーエンド至上主義っ！　そんな暗い未来はそげぶにしてやんよっ！」

『クツ…クカカカカカ。流石ハ我等ノさまな一ダナ。ソノ心意気ヤ良シ。我ハ何処マデモさまな一ニ付イテ行コウ』

『そうですね…私もこの先を見てみたくになりました』

『勿論私もですよ？』

『僕もだホー　こなたのお手伝いするんだホー』

『となりやあ色男も居るよなあ？』

『鏡見て出直してきなさい。私はサマナーの初期の仲魔だし、決まってるけどね』

「ありがと、皆。よしそれじゃ凱旋じゃあ　皆待ってるかもしれないぜっ！　いそげーっ！ー！」

どんな未来があつたとしても…後悔しない道を選ぶよ。

辛い未来しかないのなら、それを認めた上で、塗り替えるっ！

なーんてね

泉こなたが覚醒し達人になった！

力+1 知+1 魔+1 体+1 速+5 運+2された！

レベル制限が一定のレベルまで解除された。

狙撃のレベルが上がった！！

超能力・チャネリングを覚えた！

戒 きて を手に入れた！

出来ない事を出来ないと認めて、そこから一步前に進む…

言うは易く行なうは難しという奴ですね。

試練内容言っちゃうとすぐ分かって逆に覚醒の阻害になる為に言わなかったようです。

何はともあれ覚醒したこなたですね。

そして覚えたのが超能力のマニフェスト…

あるいみチートクラスの技能だと思っです。

簡単に言っ…守護天使取り付かせて数分間その力を発揮できるとかいうスキルがあったり（マテ

これはまあ高レベルにならないと使えないんですけどね…

勿論デメリットもあります、強いです…佐藤君頑張れっ！？ 超頑張れっ！

どうでもいいこと

明日はお給料日…美味しいもの食べたいな

え？ 働いてたのっ！？ という突っ込みは無しの方向でお願いします…

仕事関係が特殊で、この時期は仕事より休みのほうが多いのですよ

…よよよ

早くいっぱい仕事したいなあ…いや、ワーカーホリックじゃないですけどね（汗

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：60票

みゆき：17票

ダツキ：81票

アリス：18票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue59 く足りない想い、足りない総てく（前書き）

金剛神界編はもうちょっとだけ続きそうです。

なんとか全員揃いましたーという感じのお話です。

大感謝なのですよー

PVが1,000,000、ユニークが110,000

お気に入り登録数が900件、感想数600件を超えました。

稚拙なお話ですが、色々な方に読んでもらえてとても嬉しいのです。これからも頑張りますね。

前回の超能力・マニフェストは正しくは超能力・チャネリングでした。

修正しました申し訳ないのです…マニフェストはチャネリング内のスキルなのですよー…（涙）

目が覚めるとあの地獄の場所から金剛神界に戻ってきていた。

近くにはアリス達が心配そうな表情で僕を見ている…なんと言っかデジャヴだなと思いつつ起き上がった。

『大樹さんっ！ よかったあ…』

『心配致しました…我が主よ』

『ようやくお目覚めか、まああんだだけ錯乱してたらしようがねえけどな』

「僕は…そうかあの時…」

『びつくりしたんだからあ…急に気絶しちゃうし、それと同時にここに帰ってきちゃうしでまだ訳わかんないよお』

「ああ…大丈夫、試練は終わったようだよ」

『ほほう…成程のう。サマナーから力の躍動を感じ取れるし強くなっていると言っのは間違っておらん』

「うん。どうやら僕は覚醒の可能性を自分で消していたみたいだ。まさか恐怖を知ることが一番の覚醒の元だったなんてね」

『そうなの？ でもそれじゃ後遺症とか残るんじゃないの…大樹さん…大丈夫？』

「その辺は大丈夫みたいだ、精神も落ち着いてるし何というかすごくスッキリしてる。いまならハーモナイザー無しでも余程グロテスクじゃない限りは精神が侵されることは無いと思うよ」

確か気絶している間に何か夢みたいなのを見た気がするけど、よく思い出せない。

何か大事な事だったのかもしれないから、これは少し痛いかもしれないな。

さて…まだこなたも高良さんも戻って来ていない…か。近くにエンノオヅヌが居る気配もないし、少し休ませてもらう事にしよう。

「それにしてもマグネタイトの消費が辛いな。弾丸も心許ないし」

『そうですね…流石に銃弾を作り出す能力は私にはありませんから』

「いや…さてよ？」

そういえば僕の中で何か新しい力が芽生えているような気がする。恐らく覚醒した為だろうけど…まずはステータスを見てみる事にしよう。

COMPを取り出して、自分をアナライズする…

そこには新しく魔界魔法と魔法の銃弾作成、そして今の状況を打破してくれる凄まじい能力が追加されていた。

「ははっ……僕も随分と大概だな…文珠が使えてペルソナが使えてデビルサマナーで魔界魔法が使えて…マジックカード。手数が多いなんてものじゃない」

「大樹さんはびっくり箱みたいだね、私の自慢の人だよっ」

「今度は魔界魔法かよ。どんだけ手を伸ばすつもりなんだサマナー？ まあでもそれだけ選択の幅があるって事は有利だが、逆に選択し辛くなる事も覚えておけよ？」

「そうじゃな…何にせよ何を重点的に鍛えるか、満遍なく鍛えるかで変わることじゃろう。汎用を望むなら満遍なく平均に、特化を求めるならばどれかを捨てて重点的にじゃよ。サマナーは選択肢が多い。それゆえに迷う事も多いじゃろう、努々努力する事を忘れてはいかんぞい？」

「そうだね。漸く少しはまともになれそうだ」

『所で…どうなったのでしょうか？ 弾丸の問題についてなのですが』
「うんちょっと見ててくれないか？」

僕はそういって一枚のマジックカードを取り出す。

中に入っているのは100発分の通常弾だ。そして今銃に詰め込んでいる以外は、これしか残っていない。

これを使い切ればミトラスは魔法行使しか使えなくなってしまうから大事に使わないといけないんだけど、追加されたスキルにはこれをどうにかする能力があった。

さっそく自分のMPを消費して件の能力を発動する。

体から何かが吸われて行くような感覚がして、それがそのままカードに入り込んで行くのが分かる。

そしてやや経った後、カードを右にずらすと……

『んなっ!？ おい…手品かよこりゃ…』

『一枚…増えてる。え、なにこれ?』

『なんと…まあ…』

「これが覚醒したときに覚えたスキルの一つだね。『マジックカードを限定』として同じものを1枚コピーする能力みたいだ」

『詐欺じゃのう…つまりMPさえあればアイテムはほぼ無限に使えるところという訳じゃな?』

「消費MPが激しいから、そんなに使いまくる事はできないけどね。でもこれで弾丸…いや、食料などの問題はある程度解決かな」

「……………オレはよ、基本相手にそんな感情を持たないんだが…サマナー。アンタはもしかしなくても怖い存在だな」

「モムノフ…？」

「誰彼構わずその能力は見せんよ？マジックカードの時点でもあれだが、こいつはまずい。最悪無限に物資を補給できるって事で捕まって製造タンク行きがお待ちかねだ」

「！？　そ、そんな…」

「その通りかも知れんな。もし世界が崩壊したとしてみるがよい。満足に食い物なども手に入らない中で、時間は掛かるが食料を無限に作れる存在、人ならどうするかのう？」

「捕まえて自分のものする…か。考えられそうな事だね、わかったこれは内緒にしておくよ」

まあ、使ったとしても派手な視野効果はないし、そもそもマジックカードは量産できるから1〜2枚増えても不審はない。

こなたならバレても大丈夫だし、高良さん達も一応は黙っていてくれるだろう。

とりあえずはアイテムの心配は無いと言う事だ、これは凄くありがたい。

「さて…これからどうしようかな…」

「ちえりおーっ！！」

「がふっ！？」

後ろから凄い勢いで何かがぶつかってきた。

あまりに咄嗟過ぎたのでそのまま前に転んでしまっ…結構痛いんだけど。これ、目の前がコンクリートだったら怪我してるよね。

で、だ。さっきの声で誰が犯人なのか直ぐに分かったんだけど、これは反撃してもいいのだろうか。

『ちよっ！？ 何してるのよこなたーっ！？』

「いやあ、感動の出会いを試みようとしたらさ、さっきそこで躓いちゃってね？ で、それだけだったらつまんないからせめて掛け声を発してみました」

『と、ととととっ、とりあえず大樹さんから離れてよっ！』

「おおっ…ナイス姿勢。これはある意味男の本懐ではなからうか？」

「絶対に違っし、どいてくれないかな？」

「はっはっは。ごめんごめん」

直ぐに上からどいてくれたので、僕も起き上がる事にする。

傍では微妙に笑顔のこなたが両手を合わせて悪かったーと、拝み倒していた。

このやり場の無いやるせなさど怒りは誰に当てればいいのかだろうか…

「…まったく。とりあえず、おかえりこなた」

「うん、ただいまっ 所でみゆきさんはまだ帰ってきてないのかな？」

「今の所はそうだと思う。僕も戻ってきたばかりだからね、もうすぐ戻ってくるよ」

『こなたも強くなったみたいだねー、何か変わって見えるし』

「はっはっは。これぞスーパーこなたンですぞ。具体的には赤くなつて3倍強くなれましたっ」

『うそっ!？ と言う事はニュータイプっ! くっ、大樹さんなんて連邦の白い悪 なんだからっ!』

「なんとおーっ!？」

「……突っ込まないからね？」

「『えー』」

『えーじゃねえよ。つか喧しい少しは落ち着け』

『そういえば他の仲魔はどうなさいました？』

「あ、うん。一応戻ってもらってる、今の所は召喚する必要ないしねえ」

「なるほどね」

お互いに試練を乗り越えた事を労いつつ、マジックカードから食料を取り出して食べる事にした。

色々動いて小腹が空いていたから、結構なスピードで消えて行く食料たち。

それにしてもこなたもあの悪魔とのエンドレスな戦闘をしたかと思っただけど、違う試練だったようだ。

其々の特性に合わせて試練を行ったんだろうか…エンノオツヌが何を考えてこうしたか微妙に気になる所ではあるな…

『ヒョーヒョー。成程のう…守護天使を召喚ではなくて乗り移らせる能力か…凄まじいもんじゃなあ』

『ペルソナに似てるけど、なんか代償がとんでもなさそうよね、平気なの？』

「んー、大丈夫だと思うよ？ どっちにしても今の所はまだ使えないし、良い所ヒーリングだけだから」

「回復魔法じゃなくてヒーリングか、緊急時には便利だね」

「そだねえ…だけどさ、ヒーリングは治癒能力の促進だから、使いすぎると人間だったら厄介だよ。ほらたしかあれ…」

「細胞の分裂限界って奴だっけ？ 一定数分裂したらもうそれ以上分裂しないから回復効果が見込めないっていう」

「そうそうっ！ まあ、そんなすぐにはこないだろうけどねー。その点回復魔法は便利だよー、その辺の事一切合財無視するらしいし。魔界魔法ばねえ」

「まあ、それが魔法だしねえ。でもヒーリングとかも凄いいじゃない。使いやすそうだし」

「だな、時間は掛かるかも知れねえけどちゃんと直せるなら十分使えるだろ」

色々これからの事にかけて話していると突然大きめの音が聞こえてきた。

僕達は一斉にそちらの方向を向く、すると近くの空間がぶれはじめているのが見えた、暫く見続けていると影のようなものが見えて、其処に誰かが現れる。

「あ…みゆき…さん？ みゆきさんだっ！」

「泉さん…佐藤さんや皆さんも。ただいま戻りました」

持っている武器が非常に彼女に合っていなかったが、どうやら彼女も試練を終えたようだ。

こなたがそのまま高良さんに抱きついて彼女が帰ってきた事を喜んでいる。

僕も少しホっとした、万が一の可能性もあったから。

「お帰り高良さん。その様子だと上手く行ったみたいだね」

「はい、おかげさまで」

「おおう、みゆきさんが重火器を持つと不思議な感覚が…こう、新しい萌えといつかなんというか」

『自重したほうがいいよこなた』

「あ、あはははは。それよりもみゆきさんっ、なんだかスッキリした表情してるよ」

「そつでしょうか？ そつかもしれないね…目的が出来ましたから」

「目的…？」

「はい…今は内緒です」

「流石みゆきさん、思わせぶりな感じがまた萌えを…やるな…」

わいわいがやがやと、和やかに話しているこなた達、そこにエンノオツ又が再び現れた。

【全員が無事に試練を乗り越えたか…ある意味これも必然なのかも知れんな】

「ありがとうございます、エンノオツ又様」

【気にするな強き魂を持つ者よ。さて……最後に一つだけお前達を試そうと思つ】

「僕達を試す…？ まだ試練があるというのですか？」

【試練とは違うな…最後はいうなれば肩慣らしのついでの使いのよ
うなものだ】

「おお、これが噂のお使いクエストって奴だねっ！ で、行く先々で悪魔を倒しつつ目標のアイテムをげっちゅっ！ そして報酬っ！」

『ぶれませんか、あの方は』

『だってこなただもん』

『ヒョーヒョーヒョー』

「とりあえず話を聞かせて頂けませんか、私達は何をすればよいのでしょうか？」

【この金剛神界の奥にはソーマが湧き出る泉がある他に、蟠桃がなる樹が存在する。其処より蟠桃を持ち帰ってきて欲しい】

まさかこれは…金剛神界のお約束のイベントなのではないだろうか…

真・女神転生？では金剛神界に来るとエンノオヅヌからソーマを持って来いというイベントが与えられる。

勿論其処に行くまでに悪魔が沢山居る為、低レベルだと結構苦戦するよな場所だった。

更に…持ち帰ると今度もまたとってこいと言つ二度手間をさせてくれるという意地の悪いクエストだ。

まあ、二回目のソーマは此方にくれるのだが…もしかしてこれは一度行つてからまた戻つて取つてこいと言う奴なのだろうか…

しかし…ソーマじゃなくて蟠桃か…確か不老長寿の実で、セイテンタイセイがこの実を食べて不老不死になったはず。

蟠桃の他に仙桃とも言われている伝説のアイテムの一つだ。

この世界だと不老不死になるのか、それに等しいステータスでも得るのか分からないけど…この先生き残るなら欲しいアイテムの一つ

だな…コピーカードで増やしてしまおうか…

「蟠桃…！？ まさか、不老長寿の実がこの世界にあるのですか？
！？」

「あー、知ってるなあそれ。伊達にオタクじゃないよん、チートアイテムてんこ盛りだねこの世界、サラツといったソーマだってレアアイテムだよ」

「失礼…エンノオツヌ。ソーマは持ち帰らなくて良いのですか？
もし見つけた場合は所持しても良いのですか？」

【良いだろう、しかしソーマは一度汲むと枯れてしまう、大量に持ち運ぶ事はできんぞ？】

「いえ、十分です」

既にソーマは持っているし、これで2つだ。

必要になれば増やせば良いし、これはいい回復剤をゲットするチャンスだろう。

「もしかして…蟠桃も1個とつたら消えちゃうとか？」

【無論だ、あれは数千年に一度、一個しかない伝説の木の實だからな、気をつけて手に入れてきて欲しい】

「何故欲しいか…とかは聞きません。これも貴方の言う修行なんでしょうしね。こなた、高良さんもいいかな？」

「はい。私達にここまで良くして下さいですから、寧ろ此方の方こそ無償でお助けしなくては」

「うおう、流石みゆきさん。強くなっても博愛精神はすげえぜ」

【行く先々に様々な悪魔達も存在している、奥まで進めばその悪魔達も強くなり、今の戦力ではきつくなるだろう…これを持っていけ】

そういつて手渡されたのは見慣れない形の鍵だった。

重さは特に感じないが、奇妙な魔力を感じる。特殊な鍵なのだろう。

【必要になればそれを持って念じよ、さすれば空間に扉が現れる、それを差し込めば特殊な空間へ道が開かれるだろう。そこでは悪魔を合体する魔方陣がある、上手く利用せよ】

「…ご都合主義って奴ですね…」

「使えるんだから有効利用させてもらおう…この際」

「あ、あはははは…」

そういえばゲームではそのものずばり邪教の館があったなあ…あのおじいさんは一体何者なんだろうとプレイしている時に思ったもの

だ。

でもこれは助かる、今の状態でもアリスとヌエという過剰戦力が居るけど、モムノフ達はそろそろ戦力的に厳しくなってくるだろう。

僕のレベルが上がれば高レベルの悪魔も作れるようになるし、こなたの方もレベルが低いから役に立つはずだ。

でも利用する前に僕自身がレベルアップしないといけないけどね…果たして今度は何処までレベルが上がるのか…せめて60くらいまでは上がってもらいたいものだ…切実にそう思う。

【それが終わり次第、お前達を元の場所に戻そう。それでよいか？】

「はい…お願いします」

「いえっす！ さくつと終わらせて元の世界にもどろっか！ かがみとつかさが心配だしねっ！」

「そうだね…じゃあ行こう」

『いよーしっ！ 頑張りましょ大樹さんっ！』

『リカムも上手く効いた、アメノウズメ達もいつでもいけそうだぜ？ それじゃ…合体を楽しみにさせてもらおうか！』

「ああ、頑張るよ。よし、終わらせよう」

- おおーっ!!

蟠桃を探すクエストが始まる……………

- ミッションが開始されました。

異界レベル20～35 出現予想悪魔、御魂、魔人、秘神、狂神、
威霊、偽人を除く全種族を確認。

依頼ナンバー05、『不老長寿の実の確保』 報酬：????

Continue59 〈足りない想い、足りない総て〉（後書き）

能力自体を考えると、これ以上成長しなくても良いくらいのチート加減な佐藤君ですね…ついにはコピー能力ですよ、カード限定ですけど。

でも、レアアイテムとか量産できると考えると…うわぁ…ですねー。

今回は桃探索なのです、ついでにレベルも上がりますよー。

仲魔の合体もする予定ですが、何が良いか分かりません、カードとかは話の都合上合わせますので、いい合体案があれば欲しいなあと思います（自分で考えないのかっ!？）

どうでもいいこと

甘いものが食べたい…ケーキが食べたい…はうっ…甘味ー！（錯乱

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：62票

みゆき：18票

ダツキ：85票

アリス：19票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されるごとにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue60 足りない物は…何ですか？（前書き）

ミッション中です。

これからすぐに用事があるので、すみませんが切りの良い所で
中断しました。

夜遅くには帰ってくるので、その後に感想返しさせてもらいますね
！。

Continue60 く足りない物は…何ですか？

- 金剛神界 -

蟠桃を持ってくるといふよくあるお使いイベントをこなしている3人。

前衛にみゆき、モムノフなどが立ち、後衛に大樹とこなたなど支援や遠距離系のメンバーで進んでいる。

出てくる悪魔は、これまで戦ってきた悪魔と違いかなり強い悪魔だったが、覚醒したメンバーには何とでもなる相手だった。

「はあっ！！」

『ひゆう、やるじゃねえか。オレも負けてられないな。いくぜっ！』

前衛火力として申し分ない働きをするみゆきとモムノフ。他にもナーガやモー・シヨボーなども前衛に立っているがやはりこの二人が突出しているようだった。

又エはどちらかと言うと中衛での阻害や放電による迎撃などを得意としている為、攻撃力という点では彼女達に一步劣る。

とは言えレベル20台後半という存在はそれだけで圧倒的な力を持

ち、アリスと共同するだけで並居る悪魔達を根こそぎ払って行った。

「おっと。みゆきさんを狙わせはしないよ」

轟音が響きみゆきを襲おうとしていた悪魔が脳天を撃ち抜かれて消えて行く。

狙撃の腕が更に上がったこなたの前では近づいてくる銃撃が効く相手は全体的でしかない。

1発1発確実にヘッドショットを決め悪魔を滅ぼして行く。同時に入ってくるマグネタイトもあつてうはうはだと喜んでる位だ。

そして大樹は……………

「アイツの弱点は、剣と氷、右の奴は銃弾に弱いつ！ 奥の奴は風反射だから気をつけてくれっ！」

『はあい わかりましたわあ』

皆に比べるとやっている事は地味にしか見えないかもしれない。だが、この場で一番活躍しているのは紛れも無く大樹だろう。

こんなスムーズに悪魔を倒せるのは全体的確に大樹が指示しているからだ。

大樹が全てのアナライズや援護を引き受けているお陰で、全員がそれぞれ100%以上の力を発揮できている。これもまた彼の力に他ならない。

お陰で大したダメージや消耗も無く狩りと探索を続けられている。

「よし、ここで少し休憩しよう。仲魔は今度はこなたの悪魔と入れ替えてくれるかな？ こっちは少し休ませるから」

「ほいさ。召喚つとね」

大戦力で蹂躞するのも手ではあるが、それは所詮短期決戦の場合のみだ。

これだけのメンバーが居るなら、小出しにして休憩を取らせれば更に効率が上がるだろうとみゆきからの指摘でこうしている。

実際その通りで、ある程度休ませて再び戦ってもらう方が効率が良かったのだ。

とはいえ、こなたの方の仲魔は全体的にレベルが低い為にアリスと又エは出ずっぱりになってしまっていたが、フルタイムで戦うのはいつもの事なので気にしていない。

寧ろ戦えば戦うほどマグネタイトを吸収して強くなれるのだから合体をあまり良しとしないアリスは喜んでいくくらいだ。

又エも暫くは合体は出来ないので、レベルを上げるほうをメインと

しているのでこれでいいらしい。

「それにしてもみゆきさん強くなったなあ…ほんの少し前まで非戦闘員だったとは思えないよ」

「小太刀とマシンガンを連射してるのが凄いよね。僕も銃は使っけどミトラスがメインだし」

「そうですね…私もこうなるとは思ってもみませんでした。でも…お役に立てて嬉しいです」

「どちらかというともみゆきさんって後衛魔法使いかな…って勝手に思ってたけど、これはこれでいいね。萌えを感じるよ」

「え…ええ…？ 萌え…？」

『そう、萌えだね。同時に燃えも感じさせてくれるしっ！』

「わかるかアリスちゃんっ！」

『わからいでかっ！』

僕にはよくわからないと大樹は心の中で思いつつも突っ込まない。つつこむと更に騒ぎ出しそうだったからだ。

『こなたー。こんなの拾ったホ』

「どれどれ？ おおっカードじゃまいか。落ちてたのに気づかなかったよ。ふむふむ、カンプアアのカードか、そういえばさつき奥の方に何か居たなあ」

「見える前から撃ち落してたしね、奥の方で放置されていたって事か」

「そう言う事もあるのですね」

遠距離で倒したとして、マグナイトなどは補充できたとしても持っていたアイテムなどをドロップした場合はその場に放置になるのが当たり前だろう。

ゲームとは違い、そこまで優しくはない。

『シカシ…ソロソロ我等二八辛クナツテキタナ…』

『さつき一度死に掛けたしなあ。合体時期かねえ。サマナー今何レベル？』

「んーと…ちょっとまってね…おおう。レベル24とか言ってる。何時の間に」

「僕も27になってるよ。でもそろそろ上がり難くなってきたな」

「私は…どのくらいなのでしょう？」

「みゆきさんはーと…23だね。十分強いよっ　しかし20台と

か：15で超一流とかの世界なのに20を超えてるって私等かなり
凄いんじゃないかな？」

『30を超えたら人間は超人と呼ばれるくらいじゃからのう。わし
等のサマナーはそれに一步近づいて居るしそれなりに嬉しいもんじ
ゃよ』

『ふっふっふ。一人レベル40のアリスちゃんが通りますよ』

えっへんと胸を張るアリス。

この中では一人突出してレベルが高い上、万能魔法まで持ち合わせ
ている彼女は大樹の切り札の一つでもある。

更に先ほどの戦闘で1レベルアップしているため更に強くなってい
る。

『もうちょっと強くなればメギドラいけるかも』

「くそう、公式チートキャラめ。羨ましいぞっ」

「泉さんとアリスさんは本当に仲が良いのですね」

「波長が似てるからね、気が合うんだと思うよ」

『偶に同一人物じゃないかと思う時があるわ私』

『魂の姉妹って奴か 胸の部分は違うけどなぐぼあっ!?!?』

おどけて言うナーガの顔面に手加減していない裏拳が突き刺さる。

物理的にありえないはずなのに、拳が貫通しているように見えるのは多分気のせいだと大樹はできるだけ気にしないことにしたようだ。

「ナーガっち…いいかい？ 一つだけ言っておこう…貧乳はステータスだ希少価値なんだっ！ おーけい？」

『い、いえすまむ』

「……………それじゃなくても負けてるのに…」

「??？」

ビシッと敬礼を取る横でこなたがぶつぶつと呟いていたが流石に小さすぎて聞こえなかった。

と、お馬鹿な真似をしつつ休憩を取った後は再び歩き出す。

百太郎は変わらず常にイエローマークを出し続けている為常に警戒し続けながら歩かなくてはいけない。

この辺りに出る悪魔は大体倒した為、ほぼ全ての情報を持っているがレベル帯は此方もほとんど似たレベルの為、万が一奇襲された場合かなりの確率で全滅の危険がある。

その為最低でも一人は常に辺りに気を配らなければならない。

そしてその役目は基本指揮などをする大樹が任されている。ペルソナを降ろしている為に他のメンバーより悪魔の気配を感じやすい点も考慮した結果だ。

こなたのアストラル・サイトも役に立つがまだ使い慣れていない為今は全て大樹が担当している。

「それにしても…不老不死の実かぁ。どんなアイテムなのかな？」

「セイテンタイセイが食べて不老不死になったという逸話があるけど、多分人の蘇生も出来るほどの果実というのは確かだろうね」

「そうだった、こういう時こそみゆきさんの出番だった！」

「あはは……わかりました。コホンツ。蟠桃とは西王母が住んでいるという崑崙山に生えていると言われる桃の木、またはその実を表していると考えられます。その実は三千年、西遊記では九千年に一度だけ実になるとされてまして、食すと不老長寿が得られると言われてますね。西遊記では孫悟空がこの実を食べて不老不死の力を得たとされています。後、実際に果物として蟠桃は存在していますね。原産は中国です、でも此方はそういう名前の桃であって不老長寿の実ではありません。でもとても甘くて美味しいとされています」

「…成程」

アニメなどでもみゆきはこうやって深い知識を説明していたが、実

際に目の当たりにすると凄まじいなと考えている大樹。

流石は歩くウィキペディア、もしくはみwikiと言われているだけあると深く納得してしまった。

こなたはこなたで、どや顔をしつつ嬉しそうにしているが凄いののみゆきであってこなたではない。

説明が終わると仲魔も含めて拍手の雨が降り注ぐ、みゆきも流石に恥ずかしいのか顔を逸らしていた。

「ふむ、となるとエンノオツヌが何故それを欲してるのかよくわからないな…取ってきて食べる訳でもないだろうし」

「もしかしてくれるとかつ！」

「不老不死になりたいかい？ 僕は嫌だな、例え地球が消滅したって生きてるって多分地獄だよ」

「そうですね…死なない他にある程度のステータス強化はあるらしいですが、この先永遠に生き続けると考えると精神もおかしくなるでしょうし、大変な事になるでしょうね」

『悪魔と人間じゃ精神に違いがあるもんね…私としては大樹さんに食べてもらって永遠を歩んでもらいたいけど』

「人間は生きてるから人間だよ。不老不死ってのはある意味死者と変わらない。人間なんてすぐ精神が磨耗して使い物にならなくなるさ」

大樹も流石に蟠桃をコピーする気にはならなかった。

というより、神々のアイテムは今のレベルではカードに封じ込められない気がしている。

レベルが上がる度に、容量の限界が何となく分かる様になってきていたようだ。今のレベルのマジックカードでは伝説級のアイテムは収納できないものが多いと思っっている。

現在ソーマは収納できているがこのソーマは本来の神の酒とは違ใหญ分劣化している為に収納できているようだ、この場所で湧いているソーマは恐らく収納できないだろうと踏んでいる。

とりあえずカードをコピーしようとしてみたが、ソーマのカードは増やす事が出来なかった。どうやら此方もレベルが足りないらしくまだまだ修練が必要なようだった。

とは言え、基本的なアイテムはコピー出来る為、別段困る事はないのだが……………。

後、MP回復剤を用いての連続使用も考えたが、これも頓挫する事になった。

確かにMPさえあれば複製は無限に出来るのだが、一つ作るだけでMPの他に精神力もごっそり奪われていた為、MPがあっても精神的に連続で作り出すのは難しいだろうと言う事を頭で理解していた。

世の中そう都合よく上手くは行かないなと苦笑してしまう大樹が居

た。

「……………ん。赤…か、全員戦闘配備についてくれ、奥から5体、その奥に更に4体だ。こなた確認できる？」

「あいよー…うん。前のは悪霊ピシャーチャかな。その奥のは未確認だね、アナライズアナライズ…と……………うっわ…龍神パトリムパスだ。銃での狙撃はあんまり効果ないなあ…」

「ピシャーチャはともかくパトリムパスが面倒だな…全員が集まる前にせめてピシャーチャは潰さないと。よし、こなたは来る前に出来るだけ数を減らして欲しい、他の皆マハ・ラギオンカードで攻めてくれ。こなた仲魔は援護専念っ！ 皆行くぞっ！」

マハ・ラギオンを収納したマジックカードを全員が所持し、悪魔が向かってくるのを待つ。

かなりのスピードで此方向かっている為、いつでも攻撃できるように陣形を取り待ち構えた。こなたはスナイパーライフルを取り出し向かってくる悪魔の頭を狙って行く。

悪霊ピシャーチャは大抵が発狂していたために機敏な動きは見せない、つまりそれはこなたの独壇場とも言える。

「よーし、来い来い来い来い…シュートッ！」

数初連続して乾いた音が響く、弾丸は確実に悪魔の頭を捕らえていた。

何発もの弾丸で頭を撃ち抜かれたピシャーチャはその場にもんどりうって倒れ、消滅して行く。

このペースならこちらにエンゲージする前に後1体は落とせそうないペースだ。こなたはすぐにもう一体に狙いをつける。

「祈る時間は…つてそもそも発狂してるか…それじゃ…ねっ!!」

「見えてきた…皆、攻撃開始っ！一匹も近づけるなっ！」

もう一匹が倒され3匹となったピシャーチャの前にマハ・ラギオンの雨が降り注ぐ。

そもそも火を弱点とするピシャーチャにカードを使える全員によるカードの連打、それは正にオーバーキルと言った感じだった。

悪魔達は近づく事も出来ずに火炎の前に燃え尽きて行く。

程なくピシャーチャ達は全てマグネタイトに変換され消えて行くが、次は邪龍が攻めてくるのを知っている為に気を抜いていない。

先ほどのピシャーチャの様に纏まって現れてくれればいいのだが、流石に龍神だけありこちらを警戒しつつ近づいているのが分かる。

彼等の弱点も火属性な為にまとめて近づいてきてくれれば楽だった

のだがそうもいかないようだった。

「持つてるスキルはマハ・ジオンガにリカムか…更に電撃ハイブ
ースタを持つてる。一撃がダイン級だ皆気をつけてくれっ」

『雷は私と又エは平気だけど…皆が危険ね、マハ系だから私達が困
になるのも出来ないし』

『私は電撃はまずいわね。マカラは電撃吸収だけど、そもそもレベ
ルのにアイツラの方が上位だから面倒だわ』

「ブレスがあつたら厄介だったけど、こいつらは電撃特化みたいだ
ね。魔法なら僕が何とかできる、皆悪いけど僕を信用してくれるか
な？」

「うん、信頼してる」

『私もだもんっ！』

「お任せします佐藤さん」

「よし、奴等は多分すぐに魔法を撃ってくるはずだ、僕の一手が終
了次第全員で突入、前衛は切り込んで相手の動きを止めてくれ。足
止めが済んだら火炎魔法で薙ぎ払う、合図と共にすぐ下がって欲し
い。できれば下がった後にカードを頼むよ」

『へいへい、やりますかつと』

『足止め八任セヨ…』

「分かりましたっ！」

「くるぞ…よし！ ペルソナチェンジ。バクヤ！ 全ての魔導を跳ね返せ！ マカラカーンツ！」

大樹がそう叫びながら手を上に持って行く。

別に手を上げる必要などは特に無いのだが、これはある意味精神集中のようなもので無意識に行ってしまうようなものだ。

別に格好つけてる訳でもないし、これがかっこいいとも思っていない。よくある無意識な行動と思って欲しいと思うばかりとの事。決して厨二病ではない。

すぐ上空に現れる民族衣装のような物を来た女性：バクヤが召喚される。

ペルソナとしての能力は中の下だが、支援能力を持つペルソナとしてはそれなりに優秀である。

更に言えばマカラカーン（魔法反射）を持つ点もあり、重用する１体だ。

『我が力を半身に…全てを防ぐ魔法の盾よっ！ マカラカーンツ！』

魔法の結界が形成されたのと電撃が降り注いだのはほぼ同時だった。

戦いは…加速する……………

大樹はレベルが7上がった！

こなたはレベルが6上がった！

みゆきはレベルが5上がった！

仲魔達はそれぞれレベルが上がった！

戦闘中断……………

Continue60 く足りない物は…何ですか？（後書き）

マジックカードの限界とコピーの限界などをちょこちょこ入れたお話になりました。

まだミッションの中盤辺りを歩いているようです。

今回は……… 終わり間近までもって行きたいですよー。

どうでもいいこと

部屋をこそそそしてたらドラゴンクエスト？のパッケージとゲームが出てきました

何このレアっ！？ なのですよ…買った覚えは、勿論ありません（えー

何故あるんだろう…摩訶不思議です。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：65票

みゆき：18票

ダッキ：88票
アリス：20票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されるごとにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue61 不老より不死より尊いモノを (前書き)

という訳で戦闘再開なのですよ。

いやあ…寒かったり暑かったりで、結構体調が辛いです。

だれか助けてっ！(微妙に切実)

今回は最後に選択肢がありますよー。

Continue 61 不老より不死より尊いモノを

戦闘再開……………

降り注ぐ魔法の雷撃が全てマカラカーンによって反射される。だが、パトリムパス自身電撃は無効なのでダメージにはならないのだが。

それでも相手の一手を無効化した事によって此方は断然有利になっている。

先ずはみゆきがマカラやナーガと共にパトリムパスに切りかかる。みゆき自身行き成りレベルアップした為に、まだ熟練度が足りず力に振り回されやすいが、其処をマカラとナーガが上手くフォローする。

即席の連携だが、これが見事に噛み合い本来の実力以上を出す事に成功しているようだ。

『おのれ…ちよこまかと…!』

『うおっとうっとうっ…やべえやべえ…当たると死ぬなこりゃ! そ
いやっ!』

『ミユキ殿二繋ゲルノガ我等ノ役割ダ。突撃ハスルナヨツ!』

『へいへいつ、かわいい子ちゃんのご機嫌取りなら任せて置けっ!』

「あ、ははは…」

命懸けの戦場なはずなのに、ほぼ初参戦に近いみゆきがここまで何の問題も無く戦ってこれたのは、偏に仲間や仲魔達とのこうした会話のおかげだった。

ともすれば死んでしまう争いの中でも、時々はこうやっておどけたり助けてくれたり、あるいは助けたり…と、このお陰で緊張もほぐれ彼女が本来持つ天才的な戦闘力も加味し上手く回っていた。

「はあっ!!!」

掛け声と共に小太刀を振るう。

小太刀：本来は刀より小さく攻撃力なども控えめな武器なのだが、エンノオツ又より手渡された光の小太刀は普通の小太刀より多少長く、形式としてはショートソードに分類されるだろう。

その攻撃力はとても高く、更に魔法がかかっている為に一度振るうだけでもう一つ幻の刀身が現れ相手を切り刻むという凄まじい特性をもつ。

更に破魔の力の祝福を持ち、邪悪な悪魔などにはハマの効果を持つ

という強力な小太刀だった。

『むっっ…』

「逃しませんっ！！ ていつ！！」

相手の懐に飛び込む小太刀を逆手に持って振るい、振り切った瞬間に元に戻し薙ぎ払う。脅威の連続攻撃に浅くない傷を負いつつパトリムパスは後ろに下がる。

其処にナーガが槍を持って突撃し、相手の行動を許さない。

更にはマカラがパトリムパスの下半身に狙いをつけアイスブレスを吐き出す。咄嗟にナーガはブレスを避けるがパトリムパスは突撃の衝撃で体が強張り動く事が出来ずまともにアイスブレスを受けてしまっ。

『ぐっっっっ！？ こ、このようなものっ！ すぐに…！』

『イヤ…終ワリダ』

『う…っおおおおおおおおおっ！…？』

凍りついた足を無理やり動かそうとするパトリムパスの前に小太刀を納刀したみゆきが駆け寄って行く。

そして……………

「これで…終わりですっ!!」

みゆきの奥義一閃。光の線が見えるほどの一撃がパトリムパスに振るわれる。

避ける事もできずにパトリムパスは胴体から真一文字に両断された。

『ぎゃあああああっ!?! おおおおっ!』

少しずつ全身がマグネタイトに変換され消滅しかけていく。しかしそれでもその目は生きており、魔法を唱えようとする…が。

『あめえなっ!』

ナーガの持っている三叉の槍によって顔面を突き抜かれ今度こそ完全に消滅する。

これで一体と、一息つく前にみゆき達は他の皆の場所に向かって駆けて行った。

「ちょいさっ！！ とととっ、やっぱりこのレベルになると強いなっ」

『この先には…進ませんぞっ！！』

「龍神の癖に流暢に話してる件について。てか龍神の割には見た目男性だよな。ちえいつ！」

『アギラオツ！！』

2体のパトリムパスを相手にするこなたとペレ達。

銃を得意とするこなただが、勿論接近戦も難なくこなせる程の実力を持っている。

両手にナイフを持ち、辺りを素早く動き回りながら頻りに攻撃を繰り返して行く、其処にペレのアギラオがパトリムパスを狙い撃ちにする。

火炎を弱点とするパトリムパスはこれに注意しながら動かなくてはならないので、動きと魔法を制限されてしまう。

『……………』

アリスは敵の隙を伺いながら魔力を練り上げている。

この中で過剰に攻撃力を持つ彼女は、その威力の凄まじさもあって魔法を使う場面も一番の時を選ばなくてはならない。

電撃ハイブースタとマハ・ジオンガを所持しているパトリムパスに魔法を使わせるわけには行かない。アリスには電撃が効かないものの、他は全員耐性を持っていないのだ。

一撃でも受けてしまえばそれだけで戦闘不能、もしくは死亡する可能性がある。

1体にはこなたがメインで張り付き魔法を撃たせないようにし、もう一体の方にはペレとジャックフロストが懸命に戦いながら足止めをしている。

「ちえ…いやっ！　てりゃっ！！」

飛び上がったの双龍脚が顔面にヒットし相手をぐら付かせ、もう一撃で胸を蹴り飛ばす。その反動を利用したまま、投げナイフを投擲して腕と足を狙う。

しかし、ナイフはすぐに払われ、そのまま豪腕でこなたを殴りつけた。

咄嗟にナイフで防御できたが、かなりのダメージを受け弾き飛ばされてしまう。

戦闘力自体は悪魔であるパトリムパスの方が上な為、これ以上攻撃を受け続けたら倒されるのはこなたの方だろう。

だが、流石にダメージは重く、立ち上がる前に攻撃を受けてしまうのは明らかだった。

アリスがそれをさせまいと動こうとしたとき何かが凄まじいスピードで駆け寄り、それと同時に氷の散弾がパトリムパスを穿つ。

『ぐっ、邪魔するな雑魚がっ！』

『こなたを倒させはしないホッ！』

もう一方のパトリムパスと戦っていたジャックフロストがそちらをペレに任せてこなたの援護に回ってきた。

こなたに近寄らせないようにブーラを連続して打ち出すが、魔力が低い為あまりダメージにならない。それどころからそれさえ無視して飛び掛ってくる。

ペレがそれに対抗して駆け寄ろうとするがそれをもう一体のパトリムパスが止めに入る。

『させんっ！ お前はここで死ねっ！』

『くっ…邪魔しないでよねっ！ アギラオッ！』

『ぐっ…この程度では落ちぬっ！』

火炎を弱点とはしているが、やはりペレとパトリムパスではレベルに差がありすぎてダメージが低いようだった。

それでも、かなりのダメージを与えている為、ペレー人でもギリギリで立ち回れている。近くにはアリスも居るために思うように動けない悪魔は舌打ちしながらもその場に足止めされる。

「うくっ…魔石と…これで」

受けたダメージを魔石で回復しているが完治までは数秒ほどかかりそうだった。

それを見たジャックフロストは残り少ないMPでも使える技でパトリムパスに向かって行く。

腕をぐるぐると回しながら飛び掛るその様子はとてもキュートに見えるが、その威力はかなり高い、当たればだが。

『これで成仏するんだホーっ！』

『やかましいっ！』

『ヒホっ！？ きゅっっ…』

殴りかかるもすぐに倒されてしまうジャックフロスト。単純な戦闘不能なのでCOMPに戻らずその場で目を回している。

気にせずにパトリムパスはあなたを狙おうとするが、この行動が悪魔の運命を決定させた。

「よくもフロストちゃんをつ！ たあああつ！！」

その僅かの間に完全に回復したあなたが回転袈裟蹴りでパトリムパスを弾き飛ばす。丁度そこにはペレと戦っているもう一体が居た。

此方に吹き飛んでくるのを確認したペレは全力で後退する。

くすつと笑うアリス、これでチェックメイトだと右手を前に突き出し魔法を唱えた。

『……今だっ、喰らいなさいっメギドッ！！』

『ぬっ！？ しまっ…！？ ぐあああぎゃああああつ！』

『ぐおおおおおつ！！？』

アリスのメギドが悪魔に直撃し、一瞬にして蒸発させた。

その威力は凄まじく近くにいたもう一体のパトリムパスにもかかり

のダメージを与える事に成功する。

『おのれ…こうなれば死んでも貴様等を巻き添えにつ！ マハ・ジ
オン…!!』

「遅いつ…!」

『ガ…はあっ!?!』

後ろからこなたが両手のナイフを鋏の様に使い首を跳ね飛ばした。

血飛沫が噴水のように吹き上がり、それが同時にマグネタイトに変化しCOMPに収納されていく。

こなたに降り注いだ赤い血も全てマグネタイトになっているので、全身が赤く染まると言う事はなかったようだ。全身血まみれでは流石に大樹君に近づけないなあと何気に微妙な乙女心を出しつつもホツとしている。

これで残ったのは大樹とヌエ、リヤナンシー達が相手になっている残り一体だけだった。

『くっ…まさかこんなにあっさり和我々を下すとはな…』

「奇襲さえされなければどうともなるからね…さて、君はどうする？ この戦力の前じゃ君は無力だ」

ミトラスにアギラオを封じ込めた火炎弾を込めてパトリムパスに狙いをつけている。

銃に耐性のあるパトリムパスだが、属性が炎に変更されている為に、この一撃が命中すれば一瞬で死んでしまうだろう。

近くでは又エと、マハ・ラギオンカードを持っているリヤナンシーとアップサラスが相手の動きを注意深く見ていた。

悪魔が動いた瞬間に炎が唸りを上げるだろう、戦況は既に詰んでいた。

『…殺せ』

「それを決めるのは僕だ。なぜこの先に進むのを止めようとしたのか教えてもらおう。先ほどのピシャーチャも君達の仲魔だろう？」

『答える義務はない、さあ殺せっ！』

『ヒョーヒョーヒョー。奥に護るべき物がある、という奴かのう』

そう又エがいうと相手を射殺さんばかりの目で又エを睨みつける。

しかし飄々としている又工の前にはまったく効果をなさないようだ、寧ろこれでこの奥に何かがあると答えたようなものだろう。

大樹は考える…蟠桃を護っているにしてはこの悪魔達は強い上に我武者羅だった、もしかしてこの奥にはこの悪魔達が護るべき存在が居るのかもしれないと当たりをつけ始める。

「この奥に誰かが居るのかな？ 僕達はそれには興味がない。僕達はこの先にあると言われている蟠桃を探しに来ただけだ」

『蟠桃だと…？』

「この金剛神界がどのような異界のようになっていたのかは僕達は良く知らない。僕達はある人の頼みでそのアイテムを探しに来ただけだ。君達が護るべきものを害しに来た訳じゃない」

『……………信じられんな』

「信じられないなら、死んでもらうしかない。でもそれでいいのかい？ 僕達は自分達からは攻めるつもりはないけど、こつも攻撃されたらやりかえすだけの気概はあるよ？ それだと困るんじゃないかな？」

『……………外道め』

悪魔に外道呼ばわりされるとは焼きが回ったな…と微妙に苦笑しつつも銃は突きつけたままで交渉…いや尋問を続ける。

大樹にとって彼等が何を護っていようと特に関係はない。この交渉は彼等の手による襲撃を抑える事と、蟠桃への道を知る為の交渉なのだ。

低姿勢で会話したり、フレンドリーに会話するのは大樹には苦手としている、だから大抵はこういう威圧交渉などになってしまいがちなのが難点だろう。仲魔が増えにくいのはその辺が関係している。

「なんでもいいよ。で…情報をくれないかな？ 僕達はそれさえあれば他に興味はない」

『……いいだろう。蟠桃の樹はここより北西に数キロ歩いた地点にある。勿論其処には守護者が存在し容易く近寄れる事は出来ないがな』

「守護者…？ どういった悪魔なのか教えて欲しい」

『魔獣だ。それ以上は言えん』

「魔獣か…」

守護者で魔獣というと凄く嫌な予感がしたが、流石にケルベロスではないだろうと候補を取り外す。

寧ろこのレベルでケルベロスと戦えというのは正に自殺行為でしかない、エンノオツヌも死ぬと言っている訳でもない筈だと思うので、それよりランクが下と考えるおく。

だが、雑魚ではないだろう、戦う前に調べるだけ調べておきたいがこれ以上の情報はパトリムパスからは得られないようだ。

「大樹君が、凄く…悪役です」

「あはは…」

『え、カッコいいけどなあ…』

『いや、それは無いわ』

「わ、私も少しはいいかなあって。ダークヒーローっぽくて」

痘痕も笑窪とはよく言うものだとペレは頭に少し痛みを感じつつやり取りを見ている。

暫くのやり取りの後アイテムなどを受け取って戦闘は終了した。

リカームカードを使ってジャックフロストを蘇生し、回復魔法などで体勢を整えて行く。

「パトリムパスが護ってる何かかあ…こついう時は大抵おにゃの子だよな」

『うんうん。プリンセスとかそういうのかなあ』

「金剛神界にもそういったものがあるのですね…」

「らしいね…エンノオツヌが住んでいる場所は悪魔も出ないし中立地帯みたいな場所なんだろう。多分ここも異界で間違いないはずだ。さて…どうしようか、守護者が居るらしいね、種族は魔獣らしい…多分修行も兼ねての頼み事だからかなり強い悪魔だと思う…」

『となると…私達はまず合体しないとやばいわね。最低でも20台前半にはならないともう役にも立てないわ』

『だなあ…流石に少しきついぜ』

「僕のCOMPはDDRがあるけど、もう組み込んだから僕の仲魔しか合体できないんだよね…更に言っとカード合体は出来ない」

「カード自体は結構見つかったし、ここで合体の部屋に行ってみない？ 戦力増強の時間だね」

邪教の館…の様な場所にいけるといふ鍵を貰っているため、その気になればすぐに合体は可能だった。

大樹としてもアリスと又エ以外はそろそろ合体時期だと考えていたので丁度良いタイミングだと鍵を取り出す。

「あ、大樹君貸して〜」

「わかった、どうぞ」

「おつ　ほにゃらば…ひらけゴマっ！…！」

あまりにもベタ過ぎるギャグに全員が無言になる。それでも一応効果があつた為、見慣れない扉が現れた。

『出てきたね…うん』

「はっはっは。お約束はどんなに寒くてもやらなくちゃいけないのだよ、さあ行こー」

こなたが一番乗りで入って行く、大樹達もそれぞれ扉の奥に入ってしまった。

「確かに…邪教の館っぽいね。機械とかは無いけど」

「ここが…合体施設なのですか。魔法陣しかありませんね…」

辺りは無機質な灰色の壁に覆われていた、広さはあまり無く畳6畳分位の空間しかない。

その中心には3つの魔方陣が描かれていた。恐らくこのうち2つの魔法陣に乗り、中央にある少し大きめの魔法陣で合体されるのだろう。

機械とは違いどうやって発動して良いのかよくわからないが、一応は合体施設のようだった。

『普通の邪教の館とはやっぱり違うみたいね』

《ほう…あれだな。魔力を流すと発動する昔のタイプって奴じゃねえのか?》

「なるほどね…合体事故が起こるかもしれないから慎重にやって行く事にしよう。まずはこなたの仲魔から行こうか」

「あ、いいの? ありがとうっ カードは結構あるしレベルもさっきので1上がったから25かあ…30レベルの悪魔が作れそうだね」

「僕は27のままだ、32レベルだけどアリスは暫く必要ないし、又工はどうする?」

『そうじゃのう、カードでの合体ならば構わんよ?』

《我はこの姿から変わるならなんでもいいぞっ!!》

《今度はサキュバスになったりとかかも知れませんわねえ》

《やめてくれええええっ!?!》

「かわいそうなモー・シヨボー(笑)だね」

《(笑)をつけるなあっ!》

それぞれ持っていたカードを持ち寄り合体を行って行く事にした。

初めの内はどうやって合体していかわからず、少し手間がかかってしまったが、その後は合体事故なども起きることなく全ての合体が終了した。

……

……

…

ペレは霊鳥フェニックスに変化した！

マカラは龍王ユルングに変化した！

ジャックフロストは邪鬼じゃあくフロストに変化した！

ナーガは墮天使オリアスに変化した！

リヤナンシーは妖精シルキーに変化した！

アプサラスは妖魔ディースに変化した！

「うおう…迫力あるね。所で所で、元ペレさん、というか現在フェニックスさんや」

『…何？』

「なして人の姿？ 鳥じゃないの？ 炎の鳥じゃ」

『そっちにもなれるけど、こっちのほうが融通効くでしょ？』

「そ、そういうもんですか…流石悪魔、ばねえ…」

「まあ、でもかなりの戦力強化だと思うよ、かなり助かるね」

『こなたー 僕も強くなったホ』

「うんうん、見た目大して変わってないし、じゃあくってついてるのに性格も変わらない君が素敵だよ」

『わーい、褒められたホ』

『まあ、悪魔同士の合体じゃなくてカード使ってるせいもあるんじゃないの？ 悪魔同士なら新しい悪魔になるけどよ、この場合は合体つつー名前のランクアップみたいなもんだしな』

『確力ニナ…ダガ有益ダ、コレデさまなーノ役ニ立テルダロウ。コレカラモ使ツテクレ』

「うん、ありがとね。それじゃ次は大樹君の番だね」

「そうさせてもらつよ。皆もそろそろ合体時期だしね」

COMPから仲魔を召喚し、カードを用意して行く。

前々から合体したがっていたモー・シヨボーから始める事になった。

『うう…漸くまともな姿になれる…感謝するぞサマナーよっ!』

『残念ですわぁ可愛いですのにい』

『やめてやれ、可哀想だから』

「よし…カードは…と一番近くて邪神になれるけど、これでいいかな?」

『ふむ…魔王には遠いが、まあいいだろう。よろしく頼むぞっ!』

反対側の魔法陣に妖樹のカードを置き、用意を整える。

「よし…行くぞっ!」

こなたと同じように魔法陣を起動させる。

互いの魔法陣に居たモー・シヨボーとカードが消滅し、中央の魔方陣が光り輝く。

暫くすると其処には一体の悪魔が生まれていた。

『我が名は邪神バフォメット…うむ。これならば畏怖の念を抱かせ

る事も出来るだろう。感謝するぞ！ あっはっはっはっはっはっ！』

「へー、バフォメットかあ。ゲームだとよく見るよね。確か…えーと。みゆきさん、パスっ！」

「あ、はい。バフォメットとはキリスト教でよく知られる悪魔の一体で、黒ミサを司る悪魔とされています。頭部は目の前のバフォメットさんを見て分かる通り、山羊の頭を持っているとされていますね。何時から知られていたかは定かではありませんが、1300年初頭にテンプル騎士団がバフォメットを祀っていたとされます。これは異端審問の裁判記録にも残されています、これが最古のものとして残っていますね」

「黒ミサか…確かに邪神だね」

「エロゲーとかによく出てきそうだよねえ」

『「らっ！ そこそっという発言禁止っ！」』

「うわっちゃ…あはははーめんじ」

『とりあえず…突っ込んでもいいかしらあ？』

『ん？ なんだアメノウズメ。今の我は気分がいいから何でも聞いてやるぞっ！』

『胸が大きいわねえ。やっぱり女性なのかしらあ？ 顔は山羊ですけどねえ』

『……………「っ、っっっっっっ！？」 これはどういうことだー！』

っ!?!?』

錯乱するバフォメット。確かに着ている服からも飛び出して見えるほどの胸の大きさが特徴的だった。

頭部はどうしようもなく悪魔の顔なので、凄くアンバランスに見えるのだが、先ほどまで男の娘だったぶん、更にシヨックが激しいようだった。

『男の娘の時でも一応は男だったんだぞっ!?!? 今度は…今度は完全にメスなのかあああつ!?!? 神は我が嫌いかつ!?!?』

『まあ、悪魔を好きな神はいねえやな』

『ぶぐづっ…』

「えと、ですね。バフォメットは両性具有の悪魔とされてまして、その身体は自由に変更させる事ができるらしいですよ。なのでバフォメットさんが望めば男性の体になれるかも」

『よく言った人間っ! ふぬぬぬぬぬ…』

なにやら力を入れ始めるとふつくらとしていた胸がどんどん小さくなっていく。

暫くすると完全にぺったんこになったようだ。自分で触って確認し喜びに満ち溢れた表情のバフォメット。しかし山羊の顔が喜びに満

ち溢れても人間には何が変わったのか分からないのだが。

『はーはっはっはっは！ これで我は完全に元に戻った！ 驚かせおつて…ふははははははっ』

『やかましい奴だな…毎度の事ながら、うしっ、次はオレだな？ 出来るなら男性系の悪魔になりたいが、アレを見てるとなんだかその辺どうでも良くなってきた』

『あー』

「あー」

『う、煩いっ！ 死活問題だったのだぞっ！』

生易しい表情で見つめる大樹達。このままオチ要員になりそうなバフォメットに多少憐れさを感じないでもなかった。

アホなやり取りの後他の仲魔達も順次合体して行く。今回は前のような事故もなく、此方も安全に合体が終了した。

………

………

…

モー・シヨボーが邪神バフォメットに変化した！

モムノフが妖鬼キンキに変化した！
アメノウズメが女神パールヴァティに変化した！
又エが龍神グクマツツに変化した！
魔銃ミトラスが魔銃フォルトウナ（強化種）に変化した！
アメリカのレベルが30に上がった！ 各種スキルなどを覚えた！

「よし、これで終了だね」

「お疲れ様です」

「こゝ しっかりと皆強そうだねえ」

『ヒョー まさかこの身が龍神になるとはのう、長生きするものじゃ』

『くすくす。これでまたサマナー様を狙えますわあ 夜中に…なあんて』

「アリスちゃん。全力で止めるべし」

『うらじゃー』

『あれで…女神なんですよね…私も一応女神フォルトウナになったようですが…あれ…？』

「どうしたんだい？ フォルトウナ…って…え？」

目が点になる大樹、そこにはちびっ子…というかピクシーというか2頭身キャラっぽくなっている可愛い女の子がぶかぶか浮いていた。皆が気づいて驚いていたが、なによりもその彼女自身が一番驚いているようだ。ぺたぺたと自分の体を触っては一々驚いている。

漸く落ち着いたのでかふよふよと大樹の目の前に飛んできて、そこでぺこりと頭を下げた。

『我が主よ…どうやらこの姿は私自身のようです。よくわかりませんが…なにやら意思が抜け出たようです』

「つまり、君がフォルトウナ自身と言う事かい？ じゃあこの銃はもう…？」

『いえ、そちらも私自身のようです。こう、ラインが繋がっていると言いますか、どちらにもそれぞれ私という存在が宿っていると言っていますね。複数思考のようなものです』

「ほうほう…しかしまさかマスコットキャラ化とはフォルトウナちゃんもやるねえ」

『結構可愛いじゃない 抱かせて抱かせてっ』

『わわわっ！？ あ、アリス様っ！？』

見た目からして可愛い為かこなた達の人形のような扱いをされているフォルトウナ。

銃になってしまった時は、少しばかり寂寥感を感じてしまったが、再び彼女が動けるようになって少し心が軽くなった大樹が居た。

「さて…そろそろこの後の事を考えよう」

「おとと、そうだね。えーとこっから西方に数キロだっけ？」

「北西ですね。方位磁石はありますけどCOMPの方がもっとわかりやすいかもしれませんね」

『後は、パトリムパスが護ってる何か…が気になるといえば気になるわね』

「誰かを護っている、で間違いないと思うよ。上手くコンタクトをとれば何かの役に立つかもしれないけど、別段そっちは無視してもいいしね。問題は蟠桃を護っているとされる守護者か…」

『確か魔獣じゃったかのう。流石にこのメンバーで挑めば物量で勝てる気がするかのう』

「エンノオツヌもその辺考えてるだろう、何かしらあると考えたほうが良いね。例えばメンバーが固定されるとか、場所が狭いとかかな」

『成程な…其処も考えておくべきか。で、その場合はどうするんだ』

？ オレは前衛に出たいけどな』

『私は大樹さんと一緒に戦うからこれで2よね。でこなたとみゆきは人間だから4かしら』

「6人位がベストかもしれない。となると前衛に高良さんキンキ、バフオメットが良いかな。後衛に僕とこなた、アリスで。ダメージを受けた順から下がって、僕から仲魔を召喚して行こう。もし追いつかなくなればこなたからも召喚を頼むよ」

ゆっくりと確実に作戦を立てて行く。

大樹達はこれからどうするのだろうか……………

選択肢

- 1、このまま奥に行く
- 2、パトリムパスが護っているとされる何かを調べに行く
- 3、ソーマを探してから奥に行く

Continue 61 〈不老より不死より尊いモノを〉（後書き）

悪魔合体ですよー。

漸くそれなり…いやそれ以上の戦力になったと思います。

これなら上手く戦えば雪之丞（弱体化ヴァージョン）にも勝てそうですね、はてさて…

という訳で選択肢を置いてみますね。

特に無ければ1番をメインに動きます、アンケートの最終時間は明日の朝7時までとさせてもらおうですよー。

どうでもいいこと

稲荷寿司を食べました、仄かな酸味と甘みがとても美味しいですよっ！

あぶらげは私の好物なのです！ あ、けっして狐じゃないですよ？
そ、そこん所わかっておきなさいよねっ！ 断じて私は狐じゃないんだからっ！

…誰の真似だこれはーっ！？（錯乱

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

ダッキがダントツになりそうですね、このままダッキでしょうか、

元の世界に戻るまでにコミュが1回ありますので、それまで頑張れ
ですよ！。

こなた：69票

みゆき：18票

ダッキ：90票

アリス：21票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

Continue62 〈護る者奪つ者傍観する者〉(前書き)

アンケートありがとうございましたー

という訳でこうなりました！

1：2票

2：11票

3：6票

やはり、この選択肢が多かったです。

そしてこのルートが一番書きにくいなあと考えてた選択肢でしたっ
(えー

でも、楽しんでもらえるなら書いた甲斐があるなあと思ってます。

それではどうぞなのですよっ！

「んー。パトリムパスが何を護ってるか気になるなあ…」

「こなた…?」

「いやね、あそこまでして何を護ってるか気になったんだよねえ。蟠桃を護ってる様には見えないから少し気になってね」

『悪魔と言っても龍神だしねえ、気になるといえば気になるねー』

「蟠桃に関係なければ無駄足になりそうじゃないかな?」

「それはそうなんだけどね、こういうのって何か燃えるっていうか何かありそうじゃない?」

確かにあのパトリムパス達が何を護っているかは大樹も気になっていた。

知っている知識にはソーマが湧いている事は知っていたが、蟠桃や他に誰かがいるかもしれないという情報はこの世界に来て初めて知った情報だ。

そもそもちゃんとした原作の世界とは根本からして違うこの世界、何が起きてても不思議ではないだろう。

自分という異物が存在していなかったとしても彼女達はもしかした

ら似たような運命を歩んでいた可能性のほうが高い。

エンノオツヌが大樹に言った外れし者というフレーズが頭に残っている。つまり自分はまったくのイレギュラーなのではないだろうか。

自分がイレギュラーならば、この金剛神界もまたイレギュラーな存在が混ざっている可能性も考えられる。

そう考えると、確かにこの先にある何かはこれからの役に立つかもしれないと思う。

『でも、いいの?』

「ん? どつたのフェニックス?」

『さっきの交渉の事よ。手は出さないって言ったんでしょ? 反故にするのもどつかと思つわ』

「そうですね…争いになったら大変な事になってしまいそうですし」

『確かに…そうですね』

フェニックス、みゆき、フォルトウナは流石に少し悩んでいる表情を見せる。

「あちゃー…そっか。うーん……どうしよっか」

『別に良いんじゃないの？ 攻めに行く訳じゃないし欲しいのは情報だもん』

「口車で逃げるって手か…まあ無駄に争うつもりもないし、悪魔とかの情報や蟠桃にも詳しそうだっしその情報を取得しに行くのもいいかもしれないな」

『オレはどつちでもいいぜ？ 戦うなら折角強くなれたんだから試させてくれよ？』

『我也構わんぞ』

「ここはリーダーっぽい大樹君に決めてもらおうっ！」

「僕が…？ というか何時の間にリーダーに」

「司令官っぽいからっ！」

『大樹さんだからっ！』

「……まあいいや。僕としては確かに情報などは欲しい、攻めるつもりは無いけどコンタクトを取るのはいいかもしれないと思ってるよ。問題は僕が交渉下手と言う事かな。何かあればこなたに任せる事になるけどいいかな？」

交渉が相変わらず苦手な大樹。相手との交渉が生死を分ける場合もある為どうにかしたいのだが、いかんせん未だに威圧交渉などになっってしまった。

奥底には相手に対する不信感や不安、恐怖が今でも残っているせいだろう。

仲魔や彼女達とのやり取りのお陰で大分緩和されてきてはいるが、心に根強く残ってしまったものは早々簡単に治す事などで気はしない。

それが出来れば今頃コミュ障などで困っている人種など居ないはずだ。

しかしこのままでは困るのも確か、早急に何とかしたいと考えてはいるが…ここまで来ると最早心の傷だろう、それを癒す方法はあまり無い。

「うん、いいよ　それじゃそろそろ行こうか」

「そうですね、休憩ばかりしていても仕方ありませんし」

「開けて行き成り悪魔とご対面は遠慮したい所だな…」

『なあに、その時はオレが出張ってやるよ』

「とりあえず今出るメンバーは僕、アリス、アメリカ、キンキ、あなた、高良さんで行こう。皆もそれでいいかな？」

こくと頷く皆を見回した後扉を開ける。

開けてすぐ戦闘態勢を取るが、近場にはどうやら悪魔は居なかった。とりあえず戦闘態勢を解除してパトリムパスが去っていった方向を思い出しそちらに向かって歩いて行く。

勿論蟠桃の場所も忘れないようにマーカーのような物を用意しておいたので道を忘れる事はないだろう。

ここから先は出来るだけ連戦は避けたいと考えた為、最近覚えたばかりの魔界魔法、エストマを唱えて結界を張りつつ歩いて行く。

覚醒して使えるようになった魔界魔法だが、正直言って魔法攻撃に使うには弱く戦力にはなりそうもなかった。

魔弾作成を同時に覚えた為にこの魔界魔法はどうやら魔銃と一緒に使う為に獲得したのだろうと理解した。

魔銃の弾丸を作る為の条件は『自分が使える魔法を込めて作る』となっている。他の人間や悪魔には弾丸に魔法を込める事はできないのだ。

自分が魔力を支払い魔法を使う事によって初めて魔力弾が作れるようだ。

パトリムパスに向かって突きつけた火炎弾は自分で使ったアギラオを収納している。

威力的には相乗効果も相まってアギダイン+射撃ダメージとなつていくようだ。ダイソ級の魔法を使えるようになれば更に威力上昇が出来るだろう。

問題は相手の相性を見極めなければ反射されて死ぬといったところだろうか。

耐性があれば威力はかなり落ちる点も考慮しなければならない。

大樹はどうやら、『作る』事に特化しているようだった。文珠といい、マジックカードといい、魔法弾といい。どれもこれも作成系の能力ばかりなので嫌でも気づく。

戦力と言う点では、同レベルの能力特化相手には勝つことは出来ないだろう。勿論能力をフルで使う事が出来れば負けることはないかもしれないが…

『一体何を護ってるのかなあ…こういう場合はお姫様とかだよねえ』

「そうなのですか？」

「忠義の騎士に護られるお姫様っ！ いやあ、お約束だよねえ。でもそうになると私達は悪人になるけど」

「ご主人様は悪い人じゃないのです。ぶんぶんなのですよっ」

「そうですね、佐藤さんは悪い人ではないですよね」

「みゆきは良い人なのです」

よく分からないがみゆきに懐いているアメリカ。

まるで子供がお母さんに甘えているような感じだった。まずったっ！？ と痛恨の一撃を受けたような表情をするこなた。

アメリカは造魔、ある意味では大樹の子供のようなものだろう。彼女に好かれると言う事は大樹に良い印象を与えるのじゃないか？ と先ほどの行動を反省する。

これからの事を考えると、どうにかして引き込みたい子だなあと微妙に黒い事を考え始めるこなた。

みゆきが大樹を好きになる可能性は少ないとは感じているが、これ以上ライバルは増やしたくはないようだ。

暫くはどうせ告白も出来ないのだから、今の内に出来るだけのポイントを稼いでおかなくてはと心の中で腕を振り上げているこなただった。

「しかし…エストマは便利だな。悪魔が近寄ってこないよ」

「おー…道理で悪魔が逃げて行く訳だ。トへ スだねえ、と言う事は強い悪魔には効かないのかな？」

「お約束だね。自分より1レベルでも高い悪魔には効果がないよ。それでもこの辺の悪魔には良く効いているけどね」

『雑魚と戦つてもしょうがねえしな。純粋にオレ達より上の相手と戦えるんだから、ハズレを引かなくていいじゃねえか』

『キンキは本当に戦いが好きよねえ。私は血生臭いのよりゲームの

方が好きだなあ』

「私もー。そっちの方が好きだよ。なんと言ってもオタクだしねえ」

「僕はそうだな…一日のんびり出来ればそれでいいや」

のんびりする、ゲームをする…恐らくこれから先はそんな事も出来ない世界が待っているだろう。

言われなくても全員がそれを理解していた。この世界から脱出できたとして戻った先は数ヶ月先の異界化された故郷。

大事な人達を救う為には、異界を作った人修羅を倒さなくてはならない。

別れてしまったかがみとつかさを見つけて、家族や知り合いが助かったとしてもその次は核が降り注ぐ現実世界をどうにかしなければならぬ。

どれもミスする事は出来ない、そうしてしまえば誰かを助ける所か此方が死んでしまうのだ。

現実逃避したとしても待っているのは悪魔に殺されるか核に焼かれるかという死の選択肢しか残っていない。

全部をまともに受け入れてしまうと、おかしくなっても仕方のない重さだった。

それでも尚彼女達が前向きに戦っていていけるのは、笑っていられるの

は仲間達のお陰だろう、みゆきはこなた達がいるから世界を救いた
いから戦う事ができる。

こなたは親友が、大事な家族がいるから仲魔がいるから…そして好
きな人が今ここにいるから戦う事ができる。

大樹は……実は其処まで深く考えていない。

彼にとっては世界はどうなっても構わないからだ、かがみやつかさ
が心配と言えば心配だが、多分無理だと諦めもつけられるほど冷静
でもある。

大樹には護るべき存在が少ない…仲魔とこなた、みゆきしか存在し
なければ、元の世界がもう無いとなれば嬉々として…は無いが妥協
してでもこの世界に留まり続けただろう。

親は元々助けるつもりもなかったし、更に言えば死んだから気にす
る事も無い。

友人も彼女達が友人になってくれた以前はそもそもいなかった。世
界は大樹に厳しく、そして優しくなかった。

頑張っても報われず、何をしても認めてもらえない、居場所など何
処にも無く一人寂しく部屋に居る事しかできなかった。

食べ物食べられる、生きていられる、暖かい部屋に居られる。確
かに底辺にはいなかっただろう…だが、心を護ってくれた人は何処
にもいなかった。

笑える事に、それは前世でもだった。

何をしても上手くいかず、認めてもらえず誰にも愛してもらえなかった。ただ情性に生き続けて、最後を誰にも看取られる事なく一人でこの世を去った。

これで尚これ以上欲張りな事を言うなどは…言えるだろうか。

だから大樹はどこまでも冷静になれる。護るべき存在はほぼ9割ここに居る。それさえ護ればそれでいい、それ以上は望んでいなかった。

それでも動いているのはこなた達が望んでいるからだ、それ以上でもそれで以下でもない。

「夢が無いなあ大樹君、ここはもう少し男らしい事をだねっ！」

『そうそうっ！ なーんかこうガツんっ！ 男らしい夢とかをっ！』

わくわくと両手を胸の前に置く、所謂ぶりっ子（死語）の姿勢をとりながら大樹を見ている二人。

悪魔が出てこない事を良い事に、大樹で遊ぼうとしているらしい。微笑ましいがやかましいと頭が痛くなる大樹。

仕方ないのでからかってやろうと、某有名なセリフを言う事にした、彼女達が言うギャップ萌えと言う奴を加味するつもりで。

「そつだなあ…じゃあ死ぬまでに何処かの武道館で美女に囲まれながらジヨニー・B・グッドでも歌う事かな」

「え…」

『…っ、嘘』

「まあ…」

掴みはOKで三者三様にありえないと言った表情で大樹を見ていた。その表情があまりにも面白く、つい顔が緩んでしまう。

「とまあ、僕の知り合いの男性の夢なだけどね」

嘘だと告げると一斉にホっとしたような表情をするアリスとこなた。

みゆきはギャグだったのかと微笑みながら大樹を見ている。

「だ、だよねー…あはははは」

『うんうんっ！ 大樹さんがそんな夢っ！ あ、でもハーレムでもいいかも…私が一番なら…』

「アリスは言動が駄々漏れなのです」

『ひゃわっ！!?』

『普段の様子みてれば嘘だって事くらいわかるだろうよ、女が多いし見てくれは全員良いんだからよ、そんなのが夢なら態度でわかん
だろ?』

「そ、そういえば…素で言われたから普通に信じちゃったよ。やる
ね大樹君っ」

『ほれ、馬鹿やってないぜ行くぞ。サマナーも反応が面白れえから
つて遊んでやるな』

「という訳だし、そろそろ行くこうか」

気にした様子も無く歩いて行く大樹にぷくーっと顔を膨らませるア
リスとこなた達が後に続く。

エストマが発動しているとはいえ、自分達より強い悪魔には効果が
無い。その為最低限の警戒は必要となる。

みゆきの技能、神算鬼謀のおかげで余程の事が無い限りは奇襲など
はされないのだが、それでも一つ間違えたら死んでしまうこの世界
怠る事はできない。

先ほども騒いではいたが誰もが最低限の警戒を続けていた。

「うーん、こつちの方かなあ…足跡も有るし」

「よく見つけられたね。僕には何がなんだか分からないよ」

「ふふんっ シーフもこなせる遠距離系の私にとっては造作も無い事なのだよ。褒めてくれてもいいよ」

『はいはいはい。その辺でストップね。それで？ 行き先は分かる？』

「んー、多分こっちだね。蟠桃がある場所とは逆みたいだねえ」

「そうなるよ。この先にパトリムパス達が居るかもしれないと言う事か。皆気をつけてほしい」

『おつよ』

「わかりました」

前衛を張るみゆきとキンキが同時に頷く。

時間的にはまだ大丈夫だが、安全の為にもう一度エストマは発動させる。消費した分のMPはチャクラドロップで回復しておいた。

ゆっくりとだが確実に歩いて行く。

………

………

…

すでに20分ほど歩いただろうか、今の所エストマが効いているのか悪魔と戦うことなく進む事ができていた。

キンキは流石に物足りないようで、辺りをキョロキョロしながら敵が来ないもんかと呟いている。

そんな彼女を見て笑うみゆき。どうやらそれなりに気が合っらしく二人はよく会話する事が多かった。

後ろの方ではアリスとアメリカ、こなたが色々な話で盛り上がっている。その話を聞きながら大樹は辺りを確認しつつ歩いている…それが今の状態だった。

「さーて、鬼が出るか蛇がでるかーって、龍神かなあ」

「何にしても敵なら倒して、そうでなければ情報を貰うか仲魔にするかアイテムを貰うか、かな」

『世の中シビアだもんねえ』

未だにパトリムパスに会う事はない。よく考えるとパトリムパスはレベル的に大樹より弱いのもしかしたらスルーしている可能性も

ある。

そう考えるとエストマも使い難いのかもれないなと考えていると、前方から音が聞こえてきた。

咄嗟に戦闘態勢をとる大樹達。スナイパーの性格上双眼鏡などを普段持ち歩いているこなたが、前方を覗き見ると。

「あ、あれパトリムパスだ。何か違う悪魔と戦ってるね。数はパトリムパス4、ピシャーチャー10。こっちがパトリムパス側かな。相手はヴァーチャーが15体。どうやら天使の方が有利みたいだね」

「ふむ…そんな数の天使がこの奥で戦っている…か。ますます奥に何かがあると考えた方がいいね」

「天使が…と言う事は彼らにとって許せない物があると言う事でしょうか」

「どうするですかご主人様」

「……………恩を売るチャンスかもしれないな。上手いけば情報などもゲットできそうだ。数は多いけど丁度よく相手は此方の持つ攻撃に対して弱点が多い。上手く奇襲すればあっさり瓦解できるかもだね」

数が多いが、相手はパトリムパス達と戦っている上に此方には気づいていない。

上手く事を運ばずぐに倒す事ができるだろうと踏んだ。すぐに大樹とみゆきによって簡単な作戦を立て始める。

大樹は戦いの経験から、みゆきはその深い知識力から安全で確実な奇襲方法を作り上げて行く。

「成程：アメリカが使えるねこれは」

「あ、そういうえばそういう魔法があるのでしたね」

「うん。更に言えば自分も戦ってくれる丁度良い困だ」

「ふえ…？ アメリカがお役に立つですか？」

「あれかあ、確かに凄く使えるわよね。グロいけど」

「あー…あれね。うんアメリカちゃんのような純粋な子が使うような魔法じゃないけど滅茶苦茶使える魔法だよねえ。」

『となるとそっち側に最低限の護衛もいるだろ？ オレが行くか？』

「それもいいけど、そっちはこなたの仲魔に頼もつと思う」

『私は火力だね。あいつらの弱点は電撃だから…にゅふふ。メギドより悲惨なダメージをプレゼントしちゃうよ』

《ヒョーヒョー。その場合はワシもかのう》

「後はパールヴァティも頼むよ。これだけの連続攻撃なら奇襲分も

加われれば確実に落とせる」

「寧ろアリスちゃんの魅惑の雷撃だけで一撃な気もするけどねえ」

『威力はハイブースタあっても据え置きだからねえ。マハ・ジオダインが欲しいよお』

《私が使えますけど、カードにした方がいいのですの？》

「いや、流石にこんな場所で使ったらバレル。万が一この雷撃で落とせなかつたらアリスとバフォーマットに呪殺を頼むよ。これも弱点だし」

「天使は弱点が多いので攻めやすいのです」

『ま、これには脅しの意味も混じってんだろ？ 助けたとしても相手がこつちを新たに敵視したらまた再戦だ。なら相手の気を削ぐ位に圧倒的に殺しまえば此方に攻撃する可能性は減る』

「しゃーいーじんぱいですねっ！」

「成程…そういう事ですか」

シャイジンバイ
殺一警百。中国の諺の一つで、意味は一人を惨たらしく殺す事により他の百人に警告するという意味である。

この場合は少し違うかもしれないが、天使達を圧倒的な力で殺すことにより、パトリムパス達が此方を恐れて攻撃させないようにするという意図が含まれていた。

後は簡単な話で作戦は完全に纏まった。後は気づかれぬように細心の注意を払って進んで行くだけになる。

足音を立てないようにゆっくりと、だが確実にそれぞれが持ち場に移動して行く。

「準備できたのです」

アメリカが悪魔達が戦っている丁度真ん中の辺りに移動する。

上手い具合に遮蔽物を見つけられる事が出来た為、気づかれてはいないようだった。

既に数体のピシャーチャが倒されており、このままでは時間の問題と言った所だろう。

「何かあった時の援護はお任せするのですよ」

『ウム。援護八任セヨ』

「あい。お願いするのですよユルングにオリアス」

『任せとけて、きゃわいい女の子に頼まれたらやっつてやらねえとなあ　で、これが終わったら俺と遊ばない?』

「アメリカはご主人様の物なので、その辺りはご主人様に聞いてください」

『しくしく、ガード固いやね』

『：トイウカダ：見夕目幼女ニ貴様八何ヲ望ンデイルノダ：？　クレグレモさまなノ半径5M以内ニハチカツクナヨ?』

『ひどくねっ!?!　　というか最近ユルングって娘に甘いおじいちゃん化してねえ?』

『ソウカ。まは・じおんがガイイカ』

『いえ、滅相も御座いません』

「賑やかなのです…さあて…踊るですよ。死霊達」

アメリカが呪文を唱え始めた。

「準備はOKつとね」

『ああ、いつでもいけるぜ。後はアメリカが動くだけだな』

「そうですね。頑張りましょう」

『ヒョーヒョー。腕が鳴るわい』

『いい？ 同時に行くんだからね？』

『ええ、大丈夫ですわあ 同時にイクんですわねえ？』

『卑猥な言葉禁止っ！』

アメリカと別行動の大樹達は既にいつでもヴァーチャー達の後ろから奇襲する事が出来る場所に居た。

後は作戦開始と共に動くだけだ。

作戦はこうだ。アメリカの召喚魔法によって複数の屍鬼や幽鬼を召喚し両方を牽制する。後はアメリカの指示通り動く悪霊達をヴァーチャーに向かわせピシャーチャー達から引き離す。

勿論そのままヴァーチャーだけを狙えばパトリムパスの仲魔と間違えられる可能性が高い為、牽制の為に弱い屍鬼などをピシャーチャー達に送り込む。

後は引き離れたヴァーチャー達を後列から魔法などで一網打尽にすると云う簡単な作戦だ。

「さて…はじめようか。ミッションスタートという奴かな」

この後の交渉を自分達の方角に持って行くための蹂躪が…始まる。

Continue 62 〈護る者奪つ者傍観する者〉（後書き）

そのまま行ったら普通に対戦フラグだなあ…どうしようかなあ、どうしようか…と15時くらいまで悩んでました（えー

ならば他の悪魔に襲われている所を助ければいいんだっ！ となにやら閃いてこんな感じになりました！。

そして佐藤君。もしかしてこなた達がいなければここに永住してた可能性が…
ある意味ゲームエンドですよねえ…あっはっはっは…

どうでもいいこと

私が好きだった小説がアニメ化しました

電波女と青春男というやつですよ。前々からアニメ化すると言っていましたから

喜びもひとしおなのです。

でも…北海道の片田舎では…見る事が出来ません。泣いていいでしょうか？

えぐえぐえぐ…いいもんDVD買うもん…えっぐえっぐ

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

これはダッキが勝利でしょうか。

後数話でコミュパート予定なのです。さあ！あなたの逆転はあるのでしょうか！

23票差は正直難しすぎると思います（えー

こなた：72票

みゆき：18票

ダッキ：95票

アリス：23票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue63 く龍の見る夢、龍が見た絶望く（前書き）

あーうー……風邪引いた模様です…頭痛いー、頭痛いよー…

でも、他にやる事が無くてのんびりと書いてました（汗

ぼけーっとながら書いてたので、誤字がいつも多そうです（涙

という訳で短め+ぶつ切りです…ごめんなさいですよー…

感想や、アンケートは次回に回させてもらおうのです。

でははははは〜（ぱたり

寝る前に見たら言葉足らずに誤字だらけ…少し訂正しました…では死ぬのです（マテ

Continue 63 龍の見る夢、龍が見た絶望

Continue 63 龍の見る夢、龍が見た絶望

それは突然訪れた、新しい敵達だった。

行き成り現れた悪魔達の来襲にパトリムパス達もヴァーチャー達も混乱していた。

突如現れた屍鬼と幽鬼達、更には敵も味方も無く襲い掛かってくる狂った乱入者達のせいで戦場は混乱していた。

「くっ！ 汚らわしい悪魔共よ、其処を退きなさいっ！」

「なんだこいつらは…邪魔をするなあっ！」

突然現れた勢力のせいで折角押していた天使達が苛立ちを顕にしながら屍鬼達を攻撃する。

天使達はここで撤退する訳には行かなかった。この先にある龍神達の護る存在を破壊すると言う使命があったからだ。

あれは混沌を撒き散らす、それは天使達や彼等を使役する者にとつては邪魔になるものでしかなかった。

そして龍神達にとっては命を懸けても守り抜かなければならないものだった。

『ああ…ああああ…うゝ ああああああつ！！』

錯乱した屍鬼達がヴァーチャーに襲い掛かる。

一体一体はそれほど強くは無いがいかんせん数が多すぎた。更に言えば其々がバラバラに動くので纏めて倒そうにも狙いのつけようも無い。

単調な攻撃しかしてこないが、そのタフさは異常でかなりの力を使わないと倒すのも一苦労だった。

『ぐるしい…くるしいんだあああ！？ 助けてくれよおおおゝ
ゝ！！？ いてえっ！ いてえええよおおお！？？！』

『UOOOONN！！ OOOOOOONNっ！！』

パトリムパス達に襲い掛かっているのは幽鬼モウリヨウ達だった、勿論この程度のレベルは雑魚でしかない。

発狂したまま飛び掛ってくる事しかできない悪魔など彼等には相手にもならない。

『くそっ！ 数が多いっ！ 貴様等邪魔をするなっ！！ ピシャー
チャ相手をしろっ！』

『おおおおおっ！』

『ぐるろろろろろっ！？』

残っていたピシャーチャ達がモウリヨウに襲い掛かる。

悪霊とはいえピシャーチャのレベルは29。そのレベルはパトリム
パスさえ超えている、それらが何故従っているかと言えば、理由は
単純で悪霊は操りやすいからだ。

レベルなどが如何に高くても、ピシャーチャ達は特殊な者を除き大
抵が発狂し操るには容易いのだ。

パトリムパス達としては造作も無い事だった。

『おおおっ！？』

『ぎゅろろろろろろっ！！』

ぶつかり合い、殴り合い、噛み付き合い、殺しあう。

あっという間に殺されていくモウリヨウ達。しかしその数は経るこ
と無く少しずつだが増えて続けている。

ヴァーチャー達の真後ろから神の怒りを思わせるような雷撃の雨が降り注いでいた。

『な…あ？ ああああっ！？ ああああああああああああああああああああ
あああああああああああああっ！？』

『うぎゃあああああっ！？』

絶叫が響く。まるで地獄のような光景が其処にはあった。

逃げる事もできずにヴァーチャー達が纏めて雷撃に撃たれていく。
終わり無く放たれる目を潰してしまうほどの稲光がしきりに光を放ち続けている。

1体1体がまるで象に踏まれた蟻の様に無造作に、容赦なく殺されていく。

逃げようとしても近くには屍鬼達がいて逃げ道を塞ぎ…共に電撃に焼かれて行った。それは正に一方的な蹂躪だった。

マグネタイトに変換されていくヴァーチャー達。暫くすると其処には何も無かったかのように誰も居ない空間があるだけだった。

『な…んなのだ…』

『ぐおおおおおんっっ？』

『！？』

続けざまに彼らにとって驚くべき事が起きる。

戦っていたモウリョウ達は何もしていないのに消えて行くのだ。殺されて襲い掛かっていたピシャーチャもぐずぐずと肉が腐り溶けて消えて行く。

残ったのは閑散とした空間とパトリムパス達。ピシャーチャ達は訳の分からない言葉を叫びながらその場に留まっていた。

『……………これは…一体……………！？ な、何者だっ！』

奥の方から何者かの気配を感じ武器を構えるパトリムパス。しかし先ほどの光景を見てしまった為にその体勢にあまり力は感じられない。

もし戦いになれば、間違いなく殺されるだろう。

電撃は効かないパトリムパス達だが、それ以上の強さを感じていた。

そして彼等は更に愕然とする。其処には、悪魔ではなく人間が居たのだ。それも先程戦った人間達だ。

「殺気を抑えて欲しい。僕達は戦いに来た訳じゃない」

『貴様等…何故、ここに…』

「ああ……………ごめん、こなた頼むよ」

「あいあいつとね。ちょーっと武器を下ろしてくれないかな？ ほんら、こっちも武器は下ろしたからさ。戦いに来た訳じゃないよ」

大樹達にとっては作戦の序盤は成功と言った所だろう。

アメリカの呼び出した悪魔が強すぎてピシャーチャを殺してしまつたのは流石にまずいと思つたのだが、更にはネクロマの魔法でアンデッドに変えて壁にすると言う離れ業までアメリカはやつてのけた。大樹自身、敵対した相手には容赦などしないがアメリカもその辺を受け継いでいるようで、作り上げた悪魔なども作戦の為には容赦なく切り捨てる非常さを持っているようだ。

流石に他の仲魔達にはそこまでしないが、魔法で呼び出した悪霊や屍鬼には其処までの情は無いようだ。勿論大樹もそんな情は持ち合わせてない。

奇襲からの波状攻撃でヴァーチャー達を一掃し、丁度よくパトリムパスに精神的に圧迫をかける事にも成功したようだ。成果は上々と言つた所だろう。

ここからはこなたの交渉力に任せるしかない。出来る限りの情報を獲得しておきたいと大樹は悪魔を見つめながら考えていた。

「ん、ありがとね。ごめんねえ、ちょっと気になって追わせせてもらったんだけど、追いついたら天使や悪霊とかとドンパチャってたでしょ？ だからつい援護しちゃったけど迷惑だったかな？」

『あの雷撃は貴様等が……あの悪霊達も貴様等の手の者か？』

「ん？ 悪霊？ 流石にそんな仲魔はいないけど？ えーと、巻き添えで違う悪魔も倒しちゃったけど、もしかしてまずかった？」

『ああ……いや奴等も急に現れたからな、お前達の仲魔かと思ったのだが……違うようだな』

純粹なのか恐怖で判断力が鈍っているのか、こなたの嘘の情報にあっさりと騙されるパトリムパス達。

悪魔との交渉は綺麗事だけでは上手くは行かない、清濁併せ呑まなくてはやっていけないのだ。

悪霊達を召喚したのが仲魔で、ヴァーチャーを彼等より引き離すのが目的だったのだが、ピシャーチャを殺してしまった手前自分達の魔法だと言う事は黙っている事にしたようだ。

態々あの悪魔達は自分達の仕業ですと馬鹿丁寧に話す内容でもないだろう。

後はこのままこなた優勢で交渉を続けて行く。大樹にとっては勉強になる会話内容だった。

突く所は突き、相手が望まない会話は出来る限り自然にスルーしていく。それでいて自分側が有利になるように会話し、更には相手に好印象を与えて行くその手際は正にデビルサマナーと言った所だろう。

そういう点では大樹はまだまだデビルサマナーとしては未熟な方だ。交渉も満足に出来ないデビルサマナーではこの先生き残るのは難しいのだから。

自分の心次第…分かつてはいるがまだまだ大樹には難しいかもしれない。

こなたとフェニックス、アリス達が交渉を続けている間に、アメリカ達が後方からばれないように近づいていた。

そのまま相手に気づかれる事なく大樹の傍によって笑みを漏らす。純粹無垢なその表情は、先程まで悪霊を慈悲無く操り手駒にしていた少女とは思えないあどけなさだった。

『……難しい表情をしておるのう？』

「そう…ですか。そうかもしれませんね」

相手を騙して交渉している事に流石に罰の悪さを感じているみゆき。

決めた作戦とは言え、これは一方的な出来レースの様なものだ。相手の生き死にさえ作戦に加えた。

相手が悪魔だとしても流石にやりすぎたのではないのかとみゆきは自問していた。

「遅いのですけど、もしかしたら違った作戦もあったのかもしいと…考えてしまいました」

「時間さえあれば出来たかもしれないね。そのまま戦えば今のような居た堪れない気分でいられたかもしれない。でもその先に結果は多分パトリムパス達の半数以上の死亡、もしくは三つ巴の可能性だ」

「…そうですね。その可能性の方が高かったでしょう…」

『ふむ…嬢ちゃんよ、少し教えておこつ』

「グクマツツ、さん？」

辛そうな表情をしているみゆきに人外の悪魔とは思えない表情を見せながらグクマツツが続ける。

『世の中は綺麗事ばかりではない、どんな事でも勝った者が勝者なんじゃよ。おぬし達の今回の判断は正解ではないが間違つてはおらんよ。じゃがそれでも今回の事で思う事があつたのならは覚えておく事じゃ。そして次に活かすん事じゃな。そうすれば次は次はどうにか出来るかもしれんじやろう？ こういう事に関しては答えなんぞ無い。嬢ちゃん自身が納得のいく答えを見つけるとええ』

諭す様に言うグクマツツ、長く生きていだけありその言葉には説得力があった。

今悩んでも過ぎた事は仕方が無い。ならば次はそうならないように考えればいい、強くなれば良いのだ。その先の答えは無限に存在し、好きな答えを選べと彼は言っていた。

それをしっかりと脳に刻み付けるみゆき。そしてゆっくりと大樹とグクマツツの方を向き頭を下げた。

その表情に既に憂いは無い。

「すみませんでした。もう大丈夫です」

『ヒョーヒョーヒョー』

空気が抜けるような笑い声で頷くグクマツツ。悪魔なはずなのに人の機微に聡いのは元妖怪だからなのだろうかと大樹は考えるが、すぐに気にしないようにした。

何故ならアメリカが大樹とみゆきの服をくいくいと掴みながら此方を見ていたからだ。

「ご主人様、みゆき、今はどうなってますか？」

「うん、今の所は良い感じかな。流石こなただよ、僕にはああいう

会話はまだ無理だと思う」

「このままだと上手く行きそうですね」

『まあ、口は上手いから俺達のサマナーは。あ、いや、勿論きやわいいのって所もあるぜ』

『…ヤレヤレ…サテ。後ハ後詰ダケカ？』

『だな、良い感じに持って行ってる。上手く行けばこの先にいけるかも知れねえな』

「この先か。あの悪魔達が何を護っているのかわからないけど、守護者に対抗できるアイテムでもあれば楽で良いんだけどね」

『そりゃあ都合のいいこった』

「さ、流石にはそれはないかと…」

さすがに其処まで都合の良い事はないだろうと分かりきっているのだが、其処はそう思いたい年頃というか、ここまでやったのだから見返りが欲しいと思うのも基本的な考えだろう。

まあ、その辺りはこれからの交渉などによるのかもしれないが。

「たっだいまー いやあ、何とかなつたよー」

「お疲れ様です泉さん」

「上手く行ったようだね。で、どんな情報などを獲得できたのかな？」

『えつとねっ、これからパトリムパスの集落っぽい所に行く事になったの』

『なんだか知らないけど、感謝って事らしいけどね。微妙に居た堪れないわ、何か騙してるっぽくて』

「というか間違はなく騙してるけどね。とりあえず上手く行ってよかったよ、ありがとうこなた」

「へへっ、お安い御用なのだよ。もっと褒めてくれても良いよん」

『はいはい、行くわよ』

「うう、フェニックス冷たい。炎属性なのに冷たい」

『ホットがお好き？』

「ノンノンノン…謹んで遠慮」

パトリムパスの方を見てみると、先程までの恐怖は既に無くなった様で、寧ろ先程よりはフレンドリーな感じになっていた。

大樹は自分じゃまず無理だなあと、後輩な筈なのにすでに交渉系統にかけては大いに負けているこなたに尊敬の念を抱いておく。

いつかは自分もそこまで出来るのかと、パトリムパスと和やかに話しているこなたを見て考えていた。

……

……

…

『我等は我等の神を信じ、奉り、そして護り続けているのだ』

「ふむふむ。ずっとこの金剛神界で？ 結構そういう争いが多いんだねこって」

『いや、そういう訳ではない。我々の神は元々この世界には居なかったのだ。だが突然あの方は現れたのだ』

「突如飛来したスーパー神様って事？」

『何だそれは…』

「とりあえず、すつごい神様って事だよ。でも龍神だよねパトリムパスって、神様が神様を祭ってるって何か変な感じするね」

『神と言うものは色々曖昧だ、更に言えば格付けと言う物もある。我々は人間達の使う言葉では下級神という存在だな』

『成程ねえ。と言う事は祀ってるのは上級神って事かあ。でも上級のクラスの神ならパトリムパスより強いんじゃないの』

『それはこれから会えば分かるだろう。良いか？ くれぐれも…変な真似はするなよ？』

「そこでどうして僕を名指しで見るかな」

『信用ねえんじゃねえの？ けっけっけ』

「僕はそういえばマハンマオン使えるんだが」

『我が主よ、いつでも』

『犬とお呼びくださいませ。どうか命ばかりは』

「何やってるんだか」

ロボットの様にきちっと90度直角に頭を下げるオリアス。微妙にムカつくと拳をふるふると震わせる大樹。

きやらきやらとこなたとアリスが笑い、アメリアが何処から持ってきた用途不明の棒でオリアスを殴ったりしていた。

そんな彼女達をキンキがやれやれと呆れながらその様子を見ていた。先程まで殺し合い、騙しあっていたとは思えないほど賑やかな様子に歪な現実を感じるのは仕方のない事だろう。

そんな殺伐なのか賑やかなのか分からない雰囲気のまま彼等は先に進んで行った。

そして…大樹達は歪な存在に出会う。

Continue63 〈龍の見る夢、龍が見た絶望〉（後書き）

こちらは回復次第に今回分のアンケート結果などを載せるのですよ
！。

では、ベッドにだいびーんぐなのです（きゅっ

Continue64 くどこまでも弄ぶ現実く（前書き）

にやはははは。黙って寝てられませんでした。

お薬飲んで寝ていたら19時くらいに目が覚めて大体良くなったので書き始めてしまいました（えー

このルートは強くGS系が関係しています。龍神と言う事でもしかなかったら予想ついた方もいるかもですね。

ではでは短いですがどうぞです。

Continue 64 くどこまでも弄ぶ現実

- 現実とは小説より奇なり

今までの事で十分それを理解していたはずの大樹だが、これを見ますますこの世界が色々ごちゃ混ぜの世界だと認識せざるを得なかった。

『この御方が我々の信奉する神であられる』

「……………ここまでくると…笑いしか出ないな」

パトリムパスに連れて来られた彼等の居住区のような場所、其処の一番中心に案内された大樹達はそこで驚くべきものを見る事になる。

其処には特殊な服 彼らにしては法衣の様な物を着込んだパトリムパス達が剣を持って立っていて、その後ろにカーテンの様なもので奥を隠していた。

神官？ の様なパトリムパスに耳打ちすると彼等はそれを取り外し、奥を見せてくれる事になったのだ。

そこには…一本の剣が立て掛けられていた。

特殊な形状の両刃の片手剣と言えば良いだろうか、幅広の古代の剣の様な感じで押し切るには都合が良さそうだが先端が特殊な形状をしているため突くのは難しいだろう。

そんな無骨なそれでいて頑丈そうな剣が其処にあった、パトリムパスが護っているという神様としてはありえない形状で皆しきりに首をかしているが、大樹だけは頭が痛くなる思いだった。

「えーと…この剣が神様？ まあ、こりゃあ確かに自分じゃ動けないね。剣だし」

「意思がある剣…というものでしょうか」

「へー…でも妙な力は感じられないけど？」

「普段はお休みにいられている、元々は今以上の力を有されていたのだが、徐々にその力を失いつつあるのだ」

「でも、剣が本体って訳じゃないんでしょ？ 寄り代か何かかなのかな？」

「聡いな。正にその通りだ、この剣を寄り代にある御方が魂を封じ存在しておられるのだ」

魂と言った辺りで、大樹はこの剣の中身が誰なのか完全に理解した。龍神が護り奉っていて、更にはこの形状の剣、見た事がある所の話ではない。

名称こそは知らないが、この剣は某龍神の姫が装備していた龍の武器の一つだろう。そしてそれの中に魂を封じているとなれば自ずと

結果が出る。

本来はありえないと思いたかったが、既にこれが事実であると言っ
証拠が存在していた。

（雪之丞がこの世界に居たし横島がペルソナとして存在している以
上、もしかしたら何処かに存在しているとは思っていたけどまさか
こんな所に…武神・小竜姫）

武神・小竜姫

GS美神に登場する、神々の一柱つちのであり、妙神山という霊峰で修行
所の管理人をしている見た目は歳若い女性の神だ。

その力は凄まじく、人間程度では相手にならないほどの戦闘力を秘
めている。

実際のGS美神ではその力は確かに凄まじかったが、色々ギャグ要
員にされたりと何気に不遇の立ち位置の神だったりする。

更には真面目一辺倒の性格ゆえ、搦め手に弱く其処を攻められ負け
る事が多く、正直漫画の中では弱いイメージがある。

横島の霊力を目覚めさせた張本人…いや張本神であり、横島を自分
の愛弟子としている部分も伺えた。

（何故魂だけの状態で自分の武器に宿っているか知らないけど…と

にかく面倒くさそうな感じだな。早めに貰える情報を貰って出た方が良いかもしれない」

『どうしたの大樹さん？』

「ん、いや。まさか剣だとは思わなくてね、それに今は寝ているよ。うだしこれで失礼させてもらおうか」

「そだね。何となく護らなくちゃいけない理由も分かったし」

いえ、少しお待ち頂けますか？

『！？ おお…我等が神よ…お目覚めでしたか』

ピシリと何か亀裂が走ったような音が大樹の中で聞こえた。

気のせいと思いたかったが、聞こえてきた声が女性の声である以上、やはり彼女なのだろうなと溜息をつきたくなった。

こなたとみゆき、他の仲魔達はおおっ！？ と驚きの表情で剣を見ていた。

ようこそいらっしやいました。このような姿でごめんなさい。私は龍神小竜姫と言います。

「小竜姫…ですか聞いたことがありますね。今まで見てきた悪魔は大抵が有名な悪魔や天使、龍や妖怪だったりするのですが」

「名前からして良い所のお姫様っぽいと見たっ！」

『綺麗な声だもんねえ。でもそうになると何で剣なのかしらね？』

私は龍神の中でも本来下から数えた方が良いくらいの無名ですから…後この剣は私が生前使っていたものです。

「生前と言う事は、貴方は既に故人…いやこの場合は神と書いて故神か…なのですか？」

正確に言うと違うかもしれませんが。でも私の肉体は既に無く、魂だけが剣に宿っている状態ですから。

横島と言い雪之丞と言い、そしてこの小竜姫と言い。この世界はGS美神の世界が混じっているのだろうかと考えてしまう。

だがこの世界にはGS…つまりゴーストスイーパーと言う存在は無く、そう言ったオカルト系の物はデビルバスターズやクスノハ、民間の者が裏で動いているだけだ。

表に存在するGSが無いと言うのはとてもおかしい。故人ならば過去と言う点もあるが、そのような歴史も無ければ証拠も何も無い。

まるで異物の様な物だ、本来ありえない筈なのにそれらが存在するのは知っている身としてはとても恐ろしく感じた。もしかしたらまだ見知らぬ者がいるのかもしれないと。

（横島にまた会えたら聞く事が増えたな…どうする、小竜姫が既に

死んでいて剣に宿っている。何故金剛神界に存在し留まり続けているのか理由が分からない)

しかし珍しい…いえ初めてではないでしょうか。ここに人間の方が来たのは。

「んー、そうなんだ。今回はちょっとした縁があっただけ」

如何に龍神の姫とは言え悪魔として存在する以上、下手な敬語など使わない。

例え大樹が彼女の存在を知っていたとしても、こなた達はそれを知らないのだ。ならば余程の存在でもない限りは砕けて話すのがこなたの信条とも言える。

こなたにとって人間と悪魔は違う存在として認識しているのだ。下手すれば敵になってしまう相手には強気が出る。とは言え敵愾心などはひたすら隠してはいるが。

「私達はこの先にあるという蟠桃を取りにきたのですが、その時にこの方々達と出会いました」

蟠桃ですか。それを手に入れてどうするつもりなのです。

「どうもごつも、僕達は頼まれ物を取りに来ただけですよ、ああ、誰かまでは聞かないで下さい。流石に依頼人の名前をすぐにはらすほど落ちていないもので」

……あれは不老不死の実。そう易々と人間がそう容易く手に入れられる物ではありませんよ。

「守護者が居る位ですしね。僕達がここに来たのは蟠桃を守護している魔獣についての情報を手に入れる事と、効果のあるアイテムがあれば譲ってもらおうと思ひましてね」

『めっちゃストレートに言ったなあ…おいおい』

「彼女には正直に話した方がいいと思つてね。隠し事をして見限られて情報を手に入れられないのは本末転倒だから」

『…小竜姫様』

成程……わかりました。その正直な態度とても好ましいです、パトリムパス達よ出来る限りお手伝いして差し上げなさい。

『ははっ！！』

「では。失礼します」

ややこしい事になる前に切り上げようとする大樹、しかし一度出会った縁はまるで呪いの様に彼を放さなかった。

戻ろうとした時に小竜姫が何かに気づいたようで、此方に話しかけてくる。

！？ ま、待ってください！

「ほえ？ どうしたのかな？」

貴方達からとても見知った波動を感じました…それもあの人の…すみません。少し聞いてもいいでしょうか？

（まずい…な。横島の事を聞かれたら面倒だ…何とかして誤魔化すしかないか）

貴方達から見知った波動…つまりは横島の文珠の波動に気づいたのだろう。

作ったのは大樹だが、消費したMP…いや霊力は横島のものである。あの剣の何処にそういう気配を感じる機能があるのかさっぱりだが、恐らく魂が感じているのだろう。

貴方達は…その。横島忠夫と言う人間の方を知っていませんか？

そのセリフが聞こえたと同時にアリスとキンキに目配せをする大樹。様子に気づいたアリスとキンキは小さく頷くと口を開かず先に出て行った。彼女達はペルソナとして横島を見ている。

バレて困る事は無い筈のだが、色々ややこしい事になりそうな気がした大樹はこの事を出来るだけ黙っておく事にした。

「うーん…知らないなあ。男性だよね？」

どうにかして切り上げて戻りたいと考える大樹だが、そんな簡単に止まるはずも無く…

「私も存じ上げませんね。名前からして日本人の男性の様ですが」

「僕も知らないな。知り合いですか？」

はい…大切な人です。私が卑しくもこの姿で今尚生き続けているのは、その方に何時か出会う日を待っているからなのです。

その言葉は龍神・小竜姫と言うよりは何処にでもいる少女の様な感じだった。

横島の事を好いているのか、愛弟子の様に思っているのかは分からないが、とても大事な人間なのだなと言う事は3人とも理解した。

可哀想だとは思いますが、だからと言って今はペルソナになっていまずとは口が裂けても言えなかつた。もしバレてしまったら面倒な事になるのは間違いないからだ。

そうなってしまうえば最悪大樹がこの場に釘付けにされてしまう可能性がある。横島は雪之丞や魂とはいえ存在している小竜姫とは違い完全にペルソナという存在だ。

本体なのか自分の心の仮面の一人なのか分からないが、説明が難し

以上に現在は召喚する事も出来ない為更にややこしい事になる。

まさかこんな事になるとは…とここに来た事を後悔している大樹だった。しかしそんな事を考えていても小竜姫の会話は止まらない。

「でもここに居たら流石に会えないんじゃないの？」

「ここはどうやら特殊な異界ですし…其処に迷い込む人間は私たちの様な例を除いてあまり居ないかと」

そうですね…ですが今は力を蓄えなければなりません。今のままでは動く事も出来ませんから。

「と言う事はいつか元の体に戻れる可能性があると言う事ですか？」

『その通りだ。今でこそ魂を剣に宿されている小竜姫様だが、この地にて僅かずつではあるがマグネタイトを吸収し続ける事によってその御体を顕現させる事が出来る』

「それまで小竜姫を守るのが君達って事かぁ。でもそうなら小竜姫って居なくなるんじゃない？」

『そこは問題ない。我々はこの方の自由を願っているのだ。龍神であり武神でもある小竜姫様が元の姿に戻る事こそが我等の悲願でもある』

龍神でもあり武神でもある小竜姫の復活。

悪魔と言う存在だが同じ龍神でもあるパトリムパス達にとってはそれは自分達の上位存在が復活すると言う誉れでもあるのだ。

例え復活しここから去ったとしてもそれは本望でもあると考えている。

この辺りは人間と悪魔の思考の違いが挙げられるだろう。

そして…その横島さんの波動が貴方達3人からとても強く感じられたんです、だからもしやと思ったのですが。

「うーん。何かあったかなあ…私たちが3人が共通するって…試練？は違うよねえ…となるとあの変態とか？」

変態っ！？ 変態と言いましたかっ！？

「えっ！？ そこに食いつくのっ！？ 小竜姫の好きな人って変態っ！？」

あ、いえ変態と言うか…途轍もなく女性が好きと言いますか、殺しても死なないと言いますか…あ、でも素敵なんですよ。

「…その何処に素敵と言う要素があるのか僕には分からない」

「あ、あはは…」

実際に出会った上に漫画などで色々見てきたので確かにそのままだなと思う大樹。

更に言えば男性には微妙に容赦が無い所もあつたりする。

小竜姫自身興が乗り始めたのか、更に語られる横島像。聞いている内に半分以上ノロケっぽくなつて来た為、微妙に白い目になる大樹とこなた。

みゆきはただじつと聞いているが内心何を思っているかは、そのここに顔からは想像もつかない。

が、ここで小竜姫は思わぬ爆弾を落としてきた。

そして横島さんは神の奇跡とも言える最高の霊能・文珠を作り上げたのです。

(まずっ…)

「文…文…文…？ 文珠って、もしかして大樹君がくれたあれじゃ…？」

「！？ そ、それは…それはどう言う事なのですかっ！？ 貴方達はもしかして文珠を持っているのですかっ！？」

「この事でしょうか…？」

文珠を取り出すみゆき。

口が無いのでこの表現で良いのかわからないが息を呑む小竜姫が居

た。

恐らく体があれば泣いていたのかも知れない、それほど彼女の声は震えていた。

それは…間違いありません…文珠です。あの人の…横島さんの霊能の集大成です。こ、これをこれを何処で手に入れたのですか？！？

『お静まり下さい小竜姫様っ！』

存在を忘れかけていたパトリムパスの神官達が小竜姫に静まるように話しかける。

しかし彼女にとっては漸く見つけた横島の情報、止まる訳には行かなかった。彼に会う為だけにこのような姿にまで身を糺したのだ。

だがそれも大樹の言葉で止まってしまふ。

「…それは僕の能力です。その人の能力で作られた物じゃないですね」

そ…そんな…横島さん以外に文珠の能力者が！？

「あ、そか。これは大樹君がくれたアイテムだもんね。でもそうなるとその人と大樹君って関連性がある…いや、ないわー。大樹君は普通だし」

（関連性があるというかペルソナとしてある位だけどね…それにしてもどうしようか。いっその事横島の情報がある程度流すか、徹底にはぐらかすかな…上手く行けば彼女の力を借りる事もできるけど…下手すればパトリムパス達に捕まる可能性もある。勝てない事はないけど面倒な事になるのは確か…）

其処まで考えてふと大樹は気づいた。

（…何故僕はここまで彼女に横島の情報を渡す事を拒否しようとしてるんだろ…）

彼女が小竜姫であることがわかった瞬間に情報を隠蔽しようと考えてしまった。

嫌悪感などは感じないので、自分自身彼女を嫌っている訳でもない。ただ彼女に伝えたくないところまで考えてしまっている。

それが自分自身が思った事なのか、ペルソナである横島の意味が作用したのかはまだ分からない。

大樹自身はある意味複雑な感情を抱いていた。それは…初期のこなた達に感じた感情でもある。

何故ゲームや漫画のキャラクターが普通に存在しているのかと
言う複雑な感情だ。

もし大樹がGS美神を知らず、小竜姫が横島を探している事を知ったら情報を渡して様々な利点を受けようとしただろう。

簡単に言えば：現実をあまり認めたくないと言う感情のせいかもしれない。こなた達についてはもう自分で現実の存在だと認め理解している。

だが雪之丞や小竜姫などに大してはまだそこまで自分自身で理解出来ていないのだ。それが出来るだけ隠蔽しようと、巻き込まれないようにと考える。

この後も小竜姫の追及をなんとか誤魔化し、文珠は大樹が作った物。横島と言う存在は知らないと理解させる事に成功した。

パトリムパス達も小竜姫が落ち着いた事に安堵の表情を見せる。

少しばかり時間は取られてしまったが、これで漸く守護者についての情報が得られると安堵していた。

す、すみません。もしかしたらと考えてしまいました。でも、まさか本当に文珠を作り出せるとは：文珠自身稀有な能力ですが横島さんだけの能力ではありませんでしたからね。

「悪魔：つてか神様でも使える人が居るんですか？」

いえ。私を知る中では文珠を作り出す事のできる存在は横島さん

しか知りませんね。大宰府の菅原道真様が文珠を保有していると言
うのは知っていますが彼は持っているだけで作れる訳ではないので。

「能力もチートだけに取得条件は厳しいって所だね。流石大樹君だ
よ、うんうん」

「確かに…凄まじい能力ですね。使い方によってはどんな事でも出
来そうなのが…」

「作れる量に限界があるからこそぞと言つ時にしか使えないと言っ
点があるけどね。万能だから使いやすいよ」

この世界にも…いえ…まさか…でも、もしかしたら……

『小竜姫様…?』

……………パトリムパス達よ。

厳かな声で言う小竜姫。

静かに傅き頷くパトリムパス達、そしてそのまま小竜姫の入れ物で
ある剣を取り出す。

「…えと、どういう事?」

そのこの貴方。

「あ、はい。私でしょうか?」

ええ。貴方には剣の才能があるように見えます。其処でなのですが、私を連れて行ってくれませんか？

連続する爆弾発言に再び驚く大樹達。

あまりに突然な彼女の言葉に流石に大樹が止めに入る。

「なっ！？ それはいいんですか？ 貴方は復活する為にここに居るんでしょう？」

問題ありません。小さいとは言え漸く見つけた横島さんの手がかり…ここで無くしてしまうには惜しい。勿論タダでは言いません。私が宿っている剣は龍神の剣。そこいらの名刀にも負けない攻撃力と耐久性を持っています。後は私が彼女に戦い方を伝授しましょう。見た所才能はあるようですがそれを使いこなせては居ないようですから。

「それは有り難いのですが…パトリムパスさん達は良いのですか？ 皆さんが護っていた存在なのでしょう？」

『小竜姫様が自ら決めた事ならば、我々は従うのみだ。どうかこの御方の頼みを聞いてはくれないだろうか？』

「ど、どうしましょ…」

「うーん。龍の武器で更に言つと意思のある剣でしょ？ 恋多き剣って変わってるけど助かると言えば助かるよね。頼まれてるのはみ

ゆきさんだしみゆきさんが決めた方がいいかな？ 私はちなみにオツケー」

「…頼まれているのは高良さんだからね。任せるよ」

こうなれば梃子でも動かないだろうと諦めている大樹。横島と再び会った時に彼女に対してどうすればいいのか相談しようとして心に決めた。

恐らくみゆきの答えは決まっているから。

「分かりました。私達も色々ありましてすぐに横島さんという方を探せるか分かりませんが、それでも宜しいのでしたら」

いえ、それでも十分です。宜しくお願いしますね。

こうして小竜姫を仲魔に加え、これからの相談をする事になる。ただ本来の依頼は終了していない、寧ろこれからが本番だった。

龍神剣・小竜姫を手に入れた！！

攻撃力：140 相性：剣/万能 攻撃時小竜姫の意思によって相性に変化する。

1〜3回攻撃。絶対に壊れない。

Continue 64 〈どこまでも弄ぶ現実〉（後書き）

登場、小竜姫様の巻でした。

このルートに進まなければ出てこなかったキャラですねー。

とは言えサブキャラ+攻略キャラじゃないので、多分その内影が薄くなるですよー

今現在は合体剣扱いとしてくださいなのです。

小竜姫様のお陰でパトリムパスの信頼度が大幅にアップ、アイテムなどを貰って次回かその次には守護者との戦いですねー。誰か死ぬかな（マテ

どうでもいいこと

おかゆが美味しかったです。こーう、ほんのり塩味が美味しいですよ。ね。

でも雑炊とかおじやは苦手だったりします。シンプルなのが一番好きなのです。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

これはダツキが勝利でしょうか。

後数話でコミュパート予定なのです。さあ！こなたの逆転はあるの

でしょうかっ！

23票差は正直難しすぎると思います(えー

こなた：78票

みゆき：18票

ダッキ：100票

アリス：25票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue65 〈絶望しかない未来への第一歩〉（前書き）

んー、微妙に少しずつ話が進んでますね。

小説だとこんな感じで進むのが一番なのかもしれません。

行き成り戦闘＋戦闘描写＋終了というのも味気ないので、こういうやり取りも必要なのかもしれないですね。

風邪、ほぼ落ち着きました。のどがちょっと痛いですが喉飴のお陰で大丈夫です。

のーどあーめー　りゅーかくさーん。にがーいよー（落ち着け

お気に入り登録が1000件を突破しました。本当にありがたい事です。

これからも頑張るのですよ。近い内に番外編でも書こうかなあ…
その場合は何がいいですか？　なんて聞いてみちゃったりして。

Continue 65 〈絶望しかない未来への第一歩〉

『蟠桃を守護している悪魔は我々のレベルを大幅に超えている。如何にお前達が強いと言っても勝てるかどうかは分からないだろう』

「うわぁ…帰ってもいいかな？」

「同意したいけどそういう訳にもいかないだろうね。名前とかは分かるのかな、そういうのが分かれば大体の弱点などは探れるかもしれない」

『名前か。確かケルベロスだったはずだ。魔獣の中でも上位に属している種族だな』

「よりもよってケルベロスか…無理ゲーなんてものじゃないな…」

大樹が愚痴る。ケルベロスと言えば女神転生のゲームをやっていたら一度は見た事あるだろう悪魔だった。

その実力は折り紙つきで、大抵のゲームでは仲魔として一緒に戦ってくれるとても優秀な悪魔だ。弱点も少ない上にその戦闘力は魔獣系でも随一と言えるだろう。

真・女神転生？では自分の飼っていたペットと合体して低レベルの内に従える事が出来ると言う裏技の様な物があった。

そう、味方ならこれ以上に優秀で頼りになる悪魔は居ないだろう。

そして…敵になればこれ以上厄介な悪魔も居ない。

此方のレベルは漸く30近くになったばかり、ケルベロスはとう優しく見積もっても50レベル台後半だろう。

「ケルベロスって地獄の番犬って奴じゃなかったっけ？ あの三つ首の…おお、かなりやばい気がしてきたんだけど」

「英雄ヘラクレスが12の試練の時に倒したという悪魔ですね。地獄の門を護る存在とされていますが…そのような存在までもここに入るのですね」

ケルベロスですか。確かに多少厄介ですね。

『多少ってあーた…私達じゃかなりきつい相手だと思っただけど』

『まあワシ等が何も考えずに突っ込んだら負けじゃのう。ここに来てよかったと思っつい。そんなクラスが悪魔に突っ込んでいたら即死じゃしな』

「他に情報が欲しい、弱点があればそれも…高良さんはケルベロスの神話とか覚えていたら教えて欲しい」

「そうですね…ケルベロスは三つ頭と蛇の尻尾を持つ冥府タルタロスの門を護る門番です。主に冥界から逃げようとする魂を貪り喰らうという点から冥界の門番と呼ばれるようになったようです。逆に冥界に来た魂にはとても友好的だという逸話もあります」

「ほへー、アニメとかだとメジャーな悪魔だけどそこまで詳しく調

べた事は無いから為になるよ」

「ふふ… では続けますね、ケルベロスは其々の首が個別に意識を持つとされ、それぞれ現在、過去、未来を示しているとされていますね。彼等はそれぞれ交代で眠るそうなのですが、音楽を聴くと総ての頭が眠ってしまうそうです。この習性を利用して豎琴の名手オルペウスが死んだ恋人エウリュディケーを追って冥界まで行くのですが、この時ケルベロスは豎琴で眠らされています」

「音楽かあ… それって結構な情報じゃないの？」

「音楽に弱い… 我々も初めて聞いたな… そもそも奴とは不干渉だった為に気にはしていなかったが。さて、奴について付け加えよう。ケルベロスは其々の口から火炎、吹雪、毒のブレスを吐き出している。」

それだけでも脅威だが、それと同時にその巨体で襲い掛かってくる。生半可な悪魔ではその攻撃には耐えられないだろう。更に言えば回復魔法すら使いこなす」

聞くだけで頭の痛くなってくる戦闘力の高さに辟易する大樹達。

強いとは思っていたが、内容を聞く限りとんでもない戦闘能力を有しているようだ。大樹も知っているがああ悪魔は確かサマリカムまで使いこなせるのだ、回復魔法もお手の物だろう。

「後、ケルベロスは甘い物に目が無いという情報もありましたね。ソップという蜂蜜を使ったお菓子を与えればそれに夢中になってその先に進められたと言う話も神話にはありました」

聞く限りでは音楽と甘いものに弱いという少々子供っぽい所がある悪魔ですね。

「音楽に甘い物…か。どちらも用意は出来るけど、神話通りに効果があるのかはわからないからね…」

「アニソンならめっちゃ歌うけどダメかなあ」

『流石にそっち方面はダメなんじゃないの？ 私ならOKしそうだけど』

『どっちにしても正面からじゃやばそうだしな。出来る手があるなら試してみるのもいいんじゃないか？』

『少しいいか？』

パトリムパスの一人がこなたに話しかけてくる。

「ん？ どつたの？」

『実はケルベロスの事なのだが、少し前に馬鹿な悪魔達がケルベロスに向かって行ってな』

「ふんふん。凄く無謀な気がするけど、どつたの？」

『勿論奴等は全員殺されたのが、一人だけ奴に手傷を負わせた悪魔が居たのだ。お前達が奴を攻略する上で役に立つ情報かと思ってな』

「おおっ！ 弱点かもしれないねっ！ どんな攻撃が効いたのっ？」
『かすり傷程度だったが、悪魔が放った吹雪で多少だがダメージを受けていたな。逆に火炎は総て跳ね返していた』

「…成程火炎反射の氷結弱点か…そうになると僕のペルソナとアメリカ。こなたの仲魔がメインになりそうだね」

《ヒーホー 氷はお任せなんだホっ》

こなたのCOMPからじゃあくフロストの元気な声が聞こえてくる。

大樹の仲魔はメインが電撃魔法や万能魔法で固めた物が多いが、こなたの仲魔は現在氷結魔法の使い手がとても多い。

弱点さえ上手く狙う事が出来れば此方のレベルが低いとしてもかなりのダメージを与えることが出来るだろう。

問題はダメージ源は確保できているが、その間ケルベロスを抑える事ができる屈強な前衛が足りないと言う事だ。

テトラカーンやマカラカーンがあつたとしても一時凌ぎにしかならず、パトリムパス達が言うには奇襲する場所が無いらしい為、先手を取って攻撃する事も難しいらしい。

かなり強くなつた仲魔達だが、これから相対する悪魔は単純に此方の2倍近い、いやもしかしたら2倍を超えている悪魔なのだ、一歩間違えれば全滅してしまうのは此方の方だった。

アメリアの屍鬼軍団も考えたが、ケルベロスの攻撃は大体が範囲攻撃な為、数を増やせば逆に範囲攻撃の洗礼を受けてしまう可能性が高いだろう。

みゆきの言う神話通りならば音楽で眠らせる手や甘い菓子などを使って交渉する事も可能かもしれないが、それが上手く行くかどうかは未確定なので実行に移すには問題がある。

エンノオツヌが頼んで来た『お使い』にしてはハードルが高すぎるな、と考えながら大樹は計画を煮詰めて行く。

話を聞く限り氷結魔法には弱いだろう、となればヘルのニヴルヘイムは有効となる。問題は物理系に非常に弱くなるのでケルベロスクラスの攻撃を一撃でも喰らえば即死するだろうと言う事。

前衛を張る事のできるメンバーが少ない事だろう。

みゆきはこの場合前列に置く事は難しい。そもそもあまり悪魔との戦いの経験が低い彼女が自分より数倍以上も強い悪魔と出会って身が竦まないとは言えないのだ。

もしそうなってしまうえば格好の餌になってしまっだろう。人間に対するリカームは時間が掛かる上に下手すれば効果が無い可能性もあるらしい。らしいと言うのはアリス達から聞いた話から総合したのだが。

これがサマリカームならば話が違っのだが、現在サマリカームを使えるのはこなたの守護天使であるアムルタートの化身、泉かなただけであり、現在は召喚する事が出来ない上にデメリットの方が多い。

今回は後ろで射撃に回ってもらうしかないかと、みゆきを後列に下げる考えを告げる。

確かにそうかもしれませんがね。圧倒的な強者に出会ってしまった場合、場数を踏んでいなければ動けなくなる可能性のほうが高いです。

「…悔しいですがその通りかもしれませんがね」

「まあ、これに関しては僕もあなたも同じだよ。蘇生させるにも肉体が必要だし、食われでもしたら一巻の終わりだからね」

『私達は悪魔だから、オーバーキルされてもCOMPで蘇生できるし、リカームですぐ蘇生できるから前衛はしやすいよね。でもそんな私は後衛火力』

「アリスはディアラハンとメ・ディアラマがあるから回復に回ってもらおうと思う。アリスの魔力ならかなりの回復量が見込めるからね。前衛が崩されれば後は全滅しかない。それをどうにかして防がないと」

『任せろ…とは言えねえな。今ならオルクスなら全力で行けば抑えられそうだが、聞いている限りはそれも難しそうだ』

『ワシもこの場合は前衛かのう。ヒョーヒョー、サマナーについて行くところ言う事はかりが多くて賑やかじゃわい』

「んで、こっちは全員火力って事だねえ」

『俺の場合は支援と攪乱かねえ。流石に火炎は焼き殺される自信があるぜ。これはご褒美がないとなあ　　という訳でアメリカちゃん俺を全力で慰めてみない？』

『いつぺん死んで見る？』

『すんませんマジ調子のりました。あの、熱いんですが、あちっ！？　あっ！ってっ！　許してっ！？』

フェニックスに足蹴にされるオリアス。

微妙に足の部分だけ変身を解いているようで、燃え滾る不死鳥の足がこんがりとオリアスを焼いている。弱点も加味してかなり辛そうだが自業自得なので無視されている。

美人の仲魔は他に沢山いるのに何故アメリカをメインで行くのかと白い目になる皆がいた。もしかなくてもオリアスはロリペドなのかもしれない。

近づけさせないようにしなければと大樹は他の皆よりも白い目で見つめていた。

『ふい〜。死ぬかと思ったぜ。フェニックスの姐さんってばもしかして嫉妬？　ぎゃあああああっ！？』

『なんか言った？　あ、そう墮天使の丸焼きが食べたいのね？　仕方ないから作ってあげるわアンタで』

『のおおおっ!?! ごめんなさいっ! マジ許してえええええっ
アーーーーッ!』

暫くお待ちください

『さて、続けましょ』

「あ…あぁ、そうだね」

「南無南無。迷わず成仏してねえ」

『お、俺まだ死んでないけど…げふっ』

「あ、死んだです。ネクロマに使えそうですね」

『流石に可哀想だから止めておきなさい、ってか生きてるから』

先程までのやりとりを綺麗にスルーして作戦会議を続けて行く皆。墮天使の丸焼きが出来た気がするが誰もが無視する事にした。好き好んで干渉しようとは誰も思わなかったようだ。

作戦の結果、音楽での睡眠作戦と、甘味による注意を逸らす作戦を同時に決行する事になった。

パトリムパス達も今回は小竜姫を共に連れて行く事になった為に力を貸してくれる事になった。

と言っても仲魔になる訳ではなく、甘味などでケルベロスの注意を引く役割を引き受けてくれただけなのだが。

音楽に関してはみゆきとこなたが同時に行う事になった。これらが通じなければ即座に射撃メインの攻撃に移る予定だ。

前衛はキンキヤグクマツツ、ユルングなどの比較的耐久力が高いメンバーで抑える事に。ケルベロス相手には分が悪いフェニックスとオリアスは中衛にて支援する事になる。

メインはブフダインなどが使えるじゃあくフロストとデイス。マハ・ブフーラまでしか使えないが氷結ブースタがある為に威力が高いシルキーが中核を担う事に。

アメリカもマハ・ブフダインが使えるが、彼女は攻撃より支援魔法の方が優秀な為に前衛に支援をかける事になった。勿論それが終われば攻撃に回るのだが。

そして大樹の役目は変わらず司令塔の役割だ、勿論弱点は分かっているのでペルソナでの攻撃なども考えてはいる。

ブフーラは使えるので、それで魔弾を作りフォルトウナのスキルである至高の魔弾・弱と共に撃ちこむ事を考えているようだ。これで効果がなければ文珠を使ってでも逃げる準備は出来ている。

出来る限り文珠は残しておきたいのでその辺が上手く回るように指令していかなくてはいけない。一つでも間違えればあつという間に瓦解するのだ。

「よし、これでは動くだけか…」

「ねえ、大樹さん？ ブフダインをカードにしないの？ 全員に持たせて一斉放射！ とか」

「ああ…成程それもいいかもしれないね。全員最低でも1枚持っていれば攻撃には回れるか」

「おおっ！ 大樹君のスーパーチートぱうわが発動だねっ！」

「確か魔法石の様にカードに魔法を封じられるのでしたね」

「流石にブースト分は加味されないけど、使う時にブースタがあれば威力上がるしそもそもその威力は自分の魔力じゃなくて魔法を使つた人の威力だから強い人が使えば凄いよお」

「となると…私よりアメリカさんの方がいいかもしれませんね。私の魔力は彼女には追いついてませんので」

「僕の魔法も強いホっ！」

ブフダインが使えるのはアメリカ、じゃあくフロスト、ディースの3体だ。

その中で一番魔力が高いのが造魔であるアメリカだったりする。

勿論じゃあくフロスト達もブーストなどがあり、威力に至っては同値に近いがそれはブースタがあるお陰なので純粋な魔力だけの威力はアメリカが一番高いのだ。

早速マジックカードを取り出し魔法を取り込んで行く。

その様子を大樹と仲魔達を除く誰もが驚愕の表情で見っていた。

こなた達は魔法を封じられる事を既に知っていたが、実際目の当たりにするとその方法も特殊すぎるために開いた口が塞がらない。

小竜姫に至ってはありえないとボソッと口にしていた。

「よし、最低限の枚数は稼げたね。アメリカ大丈夫かい？」

「問題無しなのです。ご主人様のお役に立てて嬉しいのですよ」

『はい、チャクラチップね。アメリカちゃんのMPかなり減っちゃったし補充補充』

「あむっ…あむ…コンソメ味は嫌いなのです。薄塩が至高なのです」

『それって大樹さんが薄塩好きだからじゃ…』

「当然なのです。ご主人様とアメリカは一緒なのですよ」

「いやあ、モテモテだねえ大樹君」

クシシシと笑っているこなた。だがよく見ると目が笑っていない事に気づくだろう。幸い誰も気づく事はなかったが。

「アメリカは僕にとって妹とか娘みたいなものだからね。似てくれるのは確かに嬉しいかな」

「妹…娘…にゆふふ。お父さんの気分はどうかねっ」

「まあ、悪くはないよ」

「そかあ…子供かあ」

（もし…告白が上手く行ったら、その…あれがあるよね。実際考えると胸の動きがやばいんだけど…おおう。エロゲーで慣れた私戻ってこいつ！ それにしても…子供好きかあ。いいお父さんになりそうだね）

これから下手したら死ぬかもしれない戦いに行くのにそちらの方向で考えられるこなたはある意味大人と言うか冷静というか、ある意味凄いのかもしれない。

現実逃避と言ってしまうえばそれで終わりだが、恐怖に負けない為にはある意味こんな風に軽く考えるのも間違いいではないだろう。

パトリムパス達よ。彼女に回復剤を用意してあげてください。万全を期さなければいけませんから。

『御意に』

一体のパトリムパスが何かを取りに行く。それを見送った小竜姫が小さく溜息を漏らした。

「小竜姫？ どうしたのですか？」

ああ、すいませんみゆきさん。私に肉体があればすぐにでも倒せたのかもしれないと思うと不甲斐無くて。

「あ、そか小竜姫って武神なんだよねえ。やっぱり強いんでしょ？」

これでも武神を名乗っていましたからそれなりであるとは自負しています。でも私以上に強い方は沢山居ましたから…でもケルベロス相手には負けない自信はありますよ。

「文珠で蘇生とかやってみようか…割と本気で」

「大樹君、そんな遠い目しないで」

ケルベロスを圧倒できるのなら本気で蘇生させようかと本気で思う大樹。

そういえばGS美神にもケルベロスが居たなあと思いつく。まあそのケルベロスは某蝶の魔族のペット扱いでかなり雑魚扱いされていたが。

あのケルベロスと今から戦いに行くケルベロスのどちらが強いのか分からないが、それでも小竜姫が動けるならばかなり楽にはなるだろう。

そんな詮無い事を考えているとパトリムパスが戻って来てアメリカに回復剤を使ってくれた。お陰で彼女も全回復し、後は向うだけになる。

エストマを唱え雑魚の悪魔を退けつつ一行は歩き出した。

何故エンノオツヌがこんな無理難題を出してきたのか考えたまま、ケルベロスの待つ蟠桃の場所まで足を進めるのだった。

Continue 65 〈絶望しかない未来への第一歩〉（後書き）

私の中でチャクラドロップはみかん味とかコーラ味とかの飴玉です。チャクラチップはポテトチップスです。薄塩、コンソメ、のり塩があるですよ

チャクラポットは500ミリペットボトルのジュースですね。種類沢山です。

という訳でチャクラ系は食べ物ですっ！ 反論は受け付けるのですよー（落ち着け

さて、今回は戦闘シーンです。作戦などは考えましたが上手く行くかどうかですねー。

あっさり…なんて問屋が降ろしてくれないのです。書くほうとしてはあっさりした方が楽なんですけどね（マテ

次回も頑張るのですよー。

どうでもいいこと

スマートフォンなのですが、最近もう少し待てばよかったかなーと嘆いています。

…新しい奴の方がネットのバージョンが高いのは当然なのですがこんな短い時期にもう新しいのが4個も5個も…涙目なのです。

えうう、でもそんな私は携帯を基本使わない子なのです（えー

メールとかはPCで出来るのでつい（汗

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

これはダツキが勝利でしょうか。

100票突破とか…凄いですねえ…ケルベロス倒して蟠桃ゲットして〜

エンノオツヌ〜が終わればコミュの予定です。後何話でいけるかな

あ…

こなた勝てるかなっ!?

こなた：82票

みゆき：19票

ダツキ：104票

アリス：26票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいいです。

Continue66 〈死ぬ事さえも試練〉(前書き)

さあ、戦闘なのですよー。

流石に一話じゃ終わりそうにありませんでしたっ！

といつか書いたのが18時半って…うう、今日は帰るのが遅かった
よう(汗)

急いで書いたので、ちょっと変かと思いますが、どうぞです。

Continue 66 〈死ぬ事さえも試練〉

エストマの効果もあり雑魚の悪魔と戦う事も無く、一行は目的地の目前まで来ていた。

双眼鏡で覗いて見ると、情報通りにケルベロスが入り口を護っている。

その大きさはここから見てもかなりの物だと言う事は嫌でも理解できた。正直戦いたくは無いなと全員が思っている。

「奇襲しようにも開けてるなあ… やっぱり狙撃とかは難しいかあ…」

「動き回るには最適ですけどね」

『あの奥が守護者が護る蟠桃の樹がある場所だ。用意は良いか？』

「眠らせて取りにいけるなら一番楽なんだけどそう上手く行く訳もないし、この作戦も果たして上手く行くか… だね」

「音楽の準備は出来てるよー いやあパトリムパス達が楽器持ってたてよかったねえ。私は使えないから携帯の音楽垂れ流し作戦だけど」

「まさかバイオリンがあるとは思いませんでした。ある程度はかじった事があるのでどうにかなるかと」

『私の子守唄などはどうでしょう…？ 勿論ダメならばブフダイソ』

で攻撃しますが」

「そういえばそんなスキル合ったね。スキルによる睡眠の効果もあるし便利かもねっ　じゃあデイスは初め歌にも回ってよ」

「ええ、わかりました」

「となると…後は甘味の方が」

此方はパトリムパス達に一任していた。それぞれが大樹が用意していた菓子類などを持っている。

これらを持ってケルベロスの注意を引くのが彼等の役目だ。

「効果があればいいんだけどねえ。でもこなたの方の歌が厳しいかなあ」

「拡声器があれば良かったのですが…流石にそう都合よくはいきませんね」

「拡声器か…歌のスキルを広範囲に流すには良いかもしれないな。元の世界に戻ったら探してみる事にしよう」

やはり眠ってはいけませんね。これからどう進めますか？

こなたのスナイプも作戦に上がったが、流石にあのクラスの悪魔にはこのクラスの銃弾では傷もつかない可能性がある為今回は断念し

た。

もしミスした場合ケルベロスがここまで襲ってくる可能性があるからだ。その間に攻撃魔法をぶつけるという手もあったが流石にレベルの差を考えて中断せざるをえなかった。

やはり当初の予定通り、音楽や甘味などによるケルベロス無効化作戦で行く事になる。

「さて…皆配置についてくれ。言って置くけど多分…いや確実に誰かが殺されるだろう。こなたと高良さんは文珠があるから少しは耐えられると思うけど、無理はしない事」

「はい…分かりました」

「死ぬのは嫌だしね、最悪逃げるから大丈夫っ！ だから大樹君も…気をつけてね？」

「僕もそうやすやすと死ぬつもりは無いよ。皆も気をつけてくれ」

『まっかせてっ！ 回復の雨降らしちゃうからっ！』

『前衛は任せな。バフオメットも中衛頼むぜ？』

『我が中衛とはな…まあ仕方あるまい』

それぞれが頷き作戦は開始された。

見えてくる巨体。感じる威圧感、少し前の大樹ならば戦う前に逃げるだろう、それほどまでの戦力の差が見て取れる。

此方に気づいたケルベロスがゆっくりと身体を起こし此方を睨みつけてきた。

そして高らかに吼えたけようとした瞬間を見計らい大樹は大きく声を張り上げる。

「今だっ！！」

デイスの甘い歌声が、みゆきのバイオリンの音色が、こなたのアニソンが辺りに響き渡る。

それと同じくしてパトリムパス達が高速飛行し、ケルベロスの前にお菓子などを投げ入れて行く。

吼えようとしたケルベロスだが、聞こえてきた音楽と目の前の菓子に耳と目が行ってしまい、少し動きが乱れてしまった。

「効いている…！ 皆攻撃開始っ！」

『よっし！ いくホー！ ブフ…ダインツ！！』

『デイスはそのままです！ 私達もカードでお見舞いするわよっ！ マハ・ブフダインカード…！！』

「支援なのですっ！ ラク・カジャツ！」

『先ずは勢いを削ぐっ！ フォッグブレスっ！』

二の足を踏んだケルベロスに降り注ぐ猛吹雪。それらがケルベロスの身体を刻み傷つけて行く。

それと同じくして、アメリカ達が支援魔法や阻害魔法をかけていく。襲い掛かる吹雪の前にケルベロスは動く事が出来ないようだ。

歌は止まる事無く鳴り響いているが、どこまで効果があるのかはわからない。こなたの方は携帯をおいたまま射撃に入っている。

「これは…いけるかっ！ 皆攻撃の手を休めるなっ！ 奴は僕達の数倍以上レベルが高い悪魔だ、容赦したら負けるっ！」

ペルソナをチェンジし魔力を高めて行く大樹。

この期を逃せばケルベロスに勝つ事は難しいだろう、全力で彼女を呼び出した。

「ペルソナっ！ ヘル！ ニヴルヘイムを！」

頭上に現れる美しい女性、ヘル。大樹に向かってこくりと頷くと両手

を突き出し永遠の氷河を呼び出して行く。

『凍て付きなさい、その魂までも。そして冥界に戻るのですケルベロスよっ！』

ケルベロスが居る場所に降り注いで行く複数の巨大な氷の槍。一切の容赦なくそれは何本も降り注いで行く。

何発ものブフダインにニヴルヘイムをほぼ無抵抗のまま受けているのだ、大ダメージは免れないだろう。だがそれでも不安は取れない。それだけ脅威の悪魔なのだ。すぐにブフーラを込めた弾丸をフォルトウナに装填し狙いをつけようとする…

『『『これで…終わりか？ 興奮めだ』』』

「！？ 全員後退っ！」

『『『遅いわっ！ 雑魚共がっ！！』』』

大樹が叫ぶ前に降り注ぐ炎と氷と毒のブレス、離れている筈の大樹達にもその衝撃や熱風などが襲い掛かってきた。

あまりの衝撃に吹き飛ばされてしまう大樹達。すぐに起き上がって辺りを見回すとあっという間に戦況が塗り変わっていた。

『ち…くしょお…が…化け物…過ぎる』

前には既にキンキしか残っていなかった。他の仲魔は総て先程の攻撃で殺されてしまったのだろう。

そしてそのキンキも両足が凍りつき折れ、右半身は炭化し比較的ダメージの少ないように見える左半身も猛毒に侵されているのが分かる。

生きているのは恐らく食いしばりのお陰なのだろう。だがそれももう持たないようだ。

すぐ近くには息絶えているアメリカとフェニックスがその場に倒れていた。

近くに居たパトリムパスも、先程食われていた様だ。

『『『しかし褒めてやろう。このワレにここまで手傷を負わせたのは貴様等が初めてだ。更にはワレが弱いとされる音楽や甘味などを用意するなど、頭も悪くない…だが…あまりにも脆弱すぎたな』』』

ぐしゃ…という音と共にキンキが踏み潰される。COMPに強制的に戻されたキンキ。

先程まで優勢だった筈なのに、ほんの一瞬で此方は半壊してしまった。

「無理ゲーだよお…弱点っぽいはずなのにアレしか効いてないなんて」

「ここまで強いとは…流石に誤算でした」

私もケルベロスに会うのは初めてでしたので…まさかここまでとは。あの力は恐らく中級神魔族並です。

「仲魔はほぼ全滅。耐久力が高い筈のキンキまで一蹴された以上僕達では耐える事なんて出来ないな…」

人間より強い筈の仲魔がただの一撃で全滅してしまった事に流石にダメージを受けているこなた達。

其処に誰かが走りよってきた。一瞬だけ身を硬直させてしまっが、走りてきたのはアリスだったのですぐに警戒を解く。

「あ、アリスちゃんっ!?!」

「ご無事だったのですねっ!」

『うく…っ 流石に強すぎるよ……私は何とか…バフオメットが庇ってくれたから。吹き飛ばされなかつたら二人揃って蒸発か氷付けだったね』

「アリスっ!?! 無事だったのか。そうか…良かった」

傍に駆け寄ってくるアリス。近くには死んでいるバフォメットが倒れている。どうやらアリスが連れてきたようだ。

アリス自身、身体中が傷だらけだが、ディアラハンを使っている様で動く分には支障も無いように見える。

バフォメットの方もCOMPに戻っていない以上リカームは可能だろう。

『すぐにリカームしてあげてっ。後パールヴァティはどこ？』

「後列にいたはずだけど先程の衝撃で吹き飛ばされてから姿が見えない。残ってるのは僕達人間とアリス位か…これは詰んだかな」

「大樹君…」

相手が強い事は理解していた。しかし虚を突き弱点をつけばどうにかなると踏んでいた。しかし待っていたのは容赦の無い現実。

エンノオツヌは何の為に自分達にこんな使いを頼んだのか…殺すつもりならばそもそも試練など課せはしないだろう。

ならば恐らく意味があるはず…だが、このままではただ殺されるだけだ。

『ぐっ…くそっ…魔王である我がたかが地獄の番犬如きに…許さんぞっ…』

『落ち着いてバフオメット！ レベル的にこっちが弱いのは仕方ないよっ！』

「私の仲魔は全滅しちゃったしね…蘇生はできるからまだそこまでガクつとしてないけど。正直悔しいよ…」

「あの…いいでしょうか？」

「みゆきさん…どしたの？」

「いえ…何故今ケルベロスは攻めてこないのでしょうか？ 私達、今物凄く隙だらけだと思うのですが」

「…！？ そういえば」

先程からケルベロスが攻めてこない事に疑問を持つみゆき。

言われて気づいたこなた達が八つとして振り向くと、其処には唸り上げつつも近寄ってこないケルベロスが居た。

口から炎の息などを撒き散らしてはいるが、それだけでそれ以上攻めてはきていない。

…もしかして甚振るつもりなのでしょうか。

「いや、すぐに死ねと言っておきながら舌なめずりするほど頭は悪くない筈…どう言う事だ…？」

「…もしかしてあそこから動けなかったりして」

『え……それマジ？』

「蟠桃の守護者だからね、ある一定の距離からは近寄ってこないのかもしれない。ある程度勝機は見えてきた…かな？」

『番犬だから首輪でも繋がれているか？ あーっはっはっはっは！
所詮は犬かつ！』

『『『ワレを愚弄するか…雑魚共がつ！ 確かに貴様等の想像通り、
ワレはここに括り付けられている。一定距離からは動く事叶わぬが
…だからと言って攻撃方法が無い訳ではないぞ？』』』

大きく息を吸い込むケルベロス。再びブレスを吐き出そうとしていた。

「皆散開しろ！ ブレスが来るぞっ！」

今度は大樹の方が早かった。ブレスが襲い掛かる前に全員がその場を離れる事に成功する。

同時に襲ってくる衝撃もある程度離れているために耐えられないほどではなかった。

それぞれがバラバラになりつつも、少しづつ光明を見出して行く。

こなたとみゆきとアリス。そして大樹とバフォメットに別れつつも次の攻撃に備え相手を見据えていた。

『くっ…このままでは攻勢に回ること事態もできんぞっ！』

「どうにかしないと…か。逃げるのも手だね、仲魔は今のCOMPに戻ってるし」

『逃げる…くそっ！ 魔王があんな雑魚に…』

「とりあえずアメリカもCOMPに戻ったか…暫く蘇生は無理だな…サマリカームがあればどうにかなるのに」

先程のプレスで素体ごと焼かれましたようCOMPに戻っているアメリカ。未だに戻っていないのは何処に行ったか分からないパールヴァティだけだった。

恐らく後列にいて気絶している可能性が高い。ケルベロスがこれ以上攻められない以上逃げるのは簡単そうだが、蟠桃を手に入れるのは無理だろう。

しかし命と蟠桃では命が大事に決まっている、このままでは勝つ事すら難しい為撤退も視野に入れ始めた。

情けない。

『まさかキンキもグクマツツも一撃で倒されちゃうなんて。折角合体したの上には上が居るよね…私も合体しなきゃ…かなあ生き残ればだけど』

「縁起でもないこと言っちゃだめだって。私達は絶対帰るんだから。そしてエンノ君殴つてもいいよね。うん、これは酷いお使いだ」

「泉さん…お、お気持ちは分かりますが、どうかクールダウンを」

攻めるにも、このままでは無理がありますね。超加速さえ使えればまだ手があるかもしれないのですが…

「超加速…ですか？」

「名前だけ聞くと厨二っぽいけど、神様の技ならいけるかな…？」

いえ…あれを使うには魂の力が足りません…マグネタイトというもので代用しようにも、かなりの量を使ってしまおうに今のみゆきさんでは身体が潰れてしまふ可能性が高いのです。

『それは却下だね…ねえ、私じゃダメかな？』

剣は使えますか？ 魔法では無意味なので。

『ごめん、無理』

八方塞がりだった。このまま逃げるくらいしか今の彼女達には出来ないだろう。

どうにかしたいが、ケルベロス相手にはどうしようもない。ここからブフダインを使おうにも恐らくプレスで相殺されるか、撃ち負けるだけだろう。

銃で狙おうにもブフダインすら効かなかった相手に銃弾なんて効く訳もないだろう。

『『怖気ついたか…これ以上は無駄だな、ここまでワレに痛手を与えた褒美として見逃してやろう…消えるが良い』』

『す…好き勝手言いおって…サマナーっ！　ここで逃げればキンキ達が浮かばれぬぞっ！』

「分かってる…だけど。正直勝てるビジョンが浮かばないのが現実だよ」

『くそっ…我は魔王だというのに…仲魔の仇すら取れぬのか…』
仇はと

もかく、殺し足りないだろう。

「……………」

先程から大樹の頭の中に声が響いてきていた。

殺せと、奴は殺せる相手だという言葉が聞こえてくる。そしてその声はどんどん強くなってきていた。

なあ？ 本当に勝てないと思っっているのか？

あいつを殺したくは無いか？ 単純に殺して、殺して、殺したい
だろう？

我慢するなよ。どうせお前は殺人鬼だ。俺と同じな。

呼べ俺を、そして開こうじゃないか。

素晴らしき惨殺空間を……………

『お、おい？ どうしたんだサマナー…？ お、おい待てっ！』

突然電池が切れたように止まった大樹を心配し始めるバフォメット。

しかしそれを意に介さずふらふらとケルベロス向って歩き出した。
あまりに突拍子の無い行動に驚きを隠せないバフォメット。そして
それはこなた達も同様でしきりに逃げる様に促す。

それでも大樹は気にした様子も無く、一步一步確実にケルベロス向
って歩いて行く。

『『『命が惜しくないようだな…良いだろう。ならばここで…死ね』』』

『』

再び吐き出されるプレス。悪魔でも一瞬で滅ぼしてしまう死の息の前には人間など憐れな羊でしかない。

文珠があるとは言え、これだけの威力の前には防ぐ事もできずに死んでしまうだろう。

「大樹君っ！　だめえええええっ！」

『大樹さんっ！　逃げてっ！　逃げてええええっ！』

「佐藤さんっ！！　だめですっ！　自棄にならないでっ！」

「……………」

彼女達の声が響く…しかしそれすらも耳に入らず。

ゆっくりと口を開く。

目の前に降り注ぐ火炎と吹雪と猛毒のプレス、あと少しで完全に飲み込まれるだろう…だが…

ペ

さあ、始めよう。

ル

お前は俺を呼べるまでに強くなった。

ソ

ならば力を貸してやろうじゃないか。

ナ

だが…俺の好きにさせてもらっけどな。

大樹を覆い尽くすブレス、誰もが死んでしまったと思った。こなたはケルベロスに銃口を突きつけ、みゆきも小竜姫の剣を構える。

アリスも同時に飛び出して行くと、其処には2つの影が見える。倒れ伏している影は大樹の様だ、死んではないようだが気絶しているらしくピクリとも動かない。

もう一人の影はその場に立ち、ゆっくりと口を開く。

『俺はお前でお前は俺…俺はお前の心でありお前自身、そう、俺達は一心同体と言う事だな。始めまして悪魔。俺は

ナイフを持った少年が其処に立っていた。

威圧感はない、その筈なのに、其処には濃厚な死の気配が溢れていた。

その気配はあまりにも強く、あのケルベロスすら動くことが出来ない。

七夜志貴。召喚に応じ貴様を殺しに来た。さあ、楽しい殺し合いを始めよう』

召喚はなされた、この異界に死を呼ぶ風が吹き荒れる…

Continue 66 〈死ぬ事さえも試練〉(後書き)

ナナヤシキ初召喚？ です。

というよりもこの場合はペルソナの暴走の様な感じですねー。
今回はナナヤ君VSケロちゃんですね。どちらが勝つのやら。

ブレス一回で半壊。流石にレベルがメンバーの2倍もあるので攻撃受けたらこうなります。

音楽とお菓子は効いてましたけど、ほんの少しだけですねー。

もっと良い戦い方もあったかなあと思いつつ。所詮私にはこの辺が限界と。

戦闘描写が得意な人がいれば教えてもらうのに(涙

戦闘の補足

スナイプしなかったのは攻撃が通じなかった場合に突撃されたらやばいなーと言うのと、スナイプしようにも場所的に狙えなかったからですねー。

遠くから歌う手もありましたけど、多分拡声器無いから聞こえないという(汗

あ、ちなみにお菓子は気になっただけで効いてませんでした。

子守唄や音楽は気を逸らすのに成功してますけど、眠りまでは言ってないようです。

どうでもいいこと

ケーキが甘いですっ！ ああ…ケーキ…幸せです。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

これはダツキが勝利でしょうか。

100票突破とか…凄いですねえ…ケルベロス倒して蟠桃ゲットして…

エンノオヅヌ〜が終わればコミュの予定です。後何話でいけるかな

あ…

こなた勝てるかなっ!?

こなた：84票

みゆき：20票

ダツキ：107票

アリス：27票

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue67 〱迷走・暴走・遁走〱(前書き)

ケルベロス戦その2なのですよー。

ナナヤ君の言い回しが難しい…上手く書けたかなあ…

ちよつと19時半頃に用事があるので、短めになりました、あしたもがんばるのです。

コメント返信は登録後に直ぐ頑張るですよー。

今回のあんけーと終了なのです。

話数的に、後数話でコンピュータなので、今回で終了させてもらいましたー。

沢山のアンケートありがとうございました！

次回のアンケートまでお待ちくださいね。

七夜召喚よりほんの少し前…

泉こなた視点

「…こりゃ、まずいね」

ブレスを命からがら避けきった私達。なんとか逃げきったけどパーティがバラバラだよ、ここまで来ると前衛後衛関係ないなあ。そもそも戦線崩れてるけどさ。

今更交渉すれば良かったー、何てのは過ぎた現実だねえ…まったくの無駄だったとしてもさ。

守護者って時点で嫌な予感してたけど、まあ初めから交渉が無理ってのは笑ったよ。

勿論考えに上がった話題でもあるけどね、パトリムパス達に話に聞いた限りさ、それが無駄だって事をきっぱりはっきり言われちゃったよ。

そもそもが蟠桃を護る守護者。蟠桃を「何か上げますから下さい」とかそんな理由や交渉で蟠桃が貰えたり手加減してもらえないならそもそもこんな戦いはしなかったよね。

まあ、その結果がこんな結果になったけど。聞く耳を持ってくれれば初めからやりようもあったけど…ねえ。

既に交渉は試したんだってさ、パトリムパス達がね。

なんと言っても不老不死の実である蟠桃。復活を望んでる小竜姫を蘇生させるには最高のアイテムだもん、どうにかするに決まってる。でもダメだった、捧げ物を用意しても、生贄を用意しても何をしても無駄だった。人であろうが悪魔だろうが、ケルベロスは一切合財全部無視して全部殺しちゃう。

蟠桃を護る守護者はどこまでも冷徹にこの地を護り続けてたっていうお話だよ。

ならばどうするか…もう倒すしかない。まあゲームじゃ良くあるシチュだよ、ボスに向かって交渉しても無駄って感じだね、ラスボスに会話…戦闘終了って訳には行かないって事さ。

だから戦ったけど、正直相手が悪すぎたね…あの一瞬で皆殺されちゃった。正直前に立ってたと思うとゾっとするよ…

そんな時だった。私がエンノ君殴るなんて考えてたら、佐藤君が飛び出したのは。

そして、佐藤君はいつものように、でも少し違う感じであの言葉を唱えた。

ペルソナ

その言葉と共に大樹君はプレスに飲み込まれた…一瞬世界が真っ黒になったよ。

大樹君がまた殺されるなんて…あんなの食らったら人間なんて骨も残らない。そうならリカームによる蘇生だってできないって。

でも……奇跡は起きた。

『俺はお前でお前は俺…俺はお前の心でありお前自身、そう、俺達は一心同体と言う事だな。初めまして悪魔。俺は七夜志貴。召喚に応じ貴様を殺しに来た。さあ、楽しい殺し合いを始めよう』

訳がわからない、ってのが今の私を一番表してる。

そして倒れている大樹君とその目の前に立っている学生 多分私達と同年代位の人だと思うけど が無造作に立っていた。

片手を腰に当ててやれやれと言った風貌で真っ直ぐにケルベロスを見つめてる。

『『『人間…では無い様だな』』』』

『それで？ 俺が人間であろうと無かろうとアンタには関係ないだろっ？』』

右手に持っていた小さなナイフを逆手に持ちながら飄々としている男性。恐らくあれも大樹君のペルソナなんだと思うけど、あれは何か違う気がする。

いつも召喚してるペルソナは出てきても一瞬だけだし、あんな風にちゃんとした実体なんて持ってない。

ついでに言つと大樹君は気を失ってるのに発動しているのがおかしいよ。

『俺とアンタ…出会った以上やることは簡単だ。さあ楽しいパーティーの始まりという訳だ。俺もアンタも似たもの同士、言葉は…要らないだろっ？』

そう言うや否やありえないスピードで駆け寄って行く、ペルソナ…？ でもあれじゃ狙い撃ちされるよ。

なっ！？ 早い！？ 彼は何者なのですかっ！？

小竜姫が何か叫んでるけどこっちはそれ所じゃない。

今の内に大樹君を確保しなきゃ、あのままあそこで倒れてたら今度こそ消し炭になる。

すぐに飛び出して大樹君に駆け寄る。みゆきさんが危険だと止めたけど、そんな危険な場所に彼を置いとけないよっ！

距離的には其処まで離れてないから直ぐにたどり着いたけど、ここからが問題。どうやって運ぶかだけど…

『この戯けサマナーがっ！ 人間っ！ 手伝えっ！』

「あ、うんっ！ ありがとバフォメット！」

反対側からもバフォメットが大樹君を助けに来てくれた。すぐに持っていた武器とフォルトウナを私が持つて、大樹君をバフォメットが運んでくれる。

ケルベロスの方を少し見ると…ありえない光景が目に見された。

とんでもないスピードとありえない動き方でケルベロスの攻撃を避け続けるペルソナ。何あれ、尋常じゃないよ。

『急げっ！ あの訳の分からない奴が戦っている今の内に』

「うっ、うんっ！」

急いでみゆきさん達の下に戻って行く。

幸いと言っかなんと言っか無事にみゆきさん達の居る所に戻ってこれたけど…

「何か…怪獣VSウルト 警備隊歩兵って感じだね…」

「えと、流石に意味が分からないのですが」

それよりあの霊体はなんなのですか…？ 佐藤さんの霊力を使って顕現しているように見えるのですが。

「多分、大樹君のペルソナだと思うよ。さっきも見たでしょ？ へルっていうペルソナを」

ですからそれがありません。その身の中に神を宿す神卸しならばともかく、あれは力こそ縮小されていましたが間違いなくニヴルヘイムの女王ヘルでしたっ！ そして彼は…

「小竜姫…」

佐藤さんは…本当に人間なんでしょうか。横島さんと同じ文珠を使えて、あの不思議なカード…そして神などを一時的に呼び出すペルソナといい規格外です。

「小竜姫は大樹君の事を不審に思ってるの？ それ今考える事？」

いえ…ですが。でも貴方も感じたことはないのですか？

そんな事、今更言われなくても分かってる。

「そんな難しい事は分かんないよ…そりゃあ未知の力は確かに怖いかもしれない。あの学生の人、正直見るだけでも怖いし…でもさ。でも…」

大樹君が色々隠してるのは知ってる。

ペルソナ然り、文珠然り、マジックカード然り、ううんそれ以上に色々隠してる筈。

でもさ、私が知ってる大樹君は初めからそうだった、でも少しずつ教えてくれた。心を開いてくれた。

だから今はそれでいいんだよ。疑ったって不審に思ったってどうしようもない事もあるよ…それ以前に。

「私は大樹君を信じてるから」

『右に同じっ　大樹さんは私達にとって大事な人っ！　それだけで十分だよ』

「という訳なのさ　今はそれよりあっちでしょっ！」

そう…ですね。

ケルベロスと戦っている彼…ペルソナだと思っけど、いつもと様子が違う。なんだろう、凄く嫌な予感がするよ……………

泉こなた視点解除

ケルベロスは焦っていた。

ブレスを放とうにもこの目障りな人間モドキは猛スピードで自分を攪乱する。

更にはこの身を易々と傷つけて行くその攻撃力と技量だ…一撃は軽いがこのままではジリ貧になってしまう。

『どうした？ まさかこの程度じゃないんだろう？』

『『『小賢しいわあっ！』』』

ケルベロスと言われたこの身が脆弱な人間もどきにここまでされるのは屈辱の極みだ。

怒りに任せて虚空爪激を放つがそれも容易く避けられる。しかしこれはフェイントだ、攻撃の手を緩めず相手の動きを封じ誘導して行

く。

思考が怒りに捕らわれていてもどこまでも冷静に冷徹に相手を喰らい殺す事を考える。

守護者という存在に身を竄した今、ケルベロスが守るべきものは蟠桃のみ。奪おうとするもの近づこうとするもの総てを殺し喰らい尽くす事が我が使命ならば、と。

『『『捉えたわっ 死ぬがいつ!!』』』』

3つの口から炎のブレスを吐き出す、その火力は鋼すらも溶かす地獄の業火。

逃げ道を防がれた七夜は咄嗟に行動する、逃げ切れないならば逃げられるように何かを捨てればいい。

そう、自分の腕だとしても。

『…ほう、唯の犬畜生にしては頭が働く。くくっ、それでなくちゃ面白くない』

『『『戯言を、その身体で何を抜かす。もう動く事もできまい』』』

七夜の左肩からその先は完全に炭化していた。

その様子を見て驚いているこなた達、アレだけのスピードの持ち主でも勝てないのかとその表情は落ち込んでいる。

だがそれでも七夜は何の感慨も無さそうに自分の無くなった半身を見ている。

『ああ、これか。確かにこのままじゃ面白くないな。なら直ぐに元に戻そう』

その軽い言葉と大樹の叫びと腕の再生は同時に始まった。

「だ、大樹君っ！ 大樹君の腕がっ!？」

『どいてっ！ ディアラハンッ!! くっ！ 回復が追いつかないっ！ 何よこれっ!!』

七夜の腕が回復して行くと同時に、大樹の腕が焼かれ黒く染まって行く。

大樹が自分の半身だからこそ、そして暴走している今だからこそ出来るダメージの転換だった。

自分のダメージを本体に送る事で、自分のダメージを全部無効化するという本来ありえないことをやっていた。

気を失いながらも苦しそうに呻く大樹。ディアラハンで完全に炭化

する前に回復を施して行く、あと少し遅ければ大樹の腕は二度と使
い物にならなかつただろう。

あの霊体の腕が再生を…まさかダメージの反転っ!? 本体にダ
メージを送り出すなんて無茶な真似をつ!

「大樹君っ! あのペルソナ何考えてるのさっ!」

「泉さんっ! 今は回復にっ! このカードで回復できるようです
っ!」

『さて、続きを始めよう。悪かった、少しばかり侮ってたよ。アン
タにその侘びとして送ろう。完全なる死の花束を』

言うや否や突如消えうせる七夜、ケルベロスも一瞬見失ったが頭上
に感じる濃密な殺気に緊急回避を試みる。

そしてその場を駆け巡る銀の煌き。その衝撃は近くにあった木々を
まるでバターか何かの様に切り捨てた。

あの数瞬でケルベロスの頭上まで飛び上がりナイフを一閃したのだ。

『『『馬鹿な…あの一瞬であそこまで…貴様…何者だっ!』』』

『そうだな。アンタに対する死神、それでいいじゃないか。それ以
上何も要らないだろう?』

『『『舐めるなああつ!!』』』

再びの虚空爪激、しかしそれも七夜が少し動くだけで避けられる。

圧倒的なまでの力の差だが、そもそもケルベロスはその処まで弱い訳ではない。先程大樹達を半壊させたようにその実力は折り紙つきだ。レベルに関して分霊とはいえ66レベルという大台に達している。反対に七夜のレベルはその半分に近い35レベルだ、ステータス的にはそれこそ当たれば一撃で殺せる位の実力しか持っていない。

圧倒的に見えるスピードもケルベロスを切り刻めるその攻撃力も、本来はケルベロスの方が上回っている。

ならば何故、ここまで圧倒的なのか…その理由は二つあった。

『甘い。力だけあってもそれだけだな、そもそもカタチが悪い。その力を発揮させたいなら腕の一つや二つ増やす覚悟が必要だろう?』

一つは生前…彼?が666の因子を持つ獣を殺した事による、概念上での優勢。

一つは彼の持ち得る身体能力と能力による、殺戮に対する上方修正。

『『『ぐおおおおおんっ！！』』』

振りかざしてきた前足を寸分違わず見切り、切り刻む。

爪も肉も削ぎ落とされ、絶叫を上げるケルベロス。それでも瞳は冷徹に七夜を捉え猛毒のブレスを吐き出してきた。

即座に飛び離れるがブレスの特性からか拡散する毒の息吹は蔓延し七夜の足を猛毒で溶かして行く。

だがそれも数瞬もしない内に再生し、そのダメージは大樹に送られる。

アリスは全力でディアランやパトラをかけて行くが、その瞳はダメージを大樹に送る七夜に怒りの感情をぶつけざるにはいられなかった。

それはこなたも同様で、幾らペルソナでケルベロスと戦っていると見え総てのダメージを本体に移し変える事に怒りを禁じえない。

それでも、あの二人を止める事は出来なかった、ケルベロスを倒さなくては蟠桃は手に入れられない上、そもそもあの暴風のような空間に入り込むことなど誰にも出来ないのだ。

瞬間移動でもしているようなスピードでケルベロスを攻撃して行く七夜。ダメージを受けながらもブレスを吐き足を振るい戦うケルベロス。

それはまるで12の試練のケルベロスに挑むヘラクレスに似ている

とみゆきはどこかで思っていた。

『くっ……我は魔王である我が…あんな獣に勝つ所か、こんな所で動く事さえ出来ぬとは…何が魔王だっ！』

何も出来ないという現実に齒噛みし地面を殴りつけるバフォメット。

確かに自分はモラクスという魔王だった。その辺の悪魔とは一線を画す程の悪魔だった筈なのに、今やっている事は仲魔の援護だけ。

自分のサマナーとは言え、たかが人間の召喚したペルソナと、地獄の門番ケルベロスにさえ勝てない自分が許せなかった。

「バフォメット…」

『…っ。今はサマナーの回復の方が先だな。あのペルソナという奴、サマナーの身体など知った事では無い様だ、回復魔法を唱え続けねば下手すると死ぬぞ』

『今やってるっ！ 大樹さん…目を覚ましてえ…』

七夜が傷つく度にそのダメージが総て大樹に帰ってくる。

その度に回復魔法を使いダメージを消して行くが、もし即至級の攻撃を受けてしまったらどうなるか考えると気が気ではない。

ペルソナが消えるのは良いかもしれない。勿論大樹に弊害が来るかもしれないが、問題はその状態から回復される事だ。そうやってしまえば確実に大樹は死ぬ。

蘇生魔法で蘇生できるならまだしも、あのケルベロスのブレスに氷付けにされた場合や燃やされてしまった場合を想定すると嫌な想像しか浮かばない。

今の所は有利に見えるが、こなた達にとって今の戦闘はいつも以上に精神にダメージが来る戦いだっただ。

『『『この…ワレが…蟠桃の守護者であるケルベロスたるワレが…脆弱な幽霊ごときに………』』』』

『そろそろ、飽きてきたな』

『『『飽きてきた…だと。貴様言うに事欠いて…っ！』』』』

やれやれと頭を振るい、ケルベロスを見据える七夜。

その目には何も映っていない様に見えた。そう、ケルベロスすら七夜にとっては取るに足らないものだと言う事だった。

七夜のあまりの態度にケルベロスは怒る事すら忘れ、それ所か豪快に笑い始めた。

気づいたのだ、七夜が何を考え何を求めていたか、そして自分の今の体たらくを、自分という存在を。それ以上の存在を。

『くくくく…ははははははははははっ！ 脆弱なのはワレの方だったか。謝罪しよう侵入者よ…貴様のお陰で目が覚めた。あまりにも永い間ここを護っていた為にワレもまた増長していたのだろう…この世界にはワレより強い者等沢山居ると言う事を忘れていたわ…』

『漸く、本気になったと言う所か。そうだ、そうじゃないとダメだろう？ 死が吹き荒れるこの空間に遊びも感情も何も必要じゃない。居るのは純粹な殺意のみ、これからが本番と言う事さ』

『成程…遊ばれていたと言う事か。くくくくく…未恐ろしい存在だな貴様は…』

彼等の声はこなた達の所まで届いている。

その言葉に怒り所か殺意すら湧き起こるアリスとこなた、大樹がここまで怪我をしたというのにそれすら無視してケルベロスと遊んでいたのだ。

ケルベロスの言葉が真実ならば、ここまで苦労せずとも勝つことが出来たのだ。それを純粹に殺しあいたいという理由だけで戦闘を引き伸ばした七夜の的外れだとしても怒りを感じてしまう。

それでも、それでも彼女達は七夜を止める事は出来ない、呼び出したのは大樹自身で…そして例え戦いを楽しんでいるのだとしても、この中で唯一ケルベロスを倒せる可能性を持っている為に。

「泉さん…手を傷めてしまいます」

「ん…ごめん。でもさ…やっぱ許せないよ、大樹君のペルソナだからって、あそこまで勝手に」

しかし今の私達ではどうする事も出来ません。せめて彼が目覚ましてくれれば変わりようがあるのですが。

『あの馬鹿ペルソナ、殺せるなら殺してやりたいよ。あんなのが大樹さんのペルソナだなんて信じられないっ』

『信じられなくてもあれが現実だ…ちっ』

動かない七夜とケルベロスを見る事しかできないこなた達。

そして此方は再び動き出そうとしている。

『迷走回廊は抜け到達した場所は血沸き肉踊る純粹なる一つの極地。ようこそ、この素晴らしき惨殺空間へ』

『『『ワレはテュポーンとエキドナが息子50の首と青銅の声を持つ底無し穴の霊、ケルベロス…地獄の門番であり蟠桃の守護者。ワレは誓約する、貴様を認め、ここで喰らい尽くすと!』』』

戦いは更に加速する

Continue67 〱迷走・暴走・遁走〱(後書き)

ダメージ全部佐藤君にお供えする七夜クン。見事に暴走中ですね。まあ、暴走というかいつも通りというか。

レベル的にはほぼ半分のナナヤ君が勝てるのは、お話の都合上です(マテ

とはいえ、クリティカルしたら死亡ですねえ…ROのアサシンと考えてもらえると嬉しいです。

明日は…書けるかなあ…出来る限り頑張りますね。

どうでもいいこと

明日は会社での身体検査の日なのですよー。

採血嫌いだ…怖いし…まあ、なれましたけど。でもイヤです。えうう

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュニケーション

ダツキです！

こなたを完全に追い抜いての100票超え、凄まじい。

コミュニケーションをお待ちくださいなのです。

とは言え、甘い話になるかどうか不安です。

投票について(中断中)

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで

Continue68 〈加速する牙と爪〉(前書き)

戦いその2ですよー。

かなり短いですが、この後健康診断+用事があるので切り上げました(汗)

ごめんなさいですよー…

更に言うと戦闘描写難しい…上手くかけてるか心配です。

少しは臨場感溢れてるかなあ…

コメント返しは返ってきたら行きますねー！

Continue 68 〈加速する牙と爪〉

宣言と共に戦いは再開された。

圧倒的なスピードで動き回る七夜に対し、その身に回復魔法を掛け獣特有の動きで攻撃を捌いて行くケルベロス。

慢心を無くしたケルベロスは七夜より数段上の実力と身体の差がある。

6つの目による動体視力は人間の数十、いや数百倍あるのだ。それで捉えきれない物など僅かしか存在しない。

ナイフと下手な名剣より鋭い爪による剣戟が一合二合される。七夜の直死の魔眼によって死の線を切られた爪は直ぐに切られ落ちてしまいが、1秒も立たずに爪は再生し即座に死を運ぶ爪となり振るわれる。

『疾っ!!!』

『『『温いつ!』』』

攻撃を紙一重で避け、其処にナイフを爪ではなく足に滑り込ませるが、魔獣の最上位足りえるケルベロスがそうそう簡単に当たつてくれる訳もない。

その巨体な肉体ではありえないスピードで避けお互いに距離を取る。

スピードはパーティの中で一番のこなたですら、追いかけるのが難しいほどの速さだった。

まるで昔見たような漫画やアニメの世界の様な、超高速戦闘が目の前で繰り広げられていく。

時々聞こえる、金属と金属がぶつかり合う耳障りな音が響き渡り、炎や吹雪、そして猛毒が辺り一面に降り注いでいく。

多少離れているとはいえ、熱気や冷たさがこなた達に容赦なく襲い掛かってくる程だ。

『かああああああっ！！』

迫り来る衝撃をバフォメットがガルダインの衝撃で相殺する。

戦いの余波だけでも、まるで災害が起こったかの様に焼き尽くし、凍らせ、腐らせて行く。

ここにバフォメットが居なければ死にはしないがダメージは免れなかっただろう。

『辺りの事は知った事ではない…か。正に悪魔そのままの思考だな…ちっ。パールヴァティが居ればもう少しまともな防御幕が張れるというのに』

「助かるよバフォメット。私達じゃ魔法は使えないから、こんな場所
に身一つじゃやばかったね」

「凄まじいですね…私達ではまだ辿りつけない境地です」

そうですね、あれは最早、神魔族クラスの戦いです。私が身体を
取り戻したとしても、暫くは追いつけそうに無いほどに。

「でも…正直、うんあのペルソナは気持ち悪いよ…」

「命を粗末に、いいえそういう次元ではありませんね」

凄まじいと言う言葉すら生温いと思えるケルベロスと七夜の戦いを
こなた達は唯黙って見続けることしか出来なかった。

あまりにも自分の身を無視した刹那的な戦い方にこなたとみゆきは
恐怖と多少の嫌悪感を抱く。

あれは自暴自棄になって自らの身体を捨てているとは訳が違う、自
分という身体すら戦いの一部とみなし戦う事の喜びを見出している
狂人の考えだと。

対して小竜姫の考えはまた違う。死中に活を求めるような詰め将棋
の様な戦い方に純粹に賞賛を送りつつも、その存在をいぶかしみ見
続けている。

ペルソナという能力が良く分かっていない為、神やあのような存在
をほぼ何のデメリットも無く召喚できる大樹に興味と恐れを感じて
しまいそうになっていた

こなた達が見ている間も嵐は止まらない。

ナイフが煌き、爪が唸る。どちらも当たってしまったえば一撃で終わってしまふ暴風雨の中、お互いに笑いながら戦い続けている二体。

片方は驚異的なスピードと回避力で攪乱し、片方はその力と魔力で覆い尽くそうとしていく。

『閃鞘・八点衝…！』

一瞬でケルベロスの後ろに回りこみ超高速の斬撃を叩き込む。しかしケルベロスの背後は隙だらけではない。

ケルベロスの尾は蛇であり、それすらも生きている。無数の攻撃を尾の蛇がブレスを吐き出す事により相殺して行く。

不利を悟りバツクダツシュで下がると、今度はケルベロスが追撃する。見事なアクロバットで回転し回り込むと縦横無尽に暴れ回った。

その様子は正に嵐と言うより巨大生物の暴虐そのもの、当たれば七夜の身体など豆腐の様に潰されてしまっただろう。

だが、それすらも容易く避け、再びお互いに距離を取った。

『『『くかかかかかかか！ 見事だ、いや美事か。ワレの攻撃をあそこまで容易く避けるとはなっ！』』』』

『情けない限りだ、あれを褒められてしまえば俺の立つ瀬が無い。美技などに拘る趣味はないのでね、それより必要なのは確実に、完全に、絶対に死を与える事だ』

『『『くくつ』』』

笑みを零すケルベロス。どこまでも直向に殺す事のみを追求する七夜に素直に尊敬の念を抱きそうになる。

既にケルベロスにとって七夜はか弱き悪魔や人間等ではなく、対等の存在と認識している、ならば全力を持って喰らい尽くすのみだ。

前足で地面を削り七夜を見据える。七夜には生半可な攻撃は通用しないだろう、ならば全力で葬り去るのみ。

『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおんっつ！！！』』』』

辺りが振動するほどの雄叫びを上げ、魔力を全身に駆け巡らせる。

力を込め、獲物を食い千切る事のみを考え……そして駆けた。

余りの速さに七夜も眼に追う事が出来ない、感じた死の気配に従い

横に全力で飛びのく、同時に何かが駆け抜けた音と衝撃破が襲い掛かる。

無理な体勢で避けたため衝撃をまともに食らい弾き飛ばされる七夜。そこに巨大な顎が迫りかかってきていた。

『ちっ…！　ぐあ…っ！』

吹き飛ばす自分に自ら重い一撃を与える事でケルベロスの顎をぎりぎり避け体勢を整える事に成功した七夜だが、顔がそのまま七夜を叩き付ける。

避ける事もできずに地面に叩き付けられた七夜を尻目にその大地に向って火炎のブレスと共に巨大な口が襲い掛かる　　が既にそこに七夜は居ない。

獣の本能に従い其処から緊急回避を試みるケルベロスだが、同時に強い痛みを感じ首の一本で後ろを見ると…其処には根元から断ち切られた蛇の尾がズタズタにされて地面にばら撒かれている。

あの一瞬で断ち切られていたようだ。直ぐにディアラハンを唱え回復するが痛みこそ引いたものの、蛇の尾は再生することなくそのままだった。

余りの出来事に戦慄し、そして七夜の持つ異常さと能力をはつきりと見極めたようだ。その表情は恐れと笑みが含まれている。

対する七夜も、無傷とは行かず全身が傷つき血を流しつつも、楽し

そうにケルベロスを眺めていた。

『『成程：一撃でも受ければ終了か。魔眼持ちとは恐れ入る。相性も無効化とはな』』』

『一目で見切るとは。いやすまない、アンタを馬鹿にした訳じゃないんだが』

『『『その脆弱な身で良くぞ其処まで：素直に感嘆するぞ。貴様はもしかすればヘラクレス以上かもしれん』』』

『この身を英雄などと比べるのは無意味だ、この身は既に殺戮だけに特化しそれを行使する事のみを目的とした死そのもの。概念では英雄にはなれんよ、興味も無い』

『『魔の眼を持ちつつも完全には壊れず、そしてそれを認め立つか：本体ならば喜んだやもしれぬ』』』

『『たれば』など唯の言い訳に過ぎん、目の前にアンタが居てアンタの目の前に俺が居る。お互いに死に会っているのさ。それ以上に幸運な事は無いだろう？』

気安く話し掛ける様はまるで気心が知れた相手のようで、そしてその内容はどこまでも殺伐としている。

お互いの中に必要な物は、死とその行為だけで、他には何も必要もしないと七夜は語る。

常人ならば狂っていると思われるも仕方のない科白だが、彼等にとつてはそれが当然であり通常であり、そして必要な事だ。

一瞬の静かな交差の後、再び悪魔達は動き出す。

今度は七夜が接近しケルベロスの動きを止める。突如消えたと思えば上空より現れナイフを叩き付けようとす。

ぎりぎり回避した所に、追隨してきた七夜が再びナイフを振り翳すが、それもどうにか避けきった。

『『『』』』』はあああああああああああつー！』』』』

七夜の攻撃を総て捌いた事で、戦いの風がまたケルベロスの方に回る。

ケルベロスの火炎の息、吹雪の息、猛毒の息を撒き散らしつつ突撃する姿は重戦車を思わせる。

七夜と言えどあのブレスをまともに喰らえば顕現し続けるのは無理だろう。多少のダメージならば本体に送り出せば良いが、一撃で倒されてしまえばそれも無意味。

ついでに言えばダメージを受ければ回復すればいい、と言つのは実はあまり好きではない。

使えるならば使うが、それでは相手も殺し甲斐がないだろう、戦いはお互いに殺し殺されが楽しいのだと内心で笑う。

迫り来る死に身体中が歓喜で染まっている。

『ああ…これだ。殺し合いはこうでなくちゃならないだろう？ 絶対なる死を自ら殺し、その上で新しい死を作り見出す。そうでなくちゃ…詰まらない、そうは思わないか？』

死を見る眼は、死を見ることが出来る故に、死を避ける道もまた見える。

七夜が持つ驚異的な回避力も命中率も総てはこの目が後押ししてくれているからだ。勿論自身の身体能力もあるのだが、それ以上に人外染みた回避力は眼が由来している。

だから、それを信じる事で先を見出す事も可能なのだ。

七夜は迫り来るプレスに逃げる所か真つ直ぐ駆け抜けて行く。プレスと襲い掛かる巨体に恐れる所か笑みを漏らし滑り込んだ。

『『『っ！？ があああああっ！？』』』

予想もしなかった回避方法と攻撃方法。

プレスとプレスの隙間を駆け抜け、走り抜き様に前足の線を断ち切った。

体勢を崩し倒れこむケルベロスだが、追撃が来ないようにブレスを
辺り一面に撒き散らし立ち上がる。

すぐさまディアラハンとサマリカームを唱えるが、完全に「殺され
た」足は再生する事が出来ない。

「安心したのが間違いだったな。窮鼠猫を噛むを地で行ってみたが
お味は如何かな？」

「『『ぐううう……回復や蘇生も無効とはな。だが、まだワレは
戦えるぞ』』」

「そうでなくちゃ楽しくない。始めたばかりの遊戯がすぐさま終了
じゃ味気ないだろう？ それも何気にダメージが多いようだ」

完全に氷付けになった左手。少しの衝撃で脆く壊れるだろう。

今度は回復しない。お互いに手と足を交換したと思っていた、狂気
に近い考え方だがそれも七夜という存在を更に高める意味がある。

じりじりと再び距離を詰めていく七夜とケルベロス。

「『『次で終わりにしよう。お互いの体力的にそれが限界だろうか？』』」

「その身体で既に限界とは、老骨は労るべきだ、そうでなくては守
護者としての役割も果たせないだろう？ さて…もう少しこの殺し

合いを楽しみたかったが、ダラダラ続けていても楽しみは長続きしないか』

『『殺したとしても、殺されたとしても貴様の事は覚えておこう。ヘラクレスの次にワレをここまで追い詰めた、もしくは殺した相手が居たと言う事を』』』

お互いの殺気がどんどん膨れ上がって行く、七夜もケルベロスも次の一手で最後になるだろう攻撃を繰り返す。

メギド！

メギド！

メギド！

す前にお互いに降り注ぐメギドの爆発を避ける。

「んなっ!？」

こなたが驚き見た方向には

『これは丁度良い事になりましたね。パトリムパスの奉る神と、痛手を負ったケルベロス、そして汚らしい人間達が揃っているとは』

何十体もの天使がニヤリと笑いながら此方を見ている姿があった。

『『『なんのつもりだ…貴様等ああああああっ！』』』』

『同感だ、楽しい祭りを邪魔しないで貰おうか』

『目障りですね。我等は神の代弁者、口を慎みなさい』

『この地に住みしケルベロス、そして龍の姫、紛れ込んだ人間を滅ぼす機会を伺っていましたが、これは丁度良い場面に到着できました』

『傷ついた魔獣と動けない龍の姫、そして人間程度ではこの数に勝つ事は出来ないでしょう。我等ドミニオンが貴方達を地獄に送り返して差し上げます』

突如現れて勝手な事をそれぞれ告げる天使達。

その余りに勝手な態度に怒りを超えて呆れさえ感じてしまう彼女達。そして名誉ある戦いを邪魔され怒り狂うケルベロス。

「KYなんてもんじゃないよね…そりゃあのペルソナもケルベロスもどつでもいいけどあれは無いんじゃないかな」

『どつちにしても、あいつら私達も狙ってるし倒すしかないんじゃない？』

『たかが天使の分際で、訳の分からぬ事を…』

あれが天使…あれが天使…あれが天使……同じ神族として恥ずかしい限りです。

天使の余りの空気の読めなさ態度に情けなさ過ぎてこなた達に謝る小竜姫。

しかしその言葉を聞いたドミニオンの一体が表情を変え小竜姫向って怒鳴りつけた。

『貴様の様な龍神ごときが神族などとふざけた事を言うとは！ 所詮龍など我々の神に駆逐されし愚かな種族！ 何を同族とふざけた事を！ 貴様に生きている価値などありません！』

『元天使のフォルトゥナさん一言』

『…ノーコメントでお願いしますアリス様。正直泣きそうですあの馬鹿さは』

「天使ってあんなのしかないのかなあ…」

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおん！！！！

耳を劈く咆哮が直ぐ近くから聞こえる。その咆哮には怒りがあつた、
純粋な怒りがあつた。

戦いを汚された事に対する怒りが…咆哮となり漏れて行く。

威圧感が辺りを覆い尽くす…

『『『雑魚共が…訳の分からぬ理由で、ワレ等が戦いを邪魔したの
か…許さぬ……許さぬぞおおおっ！』』』

怒り狂う地獄の番犬。そして怒りを感じているのはケルベロスだけ
ではない。

『…ああ、殺しても良いんだらう？ 誘蛾に誘い込まれた愚かな鳥
…救われないなアンタら』

『下等な霊体ごときが何を偉そうに……え…』

それ以上ドミニオンが口を開くことは無かつた。一瞬でその身を1
7の肉片に分解されマグネタイトとなって消えて行く。

直ぐ傍には七夜が立ち、気だるそうに他の天使達を見ていた。

あまりの出来事に驚き動く事が出来ない天使達に、七夜はゆっくり

と口を開く。

『奈落より這い山河を越え大路にて判を下す。、ヤマの文帖によると、アンタ等の死は確定らしい。罰を罰と知る前に罪に溺れて自殺する事をお勧めするよ』

『『肉片さえ残さぬ。貴様等は全員ワレが食らい尽くしてくれよ
うっ！』』

虐殺が始まった。

アナライズ成功……ケルベロス

「名前」：ケルベロス 「種族」：魔獣（異端）

「現在LV」：66 「属性」：N・N

「ステータス」

HP：541（強化：6751） MP：285（強化：1250）

力：45 知：37 魔：37 体：40 速：44 運：42

「強化後」

力：60 知：52 魔：52 体：55 速：59 運：57

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖：× 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

- ・ 超高位分霊
- ・ 火炎ハイブースタ ・ 氷結ハイブースタ ・ 猛毒ハイブースタ
- ・ 火炎反射 ・ ムド防御 ・ ハマ防御 ・ 勝利の雄叫び
- ・ 連続攻撃・強 ・ 達人の感

「スキル」

- ・ 虚空爪激？ 敵単体に剣属性超絶ダメージ
- ・ 狂気の暴虐？ 敵全体に2〜6回の剣属性、特大威力ラン

ダム攻撃

- ・ ファイアプレス？ 敵複数に火属性特大ダメージ。3 - 7回ラ

ンダム攻撃

- ・ アイスプレス？ 敵複数に氷属性特大ダメージ。3 - 7回ラ

ンダム攻撃

- ・ 毒ガスプレス？ 敵全体に無属性大ダメージ。致死毒を超高

確率で付与

- ・ 猛反撃 近々遠距離物理攻撃時、高確率で威力2倍

で反撃。

- ・ デイアラハン？ 味方単体のHP全回復
- ・ サマリカーム？ 対象の死亡、昏倒を回復。HP回復：特大。

超高位分霊：合体しても姿が変わらない。

火炎ハイブースタ：火炎魔法に2段階の補正

氷結ハイブースタ：氷結魔法に2段階の補正

猛毒ハイブースタ：猛毒魔法に2段階の補正

火炎反射：相性などを無視されても火属性の攻撃を完全に反射する

ムド防御：相性などを無視されてもムド系魔法を完全に無効化する
ハマ防御：相性などを無視されてもハマ系魔法を完全に無効化する
勝利の雄叫び：戦闘終了後HPとMPが全回復する。
連続攻撃・強：1ターンに3回行動可能。
達人の感：あらゆる回避率に補正

Continue 68 〈加速する牙と爪〉（後書き）

という訳で戦闘を思いつきり邪魔されたけるんなやんでした。滅茶苦茶切れてますねえ。更に言えばこなた達もKYぶりにあきれ返ってるという。

次回は天使達がぼこぼこになる？ お話ですねえ。

でもドミニオンだからメギドもありますし、結構辛い…？ 佐藤君早く起きろー。

あ、起きたら七夜消えるのか…はてさてっ！！

どうでもいいこと

ほっとけーきが食べたい今日この頃…皆さんはどんな風な味付けですかー？

我が家は砂糖少な目の蜂蜜オンリーですよー。

バターは太るからダメさ…そうなのさ…うふふふふふふふふ…

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュキャラクター

ダッキです

投票について（中断中）

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえる嬉しいです。

C o n t i n u e 6 9 　↳ 蹂躪する者される者　(前書き)

おお…何だかんだで69話です…よく続いているなあ…と少し自分を褒めてあげたい気分です。

内容は薄いので其処突かれると厳しいですけどね(笑)

という訳で、その頃々々を含めたメインのお話です。ちょっと終わり所が見つからなくて少し長くなっちゃいました(汗)

ではではどうぞです。

Continue 69 へ蹂躪する者される者へ

ドミニオン達がケルベロス達とエンゲージする、少し前

およそ、ケルベロス達から数百メートル以上離れた地点に彼等はいた。

『私は天使、失格なのかもしれん…』

ケルベロス達の所に向ったドミニオン達の仲魔である天使ヴァーチャーが一体其処に立っていた。

傍には気絶しているパールヴァティが居る。先程ケルベロスが放ったブレスの衝撃でここまで吹き飛ばされ意識を失っていたのだ。

其処に丁度良く天使達が現れ彼女を発見したのだ。ドミニオンの1体がパールヴァティが人間の仲魔だと言う事を知っていた為 先のヴァーチャー戦の時に監視していたらしい

これを利用して、彼等の中では格下の存在であるヴァーチャーに指令を与えた

『この悪魔を使い人間達の動きを止めよ』

と。確かに神の供物である蟠桃を占有するケルベロスは退治しなくてはならない存在で、神を語る龍神の姫も殺さなくてはならないのだろう。

だが、これは果たして善なる行いなのだろうか…今やろうとしている事は我々天使がもっとも蔑む行為とされる事なのではないのだろうかと、彼はドミニオン達に思いを馳せる。

勿論、それが神の御意思ならばこれもまた正義の行いなのだろう。

この者達は邪悪なる悪魔と汚らわしい人間達、そこに情けも容赦もいらぬのかもしれない。絶対なる善を貫く為にはそれも必要な行為なのかもしれない。

しかし、このヴァーチャーはそれをどうしても受け入れられなかった。

『……………美しい。彼女の様な存在が悪魔などと…私には到底思えない…はは、私も墮落してしまうのかもしれない』

自嘲する。

天使達にとって一番必要な物は神に対する信仰と崇拜。それ以外は必要としない。

神を信じ、神を愛し、神と共に歩む事が天使の幸福であり、使命だ。他の者に必要な感情を持つ必要など無い。

もしそうなってしまった時、それは天使では無くなり、墮ちる。

天使達が最も忌み嫌う墮天使に成り下がってしまったのだ。その恐怖は到底抑えきれぬ物ではない。だが、それでもヴァーチャーは彼女を使い人間を陥れる事を良しと出来なかった。

『…うん……』

『！？』

パールヴァティが小さく呻き声を漏らした。どうやら目が覚めたらしい、ヴァーチャーはそれを見ても動く事が出来ずに彼女を見つめる事しかできなかった。

ゆっくりと眼を明け、身体を起こす彼女。どうやら記憶があやふやになっているらしくキョロキョロと辺りを見ている。

直ぐにヴァーチャーの姿を見つけた後、即座に戦闘態勢に入る事も無く人好きのする笑顔で彼を見つめた。

『あ……ああ……』

『くすくす。私を見てくれたのかしらあ？ 天使にも優しい方は居るのねえ』

『ち、違……私は……』

『うーん…とお。サマナー様達が心配だわあ、直ぐに行かないとお』

漸く落ち着いたのか、先程までの事を思い出し立ち上がろうとするパールヴァティ。しかしそれをヴァーチャーが止める。

『ま、待てっ！ お前はそのまま行くつもりなのかっ！？』

『ん…少しダメージはあるけどねえ。急がないとサマナー様が大変な事になりそうなのよねえ。相手はケルベロスだし』

『無理だっ！ お前を形成しているマグネタイトに少なからずダメージがある。もしこれ以上ダメージを受けたら霧散するぞっ！』

『その時はCOMPに戻るだけよお 心配しなくても平気だから安心なさい』

『いかんっ！ 天使としてお前の無謀を見過ごす訳にはっ！』

いつの間にかパールヴァティを使って人間達を止める、と言う事などすっかり頭の中から消え去り彼女を抑えようとするヴァーチャー！

あの衝撃は思ったよりも体中に打撃を与えていたようで、押さえられると抵抗も出来ずに座らせられてしまう。

彼女としても直ぐにサマナーの居る場所に向いたいがどうやらこのままでは役に立て無さそうだと、冷静に思考し始めた。

そもそもヴァーチャーが何故自分にここまでするのかが分からない。女神とは言え、天使にしてみれば抹消の対象だろう。それも気を失っていたのだから殺そうと思えば直ぐに殺せたはず。美貌には自信があるし魅了も持つてはいるが誘惑はされてないようだ。

となるとこの天使が単純にお人よしなのかもしれないと、甲斐甲斐しく回復魔法を唱えるヴァーチャーを見つめていた。

『……私はお前を使ってお前の言うサマナーの動きを止めると言われてここに居た。決してお前を助けるためではないのだ』

『天使つて、素直過ぎるわねえ。それをバラしてもいいのかしらあ？』

『今更遅いからな……私は天使だ。よしんばその行動が正しい事だとしても、私の中の正義はそれを認める事を良しとしなかっただけだ』

『ふうん……変わってるわねえ』

『かもしれないな……私は他の天使と比べて浮いていた所もある……恐らく墮天使に近いのやもな……ははは……』

ヴァーチャーは今でも神を敬愛し、崇拜している。

だが、それ以上に正義もまた愛しているのだ。彼の持つ正義はこの様な人質を取る方法を認める事は出来なかった。

自分の正義を実行すれば、同胞を裏切り。同胞の頼みに従えば、自分の正義を裏切る事になる。

感情が緋い交ぜになり動く事が出来ず、タイミリムットになってしまったがそれでも後悔はしていなかった。

恐らくこの後同胞によって裏切り者と断罪され殺されるのだろう、それでも彼の心はともスツキリしていた、自分を最後まで貫いたのだから。

『これでいい、行くならば直ぐに行け。しかしこの先に居るのは我等が天使の中でも上位の主天使達だ。お前では勝つ事は難しいだろう…それでも行くのか？』

『当然よお。身体も楽になった事だし助かるわあ。でも、貴方はこれからどうするつもりい？』

『同胞を裏切ってしまったのだ。断罪される為にここで待つ。愚かな天使には相応しい最後だ』

『…お馬鹿さあん』

『な、なんだと！ 私のどこが馬鹿だというのだ！』

『どこがと言われるとお、全部かしらねえ』

『ん…ななな…』

にこりと笑い人差し指を頬に当ててくすりと笑うパールヴァティ。
対して馬鹿にされたと怒りを頭にするヴァーチャーだが、次の言葉で強制的に熱が冷めてしまう。

『相手を助ける事で、殺されるなら神様も天使もいらないわあ。そんなの悪魔と何が違うのお?』

『あ……』

『貴方にとって、神様ってなあにい?』

『わ、私にとって……神は』

考える、単純に崇拜し、尊敬し、愛した神について考える。

今までヴァーチャーは神について深く考えた事がなかった。絶対なる存在、絶対なる善、絶対なる正義、それで十分だと考えていた。

しかし、それは天使の共通認識であってヴァーチャーが信じる神は少し違う。

誰にでも優しく、施し、愛し、許し、正義の心を持ち、弱き者を助け、邪悪を挫く、そして卑怯な真似などをせず。誰に対しても善の心で接する。それが彼の望む神のイメージだった。

ヴァーチャーというランクで居る以上、自分が神に会う事は出来な

いがそれを想像し、いつかは総てを救う存在になろうと考えていた。だが……今やっていることは、まったくの別だ。

戦っている最中の悪魔達に乱入し、弱っている所を叩く。更には仲魔を人質にとつての人間達の足止め。

それは…彼の望む所ではない。そして彼の信じる神はそのような事を良しとはしない。

『私が真実、信じる神はどのような存在にも救いの手を差し伸べ、愛を授けてくれる方だ』

『ならあ、貴方のした事は間違つてないわよねえ。どうかしら？』

『……………詭弁…だが、そうかもしれないな』

『なら貴方のする事は違つてないかしらあ？ 今貴方のする事は何なのかしらねえ？』

『……………この様な振る舞い神がお許しになる筈がない…私は例え同胞を手にかけたとしてもこの様な愚かな真似を止めなくてはならないっ！…名前を伺つても宜しいか女神よ』

『今は、パールヴァティよお デートのお誘いかしらあ』

『違つっ！ パールヴァティ殿。私も貴方に付いて行こう。私が彼等を止めなくてはならない。これ以上天使の尊厳を傷つける訳にはいかないのだ』

その眼には強い意志と信念が見えた。

敵になった場合ややこしい相手を作ってしまったかとも思いつつもパールヴァティは笑顔でヴァーチャーを見つめる。

『くすつ、良い男ねえ　私にサマナー様という存在が居なければ抱かれていたかも知れないわあ』

『んなつ!?!?　そ、そのような破廉恥な行為は神がお認めにならないぞっ!』

『ええ?　でもお、正常位ならOKって聖書に載っていた気がするわあ』

『どんな聖書かつ!?!　パールヴァティ殿っ!　貴方は仮にも女神なのだからその辺を矯正する事を進めるぞっ!』

『残念ねえ　じゃあいきましょうかあ。具体的にはどうするつもりなのお?　多分ケルベロスも居る筈だし、どちら相手にするのは骨が折れるわよお?』

『そこが問題だ。私は所詮ヴァーチャー、ドミニオン様にはそもそもレベルの時点で負けている。更には数十の数で攻めているからな、攻撃で止めるのは難しい』

『随分な数ねえ。そこまでしてケルベロスを倒したいのかしらあ?』

『追加で言えば龍神の姫と人間もだな。ドミニオン様達は神以外に神を名乗る存在を許せないのだ。人間は悪魔を使役するから抹殺しなければならぬし、ケルベロスが守護する蟠桃は神の供物として捧げたいらしい』

『……天使って本当に敵を作るのが好きなのねえ。頭が痛いわあ』

普段刹那的に生きているパールヴァティすら匙を投げたくなる馬鹿さ加減に、ヴァーチャーも初めて自分達のやっている行いが途方も無い事だと考え始める。

この考えで行けば必要なのは神と天使だけで、他の存在は必要が無いと言う所まで行ってしまいそうだったからだ。

改めて考えると、天使達は目的を忘れて手段だけを講じているようにしか見えない。

神は総てを愛し救う存在なのだから、悪魔だからと言って救いの対象にならないと言うのはありえないのだ。

更に人間は神を信じ愛する憐れな子羊なのだから守らなくてはならないのに、それを総て滅ぼすのは本末転倒でしかない。

『…もし私が天使にこれを説いたとしても異端としか見られないのだから…神を信じすぎて盲目になっているのか我々は…』

『それが分かっただけでも十分じゃないかしらあ？ 天使にもまともな相手が居るだけで十分だと思うわあ』

『そうかも…しれんな。さて、急ごうケルベロスとドミニオン様達が戦えば多分とんでもない事になる』

『そうねえ…蹂躪が始まってそうよね。どれくらい生きてるかしらあ』

『い、いや。如何にケルベロスが強いといってもドミニオン様達が30以上、数の暴力には』

『それで負けた私達もいるわよあ』

凄く嫌な予感を漂わせながら二人は大樹達のドミニオン達の下へ向かって行く。

其処で見るものは

『ば…馬鹿な…馬鹿なっ!?! 馬鹿なあ!! あれほどまでダメージを受けて尚我等を圧倒するといふのか貴様等はっ!?!』

圧倒的という表現が一番似つかわしいだろう。

30以上居たドミニオン達は既に残り半分にまで数を減らしていた。ケルベロスのブレスを避ける事もできずに消滅して行き、縦横無尽に動き回りすり抜ける度に切り刻まれ肉片と化し死んで行く。

弱点である風の魔法でぐら付いた所に100%の命中率で頭を撃ち抜かれ死んで行くドミニオン。

数体はケルベロスに多少の傷を負わせたりするがそれも直ぐに回復され意味が無い。

こなた達の方に向かう天使の前には小竜姫の指示の元、危なげなく戦うみゆきが守護神の様に立ちふさがり天使を切り裂いて行く。

放つメギドはアリスのメギドに撃ち負け弾き飛ばされてしまうほどだ。

『蟲は蟲なりに地中に潜り人生を謳歌するべきだった、存在を変えようにもアンタらじゃ鳥にはなれない』

『が…あああ!?!』

豆腐を切る様にナイフを動かしました一体ドミニオンが殺される。

あれほど数で優位に立っていたドミニオン達は、既に窮地に立たされていた。

ダメージを受けたケルベロスならばメギドの連発で殺せただけなのに、それを邪魔したのは七夜とこなた達だった。

七夜は折角の殺し合いを邪魔された為に雑草処理という名目でドミニオンを屠り、こなた達は自分達に攻めてくる悪魔を倒して行く。

こなたとしてはドミニオンとケルベロスが相打ちになってくれれば良いなと考えていたが、流石にあの程度の実力では無理だなと諦めても居る。

『我が主よ…早くお目覚めになられて下さい…』

フォルトウナが大樹の顔をびこびこ触りながら心配そうな表情で見つめている。

実体を持たたとはいえ、本体は銃である以上彼女が自分で魔法を使うことは出来ない、大樹と一緒に戦わなければただのマスコットの様なものなのだ。

こなた達が懸命に戦っているのに自分だけが何も出来ないのがとても歯痒く、そして未だに目覚めない大樹を心が張り裂けそうなほど

心配していた。

七夜が存在している以上、大樹は死ぬ事は無いかもしれないが、彼はそのダメージを大樹に投げつけてくる最悪のペルソナだ。

早く目覚めて制御しなければ大変な事になると、彼女が出来る限り大樹の目を覚まそうと頑張っている。

それゆえのぴこぴこなのだが、そんな小さな手で頬をつんつんした程度で起きる訳もなく、未だに眼を覚ます事は無い。

『『この程度の実力で…よくもワレ等の戦いを邪魔してくれたな』』
『貴様等はマグネタイトに変わる前に完全に消滅させてくれよう』』
『っ！』』』

脅えていたドミニオンの一体に飛び掛るケルベロス。

『ひっ！？ ひいいい！？ ぐええええっ！？ 重いつ！？ 重い
いいいいっ！？』』

『『焼き尽くすか？ 凍て付かせるか？ 毒で溶かすか？ 食ら
い尽くされるか？ 好きなものを選べ』』』

『どっ、同胞よっ！？ 同胞よっ！ 私を！ 助けっ！？ 助けっ
…っ！』』

何かを握りつぶした音と共に踏み潰されるドミニオン。それでもまだぎりぎり生きてはいるようで、マグネタイトになる事もなくその場にぐちゃぐちゃになって倒れている。

踏み潰しただけでは飽き足りないケルベロスは、そのドミニオンを何度も踏み潰した後炎のプレスで完全に焼き殺した。

怒りはそれだけでは収まらず、ギラついた6つの瞳は残っているドミニオン達に向けられる。

『『『残るは貴様等だけだ、楽に死ぬると思うな…？ 八つ裂きにしてその上で焼き尽くしてくれる』『』』

『お、おのれえええっ！ 同胞よ！ 一斉掃射だっ！ 奴は手負いダメージは蓄積されている！ これで落とすぞ！ メギド…！』

メギドの雨がケルベロスに降り注ぐ。

圧倒的にケルベロスの方が戦力が上とはいえ。万能属性の超威力魔法を与え続ければ勝てるかと踏んだのだ。

更に言えばケルベロスの前足は再生することなく3本のまま、つまり再生が追いついていないのだと考えていた。

本来は直死の魔眼で肉体を切られたので、回復しないだけなのだが…ちなみに爪を断ち切られても再生したのは爪は生えるものであり根元を断ち切られない限りは再生する。

足も切られた部分を切り取れば恐らく回復するだろう。

耳がおかしくなりそうなほどの爆音が響き、ケルベロスの周りが爆発で出来た土煙に隠されていく。

『くっ…くはははははっ！ 避ける事も出来ないほどダメージを受けていたとはなっ！ 同胞よ手を休めずに撃ち続けよっ！ がはっ！？』

左肩を撃ち抜かれて体勢を崩すリーダー的存在のドミニオン。

焼け付く痛みを抑えながらも攻撃された方向を見る。

「ちえっ、頭は外したか。少し焦ってたかも」

其処にはスナイパーライフルを構えているこなたの姿。

絶え間なく動いているというのに、自分に当ててきたその命中率に脅威を感じ他の仲魔に抹殺を命令する。

本来ならばここでヴァーチャーが人間の足止めの為に悪魔を連れてくる筈なのに、未だに彼は現れない。

『でも十分当ててるのが凄いわね』

「此方に一体向かってきますっ！ 小竜姫、指示をっ！」

まずは動きを止めるのです。バフォメットは天使の行動を阻害してください！

『ふん…行くぞ！ ガルダインっ！！』

流石に見え見えの魔法、ドミニオンは容易く避けるが、それが罠だった。

避けたと思った瞬間に腹部と胸部に感じる強い痛み。

余りの激痛に飛ぶ事すら叶わず落ちて行くと其処にはみゆきの姿が

『う、うおおおおおっ！？ め、メギ 』

「遅いですっ！！」

魔法を唱える前にみゆきのダブルインパクトがドミニオンの首を断ち切り、返す刃で胴体を切り裂いた。

一瞬の内にマグネタイトに変換され、それは総て小竜姫の剣に吸収されていく。

消えて行くドミニオンを見ながら、警戒は解かず彼女は七夜を見つめていた。

『くっ！ 皆散開するのですっ！！ ぐあああっ！？』

『ひいいいっ！？ 当たらないっ！ 攻撃が…魔法が…ああああああああああああっ！？』

呼吸するかのようにドミニオン達を殺して行く七夜。

その表情は先程とは違い、能面の様に無表情だった。恐らく彼自身戦いを邪魔された事に苛立っているのだろう。

大樹が召喚したペルソナ。先程見たペルソナとは違い実体化し本体が気絶しても存在し続ける非常識な存在。

だが、それよりなによりみゆきは七夜の姿や能力に疑問を持っていった。

見た感じ、元々は人間なのだろう。それが何故ペルソナになっているのかは大樹に聞かないと分からないが、あの能力は一体なんなのかと疑問に思う。

彼は恐らく狂人で、自分の欲求のために動くのだと…それは先程の戦いで十分理解した。

そういう人種は見た事は無いがこの世界には少なからず存在すると知っている、それはいい。だがあの能力はなんなのだろう。

切った部分を再生させないという能力。

爪は再生したが、肉体はそのままだ。恐らくナイフの効果ではないはず、ならば彼の能力なのだろう。

再生を封じる力…？ いやもしそうならば爪を伸ばす事も無理な筈だ。爪が生えると言う事は再生すると似たようなものなのだから。

極めつけは…先程起きたありえない現象だ。

仲魔が傷つき自分も死にかけたドミニオンが苦肉の策でリカームドラを唱えたのだ。

あの魔法は裏を調べていたみゆきも知っている。自分の命を生贄に捧げ、仲魔を蘇生し癒すという自己犠牲の魔法。

効果はちゃんと発動し、マグネタイトにならずに死んでいた者や傷ついていた者が回復したのだ。

だが……

七夜が殺した、もしくは傷つけた仲魔は蘇生も回復しなかった。

いや、その表現は正しくは無いだろう。一応体は癒され、蘇生はした…しかしバラバラになって死んでいたドミニオンは蘇生と共に再び死亡した。肉体が元に戻ることなく。

そして、身体の一部を切られていた天使はそれ以外の場所は再生したが、切られた部分は一切回復しなかったのだ。

ケルベロスによって殺された天使は完全に蘇生し、回復したのに比

べ七夜に殺され、傷つけられた天使はそのままだった。

それは何故？ 一体どのような能力が？ この様な時だというのに
みゆきはそれがとても気になった。

もしかしたら、大樹が目覚めないのはあのペルソナが特別で、あの
能力を使っているからなのではと危惧している。

「…もし万が一あのペルソナが此方の敵に回れば…ただでは済みそ
うにないですね…」

現在グダグダになっているが、ケルベロスは健在で、七夜も消える
気配は見せない。

もし天使を全滅させてもまだ本命が残っている。七夜が消えなけれ
ば再び戦いになるだろう…それはいいのだ、勝ってもらわなくては
困るのだから。

しかし、万が一七夜が消えたら…ケルベロスも倒しても七夜が此方
を襲ってきたら…

此方を一撃で半壊させたケルベロスにダメージを受けているとは言
え勝てるとは思えない。それ所か手負いの獣は手がつけられない。

その脅威の悪魔と同等に戦っているペルソナが此方に牙を向けたら…

最悪大樹がくれた文珠を使っても逃げるしかないと思考する。

「佐藤さん…貴方は何者なのでしょうね…」

こなたが信じている…そしてみゆきも彼を信じたい。

世界がおかしくなっている今、仲間を信じずに誰を信じれば良いのかと自問する。

今はただ…目の前の脅威を取り除こう、みゆきは小竜姫の剣を構え前に立つ。

「ここを通させはしませんっ!!」

「おお…みゆきさんがヒーローしてる。この場合ヒロインは誰かな」

『大樹さんかもっ!』

「あ、あはははは…」

気が抜けそうになるが、これもこなた達なりの激励のしかた。

一寸先は闇所の話ではないが、諦めれば終わりなのだ、馬鹿な事をやっても生き残ろうと懸命に立ち向かって行く。

そして…メギドの連打を受け続けたケルベロス。流石のドミニオン達もメギドの連発で疲労している。

『これだけ食らえば、あの魔獣も……』

ニヤリと笑ったドミニオンはそのまま何も出来ずに消えて行った。

土煙の中から吐き出された3種のプレスが魔法の使いすぎでその場に留まっていた天使達を焼き尽くし、凍て付かせ、猛毒で殺して行く。

『『虚け者共が……この程度で……この程度でワレを殺せると思っ
たかあああつ!!!』』』

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオン!!!

響く咆哮。

地響きを鳴らしつつ、煙の向こうから現れたケルベロス。

体中に浅くは無い傷は負っているものの、メギドの連発を受けて尚致命傷にすらなっていない。

それ所かダメージのお陰で獣の本能が昂り、ステータスが上昇して

いるほどだ。

このままでは全滅する。せめて人間と霊体の方に割り当てている同胞を此方に回せれば、と齒噛みする。

その時…待ち望んでいた同胞がやってきた。そしてそれと同時に驚愕する。

『パールヴァティっ！ あ、あれ？ 何でヴァーチャーと一緒に…？』

『貴様何処に行っていた！ というよりそいつは何者だ！』

『遅れましたわあ ヒロインは遅れて参戦ですよお 三つ巴と言っか乱戦ですわねえ』

『ま、間に合ったか…』

『ヴァーチャー！ 何のつもりです！ 貴方の役目は！』

『ドミニオン様！ お引きください！ 貴方達は間違っている！』

ヴァーチャーの叫びに戦場が止まる。

七夜を除く全員がヴァーチャーを見ていた。ドミニオン達は信じられないといった表情で、こなた達は驚きつつもパールヴァティと一緒に居た意味を理解しつつ、ケルベロスは単純に見つめ。

『我々は神の命で動く正義の使徒！ この様な奇襲など我々が行って良い行為ではありません！ 直ぐに撤退を！』

ここまでやっておいて撤退も何も無いと自分で思っではいるが、それでもこれ以上の戦闘は自分達の尊厳を汚す行為だと説得するヴァーチャー。

ドミニオン達はそのヴァーチャーの言葉に耳を…

『魅了でもされましたか… 所詮は下位の天使…！！ 良いですか聞きなさい！ 私達の行う行為は神の認めし行為！ 我々が行う事こそが正義であり善なのです！ 神の意思の前に卑怯などと言う言葉はありません！ ヴァーチャー… 貴様を墮天使と判断し抹消します』

『そ… そんなつ！ それは正義ではない！ それでは我々が忌み嫌う悪魔と同じではないですか！ 神の名の元に総てを通すなど神を汚す行為です！』

『黙れ墮天使！ 薄汚い口で神を語るなつ！ 全員構わずケルベロスと葬りさり、人間を殺すのです！』

『おおおーっ…！！』

誰一人としてヴァーチャーの声に耳を傾ける天使は居なかった。

それ所か、自分達を絶対と認めそれ以外を墮落と断罪し墮天使とまで呼ぶ始末に、ヴァーチャーは絶望しそうになる。

『これが…これが天使だというのか…私の正義は貴方達にとって悪だというのかっ!! ドミニオンっ!!』

「無駄だよ、あれは神に狂ってるって感じだし」

『人間…』

「貴方がもし、彼等を止めたいのであれば…言葉ではなく態度で止めるしかありません。私達も手伝いましょう」

『……分かった、手を借りよう…私は私の思うまま、天使としてあり続け正義を目指す!!』

立ち上がるヴァーチャー。その眼には微塵の迷いも無かった。

ひとまずこなた達と共闘し、ドミニオンを倒す事にする。後の事はその後考えよう、ヴァーチャーは槍を持ちこなた達の前衛に立つ。

向ってくるドミニオンにみゆきと共に立ち塞がり戦って行く。

『死ねええっ! 裏切り者がああああっ!』

『神を裏切ったのは汝等の方だっ!!』

剣と槍が火花を散らしていく。

気迫はヴァーチャーのほうが勝っているが、そもそもレベルに差がありすぎるヴァーチャーでは攻める事はおろか抑えるのがやっと。

そこにみゆきが参戦することで、彼も何とか戦っていける。

再び剣を振りかざしたドミニオンがそのまま動きを止め、ぶるぶると震え始めた。

『あ……あああ……』

『くすくすくす。どうかしらあ。私の身体　貴方の好きにしてもいいのよあ』

ゆつくりと前に出てきたパールヴァティ。しかし其処に居た誰もがあんぐりと口を開け動けない。

唯一こなたが「ちくしょう、ちくしょう」と黒い表情で呟いているくらいだ。

美しい裸体を曝け出し、妖艶な瞳でドミニオンを見つめるパールヴァティ。スキル、ファイナルノードでドミニオンを魅了したのだ。

『私のお願い、聞いてくれるかしらあ』

『……………はい』

『ならあ、あの天使達が苛めるのよねえ…助けて欲しいのお』

『お任せを…!!』

ふらふらと飛びながら近くに居たドミニオンを切りつけて行く魅了された天使。

行き成りの出来事に抵抗する事もできないまま、一体が殺されていく。それでも魅了が解けないドミニオンは再び違う天使を襲っていく。

『漸くお披露目出来たかしらねえ』

『魅了ハンパないね…てか胸おつきい…ううう』

『パールヴァティ殿！ 破廉恥すぎますっ！ 直ぐに服を！』

『開放感があつてよくないかしらあ　なあんてねえ、そんな怒らなくてもいいじゃないのお』

『す、スキルですし…まあ、仕方ないかと』

……………あの脂肪の塊は私に対するあてつけですか…そんなんですかっ!？

一人違う意味で魅了？　というか暴走している神様が居たが無視された。

『と、とりあえずがんばろっ！　うんうんっ！』

なんだかグダグダしつつもこなた達の方はなんとか戦っていた。

そしてたった一人ドミニオンと戦っている七夜だが、流石に相手の弱さに飽きが来ているようだ。

魔法は容易く避け、攻撃はあっさりで見切り、此方の攻撃は相手を容赦なく傷つけて行く。

何時しか10体ほど居たドミニオンは、残りたったの2体になっていた。

『弱い、脆い、遅い、鈍い、ああ、なんだアンタ等生きてる価値が無いな。俺と出会った事を後悔しておくといい』

『馬鹿な…こんな…ありえない……我々がケルベロスならともかく、このような下賤な霊体ごときに…』

『主天使と謳われた私達が、手も足も出ないなんて…』

『御託を並べてもスープにもなりはしない。蟲は蟲なりに這い蹲って動かなければ肥料すらならないな、地獄の果てで鬼に潰されやり直した方が良い』

恐怖で動く事が出来ない天使達に気安く話しかけ、同時に死を運ぶ七夜。

全身を細かく切られバラバラになり消えて行く。この時点で既に雌雄は決していた。残りの天使はケルベロスと戦っている数体とこなた達を襲っている数体。

それらも後数分もしない内に全滅するだろう。そうなれば今度はケルベロスとの戦いが待っているのだが、どうやらこちら辺が限界のようだった。

先程から絶えず聞こえてくる、男の怒鳴り声。無視して居たかったがどうやら強制的に大樹に戻させようとする力が働いている。

恐らく後1分も存在してられないだろう。

いい加減に戻りやがれっ！ お前は大樹を殺す気かっ！？

『別に興味は無いさ。あいつが死のうと生きようと俺には関係ない、確かにこうやって殺し合いが出来なくなるのは少々残念だがね』

あのなあ…俺だって男はどうだっていいが、お前は一応メインペルソナだって忘れてねえか？

『俺は俺だ、あいつも俺なら其処の所理解してくれと思うんだがね』

アホかつ！ 無理やり顕現してるせいで意識ねえのに何が理解だつっーの！ 良いから戻れっ！ そろそろ大樹の方がやばいっ！

『やれやれ、宮仕えは大変と言う奴だな。それで、あの獣はどうするつもりか聞きたいね？』

うぐっ……それがあつたか……つってもそろそろ限界なのはお前もわかってんだろ？

『行くも地獄戻るも地獄、刹那的で良いじゃないか』

脳に直接聞こえてくる男…横島の声、出来るならばこの男とも殺し合いたいと願うがそれは無理だと流石に理解している。

もう少しこの地獄で踊って居たかったがそれも無理なようだ、と身体力を抜きその場に座り込む。

『ああ、次もこうやって楽しみたいもんだ』

あのもう一人の自分はケルベロスにどこまで抗えるか、もしくは戦い以外の方法を選ぶのか。

ほかに切り札もある以上、死ぬ事は無いだろうとゆっくりと眼を閉

じ消えて行く。

同時に…大樹が眼を覚まし戦いは終盤を迎える事になる。

Continue69 〈蹂躪する者される者〉（後書き）

天使にもちゃんと良い子が居るんですよ！ というそれだけの為にヴァーチャーを書いた私です（マテ仲魔になるかは微妙ですねえ…皆さんの声如何によってはなるかもです。

パールヴァティさん気絶の巻でした。

戦闘描写も長く続くと大変です、出来る限り簡素にしてみました
が上手く行ったかどうか…

そして消えちゃったななやん、起きた佐藤くん。

こういつてはなんですが、戦力ダウンですね（えー

けるるとの戦いはどうなるかっ！ 何も考えてませんっ！（えー

どっでもいいこと

タラの芽げつとー テンプラに最適な山の幸ですよ

コゴミヤフキも沢山ゲットなのですっ！ アイヌネギ（ギョウジャ

ニンニク）もありますよっ！

これって…全部買つと万札が容易く消えていきますよね…ほろほろ

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュニケーションキャラクター

ダッキです

投票について（中断中）

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue70 く時は過ぎて、追い続ける事もできずく（前書き）

何だかんだで70話目です、随分書きました…私にしてはよく頑張った方かと思うですよ。

これもひとえに皆さんのおかげだと思っております。

沢山の感想などを頂いて、それが活力になって頑張れるですよ！

これからも頑張りますね。

さて、ケルベロス戦闘編もラストなのです。目覚めた大樹君が取る行動とは！

Continue70 く時は過ぎて、追い続ける事もできずく

僕が気絶している間に事態は二転三転していたらしい。

辺りでは天使達がケルベロスと戦い…いやあれは苛めに近いと思うけど、あっさり殺されている。

近くには倒れ伏した天使と、それを倒した仲魔達が居た。

よく分からないがペルソナを呼んだのは覚えている、其処から何が起きたかさっぱり分からないのだけどこれは一体どうなっているんだろう。

『我が主よっ！』

「うわっ！ とと…フォルトウナか誰かと思ったよ」

『お怪我はありませんかっ！？ どこか痛む場所はっ！？』

「大樹君っ！？ 良かった…」

『やったあ！ 大樹さんが起きたよお』

直ぐ近くでアリスやこなた達が僕を囲む様に陣形を組んでいる。恐らく気絶していた僕を護ってくれていたのだろう、迷惑をかけてしまったな。

ケルベロスと戦って気絶ですんでいるのだからまあ重畳なのかもしれないけど。

ふと、仲魔を見回すと見慣れない天使が一体バフオメットと話していた。あれは…ヴァーチャーか？　なんでこんな所に？

いや考えるより先に動く事を考えよう。何故か先程から左腕が突っ張る感じがするけど、気絶した時にぶつけたのだろうか…

「今の状況は？」

「ドミニオン達が私達とケルベロスに襲い掛かってきて返り討ち状態って所かな。残りはあつちで戦ってる数体だよ。それが終わればケルベロスがこっちに来るかもねえ」

「先程までは佐藤さんのペルソナが単身でケルベロスと対等に戦っていたのですが…いつの間にか消えています。このままでは危険ですね」

「ペルソナが単身で…？　僕は気絶していたのに動いていたと…？
一体どんな？」

ヘルやテンセンニャンニャンなどは召還しても一瞬で消えて行く。ペルソナとはそういうものだ。

暴走でもしない限りはずっと実体化なんて……いや　そうか、暴走していたのか。それならばペルソナが実体化している可能性は

高い。

でも、ケルベロスに単体で戦えるペルソナなんて横島位しか知らない、一体…？

「学生服来てたから高校生っぽいけど…後はね、変なナイフでこうスパスパーツとね。かなりやばかったよ」

「ナイフ…学生服…」

ナイフを使う学生という言葉で思い出した、一人あのケルベロスに勝てるかもしれないペルソナが居た事を。

愚者・ナナヤシキ

七夜志貴と書く、英雄の様な存在だ。月姫というゲームに出てくる遠野志貴という主人公の反転した性格とも言われている。

格闘ゲームでそのキャラクターが本格的に登場し、古臭い言い回しや厨二病のような語り方をする、生粋の殺人鬼。

その戦闘能力は、月姫の世界観では最上位とも言える吸血種すら倒し殺す事が出来るほどだ。その能力の最たるは…やはり直死の魔眼だろう。

死と言う概念を、『線と点』という状態で見ることが出来るという上位の魔眼。この線をなぞったり、点を突く事で相手に蘇生もできない程の絶対の死を与える事が出来る。

見る事さえ出来れば、たとえ相手が不老不死だと言おうと直死の概念の前には敗れ去るしかないという、文珠などが可愛く見えるチート能力だ。

現在の僕のレベルは27。アイツを召還するには最低でも30にならないければ呼び出す事が出来ない。

つまり…現れた七夜志貴は完全に暴走した状態で出てきたと言う事か…しかし良くケルベロス相手に対等に戦えたものだ。

七夜のレベルは35しかない筈なのに、あの悪魔と対等以上に戦えた事に驚きを隠せない。

相当無理をしたのだろう、直死の魔眼があるからとはいえ補正がつくのは強力無比な攻撃力と、死を見る事による緊急回避力だけだ。

肉体は人間のそれである以上、対等に戦っているように見えたのは多分上手く戦場が回っていただけだろうと僕は思う。

「どちらにしても…僕達は手詰まりか。今の内に逃げるのが得策かな。蟠桃は諦めてもらおう、はつきり言っただけだ…僕等じゃ無理だ」

「たいちよーにさんせーでありますっ！」

「仕方ありませんね。私達には荷が重過ぎる使命ですし。エンノオツツ様も話せば分かってくれると思いますし」

僕の意見に賛成してくれるこなた達。

初めから交渉は無理だと分かっている以上、有耶無耶になっている今の内に逃げるのが得策だ。

状況が混乱している今が逃げる最大のチャンスなのだから、これを利用しない手はない。

エンノオツヌが何を考えてこんな無茶な要求をしてきたのか……多分かもしれないけど、これもまた試練だったというのかもしれない。どんなに強くなっても、自分の前に立ち塞がる理不尽は必ず存在する、という警告という可能性もある。

単純に死んでこいとはあいつも言わない筈だ、そもそも不老不死と言う存在に成り果てているエンノオツヌが不老長寿の実を持って来いと言っていた時点でおかしかった。

僕等はそれを単純に聞き過ぎてしまったのかも知れない。

蟠桃を護る守護者は居るのか、どのような場所なのか、今の自分達でどうにかなる相手なのか……聞き出そうと思えば色々な情報があったはずだ。

それすらも怠り、「エンノオツヌの頼み事」だからと何も聞かずに出て来てしまったのが今回の出来事の一歩の敗因だろう。

『でも、いいんですのお?』

『私は賛成かな。今の私達じゃ逆立ちしても勝てないよ』

『悔しいがな……！ 何時か必ず越えてやる。我は魔王なのだから……！』

『我が主の御心のままに……』

「ヴァーチャー君はどうする？ ここに居るといつ時点でドミニオンの仲魔ではないと判断するけど」

『……もはや同胞達は最後の最後まで殺し尽くされるだろう。そうなれば私もここに居る理由はなくなる……だが、共に行動するのは遠慮させてもらおう。私は流石に其処まで厚顔無恥ではない』

「え、ついて来ないの？」

『私は、私の信じる正義のままに行動する事にした、秩序や法律は世界には必要なものだ、私はそれを捨てる気はない。しかしそれに捕らわれすぎて他を疎かにする気もない……今は多くを見て周り。自分の正義を、神の愛を知ろうと思う』

「うわぁ……本格的に主人公っぽいセリフだね……大樹君、ここでドカンと言いつ返すんだっ！」

「いや、なんでかな？」

どちらかと言うと法ロウというよりは混沌カオスっぽいけど。根はその辺の天使とは違つようだし馬鹿な真似はしないだろう。

敵に回る事は無さそうだし、もし敵になったとしても弱点は天使だから分かりやすいから放置でもいいかな。

となると、後は逃げる準備だけだ。ケルベロスは蟠桃を護っているせいか、それとも括り付けられているのか理由は分からないけど一定距離以上は此方に近づけない。

つまり……逃げるのは容易だ。問題は後ろからブレスを吐かれる事だけど、今の内なら問題ないだろう。

「幸い時間はあの天使が稼いでくれている。僕が殿になって逃げるから、合図をしたら全員退却だ」

「え……大丈夫……なの？」

「文珠もあるしマジックカードもある。この中でその気になれば一番硬いのは僕だよ。気にせずにブレスが来る前に逃げよう」

引くのも戦略、今回は致し方ありませんね。痛い授業料となってしまうましたが、これを励みにすれば何れ強くなれるはずです。

「わかりました……決して無理はなさらないで下さいね？」

「無理なんて僕が一番しない事だよ。さて……」

ケルベロスの注意が完全に逸れるまで、戦いの行方を見守る。

あの巨体とスピードで襲われたら、物理攻撃などは此方まで届かな

いとはいえ、あの此方のパーティを半壊させたプレスの範囲内なのだ直ぐに餌食になって全滅するのがオチだ。

僕とこなた、高良さんは文珠があるからある程度は【防】の効果で防げるだろうけど、出来るなら消費はしたくない。

横島製の文珠はもう残り少ないのだ、出来る限りこの後の事に取っておくのがベストだろう。

僕自身の文珠もまだまだ個数が少ないからそうそう容易く使うことは出来ない…こうなると万能ゆえに制限が多すぎる能力だと思う。

横島を召還できるようになれば前の状態に戻るというけど、果たして次はどの辺りで成長が止まるか…恐らく惜しい所で止まるとかありえそうだ、僕的に。

「……強いな。僕達はいつかあそこまでのクラスに辿り着けるんだろうか」

天使も弱くはないだろう。メギドを放ち剣で切り付けて行くその様は、キンキやアリスにも引けを取らない。

強いて言えば真っ直ぐすぎるせいで攻撃を見切り易いのが問題かなと思う。次にどうするかが分かりやすい上に天使は簡単に挑発に乗り易いから倒すのも容易だ。

強くても弱点を狙えば倒す事は出来るだろう。でも…ケルベロスにはそういった部分がまったく見られない。

弱点の攻撃を受けても物ともせず、その力で蹂躞する様は魔獣の王の様に見えた。

歴代女神転生で高確率でパートナー悪魔としてある存在……彼がもし仲魔になってくれればこの先随分と楽なんだけど、そういう訳にも……いかないか。

寧ろダツキがいるんだ、どうにかして彼女を御せるようになれば、ケルベロスとも対等に戦えるだろう。

何時そんな日が来るか分からないけど……この後元の世界に戻ってやることを考えると、近い未来そうなるかもしれないと感じた。

「！ 皆撤退！！」

「『』『』『』『』『』」

脇目も振らず全力で逃げて行く僕達。恥ずかしいと言われれば、だからどうしたと言いつ返そう。

何よりもまずは生き残る事が最優先だ。死んでしまえばそれで終わりなんだから、それを恥ずかしいとかそういう感情で無駄にするのは馬鹿のする行為だ。

今の所はケルベロスに気づかれていない……いや……？ 違う、あいつはこちらを見ている。何故それなのに攻めてこないんだ……守護者ならば僕達を倒す筈なのに……？

結局ケルベロスは僕達に注意を払う事も無く、安全に逃げ切る事が出来た。

……

……

…

ケルベロス視点

弱い、弱くて下らない。

この程度の力で、この程度の意志でワレを殺そうとしたか。

蟠桃を奪いに来たか！ 哀れで、それと同時に呆れてしまう、こんな者が天界の存在だなどと良く言えた物だ、これならば地を這う悪魔の方がまだ利口ではないか。

こやつ等の攻撃はワレの肉体に深手一つも負わせる事ができない。実力ではこやつら以下だったあの霊体が、ワレに死を与えようとしていたのに、この雑魚どもはそれすら出来ないのか。

『うああ…うがあああああっ!?!』

奥で踏ん返り返っていた最後のドミニオンが錯乱して襲い掛かってくるが、それも所詮悪あがきにしか過ぎず、ワレにダメージを与える事など出来なかった。

阿呆の様に笑いながらワレの体毛を剣で切り付けて行く様は最早哀れにしか写らない。

最早この下らない遊戯もこれで終幕だな、数だけはいせいで時間を取られてしまった。そのせいで本来戦うべき相手は既に消え去っている。

まあ、よしんば残っていたとしてもお互い興奮めしている状態だ、このまま戦ったとしてもあの滾る様な戦いは出来ぬだろう。

『『『もついい、去ぬ』』』

『あああははははははははははっ！ あははははははあぎゃ…あぎゃ…ぐええ…』

残っていたドミニオンを食い殺す、まずい…エサにもマグネタイトにもならぬか。

周りにはもう残っている天使は居ないようだな……いや、まだ複数動いている物が居るな…？

ふむ、あれは人間共か？ どうやら逃げるつもりだが。さてどうする…殺すのは容易いが既にこの天使共のせいで怒りも失せてしまった。

所詮ワレに苦痛を与える事も出来ない脆弱な存在、あの霊体との戦いの昂りをこれ以上上下らぬ争いであの戦いを汚すのは惜しい。

それにしても、手酷くやられたものだな。

未だに前足が再生せぬわ。よく分からぬ仕組みだが…切断部分が邪魔して再生しないのならばやりようは幾らでもある。

顔の一つを近づけ、前足を噛み千切る。血が溢れ出すが、これでいい。

『『『サマリカム』』』

先程まで一切回復しなかった前足が徐々に回復して行く、数秒ほどで元の前足に戻っていた。

ふむ…成程、傷つけられた部分を消してしまえば其処からの再生は容易という訳だな、再生防止まで持っているとは面白い魔眼使いだ。

ここまで心が震えたのは何時以来か…楽しい死合だった、邪魔さえされなければな。

あの人間共を逃がしたのは、この戦いをワレに捧げた報酬の意味も兼ねている。

長い時を蟠桃を護る為に存在し、心震わせる事も無くなっていた。今日はワレにとって最上の日であり最低の日になるだろう。

怒り、喜び、悲しむ日になるだろう。

いずれワレにここを任せた者がやってくるまで蟠桃を護り続ける日々を過す、何れまたこの時の様に全力で戦いたいものだ。

ケルベロス視点解除

依頼ナンバー05、『不老長寿の実の確保』

Norm

all Clear!!

Continue70 〱時は過ぎて、追い続ける事もできず〱(後書き)

全力で逃げた佐藤君パーティ。まあ、ドミが一瞬で倒される相手に勝てるはずもなく。

ななやんも実はギリギリで戦ってました〱という設定のようです)マテ

正直クリティカルしたら即死ですしねえ〱レベル的に。神懸りの回避が高いのと、当たれば殺せる攻撃があるから余裕に見えたかもですねえ〱

この辺の描写はまだまだ難しいです。容赦なく殺しても良かったですがそうなるゲームオーバーという(汗

今回はエンノオツヌにお話を聞きに行くという感じですね。どうなるやら〱

久しぶりにらくがきを書いて見ました。

こなたです。似てるかなあ。にやにや笑顔以外はうちのこなたんはこんな顔です。

<http://3203.mitemin.net/i24333/>

どうでもいいこと

機能はTRPGで〱ゲームマスターしてました。

21時に初めて終わったのが午前5時〱眠いよう〱眠いよう。

今も凄く眠いです…起きたら感想書かせてもらいますね…きゅんぱたり

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュキャラクター

ダッキです

投票について（中断中）

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

Continue71 〈強さとは識る事也〉(前書き)

71話目ですよー

志貴君…名前間違えてごめんよう…ふふふ…月姫やってない事がバ
レそうですね(マテ

で、でも月箱持ってますよー(封開けてないけど

とりあえず幕間みたいなものです、あと2〜3話で金剛神界も終わ
りですよー。

Continue 71 〈強さとは識る事也〉

ケルベロスから命辛々逃げ遂せる事が出来た大樹達は、一先ずパトリムパス達の集落に寄る事にした。

殺されたパトリムパスの事を知らせると彼等は『姫の為に命を掛けた事、誉に思えど悲しむ事はない』と怒る所かその生き様を誇りに思ってくれたようだ。

仲魔の殆どが死んでいる以上、このまま戻るにしても戦力が心許ないと言う事でここに一泊する事になった。

現在はそれぞれ個人で行動している。大樹は一人外で物思いに耽っていた。

エンノオツヌから頼まれた依頼：本来ならこのような場所で出会う筈もない悪魔 ケルベロスとの戦い。

初めの一手から躓いた結果が仲魔の半壊という散々な結末になってしまった。

ゲームの様な依頼だから、と軽はずみに依頼を受けてしまったのがそもそもの間違いだったのだろう。それも本来あるイベントではなく全く未知の依頼内容。

(慢心は身を滅ぼす：分かっていた筈なんだけどな)

相手を軽く見ずに、疑い暴き最善を求める。それが大樹の考え方で生き残る術だ。

自分で理解していたというのに、それを怠ってしまったのが情けないと一人ごちる。強くなって気が昂っていたのかもしれない。

そこに思い切り冷水をかけられた気分だと、漸く色々頭が冷めてきた所だった。

下手をすれば死んでいた。だがそれも必要だったのだろう…大樹達が自覚する為には、自分達の考えを矯正させるために。

それで死んでしまえば其処までだったという事なのだろう。エンノオヅ又はそこまで優しくはない。乗り越えられなければ死ぬのは当然なのだから。

しかしこれで大樹ははっきりと認識しなおした。この世界はゲームや漫画の世界ではない、ちゃんとした現実なのだと。

心のどこかで、ここはゲームの様な世界だと思っていた節が大樹にあった。

らき すたのキャラクターやGS美神のキャラクター、ペルソナなどの女神転生のキャラクター。そして月姫のキャラクター。

どこまでもファンタジーの様で、この世界はどこまでもリアルだった。其処に「〜」だから「〜」じゃないから「〜」などと言う甘い言葉は通用しないと。

一つ間違えばあっさりと死ぬし、それは絶対に覆らない。

この世界に生きていく以上、自分は主人公でも脇役でもなんでもない、ただの佐藤大樹なのだ。改めて実感する。

知っている情報はこれからも利用するし、使える部分は使おうと決め、それを盲信しないと心に誓う。

次はこんな馬鹿な真似はしないと、心に誓いながら……………

漸く、今の状況を理解したらしいわね…もう少し遅かったら私が出てた所だったわ。

COMPの中でダツキがホッと胸を撫で下ろしていた。

この世界が其処まで甘い世界ではないと実感するにはここまでしなければならなかったのだ。

大樹は自分を律しているようで、完全には律せていない。

相手を疑う事はする。その警戒心はこの先生きる上でとても重要になるだろう。騙し騙されの世界になるのかもしれないのだから必要な能力だ。

だが、大樹には致命的にダメな部分があった。

それは……仲間と認めた相手は、表面上は警戒していても無意識に

信用してしまう所。そして、物事をどこか離れた立場から見ていると言ふ事。

どちらもこの先を生きていく以上、致命的な弱点にしなければならない。

仲間を信じるのは良い事だが、それを鵜呑みにしてしまえば手痛いしっぺ返しを食らう、もし相手が親友であれなんであれまずは疑い、調べて行く事が大事なのだ。

今回の事にしても、大樹があれこれと聞いてきたらエンノオツ又は話す予定だった。それで受けるかどうかは大樹達の自由…そして受けないを選択する事がクリアの最短。

しかし、試練を与えた相手だから、総ての試練は終わったのだからと無意識に大樹達はエンノオツ又を信用してしまった。

これが悪意ある物だったら大樹達は既にこの世に居なかつただろう。

人間の心は難しい、だがそれ故に識る事が何よりも大事だ。特に大樹の様な直接的な戦いの才能がない人間にとつては情報こそが命だろう。

それを怠れば死ぬ…今回の事で十分理解出来た筈だ。とはいえ、総てがたった一度のことで完全に変わる事なぞ、そもそも出来はしない。

いつかはまた似たような事が起きるかもしれない、それを自分で理解できれば良いが。完璧というものは存在しない…その時は自分か、誰かが止めようとダツキは考える。

そしてもう一つの方。

大樹自身転生した身の上である以上、どこか意識的に他人と離れてしまいがちで現実を一步離れた目で見る所がある。

しかしダツキが今まで見てきた上での大樹の行動は腑に落ちず、彼女自身理解出来ていない。

人生を達観した上での境地などではない。まるでTVか何かを通してしているように大樹が現実を見ているような気がしていた。

である以上、大樹が単純に違うとは知ってるけど、それでもあまりに不自然だわ。まるでこう…何かのアニメでも見てるような……

の大樹。前世が関係しているのだろうとダツキは考えるが、それでも総てを知っている訳ではないダツキがそれを理解する事はできない。

このまま生きていけば必ず大樹は躓くだろう、それを慰める事はできたとしても…愛する事はできたとしても、それで終わってしまう。

その時点で大樹の人生は終着を迎えるだろう。ダツキとしてそれはある意味本懐でもあるが、それではここまで来た意味が無い。

とは言え自分の口で教える事は出来ない、まだ時期ではないのだ。ケルベロス程度に負けている今では話にもならない。

彼女が…そして横島が知っている現実は今までの事が遊戯と思えてしまつくらいに【重い】のだから。

今までの状態が続けば、大樹は終わるだろう。ならば…どうするか…彼女は思考する。思考する。思考する。

「だーいきつ君。なーにを黄昏ておるのかねい？ ほれほれお姉さんに言つてみたまへ〜」

「…こなた、か。いや、手酷くやられたな、と思つてね」

「うん……」

「こなたの仲間は蘇生中かい？」

「あ、さつき回復してた。オーバーキルだったから時間掛かると思つたけどね」

悪魔達は通常死んでも肉体が残る。しかし、其処から更にダメージを受けた場合や、そもその限界値以上のダメージを受けると肉体を構成するマグネタイトが霧散してしまう。

こうなるとリカーム程度の蘇生魔法では回復できなくなる、サマリカームでもその状態になると蘇生は難しい。この状態をオーバーキルと言つ。

リカームドラという自己犠牲の魔法が高ランクならばその状態でも蘇生はできるが、そのレベルになるにはかなりの熟練が必要となる。

仲魔になった悪魔達は、基本COMPの効果で、データーとマグネタイトが深く結びつきあっている。

その為オーバーキルされた悪魔は自動的にマグネタイトに変換されCOMPに吸収されるのだ、そして其処でデータを再構築する事により、どんなに殺されても蘇生する事が可能になる。

仲魔になった悪魔達が、死を恐れず戦えるのもこの辺があるからなのだろう。

「僕の方はまだかかるみたいだね…アメリカは蘇生してるけど反応はないから寝てるのかもしれない」

「あ、そか。造魔も一応悪魔だしね…どうみても幼女ですありがとうございます」

「どうしてあの姿になったかは僕もわからない…なにか大いなる意思でも働いているのかと」

「幼女趣味とは高レベルだねっ！（貧乳好きならOKだけどさ）それよりもエンノ君、無理ゲーな依頼持ってきて、一発殴っても良いかな？　かな？」

「いや…これもある意味試練の延長だったと思うよ」

「ほへ？」

先程から考えていた事をこなたに話す。

初めは不思議そうに話を聞いていたが、次第に表情が硬くなって行くこなた。どうやら依頼の内容の意図を掴み始めてきたようだ。

総てを話し終える頃にはこなたも静かに頷いていた。

「情報かあ…敵を欺くにはまず味方からって良く聞くけど、まさかこんな所でねえ」

「意味は似てるけど、使う場所は間違ってるよこなた…」

「まあまあ、いーじゃんこれくらいしか思いつかなかつたし。でも…そだね、これからの事を考えると奥の奥の奥までちゃんと理解しないと…かあ」

「これは僕の考えでエンノオツ又は本気で蟠桃を持って来いと言った可能性もあるけどね。流石に彼は其処まで馬鹿じゃないからこれが正解なんだと思う」

「じゃあ、普通に依頼を受けた時点で落第って事かあ…何これ意地悪問題にも程があるよね」

「それだけ、これからの事を考えるとこういう思考も必要と言う事だね。実際とんでもない目にあつたし」

「だねえ…奥の奥かあ…」

「だから、僕もそろそろ出来る限りの情報を皆に教えようと思う」

「…!? いい…の…?」

全部を吐露する訳にはいかない。

貴方達は僕の世界ではゲームやアニメのキャラクターでしたなんて言ってしまうえば更にゴタゴタになってしまう。

その辺は隠す事にして、文珠やマジックカードの詳しい説明やペルソナについて自分の戦力の事を皆に打ち明けようと決意した。

未知の力というだけではこの先相手に不信感を持たせてしまう可能性があるからだ。実際小竜姫は文珠が使える、ありえない効果を持つマジックカードやペルソナを警戒している。

みゆきも大樹を信じたいが、どうにもその判断材料が無い為、どうしようもないというのが現状だ。

ここまで見せた以上、これらは今更探られても痛くはない能力だし、これから戦う上で戦略の材料になるなら寧ろ伝えておくべきだと考えていた。

ただし、横島については厳禁だ。どうしてもそれを今伝えるのはダメな様な気がしている…意識誘導でもされているのかと考えたがそれもどうやら違うようで首を傾げそうになっていた。

どちらにしる大樹が強くなればいつかは露見するのだ、それまでは放置しておこうと大樹は思っている。

「ね……大樹君」

「ん？」

「大樹君はさ……その……えーと何て言っていいかわかんないけど。あれだよ、実はあんまり戻りたくないでしょ？」

「……どうしてそう思うのかな？」

「もし、ここにかがみとつかさが居たら、それでも戻りたい？」

「……………」

「実を言つとさ……私も似たような感じなんだよね。お父さんとゆーちゃん、かがみとつかさ。知り合いがここに全員居たらここで永住もいいかななんて思ったりしてる」

「こなたらしくない考えだね。ゲームとか好きなんだろう？」

「自他共に認めるオタクだけどねえ。でもそれよりも大事なものはあるし、元の世界に戻ったら核の問題もあるし……さ。正直お腹一杯ですよ。高校生が悩む問題じゃないよね、卒業したけど」

こなたはやれやれと大げさに溜息をつきながら続ける。

「夢って……特に無いんだよね私って。今を楽しく生きてさ。みんなの楽しくわいわいやれたらそれでじゅーぶん。でも、そんな小ささ

な事も現実には許してくんなかった。正直、ふざけんなっ！ って言いたい位だよ。そりゃあこうやって裏の世界のバイトとかしてたけどさ、よりにもよって世界の崩壊。ゲームでもこんな無理ゲー無いよ。でも愚痴っても世界は止まんないし、かがみ達は置いてけぼり。私達が住んでる場所はある変態のせいで異界化してて、戻ったら最低でも一月は過ぎてる…やってられないよ、責任者でてこーいつ！
て感じだよ」

大樹の前だからなのだろうか、普段押さえつけた感情がどんどん漏れて行く。

先程も死にかけ、大樹は死にそうになる。戻っても戦いは終わらない上に、それを終えても核が来る。

心にかかる負担は果てしなく重い…それでも持ち前の明るさで笑い続けてきたが、まだ18歳の少女であるこなたには重い運命だった。

総てを投げ出してここに居たいと思ってしまつのも無理は無い。そしてその考えを多分持っているだろう大樹に今の想いをぶつけたかった。

好きな人に甘えて八つ当たりをするようなもんだな、と心の何処から思いながらもこなたは止める事ができない。

「どうして、どうして私達が生きてる時期にこんな事起こるのさ…私は皆と楽しく生きられればそれでいいのに……」

「こなた…」

「っ……」めん。らしくない事言っちゃったね。たははは、いやいや乙女の暴走って事で許してよ。」

「僕は正直世界がどうなるかと知った事じゃない。苛められ無視され、軽蔑されてきた僕にとって僕が住んでいた場所は地獄の様な場所だった。だから別に核が落ちようがどうでもいい。食料などの問題はどうかできるし、何処でだって生きていける。一人でも」

「あ……」

「でもさ、こなた達と会って僕も少しだけ変わったんだ。一人だけの中に仲魔が増えた、友達が増えた。世界は理不尽で、ゲームより尚酷い。ゲームと違ってリセットも出来ないけど。僕は友達が困っているなら助けようと思う、どうかな？」

「うん……うん……」

「さつさと終わらせよう。柊さん達を見つけて、こなた達が助けた人も連れてまたここに帰るのも良い、核から逃げて何処からひっそりと暮らすのも良いね。世界なんか救うのはヒーローだけで十分だ。僕達は戦えるだけの一般人。身の回りだけ助けて後は誰かに任せよう」

「そ……だね……そだね……うん、そうだよ、ね。ありがとう大樹君」

涙が出そうになるこなた。出来ればこのまま甘えてしまいたい……だけどそれはまだ出来ないかと、ライバルな悪魔の少女を思い浮かべながら笑みを零す。

彼が好きだ……その思いは日に日に強くなって行く。でもまだ告白も出来てないし、こんな感じでグダグダのまま進むのはアリスにも悪いだろうと自分を抑えるこなた。

でも、もしこれ以上の一押しがあれば、こなたは躊躇うつもりはない。

今は、辛い事だらけの前をしっかりと向いて歩いていこうと笑いながら思っていた。

……

……

…

「いやあ、なんかさっきまでの私ヒロインっぽくなかったかな？
こう、最終のシーンの所とかっ！ この後はエロゲーだとネチヨいシーンですねわかります」

「今ので跡形も無く消えたけどね」

「上げて落とす！ 基本だよね〜」

「やれやれだよ…とりあえずそろそろ冷えてきたし戻るかな、話もしなくちゃいけないし」

「そうだったね、いやあ、すっかり忘れてたよ、んじゃ直ぐ戻ろう〜」

大樹の背中を押して家屋に向かうこなた達。中に入ると既にアリスとみゆきがお茶を飲みながら話していた。

バフオメットの方は疲れているのか既に眠っている。パールヴァテイはフォルトウナや小竜姫と世間話をしているようだ、かなり下世話な。

『あ、お帰りなさい大樹さんっ ってなんでこなたが後ろに…？』

「ふっふっふ。なんでかな、おぬしはわかるまい…ふはははははははははは…」

『ま…まま…まさかつ！ まさかつ！』

「そのまさかなのだよアリスちゃんっ！ うわーはははははははははははは…」

「え、えーと何があったのでしょうか？」

「さあ。とりあえずやらせて置こう。二人のいつものやりとりだし」

高らかに笑うこなたを見つめて涙を流しテーブルをどんと叩く
アリス。

良く分からないドラマが其処で展開していた、が。誰も見て見ない
振りをしてあげたようだ。

微妙な心遣いが突き刺さるなあ、とアリス達は心の中で号泣しつつ
もエンドを迎えるまでコントを繰り広げる。

数分ほど馬鹿なやりとりを続けた後、漸く本題に入る事になった。

大樹にとっては今までと決別する為の、重要な会話であり。彼女達
にとっては大樹を理解する一つの転機となる会話となった。

……
……
……

成程：自分の心の海に眠る神々を模した自分を召還する技法です
か：誰もが信じる神を自分と認め召還する。神卸しの上位の能力に
近いですね。

「ペルソナも総てが英雄や神々、悪魔ではなく、多次元に存在する人の想いから生まれる…あのペルソナもまたそのような存在なのですね。興味深いです」

「ベルベツトルームかあ。ペルソナ使いならいけるみたいだけど流石にねえ。私はガーディアンだから違うし」

『私達も行った事ないわよ。そうかあ時々大樹さんが上の空になってる時があっただけど、あの時に魂がベルベツトルームに行ってるのね』

「詳しい事は僕にもわからないけど、有用な力だ。先程のは多分暴走だね、本来ナナヤは僕の扱うレベルに余るペルソナだから、それに普通に呼び出せるようになったら多分、聞く話よりは弱くなると思う」

それは何故ですか…？

「ペルソナは基本、一瞬だけ呼び出す能力なんだ。維持するのは本来難しい能力なんだよ。僕のレベルじゃ無理だね、つまり長時間は出せないイコール弱くなると言う事さ」

「成程：他に質問しても良いでしょうか？」

「ああ、僕に分かる事ならね」

この後もみゆきと小竜姫による質問攻めが続いて行く。

更にはマジックカードの限界の事や、さらに増殖の話を伝えると流

石の二人も絶句していた。

其処までくると最早個人の能力ではなく、神の領域に近いのだ。それも多少なりのMPは使うが、精神力とMPが持てばほぼ無制限に使えるとなるとんでもない。

改めて大樹の異質さが浮き彫りになるが、それでも総てを隠す事もなく伝えた事によって、みゆきの確執はすでに解けていた。

小竜姫もまだ文珠について色々知りたい所があるが、所詮はつい先程加わったメンバーにしか過ぎず、遠慮する事にしたようだ。

能力については、出来るだけ宣伝しないようにを伝えた後、解散になった。

時間は既に数時間を余裕で経過している。今日はこの辺で休む事にして、明日エンノオツヌと再び会話する事になる。

Continue 71 〈強さとは識る事也〉(後書き)

佐藤君の決意とダツキの考え、そしてこなたの心の内でした。

正直いっばいっばいですよねえ、肝心な時には負け続けて、負けると死や世界崩壊。正直私だと投げますね！(え)

明日以降の投稿について…

明日から仕事が本格的に忙しくなります、出来る限りは頑張りますが、一日一話は確実に難しくなるのですよー。申し訳ないのですが、出来る限り頑張りますね。もう直ぐ中盤、異界化編です。終わりは…終わりは何処…(汗)

どうでもいいこと

貴方の胸に飛び込んでも良いですかっ！(意味不明とまあ、それはどうでもいいとして)汗
そろそろ暖かくなってきましたねえ、ぽかぽか陽気は素敵です。ピバぽかぽか

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュキャラクター

ダツキです

投票について(中断中)

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで
す。

ついったーで読了宣言！

Continue72 千差万別の思考回路 (前書き)

物凄く短いですが…これで金剛神界編終了ですっ！

後2〜3話とか言いながらこれで終わらせた私…外道っ！？ しかも短いし。

ふはは…時間が無くてこの辺が限界なでした(汗 これからお風呂に入ってくるのですよー！。

つかれたう(ぱたり

「炎で焼かれたのにこんがりお肌にならないのです…店長を呼べっ
なのですっ!」

「いい感じで壊れてるなあアメリカちゃん」

「こんがり所が一瞬で蒸発するっつーのあれは。っーかレベルが違
い過ぎたな…オルクスレベルなんてもんじゃなかった。あれが壁な
んだらうな」

「ふん。今に見ている犬っころめが、我の恐ろしさ今に見せてやる
」!

翌日、全員が蘇生したのを確認した後、急いでエンノオツヌの居た
場所に戻る事になった一行。

ぐだつて居ても仕方が無いので気分を一新した仲魔達。キンキなど
に至っては一つの到達点を見出したようで落ち込む所かやる気に満
ち溢れているほどだ。

アメリカも、恐怖と言う感情をまだ持っていないため素っ頓狂な事
を言っている始末。

半壊したパーティの割には、それなりに気楽な感じに見えた。

「随分と時間が経った様に思えますが、実際はまだ一日しか経って

いないんですよね…随分と長く感じてしまいました」

「それだけ内容が濃かった、と言う所だよ。それじゃ準備も整ったし、エンノオツヌの居る所に帰ろうか」

『はい』

エンノオツヌ…役行者の事ですね、昔話に聞いた事はありますがまさかこの異界に住んでいるとは思いませんでした。既に仙人化しているのでしょうかね。

「なんてーか、意地悪おじいさんって感じがするけどねえ。強くしてくれたり無理ゲー持ってきたりと一貫性が無いよまったく」

「佐藤さんの言う事を信じるならこれもまた試練だったのでしょうね」

みゆきも今回の依頼についておかしいと思った事はいくつもあった。

大樹の見解を聞いて行く内に、彼が自分達に何を示してしてくれたのか何となく理解できる事が出来た。

初めはこんな不可能に近いクエストを何故持ってきたのかと不審に思いもしたが、同時に何かがおかしいとも思ってはいた。

それが何なのか流石のみゆきでも上手く理解する事が出来なかったが、大樹の説明で漸く今回の意図を察知できたのだ。

試練が一つとは誰も言っていない。今回の依頼は「気づく事への試

練」だったのだろう。となると思い切りミスしてしまった事になるが、これも教訓と胸に刻み込むみゆき。

間違える事は決して悪い事ではない、間違えた事を、間違えたままにする事こそが悪い事なのだ。反省し、理解し、次に取り組めば愚かな間違いはしないだろうと考える。

「言葉の裏を知り、表を知り、総てを理解する……難しいですがこれも必要な事なのでしょうね」

「そういうのは私には不向きだよー。という訳でみゆきさんと大樹君に任せたっ！」

『サマナーあんなね…少しは勉強しなさいなっ！ 一人の時はどうするつもりよ？』

「うー、フェニ子ちゃんが厳しい」

『誰がフェニ子ちゃんかっ！？ てか語呂悪すぎっ！』

『こなたとフェニックスは仲良しさんだホー 僕も混ざるホっ』

『あー…前回ほとんどセリフもなくやられてね俺等？』

『言ウナ…』

ケルベロスのブレスで一瞬にして倒されたオリアスとユルング達。

強化したばかりなのにたったの一撃で一蹴されてしまい此方は少し落ち込み気味だった。

キンキ達は強敵と戦う場合大抵が負けていたので、これをバネに出ているが、こなたの仲魔はこれほどこっぴどくやられた事はない為多少メンタルが弱い。

更に言えば、合体後直ぐ倒されたのも問題だったのだろう、それでもこの程度の凹み方で済んでいるのは大樹の仲魔達やシルキー、デイスのフォローのお陰である。

しかし、これを糧にすればいつかは必ず到達できるだろうと心の中で強くなる事を誓っているオリアス達だった。

ちなみにじゃあくフロストは何時死んだかも覚えておらず、そもそもあまり物を考えないくらいがある為か悩む所か落ち込んですら居なかつたりする。

仲魔の中で一番精神的ダメージが少ないのは恐らくじゃあくフロストとアメリカだろう。純粹と能天気はある意味逆境に強いのかもされない。

「まあ、何にせよまずは報告だね。失敗であろうとなんであろうと話さなきゃ先に進まないし。時間もあまりかけては居られないしね」

『そうよね…元の世界に戻らなくちゃいけないし…でも異界になつて嬉しいし気が滅入るなあ』

『そういう時はあ、違う事を考えると良いかもですわよお？』

『具体的には?』

『例えばあゝ。サマナー様の【放送禁止】とかあ』

『教育的指導っ!!--』

七夜もかくやと言わんばかりのスピードで突っ込むアリス。

鳩尾辺りに突きが命中しふるぶると震える様はまるで生まれたての小鹿を見ているようだ、と呆れながら見ている大樹達。

こなたは一人「エロワードを容赦無く口にするパールヴァティ! 其処に痺れる憧れるう!!」とかやっている。

今日も彼女は平常運転のようだった。

『小竜姫様、御気をつけて。何時か御身が完全に復活される事をこの地よりお祈りしております』

ありがとうございますパトリムパス達よ。貴方達も息災で。

『ははっ!!--』

一斉に頭を垂れるパトリムパス達。その様子は正に神様と信者の構図そのままだった。

挨拶を終えた後、大樹達は集落を後にする。

ここから歩いていけば、敵と戦わずに進んだ場合5〜6時間で到着できる。やる事も終わった以上、金剛神界に居続ける必要は無いのだ。

「パトリムパス達かあ、料理が普通だったのには驚いたよね。あの食料何処から見つけてるんだろう」

「…その辺は多分突っ込まない方が良いよ」

まさかパトリムパスが農作など畜産等をしている訳も無く、出てきた料理などが一体何であったかなど考えると後で吐きそうになるかもしれないと気にしない事にする大樹。

これは〜の悪魔の肉だ、などと言われたらその場で吐く自信があった。

『この世界とも漸くお別れかあ。正直休んでる暇なんて無かったから疲れちゃった』

「アリスは基本出さずぱりだったからね。本当は休ませたかったけど戦力的にアリスは欠かせなかつたんだ」

『あ、いいのいいのっ！ だってその分大樹さんと一緒に居れたもん、役得だよ』

『あ、あのー。私も居たのですがアリス様』

『マスコットは所詮マスコットだよ』

『しくしくしく…』

フォルトウナを捕まえて弄繰り回すアリス。こうして見ていると少女が人形遊びをしているようにしか見えないが、その顔は微妙にあくどく見えたりする。

頬を引つ張られて涙目になりつつも、されるがままのフォルトウナを見てくすくすと笑う大樹達。

この数日笑う所か死に掛ける時間が続いたせいで、テンションも落ち気味だったが失敗にせよなにせよ漸く終わったので少し気が楽になっていた。

「色々と…為になりましたね。これをこの先活かして行かなくては」

「そうだね。命辛々どうにか手に入れた知識と経験と力だ、活かさなくちゃここで試練を受けた意味が無い。たとえ世界が崩壊しても生き残る位は出来そうだよ」

「核かあ…多分どこかは失敗するよねえ。あ、あれだよ今住んでる場所が異界になってるでしょ？ その間に基地を破壊すれば元に戻った時、核降ってこないんじゃないかな？」

『それだ！！　そーだよっ！　異界になってる以上、現実世界』

と異界は別世界なんだから核が落ちて来る訳無いよねっ！ 元の世界に戻す前にどうにかすればっ！』

「多分その辺はクズノハも考えてる筈だよ。もしくはガイアも動いているかもしれないね。問題は異界になっているせいで悪魔が湧いているかもしれないって事かな」

核を発射させる基地が異界に閉ざされている以上、そこに核が降る事はない。

もし振ったとしても、世界と切り離されている異界には何の問題も無いだろう。その場合元に戻った時が恐ろしいが、それなら色々やりようはあると考えている。

そもそも、レイ・レイハウもまだ町から出ていないのだから彼女が率先して動いているだろう。

暗く考えすぎて、碌な事しか思いつかなかったが異界になった世界にも希望はまだ残っている事を再認識したこなたとみゆき。

全部が上手く行くとは考えていないし、異界を作った人修羅と化した不良が何かをしている可能性もある。

だがそれでも希望を捨てずに、家族や親友達を助けようとやる気を見せていた。

「さーて、そうなると急いで帰らないとねっ！ 下手したらかみん達がもう終わらせてる可能性もあるし！ そうなるときっと怒ら

れるよ」

「ふふ、そうかもしれないね」

「いや、これは不可抗力だから。自然現象に人間は抗えないよ」

『やれやれ、漸くいつもらしくなってきたな』

キンキが大樹達を見て小さく笑いながら前を歩く。

ここに来てからと言うものの、誰もがこの後の事を考え過ぎたせいで、完全に明るくとはいかなかった。

だが、今は漸く普通に会話し笑う事が出来ている。

例えそれが、今だけだとしても彼女はそれを守ってやりたいと感じていた。

唯強くなりたい、それだけを考えていた自分がいつの間にかここま
で情に絆されるとはと、内心笑いながらもそう思う。

しかし今の弱いままではそれすらも出来ない…

（強く…ならねえとな。オレが全部を護れるとは言わねえ…だけ
よ、このままじゃいけねえよな。何よりもオレが許せねえ……なあ
サマナー。お前もそう思うだろ？ オレは強くなる。強くなりたい
からじゃねえ…意味が出来たから強くなるんだ）

『どうなさいましたのお?』

『ハッ。なんでもねえよ。ほらほら警戒しておけよ? 奇襲されたら敵わねえからな』

『…… ふふっ可愛い方』

『あん? なんか言ったかよ?』

『なあんでもありませんわあ』

そんな二人のやり取りを含み笑いをしつつ見ているこなた。

彼女の頭の中では、思い切り腐向けな物語が繰り広げられているらしい。

「いやあ、青春だねえ。あれで男の子だったらラブラブっぽいけど、これは寧ろ百合百合かな…いけるねっ!」

「一人でどこまでも行くと良いよ」

白い目をしながら言い切る大樹。みゆきもただ苦笑いするだけだった。

「辛辣すぎるっ!?!?」

そんな阿呆なやりとりを続けながらも、彼等は終始賑やかな感じで目的地まで歩いて行った。

……

……

…

そして数時間後…一回も悪魔と遭遇する事も無く エストマを掛けていた エンノオツヌが居た場所まで戻ってきた。

其処には既にエンノオツヌが、大樹達を見つめながら立っていた。

【戻ってきたか…目的の半分はこなしたと言えるだろう】

「随分な依頼だったよ。感謝はしないし礼も言わない…でも、役立たせてもらう」

【それでいい。外れし者、強き魂を持つ者、そして見渡す者よ。お前達はこれで総ての試練を終了させた。最後は至らなかつたがそれでもここに居る時点で十分理解しただろう】

「大樹君の言う通り…か。正直すつごくムカつくけど今回は許してあげるよ…で、見渡す者つてもしかしなくても私の事？」

初めから総てにおいて、ノーヒントで進めさせ最後はこの様な試練。理解は出来ても納得は出来ないこなた。

意味があったとしてもこれはやりすぎじゃないのかと、文句の一言でも言つてやりたかったが大樹もみゆきも抑えている以上自分がこれ以上突く事もないと自制する。

そして、見渡す者、と面を向かれて言われた事に首を傾げる。恐らく大樹は外れし者で、みゆきは強き魂を持つ者とは言われていたからそうなのだろう。

「そりゃあ私はオタクだけど、そんな厨二な二つ名いらないよ」

「ま、まあまあ…」

ジト目で睨みながら言うこなたをとりなすみゆき。

今回の一件で完全にこなたはエンノオツ又が嫌いになったようだ。間違つた事をしていなかったとしてもどうにも認められないらしい。

嫌な事してるなあ、と自分で思つていてもあれだけとんでもない目あつた事もあつてか、どうにも反りが合わなくなつてしまった様だ。

【元の世界に戻った時：お前達は真に新しき一步を踏み出す事になる。この先の未来は、お前達自身が決めるのだ。ここで起きた事、体験した事、理解した事を教訓とし、歩め。さすれば道は自ずと開かれるであろう。だが、努々忘れるな：それが真に正しき道であるかは誰にも分からぬ事を】

未来は無限に存在するが、そのほぼ総てがこのまま歩めば崩壊の道しかない。

小さな小さな希望をしっかりと掴む為に必要な最低限の力を、知識をエンノオツ又は大樹達に与えた。

それを活かすも殺すも自分達次第だろう、出来れば生き残ってもらいたいと彼は心の奥で思う。本来この地に来た時点で彼等は人生の終着点についたのと同じだった。

これからは苦しむ事無くこの異界で幸せに生きる事も出来た。だが、運命がそれを許しはしなかったのだ。

何処に居たとしても大樹達は否応無く何か大きな意志に巻き込まれる事になる。そこから生き延びる為には強さだけではなく心も、知識も、策謀も必要になる。

どのように思われ様とも、憎まれようとも、恨まれようとも、この地に来た元同胞をこの先を生き残れるように育ててやりたいと、ここまでしたのだ。

彼等はこの先、ここで覚えた事を上手く利用するだろう、理解するだろう。それだけでも彼等を鍛えた甲斐があると心の中で微笑む。

【今から10時間後にこの金剛神界の世界が一瞬だけ歪む…その時だけ金剛神界から抜け出すゲートが現れる。行け…そして見極めよ、この世界の真実を】

役目を果たし消えて行くエンノオツヌ。再びこの世界に来訪者が来るまで彼は深い眠りにつく事になる。

彼と再び出会うかどうかは、これからの歩み方によるだろう…今はただ真つ直ぐ進むしかない。

元の世界に戻るまで残り10時間……………

Continue72 千差万別の思考回路（後書き）

ある程度、荷が下りたという感じで明るさ…というかいつものやり取りが出来たこなた達でした。

思いの丈をぶつけたのもあってスッキリしたのかもしれませんが！。

今回は残りの時間でのコンピュータ。ダッキ編です。

でも明日は多分更新できません、うん…確実に無理ですね…帰ってくるの22時くらいですし…（汗

どうでもいいこと

昨日はぽかぽかだったのに今日は寒かったです…お陰で少し熱っぽい…

けほけほ…喉が痛いです（涙

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュニケーションキャラクター

ダッキです

投票について（中断中）

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効

となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

Continue73 〈限りある平穩〉(前書き)

神様は言いました…明日中に書けないのなら…今書けばいいじゃない、と。

という訳でです。昨日の内に書き終えたとかやり始めた私が居ます。

予定より30分早く帰って来たので今投稿するのですよー。

予約投稿とかしておいた方が楽でよかったですかなーと(汗

ではでは。コミュパートなのです。

ほんのリララブ…？ な一時をどうぞ。

あ、この話よりアンケート再開ですよー。

他にも「この子とコミュりたい！」とかありましたらコメントでどうぞー。

早ければ今回から、遅ければ次回のコミュの対象にしますね。

まあ、人間以外は色々強化フラグとか会話イベントでしかないのですが(汗

Continue 73 限りある平穩

エンノオツヌが言う、空間の揺らぎまで約10時間。ここには悪魔が出ないから少し時間が空いてしまった。

特にやる事もないし、今の内に出来る事と言えばマジックカードの量産位なのでいそいそとカードを作る事にした。

自分で作っておいてなんだけど、どういう原理でこのカードが作られているのか正直さっぱりわからない。

能力も限定されている割にはアバウトだったりするし、色々不思議な能力だと思う。

一度使ったら消えてしまうカードと、何度も使用できるタイプのカードが2種類存在するので、武器などを保存するタイプはこの永続タイプを使っている。

此方の問題は、コピーする事が出来ないと言う所だろう。空いている時間に何度か試してみたけど何度やってもダメだった。

どうしても量産したい場合は消費用のカードを使うしか無さそうだ。

コピーが出来る様になったお陰で、最低限の食料や資材の確保が出来るようになったのはとても助かる。ある意味MPさえあれば永久に困ることは無いしね。

食料などはカードに入れている間は時間も止まっている為腐る事も無いから、無限の食料庫が出来た様な物だ。ちなみに取り扱いも楽

で良い。

「おお、何時見ても不思議な能力だねえ…」

「作ってる僕自身も不思議だと思っっている節があったりする」

…それはなんとも…横島さんも文珠を「なんとなく」で作ったり使ってみましたから、こういうのよく分かりませんね。自分の使う能力が自分でも分からないと怖いものですが、それでもとても有効な力ですから頼ってしまうのも分かります。

「文珠は作るのに時間が掛かるから、頼りきりには出来ないけどね」

毎日湯水のように作り出せた時の事は言わない。

それだけ使ってもダメだった時期は、出来れば黒歴史にしておきたいしね…

さて、全部作り終えたけどまだ全然時間が経っていないな、これからどうしようか。

「あ、そうだ大樹君。エストマの使いすぎで少し疲れたでしょ？時間はまだあるし休んでいいよ」

僕がカードを作り終えて一息入れたのを見たこなたがそう言った。

「いいのかい？ 僕はまだ平気だけど」

「うむにゅ。もしかしたら戻ってきて直ぐ戦闘！ とかもありえるしき。今の内に休んでおいてよ」

「そうですね。私達はまだ大丈夫ですので、どうぞお休みになってください」

この辺りは結界か何かで覆われているようですし、それがいいでしょう。戻っても話に聞く限りは異界ですし。体調は万全にして置いた方が良いでしょう。

こなた達が言う様に確かにエストマを数回使い警戒もしていたせいか多少疲れてはいる。

でもこの程度ならいつもの事なだけど…まあ、この後も事もあるし素直に甘える事にしよう。

「ありがとう。それじゃすまないけど少し仮眠させてもらおうよ」

『お供しますわあ』

行き成り服を脱ぎつつパールヴァティが乱入してきた。

後、そこ。何時の間に布団を用意したんだ君は…お約束的に枕も二

つあるし…態々カードから取り出してきたんだろうかこの女神は…
ちなみに雑貨用のカードは何が起きても良い様に、最低限の分を分散して渡してあるから、はぐれても問題はないようにしてある。

『脱ぐなっ！ 寝るなっ！ 触るなああああっ！』

アリスの渾身のハリセンが唸る。

だからそれを何処から持ってきたと突っ込みたい…カードか？ カードなのか？ わざわざハリセンをカードに収納する意味があるのか？

それ用に保存用のカードを渡したつもりはないよ僕は…

『淫魔のお勤めですのにい』

『今のてめーは女神だろうが…』

パールヴァティはどこまで本気なのか正直見当がつかないな…もし全部本気だったらある意味怖い。

いやまあ、これでも思春期の男性だから反応しない訳ではないけど、流石に、このメンツの中で『はいそうですか』と頷く訳にはいかないだらう。

僕は其処まで色々捨ててないから。

兎にも角にも…僕は少し仮眠させてもらう事になった。かなり歩いたしMPもそれなりに使ったから、直ぐに眠りに入れそうだ…

せめて起きるまでは楽しい夢でも、見させてもらおうかな。

寝袋をカードから取り出しつつ、先に休ませて貰う事にした。

目覚めて戻った後は…どうなる事やら、だよ。

………

………

…

仕方ないわねえ。それじゃ少しだけ…甘えさせてあげるわ。私も…まあ、それ位してもバチは当たらないわよね。

眠りに就く直前、何処からかそんな声が聞こえた気がした。

誰かが僕を揺さぶっている気がする。

寝たばかりな気がするな…もう少しだけ眠らせて欲しい……

『あんだね…何時まで寝てんのよ。ほら、おきなさいってのっ』

「うわっ!?!? もう10時間!?!?」

寝過ごしてしまった、と行き成り飛び起きる僕。どうして誰もギリギリまで起してくれなかったんだろう。

慌てて辺りを見回すと、そこは金剛神界の広い草原ではなく、僕の家の中だった。

あれ…何時の間に戻ってきたんだろう。こなた達は何処にいったんだろうか…？

『…いつまで寝ぼけてるのよ。いいからシャキっとしなさいっての。朝ご飯抜きにするわよ？』

やれやれと呆れたような顔をしながらも優しい笑顔を見せてくれるダツキが其処にいた。

あれ…僕は何をしていたんだ…？

どうしてこなた達の事を探してたんだろう？ 僕はダツキと二人で暮らしていたじゃないか…もしかして寝ぼけていたんだらうか？

とりあえず起き上がる。窓の外は快晴のようだ、ぽかぽかと暖かい日差しが差し込んでくる。

「あー…それは困る。朝から何も無いのは流石に辛いよ」

『ふふっ、仕方ないわねえ。それじゃ私特製のお稲荷さんを用意し

てあるから急いで着替えなさいよ?』

「…また稲荷かい…?」

昨日も、その前も、たしかその前も稲荷だったような気がする。

肉を食べたのは何時だったか…ダッキが稲荷…というか揚げが好きなのが主な原因だけだ。

『嫌なら食べなくても良いわよ?』

「いや、謹んで食べさせて頂きます」

古今東西、食を掴んでいる相手には勝てないものだ。

『ん、よろしい さ、チャツチャツと着替えるっ!』

「あ…いや。せめて出て行って欲しいんだけど」

『今更何を恥ずかしがってるのよ、もうお互いの知らない場所なんて無い癖に ほーれ、見せてみなさいよ』

「……………」

『いや、そんな白い目で見られると困るんだけど…はいはいはい。じゃ、先に行ってるわよ?』

部屋を出て行くダツキ。

さて、今の内に着替える事にしよう。それにしても一体何を寝ほけていたんだろうか。

夢だからなのかもしれないけど、所々ぼやけて思い出せないな。まあ、思い出せないと言う事はどうでもいいってことかもしれないな。待たせ過ぎるとダツキの事だすぐにむくれるに決まっている。出来るだけ急ぐ事にしよう。

……

……

…

『うんっ　上出来ねっ　ほら、お揚げのお味噌汁もあるんだからちゃんど飲みなさいよ？　身体にも良いんだからっ！』

「それは分かるけど揚げフルコースは流石に辛い…肉も食べたいんだけど」

『あるわよ？　ほらお肉の巾着』

渾身の作なんだからっ　と胸を張って言うダッキ。それにしてもこれも揚げ料理か…

「更に揚げが……その内冷蔵庫の中身が全部揚げになりそうで怖い」

『流石にそこまではしないわよ。やっても8割くらい？』

「十分やりすぎだと思っ」

『あはは。ま、いいじゃない　ほーら、食べたらデートなんだから急いで食べる事っ！』

「デート…ねえ。僕には縁遠い話だと思ってたけど…ああ、こなたと武器などを買いに行ったのもまあデートなのかな」

『アンタね…彼女の目の前で他の女の話ってフツーしないでしょ』

彼女……ああ、そうだった。

ダッキとは最近付き合う事になったんだ。どうしてそうなったのか…は…？　はて思い出せない、この年齢で痴呆とかは勘弁して欲しいな。

「とりあえず食べようか、うん」

『逃げたわね』

「うん、美味しいよ。たまには違うのが食べたいけどね」

『美人の手料理なんだからもう少し喜びなさいよ。枯れてるわねえ』

「いや、これでも喜んでるよ。うん、美味しい」

『あーほら、あんまり急いで食べると…もう…子供なんだから…ほら、唇にお米ついてるわよ?』

「おや……」

『はいはい、動かないの』

そう言うとダッキは僕の唇についていた米粒を自分の舌で舐め取って行く。

クスリと妖艶に笑うダッキ。

「……………朝から何するんだか」

『あら、こじいつのは嫌い?』

「……………女性に口では勝てないな」

『ふふっ、役得でしょ?』

「ノーコメント」

やれやれ…嬉しいけど恥ずかしいと言う事を分かってほしいな。

『今日は何処行くの？ 前は映画だったでしょ？ 今日…お勧めとかある？』

「万年ボツチだった僕にそれを言うかい？ まあ、無難にウィンドウショッピングでいいんじゃないかな？」

『ええ〜。買ってくれないの？』

「正直二人暮らした上に揚げて生活費が貧困なんだよ、少しは自重してくれたら買えるけどね」

『あーあーきこえない』

やれやれだ。

わがままで揚げが大好きで、賑やかなダツキ。

二人で暮らしている筈なのに、毎日とても騒がしいのは少し有り難いかもしれない。多少は自重してほしいけどね。

まあ、軽く何かを買ってあげるのも良いだろう。何が好きか分からないけどね…揚げ渡せばそれだけで喜びそうだから安い気もするけど。

『「馳走様でした」』

「「ごちそうさま…今日はいい天気だな。暖かくなってきてるし良い日になりそうだ」

『「なりそうだ、じゃなくて良い日にするのよ。さ、さっさと準備していきましょ」』

「はいはいお姫様…」

……

……

…

『「宝石ねえ…私は自分に自信があるから着飾って美しくなるうなんて思わないわ」』

「大層な自信だ…ああ、傾国の美女だったなそう言えば。全然見えないけど」

『「ほっほーう。喧嘩なら買っわよ？」』

「やめてくれ、一瞬で殺される」

『冗談よ冗談。でも大樹でも女性をここに連れて来る位の甲斐性はある訳ね』

「見るだけならタダだよ。見るだけならね」

『世知辛いわねえ…サマナーも余り儲からないし。いつそ二人で料理屋さんでもやらない？』

「で、出るのは揚げと言うオチな訳だ」

『オチじゃないわよっ！メインに決まってるでしょ！本当に大樹は少しお揚げの素晴らしさを知るべきだね。いいえ、私が教えてあげるっ！』

「宝石より揚げに食いつく美人って…世界に何人居るだろうか…」

『ここにいるわよ』

色々回って見たけど、特に興味を示すものがないから女性の好きな宝石店に来て話す事が揚げ談議…うん。ダツキに何かを求めた僕が馬鹿だった。

これは本気で揚げを買ってあげたら十分喜ぶんじゃないかと思えてきた…その辺のスーパーで安いのも買うかな。

隣では身振り手振りで揚げの素晴らしさとか言う物を一生懸命話し

て行くダツキが居る。

美少女なんだけど…残念な感じがする。まあ、高飛車とか性格が悪いとかそういう致命的な部分はないから助かっているけどね。

そもそも人付き合いが苦手な僕がそんな相手と話せる訳もなく…まあ、こう見えてかなり子供っぽく見えるからねダツキは。

『という訳なのよ！ わかった！？』

「ああ、あのクッションいいな」

『ガン無視！？』

「一応聞いてたよ、聞いてただけで理解は出来なかったけど」

『うー…揚げ神様に怒られるんだからね？』

「…そんな神初めて聞くよ、ちなみにレベルは？」

『揚げ神様のレベルは無量大数を軽く超えるわ！ 私的にっ！』

「聞いた僕が馬鹿だった……………」

揚げ馬鹿…いいフレーズかもしれない。

今度ストレートに言ってみる事にしよう、殴られそうだけど。

…

『どうよ？ 結構似合つてしょ？ こう見えてもセンスはいいのよ
センスは』

「…ごめん、何が良いのかよく分からない」

『…そういやアンタ服のセンス壊滅的だったわね…はあ、いい？
アンタも少しはおしゃれに気を使いなさい？ 元が悪いんだからせめてこう一工夫が必要なのよ、わかる？』

「見てくれが悪いのは僕のせいじゃないけどね」

悪く言ってる訳ではないので、気にはしないがこれをダツキ以外の
人に言われたら流石に凹みそうになる。

顔が悪いのは僕が悪い訳じゃないからね…まあ、ブサイク一歩手前
で止まってるのが唯一の救いかな。

『色々しないと誰も見てくれないわよ？』

「ダツキは見てるんだろう？ それでいいさ」

『！ ……馬鹿。 ……そうね、アンタじゃ格好つけても様
にならないし、仕方ないわねうんうん。じゃコレは無しの方向でっ

！』

急に焦りだすダツキ。

普段は冷静沈着なのに、実はつつかれると弱い部分があるようだ。

まあ、完璧超人なんて見ていてもつまらないからね。こういう所に愛嬌があると考えると可愛い物だ。口に出しては言わないけど。

「とりあえず、それ早く脱いでくれ」

『え…？ …このスケベ…』

「違う、僕はこんな往来でそんな事考えるほど酔狂じゃない。早くしないと買えないだろう？」

『…ふえ？ え、買ってくれるの？』

「揚げは少なくなるけどね。それでもいいなら」

『あ……………ありがとう…ちょっとは気が…効くじゃない』

顔を真っ赤にして俯くダツキ。

揚げが少なくなる部分は指摘しないのか…まあ、喜んでくれているようだからOKにしておこう。

確かに…幸せだ。幸せだと思う。

毎日が平坦で日常がどこまでも続いて、大事な人とずっと暮らしていけるといつ………幸せな…夢だ。

だからもういいよ、ありがとうダツキ。

完全に夢から覚める。ただここはまだ白い空間だった。

意識は完全に覚醒しているから…恐らくここはダツキが作った世界なのだろう。

強く意識すると白い空間の先にダツキが居るのが見えた。

いつものように不敵な笑みを零している彼女が其処にいる。

『あら、随分と早いお目覚めね。どうだったかしら私からのプレゼントは』

まあ、少しは気が楽になったよ。

あれが現実なら楽でよかったけど、人生そう都合よく行く訳もないか。

彼女が何を考えて僕をあの夢に誘ったのかは分からないけど、お陰で少しは精神的に楽になっている気がする。

『あら…夢の中とはいえこの私と傍に居られたのよ？ もう少し喜ばさいな』

あれが真実なら、まあ喜べるかもしれないね。でも所詮は夢だ。夢は夢でしかない。僕の知っているダツキはあれじゃない

『……………そ。まあ、どうでもいいわ』

興味無さそうに此方を見続けるダツキ。

彼女の表情からはやはり何も読み取る事ができない…本当に何を考えているのだろうか。

何故こんな事を？

ストレートに聞いてみる事にした。

『プレゼントって言ったでしょ？ それ以上に他意は無いわよ』

……僕がダツキに其処までしてもらえる理由が見つからない。

『さあね。自分で考えなさいな、あの異界で理解したでしょ？ 物事を探る事、疑う事、識る事を』

理解した事による…か。まあいいよ。今回の事は只の戯れかもしれないしね。

寧ろそんな気がする。ダツキといえば九尾の狐。人心を容易く操る事に長けている妖怪なのだから。趣味などでこつこつ事をする場合もあるはずだ。

『あはは。アンタらしいわ。そんな貴方に少しだけヒントをあげようかしら』

ヒント……？

『私の正体…』

いくつか思いつく点はあるけど……もしかして。

僕が知っている有名所の九尾で彼女に合いそうなタイプは2種類だ。

一つは封神演戯の妲己そのもの…もしくはGS美神の…

『はい、残念。言っておくけど私は【妲己】や【タマモ】じゃないわよ』

！？ な、ゼタマモの事を……………！？

行き成り答えを覆された事と、彼女がタマモの存在を知っている事に驚きを隠せない。

予想として一番可能性が高かったタマモ本人と言う答えを真正面から潰された…でも、それは本当なのだろうか？

妲己は彼女がダツキと言う悪魔なのだから知っているのは当然だろう。でもタマモは玉藻御前の略称ではなく、GS美神のキャラクターの名前だ。

それをストレートに出すのだから最低でもタマモを知っているか、彼女が嘘をついているかなのだろうけど…

『それは内緒。考えなさいな、考えて考えてどこまでも考えて…その奥の答えを知りなさい。貴方が強くなれば…自ずと分かる事よ。さあて、そろそろ時間ね。楽しい楽しい夢はもうおしまい。アンタに待っているのは地獄の様な日常。這いずってでも生きなさい。そうしたら…少しだけ手伝ってあげなくも無いわよ』

……………信用だけはしておくよ。だけど…信頼は出来ない。

『それが正解よ さあ、帰りなさいな』

答え…か。単純な合体事故で出て来た訳じゃない…と言う事なんだろうかな。

少なくとも敵じゃない事は分かった。でも…完全に信用するには謎が多すぎるのが現状だ。

だから、今は信用だけはしておく事にしよう。僕が強くなってダッキを従えられる様になった時に改めて聞いてみる事にするか…

…そろそろ意識が覚醒してきたのが分かる。

色々謎が深まるばかりだけど、それでも夢のお陰かスッキリして目覚められそうだ。この辺だけは感謝しておく事にしよう。

さあ…この後も大変な事になる…面倒だけどやるしかないか…

……

……

……

…

ダツキ視点

信用は出来ても、信頼は出来ない……か。

分かりきつてた事だけど、グサつと来るわよねえ。

後、あれはダツキじゃない……ね。ねえ、割と本気で泣いていいかしら？ まあ仕方ないけどね……

とりあえずは夢を見せると同時に、ストレスとかを浄化したけど、奥底にある感情までは操作できないのよねえ。はああ……面倒ったらありゃしないわ。

ま、でも……夢とは言え久しぶりに楽しめたし。大樹も少しはすつきりしたし結果オーライでしょ。

それにしても……結構思考誘導とかさせて私と恋仲って事にした夢を見せたのに開口一番こなたって何よこなたって……くっ！ 所詮貧乳でしょ貧乳！

私のナイスバディがあれば、あんなことやこんなことか出来るの

につ！ って…まあ純粹に好感度の差よね。正直私胡散臭いし、嫌われてるっばいし。

はあ…嫌な役所ねえ…お揚げでも食べなきゃやってられないわよ。

早く強くなつて私を支配して欲しいわ…そうなれば色々してあげるのに。

………

~~~~~

おっと、起きたわね。さて、今度は異界でその次は核が降って来る現実世界。賑やかねえこの世界は…神も馬鹿だし悪魔も馬鹿。

今の事だけ考えて、この後の事をさっぱり理解してないわ。所詮只の神と悪魔かあ、ま、早々簡単に理解できたら横島達が動く必要も無いか。

何にしてもこつやつて分霊を出してまでこつちに来たんだから、やりたい放題させてもらっわよ。

『今は所謂雌伏の時って奴よ。見てなさい？ 良い女は後から獲物を搔っ攫っの、知恵と美貌を武器にしてね』

白金の大妖狐でもある私に出来ない事なんてないわ。

これからも色々裏で動かせてもらいましょうか。

それじゃ…頑張りなさいよ大樹、期待……………してるからね？

## ダツキ視点解除

大樹のダツキに対する信頼度が+1された！

ダツキの大樹に対する信頼度が解放された！ 現：4（愛情）  
ダツキが一度だけ、緊急時に助けに入るフラグがセットされた！

### - 追加データ -

合体におけるメリットとデメリット

カード合体

### ・メリット

- 1・高レベルのカードと合体しても意志を乗っ取られない。
- 2・一定レベルの悪魔カードなら購入することが出来る為に、必要悪魔を探して仲魔にする必要がない。
- 3・造魔の合体に使うと、スキルの変わりにステータスが上がったりする。
- 4・合体事故が発生すると、魔人、秘神、狂神、珍獣、威霊が出来る可能性がある。
- 5・同じ種族の悪魔とカードを合体させても、精霊にはならずレベルさえ適正ならば1ランクアップする。

## デメリット

- 1・COMP合体できない。
- 2・3身合体できない。
- 3・相手がカードなので、記憶とスキルの継承が出来ない。
- 4・ペルソナに使うので枚数を使うとペルソナが作れない。

## 悪魔合体

### ・メリット

- 1・悪魔同士の記憶やスキル、経験を総て継承する。お互いの高い経験を最優先することで、戦力が大幅に増す。
- 2・御霊合体ができる。
- 3・合体事故がおきにくい。
- 4・3身合体ができるのでダーク合体も可能。
- 5・合体剣などが作れる。
- 6・人間と合体できる。

### ・デメリット

- 1・仲魔が減る。
- 2・合体対象のレベルが高いと意志を乗っ取られる場合がある。
- 3・高レベル悪魔が完成した場合、高確率でサマナーが襲われる。
- 4・仲魔を探すのに時間がかかる。
- 5・合体事故を起こすと高確率でスライムになる。

## 邪教の館とCOMP合体について

- 1・邪教の館はCOMP合体より、成功率が高い。
- 2・COMPは意図的に合体事故を起こせるソフトなどがあるので、異端を作りやすい。
- 3・邪教の館には悪魔全書があるため、金さえあれば今まで出会った悪魔、合体した悪魔を買い戻せる。
- 4・COMPには有志による悪魔オークションが存在する。ソフトをインストールし、魔貨さえ払えば悪魔を購入できる。



Continue73 〈限りある平穩〉（後書き）

せめて夢の中だけは幸せに…とダッキの夢の世界のデート如何でしたでしょうか。

肝心のデート部分が短いからつまらないっ！ といわれそうでドキドキです。

長くしすぎてもなあ…とあっさり切っちゃいました。

やりすぎるとクリアキャラになりそうなので（えー

さて、次回からは人修羅異界編ですね。

そろそろかがみとつかさ、シスターや隊長やクズノハが出てきますよー…

ああ…頑張れ私…

どうでもいいこと

風邪引いたっぽいです……………寒暖の差が激しすぎたせいかもですねえ。

暖かくして休みのですよ。でははははは〜

おかゆ食べたいなあ……………おーかーゆー…（ぱたり

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダッキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：0票（手助けフラグはON）

アリス：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue 74 番外・力を望む鬼（前書き）

キリもいいので？ 番外編なのですよ。

キンキの過去を彼女の独白込みで書いてみましたー。

仲魔になった理由は…まあ、こんな感じですよ。

短いですが…笑って許してもらえると嬉しいのです（汗）

アンケートの追加〜

皆さんから頂いたコメントを元にコミュキャラが増えましたー

いやあ…キャラの事を好いて貰えている様で…書いている私も嬉しいのですよー。

という訳で増えたのはこのメンバーですー

- 1・伊達雪之丞
- 2・フォルトウナ
- 3・パールヴァティ

小竜姫は今回は申し訳ないですが、違うイベントがあるためにスルーになりました。

今回の追加はコレで終了なのですよー。

キンキ過去視点

今更だが、思えば昔のオレは能天気で多少馬鹿だった気がする。

じゃあ今はどうなんだ？ って言われると、まあ頭は良くねえから馬鹿だとは思うが、能天気ってのは無くなった気がするな。

寧ろノーテンピーカンな奴等が増えてきたせいで、その辺隠れちまってるのかも知れねえが。どうでも良いことさ。

んで、オニという種族の性質上、オレは強くなりたかった。戦うのが好きだったし、殺すのも好きだった。まあ、そりゃ今も変わってないけどな。

だが、所詮は悪魔。単純に強くなるにはマグネタイトが必要だし、鍛えたとしてもたかが知れている。

強い悪魔ってのは、膨大な量のマグネタイトを持ち名の知れている悪魔に限られるからな。オレ自身が強くなる為の近道は他の悪魔と合体して上位の悪魔になる事位だった。

勿論、意志の乗っ取り合いに負ければオレは只の経験と記憶を持つだけの存在になるが、それくらいのリスクは承知の上だった。

その為にはデビルサマナーと交渉しなけりゃならねえ。悪魔合体が

できるのはデビルサマナーに使役されている悪魔に限られるからな、普通に生きてりゃ。

だけだよ、そのサマナーが弱かったら意味がねえんだ、オレを支配できて尚且つ合体した後も使役できるようなやつじゃなきゃ、だから試す事にした。

あの時期、よく分からない力などで異界を賑やかしていたピクシーを連れて新人サマナー…そう今のオレのサマナーを…

………

………

…

〈回想〉

『ったく。どいつもこいつもマグネタイトの足しにもなりやしねえ』

『私には十分ですけどねえ』

リリムはこの時期からオレと一緒に居た。

と言つても仲魔ではなく、オレが殺りにくい奴を変わりに殺すという一時的な共闘の様なものだったが。

こいつ自身もサマナーに興味があったらしい。単純に性的な興味なんだろうが・・・オレは女という存在だとしてもそつちの方面は興味ねえ。

後、普段馬鹿丁寧で甘えるような口調で話すこいつだが、殺す敵と認めた相手や本気の際は途端に会話が物騒になりやがる。

普段はマゾだとかほざいてるが、その時のこいつは基本ドSだと思つぜ。昔、雑魚のダークサマナーが淫魔を拉致しに来た時、襲う所か発狂するまで痛めつけてた事があるしな。

何にせよ、オレとこいつを相手にして勝てるようなら十分オレ達のサマナーとしては合格点をやれるだろう。

駄目だった場合は、喰らう事にするかなどと考えていた。人間は基本マグネタイト保有量が高い。

更に言えばデビルサマナー。COMPと言う機械にかなりの量のマグネタイトを所持しているだろう事は予想に難くないと。

『噂だとこの辺なんだがなあ。ちっ、異界から出られりゃあ外に出て探すんだがな』

低レベルの悪魔は基本的に異界と現実世界の境界線を潜り抜ける事ができない。

オニであつたオレも所詮は低レベルの雑魚だつた、無理して出ようとすると肉体を構成するマグネタイトが暴走する。

実際に外に出て人間を食おうとした雑魚がその暴走に耐え切れず只のスライムになつてしまつた例を見た。

COMPに自分と言うデータを収納できている仲魔ならばこの時のマグネタイトの暴走を抑える事が出来る為、低レベルでも行き来は可能だが他の雑魚はそうは行かない。

オレ自身そこまで弱くはないとは思ひかつたが、流石に下手すればスライムだ馬鹿な真似は出来なかつた。

それだけじゃねえ、人間にもオレ達を打倒できるやつなんざごまんと居る。楽しい殺し合いならともかく、無駄な事はするべきじゃねえって事位は足りない頭でも理解できたさ。

強力な悪魔…そうだな、レベル15以上なら出てきても大丈夫なんだろう。試した事はないからその辺詳しくはわかんねえけどな。

『砂漠の中から殿方を探すようなものですわねえ』

『……………いや、そりゃ違つたろ』

『私には格言ですよのよあ？ くすっ、今度出会えるサマナーは男性だといいですわあ。美味しく気持ちよく感じあえるのですからあ』

『オレ達に勝てない程度のサマナーならそれでもいいか。とりあえず…ん？ この気配は』

『ビンゴ、かもしれませんわねえ』

ここから少し離れた場所から聞こえてくる爆音、そして濃密なマグネタイトの気配と人間の臭いを感じたオレ達。

直ぐに音がした場所に向かい……俺達はふざけた次元の戦いを見る事になる。

あの頃のサマナーは……いや、今もだが、ありえないほど弱く。そしてありえないほど非常識だった。

(おいおい…なんだこりゃあ…)

雑魚の悪魔…良い所4〜6レベルがせいぜいの悪魔だが、それでも人間より弱いなんて事はない。

寧ろ普通の人間を相手にするならばこのレベルなら捻り潰せる位の



強さの悪魔ばかりだ。

それが、数で押しして…押し負けている。

対する人間は一人と、弱い事で有名な妖精ピクシー、そこその強さをもつ墮天使メルコムのを合わせても3体。

たったそれだけの人数でこの数を負ける所か圧倒している姿に、一瞬だが圧倒された。

とは言え、その力量は見た感じでもオレを超えているようには見えなかったし、ピクシーも妖精にしては強いが…程度のクラスだ。

メルコムがこの三体の中では突出して強かったが、それだけ。この数を圧倒するにはそれぞれ力が足りない。

それでも…それでも圧倒できたのはサマナーの能力のお陰だろう。

今でこそ理解しているし、信頼しているサマナーの能力・『文珠』  
それを巧みに扱い悪魔を薙ぎ払って行くその姿は力を求めているオレには輝いて写った。

こいつならば…この人間ならばオレを強く出来る、そう確信した。

「数が多いけど、それだけか。まあ前衛が居なかったら逃げる所だったけど」

『お疲れ様〜。サマナーさんの能力って相変わらずとんでもないね。』

あれだけ居たのにもう全滅だよ。』

『流石は我が主ですね。凄まじいです』

「二人とも、気を抜かない方がよい。さっきからエネミーソナーがレッドを示してる。多分近くに居るよ」

激しい戦いの後にも警戒を続ける、その冷静さは悪魔と戦う上で重要だ。ああ、良い相手を見つけたなんて思ったもんだ。

もう見つかったるんだから、出ていかねえとな、なんて考えながらサマナー達の前に立った。

思えば…この時サマナーに合わなかったらオレとリリム いや、今はパールヴァティだが はどうなってたんだろうな…他のダークサマナーに殺されてたか捕まって犯されてたか…

他の高位の悪魔に食われてたか…未だに彷徨ってたか、ってな所か。おーおー、碌な人生じゃねえな。

とりあえず、オレ達がサマナーの前に出てきた時、驚いた顔をした後に少しだけ笑ってやがった。

後から聞いた話なんだが、リリムはともかくオニは前衛として欲しかったらしい。オレとサマナーは相思相愛だったっつー訳だ。愛情じゃねえぞ？

まあ、憎からず思っちゃいるが、そういうのはアリスかこなたのどっちかとやってくれや。

『よう。殺しも殺したりつてな所かい？』

『まあまあ　可愛い殿方ですわあ　』

「…眼科を紹介しようか？　間違っても僕は『かわいい』と言う顔はしてないよ」

『そ、そんな事ないよっ！　サマナーさんはカッコいいって！』

『我が主の良き所は心かと』

「…仲魔にも居たか…。で、行き成り襲つてこない以上は交渉するつもりかい？　僕は出来れば楽な方がいいけど」

『くくくっ……肝が据わってんじゃねえか。人間にしちゃ豪胆だなあ、オイ？』

「馬鹿言っちゃいけないよ。こう見えてもかなり怖いんだ…悪魔はね…で？　君達は僕に何を求める…？」

高圧的に話すのも交渉っちゃあ交渉だが、サマナーは昔からこういう事に向いてなかった。

色々複雑な人生つての送ってきたせいらしいが、まあ。サマナーとしては減点だわな。だが、オレにとっちゃその辺はどうでも良かった。

相手が強い……つまりオレを強く出来る。後はオレを負かせれば話をスムーズに行くって訳だった。我ながら単純っつーか……馬鹿だわな……所詮はオニって事か。

でも、サマナーの場合はこうした方が楽なんだろう、ぐちゃぐちゃご大層な言葉を並べるのはオレもサマナーも未だに苦手だ。

『話は簡単だ……オレと戦いな。勝てばてめえの仲魔になってやる。オレが勝てばこの場で食われる。シンプルだろ?』

『んなっ！ そんな事させないんだからっ!』

『ふふ、その前に私が食べてもいいでしょう。せめて殺される前に気持ちよくして差し上げますわぁ』

「……オニにリリムか……さっきの様には行かないな」

『お任せを我が主。私が見事あの2体を倒してご覧に入れましょう』

『ハっ!! 上等だっ! さぁ、楽しもうぜ戦いをよっ!』

く回想終了く

この後の事は……まあ、今オレがここに居るって事でわかるだろ? ま、そっという訳だ。

詳しい戦闘描写？ いらねえよ戦闘時間は3分もしねえ内に終わつたからな。ああ、完敗だったさ。文珠で動きを止められた所に魔法の連打だ、勝てるわきゃねえわな。

本当はオレだけが仲魔になって、リリムは逃がすつもりだったが、何か考えたのか随分とサマナーに入れ込んでしまったなあ、なし崩しについてきやがったって訳だ。

あんな…強い快感を伴う痛みは初めてですわあ　　ずっとこの気持ちよさ…感じさせて欲しいんですのお

ああ、めっちゃ引いてたなサマナー。かくいうオレも引いてたがな。そんな訳で、面倒臭いが離れるには惜しいってな感じのサマナーの仲魔になったって感じだな。

今は馬鹿単純に力が欲しい訳じゃねえ…

井の中の蛙…いや、それ以下の存在だったオレ。力、力、力と強くなることしか考えていなかったが…最近漸く、オレが力を求める理由が出来た。

敵と戦いたいから強くなる、殺し合いがしたいから強くなる。それも力を求める形の一つだが、今のオレは違う考えを持つ様になった。

まあ…面と向かって言うのはかなり恥ずいんだが………オレも『誰かを護ってやりたい』そう思う様になったんだ。

一度目は、オレの目の前であっさりとサマナーが殺された時におけるげに。

死神オルクス：アイツと出会った時は単純に自分の力の無さを呪った、オレはこんなに弱いのかと、オレは所詮この程度なのか…ってな。

強くなってもオレは雑魚でしかない、サマナーすら護れない前衛など何の役にも立たないと、自分にムカついたもんだ。

二度目は、英雄・ダテユキノジョウと戦った時か。

あの時におぼろげだった想いは、確固たる理由になった。

オレの力は、殺しを楽しむ為には有るのではなく、仲魔をサマナーを護る刃として存在するのだと。

まあ…今の所はその力も無いのが現状だがな。

最近よく思うが、オレって実は肝心な時にいつつも直ぐ戦闘不能になっている気がする。

ケルベロスの時はブレスの後踏み殺されたしな…そういうオチ役はバフオメットで十分だったの。

今のオレにとってサマナーと仲魔は…そうだな…

サマナーは頼りない弟…みたいな感じか。オレが護ってやらねえと何かやらかしそうで休まる気がしねえ。

時々、思い出したように無茶しやがるからな…普段は戦うのも面倒臭がるくせに、目的が出来ればそれもあっさり翻して戦いやがる。

他の奴等は…まあ、仲魔だな。強いて言えばアリスとアメリカは…なんつーか妹みたいな感じだけだよ。

とりあえずは…この騒がしくも楽しいこいつらを…完全に死なせたくはねえよなあ…

オレに出来る事は少ないかも知れないけどよ、出来る限りの事はするつもりだ。

最悪、通常の悪魔合体をして意志が消えたとしても…オレはそれでいいと思える様になってきた。

なあ、サマナーよ？ 今のオレは馬鹿なのか愚かなのか、どっちだろうな。

ハッ…そんなものどうでもいいか。悪魔は悪魔なりに貪欲に求めさせてもらっぜ。

オレはこいつらの盾になってやる。簡単には崩させねえ、たとえ死んでも盾として形が消えるまで存在してやらあ。

だから、前見て歩けよサマナー？ たとえこの先が地獄でもオレが前を歩いてやるからよ。





Continue 74 〈番外・力を望む鬼〉（後書き）

ついつつかり、此方の部分書くのと直すの忘れてた私…はっ?!  
あるっはいまー!?!（違う）

という訳で、キンキの昔話なのでした。

たまーにこうやって番外を書こうと思います。

ネタがないので、誰かが「こういうのがいいな」「みたいなのを貪欲に補充なのですよ…うふふふ…」（えー

今回は遂に？ 人修羅異界編です。がんばりますねー

どうでもいいこと

エンドブレイカーやってます 楽しいですよー。

アリアオロと言う女の子きやらなのです！ ふふふ…ほしいアイテム見つからないです（涙

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダツキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：3票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：5票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）

ダッキ：3票（手助けフラグはON）

アリス：2票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：0票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら…：メインHPで書く可能性があります  
（危険）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue75 へ変わらないもの・変わり果てたもの（前書き）

今日は……………何故かお休みでした。不思議だ…（汗

始まりました故郷異界編です（正式名称…？ 無いですねっ！

これからのんびりと続く予定ですよー。

具体的にはお話の中盤へ後編orキャラエンド？ の場所ですねえ。

20話くらいで終わるかなあ…どうかなあ…頑張りますね。



異界化・某所

「ここは…あの時の場所か。変な所に飛ばされてなくて良かったよ」

金剛神界から戻ってきた大樹達を出迎えたのは、いつもと変わらな  
い町並みだった。

しかし、そこかしこから感じられる異界の気配と、絶えず鳴り響く  
百太郎の警告がこの町が完全に異界化した事を示していた。

辺りが破壊されていない事に少しばかりホっとしていたこなただが、  
直ぐ思い出したように携帯をとりだす。

「だめだ……圏外だよ」

「私の方も、ダメみたいですね。やはり異界化しているせいでしょうか」

「この町がまるまる異界そのものになっているようだしね。見た感じ昼だというのに人の気配はしない。悪魔に殺されたか逃げ切れたか。ここから近い知り合いの家はある？」

「昼間な筈なのだが、辺りには人の喧騒や車の走る音は一切聞こえない。」

「寧ろ百太郎から悪魔が居るといふ情報が流れてくるだけだった。恐らくはこの辺りから逃げたか悪魔に殺されたかのどちらかだろう。」

「私の家ならここから近くだけど。あ、そうだった！ お父さんやゆーちゃんが心配だよっ！」

「まずは泉さんの家に行ってみましょう。もしかしたら既に逃げているかもしれませんが居場所の手掛かりがあるかもしれません」

「ごめんね。みゆきさんだって心配してる筈なのに」

「お母さんやみなみ達は、危機に聡い部分もありますし恐らくクズノハの方も動いているでしょうか大丈夫だと思います」

『面倒なのは悪魔よね。エストマで行く？』

「時間は掛けたくないからね、急ごう」

エストマをかけて悪魔を避けつつこなたの家に急ぐ大樹達。

この辺りの悪魔は大樹達より弱いようで、問題なく魔法の効果が発揮されていた。

近場に打ち捨てられていた、普通に使える自転車などを緊急時と言う事で無断拝借させてもらい、急いで行く。

悪魔達は走ったりしながらついて来ているが、アリスはちゃっかり大樹の後ろに乗っていたりする。

自転車の速度があれば大体10分程度で到着する距離だった為、直ぐにこなたの家が見えてきた。

辺りも悪魔がいる割には破壊されたりはしていない様で、もしかしたらクズノハが悪魔退治に動いているのかも知れないと考えられる。

家に到着するやいなや、急いでドアに走っていくこなた。

ここに戻ってくるまで出来るだけネガティブ方向に考えないようにしていたが、父親や妹同然のゆたかに何か起きたと考えるだけで背筋が凍ってしまいそうになっていた。

「到着！ お父さんっ！ ゆーちゃん！」

ドアを開けようとするが鍵が掛かっているらしく開ける事ができない。

普段から父親であるそうじろうは家にいる為に、鍵を掛ける事が無い、その為かこなたは鍵を持っていなかった。

もしかしたら悪魔から隠れる為に鍵を掛けているのかもしれないインターホンを押したり、ドアを叩いたりするが一行に反応は無い。

こなたの声は聞こえている筈なので、出てこないと言う事は既に居ないのだろうと当たりをつける大樹達。

こうなると既に殺されているという可能性は案外少ないかもしれないと見ていた。

「こなた。鍵が掛かっているんだから多分既に避難してる筈だよ。ここから考えられるとなると高良さんどころ辺だと思っ？」

「そうですね…緊急避難と言う事でしたら基本は学校か公民館などが候補に上がりますが、これは恐らく悪魔からの避難ですので…他にはクスノハの協力による地下シェルターへの避難が一番濃厚かと思えますね…」

『とりあえずあれだな…今日が何日か調べる方が先じゃねえか？あれから何日たったかわかんねえんだろ？』

「そうか…とりあえずは出来る事をやっていこう。こなたもいいかい？」

「…うん。そだね…いよっし！じゃあ家の中に強制突入だ！フェニックス扉を壊すのDA」



《いや…やるのはいいけど、それでいいのサマナー？》

「家主代行が許可しているのでいいのだよ。TVかPCなら今日の日付分かるしねー。他の場所で調べるより家で調べた方が落ち着くし」

努めて何時もの様に振舞うこなた。

騒いでいないとどんどん嫌な方向に考えてしまいそうになってしま  
うので、態とこんな感じに振舞っていた。

大樹とみゆきの言葉のお陰で、騒ぎ出さない程度にまで心を抑える  
事が出来た事に感謝しつつこの先の事に思考を傾ける事にする。

今が何月何日でどれだけ時間が過ぎたのかを知る事はこれからの行  
動指針に大いに役立つ事になる。

避難しているだろう人達の食糧事情などの情報も大体の当たりがつ  
けられるだろうと考えられる。

まずは、こなたの家にかこうにか侵入 ドアを蹴破ったりは  
してない する事に成功した。

「ただいまー…ってね。流石に誰も居ないか。」

直ぐにリビングに行くが、誰も居ない事に多少落ち着きつつも中が

荒らされていない為どこかに避難してくれているのだと考える事にするこなた。

置手紙などは無い為、こなたが戻ってくると言う事は考えてなかったよつだ。恐らくこなたもどこかに避難していると考えたのだろう。

とりあえずTVをつけてみる事にしたが

「あー… やっぱ繋がってないか。電気が来てるだけ十分って考えておこつか」

危惧していた事は電気の供給がここに来ていたのかと言う事だが、こちらは都合の良い事にまだ通っている様子だった。

異界になった時点でもしかしたら電気はダメなんじゃないかと思えてはいたが上手くいった事にホッとしている一団。

最悪発電機を用意しないとダメかもしれないと考えていたので、これは僥倖と言う所だろう。

こなたも自分の家ならば拠点としても使えるので、色々助かると考える。

「となるとパソコンで調べるしかないね。見た感じ新聞はあの日の日付のままだし」

「お父さんの部屋のパソコンはー…………… ああ、Dドライブ見られた

ら死ぬって言ってたしやめてあげよう…」

『…それって娘に言う言葉なのかな…』

「うちのお父さんだしねっ！！ まあ、とりあえず私の部屋に居ろっか、私のPCなら問題ないしね〜」

『へいへい。んじゃ行くっぜ』

こなたに案内されて歩いていく。

女性の家にかかる回数など片手で足りるほどしか体験していない大樹だが、その半分ほどが甘い話ではなくこつこつという事務的と言つか殺伐的な感じなのが切ない。

「という訳で私の部屋だーっ！」

『うん、予想通りの部屋ねっ！』

「これは…まあ…凄まじい事で」

「泉さんのお部屋は色々な物がありますね」

色々な絵がありますね…どれも女の子の絵ばかりですが。

「まあ、普通のおにゃの子の部屋とは違つかないーんで。変かな…?」

ちらりと大樹を見るこなた。趣味は大事だが、それでも好きになつた相手がこういう趣味を好きでは無いときっぱり言われると辛い物がある。

だが、大樹はその辺をあまり気にはしていないようだった。

人の趣味をを笑うほど大樹は性格は悪くない。流石に猟奇的な事が趣味だとか言われたら付き合いを考えるかもしれないが。

「良いんじゃないかな？ 趣味は趣味だ。世の中部屋中埋め尽くす位色々な物を集めてる人もいる位だしね」

「あはっ、そーだよね いよーし、さくつと調べよう」

急に元気なつたこなたに良く分からないと言つた感じの小竜姫、剣の表情はわからないのであくまでも雰囲気 だが、みゆきはそんなこなたを見て優しく微笑みを浮かべている。

使い慣れたパソコンをカタカタ動かして行き、何月の何日なのかを確認していく。

「……良かったって言うべきなのかな。一応あれから一月程度しか経ってないみたい。後は………あー、やっぱりネットはだめかあ。携帯もダメだし電気が通ってるだけ儲け物かな」

「1ヶ月か…現実世界と異界が連動しているなら今頃世界は核が降り注いで滅びているか、どうなっているか…だね」

「そちらもどうにかなっていると信じたいですね…」

『何にせよ阿呆みたいな日数が過ぎてなくて良かったじゃねえか。んで？ これからどうするよ？』

今があれから何日過ぎたかは漸く理解できたが、

「まずは知り合いの搜索…後に彼等の安全を確保して、その後に基地をこの異界が元に戻る前に破壊する。その後でこの異界を作った不良を倒す…か。やる事が盛り沢山だね」

《食料や必要な物を確保するのも良いのではないか？ どうせ人間など辺りにはいないのだろうし貰っておいても問題無いだろう》

「確かに、盗みとか云々言ってる場合じゃ無さそうだしねえ…必要分は確保すれば大樹君の能力で増やせるらしいし良いかもね」

「となると…目的が一つ増えるか…パーティを分けるのも考えた方が良くもしいないな」

危険では有りますが、調達班と搜索班に分かれたほうが効率は良いかもしれませんね。となるとこの場合は佐藤さんのパーティと泉さんのパーティに分かれる事になるのでしょうか。

デビルサマナーが二人居る時点で戦力的には過剰とも言える。

相手が極端に強くない限りは、寧ろ相手を圧倒できる戦力とレベルを持っているのだ。

大樹は元々仲魔とだけで戦闘をしていたし、こなたの方もかみとつかさが居ないが、戦力としてみゆきと仲魔が増えている為に問題は無い。

『この場合、大樹さんと私達が調達班かな？ マジックカードは大樹さんの能力だし』

「そうなりますね。レベルや経験的に佐藤さん達をそちらに回すのは痛いですが…この辺りは今から煮詰めましょう」

「うえー…大樹君と分かれるのかあ…ちよいと心配だなあ」

『いままでずっとそうだったし早々負けないわよ？ こなたも私達の実力知ってるじゃない？』

「うんにゃ…そっちの方じゃなくてね」

じーっとアリスを見ているこなた。

きよとんとしていたアリスだが、直ぐにこなたが考えている事を理解してニンマリ笑う。

『ふふふふふふ〜』 今の内にポイントは私が頂くね 』

「んなつ！？ ううう〜」

二人にしか分からない争いが小さく始まっているが、誰もが見ているが誰も気にしないで居た。

大樹自身も今はそちらに感けている余裕はないので、これからの事を詳しく考えていく。

分散する事の利点と言えば、一番に挙げられるのは効率の良さだろう。目的が沢山あった状態で行動すれば、勿論その総てを満足にこなすことは難しい。

だが、一つに特化しておけばそのみを注視すればいいので、効率は大分上がる。

食べ物はある程度有るとはいえ、コピーの能力は一日に出来る量に限界がある。それならば増やすよりも元々あるものを補充した方が今の内は楽なのだ。

人を探すにはばらけて動く方が、探しやすいのは確かだろう。

問題は、この異界の悪魔を分散したパーティでどこにかできるのかと言う点と、電話も繋がらないので連絡のつけようがない所だ。

空を飛んで知らせる、魔法を上空に打ち込む…などと沢山の例もあるが、同時に悪魔に見つかる可能性もある。

文珠の【伝言】で知らせる手もあるが、そんな事に文珠を使うよりはもっと違う場所で使うべきだとも考える。

なんにせよ、まずは皆で相談しようとなた達に話かけた。

「分散するのは良いけど、まだ僕達はこの町の悪魔を見ていない。分かれて行動するには情報が足りなすぎると思う。何にしてもまずは悪魔の情報を集めるために同時に行動するのも候補にいれるよ。ある程度のレベルが分かった後なら分散するのも視野に入れよう」

「そうだねえ。それじゃここは私と大樹君の少数人数でっ！ とか」

『はいはいはい、大却下』

「冗談だったけど、そうあからさまに却下されると逆に燃え上がるという…」

『つぶつぶつぶ…』

「つぶつぶつぶつぶ…」

『……………あー、詰めてくか』

「そうだね」

「そうですね…」

とまあ、こんな感じで大樹達は更に作戦を詰めていった……………



どういう行動をとる？

1・分かれて行動する・こなた班（搜索・危険度：大） 大樹班（  
調達・危険度：小）

2・分かれて行動する・こなた班（調達・危険度：小） 大樹班（  
搜索・危険度：大）

3・同時行動をして悪魔の情報を知った後に分かれて行動する（搜  
索・危険度：中 調達：危険度：極小）

4・同時行動を続ける（分かれての行動をしない 搜索・調達：危  
険度：超極小）

## Continue75 変わらないもの・変わり果てたもの（後書き）

という訳で選択肢登場です。ふふふ…ゲームブックかTRPGのゲームマスターな気分です（えー

良かったら皆さん選んでくださいね。お勧めは5番「僕は家に帰って寝る！」です（そんなものは無い

どうでもいいこと

時々…物凄くすっぱいもの食べたくなりませんか？

私はそういう時はフルーツとか良く食べますねえ。

皆さんはそういう時何食べます？

### 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

逃げるダッキ、追いかけるこなたな感じですよ。

こなた：6票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：9票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）

ダッキ：4票（手助けフラグはON）

アリス：5票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：3票（…？…？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：2票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
雪之丞：1票（再戦フラグまで後1回）

もし：パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue 76 〈複雑で単純な世界〉（前書き）

アンケートありがとうございます！。

1：1票：大まかな内容 探索中こなた班のレベルが上がり、大樹班は最後にシスター・アンナと遭遇。フラグ獲得及びフラグ消去。  
2：6票：大まかな内容 探索中大樹班のレベルが上がり、こなた班はかがみらしき人物を発見、見失う。フラグ獲得及びフラグ消去。

3：6票：大まかな内容 探索中全員が1～2レベル上がり、最後の方でクズノハを発見するが見失う フラグ獲得？

4：6票：大まかな内容 探索中全員が1～2レベル上がり、最後の方でクズノハを発見、コントタクト成功 フラグ獲得

なんとも見事に6で揃いましたね……………

流石にどうしようもないので、サイコロの出番です！

2は1～2 3は3～4 4は5～6でした。では（コロコロコロコロコロ

ではでは内容は此方なのです！

Continue76 〈複雑で単純な世界〉

こなたは現在、真剣に悩んでいた。

取るべきか…取らざるべきか…もし手に入れば彼を掴む力になる  
だろう…しかし自分は堕ちてしまいかもしれない。

これを取らなければいつも通りの毎日が続くだろう。だが、これ以  
上の進展はないかもしれない。

考える、考える、考える……………

そして…その手は『ソレ』に伸びていく……………

「…ろりっこマンセー5月号……手に入れるべきか、それとも無視するか…そこが悩み所だ…」

『戯けた事しないで缶詰とか集めなさいよ』

「うう…大樹君をロリにする大作戦が発動中なのにい」

こなたとみゆき、そしてフェニックスなどの仲魔達は現在コンビニに訪れていた。

話し合いの結果、まずはこなたの家の周りを調べつつ、互いに捜索や調達をする事にしたのだ。

時間は万が一の場合に文珠でのやり取りを考えてはいるが、基本は夜の19時になったらこなたの家に戻る事になっている。

ありがたい事にこの辺の悪魔達は強くてもレベル10が良い所だったので、倒す分には問題が無く直ぐにコンビニに到着できた。

『それにしてもレトルト以外は駄目っばいな…うわっ!？ これ斑点生えてやがる…』

『ソレハ黴ダ…ムウ…警戒シカヤル事ガ無いセイデ暇ヲ持テ余シソウダナ…』

『アイスは食べれるホッ　まとめてしまっておけばいつでも食べれるホー』

「そだねえ。袋に纏めてからカードに入れてねー」

『了解だホッ』

「それにしても…皆さん着の身着のまま避難されたのでしょうか。まさかコンビニもこのままとは…」

生物の賞味期限を見ると自分達が居なくなつた次の日に設定されているものが多い。クズノハの行動が彼等を救つた可能性が濃厚になつてきている。

「でも…人の死体もあつたけどね」

『ここに来るまでに数人ほど…でしたね。ほぼ原型を止めていないのでゾンビにはなりません』

デイスが食料などを詰め込みながら言う。

やはり総ての人間が避難していると言うご都合主義などは存在せず、疎らにだが車が事故を起こした後や、その残骸。

死んでいる悪魔や人間の遺体などが打ち捨てられている場所もいくつかあった。

「どれだけの人が避難できたか…少し心配ですね。」

「着てる服からして知り合いじゃない事は確かだけど、やっぱり悪魔が居たらこうなるよねえ。皆無事だと良いけど。」

「かなりの日数が過ぎていきますし…コンビニなどの食料がこうして放置されている以上。皆さんの食料自給率が心配ですね。」

「今保存してる分じゃ足りないよねえ…うーん」

大樹が無限に増やせる様になったとは言え、それで賄えるのは良い所10〜20人が限界だろう。寧ろそれでも切り詰めなくてはいけない。

一日にコピーできるカードは今の大樹だと20枚にも満たないのだ。そもそも大樹だけに頼む訳にも行かない、できる事は自分達でやらなければ、依存してしまうと最悪大変な事になる。

『しかし、この辺良く電気が通ってるよなあ。普通こういう場合切れね？』

「そこん所は何かご都合主義とか入ってるんじゃないの？ まあ、お陰で飲み物や冷凍品をゲットできるのが嬉しいね。お弁当とかは流石に死んでるけどさ」

「異界になっている以上、普通の常識は通用しませんからね…使え



る部分は最大限に利用させて頂きました」

「そうそう。という訳で漫画とかもハッ！ こいつは…ヘビィだぜ…」

『はいはいエッチな本は没収』

「ちょっ、まっ！？ 流石に酷くないっ！？」

『こんな物読んでどうするつもりよあんたは…一応女でしょっ！  
恥じらいを持ちなさい恥じらいを！』

「ふっふっふ。甘いぜフェニ子ちゃん。おにゃの子だってそういうのは気になるお年頃なのだよっ！」

『誰がフェニ子ちゃんかつ！！』

「…何故でしょう、あそこにかがみさんがいるような気がしてなりません」

『似てるっつていやあ似てらあな、性格とか。それにしてもサマナーも色を好む年頃かあ。あれでもうちよつとあれならなあ…アメリカちゃんとかさ』

『寄ルナろりこん』

『サマナーの半径20キロに近づかないで下さいまし』

白い目でオリアスを見るユルングとシルキー。目が本気と書いてマ

ジと言っちゃった。

『ひどくなっ!?! 純粋な愛だよ愛っ! 英語にするとラヴッ!?!』

『ソナナ愛ナドイランワ』

わいわいと騒ぎながらも、その手は休む事無く必要な物を取り込んでいく。

こうしてみるとやっている事は間違いなく火事場泥棒だな、とみゆきが理性的に考えてしまう。

しかしこうしなければこの先生きていけるかどうかも分からない以上、使えるものは使わせてもらおうと心に決めていた。

「もし、下手したらこの世界は終わるのだから、大事の前の小事だよ」と大樹が言っていた言葉がとても印象的だったようだ。

1時間ほど必要な物を纏めた後、次の店に向かう事にした。

.....

.....

...

銃声が響く

脳天を撃ち抜かれた悪魔がその場に倒れこみマグネタイトに変換されていく。

この町が異界になった時、ここは彼等悪魔にとって最高の餌場になっていた。

時々小煩い人間達が居たがそれも美味しく喰らっていた。これが強くなれる、もっと上の存在になれると彼等は喜んでいた。

しかし、小賢しい人間共が総動員し餌をどこかに避難させてしまったのだ。こうなると餌である人間を探すのも一苦労だった。

そんな中ふらふらと高純度の餌がこの場に紛れ込んで来た。

デビルサマナー。沢山のマグネタイトを持つ悪魔にとっては強敵で

あり、同時に最高のご馳走である存在。

味方は10体以上居て更に全員がそれなりに強い悪魔だった。だから奇襲を掛けて喰らい尽くそうと考えたのだ。

奇襲は成功し、後は脅える人間を喰らい尽くすだけと悪魔達は笑っていた。

それなのに

『うぎゃああああっ!?!』

それなのに

『くっ……くるなっ!?! くるなああああっ!?! がぶっ!』

それなのに!?!

『た、助けっ!?! ぐえええええっ!』

戦況は圧倒的だった。そう…人間達が大幅に有利と言う状況で。

前衛を攻めた悪魔は、その攻撃を易々と避けられ斧で真つ二つに断ち切られ死亡した。

弱そうな女の悪魔を殺して食らおうとした奴は、凍て付く吹雪が襲い掛かり一瞬で氷付けにされ。

妖艶な悪魔の微笑を見ってしまった奴等はお互いに殺し合いを始めてしまう始末。

弱そうな子供の姿をした悪魔は死霊や幽霊を巧みに操り近寄る事さえ出来はしない。

そんな中デビルサマナーが一步前が出る。

「自分達で奇襲しておいて、死にそうになったら逃げるとか…まあ、僕も多分逃げるけど。でも…」

『ひっ、ひいひいっ!?!』

「やられたら、やり返されるくらい君達も分かってるんだろっ?」

『我が主よ…いけますっ!』

魔銃・フォルトウナを構えた大樹が悪魔の頭部に狙いをつける、逃がすつもりは無く、今使える最大のスキルを使う。

至高の魔弾・弱

弱と銘打たれてはいるが、その威力は銃のスキルの中ではほぼ最高に近い威力を持つ。

轟音と共に放たれた魔法の弾丸は寸分変わらず悪魔の脳天を貫き、爆音を撒き散らしていく。

恐らく悪魔は自分に何が起きたか分からないまま一瞬でマグネタイトに変換されただろう。下手に痛みを感じるよりは優しいかもしれない。

「さて…今ので最後かな」

『お疲れ様、大樹さん』

ぴよいつと抱きつきアリス。少し顔を背けつつもこれだけ可愛い女性に抱きつかれて嬉しくない訳が無い。

アリスも照れつつも嬉しそうにしている大樹を見て喜んでいたが、大樹の方から離れていったのでこれ以上は諦める事にしたようだ。

こなたも居ないし、今は独占中と少し大らかになっているのかもしれない。

『やれやれ…こいつら本当にレベル25〜30なのかよ？ これならパトリムパスの方がまだ倒し甲斐がある』

強敵と戦い続けてきた為、雑魚悪魔の攻撃などが遅く感じ、とても弱く見えていたキンキ。

実際にはそれなりに強力な悪魔達だったのだが、あの戦いを経て戦い方などが巧みになって来たのもあるだろう、今更ただ徒党を組む程度の悪魔に負けるほど弱くはない。

『力だけ強いつてだけなんじゃないのかな？ でもそっちの方が楽で良いわよね』

「ご主人様。 宝石見つけたのです」

いそいそと倒した悪魔の居た場所でアイテムを探していたアメリカ。大樹の喜ぶ事が自分の幸せなので、頑張っているようだ。

今回は余り役立てず殺されてしまったので、こういう所から少しずつ頑張ろうとしているらしい。

「ああ、ありがとうアメリカ。それにしても…結構死体も多いな」

こなたの家の周辺は特にそういう死体は転がっていないかったが、少し進んでいくとまばらにだが人間の死体が食い散らかされたりしている。

恐らく数が少ないように見えるのは一口で食われたかマグネタイト

に変換されて肉体が消滅しているかのどちらかだろう。

見ている正直気持ち悪いが、ゾンビになる訳でもないので基本放置している。

わざわざ墓を立てるなんて真似をしている暇など無いし、大樹にはその義理もない。

「百太郎に反応は…イエローか。バフオメットにグクマッツは警戒を続けてくれないか？ 僕とアリスとアメリカで調べに回るよ。キンキとパールヴァティはその場に応じて動いて欲しい」

『了解ですわあ』

『あいよ。まあ、気をつけていけや』

「了解したよ」

今回の戦いは奇襲を受けた事もあって陣形がバラバラになった為、経験を積むと言う事で大樹も前衛に立ち戦う事になっていた。

銃はフォルトゥナのお陰もあり、こなたには勝てないものの、かなりの命中率を誇るが剣の方はあまり得意ではなかった。

そもそも大樹はデビルサマナーになるまで一般人だったのだから、肉体が強化されているとは言え戦い方は滅茶苦茶でしかない。

みゆきのように覚醒したてでも、二流〜一流半の実力があるという



訳でもなく、どれもこれも平均的なのだ。

戦況に応じてどんな事にも対応できるし、指揮官としてはこれだけの戦闘能力があれば十分なのだろうが、この先を生き残るためには経験と技術が必要になる。

実戦は訓練の1000倍の勢いで経験になると言うが、命を懸けた戦いをすることで少しずつではあるが確実に大樹は強くなっていた。

強いて問題があるといえば、総てが平均な為に特化した相手にはその分野で勝つ事が出来ないと言う所だろう。

「目的の基地の場所は…ここから先に10キロか。異界をどうにかするよりも先に基地を攻めるべきだろうけど。この3週間でどうなっているかを知らないで攻めようにも攻められないな」

『メシアとガイアもここに居るんだよね…どうなってるのかなあ』

「あの二つは多分どこかに隠れ家でもあるはずだよ。問題はクスノハとコンタクトする方法だけど。地下シェルターがどこにあったか聞いておけばよかったな…」

『連絡の取りようがねえってのが痛いな。ちっ、面倒くせえ』

『仕方ありませんわあ。この時期に戻って来られただけでも良しと考えませんかねえ』

「パールヴァティの言う通りだね。それにしても人が居ないな…ガイアでもメシアでもクスノハでも居ればいいんだけど」

「情報が欲しいのです。あ、ご主人様ご主人様、今思い出した事があるですよ」

「？ どうしたんだいアメリカ？」

「邪教の館はどうなってるんです？ もしかしたらまだ居るかもですよー」

「……盲点過ぎた。そういえばまだ調べて無かったね。急ごう」

誰から探せば良いかと言う事のみを考えていたせいで一番大事な事を忘れていたらしい。

悪魔と関わりの深い邪教の館ならば、まだ普通にやっている可能性もあるだろうと予想もつきやすい物だ。

直ぐに探索を中断し邪教の館を目指す事にする。ここからならば1時間も少ない内に到着できるだろう。

悪魔との戦闘も加味した場合でも、ある程度余裕を持って戻れそうだった。

「ありがとうアメリカ。お陰で光明が見えてきたよ」

「ご主人様のお役に立てて嬉しいのですよー」

きゃいきゃいと跳ねて喜びを表すアメリカ。

これが死体や幽霊を操って場を支配する魔法使いだと何人が理解できるだろうか。

見た感じからはどう見ても少女にしか見えない。

『ふむ、次の目的地が見つかったのかのう？』

『らしいな。こんな辛気臭い所に居るよりも次の場所に向かおう。ついでに合体素材も集めておいてくれよサマナー？ 我はもっと強くなればならんからなっ！』

『ヒョーヒョー…青いのう。じゃが良き青さじゃ。これからどうなるか楽しみじゃわい。ヒョーヒョーヒョー』

『？ どうしたんだグクマツツ？ 急に笑い出して？』

『さてのう。ほれ、皆ワシ等を待っておるぞい。』

『ん、ああ』

終始ハテナ顔をしながら前を歩いていくバフォメットを見つつグクマツツは微笑ましそうにその様子を見ていた。

付き合いはほんの数日、敵に情けを掛けられての仲魔入りではあったが、このパーティは彼にとって有意義な場所になりつつあった。

成長が期待できる悪魔と人間。元々鶴と言う老成していた悪魔だった為か、彼等が育つていく様を見るのがとても楽しみなのだ。

この楽しみを自分に教えてくれた彼等には感謝する事にしよう……そしてそれに報いる為に、彼等の未来を見させて貰う為に戦おうとグクマツツは大樹達を見つめていく。

『さて……どうなるものかのう』

グクマツツの声が風に流されていった……

……

……

……

悪魔の群れを倒した！！

各種アイテムを手に入れた。マグネタイトを手に入れた！

大樹のレベルが3上がった！　しかしナナヤシキを支配する事ができない！？

！　アリスのレベルが1上がった！　他の仲魔のレベルが2上がった

……大樹の成長限界が近づいている……

## 店内部。

この辺りでは割りときめめの食料品店などを何件も転々としている  
こなた達。

貰ったカードの枚数が枚数なのでかなりの量を確保する事ができた。  
特に薬局ではかなりの量の薬等を手に入れることができたので、万  
が一の場合の薬もこれで安心だろう。

総ての店が完全に無傷とは言えず、いくつかの店は悪魔に乗っ取ら  
れていたたり破壊されていたりしたが、概ね問題なく補給はすんでい  
た。

現在は時間的に最後になる2階建ての大型店で食料などを保存する  
予定らしい。ここが終われば今日は一度家に戻る事になる。

「じじいっ！」

『同じ馬鹿な事したら燃やすわよ?』

「サーセン」

「こちら辺に必要な物は大体集まりましたね」

カードも残り少ないですし、とりあえず戻りましょうか?

「そうだねえ、そろそろ大樹君達も帰ってきてるかもだし」

『愛しの彼ってな所だなんて、いててててててっ!?! 決まってるっ!?! 決まってるからサマナーっ!?!』

「いや、決めてるし。ふっふっふ。そう言う事言う口はここにや  
く?」

『ちよっ!?! 聖水はやばいっ! やばいって! みゆきちゃんへ  
ルプーっ!?!』

何をしているのですか貴方達は...

「えーと...今回はオリアスさんが悪いかと.....ん? ...!  
? か、かがみさんっ!?!」

「んなっ!?! どごごごっ!?!」

みゆきは奥の方でかがみらしき人物が歩いていったのを見つけた。

直ぐにこなたが走り寄って行くが、既に其処には誰も居ない。

「かがみー！ー！ー！　かがみー！ー！ーんっ！　私だよっ！　こなただよー！ー！ーっ！！」

『本当に居たのっ！？』

「はいっ！　あれは恐らくかがみさんですっ！」

大声を上げてかがみを呼ぶこなた達だが、誰も近寄ってくる気配はなく、声だけが虚しく響き渡る。

この後全員でくまなく店の中を探索したが、結局かがみを見つける事は出来なかった。

もしかしたら見間違いかもしれないとは思っただが、人間の臭いはしていたとじゃあくフロストが確信した為かがみで無かったとしても誰か人間が居た事が間違いなかった。

とりあえず一階の休憩スペースで先程の事を話し合うこなた達。

「仲魔を見て逃げたのかなあ…合体したから姿変わってるしね」

「すみません、もう少し早めに気付いていれば」

「ん、私なんて気づきもしなかったし仕方ないよ…でもかがみんだつたら何で来なかったのかな…」

『どちらにしても人間が居る事は分かったって事にしておきましょう。匂いを追跡できたらよかったんだけど、魔獣はいないしね』

『ここに居てもどうしようもありませんし、とりあえず戻りましょうサマナー』

「そだね…」

一先ずかがみが生きているかもしれないという希望は持てた一同。

これならつかさも大丈夫かもしれないと、理由付けとしては弱いかもしれないが納得しておいた。

あれは本当にかがみだったのかと、少しばかり猜疑的になりつつも、信じたいとみゆきとこなたは帰路につく。

特殊イベントフラグ 『神々に裏切られた巫女』の発生条件が整いました。

特殊イベントフラグ 『壊れていく聖母』の発生条件が消失しました。



まさか3つとも同値になるとは思わなかったのですよ（汗  
という訳で緊急措置として知り合いにサイコロを振っていただきま  
した。

出目は内容の通りに『2』となりました！。

沢山のアンケートありがとうございます。

みゆきさんがかがみん？を発見しましたが、これからどうなるので  
しょうか。

次回は戻る前に佐藤君が邪教の館に向かうですよー。

さて…ネタがないまま良く続いているなあ…と思う今日この頃です。  
だれかー…ネタを、ネタを下さいー（ころころころころ

どっつてもいいこと

うどんを食べる時、皆さんはどういう風に調理しますかー？

私は暖かいのも好きですけど、ざるそばみたいにつゆにつけて食べ  
る冷やうどんも好きだったりします。

という訳で麺類は美味しいですよ。うんうん。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお  
答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

## 次回コミュ話対象キャラ表

こなた：9票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
みゆき：14票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）  
ダッキ：6票（手助けフラグはON）  
アリス：7票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
パール：4票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
フォル：3票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
雪之丞：4票（再戦フラグまで後1回）

もし：パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

## 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue77 〈複雑で単純な世界〉 〈前書き〉

佐藤君のターンその2ですよー。

謎が深まったり、深まったり、深まっていますねえ…風呂敷包めるかなあ…頑張ろうっと。

では短いですがどうぞなのです。

ああ…明日は早めに帰ってこれるかなあ。

邪教の館前

「あれは……守護者なんだろうか？」

大樹達が邪教の館の近くに到着すると、其処には一体の悪魔が店を塞ぐような形で立ち塞がっていた。

姿は人型に見え、大きさも普通の人間かそれより少し小さい程度にしか見えず、特徴的な物は龍の仮面を被って居る所だろう。

しかし、その威圧感は凄まじく周りの悪魔が近寄って来れない方だ。キンキが戦っても彼女では勝てるかどうか分からない。

先程まで戦っていた悪魔とは違い、ただ純粹にこの店を護っている様に見えた。

何故そんな事をしているかは分からないが、もしこれが邪教の館の主人の命令で立っているならば交渉する事によって安全に入ることも可能だろう。

ここで微動だにせず立っているのだから、何かしらの意味があっているのだろうしと僅かの時間で考える大樹。

『私がいこつか…？』

アリスが言う。彼女ならばあの悪魔と対峙した場合でも接戦に持ち込めるだろう。

戦闘になれば仲魔全員で出るのだからあの悪魔には負ける事はない。しかしそれを大樹は止める。

「いや、僕が行こう。この場合あの悪魔は人間より悪魔に注視する筈だ。ここが邪教の館でこの悪魔がもし守護者なら交渉は僕がしやすい…と思う」

『問題はサマナーの交渉下手さ加減か』

「……………なんとかしたいね」

大樹はかなり交渉が苦手だ。サマナーとしてかなり致命的な部分でもある。

それでもこなたの交渉術を見たり聞いたりして少しずつではあるが、上達していたりもする。問題はそれが上手くいつていないだけだったりするが。

見た目的に物理攻撃を得意としてそんな悪魔の為、バクヤを降ろし物理体制を持たせておく。

これで相手が貫通などを持っていない限り直ぐに殺されると言う事

はない。

出来る限り気配を抑えて、店に向かって歩いていく。

『何者か……人間が斯様な場所で何をしている』

「僕はデビルサマナーだ。用件は此処の主に会いに来た、此処の店主と僕は知り合いでね。貴方は此処の守護者かい？ それとも？」

『……然り。我はこの邪教の館の守護を命じられし、造魔・ラリヨウオウ。此処を悪魔より護る為に作り出された人造の悪魔である』

「造魔……ドリー・カドモンがまだあったのか……いや。それとも……それよりも、此処を通して貰えないだろうか？ 僕達は彼に用事があるんだ」

『……ならぬ。此処より先はある人間しか通すなと言う命令を得ている。それ以外の者は何人たりとも通す訳にはいかぬ。退かれよ』

持っていた剣を大樹に突きつけるラリヨウオウ。

殺気は感じられないが、無理に此処を通ろうとすれば全力で襲い掛かってくるだろう事は間違いない。

だが、ラリヨウオウが言った言葉に少し引つかかる部分があり、それを聞く事にした。

「ある……人間？ それは？ 名前などを教えてもらえないか？」  
「ラリヨウオウが邪教の館をを護っている事は、聞いた言葉からも間違いはない。」

ある人間なら通しても良いと言うならば店主は誰かを待っている事になる。

『良からう。対象者は『佐藤大樹』『泉こなた』『麗鈴舫』の3人だ、それ以外は……』

その言葉に大樹は店主が自分を待っていてくれたという現実に驚きと少しばかりの喜びを感じ、しかしそれを抑えて話を続ける。

「僕は佐藤大樹だ。名前だけじゃ、対象にならないかい？」

『！？ □だけ……では無さそうだな。ならば問おう。汝の持つ造魔の名前を。それが確かならば此処を通す事にしよう』

「アメリカ。直ぐ其処にもいるよ……これでいいかな？」

『成程：失礼した佐藤大樹殿。この数週間で悪魔やメシア、カオスの人間が此処を攻めて来る事が多かったので警戒させてもらった』

「成程ね……おじいさんは元気かい？」

『無論。佐藤大樹殿、汝が来られるのを待っていたようだ。直ぐに向かわれると良い』

締め切っていたシャッターを一部だけ開けて大樹を通してくれるラリヨウオウ。

仲魔も同行をOKされたので全員を連れて行く事になった。

ラリヨウオウ自身はこの後もこの場を護らなければならぬ為、先程の場所でこの後も警護を続けるとの事らしい。

現実世界では3週間も立っているとはいえ、大樹達が此処を訪れるのはつい数日前の事になるため、懐かしいという感覚はない。

いつも通り地下を歩いていくと、様々な機械の音が聞こえてくる。

「無事だとは思っておったが、随分と来るのが遅かったのう。坊や」

「色々有りました…ご無沙汰してますおじいさん」

「うむ。久しぶりじゃな。仲魔達もかなり強化されているようじゃし、余程大変な目にあってきたんじゃろう」

普段通りに話しかけてくる店主に大樹も何時も通りに話していく。

それはまるで、近所の知り合いのおじいさんに話している近所の青年の様な親しみ具合だった。



お互いの無事を確かめ合い、大樹はこの3週間にあった事を聞き、店主は大樹達に何が起きたかを聞く事にした。

……

……

…

「成程のう…この異界化にはそんな訳が…こう言うてはなんじゃが、上手く利用すれば核を防ぐ事は可能かも知れぬな。この際の人間数十〱数百は犠牲になったと考えるのも有りかのう」

『でも、このままじゃやばいよ、さっさと基地を壊してあの不良を殺さないとなね』

「それもだけど、まずは他の人達がどうなったか知りたいな。おじいさんが知っている場所の地下シェルターとかありませんか？」

「ふむ…坊やにならば話しても良いじゃろっ」

そういつと店主は近くにあったディスプレイを大樹達に向ける。

老人が弄っているとは思えない巧みさでキーボードを押していくとディスプレイに町の地図が浮かび上がってきた。

その町の幾つかの部分に赤い点が点滅している場所がある。その数、大体6個前後。

『こりゃあ…あれか？ 地下シエルターの数とか？』

「その通りじゃ。わし等も裏で行動している以上何かあった時の為に避難する場所や、地下シエルターの場所は把握済みじゃ。このうちの2つがクズノ八が管理しておる地下シエルターじゃな」

「クズノ八が管理…と言う事はやはり？」

「うむ。こことここ…そしてこのメシア教会にある点がメシア教が保持している地下シエルターじゃ。主に信徒などを保護しておるな。それ以外は例え家族であろうとも入れることは無いらしいの」

メシア教が保有している地下シエルターの場所を示される。

話によると此処はガーディアンにヴァーチャーが数体置かれている為、一般人が庇護を求めても信徒ではない限り追い返されるか、もしくは殺されているらしい。

「此処は…？ お話の通りなら此処はガイアなのです？」

アメリカがこの中で唯一離れた部分にある点を示す。

「そうじゃ。此処が唯一ガイア教が保持しておる地下シエルターじや。とはいえ避難しておるのは主にガイア教の上位の幹部ばかりらしいがの」

『クズノハが確保してるシエルターって何人くらい入れるの？』

「そこまではわしも把握しとらん。じゃが2つで大体5000人ほど入れれば御の字じゃなあ…まずこの町全員を避難させるには難しいじゃろ。他の地下シエルターもあるしそこは何とかなっているかもしれないがな」

「それでも、これで場所が把握できた。上手くいけばこなた達の親族や知り合いも此処に居るかもしれない」

求めていた情報をおささり手に入れる事が出来た為喜ぶ仲魔達。

対価としてマグネタイトや魔貨、1ヶ月は食べていけるだけの食料などを渡したがそれでも足りないと感じてしまうほどの情報量だった。

流石に悪いと思った大樹だが、前回のミッションでのお礼も兼ねているから気にするなと言われてこれ以上は逆に店主の迷惑になると

ここで終了する事にした。

此処に来てよかったと改めて感じつつ、この後の事に思いを馳せていく。

これを見る限り、勢力的にはメシアがガイアを上回っている様に見える。クズノハは2つほど確保しているが恐らく其処に非難している人間の大多数は一般人だろう。

今の所悪魔の混乱の為に表立って争ってはいないようだが、それも現在食料が持つているからに過ぎない。

普通の異界と違い、ここから外に出る事は出来ず食料品などは予め用意しておいた物しかない筈。それが足りなくなれば、残っているのは食料品の強奪が待っている。

大樹が食料品を増やせると言っても限界があるし、そもそも知り合いでもない相手に食料を配るほど大樹は優しくくない。

そうになると、知り合いだけでも地下シェルターから連れ出して避難するという事になるが、それも現状では悪手でしかない。

「まずはこの情報を元に相談かな。これだけ距離が離れていれば、メシア教やガイア教と鉢合わせすることも少ない筈」

『そうですねえ。この後の問題は食料関係かもですわあ』

『食料かよ、面倒な問題だなあ』

「日本はそれなりに食糧事情は豊かだったからね、まさか食べ物で悩む時が来るなんて思わなかったよ。と、おじいさんは大丈夫なんですか？」

「わしはそもそもそんなに食べんしいう。このまま節約をしていけば数年は楽に暮らして行けるわい」

「おじいさんが死んだら僕も困ることになりますから、今度色々もつて来ますよ」

「ほっほっ。すまんう、さて折角来たのじゃ、合体でもしていくかの？」

『あー。どうする？ オレはどっちでも良いけどよ？』

『我は合体したいぞ！』

「ああ…：そういえば真・悪魔全書が使えましたよね？」

「うむ、忘れてはおらんよ。カードも出来る限り都合するともな」

前の依頼の報酬で本来かなりのお金を支払う事で利用できる真・悪魔全書が使える様になっている大樹。

今まで出会った事のある悪魔ならば呼び出して仲魔にしたり合体材料に出来るのが利点だ。

カード合体と違い多少でも経験が増えるのが利点だろう。勿論、まずは交渉から始まるし、上手く言ったとしても合体時に意志を乗っ

取られる可能性も0ではないのだが。

この中でバフォメットは唯一レベルが低い。現在レベルが大樹に負けている時点で戦力的に下ともいえるだろう。

大樹も30レベルにはなったので、35レベル位にまでなら合体できる。

「この中で…うん、上手くいけば魔王オーカスに出来そうだね」

『魔王オーカスだとっ！ それだ！ それで頼むっ！ 再び我を魔王に戻してくれるのか！ ありがたいぞサマナー！！』

「問題は、外道ドツペルゲンガーに事会ったが無いと言う事と、狂神オグンが登録されているかだね」

『ふっふっふっふっふ！ これで再び魔王に戻る！』

『魔王（笑）』

『（笑）をつけるなああああああっ！？』

邪神であるバフォメットが合体で魔王になる為には、それなりのレベルの死神か外道か狂神を材料にしなければならない。

現在どのカードも持っておらず、ドツペルゲンガーとは戦った事も無いので、これは自動的に除外される。

店主も流石にこのレベルの悪魔カードは持つておらず、真・悪魔全書から使う事になったのだが、戦った事の無い悪魔は載る事はない。ちなみに悪魔の登録方法は極めて単純で、COMPと連動させることにより、COMPが調べたデータを連結させる事で新しく召還できる悪魔を増やせるのだ。

悪魔全書と銘打って入るが、これは列記としたプログラムだったりする。

他に合体の候補としては死神オルクスと狂神オグンが合体の候補にあげられるのだが、ここで少し致命的な問題があった。

オルクスの際はそもそもアナライズも出来ておらず、オグンの際は普通の悪魔とは違ったので乗っているかどうか不明なのだ。

「ふむ……狂神オグンか……おお、載っておったぞ」

『おおっ！ これで我も再び魔王に戻る事が出来る！』

「普通の合体だから意志を乗っ取られるかもしれない、それでもやるかい？ レベル的にはバフォメットの方が勝ってはいるけどね」

『愚問だサマナーよ。我が負けるはず無いだろう。はーっはっはっはっはー！』

『どこからあんな自信が出てくるんだらうねえ』

『ある意味感心するぜ。まあ、やらせてやるか』

アリスを除く仲魔達はそもそも悪魔の個人の意志と言うものを強く持たない。それが何故かは分からないが単純に強くなる事のみを追求する悪魔にその考えを持つものが多い。

意志の取り合いで負けたとしても、自分の記憶と経験は残り自分は強くなるのだからそれでいい、と考える者が多いのだ。

それゆえに悪魔合体は今も尚こうして存在している。

勿論アリスの様に、自分の意思を大事にするというタイプも存在し、そついう悪魔は精霊進化か御霊合体。カード合体などを好む。

「分かった。まあ、それより何よりもまずは呼び出してからの話になるけどね」

「そうじゃな。上手くやり取りが出来なければ意味が無いからのう。しかしここで呼ぶのは基本意志を余り持たない分霊の様なものが多数じゃから余程の事が無ければ大丈夫じゃろう」

「ふぁいとなのですご主人様っ！」

何処からか取り出した旗を振って応援しているアメリカを苦笑して見つつ、オグンを呼び出す事になった：



「では始めるぞ？ その封印結界を兼ねた特殊な魔法陣に一時的に顕現させる。交渉が失敗した場合は強制送還させることになるから気をつけるんじゃないよ？」

「わかりました……」

悪魔全書が起動し、魔方陣の中にデータとして狂神オグンが召還される。

しかし現れた狂神オグンは前に見た悪魔とは姿や体格が違っていた。

『……俺を呼んだのは貴様が人間』

「そつだよ、狂神オグン」

狂神と言う種族なのにその目はとても理性的であり、前回大樹達が戦ったオグンとは何もかもが違っていた。

言葉のどれ一つをとっても冷静でおかしくなっていると聞いた様子はない。

話を通じなかった場合はどうしたらいいかと考えていた分、普通に会話が出来たので安心している大樹。

問題はここから先の合体に関係する話だったが、どうやらオグン自身は合体に禁忌を持っていないようで、それなりに食いついてきた。

『成程な…俺と其処の悪魔を合体させる為か…くははははっ！ あつさりと言つてのける。これでこそ人間なのかもしれんな。良いだらう俺も強くなれるなら構いはせん』

『おおっ！ 話が分かるなオグンっ！』

『だが、俺とてオグンという神の分霊。ただで合体に付き合うほど安くはない。具体的には本体にマグネタイトを捧げる。そうすれば俺も付き合つてやろう』

分霊が消滅した時、もしくは合体した時にその分のマグネタイトは本体に還る。

強い悪魔が分霊を作つて地上に降ろす訳の一つがこのマグネタイトの補充にあるらしい。

今回の場合はオグンに一定量のマグネタイトを供給してから合体する事で、本体であるオグンに補充した量のマグネタイトが返還されるという仕組みだ。

「分かったよ。それで済むなら安いものだ」

『……………ふむ、高純度のマグネタイトだな。これだけあれば問題無いだらう』

『1万も持つていきやがったなこいつ。そりゃ高純度だろ。さっき稼いだ半分以上持つて行きやがって』

『まあまあ、いいじゃありませんの サマナー様の生命力とか体とか言つてたら少し泣かしましたけどお』

『お付き合いしますパールヴァティ』

『ヒョー……な、何気に怖いのう』

「パールヴァティの目が本気なのです」

と、色々合ったが問題なくバフオメットとオグンが合体する事になった。

この後特筆する事は無いだろう、合体はなんらおかしい事も事故も起きず普通に成功したのだった……

……

……

…

『おいつ!?!? 我の!?!? 我の合体後の見せ場はっ!?!?』

バフォメットは魔王オーカスに変化した。

Continue 77 〈複雑で単純な世界?〉 (後書き)

合体シーン飛ばされてしまうバフオメツト事オーカス君。きっと良い事あるさ(涙)

家の前を護っていた造魔がなんなのか? とかドリーカドモンは1個じゃなかったのか? と色々ありますがこの辺は伏線でもなんでもなくて適当です(マテ)

まあ、いろいろあったと言っ事にしておいてください。

ラリヨウオウは造魔の特殊合体で本来は『猛将』ですねー。レベルは結構高いです。

とは言え敵対も仲魔にもならないですが。

なんともあっさり地下シエルターの場所を見つけた大樹君達、次回はどうなるやらですねー。

どうでもいいこと

シチューが食べたい今日この頃です。

スープのようなさらさらシチューも好きですが、お芋さんの沢山入ったゴロゴロシチューも大好きなんですよねえ。

皆さんはトロトロ系とさらさら系どちらが好きですか?

私はどっちも好きですっ!(えー)

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

みゆきさんリードのこなたんが追い上げ中です。

そしてほんのりパールヴァティが追い上げてきてます…おおっ、皆本気ですね(え

こなた：13票(個別エンドフラグまで信頼度が後1)

みゆき：18票(個別エンドフラグまで信頼度が後…?)

ダッキ：6票(手助けフラグはON)

アリス：8票(個別エンドフラグまで信頼度が後1)

パール：7票(???なフラグが建つ?まで後1回)

フォル：4票(???なフラグが建つ?まで後1回)

雪之丞：6票(再戦フラグまで後1回)

もし…パールが受かったら…：…メインHPで書く可能性があります(危険)

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue78 〈複雑で単純な世界?〉(前書き)

ふにやはははははは！ ネタが出てきません！！(えー

という訳で、お茶を濁すかのごとく隊長さんの視点でのお話です！。

専門的…とかそういうのは私に求めてはいけません！(えー 戦争物は読んでても面白いとは感じても自分のものに出来ないですよ…  
…つう、頭が悪いのです…

まあ、所詮この程度！ という感じで生暖かい眼で見てあげてくださいー。

ガイア教隊長視点

「やれやれ…この調子じゃいずれ餓死者も出てきそうな勢いだな。で？ 食料の備蓄は後どれ位持つ？」

「はい。この調子で行きますと最長で後3ヶ月が限界ですね。輜重部隊も大半が悪魔に殺されてしまい物資補給も思う様に行っていないのが現状です」

「あーやだやだ。鬱になる展開ばかりだな、輜重班に改造悪魔を回して置いてくれ、そうすりゃ調達も楽になるだろう？」

「宜しいのですか？ 改造悪魔は我々の切り札…たかが輜重班程度に」

「その輜重班がいなきゃ俺達は飢えて死ぬ。それに彼等は悪魔が蔓延る場所に…死地に向かうんだ、それ位するのが当然だろう？」

「……そう、ですね。分かりました！ 直ぐに取り掛かりますっ！」

「ああ、待て」

「はい、どうなさいました隊長？」

「亡くなった部下は手厚く葬ってくれ。後誰がどうなったかも資料



としてもつてきておいてくれよ」

「……分かりました、直ちにつ……！」

人間が生きていくには水と食料が必要だ。衣食住の内最悪、衣住が無くても食さえあれば人間は生きていける。だが、食が無けりや人間は飢えて死ぬだけだ。

それでも200を超える部隊人数に、流石に見捨てるのも忍びないので保護した一般人を数百人単位でどうにか食わせて行かなくちゃいけない。

初めの内はある程度此方の物資で間に合ったんだが、流石に人数が人数。毎日食わせていくにも限界がある。

町を覆った距離がそれなりに大きいお陰でコンビニや食料店、大型店と手付かずの店がある程度残っている為、輜重部隊を派遣したが大半が悪魔に殺されてしまう始末。

更にはこの町と外の世界は完全に分断され、能力者の話によるとどうやらこの異界は現実世界と違い時が止まっているか、物凄く時間が立つのが遅いらしい。

つまり外からの物資補給や応援の可能性は絶望的、ガイア教の本拠地は東京の為に今居るガイアの兵達は俺達しか居ないときたもんだ。メシア教はメシア教でどうにかやっているらしいが、あちらさんもそろそろ食糧問題がきつい時期に入っているだろう。抱え込んで

人数も人数だからな。

クズノハ…もしくははこの町が管理している地下シェルターに至っては現実問題そろそろ限界に近いだろう。

どれだけ祈っても状況はまったく良くならず、それ所が悪化する一方…か。やれやれ、本拠地が異界に残ってればどうにかできたんだろ…うがな…

比較的平和…というか戦争反対派の日本に居る筈なのに、やってる事が戦地と似通っている所為で笑ってしまいそうになる。

3週間前のあの日、聖母候補の姉を見つけたまでは良かったんだが、その後この町全体が異界化するとはなあ。神様ってやつは余程人間が嫌いかね。

ある程度日数も過ぎて、初日の様な騒動は漸く収まったが…避難させてる一般人の精神的ストレスを鑑みるにそろそろ限界だろうな。

暴動が起きればややこしい事になる。ったく、戦畑の人間に一般人の保護なんて難しい真似させやがって、やれやれだぜ。

「あー…タバコがまずい」

「なら吸わなきゃ良いじゃないですか」

「ん…ああ、柊のお嬢さんか」

「その『お嬢さん』って言うのやめてもらえます？ 正直寒気がす

るんで」

「やれやれ。んじゃ柊ちゃん」

「ちゃんって…まあ、どうでもいいですけど」

目の前で溜息をつく聖母候補の姉…柊かがみ。

天使に一度殺されたが、メシアに対するカウンターと言つ事で連れてきたのが彼女だ。

一度完全に死んだが、死んでから時間が浅かった為に回復魔法と反魂香というアイテムの効果で蘇生させる事ができた。同時にその時に覚醒もしたらしい。

笑える事に、こんなか弱そうに見えるお嬢さんが俺の部下の数倍強いんだから泣けてくる。

ガイア教の戦闘班特有のレザースーツを見に纏う姿は、高校生何ていうシヨンベン臭い餓鬼とは違って、妖艶な雰囲気さえ感じるな。まあ、俺にとつちや餓鬼は餓鬼なんだが。

「なんですか？ こつちをジロジロ見て」

「いんや。出る所が出て、引つ込む所は引つ込んでんな、ってな」

「っ！！ セクハラ発言しないで下さいよっ！！」

「おー、怖い怖い。ははっ、まあそれくらいの気概があれば十分だ。それにしても柊ちゃんも随分と此処に慣れたな」

「慣れざるを得ませんですから…私にはやる事があるし…絶対につかさを助けなきゃ…」

その目は復讐とかそういうものじゃなくもつと澱んだ暗い眼だった。昔の俺を見てるような気分だな…

「初めは敵愾心バリバリだったのになあ」

「あの時は…敵でしたから。ガイアって言えばメシアと並んで危険な宗教ですし」

「違うない。ははははっ」

「でも…力はある。だから私は此処にいる……」

「まあ、愛想が尽きない程度にはやってるさ。俺達もメシアだけが生き残る世界はごめんなんぞね」

「あ、そうだ。近くのスーパーで使える物持って来ておきましたよ。食料とかはレトルトとかばかりでしたけど」

「通りでさつきいなかった訳だ。やれやれ…一応はまだ捕虜の扱いなんだから気をつけてくれよ？」

「とか何とか言いながらいつでも逃げれるようにしている貴方に言

われたくないです。はつきり言ってザルですよザル」

「こりゃ手厳しい。今度部下を叱っとかないとな」

実際は彼女に爆弾つき発信機が内蔵されているから放置しているというのもある。

非人道的とかは今更だ、俺達が相手にしているのは敵対する人間と悪魔。其処から勝ち残る為にはなんでもしなくちゃいけない…しなくちゃ行けないんだが、ね。

どうにもこんな娘さんに其処までするのはやるせないもんだ。上の命令にや逆らえないってのは辛いもんだな。

まあ、爆弾取り付けた技術班の奴に俺の息が掛かってる奴がいるから、万が一発動しても爆散するという代物から変えては貰ってるがな。

それでも最悪両脚は完全に持っていかれるだろう。偽善なんだか何がしたいんだか俺もわからんね。

「あの……」

「ん？ なんだい？」

「もし…もし…その。メシア以外のデビルサマナーがいたら教えて欲しいんです」

「そりやまた……ああ、あれか」

「はい。私の友達がもしかしたらまだ生きてるかもしれないから……上手く行けば引き込めるかもですし、彼は何処にも所属してませんからお金さえ出せば」

「あの坊主ねえ……確かにあれを引き込めるのは美味いかもしれんなあ。あのクラスのデビルサマナーは早々居るもんじゃない。それがフリーならば尚更だ」

恐らくデビルサマナーとしての能力以外にも隠し玉を持っていると思われる坊主。

所持している仲魔もそうだったが、本人自身かなりのレベルだと言っても過言じゃないだろう。それだけの迫力と実力はあった。

下手すりゃうちの奴等が全滅するかもしれないくらいの戦闘力が、それを味方に出来りゃあ確かに心強い。上手い具合にパイプ役も居る事だしな……そっちの方にも手を回して置くか。

「それに、出来るなら友達は戦いたくないですから……」

「まあな。でも分かってるんだろ？」

「……ええ……分かっています。もし私の邪魔になるんなら……立ち塞がるなら」

殺します

たかが18歳程度のお嬢ちゃんが確りと自分の意思で人を殺す覚悟を持つ…か。

俺の娘も生きてたらこれ位の年齢なはずなんだが…世の中つてのは何処で腐るか分からんもんだな、こちらがそういう風に仕向けたとは言え死兵を簡単に作れる時代か。

目的の為なら、妹さんを助ける為ならこのお嬢ちゃんは何でもするだろう、それだけ家族を愛して世界を憎んで、神々を憎んで、自分すら憎んでいる。

妹さん…いや聖母候補が完全に聖母だったならば今頃は、恐らく記憶消去か洗脳されている頃だろうな。違つたとしてもその時は廃棄どちらにしるふざけた運命しか残ってない。

出来るだけ力を貸してやろう。メシアを潰すのは俺達の悲願でもあるからな。

「報告しますっ！ 改造悪魔12体用意できました！ それと報告が上がっています！」

部下が入ってくるなり報告をしてきた。普通の軍隊とかならこういう時は規律だとか云々と煩いが、俺はそんなどうでもいいものより速さと実を取る。

という訳で、出てきた情報は俺に気にする事無く告げに来いと教えてある。俺の部隊の行動力が早いのはこう言う所があるからかもしれないな。

「おっと。そっちは任せる。で、報告は？」

「ハッ！ 核ミサイル誘導基地ですが現在強力な結界によって近く事すら出来ませんっ！ ですが近くには天使の死体も転がっていたので第三者が結界を張っている可能性があります！」

「天使が死んでた…？ あそこを護ってたのはたしかヴァーチャーだろうか？」

「はいつ！ 強力な呪いか何かで縛り付けられていて、死んでもマグネタイトにならず死体として放置されていたようです」

「なんでまたそんな阿呆な事を………いや、見せしめか？ 誰かに対する宣戦布告…メシア教に…いや違う、それならばもつと違う行動を取る筈だ…」

「如何致しましょう」

「とりあえずは偵察を続けてくれ、何かあれば逐一連絡を。天使じやなきやこの町を異界化させたド阿呆かもしれないからな」

「ハッ！ 失礼します！！」

部下が戻って行ってから再び考える。



今回の町を全部ひっくるめた異界化について、もしかなくてもメシア側の起こした行動じゃないだろう。

となると第三者の悪魔が引き起こした事になるんだが、そもそもそいつが何故そんな事をしたのか理解が出来ない。

これほどの巨大な異界を作り上げる意味が、だ。

学者じゃないから俺には異界が作られる理由なんざ分かる訳無いんだが、これに何の意味があるのかさっぱりわからん。

人間をマグネタイトにして取り込むとか言うなら、これだけの事が出来る悪魔、もう少し秘密裏且つ安全に今以上の効率で奪う事だって出来るだろう。

わざわざこの空間を異界にして逃げ道を塞ぐという大胆な真似をすれば外からも内からも敵はわんさかと出てくる。

それらを誘い込むのが目的なのか…？ 大胆なのか馬鹿なのか予想が付き難いのが現在の状況だ。

はっきり言っちゃえば今回のこの異界化は完全に無駄と言えるだろう。メシア教会側にはかなりの上位天使がいるし、俺達ガイア教が誇…りたくはねえが改造悪魔もいる。

出てくる悪魔はかなり強いが、何とか戦えないでも無い。更に言えば動くのは異界に現れた悪魔だけでこの異界を作ったと言う奴さんの情報は未だに無いのが現状だ。

本気で何がしたいんだ此処を作ったやつは…？

人間をじわじわ苦しめるのが目的？

マグネタイトを掻き集めるのが目的？

それとも単純に上位悪魔の戯れ？

まあなんにせよ、こいつのお陰である意味では助かっていたんだが、今回の情報でそれもぬか喜びにされちまったな。

天使による確実な核落としをさせる為の誘導施設を分捕られるとは。

予想はしてたがまさかこんなに早くとは…もし俺達が先に奪取して基地を破壊しようとしてもそんなとき俺達が殺されてたかもしれんな。

どうする

メシアは一先ず脇に避けて施設の破壊を優先するか…？ だがそうになると聖母の覚醒が早くなる。最悪その時は殺さなくちゃならんそうなればお嬢ちゃんがヤバイ。

部隊を分けて…いや、そもそもヴァーチャーを相手にするのすら一般の兵には無理だったのに、分けて行動はみすみす死なせに行くだけだ。

クズノハと連携…は無理だな。奴等はメシアもガイアも目の敵にしてる節がある。

となるとやはり……

「柊ちゃんが幸運の女神に見えてきた気がするよ」

「……………は？ 何か悪い物でも食べました？」

「おいおい、そりやないだろう。おじさんはいたって平常運転だよ」

「はぁ……………で、これからどうするんです？ 私としては早くつかさを助けたいんですが」

「そうしたいのはやまやまなんだがなぁ。いかんせん戦力が無いんだよこっちは」

「……………それをぶっちゃけますか私に？」

「なぁに。柊ちゃんが言ってただろう？ 腕の良いサマナーが居ると」

「…引き込むと？ 私としてはそっちの方が嬉しいですけど」

「そうだな。それを重視する方向で行こうと思う」

なににせよ、まずは各地点の情報収集と資材の調達、改造悪魔の量が急務か…やれやれ、上司から切り離された中間管理職は辛いね。

Continue 78 〈複雑で単純な世界?〉 (後書き)

難しいお話は…私には無理です！(マテ書き手)

という訳で隊長さん+かがみんのお話でした。隊長さんとかがみん、佐藤君達を欲しがるーのお話でしたね。

今回は改めてこなた家での相談と次の日いけたらの予定ですー。

どうでもいいこと

さ…寒い…真冬に戻ったかのような寒さです(涙)

こつこつ日は暖かいものが食べたいですよ…暖かい鍋とかいいなあ…

我が家の皆さんはキムチ鍋が好きなのですが、私はキムチ鍋よりふつーの海鮮鍋さんが好きですよ！後は〜スキヤキは豪勢かなーと思うです。

しゃぶしゃぶ…？ は実は食べたことありませんっ！

皆さんはどんなおなべが好きですかー？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

みゆきさんリードのこなたんが追い上げ中です。

そしてほんのりパールヴァティが追い上げてきてます…おおっ、皆本気ですね（え

こなた：17票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：24票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：9票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：9票（???なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：6票（???なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：9票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら…：…メインHPで書く可能性があります（危険

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue79 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

という訳で、佐藤君達のターンです。

拠点があるのはいいですねえ、うん…さて今回は相談とかで次回はシエルターかなあ。

誰を登場させるべきか……悩みます。いっそサイコロでもふるっかな(えー

泉家リビング

「たった数時間で情報持って来る大樹君ばねえ」

『ふっふーん　だって大樹さんだもんっ　』

「いや、僕がどうか言う以前に運が良かったただけなんだけどね。それにしてもそっちは柊さんらしき人物が居た、か」

情報収集と物資補給が滞りなく終了し、現在は泉家で明日の行動に關しての相談をしている。

大樹が持ってきた情報はとても大きく、明日からの指針に大いに立つ物だった。

一般人、もしくはクズノハが護っていると思われる地下シェルターの場所が割れたのはとても大きい。

ならば明日はここから行ってみる事にしましょう。

「そうですね。もしクズノハの方が居ればこれから先の事にも協力を得られそうですし」

「皆居るかもしれないしねえ。お父さん達元気にしてるかなあ、いや寧ろ騒いでそうだなあ…」『ゲーム展開k t k r』とか言って」

『それで、見つけたらどうしよっか？ その場に置いておく？ 此処に連れてくる？』

「そこが問題ですね。あの場所だと安全は確保されますが、恐らく不安やストレスなどで大変な事になりそうですから…更に食料問題が不安ですね…」

「全員分を供給するほど僕達は食料を持っていないからね。クズノハや町の人間が動いてるとしてもこんな閉鎖された空間じゃ限界があるし」

既にほぼ一月近く経っている。

シエルター内部にそれなりの食料が備蓄されていると言っても、この町の大多数の人間の食料を賄うには限界があるだろう。

更に言えば供給はほぼ0で、町に確保しに行くには悪魔をどうにかしなくてはならない。

この辺りに居る悪魔のレベルは疎らだが、最低でも10レベルクラスの悪魔ばかりだった、一般人ではどう足掻いても勝てる訳が無い。

銃さえ効く悪魔なら、自衛隊や警察が居れば何とかなりそうな気もするが銃弾も無限ではない為、早々闘うことなど出来る筈も無い。



「食糧事情は詰んでるよね。今から作るっても最低半年先だよ。そもそも作る場所なんてこの辺りに無いし」

「一部の店の食料などは無くなっていたので、メシアかガイア、それともクズノ八が調達している可能性がありますね。でもそれも何時まで持つか」

「メシア系は余裕そうだけどね。となると時間が掛かるほどまずいな。人間なんて極限状態に置かれたらあっさりと錯乱するし、そうになると手がつけれない」

『つつても、オレ達にはどうする事もできねえぞ？ 単純に行くなら大多数は見捨てて必要な分だけ困えばって所になるな』

そ、そんなのは許されせんっ！！

「許す許さないじゃない、神様が何もしてくれないんだし。それに僕達は神様じゃない、魔法や何かで永遠に食料を配れたりはいしないんだよ」

っ…………それは、そうですが…

大樹のマジックカードを上手く利用すれば出来ない事はないだろう。

こなたやみゆきから伝えられた方法なら、単純に数百人程度の食料なら賄えるかもしれない。

カードの収納できる移動式コンテナを対象にして、そこに食料などを隙間なく詰め込む。後はそれをカードにしてから量産すれば、倍

々ゲームの様な感覚で増やせるだろう。

だが、それをするのはいいが、そこまでして人間を救いたいとは大樹は一欠けらも思っては居ない。

大樹にとって此処から守るべきものはこなた達と、こなた達の家族友人だけなのだ。それ以外は實際死のうがどうしようが関係ないと思っっている。

正義の味方を気取っている訳ではないし、神様ですら人間を間引こうとしている世界でこのような考えが悪だとは、例え小竜姫でも言わせるつもりはないのだろう。

「出来れば皆さんを助けたい…私もそうは考えますが、無理…なんですよ」

「異界をどうにかすれば…って感じだけど、その後は核でしょ？私達が攻める基地ってまだ残ってるのかな？」

「多分あると思うよ。クズノハはそもそも数が少ないし本来僕達の手伝う予定の仕事だったからね。僕達無しでいけるならそもそも頼みはしないさ」

『まあ、それも調べればいいんじゃないの？』

『そうですね…今の私達でしたらある程度までは戦えますし。我が主も居りますから』

「この町を開放しても次は核が降って来る。それも護りきれなければ

ば全世界に、この町がもし助かったとしても世界に核が降り注げば世界は終わるよ」

『つーかよお？ 聞いていいかサマナー？』

「ん？」

『核つてのはそんな凄い爆弾なんだろ？ それを世界中に落としてこの地球は無事なのかよ？ 環境以前に星にダメージがこねえのか？』

キンキの言葉に止まる一同。

彼女が言った事はある意味大樹達が眼を逸らしていた事だったからだ。

たった2発の核爆弾で大ダメージを負った日本、その2発だけでその辺りの環境は激変し放射能が辺りを覆いつくした現実。

それだけでなくも辺りに尋常ではないダメージを与える事の出来る核爆弾が、全世界に雨の様に降り注いだ場合の世界…いや星のダメージは考えられないほどだろう。

下手すれば星が無くなるかもしれないほどの打撃を与えるつもりなのだ、改めて神のやりたい放題さに呆れと恐れを抱く。

『恐らく大丈夫でしょう…神々も世界を浄化する事を目的とはしてありますが、星を破壊しようとはまでは考えていない。最低限のダメージ』

ジは何とかするんじゃないかと…』

『説得力無いわよフォルトゥナ』

『あう…』

フェニックスに突っ込まれてへたるフォルトゥナ。

「とりあえず…クズノ八達も無能じゃない、ある程度の誘導施設は壊せるんじゃないか？ 出来れば日本は全部どうにかして欲しいけど、そうも行かないだろうね、となると…」

「待っているのは大飢饉…ですか」

「飢えて言うのは死ぬ中でかなり苦しい死に方って聞いた事がある。メシア教はこの辺をどうにかするつもりなのかな」

「あー…なにかやってそうだもんねえ。なににせよ食糧問題か…取捨選択って所だね」

……本当にそれしかないのでしょうか…？

「小竜姫…私も色々思う所があります。それにこれは最悪の考えを想定しての予想ですし、此処まで酷くなる事はないかと」

「すみません。分かってはいるのですが」

『優しい神様ってのも居るんだね。後は力と能力が欲しい所かな』

うぐっ…

『まあまあ、それ以上苛めちゃいけませんわよお』  
それでどう  
なさいますのおサマナー様あ』

「まずは地下シエルターに赴いてクズノハとの接触。その後には皆の親類縁者を探す方向で行こう。その後の事は…どうするか。僕としては此処に保護するのはまずいと思う」

「え…あ、そか。悪魔から身を守る術が無いんだよね…もし、異界を開放しても核が降るし…」

「個人所有の地下シエルターがあれば良かったのですが、其処までそう都合良くは行きませんしね…」

「どちらにしても、まずは安全を確かめたいだろうし、クズノハとの接触は僕がする。二人はその間、家族を探していいよ。後、これを」

そういつてテーブルに小型の無線機をいくつか置く。

この無線機は店主から買い取ったものだ、普通の無線機と違い様々な科学と魔法の力で作られた無線機らしく、マグネタイトを使用して使うタイプの無線機である。

COMPのエネミーソナーや百太郎、ハニー・ビーの追跡ソフトの使える部分を内蔵する事で、3キロ程度なら電波が届かない場所ですら会話が可能と言う魔具だった。

その分作るのには莫大な魔貨やマグネタイトが必要で、購入するのに2万魔貨を支払う事になったが、これがあればやり取りは可能なので痛い出費ではない。

「へー……これはいいねっ！ イヤホンもつけられるし、大事な会話も普通に出来るのかー。でも高かったんじゃないの？」

「これからは離れて行動する可能性も多いからね、情報のやり取りが出来ると思えば安いよ。寧ろ2万程度で買ったのが不思議だ……」

恐らくは店長の好意によるものだろうと大樹は思っている。

これを大樹、こなた、みゆきで扱えば問題なく会話などが出来るだろう。流石に離れすぎると聞こえないがそれでも携帯が使えない此処では無いよりマシだった。

その後も詳細を詰めていく、総ての話し合いが終了する頃には既に23時近かった。

『戻ったぞお。何か食べ物くれ。マグネタイトでもいいぞお……』

「ただいま戻りましたなのです！ 辺りに悪魔の気配はないのですよっ！」

『拍子抜ケトモ言エルガナ』

丁度良く見張りをしていたオーカス達も戻ってくる。今度はオリアスやディース達が夜の見張りに立つ事になった。

流石に町で家の中とは言え異界になっているこの世界。一番危険なのは夜と睡眠中という訳で、基本寝る必要の無い仲魔達が昼夜を問わずに警戒をしてくれている。

アメリカは単純に大樹の役に立ちたいと外で警戒してただけだったりするが。

「大樹くん。お風呂開いたよー」

「ああ…ありがとう………」

声がした方向を向いたまま止まる大樹。

そこには、バスタオルを羽織っているだけで笑っているこなたが居た。お風呂上りの火照った顔がそれなりに艶かしく、流石に眼を逸らしてしまっ。

してやったりと、サムズアップするこなただが其処にアリスが恐ろしい表情で突っかかっていく。

「ふっふふーん」

『ちよっ!?!? こなた何よその格好っ!』

「何をと問われれば、バスタオルオンリーと言わざるを得ない」

『とつとと部屋に戻りなさいよー！！』

「にゃにい！ こういうハプニングは同居イベントの定番じゃないかっ！」

『アンタのは思いつきり故意じゃないっ！』

「それはそれ、これはこれ。一応下着はつけてるからポロリはないけどねっ」

『にゃああああああっ！！』

こなたとしては勿論お約束のギャグのつもりでもあったが、それなりに心を決めてのアタックだったりもする。

顔を逸らしたと言う事は、自分に魅力があったと言う事でアリスに怒られながらも嬉しさを隠せないようだった。

勿論この後フェニックスを初めとして、みゆきや小竜姫達にこつてりと絞られる事になったのはご愛嬌だろう。

……  
……  
……



『まったくもう、こなたったらっ！！ あ、あんなえっちな格好でっ！』

『及第点をあげてもよかったですわねえ。でもどうせならあ、夜にサマナーさんの部屋にあの格好で行けば堕ちたかもしれませんかあ』

『何癒ろつとしてるんだてめえは…』

「ふむむ…夜のですかっ！ 良い事を聞きました！」

『いや、貴様じゃ流石に無理だろう…サマナーにロリの趣味は無さそうだぞ』

「む…ではどうすれば既成事実がゲットできるですオーカス？」

『い、いや我に問われても困る』

『ヒョーヒョー アメリアは本当にサマナーが好きなんじゃなあ』

「当然なのですよっ」

「いや、その姿で既成事実とか怖いから、グクマッツも止めてくれないか」

現在大樹はそうじろつこの部屋に泊まらせてもらっている。

こなたの父親の部屋の割には、それなりに落ち着いた部屋で、本棚が沢山あるのが特徴的だった。

そのどれもが普通の小説などで、趣味を仕事に持ってきていないというのが良く分かる感じがする。

「ん？ ご主人様どうしたです？」

「いや、明日について考えててね。柊さんもまだ見つかってないし面倒な事になっていなければ良いけど」

『だな。まあ明日になりや分かる事さ。とっとと寝ちまえ、明日に響くぞ？』

『そうですわあ。私が添い寝してあげますから、ほらあ』

『何いそいと布団に入ろうとしてるっ！ 何故脱ぐっ！ 見せ付けるーっ！？』

『やれやれ…煩い奴等だ…』

『そうですよ、ここは小さい点を考慮して私が我が主と…あ、いえなんでもないです（あれは狩る者の目っ！？）』

騒がしい雰囲気になっただけ心が軽くなる大樹。付き合っていたら朝になりそうなのでとっとと休む事にする。

そんな中でも騒ぎ続けるアリスとパールヴァティにキンキが切れるのはその数分後だった。

Continue 79 〈複雑で単純な世界?〉 (後書き)

こなた身体を張ったギャグ+アタックはアリスに止められて終わりました。

お説教は1時間ほど続いたようです。主にみゆきさんから(笑)でも、自重しないのがこなたん、次回はきつと何かとんでもない事を!(えー)

どうでもいいこと

体が微妙にだるいです、風邪を引いたわけじゃないのですが…こう、なにもしたくないーみたいな感じですねえ。

時々なりませんか? 私は時々と言うか毎日そんな感じですが(マテなんだろう…糖分が足りないんだろうか…ふふ…そうか…ケーキの出番ですねっ!(オイ

イチゴシヨートは正義と言う事この後買いに行つてきます。

ケーキは美味しいですよ〜 モンブランもいいかもしれぬ…くっ…悩む。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

みゆきさんリードのこなたんが追い上げ中です。

そしてほんのりパールヴァティが追い上げてきてます…おおっ、皆本気ですね（え

こなた：22票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：27票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：9票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：12票（…？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：8票（…？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：10票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら…：…メインHPで書く可能性があります（危険

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue80 複雑で単純な世界? (前書き)

今回はあなた視点からですよー。

乙女は色々悩んじゃいます、とまあ、そんなお話です。

感想返しはもう少しお待ちくださいー。実は色々やる事が(涙

泉こなた視点

……むー。

やってしまった……やりすぎてしまった……みゆきさん達の目が怖かったぜ……へへへっ。

シエルターの場所が分かった御陰でかなりハイテンションだったもんねえ、私つてば。いやいや、抑えてるつもりでもやっぱり心配だったんだなあ……

あんまり嬉しくてサービスしてみました、くっ……今更ながらに思えばかなり恥ずかしいんだけどっ！！

情報持つて来てくれた大樹君にお礼の……って……私は何処のパールヴアティちゃんかね。

いや、彼女なら絶対バスタオルを取っ払うと思う、若しくは全裸で来るか……くう、あのナイスバディは脅威だねっ！ まあ、恋愛感情は無さそうだけど。

私ももう一押し必要かもしれないなあ……ポロリ必至まで行くべきだったか…………？ 無い物をどうする気だっ？ 上等、ちょっと体育館の裏に来い。

大樹君が眼を逸らした位なんだから、結構魅力があると思うんだよねえ。って私思考が段々まずい方向に向かってきてないかな？

あー…もしかして私微妙に情緒不安定なのかなあ。流石にやって良い事と悪い事位わかってるんだけど…

嬉しい事や辛い事や楽しい事や悲しい事がこの数日で沢山起きたしね、やっぱり私でもこんなになる位ダメージ受けてるのかもしれない。

こつこつ時は誰かと話せば良いのかもしれないけど仲魔の皆は外で警戒中だから一人なんだよねえ。

明日は早いし早く寝なくちゃなんだけどさ。

「あう…目が冴えて眠れないよ。気分転換にネトゲ…は出来ないからちょっと歩き回ろつと」

ゲームは流石にやってたら徹夜しそうな雰囲気…と言うか微妙にやる気が起きないし、どうしようか？

リビングで積んでたアニメでも見て気分を紛らわせるかな。自分の部屋でも良いけどなーんとなくね。

もしかして誰か居るかもしれないし、その時は話に付き合ってもらおうかなー。大樹君とアニメ談義に花を咲かせるのかいいかもしれないねっ



という訳で早速つと……未だにVHSなのって家位なのかねえ……最近だとブルーレイまで出てるけど、うーん今度あれほしいなあ。今度の散策で見つけてこよっかな。

「あれ……大樹君……とみゆきさん？」

リビングに入ろうとしたら其処に大樹君とみゆきさんが居た。

って、何を隠れてるかな私……普通に入れば良いじゃん。

「成程……そういうやり方もあるのか」

「ええ。でもこの場合はですね」

何か色々話してるみたい、何でかな……みゆきさんと大樹君が二人で話してるのは……なんかヤダな。

でも混ざったら邪魔だろうしどうしよかな……

うう、何でこつという時引つ込み思案かなあ私、普通に行けば良い筈なのにどうしても行けないよ。

それにしても……みゆきさんって大樹君の事どう思ってるのかなあ、友達？ 親友？ 戦友？ それとも……あ、でもそれは無い、って思いたいな。

「まあ、そんな…」

なんだか仲良さそうだな。やっぱり男性は美人の方が好きだよねえ。

それ以上二人の様子を見てられなくて私は直ぐに部屋に戻ってベッドに倒れこんだ。

どこかの悲劇のヒロインでもないし、大樹君が誰と話しても悪い訳じゃ無いけど、なんだかすごく胸が痛いよ。

大樹君：が好きなんだなあ、私。だって、あんなシーンを見ただけでこんなに心が軋んでる。

いつもの様な場面なのに、多分確実に違っていて分かってるのに。

「…乙女だね…私…ははっ」

胸が痛いよ……………

……………

……………

……………

「目的のシェルターまで歩きだと近くの方は1時間、もう一つの方は2時間掛かる。まずは昨日の話通り近場の方から行って見ることにしよう」

「おーっ！」

『「あなたは朝から元気ねえ…眠くないの？」』

「ふはははははっ！ 朝はバッチリ快眠なのだよっ！ 強いて言えばコミケモードかなっ！」

「ああ、あのイベントのある日は早起きすると言っ」

「うんうんっ。前話したもんねー」

次の日になった。

モヤモヤはまだ完全には晴れて無いけど、それを引きずってちゃダメだよ。寧ろそんな事で凹む位なら私は奪っっ！ うんうん。

今日は昨日の話通りに皆で1箇所目のシェルターに行く事になったよ。勿論その後大樹君はクズノハを探しに、私たちは皆を探しに行くんだけどね。

此処で大事なのは大樹君。もしシェルターについてクズノハかシェルターの管理者に話を通さないと、其処から出してもらえなくなる

かもしれないから頑張ってもらわないとね。

私は結構アドバンテージあるし、大樹君も待っていてくれてるんだから頑張らないとっ！

「いよっしいこー」

「そうしようか。後ろはこなたの仲魔に任せるよ」

「うんうん、任せておきたまへ」

百太郎の準備もおkだし、後は出来るだけ戦わないように〜かな。あ、そういえば。

「大樹君、行く途中に資材店があるから、其処寄ってかない？ 良い感じのコンテナが置いてあったんだよ。上手く行けば増やせないかな？」

ちなみに持ってこなかったのは、食料品をメインで補充しててカードが切れたからである、まる。

「それは良いかもだね。行く途中ならついでに寄れば良いし、つと。ならあの店かい？」

「そうそう　　ホームセンターだよー」

「あの店でしたら色々な物がありますし、良いかもしれませんね」

今更ながらこれは泥棒…とは言えませんよね。必要な事ですし。

「そんな事で良心の呵責なんて感じてたら生きていけないし、悪魔を殺すのも躊躇うよ。非常事態なんだから有効活用する位の気持ちで居ないとね」

「小竜姫は神様だし真面目さんだからなあ。でも、その分良識があるから良いかもだけど」

下手したら世界がなくなっちゃうのに、余裕って言うか良く分かってないよね小竜姫って。

まあ、神様だから仕方ないのかもしれないけど、もし最悪の事態になれば此処にあるもの全部核で消えちゃうんだし、それなら使う方が良いと思うけどなあ。

そりゃ普段ならこんな泥棒紛いの事なんて絶対しないけどさ、そんなに躊躇してたらこの先やばいと思うよ。

やっぱり危機の心構えが違うのかなあ。

言ってる事は正論だし間違っていないけど、それは平時だから言える言葉だよな。

みゆきさんに悪影響なければ良いんだけど…

『ねえねえ、こなた。ホームセンターにはアイスあるホ？』

「いんやー、流石に無いけど、食べたいの？」

『うん、食べたいんだホ…』

「しかたにやいなあ」

カードホルダー（食べ物用）からアイスのカードを取り出してじゃあくフロストに上げる。

沢山纏めた奴上げると大変だから、2〜3個に纏めた奴を上げることにしよう。でも大樹君も優しいよね、アイスなんて食料としたら無駄な物なのに怒んなかったし。

アイスのカードを上げると直ぐに取り出して喜んで食べるじゃあくフロスト。

じゃあくについてるせいかわ微妙に一部が黒っぽくなってるけど中身は変わらず子供だよねえ、そこが可愛いけど。

こう、ぬいぐるみを持ってると言う感じで。まあ、ぬいぐるみよりはゲームの方が好きですがなにか？

『もう、そつやって甘やかすと良い事無いわよ？』

「まあまあ、これで元気になってくれるなら御の字だよ。悪魔の

ステータスって結構モチベでも変わるじゃん？」

『ああ、それはあるかもしれねえなあ。という訳でアメリカちゃん。俺と一緒に…』

『寄ルナるりこん』

『酷くなっ！？ 純粹に愛情だから！』

ロリーの魔力に負けたかやはり墮天使。炉の道は険しいぞい。まあ頑張りなされ。

「となると…そこで1時間として…昼までには到着できそうだね。車があれば良いんだけど流石に異界で車はまずいから無理か」

「悪魔を轢くカーチェイスもある意味、それっぽいけどねえ」

「車の中だと動きが取りにくいですし、難しいかもしれませんね…というより誰も運転できませんし」

「クリス・ザ・カーでもいれば良いんだけど」

『それって車？』

「車の九十九神と言った所かな。話に聞いた程度なんだけど、外道になるらしい。もし仲魔に出来たら移動が楽かと思ってる」

車の悪魔かあ、なんとというか乗ったら呪われそうだね。

とまあ、こんな感じでさくさく歩いて行った私達。勿論と言っかなんというか数回ほど悪魔との戦闘もあったけど問題なく倒していったよー。

途中でちゃんとホームセンターによって良さげなコンテナをいくつか、大工道具などもまとめて貰って行く事にしました。

電池や発電機はこれから重要なアイテムになるからねえ。

ってあんまり時間も掛けてられないので、1時間程度で終わらせてシエルターに向かうことになりましたとき。

………  
………  
………

見えてきたのはシエルター入り口。近くには武装した自衛隊が数人いたよ。

クズノハの人はー、見当たらないね。と言う事は完全に自衛隊か町が管理してるシエルターなのかな？ それとも内部で動いてるか離れてるか、かなあ。

でもなんてゆーか他に人が居るだけでこう、胸がドキドキしてくる



よ。お父さんとゆーちゃん、ゆい姉さん達がここに居ればいいんだ  
けど。

流石にこの場合で仲魔を前面に出すと自衛隊の人が襲ってきそうなので、私と大樹君とみゆきさん。見た目は悪魔に見えないアリスちゃんとアメリカちゃんで行くことになった。

初めはすっごく驚いてたけど、話をしている内になんとかなっ  
たい。いやあ…流石みゆきさんだあ、こういうのは得意だね。

暫く話している内に、中に入ってもよくなったから早速お父さん達  
を探さないかね。

「うっわ……………」

「これは……………」

中は予想してたよりも悲惨だった。

聞こえてくる子供の泣き声、それに対しての怒声が響いてくる。

警察関係者っぽい人達が一生懸命宥めてるけど、それもあんまり効  
果が無くて騒ぎは収まる所を知らない。

何ていうか…地獄ってこついう場所なのかなって幻視しちゃう位の  
場所だった。

大災害とかで被災した人達でも此処まで荒まないよね…やっぱり悪

魔とか異界のせいなのかな。

聞いてたら嫌な気分になってくるし、急いでお父さん達を見つけないと。

「私あっち探してくるね。みゆきさんは反対の方お願い、何かあれば通信して?」

「分かりましたっ」

みゆきさんの顔色も悪いかあ…だよ、これだけ負の感情が溢れてたら誰だってそうなるよ。

こりゃ、最悪此処から連れ出したほうが良いかもしれない。特にゆーちゃんはこの中だと辛そうだし…まあ、居ればなんだけど。

辺りをくまなく探しながら歩いていく。

その度に聞こえる、泣き声、怒りの声…

お母さん…お母さん…なんで。何で死んじゃったのお…

くそっ！ 化け物どもがっ！ 返せよ…返せよっ！！

痛い…痛いよ…

腹減った……腹いっぱい飯食べたいよ……

「っ……っ」

分かつちやいたけど、これはきついね。

私達は、大樹君のおかげで食いつぱぐれる事は基本無いし、困る事もあんまり無い。

でもここにいる人達は違う。安全はある程度保障されてても、食べ物保障なんて何処にも無いし清潔面だって無理な所がある。

此処から出れば自分の家に帰れば、電気も水道も何故か使えるし普通に暮らせるだろうけど、その前に悪魔に殺される。

可哀想……とか思っちやいけないんだ。誰彼救おうとしたら困るのは私達で……一番大樹君が辛くなる。

だけど……みゆきさんや小竜姫じゃないけど、これは……辛いよ。

っていけないいけない、凹んでる暇があるならお父さん達を探さないよ……

そう思っていた時だった

入り口の方で大きな爆発音が響いたのは

「んなっ！？ まさかっ！」

百太郎がレッドを示している。普段は音も鳴るし、実際鳴ってたんだけどこの喧騒でかき消されてたみたいだ。

くっ！ イベントとかフラグなんてもんじゃないよこれはっ！？

《こなたさんっ！ 先程の音は！》

「こつちも聞こえたっ！ 多分大樹君が外で戦ってると思う。私が助けに行くからみゆきさんはこの人達をっ！」

先程の爆発音で全員錯乱しかけてる。このままじゃ集団心理がどうとかで大変な事になるよ。

《わ、分かりましたっ！！ 気をつけてくださいねっ》

「大丈夫っ！ 仲魔も大樹君もいるしねっ！ ……………いよっし！ さっさと倒しに行こうかっ！！」

急がないと大変な事になるね、お父さん達を探すのは一時中断になるけど、仕方がない。

仲魔は此処で出したら更に騒ぎになるから外に出てからになるか…  
武器はカードにしてあるし、いつでもいけるね。

「よしっ！ 行っかっ！」

辺りを確認して走り出したその時、後ろから声が聞こえた。その声は私が知っている声で、今一番聞き覚えがあった声…

「こなたっ！！！」

「お姉ちゃんっ！？」

振り向くと其処には……お父さんと顔色の悪いゆーちゃんが、居た。

少し体調が悪そうだったが、二人とも無事で…良かった。

でも今は安心と喜びに浸ってる暇はない、あそこでは多分大樹君が戦ってる、急いで手伝いに行かないと。

「っ！ 其処で待ってて！！ 絶対にここから動いちゃダメだからっ！」

「ま、待ちなさいこなたっ！」

大丈夫、直ぐ戻ってくるから。

ほんのりせつなさを出してみたあなたん。

何も無いとは言え好きな男性が夜中に他の女性と話してたら、結構来るものがあります。

でも其処でへこたれないのがあなたんです。ダメなら奪うっ！と頑張るつもりの方ですよ！。具体的にはコミュに勝てばイベントです(オイ)

そうじろうさんとゆうーちゃんも見つけたので一安心と行きたい所ですが、そんなの関係ないっ！ の如く戦闘です。

今回はシエルターせめて来た悪魔を倒すお話ですね。

どうでもいいこと

甘い物を食べたり、休むといいと言われたので、かなりのんびりして見ました。

おおおお…元気が沸いてくる！！ という訳で現在元気一杯です。

チロルチョコは偉大だ…あ、冷えピタも良い感じですよ。

皆さんありがとうなのですよー。

チョコ…ちよ…こ…こ…。ビターも好きですねえ。

あ、でも99%力カオは人の食べ物じゃなかったです(全部食べましたが)

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

みゆきさんリードのこなたんが追い上げ中です。

そしてほんのりパールヴァティが追い上げてきてます…おおっ、皆本気ですね(え

こなた：27票(個別エンドフラグまで信頼度が後1)

みゆき：31票(個別エンドフラグまで信頼度が後：?)

ダッキ：6票(手助けフラグはON)

アリス：9票(個別エンドフラグまで信頼度が後1)

パール：15票(???なフラグが建つ?まで後1回)

フォル：9票(???なフラグが建つ?まで後1回)

雪之丞：11票(再戦フラグまで後1回)

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
(危険)

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。



Continue 81 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

おおお…書いても書いてもすすまないにゃー (涙)

と…訳でど…ぞなのですよー。

シエルターを護る自衛隊員はある程度悪魔やそれを退治する者達の話聞いていた。

実際にクズノハと名乗る組織の退魔士がシエルターを襲う悪魔を不思議な術や銃などで倒してきた姿を見ている。

その中で最も驚いたのが、敵である悪魔を従えて襲ってくる悪魔を退治するデビルサマナーだった。

そもそも普通に生きていれば悪魔やゾンビなどは映画やゲームに出てくる存在でしかない。実際に目の当たりにした時は彼等も錯乱しかけていた。

クズノハの退魔士はそんな不甲斐なかった自衛隊の代わりに悪魔を退治してくれていたのだ。

現在はもう一つのシエルターの警護に回っている為、クズノハの退魔士はいない。

無用心だと思われるかもしれないが、そもそもクズノハの退魔士の総数が絶対的に少ないのと、彼等も無敵ではない為に重症を負ったり殺されていたりと少なからずダメージが多いのだ。

もう一つのシエルターの方に悪魔が集中してきた為に此方からメンバーを派遣しなくてはならなかった為、今は自衛隊員だけが此処を

守っている。

今もシエルター内部に作られた治療室で数人のクズノハのメンバーが寝たきりになっている。

そんな現在、とても危険な状態で現れたのが逃げ延びてきた一般人と、暫く後に襲ってきた悪魔達だった。

「くそっ！ この化け物があつ！」

軍隊でもない、そもそも一等陸士でしかない彼等が持つ銃器などでは悪魔を牽制する事は出来ても倒す事は出来ない。

それでも下級の悪魔 レベル1〜3 程度の悪魔ならば倒せるが、今襲ってきている悪魔に対しては何の役にも立たない。

万が一の為にクズノハが用意してくれているロケットランチャーなどはあるが、それを使う余裕も無く銃で牽制しつつシエルターを閉じなくてはならない。

彼等は一刻も早くこのシエルターを閉じて悪魔を内部に入れさせないようにしなければならないのだ。

「…妖虫ミルメコレオに邪鬼ウエンディゴが数体か…」

「きつ、君達急いで中に入るんだっ！」

『あー、大丈夫大丈夫。この程度なら私達で十分だから、下がって？ 銃当たると痛いし』

「な、何を言つて…」

「とりあえず邪魔です。シエルターを閉じるなら急いでくれませんか？ それにしても数が多いな」

逃げる事もせず淡々と悪魔を見つめている少年…大樹達。

襲ってくる悪魔に脅える態度も見せない少年と少女達に、悪魔とは違う恐怖を覚える自衛隊員。

もしかしたら彼等も退魔士なのかと、語りかけてみるがすげなく無視された。

『げえっへっへっへっへ。美味そうな人間に匂いがしやがる。ここは食い物の宝庫だな』

『HAUITDUITYTDADYOIOPAYDIOUYAIO  
DYAIODYAIOA!』

『うっわ…いかにもな三下のセリフ。レベル的にも弱そうだし、私と大樹さんでも十分そうだねえ』

「アメリカも頑張るのですよー」

『てっ…てめえらあああああっ…! あびゅっ…!』

いきり立って襲い掛かろうとしたウェンディゴの頭部が銃弾かなにかが打ち抜かれトマトのように弾け飛ぶ。

同時にマグネタイトになって消えていくのを他の悪魔達は呆けた様子で見つめていた。

「来たんだ。いいのかい？ この程度なら僕達で十分なんだけど」

「ふっふっふ。ヒロインは遅れてやってくるのだよ それにもー  
まんたい、お父さん達はさっき見つけたしね。という訳で…やろう  
かつ！」

後ろからやってきたのは大型のスナイパーライフルを構えている女子高生だった。

最早彼等には何かなんだか分からない状態だが、唯一分かっている事は大樹達が悪魔を倒せる存在だと言う事だろう。

実質、こなたはにこやかに話しながらも銃を連打して悪魔を近寄らせない。

「そうしよう。クズノハの人は大多数が他の場所に応援に行ってる  
ようだから、残ってるのは怪我をしてるメンバーが数人内部にいる  
だけらしい」

「つて…誰もいないの？ 戦える人？ 無責任じゃない？」

「そこらへんは僕には分からないよ。ただ言えるのは僕達がいないと危険だったと言う事かな」

『大方あつちの場所にはお偉いさんとかいるんじゃないの？ 「こつちを優先して護れー」とか？』

「ありえそうなのです」

『…ぎぎっ…貴様等ああああっ！ 無視するなあああああっ！！』

斧を持って襲い掛かってきたウエンディゴにフォルトゥナの銃弾が雨の様に降り注ぐ。

自分に何が起きたかも分からずその場で消滅していく味方を見て、恐れる所か怒り狂って更に激しさを増して襲い掛かってきた。

「やれやれだ…僕ならこの時点で逃げるけど、その辺の境目が分からないんだろっな」

『基本的に悪魔は人間に格下って思ってる節があるしねえ…まあ、態と隙だらけにしてみたけど、あっさり乗ってくるし馬鹿だよね』

「という訳で行くのですっ！ タル・カジャー！！」

攻撃力強化の魔法を受け前に飛び出す大樹、既にペルソナはバクヤ

に変えているので物理的な攻撃は一切通用しない。

「…はあああああつ！！！」

大振りではなく、相手の急所を確実に狙いプラズマソードを振り翳す大樹。

ハーモナイザーによって強化された脚力と腕力、そしてタル・カジヤによって底上げされた攻撃力はまるで豆腐か何かを切り裂くようにミルメコレオを容易く切り裂く。

しかし、格闘のプロではない大樹、その一瞬の硬直を横から襲い掛かってきたウエンディゴに襲い掛かれる。

『殺ったあああああつ！！　んなああああつ！？』

大樹の首元に叩き付けた筈の斧が、斥力か何かには押し出されたように無効化される。

余りの出来事に動けなくなっているウエンディゴの口にフォルトウナの銃口が押し付けられた。

『は、はひっ！？』

「バクヤじゃなかったら死んでたか…まだ接近戦は難しいな。それ

「じゃ」

轟音とともにウエンディゴの頭部が爆発し仰向けに倒れ消えていく。

『あうう…しゃぶられるならあんな気持ち悪い悪魔より我が主の方が…ポっ』

「凄まじく喧しいよ。よし、続けて行こうっ！」

「あいつさー！ ってか吃驚したよ！？ いくらペルソナで耐性あっても怖いから、ああいうドッキリはやめてよねッ！」

「うん、気をつけるよ」

彼等自衛隊員はこの時の事を一生忘れる事は無かった。

良い所16〜18の少年少女が、軽く会話しながらも悪魔を淡々と殺していくその様子を。

小学生くらいの女の子…アメリカが魔法で全員を援護し、前衛に大樹が立ち塞がり、プラズマソードでミルメコレオ達を斬りとばす。

そのまま直ぐにボックスステップして銃でウエンディゴを蜂の巣に変えていくその様は正に熟練の傭兵…いや戦士だった。

集団で襲い掛かるウエンディゴ相手に余裕の表情で立ち向かうアリスとこなたの二人。





態勢を解く大樹達。

今回の悪魔は弱点も耐性も完全に知り尽くした悪魔だったので、接近戦の練習も兼ねて前衛に飛び出した。

キンキ達を召還する手もあったのだが、そこまで脅威の悪魔でも無い上に、自衛隊員は一般人にしか見えなかったため、見た目完全に悪魔な仲魔を呼ぶのを多少躊躇った為でもある。

ここで、悪魔の仲間だと騒がれて追い出されでもしたら面倒な事になる為だ。

「ふい〜。数だけは多かつたねえ。お疲れ様大樹君」

「まあ、接近戦の練習にはなったよ。でもまだ動き方がぎこちない気がするな…」

「ご主人様は指揮官タイプだと思うのです、ご命令してくれた方がアメリカも動きやすいですよー」

『寧ろ前で戦われるとハラハラしちゃうから、出来るだけ後ろでーっ！ー！』

「それは…あんまり嬉しくないな」

などと和やかに話している大樹達。

あれだけの悪魔を圧倒して尚余力を持っている様に見える少年達を

見て、流石に怯えが入ってしまう自衛隊員だが其処で止まっている訳にも行かず改めて話しかける。

「す、すまない…君達のおかげで最悪の事態は免れたよ…君達はクズノハの人なのかい？」

「いえ、違いますね。彼等に用事があると言えばあるんですけど…レイ・レイホウと言う人を知りませんか？」

「いや…聞き覚えが無いな。でもクズノハの人で怪我をしている人なら治療室にいる、彼等ならわかるかもしれないな」

「ほうほう。良い情報だね大樹君っ！早速聞き取りに行こう」。

あ、みゆきさんに連絡しないと。みゆきさん」

こなたが無線機で話し合っている間に大樹は今までの有った事の大体の事を自衛隊員から聞きだしていく。

もう片方の自衛隊員は避難している人達を落ち着かせる為に内部に走って行った。

………

………

………

シエルター内治療室内部

其処には何人ものクズノハのメンバーや自衛隊員、一般人が魔され続けている。

治療室と銘打ってはいるが、そもそも薬などが圧倒的に不足している現状では完治させる事はほぼ遠い状態だった。

最低限の治療しか出来ない今、このまま放置しておけば傷が悪化して死ぬ事になるだろう事は間違いない。

「酷いね…これ」

彼等は命を懸けて戦ったのですね…

「…あつ!? こなたじゃんっ! 無事だったんだっ!」

「ゆ、ゆい姉さんっ!? だ、大丈夫なのっ!」

「なんのこれしきっ、あたたたた…」

頭に包帯を巻き、全身が痛々しそうな格好をしている成実ゆいが辛そうにしながらも起き上がりこなたを見ていた。

此処にはみゆきの母親達は居なかったが、そうじろつやゆたかなどの家族や、幾人かの知り合いが無事で残っていたらしい。

みゆきの家族やみなみ達、ゆたかの親友ももう一つのシエルターに居るらしく、一先ず大体の安否は確認できた。

唯一不明なのが、柊かがみとつかさの姉妹だけらしく、家族がとても心配している。

「それにしても…無事でよかった…お父さん心配したんだからなっ  
！！ 本当につ！！」

「ごめん…お父さん、ゆーちゃん」

「お姉ちゃん…お姉ちゃん…無事でよかったよう…」

今はそつとしておこうと、大樹はこなた達から離れていく。

アリスを連れ立って、今も尚呻き続けているクズノハのメンバーを見つめた。

「話を聞こうにもまずは怪我を治す事が優先か、ついでにこなたの親戚のお姉さんも対象にしよう。後はまあ適当で」

『らじゃー　　という訳でっメ・ディアラマ!』

「フォルトウナ、メ・ディアラマ!」

強力な回復魔法が辺りを覆っていく。

呻いた人間達の傷が、みるみる内に消えて行き、回復魔法の放つ光が消え去る頃にはほぼ全員の怪我が完治していた。

初めて魔法を見るそうじろう達は勿論、現在進行形で傷が癒えて行くのを間近で体験したゆいには驚きを隠せない。

「な…なにこれっ!?　全然痛くなくなっただけど!?!」

「あの人が何か叫んだら、不思議な光がほわってなって…」

「あー、そっか。お父さん達は知らないしねえ…ま、今更だよね今更。この力の事は後で説明するからちよっと待っててね。どう大樹君?　目覚めそう?」

「ダメージが大きいらしいね。リカームの方が良いかな。とりあえず、すいませんが何が出てても驚かないで下さい、最悪無理矢理にでも黙らせてますが」

「あ…はい…」

有無を言わさない大樹の言葉にその場に居た全員が大人しく頷く。

仲魔を召還するよりはペルソナの方が、騒ぎが少なくていいだろうとテンセンニヤンニヤンを降ろし召還する。

「来いっ！ テンセンニヤンニヤンっ！」

突然現れた美女に驚きを隠せない全員：唯一そうじろっただけが違う驚きをしているが気にする事ではないだろう。

『傷つき倒れた勇者に、再び活力の奇跡を与えましょう……………』  
『リ  
カーム』』

再び柔らかな、それで居て力強い光がクスノハの男性の全身を覆っていく…

光が消えると同時にペルソナも消えさった。

「うっ…うっ……………ここは……………はっ！？ 悪魔達はっ！？」

「大丈夫です、悪魔達は既に倒されましたから」

「ああ…良かった……………それで、貴方達は…？」

「初めまして。レイ・レイホウから依頼を頼まれていた者なのです

が、彼女が何処にいるか分かりませんか」

「!?!? では、貴方が…」

『とと、ちょーつとタイムね。ここじゃ皆に聞かれちゃうから移動しましょ』

「あ、じゃあ私もいくよ」

「勿論私もです」

「なっ!?!? こ、あなたどういっつもりなんだっ!?!? 危険だから大人しくしてなさいっ!」

「あー…ごめんねお父さん。後でちゃんと話するから」

「何を言ってるんだ! こなたはまだ未成年なんだぞっ!?!? それも漫画とかじゃない化け物が出てきてるといっのにつ!」

そもそもこなたが何処で何をやっていたかは知らないが、これ以上心配を掛けて欲しくないとそうじろうはこなたを止める。

だが、こなたにも引けない理由は数多く存在し、このままシエルターに引き籠る理由は無い。

今はお互い混乱しているので、この話が終わったら総てを話すと、押し切って大樹についていった。

………



…  
…

## シエルター内作戦室

「……面倒な事になってるね」

「レイさんその日に限っていないとか、酷くない？」

「上の方からの出頭命令でしたから…まさかこのような事になるとは思いもよらず…現在我々が貴方達と共に攻める筈だった基地も何者かに占拠されているようです」

『現状手詰まりって事ね。面倒だよー』

《にしても、総勢6名ってのはねえだろ。お前も見ただ感じ良い所10レベル前後にしか見えねえしな》

「実際は12です。無傷だった4人は多分この町の上役の命令であちらの援護に行っているのだと…実質的にはスポンサーの様なものですから無碍にする事もできず」

「それで、こっちが酷い事になってたら世話無いよ。正直私たちが居なかったと思うとゾっとするね」

シエルターの入り口は強力な結界で覆う事が出来るらしく、締めさえおけば余程の悪魔でない限りは問題無いらしいがそれでもこんな体制では完璧とは言えない。

命が掛かっている状況での人間の心理が浮き彫りになっているのが丸分かりだった。

「かがみとつかさの行方が分からない…かあ…」

「心配です…」

もしかしたらメシア教がガイア教に捕まっているという可能性は？

「ありえるね。高良さんが聖母候補だと言う事はお互い分かっているだろうし、その時の人質として捕まえている可能性もある」

「とりあえずお父さん達をどうしようか…流石にこんな所において置けないよ」

『でも引き取るにしても結構な人数でしょ？ 護る人だっ居ないし、個人所有のシエルターとかあればいいかもだけど、それでもね…』

「もし、彼等を保護するんだったら、最低でも僕かこなたは留まらないといけない。基地をどうにかする場合は全員で行きたい所だから…いっそこで何とかしてもらおうのがベターだね」

現在戦えるのが大樹とこなたとみゆきの三人だけであり、その内の2人がサマナーというパーティ。

こなたか大樹が拠点を護りさえすれば家族や親類は确实…とは言わないまでもここのシエルターに置いておくよりは安全に避難させておけるだろう。

しかし、その場合確実に大樹がこなたが、戦線から外れてしまう為此の後の事を考えると悪手になってしまう。

柊家を迎え入れて援護に回ってもらう手も考えたが、そもそもかみもつかさも居ない手前、護ってもらえるかその点が問題な上に、そもそも其処まで強くないだろうと考えた為却下。

強力な結界を張るうにも、そういう能力は誰一人として持っていない為にそれも不可能だった。

「ここのシエルターは防衛機能以外に不備はありませんか？」

「それが…食料の問題がありまして…大部分はあちら側に持っていかれてしまい、全員分の食料は1日2食にしても良い所後1月も持たないんです」

「うあ…金持ちうざいんだけど…」

「す、すいません」

「あ、いやいやみゆきさんの事じゃなくてね。食料かあ…うーん」

「分かった…僕が何とかしよう」

食料の問題が何とかなると聞いて顔を上げるクズノハのメンバーと自衛隊員。

見た所食料のしの字も持って無さそうな青年がどこから此処の人数分の食料を確保できるのか不思議でならない。

「正直、他の人の食料なんてどうでもいいけど、こういう場合は全員に配給しないと暴動がおきそうだからね。まあ、何とかしてみるよ」

『んー…本当はあんまりさせたくないけど仕方ないね。さっさと基地を潰して異界を元に戻せばどうにかなるし…』

「一つクリアすると一つ問題が出てくるな…」

頭が痛そうにしながらも、これからの事を考えていく大樹。

正直色々手詰まりだが、何かしなければどうしようもないと、色々脳内で考えていった。

Continue 81 〈複雑で単純な世界?〉 (後書き)

仲魔は今回お休みのようでした！ アリスとアメリカがメインでしたねー。

そしてお金持ちの偉い人はこういう時は嫌な人になるようです… (涙でも、全員がこういう人じゃないですよー。うんうん。

こっち側のシエルターにはそうじろつさん、ゆーちゃん、ゆい姉さんが居ました。

もう片方ノシエルターに皆居ると思うですよー。

さて、次回はどうしようか…何にも思いつかないぜ… (汗

どうでもいいこと

いーしゃーきいもー、おいもー。

時々食べると美味しいですよね、中がホクホクで良い感じですよ！

やはり、ああいうのは雰囲気味のトッピングなのかもですねー  
皆さんはおいも好きですかー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

みゆきさんとこなたが接戦です。

パールヴァティがどこまで追いつけるかーですね。

こなた：35票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
みゆき：36票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）  
ダッキ：6票（手助けフラグはON）  
アリス：10票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
パール：17票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）  
フォル：10票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）  
雪之丞：12票（再戦フラグまで後1回）

もし：パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue 82 〈複雑で単純な世界〉 〈前書き〉

すーすーまゝなーいー。と、こんばんはなのですよー。

今日は短めです。みゆきさん視点とこなたん視点をどいどい。

みゆきさん考えすぎて色々堂々巡りしてるっばい……？

高良みゆき視点

これから大変になるとは思いましたが、本当に色々ぎりぎりですね現状は。

もし私達が戻ってくるのが後1ヶ月程遅かった場合を想像してしま  
うと、寒気がしてきます。

今一番問題なのが、皆さんの食糧事情ですね…泉さんのお父さんや  
ゆたかさん達を此方に連れて行く訳には行きませんから自動的にシ  
エルターで避難してもらうことになります。

その場合の清潔面や食料品…どれもこれも足りない上に、もう一つ  
のシエルターから搾取されている現実に頭が痛くなってきました。

勿論話に聞く限り、そのような横暴をなさっているのは一部の方ら  
しいですが、それでも困っている事には変わりありません。

こうなると、最低でも一月は持たせる程度の食料と薬、衣服などが  
必要になります…其処が一番問題です。

佐藤さんの力でこの人達の分の食料を賄うのはギリギリ可能らしい



ですが、その場合もう片方のシエルターに情報が行ってしまう可能性がありますね。

更に付け加えるならば、これらの食料品を用意した事によって佐藤さんの能力がばれてしまう恐れがあります。

彼の能力は稀少且つ、恐ろしい能力なでもしバレてしまうと大変な事になってしまうのが痛いですね…

それでも、泉さんのお父さんとゆたかさん達の為だけに佐藤さんは能力を使ってくれる事になりました。ならば私達は彼の能力を誰にもわからないように隠蔽するお手伝いをするのみです。

現在泉さんは、お父さんとの話し合いの最中で此方に参加することは出来ません。やはり心配されていらつしやるのでしょね…私も似たような立場なら止めるかもしれませんし。

やっと出会えた家族が、再び悪魔と戦いに行く…こつ言葉にすると現実味がありませんから例えを変えますと…

行方不明だった娘が帰ってきた途端に戦争に行く　こつ言い  
換えればよく分かりますと思います。

それでも、これからの事を考えれば戦えるのは私達しかいません。このまま放置しておけば待っているのはメシア教を除く人間の滅亡です、それだけは止めないといけません。

みゆきさん？　どうしたんです？

「あ、いえ。少しばかり考え事を」

『大丈夫？ 見張りなら私立ってるから今の内に休んでていいよ？』

「いえ大丈夫です。これ位しか出来ませんから」

現在シエルターから少し離れた場所で、コンテナにカードに収納していた食料や薬などを詰め込んでいます。

詰め込んでいるコンテナは『20ft アルミドライコンテナ』と言うよく大型車両などが牽引しているタイプのコンテナです。

アルミドライタイプで錆び難く更に頑丈なタイプですね。扉は観音開き型なので邪魔になる事が無くスムーズに物を収納出来ます。

重量はかなり重くて数トン以上の重量がありますが、其処は佐藤さんのマジックカードのお陰で収納してしまえばカード1枚分の重さしかありません。

ホームセンターとは言いますが、よくこういうタイプのコンテナが置いてありましたね…まあその辺は気にしてはいけないのでしょうか。

ミニコンテナという手もありましたが、色々な物を詰め込むのですたら此方の方が沢山入りますし便利です。

かなり大きいですから出す時は場所を考えなければいけません、それ以外で困る事はあまりありませんね。

これに限界までお米などの最低限必要な食料などを詰め込めば最低

でも大体百人分の1ヶ月の食料を用意する事ができます。

薬なども箱に詰めて入れてありますので、これで困る事はないでしょう。

後はこれ幾つかコピーしてしまえば手元にも同じ物が残りますし、皆さんの食料もどうにか出来ます。

問題は、これをどうやって説明するかですが、それは私が主に話をするつもりです。こういう交渉はそれなりに得意な方なので、絶対に佐藤さんに迷惑を掛ける訳には参りません。

クズノハの方も居ますからこころ辺は上手く話を合わせる事ができますし、何とかして見せます。

カードにして持ち運ぶ訳には行きませんから、このコンテナを置く場所なども考えておかなくてはいけませんね。

「これで大体良いかな」

『な…何故魔王である我がこんな事を…』

『黙ってやりなさいよ。力強いんだからいけるでしょ？』

『ううう…我は魔王なんだぞお…』

『はいはい魔王（笑）様、魔王（笑）様』

「お、お疲れ様ですオーカスさん」

『うう、人間よ。慰めてくれるのはお前だけだ…きつと何時か奇跡を起こしてやるからな』

オーカスさんは佐藤さんの仲魔の中でも、よく弄られてしまう方です。

でも陰湿と言うよりは楽しい感じで行われています。なのでオーカスさんも怒る事はないようです、時々泣きそうになってますが、これもある意味ではコミュニケーションなのでしょうね。

何となく泉さんとかがみさんを思い出してしまいます。

………かがみさんとつかさんは此方に居ませんでしたね。何故か凄く嫌な感じがします、もしかしたら彼方のシエルターにも居ない可能性があるかもしれないので。

あの時私が見かけたかがみさんは、本当にかがみさんだったのですよ  
うか…

見間違えたのか、もしそうならばあの方は誰だったのか。

もしかかがみさんならば私がもう少し見つけるのが早ければ…と考え  
てしまいます。

「さて…後はカードにして量産か。今の状態で出来るのは良い所4  
つかな。それ以上やると戦闘に支障がある。渡すのは3個で良いか  
な？」

「あ、はい。この量がそれだけあれば問題ないと思います。中に居た人数を大体で把握して簡単に計算してみました。がそれ暫くは大丈夫ですね」

「水とかは大丈夫なのかな？ メインは食料にしておいたけど何も入れてないコンテナはまだあるし、こっちに水を入れておくかい？」

「そちらはまだ大丈夫のようです。流石にお風呂などを用意するのは難しいですが、飲み水や料理に使う水は暫く持つそうですから。でも有った方が助かると思います」

「じゃあ水は明日以降にしておこう、この後もう片方のシエルターも行かないといけないしね」

そうですね…それにしても食料を取って行くだけではなく護衛までは…此方の人間の危険を考えていないのでしょうか！

『考えてないんじゃない？ 寧ろ自分だけ助かりたいんですよ？  
そういう感じバリバリだもん』

こっこの時こそ人同士が手を取り合っていないといけないと言  
うのこ…

そう、ですね。小竜姫の言う事はもっともだと思えます。

でも…やはり自分だけが助かりたい、自分だけが良い思いをした  
いと考えてしまう方もいらっしやいますから、総てが理想通りとは  
行かないでしょう。

この状況になつてから色々と考えさせられます。もし私が同じような状態に陥つてしまつた場合、そして力を持つていた場合、私はその力をどう振るうのかわかりません。

皆さんを助けたか、もしくは彼等と同じように、自分達の為だけに力を振るつたか…

人間は弱く、脆い…とても脆弱で流されやすいのが人間です。私自身嫉妬してしまつたり、不審に思つてしまつたりと恥ずかしい事ばかりです。

物事の表面しか見ていないと言う事も前回の事で痛いほど分かりました。

人と人は手を取り合う事が出来ないのでしょうか……

『ふむ……悩んでおる様じゃのう』

「グクマツツさん……」

『悩むの事は良い事じゃ。物事の真実を見据えるには必要な事じゃろ。う。じゃが、今のお主は思考の迷宮に入り込もうとしておる』

「思考の迷宮…ですか」

『考えても答えが見つからぬ時もある、今は考えるのと同時に行動するのも良いかもしれんのう』

「……そう、ですね」

『それに、今は考えるより動かなくてはならぬからのう。期待しておるぞお嬢ちゃん。サマナーの能力の隠蔽はお主に掛かっておるからのう』

「！ はい、お任せください」

今は悩んでいる暇はありませんでしたね。

私達はこれからもっと大変な事を頑張って行かなくてはいけないのですから。

もう一つのシエルターに居る皆さんを探し出さなければいけませんし、その後はかがみさんとかさんを探し出さなければなりません。

その後に核ミサイルを誘導する施設の破壊、異界を作っている対象を倒して元の世界に戻し、メシア教やガイア教を如何にかしなくてはいけません。

考えるだけで気が遠くなってしまうそうですが、私達がやらなければいけない問題でもあります。

戦える力は手に入れる事が出来ました、まだまだ未熟ですがそれでも今を戦える力が。

皆さんと一緒にならきつと戦えると思います。だから…考えるのと同じ時に動かなければいけませんね。

「よし…コペーは終了だ。後は高良さん、これをどっやって配置しようか」

「はい。まずはですね…」

さて、頑張りましたよっ！

……

……

…

結論から言いますと、コンテナの件は上手く収まりました。

場所を色々変えたのと、中身を入れ替えたのが功を奏しましたね。

中身は此処に来るまでに収納しておいたとこの辺りが難しかったですが、違和感を持たさない程度に何とか出来ました。

足りなかった食料や薬などを多く補充出来たので、シエルター内もある程度落ち着くでしょう。

問題は、直ぐ近くに用意できない以上運搬しなくてはいけません。その点は自衛隊の方やクスノ八の方が動いてくれる事になりました。

流石に、カードの量産で佐藤さんが少し疲れてしまいましたが、その分を私達が埋めていくつもりです。



高良みゆき視点解除

泉こなた視点

「だからっ！ 今私が行かないと大変な事になるんだってばっ！」

「何を言っているんだ！ ゲームやアニメの話じゃない！ これは現実なんだぞっ！」

「お父さんの分からず屋っ！！」

さつきから色々説明してるのにお父さんってばダメの一点張りで嫌になるよ。

そりゃ、心配してくれるのは嬉しいけどさ、正直私達以外に満足に戦える人が居ないんだよ…おまけにアテにしたレイさんも居ないって言うムリゲー状態。

あの馬鹿がどれ位強いのかも分からないのに、大樹君とみゆきさん達だけに戦わせる訳にはいかないって言うのに。

「なあ…こなた。お父さんはな、意地悪で言ってるんじゃないんだ…化け物だぞ？ 人間が戦ってどうにかなる相手じゃないんだ…お父さんに妻に続いて娘も失えって言うのか？」

「うぐっ…でも…私が行かないと大樹君もみゆきさんも危険なんだよ。警察も自衛隊もクスノ八だって今は頼りにならないんだ」

「…それはこなたがしなくちゃ行けない事なのか？ こなたはどこかの勇者でもなんでもないんだぞ…？ お父さんとゆーちゃんをこれ以上心配させないで欲しい…」

「……」

「お父さん…ゆーちゃん…」

「こなたがそう言っている以上、信じたくはないがあの化け物をこなたが倒せるんだでしょう。だがな？ それがどうしたって言うん

だっ！ お前はお父さんの大事な娘で代わりなんて居ないんだっ！  
頼むからもう…危ない真似はしないでくれ…」

お父さんの私を心から心配しての言葉と、ゆうちゃんの悲しそうな瞳が私を突き刺す。

確かに…私は勇者でも何でもないし、こういうのは本来別の人がやる事なんだろうね…私達はただ力があるだけの一般人でしかないんだから。

でも…でもさ…お父さん達が私の事を心配してくれてるように…私もお父さん達が心配で助けたい。

「…私、お父さんが好きだよ？ いつつも引っ付いてばかり出し、犯罪者予備軍に見えるし、変態な所もあるけど私にとって大事なお父さんだから」

「…こなた…」

「ゆうちゃんもゆい姉さんも大好きなんだ…だから、だから皆を護りたい、誰かがじゃない、私が守りたいんだっ！」

「お姉ちゃん…でも…私、お姉ちゃんが死んじゃうのは嫌だよ…みなみちゃん達にも会えなくて、お母さんも心配で…やっとお姉ちゃんに会えたのに」

「その言葉は嬉しいよ…でもな…？」

「『でも』とか『だから』とかじゃないんだよ、お父さん。私達が動かなければ…私達がやらなくちゃ道が開けないんだよ。ゲームとかアニメとかじゃない…これはどこまでも現実で、有り得ないほど理不尽だけど、どうしようもないほど現実なんだ。私達は主人公とかじゃないけど、私達が動かないと、本気で皆死んじゃうんだよ…比喩じゃない、本当に」

ゲーム感覚なんてのは、アルバイトの初日で消えてるよ。

それに、私だって本当なら戦いたくなんか無い…日がな一日ゲームして遊んでたいし、かがみん達と遊んでいたい。

大樹君と…デートだってしたいし…やりたい事なんて沢山ある。私達はこの間高校を卒業したばかりなんだよ？ まだ遊んでたい、生きてたいに決まってるよ。

でも…現実はそのを許してくれなかった。クズノハは残念だけどアテにならないし、自衛隊はこのシエルターすら守り通せない。

メシア教は信徒しか救わないし、ガイア教は胡散臭い上に何してるか分からない。

そもそも核落とそうとしてるのはメシア教と天使なんだ、どうにかしないとどっちにしたって世紀末なんだよ。

そんな世界になれば、お父さんもゆーちゃんも殺されてしまうかもしれない…そんなのは嫌だっ！

「……………」

「お父さん…ごめんね、親不孝な娘で…でも、私は…」

「……………」なあ、こなた

「…え？」

「やっぱりお前は、かなたの娘なんだな…意地っ張りな所がそつくりだ。あなたもあ見えて結構意地っ張りだったんだよなあ。自分で決めた事は何かあっても押し通したんだ。俺もそんな所に惚れたんだよ」

「お…父さん…」

「本音を言えば、こなた…お前を引っ叩いても止めたい。大事な娘を死地にする父親なんてクソ喰らえだ…でも…お前はもう決めたんだな」

「うん…」

「お、おじさん…」

「ごめんなゆうーちゃん。おじさんやっぱりダメな奴だよ。戦いに行く娘を止められないんだからなあ…」

ぼろぼろと涙を流すお父さん…私もいつしか涙が止まらなかった。

「行ってこい。こなたにしか出来ない事なら、精一杯頑張ってきたさい。だが…だがっ！ ……生きて…帰って…きておくれ…お父さんにはもうお前しかいないんだから…」

「うんっ、うんっ！！」

お父さんに抱きついて涙を流す私。

隣ではゆーちゃんが私の手を握って、声を出さずに泣いていた。

ごめんね…二人とも、悲しませてごめんね…

「絶対…絶対戻ってくるから…皆が居るから大丈夫だから…」

お父さん…私、親不孝者だけど……きつと、皆に平和な日々をお土産に持って帰るからね…

それに…好きな人も紹介するから…だから。

「行ってきますっ！！」

「よし、行って来いっ！！」

「頑張ってお姉ちゃんっ！！」

行く時は笑顔で行くよっ！  
暗い私は私じゃないからねっ！

泉こなた視点解除

みゆきさん、考えると同時に前を見据える。  
こなたん、涙の誓い？  
の二つでしたー。

コンテナが大きいんじゃないのっ！？ というつつこみがきそう  
ですが  
大きいの業務用で売ってたんだよーと生暖かい眼で見えてくださ  
さい。

コンテナの配置や中身を入れ替えて〱とかは仲魔達が一生懸命やっ  
てくれたので  
置き場所を色々やった事で能力とばれなかったようですー。

どうでもいいこと

今日は暖かかったですよー。お陰で仕事もはかどりました！  
これからはずーっとこの暖かさを維持して欲しいなあ…  
寒くなるのはもう嫌ですー(涙)

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお  
答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表



怒涛のみゆきさんラッシユ。

これはこなた追いつけるかーですね。

パールヴァティも頑張ってますが、こなたんVSみゆきさんっばい  
です。

こなた：43票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：50票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：11票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：19票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：11票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：13票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continues 3 〈複雑で単純な世界〉 〈前書き〉

ぐるぐるとるーむでのお話がありますー。

いやぁ…今日は時間がないので短いです(汗

楽しんでもらえるといいのですが…

あ、最後の特殊アンケートがあります。ちなみに早い者勝ちです

(えー

「いやあ。おまたへ、こっちは話しついたよ」

「お帰りなさい泉さん…っ!？」

話を終えて戻ってきたこなた。

彼女の腫れた目を見て驚くみゆきに対して口元に指を当てて、内緒ねとポーズを取るとこくんと頷き静かに微笑む。

「所で大樹君は？ 待ってるかなーって思ってたんだけど？」

「佐藤さんは今から新しいペルソナを整えてくると、少し離れました。直ぐに戻ってくるそうです」

「おおっ、ペルソナのパワーアップフラグかあ。今度はどんなのが来るんだろっねえ」

『うーん…女の子型のペルソナはやだな』

「うおう、アリスちゃんはこっちに居たんだ」

『まね。みゆきだけじゃ心配だし大樹さんの援護はオーカスとキ

ンキが行ってるから大丈夫だって』

レベルも30まで上がった為、これからの激戦を考えてペルソナを作りに行った大樹。

実は今まで作りに行くのを素で忘れていたらしく、急いで向かっていったとの事だった。

「時々大樹君がすっかりさんに見えてくる現実、これはあれだねギヤップ萌えって奴かな」

も…萌え…？

「普段冷静で隙が無いって感じなのに、時々思い出したようにすっかりさんになる部分を見ると、こっ…可愛いつて思わないっ!？」

『同意っ!!!』

い、いえ…そこまでは流石に…みゆきさんは？

「珍しいとは思いましたが、それ位ですねぇ…」

どうやら、惚れている人と居ない人で色々認識の違いがあるらしい。

そもそも大樹は見た目が良くて良くないので、その認識の差は結構ありそうだった。

「さて…大樹君が戻ってきたらもう片方のシエルターだね。そつちにはみゆきさんのお母さんや皆が居ると思うし」

「シエルターに集まる時に避難警報が出ていたらしいですから、それを素直に聞いている方は皆さん無事のようにです。となると知り合いの皆さんはきっと大丈夫だと思いますね」

『問題は、あつちのお偉いさんがヤバイって所でしょ？ 食料持つてくし、強い人間持つてくし、何か勘違いしてるんじゃないの？』

「ここに居るクズノハの方は末端のようでして、命令を聞かないと色々困った事になるらしいんです…緊急事態なんですけどね…」

「まあ、お金持ちで権力もあると勘違いしちゃうお馬鹿な人も居るからねえ…あ、食料とかの件大丈夫だった？」

『うん。みゆきって凄いいよね、こつ色々話しててさ…私には無理かなあ…』

「少しばかり小賢しいだけです。真実の中に多少の嘘を交えてしまえば疑い難くなりますし、今はそちらより重要な方を前面に押し出しましたから」

勿論自衛隊員やクズノハのメンバーもこれだけの食料を何処に確保していたのかと不審に思いはしたが、大樹の能力を知らない以上『コピーして量産した』というふざけた現実を信じられはしないだろう。

みゆきもその辺りを分かりにくいように言葉巧みに誘導し、事無きを  
を得ている。今回に限っては能力がばれる問題は無い。

「この食料に目を付けられたら大変ですね…人の欲望は際限が無い  
と言いますから。」

「その辺りは隠蔽するようですから何とかなるかもしれません。そ  
れにその上役の方々が外に出ることはないでしょうから大丈夫でし  
ょう」

「全部が大丈夫って言えない所が怖いよねえ…最悪このシエルター  
からこなたの親族全員連れ出してあつちのシエルターに送るとか良  
いんじゃないの？他に知り合い居ないんでしょ？」

「まねえ、軽い近所付き合いしてた人が多少居た位だし、切り捨て  
る事を考えるなら連れて行くのはお父さん達だけでいいけど、そも  
そもあつちがどうなってるのかわかんないし」

「あ、そうです。アリスさん。佐藤さんが戻ってきたら、トレーラ  
ーを確保できるか聞いてくれませんか？」

「とれーらーって車？」

「はい。流石に現時点で運転は出来ませんが、この後の事を考えて  
長距離を移動できて物資を運んだり簡易の移動基地の代わりになる  
大型の車が必要になるかと思ひまして」

ふむ…でも運転できないのなら意味が無いのでは？

「その辺はー、最悪お父さんに運転してもらうとか、私達が覚えるかだねえ。車かぁ、トレーラー以外にも使えそうなの2〜3台有った方が良いんじゃない？」

「それも良いかもしれませんがね。ガソリンなどは…佐藤さんに頼りきりになってしまいますがこれから考えるとやはり必要です」

「大型のハコ型トレーラーなら最悪、皆を連れて移動とかもできそうだし…良いかもしれないねっ！」

こうしてみゆき達は大樹が戻ってくるまでこの後の事やこれからの事を詳しく話し合っていた。

………

………

…

## ベルベットルーム

「ここに来るの久しぶりだな。と言うかヘルやバクヤが普通に使えるせいで新しいペルソナを呼び出すのを普通に忘れてたよ…」

此処に来る時間は結構あったのに、まさか普通に忘れてるとかこの歳で健忘症は嫌だな。

いつものように鍵を使ってドアを開けるとイゴールさんと達哉君が出迎えてくれた。

『いらっしやいませ。本日はどのような御用向きでございますかな？』

「レベルもそれなりに高くなってきたようだな。一つ壁を乗り越えたのが手に取る様に分かる」

「こんにちは二人とも。今日はペルソナの作成と質問があっってきました」

「…後者はナナヤの事だろうか」

やはりと言っかなんと言っかペルソナ使いである達哉君は僕が聞きたい事を前もって全部知っているような感じがする。

ナナヤ…召喚する為の適正レベルは30で、あいつは35だから本



来普通に召喚する事が出来る筈なのに、ナナヤは召喚に応じなかった。

いつもはペルソナを召喚する時、独特の高揚感みたいな物を感じるんだけど、ナナヤを召喚した時はそういう感覚を何も感じる事が無かった。

レベルは足りているのだから、何か足りないのかもしれない…それは分かるんだけど何をどうして良いか分からないのが現状だ。

別段其処までして使いたいとも思わないペルソナだけど、前のように暴走されたら困るし制御できないのは辛い。最悪このままでもいいから送還しようかとも考えている位だ。

「ナナヤはお前が始めて生んだ、言わば一番お前を模しているペルソナだ。例えそれがお前と似ていないとしても、知っている存在だとしても、お前とナナヤは何処かしら共通点があると言う事だ」

「僕とナナヤが…？」

僕は快樂殺人者じゃないし、好き好んで相手を殺そうとかは余り考えしていない。

確かに敵対する相手は容赦するつもりはないし、自分の命が危険になれば殺す覚悟も出来ているけど、ナナヤはそれ以前に総てが違うと思う。

一応似ている点を考えてみたけど…なんだろう何が似ているのかす

ら分からない。

そもそも始めて出て来た時は暴走していた為に僕はナナヤがどう暴れたのかをこなた達から又聞きするしか出来なかった。

「ごめん、どこら辺に共通点があるのかさっぱりだよ」

「単純に上辺だけを見るな。ペルソナとは心の仮面、奥を見据えろ。そうすれば自ずと答えが出る。お前とナナヤには少なからず共通点がある、それを理解しナナヤを知ればお前は更に自分を御せる様になるはずだ…それがお前の次の覚醒に繋がっている」

「次の覚醒…か。分かった話を聞くだけじゃだめなんだろうね、もう少し考えてみる事にするよ」

「ああ」

『私からも一つご忠告を…ペルソナとは本来、自分の心の海の中から自らの意思を持って力を持つ仮初の自分を呼び出す力。其処を努々お忘れの無きよう…存在する以上総てのペルソナには意味が御座います。貴方様の宿すペルソナにもきつと意味が御座いましょう』

「……はい、ありがとうございます。まだナナヤの事はよく分からないですけど、もう少し自分で頑張ってみる事にします」

僕がナナヤをペルソナとして呼び出した以上、ナナヤには意味がある…か。

単純にゲームのキャラだから…そういう感じで考えてはダメだ。例えばゲームのキャラだったとしても存在する以上それは現実の存在なんだから。

この世界が現実なのとナナヤが現実なのは同じ、使いこなせないのにはちゃんと意味があるんだろう。

「焦りすぎるなよ。焦りは自分を蝕む毒の様な物だ、直ぐに出る答えなどそうそう存在しない。今回の事はある意味お前の心の問題なんだからな」

「心か…色々歪なのは自分でも理解してるよ。ありがとう達哉君」

「悪いな…抽象的な事でしか力になる事が出来なくて」

「気にしなくて良いよ。聞いて答えが出るようなものじゃない事は僕も何となく分かってたし、多分意味がある事なんだろうから」

ナナヤの事はこれから良く考えてみよう。

もしかしたら最悪の場合、暴走したペルソナと戦う事になるかもしれないけど、それにも必要になる事かもしれないな。

「さて…それじゃあイゴールさんお願いします」

持っている悪魔カードと『英雄の槍』のマテリアルカードを同時に

並べた。

今の僕でこのマテリアルカードから作られるペルソナを扱えるか分からないけど、一応試すだけ試してみよう。

『ふむ…少々お待ちください…今のお客様のレベルは30で御座いますな、更に言うと、『恋愛』のコミュと『正義』のコミュ、それに『塔』と『悪魔』のコミュが活性化しております』

「コミュ…ですか？ 僕には関係無かったんじゃ？」

僕がペルソナを作る分にはコミュを築く必要は無いと言っていた。そもそも僕は会話が今でも苦手だし、コミュニティーを拓けた感じもしないんだけど。

『はい。佐藤様は通常と違いペルソナを作成するのに絆の力は必要ではありません。ですが無意味ではないのです。コミュが活性する事により、通常以上のペルソナも宿す事が可能なので御座います』

「簡単に言えば前のテンセンニヤンニヤンと似た様な物だ、適正レベルじゃなくても扱える様になるといふ奴だな」

「正直、何がどうなってるのか分からないけど、使えるのなら利用すべきですね。ではその系統でペルソナをお願いしても良いですか？」

『承知いたしました。ではお待ちを……………』

恋愛…は多分こなたなんだろうな。確かに僕はこなたを大事に思っているし、少なからず意識もしている。

それがコミュに繋がっていると思うと、義務でこういう事をしてるんじゃないかと感じてしまうけど…多分違うんだろう。

僕達がこうして一緒に歩んできたから、コミュが築かれて強くなった…って事なのかな。そうだとしたら…嬉しいと思う。

正義は高良さんか小竜姫のどちらかだろう、もしくは二人かもしれない。

悪魔は………仲魔の内の誰かだろうか？ キンキかパールヴァティのどちらかかもしれない、と言うより悪魔とでも絆は開けると言う事なのかな。

そう考えると塔はなんとなくわかる…恐らくダッキだろう。タロットの事は分からないけど、確か逆位置なら彼女らしいとも考えられる、正位置もそれっぽいけど。

「正義以外は特殊すぎるコミュだな…俺もそもそもコミュとかは無くて召喚出来たからその辺りは良く分からないが」

「僕もはっきり言えば誰がどうなのかさっぱりだよ。でも、コミュが深いと言う事はそれだけ僕も他の人と話せる様になってきたと言う事なのかな」

「ああ… 前来た時よりも変わっている気はするぞ」

「そうか… な」

『お待たせ致しました。今現在佐藤様が呼び出す事に出来るペルソナは以下のペルソナになりますな』

そう言つてイゴールさんは何体かの合体案を用意してくれた、さあこの中から選ぶ事にしようか。

今のカードの枚数だと4体が限界だな、よく考えて選ばないと……

・レベル：3 4 愚者：ジャアクフロスト  
・レベル：3 5 愚者：リヨフ・ハウセン 要：マテリアルカー

ド『英雄の槍』

・レベル：3 4 魔術師：オロバス  
・レベル：2 7 女教皇：サラスヴァティ  
・レベル：3 3 女帝：リヤナンシー  
・レベル：3 0 皇帝：キングフロスト  
・レベル：3 3 法王：フラウロス  
・レベル：2 7 恋愛：クイーンメイブ  
・レベル：3 9 恋愛：サキミタマ  
・レベル：4 0 恋愛：はいよるこんとん  
・レベル：3 0 戦車：オオミツヌ  
・レベル：3 2 正義：ヴァーチャー  
・レベル：4 2 正義：ドミニオン  
・レベル：3 2 隠者：モスマン  
・レベル：2 9 運命：クシミタマ

：レベル：29 剛毅：ジコクテン  
：レベル：28 刑死者：オルトロス  
：レベル：31 死神：ロア  
：レベル：29 節制：ゲンブ  
：レベル：34 悪魔：インキュバス  
：レベル：43 悪魔：サキュバス  
：レベル：31 塔：エリゴール  
：レベル：40 塔：クー・フリーン or 英雄：クー・フリーン  
右時要：マテリアルカード『英雄の槍』  
：レベル：26 月：ヤマタノオロチ  
：レベル：30 太陽：ヤタガラス

#### 特殊選択肢

汝等が望むままに……………汝等が望むままに力を宿すが良い…

このお話が投稿されてから4コメントまでのペルソナを適用いたします。お好きなのをどうぞ

1コメント 1ペルソナまで。一人一回のみ適用します。

重複した場合は次のコメントにずれますのでその時は4コメント以上になる場合があります。

Continue 83 〱複雑で単純な世界？〱（後書き）

という訳で、ペルソナを選ぶ時間がやってきましたー。

皆さんから頂いた感想から色々引ッ張らせてもらいました！ ありがとうございますー！

むっ…これから用事なのですよ…（汗 急いで行って来るのです！

どうでもいいこと

ドラ焼きかいましたー。あまあまですよっ！！ いやぁ…和の心なのですよー。

決してドラえもん見たからじゃないのですよー（ドキドキお茶と一緒に頂くとホッと一息なのです。

皆さんのお勧め和菓子（洋菓子でも可）はありますかー？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

怒涛のみゆきさんラッシユ。

これはこなた追いつけるかーですね。

パールヴァティも頑張ってますが、こなたんVSみゆきさんっばい  
です。



こなた：56票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
みゆき：63票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）  
ダッキ：6票（手助けフラグはON）  
アリス：11票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
パール：19票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）  
フォル：12票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）  
雪之丞：14票（再戦フラグまで後1回）

もし：パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue 84 〈複雑で単純な世界？〉（前書き）

…ほろほろ…17時から書いてました。18時に書き終わってさあ  
のせよとしたのでありますが、何をとち狂ったのか、間違えて全部消し  
てしまうという悲しい現実が…  
さすがに少し呆けてしまいました…で1時間位落ち込んで今書き終  
えました…

お陰で短いですがご了承をなのです（涙 次回はちゃんと上書き保  
存するんだえぐえぐ

ペルソナアンケートありがとうございます！御座いました！。

初めの4つを適用させてもらいました、同じのだったりしたのは抜  
かしましたのでご了承をなのです。  
後、リヨフなのですが、先にクー・フリーンが来ていたので召喚で  
きませんでした。

皆さんありがとうございます！

〈今回召喚するペルソナ〉

オオミツヌ

クー・フリーン マテリアルカード消費

ヤタガラス

はいよるこんとん

実はライドウもやったことありません…色々調べてきましたが…み  
ー（涙

## Continue 84 〈複雑で単純な世界?〉

作り出せる事の出来るペルソナから4体ほどを吟味し、選ぶ事にした。

今回呼び出すペルソナは、ヤタガラス、オオミツヌ、はいよるこんとん、クー・フリーンにする。

はいよるこんとん…恐らくは無貌の神ニヤルラトホテプだと思う、でもニヤルラトホテプはそもそもレアペルソナだし、ペルソナとしてもレベルが低いから分霊みたいなものだろう。

それでもレベル40と、本来僕のレベルでは扱いきれないペルソナなんだけど、いける様だし使わせてもらおう。

クー・フリーン。トビカトウから貰ったマテリアルカードを消費して呼び出す事の出来る上位のペルソナか。

基本は『塔』クー・フリーンらしいけど、このマテリアルカードを使う事で『英雄』に進化させる事が出来るらしい。

英雄や猛将、魔人などは基本のステータスが通常の悪魔より高いから、これから先かなりお世話になるかもしれないな。

「では、この4体をお願いします」

『承りました……では、始めましょう』

手渡した悪魔カードとマテリアルカードを手に取り、目の前のテーブルに配置していくイゴールさん。

この行動にどれだけの意味や魔法が込められているか分からないけど、やはり彼は普通ではないのだろう。

設置されたカードがイゴールさんの手が動く度に踊る様に捲られたり、動いていく。

そしてそのままカードはひとりでに動き出し、八角形を作り出す。その中心でマテリアルカードが淡い光を放ちゆっくりと舞い上がっていく。

「いつもながら…壮観だな」

「確かに、俺達の時とは召喚の方法も違う。噂だと昔の携帯電話で呼び出していたと言うシンプルな召喚もあつたらしいが」

たしかペルソナ1だったと思う。イゴールさんが携帯電話を使い、よく分からない言葉で話した後カード状のペルソナが現れていた。

そう考えるとこの儀式はもしかして要らないのかもしれない…となると、多少なりとも格好つきたい年頃なのだろうか？ と温かい目で見てしまいそうになる。

八角形を維持したまま右回りに初めはゆっくりと回転していたカード達が、徐々に目に追いきれなくなるスピードで回転し上空に昇る。

上空に舞い上がったカード達はそのまま光を大きくし、まるで巨大なゲートの様なものを作り出した。

幻想的な光景：なんだろうけど僕はこれにどこまで意味があるのか？  
と言つどうでもいい事を考えてしまう。

光が最後に眩しいくらい輝くと同時に、其処にはとてつもなく巨大なペルソナが顕現していた。

『汝よ…我は八束水臣津野命。やつかみず おみつぬのみこと 国引きを行い出雲を作り上げた。我が半身であり我が民よ。我が力を振るい、世界に安寧を齎さんつ！』

巨大な石造の様な神、オオミツヌがそう言い残して僕の中に消えていく。

湧き上がる力を感じる、成程流石は神と言つ所なんだろうね。

オオミツヌが完全に消えると同時に次のペルソナがその姿を現した。  
三本足の黒い鴉、そう八咫鳥だ。

『ホウ…汝ガワシノ半身トハナ。靈鳥ヤタガラス、召喚ニ寄り参上シタ。コレヨリ汝ヲ先導シ必ズヤ勝利ニ導コウゾ』

「よろしく頼むよ、ヤタガラス」

『フム…此方こそ、ダナ』

巨大な翼を雄雄しく広げ消えていくヤタガラス。自分の心の海の中に新しい力が宿っていくのが分かる。

やはり高レベルのペルソナはスキルもそうだけど基本のステータスもやはり高いんだろう。

さて…次はいよるこんとんかクー・フリーリンだな。

先にどちらが出てくるか…？

「んな…えーと…」

『ハジメマシテー 私ハアル宇宙カラ人間ヲ色々研究シニヤツテ  
キタはいよるこんとんデス マサカアナタガ私ノ分身ダナンテ、  
何時分身シタソデスカ？ マアイデスコレカラモ人間ヲ研究シマ  
シヨウネ？ 英語デ言ウナラりさーち』

「う…宇宙人…？」

ペルソナは神とか悪魔とか呼び出すし、這い寄る混沌…ニヤラルラ  
トホテプも宇宙人と言うカテゴリには間違いないんだけど。

見た目からしてスピードマークのような頭部に真っ赤な顔が凄く特  
徴的だ、更に言えば目はかなり大きい上にオレンジ色という不可思  
議と言うか精神を削られそうな感じだ。

体は緑色で白い白衣を身に付けている感じは科学者と言つか何と言  
うか…何か魔法の鍵でも持っていてそんな雰囲気がある。

その姿はまさに一昔前のデフォルメされた宇宙人にしか見えなかつ  
た。

『オヤ？ ドウシマシタ私？ 英語デ言ウトゆー？』

「いや…ペルソナは何でもありだなと思ってね」

『フムム？ コノ姿ガ気ニナリマスカ？ 別ニ色々ナ姿ニ変エラレ  
マスノデモウチヨット萌エノアル姿ニナリマシヨウカ？』

「…いやなんでもいいよ」

『イケマセン、イケマセンヨ私ツ！ ソコハ一緒ニ『萌エー！』ツ  
テ叫ブ所デシヨウツ！？ 最近色々人間ヲ研究シテキマシタガ、ヤ  
ハリ萌エコソガ人類ノ進化ノ鍵ナノデスヨ。英語デ言ウトレヴオリ  
ユーション・キー』

「いや、その英語は違う」

なんだこの不思議宇宙人は…

『マア、コウ見エテモ。萌エ時ノ姿ハソレナリニ可愛イデスカラ期  
待シテオイテクダサイ。今ハきやら作りモ兼ネテコノママデイマス  
ネ。宇宙人ツポイデシヨウ？』

「あの、イゴールさん。これ送還出来ませんか」

『召喚したてでそれは無理が御座いますな』

「いや、気持ちは痛いほど分かる。あれがニヤルラトホテプの分霊だとしたら俺達の戦いが情けなくなるからな…」

ああ、そういえば達哉君達が最後に戦ったのはニヤルラトホテプだったな。

確かにこの萌え萌え煩い、如何わしい宇宙人がラスボスだとやるせない気がするよ。

『酷クナイデスカ！？ 女ノ子ニハ優シクトゴ両親ニ言ワレマセン  
デシタカッ！？』

「終ぞ言われた試しは無いね」

『絶望シタツ！？ 現在ノ優シサヲ持タナイ青年達ニ絶望シタツ！  
？ 傷心旅行ヲ兼ネテ秋葉原ニ行ク事ヲ提案シマスッ！』

「初めの人間の研究はどの辺に消えたんだ…？」

『勿論シテマスヨ？ マズハじゃぱにめーしょんカラ覚エナクテハ  
ッ！』

「佐藤…こいつにハルマゲドン仕掛けても良いだろうか」



「気持ちは凄く分かるけどそうになるとダメージが僕に来るんで辞めて欲しい」

「というか撃てるんだ…今から僕の代わりに不良とか核とかどうにかして欲しいと思ってしまっけど、やはりだめなんだろうな。」

『マア、私サンモ落ち着イテ。次回はちゃんと美人で現れますから其処の所宜しく』

「口調が流暢になってるんだけど、もしかして普通に話せたんじゃない」

『ナ、ナンコトラヤ…』

「それを言うなら、「なんの事やら」だ…」

「疲れた様に達哉君が突っ込む。どうしよう…このペルソナは本気で使えるんだろうか。」

「あと、わたわた動くと見た目からして気持ち悪いので早く消えて欲しい。生理的嫌悪に一步近いよ…流石はクトゥルー系の悪魔…？」

「色々ダメージを受けた気がするけど漸くはいよるこんとも僕の心の海の消えていく。」

「…どうしてか強くなった気がしないのはなんでだろう。」

さ、最後はクー・フリーンだろうし、もう少しまともなやり取りになる筈だ…

『あー…もういいか？』

「ごめん、色々と気まずくてごめん…っ!？」

『いや、別に良いけどな。っと、英雄・クー・フリーン、現界した。お前が俺で、俺がお前、か。見た感じ槍なんて使えそうに無いけどな』

はいよるこんとんで驚きはしたが、今度は目の前のクー・フリーンで二重に驚いてしまう僕が居た。

ペルソナシリーズのクー・フリーンと目の前のクー・フリーンは見た目も何もかもが総てが違っていたからだ。

勿論このクー・フリーンも知ってはいる…知っては居るんだが…

「英霊…?」

『おっ? そつちも知ってたか。つっても魔術師には見えないんだがな。まさか聖杯戦争じゃなくてペルソナとか言う存在として呼ばれるとは色々不思議な事もあるもんだぜ』

『ふむ…どうやらマテリアルカードを使用した事による、故意的なイレギュラーの様で御座いますな。本来召喚される筈のクー・フリーン』

リンに上昇修正と強い意思が追加されているようです』

『おいおい。俺以外にクー・フリーンが居るわけねえだろ…ってまあ、もしかしたら意志の違う分霊の事かもしれねえけどよ』

このクー・フリーンは、ナナヤが居る世界に存在していた過去の英雄だ。

『Fate/stay night』と言うゲームに存在していたキャラクターの一人で、魔術師によって召喚される『サーヴァント』と言う特殊な使い魔『ランサー』と言う存在だ。

人間以上の実力を持ち、その槍の一撃は運命さえ覆して相手を屠る事が出来るという、宝具という武器を所持している。

僕自身、ゲームはやった事はないが前世でもインターネットなどで色々調べていた事がある為、大体の内容は知っている。

まさか…こんな英霊までもペルソナになるなんて。確かに彼を召喚する事が出来るならこれからの戦いはかなり楽になるだろう。

『どうした？ ボケつとした面してよ？』

「あ、いや…これからよろしく頼むよ」

『ま、呼び出されたもんは仕方ねえだろ。サーヴァントとして呼び出された訳じゃねえから補正もねえし、この世界の事もよく分からねえが力は貸すぜ』

強い相手と戦う事を望む英雄か。この先あの不良と戦う上でかなりの切り札になりそうだ。

後は雪之丞との再戦の時かな、お互い英雄同士気が合うかもしれないね。

『んじゃ、最後は一応決めておくか。我が半身に限りなく深い誓約ゲッシュを、この血、肉総てを賭して総ての敵を殺しつくし、先に続く道を切り開くと誓約する』

槍を目の前に置いて跪き、臣下の礼を取るクー・フリーリン。

自分の命を散らす結果となった誓約を新たに誓ってくれた。恐らく儀式の様なものなんだろうけど、僕はペルソナ使いとしてそれに応えなければならぬだろう。

顔を上げて力強く笑うクー・フリーリン。そのまま僕の中に消えていった。

「召喚した4体の内2体がイレギュラーか：これからの未来を何か示唆しているのか：単純に偶然か：なんにせよ気をつけていけ」

「ありがとう。僕も死にたくはないし出来る限り戦うよ、さっさと全部を終わらせてのんびりしたい。世界全部を救う云々は誰かに任せろね」

「そう…だな」

「…？ イゴールさん今回もありがとうございます。もう御座います。また近い内に来ますので」

『ええ。此処は貴方様の為に用意された場所、いつでもお客様をお待ちしております』

軽く一礼をして、部屋を出て行く。

次のシエルターは色々と問題がありそうだし、面倒がなければ良いんだけどね……………

……………

……………

…

### 周防達哉視点

「行ったか。イゴール、この茶番は一体何時まで続くんだ？」

『…私めからはなんとも…ですが、時は近づいてきておりますな。現在あの方が進むべき道はいくつかに広がっております』

「…そうか。道が一つしかなかった前を考えると格段の進歩なんだろうな」

『そうでございますな。私としましても折角のお客様を失ってしまいたくはありませんから』

佐藤大樹…ほんの少し異能に目覚めただけの一般人。

それは俺もそうだったが、あいつはそれだけじゃない。

いや、あいつ自身が一般人で、英雄でも救世主でもない事は知っている。前世がどうだ、来世がなんだと言ってもあいつはあいつ自身でしかない。

だが、言葉では難しいが…あいつは…

「理不尽か…理不尽だろうな。更に言えばあの世界の異変…」

『困難に立ち向かう未来は本来ありませんでした。この世界で佐藤様は平凡に生き、そして死ぬ筈だった。それが運命で御座いました』

「運命は突然捻じ曲げられ、繋がりに取り憑かれた。誰が悪いんだろうなこれは」

本来俺は此処にいる必要は無かった。まあ…俺は俺だが、本来との俺とは違う。

難しいかもしれないが、理解する必要はない。

「イゴール。あいつが…佐藤が今死ぬとどうなるんだ…？」

『……』総てが終わる』。としか聞かされておりません…ですがそれが何を持って終わりとなるのかは私にもわかりません』

「…違う世界では、絶対の死に抗った英雄がいた。俺達は普遍的無意識の世界で…噂の世界で戦った。だが…俺達が死んでも世界はそのまま動いていく…」

あいつが前言った、俺達は『ゲームの世界の住人だった』と。

つまりは俺達は佐藤が見ている夢の存在で、あいつが死ねば総て無かった事になる…と考えた。

だが、佐藤は既に数回死んでいる。だからこそ分からない。

何を持って『総てが終わる』のか…英雄・横島忠夫が何を知って行動しているのか、何故佐藤大樹なのか。

「佐藤は…一体『何』なんだろうな」

『今は、待つしかありません。ただ、この世界はあの方が見ている夢、などではありません。あらゆる世界、あらゆる宇宙の中で、勿論此処も現実の世界でございますから。』

後、佐藤様はただの人間で御座います、英雄でも超人でも、神でも悪魔でも御座いません。それだけは確かでございますな』

総ては佐藤が強くなって、横島が総てを判断した後になる…か。

今はまだ待つしかないんだろうな……………

### 周防達哉視点解除

ペルソナを4体降ろした!!

「名前」：オオミツヌ 「アルカナ」：戦車

「LV」：30

「消費MP」：15

「ステータス」

力：35 知：18 魔：18 体：35 速：18 運：20

「相性」

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 剣： | 物： | 技： | 火： | 氷： | 電： | 風： |
| 魔： | 心： | 禁： | 聖： | 呪： | 状： | 万： |
|    | x  | x  | x  | x  | x  |    |



「所持スキル」

- ・貫通見切り
- ・貫通耐性
- ・ヤケクソ防御
- ・マハタルカオート
- ・斬撃ブースタ

「スキル」

- ・キルラツシユ？ 敵全体に2〜4回の剣属性、大威力ランダ

△攻撃

・リベリオン？ 味方全体をクリティカル率を3ターン上昇させる。

- ・ギガンフィスト 敵単体に剣属性極大ダメージ

- ・ヒートウェイブ？ 敵全体に剣属性特大ダメージ

- ・カウンタ 常に15%の確率で物理攻撃を反射する。

貫通見切り：物属性の回避を上昇させる。

貫通耐性：物属性の攻撃を常に半減する。相性より優先する

ヤケクソ防御：ヤケクソ状態を無効にする。

マハ・タルカオート：戦闘開始時、全員にタルカジャ？をかける。

斬撃ブースタ：剣属性の威力を上昇させる。

「名前」：ヤタガラス 「アルカナ」：太陽

「LV」：30

「消費MP」：15

「ステータス」

力：25 知：29 魔：29 体：19 速：30 運：18

「相性」

剣： 物： 技：× 火：× 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・気功・小 ・ミドルグロウ ・飛翔（特大）

「スキル」

・スク・カジャ？ 味方全体の命中が3段階上昇。

・マハ・スクンダ 敵全体の命中値を限界値まで減少。

・ディアラハン？ 味方単体のHP全回復

・終末の予言 敵全体を高確率で発狂させる。

・残影 敵単体に剣属性大ダメージ。新月時は極大ダ

メージに変更。

気功・小：一定時間毎にMPが10%回復する。

ミドルグロウ：戦闘に参加していなくても経験を50%ほど獲得できる。

（ペルソナなので、この経験値はペルソナ使いに適用される）

飛翔（特大）：人間5〜6人を乗せて飛行することが出来る。

「名前」：はいよるこんとん 「アルカナ」：恋愛

「LV」：40

「消費MP」：20

「ステータス」

力：27 知：38 魔：38 体：28 速：28 運：12

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

- ・デュプリケイター
- ・身体変化
- ・無貌の神・弱
- ・バステブースタ
- ・宇宙CQC

「スキル」

- ・人体実験 敵単体に万能属性中ダメージ 高確率で複数のバッドステータス付与

- ・原初の暗黒 敵全体に万能属性大ダメージ 使用毎に威力1段階上昇

- 必・インフィニティ 1ターンの間あらゆるダメージを無効。最速行動

デュプリケイター：あらゆる鍵がかかった物を開ける事ができる。  
身体変化：自分の容姿性別などを好きなように変化させる事ができるようになる。

無貌の神・弱：所持者より低レベルの対象に常に全ステータス1段階減少

正し、身体変化で姿を変えている場合は効果無効。

バステブースタ：強力な呪詛でバッドステータスの効果を上昇させる

宇宙CQC：中確率で、本体を無視して2回行動する

「名前」：クー・フリーン 「アルカナ」：塔 英雄

「LV」：40

「消費MP」：20

「ステータス」

力：40 知：32 魔：32 体：34 速：50 運：26

「相性」

剣： 物：× 技：× 火： 氷： 電： 風：×  
魔： 心：× 禁： 聖：× 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・英霊 ・斬撃ハイブースタ ・物理攻撃貫通 ・達人の勘  
・超人？

「スキル」

・デスバウンド 敵全体に剣属性極大ダメージ 高確率でク  
リティカル

・空間殺法

敵全体に剣属性極大ダメージ

・チャージ 次のターンの物理攻撃の威力を2.5倍に  
する。

・終末の予言

敵全体を高確率で発狂させる。

必・刺し穿つ死棘の槍 敵単体に剣属性超絶ダメージ 超高確率  
で即死

必・突き穿つ死翔の槍 敵全体に剣属性絶大ダメージ

英霊：常に全ステータスが1段階上昇。

斬撃ハイブースタ：剣属性の威力を2段階上昇させる。

物理攻撃貫通：あらゆる相性を無視して物理ダメージを与える事  
ができる。

達人の勘：あらゆる回避に補正。

超人？：好きなステータスをレベル毎に+5する

成長・低：このペルソナは成長する。正し成長率は低い

Continue 84 く複雑で単純な世界？（後書き）

ふかまる佐藤君の謎くくがちょっと出てきました。

「総てが終わる」とはなんなのでしようっ！

あ、這い寄れニヤル子さんが来て欲しいとの事なので、本買って来ました！（マテ  
ふむふむ…フォークに弱いのか…ほへー…

ちなみに基本体はワイルドアームズというゲームに出てくる「はいよるこんとん」です。人体実験はトラウマなのですよ。

どうでもいいこと

今日はおそばでしたよ。おそばは好きな人と嫌いな人が分かれる料理ですよねえ

私はちなみに大好きですっ！でも弟は嫌いなのですよー（涙  
なので一緒にレストラン行く時自動的にお蕎麦屋さんはないのです…寂しいな。

みなさんはおそば好きですか？

私は冷たい方が好きです。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

怒涛のみゆきさんラッシュ。

これはこなた追いつけるかーですね。

パールヴァティも頑張ってますが、こなたんVSみゆきさんっぽい  
です。

こなた：73票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：81票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：13票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：19票（????なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：13票（????なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：15票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue85 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

遅くなりましたー。何にも思いつかなかったせいで30分位現実逃避してたせいですねっ！(マテ)

はいよるこんとんの実体実験があまりにも強すぎたので、後で修正をかけるのですよー。

具体的にはこうなります。

- ・ 人体実験 敵単体に万能属性小ダメージ 全バッドステータス付与から
- ・ 人体実験 敵単体に万能属性中ダメージ 高確率で複数のバッドステータス付与

うん…全部のバッドステって…決まると詰みですよね(汗)

シェルターに向かう道

「空は青いねえ。異界の中なのにそのまま飛んで行ったら出て行けそうな感じだよ」

「通常の異界とは違うみたいだしね。でも多分強力な結界とかで封じられてると思う」

「その可能性が高いですね。恐らくこの空も異界の中の一部なのだと思います。この町が異界に包まれて3週間ほど経っているようですが、飛行機等は確認されてないらしいのです」

『この町にも探せばへりとかあるよね。やっぱり出て行けなかったんだ？』

「はい。どうやらこの異界は半ドーム状に形成されている様です。端は深い霧に覆われているようで、その先に進む事は出来なかつたようです」

「だろうね。出来るならシェルターに閉じ籠ったりはしないよ」

徒歩で次のシェルターに向かう大樹達。自衛隊員の一人が車を出してくれと言ってくれたが、そもそも警備の総数が少ないシェルターから人を借りるのは憚られたので断った。



更に言えば、車などで移動した場合、不意打ちを受ける可能性がある為敢て徒歩を選んでいた。

先程作り出したペルソナ『ヤタガラス』で飛んでいく事も考えたが、移動中に乗れそうな車などをカードに収納する事にした為、車を探しつつ歩いている。

それにしても…邪悪な気配がとても強いですね。

『気配ねえ〜。まあ、今更って感じがするよ』

「あの変態が作った世界だしね。悪魔も気持ち悪いのしか居ないし、唯一の利点はゾンビが居ない事かな」

「ゾンビ…ですか。確かに存在していたら厄介でしたね」

ゾンビ自体は、基本的にそれほど強くはない。

遠くから射撃したり、複数で襲い掛かれれば一般人でも倒す事が出来る悪魔だ。

だが、そこに穴が存在する。一般人でも倒せる悪魔…つまりゾンビに対しては通常の悪魔と比べて警戒心が薄くなってしまいう可能性がある。

弱いと言っても、ゾンビはレベル2の悪魔。決して油断して良い相手ではない。

更に言えば、映画で出てくるゾンビの如くゾンビに殺されてしまった人間は時間を置くとゾンビになってしまうのだ。

殺されなくても、ゾンビの体液などが口内や傷口に入ってしまうと、そこから感染し同様にゾンビになってしまう。

能力者達…つまり最低でも患者になれば、悪魔に対する抵抗力が増すので殺されたり、体液などが傷口などに入ってもゾンビになる事は無い。

つまり、処理を間違えてしまえば爆発的にゾンビを生み出す事になる。

「今は居ないかもしれないけど気をつけないといけないね。まあシエルターの前で警護しているクズノハがいればゾンビ程度なら大丈夫だろう」

『過信は禁物だけだな。とりあえずよ、無事を確認したらどうするんだ？』

「親類縁者を一つのシエルターに纏めるのが楽で良いかもしれないね、もしもの時二手に分かれる可能性は出来るだけ潰したい」

「となると、あっちのシエルターで人探ししないかねえ。ひよりんやパティ達も出来れば助けてあげたいけど…」

『ねえねえ。トレーラーで皆で移動するってのは？ キャンピングカーみたいで楽しくない？』

「却下。悪魔に餌が目の前にあるぞと、教えてるのと同じだよ。確かに安全性で言えば僕達が護るし安全だけど、僕達は基地を攻略したりこの異界をどうにかしなくちゃいけないからね。そっちにメンバーは割けないよ」

アリスの思いつきは、大樹としても多少は考えていた。

しかし問題点が言葉通りに沢山存在する為、それを行う事は出来ないのだ。

そもそも運転する技術が無い以上、誰かを運転手に据えなければならぬ上、運転手は一番殺されやすい位置に居るので一般人に任せると訳には行かない。

現状仲間がこの人数しか居ない以上、分散したり足手纏いが増えるのは下作だった。

シエルターからもう一つのシエルターまで護衛するのも、出来るならしたくはないのだが、大樹と違いこなた達には護るべき家族や友人が居る。

万が一シエルターを襲われ、気を散らされてしまえば最悪な事になり兼ねない為、危険を承知で行動を起こしていた。

エストマが使える為、余程の悪魔以外は抑える事が出来るので実行出来る策でもある。

『ヒーヒーヒーヒー　　なんだか遠足みたいだホッ』

『一歩間違えると死ぬという遠足じゃがのう。ほれ、前方に悪魔が見えるぞい。どうするかの手順よ？』

「こなた…いけるかい？」

「おふこーす。任せたまへっ！」

百太郎より早く悪魔を視認したグクマツツのお陰で、見つかる前に奇襲を行う準備を整えられた。

素早く狙撃銃を展開し、集中していくこなた。

スコープ越しに見える悪魔は2体で、どちらも何度が戦った事のある悪魔な為、情報は既に得ている。どちらの悪魔も銃に耐性は無い為、上手く狙えば一撃で殺す事が出来る。

「よしよしよし…其処から動いちゃだめだよ」

こなたと悪魔との距離はおよそ800メートル以上。そう、『たかが』800メートルしかない。

その程度の距離の狙撃など彼女にとっては、パソコンを起動させるより楽でしかなかった。

集中し、自分と銃が一体化したような感覚に捕らわれるが、それに

抗う事はせず寧ろ積極的に感覚を合わせていく。

余分な音がそれと同時に聞こえなくなり、銃が自分の延長上の存在となるのが分かる。

迷いは消え、あるのは確定した未来だけ。後は最後に一言：呟くだけで事は足りた。

「BANG」

タン、タン、と狙撃銃特有の音を響いた。

吐き出された弾丸は、自然に、そして確実に悪魔の脳天を撃ち抜きその存在を消し去っていく。

恐らく二体の悪魔は何が起こったのか分からないまま死んで行ったのだろう。それほどまでに正確に、確実に、無慈悲に死の銃弾は悪魔を貫いた。

余韻を残す事無く、意識を覚醒させるこなた。

「手応えバツチリ。ふふん、シューティングスターこなたと呼んでくれたまえっ」

肩に銃を乗せ、腰に手を当ててポーズをとるこなた。その様子が物凄く様になっている。

「流石泉さんですね。ここからあそこまでの距離を、こんな短時間の間で確実に捕らえるなんて」

「これで前衛にも立てるんだから僕は色々遣る瀬無いな。まあ、ペルソナとかで頑張るか」

「大樹君は万能タイプだから、色々活躍できてるよ。と言っかいつも指示してくれるから助かるんだよねっ」

「私も指示などは出来ない事はないですが。佐藤さんの経験を基にした的確な指示はいつも助かっていますよ」

みゆきは能力を得るまで戦場で戦う事が無かった為、作戦を発案し簡単な指示を出す事は出来るが、咄嗟の場合の指示や戦闘中の指示などは上手くこなせない。

だが大樹はデビルサマナーとして戦い続けた経験を活かし仲魔を使い戦う事に慣れている。その経験が上手く作用していた。

こなたもデビルサマナーではあるが、どちらかと言えば狙撃や前衛で指示通りに戦う事を得意としているタイプなので、大樹がいなければ上手く連携を取る事ができないのだ。

とはいえ、大樹自身もまだまだ未熟な為に不測の事態に対しては一步遅れてしまうのが難点だろう。しかしそれも成長すればどうにでもなる。

成長の余地が残されているが、成長しきる前に死ぬ可能性もあるのが、今が一番大事な時の為、色々不安はあるのだが…

戦闘になる前に悪魔を退ける事が出来た為、仲魔に警戒して貰いつつ、乗れそうな車を探して行く一行。

しかしそうそう都合良く乗れる車など存在せず、其方は不漁だった。

……

……

…

結局、乗れそうな車を見つかる事は出来なかったが、途中寄ったコンビニで色々物資を補給出来た為、そこまで落ち込む事は無かった様だ。

あの後数回ほど戦闘をこなしたが、問題なく撃破する事に成功している。

休憩を多めに取りながらも地図通りに進んで行き、後30分程歩けばシェルターに到着する距離まで進んでいた。

「ディアラハン最高〜。足の痛みが消えていくよ〜」

「ある程度の疲労なら同時に回復してくれるみたいですね。やはり魔法とは凄いものですね」

「うー…アメリカは回復魔法無いのですよ。出来たらご主人様に回復魔法掛けられたですのに…」

アマリタ、リカームと状態異常治癒や蘇生魔法なら持っているが、何故か回復魔法だけは覚えていないアメリカ。

攻撃に、阻害、強化、支援、物量作戦と何でも出来るが故に忘れがちな欠点の一つでもある。

彼女の的には、ダメージを受けた大樹に颯爽と自分が回復魔法を掛けて上げたいのだが、早々都合よくは行かないものである。

「アメリカちゃんは、それ以外がとても優秀だからねえ。グレイブとか凄まじいし」

「あれは確かに驚きました…時間さえあれば悪霊軍団を用意出来るそうな程でしたしね」

私としては、罪も無い霊を呼び出して戦わせるのはあれなのですが…

『だが、便利なのはたしかだぜ小竜姫。あんたがどう思おうとも、



使えると思えないじゃかなり差が出る魔法だしな。優しいのは分かるが少々潔癖すぎるだろ、多少は清濁合わせ飲みな』

…ですが…

『なんつーか、骨の髄まで正義の神様なんだなアンタは。オレには流石に真似できねえよ。だがな？ 言葉だけじゃ今はどうにもならないんだぜ？ 更に言えばあんたは現在只の剣でそっちの理由で付いて来てるだけの存在なんだ。あんまり余計な口出ししていると捨てられるぜ？』

小竜姫の言葉は確かに哀れな霊に対しての憐憫の情などが感じられた。誰にでも優しい神様なのだろうとキンキは彼女を見る。

だが、それは平和な世界だからこそ、吐いても良いセリフだと切り捨てた。

！？

小竜姫も心の奥では理解している。

今が有事の際で、甘い言葉など何の役にも立たない事を。生き残る為にはどんな手でも使わなければ死んでしまうと言う事も。

だが、正義を志す龍神としてどうしてもそついう物に敏感に反応してしまうのだ。

そしてキンキはそれが気に入らない。

口を出す位なら、実際に行動して人間を救えばどうだとキンキは言いたかった。

今の小竜姫にはそれさえも出来ない事は知っているが現状を知っても尚、甘い言葉を並べる小竜姫に対してイラついてしまう。

其処まで言えるのなら強いのだろう、ならお得意の正義で大樹達を救ってから物を言え。その言葉を飲み込みつつ彼女は前を歩いていく。

「え、えと？ どうしたですキンキ？」

「ん、ああ。なんでもねえよ。お前は十分サマナーの役に立ってるし、回復魔法が使えない程度で落ち込むなって事だ」

「次回の強化ではきつと回復魔法を覚えるのですよっ！」

『ふぁいとですわぁ〜』

『これ以上強くなられたら魔王である我の立場が…』

『今更じゃのう。ヒョーヒョーヒョー』

気まずい雰囲気になりかけたのを仲魔達がどうにか取り成していく。

キンキも小竜姫に少し言い過ぎたと謝り、彼女もそれを受け入れそ

れは終了した。

だがみゆき、小竜姫にはキンキの言葉が深く突き刺さっていた。

（力が無い状態で吠えるな…確かにその通りかもしれないね。私も泉さんも、いえ…私達は全員未だに弱い。言葉はそれをなせる位になってからではないと意味を成さない…）

そうみゆきが思考の海に入ろうとした瞬間。こなたが声を張り上げた。

「あっち…煙が上がってるよっ!？」

「なっ…急ごうっ! ペルソナっ!！」

先の方を見ると黒い煙がもうもうと立ち昇って行くのが見えた。

この先はシエルターがある以上、恐らくシエルターが襲われているのだらうと全員が気を引き締める。

『フム…急イダ方ガイイナ…汝ヨ、我ノ背ニ』

大樹が呼び出したヤタガラスが言葉少なく急かして行く。

直ぐに全員がヤタガラスの背に乗り、それを確認したと同時に高く羽ばたく。

『行クゾ…！ 振り落トサレルナツ…！』

猛スピードで飛行するヤタガラスの背で大樹達が見たものは、シエルターを破壊しようとしている。

メシア教の人間達と、それを指揮する修道女の姿だった。

キンキ、小竜姫に物申す。

修道女さん？ 登場の巻でした。

今回は戦闘ですねー。はてさてどうなる事やら。

どうでもいいこと

暫くの間帰りが遅くなります。

一日更新が出来ない時もありますがご了承をなのです(涙

所で話は変わりますが、ロールケーキを食べました！

ふんわりふわふわで美味しいですよ。でも食べ過ぎに注意ですね

(汗

私は普通の生クリームと抹茶タイプが好きです。

皆さんのお勧めの味はありますか？

### 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

逃げるみゆきさんに追うこなた。このまま逃げ切れるかっ！ ですね。

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：85票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
みゆき：95票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）  
ダッキ：6票（手助けフラグはON）  
アリス：14票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
パール：19票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）  
フォル：14票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）  
雪之丞：17票（再戦フラグまで後1回）

もし：パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue 86 〱複雑で単純な世界? ? 番外〱 (前書き)

佐藤君達のエンカウントは少しお待ちくださいですよ。

今回はちょっとした幕間です。つかさ視点からどうぞ。

シエルターを攻めてるシスターさんの正体が!!

Continue 86 複雑で単純な世界?? 番外

く大樹達が金剛神界に行っている間く

メシア教・聖母の間

柊つかさ視点

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。



お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

お姉ちゃん。

大好き、大好きだよ。皆大好きだよ。大好きなの、大好きだから。

大好きなのに。

お姉ちゃん、何処？ こなちゃん、何処？ ゆきちゃん、何処？  
佐藤君、何処？

お母さん、何処？ お父さん、何処？ まつりお姉ちゃん、何処？  
いのりお姉ちゃん、何処？

ふわふわだよ、ぼーっとするの。

ねえ、私は此処に居るよ？ お姉ちゃん、皆、私は此処だよ？

皆で遊ぼう？ 皆で今度は何処に行こうか？ 海かな？ 山かな？  
旅行したいね。 皆で沢山遊びたいね。

ねえ、私は此処に居るよ？ こなちゃん、皆、私は此処だよ？

皆で休もう？ 皆でお布団で一緒に寝ようよ。 シングル？ ダブル？  
キングもいいよね。 皆で一緒にお休みしたいね。

ねえ、私は此処に居るよ？ ゆきちゃん、皆、私は此処だよ？

ねえ、私は此処に居るよ？ 佐藤君、皆、私は此処だよ？

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

真っ白になっちゃうの、全部消えて行くの、やだな。お姉ちゃんが  
消えちゃうよ。

真っ黒になっちゃうの、全部塗り潰されるの、やだな。皆が消えち  
やうよ。

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

ふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわふわ  
ふわふわふわふわ

聖母？ 聖母ってなんだろう？ お母さん？ お母さんになるのか  
な？ 私結婚するのかな？

子供？ 子供は大好きだよ？ お母さんになったら、いいいいこ  
してあげたいな？

ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？  
？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？

ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？  
？ ねえ？ ねえ？ ねえ？ ねえ？

どうして私は此処に居るの？

お姉ちゃんが居ないよ…？ どうしてなのかな？

どうして私は此処に居るの？

昨日のお注射はもう嫌だな。 ふわふわになるから。

どうして私は壊れないの？

なんで皆、私に変な事を言い続けるの？

『聖母様が遂に現れた。これで我等は神の愛の元、永遠を約束されるでしょう！』

『万歳っ！！ 聖母様万歳っ！！ 救世主万歳っ！！』

寂しいな、お姉ちゃんが居ないの寂しいな。

寂しいな、こなちゃんが居ないの寂しいな。

寂しいな、ゆきちゃんが居ないの寂しいな。

寂しいな、皆が居ないの寂しいな。

寂しいな、寂しいな、寂しいな、寂しいな、寂しいな、寂しいな、寂しいな、サミシイナ、さみしいナ……

『どうしてですかっ！？ 彼女は聖母に間違いない筈ですっ！？』

《私も不思議でなりません…受胎告知をしても尚、彼女に子が宿されないなんて…》

『間違つてなどいない…彼女は何度調べても聖母を産む事が出来る身体だっ！ 属性に因る反発は薬や布教で既に正したはずです！』

《ええ、恐らく彼女は既に個人の意識を有していない、聖母としては最適の状態です…なのになぜ…？》

『まさか…あの時飲み込んだ金色の珠が何かをつ！？』

《分かりません…しかしまずは様子を見ましょう》

寂しいな……………

『初めまして聖母様っ！ 私、貴方様のお世話をさせて頂くことになりました、シスター・アンナと申します』

……  
……  
……

サミシイナ……………

『ほらほら、聖母様。ちゃんと食べないとお体に悪いですよ』

……  
……  
……

サミシイナ……………

『聖母様は…自分の意思を無くしてまで救世主を御産みになると言われたのですね…私尊敬いたします…きっと私が貴方様をお守りしますね』

……  
……  
……

さみしイナ……………

『私…親に捨てられたそうなのです。この世界はそのような悪意に満ちています…救世主が誕生して世界が浄化されれば、きっとそのような哀れな子はもう産まれないのでしょうかね』

……  
……  
……

さみし……………

『っ！？ 悪魔達よ！ この御方を傷つけさせる訳には参りません  
っ！ 塵は塵に、灰は灰に、そして邪悪は闇に還りなさいっ！』

……  
……  
……

誰…か…居るのかな……………

『世界が異界に飲み込まれて早2週間…悪魔達は更に苛烈になって  
きていますね。でも私が護り通さなくては、自ら意志を捨ててまで  
聖母になる事お選びになられたつかさ様の為に』

「……………あ…う……………」

『つかさ様っ！？』

……  
……  
……

さみしく…くない…でも…さみしいな…

『そつですか…つかさ様にはお姉様が…』

誰だろ、このひと…あれ…私、誰だろ

誰…

「おねえちゃ…おとうさ…おかあさ…あいた…い…」

『…つかさ様…恐らくつかさ様が救世主を御産みする事が出来ないのは、家族に対する懸念があるからなのです。』

お任せください、つかさ様。きつとこのシスター・アンナがつかさ様のご家族をお連れ致します。』

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……



A series of 25 vertical dotted lines for handwriting practice, spaced evenly across the page.

あ

神父視点

柗つかさ視点…沈黙

A series of 18 vertical dotted lines arranged in a column, intended for writing. The lines are evenly spaced and extend across most of the page's height.

「シスター・アンナは行きましたか」

レイ・レイハウとの戦いで石化されたと聞いた時は、とても悲しくなりました。しかしテンプルナイトの方々が彼女を発見出来たので直ぐに救う事が出来ましたね。

彼女はとても神を敬愛し、救世主を望む優しい信徒ですから、帰還はとても嬉しい事でした。

神の怒りが落ちる日を待たずにこの町が異界になった時は驚きましたが、彼女の戦闘力があれば多少の悪魔など恐れるに足りません。

勿論私が聖母を護ればいいのですが、その前に何故聖母が子を宿す事が出来ないかを調べなくてはいけない為に護りが疎かになってしまいます。

そこで自ら聖母のお世話をすると彼女が言ってくれた時は、何て素晴らしい人なのだろうと涙すら流してしまいましたよ。

彼女には総てを伝えていないですが、まあその辺はどうでもいでしょう。彼女はきっと聖母と救世主の為に祈り、戦い続けてくれますから。

『彼女は行きましたか。しかし聖母を護る異質で邪悪な結界を破る事が出来なくては救世主が誕生しない…くっ！』

「恐らくは家族の誰かがこの様な呪詛を掛けたのでしよう。シスター・アンナが直ぐに連れてきてくれる筈です。後は懇切丁寧にお話すればきつと納得してくださる筈」

『姉の方は聖母を獲得する時に殺してしまつたが、まあ彼女程度の力量では上位天使の力を無効化する呪詛を掛けられる筈が無いので気にする必要は無いですね』

「聖母が見つかり、救世主誕生までもう一步だというのに……この腐れ背信者どもがっ！ てめえらの様なゴミクズはこれから先の世界には不要っ！」

もし、話すつもりが無ければ最悪どんな手を使ってでも聞き出す事にしましょう。

これから先、私達は救世主の導きの元に生きていくのですから……それを邪魔する異教徒共は確実に抹殺しなくては。

シスター・アンナもその辺は良く分かっているでしょうし、必ずや朗報を持って来てくれるでしょう。

「……………」

「おお、つかさま。涎とははしたないですな。ささっ、お綺麗になりましたよ」

「……………」

『最早完全に自我が消滅したようです。まあ、聖母の役割は救世主を安全に産む事、その為には苦痛も意志も必要ありませんからね』

我等の神や救世主様による明るい未来は近い……………

神父視点解除

つかさ、薬や洗脳で自我が壊れるーの巻でした。

金文珠の効果で救世主の誕生を現在防いでいるようです。飲み込んだのもあって効果は長続きしてるようですね。

物凄くつかさ終了のお知らせな感じがしますが、勿論救済策は残っているのです。

この辺は選択肢があるかもですね。

…ふふふ…40分で書き終えたですよ…こつというのは何も考えなくて良いから早いなあ…(笑)

どつでもいいこと

暫くの間帰りが遅くなります。

一日更新が出来ない時もありますがご了承をなのです(涙)

今日のお昼はパスタでした。

あっさりパスタもミートソースも大好きですよ。

ナポリは、時々食べると美味しいですね。

皆さんはどんな味が好きですか？ あさりパスタとか色々ありますよね。

## 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

必死に追いかけるこなた、逃げるみゆきさんっ！ という感じですよ。

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：95票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：104票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：14票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：19票（???なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：15票（???なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：18票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります

（危険

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue87 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

戦闘開始なのですよー。

ちよつと色々やることがあるために、ぶつ切りになりましたがご容赦をなのですよー (涙)

ちなみに戦闘は始まったばかりです。ちよつと長い戦闘になるかも  
|  
|  
|

戦闘描写苦手なので、ここで思い切り練習なのですよー! (マテ)



Continue 87 〈複雑で単純な世界?〉

ヤタガラスに乗って急行する大樹達。

空を飛行している為、本来掛かる数分の一の時間で到着出来る。このままのスピードで行けば5分も掛からず到着出来そうだった。

(ヤタガラス、誰と誰が戦っているか見える?)

ペルソナは自分の心とも言える存在の為、心の中で念じればペルソナとの会話が可能になる。

正し、特殊な場合を除きペルソナと意志を通じ合わせる為にはそれなりにペルソナ使いとしての力量が必要な為、低レベルのペルソナ使いは普通に呼び出す程度しか出来ないのだが。

(感ジル波動八神聖ナ物ト中庸ナ物ヲ感ジルナ。恐ラクハ襲ツテイ  
ルノガめしあ教徒デ、襲ワレテイルノハくずのは達ダロウナ)

(分からない。何でメシアが態々一般のシエルターを襲う意味があるんだろう)

(ソコマデハ我ニモ分カラヌガ。何力意味ガアルノハ確カデアロウ  
ナ。ドウスル? 手前デ止マル方ガ安全ダガ。強襲シテ混乱ヲ誘ウ

手モアルゾ?)

(強襲か…流石に危険だと思っし無理かな)

(確力ニ賭ケニ近イガ、コノママダトしえるたー側ガ全滅シソウダゾ?)

ヤタガラスの視点では、圧倒的な数の天使やメシア教徒達が、シエルター側の相手を蹂躪しているのが見えた。

彼等も善戦しているが、一人特化している相手が居る上に数で負けている為にもう時間が無いのが分かる。

このままだとメシア側がシエルターに押し入るのも時間の問題だった。

(……………勝算は?)

(アルガ、コレハ汝ノチカラモ必要トナル。最低文珠ヲ消費スル事ニナルガ良イカ?)

(あのシエルターには高良さんの親や柊さん達が居るかもしれない…となれば遅くなるのは下策だね…頼めるかい?)

(我ノチカラハ、支援ノチカラ。汝サエ望メバ。アラユル敵ノカラ削ギ落トシテヤロウゾ)

ヤタガラスは命中率低下系の最上位、『マハ・スクンダ』を持っている。

基本確実に成功する低下魔法の中で一度に限界値まで下げる事の出来る強力な魔法だ。

スク・ンダ系は命中率を下げると魔法では記されているが、実際には全身を魔法で低下させて行動力を阻害させる魔法で実戦で急に使われると余程の達人で無い限り碌な行動が取れなくなる。

空より強襲し、行き成り低下魔法で行動を阻害されればかなり優位に立てるだろう。

そもそも大樹達は中堅所のレベルでしかない。メシア教徒達がどこまで強いかわからない上、通常に割り込んでしまうと第三者と思われるどちらからも攻撃される恐れがある。

強襲に関しても同様な事が言えるが、攻撃相手を限定している為、上手く行動すればシエルター側の人間と連携を取れる可能性があった。

「時間が無い、皆聞いて欲しい。これからそのまま空から強襲を掛けようと思う。敵から狙い撃ちにされる可能性もあるけどヤタガラスは上位のスク・ンダが使えるからその点は大丈夫だ」

「ふむむ…落下傘っ！ とかつ、あ…パラシュート無いや」

「相手に低下魔法を掛けると同時にヤタガラスで敵側に突撃を掛けるから、その間に飛び退いて欲しい。出来る？」

「ん、このスピードでしょ？ スク・カジヤがあればいけるね多分」

「スク・カジヤならアメリカにお任せなのですっ！」

不意打ちを掛けて、相手の行動の阻害と攻撃…相手の混乱を狙うのですね。でもその場合佐藤さんが危険では？

ヤタガラスは銃に非常に弱い為、撃たれてしまえば大樹にフィードバックが来る。

それを懸念する小竜姫だが、その点も抜かりは無い。

「文珠の【防】を使う、余程の攻撃じゃない限りは総て防げるはずだ。それに命中率を最大限に下げれるし、そうそう当たる事は無いよ」

『ソウダ。主ヲ信ジヨ。必ずヤ汝等ニ勝利ヲ約束シヨウ』

「分かりました…くれぐれも気をつけてくださいね」

「勿論、死にたくないからね。防御は全力で行くさ。相手の混乱を誘う事が出来たら、こなたと僕で仲魔を召喚。高良さんはシエルタ側側の護衛について欲しい」

「んじゃ。後は攻め込むだけだねー。召喚した後は前衛に回る？」

「いや、こなたは銃を持って牽制などをお願いするよ。大体の場合、

こついつ時は司令官が居そうだしね。相手がデビルサマナーと言つ可能性も捨てきれないし」

この言葉にハツとするみゆき。

今から戦つのは悪魔ではなく人間だと言つ事を再認識する。悪魔は今まで普通に殺せてきたが、果たして自分に人間を殺す事が出来るのかと今更ながら考えてしまう。

日本と言つ平和な世界で生きてきた為、殺人に対して強い禁忌感を持ってしまふのだ。

それはあなたも同様だった。だが彼女はそれをあえて考えずに戦つつもりでいる。

人間同士の戦いならば、わざと殺さずに瀕死程度までダメージを与えて、相手の行動を阻害する方法もある為、其方を選ぼうかとも考えていた。

それに対して大樹は、相手を殺す事に躊躇いは無い。

悪魔を今まで殺して来たのに、人間は殺せないなんて甘い考えは既に持っていなかった。

戦う以上は、勝つしかなく。殺すしなければ容赦無く殺すつもりでいる。殺人だ犯罪だと言っている場合では無いのだから。

(おい。聞こえてるか?)

(クー・フリーン? どうしたんだい?)

(この戦いで俺を使うのは良いんだがな。悪いがお前の制御力が足りてない所為で宝具が使えねえ。そこん所覚えて置けよ?)

(必殺技が…か。分かった教えてくれて助かるよ)

クー・フリーンの必殺技である、ゲイ・ボルグでの攻撃を期待していた為、多少不安になるが、知らずに使って不発になってしまえば危険所の話では無い。

それでも彼の持っているスキルはどれも強力な為、前面で使って行こうと作戦を練っていく。

今回の戦いは電撃作戦の様な物の為、必要なのはスピードと大火力である。

「よしっ! もう直ぐ到着する! アメリカ、皆準備を!」

おおっ!!

……

……

……

## シエルター前

幸か不幸か、クズノハのメンバーのほぼ総てが此処に終結していた為に、彼等は善戦出来ていた。

突如訪れた法衣姿の人間達。初めは逃げ遅れた人間か何かかと彼等は思っていたが、それは直ぐに否定される事になる。

法衣姿の男達が、一斉に腕にある何かを弄っていくと、数十体もの天使達が現れ自衛隊員を殺していった。

同じく警護をしていたクズノハのメンバーが、直ぐに仲間を呼び戦わなければ大惨事になっていただろう。

「くっ！ 弾幕を張れっ！ 天使は銃に弱いぞっ！」

「来るなっ！ 来るな来るな来るなあああっ！！！」

「こいつ錯乱してやがる！ 気絶させて後方へ！」

向かって来る天使達を銃弾や魔法などで倒していくのだが、それでも彼等は襲い掛かってくる。

既にクズノハのメンバーも数人が殺され、自衛隊員や自警団のメンバーも既に半分以上が殺されていた。

「くそおっ！ なんだよっ！ なんだよあの化け物っ！ 天使よりつええっ！ ぐえっ！？」

顔面に細長い剣が突き刺さり…そのまま同時に顔面がまるで水風船が破裂したような音を出しながら爆ぜた。

脳髓や血を撒き散らしていくその姿に恐れをなして逃げようとした男性も全身を串刺しにされて死亡する。

悲惨な死に方をした仲間を見て、恐怖を覚える自衛隊員だがそれでも尚、手を休める事無く銃弾を撒き散らす。

だが、その数は徐々に、徐々に減っていく。弾丸のように剣を投げつけていく一人の修道女の手によって。

「道を開けなさい異教徒共。私達はこの先に用があるのです」

「な、ならなんで普通に来ないんだっ！ お前達が攻撃してきたか



らっ………！？」

その先を彼が話す事は無かった。なぜなら既に首と胸が完全に分かつたれていた為だ。

それを見てシスター・アンナは汚いものを見るような目で吐き捨てる。

「世界を汚し悪意を撒き散らす事しか出来ない異教徒に安らぎも話し合いも何も必要ありません。貴方達はここで惨めに死んでいくのです。さあ、きりきり道を開けなさい」

「むっ、無茶苦茶だっこのシスターっ!？」

「くっ！メシア教の幹部かっ!？話が通じる所じゃない…っ！狂ってるっ!！」

行過ぎた信仰の為に、それを盲信するメシアの過激派が同じ異界に居るとは彼等も聞いていた。

穏健派ならともかく、過激派のメンバーは誰もが攻撃的で信徒以外の人間を邪悪な悪魔や外道としか考えていないと聞いている。

更に言えばこのシスターは信仰に狂っている節が見えた。話が通じないのは当然と言った所だろう。

恐らく自分の正義に酔いしれている為に自分がどれだけちぐはぐな

行動をしているのかも分かっていないのだ。

いつその事逃げてしまいたいが、この中には一般市民が今も恐怖に脅えながら避難している上、スポンサーである馬鹿も一緒に居る。

自分達が護らなければ、彼等に明日は無いと全力で戦い続けていく。

(ああ、こりゃ死んだな…死ぬ前にマダム銀子に告白したかったぜ)

クズノハのメンバーの一人が盛大に死亡フラグを脳内で吐いたその時…彼等にとつて助けの手が文字通り舞い降りてきた。

『……………ん？ んんっ!?!』

『遅イ!! 汝等全テ二重キ枷ヲツ! 『マハ・スクンダ』!!』

『て、敵っうぎゃあああああああつ!?!』

『なっ!?! 体が重くっ!?! つ!?!』

巨大な黒い物が上空から物凄いスピードで天使達に体当たりを仕掛けていく。

それに巻き込まれて消えていく天使達。シスター・アンナと数人のメシア教徒は逸早く攻撃に気づき回避に成功したが、全身が低下魔法によって阻害されていた。

「　　いいいいいいーっほおおおおおおお  
おっー!」

甲高い、それでいて子供っぽい声がクズノハのメンバー達の目の前から聞こえてくる。

其処には凶悪な銃を構えた、小さな少女　こなたが居た。

「レッツッ！　パーティーっ!」

『ぎゃっ!?!』

『あぐうっ!?!』

『ぎゃばっ!』

ダン、ダン、ダンと連続で響く轟音と共に殺されていく天使達。どちらとも何が起きたか分からず、完全に混乱していた。

『な、何者ですっ!?!　きゃあああああっ!?!』

混乱していた天使　プリンシパリティ　を小竜姫の剣の一太刀で真っ二つに切り裂くみゆき。

「…まずは一人、ですっ！」

良い太刀筋です。次はあちらにつ！

「はいっ！！ シェルターの皆さんっ！ 私達は味方ですっ！ どうか援護をお願いしますっ！」

大声を張り上げ、クズノハや自衛隊の人間に味方である事を知らせつつ、全員の前に立ち剣を構える。

その隣ではこなたが、COMPから仲魔を呼び出し天使達に向かわせていた。

「いよっし！ 皆召喚っ！ 敵は前の天使やメシア教徒だよっ！  
呐喊！ 呐喊！ 呐喊ってねっ！！！」

『行くわよっ！ マハ・ラギオンツ！！』

こなた達による、天使達の一掃が始まった

大樹側視点

アメリカに因る、スク・カジヤの効果で全身が身軽になった大樹達はヤタガラスの突進の瞬間に背から飛び降りる。

普通の人間ならば高速で走る車から飛び降りると言う自殺紛いの行動だが、既に30レベル近い戦士に成長し、更に強化魔法まで掛けた大樹達には簡単なスタントと変わらなかった。

（作戦は成功：危惧してた銃による攻撃は無しだったのは幸いだ。敵はやはりメシア教徒かな：目的は分からないけどまずは全滅させないと）

ヤタガラスが役目を終え消えていくと同時に大樹は次の一手を練りだす。

COMPを取り出し、ハーモナイザーと召喚プログラムを起動する。

「召喚！ キンキ、グクマツツ、パールヴァティ、オーカス、アリスッ！ パターンB！（ペルソナチェンジ・クー・フリーンセツト）来いっ、ペルソナアっ！！」

『はっ！ 早速出番かよっ！ 行くぜえっ！ 『空間殺法』！！』

一瞬の内に仲魔を召喚し、同時にペルソナをクー・フリーンにセツトし直して召喚する。

現世に呼び出されたクー・フリーンが槍を持ち縦横無尽に辺りを駆

け回る。まるで荒れ狂う暴風のように周りに居たメシア教徒や天使達を薙ぎ払っていく。

英雄である彼の手加減無しの一撃が、一瞬にしてエンジェル、アークエンジェルなどの天使を一撃で滅ぼした。

しかしデビルサマナーと思わしきメシア教徒 テンプルナイト は半数が一撃でほぼ全滅させられたが、直ぐに自分を律し体制を整えていく。

直ぐに新たな天使を召喚して攻撃させようとするが、目の前には完全に自分達より上位の悪魔が立ち並んでいる為、うかつに攻撃する事が出来ない様だ。

「っ…召喚できるだけって、感じか…時間が無いのにつ…！」

大樹も続けて召喚と行きたかったが、テンセンニャンニャンとは違い、レベルが通常以上で英雄であるクー・フリーンを呼び出すのはMPだけではなくごっそりと精神力も奪ってしまった為、直ぐに召喚する事が出来ず、隙を見せてしまう。

『我の一撃耐えられるかつ！ ガルダインっ…！』

「っ！ 卑怯者の異教徒がつ！ 死になさいっ…！」

『させるかあっ…！』

『かあああああああつー！』

そして、先程の攻撃を避けていたシスター・アンナがそんな隙を逃す筈がない。

流石に一瞬混乱しかけてしまったが、その程度で行動不能になるほど彼女は弱くはない。

キンキとグクマツツ、オーカスが駆け出してアンナに攻撃をしかけようとするが、それよりも彼女の攻撃の方が早かった。

マハ・スクンダによって命中率は最低に下げられているが、雨の様に投げつければ命中率など関係無く、まるで降り注ぐ雨の様に大樹達の上空に剣が降り注いでいく。

「しまっ！？（弾丸みたいに振り注いでるけど、剣である以上、相性は剣。避けきれないっ！）」

クー・フリーンの相性は剣： の物：xである。

銃や弓などの射撃攻撃に対しては万全の性能を持っているが、射撃の様に降り注ぐとは言え、剣である以上クー・フリーンではダメージは免れない。

バクヤにチェンジすれば攻撃は無効化できるが、時間的にそれをする暇も無く、これを避ける時間も無い。

「っ！？ 結界魔法ですか…？ 邪魔あつ！！」

キンキの豪腕から振り下ろされる斧を投剣を巧みに操り攻撃を受け流し、グクマツツの吐き出した猛毒のブレスはマハ・スクンダで行動が阻害されているのにも関わらず華麗に避ける。

それと同時にまるで弾丸の様に剣を投げつけてくるアンナ。

命中率が下がっている為、必中する事こそ無いものの、その剣の威力が辺りの壁を突き破るのを見て防御から回避に回る。

『うおっ！？ こいつ、本気で人間かつ！？』

『むう…まずは攻撃力を下げたほうがいいかもしれんわ。サマナー達は…うむ問題ないようじゃな。オーカスよ。後衛を任せたぞい？』

ガルダインを避け、キンキとグクマツツの攻撃も防ぎきったアンナを見て、思考パターンを変える仲魔達。

『ちっ！ 我の最大魔法を防ぎきるとは…癩だが防衛に入るぞっ！ サマナーよ無事かつ！？』

「なんとか間に合った…って所だね」



使わなかった【防】の文珠を発動させ、攻撃をやり過ごす事に成功した大樹達。

文珠の結界は問題なく起動しているが、感覚的に考えて後数十秒程度しか持たないだろうと認識する。

「さあ、反撃だ。フォルトウナはタル・ンダ！ アリスはメギドラ、パールヴァティは相手を魅了させるんだ！ アメリカはラク・カジヤで防御力を上げてくれっ！」

『吃驚したあ。流石大樹さんだねっ！ それじゃ行くよっ！』  
『メギドラッ』！！』

『くすくすくす。清楚なシスターを淫夢で汚すのが楽しいんですわあ。さあ、貴方はどのように鳴いてくれるのかしらあ、良かったらサマナー様のペットに…ねえ』  
『淫欲の夢』！』

『いきますっ！ タル・ンダ！』

「ラク・カジャなのですよっ！」

巨大な爆発がアンナに襲い掛かった

..... T o B e C o n t i n u e d

ヤタさんかつこいいい！ な感じでした。

奇襲も成功し現在は相手も混乱している為優勢に見えますが、此処から先ですねえ。

これがシスター・アンナじゃなかったら文珠を使う事もなく蹂躪できたかもですね。

しかし、戦闘描写苦手だなあ…上手くかけてるか疑問なのですよ(涙

どうでもいいこと

今日は暑かったのですよ…珍しい事もあるものだ！。

こういう時は………アイスの出番ですねっ！

私は60円のバニラアイスが好きです！。あの安物な感じがする味が好きだったり(笑

後〱、偶に高級なのを買いますね〱。こう、ホットな紅茶を用意してほんのり…

幸せなのですよ。まあ、北海道は直ぐ寒くなるのであまりしないですが(汗

皆さんはどんなアイスが好きですかー？

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

必死に追いかけるこなた、逃げるみゆきさんっ！ と言っ感じですよ。

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：104票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：120票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：14票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：19票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：16票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：19票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue88 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

という訳で戦闘その2なのですよー。視点を色々変えて書いていきますねー

今日はみゆきさん視点なのです。

ちょっと短いですがどうぞー…やあ、戦闘描写は苦手だ(涙

今回はちょっとためしに】 技名【とやってみました。少しは格  
好いいかなあ？

Continue88 〈複雑で単純な世界?〉

高良みゆき視点

明確な意思を持ち、相手がなんであるかを理解して、確実に倒す…  
いえ、殺す。

私には出来るのでしょうか。

目の前にはプリンシパリティ3体とその直ぐ後ろにメシア教徒のデビルサマナーが一人。

私の能力で、相手の大体の力量や能力を一瞬で理解する事が出来る。  
COMPのアナライズの強化版と言った所でしょうか。

デビルサマナーのレベルは15、プリンシパリティは14、今の私の力があれば物の数秒で倒せる相手。

『愚かな人間共がっ！ これは神の意思なのですっ！』

神の意思…神の意思ですか。

神の意思とは一体何を持って示されるのでしょうか。そして何故それを受け入れなければならぬのでしょうか？

もし、聖書の通りに神様が人間を作ったとして…確かにそれならば尊敬できるかもしれません。

ですが…神は果たして、愛をもって人を作ったのでしょうか？ 神様が万能ならば、全知全能ならば、人間は知恵の実を食べる事無く神に従順な下僕のままでしたでしょうか。

神が万能ならば、天使が墮天し、人間を陥れる事もさせなかったでしょう。

神が愛を持ち全能ならば、何故異教徒と言っただけで人を殺すのでしょうか？ 罪を犯したからでしょうか？ ならその罪を何故その時に罰しなかったのでしょうか？

ダブル・インパクト！！

『ぎええええええっ！？』

私は一瞬で天使まで駆け寄り、渾身の一撃で天使を一刀両断する。

反応する事も出来なかったプリンシパリティの胴体を二連続で切り裂き、消滅させました。

「おおおおっ！？ プリンシパリティ様がっ！？ おのれっ！ 異教徒共があっ！」

吠えるメシア教徒の方。

私は………人を殺す事が出来るのでしょうか？

多分、私は怖いでしょうね。人を殺すのと悪魔を殺すのは違う……と頭のどこかで私は考えています。

人は、人を殺す事に恐怖を感じます。なぜならそれは人間の生存本能が刺激されるからだそうです。人として存在する以上お互い殺し合えば種として絶滅してしまふ。

それを防ぐ為に、人間は人間の血を恐れたり人を殺す事に抵抗感を感じるのです。

でも……それは他の種には通用しません。

子供が昆虫を潰した、煩く集る八工を殺した、蚊取り線香を用意して蚊を殺した。これも究極的に言えば殺害に他なりません。

私の……いえ、恐らく私達の中で悪魔はこれらの認識になっ  
てしまっているのでしょうかね。

邪魔だから、迷惑だから殺す……その究極が今の悪魔を躊躇いなく殺している状態を示しています。

悪魔は人を襲うから、人を殺すから、殺してもいい……人間らしい傲慢さだと思います。

ならば？　ならば目の前にいるデビルサマナーの方はどうなのでしょう？

彼等は異教徒と言っただけで、クズノハの方や自衛隊の方を殺しました。それを何故禁忌だと思っのでしょうか…私は。

みゆきさん…？

『隙だらけですっ！　これで死になさいっ！！』

「……………っふっ！！」

月影！！

天使が繰り出してきた攻撃を剣で円を描くように受け流し、その勢いを保ったまま力任せに叩き切る。

覚醒によって強化された私の攻撃力はアスファルトの道路に天使を叩き付けて小さなクレーターを作り上げた。

「…私は…何を恐れているのでしょうか…」

「ば…ばかな…？　天使様が何故こんなにあっさり…！？　弱点である銃で撃たれた訳ですらないのに…」

「…っ…宜しいでしょうか？」



「…!？」

私は何をしているのでしょうか。何故戦っている…殺し合っている人に悠長に話しかけているのでしょうか。

そんな事をしている暇があれば、天使を倒し、彼を気絶させて移動すれば早いのに。私は自分で自分の行動を止められません。

ちらりと後ろを向く。其処には何人もの怪我人と、死亡した人達。リカームですらこの状態では回復させる事は出来ないらしいです。

つまり、彼等の生はここで潰えてしまった。実行したのは天使達でも、命じたのはデビルサマナーの方。

分かっています、彼等にとって異教徒は人ですらなく、邪悪な生き物だと言う事を。

これが、命を掛けた戦いだと言う事も。

だから私は……………納得したい。

「何故、貴方達はここまで人を無慈悲に殺せるのですか？ メシア教…つまりキリスト教の分家ですよ、一神教を信じる神の子が何故此処まで出来るのですか？」

みゆきさんっ!?!? 今はそう言う事を話している暇ではっ!?!?

「答えてください」

「……………人だと…？ 馬鹿にするのもいい加減にして欲しいものだっ！ お前達異教徒は神にすら見放された悪魔に近い存在っ！ 我々が行っている事は救済であるっ！」

「その為には、人も殺せると…？ 彼等もまた生きて、明日を夢見ていたというのに？」

「明日だと…？ 汚らわしいっ！ この世界は救世主様の導きの下、神の愛で溢れた世界で、我々信徒が生き残る世界であるっ！ 貴様等の様な外道に明日など無いっ！」

人は……………ここまで簡単に他人を貶められるのですね。

私は…

「分かりました…貴方達の答えが……………」

私は……………

私は……………

何時か聞いた言葉がある。

【お前等は何故我々を其処まで無慈悲に殺せるのだ？ 我々と生きているのだぞ？】

何時でしたでしょうか…私が戦えずに、皆さんをサポートしていた時に遠くから聞いた言葉。

【悪魔をここまで無慈悲に殺せるのに…人間には優しいのだな。貴様等の方が悪魔より余程悪魔ではないかっ！】

そうかもしれませんがね。人は、ここまで簡単に悪意で人を塗り潰してしまう。貶めてしまう。

「そして…私の答えも」

遅かれ早かれ、私は決めていたでしょう。

この先を戦う時に、理解していたはずなのにこの土壇場で躊躇してしまいました。これがあのケルベロスが相手ならば直ぐに殺されていたでしょうね。

でも…必要でした。私には…

「もう、迷いませんっ…高良みゆき…行きますっ…!!」

小竜姫の剣を居合いの構えに整え、一瞬で走り抜くっ！

自分でも最高速を出せたと自信を持って言えるほどのスピードで私は駆け抜けた。

「……………奥義…一閃ッ！！」

後ろで血飛沫が上がる音が聞こえる。

今はこれ以上振り向いている暇はありません。泉さんや佐藤さん、仲魔の方達が戦っているというのにこれ以上迷惑を掛けるわけには行きませんから。

「死にたくなければ引いてください。それでも尚掛かってくるのでしたら。容赦は致しませんっ！！」

震えは無い。今まで悪魔を殺して来て、人間を殺したからと言って吐き気や震えなど感じる脆弱さは既にありませんから。

「くっ！ よくも同胞をつ！ 滅びよっ！ マハ・ラギオンッ！」

魔法使いも居たのですか…まずいですね。現在装備している装備は

シルバー・メール。火炎は通常以上に通してしまっ…ならば。

「これですっ！ 弾き飛ばせデスバウンドッ！！」

襲い掛かってくる火炎にデスバウンドで作り上げた衝撃破を叩き込む。

一瞬衝撃と火炎がぶつかり合っている内に、大きく右に駆け寄り銃を構え狙いをつけます。

そのままM242ミニミニ 軽機関銃 で近くに居た天使を撃ち抜く。銃弾に弱い天使ですから、頭部などを狙わなくてもこれだけ弾丸を浴びせれば容易く倒すことができます。

私の役目は皆さんの防衛。態々敵総てを相手にする必要はありません。

これを期に、精々掻き回しましょうか。

「くっ！？ 同胞よっ！ あの小娘を集中的に狙うんだっ！！」

「分かって……………」

悪魔を召喚しようとしていたメシア教徒の顔が爆ぜました…流石に精神的に来る物がありますね。

ふと横を見ると、少し遠くで泉さんが銃を構えているのが見えました。となると、今のは泉さんの支援…そうですか、泉さんも覚悟を決めていたのですね。

ならば、私も頑張らなくてははいけませんねっ！

「小竜姫っ、私に力を貸してくださいっ！」

分かりました…っ！

体中が凄く軽くなって行きます。小竜姫は取り込んだマグネタイトを装備者にある程度付与する事が出来るそうです。

それにより全身が凄く活性化し、普段以上の動きが出来る様になります。恐らくこれは佐藤さん達の使うハーモナイザーに似た感じなのかもしれませんね。

「さて…薙ぎ払いますっ！ タル・カジャカードっ！ はああああああっ…！」

デスバウンド…！！

事前に佐藤さんから強化系や攻撃系、回復系の魔法カードを頂いてましたので、早速タル・カジャカードを使い全力攻撃を仕掛けていきます。

小竜姫に因る強化と、タル・カジャの強化で数段階に攻撃力が底上げされた衝撃破が容赦なく周りに居た天使ごとメシア教徒に襲い掛かりました。

抵抗する事も出来ずに衝撃破に巻き込まれて死んでいく天使と人間達。

既に迷いなどなく、今あるのは敵を倒し皆さんを護る事のみです。

「これ以上、誰一人として殺させはしません。此処から先に通りたければ、まず私達を倒してからにしてもらいましょっ！！」

「くそおおっ！ 相手は小娘二人と悪魔だけですっ！ 天使様と共同し確実に殺しましょっ！」

『神の子を傷つける邪悪な使徒よっ！ これ以上の暴虐は許す訳にはいきませんっ！』

「それは此方のセリフです。正義や悪など…この場では関係ありません。貴方達がこれ以上何の罪も無い彼等を殺すというのでしたら…私が貴方達を殺しますっ！！」

今は前を向いて、戦います ！！

自分を律し、自分の意思を持ち、自分の道を見つけた……………  
高良みゆきのアライメントがニュートラル固定になった!!  
高良みゆきはマハ・ラギオン、三日月斬りをラーニング!!  
強い魂が新しき魂を宿す! オニを解除し『魔神トート』を宿し  
た!!

暴れまくりを継承。トートを宿した事でタル・カジャ? タル・  
ンダ? マカラカーンが使える様になった!!  
覚醒が近づいている……………



Continue 88 〱 複雑で単純な世界？？〱 (後書き)

悪魔を殺して平気なの？ 彼女もうすうす感じていたようです。日本で生きていると、人を殺す事に不快感や禁忌を覚えても、虫とかを殺しても一切の罪悪感を覚える人はあまりいないですよね。多分、人間にとって悪魔を殺すと言う事は。虫や家畜を殺すとイコールなのかもしれません。だから、人間を殺す事を恐れても、悪魔を殺す事は恐れない。と、そんな感じの事をみゆきさんは考えてましたー。

みゆきさん初殺人…まあ、容赦ないくらいがメガテンですねー(マテ

どうでもいいこと

ふふふ………ふふふふふ……今日は車に轢かれかけました…怖かったう…(涙

えぐえぐ、スピード違反+わき見運転はしちゃいけないのですよー！(涙

もう少しで物理的に逝く所でした。となるとこのお話はさよならーに(おい

皆さんも安全には十分注意してくださいねー。まあ、今回は私じゃなくて相手が完全に悪かったです。

というか謝りもせずに逃げていきました、世の中は切ないですねえ(ほろ

いいもん、今日はあつかったからそうめん食べて忘れるもんっ！

## 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：112票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：134票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：14票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：19票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：17票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：21票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険

### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue 89 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

戦闘その3) 今度はごなたん視点です。

こっちはみゆきさん程ふかーく考えてないかな…? どうかかな…?

それにしても戦闘描写…こっ、上手くならないかなあ… (涙)

Continue 89 〈複雑で単純な世界?〉

泉こなた視点

『うつしやあつ！　まずは星一つ！！』

『喧シイゾ。モウ少シ静カニ戦工ナイノカ…？　コオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！』

「かつ、体がつ！？　誰か助けつ！？」

ユルングのアイスプレスがメシア教徒…長つたらしいからメシアンでいいやメシアンで、そのメシアンを完全に氷付けにする。

ああ、あれは死んだかなあ…つてディースがマハ・ガルーラで粉々に砕いちゃった…うわっ、グロ…完全に凍り付いてる分、血とかドバドバ出ないのが幸いって所かな。

死んだ…そか、殺しちゃったんだよねえ。私が仲魔に命令して倒し…いんや殺してる。

恐怖とか、罪悪感が結構来るけど予想してた程じゃないかな。うん、これなら私も人を殺せる。

良くさ、人を殺す事に何とも思わなくなったら、それは人間じゃない、化け物だって言うよね、でもさ…こんな世界になってこんな場

所で戦わずに居たら死ぬのはこっちだよ。

変な道徳心を持って不殺を心掛けても、最後にはやっぱり誰かに殺されちゃうんだろうな。

「シルキー、右っ！」

『了解っ！ 『マハ・ブフーラッ』！！』

私の指令を受けて見向きもしないまま右方向にマハ・ブフーラを唱えるシルキー。

んでもって其処には、銃を構えたメシアンが居る訳で。

「ああああっ！？ うああああああっ！？」

「フロストちゃん。打ん殴ってっ！！」

『任せるホっ！ 『成仏の拳』だホーツ！』

ガチガチに凍りついたメシアンをじゃあくフロストが叩き割ってまた一人死ぬ。

これは現実、どうしようもない現実。指令してるのは私で、殺しているのは人間。

でも……だから何さ？ 悪魔を散々殺しておいて今更人間は殺せませーんなんてふざけた事は言わないよ。

それでなくても人そっくりの天使とか散々殺してきてさ、今更『人は殺せないよ』とか甘っちょろい事なんて言わないし、言えない。

だってそれは私に付いて来てくれてる仲魔に対する侮辱だから。

それに実は結構前から覚悟してたしね。あの変態……このふざけた異界を作り上げたあの馬鹿を私が殺すって決めてたから。

まあね……人間の道徳から外れてるってのは理解してるよ。『汝人參を愛せよ』だって？ あれ？ ナスビ？ あ、隣人か。

それを謳ってるメシアンが今やってる事を見るとさ、道徳ってなんぞや？ になるよねえ。

「そこっ！！ 殺ったよっ！！」

スナイパーライフルでオリアスの後ろから攻撃しようとしたアークエンジエルの脳天を撃ち抜く。

本来こんな風に直ぐに取り回せない武器だけど、色々戦ってきたお陰か、直ぐに集中して撃てる様になってた。うーん、女子高生……あ、卒業したし元、か。

そんな子が覚えるような特技じゃないよねえ。すっごく今更だけど。

『助かったぜサマナーっ！ 愛してるう』

「あ、愛はいらないよ。その辺大樹君から貰うから」

『ひつで…。ちくしょー！ 俺のヒロインアメリカちゃんに慰めてもらおう…。だからてめえらさっさと死になあっ！ 『ジオ・ダイン』』

局地的に降り注ぐ轟雷が、周りに居た天使ごとメシアンを焼き焦がしてく。

耐え切れる訳も無く、皆一撃で殺しちゃったね。

なら…私もさっさと卒業しようか。後でガタガタ脅えないようにね…多分、全部終わった後に泣くかも知れないし、吐くかも知れない。

その時は大樹君に甘えちゃおうかな…なんてね。

「はあ。絶対こんな元女子高生いないよね…」

狙いをつけるはデビルサマナー系のメシアン。まずは悪魔量産機を潰すのが定石だよね…って。

奥義……一閃ッ！！

「みゆき……さん……？」

私が見たのは、剣を振り切って走り抜けたみゆきさんの姿。

その後ろではお腹辺りから真つ二つに切られた幾人ものメシアンと天使の死体。

特に人間の方の死体からは血が噴水の様になぶしやああって音を立ててる。

「嘘……」

みゆきさんが人を殺した？ ごめん私には予想も出来なかったよ。

だって、みゆきさんは……誰よりも優しくて、誰よりも暖かくて、そして誰よりも弱かったから。

先の方で口上を吐くみゆきさんの姿からは、脅えも後悔した様子も感じなかった。敵が居たから殺した、淡々とその事実が目の前で流れてる。

私は……みゆきさんは何だかんだ言って結局人は殺せないんじゃないかなって思ってた。

最後には気絶させれば……とか言いそうだったもん。優しい……でも甘い、それが私が今まで感じてたみゆきさん像。



嫌ってる訳じゃないよ？ みゆきさんも大事な友達だもん。大樹君の事があって少しギクシャクしてるかもしれないけど、かがみやつかさと並んで大事な…大事な友人。

だから、みゆきさんの事は結構知ってるつもりだった。私が知ってるみゆきさんは優しくして聖人君子みたいで、でも怒るとちょっと怖くて、基本ほわほわな人。

…：覚悟、決めちゃったんだろうな…私と同じで。みゆきさんもただ甘いだけの人じゃなかったって事か。ごめんねみゆきさん、私みゆきさんの事信じてなかったかもしれない。

「…！？」

みゆきさん向かって降り注ぐ火炎魔法、それをみゆきさんは持った剣で繰り出した衝撃破で相殺する。ぱねえ…みゆきさん何処の戦国キャラですか…

つて！？ 狙われてるっ！ あのままじゃ間に合わない。私は直ぐに銃を構え狙いをつける。

「んじゃ…私もさくつと覚悟決めちゃおうかつ！」

至高の魔弾コピィー…！

凄まじい唸りを上げて吐き出された弾丸が、寸分変わらずメシアンの頭部に命中し爆発する。

人間の頭がまるでスイカ…いや、水風船かな？それが破裂した感じでパアンと飛び散った。うおう。やりすぎたかな、夢に出そう。

死んだメシアンを見てこっちを振り向くみゆきさん。うん、それじやとりあえずサムズアップでもしておこっか。

流石に返してはくれなかったけど、くすっといつもの笑顔で笑ってくれたみゆきさんを見てすこーし、ささくれそうだった心が落ち着いたね。

「くそおおおつ！相手は小娘二人と悪魔だけですつ！天使様と共同し確実に殺しましょうっ！」

おお、なんか叫んでるよメシアンが。

とうるかさ、完全に相性とかレベルとかで負けるのにどうして撤退を考えないのかなあ？そこん所、やっぱり狂信者だから盲目的なのかねえ。

それじゃ、大樹君の手助けをする為にちやちやっとな片付けますかっ！

《こなた…大丈夫？》

(おおっ！？ いきなりお母さんの声がつ！ 最近ずーっと黙ったままだったから結構寂しかったんですが？)

いざ呐喊~~~~とかやりかけた瞬間にお母さんからメールが届き…  
じゃないや、声が聞こえてきた。

そういえばそろそろ一週間近く経ってるのかあ、一度使ったらクルタイム一週間とか長すぎるよね、MMOとかだと暴動来るスキルだと思ふ。

(心配してくれてありがと。でも大丈夫だよ、まあ…お母さんからしたら娘があんなに人殺して何も考えない筈ないよね)

《……そうね。本当は貴方にも彼女達にもこう言う事はさせたくなかったわ。日本は平和で、貴方達は普通に大学にいつて、結婚して…》

(でも、メシアンがその平和をぶっ壊した。あの馬鹿がこの町を地獄に変えた。平和だった日本はもしかしたら二度と来ないかもしれない…かあ)

《貴方に最後の覚悟をさせてしまったわね。あなた、何があってもお母さんとそう君…お父さんもあなたを護るからね？ 肉体だけじゃなくて心も…》

(うん…嬉しいよお母さん。なんかさ、親子の会話なのに殺伐としててあれだけど…でもすっごく嬉しい)

心がさつきよりずっと軽くなったのが分かる。

只の慰めだったのは分かっているけど、それでもお母さんがそう言うてくれるだけでここまでテンションが上がるなんて私ってやっぱり単純なのかなあ。

『サマナー…大丈夫なの？』

「ん？ へーきへーき。心配してくれてありがとねフェニ子」

『戦闘中の時位それやめなさいよ…ま、人を殺してモチベーション下がってたら大変だったけど…問題無いのね？』

「まね。さくつと倒して大樹君のヘルプに行こうかつ！ 全員、メシアンのサマナーを集中攻撃！ 後ろは私に任せておいてっ！」

『オオツ！ 行クゾ！ 皆ノ者ツ！』

『はっはっ！ 良い女は人間も悪魔も関係なく強いなっ！ いくぜオラアっ！』

私の号令の下、突撃を掛ける皆。

オリアスの剣が逃げようとしたメシアンの一人を横一文字に切り裂き、ユルングの爪が相手のお腹を抉り取る。

『お、おのれええええつ！』

プリンシパリテイの一体が、殺されたメシアンの敵討ちとばかりにユルングに襲い掛かるけど、甘いね。

『はっ！ 隙だらけよっ！ 『アギダイン』！！』

『しまっ！？ ああああああああああああああああああ  
っ！？ あづ……い………』

フエニ子ちゃんのアギダインが骨も残さず、一撃で焼き尽くす……あれ？ 天使に骨とかあるのかな？ いやまあ、タコじゃあるまいしあるかな。

今更この程度の相手に苦戦する事はないからね、皆が攻撃する度に確実に敵はその数を減らしていく。

私と離れた所ではみゆきさんも一人無双してる……いやいや。幾ら相手が弱いといってもあれは無いんじゃないかな？

メシアンや敵が、その辺にいる雑魚モブの様な感じでこう、面白いくらい吹き飛ばされたりバラバラにされてるし……うん。絶対正面から戦えないねみゆきさんとは、怖すぎ。

「死っ、ねええええ異教徒がああああっ！」

「んー、だが甘い、ベリーベリーすいーと甘いねっ！」

正直叫ぶ前に黙って行動した方が良いんじゃないの？ って位声を張り上げて襲い掛かってくる戦士系のメシアン。

そんな隙だらけな感じだと、私に近づく事も出来ないよ。

「言つとくけど。私はみゆきさんより優しくないよー？」

スナイパーライフルから、ハンドガンに持ち構えて連続で発砲した。タン、タン、タン、タンと4連続で両手両脚を確実に撃ち抜く。なんで一撃で殺さないでこういう真似をするかというところ…

「あああああっ！？ うあああああああっ！？」

「同胞よっ！？ 今行くぞっ！？」

『ま、待ちなさいっ！！』

「はいドーンっ！ マハ・ジオンガカード！！」

助けに集まったメシアンと天使達が範囲内に入ったと言う事で、魔法カードを使う私。うん、限りなく外道だと思う…でもこれも作戦作戦っ

「ふっふっふ。君達がいけないのだよ。その甘さが命取りだねっ！  
ほりゃもういつちよっ！ マハ・ラギオンカード!!」

「あああああああああああああつ!?!」

《そう君…こなたに一体どんな教育していたのかしら…》

残りは、メシアンが後10人前後で、その内サマナーっぽいのが3  
〜4人。天使が20〜30体かな。

さつきからみゆきさんの方で、援護っぽい事してくれてる自衛隊員  
やクスノハっぽい人達も居るし、あと少しかな。

「よし！ ラストスパート！」

そう叫んで私が両手に銃を構えたその時

うぐっ！ くはっ…!?!?

「っ!?! 大樹君っ!?!」

右手と左足を剣で貫かれて吹き飛ばされた大樹君が見えた。

泉こなた視点解除

泉こなたの性格がライトからノーマルに変更された！

泉こなたのアイテムがニュートラルからカオスに変更された

！



Continue 89 〱複雑で単純な世界?〱〱 (後書き)

こなたの方は結構大樹君寄りのドライさんでした。

それでも多少なりとは罪悪感があったみたいですけど、それをちゃんと乗り越えていますねー。

漸く登場できたかなたさん、でも使うと大変なので声だけです。切ないなあ

そしてやはりというか何というか、みゆきさんやこなたが無双してる中で一人大ダメージを受けている佐藤君。 うん…頑張れ(ほろろ

どうでもいいこと

明日〱は〱お給料日〱〱なのですよっ!(くるくるターンっ!!) という訳で…明日はケーキを買うのですケーキッ! ふふふ…至福の一時なのですよー。

モンブラン買おうかなあ…ショートとチーズケーキは勿論で… あかん…太る…助けてっ!?(でも買うのです

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：118票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：146票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：21票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：18票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：23票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue90 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

何だかんだで90話到達なのですよー…あれー? メイン小説抜かれそうだ(笑)

気づけばPVが170万 ユニークが20万 お気に入りが1100件…おお…何だか凄い事になってます。

こんなトホホなお話なのに、楽しんで貰えてる様で嬉しいですよー(涙)

苦手な戦闘回その3なのですよー。

佐藤君達VSシスター・アンナ。これからどうなるかーですね。

楽しんでもらえたら嬉しいですよー。

ちょこつと重要なお知らせ。

いつも沢山のアンケートありがとうございます。

そこでーなのですが、惜しくも敗れ去ったキャラが居ますよね、100票とか獲得してそう言うキャラとかですが。

折角のアンケートなので、信頼度が一切変化しないサブイベントを2〜3位に

組み込もうかなーとか思ってます(書くのは大変)

サブコミュなので、信頼度は増えませんが佐藤君の隠しパラであるコミュニティーは増えるかもしれないですねー(こっちは本編に余り関わらないですが)

まだ予定段階なので、皆さんの感想などを下にして実行するかしないか考えるのですよー。

#### 主な予定

2〜3位、且つ投票数が50〜100を超えているキャラクター

一切の信頼度上昇などは無く、単純にサブイベント。

もし、アレ系なキャラなら自分のHPにこっそりと(マテ

手と足の激痛に意識が途絶えそうになりながらも、剣を引き抜き投げ捨てる。

途端に溢れ出る血を回復魔法のカードで無理やり回復させる大樹。

(油断はしていなかった…それでもそうやすやすと勝たせてくれる相手じゃ、ないか)

回復魔法で治ったとはいえ、剣で貫かれた部分は今も尚ズキズキと痛みを発している。

それに思考が邪魔されるのを敵を倒すと言つ意思で無理やり捻じ曲げ、立ち上がる。

(ペルソナチェンジ・バクヤ!)

剣の相性と物の相性を無効にする、バクヤを降ろし前を見つめる。これで相手の攻撃は物理貫通でもない限りは無効化できる。

攻撃に回すには多少心許ないペルソナだが、それでも色々使いよう

はある。

要は自分は回復やサポートに徹すれば良いのだから。

『大樹さんっ!? つ回復魔法をつ!』

「既に回復してるからアリスは攻撃を! 相手は人間、其処までの耐久力はないはずだ! 全力で殺す!」

『はっ! 良い心構えだぜっ!』

メギドラで発生した煙が消えると、其処にはほぼ無傷のシスター・アナナが立っていた。

先程のメギドラは、衝撃に抵抗せず吹き飛ばされることによって軽減していたのだ。追撃から離れる為にも好都合であった。

だが、あの威力はまともに喰らえば自分でも致命傷は避けられないとアリスを警戒する。

前に立っている悪魔2体：キンキとグクマツもこの辺りでは戦う事すらない強力な悪魔な為、勝てない敵では無いのだがかなり状況は悪かった。

更に言えばマハ・スクンダの魔法で身体能力が下げられているのが痛い。回復するまで純粋な命中率はとも下がっているのだから。

「有象無象が……邪悪な悪魔と異教徒が私に勝つつもりでいるのですか？」

「勝つ…？ 何を言ってるんだい？」

「…？」

大樹が痛みを堪えて、それでも尚不思議そうに言い返す。

それに対して不思議な顔をする彼女、どうやら思い違いをしているらしかった。

「勝つと言うのは戦って勝つ…って事だね。僕達はしてるのは？ まあ、油断してくれているのは助けるけど…僕達は君に勝ちにきたんじゃない」

殺しに来たんだよ

言うが早いかフォルトウナを構えて発砲する大樹。

相手が確実に強者である以上、これは勝負や何でも無く、殺し合いだと自分の頭の中で状況を切り替える。

このような強い思い込みは、人間にとってデメリットでもありメリットでもある。

勝てば良いのではなく、勝たないと、殺さないと此方が殺されるとなれば、人間は我武者羅に力を振るえる様になる。

大樹は言葉と頭で、人間を殺す事に対する恐怖などを無理やり押さえつけ、殺す事に全力を傾けたのだ。

相手に『勝つ』のと『殺す』のとは、戦いのテンションも変わって来る。

「フォルトウナツ！」

『参ります…至高の魔弾っ！！』

大樹のMPを使い発射される凶悪な一撃がアンナ向かって襲い掛かる。

「っ！？ …………… 成程、かなりの場数を踏んでいるようですね。（まずいかもしれませんが…数が多し。同胞は既に多くが殺されてますし）」

化け物染みた回避力で魔弾を回避するアンナだが、この状況を改めて考えて自分達の不利を悟る。

数で勝っていた筈の戦況が、たった数人によってほぼ覆されてしまっていた。それも年端もいかないうような少年少女達にだ。



それが、追い風となりメシア教徒達の士気はがた落ちし、シエルタ  
ー側の人間の士気は凄まじく高まっている。

(…この中に…この中に…つかさ様のご家族が居るのにつ！？も  
しつかさ様がメシアだとばれてしまえば、殺されてしまう。異教徒  
はメシアを信じはしないでしょうから…そうなってしまったら。つ  
かさ様が悲しむ、例え意志を無くされてしまわれたとしても…その  
想いだけは護らなくてはっ！)

自分には、家族は居ない。

アンナにとって、家族とは同じメシア教徒達だけであり、両親は既  
に居ないと聞かされている。凄まじい力を持っているとして棄てら  
れたと聞かされている。

だから愛されているつかさが羨ましくて、そして憧れたのだ。

この悲惨な世界を救うメシアを産む聖母、その聖母が何の憂いも無  
くメシアを産む為に、幸せな家族が引き裂かれないうようにと彼女は  
動いた。

例えそれが、誘導された事に因るものだとしても、アンナにとって  
つかさの家族を連れ帰り、彼女の笑顔を見て、憂いを断たせるには  
必要な行動なのだ。

「どけえっ！ 貴様等異教徒にこの先の未来を生きる価値などあり  
ませんっ！ はあああああっ！」

刹那五月雨撃ちっ!!

雨の様な剣群がキンキとグクマツツに襲い掛かる。

互いに斧や放電でやり過ぎしていくが、それでも浅くはない傷を負ってしまっ。

『ぐっつ!?! つあああっ! この程度じゃ今更死ねねえんだよっ! おらあああっ!』

『ヒョーっ!! ケルベロスと比べるのもアレじゃがのう! けええええええっ!!』

『くすつ だからこそ私が居るのですわよお?』  
『メ・ディアラ  
ハン』

体中を剣で切り裂かれながらも、後衛で待機する大樹達には攻撃を来させないキンキ達。

いつも強者との戦いでは大抵初めに殺されている為、前衛として役に立っていないのではないかと考えてしまう彼女。

それでも不器用な彼女は前に立ち塞がり盾と剣になるしかない。

総てを防いだ瞬間に全身に活力が漲ってくる。

メ・ディアラハンによって再び回復した彼女達は再び前に立ち塞がった。

『そんじゃ、今度はこっちの番っ！ 大樹さんに怪我させた以上…許しはしないよ？ それじゃ…』死んでくれる』？』

「……………っ！？ きゃあああああっ！？」

自らを死に誘う凶悪な呪いが、彼女を締め付ける。

ぶるぶると震え自分の首を断とうとする右手を必死に押さえつけ抵抗する彼女だが、其処に致命的な隙が出来る。

「そこなのですっ！ 恐怖に脅えろですよ！ 『ダムドロー』！！」

「しまっ…あああああああああああっ！？」

メギド系と対を為す暗黒系万能魔法が容赦無くアンナに叩き込まれる。

呪いに耐えていた彼女が咄嗟に動く事など出来ず、メギドラと同威力に匹敵する闇の爆発が叩き付けられた。

ゴムマリの様に地面に跳ね飛ばされ転がっていくアンナに大樹は一瞬の躊躇さえ見せずに次の一手を繰り出す。

「アメリカはラク・カジャ！ 全員攻撃態勢のまま維持！」

「はいなのですよっ！ 『ラク・カジャ』！！」

先程もこの状態から攻撃を受けた為、追撃よりまず準備を整える事にした。

大樹もスク・カジャカードを使い準備を整えていく。

全員の防御力と命中率が上がった所で、改めて相手を見る大樹達。

（流石に直撃だったけど、相手は人間だし何か手があるはずだ）

（だろうな、で？ どうすんだ？）

心の奥からクー・フリーンの声が聞こえる、激しい戦いを見ている事しか出来ない為、自分も戦いたいのだろう。

（クー・フリーンは今は呼べないね。流石に消費が激しすぎる。ゲイ・ボルグが使えるならともかくダメージを与えるならまだ他に使えるからね）

（ソレヨリモ、ソロソロ『マハ・スクンダ』ガ解除サレルゾ？ 生キテイルナラバ此処カラガ本番ダロウナ）

油断無く相手を見据えるが今の所ピクリとも動かないが倒せたのだろっかと考える。

「アリス、メギドラを生きているならあの行動は此方の油断を誘うフェイクかもしれない」

『うんっ！ 『メギドラ』！』

再び放たれる真白い極光。

生きていれば避けるだろうし、死んでいれば木っ端微塵になるだけだ。

捕まえて情報を奪う手もあるのだが、これらの狂信者は捕まえた所で情報を口にしたりはしないだろうから最悪でも強敵は殺しておくなくてはならない。

「……………っ！ はあああっ！！」

『やはりって所だな。アリスとアメリカの魔法を受けて生きてるたあ、人間とは思えねえな』

あわや命中するかと思ったその時、まるで虫が跳ね飛んだかのようなスピードで跳躍しメギドラの直撃を避けたアンナ。

それでもダメージは深い様で、全身が赤く濡れているのが見えた。斧を構えて前に立ちはだかるキンキが、賞賛の声を浴びせる。

「まさかこのクラスのデビルサマナーが居るとは…驚きましたね（個人個人は私一人でも倒せますが、連携が面倒だ…まるでレイ・レイホウと戦っている感じですね）」

隙のほぼ見えない連続攻撃や、此方の動きを封じてくる攻撃方法など今まで会って来た強敵の中でも上位に組する相手だった。

それもその筈だろう。大樹達はこれまで自分達より圧倒的に強い相手とばかり戦い、負け、殺され、それでも生き残ってきたのだから。一人一人が弱ければ、共同して戦う事が勝利への近道なのだ。未だに指令に甘い部分はあるが、ケルベロスとの戦いで圧倒的強者を相手にした経験は確実に実を結んでいる。

大樹達からしてみれば、英雄・雪之丞と戦っている様な物だ。寧ろあちらよりまだ可愛げがある。まだ一人も倒されていないのだから。

「…宝玉よっ！ 我が身を癒せっ！」

持っていた宝玉でHPを回復させ投剣を構え大樹達を見据える。

『ヒョー。お約束じゃなあ。これで振り出しかのう』

『まあいいじゃねえか。それでこそ潰し甲斐があるってもんだ…行くぜっ！』

「体のダルさは消えました…ここからが本番ですっ！」

「そうは問屋が降ろさない。ヤタガラス！！」

『……ソノ突撃…余リニ無謀！ 『マハ・スクンダ』！！』

再びヤタガラスが呼び出され、低下魔法が身体を蝕んでいく。しかし今度は通常攻撃がメインではなかった。

懐から何かを取り出し思い切り投げつける。

「ふっ！ その程度予測してましたっ！ 死になさい『メギドラオンスターン』！！」

『しまっ！？ 耐えろおおおおおおおっ！！』

巨大な爆発が大樹達を襲い凄まじい爆発と熱風が一切合財総てを薙ぎ払っていく。

咄嗟の攻撃で防御が遅れたキンキ達は耐える事もできずに吹き飛ばされた。

アンナにとっても切り札の一つでもあったメギドラオンストーンを  
此処で使ってしまうとは思わなかっただろう。

数ある魔法石の中でも最上位に存在する魔法石なのだから当然とい  
えば当然なのだが、もう予備はない。

物理攻撃がメインである以上、魔法は魔法石に頼らざるを得ない為  
にこれら魔法石は数多く所持してる。

「メギドラの数倍以上の大爆発。果たして耐え切れませんでしたかね？」

油断無く投剣を構えるアンナ

対して大樹達は先程のメギドラオンで半壊しかけていた。

まさかメギドラオンまで飛んでくるとは予想していなかったのだ。  
まあ、予測していたとしても一手遅かったのだが。

仲魔達は全員、死んではいないがキンキを除き立ち上がることが出  
来ない。

大樹自身も深いダメージを負っている為、全身に力が入らないよう  
だ。

「となれば……力を借りるよ……ミックススレイド！ バクヤ、カンシ



ヨウの力を借りて！」

『魂捧げの祈り』！！

「なっ！？ 何なのですかあれはっ！？ 先程のカラスといい…！？」

大樹の上空に現れた、カンシヨウとバクヤを見て驚きを隠せないア  
ンナ。

ペルソナという能力は基本、この世界には存在しない能力であり、  
また神降ろしとも違う強大な奇跡の力に戸惑っている。

その間にもペルソナ達の奇跡の力は行使されていく。

『我が身を持ちて、皆に安らぎの力を』

『いざ立ち向かえ戦士達よ！ 安息の日々は未だ遠いつ！』

暖かな光が全員を包み込み、再び立ち上がる力を与えた。

「っ…ふう。まさかあんなのまでとはね…人間は道具を使うから恐  
ろしい、身に染みて分かったよ」

『うー。でも、あれはないよー。剣投げてくると思ったもん』

『突然行動を変えられてはな、くそっ！我等を怒らせたな人間っ  
』！』

『別に怒ってませんけどねえ』

総てのダメージと疲労を完全に回復させた仲魔達が立ち上がる。

大ダメージを与えた筈なのに、傷一つ無く起き上がる大樹達を見た  
アンナは冷や汗が止まらなかった。

（道具？ いえ、回復魔法？ 先程の何かが…それだけでは説明が  
つきません？ 体力だけならともかく精神力までも回復しているの  
ですかっ！？）

「まあ、ケルベロスの火炎に比べればまだマシだよ。それじゃ仕切  
り直そうか？」

大樹の余りにも平坦とした口調に初めて途轍もない恐怖を感じるア  
ンナが其処に居た……………

戦いは激化する

Continue90 〱複雑で単純な世界??〱 (後書き)

シスターはメギドラオンストーン使い切って、佐藤君はHPMP全回復を切りました。

お互いに良い感じで切り札の消耗戦ですねー。流石にはいよつてる暇は無いようです。

次回辺り、オオミツヌとこんとんを出したいなあー…果たして上手く書けるかなあ…

どうでもいいこと

我が目の前には沢山のケーキがっ！(どどーん  
モンブランがいいかなー、ショートケーキがいいかなーとはしゃいでおります。

今月の7日は誕生日だったので、誕生日記念なのですよー(お前は2回も記念するつもりか  
ふふふ…それじゃ逝ってきます)えー  
その前におくふる

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

## 次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：122票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：156票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：21票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：19票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：24票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue 91 〱複雑で単純な世界?〱〱 (前書き)

バトル最終戦ですっ！ はて…どうしてこうなったんだろっ… (汗  
ではではどござなのですよー。いやぁ…戦闘描写書くと時間が遅く  
なりますね…

やはり難しいのですよー (涙)

Continue 91 〱 複雑で単純な世界？？〱

改めて大樹は相手を見た。

メシア教会のシスター、その攻撃力はまともに命中してしまうと一瞬にして大樹の命を奪っていく程の攻撃力を秘めている。

対して此方はアリスとアメリアの魔法火力が主な主力と言える。

どちらにしても最強の火力を互いに当てる事が出来れば勝利をもぎ取れる条件だ。

大樹は勤めて冷静に相手を見つめる。

ケルベロスや雪之丞に比べてこのシスターはまだ戦いやすい部類と言えるだろう。

彼女自身が前衛系で無い為か接近しての最高火力と言う物が無い。

更に言えば投剣に因る攻撃は、大樹やアメリアなどのHPが低い相手はともかくキンキやグクマッツ達ならば何とか耐えられる程度の攻撃力でしかない。

先程のメギドラオンストーンにしても、恐らくは切り札か何かだろう。初めから使えるなら使っている筈と思考していく。

となれば、今最も大事な事は自分の身を護りつつ仲魔達をサポートする事だった。

そして逆にアンナは追い詰められていた。

同胞であるメシアのテンプルナイト達が事も無げに殺されていく、如何に自分より弱いとしてもあそこまで圧倒出来ると言う事は目の前に居る大樹と同程度…いや火力などは上回る可能性がある。

彼女が現在使用できる広範囲火力と言えばダイン系の魔法石が1〜2個程度でしかない。

攻撃を通す事さえ出来れば勝てるのだが、目の前の悪魔達がそう易々と攻撃を通してくれる筈が無い。

となればどのようにして攻撃を当てるかが焦点になる。

（魔法石で牽制…いえ、流石に警戒されてますね。雨の様な攻撃では先程の様に塞がれるかもしれない、か。異教徒とは言え一筋縄ではいきませんね）

牽制を兼ねて剣を投擲する。

単純に腕力と、相手を破壊する為の魔力を込めて撃ち込む。

五本の剣が大樹目掛けて襲い掛かるが

『あめえっ！！ ハッ！ 早々簡単には通さねえよっ！』

前衛に立ちほだかるキンキがそれを薙ぎ払ってしまふ。

凄まじい腕力と広角視野に驚嘆するアンナだが、これは布石でしか無い。

「ならば、どこまで耐えられますかっ！！　せいっ！　はあああああああっ！！」

『つあっ！？　うおおおおおっ！？』

大樹が落とせないのならばまずは前衛から崩していく。

アリスとアメリカの火力は脅威だが、アンナの判断力があればまだギリギリ回避出来ると判断しての行動だった。

大樹：いや全体を狙い攻撃しつつ、主な攻撃は大樹を狙っている。そしてそれを総てキンキが防ぐ…と言うより防がねばならない。

避けてしまえば大樹に当たるからだ。剣の攻撃は無効と聞いていたが、だからと言って放置出来るほど甘い攻撃ではなく全力で払い続けている。

『むう…無差別攻撃の中に集中して攻撃かっ！　けええええっ！！』

『ひゃうっ！？　い、今かすった！？』



「ちっ…このままじゃジリ貧だ…どうする…」

攻勢に回りたいが、まるでマシンガンの様に襲ってくる投剣をどうにかするだけで精一杯である。

一体何処にあの剣を隠し持っているのか分からない程、何十、何百と投剣が降り注ぎ、それを全員で防いでいる為に身動きが取れない。

この中で唯一動けるのは大樹だけだった。

(どうする…生半可な攻撃じゃ逆に僕が隙を見せてしまう。至高の魔弾…？ いや…)

相手の回避はかなり高い。更にはマハ・スクンダで命中率を下げても尚確実に此方を狙ってくる程の正確性を持っている。

クー・フリーンを呼び出すのが良いか、それともヘルで確実に止めを刺すかと考え、同時にある程度ペルソナの事は認識している為に対応されているかもしれない。

(ここはテトラカーン？ いや、それよりも…！)

「ここは絡め手で行くっ！ 恐怖に脅えろっ！ 『テナタラファー』  
！…」

「っ！？ 精神操作の魔法…だがっ！ 効きませんっ！ たあああ  
っ！」

一瞬頭を抑えるが、恐怖に陥る事無く攻撃を繰り返していく。しかし先程より攻撃の精度は確実に甘くなっている。其処に糸口を見出す大樹。

「効かない…か、でも一瞬でも気を逸らせれば此方が攻撃に回れる！ 何度も行くよ！」 『テンタラフー』！！」

「あぐっ！ ま、魔法をそんな理不尽な使い方だっ！？ ならば…燃えなさいマハ・ラギダイNSTーンっ！」

攻撃の手を緩めそうになるアンナだが、咄嗟に魔法石を投げて一手を費やす。

燃え盛る爆炎が迫る直前にアリスが高らかに叫んだ。

『させないわっ！ アメリカ、オーカス合わせてっ！』

「はいなのですよっ！」

『行くぞっ！ 押し返してくれるっ！』

一斉に魔法を唱え、そしてそれを混ぜ合わせていく。それはマハ・

ラギダインで巻き起こった爆炎をあつさりと飲み込む大火炎となる。

メギドラ！

アギダイン！

マハ・ラギダイン！！

### 合体魔法【メルトダウン】

「魔法を…掛け合わせたっ！？　まずいつ！」

マハ・ラギダインを飲み込んだ爆炎はアンナも飲み込まんと襲い掛かるが、全力で逃げを打つことで何とか回避する事に成功した。

彼女と言えどこの状態で反撃する事は出来ず、今度は大樹達が攻勢に回る事になる。

『…何あれ…ま、まあいいやつ！　隙が出来たんだし今度はこつちからねっ！』

『分かってなかったのかよ…ま、まあ凄まじい事は確かだな。もう一発いけないのか？』

『戯けっ！　先程の一撃でこっそりとMPが持っていかれたわっ！　早々連発できるものではないな…あれは』

「全員の魔法で押し返す予定だったのですが、なんだか凄い事になりましたですね」

「まぐれ…なんだ。とりあえず隙が出来た！ 全員攻撃！」

アリス達にとつても先程の合体魔法は意図して行った行動では無く、運良く現れた奇跡の様なものだった。

しかし代償は高く、通常の魔法を唱えた筈なのにかかなりのMPを持っていかれている。連続で撃つ事は今の状態では無理があった。

それでも普通に攻撃するだけの精神力やMPは残している、隙が出来た今の内が攻撃のチャンスだった。

『本気で行くぜっ！ 覚悟しなあっ！ 『チャージ』！』

『とりあえずは積むかのう…ヒョー—————』

渾身の一撃を繰り出す為に力を溜めるキンキ。それと同時にグクマツツが攻勢を取れない今の内に雄叫びによって攻撃力を下げる。

『はいはい、逃がさないわよっ！ 甘い電撃で痺れて見る？ 『魅惑の雷撃』！』

足止めを目的とした電撃がアンナに降り注ぐ。

直ぐに回避しようとするが体勢を整えきれない為に避ける事ができずにそれを総て受けてしまい、体が強く痺れていく。

ダメージはまだ何とか耐え切れる上に魅了は信仰心が強すぎるお陰で耐えられたが、付属の麻痺のせいで体が痺れて言う事を聞かない。

「ま…ずい…くうっ!?!」

焦り動こうとするが、全身の痺れは直ぐには回復などせず立ち上がるのも困難だった。

このままではキンキの渾身の一撃を受けて死ぬしかない。

考えるが、この状況をどうにかする方法は一つしか思い浮かばなかった。

痺れる腕を無理やり動かし、懐から魔法石を取り出す。

『喰らいやがれやあっ!』『忠義の一撃』!』

「ザンマストーンっ!! あぐっ!」

『んなっ!?! 自分に魔法掛けて吹き飛びやがった…ちっ、やるじやねえかっ!』

投げる事が出来ない彼女が行ったのはキンキに使うのではなく、自

分にザンマストーンを使う事で衝撃波を巻き起こし自ら吹き飛ばされる事だった。

半ば無理やりキンキの攻撃を回避したアンナだが無抵抗のままザンマを受けてしまったのでダメージが酷い。

「こぶっ…ごぼっ…内蔵を傷めましたね…だ、だが…」

痺れは未だ解けないが腕だけは何とかある程度自由になっている為に、回復用の魔法石を使い回復を図る。

先程使った宝玉はレアアイテムな為、そこまで数が無い。ディアラマストーンを用いて回復を図るが焼け石に水に近い。

そんなアンナを冷静に見つめる大樹。確かに彼女は強いが此処まで来てしまえば大樹達に敗北は無い。

「…詰んだかな。なら…」

最後の一撃とばかりにクー・フリーンを宿そうとした時、脳内に声が聞こえてきた。

（おおーっと私さん。ちょっと待ってください。英語で言うとスト  
ップ・ミー）

(悪いけど命が掛かってるんで話を聞いている暇はないよ)

(いやいや、私も状況は見てますからね。という訳でちょっとミックスレイドしてみませんか?)

(…スキル無いじゃないか。と言うより流暢に話せるなら初めから話しておいてよ)

(3メートルの宇宙人といえばあの口調しかないでしょうっ!?)

まあ、私は宇宙人というカテゴリで間違ってますが、言うなれば邪神。そう、悪い神様っ!)

(なら危険だから召喚しないよ)

(酷いつ!?! 事も無げにスルーした上で放置されたっ!?! えぐえぐえぐ)

(だから、真剣勝負なんだって…)

(まあまあ。聞いて下さいよ私さん? この会話は何ていうか心の中の会話ですから時間の流れが緩やかですし、単純に言えば刹那の瞬間って奴ですね。それでなんです相手を殺すのは今なら簡単ですけどどうせなら捕まえませんか? それが私とみっ君のミックスレイドなら出来ちゃったりするんですよ!)

(色々突っ込みたいけど、みっ君って誰かな…)

(我だ、汝よ)

(オオミツヌ…? 何故?)

はいよるこんとんが邪魔つばい事をするのはまあ、らしいと言えばらしいと考える大樹。

オオミツヌの様な、見た目からして和風の戦士である彼がこの様なタイミングで意味の無い会話はしないだろうと話を聞く体制になる。確かに情報を得るなら捕まえた方が良いのだが、多分狂信者である以上口は割らないだろうと予想はしている。

(強いて言えば、先を見通した為か…汝よ。先は未だ光明が見えず謎だけが全体を覆っている。其処で一つでも情報をと我等は考えたのだ)

(でも相手は狂信者だ。果たしてそう上手くいくかな?)

(其処で宇宙のすーぱーあいどると自称する私事はいよるこんとんの出番ですよっ！ 人体実験であれやこれやそれ…ちよつとえつちな事だつて…ふふふふふ やりますよ私はっ！ 例えこの小説が18歳未満禁止になろうともっ！)

(メタるな…人体実験つて…スキルのあれか…口を割らせられるのかい?)

大樹としてもメシアの情報は欲しい所だった。

この町を元に戻して、核を如何にか出来たとしても、メシア教自体



は残っている為何時また似たような事が起こるか考えると早めに手を打って置きたい所だった。

殺してしまうのが一番後腐れないのだが、そう考えると多分かなりの実力者であるアンナを捕まえる事は有益な情報に繋がると考える。

(問題ありませんよ　　某有名なセリフで言う。大丈夫だ問題無い)

(寧ろ君の存在は問題しかないけどね)

(乙女に優しくしてっ!?!　　というか私さんは私なんだから自分を卑下しちゃだめですよっ!)

(冗談とかは要らないよ。で…行けるのかな?)

(任せよ汝…視覚的には微妙ではあるが、効果的ではある)

嫌な予感しかしなかった。

だがオオミツヌが問題無いと言っている以上使えると踏んで意識を再び覚醒させる。

(という訳で、さくつと行きましょう!　さあさ!　我等の力を見せ付けましょう私さん!)

(なんだろう…真剣勝負が物凄く汚された気がする……)

確かに完全に目が冴えると、あれから1秒も経っていないようだった。

麻痺して動けないアンナを見て、魔力を高めていく。

すると同時に：大樹の頭に力のある言葉が響いてきた、その言葉に導かれるままに大声を張り上げた。

「…いくぞっ！ ミックスレイド！ オオミツヌとはいよるこんとんの力を借りてっ！！」

『巨神と女神の降臨』！！

『オオミツヌ、ショーertimeっ！ なぎはらえっ！！』

『……………眠れっ！ 我が一撃で！！』

巨体…巨人と言っても良いだろう大きさのオオミツヌの肩に乗ったアホ毛が特徴的な少女が腕時計の様な物に向かって叫んでいると言う凄まじくシユールな光景が展開された。

そのあんまりな光景に誰もが手を止め巨人…オオミツヌを見つめてしまっ。

「……………っ！ 必ずや…次回こそはっ！ トラポートスト  
ンっ…！」

彼女が消えるのとオオミツヌの拳が地面を抉ったのは紙一重の差だ  
った。

「逃がすかつ！？ ……くっ、逃げられた様だね」

ミックスレイドを使ったMPの消耗で座り込む大樹。

逃がしてしまったが、本来ここを護る事が目的で、相手を殺すつも  
りだったのでこれはこれで勝利だと気を取り直す。

直ぐにこなた達の援護に行こうと思ったが、何時の間にか銃撃が止  
んでいる事に気づいた時にはこなた達が此方に走り寄っている姿が  
見えた。

「大樹君っ！ 大丈夫っ！？」

「佐藤さんっ！」

「こなた、高良さん。そっちも何とかなっ たみたいだね」

「うん。大体はやったけど、あのメシアンが逃げた瞬間に皆魔法石  
使って逃げたよ」

「此方もです」

こなたの方は多少薄汚れているだけだったが、みゆきの姿はメシア教徒の返り血などで赤く染まっている。

「うん、みゆきさんがギャップ萌えに目覚めたね」

「え、ええ…と」

後で着替えが必要ですね。カードにしてありましたっけ？

「兎にも角にも…勝てたか。まあまあ強くなれたのかな」

「うおーい。佐藤君が弱かったら私涙目だよ」

「ふふ、そうですね」

『こらっ！ 其処何良い雰囲気出してるのよッ！ ここは努力賞として私が大樹さんに甘えるべきでしょっ！』

『じゃあ私はベッドを用意しますわねえ〜。複数プレイって夢でしたのよお』

和気藹々と話していると、そこにおずおずと話しかける声が聞こえてきた。

一斉に振り向くと、ビクつとした表情をした自衛隊員とクズノハのメンバーが不安そうにしながら大樹達の近くに居た。

「君達が誰かは分からないが…助かったよ。ありがとう」

「気にしないで下さい。僕達も此処に用がありましたので」

「アリスを連れてたデビルサマナー…もしかして君がレイホウさんが言っていたデビルサマナーの少年かい？」

「…と言う事は貴方は。漸くまともな情報が手に入りそうだ」

多少の虚脱感を感じつつも立ち上がり、この後の話を聞く事にした。

戦闘終了!!

大樹はレベルが5上がった!

こなたはレベルが4上がった!

みゆきはレベルが4上がった!

仲魔達はレベルが4上がった!

大樹の成長限界が近づいている……………

オオミツヌ、はいよるこんとはミックスレイド『巨神兵の傍に立つ女神』を覚えた!

ミックスレイド『巨神と女神の降臨』

オオミツヌ×はいよるこんとん

消費MP：50 使用后36時間のクールタイムが必要。

効果：敵単体に万能属性甚大ダメージ。

2ターンの間回復することができない睡眠、混乱、麻痺、シンク口、恐怖、発狂、金縛り、転倒、封魔、盲目、昏倒、HP回復無効、MP回復無効を与える。

これらのバッドステータスは相性を無効にして確実に効果を与える（スキルで無効は適用する）

ただし、この攻撃では相手のHPを0にする事ができず、相手は絶対に死亡しない。

解説：

オオミツヌの巨体を生かした攻撃力と、はいよるこんとんの様々なバッドステータスを合わせた効果を与える万能属性攻撃。

とりあえずはいよるこんとんは邪神系であり女神ではない。

オオミツヌはかなり恥ずかしいらしい。

時々女神役のはいよるこんとんが『パンチだロボー！』とか叫ぶらしい。ちなみに効果は変わらない。

シスター・アンナ

「名前」：アンナ 「性別」：女性 「覚醒段階」：？（超人）

「現在LV」：48 「属性」：L・L

「ステータス」

HP：424（2860） MP：350（1750）

力：38 知：35 魔：39 体：20 速：25 運：19

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖：× 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・狂信者 ・斬撃ハイブースタ ・達人の勘 ・超人？  
・投剣の極み ・アイテムスロー ・神剣召喚

「スキル」

・刹那五月雨撃ち 敵全体に物属性極大ダメージ。2～4回ラ

ンダム攻撃

・デスバウンド 敵全体に剣属性極大ダメージ 高確率でク

リティカル

・アローシャワー？ 敵全体に物属性大ダメージ。5～10回ラ

ンダム攻撃

狂信者：強い信仰の為、心属性の攻撃が効き難くなる

斬撃ハイブースタ：剣属性の威力を2段階上昇させる。

達人の勘：あらゆる回避に補正。

超人？：好きなステータスをレベル毎に+5する

投剣の極み：一定の武器で使う物属性のスキルを剣属性に変更する。

更に相手の相性：×を無効にする。

アイテムスロー：アイテムを遠くにいる相手に確実に使用できる。

神剣召喚：何時どんな時でも、投擲可能で一定の攻撃力を持つ剣を召喚できる。

召喚時HPとMPを1点消費する。

Continue 91 〈複雑で単純な世界?〉 (後書き)

シリアスを完全に破壊する子、3mの宇宙人ことはいよるこんとんさんでした。

でも、能力は確かに怖いのです…甚大ダメージが遂にお目見えですよー(でも止めはさせない。

逃がすか倒すか考えましたけど、ここは隊長さんの事も考えて逃がしました。

情報はそう簡単にはあげないですよっ(えー

今回は嫌な人出てくるかなー?

隊長さんの名前かあ…なにがいいかなあ…太郎とかだったら怒られそうなので真剣に…

どうでもいいこと

お腹が空きました、今日は何を食べようかなあ…

あっさりしたものが食べたい気分ですっ、サラダと軽めのものとかいいかもしれませぬー。

うーん、何にしようかな。

皆さんは夕飯があっさりな物にする時は何を食べますか?

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお



答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。

もう直ぐシエルター編終了ですし、コミュが近いかなっ！

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：127票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：163票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：25票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：20票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：25票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue 92 〱 複雑で単純な世界? 〱 (前書き)

今回はメインに入る前に自衛隊員、こなた、みゆきさん視点からの佐藤君の戦いを見てもらいますー。

け、けっしてネタが出てこなかった訳では(ガクガクブルブル

という訳でどうぞなのですよー。

巨神と女神の降臨について…

うん…これもある意味詰めですよねえ…という訳で少し弱くしましたー。

具体的には4ターン持続の所を2ターンに変更、

スキルで 無効などを持つ場合は無効化される。となりましたー  
後で直さないと。

後、メールを頂いてました！ コンセントレイトをチャージに直します。

ありがとうございますー。

Continue 92 〈複雑で単純な世界?〉

時は少し遡り、大樹とシスターの戦闘中・自衛隊員視点

助けてもらって何なのだが、俺には…あの少年が化け物にしか見えなかった。

突然巨大な鴉に乗って現れた少年少女達。その中の一人はどうみても中学生程度にしか見えない程だ。

俺達が銃で撃つて牽制していた天使達を事も無げに屠る眼鏡の少女にも驚かされたが、この中で一番異端なのはあの少年なのではないだろうか。

見るだけで怯えが走る悪魔を指示一つで動かし、悪魔も嫌な顔をせずそれ所か積極的に動く。

デビルサマナー…という存在はクズノハの人間から聞いた事があるが、実際にお目に掛かるのは今回が初めてだった。

「なっ!?!」

突然飛んできた剣に手と足を撃ち抜かれる少年。

余りの出来事に動く事さえ出来ない。くそっ…大の大人が何故子供

達に前を任せなくてはいけないんだ…

悔しくて情けなくて涙が出る。

俺達では直ぐにあいつらに殺されてしまっただろう、だから俺達は此処を護る事しかできない…不甲斐ないし情けない。だが、どうする事も出来ない。

ああ、あの少年はもうだめだろう。先程の仲間の様に殺されてしまっただろう。

腕と足を剣で貫かれて騒がない人間なんて居る訳が……………

「おいおい……………ありゃまじかよ…」

「人間…なんだよな…」

「人間だろうよ。17〜8位のさ…」

その少年は自ら剣を無理矢理引き抜いた。途端に溢れ出す血に目もくれずに何かを取り出して掲げると、傷が癒され何事も無かったかのように立ち上がる。

あれほどの大怪我を痛がる所か、錯乱する所か彼は毅然と悪魔達に命令を送りあの化け物修道女と戦いを再開した。

悪魔を使役し、自らも銃を使いクズノハの人間の様な不思議な術を使い戦っていく。

見た感じ、あの少年達と修道女は互角の戦いをしてるようだ。俺達が相手にもならなかったあの修道女を悪魔を含めた複数とは言え互角に戦えているのが凄まじい。

雨が何かのように降り注ぐ剣を前にいる悪魔が打ち払い、もう一方の龍の姿をした悪魔が放電を起こして剣を溶かしていく。

その後ろでは見た目も恐ろしい悪魔と、人間にしか見えない少女達が炎や爆発を巻き起こしていく。

はつきり言って、俺達が如何にか出来るクラスの戦いじゃない。確かに自衛隊なんてのは軍隊としては機能もしないような存在だがそれでも一般人に比べれば強いと自負していた。

俺自身、三尉でもあるしそれなりに鍛えてきたつもりだったが、それさえも子供のお遊戯と言われてしまいそんな位の戦いが目の前で起きている。

爆発を受けて吹き飛ばされても、全身が血まみれになっても尚立ち上がり、決して諦めず前を向き戦う少年。

彼は強いな………力が強いのもあるが、きっと彼は心が強いのだと感じた。

それに対して俺達はガタガタ震えて、目の前の少女達の言うままに天使に向かって銃を撃つだけ……

まったく笑えねえ………

「悔しいよな…ちくしょう……」

「悔しくても、俺達は出来る事をするしかねえだろ。ありやTVとかで出てくる英雄が何かで俺達はその辺のモブって事さ」

「…はっ、お得意のアニメ談義か？ ったくよ。仲間が死んでるのに軽い奴だ」

「泣き叫んでも、喚いてももう変わらねえし、変えられねえ…ならよ。友人の仲間の為に俺達が出来る事をするだけだろっ！ おらああああっ！！」

ほんの数時間前まで、一緒に笑ってたダチが隣で頭だけ無くして死んでいる。

子供がシエルターに居るから頑張ると言っていた後輩が全身を剣で撃ち抜かれて死んでいる。

俺の先輩だった人が、昨日一緒に酒を飲んだ先輩が真っ二つになつて死んでいる。

死体、死体、死体、死体、死体、死体、死体。

そこらじゅう死体だらけだ、それも他人じゃねえ。ほぼ全員が俺の知り合いの…友人の…部下の。

なあ、いつから日本はB級ホラーの世界になつたんだよ？ 俺達は英雄に縋るしかない只のモブで、目の前の少女と少年が英雄か。

「世紀末はとうに過ぎてるんだけどな」

「愚痴つてもしょうがねえよ。俺はもう色々諦めたぜ。今生きてる事をあの子達に感謝しようや」

「子供に護られる大人ってか？ 笑い話にもなりやしねえ…でもよ。これが現実なんだな…この惨状がよ」

「中の子供にや見せられないな…どうするよ…あいつの子供と興ざん」

「どうもどうも…ねえだろっ！ うおらあああああっ！！」

『ぎぎぎぎぎぎっ！？』『…はあ…』

あの眼鏡の少女を抜けてきた天使にありったけの弾丸を撃ち込む。

頭が悪いのかそもそも避けられないのか、全身に鉛玉を喰らい見るのも嫌になるくらいの表情のまま息絶える天使を見て、一歩彼等が来るのが遅ければこうなってたのは自分なのだと思いを感した。

メシア教だか飯屋協だか知らないが…とりあえずてめえらは許さねえ……………

俺も戦わないとな、生き残ってお前等の事笑ってやる…だからお前等も笑って天国に行きやがれ。ゾンビになって戻ってくるなよ？

「んじゃ、さっさと終わらせますか？」

「そうだな……頼むぜ英雄さんよ。せめて仲間の無念を晴らしてくれや。お前等、全力で行け！ 戦いはもう直ぐ終わるぞっ！！」

……

……

…

### 自衛隊員視点解除

### 高良みゆき視点

巨大な爆音が聞こえてきました。あちら側には佐藤さんが……

助けに行きたいのに、目の前の相手がそれを許してくれません。

ここで動いてしまえば彼等はシエルターを攻めてしまう、そうならば最悪の事態になってしまう。



今は信じて戦うしかないですね。

数が多いですね…一体一体は弱くても、数で攻めれば負けはしない、ですか。

「戦いの常套手段ですし、仕方が無いですけどね」

弱いのなら弱いなりに頭を働かせて動かなくてはいけません。

人間は群れる動物ですし、天使も似たようなものでしょうから数で襲われてしまえば幾ら此方のレベルが高くても苦戦…最悪負けてしまふ恐れもあります。

ただ、圧倒的なまでの強者には意味を成しませんけどね…太陽に軍隊蟻が勝てるかと言われればNOですから。

でも佐藤さん達とあのシスターは其処までの差は無い筈。離れていてよく分かりませんが、あのクラスの方ならば佐藤さんならきつと何とか出来ると信じています。

佐藤さんは…強いですから。

魔法にペルソナに文珠、魔法のカードにデビルサマナー…まさに吃驚箱の様な方です。

私も色々なスキルを持っていますが、基本的にそれは攻撃や作戦を練る為に使う専門の特技ですし、簡単に纏め上げると2種類程度の

派生でしかありません。

でもあの方は、考え得る限りありとあらゆる事に対して満遍なく対応出来る方。私や泉さんの様に特化はしてないようですが、あらゆる事を通常以上に出来ると言う事は強みです。

多分、私が全力で向かってても今の私ならば経験の差もあって戦いに足りないほどでしょうね。

一撃さえ当てられれば勝てるかもしれませんが、それを容易に許してくれる方ではありませんから。

「そう考えると、結構余裕が出てきますね。佐藤さんはあのクラスの敵には負けません」

確かに…まだ人間の範疇に収まっている以上、彼なら何とか出来る筈ですね。

「それでも一步間違えれば、負けてしまう…相手が人間というのはとても恐ろしいものですね…」

会話しながらも私の手は止まらず、天使達を切り裂いていく。

小竜姫のお陰で全身が活性化している為、自分でも驚くようなスピードで相手を攪乱しつつ攻撃を加えていく。

マグネタイトのお陰か、体力が上がっているのか分かりませんがこれだけ全力で動いても疲れる事は無く、このままなら後1時間位は

このペースで戦えてしまうほどです。

さあ、急いで彼等を倒して…いえ、殺して…ですね。佐藤さんの手助けに行かなければ。

再び剣に力を込めようとしたその時……

オオミツヌ、ショータイムっ！ なぎはらえっ！！

「……………え…？」

あれはオオミツヌ様っ！？ 佐藤さん…本当に貴方は何者なのか…

戦場には不釣合いな声を張り上げた少女と巨人が戦いを終わらせたのでした…

……………

……………

…

高良みゆき視点解除

## 泉こなた視点

大樹君と戦ってるシスターを見てご愁傷様〜とか思ってる私が居る。確かに強いかもしれないけどさ、こっちからしてみたら大樹君の方が数倍凄いつて分かってるからねえ。

爆発に巻き込まれて吹き飛ばされた時は、プツンと行きかけそうになったけど直ぐに体勢を立て直した大樹君を見て落ち着きました。

うん、ちよつとあのシスターの脳天撃ち抜いてやるうかつね。うん、大樹君の痛みの1000倍位与えてやるうか、ふふふふふふ…と病んでみるテスト。

まあ、その為には目の前にいるうざい天使達を如何にかしなくちゃいけないんだけどさ。

おー…魔法で足止めとか流石だなあ…効果的で無くても一瞬の間さえ奪えればかあ。為になるねあの攻撃は。

「んで、ほいっとな。よし星10個目」

いい感じで射線が通ったのでヘッド・ショットを連発する私。

勿論思考中でも攻撃はしてるよ〜。スナイパーこなたの名は伊達

じゃないぜ。

天使達をすり抜けて弾丸は真っ直ぐメシアンの頭部に命中する。破壊力は低い銃だけど脳天撃ち抜かれれば基本死ぬっしょ。

そんな訳でメシアン一人撃破成功。残りは…うおう、天使達でまた固め始めたよあいつら。何体天使もってるんだか…大樹君に謝れっ！！

でも大樹君も仲魔増えて来てるよねー。てかアリスちゃんとアメリアちゃんがばねえ…あ、ついでにオーカス君も。何さあの合体魔法って。

通常のアキダインとかメギドラが笑えてくるんですが。あれが氷とかがだつたらケルベロスでもダメージは必至だつたと思うよー。

今まであんなの見た事ないし、今出来たのかなあ。実戦で閃きとか…某ロマン溢れるサーガの3とか思い出すね。ミカルは至高。

『真面目なのか不真面目なのか…まあサマナーはこっちの状態の方が安定してるんだけどね』

「銃を撃つだけの簡単なお仕事です。ビバ射的場」

フェニックス事フェニ子ちゃん（え？ 逆？ こまけえこたあいいんだよっ）が隣に来てた。

いやあ…彼女はいつも私を護ってくれて助かるよ。何気にかがみ

んっぽくなってきたるし、仲魔の中じゃ一番の相棒かもねえ。

元力ハクとは思えないぜっ。

『こつちもそろそろだし、サマナーは助けに行ってきたら？ 私達だけでももう十分よ？』

「そうしたいのは山々なんだけどねえ…あの暴風の中に行けと？ 私だとあつという間にピチユる可能性があるよ。射撃もあそこまで高速で動き回られると誤射が怖いしね」

流石に身軽さに自信がある私でもあの連携に混じって動くのは至難の業だからねえ。

だから大樹君たちに敵が行かないように、ここで他の相手を足止めするのが彼に対しての最大の手助けなんだよ。

(こなた。奥に居る天使が何かを唱え始めてるわ)

(あ、ほんとだ。サンキューお母さんっ！ んじゃちょっと力借りるね)

「守護天使よ…私に力を与えよっ！ アムルタートセー…っああーっぷー!!」

守護天使であるお母さんの光の加護が私を護ってくれるのを感じる。  
流石に変身シーンはありません、気分なのだよ。き・ぶ・ん。

(…えーと、そんな事しなくてもゴーストガードは出来るのよこな  
た…?)

「お約束ですお約束。お母さん」

『よく分からないけど気にしたら負けよね、うん』

『捉えたっ！ 断罪を受けなさい！ アギラオツ！！』

アークエンジェルが何でアギラオ使えるのかなーとか思ったけど、  
ああ、仲魔だし合体したんだなあと直ぐに納得した私。

つてか…このクラスにアークエンジェル程度のアギラオって…

火炎が命中する瞬間、私を護る光が炎をあつという間に弱くしてい  
く、更に言うと炎に耐性のあるロックベスト装備してるので、結果  
的に言つと。

「ノーダメージな私がここに居る」

『……………ば…ばかなっ！?』

『はいはい、それじゃさよならね。』マハ・ラギオン『…!』

指向性を持った炎の渦が驚いて動けない天使を中心として燃え広がっていく。

巻き込まれた天使も、凄まじい勢いで燃えてそのまま死亡していく。やっぱ炎といえば最低でもこのクラスでしょ。ケルベロスの炎？あれはダメ、ありゃアギダインが線香花火の火に見えるクラスの威力だから。

さーてさて……と？

オオミツヌ、ショータイムっ！ なぎはらえっ！！

目の前に巨大な悪魔：多分大樹君のペルソナが召喚された。ってかでかすぎっ！？

と言つか肩に乗ってる女の子は一体なんぞやっ！？ どうしようすごく私やひよりんやパティ臭がするよ。きつと良い同志になれそうな感じの。

「シスターがっ！？ くっ！ 異教徒共が！ きつと貴様等には天罰が降るであろっつ！！」

『はっ！ 今更天罰が怖くて悪魔なんてやってられるかよっ！』



オルクスが攻撃しようとした瞬間に、何かを投げ捨てたメシアン達は全員消えていった。

ちっ！ まさかトラポーストーンなんて持つてるなんて誤算過ぎたよ。

悔しがってても仕方ないし、そもそも皆殺しまでは考えてなかったから、別に良いかな。

「さーてと、とりあえずは…大樹君の所に行こうかっ！」

泉こなた視点解除

???

モニターには先程までの戦いが総て公開されていた。

初めは冷や汗を流し、逃げようとしていた男性達だったが、大樹達が乱入してからの逆転劇に気分を良くし今は落ち着いている。

「素晴らしいっ！ あれだけの力があれば私達は安泰だっ！ まったくクズノハの連中も役に立たん…もう少しで殺されてしまう所だった」

「クズノハや自衛隊は頑張っていたではないですか。あれだけの被害を出しながらも…」

「役に立たなければ、意味が無いだろう？ まったく私達がどれだけ金を払っていると思っんだ」

「まったくですな。あれでは只の給金泥棒だ。寧ろ数が減って資金が潤うのでは？」

「おいおい、私達を護る為に死んだのだ。せめて黙祷位はしてやらんとな。はっはっはっは」

「まったく…入り口を護る事しか出来ない社会のクズが、それさえ出来ないのなら死んだ方がましだな」

（この人達は…自分達が何を言っているのか分かっていいのか…？  
我々は彼等が居なければ死んでいたというのに…）

眼鏡を直しながらそう吐き捨てる男性。

それに反論しつつも、それ以上言い返す事が出来ずにもう一人の男性は席に座る。

クズノハやデビルバスターズに多額の金を支払っているこの男には余り強く言えないのだ。彼が居なければクズノハ達も満足に動けな

いのだから。

しかし、この緊急時においても尚現実を余り理解せず文句ばかり漏らすこの男に一部の良識のある彼等は苛立ちを隠せない。

「いっその事口封じまで考えたが、それが出来れば苦労などしなかった。」

「あー。高木君、直ぐに彼等とコンタクトを。1千万も出せばあの程度の子供なら簡単に飛びつくだろう」

「で、デビルサマナーを雇い入れるのですか…？ 危険では？」

デビルサマナーは危険と言うのは、ある程度常識でもあるが、高木と呼ばれた男性からしてみれば自分達を救ってくれた彼等をこの男達の言うなりにはさせたくないという考えもある。

彼等はきつと、自分達の為にデビルサマナーの少年達を使い潰すだろう。

この世界がこうなっただけから彼等の行動は更に目に余る様になっているのだ。

「放置しておけばもつと危険になる可能性があるだろう？ もしまたあのメシア教が攻めて来た場合、残った自衛隊とクスノハの連中だけで対処出来るのかね？」

「そ…それは…」

確かに彼の言う通り、これだけ消耗が激しい上にそもそも彼等ではメシア教徒の相手にもならなかった。

となればあの少ない人数だけで、メシア教を圧倒し追い返した戦力はこれから考えると喉から手が出るほど欲しいのも確かである。

しかし彼等が何を望んでいるのか分からずに金だけで雇い入れるのは無理があつた。

「なあに。所詮は子供、幾ら強くても我々の交渉術の前には直ぐに落ちるさ。という訳で頼んだよ？ 特にあの女性は私専用のボディガードにしたい位だね」

「……分かりました…」

この中では一番権力が低い高木は、苦虫を噛み潰した表情をしながら部屋を退室した。

Continue 92 〈複雑で単純な世界?〉 (後書き)

お金持ちのおじさん達がアップを始めた模様です。

一人まともそうな人が居ますが、立場が低いようですねえ…さてどうなる事やらですよ。

今回はそのお話になりそうです。頑張りますねー。

どうでもいいこと

カステラ買って来ましたー。いまもぐもぐしながら書いてます。この甘みがいいですねー。食べ過ぎに注意しなくちゃ…え? 今食べるものじゃない? ふ…晩御飯はカステラにするのですよっ!

(マテ

だって…カステラ食べたいんだもん…(ほろほろ

皆さんはカステラ好きです? いろいろなのがありますよねー。

私はシンプルな普通のカステラが好きですよー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。  
もう直ぐシエルター編終了ですし、コミュが近いかなっ！

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：132票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：170票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：28票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：21票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：26票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue3 〱複雑で単純な世界?〱〱 (前書き)

書くのが遅れたです(涙)

今日は帰りが遅かったせいで、内容が短くて本題に入れませんでした…ううう。

明日は頑張らないとなあ……

という訳でどうぞなのですよ。

感想返しとステータスはお待ちください(涙)

### Continue 93 複雑で単純な世界???

いしやまたかし  
石山隆志は簡単に言えば悪人と言う存在だろう。

自分達の利益の為に金を使い、人を使い、更なる利益を生む。  
だが…決して外道ではなかった。

彼は家族を愛していた。家族を愛するが故に、あらゆる手を使い金を集め家族を養ってきた。

それは今でも同じだ。妻を愛しているし娘を愛している。来月の18日には娘の5歳の誕生日が待っている。その為のプレゼントも既に用意してある。

彼は家族を愛していた。妻と娘の安全を祈って、クズノハヤデビルバスターズのスポンサーとなる事で、家族を護ってきたのだから。

だが、その優しさは家族以外には向けられはしない。

そして…この世界がおかしくなった時、彼もまた何か外れてしまった。

現世に現れた『悪魔』を見た時、恐怖で動けなくなり泣き叫びそうになった。それでも妻を、娘を護る為に精一杯の勇気を振り絞り家族の前に立った。

しかし、そんな勇氣など何の役にも立たない。目の前で妻が無残に殺され、泣き叫ぶ娘が傷つけられた時彼は壊れた。



例えこの先、どんなに金を使つたとしても、どんなに他人を踏み潰したとしても、自分と娘だけは護ると誓つたのだ。たとえ数千数万人の間を見殺しにしたとしても。

そんな時だった。メシア教がこのシエルターを攻めてきたのは…恐怖が全身を駆け抜けた。このままでは娘が、自分が殺される。

妻を殺された上に今度は娘までも殺されるのか…自衛隊は役に立たず、金を払ってまで此方に引き寄せたクズノハですら善戦する事が出来ない。

逃げようにもこの外に出てしまつては娘も自分も悪魔に食い殺されてしまつたろう。

恐怖が全身を駆け巡つた。恐怖と怒りが脳を焼き、モニターに向かつて罵詈雑言を並べても何もならない事は分かつていた。それでも暴言は止められはしない。

殺されてたまるものか、娘を殺されてたまるものか、このシエルターに居る全員を見捨てたとしても、生贄に捧げてでも自分達は生き残りたい。

呪詛にも似た念は…石山に奇跡を呼び込んだ

「おお…おおおっ！！　素晴らしいっ！　素晴らしいぞっ！！」

巨大な悪魔に乗ってやってきたデビルサマナーと戦士達が次々とメシア教の人間を殺していく。

天使が：人間が殺されて行く度、胸がスツとするような感じが全身を駆け巡り、快感にすら変わる。

特にあの剣士：あの剣士は良いだろう。娘のボディガードには最適だ。強く、そして女性ならば娘を任せられる。

金さえ払えばきつと縦に首を動かすだろうとズレた考えを持ちながら。

既に世界がおかしくなり金の価値など最早意味が無くなり掛けているが、それも分からなくなっているほど彼は壊れおかしくなっていた。

それでも今まで人を使い続けたその胆力の為に見た目だけは傲慢なだけにしか相手には見えない。

「あー。高木君、直ぐに彼等とコンタクトを。1千万も出せばあの程度の子供なら簡単に飛びつくだろう」

「で、デビルサマナーを雇い入れるのですか：？ 危険では？」

危険など既に体験している。憤りそうになりながらも努めて冷静に冷酷に指示を下す。

彼等が居ればこのシェルターは安全になる。それで自分達は救われる。死にそうになれば新しいのを雇えばいいと考えていく。

「なあに。所詮は子供、幾ら強くても我々の交渉術の前には直ぐに落ちるさ。という訳で頼んだよ？ 特にあの女性は私専用のボディガードにしたい位だね」

「……分かりました……」

そう…あの眼鏡の女性だけは必ず手に入れなければならない。母親を失った娘に、笑わなくなってしまうた娘の為に護衛と母の代わりをしてもらうために。

高木と呼ばれた男が部屋を出て行くと、それぞれ上役の人間達が騒ぎだした。

誰も彼も自分達が助かる事しか考えておらず、それは勿論石山も同じだった。ただ、其処にあるのは確かな狂気で自分達の為ならばどんな手も使おうと思わすていく。

金で動くとは思っているが、それだけでは足りない。きっと足りない。ならば受けざるを得ない状況を作らなければならぬ。

そんな時、ある男の口から助け舟になる言葉が聞こえてきた。

「あの娘……もしかして高良さん所の一人娘では？ 確か前見た事がある」

「ほう……と言うと今避難している両親を探しに来たのかもしれないな。いやあ、あんなに強くて美しい娘さんが居るとは鼻が高いだろ

うにっ！ はっはっはっは！」

高良と言う名前に聞き覚えはないが、話によるとあの少女はある会社の社長令嬢らしい。

更に言えば現在その家族はこのシェルター内に避難しているらしいかった。

あまりの連続過ぎる幸運に天が自分に味方しているのではないかと思ってしまう。石山は考える、その両親を上手く使えば効率的に彼女を使えるのではないかと。

幸いにもまだあの少年達はシェルターの前で自衛隊員と話をしている。動くなら今の内だった。

「ああ…君。少しばかり頼みがあるのだが…」

壊れた男が選択したのは、外道。

だがそれに対して罪の呵責も感じ無ければ、悪いとも感じていない。既に彼にとって世界は娘と自分だけでありそれ以外はどうなっても構わないのだから。

それが彼等にとって逆鱗に触れる行動だったとしても、彼にとっては最も最良な行動だった。

(ああ…千佳。寂しかっただろう？ 直ぐにお姉さんを連れてきてあげるからな)

……

……

…

### シエルター前

大樹達がシエルター前で待たされる事20分、此方の危険性が無い事やクズノハのメンバーから家族がここに居る事を告げられ来た事などを説明する為に時間を取られてしまっていた。

彼等としても自分達を助けてくれた彼等を疑うつもりは無かったが、規則がある為に最低限の事情聴取をさせてもらう事になっていたのだ。

中に入る為には最低でも仲魔はCOMPに収納しなければならぬ

為、現在全員をCOMPに帰還させている。

これで多少時間が掛かったが問題無く中に入れる事になった。

後はみゆきの家族やかがみ達やその家族、友人などを探してもう片方のシエルターに移送するかななどを考えなければならぬ。

「ふー。悪い事はしてなくてもこういうのってドキドキするよね  
え」

「確かにそうですね。さて…皆さん無事で居ると良いのですが…」

「急ごうか、時間を掛けすぎたら日も暮れそうだしね」

『ヤタガラスでぴゅーって出来ないの大樹さん？』

「ある程度巨大化出来るらしいけど、それでも限界があるよ。車で  
の移動は難しいし、この場合必ず徒歩になるからね」

「車ゲットして、エストマー…っ！ ってのはダメなのかな？」

「試していないから分からないけど。多分通用するんじゃないかな？  
でも強い敵に遭遇したら運転手が真っ先に死にそうだ」

その様子を想像するこなた。

すぐに顔が青ざめていく、流石に運転手南無で済まされるような  
ものではなかった。

「と言うよりもそんな大人数が乗れる車がそもそも無いし。自衛隊の車は借りれないしね」

「よし、もう通っていいぞ」

「あ、どもども」

「すみません失礼しますね」

「…なあ、あんたら…」

中に入ろうとした大樹達を自衛隊員が呼び止める。

きよとんとした顔をしながら振り向くと、其処には敬礼をした自衛隊員達が居た。

背筋を伸ばし、見た目からして綺麗な敬礼は彼等にとっての最大の礼でもある。

「……シエルターを守り通した英雄に礼っ！！」

「……」

「いやぁ…ちょっと照れるね。なんかさ…うん、嬉しいかも」

「英雄と言うよりは傭兵ですけどね僕達は」

「…あんた達のお陰でこのシェルターは守り通す事が出来た、死んだ奴等もこれで浮かばれるだろう…協力感謝する」

こなたとみゆきは嬉しそうな表情を見せ、大樹はそんな二人を見ながら内部に入っていく。

先に行った大樹に気づいた二人がそれを追いかけていった。

…  
…  
…

それから比較的に簡単にかがみの両親や、知り合いや友人を見つける事が出来た。

一年生の岩崎みなみ、パトリシア・マーティン、田村ひより。卒業生の日下部みさお、峰岸あやのと特に仲のよかった友人達の無事を確認した事で漸く多少は安心出来たこなた達。

だが、その中にかがみとつかさ、みゆきの両親が居なかった。

「みゆきさん…無事で良かった…」

「オーッ！ コナタもミユキもゲンキそうでナニよりデスネっ！！」



「みなみちゃんにパーティにひよりんも、皆無事で良かったよ〜」

「先輩も無事で良かったつすよ！ いやあ…まさか現実に悪魔が出てくるなんて、世の中色々世紀末つすねえ…」

笑いながらも涙を溢して抱き合うこなた達。

お互いの無事を確かめ合い、今生きている事を喜んでいた。

流石に存在を知っているとは言え、直接的に彼女達を知っている訳ではない大樹は、場違いだとばかりに少し離れて彼女達の再会を見ていた。

友人に出会えて喜んでいるこなた達を見ると、此方側に戻ってきただけの意味があったな、と彼女達を見ている。

「ゆうちゃんも無事だから安心してね」

「はい…良かった…ゆたか」

「ちびつこおお、無事で良かったなあっ！」

「ちよっ！？ 突撃禁止だつてばっ！？」

横から突撃するようにこなたに抱きつくみさお。感激で涙を流しながらもこなたがここに居ると言う実感を感じる為に離さない。

こなたの方も、迷惑そうにしながらも嬉しそうにされるがままになっている。

そこにあやのが涙を拭きながら話しかけてくる。

「高良ちゃん、泉ちゃん…良かった」

「お二人も無事で良かったです」

「ところで、かがみんとつかさは見てない？」

「へっ？ お二人とも先輩達と一緒にじゃないんですか？」

そして、ここで初めて問題が起こる。

このシェルターにもかがみんとつかさは居ないらしい、それを知ったこなた達が不安を隠せないで居る所にかがみ達の家族が近づいてきた。

「おじさん？ かがみんとつかさは…居ないんですか？」

挨拶もそこそこにして直ぐに問いかけるこなた。すると全員が悲しそうな表情をしていく、それを見るだけで嫌な予感が止まらない。そして…それは現実になった。

「そうか…一緒に行動していた訳じゃ無かったんだな…」

終ただおの説明によると、大樹達が金剛神界に飛ばされた日以降か  
がみとつかさも同時に行方不明になっていたらしい。

搜索しようにもこの町全体が異界と化した為、自衛する事しか出来  
なかった彼等はクズノハや自衛隊の指示の下此処に避難する事が精  
一杯だった様だ。

時々もう片方のシエルターとの連絡がつく為、其方にかがみ達が居  
るかどうかが問い合わせたが結局今も尚見つかっていない。

「そんな…かがみ…つかさ…」

「まさか金剛神界に？」

「それは無いと思う。それならばエンノオツヌが合流させている筈  
だしね。色々知ってそうだったから…となると…後は残り3つのシ  
エルターに居る可能性か…」

流石にもう死んでいると言う可能性は考えているものの、口に出す  
事はしない。

とは言え、メシア教やガイア教のシエルターに居る事を考えるだけ  
で、既に碌でも無い目に合っているのではないかと考えてしまう。

ここに居ると期待していた為、三人ともかなり精神的に来るものがあつた。

大樹はまだ最悪の事を考えていた為に幾分か冷静で居られるが、あなたとみゆきにはかなりダメージが大きい。

「あの…私の両親を見ませんでしたか？」

気がつけば、みゆきの両親も近くに居ない事に気づいたみゆき。

ただおに話しかけると直ぐに色好い報告が返ってきた。

「居る筈だよ。この前話はしたからね…多分あっちの方の区画に居ると思うけど」

「そ、そうですね…良かった」

「じゃあ行ってみようか」

「僕はこの辺に居るよ、全部終わったら呼んでくれるかな？」

「え…？ 大樹君も一緒に行こうよ？」

「流石にさっきので疲れてさ、少し休みたいんだけどいいかな？」

アンナと激闘を繰り広げて居た為、この中で一番消耗が激しいのは

大樹だった。

それを考えるとこの後、もう一つのシエルターに戻る事も考えて確かに休ませたほうが良いと判断する二人。

とりあえず大樹をここで休ませて、二人でみゆきの両親を探しに行こうとしたその時

「少し宜しいでしょうか？」

「え…っと？ どちら様？」

「ああ、私はこのシエルターの管理などを勤めているグループの一人で、高木と申します。皆さんこの度は本当にありがとうございますと御座いました」

「はあ…それでえーと何の用ですか？」

「ちよつと待つてこなた。高木さんと言いましたか？ ところで何故ありがとうございます、と？」

行き成りやってきた男を警戒する大樹。

登場して早々「ありがとうございます御座いました」と言われる事と言えば、外での戦闘しか思い浮かばない。

更には高木が此処を管理しているグループの一員と言った為、自分達の行動が一部始終見られていた事を理解した。

この様にコンタクトを取ってくる以上、絶対に面倒事を運んできたのだと、予測する。

実際には厄介所の話ではなかったりするが…

「外の様子はモニターで見れる様になっておりまして…それですね。クズノハの事やこの後についてのお話が……」

高木としてはたまった物ではない。

目の前に居る少年は、その気になれば自分など一瞬でミンチに出来てしまう程の強さを秘めたデビルサマナーで、やはりと言うか、物凄く警戒されている。

しかし、それでも彼等を交渉の場に引き入れなくてはならないのが彼の辛い所でもある。

「是非、私の上司が貴方達に礼を言いたいと…どうか御足労願えないでしょうか？」

「いえ別に、礼を言われる為にした訳じゃないので」

直訳すると関わりたく無いと言っているのがまるわかりだが、それでも悲しいかな高木は「はい、そうですか」と引く訳にはいかない。

だが、どうやってあの場に連れて行くかが問題だった。やはり彼女達のリーダー格は大樹で間違いないだろうと当たりをつける。彼が渋っている以上無理に連れて行く訳にもいかない。

力づくで連れて行ける相手ですら無い為、半分泣きそうになりながらもあの手この手で会話していくが、悉くスルーされていく。

こなた達も初めはハテナ顔をしていたが直ぐに相手側が何を考えているか理解した為、誘いに乗らず総て大樹に任せる事にした。

それとは反対にただお達は高木と大樹が一体何を話しているのか漠然としている為今一入り込めないで居た。

何か不穏な感じがする為どうにか自分達も会話に加わりたいのだが、高木の方がこれ以上の深入りをさせたくない様で、彼等が会話に参加する事を「重要な内容なので」と参加を拒否している。

本当ならば此処から離れて会話したいのだが、大樹がそれをさせる訳がなく高木も諦めて此処で交渉するしかない。

そしてそうになると、大樹とは直接的な接点が無いただお達が話に加わる事は難しくなる。

こなた達の方でも出来るだけ巻き込みたく無いとただお達に対するフォロー等をする事をせず、自然と会話するのは高木と大樹の二人だけになっていた。

「僕達はこれから用事があるので、これで切り上げても良いですか？」

「其処をなんとか……………と、少々お待ちください…はい…はい…  
はあっ!?!? あ…はい…わ、分かりました…」

如何にか食い下がろうとする高木に連絡用の特殊な無線機から連絡が入る。

直ぐに対応すると、とんでもない事を言われてつい大声を上げてしまった。その内容は…まさにライオンに石を投げつける様なふざけた物でしかない。

これを伝えると言う事は、下手をすれば自分達が殺されてしまうかもしれない事に彼等は気づいていないのかと、脳内で騒ぎ立てる。

「用件は以上ですか? 僕達は忙しいのでこれで…」

「お、お待ちください…あの…実は…私達の方で、其処のお嬢さん…高良さんのご両親を待たせていると…」

「…っ!?!?」

火種は投げ入れられた。

燃え盛るか、焼き尽くすか…それともただ燻るかは、この後の風に動きによって変わるだろう。





Continue 93 〱複雑で単純な世界?〱〱 (後書き)

偉そうにしてる人も、やっぱりそれだけじゃないのだなーと言う感じのお話でした。

とは言えやってる事はやはり外道なので、この辺は難しいですけどねえ。

後、自衛隊の人が弱い説明を〱

えーとですね、この世界は才能の無い一般人が大体1〱4レベルが限界です。

能力者じゃない、一般人ですね。

ちなみにレベル15もあれば一流で、20あれば超一流です。シスターは英雄クラスですね。

自衛隊員は頑張って鍛えているお陰で3〱4の限界にまで近づいてます。

同レベルの悪魔程度なら銃反射〱とかしない限りは、良い戦いで出来るですね。

クズノハの熟練メンバーは、大体患者〱異能者の間で7〱12レベルの間位です。

大体の構成員はこの程度のレベルになりますねー。

で、今回の敵は最低でもレベル8アークエンジェルとレベル14プリンシパリティです。

この時点で自衛隊の方はレベル的に大幅に負けてますね。

通常のエンジェル程度なら、相性もありますから蹂躪できるですが、このレベルに来ると難しい上、シスターまで居ますからこの様な虐殺劇になりました。

能力の無い一般人では、鍛えても悪魔には勝てない…と言う奴ですね。

そう考えると、ペルソナに出てくるグングニルとか…カメーンとか恐ろしいですよねえ…（汗

どうでもいいこと

今日は焼きそばを買ってきましたー。ほこほこふわふわでソースが決めての焼きそばです！

油が多い料理なので少量しか食べられませんが、それでも美味しいですよー

あっさりめの塩味やきそばとかもいいかもしれませんねえ。

皆さんはどんな焼きそばを食べますかー？

ちなみに北海道では「焼きそば弁当」と言うカップ麺が人気ですよ。

### 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。

もう直ぐシエルター編終了ですし、コミュが近いかなっ！

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：140票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：180票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：34票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：22票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：29票（再戦フラグまで後1回）

もし：パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue 4 〈複雑で単純な世界?〉 (前書き)

交渉パートです。

こつこつのは本当に難しいですよー (涙)

流石に楽しんでもらえるか心配なですよ… (おろおろ)

Continue 94 〈複雑で単純な世界?〉

高良みゆき視点

冷静に、冷静に、此処で感情のままに動いてしまえば皆さんを困らせてしまいます。

だから…冷静に。

今、彼 高木さんが仰った言葉…私の両親を待たせている。これは比喻でも何でもなく、既にお母さん達が彼等の手の内にあると言う事でしょう。

狙いは確実に私達の力ですね。クズノハの方達でも護りきれなかったシエルターを私達が守り抜いた為に目を付けられてしまったのでしよう。

しかし…まさかこのような手を使ってくるとは思っても寄りませんでした。人は自分達の為なら何でも出来ると聞きますが正にその通りなのです。

「ちょっとアンタ…何やってるのさ…?」

「ひっ!? あ、い…いえ…これは私ではなく…」

「泉さん。どうか落ち着いてください」

「…でもっ！ みゆきさんのお母さんがっ！」

憤りを隠せない泉さん。私達の為に其処まで怒ってくれるのは嬉しいのですが、この状況もモニターされているはず。となればこの状況は私達にとって悪手です。

私達が動揺すればするほど、人質と言うのは価値が出て来るのですから。

「まさか……これは。どう言う事ですか高木さん？ 流石にやりすぎでは？」

「……私の方からは何とも……と、とりあえず此方の方でお話を」

「っ……このっ！ー！」

「ストップだよこなた。彼は多分何にも知らない筈、とりあえず行くしかないかな……」

「……うん。もしみゆきさんの両親に酷い事したら……このシエルタ―内に死体が複数出来る事忘れない方がいいよ」

「は……はい……で、では此方に……」

高木さんに促され私達が進もうとすると、皆さんが話しかけてきました。

かがみさん達のお父さん以外の方は内容が良く分かっていない為、頻りに不思議そうな表情を浮かべていますね。

「えーと…つまりどう言う事なのさ？」

「ごめん、みさきち。詳しい話は後ですから。後、絶対に個別で動かないで…かがみのお父さん。後お願いできますか？」

「分かったよ。これでも多少の腕はある、彼女達とその家族位なら此方で何とかしておくよ…本当にすまないね君達」

「いえ。どうか御気になさらず…今回の事はある意味此方の落ち度ですから」

「まあ、何となくあちらの希望は分かるので、その辺如何にかしないとか…本当に次から次へと問題がやって来るな…」

頭を痛そうに抑えている佐藤さん。

メシア教徒との激戦の後に、今度は人の悪意と闘う事になるので…から…それも私の所為で…

下手な行動をとってしまえば、ここまでの相手…お母さん達が何をされるか分かりません。私達が出来る事は最大限冷静に努める事。

ある意味泉さんが怒ってくれて助かりました、もし泉さんが怒っていないければ私が暴走していたかもしれせんから。



高木さんの道案内の下歩いていく私達、其処には溢れ返らんばかりの人達が不安の表情をしながら私達を見ていました。

その中にはチラホラとご近所の方も見え隠れしています。何と云うか…言葉に表せない感情が心を支配していくのが分かります。

助けてあげたい…でも助けられない。両親が心配、でもこの後私達がさせられる事についても心配…

考えていても仕方ありません、今私達に出来る最善を行うだけです。絶対に両親に手は出させません。

「……………」

人ごみの中を歩いているとボソッと佐藤さんが呟いたのが聞こえました。

同時に感じるマグネタイトの波動…まさか？

「??? どうかなさいましたか？」

「いえ。急いでください、さっさと終わらせたいので」

「わ、分かりました」

何かあったのかと振り向く高木さんをあしらい先へ進む佐藤さん。

「どうやら気づいたのは私と泉さんだけのようですね。これだけの人数が居るのならば気づく事も無いでしょう。」

ふと佐藤さんの方を見ると、まったくの無表情で歩いている彼が見えました。

私達も何も気付かない振りをしてついて行きます。暫くすると見るからに頑丈そうな扉の前にやってきました。

恐らくここにこのような事を仕出かした相手が居るのでしょう。

「此方になります。あ、すみませんが武器などは此方で一時的に預からせてもらいます。」

「断らせてもらいます。僕達は貴方達を信頼していない。丸腰で警戒している相手に会うほど馬鹿に見えますか？」

「で、ですがこれは規則ですので……」

「あのさ、いい加減にしてよね？ 私結構てっぺん来てるよ？」

武器やCOMPを預かる、確かに中で暴れられたら大変ですからね。

でも、武器ならともかくCOMPを渡せというのは流石に看過出来る話ではありません、結局武器だけは預ける事になりました。

小竜姫の剣も預けることになりましたが、彼女を悪用などは出来ない筈ですし最悪素手でも戦えますから気にしない事にします。

流石に余程の事がなければ一般人相手に戦うと言つ愚かな真似はしませんが…

扉がゆつくりと開くと其処は先程までの劣悪な空間とは程遠い、快適な空間が広がっていました。

部屋の奥には、外や内部を見る事が出来るモニターがあり、冷蔵庫やTV、基本的な家具などが完備されています。

お金持ちの特権…とは言いますが、このような時にでも貧富の差を見せ付けられると、精神的に辛いですね。

「おおっ！ よく来てくれた英雄達よっ！」

数人のこのシエルターの管理者や権力者達が手放して歓迎してきました。

でも、何故でしょうか…彼等から感じる気配がとても嫌な感じがします。強くなって相手の気配をある程度探れるようになった所為でしょうか…

その貼り付けたような笑顔や態度に比例して強い悪意などを感じます。

「ここから……ですね。最大の手札はあちらにありますからここからどうやって動くかです。」

「止して下さい。別に貴方達を助けに来た訳じゃないので」

「……………」

対人は苦手な筈の佐藤さん……私達の事を考えて自ら交渉を買って出してくれたようです……本当に何とお礼を言っただけじゃ……

泉さんはキッと相手を睨みつけ、一言も話しません。下手に会話すれば怒鳴りつけたり攻撃してしまう可能性があるので抑えているでしょう。

此処からの会話は私と佐藤さんが相手をする事にします。

「ご無事で何よりです。それで、私の両親を待たせていると聞きましたが今から会いに行ってもよろしいでしょうか？ 暫く会えなかったのも心配させてしまっているので」

「なるほどなるほど。安心なさいご両親は此方で手厚く保護しているのですね。聞けば 社の社長と言うのではないか、そんな方をあのような場所で一纏めに出来ないのですね。体の不調も訴えていたので、今清潔な所で休んでもらっているよ。後で会いに行くと良い」

「何か大事な話があるようですね。ここはこのパーティーのリーダー

「を務めている僕が受け持つので、彼女を先にご両親に案内してもらえませんか？　彼女もご両親に会いたがっているのです」

まずはお互いに簡単な牽制。

見た感じ私達を見て脅える所か嬉しそうに笑っていますね、自分達を護る兵士が出来たと喜んでいるのでしょうか。

私達がここで暴れるとか考えていないようですね…確かに両親が人質に取られている以上迂闊な真似は出来ませんが。

清潔な部屋…ですか。それが比喩だとしても私達が知らないシエルトーの一室に監禁されている可能性が出てきましたね…本当に油断ならない方です。

「いやいや。せめて礼を言わせてくれないかな？　君達のお陰で尊い自衛隊員やクズノハの者達の命が全てではないが救われた…本当にありがとう。このままだったらきつと避難している者達まで殺されていたかもしれない。私達は感動しているのだよ、君たちの様な少年達が命を掛けてまで彼等を助けるなんてっ！！」

「……………よく其処まで口が回るよね……」

「成り行き上仕方ない行動でしたから、それで礼は以上ですか？　ではありがたく受け取らせてもらいます。これから行かなければならない場所があるので失礼したいのですが」

「いや、待つて欲しい君達の腕を見込んで頼みがあるのだよっ！

詳しい話は石山さん：其処に居る方がそうだ。彼はクズノハのスパンサーでね、今回の有事の際に対して町民の前立って避難させた方なんだよ。出来れば話を聞いてあげて欲しいんだ」

周りに居た人達が、まるで台本か何かを読む様な芝居掛かった仕草や口調で話しかけてくる。

とりあえず聞くだけ聞かせてもらいましょう。

「うむ。君達には本当に心苦しいのだが：先程の戦いで自衛隊員もクズノハの戦士達も多くが傷つき疲弊してしまつた：現在またあのよ様な者達に襲われてしまえば必ず負けてしまうのだ。

其処で、君達の腕を見込んで頼みがある！ 君達はデビルサマナーなのだろう？ 報酬を渡すのでこのシエルターを護つてくれないだろうかつ！！」

「つまり雇われて欲しいと？ そういう訳ですか？」

「勿論現金で1千万程用意している。通常のデビルサマナーの報酬よりかなり高く見積もつたのだが、どうか？ 勿論普段は私達と同じように特別な避難場所も用意してある」

それだけ聞けば確かに、悪くは無条件でしょう。

基本専守防衛でのシエルターの警備で1千万円、通常のデビルバスターや能力者にとつても破格と言つても良いかもしれません。

ですが、現在この世界は異界に包まれその現況を如何にかしない限りは元の世界に戻る事など出来ません。

そうなればお金はただの紙切れでしかなく、其処に一切の価値などないでしょう。

もし世界が元に戻ったならば、今度は世界中に核が降り注ぐと言う現実に直面することになります。

この町の核誘導施設をどうにかすれば、この町周辺は被害を免れるかもしれませんが、それでも全てを護りきれる可能性は低い…世界が壊れてしまえばやはりお金は無用の長物です。

彼等の依頼が正当ならば、かがみさんやつかささんがここに居て、核問題や異界問題を解決出来ていれば、家族、友人、知人を此処に呼び寄せていれば受けても良かったかもしれません。

家族や大事な人が居る此処を守るだけならば、別に問題など無いのですから。

「申し訳無いのですが、断らせてもらいます。僕達はこれから頼まれている仕事がありまして、そちらを優先させないといけないんです」

「…1千万円では足りないか…？ 言うのかね？」

「お金は確かに魅力的ですが、それよりも先に僕達はこの異界の元凶を倒して、この町を異界から元に戻さなくてはいけません」

「ど、どう言う事なんだい？」

「この異界は、ある悪魔が作り出しています。そして僕達はその相手を知っている。その悪魔さえ倒す事が出来ればここで脅える必要なんて無いんですよ」

「成程：だ、だがそれはクズノハの人間に任せれば？ 君達がすべき事では無いのではないかね？」

「私達が行くつて時点で分かって欲しいなあ。その悪魔も強いんだよ？ 最悪あのシスター以上かもね。悪いけど彼等じゃ返り討ちだよ？？」

「そ、それはわかるが、此方としてもシエルターを護る強い護衛が欲しいのだよ。どうにかならないかね？」

佐藤さんがここで異界からの開放と言うカード切りました。

そもそも彼等がここに避難しているのはこの町全体が異界化している為ですから、この異界を消去してしまえば悪魔は現れず此処に避難する意味も無くなります。

となれば態々無駄なお金を払わずとも少し時間を置けば救われると考えると、私達を束縛はしないだろうと考える筈です。

「しかし、その間にまたメシア教などに襲われてしまえば…」

「其処も問題ありません、詳しい話はお伝え出来ませんが彼女達が



狙っているものは大体分かっているので」

此方はブラフですね、メシア教が何故此処を襲ってきたのかは、いくつかの見当が付きまますからそれを元にハツタリを掛けていきます。

これは私も乗らせてもらいましょう、出来る限り穩便に事を運びたいですからね。お母さん達を救うには相手を刺激する事はせず、希望を見せる事で相手を油断させます。

「恐らく彼女達は、ある人物を探しに来たのでしよう。その人物もある程度予想がついています」

「そ、それは本当かねっ!? つまり彼等が探している人物を差し出してしまえば…んっ、これは失礼…」

「それは逆効果にしかならないでしょうね、しかし目星はついているのでこちらで何とかしようと思います。その為にはここを離れる必要があります」

「…………… 1億だそう」

「…は?」

「石山さん? 一体どうしたんですか?」

「高良さん。君に1億を出す、その金で私専用のボディガードになってもらいたい。何、嫌とは言わせないよ?」

「っ！？ ちよつと、今話をしてる途中じゃんっ！」

「君達が行けばいいのだろう？ デビルサマナーが二人も居るんだ、出来ない訳が無い。だがね、このシエルターは他に守る人間がいらないだよ。護る為には強い人間が必要だ。面倒臭いやり取りはそろそろ終わりにしようじゃないか？ 1億出す、これで動いてもらえんかね？」

上手くいきそうだった会話を途中で切り飛ばし自分の都合を押し付けてきた石山さん。

同時に両親の事を切り札に出してきました。

「世界を元に戻す？ 結構だ、正に結構な事だ！ だがねそんなものはどうでもいいんだ、護る力が！ 護る力が欲しいんだよっ！ さあ、答えてくれないか？ 色好い返事でなければご両親が大変な事になるかもしれんぞ？」

「な？ 何故其処までするんですか石山さんっ！ 彼等の話を信じればこの様なことをしなくてもっ！ 寧ろこれからの事を考えて最大限の助力をするべきではないのですかっ！！」

「ええい！ 煩い！ 高木君は黙っていたまえっ！ さあっ！！」

急に変わり果てたような、血走った目で私を見つめる石山さん。

その表情は、目的の為には総てを棄てる覚悟が伺えました…私が欲

しい？ おぞましい話ですが私の体が目的…の様には見えません。

まるで何か、縋り付いている様な。その様な感じがします。

どうしましょう…折角佐藤さんが、上手く交渉してくれていた筈なのに…このままでは埒が明きそうにありません。

「なんだろ…あの人少し変だよ…」

「……まずいな…話を長引かせる予定だったのに…」

最悪、私だけでもと言う話なので受け入れる手も…考えなければいけませんね。

「早くしたまえっ！ 受けるのか？ 受けないのかっ!？」

勿論受けませんわぁ

「「「なっ!？」」「」

この状況を打ち破ったのは、佐藤さんの仲間パールヴァティさんの声でした……

高良みゆき視点解除



Continue 94 〱 複雑で単純な世界?? 〱 (後書き)

佐藤君交渉頑張りました。勿論色々タネを仕込んでいたようですが。

力押しでどうにか、と言うのも考えましたが。そちらは何というからしくないので切りました。暴れるのを期待していた方は申し訳無いのですよ。

実際彼等が求めているのは傭兵で、お金を出すまで言っているの  
で、みゆきさんのお母さんさえ人質に取らなければ、普通に交渉出  
来たかもしれません。

今回は異界からの開放をちらつかせて穏便に行かせる腹積もりでし  
たね。

例えそれがダメでも2手3手は考えていたようですが。

後優しくはありません、核の事を伝えてませんし、どうにかなれば  
後腐れなく逃げる予定でしたねー(汗)

うまーくこの辺かけたかなあ…悩み所です。

どうでもいいこと

弟に夕食を作ってもらいました!! 感激だー(涙)

うう、私明日からも頑張るよっ! 優しさが目に染みます。

ふふっ…これがささやかな幸せと言う奴ですね。

このまま成仏しても良いでしょうか?(マテ)

## 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。

もう直ぐシエルター編終了ですし、コミュが近いかなっ！

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：145票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：191票（個別エンドフラグまで信頼度が後…？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：38票（…？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：24票（…？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：31票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら…：メインHPで書く可能性があります  
（危険）

### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで

५.

Continues 〱 複雑で単純な世界？？〱 (前書き)

という訳でシエルター編最後の一步手前なのですよー。

時間的な関係で、途中でぶつ切りにしました、申し訳無いのです  
ほろろ

短いですがとりあえずどうぞなのですよー。

という訳でお風呂行ってきますっ！！

ほんのり追記事項

いつもアンケート有難う御座います！ 本当に嬉しいのですよー  
えとですね、今回からアンケートオンリーの方の返信は一括して此  
方でお礼をさせてもらうことにしました。時間的な都合もあり申し  
訳無いのですが、どうかご了承くださいなのです。

いつもアンケート有難う御座いますっ！



Continue95 〈複雑で単純な世界?〉

パールヴァティ視点

『さて、サマナー様のお役に立とうかしらねえ』

COMPの中で会話は聞いてたわあ、人間ってそう言う所が目敏い  
と言っか、「らしい」わねえ。

もっと簡単に考えて生きていけば敵も作らずに済むのにねえ。

まずは別の区画で話を聞いてみようかしらあ、殿方なら直ぐに教え  
てくれそうですものお。ふふっ、ちよっとだけ味見もしちゃおうか  
しらねえ…なあんて

まだご馳走を頂いてないもの、おやつを食べちゃったらお腹一杯で  
折角の味が駄目になっちゃうから止めて置こうかしらあ。

くすくす、サマナー様の味はどれほど甘露なのかしらねえ。

『ねえ、其処のお兄さあん、少し良いかしらあ?』

「え…お、俺ですか…? あ、はいっ! 何でも聞いてくださいっ」

うふふ、やあねえ。そんなにジロジロ胸ばかり見ると…感じちゃうじゃない

少しイタズラしてあげてもいいけどお、今はサマナー様の為に動かないとねえ。

『ちよつとお、案内して欲しい場所があるのよお。道案内お願い出来るかしらあ?』

「な、何なりとっ!！」

『くすくすくす、可愛い子　じゃあ　区画に案内して頂戴』

「はいつ!！」

別に魅了の魔法は掛けてないわよお。魅力的過ぎるのも罪なのかしらねえ

でも、全然サマナー様には通用しないのよねえ…この前は夜這いしても駄目だったのよお。女は度胸って言うし、次に期待しましよ

「あ、あのお姉さんの名前は…?」

『くすくす、お互いに名前を知っちゃったら、本気になっちゃうからあ、ね?』

「…じくっ…そ、そうスね…」

『ふふっ　行きずりの間柄って…良いと思わなあい？』

「そ、そりゃもうっ！！　おおっ！？　腕に…む、胸が当たって…」

『それじゃあ道案内お願いするわあ、急いでくれたら…お礼しちゃうわよあ』

「任せてくださいっ！！　こっちっスっ！！」

結構可愛いし食べちゃいたいけどあ、時間が無いのが残念ねえ。

この場で私が召喚されたんだもの、役割は大体理解しているわあ

一を聞いて十を知ると言う奴ねえ。

それに私はアリスちゃんや、アメリカちゃんの次に人間っぽいから騒がれ難いのも加味されてるのよあ。

それじゃあ、急ぎましようかあ

…  
…  
…

「…っですっ！」

『道案内有難うねえ。本当は色々してあげたいんだけどあ、今回は

これで許してねえ  
』

頬に軽くキス。勿論口でした方が気持ちいいし好きだけどマグネタイトを吸っちゃうから出来ないのよねえ。

完全に呆けて私を見てる彼に手を振って別れてく、さあここからが本番かしら。

まずは色々話を聞かないとお。

ここであの子の両親が捕まってから時間は経ってないし、急げば間に合うかしらねえ。

さあて、私なりに情報を集めようかしら。

情報収集中……………

ちよつと魅了したり、誘惑したり、少し気持ち良くしてあげたりして情報をゲットよお　私って実は才能あるのかも知れないわあ。

ほんの2〜30分前に、一組の家族が黒服っぽい人に促されて移動したっていう確定に近い情報を獲得出来たわねえ。

成程ねえ。場所も大体把握出来たし、急がないとお　ふふっ、サ

マナー様にご褒美貰えるかしらねえ。

『それじゃあ、其処まで案内してもらえるかしらあ？』

「はいっ！」

「任せておけっつ！　だ、だから後で…」

「お、俺が先に頼まれたんだぞっ！　お、俺がっ！」

「何言ってるんだ俺だよっ！」

『くすくす、全員相手でもいいわよお。急ぎましょっつ？』

「くくくおおっ！」「くくく」

「男ってサイテー…」

「こんな時に何考えてるのかしらね…っつかあの女、見た目と行動が伴ってないし…魅力的なのがム力つくっ！」

情報収集の道すがら、ちょっと騒がしくなっただけどお、誤差よねえ

大丈夫よお、貴方達も十分可愛いわあ

結構簡単に情報が手に入ったしい後は彼等には悪いけど、気持ちの良い夢でも見てもらいましょっつかあ。

「じ、この奥が特別区画ですっ！ さっきの人達はここにっ！」

「はあ…はあ…も、もういいだろうっ、な？」

『うふふ…有難うねえ　それじゃあ…気持ちの良い夢で果てて頂戴なあ　『淫欲の夢』』

淫夢に誘う、魔力の波が私を中心に溢れていく。

この魔法は基本誘惑の効果があるけどお、抵抗の低い人間は眠りについちゃうのよねえ

ふふっ、ごめんなさい。せめて夢の中で私と色々していてねえ

『起きたらスッキリしてるわよお　今は気持ちよく寝てなさいなあ』

後は…奥に居る人間を魅了して、とお。

ゆっくり歩いていくと、頑丈そうな扉の前に数人の警備員が見えたわねえ。好都合な事に全員男だし、直ぐに済みそう

この子達の前に立って、ゆっくりと服を脱いで行く私　さあ、虜になりなさい

ファイナルヌード……!

「……？ き、君っ！ ……ここで何をし……て……」

「どっした？ おいつ！？ ……しっかりしろ！ ……何があっ……」

「う……あ………あ……」

目の焦点が合わなくなつて、ずっと私を凝視してる警備員達、ふふ、屈強な男が魅力に耐え切れずに呆けた顔をするのを見るのは、いつ見ても楽しいわあ

くすくす、上手い具合に全員魅了出来たわねえ

『この中に夫婦以外の誰か居るのかしらあ？』

「……いえ……居ません……」

『そつなのお？ ……本当にい？』

「はい……命令で……閉じ込めました……何かあれば……脅せと……」

『通信が取れるのねえ？ ……どうやってるのかしらあ？』

「……この……専用の通信機で……対応します……」

『くすくす　それ私に貸してくれるかしらあ？　後お、この部屋を開けて欲しいのよお　お・ね・が・い』

「分かり…ました……」

操り人形と化した彼等を使ってえ、さくつと扉を開けると。

『あ、あらあ…？』

「はら？　どちら様かしら〜？」

「はて…？　ここにいれば娘に会えると言われたのですが。違う人ですね」

予想してたのは全然違う、どうみてもものほんとした夫婦が居たわあ……脅したりとかして脅えてる可能性も考慮してた分、拍子抜けよねえ。

でもお、何事も無くて何よりかしらあ。

『娘さんじゃなくてごめんなさいねえ　ちょっと用事がありましたのよお、こちらいいかしらあ』

「はいはいどござ〜」



あの子と違ってほんわかしてるわねえ。

この夫婦からあの子が産まれたのが微妙に信じられないわあ。見た目はそっくりだけども。

「……………」

『もう良いわよお、ちょっと気絶してて頂戴なあ？』

「…分かりました……………っ！！」

自分で後頭部を強打して気絶する警備員。ごめんなさいねえ 殺  
されないだけ有り難いと思つて頂戴ねえ。

さあて、このほんわか家族に伝える様な内容じゃないけどお、知ら  
せないといけないわねえ。面倒だわあ…

……………

……………

…

パールヴァティ視点解除

勿論受けませんわぁ

何処からともなくパールヴァティの声が聞こえてきた。

彼等が持っているらしい通信機から彼女の声が聞こえてくる。

上手くやってくれたようだね。内容も何も伝えられなかったのに、良くここまで動いてくれた物だ。後でマグネタイトをプレゼントしないといけないな。

みゆき？ 聞こえるかしら？ お母さんよ

お父さんも居るよ。みゆきは無事かい？

「お母さんっ！ お父さんっ！ 良かった…」

「おおっ！ さっすが大樹君っ！ 私達に出来ない事を簡単にやってのけるっ！ 其処に痺れる憧れるう」

「途端にハイテンションになったね、まああなたはそうやってた方が「らしい」けどね」

相手を射殺するような目をするこなたより、いつも馬鹿な真似してるこなたの方が僕的には好みだ。

高良さん夫妻の無事も確認できたし、万が一襲われてもパールヴァ  
ティに勝てる人間は此処には居ない事は分かっている。

状況的に完全に僕達の勝利と言っても良いだろう。

「という訳で、すみませんが高良さん夫妻は此方で既に確保させて  
もらいました」

「…な…！？ ば、馬鹿なっ！？ 馬鹿な馬鹿なっ！」

唾を飛ばす勢いで叫ぶ石山と言う男性。

持っていた切り札を行き成り横から掠め取られて混乱しているよう  
だ。そもそも何か感じがおかしかったけどね。

これで高良さんの家族も無事確保出来たか…演技とは言え上手い具  
合に交渉出来たものだと思う…実は物凄く怖かったけどね。

殺される云々ではなくて、単純にコミュ障な所為でこなた達以外と  
話すのは苦痛でしかない。それでも多少は緩和されてきたかもしれ  
ないけど。

今回は頭の中で考えた台本をそのまま読むような感じで、進めてい  
たお陰かどもる事も無く進められた。

とはいえ、もう少し誠意を見せて、更に話の通じる相手だったら、  
総てが終われば受けなくも無かったんだけどね…仕事だと割り切れ

ば良いんだし。

「な、なんと……………流石はデビルサマナーか…」

高木と言う人が僕を見て恐怖に顔を歪めている。

どうやらこの面倒臭い連中の中で唯一の常識人なのかもしれないな、何となく中間管理職の辛さを垣間見た気がする。

彼が居なかったら、このシエルター暴動が起きてそうだけどね。

ま、その辺はどうでもいいか。

「貴様等っ！ 初めからこれを狙って…ひっ!？」

「じゅ…銃っ!?! どこからっ!?!」

『まあ、私は一応悪魔なので、我が身を少しぼやけさせたりなどは魔力で出来るんですよ』

フォルトウナを構えて、さっさと用件を伝える事にする。

勿論初めから撃つ気などない。これは威圧交渉であって、まさかこんな人達を殺すのにフォルトウナを使う訳には行かない。弾丸だって無限にある訳じゃないから。

人間目の前に凶器を突きつけられたら、冷静な判断なんて基本出来ないからその心理を利用させてもらう。

このまま総てが終わった後に僕達を利用する、もしくは報復するなんて考えられないようにしなくては。

僕はともかく、家族や友人が居るこなたや高良さんが危険な目に合うかもしれないからね。それは…色々と嫌だ。

「先程の交渉、人質なんて取らなければ大いに考える余地はありません。でも、貴方達は初手から間違えたんです。これは警告です…僕達に干渉しないで下さい、異界の話は本当ですからこれからさつさと移動して開放する予定です。もし僕や彼女達、そして親類に手を出そうとした場合…貴方達全員を殺します」

「わ、分かった…君の言葉に従おう」

「後、他の人が似たような事をした場合連帯責任と言う事で全員殺します。嫌なら関わらない方が良いでしょう？」

此処まで言えば自分の身を護る為にお互いがお互いを牽制してくれるだろう。

要は此方に関心を向けさせなければいいのだから、こうする事で強制的に選択肢を削り取れば自ずと自分達の身の振り方を理解してくれるはず。

全員殺す…というのは基本的にはブラフでしかない。

彼等を殺す事に躊躇いはないけど、もし殺した場合後々厄介な事になりそうだから出来れば放置しておきたいのが本音だったりする。  
最悪の場合は躊躇いはしないけど。

「絶対に約束は守るっ！ ま、任せておきたまえっ！」

「わ…わかつ…た…だ、だから頼む…命だけは…」

「それと…クズノハの方を数名と、バスを借してもらえますか？  
今回貴方達の命を見逃す条件として」

折角なので此方から見逃す条件をつけてみた。あっちも人質を取ったりと色々やらかしてくれたんだからこれ位の意趣返し位は別に良いと思う。

クズノハのメンバーなら車の免許くらいあるだろうし、運転時の身の守りも可能だろう。

一般人ではなく能力者なのだから、最低限は自衛できる筈だし最悪僕達が護衛すればいいので、上手く行けばこれで大人数で歩く必要は無くなる。

後はあちらのシエルターで防衛をしてくれば万々歳だ。あちらの方はクズノハのメンバーは少ないし戦力の補充は必要だと思っから。

「そ、それもなんとかしよう……」

「……………くっ……これも総て石山氏の所為だっ！ だから初めから人質など止めようっ！」

「貴方も賛成していたではないかっ！ 何を今更っ！」

「何だっ！」

僕達をそっちのけで今度は責任の擦り付け合いを始める権力者達。

権力者の総てがこういう人間では無いと分かっているけど、何と言  
うか……

「此処まで来るとお粗末な喜劇だね」

「あーあ、高木って人頭抱えてるよ、ご愁傷様」

「……………くそっ！ くそっ！ 何故だっ！？ 何故思い通りに動かない！ 黙って私に雇われてば良いものを！ 金が足りないのかっ！？」

「…石山さん…貴方は…何処を見ているのですか？」

「ちくしょうっ！ このままだと殺されるっ！ 今度こそ私達は殺されてしまうっ！？ お前達には血も涙も無いのかっ！ 助けを求めている人間を助けないのかあっ！」

血走った目で此方を見て叫ぶ石山。

今度は支離滅裂な事を言い始めた、確かに先程こなたが言っていた様にどこかおかしい感じがする。

まるで現実を見ていないような…？

《ふん…成程な》

「オーカス？」

《あの人間、正気のように見えるが既に発狂しているようだ。それもちかなり危険な域まで行ってる様だ。最早処置しても遅いか、回復しても後遺症が残る程だぞ？》

COMPから聞こえてきた言葉に大人達全員が動揺しつつも、オーカスの言葉にざわざわと騒ぎ出しはじめる。

発狂か…確かに最初は理性的に見えたけど今は、錯乱しているような、混乱しているような感じがする。

戦っている時でも相手が発狂した事は無いし、見た事も無かったから分からなかったけど、これが気が狂っていると言う事なのか。

「通りで……オーカスさん。彼を何とか治す方法はありませんか？」



「みゆきさん…？ こいつがおかしいのが発狂の所為だったとしても助ける理由なんて無いんじゃない？」

「確かに…その通りかもしれないんですが。力を持つ権力者がおかしくなっていると其処で暮らしている皆さんが危険ですから…」

《出来なくはないぞ？ アメリアのアムリタなら100%とまでは行かないが治せる可能性があるしな》

《おお、アメリアの出番なのですか？ ご主人様の為ならば頑張るのですよー》

確かに可能性として、此方のシエルターに残る知り合いなども居るだろうし、そうなればここの防衛や内部の安全も考慮はしておきたい所だからね。

全部が全部守れる訳じゃないし、無理な事は分かっているのだから、出来る限りと言う意味なんだろうけど。

まあ、その程度の事なら特に問題は無い。正気に戻った彼が何か仕出かす可能性はあるけど、その場合は命が掛かっている彼等が意地でも止めてくれるだろう。

其処まで考えていた時、石山が突如訳の分からない事を叫びながら暴れだした。

「く、来るなっ！ 来るなあっ！ 外道共めっ！ 娘を！ 娘を殺させるものかああああ キカカカカカカッ！？」

「!?!? まさか…精神的に圧迫されすぎて、現実との区別がついてない…?!? とりあえず気絶させます、すみませんっ!」

「がっ!?!? あ…ああ…!」

高良さんが一瞬にして彼の後ろに回りこみ、締め落とした。

直ぐに静かになった彼をその場にゆっくりと倒した後、僕の方を見ていた。

仕方が無い…この後の憂いは断っておきたいし、直ぐに終わらせる事にしよう。

Continue 95 〈複雑で単純な世界?〉 (後書き)

セリフがいちいちえっちいパールヴァティの視点でしたー。

もう………君女神じゃないよ……次はサキュバスに戻るのかなあ……

おお……佐藤君が、佐藤君がオリ主っぽい事してる……

あれ……？ オリ主だから間違ってるのかな……うーん。

安定させたままの交渉より、脅しを込めた威圧交渉に切り替えて此方に関わらせない様にと考えた佐藤君でありましたっ！

そして切り札も奪われ、脅され完全に発狂してしまった石山さん。

アマリタで治るかなー？ そう簡単には治らないかなー……明日考えますねっ！

どうでもいいこと

朝は眠いのでよくコーヒーを飲みます。今日も今日とてホットコーヒーを飲みましたよ〜。

甘いのがブラック、カフェ・オ・レとありますが皆さんはどれが好きですかー？

私は朝は少し甘めのミルクコーヒーで、お昼や夜にはブラックを飲みます。

苦味が美味しいですよ〜。

## 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか  
次回コミュ話対象キャラ表

これはみゆきさん優勢ですねー。

もう直ぐシエルター編終了ですし、コミュが近いかなっ！

予定ではシエルター編が終わった後にコミュの予定です。

こなた：149票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：195票（個別エンドフラグまで信頼度が後：？）

ダッキ：6票（手助けフラグはON）

アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：45票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

フォル：26票（？？？なフラグが建つ？まで後1回）

雪之丞：34票（再戦フラグまで後1回）

もし…パールが受かったら……メインHPで書く可能性があります  
（危険

### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

Continue 96 〈複雑で単純な世界? ? ?〉 (前書き)

石山さん普通にフェードアウトしました(えー

この後出てくるかは、その場のノリと勢い次第です。

では、短いですがどうぞ。

今回のアンケートで、締め切りにさせてもらうのですよ。

明日のコミュキヤラはみゆきさんになりましたっ(わーぱちぱち

という訳で明日はがんばらないとすね。

次点はこなた、その次がパールヴァティです。

この二人は短いサブイベントでも考えておこうかなあ。

Continue 96 〱 複雑で単純な世界????

シエルター内・特殊患者用医務室

その後、大樹とこなたが救護班の手を借りて石山を運びつつ医務室までやってきていた。

「これでOKなのですよー。後は起きたら大丈夫だと思うのです」

「とりあえず現時点で権利を剥奪させて貰ってるから、馬鹿な真似は出来ないだろうね」

ここまで到着した後、直ぐにアメリカを呼び出して治療を行った。

アマリタを使ったアメリカからの話によれば、精神が悪い方向に「ズレ」ている為、完治はしないが大体の治癒は行えたらしい。

鎮静剤なども打っている為、表面上は落ち着いて眠っているように見える。

それを確認した後、漸く落ち着いたので近くの椅子に座り会話を始める3人。

「とりあえずあの場にキンキとアリスを置いてきたけど大丈夫かな」

「あー：あの二人って結構自重しないもんねえ。とりあえずは…いろいろ在ったけどミッシェンクリアーって所だねっ」

「戦闘もそうだけど、今日は本当に疲れたよ。出来ればこのまま倒れて眠りたい」

「ならアメリカと一緒に添い寝するのですっ」

「おーっと待ちたまへアメリカちゃん。そうは問屋が卸さないのだよ、つてまあ、実際問題大樹君は動きすぎたからね、少し休んでいいよ。後は私達に任せてさ」

《それがいいかもしれんのう。なあに、護衛はオーカスが居れば十分じゃろうな。ワシは図体が図体じゃからのう。ここでは呼び出せんし》

《魔王が護衛とか…世も末だな。まあいい、ゆっくり休んでいろ》

長い間の移動や、強敵との戦闘。更には間髪入れずに精神的に苦痛を伴う交渉を行った大樹。その疲れは既にピークに達していた。

気を抜けば直ぐに倒れてしまいそうな位、精神体力共に尽き果てている。

出来れば今日中に此処を離れたい事もあり、出来れば休みたくは無いのだがと考えるが、こなたとアメリカに説得されて軽く仮眠をとる事にした。

「じゃあ、少し休ませてもらうよ。ある程度の目処が付いたら直ぐに起こして欲しい」

「うんっ、今はゆっくり休んでよ」

「そうさせて…もらうよ……」

オーカスを召喚して護衛として配置する。

この場に居た医師は回復魔法を使える能力者の為、デビルサマナーの事は理解しているので別段騒ぎ立てる事は無い。

それでも目の前に魔王が召喚された事で、冷や汗が止まらなかったが。

召喚を確認した後、ベッドに倒れこむ。余程疲れていたのか、数分もしない内に寝入ってしまった。

こなたとアメリアの二人で、大樹を色々と介抱していく。

「やっぱり疲れてたんだね。そりゃあれだけバンバンペルソナを呼び出したり、マジックカードとか使ってたんだから当たり前か」

心配そうな表情で大樹を見るこなた。

恐らく戻ってきてから自分達の中で一番動いている事は間違いないだろう。



それも、彼自身の目的では無くこなたやみゆき達の為に動いているのを分かっている為、感謝と同時に申し訳無さを感じてしまう。

だがそれは誤解であり、大樹としてもかがみとつかさは出来れば助けたいと思っているし、友人の為に動くのは彼にとって苦では無くなっている。

「連戦もしたですし、その後はエストマとかの魔法の連発もしてましたからご主人様は今回凄く頑張ったのですよ」

「そだね……………やっぱり、私達って凄く大樹君に頼ってるなあ……………」

「ふえ…？ それは駄目なのですか？」

「んー…まあ、ね。仲が良くても頼ってばかりじゃ依存しちゃうし、こういうのは出来る限りイーブンで居ないと駄目になっちゃうからね。でも大樹君は望みってあるのかな……………」

あれが欲しい、何が欲しい、と言う状態では無いのは重々承知しているが、現時点だと自分達は大樹に頼りきっていると感じていた。

お世話になっている大樹の為に色々と何かをしてあげたいが、彼が何を欲しがって何を望んでいるか分からない。

ここまで来たらもう、『プレゼントは私』をやるしかないのでは、と見当違いな方向に思考が飛んでしまうほどに悩んでしまっている。

ゲームを買ってあげる…この世界が平和だったならばそれも良いかもしれないし、自分らしいとも思うが、そんなので喜ぶような感じには見えない。

デートは…自分が嬉しいだけじゃないかと頭を振って大樹を見つめた。

静かに寝息を立てている顔を見てうつすらと顔が赤くなるのを感じるこなたが居る。

「あー…大樹君が好きなのすら良く分かんないなんてなあ…」

彼が好きなのに、彼の深い趣味や、服装の好み、お気に入りの料理などその全てが分からない。

遊びに行った時も、基本は大樹を混ぜてアリス達とゲームしていただけだったので、深く探る事を考えていなかった事もあるだろう。

こなた自身、恋愛沙汰など今回が初めてなのだから仕方ないと言えるが。

『人間は暢気だな。ほれ、煩いからとっと散れ。やる事があるんだろっ？』

「あ、そうだね…んじゃ大樹君をお願いするね？」

『我とアメリカが居るんだ、あのシスターがまた突撃してこない限りこの辺で負ける訳が無い。サマナーに言う事ややりたい事があるならさっさと終わらせて来い』

「…うん。じゃ、行って来るねっ！」

こなたを見送った後、オーカスは大樹と石山を交互に見渡す。

『ふん。人間は本当に脆弱だな』

「ご主人様は強いのですよっ！」

『肉体的な話ではない。人間は心が弱いのだ』

「…ほえ？」

『確かに、人間という存在は脆弱でありながら、その身に無限の可能性を秘めている。或いは神に届くかも知れんほどに…な、だがそれと反比例して心は脆く脆弱だ』

石山は妻を殺され、娘を傷つけられて壊れた。

もし、似たような事を大樹も体験すれば、どうなるかは簡単に予想が出来る。

こなたが、みゆきが目の前で殺されれば。二度と蘇る事が出来なくなれば、大樹なら簡単に壊れてしまうだろう。

肉体が強くなるうとも、凄まじい力を身に宿そうとも、人間はその精神構造上、極端に弱い部分が存在している。

故に人は容易く狂気に陥ったり、盲目的な狂信に傾いてしまったり、簡単に属性が揺らぐ。

オーカスが見た中で最もこの中で心が強いのはみゆきだった。

確かにブレやすく、精神的に弱い部分が見えたがそれは基本的に誰でも持っている要素であり、それを抜け出した彼女は3人の中でダントツで精神が強いと見た。

彼女ならば、大樹が死のうとこなたが死のうと、両親さえ殺されても。悲しみはしても、怒りはしても狂う事はないと感じている。

こなたは、自分ではそう思って居ないだろうが大樹に依存している部分があるし、大樹は友人と言うネットクの為に道が揺らいでいた。

『…この人間は、言わばお前やあいつらの居ないサマナーの様な物だ。簡単に狂気に陥りやすいのはあのサマナーもだからな、せめて我達が護ってやらねばな』

「おお…オーカスも良い所があるのですねっ！　アメリカ初めて感心したのですよー」

『言うに事欠いてこの幼女は…くっ。実力では勝てないのが更に悔し…』

オーカスはアメリカの言う様に、大樹を完全に心配している訳ではない。

そもそも、魔王と言う存在であったオーカスが、如何に自分より強い人間であろうとも全幅の信頼を置く方がおかしいのである。

今現在従っているのは、サマナーとしての契約もあるが、それなりの信頼やこれから強くなれるという打算が込められているからだ。

そして、それは恐らくグクマツツも似たような考えを持っているだろうと彼は考えている。

完全に大樹を信頼し行動を共にしているのは、目の前にいるアメリカとアリス、キンキの三体だけだろう。

パールヴァティについてはオーカスも良く分からないらしい。

『で、両親と再会した方は今何をやっているのだろうな？』

「この人の娘と会って来ると言ってたですよー。何してるんでしょうねー？」

『ふんっ、別にどうでもいいさ。おい、其処の人間。飲み物を持って来い』

「は、はい、ただいまっ！ー！」

「魔王（笑）の癖に偉そうなのです」

『お前最近奴等に毒されてきてないかつ!? いい加減にしないと泣くぞっ!?!?』

……

……

…

両親と再会したみゆきはお互いの無事を確認しあつた後、これからについて話をしていた。

此方とは別のシエルターに、家族や親類、友人を護送すると言う内容。ただし此方に残るならば強制はしない。に全員驚いたり不安を感じていたが、どうにかスムーズに行きそうだった。

それも全て柊ただおとその家族が、みゆき達の内情をある程度理解していた為、尽力してくれたからでもある。

あちらにシエルターに向かうメンバーは次の様に決まった。

「柊家」「高良家」「岩崎家」「田村家」「日下部家」「峰岸家」、個人としては「パトリシア・マーティン」と、先程漸く再会できた

「黒井ななこ」

他にも数人程学校での知り合いや、近所付き合いのある人間達が居たが、其方は此処から出る事に恐怖などを感じている為、断られている。

それでもかなりの大所帯になってしまったが、この程度の人数ならばまだあちらのシエルターでも許容範囲内であり、後は移動する車両の都合がつけばいつでも向かえる用意は整っていた。

現在はクズノハのメンバーと車の都合をつけている所である。其方に関してはキンキとアリス、追加でパールヴァティが監視している為問題は無いらしい。

『何かしでかしそうだったら魅了するから大丈夫ですわぁ』とはパールヴァティの談。

「しっかし…卒業式の次の日にこないな事になるなんて、人生つてのはよく分らんなあ…」

「そうですね…でもこれは現実ですから、それを直視しなければなりませんけど」

「高良は強うなったなあ、まあ前々からなんとなく分かつつたけど、まさかあのモンスター倒せるまでになつてるなんてなあ。うちもMMOのキャラなら無双出来るんやけど」

「高良ちゃん達があの悪魔を倒してるなんて、初めは吃驚したわ」

「すげーよなあ。あのちびっ子も戦ってたか？ 想像できねーや」

「泉さんは私達の中で、中衛を担ってくれているんですよ。あの銃には良く助けられています。前衛は私で、総合的な指揮は佐藤さんですわね」

武器を持って悪魔を殺している、と言う事に其処まで恐れを感じていないみさお達。

まだはつきりと現実を理解していないのもあるが、それとは別に彼女達はみゆき達を信じてるからでもあった。

自分達を襲う化け物を倒す英雄、とまでは考えていないが大事な友人、先輩、家族であり、それに変わりはないと。

「しかし、その佐藤君だったかな…？ 彼は一体何者なんだい？」

「そーいや、私達と再会した時に佐藤がぽつんと居たけど、滅茶苦茶影が薄くて忘れてたかも」

「影が薄い……ですか。た、確かに佐藤さんは何も無い時は寡黙な方ですから。でも彼も大事な友人であり私達のリーダーの様な存在なんですよ」

大樹が自分達の暫定的なリーダーであり、デビルサマナーと言う能力者である事を伝えるみゆき。



裏の事情を知っている柊家の面々としてはデビルサマナーの部分で少し顔色を変えてしまう。彼等にとってデビルサマナーはダークサマナーの方が有名な為だ。

しかし、みゆきの真摯な説明により、悪魔を呼び出して敵と戦う立派な戦士だと伝えられた事で皆一様に安心していた。

大樹の能力は魔法以外どれも特殊過ぎるので予め説明しておかなければパニックに落ちいる可能性がある為に上手く行ってホッとしていた。

「デビルサマナーかぁ、ポケントレーナーみたいなものっスね！？」

「チガイマスよひよりん。ソコはマモノツカイというところですよ！ ヒッサツワザはバギクロスなんでスねっ！」

「いんやっ！ 大樹君はそれプラスガンナーでもあるよっ！」

「あ…泉先輩お帰りなさい」

ぴよんつと会話に乱入してきたこなたが居た。

「あ、お帰りなさい。あの方はどうなりました？ 後佐藤さんが見えないのですが」

「んー、まあ完治は無理っばいけどある程度まで大丈夫だったさ。

私としては治んなくても別にいいけどねえ…後、佐藤君は疲労が激しいから時間まで休んでもらう事にしたよ。一番頑張ってたしね」

「そうですね…私達の中で一番辛い所で戦ってましたから」

「あ、それとね。バスとクズノハの人だけど後2〜3時間でいけるらしいよ〜？ 時間的に暗くなってきたし安全の為に今日はここで一泊する？」

「…そうですね。夜だと視野が悪くなってしまうすし…皆さんはどうでしょうか？」

「お母さんは賛成よ〜 今日のみゆきと一杯お話したいしねえ」

「確かに夜は悪魔も強くなるからね、此方としても特に重要な用事が無いなら明日にした方が良いと思うよ」

現時点で既に夕方の18時を回っていた。

まだ春先な為日が落ちるのが早い。その為安全を第一に考えてここで一夜を過ごそうと言う結論に至った。

直ぐに用意出来るならば強行する事も考えたが、大樹が疲労状態な上に時間がまだ掛かるので無理は出来ない。

心配なのは、権力者が此処に来てまた要らないちよっかいを掛けてくる可能性もあるが、彼等は脅されている為にやるとしても間接的にだろ。

その程度ならば問題無いだろうと思考を切り替える。

「そういえばみゆきさん。あのおっさんの娘さんに会いに行った？」

「いえ、まだですね。まだ子供のようですし心に傷を負っているかも知れませんが、一応会って置きたかったのですが、まずは説明などをと思ひまして」

「それじゃさ、どうせ今日はここに泊まるんだし会いに行こうよ」

「んー。二人とも、今日は止めて置いた方がいい。時間的にそろそろ夕食の時間だし面倒だからね」

「あ、そか…じゃあ明日にしようかな、別にそこまで会いたい訳じゃないし無視でも良いけど」

みゆきが石山の娘である千佳に会いたいと言っているだけで、こなたにとっては其処まで重要視する問題ではない。

どちらかといえば、それよりも大樹と一緒に居たい、皆と一緒に居たいと言っ思ひの方が強かった。

勿論みゆきも、少女を助けたいとかそういう無謀に近い優しさを持っている訳ではない。

少女に会う事で、これからの事に完全なケジメをつけようと考えているのである。勿論、出来れば助けてあげたいとも思っているが。

「まあ、それよりなにより夕食っスよっ！ 今日はずいぶりに騒ぎましようっ先輩っ！」

「やっとゆたかに会える…今日は早めに休まない」と

「ユタカもゲンキしてるトいいですねっ」

まずは腹ごしらえと、これから全員に配布される夕食を待つ事にした………

………

………

………

## 一般用医務室

「……………」

ポロボロになったウサギの人形を抱いたままの少女…千佳がぼーっと天井を見つめていた。

その目に光は無く、何処を見ているかも分からない。

ただ、少女は小さく、小さく、声を漏らしていた。

「.....時が.....来た.....」

声が、小さな声が、誰にも聞こえない声がただ流れていく。

彼女は何も知らない、何も分からない、ただ。ゆっくりと世界が破壊に近づいているのを伝えるだけの機械になって。

まるで歌のように、全てに届いて、誰にも届かない、歌のように.....

彼女は壊れた為に、チャンネルが繋がった。

小さく小さく、誰にも聞こえない声で、謳う、歌う、謡う。

それは...神の炎を奪い、邪悪な念を潰し、無心の心が全てを穿つ為の初めの布石...

少女は壊れた歌を歌う。

知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となった…

物語が示す旅路を辿り、未来に淡い期待を託して。

そう…、とある魔術師がこう示した…

強い意志と努力こそが、唯一夢を掴む可能性であると…

……NEXT…COMMUSTAGE

Continue96 〱複雑で単純な世界???? (後書き)

なんだか最後に意味深なこと言ってます。

大樹君にとって、メシアやガイアは通り道でしかないですよねえ…

無心の道、漸く見えてきました。まだまだ謎は深まるばかりなので  
す。いやあ…本当にどうしよう(汗)

どうでもいいこと

ケンタッキーフライドチキンを買いました。

たまーに食べると美味しいですよねえ。

時々色々な味のが出てきますけど、私はシンプルな普通のが一番好きです。

弟は偶に出てくる辛いのが好きなんですよ。

皆さんはどんなのが好きですか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお  
答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回コミュ話対象キャラ表

アンケートはコミュ回終了時から再開です。

〱現在アンケート中断中

こなた：0票(個別エンドフラグまで信頼度が後1)

みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
ダッキ：0票（手助けフラグはON）  
アリス：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
パール：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
雪之丞：0票（再戦フラグまで後1回）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。



Continue97 〱 限りある平穩?〱 (前書き)

アンケート中断中

おー…間に合った…短いですがコンピュータ1をどうぞ

仕事が忙しい間は細かいのサブパートを書けるときに書きますね

Continue97 ～限りある平穩～

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

特別イベントが発生しました 対象：高良みゆき

信頼度3（親友フラグ）イベント

ヒロイン確定まで：『信頼度：5』 『MAX時選択肢有り』
が必要

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

Ready.....  
Ready.....  
Ready.....  
Ready.....  
Ready.....

特別イベント』壊れた平穩、壊した平穩。そして縊る事さえ出  
来ない日常』

Start.....

### 高良みゆき視点

夜21時、この時間は電力の節約もあり皆さん就寝を取る事になっ  
ているらしいです。

泉さんと仲魔の方は、万が一の事を考えて警備を買って出てくれて  
いますね、私は…少し思う事があってシェルターの入り口付近で座  
っていました。

小竜姫は、連れてきていません。今は一人で考えて居たかったので。

初めて私は人を殺した……………

今頃になって手が震えてきました。覚悟はしていたのですがやはり一段落着いて落ち着いてしまったら、例えようもない虚無感が私を包んでいました。

彼等は敵で、私達を殺そうとしている相手。悪魔を殺すのとなんら変わりはない、そう思っているても、やはり日本で生きていた所為が常識的な部分が私を責め苛む。

殺さなければ生き残れなかった、殺さなければ皆が殺されていた。だから殺した、それに対して後悔はしていません。

後悔はしてないのに……………

「どうして…こんなに手が震えるのでしょうか…」

全身が冷えた感じがして両手で体を抱きしめる。

ガタガタと体が震えているのがわかります…ああ、今になって漸く実感してしまった

私は人を殺してしまっただと、相手は二度と生き返らず、ただの死体になったのだと。

泣きはしません、泣くのは仲魔の方に対しての侮蔑なのですから。悪魔を躊躇無く殺せて、人間を殺して泣きましたなんて、笑い話にもなりません。

それに、こうやって戦う事は自分で決めたのですから。

「自分の心は、思うようにならないのですね……」

「当然だよ、それが出来れば聖人だと僕は思うね」

「……………佐藤…さん？」

「こんばんは。……………仮眠し過ぎたかもだね、少し体がだるい」

声が出た方向を振り向くと、其処には佐藤さんが居ました。

いつもなら気配などで大体察知出来るのですが、ここまで接近に気づけないほど疲弊していたのですね。

「はい、珈琲。暖かい奴をカードにしておいた奴だから。」

「あ、頂きます……………あっっ」

「両親と話は終わったのかな？」

「はい……とても心配を掛けてしまいました。いつも笑顔のお母さん

の泣き顔を初めて見た気がします」

「こうなったのはある意味不可抗力だよ。寧ろ悪いのは高良さんを攫ってきたあの不良だしね」

「そう…ですね」

お母さんに泣かれたのは生まれて初めてでした…私の事を心配してくれたお母さんとお父さん。

私はここまでこの二人に愛されていたのだな、と改めて実感しました。そして同時に心配を掛けた事に対しての申し訳無さで私もつい泣いてしまいました。

ちなみに皆さん私達が人を殺した事は知りません。流石に人を殺すと言う事を伝える訳には行きませんから。

「あ…あの佐藤さん。すみません…私佐藤さんの能力の触りの事を皆さんに伝えてしまいました。事後承諾になつてしまい申し訳ありません」

「…ああ、ペルソナとかデビルサマナー、魔法の方かな？ あつちの二つは内緒にしてくれてる？」

「はい、其方はそうそうと伝える訳には行きませんから」

文珠とマジックカードについては伝えていません。あれは佐藤さん

の切り札であり、無限に近い万能性を持っている能力ですから簡単に伝える訳には行きません。

もし、伝えなくてはいけない時が来た場合は、佐藤さん自らが口にするのが大事だと思いますし。

「そうか、となると…特に問題は無いかな。問題は心の問題…だね」

「……………そう、ですね。分かってはいるのにどうにもならないのがもどかしいです」

「そういうもの、だと思っよ僕は」

「え…？」

「僕は今でも悪魔が怖い、人間が怖い、攻撃される時はいつも殺されるかもしれないと脅えてるし、人間の悪意はそれだけで怖気が走る。慣れないし、これからも慣れないんだろうね」

「そう、なのですか」

私が見ている佐藤さんは、寡黙で冷静、少し人間不信の気がありますが実は凄く繊細で優しい方。

戦闘ではいつもブレる事無く私達に指示を出して自らも戦い続けている、私達以上の経験を持つ戦士だと思っています。

でも、そうなのでしょうね。私達は同じ年なので、悪魔を殺

して、人を殺して何とも思わない人ではないでしょう。

「人の事を心配できる程僕は、成長もしてないし達観もしてない、割り切れとか後で考えろとかも言えない。それで簡単に割り切れるなら理解出来るなら此処に居ないだろうしね」

「……………」

「怖いなら怖いで仕方ないと思う。人を殺して罪悪感を持つななんて口が避けても言えない。悪魔を殺して何も感じない事を指摘するつもりも無いよ。だって僕も似たようなものだからね」

「佐藤さんも…ですか」

「当たり前、だね。僕達は簡単に言えば、力あるだけの一般人だしね。何が正しいとか何が悪いとか、僕だって分からない。寧ろ答えなんて必要なのかな…？」

罪に対しての罰、求めに対しての答えは必要ではない…？

「僕等に出来る事は、我武者羅になって明日を生き延びる事だと思う。例えどんな手を使っても、人を陥れても。それに関してはあの石山って人と似た感じかな」

「ですが、佐藤さんは自分の為ではなく私達皆のために…」

「違う。僕はこなたや高良さん、柊さんに妹さん。それだけの為に



動いてる、それ以外に今の所情がある人間なんて数人も居ないよ」

佐藤さんは言いました。

自分が動いているのは、私達を護りたいという自分の目的の為だと。

折角出来た友人を、理不尽に死なせてしまうのは寝覚めが悪いし、居なくなってしまうと寂しいからと。

その為になら、どんな事でもするし、一切の妥協などしない…と。

「僕はどこまでいっても僕の事しか考えてない。でも、この考えは駄目かな？」

「私には判断出来ません、ね。でも…その思いのお陰で、私達は今もこうしていられるんですよ…そしてその気持ちは凄く嬉しいです」

偽善…では無いのでしょうか。単純に友人を助けたいから、そう決めたから自分が動いた。

その目的があるから、怖くても辛くても何でも出来るのですね。

「その過程で今回みたいに、恐怖に負けそうになったりする事だっ  
てあるかもしれないね。でもさ、一人で悩む位ならこなたに相談し  
ようとか考えた方が良く。悩んで動けなくなるより、罪の呵責に押

しつぷされて駄目になるよりきつと有益だと思つよ。僕は仲魔に色々頼ってるしね」

僕達はどこかの英雄でも救世主でも、ヒーローでもないんだから。

そう言つて私を見る佐藤さんは、少しだけ恥ずかしそうにしながらも真つ直ぐに私を見てくれました。

それが凄く嬉しくて…一人で悩もうとしていた自分が、馬鹿みたいに思えて…それと同時に心の重みが取れていったような感じがします。

同時に、少し胸が高鳴ってしまうのは、仕方ないかもしれませんがね。

「根本的な解決にはなつてないけど、僕から言えるのはこの程度…かな。ごめん、もう少しまともな事でも言えればいいんだけどね…」

「いえ、有難う御座います。大分楽になりました。そうですね…わざわざ一人で悩む必要なんてありませんでした。私には家族が、親友が、仲間がいるのですから」

「…そう言えば、こうやって二人だけで話すのは初めて、かな」

「そ、そうでしたね…あ、あの…」

「今まで、こうやって話す友人なんていなかった、僕は苛められっ子だったからね…と言つか最終日までそうだったけど」

「私としてはどうして佐藤さんが苛められていたのか、良く分かりません…」

こうして話していても、凄く話しやすいですし一歩引いた感じ、と言っているのでしょうか。話を聞くのが得意のように感じますから。

魅力的…とは言えませんが、そこまで見た目が悪いとも思いません。強いてあげるならば、余り他人と関わらないようにしている感じがしましたが、それが苛めの火種になるのでしょうか。

「小さい頃からだったからね、僕も分からないよ。両親も僕を見てなかったしね。学校では「気持ち悪い」「キモイ」「ウザイ」「臭い」って色々言われてたな。最後は物申したいけどね」

「……………」

「学校も家も地獄だった。どこにも僕の居場所なんて無かったし、唯一パソコンでネットサーフィンしているのが僕の楽しみだったな。だから今は例えこんな世界だとしても僕にとっては色の有る世界に感じる。高良さん達にとっては不謹慎かもしれないけどね」

「そんな事はありませんっ！ 良いではないですか、喜んだって…」

「ごめん、同情を言うようなこと言ったね。でも、だから今は結構充実してるよ。友人が居るし、仲魔も出来た。僕にとっては今は幸せなのかもしれない」

佐藤さんにとつては、地獄の様なこの世界でもきつと幸せを感じているのかもしれない。

そこまで私達を想って貰えて、嬉しいと思う反面…世の中がそこまで厳しいと言う現実に考えてしまう所があります。

私は皆さんが居ましたし、両親はとても優しくかった。

世界は明るくて、この先もずっと未来が続くと信じ、幸せを噛み締めていました。

でも……………佐藤さんは私達が幸せを感じている間も、泣き、悔しがり、痛み、嘆いていたのですね。

ぬるま湯の様な地獄……………地獄の中の楽園……………どちらが幸せなのでしょう。

「さて…こなたの所に行つて来るよ。多分、そろそろばててるだろうし、夜食でも持つて行こうと思う」

「あ、私も一緒に…」

「そろそろ休んだほうが良いよ、精神的なダメージは僕が先程身を持って知ったからね…何かあるなら小竜姫が居るんだし、神様なんだから色々話を聞いてくれると思うよ」

「……………そう、ですね…分かりました。佐藤さんも早めに休んでく

「ださいね？」

「うん、有難う。それじゃまた明日」

「はい、また明日です」

歩いていく佐藤さんを見送る私……………ほんの少しだけ、名前  
で呼び合っている泉さんが羨ましいと思ってしまうました。

「……………や、やだ私ったら……………でも……………」

顔が真赤になるのが分かりました。

そう言えばこうやって男性の方と夜中にぶ、二人きりでお話したのは初めてです……………

心臓がドキドキ……………言ってますね。ど、どうしましょう。

「と、とりあえず戻りましょうっ」

胸に両手を当てて、先程の事を思い返しながら私は元来た道に戻って  
いきました。

もう、人を殺した事に対する苦しさは完全に消えている事にも気づ  
かずに……………

特別イベント終了

大樹 みゆき信頼度 + 1 (親友)

みゆき 大樹信頼度 + 1 (気になる異性)

大樹はみゆきを心配している…

みゆきは大樹に淡い気持ちを抱いているようだ…

みゆき最終選択肢が開放されました。

信頼度が【5】の時にデートイベントかコミュパート時に選ぶ事が

出来ず。

一度決定すると二度と変更する事が出来ません

Confliction ~ 限りある平瀬? ~ (後書き)

~ アンケート 中断中 ~

~ ヴィンピキゴロウ 中断中 ~



Continue98 〽限りある平穩? サブパート〽(前書き)

アンケート中断中〽頂いたアンケート票は現在無効にさせてもらってます、ご了承ください。

ふははははっ、残り数時間で書き上げる私。今日はそろそろ寝るのですよー(笑)

気がつけば書いてましたっ! という訳でどうぞ〽

前回アンケート2位 こなたんのターンですよ〽。

一切信頼度増えませんがねっ(えー 内容は…んー、何でこれで増えないんだろっねと言っ(えー

〽重要〽

いつも感想有難う御座います。

暫くの間、感想の返信などが出来ません。

Continue98 〱限りある平穩？ サーパー〱

サブコミュニティー01 〱ねえ？ 君の事好きで良いですか？〱

こなた視点

「異常なーしって所かな」

『それはいいんだけど、サマナーはそろそろ休んだら？ 何だかんだ言ってサマナーだって色々動いてたんだし』

「んー。実は眼が冴えちゃってね。眠れないから動き回ってるのもあったり」

今日は色々特大イベントがあったからねえ。

お父さんやゆうちゃんに無事会えたし、ひよりん達にも会えた。かがみん達が居ないのは凄く辛かったし、初めて人を殺した所為で微妙に気が立ってるのもあるかもね。

そう…ここにはかがみとつかさが居ないんだよね。

ここにも居ないって事は、もう嫌な予感しかしないよ…せめてどこかで無事で居て欲しいな。

『こなたあ、大丈夫ホ？』

「ん？ へーきへーきだよ」

『無理ハスルナさまなー。如何ニ汝ガ心強キ者ダトシテモ同族殺シハ辛イ物ガアツタダロウニ』

「んー…まあ、今更だよな。天使をスナイプしてる時点で、人間が殺せないっておかしいし」

『そりやそうだわな…って、人間そう都合良く行かないもんだろ、休んどけて。俺達はマグネタイトも十分あるし、問題無いからさ』

『オリアスの言う通りよ？ 明日は一般人の警備もあるんでしょ？ そんな時に倒れましたじゃ意味ないんだから』

「おおう、包囲網が完成してる…ちなみにディースとシルキーの意見は…？」

『右に同じですよ』

『同意ですわ』

「うぐう、なんて時代だ…とまあ、冗談はともかくとして、心配してくれてありがと。じゃあお言葉に甘えて少し休んでるよ。何かあれば起こしてね」

良い仲魔達を持ったなあ、私って。

事、仲魔に関しちゃ、大樹君の仲魔達にもひけを取らない気がするよ。

という訳で、近くに有る仮眠室に向かう私。いつもはここに自衛隊員さん達が居るんだけど、ほぼ全員医務室に直行済みさ。

他の人達も、私達が警備してるから休ませておいたよ。彼等も疲れてるだろうしーってのは建前で、本音はあまり相手に対して情を持ちたくないからかな。

話せば、相手を知れば情が湧いちゃうかもしれないから…そうやって何人も何人も助けるなんて、最後に転んじやうフラグにしかないからね。

この後世界がどうなる分らないんだし、私は本当に大事なもので外は切り捨てる事にしたから。

「ふう…いつもならゲームしてる時間帯だなあ」

MMOとか懐かしいな、あれから数日しか経ってないのにもう何ヶ月以上もそっちから離れてる気がするよ。

一応ゲーム機とかはカードにしてあるから暇な時に遊んだりしてるけどね。

今日は流石に、そんな気分にならないよ。

「かがみ、つかさ…何やってんのさ…会いたいよ」

ガイアに捕まった？ それともメシアに？ 悪魔に殺された？ 逃げる場所を転々としている？ まさか異世界に飛ばされた？

どれもこれも信憑性が有り、そのどれも私達に希望を持たせてくれる事はない。

もう一つのシエルターに居るって期待してた、それも見事に打ち碎かれた。

「殺した人間を悔やむより、大事な友達の方が心配って、人間としてどこか壊れてるのかな」

コンコン

「あ、開いてますよー」

こんな夜中に誰だろ？ クズノハの人かな？

と、ボケボケしていると、なんと、クズノハでも自衛隊でも無くて、休んでる筈の大樹君が入ってきた。

あ、なんか途端にテンションが上がって来たの感じるよ。私も分  
り易いなあ。

「って、大樹君。もういいの？」

「うん、ある程度はね。明日に疲労を持ち込む事は無さそうだよ」

「そりゃ良かったよ あ、こっちどうぞ」

「お邪魔するよ。そういえば仲魔は警備に行ってる様だね。こなた  
を探しに来たらフェニックスにこっちだって教えられたよ」

「私を探しに？ ま、まさか告白フラグっ！ くっ！ こんな色気  
のない場所では…やるねっ!？」

「それはない」

「デスヨネー」

至極あっさりとスルーする大樹君。いやあ、流石だね。

でもほんのり期待してたり。そりゃ女の子だし、こんな時間に会い  
に来たって言われたらそう感じちゃうよ。

「明日は昼前が出る事にしよう、朝も考えたけど、早すぎると頭が  
回らない可能性もあるからね。出来るだけ万全の状態で行きたいし」

「そだね。あ、バス見てきたけど結構大きかったよ。自衛隊の大型バスが有ったらしくてね。さっきまで時間ある人が整備してくれてた」

「成程ね…明日は問題なさそうかな」

「大樹君のエストマかあ…負担ばかり掛けちゃってごめんね」

「気にする必要は無いよ、魔法の練習にもなるからね。エストマの連打でMPを消耗した時の感じが何となく分かってきたし」

あんまり色気の無い話が続いていく。

皆をシエルターに移動させたら今度は、核爆弾をここに誘導させる装置があるらしい基地を叩きに行く。勿論かがみとつかさを探しながらになるけどね。

もしどこかで隠れているんだったらさっさと終わらせないといけないし。

そしてそれが全部終われば、異界を作ったあいつを殺しに行つて私達の冒険はオシマイ。

その後世界が通常に戻れば御の字だし、もし世界が崩壊しても私達が生きていけるだけの物は既に用意しているから後の憂いも無い…か。

何ていうか…この作戦の要も基本は大樹君だよ、私達ずーっと大樹君を頼ってる気がするな。

こんなんで…大樹君を好きでいて良いんだろうか…もしかして好きって言葉を友人って言葉を隠れ蓑に、私達は彼を利用しているんじゃないか。

勿論違うって答えられるけど、今現在私達がやっていること、頼っている事は間違いないんだよね。

私達は、大樹君に何をしてあげられるんだろう。

「ねえ、大樹君」

「ん？ 何かな？」

「あの…さ。もし全部終わったら、どうするの…？」

「全部終わったら…か。世界もこの町も全てが異常に気づき始めだし、僕達が安定して暮らせる世界はどうなるか分からないけど…多分、今と変わらないよ」

「変わらな…い？」

「仕事かデビルサマナーの依頼をこなして、お金を稼いで日々を暮らす。適度に欲しいものを買って、趣味を楽しんだり、皆と遊んだり、かな」

夢って言うには、あまりにも平凡すぎる大樹君の夢。



でも、この世界を見て尚、それを求めるのは凄く大変だと思う。でも、それだけでしかない。

何かが欲しい、何かを手に入れたい、そういうのが大樹君は無いんだな。

それが普通なのかも、普通に生きていたとしても、同じ事を願うのかもね。

社長になりたい、家が欲しい、お金持ちになりたいって言うのも所詮はこの辺と余り変わらないと思う。

私の夢は……………

「大樹君……」

「……！？ こな……………た……？」

私はぎゅっと大樹君を抱きしめた。

トクン…トクン…って彼の心臓の音が聞こえる。彼の体温を感じる。それが凄く嬉しくて、とても幸せで。

悩み事とか、辛い事とか沢山あるのに、彼の胸の中が暖かくて、一時的にでもそれを忘れそうになる。

「私の夢も…似てるよ？ 平和に暮らして、ゲームしてお父さんを

からかって、ゆうちゃんに癒されて。かがみ達と色々遊びまわりたい。でも…さ、もう一個だけ夢があるんだ……………」

今はまだ時期じゃない。こんなのは迷惑を掛けるって分かってるけど、区切りはつきたいから。

彼には知ってもらいたいから、私がちゃんとこの気持ちの本物だと心で理解したいから。

「私の夢はこれからもずっと大樹君と一緒に居る事。大樹君を愛して、大樹君に愛されたい」

「…こなた……………」

「でも、不安なんだ。私達はこれからも戦うし、戦い続けてく。そしてその中で一番辛いのは…多分大樹君だよ」

「いや、僕より前衛や仲魔の方が」

「違うよ…私達の代わりは大樹君なら出来るけど、大樹君の代わりは私達には出来ないんだ…出来ないんだよ。負担ばかり掛けてるんだ」

私達は大樹君のように万能じゃない。

彼は頑張れば私達と同じ事が出来るけど、私達は大樹君の様な事はできない。頼ってもらいたいのに、私達は結局頼るしかない。

頼るだけの愛情って………違うよね。

「私はさ。大樹君が好き、今まで一緒にいて育んで来たこの想いは嘘じゃない………でも…不安だよ…不安なんだよ…ねえ？  
大樹君」

ねえ？ 君の事好きで良いですか？

「答えはまだ良いんだ。でも、覚えておいて欲しいよ。私が大樹君を好きだった事」

「ここまでされて分からないなんて人間はいないよ。ありがとう、こなた」

「うん…答えはまだ待てるから。それにまだ聞いちゃいけないんだ、答えは…私が大樹君に何か出来るようになるまで」

今はまだ、その時じゃない。

答えは聞きたいけど、その次のステップに行きたいけど、今は憂いを絶つのが大事だから。

「さくつと終わらせちゃおうよ。捕らわれのピー 姫の様を救う、伝説の配管工の様にさっ」

「一瞬で空気を元に戻すのはある意味才能だと思うよ」

「まあ、これが私の持ち味だしっ！ 乙女とオタク。いい二面性だと思わないかな？ かな？」

「それも個性かな、こなたらしくて良いと思うよ」

「ふっふっふ。甘い一時は終了を告げ、次はゲーム談義だよっ！ さあさあ何かしようか」

「寝た方が良いと思うけど…そろそろ休まないと明日に響くよ？」

「大丈夫大丈夫、明日はコミケモードになるから」

「便利だね、それ…」

君が好き、時が経つほどに恋焦がれてしまつほど、君が好きだよ。

だから、私も頑張らないとね。

貴方の隣に立ちたいから、貴方の背中を護りたいから。

同じ立場で…居たいからさっ！

サブコミュニティー 終了……………

Continue98 〈限りある平穩？ サブパート〉（後書き）

21時過ぎに帰ってきて、今先程書き終えましたっ！

いやぁ…もう、出来る限り書きたいなあって…そんな感じですよ（笑  
何時までできるかわかりませんが、出来るところまで頑張るですよー。

お知らせの内容なんてぶち壊せ私っ！（きゅぴーん

おお、こなたが頑張りました。

そして佐藤君も待つてくれる体勢にっ！ 後はコミュを勝ち取れば  
こなたんエンドが待つてますねー。同時にバッドエンドも考えよう  
かなーとか考えてる私が居ますが（オイ

佐藤君の仲魔はそれぞれ、色々思想や考え方の違いがありますが、  
こなたの仲魔は満場一致でサマナーであるこなたを護りたいよう  
です。愛されてるなあ…

どうでもいいこと

疲れた……これがまだ最低木曜日まで続くのかと考えると、微妙に  
鬱ですねえ。

そんな時には私達の味方っ！ スニツカーズを食べてました。

チョコバーの中でも私の中では上位なのですよ〜。

ピーナツキャラメルが美味しさを引き立てているのです。

皆さんはホッと一息する為のお菓子とかありますか〜？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

次回コミュ話対象キャラ表

（現在アンケート中断中）

こなた：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

ダッキ：0票（手助けフラグはON）

アリス：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：0票（再戦フラグまで後1回）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいです。

Continue99 ～限りある平穩？ サブパート～（前書き）

ふ…遂に更新が出来ませんでしたよ（涙

と言いますか昨日も今日もかなり危険域でした、特に昨日は…もう（汗

朝5時出社～お仕事～午後23時お仕事終了～帰宅～到着24時10分

おおお…日をまたいだよ…かなり眠かったです。

そこからお風呂入ってなににしておいて寝たのは2時近くで起きたのは4時半（汗

そして～またお仕事でつい先程帰ってきました（23時頃）

これが後最低2～3日続きます、お話は申し訳ありませんがもう少しお待ちくださいね。

この間はアンケートは無効にさせてもらっています、流石にこう忙しいと纏めるの大変なので…今日はこれを投稿したらやる事やって寝ますね～。

この続きは流石に書いている時間が物理的に無いのでもう少々お待ちください。

という訳で…明日も頑張ります、眠いよーだるいよー…

では、今回も短いですが、どうぞなので、よろしく。



Continue99 〈限りある平穩？ サブパート〉

サブコミュニケーション02 〈大好きなご馳走、気に入った場所・表〉

23:30 シェルター内部のとある一室

パールヴァティ視点

もう、大体の人は寝静まったシェルター内、この中で元気に動いてるのは、一部の自衛隊員と私達悪魔だけ。

あの出来事の後、サマナー様から感謝の気持ちと言う事で、特別に過剰のマグネタイトを貰える事になったわあ。

サマナー様から直接だなんてえ、嬉しい、すごく嬉しいって思ってたんだけどあ。

『分かった、分かったわあ、こういうオチだって事はあ…ほろほろほろ』

期待はあっさり裏切られてえ、マグネタイトはCOMPから貰う事になったのよねえ………なんだか寂しいわあ。

COMPから直接供給と言うのは流石に味気ない気がするわぁ、確かに効率的ではあるんだけどねえ。

こう、もう少し違ったパターンが欲しいとは思わなあい？

せめて口移しとかぁ…私そっちも得意なのにい…

『で、それを何でオレに言うんだよ。貰えてるんだから十分じゃねえか』

『味気ないのよぉ、こう、ドロドロでテロテロで、エロエロな所じゃないかしらぁ？』

『悪魔合体になったとは言え、てめえのそのセリフはもう女神じゃねえな…』

警戒とか全部、あの子達がやってるから暇なのよねえ。

私は色々お役目も果たしたし、休憩中よぉ

という訳でえ、同じく休憩中のキンキと一緒にガールズトーク？中よぉ。

ちなみに現在サマナー様は就寝中なのよねえ。サマナー様から離れているのに、どうやってマグネタイトを維持しているのかと言っとお、これもCOMPのお陰なのよ、

COMPにデータとして記録された私達は、核の様な物がCOM

Pと密接に繋がっている状態なのよ。

基本的に存在できる程度のマグネタイトは召喚時に供給されてえ、サマナー様と離れていてもお、早々減るものじゃないわあ。

普通の悪魔達がCOMPもないのに、普段居るでしょう？ それと同じよお。

そして、万が一戦闘などで、存在するのに必要な分マグネタイトが足りなくなつた時はあ、繋がっている部分からマグネタイトが供給される仕組みなのよねえ。

『しつかし、人間つてのは馬鹿だな。自分から選択肢をぶつた切りやがって』

『強い力は怖いでしょう。だからそれに対しての切り札を持たがる、柵に捕らわれた人間ほどそれが顕著よお』

『はんっ…分からねえな。この辺がオレ達と人間の性質の差なのかね』

『サマナー様は違うわよお どちらかというとお、もう少し私の体に興味を持ってもらいたいけどお』

『てめえは…まだ諦めてねえのかよ』

難しい話はあるより好きじゃないからあ、サマナー様の話に切り替えましょ

サマナー様の淡白さ加減について彼女とお話中なのよお。

それにしてもお、若い殿方だというのに全く靡いてくれないのは元淫魔として悲しい所があるのよお。

この体を存分に見せつけて、マグネタイトを殿方から頂く…それが私の好みなのにい。

『そんな趣味は知らねえよ。つーか、マグネタイトは貰ってるのに態々そこまでする必要はねえだろ？ 何がお前を其処までさせんだよ』

『欲望と快感よお』

『そりやまた、ストレートに言い切りやがったな…でもよ、元が淫魔だからって、其処までする義理がお前にあんのか？ 襲うんじやないんだろ？』

『あらあ、私がこんなにサマナー様に執心してるのがおかしいかしらあ？』

『淫魔としては別に間違っちゃいねえ、でもお前は少し違っただろ？』

『そうねえ…端的に言うならあ…食べちゃいたいくらい可愛いって所かしらあ』

『…眼科を紹介するか？ サマナーの見た目はどう見たって可愛いという範疇に入らねえだろ』

『キンキはサマナー様の事嫌いなのお?』

『…護ってやらなきゃな、とは思ってる。嫌いじゃねえよ』

そっば向いて言うキンキが可愛いわねえ。

きつと彼女の中では、私達はもうかけがえの無い大事な宝物になっているのかしらあ。

そう思ってくれてるのは、凄く嬉しいわあ

でも、サマナー様が可愛いというのは譲れないわよお、見た目の良し悪しで感じるなんて人間の美的感覚は違うのよねえ。

私達淫魔は人を、精力とその魂の輝きで判断するのよお。精力は勿論、魂の輝きが強い人間を墮とした時の充実感と言ったら無いわあ。

それは正にご馳走に必要な調味料と言った所かしらねえ。

そしてサマナー様の魂の輝きは……他の人間とは違って色々混ざり合っている。

そんな人間滅多に居ないわあ、通常魂の輝きは一色で固められているのに、サマナー様は様々な色が交じり合った綺麗な『漆黒』をしているのよお

闇に堕ちた人間も『黒い』輝きを放つけどお、サマナー様のは黒いのではなくて、様々な色が複雑に混ざり合さってできた漆黒の色。

魂の輝きを見る度、触れ合う度、ゾクゾクとした快感が私の全身を駆け巡るのよお。

だから…だからあ、サマナー様は可愛くて、食べちゃいたいのよねえ。

でも、無理矢理は駄目だわあ。同意を持って…が難しいのよお。

『サマナーも男なんだし、お前が誘惑すりゃ早いんじゃないのか？  
まあ、実際やろうとしたら止めるけどよ』

『既に実行済みよお……すげなくかわされたわあ……』

『とりあえず殴って良いか？ 割と本気で』

『お断りですのぉ』

『ったく、こいつは……ん？ お前の魅了が効かないのか、それって何時だ？ ペルソナが使える時期ならそれを防ぐペルソナもあるかもしれないけどよ』

『ペルソナが無い時よお、あの頃は私もサマナー様とイイコトしたくてねえ……魅了耐性でも持つてるのかしらねえ……』

『潜在的に効かねえのか、その頃には既にペルソナの加護があったのか……まあ、問題が無くて良かったな』

『私は切ないわあ……サマナー様あ』

目の前にご馳走が並んでいて、頑張れば直ぐ手が届くけど、足を縛られて動けないと言う状況を考えて見なさあい？ 辛いでしょお？ 私の状態が正にそれなのよねえ…

『まったく……ああ、もうこんな時間か。オレは見回りに行つて来るぜ』

『いつてらっしや〜い ……さあて、私はどうしようかしらねえ』

つまみ食いにでも…なあって、気が乗らないのよねえ。

美味しいご馳走を見続けていたら、コンビニのご飯なんて色褪せて見えるでしょう？ それと同じよお。

今はマグネタイトも充実してるし、態々そう言う事しなくても…ねえ。

そんな事するなら、サマナー様の寝顔でも見ていた方が数倍楽しいわあ…

『！ そつよお、良い事思いついちゃった』

淫魔は相手のマグネタイトを奪う事が出来ると同時に……その気になれば生命力を相手に渡す事が出来るわあ。

サマナー様も、連続の戦闘とかで疲れてるしい……くすくすくす。

きつと、サマナー様の為になるしい、受けてくれると嬉しいわねえ。

もし駄目でもあ……サマナー様の体調が心配だし、無理矢理、とかねえ

『……この場所は気に入ってるしい、その為なら妥協はしないわあ。問題は嫌われたく無いって所ねえ』

私の中でサマナー様は、私のご主人様であって、私の大事な仲間であって、頼りがいのある殿方であって、可愛い弟でもある。

これからもきつと、サマナー様は大変な道を行くんでしようねえ……なら戦闘じゃ余り役に立てない私が彼にしてあげられる事は、これ位だものお。

私は、私なりに彼が好きで、彼が心配よお。

悪魔として生きてきて、こんな感情を持つなんてねえ。危なっかしくて、でも前を向く素敵な殿方。

あ、勿論。恋愛にまで発展させるつもりはないわあ、そういうのは既に候補が居るし、取ったら可哀想じゃなあい。



私がサマナー様にしてあげられるのは、これからを生きる為の、活力を与える事だからねえ

『よおし、理論武装もOKですわあ、サマナー様あ、今から行きま  
すわねえ』

準備万端整って、サマナー様が個人で寝ている場所に向かう私。

くすくす、この後どうなったかはご想像にお任せしますわあ

サブコミュニティー 終了……………

????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????

.....NEXT..... ~好きなご馳走、  
気に入った場所・裏

????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????  
????????????????????????????????????????

.....閲覧条件を満たしていません。  
.....閲覧条件を満たしていません。

要・パールヴァティ『???コミュフラグ』が必要です。

Continue99 〈限りある平穩? サブパート〉(後書き)

という訳で3位の残ったパールお姉さんの視点でのお話でした。

もう…何ていうか彼女は勝手に動くのですよねえ。いやぁラクで良いです(えー)

この続き…と言うか裏は既に出来てたりします(えー)

コミュを取れた時に私のホームページに掲載する予定です。

後はこの修羅場を乗り切った後で、新規パート再開ですねっ！体に気をつけないと…今日なんて倒れかけたし…眠くて(笑)

どうでもいいこと

今日は夜食にカレーパンを食べましたっ！

普段は結構美味しくて好きなのですが、疲れ果てていると何を食べても美味しくないですね……(ほろろ)

パンは結構好きなんですけどねえ。私はクロワッサンとか、可愛いのが好きです。

皆さんはどういうパンを食べますか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

〈現在アンケート中断中〉

こなた：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
ダッキ：0票（手助けフラグはON）  
アリス：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
パール：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
雪之丞：0票（再戦フラグまで後1回）

Continue100 〽何処までも理不尽な世界で〽(前書き)

アンケート今回から再開です。今回までの分のアンケートは申し訳ありませんが無効にさせて頂いています、ご了承下さい。

ふいー…漸く落ち着きました。

と言っても来週もまたある可能性が濃厚なのですけどね(涙)

流石に4日間で合計睡眠時間が6時間に満たないのは…疲れたぜ…なのですよ。

今日は流石にお休みを頂いたのでずーっと寝てました。

それでも一度は4時に目が覚めてごろごろしつつお昼前にはぼけーっとしてましたが(笑)

色々ダウンしているので感想返しなどはもう少しお待ちください。

という訳でガイア教のターンです、情報は早いのが命…それにしても凄まじいですね諜報員さん。

メシア教、シエルター襲撃後 23:35

ガイア教

寝る間を惜しんで動いている彼等… 勿論ちゃんとした休みなど無く  
絶えず動いている。

そんな所に、ある意味朗報が流れてきた。

シエルターを襲ったメシア教の幹部と部下達がほぼ何も出来ずに8  
割方壊滅して撤退したと言う情報と、探していた人物が見つかった  
と言う朗報。

通常の連絡ならば一日位遅れているのだが、今回の事は内容が内容  
だった為に、襲撃の後直ぐに連絡が行われた。

「と報告は以上になります、詳しい事はそちらの資料で。それで  
…如何なさいますか？」

「状況は此方に向かつて風が吹いてるって所か。メシアが求めてい  
るものは大体分かったが、ここまでする意図が読めんな、しかし朗  
報である事は確かだ」

「隊長…？」

「おっと、悪かったな。直ぐに案件を纏める、明日朝、直ぐに動く事になるぞ？ お前達も覚悟はしておけ相手は敵の幹部すら追い払った奴等だからな」

「わかりましたっ！」

「頑張ってくれた諜報員も労ってやってくれ、これだけ短時間の間にやってくれたんだからな、家の奴等は本当に優秀で頭が下がるね」  
本来なら早くても一日は掛かりそうな情報を経った数時間で此処まで簡潔に纏め上げた諜報員に感謝しつつ、この後の行動について予測していく。

「勿論命がけですからね。後でビールでも配給しておきます」

そういつて笑いながら出て行く部下を見送り、彼は大きく溜息をついた。

朗報ばかりなのに、こつも胃が痛くなるのは何故だろうなと自嘲しながら資料に眼を通す。

今回のシエルター強襲事件において…

区画シエルターに、メシア教幹部が強襲。しかし、突如現れたデビルサマナー達がこれを撃破。メシア教徒の半数は死亡、幹部は逃走。

シエルター側の自衛隊員の被害は4割、クズノハの戦闘員は5割が壊滅、護衛としての役割の継続は困難と見られる。

#### デビルサマナー側の情報

人間3人、悪魔10体以上という混成パーティ。その内の3人は前回の遭遇と柊かがみ氏から得た情報により素性などが完全に判明。

元・聖母候補：高良みゆき。

両刃の大剣を軽々と使いこなす前衛職の役割を担う、戦闘力は高く、並の人間や悪魔ではこれに打ち勝つ事は困難。

柊かがみからの情報補足。更に知識、索敵、探査、戦略、などあらゆる面において優秀。

#### デビルサマナー：泉こなた

自身は銃やナイフで戦う事を得意とするデビルサマナー。射撃、特に狙撃の腕が異様に高く。1キロスナイプも余裕でこなすと言う情報あり。

所持仲魔は前衛、後衛、支援、回復と基本的且つ、どれも高レベルの悪魔が揃えられている。戦力としては1個小隊ですら攻略は難しい。

加えて、ガーディアンと言う特殊な技能を使用する。前回のオグン戦の時に発動、その攻撃力はインターバルが長い点を除けば脅威の一言。

#### 要注意人物・デビルサマナー：佐藤大樹

このパーティの要的存在、総合的なステータスは上記二人に劣っている所が見られるが、幅広い視野や、ダメージを受けてもその場で指示を出すと言う忍耐強さが見られる。

泉こなた以上の仲魔を所持している上、更に『アリス』と言う上



位の魔人と『アメリカ』と言う魔法のエキスパートの悪魔が特に危険。

ペルソナという、ガーディアンに似ている能力を使いこなす上に、先の戦いでは巨大な巨人を呼び出して戦わせた経緯があり、攻撃力という面においては危険度が高い。

他にも何かを隠しているらしいが、そちらは柊かがみ氏も情報を流す事は無く、現在確認中。

結果　：柊かがみ氏と柊つかさを餌にガイア教と共闘を組ませられる可能性は高い。問題点として佐藤大樹というイレギュラーが存在するが、その戦力は貴重。

諜報員から得た情報：これからの予定として…バスとクズノハのメンバーを調達し、もう一つのシエルターに一般人を護送する予定。理由は恐らく、家族親類を一箇所にまとめて、危険の分散を避ける為だと思われる。

今回の異界についてもある程度の情報を持っているらしく、この行動の後に、解決に向かうと思われる。

其処に今回の共闘を持ち込める状況が出来るを見た。要検証を…

……………

簡易的にだが、ある程度は纏められた情報を見ていく。

かがみの情報は、彼女が此方に加わった時に得ていた情報であり、まだ大樹達が戻ってきているとは知らないのが現状だ。

こうしてみる限りでは、上手く使いこなせば優秀な駒になってくれるだろうと考える。

どうやらあちらの方でも、柊姉妹を探しているらしく、其処に今回

の件に関しての糸口があると思考していく。

そして…それと同時にこんな子供に頼らなければならない現実には歯  
噛みする彼。

「時代が子供を作るたあ言うが…これが20歳未満の、それもつい  
最近まで普通の人間が持っていた情報かね…」

これほどの戦士がこの終わり掛けの世界に現れた事は脅威であり、  
喜ぶべき事なのだろう。

しかし同時に、子供達にここまで力と覚悟を持たせてしまった事  
は、唾棄すべき事なのだと強く拳を握る。

それをあわよくば利用しようとしている自分に呆れつつ、しかしこ  
の異界を、その後の現実を如何にかする為には結局使わなくてはな  
らない。

自分達の目的は改造悪魔の検証、及び聖母候補の拉致であり、それ  
以上の事は必要ないが、それで終われるほど甘くはない。

上が動いているかは知らないが、この異界の外、いやもしこの異界  
が消え去ればこの町にも核が降り注ぐ。

それはどうにかして防がなくてはならない、ガイア教が求めるのは  
救世主ではなく、この世界をこのままで維持していく事。

表向きは悪魔と人間の共存を謳って入るが、上の上などとうに腐敗

し、自分の欲の為に動いている者の方が多い。

本来のガイア教は世界を混沌に変え、力こそが正義という現在の世界では色々無駄と言うか無理な事を目標に掲げていたが、現在は穏健派が主流の為、そういった過激な目的は薄れてきている。

強いて言うならば、世界を裏から力などで掌握するというやり方を求め始めている。今回の改造悪魔などもその一環であるのだから。

勿論過激派方面は今でも、世界を混沌に変えるべきだとメシアや天使の核投下を望んでいるという話もあるが、所詮末端である彼には関係の無い話でしかない。

彼としては、世界の行く末にそこまで興味も希望も絶望も持つてはいない。ただ仲間や部下、知人がそれなりに生きていける世界ならどうでもいいと考えている。

娘の事については既に9割方諦めているし、これから必要なのは復讐心でも何でもなく、これからを生きる力だと思っていた。

「ガイア教としては喜ぶべきか、個人としては糞喰らえと思うべきか…どっちにしても煙草が不味くなる話しか出てこないのが…ん？」

残っていた最後の資料に眼を通す。

其処には、今回の件に関わった幹部の情報が記載されていた。

メシア教幹部：シスター・アンナ

魔力を帯びた投剣を使用し、戦闘時には様々な魔法石も使用してくる。カソックに身を包む姿はそのまま教会のシスターにしか見えないが、メシア教幹部の中では唯一表立って動いている人間。

メシアの中でも特に過激派に属している上に、その狂気は既に現実を現実として見ていない可能性がある。

身体的特徴として、黒い長髪が目立つ〜

「……………」

其処に付点されていたシスター・アンナの写真を見て彼は止まった。

どこまでも『彼女』に似ていたから、その全てが『彼女』に似ていたから。

そんな事は無いと思いつつも、ぶるぶると震える手で写真を取り、穴が開くほどにその姿を見続ける。

「よう……こ……違う……いや、だが……まさか……嘘だろう?」

上ってくる希望を、現実と言う鎖で縛り付ける。

それでも希望は競りあがり、胸の中に沸き立つ想いが沸騰しそうなほどに溢れかえってくる。

シスター・アンナ。殺された自分の妻の面影をはっきりと残す、見た目は優しいが霧囲気が見え隠れする少女。

アンナ……………そう、彼女の名前は『シスター・アンナ』そこで彼ははっきりと認定する。

この幹部のシスターは、自分の娘なのだ。

生きていたのだと、聖母になる事も無く、天使達のマグネタイトにされる事も無く、洗脳され変わり果ててしまったとしても。

「涙なんて奴は…とっくに枯れてると…思ってたんだがな……ったく、俺もまだまだ甘ちゃんって事か」

直ぐにでも飛び出したい衝動に駆られるが、それでもその想いを封印する。

メシア教の幹部な以上、余程の事がなければ心配は要らないだろう。それよりも優先しなければいけないものが彼にはある。

保護している人間の安全を確保する為の、核誘導施設の破壊、然る後にこの異界の消去。

佐藤大樹達との共闘の為の交渉など、今は私事を棄て動かなくてはならないのだ。

「冷たい父ちゃんだけど…許してくれ…ってまあ、俺の事は聞かさ

れてないだろうし、聞かされても憎んでるかもしれないがな」

全ては今を終わらせてからにしようと、意識を完全に切り替える。

もし、全てが滞りなく終わったなら、彼女と話をしてみたいと淡く望む彼。

洗脳されているなら、それを説いた後に全てを話そうと彼は夢見た、もしそれで恨まれたら仕方ないだろうと、殺されても、ある意味本望だと彼は望む。

「さあて、少しばかりやる気が出てきたかね。となると……せめてあの子にもそれなりの結末を用意してやりたいが……な」

妹を攫われ壊れかけている少女……かがみを案じる。

目的の為には必要なピースである彼女をそのまま使い潰すのは彼の頭の中には無い。

このような最低な仕事をしているからこそ、この先に夢を見る人間が羽ばたいていくのを見るのは嬉しく感じていた。

「ふむ……親類縁者や友人は既に掴んだ、か。となると聖母を奪還……がメインになるな。あちらさんも聖母が攫われたとなればかなりの打撃だろう」

実際は奪還した後殺せば早いのだが、それはかがみも佐藤達も許しはしないだろう。

これが関係無い相手ならば直ぐに殺す事も考えたが、リスクを考えるとやはり生かす方面で考えるしかない。

私的に言えば、彼女をこれ以上泣かせたくは無いても彼は感じている。

無論、既に救世主を宿していたとなった場合、最悪は殺すしかないとも思ってはいるが。

そして、こうなれば確実に佐藤大樹達との連携は必要になるだろう。基地を攻めるにせよ、聖母を奪還するにせよ現在の手数では圧倒的に足りないのだ。

異界を形成している悪魔を如何にかしないといけないのもある為、どうにも手詰まりだったのだが漸く光明が見えてきている。

「改造悪魔について、が問題だな。邪教の館の主とコンタクトを取りたいがあの悪魔が通せんぼしてるしなあ…この辺りは佐藤大樹が泉こなたで何とかかなるかもしれんが…」

デビルサマナーである以上、邪教の館は利用しているだろうし、上手く交渉出来れば館の主ともコンタクトを取れると当たりをつける。

此方の最大戦力が改造悪魔である以上、その増強は今すぐ如何に

かしなければならぬ問題だった。

基本的に所持している改造悪魔はどれもレベル10～15が関の山で、前回のオグンはとても優秀な固体だったとも言える。

この辺りの悪魔を撃破し、洗脳改造と試みているが状況は余り思わしくなかった。

成功率が4割を切っている為に、そこまでの効率が求められないのだ。

改造、洗脳装置に問題点があるのだが、これに関しては今居る技術班だけでは知識も技術も足りていない。そこで邪教の館の主と手を組む事さえできればと悩みのタネは尽きない。

「どちらにしても佐藤大樹達との連携は必要か。やれやれダメな大人の見本つてな感じだな俺達は」

溜息をついていると、ドアをノックする音が聞こえた。

直ぐに許可を出すと、部下とかがみが入ってくる。何も知らされていながみはほぼ無表情だったが、この後どう変わるかと考えると微妙におかしく感じる。

「彼女を連れてきました」

「えーと、何の用ですか？　まだ訓練中だったんですけど？」



黒いライダースーツを身に纏うかがみ。何処と無く荒んでいるように見えるのはつかさや皆を心配している所為なのだろう。

強い焦りが浮かんでいるのが伺える、まずい兆候だなと彼は思い直ぐにこれからの事について話すことにした。

「悪いね。それじゃ早速本題に入るか、今回は君も作戦に従ってもらう、いいかね？」

「つかさを…助けるんですか…？」

「最終的にはそうなる。今回はその為の布石と言う奴だな。実は」

話していく度に彼女の無表情は簡単に壊れ、嬉しそうな顔をしていく。

全てを話し終わると、かがみは真剣な表情をしながら彼に声を掛けた。

「つまり、私にパイプ役をやれって事ですね？ こなたやみゆきを仲間にする為に」

「ガイア教になるってのはないだろうがね。こちらとしてもあれだけの戦力が敵に回るのは脅威で、味方で無いとはいえ共闘出来るな

ら喉から出が出るほど欲しい戦力だ」

「確かに…そうですね。でもいいんですか…？ 私がガイアを裏切つてあつちに戻る可能性も」

「勿論対策はしてるさ、出来るだけさせないでくれよ？ とまあそれもあるが安心もしてるさ、君は目的の為なら何でも出来る所かね。折角の戦力手放す気はないだろう？」

「……使えないと分かったら逃げますけどね」

「こいつぁ、手厳しい。で、いいかな？」

「ええ、こつちも彼等が居れば色々助かりますし、出来ればやっぱり戦いたくないですから」

「それじゃあ、今回はそつちの方向で。明日朝直ぐ出る、相手はバスで移動しているし動きは限定されてるからな追尾も容易だ」

「先に皆を保護させてからのほうが良いんじゃない？」

「勿論視野には入れていたが、どうやら彼等は単独で高速移動できるものがあるらしくてな。どちらにしてもガイア教がシエルター近くで待つてたらまた要らぬ詮索されそうだしな」

「はあ…貴方の事だし何か考えがあるんでしょうね…わかりました従います」

「おいおい、買い被り過ぎだって。んじゃ、そういつ訳だ」

内容を詰めていく…恐らくまた長い一日が始まるのだろう、それが終わってもまだまだ問題は山のようにあるが、それでも彼等は目的が出来た。

その目的を叶える為には今を確りと認識し歩くしかないのだろう。

彼は…『みなかた皆方 たける武』はしっかりと前を見つめ……………

かがみは少しずつ闇を晴らしていく道を見つけ始めた。

しかし、思いはその全てを良しとはしないだろう。

全ての総意の前には個人の意志など塵芥にしか過ぎないのだから。

皆方が娘と会う事が出来るか和解出来るか、かがみがかさを助けられるか、それとも助けられないか、二人とも死ぬのか…

全てはあらゆる者達の総意によって……………カワルダロウ。

かがみのステータスが更新されました……………

「名前」：柊かがみ 「性別」：女性 「覚醒段階」：？（異

能者)

「現在LV」：20 (成長限界) 「属性」：D・C

「所持金など」 ￥：1000000 魔貨：50000

「ステータス」

HP：157 MP：265

「通常時」

力：7 知：13 魔：21 体：8 速：10 運：7

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪：+ 状： 万：

「所持スキル」

・魔界魔法の素質? ・知略 ・復讐者?

・起死回生 ・三分の魔脈 ・ロウキラー?

「所持技能」

・アギダイン? 敵単体に火属性大ダメージ

・ガルダイン? 敵単体に風属性大ダメージ

・マハ・ガルダイン? 敵全体に風属性大ダメージ

・マハ・ムドオン? 敵全体を呪殺する。高確率

・デ・カジヤ? 敵全体の強化魔法を必ず解除する。

・デク・ンダ? 味方全体の低下魔法を必ず解除する

・コンセントレイト 次のターンの魔法攻撃を2・5倍にする

・タル・カジヤ? 味方全体の物理攻撃力が3段階上昇。

・ラク・カジヤ? 味方全体の物理防御力が3段階上昇。

・マル・カジヤ? 味方全体の行動値が2段階上昇。

・リベリオン 3ターンの間敵味方共にクリティカル率

上昇

・憎悪真言 敵単体に呪属性特大ダメージ。相手に呪

いを掛ける。

・憎むべき正義 敵全体に呪属性大ダメージ。ロウの相手

には3倍の威力。

・呪われてあれ 敵単体に万能属性甚大ダメージ。使用後  
『瀕死』

「装備」：

剣：ビームウィップ

銃：コルト・サンダー 弾数：10 相性無効 常に『呪い』

状態（現在無効）

弾：炸裂弾 200発 威力上昇、事故率上昇

頭：セラミックヘルム 電耐性

体：ガイア教特別ライダースーツ 剣・物耐性 聖弱点

腕：ラウリンの指輪 魔法威力2段階上昇 消費MP2倍

足：カラミティブーツ 射撃回避増加

「アイテム」：所持限界『力+10個』 19個

・宝玉×1個

・トラポートストーン×2個

・魔反鏡×2個

・呪殺ペーパー×3個

・マハ・ブフダインスターン×1個

・マハ・ラギダインスターン×1個

・メ・ディアラマストーン×1個

・マジックカード各種

魔界魔法の素質？：魔法の素質を持つ。レベルアップで魔法を覚  
えるようになる。

復讐者？：ダーク/カオス固定 呪吸収 専用のスキルが使える  
様になる。

全ステータスに1レベル毎に+3点 HPとMPにレベル毎に+3  
0点

知略：様々な策を思いつくことが出来る。知力にボーナス+2点  
起死回生：HPが10分の1以下の時、あらゆる判定に大幅に補  
正。魔法威力2倍。

三分の魔脈：MPに補正。

ロウキラー：壊れた優しさが反転し善や正義を殺す。

ロウ属性の相手を物理攻撃する時、常に命中と威力が2倍になる。  
レベルが上がると専用のスキルが使える様になる。

隊長さんの名前がぼつりと出ていたり。

本当は感想で頂いた「皆方健三」さんにしようと思いましたが、苗字だけ頂きました。名前はもう、なんというか適当に（えー

でも、私は隊長さんと呼ぶ（えー

娘さんが生きている事を知った隊長さん。相手も幹部ですし、何故逆に気づかなかったのかーとありますが、メシア教をそもそも相手にしてませんでしたからねえ。

佐藤君達を、かがみんを使って共闘しようとする彼の策略は上手く行くのでせうか…

かがみんハイパー強化っ！ でもレベル20で打ち止めです（笑  
回復魔法が無い点を除けば優秀な後衛火力かと。

どうでもいいこと

頭が半分死んでいるようです（えー どうでもいい事が前回のまま  
っ（笑

という訳で、疲れた時は糖分がいいそうなのですよ。

私は疲れた時はキャラメルとか飴とか舐めますねえ。

皆さんはそういう時は何を食べたりします？

## 重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお

答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回からコミュは1〜3位までを載せようかなーと思います。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？キャラクター追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

#### 次回コミュ話対象キャラ表

こなた：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

ダッキ：0票（手助けフラグはON）

アリス：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：0票（再戦フラグまで後1回）

皆方武：0票（????????????）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。



Continue101 〳何処までも理不尽な世界で〳〳(前書き)

すこーしずつ無心ルートが開けてきましたよ〳

今回はその布石になるお話?? なのかなあ…石山氏の娘さん千佳ちゃん登場ですっ!

それにしても…体がだるいなあ…甘い物〳、甘いものはど〳ど〳〳(きゆう)

Continue 101 何処までも理不尽な世界で??

AM:03:30

個人用に割り当てられた特別室で大樹は眠りについていていた。

規則正しい呼吸音が聞こえてくるこの部屋で、もう一つの小さな音が響く。

静かに、だが少し苦しそうな表情で眠りについていてる彼を見て、儂げにクスリと笑うアリスが居た。

『……夢でも、戦ってるのかな』

近くにあった椅子に座りアリスは大樹の寝ている姿を見続けている。シエルターの内部の為、星の光すら当たらないこの部屋の中は、人間にとって微妙に息苦しいものがある。

『まだ…出会ってから1年経ってないんだよね』

昔、と言っても数ヶ月前も経っていない時期…アリスが初めてサマナーである大樹を見つけた時はこの様な気持ちになった事はなかった。

デビルサマナーと一緒に居れば、マグネタイトが安定して手に入るし、興味のあった人間の世界の玩具で遊べるから、なんとなくと言った感じで大樹を見つけたのだ。

人間、デビルサマナーと言うものは彼女にとってちょっと扱い辛い電池の様な物でしかなかった。

特にその点においては大樹は扱いやすかった物だ、なりたてのデビルサマナーな上に、知識も無い、人間との関わりも薄かった。

良い物を見つけた、その程度の感情しか持って居なかった。勿論表面には出していないが。

(でも……)

元々妖精ピクシーとは、人間の感情に左右されやすい種族である。

大樹という人間は特殊だった。思考は悪魔と似通っているし仲魔になった者に対しては心の奥を曝け出す。

勿論彼は其処まではしていないと思っているが、彼女達にとって自分達を其処まで信じてくれるのが何よりも嬉しかったのだ。

そして…その思いは戦いと同時に強く、強くなってくる。

『……ふふっ、可愛い寝顔』

下がっていた毛布を掛け直し、そのまま微笑むアリス。

魔人アリスとなった今でも、彼女は最前線で戦う事が出来ても、護る事は出来ていない。

それがとても歯痒く、自分の身を激しく苛む。

あの時もそうだった。

死神オルクスとの戦いの時、ピクシーだった彼女は何もする事が出来ないまま、反応する事もできないままに大樹が殺された。

心を寄せ掛けていた人間が、一瞬で殺された時に彼女はその想いを改めて自覚し、そして生まれて初めて相手に強い憎悪を抱いた。

ピクシーとは本来楽観的な種であり、怒ったとしても、喜んだとしてもそれは一過性の物にしか過ぎない。

しかし、あの時を境に強い、強い感情を持ち始めたのだ。

他人を深く愛してしまうと言う感情

他人を深く憎悪すると言う感情

この時を持って、彼女はピクシーでありながらピクシーで無くなつた。

アリスになるのは必然的だったのかもしれない。

永遠の少女であり、人間に近い……いや人間そのものとも言える悪魔。魔人アリス。

その美しき美貌はあらゆる者を魅了し、その言葉は言霊となり、相手を死に追いやるという強大な悪魔。

だが、その心は唯一つの事に執着している。

『私、頑張るからね？ きつと大樹さんの役に立つから。これ以上死なせないし、痛い思いもさせたくない……だって、愛してるから』

耳元でそっと囁くアリス。

誓約と言っても過言ではない言葉、普段は冗談としか見られない事が多い上、面と向かって言うのは彼女もやはり恥ずかしいらしい。

それでもこの想いは本物で、きつと薄れる事は無いのだろう。

悪魔の想いは、そうやすやすと消えるものでは無いのだから。

『大樹さんが誰を好きでも良い、誰を抱いてもいい、誰と恋しても良い。だって、私は悪魔だもん。人間の法には縛られない。大樹さんが私を愛してくれているならそれで十分』

大樹が別にハーレムを作ろうが、個人でアリスを愛してくれようが彼女にとってはどちらでも良いのだ。

何人居ても自分を愛してくれるならそれでいい、誰が一番などには興味が無いし、複数を好きになったからと言って愛情が薄れると言う事は無いのだから。

例えば家族……子供が生まれたからと言って、お互いを愛し合う二人が直ぐに感情から冷めてしまう事は余りないだろう。

子供も愛しているしお互いも愛している。行き着けば最終的に愛とは複数に振舞われる物なのだとアリスは思う。

例えばこなたを愛したとしても、みゆきを愛したとしても、自分を愛してくれるならそれで良い、正室側室と言う括りすら要らないのだ。

その時点で大樹が一番に愛している相手を決め付けてしまっているのだから。そういうものは要らない。

『ただ……愛して欲しいな。あはは、ゲームのヒロインって感じじゃないかな………なーんかこなたも同じ事言ってる』

現在大樹の心に一番近いのは自分では無く、こなただろうと思っている。

それはそれで仕方ない事だと思うし、大樹を想ってくれる相手が

増えるのは彼女も嬉しい。

自分が愛する人が永遠に孤独なのは悲しすぎるから。例えば自分達が居ても、その孤独は埋まらないだろうから。

『まっ、でも。大樹さんを貶める相手は……殺すけどね。くすつくすくすくす……』

くるりと振り向き、悪魔特有の恐怖を感じさせるような笑顔でドアの方向を見つめるアリス。

直ぐに何者かの気配が薄れていくのを感じた。

暫くドアの方を注視していたが、やがて表情を再び暖かなものに戻し椅子に座った。

『ここは、煩い人間ばかりで嫌だな……早く出て行かないと大樹さんの体調にも良くないわね……』

これからも激しい戦いが続く。

今はただ、彼の事を案じ、彼を護る盾になろうとアリスは決意する。

ただ……最愛の人の為に。

『ゆっくり休んでね大樹さん』

その笑顔は誰もが見惚れてしまいそんなほどの美しさだった……

……

……

……

…

翌日

流石に3週間もシエルターで暮らしている人間達は慣れたもので、今日と言つ日を頑張つて生きているようだ。

問題だと思つた臭いなどの問題は換気や空調を確りとしている為それ程でもないらしい。

改めて回りを見回ると、TVで見たような被災地での学校や施設を思わせるような場所だった。

新聞紙やレジャーシート、ダンボールなどで作られた各個人のスペースなどが所狭しと並んでいる姿に少々居た堪れない気持ちになつたりもするこなた達。



まあ、大樹の方はそんな事はどうでもよくクスノハのメンバー達とこれからの事について話しているのだが。

「うーん。昨日は色々有ったから詳しく見てなかったけど、なんていうか…あれだねえ」

「お風呂などは、水の問題が有るので難しいらしいです。現在は濡れタオルなどを使っているようですね。問題はトイレとの話でしたが…」

「そうなんだよあ、聞いてくれよちびっ子あ」

「私の名前はちびっ子で固定かねみさきち。って私も人の事言えないけどさ」

「これだけの人間だろあ？ お風呂はまあ我慢しなくちゃいけないんだけど、トイレは我慢出来ないってばよあ…此処だけの話漏らした奴も居るって」

聞くだけで切なくなる話にゲンナリとしてしまう二人。

これから向かう所もやはりシエルターなので、出来ればもう少しまとまな生活をさせて上げたいのだが、これ以上は難しいのが現状である。

それでも、此方のシエルターはもう片方から物資などを奪ってきている為、多少はマシといえる状態なのだが。

「色々怒りっぽくなっている人も多くて、喧嘩が絶えないのもあるわね……」

「ストレス溜まるだろうしねえ……こうなるとやっぱりゆうちゃんが心配だなあ。あの時もあんまり体調良く無さそうだったし」

「……ゆたか……」

「ん、大丈夫大丈夫っ！ 重症って訳じゃないからさっ！ それにみなみちゃんが来たらゆうちゃんも元気出るよ 私達は訳あって行けないからさ、お願いするね」

「……はい……っ！」

「んっ、良しっ」

「おおう、あそこで完結しちゃってるっスよ」

「イウならば、ワタシたちはカゲですっねっ！」

こなた達がそうやって談笑している中、大樹と彼等の話は大体纏まってきた。つてきていた。

そんな時、遠くから小さな子供を連れてきた高木が話しかけてくる。

「もう、行くのですか？」

「ええまあ。急いだ方が良かったですし。で？ その子は一体？」

「あ…彼女はですね…石山千佳ちゃんと言いまして…その、あの石山さんの娘さんなんですが」

「……………」

何処を見ているか分からない瞳をしている少女。

正に「ただ生きている」と言う生きた見本の様な感じが見受けられた。

此方を見る事もなく、寧ろ彼女の眼は開いているが何処も見えない様に見える、壊れていると断定しても良い位に彼女は自分からは一切の能動的な行動を取らなかった。

大樹は彼女を見て、石山と言う男が何故あそこまで狂ったのかが納得出来てしまった。

彼は自分の大事な者を護る事が出来なかったのだらうと、だからと言って彼を助ける気も、護る気も無いが一歩間違えればああなるのは自分なのだと言われ、彼女を見て改めて実感する。

「で、何で連れてきたのですか？」

「…それはですな…彼女が貴方に会いたいと言いまして。実は私は少し前までは石山さんに色々と良くして頂いていたので、この子の事も少しは知っています」

高木は狂う前の石山を知っていた。

やっている事は確かに最低な事ばかりだったが、それでも家族を愛し、気に入った部下には度量を見せる程の人間だったのだ。

良く妻と娘の自慢話に無理矢理付き合わされた事もあり、本心からは石山を憎んでは、嫌っては居なかった。

いつかはこうなるだろうとは思っていたが、今思い返しても詮無き事なのでそれは記憶の片隅に追いやる。

現在石山は完全に発狂し、特別医務室で眠らされている。恐らくもう復帰する事は不可能だろう。

アメリカの治癒のお陰である程度は治ったとしても既に彼は社会的に終わっているのだ、社会が崩壊している中で今更社会的も何も有った物ではないが、それでも権力者はそういうものに縋りつく。

「僕に…？ 僕は彼女を知りませんし、彼女はどう見ても自意識が無い様に見えますけど…？」

「……………」

ゆっくりと大樹を見つめる千佳。黒く澱んだ瞳の奥に大樹が写っているのが見える。

「……夢……で……見た……」

「??? 君は……?」

「……死が……来るの……沢山降るの。だから……歌わないと……貴方の為  
に」

《……この人間。ただ壊れてる訳じゃ無さそうね》

「ダツキ……?」

突然COMPから聞こえてきた声に振り向く大樹。

それを無視してダツキは更に続ける。

《神々……いえ。違うわね……精霊? 本来の人格がブレて入り込んだ  
のかしら? 何の為に?》

「ごめん、一人で納得されても分からないんだけど」

《アンタが知る必要は無いわよ。どうせ知っててもどうしようもな  
いんだから》

「貴方は……知ってる……この先を……死を……知ってる……私は……だから  
……歌うの……」

「僕がこの先の死を知っている?」

途切れ途切れに話す千佳の言葉を考えながら繋げていく。

統一性が無い様に思えるが、どこか引つかかる部分があり、其処を重点的に考えていく。

（死が沢山来て、降る…つまり核の事だろうか。確かに僕達は核が降り注ぐ事は知っているけど、それは違う？ 歌を歌うってどう言う事なんだろう。死…歌…）

考えても理解が出来ず悩みそうになる大樹。

そもそも見た感じからして精神が破綻しているような少女がまともな事を言えるのがおかしいと考えるが、ダツキが言うように神々か精霊が憑依している可能性がある為無碍には出来ない。

「死に抗う事は出来ないの。生きる事と死ぬ事は同じだから…そして、このまま終わりが来る…これが私達が選んだ道だから…」

《この子何を言って…》

「……………！？まさか…それも…なのか、それすら居るって言うのか…」

千佳が歌った言葉に戦慄する大樹。

その言葉は前世で聞いた事があるから、そしてこの世界を現実と認めた大樹にとって、その言葉は絶望と共にこの世界はどこまでも自分の知っている世界なのだと愕然とする。

核が降り注ぎ、メシアとガイアが戦った真・女神転生？

ペルソナを用いてニャルラトホテプと戦ったペルソナ2

そして…同じくペルソナを使い『絶対の死』から人々を遠ざけたペルソナ3

魔神アシタロスと戦ったGS美神極楽大作戦。

そのどれもがこの世界と少なからず関わり合い、そのほぼ全てが最悪を持ってくる。そして今回は核以上の絶望を聞かされた。

『絶対の死』ニユクス。もしこれが実在し降りてくるとなれば、何処にいようと結局自分達は死ぬ事になる。

(確かペルソナ3では主人公が『ユニバース』と言う力に目覚めて、ニユクスを封印して世界を救った。でもこの世界にはそんな人間はいない)

大樹にそこまでの自己犠牲の心など無い。

友人も大事だし、仲魔も大事だが、究極的には自分が死ねば全て終わりだと思っている。

どちらにしても大樹にはその資格も力も無いので意味が無い悩みなのだが。

とは言えこの世界には終末理論を信じる輩は少ない、数年に1〜2回ほど世界が滅びる年月、などとやり始めるが其処まで破滅を重要視している者は少ないだろう。

だが、世界中に核が降り注いだらどうなるだろうか。

何億と言う人間があつという間に死に絶え、文明も崩壊し明日も知れない身になればどうだろうか？

安らかに死にたいと望む人間が増えないとは限らない。そして、その願いはニユクスを呼び寄せる格好のエサになるだろう。

この世界にもし本当にニユクスが居るのならば…と仮定すればなのだが。

(この世界にはペルソナ3…いや、あの世界特有の『影時間』は無い…シャドウも見た事は無いし杞憂だとは思いたいけど…僕の勘繰り過ぎ…であればいいんだけど)

「…死が降り注ぎ、人は嘆き絶望し死を渴望するの。ただ祈り願い静かに眠る事を望んで。でもそれは絶対の眠り、終わりの無い眠り、それは永遠の無」

「ち、千佳ちゃん…いい、一体」



《トランスしてる…？ 違うわね…でも碌でもないって事は確かか》

「……つまり、核さえどうにかなればその眠りは来ないって事かな。こなたじゃないけど無理ゲー以上の物だね」

核が世界中に降り注げばどちらにしても全てが終わわり、ここが核から逃れられたとしても待っているのは死。

つまり自分達が生き延びたければ、核をどうにかするか異世界にでも逃げるしか方法が無くなったという現実には頭が痛くなってくる大樹。

基地の破壊に、不良の討伐だけでも此処まで四苦八苦している上で、更にメシア教を操っている神々にまで手を伸ばせと言うのはかなり無理があるだろう。

しかし、無理でもやらなければ待っているのはあらゆる存在の死。それで悪魔達がどうなるのかは分からないが、生きている以上はやはり死ぬ運命が待っている。

「絶望しなくても、ただ歌だけは何所までも届く、貴方にだけに聞こえる歌を…」

「……」

「優しき女教皇は示した…心の奥から響く声なき声…それに耳を傾ける意義を…」

「心の奥から……か……」

その言葉に横島の事をふと思い出した大樹。

もしかしたら横島はこれからの事を知っているのではないかと、もしそうならば対抗策があるのではないかと。

今は聞こえなくても、必要な時が来たら耳を傾けよう。

「おーいつ、大樹くんっ！ そろそろ時間だよっ！」

「ん、ああ、今行くよ。それじゃ失礼します……君の言葉、しつかりと記憶させてもらったよ。僕に何が出来るのかは知らないけどね。死にたくないから足掻くだけ足掻くさ」

「……………」

「なんとなく言って良いかわかりませんが……どうかこの町を……宜しく願います」

それに頷く事はせず、大樹は様々な思いを秘めてこなた達に歩み寄る。

少しずつ進むに連れて広がる、無心の道。

まずは……神の火を奪う事から始まるのかも知れない……………



Continue101 〱何処までも理不尽な世界で?? (後書き)

無理ゲーに更に無理難題が追加された！ と言う感じのお話でした。ニユクスと直接対決する事は無さそうですが、核を如何にかしなないと終わりフラグがやってきそうですね！… 具体的には異界を戻す前にメシアに突っ込むフラグでしょうか？ どうなるやら…

今回はちょっとだけ情景描写が出来たかなあと…うーん、まだまだ難しいですね。

頑張らないといけませんっ！

どうでもいいこと

喉飴ころころころ。

いえ、実は先程喉を切ったっぽくって血が出たんですよえ。

という訳で喉飴の出番なのですよ〜

でも、色々なのだ飴があつて困りますよね〜。

皆さんはどのようなのだ飴を舐めますか？

VC3000 喉飴はすっぱかったです(笑)

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回からコミュは1〜3位までを載せようかなーと思います。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？キヤラー人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

#### 次回コミュ話対象キヤラ表

こなた：4票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

ダツキ：4票（手助けフラグはON）

アリス：2票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：4票（???なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：1票（???なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：1票（再戦フラグまで後1回）

皆方武：5票（????????）

#### 投票について

一人一回、キヤラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいですよ。

Continue102 〳何処までも理不尽な世界で〳〳(前書き)

という訳で、移動編なのですよ〳。

すーじーすー、すーじーすーお話が動いている気がするのです。

それではど〳〳〳

今日は、自分なりに納得がいつてなかったり…やはりお話を書くのは難しいのです。

Continue 102 何処までも理不尽な世界で??

今の所何の問題も無く、全員を乗せた大型バスが走っていく。

このまま悪魔に注意して進んでいくとして、大体1時間程度という短い時間でシエルターに到着出来るだろう。

歩いていっても数時間で着く距離なのだが、流石に大型バスな上に場所が入り組んでいる為に移動するのに難がある。

更に言えば警戒しながら進まなければいけないので、飛ばしていく訳には行かず安全運転で進んでいる為に時間が掛かるのだ。

それでもエストマの魔法や警戒が功を奏し、30分経った今でも悪魔と遭遇しては居なかった。

そしてそんな車の中でも、小さな騒ぎが起こっていたりする………

中は自衛隊の車両ではなく、クズノハ専用の特殊車両の為、それなりに便利な物が数多く用意されている。

トイレに簡易キッチンやテレビ、寝具など、大型バスと言うよりは巨大なキャンピングカーと言った感じだ。

万が一、これで長距離を移動する事になったとしても、ある程度の水や食料は積んでいる為この人数でも3日は余裕で持つだろう。

まあ、例え無くなったとしても大樹がカードから用意すればいいの

だが。

「うわぁ…私達って今凄い光景目の前にしてるんじゃないの？」

「あ、悪魔が一杯…スね」

こなたの召喚した仲魔達が、戦えない皆の護衛をしているのだ。

中には悪魔を初めて見た者も多く居る為、初めは混乱するかもしれないと思っていたが、こなたの説明やクズノハからのお墨付きで安全だと言う事が分かると多少は落ち着いている。

寧ろパーティやひよりに至っては、現実世界に現れた悪魔に興味を示しているほどだ。

『逆に言えば私達も一般人が目の前に沢山居るのが変な感じだけだね』

「オウツ　フェニックスがヒトの스가タしているとはアラタなハツケンですネっ！　モエをカンジマスッ！！」

『わー…うちのサマナーそっくりだなこの金髪、しかし胸がけしからん。やはりここはアメリカちゃんが…』

『身内ノ恥ダナコイツハ…』

『今更ですし…ねえ』



『これみよがしに溜息つかないで其処の二体っ!?!』

「あれも悪魔なんスね…うーん、見た目以外はあんまり人間と変わらないのかなーっていうかロリコン…?」

初めは流石に驚いたり恐怖してしまっていたが、こなたの仲魔である上、裏に詳しい柊家が尽力してくれた為に騒ぎになる事は無かった。

更に言えば、ユルング以外の悪魔は見た目が基本人間に見えるので安心感を感じているのだろう。

じゃあくフロストについては…

『わーい 沢山のお菓子だホー』

「これも悪魔なんだよね…結構可愛いかも」

「凄まじいなあやのは。まあ、見た目は黒っぽい雪だるまだしなー」

「我がパーティの癒し系なのだよ。このひんやり感、夏にお勧めだからねっ!」

「……可愛い…ですね」

と、こづいっ感じで上手い具合に受け入れられている。

大樹の仲魔達はそれぞれ持ち場に付き、万が一の為に動けるようにしている。流石にグクマツツは巨大過ぎるのでCOMPの中なのだが。

アリスやアメリカはともかく、キンキやオーカス、パールヴァティは他の人間に対しては余り友好的では無い為 パールヴァティは違う意味で危険な為 こういう割り振りになっている。

ちなみにユルングは大きさをある程度変えられるらしく、現在は小さい龍の姿になっている。

「でもさあ、まさかこなたちゃんがデビルサマナーなんてねえ。私達も巫女とかしてるから分かってるけど、結構噂あるじゃない？」

柊家の次女であるまつりがこなたを心配そうに見ている。

彼女自身も昔、巫女としてかがみ達と同じような事をしていた為、悪魔の恐ろしさやデビルサマナーについても色々知っていた。

とはいえ、姉のいのり共々メインは巫女に重きを置いている為、退魔の方は余り才能は無かったので直ぐ引退になったのだが。

その点では、かがみとつかさはとても優秀な方に入り、将来は専門の退魔業に就くかもしれないと家族達は思っている。

勿論強制するつもりは無く、目指すものがあれば目指しなさいと両親は言っているのだが、その辺はかがみ達しか分からないだろう。

「私は最近なつたばかりですけどね」。大樹君から貰って、そこから始めましたし。かがみ達と異界に居た時は銃とナイフだけでしたよ」

「そっか…頑張ってるのね…それにしてもあの子達。一体何所に居るのかしらね」

「かがみもつかさも強いですから、きつと無事だと思いますよ。ね、みゆきさん」

「そうですね。今はただ信じるだけです」

この中で唯一家族が揃っていない柊家の面々の表情はやはり暗い。

しかし、家族ぐるみで裏の仕事に関わっていただけに、ある程度の覚悟は出来ている為、最悪の覚悟は出来ているのだが。

裏に関わっていると言っても、夫であるただおと妻のみき以外は余り強い力を持っていない。

その二人ですら、ブランクがあるためレベルは10に届いているかどうかの力量しかないのがネックだろう。

雑魚には負けはしないが、現在この町に居る悪魔と戦うには実力が不足している。

「大の大人が、子供に頼らないといけないのは…情けないものだね」  
「そうですね、でも自分の娘がここまで頑張ってくれているのを見るのは、こういうのは何ですが嬉しい、と思いますよ」

「はは…そうですね。我々は我々で出来る事をするしかない…ですね。あちらのシエルターで私達が出来た事をしましょう」

「ええ、これ以上子供達に負担は掛けられませんしね。残された僕達が頑張らないと…」

みゆきとこなた、そして子供達を見守る二人。

力があっても、権力があっても役に立たないという不甲斐無さに、怒りを感じながらも、今出来る事をしようと改めて誓う。

こなた達が安心して戦える様にするのも、自分達の使命だと考えながら。

「あちらは花が咲いているわね」 私達もお話しましょっ

「そうですね…ええ、そうしましょうか」

「では、私が飲み物持ってきますね」

「あら、ほのかちゃんありがとうね」

「あ、ほんならそれ、ウチが持ってきますわ。皆さんはゆっくりし

てて下さい」

「いえ、一緒に行きましようか、量もありますし」

「ほな行きましょ」

気分を紛らわせようとゆかりがみき達に話しかけていく。

現在がどれほど危ういのか、それを分かっている押し潰されないようにする為に、笑顔で今を乗り切ろうとしているのだ。

自分達が潰れてしまえば、子供達が恐怖に脅える事になる。そんな思いをさせない為にも今はただ笑顔で乗り切ろうと彼女達は笑い続けていく。

ななこや、ひよりの両親、みなみの両親達もそれに釣られて笑いながら談笑をし始めた。

……

……

…

みゆき達の方では、これからの事について話し合っていた。

ある程度話は纏まり、今は談笑中らしい。

何事も無く辿り着ければいいのですが。

「おおっと小竜姫、それはフラグだよ」

フ…フラグとは何なのでしょう？ 旗…？

「ふっふっふ。思わせぶりな事を言つと現実になると言つ！ っとな感じかな。そんな事言つてると敵襲が来ちゃうよ」

人差し指だけを伸ばして、にやにや顔で言つこなたに、小竜姫は見た目が剣なので分かりにくい、ちよつと焦っている様子が伺える。

基本生真面目な小竜姫はからかいやすい為、格好の的にされやすくよくアリスやこなた、時々パールヴァティにすら弄られていた。

『このメンツに喧嘩売るって、メシア教じゃあるまいしあんまり居なさそうですけどね』

『寧ろ一般人も居るからこそ狙われる可能性もあると思いますけど』

「おお…なんて言うか二人並ぶと若い主婦みたいだね、シルキーとディースって」

『それは…褒めてるんですかサマナー？』

「いやー、はっはっはっはっ とりあえず、さっきの件に関して はね。大樹君が言うにはいつでも戦える気構えは持っていた方が良

いってさ。うんうん、良い事言うよねえ」

確かにそうですね。相手は此方の事情など気にした物では無いのですから、常に最低限の緊張はしていた方がいいかもしれませんね。

油断していたら行き成り即死した大樹の言葉は結構重かった。

一歩間違えれば、少し遅ければ死んでしまうのが悪魔との戦闘なので、微かな油断も出来ないのは当然と言える。

「百太郎に反応はないのですか？」

「今の所はね。ってかさ、ここで強い悪魔ってまだ見た事無いなあ。高くても20位だっけ？」

「20…昔は強敵だったのですけどね。私達も多少は戦える様になつてきたと言う事でしょうか」

『でも、自信はあんまりねえよなあ。ケルベロス見てたら…ありや反則だっつーの』

普通ならここまで強くなれば多少は慢心しそうなもののだが、金剛神界で戦ったケルベロス戦の一件が上手い具合に彼女達の慢心を取り払っている。

ここまでがエンノオツヌの考えならば、それは大いに成功していると言えるだろう。

『何にせよ警戒は必要って事ですか、気をつけないといけませんね』

「まっ、なるようになるでしょ。そんな時は皆の護衛宜しくね」

『任せヨ。必ずヤ護り通ソウ』

『まあ、後方支援とか援護なら慣れてるしね、私達。基本行く前に倒されるし…ねえ？』

「あはははは、ジト目怖いっスよフェニ子ちゃん」

『フェニ子ちゃん言うなっ！！』

……

……

…

所変わり、運転手の隣には大樹が座っている。

常にCOMPの百太郎を起動しながらも、常に辺りに気を配っていた。

直ぐ近くではアリスとアメリカと一緒に辺りを警戒してくれている為に、今の所問題は無いようで、進むペースは遅いが確実にシエル



ターに近づいている。

「今の所は問題無いか…出来るだけ急ぎたいけどそれで鉢合わせしたら目も当てられないしなあ…」

「確かにそうだね。でも君の魔法は凄いな、数分歩けば出てくる悪魔達がぱったりと出てこないなんて」

『と言っても、効果があるのは大樹さんより弱いレベルの悪魔だけだから、過信はしないでね？ その時は戦わなくちゃいけないから貴方達は一般人の護衛宜しくね』

「分かっているよ。それが俺達の役目だからね」

「大丈夫なのですよ、こなたもみゆきもいるですし、余程の相手じゃなければ勝てるですっ！」

「だといいけどね。流石に上級クラスの悪魔が闊歩してる訳は無いと思いたいけど」

可能性として高いのは雪之丞との遭遇位だろう。しかし相手が雪之丞ならば一般人には手を出さない筈なので、其方に関しては安心しているのだが。

問題は、今の木村達であの英雄に勝てるのかと言っ点だろう。

あのままのレベルならば確かに今のレベルなら圧倒できるかもしれないが、あれでも弱体化していた筈なので、そう都合良くは行かない

いだらうと予測していた。

不良：人修羅と名乗ったあの男がこのような場所でうるちよろしている可能性も薄いので、居るとすれば彼か、ユニーク悪魔程度：もしくはガイア教の可能性がある。

ガイア教については個人のレベルはどの位か詳しく判断できないが、あの男性　ガイア教の隊長　が出てきた場合は厄介な事になるかもしれないと危惧している。

（偶には上手い具合に動いてもらいたいけど…ね。問題はこの後か…柘さんと妹さんが何所にいるか…メシアに拉致された可能性はあるな。こつちには高良さんが居るし、その人質として捕まっている可能性はかなり高い。それだけならいいけど、洗脳されているとしたら…いや、それは文珠で解除出来るか）

MPは足りていたので昨日の夜もう一つの文珠は作成できていた。

これで通常文珠は二つあるので、【解除】の文字で洗脳程度なら解除出来る。

寧ろこれで解除出来なければ金文珠を使うしかないのだが、そちらはもう作る事が出来ないので使うのは躊躇うかもしれないが。

『早く基地をどうにかして、その後は異界を作ってるあの人間を殺せば終わりだねっ　　漸くのんびりとした生活が送れそう　』

「そう…だね。そうなりたいよ」

ニユクスの事を今言っても信じられないだろうし、信じたとしたら絶望してしまうかもしれないので言づに言えないというジレンマに陥る大樹。

出来るなら全部ぶちまけてしまいたいと、自暴自棄になってしまいそんな心を必死に押さえつけて、目の前の事から取り組んでいく。

何故こうも不幸な出来事が立て続けに起きるのかと思うと、流石に気が滅入りそうになっていた。

「あ、ご主人様っ　あそこ通ったですねー」

『良く覚えてるわね。記憶力良いのは知力が高いせいなのかなあ？ ……って…大樹さんあそこっ！！』

「…！？　運転手さん、悪いけどスピードを上げて逃げる準備を」

「…分かった！」

アリスが指差した方向から、複数の装甲車らしき物やバイクが近づいてくるのが見えた。

後方からも同じく数台の車が此方に向かってくるのが見える。

一瞬で思考を切り替え、最悪の場合の事を想像し考える。今すぐ攻

撃してこないと言う事は、此方を攻撃する意志が無いと言う事だろう。

逃げ遅れた自衛隊員が山賊まがいの事をしている…とは流石に考えられず、となれば考えられるのは一つしかない。

「ご主人様っ！ 後ろからも来てるですっ！」

「囲まれた！？ くっ…相手が人間の場合も想定していたのに…まさかこういつた手で来るとはね」

『自衛隊かな？ あの石山って人が逆恨みで寄越して来たとか？』

「いや、それは無いよ、それは権力者の皆が止めている筈だし。多分あれはガイア教かな…何が目的なんだ？ 食料…いや、もしかして高良さんが居る事が分かって…？」

『成程ね…それで、どうしよつか大樹さん？』

如何に装甲車の様な頑丈な車両とは言え、悪魔が闊歩するこの町で車を使つて来る可能性は低いと考えていた。

装甲車ですらメギド級の魔法を受ければ一瞬で破壊出来るだろう事は、彼等も熟知している筈なので、まさかこんな作戦を取ってくるとは考えられなかったのだ。

大樹達はエストマを使う事により、ある程度までの悪魔を近寄せない方法を取れたので車を使っていたのだが。

この辺りはやはり戦闘経験が不足している子供特有の判断ミスなのだろうが、確かに大樹が考えていた様にこれは自殺まがいの行動とも言えるだろう。

一歩間違えれば悪魔達に皆殺しにされてしまう可能性があるのだから。

「何とかするしかないね。相手が攻撃してこない以上、其処に活路を見出す。こなたっ！ 高良さんっ！ 皆をまとめて安全な場所に！」

その言葉を聞いた二人は迅速に動き始める。

彼等もその言葉に驚きはしたものの、直ぐ言われるままに仲魔達に先導され一番奥の方に隠れていく。

これで最悪バスが壊されたとしても、文珠による結界で皆の安全を図れるようにしていた。

「避難終わったよ！ 私達も何時でも出られるっ！」

「どうしますか佐藤さん？」

「スピードを上げて振り切る…のは多分無理。今すぐ攻撃してこないとはいえ、最悪は戦うことになるかもしれないね…すみせんバスを止めてください。こなたは仲魔達と皆を護衛して欲しい。外へ

は僕が出る」

「…大丈夫？ 私も…」

「いや、こなたの仲魔は皆護衛に回ってるし、後方からの射撃を任せたい。もし大丈夫なら窓からの射撃もいけるよね？ 万が一の場合文珠を使って防御を」

「うん、分かったよ。大樹君、みゆきさん気をつけてね？」

『私達も居るし平気よこなたっ 見た感じ悪魔には見えないし人間でしょ？ さくつと殺してくるから』

殺して、の部分で流石にクズノハの人間が冷や汗を掻きそうになっていた。

「僕達が降りたらいつでも動ける準備を。何かあればこなたの指示で逃げてもらえますか？」

「分かった。しかしそうなった時、君達はどうするんだ？ って、あの巨大な鳥に乗っていくのか」

「そう言う事です、上空からなら見つけやすいですし。くれぐれも皆をお願いしますね」

『おい、奴等出てきたようだぜ？ 行くかサマナー？』

「そうだね。では行きます…準備を」

車のスピードを下げようとした時、大きな声が響いてきた。どうやら拡声器か何かを使っているらしく、声が良く響いていく。

《その車、今すぐ停車せよ。直ぐに停車すれば此方から攻撃はしない！ 繰り返す！ その車、今すぐ停車せよ。直ぐに停車すれば此方から攻撃はしない！》

『だ、そうだぜ？ どうするよ？』

「……………ここまで囲まれてたら、逃げるのは難しいね。となれば…止まるしかないか。どちらにしても相手にするつもりだったし」

「ってか、あそこまで大きい声出したら悪魔が来るって分からないのかな…寧ろそれを狙ってるのか？」

「もしくはこの辺りの悪魔程度なら対処出来るか…だろうね、こんな事してる位だし。よし、とりあえず行ってきます。こなた後は任せろよ」

「うん…気をつけてね」

「勿論。死にたくないしね」

ペルソナをバクヤに付け替えて、バスを降りる大樹とみゆきと仲魔達。

その前方からバイクが走り寄り、目の前で止まった。

どうやら二人乗りで来ているようで、後部座席に座っていた人間がゆっくりと歩いてくる。

何時でも戦えるようにペルソナを唱えようとする大樹と、攻撃の準備は完全に整えているみゆき。

だが、その手は完全に止まってしまった………目の前でヘルメットを脱いだ相手を見て大樹達は完全に硬直して。

「………久しぶり………かしらね？ 二人とも」

ライダースーツを身に纏った柊かがみが其処に居た………



という訳でガイア教+かがみんとのコンタクトです。

ガイア教無謀〱とか思いますが、実はこれも色々作戦があったり。

大人には色々考えがあるのかもしれないね、それらについては次回のお話で掻きたいです。

問題はそこまで上手く説明できるかなーって所ですね（汗  
なんせ私の頭がよくないので…（みー

明日明後日は、また仕事が忙しいので遅くなる可能性が高いです。  
もしかしたら更新できないかもしれないので…期待しないでお待ち  
下さい。

どうでもいいこと

ねーむーいー…やはり疲れが溜まっているのです。

甘いものが食べたいのですよ…甘い物…甘い物…げふう…

チョコ…パイの実とか…食べたいなあ…でもこの時間に食べたら太  
るし…

ちくせう、「私幾ら食べても太らないのよね〜」とか言ってみたい  
ぜ…

パイの実は美味しいですよね〜。時々買うのですよっ！

皆さんが好きなチョコのお菓子といえばなんでしょうか？

きのこの山とかたけのこの里とかありますよね〜

ちなみに私は邪道でどっちも好きです（笑

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

という訳で再スタートです。今回は誰になるんでしょうか

次回からコミュは1〜3位までを載せようかなーと思います。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ? キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

次回コミュ話対象キャラ表

こなた：10票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

みゆき：4票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

ダッキ：7票（手助けフラグはON）

アリス：5票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

パール：10票（???なフラグが建つ?まで後1回）

フォル：2票（???なフラグが建つ?まで後1回）

雪之丞：3票（再戦フラグまで後1回）

皆方武：9票（????????）

投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。

但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効

となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると思います。

な、難産でした…

やはりこういうのは凄く難しいです、思うように書けないと言っか、  
上手く動かせないというか…やはり頭が悪い所為で上手く内容がま  
とめられないのが問題ですね(涙)

今日は19時に帰ってこれました。で今の今まで時間が掛かりまし  
た…

ああ、これだけの事にこれだけ時間が掛かるなんて…涙が出そうで  
す。

更に言えば、今回も色々納得が行かないー(涙)

隊長さんが格好良く書けないよう…ちくせつ…

皆方武視点

運転してきたバイクから柊かがみが降りて、細工は隆々後は仕上げを御覧じろって所か。

まずはファーストコンタクトは成功って所かね、あちらさんもこちらを見て直ぐ攻撃はして来ない所を見ると交渉の場は開けそうだな。此方のカード用に色々ネタも混ぜ込んだんだ、相手さんもこれを理解してくれているといいんだが。

とりあえずはあの子の手腕を期待して任せてみるか。

「……久しぶり…かしらね？ 二人とも」

「ひ、柊…さん？」

「かがみさん…何故…？」

「何故？ 何故ね…そう、『何故』よね？ 私がここに居るのも、この町がこうなったのも全部『何故』…」

「どうして…ガイア教なんか？ それにこれは何の真似だろうか  
な？」

ほう、動揺していたのはほんの僅かって所か。大分修羅場を潜って来ていると見える。

こうなつた相手はやりにくいからな、彼女で何所まで持つていけるか。

「力が欲しかったから。単純に言えばそれだけかしらね…力が無ければ何も出来ないし、全て奪われるだけ…神は助ける所か人間を間引こうとしてる位だし」

「意味が、意味が分かりません…かがみさんっ！…！？あの…つかさんは何所ですか？」

「柊さんが居ると言う事は…妹さんも…いや、まさか？」

「流石ね佐藤君、理解が早いわ。いつもなら先にみゆきが気づきそうなものだけど、やっぱり混乱すると分からないものなのかしらね。つかさは居ないわ…ガイア教にはね」

会話を続けていく3人に注意しつつ、此方は出来る事をしておくか。出来るだけ自然の体勢を取ったまま、ヘルメットに内蔵してある小型マイクを使い、部下に指示を出す。

逃げられないように周りを固めておかなくてはな、ここで逃げられでもしたらこの作戦がオジャンになってしまう。

《A班、B班共に移動開始。決して気取られるなよ》

《A班、ラジャ》

《B班、ラジャ》

表に出ているのは佐藤大樹と高良みゆき、そして佐藤大樹の悪魔……  
だな。

恐らく姿が変わっているのは合体した所為だろう。この数週間、何  
所で何をしていたか聞いておきたい所だ。

「まさか……つかさんが……殺され……」

「てたんなら、もう少しマシだったんでしょね。私もただ絶望し  
てただけかもしれない。でも状況はより最悪だった……つかさはメシ  
ア教に拉致されたわ。みゆきと同じ聖母候補って事でね」

「!? よりにもよって聖母候補……か。高良さんだけだと思ってい  
たよ、まさか彼女もそうだったなんて。と言う事は……」

「今現在つかさはメシア教に捕らわれてる。もしかしたら手遅れか  
もしれない、けど……私はつかさを助けるわ。例えどんな手を使って  
も」

「わ、私達も一緒に手伝いますっ、だからっ！」

「だから…何？　ガイアから戻ってこいって？　悪いけど戻るつもりはないわ…別に洗脳されてる訳じゃないわよ？　って言っても信じないか…こっちに居る理由は単純。彼らには私には無い力があるから、それを利用してもらってるだけ。勿論相手もそれを分かっつて私を利用してるけどね」

上手い具合に高良みゆきは会話を聞いているようだが、佐藤大樹の方は今一分からないな。

彼等の此方に対しての心象は先の件もあるし、最悪に近いだろう。

俺達は仕事とは言え改造悪魔をけしかけ実験の為に殺そうとし、更には高良みゆきを拉致しようとしたんだからな。

此方に柊かがみが居るとは言え、あっさり信用する、もしくは協力するなんて考えは持っていないだろう。

となれば無理矢理、柊かがみを押さえ込んで此方を攻撃、もしくは威圧交渉に入る…ってな所か。

まあ、それをさせない為の手はいくつかあるんだが、出来れば使わせないで貰いたいもんだ。

「個人の力じゃ限界はある、確かにガイアの力を借りる事が出来れば、あの特殊な悪魔や、軍隊以上の数の力は確保できる…か。確かにね」



「……………」

「でも、それだけやっても未だに妹さんは助ける事が出来ていない。そして今回はこういう手に出た…成程…僕達の力を借りたいという訳かな」

「追加で言えば、私達が敵に回らないようにする為の配慮と言う感じでしょうか？ もしメシアか何かを攻めるとしても第三者である私達が襲ってくる可能性を潰す為の」

「……あっさりと見切られたか」

何とというか未恐ろしい子供達だな。1を言えば10所か20まで理解してくるか。

これが味方なら本当に得難いものなんだが、一つ間違えば敵と考えると寒気がしてくるな。

さて、あそこまで理解された以上、柊かがみでは交渉は不可能だな。情に訴えかける作戦は元々期待してなかったが、彼女が居る分あちらの手が止まっているのが幸いだ。

《隊長。包囲完了しました、改造悪魔も何時でも出せます》

《よし、最悪を考えて何時でも使えるようにしておいてくれ。だが、焦るな？ 俺が命令を出すまでは絶対に動かすなよ》

《了解》

短い会話を終えヘルメットを脱ぎ彼女の隣まで歩いていく。

此方に気づいている悪魔達が睨んでいるのが分かる。いや、何とゆうか生きた心地がしないな。

俺は残念ながら普通の人間なんでね、怖いものはやっぱり怖い。

「あ、あの。まだ私」

「あー、多分無理だ。彼らが攻撃してこない時点で君の役目は十分果たしてる、下がっててくれ」

「…わかりました」

「さて…久しぶりと言ったほうがいいかな？」

「……あの時の、面倒臭い相手が出てきたな」

「ははっ、嫌われたもんだ。…さて、初めまして。ガイア教特殊部隊部隊長、皆方武だ。宜しく」

「随分とお粗末な手を使うね。悪魔に此方を知らせてるようなものじゃないのかな？ それともこの包囲で僕達を如何にか出来るとでも？」

「まさか、上位のデビルサマナーの実力を侮っちゃあいない。その気になればこの程度くらい叩き潰すのは朝飯前だろう？」

まずは軽い舌戦からスタートか。物事の順序が良く分かってるな、強いて言えば少し威圧が強すぎるのが難点か。

恐らくは、恐怖を押さえ込んでいるか。こういった交渉が苦手か…  
って所だな。

其処を上手くつけばこちらの有利に進められるかね。やれやれ、自分で起こした作戦とは言えこうというのは本当に面倒臭い。

「今回のこれは、単純に言えばパフォーマンスの様な物だ。お二人さんなら直ぐに気づくかと思っただが？ どうか？」

「…っ！ 成程、確かに分かりやすい実力の見せ付け方ですね…」

『え？ え？ 何がどう言う事？』

「成程ね…簡単だよアリス。ガイア教の連中は『自分達はこの異界でここまで出来る実力がある』と僕達に見せ付けたんだ」

「悪魔すら無視して進める事の出来る車両とその数。悪魔を呼び寄せたとしても勝てると言う確かな自信。更には先程から感じる悪魔の気配…自分達にはここまでの価値がある、仲間になった時、共闘する時、自分達はここまで出来ると言う事を見せ付けた、という訳ですね？」

「正解だ。一から説明しようにも俺達は一度戦っている、そんな相手の言葉など信じられないだろう？ ならば直接実力を見せ付ける

事で俺達の本気を実力を示した訳だ」

まあ、これをやるには柊かがみの協力が必要不可欠だったりするんだけどな。普通にやれば返り討ちにあって即終了、ある意味バクチみたいなもんだ。

時間も色々押しているし、ゆっくりと時間を掛けた交渉は初めから無しの方向で動かせてもらった。

更に言えば如何に此方に詳しい情報や人質が居るとは言え、弱いと断定されてしまえば仲間になるのはおるか共闘すら持ちかけられないしな。

という訳で手っ取り早くガイア教団としての実力と本気を簡単にだが見せた訳だ。

俺達の力は個人個人は弱いとしても、群としての集団での強さなら自信はある。数と言うのはある程度までなら、多い方が勝利する、それを実践しているのが俺達だ。

さて、いい感じに理解してくれた所で次の段階に入るとするかね。

「俺達がお前達に要求する事はたった一つ。『この異界を脱出するまでの共闘』、これだけだ。此方から出すカードは『メシア教の内情及び柊つかさの情報と攻略』、『柊かがみの共闘終了後の開放』、『核誘導施設の情報と攻略』如何かな？」

「……………少し考えさせて欲しい」

「了解した。ゆっくり考えてくれ、色好い返事を待っているよ。出来ればこのまま決裂と言うのは遠慮してもらいたいけどね」

「私も出来れば貴方達には力を貸してもらいたいの、つかさを助ける為に」

その言葉を聞いてから話し合いを始める佐藤大樹達。

後は結果待ちだな、見せられる物は、出せる物はこちらも出した、後は相手の要望と答えだけだな。

どういった答えを出してくるか。まあ、相手の状況を考えれば答えは一つしかないと思うがね。

#### 皆方武視点解除

#### 佐藤大樹視点

嫌な予想は良く当たるけど、これは本当に何か憑いているじゃないかと思うくらいに不幸の連続だと思う。

よりもよって、柊さんはガイアに入ってるし、妹さんは聖母候補として拉致された…か。

人一倍真面目な柊さんだから、今回の事も自分で選んで行動したんだろっな。でも…いや詮無い事か、どちらにしても僕達が戻って来るのが遅かったただけだ。

さて…ガイア教からの共闘の誘いか。信じていいものかどうか判断がつかないな。

更に言えば幾らあつちに柊さんが居るとは言え、随分と余裕がある様に見える。それがブラフなのかは分からないが、下手な行動は取れないか。

聞くだけ聞いてみれば、確かに悪くはない条件だ。

全てが終わったとに柊さんを解放してくれるならば、それ以上付き合う事も無いだろうけど、それを素直にはいそうですかと信じられる訳が無い。

いっその事【読心】でも使って相手の内面でも覗いてみようかと思っただけど、流石に文珠が勿体無さ過ぎる。

金文珠がぼろぼろ作り出せた頃が懐かしく思えるよ…横島の気持ちが何となく分かる。切り札過ぎて使えないのは切ないね。

「どうしましよつか佐藤さん…私はあまり信じられません」

「同意だね。僕も全ては信じてないよ、でも共闘を持ち込んでいる

以上、相手もこの状況を何とかしようと考えているのだけは理解できるね」

『で、どうするんだ？ オレはこういう方面は苦手だからそっちなで決めてくれ』

「アメリカはご主人様に従うのですっ！」

『私も信じられないけど……うーん。どうするつもりなの大樹さん？』

「まあ、これは交渉と言う名前の脅しなのは大体分かってるからね、はっきり言えばOKするしかないんだ」

『ヒョーヒョー。人質が複数取られておるからのう』

そう、僕達是对等の立場で交渉している訳ではない。

ガイア側はバスの中の皆と柊さんを人質に取っている形で僕達に選択肢を突きつけてきている。

断れば直ぐに戦闘が始まるだろう。その場合柊さんがどのような目に合うかは分からないが、あちらは僕達を無視してバスを狙ってくる可能性がある。

勿論あの中にはこなたも居るし、こなたの仲魔も居る。更に言えば文珠もあるから護りきれれるとは思っけど、この世の中絶対なんて言葉は無い。

もしかしたら相手も何か切り札を持っている可能性はあるし、これ

で誰かが死んだら意味が無い。

相手側は僕達を殺そうとは考えて居ないはずだ、となれば…一時的に共闘をするのも考えなければならぬだろう。

ならば僕達からは、僕達にとって有利な条件を突き出していくしかない。今の場合だと全てが終われば得をするのはガイア教だけだ。

利益云々は実際の所どうでもいいんだけど、此方が完全に安心できるといふ条件が欲しい。そうでなければ今共闘したとしても後で意味が無くなってしまふ。

柊さんも、面倒臭い場所に行ってしまったものだな…これで友人でなければメギドラでもアリスに頼んで叩き込んだんだけど…まあ、仕方が無い。

「後は出来るだけ上手く、此方に有利な条件を受け入れさせるか…ですね？」

「そうなるね。こなたがこっちに来れば良かったんだけど、流石にバスを離れさせるのはまずいから、僕達だけでやるしかないか」

『我らはどうするのだ？ もしもの場合に動けば良いだけか？』

『いつその事魅了してしまうものもいいかもですわねえ』

「それは無理かな、あたりに人が多すぎる。あちらに攻撃に意思がないだけでこの状況は何所から狙撃されてもおかしくない状態だからね。僕はともかく高良さんは危険だ」



バクヤを降ろしている以上、僕に銃撃は効果が無いから、最悪は戦えばいいんだけど…

とりあえず、前向きに考えてみよう。相手もこの異界から脱出した。その為には僕達という戦力が必要で、僕達が敵に回すのは出来るだけ避けておきたいはず。

ならば、其処を攻めるしかないかな…僕はこういう策略とかは苦手なんだけど…やるしかないか。

あれだこれだと高良さんや皆と話し合い、此方から提示する条件を考えていく。

やはりこういう時に高良さんは凄く役に立ってくれるよ、僕では考え付かない事も簡単に出してきてくれるのが嬉しいね。

後はこれをどうやって飲ませるか、かな。

「答えは決まったよ。こちらからもいくつか条件を出す。それを呑んでくれれば共闘は受けよう」

「いいだろう。で、そちらの条件は？」

「僕達から出す条件は、『共闘終了後、此方を襲って来ない』『これ以後僕達に関わらない』『資材などの提供』『制御下に入る訳ではなく常に対等である事』『僕達とガイア教が同時に行動はしない、もし行動するならば貴方が柊さんのどちらかとする』かな」

「悪いが2番目と最後は難しいな。特に最後は共闘の為には受け入れられない条件だ」

「では、このどちらかを削ろう、でもどちらかは必ず受けてもらう。出来ないなら……決裂と言う事になるけど？ その場合は覚悟出来ているよね？」

「そちらも、そう言う以上は覚悟出来ているのかな？」

「当然…寧ろ僕達が貴方達程度に負けるとでも？」

「こつというのは飲まれたら負けだ。」

「相手もそのつもりで、脅してきているのだろうしここは踏ん張り所だろう…正直言えば足が震えそうなほど緊張しているのだけだね。」

「そもそも僕は交渉が苦手なんだから、出来ればさっさと終わらせたい。」

「高良さんに任せようかと思ったけど、こつというのはデビルサマナーである僕がやった方が効果があるだろうと言う事で、僕がやっている。」

「ペルソナや他に色々な能力がある事は相手にもばれているんだろうし、自動的に僕がこつという役目になるのは仕方ないのだけだね。」

「さて、最後はともかく口約束でもいいから2は受け入れてもらいたい所だ。」

信用できるかと言われればガイア教はまったく信用は出来ないけど、彼個人ならば…もしかしたらある程度は信用しても良いかも知れない。

「……………」

「……………」

お互いに相手を睨みつけていく。

折れれば負けだ、その時点で僕の交渉は失敗となる…ハーモナイザ―でも使って置くべきだったかもしれないな。

「……………ふう。まあ、其方からしたらこういう条件なのは仕方ないかも知れんな。分かった。最後は無理だが2番は受け入れよう。これでいいか？」

「守り通せると信じても？」

「そこは信じてくれ、としか言いようが無いな。と言っか君達も全部を信用している訳じゃないだろう？」

「確かに…では、その条件は呑んでもらう。これでいいかな？」

「了解した。これからは一時的とは言え共に戦う仲間だ。とりあえず宜しくな」

「宜しくするつもりはありません…一時的なものだと言つ事を忘れないで下さい…」

「という訳で、僕達はこの先のシェルターに行きたいんだけど、護衛お願いするよ?」

「やれやれ、行き成り人使いが荒いな…分かった。聞いての通りだ!  
全員、持ち場につけっ!!」

彼…皆方と名乗った男が号令をかけると、それこそ軍隊の様にきびきびと動き出していくガイアの兵士達。

直ぐに辺りの気配は無くなり、残っているのは僕達と柊さんとあの男だけになった。

「とりあえず、吞んでくれて感謝してる…ありがと。でも私は今の所ガイアを離れるつもりはないから」

「…かがみさん…」

「馬鹿と思ってるでしょうね。でも…私には…私がやらなくちゃいけないの…つかさは私が助ける」

「…それが柊さんの決めた事なら、僕達は止めはしないよ。でも両親はどうするんだい? あのバスに乗っているんだけど?」

「…っ…今は会えない。悪いけど…先行くから。詳しい話はバス

を送った後にしましょ」

「という訳だ。んじゃ急いで行こうか」

皆方と一緒にバイクに乗り先に進む柊さん。

何を棄てても護りたい人が居る…か。

僕には大事な友人が出来ても、其処までできる勇気は、意志はあるのかな。

とりあえず……………

「バスで見ていた皆を如何にかしないといけないのが、一番面倒だよ……………」

先が思いやられるね、本当に…

佐藤大樹視点解除

とまあ、結局は受け入れざるを得なかった〳〳と言うお話でした。

切り札として改造悪魔と、かがみんに内蔵された爆弾もありますし、隊長さんは色々手札を多く隠し持っていたのが勝利の鍵になりましたねえ。

という訳で共闘と相成りました。

それでも、出来る限りの条件を突きつけた分、頑張ったんじゃないかと。

こういう話は難しいのですよー(涙  
勉強しないとなあ。

どうでもいいこと

最近グリーでゲームをやり始めましたっ！

こういうのは時々やると楽しいですねー

今やっているのは、ドラゴンコレクションという奴と  
ポケ・コレとか言う奴ですね。

と言っても昨日から始めたので初心者なのですが(笑

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお  
答えくださいね。

という訳で再スタートです。次回は誰になるんでしょうか

次回からコミュは1〜3位までを載せようかなーと思います。  
1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてませ  
ん。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。  
それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？キヤラー一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけで  
が。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。  
ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

#### 次回コミュ話対象キャラ表

こなた：14票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
みゆき：9票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
ダッキ：8票（手助けフラグはON）  
アリス：11票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）  
パール：16票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
フォル：2票（???なフラグが建つ?まで後1回）  
雪之丞：4票（再戦フラグまで後1回）  
皆方武：14票（????????）

#### 投票について

一人一回、キャラクターに投票できます。

この回数はストーリーが1話更新されることにリセットされます。  
但し何話も過ぎた後の連続コメントなどは申し訳ありませんが無効  
となります。

基本、1話更新ごとに1回投票出来ると思ってもらえると嬉しいで  
す。

最重要・アンケートについて：要・必読

いつも沢山のアンケート有難う御座います。

今回は、アンケートの投票やコミュキャラが全員満遍なく選べるにはどうしたら言いか、と言う事で少々ここでお時間を頂く事になりました。

いつもアンケートを投票されている皆様はどうか此方をご覧頂きたく思います。

今回色々指摘された事や、自分でも色々考えた結果、どうしてもコミュが取れない

キャラとかが出てきている点や、アンケートオンリーで、お話よりも投票をメインにしていると言うお話を耳に致しました。

私としては、楽しんでもらえている上で、一緒にお話を作っていくみたいな事を考えて居ます、どうせ楽しく書くのなら皆さんと一緒に楽しみたいなーと言う感じですね。

そこで、今回は真に申し訳ありませんが、

一度アンケート投票数を『全リセット』させて頂き、次の様な投票方法にする事に致しました。ご迷惑ばかりおかけしておりますが、どうかご容赦頂きます様…

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
  - 2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く
  - 3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く
- これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません)
- 3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承下さい。



## コミュキャラの投票に対する変更

基本は1〜3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1〜3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ふははははは、何も思いつかずとりあえず幕間のようなものでお茶を濁す大作戦です（滝汗

短いですがどうぞ。いつもながら描写は難しいですねえ。

最後にみなみちゃんが頑張るかも…？

ガイア教と遭遇後：大型バスの中

「そっか：それがかがみの選んだ道なら…ってそうそう簡単に納得ができるかーっ！」

『おおっ！ あれが噂に聞く一人ノリ突っ込みっ!!』

「いや、違うから」

ガーツと叫ぶあなたを尻目にこれからの事について相談している大樹達。

かがみがガイア教に加わった事、つかさが聖母候補としてメシア教に拉致された事などを、かがみの家族にだけ伝える事にした。

暴走されては敵わないのでそれを抑える為に慎重に話を進めていたが、それでも憤りを感じずにはいられないただお達。

自分の娘が、拉致され自分の無力を嘆き信仰を棄て、力を求めてしまった娘に涙する。

そして自分達には出来る事が無いと知り、齒噛みする姉達と母親を見て不謹慎ながらも大樹は羨ましいと少しだけ羨望の眼差しで彼ら

を見ていた。

「私達には会えない…か。何となく分かるわね。かがみの奴責任感強いし、恐らく今回の事も自分が不甲斐無いからって思ってるんじゃないよ」

「馬鹿な妹なんだからっ！ 私達に相談してくれたっていいじゃないっ！ …って私達じゃどうしようもないから相談できないのよね」

「残念だが僕達は力も何も無いからね…」

「かがみ…つかさ…」

「それでも一先ずは柊さんの無事は確認出来ました。とは言え洗脳されているかもしれないし、何かされている可能性も無いとは言えませんが」

『うむ…洗脳されているような目はしておらんかったから、そちらの点はないじゃろうな。じゃが安心は出来ぬぞい？』

相手がガイア教である以上、表面的には友好的に感じたとしても、裏側でどれだけ最低な事をしているかは予想しやすい。

改造悪魔などを使役している時点で、基本的な人間の持つ良心などは薄いと考えた。

となればかがみの肉体に爆弾か何かでも埋め込んでいる可能性は高く、可能性と言うか、実際に体内に爆弾は仕込まれているのだが

それを危惧している。

「みゆきさんを無理矢理拉致しようとしたくらいだし、つかさを助けてもはい、わかりましたーで返す気あるのかな？ 私でも其処は信じられないなあ」

「所詮、口約束でしかないからね、その可能性の方が高いよ。でもそれまでの間の柊さんの安全は確保できた…という点で妥協するしかないかな」

私が本来の肉体に戻ればこのような菌痒い思いをしなくてすんだのですが…

『小竜姫に肉体があっても強いだけで、そっち方面全然だめそうだけどねえ〜』

はうっ！？ ひ、酷いです。

「とりあえずは、柊さんと妹さんについては僕達に任せてもらう…しかないです。流石にあれをどうこう出来る位ならシェルターに避難して無いでしょうし」

「悔しいけどね…今は、かがみとつかさが最低でも生きていると言う事だけで満足するしかないか…佐藤君、そして皆さん。どうか娘をお願いします」

「任せてくださいっ！ 絶対に二人を助け出してみせますからっ！  
ね？ 大樹君、みゆきさんっ！」

「確約は出来ませんが…彼女達は僕にとって初めて出来た友人達です。無碍に殺させるつもりはありません」

「私もです。きつとかがみさんもつかささんも一緒にここで…」

自分達の力が及ばず、娘と同年でしかない子供達に全てを任せると言う情けなさに涙が出そうになるただお達。

しかし、自分の娘はその二人だけではなく其方も守り抜かなくてはならない。更には他の家族も自分達で守り通さなければならぬのだ。

適材適所と言う言葉通りに、自分達の役目は家族や力無い者達を護る事だと気持ちを切り替えていく。

いのりとまつりの二人も、今嘆き悲しんでも全てが終わる訳ではないと理解して辛くても前を見る事にしたようだ。

かがみとつかさを助けられるかどうかは未だに分からず、それ以上の問題も抱えている大樹達。

それでも一つずつこなしに行かなければ先には進めないと、この後についても色々と相談を始めていく。

「さて…これからどう行動するか…だね。ガイアのあの隊長と名乗る人が動いた以上、何かを掴んでいるのかもしれない」

「隊長って、あの時の人？ あー…なんだか手練って感じがしてた

もんね」

「実力は大した事なさそうだが、指揮などは侮れねえな。知ってるか？ 交渉中にあいつら色々動いてやがった。ありや包囲してたんだろうな」

「サマナー様と似たタイプかしらあ？」

「残念だけど、僕じゃあそこまで器用な真似は出来ないね。まだまだ成り立ての僕がそうそう簡単に熟練の兵士の経験に勝てる訳がないし」

「やばい時は力押しだしね。でもそれが罷り通るのがこの世界だけ」

「私達もそういふ方面での経験があれば良かったのですが…」

大樹達は総合して人を使う経験などが少ない。デビルサマナーとしてやっている今でもその未熟さ故に危険に陥る事が多々有るほどだ。今回の件を利用して、それらの経験を積もうと考えている大樹。皆方と行動をしていればそれだけでもかなりの経験が積めると見えた。

レベルアップしても強くなるのは基本的に実力だけで、それを上手く生かす為の経験が絶対的に足りない。

ある意味では、今回の事は好都合な状況とも言えるだろうと前向きに理解する。

「多分、メシア教に潜入しての妹さん奪還の班、核誘導基地の占拠の班と二つに分かれると思う。僕達を使う以上、戦力をまとめるよりは分散させた方が良さだろうしね」

「となると、私達がどちらにつくか……ですね。心情としましてはつかささんを助けに行きたいのですが。どうしましょう?」

「状況によって、だね。最終的にはあの不良を如何にかするまでが共闘だから、その間は特に問題はないと思う。せいぜいが弱みを握られないようにするか、かな?」

「私は、そだなあ……つかさも心配だけど憂いを絶つて事で基地が優先かな。大樹君はどっち?」

「僕は元々基地に向かう予定だったから、そっちに行くよ。でもその辺はあつちとの話し合いによるかな。僕達の力が必要ならばあつちに向かわざるをえないし」

ここで戦力を分散させる訳にはいかず、向かうときは3人1パーティを考えなくてはならない。

ついでに言えば、みゆきは現在つかさが居るとはいえ元・聖母候補な為、メシア教が何か仕掛けてくる可能性も捨てきれない。

となれば、大樹達は其方に参加せずに基地を狙い落とすのが最善なのだが、あちらにガイア教レベルの人間が向かったとして最悪戦闘になった場合を考える。

かがみは前よりは強くなった様に見えるが、それでもみゆきのアナライズ的能力である程度の実力を看破していた為、メシア教のあの幹部 シスター・アンナ が出てきた場合は直ぐに殺されてしまうだろうと見ている。

この中で実力的や相性的に戦う事が出来るのは、大樹がこなたのどちらかだろう。みゆきも強くなったとは言え相手はその上に行く相手な為、搦め手を使ったとしても勝てるかどうか不安が残る。

安心して戦えるのは仲魔を揃えてペルソナを出し惜しみ無く使う大樹、次点でこなた位だろう。

「かがみんの安全を考えるなら一緒に行く方がいいのか…となると基地はあっち任せになるね。大丈夫かな？」

「彼等も弱くはないし、色々切り札があるように見えるから大丈夫だとは思つよ、駄目だった場合どうなるか…って所かな」

「しかし、信用しなければ話は前に進めません…もどかしいですね」

「あつちの方にオーカスとググマツツをつけるとか？ あー…こっちの戦力が手薄になつちゃうよねえ…こなたの仲魔は無理っぽいし」

「我は別に構わんかな？ だが、奴等程度では私の足元にも及ばんぞ。寧ろ足手纏いになりそうな位だ」

「言う様になつたな元レベル15魔王（笑）」



『ぐおおおおっ！？ キンキ、貴様は貴様だけは信じていたのに…』  
がっくりと落ち込むオーカス。キンキとしてはからかっている点もあるが、今まで生きていた事に対して彼女なりに褒めていたりもする。物凄く分かりにくいが。

『まあ、人員に関してはあっちと話し合うしかねえだろ。どつちにしても知った以上は行くんだろ？ メシア教も、基地も。同時攻略出来るなら越した事はねえ。寧ろこの程度出来ねえなら共闘する価値すらねえしな』

『うむ、至言じゃのう。あちらも弱いとは思えんし、舐めてかかる痛い目を見るから気をつけた方が良くぞい？』

「分かってる、戦った事の無い相手に対して油断はしないよ。とりあえずは僕達が気兼ねなく動ける状況に持って行くことにしよう。何所に向かうかはガイアとの話し合いで決めるしかないね」

『おーい、そろそろ着くつてよ。準備しといた方が良くいんじゃないかね？』

「あ、サンキューオリアス 大樹君そろそろ行くこつよ」

「そうだね。それじゃ先に行ってるよ」

「あ、はい。私も直ぐに向かいます」

「おっけー！ ほらほらっ！ 仮面ライダーかがみんを拝みに行き

ますかっ  
」

「あんまり引つ張られると服が伸びる…っって」

『こらーっ！ あんまりベタベタするの禁止っ！！』

こなたとアリスに引き摺られるように入り口に向かっていく大樹を見つめるみゆき。

少しだけ胸にチクリとした痛みを感じながら、此方でも荷物の整理を始める事にした。

元々其処まで荷物は持ってきて居ないし、大事なものは大抵カードにしてしまっているので、直ぐに準備を整える。

(……………何でしょう…少しだけ胸が痛いのは…)

他の皆 柊一家や他の人達 もぞろぞろと出て行く中、一人だけ此方に向かって来る姿にみゆきは気づく。

心配そうな表情で、此方を見ていたみなみが其処に居た。

「あの…大丈夫ですか、みゆきさん？」

「ええ、大丈夫ですよみなみ。お気遣いありがとうございます。一緒に御座います。一緒に  
緒に行きましょうか」

「はい。……あの……」

「??? どうしました?」

眼を逸らしながら言い難そうにしているみなみを見ながら不思議そうに首を傾げるみゆき。

みなみもみなみで先程のみゆきの表情を見て、何か話しかけないといけないと思いい方の方でやってきたのだが、何を言っているかわからず思わず口籠ってしまう。

困っているようなみゆきに対して何も言えない口下手な自分を叱咤しながら、小さく頷きみゆきを見つめ口を開いた。

「よく、わかりませんが……凄く頑張ってるみゆきさんが……私の自慢だから……いつでも、その。私に出来る事があつたら相談に乗りたいです」

「みなみ……有難う御座います。きっと直ぐにいつもの平和な世界がやってきますよ。だからみなみもゆたかちゃんを護ってあげて下さいね」

「うん……絶対にゆたかは私が護ります……だから、その……お姉ちゃんも頑張って」

「っ……はいっ、みーちゃん」

「そ、そのみーちゃんは流石に恥ずかしいというか」

「そ、そうでしたか。残念です」

「えーと…その、そういう訳じゃなくて、私も子供じゃないというか…その」

「くすっ、冗談ですよ」

「あ、あう……」

わざとらしく悲しそうな顔をするみゆきにわたわたしながらみなみがフォローしていく。

彼女のお陰で、少し沈みかけた気持ちが再び浮かんでくるのを感じていた。

大樹が気になりつつあるみゆきだが、今はそればかりに感じている暇などは無い。大事な家族や友人を守る為に、一歩ずつでも歩み剣を振ろうと決めた。

「みつゆきさーんっ！ みなみちゃん、早くしないと置いていかれるよ〜」

「はいっ！ 今すぐ参りますっ！ さあ、行きましようかみなみ」

「はっ」

束の間の安らぎを感じつつ、バスを後にする二人。

この後、みゆきとみなみが再び会う事が出来る時は、全てを終わらせた後になるだろうと、お互い確信する。

さりげなく握ったお互いの手を強く握り締め、今はただ大事な姉の様な人の、妹の様な子の暖かい感触を確かめていた。

外では、大樹達が二人を待っていていた……………

という訳で、アンケートに関する新たな条件を載せさせて頂きました。

それにも無い、今回のコミュ投票は一度リセットさせて貰いました。うう、本当に申し訳無いのですよ。

詳しい取り決めが出来るほど、アンケートなんてこないな〜とか考えていた浅知恵が悪いのです(涙)

どうか白亜を埋めてあげてください(にゃー

~~~~~

今回は本当に幕間でしたぜ。へっへっへっ。

ガイアとかがみんなに対する相談とかがメインになりましたねー。

そしてお父さんとお母さんが大変だ、何でこんな事に(書いたのは私だ

という訳で次回はどっちを攻めるかというお話回になりそうですね。

選択肢が最後に出ると思いますので、よかったら答えてあげてくださいね。

なければ必殺6面サイコロの出番になります(えー

どうでもいいこと

アイスクリーム買って来ました。今日は暑かったので食べるのですよっ！

この時期はそろそろアイスが美味しくなりますよねえ。
私を買ってきたのは『ビエネット』と言うアイスですっ！
カキ氷の奴にしようと思いましたが、此方に惹かれました。
小さい頃、お母さん達が食べていたのを見て、憧れていたアイスだ
つたりします。

今は、直ぐに買えるお値段ですが、小さい頃はこれを沢山食べたい
なーって思っていました。

皆さんも小さい頃に憧れた食べ物ってありますか？

それは今も好きでしょうか？ 私は今も大好きですっ

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお
答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてませ
ん。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。
それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？キャラクター追加です。とは言え彼はフラグが立つだけで
す。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位⇨自動的にメインコミュ

2位⇨一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位⇨一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位＝一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回＝1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常＝1票に付き『1票』基本はこれ。

優先＝1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優＝1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダツキ：0票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

通常：アリス：0票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：0票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：0票（????????????）

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
- 2：最低でも、1行でもいいですのお話の感想を載せて頂く

3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）

3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1〜3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1〜3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

という訳で、さくさくつと作戦会議です〱。

今回は重大？ 選択肢がありますので良かったら選んでもらえると嬉しいです。

その時は、出来れば同時に感想が何か適当に入れてもらえると助かるですよ〱。

いやぁ…頭が悪いと上手く説明できませんね、もうちょっと皆頭が良く動かせたらなぁ(ほろり)

シエルター内 - 会議室

「 というのが大まかな核誘導基地の情報だ。正直あの結界を越えるにやかなりの痛手を負う事になる。この結界を形成してるのは恐らくこの異界を作った悪魔だろうな。奴が其処を分捕ってる可能性が一番高い。まあ、此方に対しては物量戦でも問題無いし主戦力を大幅に回せる」

現在、大樹達と皆方、かがみ達がこれからの事について話し合っていた。仲魔達はシエルター内で騒ぎが起こっては面倒なので此方では召喚していない。

見た目がほぼ人間のアリスとアメリカだけが召喚されているが、彼女達はガイアの兵士達が何かしないように警戒し続けていた。

既に柊一家や他の皆はシエルターを管理している人間に話を通し避難させているので此処にはいない。

出来るならこなたもみゆきも皆に会いたかったのだが、今はそんな事をしている暇は無い、と後の事は全て大人達に任せこの会議室に來ていた。

大樹達は皆方達と対面するように座り、地図や資料などを見ながら

現在ガイア教が集めていた様々な情報を確認していく。

勿論かがみから大樹達が何所に行っていたのか聞かれたのだが、金剛神界の事はかがみはともかく皆方：ガイア教に伝えるべきではないと言う事で咄嗟にみゆきがカバーストーリーを作り上げる事で話を逸らしている。

別に言っても構わないのだが、出来るだけ相手には情報を渡したくないのがみゆき達の本音だ。

そして、核ミサイル誘導基地の現状は天使が殺され見せしめか何かは分からないが死体を放置し、更には強力な結界が張られているらしく普通に行き来は不可能。

その結界を力技で破るにはかなりの時間 早くても数時間は必要らしい が掛かると言う事だった。

最後に皆方が言った言葉に、こなたがピクリと反応したものの別段取り立てて騒ぐ事はしない。

今は個人の意志より何より、つかさを助ける事やこの後の事の方が大事なのだから。

「成程：基地の方は大体理解したよ…面倒な事が山の様に積もっている感じだね」

「まったくだ。無理って言葉がゲシュタルト崩壊起しそうになる位、無理のオンパレードだからな。俺達も何度か結界を壊さずに潜り抜けれないか探ってみたが、どうにも無理らしい。」

どうしても進みなければ結界を破壊しろって所だな」

「その結界を壊した時に何か起こる可能性はあるのでしょうか？
例えば悪魔が出てくるかもしれない…とか？」

「それは無いな。単純に行き来を妨げるだけの隔離結界らしい。とは言えその強度は並じゃないがな」

「……………それはまた面倒な…」

結界を壊さずとも文珠を用いて【抜】でも通り抜けが可能かもしれないが、その場合何人通れるか分からない上に、文珠がガイア教にばれてしまう可能性がある。

皆方が文珠の話を前面に出して来ない以上、文珠についてはかがみも黙っていてくれるのだと安心している。

だが、その為に文珠は出来るだけ切り札として使わないといけな
為、使う場所は厳選しておかなくてはならない。

「まあ、基地は大体分かったよ。それで肝心のメシアの情報はどうなっているのかな？」

「此方もどうにかって所だな。聖母が現れた云々程度の事なら奴等の方で騒いでいるから分かりやすい。そのせいで過激派達が厄介な事になっているがな。しかしまだ救世主が生まれたと言っ話は聞いているから時間的に余裕はあるだろう」

「って、子供が早々簡単に生まれる訳ないじゃん？」

「普通の子供なら…な。生憎とあちらさんは神様の僕がわんさかとやってきて聖なる奇跡だのを使いまくってる。受胎告知させた後すぐに誕生させる位の芸当はやるだろうさ。そうじゃなければ崩壊した後の世界で救世主が居ないなんて話になるだろう？」

「でも、それは起きていない。何らかのトラブルがあったか、普通に生まれるまで時間が掛かるかって所だね」

「そういう訳だ。潜入捜査をさせた結果、柊つかさ嬢が現在監禁：奴等にしてみれば保護、か。されている部屋を発見した。が、此方は面倒でな、流石に全員で攻め込むにや場所が悪すぎる。此方を攻める場合は自動的に少数精鋭って事になるな」

「うーん…つかさを助けなきゃいけないし、基地の方は後からでもいいかな。あの変態が基地に居るかもしれないとなると腹立つけど、こつちを終わらせた方が…」

「そうになると、厄介な問題が出来てしまいますね」

「良く気づいたな。メシア教から柊つかさ嬢の救出に成功した場合、奴等は必死になって此方を殲滅しに来るだろう。これは俺達でどうにか抑えられるかもしれないが、危惧するのは奴等が一般信徒すら使ってくるかもしれないって事だ。そうなれば物量で負ける、メシアの幹部はそれぞれが化け物揃いの上に、それプラス数で来られたら基地どころの話じゃ無くなる」

異界と言う檻に閉じ込められている以上、逃げる事も隠れる事も難

しく、相手が本格的に動き出したら確実に邪魔になるだろう。

一般信徒程度なら、異界の悪魔に殺される可能性の方が高いだろうが、それらが数で集まるなら悪魔も殺す事が可能になる。

後ろにメシア教という不安要素を抱えたまま基地を攻めるのは難しいだろう。

下手をすれば、シエルターすら再び襲われかねないのだ。そうなる
と避難させている家族や友人がどうなるかは目に見えている。

ガイア教が抑えるとしてもやはり限界がある上に、此方が基地を攻
めると知ったならば上位天使や幹部が確実に基地に向かって来るは
ずだ。

更に、基地を覆う特殊な結界と、その基地にいる何者かが不良：人
修羅だった場合、三つ巴：下手すればメシアと共闘される可能性す
らありえる。

可能性は極端に低いが気付かれずにつかさを助ける事が出来たとて、
やはり其処は時間の問題でしかない。

ガイアの方でもその場合に対する対策案は考えてあるが、やはり不
安は拭えない。

「全員殺す…のは難しいか、あのシスターも厄介だったしね」

「……………だな、更に追加させてもらえば此処のメシア教の神父がそ
れ以上の化け物な上、上位の天使まで既に降臨しているというおま

けつきだ」

シスターの部分で一瞬だけ表情が変わりかけた皆方だが、それにも気付いては居ない。

「うわぁ…詰め一歩手前だね、お手上げ待って感じだよ」

「だからって手を拱いてる暇なんて無いわ。こうしている間にもつかさがどんな目にあっているか…」

かがみが怒りを抑え付けながら呟く。

つかさが心配なのはこなたやみゆき、大樹も同じなのでその気持ちは痛いほど分かるのだが、焦り過ぎているかがみを見るとこの後の事が心配になる。

「となると基地の方だけど、これも厄介な事になるな。もし基地の奥にこの異界を作成した悪魔か何かがいるとなれば最悪だ」

「…あ、そつか…異界じゃなくなるんだ。となれば最悪、つかさを連れて逃げられる可能性があるって訳だね」

「その通りだ泉嬢。考える限りその可能性が一番高い。態々天使を殺してるんだ、味方同士の可能性は限りなく薄い。更にはあの結界…この辺の悪魔は高くても20レベル近くの悪魔しかいない事が分かっている。そして、そんな悪魔が天使を殺しあんな上等な結界を

作れる実力がある訳が無い。となれば自動的にこの異界の主と言う事になる」

「どつちかを先に攻めると、最悪とんでもない事になる…か。となれば同時進行になるんだけど、そうなる…」

「戦力が心許なくなる。俺達では基地の方はサポート程度しか出来ないだろうし、最悪でもお前達の力が必要になる。だが、メシア教への潜入も出来る限りの最大戦力が必要だ。万が一戦うことになれば、やはり俺達では力不足なんだな」

「弱いなあ…って、仕方ないのかな」

「厳しいねえ。生憎俺達の力は、個人の力より数としての力や索敵及び情報収集などの力とは関係無い方面が得意なんだな。そもそも俺達は荒事専門の部隊じゃあ無いのさ、其処の所宜しくな」

「つまり駄目駄目と」

皆方達は改造悪魔の実験部隊であり、自分達が基本戦う事は無い。

最低限の訓練は受けているし、群れとして動く事が出来れば皆方の指示の下数十倍の実力を出して動く事が出来るが、圧倒的な力の前ではただの小煩い蠅程度でしかない。

こんな異界に閉じ込められていなければとくに撤退していてもおかしくないのだ。

みゆきの拉致も『可能なら』程度であるし、そこまで期待を持たれ

ている訳では無い、それでも責任は重くその度に皆方が溜息を吐いていたりするが。

「両方攻める場合は自動的に戦力を分ける事になる訳ですね。そうなる自動的の佐藤さんと泉さんは別れる事になりますか…」

「まあ、デビルサマナーが固まっちゃ駄目だね。私としては大樹君と一緒にの方が良いけど」

「こなた、今真面目な話してるんだけど…」

「おお、かがみん目が怖いよ、流石仮面ライダーかがみんV3」

「誰がつ！……………今はあんたの馬鹿に付き合ってる暇はないわ、茶化すなら黙ってて」

「……………らじゃー」

（完全に余裕ないなあ、かがみん。これってもしかしなくてもやばくないかな？ 実力もあれから多少上がってるって言うてもあのシスターの前じゃ鬨り殺しにされるよ…）

かがみの心境は理解できるが、現在の精神状態のままどこなたとしては作戦に参加させたくないと考える。

焦りはミスを生み、小さなミスが全員の生死を分ける。これで万が一暴走でもされたら確実に厄介な事になる上に、確実にかがみは殺されるだろう。

リカームで蘇生できる程度に殺されるならともかく、首と胴が離れたり、粉々にされてしまったら悪魔ではないのだから蘇生は不可能だ。

（最悪外してもらおうかな…でもかがみは絶対自分が助けるって思ってるだろうし。気絶させる？ 嫌われても死なれるよりマシだもん）

死んで欲しくない。本来死んでしまえばそれでお終いなから、無駄に命を捨てるような行為をして欲しくは無かった。

こなた自身、もう何度も仲魔の死を目撃しているし、目の前で大樹が殺されたのも覚えてる。

そしてその後殺された事も、確りと覚えている。だからこそかがみの死に急いでいる様な今の状態は看過出来ない。

「何にせよ私はメシア教の潜入に回るわ。隊長はどうするの？」

「其処なんだよな、其方で良い案は無いか？ 俺としては可能性は薄いがメシアの方を先に終わらせてから基地の破壊を考えてる、時間との勝負になるがね。更に言えば運も絡んでいる。いかに君達が強いとは言え、無敵じゃない事は知ってる。佐藤大樹君…君ならどうする？」

「そつだね…僕なら……………」

…
…
…

偉大なる皇帝は示した…あらゆるものに毅然と向き合い、答えを決する、その勇気を…

- 1、パーティを崩さずにメシア教に潜入し、その後で急いで基地を落とす。(危険度・極大 フラグ再生率・極大 全員死亡率・極大)
- 2、パーティを崩さずに基地を落とし、その後で急いでメシア教に潜入する。(危険度・極小 フラグ完全消滅 つかさ死亡率・極大)
- 3、パーティを分割し、両方を同時に行う。大樹とかがみはメシア教に潜入、こなたとみゆきは基地を攻める。(危険度・大 フラグ再生率・特大 こなたみゆき死亡率・大)
- 4、パーティを分割し、両方を同時に行う。大樹とみゆきは基地を破壊、こなたとかがみはメシア教に潜入。(危険度・中 フラグ再生率・極小 こなたとかがみ死亡率・中)
- 5、パーティを分割し、両方を同時に行う。大樹とこなたとかがみ

がメシア教に潜入、みゆきとこなたの仲魔は基地を攻める。（危険
度・小 フラグ再生率・中 全員死亡率・中）

6、パーティを分割し、両方を同時に行う。大樹とこなたは基地を
破壊、かがみとみゆきとこなたの仲魔達はメシア教に潜入。（危険
度・小 フラグ消滅？ 全員死亡率・小）

という訳で何と6個の選択肢が出てきました。

今回は後々の事を考えて、各選択肢の危険度などを入れてますよ。どうぞ参考にしてください。

フラグ復活…まあ、大体分かりやすいと思います。

さて…なんだか凄くだるいので、この後のんびりさせてもらおうですよ。

感想返しはもう少し待って貰えると嬉しいです。

どうでもいいこと

しくしくしく…今日はお弁当を食べようとしたのですが、其処で悲劇が…

実は仕事が忙しくて、休むにも休めずお昼ご飯は泣く泣くスルーとなりました。

でも、そこで奇跡がっ！ なんとヘルプの人が助けに来てくれたのですよ〜

同僚「さあ！ 今の内にご飯を食べるんだ！ ここは僕に任せて！
(死亡フラグ)」

という訳で、うきうきしながらお弁当を食べに行く…あれ…？

ご飯が変なおいする…と言うか暑い…というか熱い。

今日は珍しくずーっと暑かったのですが、その直射日光がお弁当を朝からずーっと熱していたらしく…

私「あうう、ご飯が駄目になってる…るーるー」

…ふふふ、結局ご飯は無しでしたよ、人生のやるせなさを感じまし

た。

皆さんは、似たような経験ありますか？ 別にお弁当じゃなくてもOKです。

え？ 今ですか？ 何も食べてませんよ（笑

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？ キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位＝自動的にメインコミュ

2位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位＝一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回〓 1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常〓 1票に付き『1票』基本はこれ。

優先〓 1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優〓 1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：7票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：2票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダッキ：6票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

通常：アリス：7票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：3票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：0票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：6票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：4票（????????????）

アンケート資格の変更

1：お話が更新された時に一人様1回のアンケート権がある

2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く

3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）

3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせていただきます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1〜3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1〜3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

Continue106 〽何処までも理不尽な世界で？〽(前書き)

お知らせ〽COMPステータスを更新しました(やっと

お知らせその2〽pvが2,000,000を超えていました、
有難う御座います(今日気付いた

皆様アンケート有難う御座いますっ！ 凄い沢山きたですよー。

総合すると…合計40票！！ す、凄まじい事になっているですね
(汗

色々な人に読んで貰えているう様に嬉しいのです。

まだまだ駄目な部分が多いですが、これからも頑張るですよっ！！

という訳でどうぞ。

これが内訳です……………1が凄まじい事に。

ちなみに…締め切り言つの忘れてました(汗 一応16時までです
！。

その時点で1が圧倒的でしたので、1になりましたっ！

1：26票

2：1票

3：3票

4：2票

5：7票

6：2票

佐藤大樹視点

現状はほぼ詰んでるか…金剛神界に行かなかったとして、時間はあったかもしれないけど今度はレベルが低すぎるとい話になる。

どちらが最善だったかとは言えないけど、どちらにしてもこんな状況になったんだと思う。

話を聞けば聞くほど、少しでも期待していたのが馬鹿らしくなってしまふほど現状は凄く厳しい状況だね。

この場合において一番後の安全が保障されやすいのは同時進行なんだけどそれも難しい。

となれば危険を冒してでもどちらかを先にこなしてから時間制限付きでもう片方を攻めるのがメインかな、これが策略とか計画を立てるのがメインの人ならどうしただろうか？

僕では、この後どうすれば良いか5〜6種類しか思い浮かばないし、そのどれも安全とは言えない。寧ろ一つ目は上手く決まれば一番早いけど、失敗すれば一瞬で終わりだし。

だけどこの場合はこれを選ぶのが最善手…かな？

まずはメシア教に潜入して妹さんを助け出す。金文珠も通常文珠も残っているし、緊急の場合には何とかかなりそうだ。

問題は内部で戦闘になったら、相手のホームグラウンドで戦う事になる。話を聞く限りではあのシスター以上に強い相手もいるし…

人間はレベル15〜20あれば一流から超一流と聞いた事があるのに、普通に40台がごろごろしてるのが色々ふざけてる。

僕達も平均35レベルになったから人の事言えないけど まあ、僕達は覚醒しているから別枠か 35レベル…？ そういえばクー・フリーンの必殺技は使えるのかな？

最近は色々と慣れてきたので意識を自分の心の内に埋没させる。こうする事で、時間に関係無くペルソナとの会話が出来る様になった。流石に戦闘中に話しかけられた時は焦ったけど。簡単に言うなら一時的にベルベットルームの様な場所に居ると考えると分かりやすいかもしれない。

(で？ 使えるのかい？)

(レベルは到達してるが、回数的には一日一度が限度だな。今のお前じゃまだまだ俺を完全には御す事が出来ねえみたいだぜ？)

(レベルだけじゃ、足りない？ ナナヤシキもそうだけど一体何が足りないんだらう)

(おーっと、私さん私さん。潜入捜査は私の出番ですよっ、このスパーピッキングツール。ン・カイの十徳万能鍵でどんな扉でも開けて見せましようっフウーアハハハハ！！)

何なのだろう、そのTV通販とかで9980円程度で売られていそうな感じがするどうでもよさげな鍵は…

と言うかデユプリケイターの効果であって、別にその鍵は要らないだろうしそもそもン・カイの森は焼かれたんじゃないや、突っ込んでも無駄か。

(心の海に還れ、帰れじゃなくて還れ)

(辛辣っ!？ 私さんってば実はツンデレなんですわっ 実は後でデレる)

(そんな訳無い。で、話はそれだけかい？ まあデユプリケイターは使えるかもしれないけど)

(のんのんのーん。たったそれだけの事でいつもニコニコ貴方の隣に這い寄る混沌、ニャルラトホテプがしゃしゃり出てきませんよ)

つつこんじゃ駄目だなんだろうな。お前は【はいよるこんとん】であって、本体のニャルラトホテプなんかじゃないって。

と言うかこれが本体なら、周防君も対して苦労せずにあの世界を救えただろうに…

(お忘れですか？ 私の特殊能力の中には身体変化なるものがあるよっ！ これを上手く使えば潜入捜査などお手の物っ！ 初めはメシア教徒に化けたり、あのシスターに化けたり。最終的には柘つかささんに化けて相手の目を誤魔化したりっ！ と色々出来ちゃうんですよっ！ まさに万能！ 完璧っ！ これがなんと今ならお得な1980円っ！)

(ソロソロ真面目ニヤレ。汝ヨ)

(うはあっ！？ ヤタガラスさんがいつの間にか居るっ！)

(心の海の中だし、僕の持つてるペルソナなんだから来ようとすれば来られるよ)

会話しているだけで疲れるけど、はいよるこんとんが言った事は確かに上手く使えば色々と相手を翻弄出来るかもしれないな。

幻術系に近い特殊能力だし、上手くハマれば此方の被害を少なくして闘争出来る可能性もある。

僕達がメシア教に向かうのは妹さんを助ける為であって、あいつらを皆殺しに行く訳じゃない。

勿論憂いを絶つ為に其処で終わらせる事も考えたけど、シスター一人に僕と仲魔全員で対等だった事を考えると、あれ以上がまだ何人も居れば負けるのは僕達だ。

一人程度なら、あのミックスレイドで如何にか出来るかもしれないけど下手な考えは辞めておいた方が良さだろうしね。

何はともあれまずは妹さんを助ける事を第一に考えよう。上手く行けば柊さんもこっち側に戻って来てくれるかもしれないし。そうなれば後が色々と楽だ。

(我が半身よ…少し良いでしょうか?)

(天仙娘々? どうしたんだい? それにヘルも?)

(一度ベルベットルームで、これからの事について話した方が良いでしょう。後、私も天仙娘々もそろそろ戦力的に限界が近づいていきますので帰還する事で貴方の役に立てれば良いかと)

(二人のスキルは強いけど、そろそろ厳しいのも確か…か。分かったよ、後でベルベットルームで話をしよう。今は作戦の方に目を向けないとね)

意識を再び覚醒させる。

前日もそうだけど、こうしている間はほとんど時間が経っていないのが不思議だね。

さて…となれば、必要なのはスピードと万が一に対しての一点突破用の火力という訳か。

「戦力は分けない。無謀かもしれないけどスピードで勝負するよ。僕達全員でまずは妹さんを救出、直ぐに基地を攻め落とす」

「…無謀じゃないか？ お前達の實力は分かっているつもりだが数万の相手に勝てるでも思っている訳じゃないだろうな？」

「やれと言われれば出来ない事はないかもしれないけど…でも、そもそも後の事まで考えていれば行動すら出来ないし」

「確かにな。日和ってる暇は無い、それなら直ぐに動くのも悪くは無いです。万が一が起きた場合はどうするんだ？」

「どうにも？ 最悪知り合いだけ保護して逃げるさ。他がどうなるうと知った事じゃない」

「お前さんはなんつーか、こつち寄りに見えるな？ その歳で達観しすぎてるのはある意味凄まじいぞ？」

「冗談言わないで欲しいな。僕は宗教や面倒なのは嫌いだよ。後達観してる訳じゃない、必要無い物は切り捨てるだけだよ」

正直な話、一般信徒程度ならバクヤを降ろしていれば攻撃なんて通用しない。

後は来る敵を無残に殺せば、ある程度は躊躇うかもしれない…ああ、それはないか宗教は麻薬って言う位だし無視してくるか…

でも攻撃や防御、補助、回復の魔法カードは沢山有るから逃げる位ならどうとでもなるだろうね。

大量殺人者って事で世界が元に戻ったら大変な事になるかもしれない

いから出来るだけ面倒は起したくないけど。

とまあ、僕だけなら如何にか出来るかもしれないけど、こなたや高良さん、柊さんや他の一般人がそうかと言われたら無理がありすぎるから無理だね。

少し前の僕なら他を見捨てて逃げたんだろうけど、というかこんな面倒臭い事なんてしなかっただろうね。

少しずつ僕も変わってきたんだろうか、それがこの理不尽な世界のお陰と考えるとやるせないけど。

「勿論無謀とは僕も思う。こんな行き当たりばったりなのが作戦だなんて口が裂けても言えないよ。でも、戦力を分けてお互い全滅するよりは利口だと思っね」

「私と大樹君の仲魔＋みゆきさん＋かがみん＋ガイアの隊長がメインかな。となるとシスター相手くらいなら倒せるし逃げるのも容易だね」

「待つてください。流石にそれは…」

「高良さん。君はこの仲魔を半々に分けてあの不良に勝てると思ってる？ 流石にそれは無いと思うけど」

「あ…」

「この異界を作っているのは間違いなくあの不良だ。そいつは下手すればあのシスターより強い悪魔を2体使役している上に、あいつ

自身がとんでもなく強くなっている筈だよ」

雪之丞を相手にして居たあの悪魔が弱いだなんて思える筈がない。

その2体を使役…しているかどうかは分からないけど、最低でもあの2体と不良を相手する事になるからパーティの分散を考えるのは少しまずい。

時間的にあまり猶予が無い事も有るし、出来るなら分散して両方も終わらせたいけど高望みが過ぎるかな…

こなたや高良さんの実力を信用していない訳じゃないし、僕自身が戦う事になったら危険があれば直ぐ逃げるつもりだけど。出来る限りは最善を尽くして勝利したいしね。

もしかしたらケルベロスより強い…ってなったらどうしようもなく詰みだけど。

「そいつはマジか…となると改造悪魔でも役に立つか分からんな」

「聞いておきたいんだけど、貴方達が今すぐ用意出来るその悪魔の数は？ 後レベルを知りたい」

「企業秘密…と言いたいがそんなもの出し惜しみしてたら死ぬな。現在直ぐに用意出来るのは20体、平均レベルは18〜25つて所だ。勿論色々改造してるんで+5レベル程度と考えてくれ」

「弱くはないけど、頼りないかもね。どうせ命じられた事しか出来

ないんでしょう？」

「痛い所を突く。確かにその通りだ、本来悪魔が持つ意識を専用の機械で完全に操作している為に一定のパターン以外の行動は取れない様になっている。数として使えば士気に関係無く安定した戦力として使えるがね」

悪魔とは言え生きている存在を…

「剣が喋る…ああ、報告に載っていた剣か。悪いがこれもまた人の業だよ、今の俺達もあんた達もこれの力が必要な事くらいわかるだろう？ 無いよりはましとは言え…な」

「私も思う所は多々ありますが、私達が言った所で止まる相手には見えませんし、彼の言う通り今は少しでも戦力が必要ですから…」

分かって…います。ですが、私はやはり認められません。それだけは忘れないで下さい

潔癖と言うか優し過ぎると言うか、これが平和な世界なら善の神として持て囃されるのかも知れないけど、今の状態だとただの甘えでしかないよね。

今はとりあえず小竜姫の戯言は無視して考えよう。

改造悪魔が20体、基地を攻める場合にはそれなりに役に立つ数かな？ 他に悪魔が居ないとも限らないしそれに当てる事にしよう。

最悪は盾としても使えそうだから、この辺は有効活用させてもらお

うかな。

皆方については…同行させたほうが良いか、こういう相手は僕達が居ない所で何かしてる可能性の方が高いからね。

それで全てが終わった後に、こいつ等の所為で詰みましたなんて言ったら目も当てられない。

「それじゃ、大樹君の案で行こうか？話を聞いている限り潜入の方とはともかく基地の方は無理ゲー入ってるっぽいし。かがみもそれで良い？」

「戦力が多い方が有利なのは確かだね。私もそれで良いわ、それで…何時向かうの？」

「…そうだね、そっちは直ぐ用意出来るかな？後は詰めていこうと思うんだけど」

「ああ、それじゃ本格的にこれをメインで進めていくか」

後は、完全にスピードが命になるか……………

これが終われば此方で出来る限りの事はしておかないといけないな。

……………
……………
……………

色々あだこうだ言いながら大体の作戦は決まった。

まずは妹さんの救出だけど、これに向かうのは僕達3人+柊さんとガイアの隊長の5人で向かう事になった。

戦力的に考えてもこれが一番のベストだろうし、問題は無い。いや無い事は無いんだけど、ベターと言えば良いかな。

上手く妹さんを救出した後はガイアの出番だ。逃げる時用に全員に最低2個のトラポートストーンを支給してもらってるから遠慮なく使わせてもらおう。

回復剤や使えそうな装備、食料、薬品も色々分けてもらった。主に戦うのは僕達なんだからこれでも足りない位だけど、仕方が無い。

それで、一般信徒についてだけ。要は数で負けなければ如何にか出来ると言っただから、出てくる前に塞いでしまえばいい。

いっその事シエルター入り口に爆弾や罠でも仕掛ければ、動きを止める事は出来るだろうしこれを使わない手はないね。

基地側は多分動かないだろうし、折角の共闘なんだから思い切りや
って貰う事にしよう。

上手い具合に毒ガスなども持つてるらしいしバンバン使ってもら
う事にする、今更非人道的とか気にしている暇なんて無いからね。此
方に使う気なら容赦無く全滅させるけど。

万が一非道がバレても非難はガイア教に行くので僕達はこの町で普
通に暮していける訳だ。卑怯？ 僕達以外に興味はないからどうで
もいいね。

これでも最善とは言えないけど メシアのシエルターは3つあるか
らね…全部を抑えるのは流石に難しい ある程度は余裕が持てる筈
だ。

そして、潜入する所に戦力は集まってるだろうと信憑性の高い情報
をゲット出来たので、これはある意味都合と見た。

流石に全員を殺す事は不可能かもしれないけど、足止めなら何とで
も出来る。

ここが金文珠の一番の使い道だろう、奴等の動きを止めてしまえば
後は基地だけだしね。その為に使えるものは全部使おう。

【永遠隔離】 僕が使える中で多分最大の隔離結界が作れる筈だと思
う。

金文珠の出所は横島の霊力だし、あいつのレベルは60台だ。その
強力な文珠を4つも連結させるこの結界はそうそう破れるもんじゃ

ない。

どこまで持つかは分からないけど、せめて基地を攻略するまでは持つて欲しい所だね。

あの不良達に対して金文珠が無いのは痛いけど、4つの消費で更にボスが増えるのを阻止できるなら遠慮なく使わせてもらおう。

と言うか…この非常事態なんだから文珠をまた前にみたいに使わせてもらえないだろうか…無理だろうけど、愚痴りたくなるんだよ。

スムーズに妹さんを助ける事が出来たら、その足で直ぐに基地を攻め落とす。あの不良ともさっさと決着をつけないといけないし……

結界は彼らに任せて僕等はその間に準備を整える。隔離結界を用意するし時間は取れると思う…なにせよ賭けの要素が強いけどね。

全部を終わらせて、適当に生きて行きたいよ。世界の終わりも死ぬような戦闘もこりこりだ…漫画や小説の主人公とかは良く気力が持つね、羨ましいよ、なりたいとは思わないけど。

「さて…今から2時間後に作戦開始か。その間に出来る事は全部やることにしよう」

まずはベルベットルームからかな。

どうでもいいこと

ちよいとほんのり体調が落ちてます。

なんだか妙にぼーっとしてるですよ…風邪引いたわけじゃないですがひらすらだるいです。

という訳で今日のご飯はおかゆですよ。いやあ…シンプルな味は美味しいですねっ！

私はこれに鮭か梅干のどちらかで食べる人です。皆さんはどんな感じでおかゆを食べるですかー？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？キャラクター人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆっきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

- 1位＝自動的にメインコミュ
- 2位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント
- 3位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント
- 4位＝一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回＝1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常＝1票に付き『1票』基本はこれ。

優先＝1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優＝1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：5票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダッキ：12票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

通常：アリス：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：6票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：2票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：16票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：12票（????????）

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
 - 2：最低でも、1行でもいいです。お話の感想を載せて頂く
 - 3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）
- 3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが
- 無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1〜3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1〜3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談）

Continue107 〽何処までも理不尽な世界で〽〽(前書き)

という訳で(どついうわけだろう)ベルベットルームの前にかがみん視点からです。

かがみんも実は……………という感じですねっ！

それにしても…頭痛が酷いにゃ…今日は早めに休むのですよー。

柊かがみ視点

私の用意は全部既に終えてある。武器と防具、マジックアイテムや回復剤も問題無いわね…

それにしても…はぁ…自己嫌悪。

私ってば何やってるのかしらね。これじゃあなたの事なんて何にも言えないじゃない。

焦ってる…焦ってるけどあなた達が戻って来るまでは私自身結構冷静なつもりで居ただけだね…やっぱり私自身無理してたのかしら。こなた達に会えた時、凄く嬉しくて…でも今の私が凄く情けなくて、どうして良いかわからなくて感情がごちゃ混ぜになっちゃってる。

でも、皆が無事で良かった。つかさが攫われて私だけがガイアに連れて行かれた時は焦ったわよ。

まあ、紆余曲折あって今はこうやって一緒に行動してるけど、それよりも何よりもこなた達の事が心配だった。

町が丸ごと異界に閉じ込められて、悪魔が出てきて町が混乱して…

だけどそれでも、皆の情報は何にも手に入らなかった。情報収集が得意なガイア教…というか彼等が尻尾も掴めないって聞いた時は血

の気が引いたわよ。

もしかしたら 全員殺されてしまったんじゃないか、って。

つかさが攫われて、こなたも、みゆきも、佐藤君も居なくなっただか
も知れないって思った時は流石に泣いた。

誰も見てない所で、神を呪って、天使を憎んで。それが覚醒に繋が
った時は『人生ってこんなにふざけてるんだ』って呆れたりもした。
そこからはつかさを助ける為に全てを捨てる覚悟でガイア教に入っ
て…と言うか力を貸したりして実力を高めてきた。

雑魚の悪魔程度には私一人でも勝てる様になったけど、あの天使に
はまだ届いてないってのは嫌でも分かったわ。

「おーい、かーがみんっ！」

ぼーっと考え事していると其処にこなたが走り寄ってきた。

近くには誰も居ないし、一人でこの辺回ってるのかしらね。相変わ
らず行動力が無駄に高いと言うかなんというか。

こんな状況なのに何時も通りにしているこなたってある意味大物な
んじゃないかしら。

「…こなた。何の用？ 私に構ってる暇があるんならさっさと用意

「しなさいよ」

「おうふ、ツンデレの度合いが9：1になってないかね？」

「煩いわよ」

「こんな事言いたい訳じゃないのに、私何言ってるのかしら。」

「もつと…こなたが元気で、無事で居てくれて嬉しいのに…私、訳も分からず意固地になってる。」

「武器とか防具の選別終わったの？ この後直ぐにつかさ救出ミッションだからねえ、気合入れていかないとっ！」

「ゲームじゃないのよ、ゲームじゃ…人の命…つかさの命が掛かってるんだから」

「勿論ですともさ。私の大事な親友に手を出すとはメシアンもふてえ、やろうだねっ！」

「メシアンって…何？」

「ん？ 私が考えた造語だよ？ メシア教徒とかメシア教幹部って言い難いじゃん。だから略してメシアンで統一してみました！ちなみにガイアはガイアが俺にもっと輝けと言っている！で」

「逆に長くなってるっ…！」

つい突っ込んでしまう私。なんとというかこなたはこっちのペースを崩すの得意だからやりにくいのよね。

一人でシリアスしてるのが馬鹿に思えてくるじゃないの。

こなたにしてみればこんな私を励まそうとしてくれるのかもただけど…嬉しいけど今は素直に乗ってあげられない。

「あんたもさっさと用意を整えてきなさいよ？　しょっちゅう遅刻してくるんだからこういう時はシャキっとしなさい」

「おおぅ、少し元に戻ったと思ったたら説教が飛んできた件について…流石だぜかがみんV3…進化してかがみんストロンガーになりそうな勢いだね」

「ぶつとばそうかしら…割と本気で」

「ノウ！？　絶対にノウ！」

頭を抑えながら私の周りを駆け回るこなた。本当にこの子は……

思わずクスッと笑ってしまった私を見て、嬉しそうな顔をして近づいてくるこなた。

「そうそうっ、それだよかがみんっ！」

「何…よ？ 急に」

「焦ってばかりじゃ、いざって時に足を掬われるよ？ 何時も通りのかがみならきつと大丈夫っ！ 私達全員って言う…まあ、つかさ居ないけどスーパードリームチームで挑むんだからさ。もう少し肩の力抜いて行こうよっ！」

こな…た…私の事、心配してくれてるんだ。

やだ、どうしよう…凄く嬉しい。

「ねえ、かがみ？」

「何よ…？」

「私、待ってるからね。そんじゃっ！ ばいにく」

「…あっ……………」

そう言っただけで帰っていくこな。私の態度に怒ったり、非難する所か笑顔で私を見て帰っていく。

待ってるから…か、今の私には凄く重い言葉ね。ありがとうこな、こんな私にも変わらずに居てくれて。そしてごめんなさい、ダメな私で。

「はあ…ダメねこんなんじや。もう少しでつかさを助けられるって言うのに」

気分転換に風にでも当たりに行く事にしようかな。

つて、シエルターを出る時は色々申請が要るのよね…はあ、面倒だからその辺歩き回る事にしようかしら。

……

……

…

「あ、みゆき」

暫くうつろちよろしているとみゆきの姿が見えた。

近くには知らない大人の男性が居て話し合ってるけど、見た感じからしてクズノハの人かも知れないわね。

となると、一応はガイアの私が近づいたら面倒な事になるか…他の場所に

「あ、かがみさん。いま少し宜しいでしょうか？」

「別に良いけど。特に話す事なんてないわよ？」

「いえ、これからの事について少し聞きたい事が有りまして」

「聞きたい事？」

「あ、はい。少し待っていてくださいね」

そう言うと男性に断りの挨拶を入れにいくみゆき。相手も笑いながらそのままどこかに歩いて行ったわ。多分警備に戻ったんだろっけど。

「お待たせ致しました」

「別に……で？ 聞きたい事って？」

「はい……かがみさん。貴方は佐藤さんから頂いたアイテムをまだ持っていますか？ 後、それをガイアに告げましたか？」

「……………あ……」

鋭い……いえ、物凄く怖い表情で私を見るみゆき。

体が、震えてるのが分かる……呼吸が浅くなって、みゆきの目を見る事が出来ない。

これが…み、ゆき…なの？ 強くなったとは聞いたけど、此処まで
だなんて知らない……

そして、私をその表情で見るみゆきが…信じられなくて…怖い。

「い…言っていないわ。あれは彼の切り札だし…後、多分使ったと思
う。無くなってたから…カードの方はまだ残ってるけど」

どうにか声を絞り出すと、途端にプレッシャーは収まっていつもの
みゆきに戻っていた。

一体この数週間でみゆきに何があったって言うのよ。下手すれば悪
魔から感じるプレッシャーより凄まじかったわ。

「なら良かったです。もしその能力がばれていたら色々と厄介な事
になっていたのです。後すいません…脅すような真似をして」

「……………」

「でも、今のかがみさんは…ガイアの人間ですから。友人とは言え
このような真似をしてしまいました」

「もし…私がガイアにそれを伝えてたら…？ どうするつもりだ
ったの…？」

私を、どうする

するとみゆきは少しバツが悪そうにしながらも、ハッキリと…信じられない言葉を吐いた。

「そうですね…かがみさんの心情は理解できますので、仕方ないと思います。多分佐藤さんにきつく怒られてしまうだけでしょうね」

「そ、そう…」

「ですが、アレの事がガイア教に知られていた場合は…」

心苦しいですが、最悪ガイア教の方々を殺さなければならなりませんので。

「え…い、今…なんて…？」

「それだけ佐藤さんの能力は重く、そして有用です。もしこれがメシアにもガイアにも…悪魔にも伝わればどうなると思いますか？」

「あ……………」

確かにあの魔法を封じ込められるカードと言い、私を天使達から護ってくれた時の強力な結界を出したマジックアイテムと言い、凄まじい能力の一言に尽きるわ。

あれを全部佐藤君が作り出ししているとすれば…確かにそれを欲しがったり危険だと思っ輩は増えるでしょうね。

そんな事の為に佐藤君や、その知り合いにまで魔の手が伸びる…なんて事になったら最悪の一言でしかない…けど。

あのみゆきが簡単に人を殺すだなんて言葉を言うなんて、思いも因らなかつた。

もしかして既にみゆきは……………

「す、すみません驚かせてしまつて。でも、これは重要な事だったので…ここは盗聴器やガイア、メシア、クスノ八達の耳や目はありませんでしたからここでお話しさせて頂きました」

「そうなんだ…ごめん」

「いえ…私も出来ればこの様な手段は取りたくありませんでしたから…かがみさんが黙っていてくれて助かりました」

「まあ、ね。佐藤君の能力のお陰で今生き永らえてる様なもんだし」

あのアイテムが無ければ、上級天使に殺される前にあのメシア教や天使に殺されてただろうし、そうなれば最悪ガイア教に見つかつて蘇生してもらえなかつたかもしれないしね。

「かがみさん…きつとつかさを助け出しましょう。こちらには

佐藤さんが居ますから、きつと最悪の状況になったとしても如何にかする手段はあります。なので…安心して下さいね」

本当はここまで全部を佐藤さん任せにはしたくは無いのですが…とみゆきは落ち込みつつそう言う。

聞けば聞くほど佐藤君がジョーカーだっていうのが分かるわね。そしてここまで隠し通そうとするのも…

一体みゆき達は佐藤君の何を何所まで知ったのかしら…この3週間の間に何かあった、としか思えないけど。

「ありがとう…ねえ、みゆき達ってこの3週間一体何をやってたの…？ あれは…多分嘘よね？」

「……………鋭いですね。いえ…恐らくあの程度のカバーストーリーなら、ガイアの隊長さんにもばれてるでしょうけど。すいません今は話せません…これ以上ややこしくなるのもアレですし」

「なんだか…少し変わったわねみゆき。何て言って良いのか分からないけど」

「そう、でしょうか？ ふふ、そうかもしれないね。色々私も泉さんも、佐藤さんも変わったと思います。全てが終わったら…きつとその時かがみさんとかささんにもお話しますね」

「楽しみに…してるわ」

「ええ。では次は潜入作戦の時に：失礼致します」

いつも通りに頭を下げてから何所かに向かって行くみゆき。

……私の時間は、つかさが攫われた時止まったけど、あの三人の時間は今も動いているのかな。

それが少し羨ましくて：同時に其処に私とつかさが居ないのが寂しい。

こんな状態になっても、私は皆が嫌いになれないし：今でも出来るなら何時も通りに振舞いたい。

馬鹿をやるこなたに私が怒って、つかさがぼけーっとしたりわたわたしながら此方を見て、みゆきがフォローする。

其処にやる気がなさそうにしながら佐藤君が混じってきたりして：

平和……か。あっさり壊れるわよね、平和って。

つかさを助けて：でもそれで終わりじゃない。その後は核がこの町に降らない様にする為に命がけて戦わないといけない。

それが終われば今度はこの異界を作った主を倒して……………

「理不尽って、一気にやってくるわよね……」

嘆いていても始まらない。ラノベや何かと違うんだから、格好良いヒーローが助けに来てくれたりなんてありえない。

宗助でも助けに来てくれたらな、なんて現実逃避もしてる暇なんて無い。

私が、私達が動かなきゃつかさを聖母とやらにされてしまう。

殺される事は無いかも知れない、けど。人としてはきつと確実に壊されてしまう…間に合わないかもしれない、手遅れかもしれない。

そう考えるだけで怒りが、憎しみが全身を焼き尽くす様に燃え上がる…けど…だけど。

「あの時とは違う…私には力がある…仲間が居る…友達が居る………」

状況は変わった…何があっても絶対につかさを救ってみせる。

例え…私がどうなったとしても。

柊かがみ視点解除

励ましこなたんと確認みゆきさんでお送りしました。

みゆきさんの相手を殺す宣言…必要な躊躇わないと言う感じが出てきてますねえ…

まあ、文珠やマジックカードがばれたらそれこそ大変な事になりますしねえ。

特に上にはばれたら一大事です…佐藤君本人所かその周りすら巻き込まれますから、その為には殺しても情報をせき止める…って感じのようです。

今回はベルベットルームですよ。どうしたものかにか…

どうでもいいこと

ラーメンを食べてきました。

暑い時に暑い物を食べるのは良いらしいですね。 はふはふなのですよ！

私は基本しょうゆオンリーで食べますねえ、たまに塩ラーメンでしょうが。

みそラーメンは嫌いじゃないですが、食べに行くときはやはりしょうゆなので食べてないですねえ…

とんこつラーメンは。あんまり食べないですねえ。こつてり系はちょっと苦手なのですよ。

皆さんはどんなラーメンが好きですか？

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ? キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。
ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位=自動的にメインコミュ

2位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位=一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回=1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常Ⅱ 1票に付き『1票』基本はこれ。

優先Ⅱ 1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優Ⅱ 1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：2 1票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：6票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダッキ：1 6票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

通常：アリス：2 3票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：9票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：4票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：2 8票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：1 7票（????????????）

アンケート資格の変更

1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある

2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く

3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（

これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）

3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1～3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外さ

れる。

- 1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとつても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。
- 2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。
- 3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。
- 4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

ちよおおおつとやらかしました…うん。偶にはチートがあってもいいじゃないかっ！

と言う事で、佐藤君切り札ゲットですよっ！！

ではではどござ〜

ちよつと、リュウキツコウシユが強すぎる気がしてきたので(感想を見て更に確信)汗 弱体化させることにしました。

84レベルから55レベルにまで弱体化なのですよ〜

うーん…やはり行き成り強すぎるのはダメですねえ…

どうせ1回しか召喚できないし、別にいいやと割り切りすぎたのですよー…

天仙娘々とヘルに言われた通り、ベルベットルームにやってきた大樹。

今までの中では最短とも言える時間でやってきた為、特に作るペルソナ等は無い。

それでも、色々聞きたい事などがあるのでやってきたのだが、最近ここが微妙に悩み事相談室になっているような気がしている。

ベルベットルームの扉を開き中に入ると、何時もの様にイゴールと達哉が出迎えてくれた。

『これはこれは。今回は御早いお越しで御座いますな』

「珍しいな。お前がこんな短期間に来るとは」

「…この世界って現実世界とリンクしてるのかな…？ まあ、それは良いんですけど。今回はペルソナに言われた事と聞きたい事があります」

『ふむ……ですがその前に、ペルソナの話聞いてみる事に致しましょうか』

「そうですね。じゃあ…」

自分の心の中から二体を召喚するような感じで意識を誘導させると、直ぐに天仙娘々とヘルが召喚される。

大樹の上空にふわふわと浮かぶ光景は何時見ても幻想的であり、それと同時にとても心強い感じがすると彼は思う。

『我が半身よ……』

『我等が無き後も私達の想いは貴方の中に残っています』

「……ありがとう。君達のお陰で色々戦って来れた、感謝するよ」

帰還を見るのはトビカトウに続いて2回目のだが、やはり長らく使っていた力であり仲魔が居なくなるのは寂しさを感じてしまう。

仲魔の合体は主にカードを使つての合体なので、その様な感情に悩まされた事は無いのが原因とも言えるだろう。

デビルサマナーとしては、優秀であり出来損ないとも言える。悪魔同士の合体で片方が消えるのは当然であり、当たり前なのだから。

それが例えペルソナだったとしても、同じようなものなのだろう。

それでも今は力が必要であり、この二体が帰還する事で得られる力がこれからも必要になるのだから、喜びこそすれ悲しんでいけないと二人を見送ろうとする。

だが、二体がそのまま帰還しようとした時に、それを達哉が止めに

入った。

「待ってくれ。二体ともどうやら限界まで使っているんだな？ 佐藤？」

「あ、うん。そうだけど…？」

「なら…ペルソナ同士の合体を試してみないか？ この二体ならかなりのペルソナが作れると思うぞ。どうだいゴール？」

『成程：出来なくはありませんな。本来はカードだけの合体を主にしておりますが、これからの事を考えるとスキルの継承も必要かもしれないかもしれません』

「そんな事が出来るのですか…って、ああ。出来るのか」

ペルソナ3を思い出して得心する大樹。

カードなどが存在しないペルソナ3では、シャッフルタイム 戦闘終了時に始まるペルソナなどが貰えるボーナスタイム で集めたペルソナを合体させて強くしていた。

そのペルソナは合体すると両方が持っているスキルをいくつか継承し、新たに強くなって新しいペルソナに変化していく。

今までの合体はカード+カードでの合体の為、出来上がるペルソナは基本的に元々ペルソナが持っているスキルのみ限定されてしま

う。

勿論カードとマテリアルカードでしか作れないペルソナも存在する為、どちらが良いかは悩み所なのだが。

達哉が告げた事で新しいペルソナの道が開かれたのは確かだろう。

『私達が：合体ですか：確かにこのまま帰還するよりは新たに生まれ変わって半身の力になるのも良いかも知れませんか』

『我々は所詮分霊の様なもの、本体であり、ペルソナですから心の仮面を好きな様に変えるのもまた可能ですか』

「となれば：確かにかなり助かるかもしれない」

天仙娘々の持つ回復能力や阻害支援、ヘルの持つ即死攻撃や強力な必殺技を継承出来るとなれば大きな強みになるだろう。

確実に継承出来るとは限らないのだが、それでも新しいアイテムかマテリアルカードになるよりは、現在の手数を増やす事の方が大幅に有利だと合体に賛成する大樹。

『分かりました。では久しぶりにペルソナ同士の合体をして見ることに致しましょうか。御二人とも、それで宜しいですか？』

『ええ。この先を案じるならば我が半身に新しい力が必要になるでしょう。これはある意味天の意思かと』

『天はどうでもいいですが、彼は死後に冥界に来てもらう事になっています。このような場所で死なれては堪りませんしね』

『…彼は何れ仙に到達できるかもしれない人間です。死なれては困ります』

『仙になった所で、所詮ははぶられ者でしょうか？ 冥界でならきつとその力を大いに奮えるはずですよ』

『冥界こそはぶられ者の世界では…？』

『……………』

『……………』

『『表に出る…！…！』』

「いや、どうしてそうなるかな。と言うか君達そういう性格してたんだ…何だか合体事故起しそうな感じだな…」

「…とりあえず合体した方が良いんじゃないのか？」

行き成り仲違いを起こし始める二人に若干引きながらも、合体をイゴールに促す達哉。

イゴールも行き成りぎゃあぎゃあ騒ぎ出したペルソナにどうしたら良いのか分からず一瞬だけとはいえ呆けていたが、その言葉で直ぐに再起動を果たす。

コホンっと態とらしく咳をすると二人も今の状況を思い出しバツが悪そうにしていた。

色々有ったが、遂に合体の時間がやってきた。

大樹は二体に握手を求めると、彼女達は笑顔でそれに応じた。

本体ではない上にペルソナと言う実体が無い存在の筈なのだが、その手はとても暖かくそして柔らかかった。

「二人には色々助けられたよ。居なかつたら死んでた事の方が多かった。出来れば合体した後も僕を護って欲しい」

『ええ。我が半身よ…私が消えたとしてもその想いは永遠に貴方の中に残りましょう。今は再びニヴルヘイムに戻り、貴方をお待ちしています』

『進む先は深く果てしない無へ繋がる道ですが、その全てを救えなどとは言いません。貴方は貴方が望む道を突き進みなさい。私達は貴方となりてそれを助ける手と変わりました』

『この2体が合体すれば魔術師・ランダが出来上がりそうですな。準備は良いですか…では、参りますぞ』

大樹がこくと頷くとイゴールが右手を翳す。

すると天仙娘々とヘルの体が光に飲み込まれ、二枚のカードに変わり頭上をクルクルと回っていく。

二枚のカードは大樹の上でゆっくりと回った後、其々別れを果たしたかの様に高く高く舞い上がる。

静かに回っていたカードのスピードが徐々に速くなると同時に、イゴールの顔が険しくなっていた。

『…っ！ これは…イレギュラーっ』

「なっ！？ ヘルっ！ 天仙娘々っ！？」

「このタイミングでミスだと…まずいんじゃないのか…」

本来明るい色のままで召喚が終わる筈なのだが、今は様々な色になって激しく点滅している。

回転は歪みながらもそのスピードを増し、不可思議な魔方陣を作り上げていく。

強大な魔力が青白く発光し、稲光の様に辺りに降り注いだ。

一度行ったペルソナ合体を途中で止める訳にも行かず、イレギュラーを抱えたままの合体は最終局面を迎える。

最後に目を覆うほどに光を放ち、その光に耐え切れず目を閉じる大

樹と達哉。

暫くしてゆっくりと目を開けると其処には一体のペルソナが空に浮かんでいた。美しい装束を身に纏い、彼女の周囲には清らかなる水が絶えず浮かび続けている。

澄んだ青色の髪が魔力によって摩くその姿は、絶世の美と言った所だろう。閉じていた彼女の眼がゆっくりと開くと大樹に向かって優しげに微笑えむ。

『私は昊天上帝と西王母の娘、竜吉公主リウキツコウシュ。貴方の事は知っている。我が写し身よ、契約と誓約そして願いにより汝に力を貸そう』

「竜吉公主…仙人と仙人の間に生まれた最強といわれる仙女だったはず。合体事故らしいけどこれは結果オーライなのかな？」

「問題はお前が扱えるかどうかだな。見た感じからして弱くはなさそうだ」

『申し訳ありません。久々で間違えたかも知れませんが…女教皇のアルカナの中では上位に近いペルソナ・リュウキツコウシュで御座いますな』

『問題は無い、力の管理者よ。我が身の力のある程度まで抑えれば私を使える様になるだろう。写し身が成長していくと同時に私もその力を解放すれば良い。そして…一度だけが全力での召喚にも応えよう。この後の事は知っている…何とも嘆かわしい事だ』

「それは助かるよ。これから宜しくリュウキツコウシュ」

『以後良しなに…』

消えていく竜吉公主を見送った後、そのスペックを確認して戸惑う大樹。

本来のレベルが凄まじく高い為に驚愕せずには居られなかった。

(レ…レベル55…!? 横島には劣るけどかなり強力なペルソナだ…。レベル40台のクー・フリーンですら満足に扱えないって言うのに荷が重過ぎるペルソナだな…)

彼女の言う通り、現在のレベルは35にまで抑えられている為。魔力が特化されている以外は30〜40台のペルソナと変わりが無い。だがそれでも一度だけ通常召喚を可能にしてくれている為、基地を攻めた時に戦うだろう悪魔二体に対してかなりのアドバンテージを取れたと前向きに考える。

自分のレベルが高くなれば同時に強くなるペルソナと考えればかなり有利なペルソナだろう。

正直このままナナヤシキを還してメインで良いのではないかと思ったりもしたのだが、あれはあれで使い勝手が良いペルソナなので出来るならば御せる様にしたいと考えていた。

「余程のペルソナだったようだな…それがお前の役に立てば良いんだが」

「役に立つ所じゃないよ。彼女が普通に扱える様になれば凄まじい事になる。今回ばかりはイレギュラーで感謝と言った所かな」

『失敗してそう言われると流石にむず痒いですな。さて、後は佐藤様からの聞きたい事が有ったようですが？』

「あ、はい実は…」

……

……

…

「絶対の死、ニユクスか。核にメシアにガイアに異界にと、俺の時より凄まじい事になってる様だな」

「僕も正直言えばまた金剛神界に戻って籠りたいって考えてるよ。でも流石にそういう訳には行かないしね…で、イゴールさん。僕の考えが正しければ」

『ええ、数代前のお客人がニユクスと関わっておりましたな。とは言え私共はただ力添えをしただけで御座いましてその存在とは何の関係も無いのが現状ですが』

「はつきり言っただ僕の手に残りすぎる状況です。僕はユニバースでもワイルドでも無い。所詮その辺の人間の一人ではこれ以上どうしたら良いのか」

現在は能力や強敵との経験故にリーダーの様な立場になっている為、ここまで誰にも心の其処から弱音を吐く事が出来なかった。

大樹はそもそも内気で苛められっ子であり、人と人の関係さえ満足に取れるような人間では無い。ある意味では今が異常とも言えるだろう。

それは前世も同様であり、早々治るものではない。それを自らの立場を理解して泣き叫ぶ事も癩癩を起す事も出来ない事に大樹自身無意識的に苦痛を感じていた。

イゴールと達哉は大樹にとって、本来の世界から逸脱した存在であり更に達哉は初めて出来た男性の友人でもある為、気が緩んでいるのもあり、ここまで正直に話している。

逆に達哉は此処で彼に対して何を言えば良いのか分からなかった。

あの世界で戦っているのは達哉ではなく大樹なのだ。その心情は理解したくても出来るものではない。

温かい言葉をかけるのは違っだろうし、気休めの様な励ましは何の役にも立たない。

対抗策は分かりきっているがそれを如何にかできる実力は大樹には

無い為、策を授けようにも上手く行く可能性は極端に低いのだ。

イゴールと言えば、本来此処に来た人間に力を貸すだけの存在であり本来なら此処までの補助はしてはいけなかった。

それでも大樹の為に相談を受けたり、力を貸したりしているのはちやんとした訳があるのだが……それを正直に話す訳にはいかず、ここは大樹に任せる事にしたようだ。

「大体の止め方は分かってるんだな……？」

「まあ、ね。問題はそれをする為の時間と力が足りないって所かな。僕自身この町に降る核さえ如何にかできればって思ってたよ。他の場所にまで気なんか回せないからね」

「そうだな……俺達は英雄でも正義の味方でもない。出来る事と出来ない事位分かっている」

「でも僕達が死にたくなければ世界を救えと言われた様な物だよ。核誘導基地を一つ抑えるだけでも此処まで苦労してるのにね……それに時間も無い。ほとんど詰みさ……」

「……上級天使を説得は……無理だな。奴等はニユクス存在を理解しようとしないだろうし、いつその事、神でも殺すか」

「出来れば苦労しないよ……まあ、核の制御装置でも奪えれば楽なんだろうけど。そんなものが一個な訳……」

「いや……可能性は0じゃないな。良く考えてみる。全世界にミサイ

ルを発射するような複数の起動装置や施設があると言う事はそれで軌道修正も出来る筈だ。態々核ミサイルを誘導する施設なんて作るか？ 人間だつて馬鹿じゃない、マスコミがそういうのを見つけたら大騒ぎになるだろう？」

「確かに…でも、確実性を求めて用意した…いや」

「天使は別に人間を皆殺しにしたい訳じゃないだろう？ 後天使が機械に強いとも思えん。頭が良くても所詮は悪魔だ、そうなればシンプル且つ、見つけ難い物を用意しないか？」

「つまり神の火を奪えつて事が…随分な手を考えるね」

理想論でしかないが、天使の事や現実世界の事を考えると少しは期待が持てる案でもある。

複数の核施設などを作っているのなら、色々な国のマスコミが何所からとも無くそういう情報を探ってくる筈だ。

アメリカなどの国が所有している核ミサイルを牛耳っているなら、そういう情報は何所かしらに漏れるだろう。

今の今まで、クズノハに知られるまでは核の事を完全に隠し通して居たと言う事、クズノハが複数ある核誘導施設を狙おうとした事を考えると信憑性は高い。

同じ数の核ミサイルを発射する施設があるなら其処を攻撃するのが当たり前だろう。態々核ミサイルを誘導する基地を破壊している位なら其方を優先するのが普通だ。

そこで可能性として出てくるのは世界中の核ミサイルを一度に発射出来る装置か何かを天使達が何所かに隠していると言う推測が立つ。

勿論、無理矢理こじつけた理論でしかないのだが……

「確かメシアには上級天使が居るって…上手い具合にそいつから記憶を奪えれば分かるかもしれない…」

「ニコクスは倒せる存在じゃないってのは分かってるんだ。ならば其方は無視して世界の人間が絶望しない事を優先に動くだけ…だな」

「クズノハでも分からなかった事を探れって時点で無理難題だけだね…ダメだったら全員さようなら、か」

ほとんど見つける事が出来なかった道筋が、細く見えづらいが漸く形になってきた。

後は落ちない様に慎重に動くだけだろう。

ともすれば直ぐ切れてしまうような細かい道だが、大樹にはそれを歩いていくしか道が無い。

今はただ、目の前の事を終わらせてから、其方を考えることにしよう。と達哉とイゴール達に礼を言いベルベットルームを後にした……

……

『道は示されましたな…』

「後はあいつ自身が全てを捨つかどうかだ。あいつが完全に終われば、全部終わるんだろっ？ ならば出来る限りの手は貸すさ」

『あの方も…同じ意見で御座いますな。神の火をあの方は奪えるのか、私共は祈るだけで御座います』

「全宇宙のタナトス…か。余程そいつは全てが嫌いなんだな…」

二人の声は小さく部屋の中を木霊した……………

……………

……………

…

天仙娘々とヘルが合体！！ 合体事故発生により、イレギュラー：リユウキツコウシュが誕生した！！

しかし大樹はリユウキツコウシュを扱えない！！ しかし契約と盟約によりリユウキツコウシュのレベルは抑えられた！！

大樹の成長限界が近づいている……………

本来のリユウキツコウシュ：召喚不可能

「名前」：リュウキツコウシュ 「アルカナ」：女教皇
「LV」：55 「受胎」：レベル60：霧

露乾坤網

「消費MP」：27

「ステータス」

力：27 知：41 魔：58 体：21 速：31 運：27

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷：+ 電： 風：

魔：× 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・成長 ・黄泉の女王 ・ムドハイブスタ ・魅了？ ・魅了

ハイブスタ

・ムド防御 ・氷結無効

「スキル」

・マハ・ムドオン？ 敵全体を呪殺する。 超高確率

・メギドラオン？ 敵全体に万能属性絶大ダメージ

・メールシュトローム 単全体に氷属性絶大ダメージ

・サマリカーム？ 対象の死亡、昏倒を回復。 HP回復：特大

・メ・ディアラハン？ 味方全体のHP全回復。

・ファイナルヌード？ 敵全体を超高確率で魅了。 女性には無効

・蜃気楼？ 敵全体に超高確率で幻影効果

必・ニヴルヘイム 敵全体に氷属性甚大ダメージ 一日二回

必・霧露乾坤網 味方全体に一日の間火・氷属性を吸収

一日二回

必・盤古旛 敵単体に3 - 6回の万能属性極大ダメージ

ジ 一日一回

成長：このペルソナは成長する。ペルソナ降魔時、レベルが上が

った場合このペルソナのレベルも上昇する。

黄泉の女王：ヘル専用のスキル。死の国の女王の力を振るう。ムド系のスキルの成功率を9割まで上昇させる：継承

ムドハイブースタ：呪殺吸収、反射、無効、耐性の相手にも呪殺系即死技が適用される：継承

魅了？：超高確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない：継承

魅了ハイブースタ：魅了の成功値を大上昇させる：継承

ムド防御：相性などを無視されてもムド系魔法を完全に無効化する

レベルを下げたリュウキツコウシュ：召喚可能

「名前」：リュウキツコウシュ 「アルカナ」：女教皇

「LV」：35 「受胎」：レベル60：霧

露乾坤網

「消費MP」：18

「ステータス」

力：20 知：33 魔：38 体：18 速：24 運：18

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷：× 電： 風：

魔：× 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」

・特殊成長 ・黄泉の女王 ・ムドブースタ ・魅了？ ・魅了
ハイブースタ

・ムド防御 ・氷結無効

「スキル」

・マハ・ムドオン？ 敵全体を呪殺する。超高確率

・メギドラ？ 敵全体に万能属性極大ダメージ

・マハ・アクアダイン？ 単全体に魔・氷属性特大ダメージ

- ・サマリカーム？ 対象の死亡、昏倒を回復。HP回復：大
- ・メ・ディアラハン？ 味方全体のHP全回復。
- ・ファイナルヌード？ 敵全体を超高確率で魅了。女性には無効
- ・屋気楼？ 敵全体に超高確率で幻影効果
- 必・ニヴルヘイム 敵全体に氷属性甚大ダメージ 一日一回
- 必・霧露乾坤網（弱） 味方全体に半日の間火・氷属性を無効 一日一回

下部分は成長により取得。

- ・メギドラオン？ レベル：50
- ・メイルシュトローム レベル：48
- ・サマリカーム？ レベル：45
- 必・霧露乾坤網 通常召喚可能時
- 必・盤古旗 通常召喚可能時

特殊成長：ペルソナ使いのレベルが上がった時、このペルソナのレベルも上がる。

黄泉の女王：ヘル専用のスキル。死の国の女王の力を振るう。ムド系のスキルの成功率を9割まで上昇させる：継承

ムドブースタ：呪殺無効、耐性の相手にも呪殺系即死技が適用される：継承

魅了？：超高確率で異性はこのスキルを持つ者を攻撃できない：継承

魅了ハイブースタ：魅了の成功値を大上昇させる：継承

氷結無効：相性などを無視されても氷属性の攻撃を完全に無効化する

ムド防御：相性などを無視されてもムド系魔法を完全に無効化する

ダツキ以上の切り札、リユウキツコウシユをゲットですよ。とは言え、本来のレベルで呼べるのは1回だけなんですけどねー。レベル55までは佐藤君と一緒に育つペルソナになりました。

しかし…粗の多い作戦ですねえ…もう少し何とかなら無い物かしら…この辺で私の頭の悪さが露見しているっ!？ にゅああああ(ごころごころ

まあ、核発射施設が1個しかない云々は初めから考えていたのですが(汗

さてて、次回は遂に突入ですよ。ああ…何書けばいいんだろう(汗

どうでもいいこと

お給料までもう少し…なのですがお小遣いがもうほとんど残ってませんっ!(涙

だって…皆貸してつて言うんだもん(涙 と言う訳で色々貸したり奢ってあげてたら自分の分が無くなりかけなのですよー(笑

こういう時は、悲しさを紛らわすためにチョコレートでも食べるのです。

あむあむ…うう、甘さが身に染みるのですよお。

やはりミルクは美味しいですね。

ホワイトチョコも結構好きですが、此方は好き嫌いが分かれるらしいですねえ…

皆さんはどんな感じですか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ? キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位=自動的にメインコミュ

2位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位=一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回=1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てにな

る。

通常Ⅱ 1票に付き『1票』基本はこれ。

優先Ⅱ 1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優Ⅱ 1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：26票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：8票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダツキ：20票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

通常：アリス：30票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：9票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：8票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：42票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：20票（????????）

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
- 2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く
- 3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）

3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1〜3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとつても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談）

〳重要〳〳反省と謝罪。

前回のペルソナ『リウキツコウシュ』のレベルを『84』から『55』に弱体化させました。

あまりに強すぎた事もあり、皆さんをご不快な気分にした事を深くお詫び致します。

これからも色々気をつけて参りますので、良かったらこれからも見てあげてもらえると嬉しいです。

後…合体事故が多いという指摘を受けました。

が、実は事故が多いのにも色々意味があったりします。

此方はまだ全部は内緒なのでいえませんが、どうかご容赦下さいませ。

反省終わり…と言つ訳で潜入編開始なのですよーっ！

わーわーわー……何書けばいいかわからにゃいつ!?!? (汗)

でもでも頑張つてかきましたー。でも短いのは申し訳無いのですよー。

これからちょっと出かけてくるので、それで途中でぶつ切りにしましたっ。

多分つかさの場所まではあっさり行くんじゃないかなあと思います。

だって、見つかったら終わりなミッションですしねえ（笑

ではではどうぞなのですよ〜

メシア教・聖母の間

其処には二人の人間と一体の天使が居た。

聖母であるつかさと、メシア教の神父、そして大天使ヴィクターである。

未だに聖母が身籠ったと言う兆候が見られない為に、それぞれ少なからず焦りを感じているようだ。

「……………」

ふらふらと左右に揺れるつかさ。時々薄く笑っているのは昔の事を思い出しているのか、それとも単純に壊れているのかは分からない。

ハイライトの消えた濁った瞳がどこか分からない所をじっと見つめているが、彼女にはもうそれが何であるかも理解出来はしない。

薬と洗脳によって狂わされた精神は、これ以上の破壊を拒み全てを拒絶し封じ込める事で安定を保っていた。

メシア達にしてみれば下手に騒がれずにすんでいるだけ、これでも

十分マシなのだが。

彼等にしてみれば、聖母とは所詮救世主を産む為の機械にしか過ぎず、もし救世主が誕生したら後は生かして置く理由はほとんど無い。有るとすれば、救世主を産んだ聖母として信徒に公表し信仰を集める程度だろうか。

だが、本来受胎告知を受けて直ぐに救世主を身籠る筈の聖母が今も尚肝心の救世主を身籠らないと言う事で二人は集まっている。

『相変わらず…ですか？』

壊れているつかさを優しくな瞳で見ながらヴィクターは神父に問うが、その返答はやはり思わしくない。

「はい。未だに兆候は見られません、強固な結界が今も尚その力を弱める事無く展開し続けているのです」

『何と忌々しい事かつ！ 神の国の再臨が此処まで近づいていると
いうのに…おぞましい結界がつ！』

「無理に破ろうとすれば聖母に負担が掛かりすぎてしまいます。そうなれば最悪聖母が死んでしまう恐れが…」

遂に見つける事の出来た聖母に死なれてもしたらそれこそ彼等の計

画が瓦解してしまう。

何があっても最善の注意を払って経過を見守らねばならなかった。

こうなると、壊してしまった事を少なからず後悔してしまう神父だったが、どちらにしても意味はなかっただろう。

つかさはメシア教では無いのだから。

『あのシスター・アンナはどうなったのですか？ 確か聖母の親類を探しに行った筈ですが？』

「それが…どうやら失敗してしまったようで、彼女自身疲労が激しく今は休んでもらっています」

『何とっ！？ 最早聖人の域に達しているのシスターを退けたと言うのですかっ！？ それは一体っ！？』

驚きを隠せないヴィクター。

それもその筈だろう、彼女は人間でありながら大天使ヴィクターに次ぐ能力の持ち主なのだから。

事戦闘に関して言えばヴィクターを超えてしまう部分すらあるという強者である。

そのシスター・アンナが振り返ちにあっただと言う事は少なくとも自分達に匹敵しうる相手が敵に回ったと言う事なのだから。

目の前の神父も自分と同等のレベルを誇ってはいるが彼は防御や阻害、補助専門であり、実質攻撃力で最高と言えば彼女しか居ないのだ。

途端に慌て出すヴィクター。大天使と言う存在である以上、自分より弱い相手ばかりしか相手をした事が無い為に、新たに現れた強者に強い警戒心を抱いている。

『それで、その相手はどの様な悪魔のですかっ！？ どうかして滅ぼさなければこの先の神の王国の障害になりえますっ！』

「それが…どうやらデビルサマナーの人間の様なのです。更に言えばシャーマンの力を持っていると」

『デビルサマナーとシャーマンの力を持つ戦士…ですか。嘆かわしい…それだけの力がありながら何故、それを悪しき事に使うのかっ！』

「素性は知れませんでした、かなりの障害になりえるかと。今現在情報を調べている途中なのですが…どうも時間が掛かりそうです」

『仕方ありませんね。一先ずは貴方の部屋で聞かせてもらいましょう。聖母には幾健やかに居てもらわなければ』

「そうですね…聖母様。どうぞお早く救世主を…世界を信徒達を救う為に」

そう言うと二人は此処をテンブルナイト数人に任せ部屋を出て行く。
命じられたテンブルナイト達はその任務を遂行する為、誠心誠意つ
かさを護衛し始めた…

だが……………

それを見ている何かに気づく事は無い。

……………
……………
……………

PM：13：20 メシア教本拠地ビルの近く

大樹達は高層ビルの近くの隠れやすい場所に移動しながら周辺の様

子を再確認していた。

入り口前には4〜6人体制のテンプルナイト達が絶えず警戒を続けている。正面から突撃するのは無謀と言うものだろう。

シエルターに隠れる事もせずここを維持するとは。余程自信があるのですね。

「メシア過激派の本拠地だからなここは。そうやすやすと落とされるなんて思っちゃんないだろう。目の前の現実を見て分かる通り……な」

「確かにこれを見れば信者が増えるかもしれないね。人間は……聖なる祝福を受けた戦士は悪魔には負けはしない……か。見世物に近いかなこれは」

「でも、それだけの实力がある事は確かよ。そしてこの最上階にかさが居る」

大いなる天使達の手で護られたこのビルは、唯一機能しているビルと言っても過言ではない。

此処には入り口のテンプルナイトを見て分かる様に、数多くのメシア教徒：メシア教徒達が配備されており、最上階にある聖母の間を護っている。

シエルターの他にこれだけのビルを悪魔達に落とされる事無く、維持している事に驚きと関心を抱えつつも大樹達は目の前に居る警備

のメシア教徒達を見据えている。

「態々この様なビルにつかささんを匿うのは何故なのでしょうか…
メシア教は最多のシエルターを確保しているのですから、其方に預
けた方が安全面も考慮されている筈なのですが…」

「どうやらメシア教つてのは体裁に拘るらしくてな。シエルターに
聖母を籠らせておけばいい物を、救世主誕生をそんな場所で行うわ
けには行かないとあんな馬鹿な事をしてやがるそうだ」

「馬鹿じゃないの？ ねえ馬鹿じゃないの？ キリストだって馬小
屋で生まれたんだからそんな無駄な体裁いらんよな。まあそのお
陰でつかさが助けやすいただけだよ」

「表は基本無理で、裏口から…そっちにも複数のテンプルナイトが
居るのか。下手に騒ぎ立ると面倒だね」

「監視カメラの類はこっちでダミーを流して如何にかできるから安
心してくれ。まずは手筈通りに裏口から進入する。後は一直線に柵
つかさ嬢の居る聖母の間まで駆け抜けるという算段だ」

「後は目の前のメシア教徒達をどうするか、だね。こっちは僕に任
せてもらう」

本来は遠くから麻醉弾を使い狙撃して眠らせてから進入すると言っ
案も出ていたが、其方よりも安全で後でバレにくい手段があると言
う事でここは大樹が何とかする事になっている。

後はさっさとやる事をこなし潜入するだけと言った感じだ。

大樹は早速アメリアを召喚する。その姿は何時も来ている服装とは違いメシア教徒が着ているカソックに身を包んでいた。

そして勿論大樹も同じくテンプルナイトの服装になっている。

これだけなら只の変装で終わるのだが…

「凄まじいな…さっき見たメシア教徒にそっくりそのままじゃないか。やれやれ…敵に回さずにすんで良かった、最悪お前一人でウチが壊滅しそうだからな」

大樹は既にペルソナ、はいよるこんとんのスキル『身体変化』を用いて、近場に居たテンプルナイトの姿に変身していた。

今装備している服装までは流石に変化出来ないの、其方はアメリカと同じくガイア教から手に入れてきてもらった服装なのだが。

何所から見てもその姿は佐藤大樹には見えない。強いて言うならば…普段より数倍顔が格好良いと言う自分で笑いたくなる格好になっている。

「まさか。色々手が有る癖に良く言つよ。さて、それじゃあ行つてくる。上手く行くと良いけどね」

「気をつけてね…大樹君」

「どうか」無事で」

「任せたわ、宜しくね」

こなた達が無事を祈り激励の言葉を放つ。見た目がまんま別人なので、少し変な感じがするのだが特に気にはしていない。

その言葉に大樹はこくと頷きアメリカに顔を向けた。

「行こうかアメリカ」

「はいなのですよー」

ぐっと両の拳を目の前で握りこくこく頷くアメリカを連れ、裏口を警備しているメシア教徒達の所まで歩いていく。

心臓が張り裂けそうになるほど激しく鳴り響いているが、それを無理矢理押さえ目的を遂行する為に冷静な表情で彼等に近づいていく。大樹達に気付いたメシア教徒だが、小さい方のメシア教徒の様な少女はともかくもう片方の男性 大樹なのだが は知り合いだったらしく気軽に話しかけてきた。

「これはご苦労様です。此方の方まで見回りですか？」

「え、ええ。何か有ってからでは遅いですからね。後、この子がこの辺りが初めてだと言う事で少し案内を」

「はあ…成程。君はテンプルナイトには見えな…」

「マハ・ムドオン」

「…がつ!? あがが…がつ……………」

「なっ!? あぎ…ぎぎ……………」

恐ろしく無防備に近づいてきたメシア教徒達にアメリカの死の言葉が紡がれる。

天使ですら防ぐ事が出来ない死の魔法に抵抗する事など出来ず、彼等は一瞬で息を引き取った。

倒れ伏すメシア教徒に見向きもせず、辺りを確認した後、大樹は直ぐにアメリカに命じる。

「それじゃ頼むよアメリカ」

「あいつ 我が傀儡と成り果てよ。死すら汝等の前では安らぎではない…『ネクロマ』…!」

死体を漆黒の闇が取り巻いていく。それらはガスか何かの様にしゅっしゅっとう音を立てながら耳や鼻など、ありとあらゆる場所から身

体の中に進入していった。

ややあって、全ての闇が取り込まれると彼等は何事も無かったかのようにむくりと立ち上がった。

見た目は何も変わつた感じは見られないが、その瞳は完全に濁りきっている。

ネクロマ

暗黒系魔界魔法の中でもネクロマンサーがよく使用する、邪悪な魔法の一つで、『グレイブ』の魔法と共に上位ランクにされている魔法だ。

死体を媒体にある程度以上の意志を持つゾンビを作り出す魔法である。

普通のゾンビとは違い、この魔法はレベルが上がれば上がるほどゾンビの質も上がり、記憶や持っている能力なども保有したままゾンビに出来るのが特徴である。

低レベルの内は効果時間が短く1〜2時間程度しか持たないのだが、アメリカの魔力と魔法レベルがあればゾンビになってから数日は余裕で保たせる事が出来る。

問題は、やはり死体には間違いないので徐々に腐っていく所だろう。しかし魔法の発動中はある程度の腐敗が抑えられている為、戦闘で使うならばなんら問題はない。

「それじゃ、私達がこの中に入ったら後は普通に警備しているのですよー？」

作り上げたゾンビに無邪気に話しかけるその様子からは只の小さい少女にしか見えないが、やっている事はその辺の殺人鬼より非道だったりする。

しかし彼女は大樹の役に立った事に喜びこそすれ、後悔や罪の意識、恐れなどは一切無い。

造魔であると同時に、父親代わりであり、兄代わりでもある最も大切で大好きなマスターの命令に従う事が彼女の喜びなのだから。

少しずつ、少しずつではあるが彼女も自分の意思で変わりつつある。それがどんな歪な成長の仕方だとしても。

「は…はい…わかり…ました…ご主人様……」

「警備…警備…します…」

「アメリカ。出来れば余り会話させないほうが良い。それも頼めるかい？」

「らじゃーなのですよー。という訳なのですっ！ 基本は頷くか簡単な返事だけにするのですよー？ もしバレたら全力で相手を殺すのですっ！ 仲魔にしてもいいですよー」

「は…い」

こくりと頷くゾンビと化したメシア教徒。これが大樹達が狙撃での昏倒の代わりに選んだ作戦である。

気絶させたり眠らせるよりも一度殺してゾンビとして使役させておけば、ある程度は 最低でも交代直前までは バレずにすむだろうと考えた結果だ。

そして音も無く、見た目の怪我も無く殺すにはムド系の魔法があればいい、そのどちらも使えるアメリカが居るからこそ今回はこの作戦を適用した。

勿論、あなたとみゆきは大体理解しており、皆方もある程度は察して居たが かがみは除く まさかここまでストレートに躊躇いも無く相手を殺した事に皆方は警戒心を強める。

大樹には人間特有の甘えが見られないと言う事で、一段階更に評価と危険度を上げていた。

「さて…やっぱり開かないか。そいつ等は鍵を持っているかな？」

ゾンビになった二人に鍵を持っているかどうか聞いたのだが、これは魔法で封印された特殊な鍵の為、開けられるのは内部からになっていると言われた。

となれば無理矢理壊すか他の場所を探すしかないのが普通だが…それすらも大樹は余裕を持って打ち破る

「来い、はいよるこんとんっ！」

その声に呼応するは、銀色の髪が美しい美少女…の様な擬態をしている悪魔、はいよるこんとん。

一瞬にしてその姿を巨大な宇宙人の様な姿に変え、右手から光輝く……針金を取り出した。

『これぞ伝説の魔法の鍵デュプリケイターっ！！ いざや見よっ！
このスーパーピッキングをっ！！ 秘技シャイニングトラペゾへ
ドロんッっ！！』

「鍵じゃなかったのかそれは……」

鍵穴に向かって針金をかちやかちやり始めた3メートルの宇宙人に頭が痛そうにしながら突っ込む大樹。

テへつと、宇宙人の姿で可愛く笑うもその姿では可愛い所か気持ち悪いとしか言えない。

『冗談ですよ。』という訳でこっちが本物です。これはちょっとしたデモンストレーションですよ。頭にアシッドをつけると某M MOの必殺技になりますがっ！！』

「どうでもいいからさっさと開けてくれ。時間との勝負なんだから」

『ラジャーっ！ という訳で開きましたよ』 ではおさらばっ！

『！』

パキントと何かが割れる音がすると同時にカチャリとドアノブが回る。はいよるこんとんの言う通り鍵が開いたらしい。

訳の分からない事をしてくれたが、ちゃんと役目は果たしてくれたので一応感謝しておく、はいよるこんとんは嬉しそうに頭を掻きながら消えていく。

後は安全を確認した後、そのまま全員を呼び寄せた。

程なくして全員が集まったが、かがみは目の前のゾンビを見て、少しだけ顔色を悪くしている。

（仕方ないとは思うけど、やっぱり目の前で人が死ぬのは…精神的に来るわね。佐藤君もこなたもみゆきですら顔色を変えてないなんて…）

目の前のゾンビが先程まで人間だった事に何の感慨も見せないこなた達を見て、少し自分とは遠い世界に行ってしまった様な感覚に囚われるかがみ。

しかし今はそんな感情に囚われている暇は無いと、意識をしつかりと保ち、この後の事を考える。

そんなかがみの様子を何時も通りにしながらもこなたはしつかりと見ていた。万が一何か有ればフオー出来るのは後列に居る自分だからと。

（人を殺して普通にしたられない所を見るとかがみんはまだ処女殺しをしていないと言う意味 かな。これから多分バンバン人死ぬから、最悪下げないといけないかもね）

「よし、鍵も開いた。急ごう」

「ええ…待ってて…つかさっ！」

「参りましょうっ!!」

それぞれが頷きビルに侵入した。

………

………

…

その外は変わらずの晴天で、基本的に何も変わっていない様に見える

る。

近くにはこの辺りを警備しているメシア教徒が歩き回り、裏口では悪魔から進入を防ぐ……元人間達が役目を果たさんと警備を続けていた………

昨日はちょこつと凹んじやってました(汗)

まあ、強くしすぎた私が悪いので反省して次回に活かすですよ。既にチートもチートですしねえ。今更テコなんていらぬか…まあ、それでもよく死ぬのですが(笑)

アメリカちゃん無邪気に残酷です。

寧ろ彼女の方がよっぽどアリスに近い気がっ!? 笑顔で死んでくれる〽って感じですしねえ。マハ・ムドオンでしたが。

そしてやっぱりかがみんな普通に人を殺した事に驚いてました。どうなるかな…?

で、今回は何を書こう…上手く書けるかなあ…それだけが心配です。

どっつてもいいこと

お野菜、山菜 今日はお野菜と山菜のオンパレードでした

フキの炒め物に、ワラビを山葵醤油で漬けたもの。頂いたお野菜をお浸しにして〽と、どれも美味しかったですよ

偶には山菜尽くしも良い物ですねえ。

皆さんはどの様なお野菜や山菜が好きですか?

ちなみに私の一番好きな野菜はメロンとスイカです(笑)
今年の夕張メロンは美味しいですよ

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ? キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。
ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位=自動的にメインコミュ

2位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位=一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回=1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常Ⅱ 1票に付き『1票』基本はこれ。

優先Ⅱ 1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優Ⅱ 1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：31票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：9票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダッキ：28票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

通常：アリス：38票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：10票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：10票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：54票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：25票（????????????）

アンケート資格の変更

1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある

2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く

3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（

これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）

3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1～3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外さ

れる。

- 1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとつても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。
- 2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。
- 3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。
- 4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

Continue 110 〱何処までも理不尽な世界で???) (前書き)

…なんにも思いつきませんでしたっ！(くわわっ)

と、勢い込んでみましたが本当に何も思いつかないのでなあなあ進
行なのですよー(涙)

ああ…表現力や構想力が欲しいです…誰かプリーズなのですよ。

もしくれたら、お礼に何でもしてあげるのは(落ち着け

まあそんな訳で短いですがどうぞ。

Continue 110 〱何処までも理不尽な世界で???

メシア教本拠地・内部1F

内部に侵入した一行。

中は簡素な造りで、見た感じは何所にもある普通のオフィスの様な感じだ。

メシア教特有の煌びやかな装飾などは殆どされておらず、正に聖母を守る為だけに造られた様な場所に思える。

大樹の勝手な想像で、内部では賛美歌でも有線か何かで流れているかとも思っていたがそんな事は無い。

確かに音が鳴り響いていればそれだけで警備の邪魔にしなければならない、と今更気付く微妙に迂闊な所があったが、誰にも言っていないでバレはしないだろう。

まあ、その所為か大きさの割には人が居ない為に中は非常に静かで、慎重に動かなければ足音を立ててしまう可能性があった。

「潜入は成功、ターゲットは一番上、最上階の特別室に隔離されている。それじゃあ急ぐかね」

「そうですね。時間も惜しいですし」

「ちょっと待ってくれないか？ ハニー・ビーを使うから。これなら機械だし小さいから索敵しやすいからね、出来る限り見付かる可能性は下げておきたい」

「じゃ、私もだね。ほんじゃ起動っ」と

COMPソフトの一つである、ハニー・ビー。

偵察用の小型ロボットである『ハニー・ビー・ドローン』を打ち出し、そのドローンが見た情報をCOMPで映し出す事が出来る機械の一つ。

ドローン自体は小型の名の通り、物凄く小型な上に音などがしないのでこういった場所での偵察に向いているのだ。

しかし基本的にCOMP1つに1台のハニー・ビーしかセット出来ず、ドローンの耐久力はその小型さからして分かれるとおりちょっとした衝撃で直ぐに壊れてしまうのが難点だろう。

すぐさま二人はドローンを操作し、近くを偵察し始める。

「流石に空気はこのような街中にあるのに清浄な感じがしますね」

ビルの内部で感じる清浄な気配と澄み切った空気にみゆきはこれで天使が敵でなければ最高なのにと心の中で愚痴る。

これだけ清浄な空間ならば、病気などになる事も無いだろうとつか

さの体に関しての不安はある程度拭い去れた。

「腐っても天使が居る場所だからな。だからと言って過しやすい場所には思えんが…」

「確かに、常にこういう場所に居続けると少し疲れてしまえますね。まあ彼等にしてみれば信仰が薄いから等と言われてしまいそうです
が」

「ははっ、違ういな。特に俺はガイアだし空気を吸っただけで害悪だとか言われそうでかなわん」

「でも、汚い場所よりは良いんじゃないですか？　つかさがそんな場所に監禁されてたらと思うと流石に嫌ですし」

みゆきと皆方の言葉にかがみが混ざる。

まさか聖母が薄汚い場所に監禁されている訳も無いとは思っているが、想像するだけでつかさの安否が更に心配になっていた。

「何にせよ連れ戻すんだから、どうでもいいよ。さて…幸いな事に近くには居ないみたいだね。こっちだ…付いてきてくれ」

「私の方も周りに警備とかは居ないからおkだね　今の内今の内
くお弁当は幕の内」

大樹を先頭にしてこなた、皆方、かがみ、殿にみゆきと万が一の事を考えて列を組んでおく。こうする事で万が一戦闘があつたり奇襲されたりしても問題なく戦えるようにしたのだ。

奇襲に関してはみゆきのスキルや、ハニー・ビーがある為に基本ありえないのだが、念には念を入れておく。

流石に皆方に一番後ろを任せるほど信頼などしていないのもあるのだが。

安全を確保しつつ、警備が居ない場所を探し歩いていく。

走れば物音を立ててしまう為に余程の事がない限りは慎重にならざるを得ないのだ。

それでも早歩き程度のスピードは出しているので進むペースは速い。

「ねえ、佐藤君？ 内部のメシア教徒の数はどうなのかしら…？
出来るならつかさの所に行くまでは敵と会いたくないわ」

「同感だね。調べた感じじゃ、下層の方は人が疎らにしか居ないね。でも全員銃器で武装しているから見つかったら只じゃすまないかな」
「すにーきんぐみっしょんって感じだねえ。ダンボールでも持って来たなら良かったかな」

「泉さん…流石にそれは見つかるかと」

「まあ、冗談だよじょーだん。おっと、息を潜めてっ、警備がこっ

ちに来るよっ」

こなたのCOMPに此方に向かって来るメシア教徒を捉え、全員に素早く指示を出す。

それぞれ近くにあった資材等にバラバラに別れて隠れていく。

流石に人数が人数なので一塊にはなれないのだが、幸い積んであるダンボールや機材のお陰で隠れる場所は容易に探す事が出来ていた。

「……………」

そして、その場を通りかかったメシア教徒が通り過ぎる。

流石に誰かが潜入してきたとは思っていない彼等は形式程度に警備を続けている為、容易に目を欺く事が出来る。

だが万が一詳しく調べられでもしたら、見つかってしまうので出来る限り息を潜め、焦りや緊張などを抑える大樹達。

「……………」

「……………」

辺りをキョロキョロと調べた後、直ぐ何も無かったかのように他の

場所に歩いていくメシア教徒。

完全に離れたのを見てホッと一息つくも、仕切り直して階段を上っていく。

上の階層に誰か居ないかは全てドローンが調べているので問題は無く、こなたの方のドローンは周りを徹底して調べている為に余程の事が無ければ見付からないだろう。

その手際に感心しつつも皆方は特殊な無線機で外部に居る 基地破壊班 部下に連絡を取っていた。

《そっちはどうなっている？》

《はっ！ 散発的に悪魔の強襲がありました。これを全て改造悪魔が撃破っ！ 良い材料が手に入りましたよ。ところで其方は？》

《そりゃ良い事だ。こっちは今作戦遂行中だ。やれやれ、自分より一回り小さい子供の方が優秀って涙が出てくるな》

《ははっ、俺もそう思いますよ。大人が子供に負けるなんてなあって俺も思いますし。と、此方の準備は整いましたっ！ 何時でも作戦実行可能です》

《よし、中々の手際だな。じゃあ今すぐ開始してくれ。此方を終えたら俺達も直ぐに向かう》

《ラジャツ！！ 結界破壊予定時間は1555ですっ！》

《ほう。思ったより早いじゃないか、あいつらには後で臨時ボーナスでも出してやらんとな》

《そうしてやって下さい。では無事の帰還をお待ちしていますっ！
以上、オーバー》

自分の想像以上に良くやってくれる部下にこそばゆい思いを感じつつ、皆方は連絡を切り大樹達について行く。

そして連絡を終えると直ぐにみゆきが皆方に話しかけてきた。

「そちらの準備の方は、どうなってるのでしょうか？」

「問題無いな。寧ろ通常より一時間も短縮してくれるそうだな。こりゃここで時間を掛ける訳にはいかな」

「そうですね。ここで時間を掛けすぎてしまつと色々不都合が出て来てしまいますし」

ゲームとは違い、見付かったら敵が素直に待ち構えたり等と言う酔狂な真似をする訳が無い。大体的場合はここからつかさを逃がし始めるだろう。

そうなればメシア教徒がそれこそ虫か何かの様に大群で押し寄せてくるし、それを相手にしていればつかさを助ける事など不可能になる。

この異界の中から逃げられないとは言え、今度はもつと安全な場所
シエルターか彼等独自の隠れ家など に連れて行かれてしまう。

成功、失敗に拘らず間違い無くメシア教徒達は此方に襲い掛かって
来るだろうし、此方は完全に追い詰められる。

絶対に敵に見付かる訳には行かず、万が一見付かっても他に知られ
る前に口を封じなければならぬのだ。

「何にせよ、これが最後のチャンスだと思えばミスなんか出来ない
さ…流石に半分も上つてくると警備が多いな。慎重に行かなきゃ直
ぐに見つかりそうだ」

「騒ぎを起して〜とか出来れば良いんだけどねえ。相手も馬鹿ばか
りじゃ無さそうだし無理かー」

階段を一步一步音を立てずに上がりながらこなたが愚痴る。

こなたもかがみ程ではないが、親友が捕まっているというこの状況
に強いストレスと、焦りを感じていた。

それを表に出すほど今のこなたは浅はかではないし、そんな事をし
ている暇があれば動くのが泉こなたなのだから、この憤りは不良
人修羅にぶつけようと決めている様だ。

勿論それは大樹もみゆきも同じである 若干大樹は二人より焦って
はいないのだが、同じくこの鬱憤は次で晴らそうと考えていた。

「後ろも特に問題は無いか…そっちはどうだ？ 流石にここに長時間居たら気付かれるぞ？」

「動きたいのは山々だけど、そも行かない位人が多い。参ったな最悪戦闘になる」

「アメリカちゃんのマハ・ムドオンは？ 静かに殺せないかな？」

「それも考えたけど、最上階まではまだ距離があるし出来るだけ騒ぎは起したくない…いつその事魅了でもかけて…」

《私の出番ですのお〜？ 張り切って脱ぎますわぁ〜》

「ほうほう、そりゃあ男として見なきゃならんだろう」

「別に見る分には構わないけど魅了されたら放置するから宜しく」

全員が全員、ジト目で皆方を見る。

白い目で見られた皆方は流石に汗を掻きながら顔を背けた、流石に口笛は吹かなかつたが。

「どっちにしてもこれ以上人数を増やせばもっとバレル危険性があるし、魅了は僕がやるよ」

「おお…大樹君の魅了ですか…私は既にっ！！ なーんてボケはいらないか。能力の方でしょ？」

「まあね。パールヴァティ並の効果はあると思うけど、出来れば使わずに奥まで行きたいものだね」

ドローンから映し出される映像には6〜7人のメシア教徒が代わる代わる警備を続けている姿が映し出されている。

そこらじゅうにある監視カメラはガイアの方で差し替えてあるので、バレる心配は無いが、人間はそうは行かないのだ。

マンパワーはこういう時厄介だとそれぞれが思いながら慎重に進んでいく。

「っ！？ かがみん急いでっ、こっちこっちっ」

「わ、わかってるわよっ」

ドローンで監視していたこなたが此方に向かって来るメシア教徒を確認し、見付かりそうになったかがみを小声で呼び込む。

慌てながらも直ぐにこなたの指示通りに移動し事無きを得たが、上の階に進めば進むほど見付かる危険性が高まってきていた。

特に先程から通常のメシア教徒に混じってテンプルナイトやエンジエルの姿も確認している為、更に厄介さを増している。

この後の事を考えると、出来る限り見付からずに移動したいのだが、

そろそろそれも難しくなってきた。

時間を掛ければ動けるかもしれないが、此処は敵の本拠地。同じ場所にじっとしていればどちらにしても何れ見付かってしまう。

監視カメラを誤魔化すのも長時間は無理なので、表情には出さないが誰もが強い焦りを感じている。

「ハニー・ビーのお陰で今の所見付かってないけど……いやあ、万が一って事で買っておいたけどここまで役に立ってくれるか。ありがたいねえ」

「無かつたらと思うとゾツとするね、此処まで来ると」

「やれやれ。潜入作戦もそうそう容易く行くもんじゃないな。さて、目的の場所まではそろそろなんだが、上の方はどんな感じなんだ？」

「今調べるよ……ん？ あれは……？」

最上階近くを調べていたドローンに映し出されたのは複数のテンブルナイトに警備されたメシア教の神父と通常の天使とは格が違う大天使の姿だった。

彼等はそのままテンブルナイトに護られるように、近くの部屋に入っていく。

恐らくはここを管理している大天使と神父なのだろうと当たりをつけ、自分達に風が舞い込んだと強く拳を握る。

一番の障害と思われた神父と天使が最上階から離れている今がチャンスだと、大樹はそれを皆に伝えた。

「いよっしっ！　つかさ奪還に追い風が吹いてきたよ。頑張ろうねかがみんっ」

「ええっ……後少し……もう少しだから待っててねつかさ」

グッとガッツポーズを取るこなたを見て、つかさを助けられる事に現実味が出てきたかがみ。うつすらと喜びの表情が伺える。

その間も大樹は警戒を怠らず、ドローンを使って辺りを索敵していた。

先程の神父と天使に付き添ったテンプルナイト達も全員が部屋に入っつていき、その数を補う為に他のメシア教徒やテンプルナイト達がバラバラに別れて警備を再開していく。

そのお陰で、辺りの警備の数が激減し此方に都合の良い展開になっていた。

「良い感じに他の警備もそっちの方に回ってる、向かうなら今だね」

「となればさっさと向かうとするか。こっちの方もそろそろ動かんとやバイしな」

「はい、では参りましょーっ」

時間が惜しいとばかりに全員でつかさの居る最上階まで移動する。

つかさが居る聖母の間まではあと少し……………

君達大声で会話してないかい? と突っ込まれそうですがご安心を
なのです。

ちやーんと小声で会話してるのですよ。

じわじわと両方攻略に動き始めてます。つかさを助けた後は基地で
すねっ!

さあて…次回はどうしようかなあ…ハプニングはいりますか?

ストレートに救って逃げますか? どうしましょう(汗)

どうでもいいこと

私の目の前には昔懐かしのかぼちゃパンが置いてあります。

何故っ!? と言われるとあまりに懐かしすぎてつい買ってしまっ
たのです(笑)

学校の給食でカボチャパンが出るとほんのりうれしかったのが思い
出しますよ。

という訳で今日は昔を懐かしんでカボチャパンをもぐもぐするので
すっ!

んまー なのですよ

皆さんが懐かしいっ! て思う食べ物は何がありますか?

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお

答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ? キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位=自動的にメインコミュ

2位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位=一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回=1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常=1票に付き『1票』基本はこれ。

優先=1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優 1 票に付き『3 票』現在該当者無し

通常：こなた：39 票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）
前回：みゆき：9 票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダツキ：34 票（手助けフラグはON エンディングフラグ
まで後1）

通常：アリス：43 票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：10 票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：12 票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：60 票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：31 票（????????）

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
 - 2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く
 - 3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）
- 3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1〜3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとつても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までが

コミュ対象となる。

2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

Continue111 〱何処までも理不尽な世界で???) (前書き)

何とか書き上げましたよ。

やはりこつこつのは難しいですねえ…そして最後に…!!?

後にご覧下さいなのですよ。

Continue 111 〱何処までも理不尽な世界で???

メシア教本拠地・最上階・聖母の間

一行はあの後も誰かに見付かる事無く最上階までやってきていた。

今は通路の角辺りで全員が待機している。その先はドローンが先回りしてその場の映像をCOMPに映し出していた。

目の前に映っているのは一際頑丈そうに作られている扉。この内部に情報通りならばつかさが居るのだろう。

かがみが焦りを押さえようと頻りにツインテールを弄びながら映像を見つめている。

「この中につかさが…っ」

「落ち着け柊ちゃん。ここが正真正銘正念場だ、ある程度の高揚感はあるても良いが焦り過ぎるな」

「っ…分かっています…どう？ 佐藤君」

「変わり無いね、少しは移動したり見回りでもするかと思ったけど完全に扉の前に張り付いているよ」

「流石に此処には隠れる場所ありませんしね…」

険しい表情で言う大樹。映像には4人のテンプルナイトが一時も離れず警備を続けている姿が映し出されている。

何とか隙を…と行きたい所だが、彼等は機械か何かの様に決してその場を動かさず二の足を踏んでいた。今居る通路を過ぎれば部屋まで一直線でしかない。

流石に此処では隠れる場所なども無く、

4人程度のテンプルナイトなら倒せない事も無いのだが、問題は戦闘になれば必ず大きな音を立ててしまおうと言う事だ。

そうならば必ず大天使と神父がやってくる。時間があれば直ぐにかさを連れてトラポートで逃げる準備は出来ているのだが……

「うぐう…少しは動いたらどうなんだろう…いやあ、警備なのは分かるけどさ…？　こうなったらいつそサイレンサー付きの銃で狙撃する？」

「同時に四人殺せるかな…？　僕には流石に一撃で殺せる程度の技量は無いよ」

「マハ・ムドオンでどうでしょうか？」

「流石に聖母を護る役目を受けているテンプルナイトが即死対策をしてないとも限らないしね…もし失敗したら仲間を呼ばれて終わりになる」

「確かにね…」

アリス、アメリカ、かがみで3連続の即死魔法を使えば成功する可能性もあるが、その場合でも出来る限り隙が欲しい所だった。

超加速さえ使えば一瞬なのですが…流石に今のみゆきには使いこなせませんから…

「話には聞きましたが、確かに使えばこのような事を考えなくてもすみましたね…すみません、私が至らないばかりに」

「そもそもは神々…上位の悪魔が使う専用能力を使うのは難しいからね、仕方ないよ。みゆきさんドンマイッ」

自分以外の時の流れを極端に遅くして行動する事が出来る『超加速』ならば、確かにこんな悩みを抱えずとも直ぐに彼等を倒す事が出来るのだが。そう都合良くは行かない。

みゆきのレベルが低いのが原因だが、一番の理由は小竜姫が超加速を発動する為のマグネタイトが溜まっていないと言う点だろう。

大樹が譲渡しようとも考えたが、例え発動出来たとしてもその後みゆきが完全に使い物にならなくなる事を考えると無理な相談だった。

そうなればこなたの言う様に狙撃で一瞬で殺すなどのスピード勝負になるしかない。

だがそこで大樹がまったく違う方からのアプローチを閃いた。

「待てよ……もう一度変身して相手を騙す事は出来るかな？」

はいよるこんとんに因る身体変化をもう一度用いる事で、テンブルナイト達を騙して奇襲出来るかも知れないと考えたのだ。

ポンッと手を打ってこなたが得心する。上手く嵌ればこれ以上に簡単で安全な方法は無いだろう。

そのまま騙し通すのも良いし、騙した後で奇襲し直ぐに殺す事が出来ればバレる心配も減る。

「なるほど、その手があったかつ」

「上手い具合に神父と大天使の姿は見る事が出来た…僕が神父に変身して、同じく身体変化を持つてるパールヴァティに大天使になって貰えばいけるかも知れない」

「何と言うか吃驚箱だな君は」

よく其処まで考え付きますね…凄まじいと言うか…

皆方は大樹の咄嗟に思いついた作戦とそれを行えるだけの能力を持つ事に舌を巻き、小竜姫は自分が探している人間 横島の事だが

を思い出し少し声が引きつる。

「いや、逆に何でこんな簡単な事に気づかなかったかって所かな。じゃあ作戦会議と行こう」

パールヴァティとアメリカ、アリスを呼び出し全員でこの後の作戦について話し合う。

簡単な概要は、大樹とパールヴァティが神父と大天使に変身して、テンプルナイトを騙し扉を開けさせる。

その後に残りのメンバーで警備のテンプルナイトを背後から強襲し排除して同様に部屋に乗り込みつかさを救助。直ぐにトラポーストーンを用いてビルから脱出する

上手く行けばスムーズにつかさを救助出来る策だと、満場一致で可決となった。後は大樹とパールヴァティの演技に懸かっていると見えるだろう。

少しでも本物に近づける為に皆方に神父と大天使の情報や仕草、会話方法などを聞いてみたが、神父は兎も角大天使は分からないらしく、アドリブせざるを得なかった。

『殿方に変身でのお？ 仕方ありませんわねえ サマナー様のお願いなら聞かなくちゃですわあ』

『何でもいいからさっさと変身するっ、後口調は変えなさいよね？』

『ええ〜?』

『変えないとばれるでしょ…』

『くすくす、冗談ですわぁ』

美しいその姿が徐々に神々しい天使の姿に変化していく、見た目は神々しいのに中身がとてもエロい大天使の完成だった。

大天使の姿に関してはドローンから映し出された映像をCOMPで保存していた為、問題無く変身出来ている。

同時に隣でははいよるこんとんを呼び出し神父の姿になっている大樹。これで全ての準備は整った。

「うん、すつごく胡散臭いねっ！ 似てる似てるっ」

「それは褒められてるのかな…それとも遠回しに貶されてるのかな…」

「さつきも見たから驚かないけど、本当に綺麗に化けるわね…佐藤君って実は結構なんでもありでしょ?」

「否定は出来ないね…まあ、実力は伴ってないのが難点だけど」

『サマナー様ぁ、此方用意出来ましたわぁ』

「その姿でその口調だとオカマみたいだよねえ…」

軽口を叩き合う仲間達を見ながら大樹は現状について思いを馳せる。

（今の所は上手く行ってる…今までここまでスムーズに行った事が無いからある意味不安になるね…何も無ければいいけど）

神父の姿に多少の違和感を感じつつ大樹はこの後の事に集中している。相手を少しの間でも騙せれば良いのだと自らの心を落ち着けていた。

（脅えるな、慌てるな…何時も通りに、何時も通りにやるんだ…怖いのは何時もの事だ…）

落ち着いている様に見える大樹だが、その内心は自分が失敗したら最悪な事になると言う責任の重さに震えていた。

先程とは違いつかさが目の前に居る事や失敗したら彼女を助ける事が困難になり、上手く行ってもこの後が厄介になると言う事で重いプレッシャーを感じているのだ。

だが神父に変身しているのもあり、見た目から普段通りに見える大樹がその様な状態になっている等誰も気付く訳も無く

ぎゅっ……

「ア…リス？」

何時の間にかアリスが傍に近づき大樹の手を強く握り締めた。

大事そうに大樹の手を両手で触れ、自分の胸元に持っていく。まるで大事な物を手離さない様に。

『大丈夫だよ、大樹さん。何があっても私達でフォローするから』

小さく耳打ちするアリス。ニコリと笑うその表情はどこまでも優しく…美しく見えた。

感じていた震えがアリスの暖かな手の感触で止まっている。いつしか完全に脅えも恐怖も消え去っていた。

そして反対側からはこなたが歩み寄ってくる。ニンマリした表情で大樹を見つめ人差し指で大樹の頬を突きながら笑顔で言う。

「がんばろーね大樹君。私達は一人じゃないよ？」

「…確かにね。さっさと終わらせて次に行こう。面倒な事は、さっさと終わらせたいからね」

「おうよっ
」

『私も戦いよりはゲームしたり美味しいもの食べたいもんね。頑張りましょ皆っ』

その様子を見ていたみゆきが、そんな大樹達を微かにだが羨ましそうに見つめて、かがみはこなたがあそこまで積極的な事に驚きを隠せないで居る。

皆方に至っては、ニヤリと笑いながら「やれやれ、青春だね」と茶化していた。

『では、そろそろ行きましょつか神父』

「パール：いや、そうですね。参りましょつか天使様」

大天使になりきったパールヴァティが大樹を促す。頷き二人で通路を抜けて行く。

後は自分達の演技に掛かっていると奮起しながら。

テンプルナイト達の前に立つと彼等は特有の仕草を取り礼をした後、神父に変身している大樹に話しかけてきた。

先程出て行ったばかりなのに、また戻ってきた事を不思議がっているのだ。

「二、これは神父様こんなに早くどうされたのですか？」

「いえ。聖母様が気になって戻って来てしまいました。開けて貰えますかな？」

「はいっ、少しお待ち下さいませ」

堂々とした演技だった。これも全てアリスとこなたのお陰なんだろうなど、緊張やプレッシャーを抑えてくれた二人に感謝し、失敗しないように最善を心掛けていく。

テンプルナイトも何時も通りに神父を見て疑いもせず扉を開ける準備をする。

流石に魔法的な鍵が掛けられているのか、開けるのには多少の時間が掛かりそうだった。

「神父様：ヴィクター様。聖母様は救世主を身籠る事が出来るのでしょうか」

テンプルナイトの言った言葉にピクリと反応する大樹。

同じくドローンを通じて会話を聞いていた皆もその言葉を聞いて内心安心していた。

（良かった。妹さんはまだ救世主を身籠ってはいないのか。何故かは分からないけどそれならまだ何とかかなりそうだね）

そのままパールヴァティに目配せすると、小さく頷き心にも無い言葉を送り、スラスラと紡いでいく。

『信じなさい人の子よ。神の愛と奇跡は祈り信じるものにだけ与えられます。弱き心を持つてはいけません』

「はっ、はいっ！ 私も信じます。世界はきつと愛と喜びに満ちた世界になるのだと言っ事をつ！」

「…鍵が開きました。どうぞ中へ、聖母様がお待ちです」

「ええ、では行きましようかヴィクター様」

『そうですね。皆も一緒に…何か希望の力を感じるのです』

「おおっ！ もしや遂につっ！！」

パールヴァティのでまかせの言葉に感激の余り涙すら流し始めるテンプルナイトに多少引きつつも彼等を引きつれ内部に入っていく。

それと同時にドローンが見ている方向に向かって作戦時に決めた合図を送った。

こなた達が合図と共に動き出して行く。

…
…
…

『という訳で死んでくれる？ とマハ・ムドオン2連打でテンプルナイトは天に召された訳だけど…って阿呆な事言ってる場合じゃないよね』

「つかさっ！ つかさぁっ！ー！」

「……………」

「くっ…つかささん…」

作戦は完全に成功し、テンプルナイトを即死魔法で殺した後全員が聖母の間に入る事が出来た。

そして直ぐ其処には死んだ様な表情で左右にゆらゆらと揺れる廃人と化したつかさを発見する。

居ても立ってもいられずつかさに駆け寄りきつく抱きしめるかがみだが、つかさは何の反応も示さない。偶に「あー…」等と言葉にならない言葉を漏らすだけだった。

余りのつかさの様子に歯噛みするこなた達。予想していたとは言え大切な親友がこんな状態になっているのを見て心を痛めている。

「要するに救世主を産む健康な母体なら後はどうでも良いって訳か。ガイアも似たような事をしてるがどっちも随分な下衆だな…おい」

吐き捨てる様に言う皆方。

自分達も非道を行っているが、メシア教は世界を救うと全世界に説き動いていながら実情は自分達と変わり無いのだと呆れている。

娘である杏奈 シスター・アンナも恐らくは刷り込みか何かで洗脳されているとは言え、この様な場所に居るのだと思うだけで昔の復讐心が燻っているのを感じた。

「何にせよ生きてる、生きてるんだ。後はどうにでもなる。直ぐに退散しよう」

死んでいない以上は文珠で如何にか出来ると踏んでいる大樹。

精神破壊に対して何所まで効果があるか分からないが、もし1個で

ダメなら時間を掛ければ文珠を量産し3〜5個で試すつもりでいる。それでダメでももう一つだけ如何にか出来る可能性はある為、今はそれより脱出する事を考えていた。

「そだね。大樹君の言う通りだよっ！ 急いで逃げなきゃねっ！」

「分かったわ…つかさ絶対に治してあげるからね…絶対にっ…」

『それじゃトラポートストーンの出番だねっ』

「そうしよう。とりあえず妹さんの事は後で何とか出来ると思うから今は逃げる事を考えよう」

そう言いながらトラポートストーンを取り出す大樹。直ぐに使用おうとしたのだが様子がおかしい。

本来使おうと念じるだけで発動する筈のトラポートストーンが何の反応も示さないのだ。

「なっ！？ 反応しないっ……………？ まさかマジックキャンセラでも張られてるのかっ…？」

「こっちもだよっ！ この部屋全部がそうなのかな？」

「まずいな、一度部屋から出るべきか…まさかビル全体と言う事はあるまいし」

何度試してもトラポートストーンが発動しない為に焦ってしまっ
行。

そしてそれが大きな隙になった

「とりあえずは部屋を出っ……………」

「分かったよ大樹…君……………!? 大樹君っ!?!」

『サマナー様っ!?!』

大樹の胸元に投げ剣が突き刺さっていた。

スキル食いしぱりと幸運の効果で即死は避ける事が出来たが攻撃は
それだけでは止まず、今度は喉や腹、胸と心臓に連続して投剣が立
て続けに突き刺さる。

はいよるこんとんの耐性すらものともしない攻撃は確実に大樹の命
を奪い取っていく。突然の出来事に抵抗する事も出来ずにその攻撃
で大樹は命を刈り取られた。

その場に倒れ伏す大樹。心臓部分からは血がドクドクと溢れ出して
いる。

余りの光景に全員何が起きたか一瞬理解出来なかったが、直ぐに現
実に引き戻された。

「ご主人様っ！！ いやあああああっ！？」

『くっ、まだ間に合うっ！ 誓ったのに…もう大樹さんを殺させないって誓ったのにつ…うううう…！！』

『アリス様急いで下さいっ、このままではサマナー様が手遅れにつ』

絶叫を上げるアメリア。大粒の涙を流し大樹に駆け寄っていく。

フォルトウナが顕現しメ・ディアラマを掛け続ける事で出血を抑えている。

だがこの姿で顕現出来る様になったとは言え本体は銃な為、本来の力を出せずその回復量は微々たる物だった。

アリスも自分の不甲斐無さに憤りながらも、今はディアラハンを大樹に使用しようと駆け寄ろうとする

だがそれも次々と飛んでくる剣の前に妨害されてしまい、大樹に近づく事が出来ない。

『このおっ！ 邪魔するなああああっ！』

『ちいっ！ 形振り構ってられませんわねえっ！ メギドラっ！

』！

アリス達の前に立ち塞がりメギドラの爆風で投剣を吹き飛ばすパールヴァティ。

それでも全てを防ぐ事は出来ず何本かはパールヴァティに命中していく。

流石に即死はしないものの回復が必要な程のダメージを受けてしまう。体中に突き刺さる剣を引き抜き自分に回復魔法を掛けた後、再び前を見据える。

ヴィクターの姿を維持する事が出来ず、元の女神の姿に戻ると全身が血塗れになった女神の姿が顕になった。

その間に大樹の傍まで移動してきたアリスがディアラハンを使い、同じくアメリカがサマリカームを唱えていく。

間もなく血は完全に止まり、サマリカームの効果で息を吹き返す大樹だがその表情は青白く染まっている。血を流し過ぎた様でまだ目を覚まさない。

「貴様あああああつー!!」

激昂しCOMPと銃を構えるこなた。その目は怒りに塗り潰されていた。

そしてその視線の先には……

「不浄なる愚か者に断罪を…塵は塵に灰は灰にそして邪悪は地獄に還り給え…つかさまを離せ…この異教徒がつ…！」

扉の前にはシスター・アンナが立ち塞がっていた

更にアンナの背後には下の部屋に居た筈の神父とヴィクターがこなた達を睨みつけている。

メシア教の幹部二人と大天使が揃ってこの場に居る事に驚きながらもみゆきと皆方は戦闘準備を整える。

『不浄な人間共が…ついには聖母まで誑かしますか…許しません！我が剣の錆となりなさいっ！』

「堕ちた聖母に、聖母の姉…そしてガイア教おおおっ！ てめえら一人残らずぶち殺してやるぞおおおっ…！」

「ちいっ！ やっぱり最後はこういうオチかつ！ お前等ぼけつとするな、少しでも油断すれば死ぬぞっ！」

アレだけの手錬が3人…まずいですね…此方は護らなければならぬ人間が居るといふのに。

「アリスちゃん、アメリカちゃん。大樹君をお願い……かがみはつかさを護ってて。私は……」

COMPから仲魔が全員召喚される。部屋はそれなりに大きいので、全員出してもまだ余裕はある。

こなたは両手に拳銃を持ち、高らかに叫んだ。

「こいつらを…殺すっ!!」

『それは此方のセリフですっ！ 邪悪な人間共っ！ 正義の裁きを受けなさいっ!!』

逃げ道の無い戦いが今始める……………

選択肢による強制戦闘発生。回避不能回避不能回避不能

パーティを崩さずにメシア教に潜入し、その後で急いで基地を落とす。
(危険度・極大 フラグ再生率・極大 全員死亡率・極大)

佐藤大樹 Death??

BATTLE START!!

ソノセンタクヲマチガエレバ…スベテガオウルダロウ…キキキキ…
ヒヒヒヒヒヒヒヒ

アヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

る
総てを識

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

した
法王は示

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

存
己を導く
存在

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

事の
それを知る
を

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

大切さ

を

八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八
八八八八八八八八八八

見つけよ、真なる道を

八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八
八八八八八八八八八八

Continue 111 〱何処までも理不尽な世界で???? (後書き)

という訳で行き成り佐藤君即死です。

これがバクヤならまだ話はちがったですが、半減耐性とは言えはいよるこんとんじゃ耐え切れませんでした(ほろろ

幸運とくいしばりで即死は耐えましたが、連続で攻撃されてオーバークイルなのですよ。

極大の名の通りメシアの幹部2人と大天使、逃げ道無し足手纏い1と無理ゲーに近い状態で戦闘開始なのですよ。

生き残るか…全滅するか…皆さんにかかっているのです。ふぁいとー！

〱重要〱

重要な選択肢があります。

選択肢によっては佐藤君達は全滅します。

そうなればお話は終了しますのでご注意ください。

IFとして扱ってもいいですが、その場合はエンディング01となつて、

再度残った選択肢からアンケートをとって再開します。

その場合は3番目の選択肢『3:これで終了する』が追加されます。皆さんよく選んで投票してくださいね。

注意) 【今回のお話の感想】か【どうでもいいこと】のどちらかが書かれていない投票は総て無効票とさせていただきますどうかご容赦を。

どうでもいいこと

コンビニに行ってきたらさくらんぼが売ってました。
ころころして可愛い上に美味しい果物なのですよ。早速買って食
べちゃいました！
やっぱり美味しいのですよ。でも、どうせならちゃんとしたお店
で買いたかったですね。

ほかにもプラムとかキウイフルーツとか色々あって目移りしちゃい
ますねー。

皆さんが良く食べるフルーツといえばなんでしょう？

私はよくリンゴを買って食べますね。

誰か私に買ってくれー(マテ

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお
答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてませ
ん。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。
それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？キャラクター追加です。とは言え彼はフラグが立つだけだ
が。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位＝自動的にメインコミュ

2位〓一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント
3位〓一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント
4位〓一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回〓1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常〓1票に付き『1票』基本はこれ。

優先〓1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優〓1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：47票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：11票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダッキ：40票（手助けフラグはON エンディングフラグまで後1）

通常：アリス：51票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：10票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：12票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：64票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：34票（????????????）

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
 - 2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く
 - 3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれませんが）
- 3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1～3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

〜重要?〜

どうやら6〜7時頃にコメントが書けなくなると言う状況に陥ったようです。

何故かその時間は同じ人の重複コメントも多いので、何かあったのかもかもしれませんね…

基本余程の悪意が無い限りはブロックユーザー等は作らないのでご安心を。

もし万が一その様な方が居た場合は此方でブロックユーザーを設置しましたと公表しますね。

流石に名前とかは書きませんが…

今現在はブロックユーザーさんはおりませんのでご安心を。です。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

という訳でアンケートはこのようになりました。

何故か同じ人のコメントが重複していたので、其方は基本一つとして入れさせてもらいました。

そして、これがアンケート結果と、進行ルートですー。

1：12票 結果：全滅フラグON

2：29票 結果：通常進行

3：02票 結果：こなた死亡フラグ(2/10) こなたガーデ

イアン変更 こなた覚醒フラグ

ではではどござっ！

Continue 112 何処までも理不尽な世界で???

『聖母を誑かそうとするとは何とおぞましい考えっ！ 神の裁きを受けよっ 邪悪の使徒共っ！』

一番初めに動いたのは大天使ヴィクターだった。光り輝く剣を構えこなたに突撃を仕掛けていく。

『はっ！ どっちが邪悪よっ！』

『そうそう、可愛い女の子を邪悪って言うアンタの方がよっぽど醜いぜっ！』

『さまなーノ所へ八行カセンツ！！』

だが其処にフェニックスとオリアス、ユルングが立ちはだかりヴィクターを止めに入る。

振り被る大剣の軌道を見極め、一撃目は完全に回避する事に成功した。そのまま直ぐにフェニックスが魔法を唱えていく。

『燃え尽きなさいっ！ アギ・ダインツ！！』

『無駄ですっ！ この程度が私に効く筈も無いっ！』

灼熱の炎がヴィクターを包み込むのだが、羽や髪が多少焦げ付いているだけで大きなダメージにはなっていない様だ。

とは言え火炎ハイブースタを持つているフェニックスのアギ・ダイスが効かない訳では無く、まずはフェニックスに目標を定めてきた。

『死ねっ！ 邪悪なる悪魔がっ！！』

『っ！ 速いつ！？ 二人とも援護をつ！！』

『遅いつ！ メギドラッ！！』

大剣を右手だけで持ちつつ、左手をフェニックスの前に突き出し全力でメギドラを放つ。

極光に塗りつぶされたフェニックスだが、限界まで防御に力を割いていた為何とか生きているようだ。

リジュネレーションが無ければ即死だっただろう。

止めを刺そうと剣を振り被ろうとした所に、遅れて飛んできたデイスがブフ・ダインを唱え牽制していく。

全身を氷で塗り固められたヴィクターはその動きを完全に止めてしまった。

『流石に強いですね…フェニックスさんは後ろで回復をつ！』

『そつは…行かないみたいよ？』

ヴィクターを覆う氷がピシピシと音を立てて崩れていく。

数秒もしない内に覆っていた氷は完全に砕け散り、そこから無傷の状態でヴィクターが現れた。邪魔をされた所為で、その瞳は怒りに染まっている。

『……………不浄な悪魔共が……………何故神の慈悲を受け入れないのですっ！ お前達は存在総てが悪っ！ ならば疾く死ぬのが当たり前ですよっつー！』

『……………馬鹿じゃないのこいつ。何が悲しくて存在否定された上に死ぬのが当たり前って言われなくちゃならないのよ』

『ディアラハン。ソウイウモノナノダロウヨ。天使ニトツテ我々ハ』

呆れるフェニックスにディアラハンを掛け諦めたように呟くユルング。

天使にとって神の意志に逆らう悪魔や人間…いや、あらゆる生命は不浄であり、神の為に自殺するのが礼儀なのだと説き始めるヴィクター。

懇々と諭し始めるその姿に呆れつつも今の内とばかりに体勢を整えていく。

回復魔法で完治したフェニックスはこなたの方を見つめ、小さく頷くとこなたも同じく頷き返し神父とシスター・アンナと戦っていく。

大樹がまだ完全に蘇生していない以上、戦力は此方の方が大いに下の為大天使はこの4人で抑える事にしたのだ。

とは言え、此方の攻撃は殆ど効果が無い上にあちらの攻撃は直撃すれば此方は一撃で持っていかれる。

『こりゃあ…回避に専念したほうが良いかね姐さん』

『誰が姐さんよ…何にせよ、3体揃われたら厄介だし私達でコイツを抑えるわよ』

『骨が折れる仕事ですね…ですがあちらにはサマナーとみゆきも居ますし…何とかしなければ』

『貴様等っ！話を聞いているのですかっ！ええいっ！これだから不浄の悪魔はっ！』

『何で戦闘中に説教されなきゃなんねえんですかよ。ああ？　タル・ンダっ!!』

『マカジャマッ!!』

攻撃力を落とし、同時に魔法を封じる作戦に入るオリアスとデイース。

流石に魔法封じは無効化されたが、低下魔法はしっかりと効いている為、これで一撃程度なら何とか耐えられる様になる。

話を無視された為に激昂するヴィクターが熱り立って襲い掛かるが、それは全員簡単に回避する事が出来た。

(こいつ…格下しか相手にした事無いのかしらね。そうでなければ戦闘中にあんな馬鹿みたいにペラペラ話したりしないし…付け入る隙は山の様にあるわ)

『皆散開しなさいっ！ 固まったらメギドラで一網打尽よっ！！』

『くっ！ ちょこまかとおっ！！ これならばどうですっ！ アロ
ーレインツ！』

上空から魔力で作られた数百を超える矢が降り注いでいく。

一本一本の威力は中威力程度でしかないが、流石に雨の様に降り注ぐ魔法の矢を避ける事は難しく全員が小さくはないダメージを受ける。

だが、この程度の威力ならば、デイースのメ・ディアラマで簡単に回復する事が出来る為、膠着状態が続いていく。

タル・ンダで攻撃力を下げられている以上、物理攻撃よりはメギド

ラで攻撃したい所なのだが動き回る4人に上手く照準を合わせる事が出来ないのだ。

回避力や防御力では何とか上回っている仲魔達だが、彼等の攻撃力ではヴィクターに対してダメージを与える事は出来ない為にこの状態のまま維持していくしかない。

『おらよっ！ もういつちょ！ タル・ンダアっ！！』

『ぐっぐっ…卑怯な悪魔共めっ！！』

『どうしよ…こいつレベル高いけど弱く思えてきたわ…まあ、倒す手段は無いんだけど…』

『もう少ししたら合体時期かね姐さんって、うわっどっ！？ 掠った、掠ったよオイっ！？』

メギドラの光が横を通り過ぎ冷や汗を流すオリアス。一撃で落ちる可能性もある為、メギドラだけには注意しなくてはならない。

ぺちやくちやししゃべりながら戦っているのは相手の冷静さを奪おうとする戦略の一つの為フェニックスも表立って怒る事は出来ないが、注意だけはしておく。

『馬鹿言っでないで集中しなさいっ！ 気を抜くと死ぬわよっ！』

『何故だ…！？ 何故誰も死なないっ！？ お前達程度に私は何を

梃子摺っているのですかっ!？」

信じられない という気持ちちがヴィクターの心を取り巻いている。

偉大なる大天使であり、ガブリエルから受胎告知の代理を受け継いだ程の実力者である自分が何故格下にここまで梃子摺っているのか彼には理解出来なかった。

今までの悪魔は自分の姿を見ただけで萎縮し、恐怖し逃げ惑っているだけだった。

たまに我武者羅になって襲ってくる悪魔やデビルサマナーも居たがその総てを圧倒してきたのだ。

その一撃はどんなに強力な悪魔とは言え確実に葬ってきたし、今の今まで苦戦と言う状況に陥った事は無かったのだ。

(だが…だがこれはなんだというのですかっ!？ 私が…私が格下に劣るっ!？ 私に大したダメージも与えられない雑魚に私が何故っ!？)

このレベルの悪魔なら何体も殺して来た筈、それなのにたった4体の悪魔如きに苦戦しているのが理解出来ないのだ。

しかしこれはフェニックス達の方からすればまったく逆の考えになる。

(弱イナ。単純二硬ク強イ『ダケ』デシカナイ。コノ程度ナラバ我々デモ抑エルダケナラバ余裕ダ)

大樹達ほどではないが、こなたに連れられたユルング達は自分達より遥かに格上の悪魔達と戦ってきたのだ。

今更単純に強いだけの敵に負けるほど、彼等は弱くは無かった。言わば踏んできた経験の違いと言えるだろう。

ヴィクターは確かに様々な強い悪魔を殺して来た。だがそれは何時いかなる時でも『自分より弱い』敵でしかなかった。

大樹達が戦ってきたのは大体において『自分達より強い』敵の事が多かった。ここに今の差がある。

ユルング達は自分達より強い敵との戦い方を熟知しているのだ。どうすれば殺されないか？ どうすれば持ちこたえられるか？

必ず勝つ必要は無いのだ、要は生き残ればいい。この場に縛り付けておけばいい。

そして明確な意思を持ち、戦い方を熟知している仲魔達にとって…『単純に強い』だけの敵は格好の相手ではない。

『もう一度っ！ マカジヤマッ！！』

『ぐうっ！？ くっ、メギドラッ！！…！？ メギドラ！

メギドラっ！！ 魔法がっ！？』

『いよつしゃああっ！ こうなりや楽なもんだぜっ！ んで積むかな タル・ンダ』

『せせこましいけどこれも戦略よね。 アギ・ダインツ！』

魔法を封じられて戸惑っている所に更に攻撃力を下げられ、火炎を全身に浴びるヴィクター。

勝つ事は無理かもしれないが、既に彼はパターンに嵌められてしまっていた。

戦いの最中、ヴィクターに気付かれない様に微かに移動していた為こなた達から離れた場所に居るフェニックス達。

陽動の役目は完全に成功していると言っていていいだろう。

（こっちは抑えたわよサマナー。残り二人…そっちはアンタ等で何とかして頂戴っ！！）

………

………

…

ヴィクターとフェニックス達が戦っている一方、此方は未だに動きを見せていない。

こなたとみゆき、じゃあくフロストとシルキーが前を固め、シスター・アンナが投剣を構えながら相手の隙を探している。

神父はアンナの少し後方に位置し、何時でも魔法が唱えられるようにしていた。

倒れている大樹はまだ目を覚まさないが、蘇生は既に成功している。大樹を護るようにアリスとアメリカが前に立ち、かがみはつかさを庇い離れていた。

「一番厄介な人間はこれで沈黙。後は貴方達だけです…まさかつかさ様を奪おうとするとは…あの時も邪魔をしてくれましたし…今度は許しませんよ」

「こつちは親友を拉致されてるんだから、助けるのは当然だよ…で？ 死ぬ覚悟は出来てるよね？」

「親友…？ お前達のような下賤な人間共が聖母様の親友だあつ！？ ぶざけるのも大概にしておけよあつ！？」

『ホ…あいつ怖いホ…』

「口調が…違いますね。二面性という奴でしょうか。何にせよ…つかささんを攫い壊し…佐藤さんを殺したその行い、許す訳には参りません」

「……………ちっ」

それぞれが戦闘態勢を取りつつ距離を縮めていく。

少しでも切っ掛けがあれば直ぐに激しい戦闘が始まるのだろっ…お互い相手の出方を見ている為に迂闊に動けないのだ。

そんな中皆方は一人今の状況の打開策を探していた。

（杏奈：間違いなく杏奈だな…やれやれこっこの形で会う事になるたあ…覚悟はしていたが結構きついもんがあるな。さてどうする？

天使は今の所どうにかなってるが問題はこっちだ。

一度撤退させる事には成功しているが肝心の佐藤大樹が戦闘不能で仲魔が呼べなくなってる上、足手纏いが多い。俺も流石に戦力にはならんしな…）

皆方のレベルは14。一流に近い戦士ではあるが一流ではないし、たかが14レベル程度では何の戦力にもならない事は自覚している。

彼の強さは人を使った指揮官的な能力であり、実戦は其処まで強くは無いのだ。

切り札もある事にはあるのだが、ここまで両方とも高レベルの戦闘では何所まで上手く行くか分からない状況である。

（いつそ俺が終つかさ嬢を人質に取るか？ いや、そうなると仲間

も敵に回しそうになるな…やれやれ…)

お互いに聖母であるつかさを必要としている以上。下手な真似をすれば殺すと脅しをかける手もある。

皆方にとっては終つかさはそこまで重要なファクターでは無い。最悪殺す事も視野に入れているのだ。殺せば聖母は居なくなり救世主は誕生しない。

そうならばガイアである自分にとって大幅なプラスになる事は間違いないのだから。

だが、そう簡単に事が成せるほど現状は甘くは無い。

(まさかトラポートが出来ないってのは盲点だったな。直ぐに他の方法で退却する方法もあったんだが、それより先に攻撃されるとは。見た感じ変身能力や普通の魔法は使えてる様だし、トラポートに関してだけ封じてるって所か。それを何とか出来ればいいんだが、くそっ、予想してしかるべきだったな)

この様に一定の魔法だけを封じると言う特殊な結界か機械は現在の所ガイアも知らない能力だった。

今の科学力や魔法力で、一定の魔法だけを封じると言う結界や機械を作るのは不可能とされているからだ。

やるとすれば全ての魔法を封じるマジックキャンセラーになるが、

その場合は全ての魔法が封じられてしまつと言うデメリットがある。本当は結界や機械等では無く、この部屋一帯のみヴィクターが強力なジャミング能力を掛けている為にトラポートが出来ないと言うのが実際の所なのだが。

魔法全てを封じているならば初めから変身能力も解除されるので直ぐに気付きそうなものだったが、扉は魔法で封印されているし、魔法を使うテンプルナイトが居た所為で問題無いと思っていたのだ。

(なににせよ、俺は出来る事をするかね…)

万が一の為にじりじりと後方に下がる皆方。この状況を打開する手の為に今はゆっくりと息を潜める。

「アーメンツ!!!」

神父の叫んだ言葉と同時に戦闘が開始された。

アンナにステータス強化の『ヒートライザ』を掛ける神父。全ステータスが大幅に強化された投剣がこなた達に降り注ぐ。

「そんなの…何度も受ける訳ないっしょっ!!!」

デスペラード!!

両手に銃を構え四方八方に連射するこなた。

襲い掛かってくる投剣を凄まじい勢いで叩き潰していく。何本か突き抜けて来た攻撃に対してはみゆきとじゃあくフロストが防御を受け持っている。

「殺^とったあつ！ 至高の魔弾^とコピーツ!!」

「させるかよおつ！ テトラカ!!」

轟音と共に吐き出された死の弾丸がアンナに命中する直前に光り輝く壁が現れ阻まれる。

一瞬膠着したものの、直ぐに貫通し突き抜けていくがその一瞬でアンナは回避行動を取っていた。

そのまま大きく跳躍し弾丸の様に投剣を投擲していく。

「しまっ!?!」

「防ぎますっ！ デスバウンドッ!!」

こなたの前に立ち小竜姫を轟音と共に振り被り衝撃破を作り出す

！！

放たれた衝撃破が降り注ぐ投剣の軌道を悉く逸らして行き、こなたは直撃を避ける事に成功した。

防御に成功した後、そのままみゆきは神父に駆け寄っていく。

「タル・カジャ！！　まずは支援系を落としますっ！　覚悟っ！」

「はっ！　やすやすとやられる訳無いだろうがっ！　ランダマイザッー！！」

「なっ！？　ち、力が…！？　きゃああああっ！」

タル・カジャで強化し剣を振り被ろうとしたその時、全身の力が極端に下がっていくのを感じるみゆき。

ランダマイザの効果によって全ステータスが最下限にまで下げられた彼女など神父にとっては雑魚でしかない。

支援系とは言え彼もまた上位の能力者なのだ。アンナが使っている武器と同じ投剣を全力で投擲する。

胸と腹に剣が突き刺さり、その衝撃で奥の壁まで吹き飛ばされるみゆき

「あ……っ……」

胸に刺さった剣が致命傷となりそのままみゆきは死亡した。

「み、みゆきいいーっ!？」

「みゆきさんっ! くっ…ランダムイザって何さ…かなりやばいかもね…アメリカちゃんみゆきさんの蘇生お願いっ!」

「あ、あう、了解なのですよっ!」

「させると思いますかっ!？ 死になさいっ!」

アンナがアメリカに向かって投剣を投擲しようとするが、其処に銃弾の雨が降り注ぎ行動を阻害する。

それを見たアメリカが直ぐにみゆきの場所まで移動し、突き刺さっている剣を引き抜きサマリカームを唱え始めた。

「そつちこそさせると思ってる？ じゃあくフロストちゃん！ 絶
対零度ッ!」

『凍りつくホーっ!』

総てを凍て付かせる青白い死がアンナに向かって降り注ぐ。だが、その氷は総てじゃあくフロスト向かって跳ね返っていった。

彼女の目の前には結界　マカラカーン　が張られていたのだ。

アンナを襲う筈だった絶対零度はじゃあくフロストにそのまま跳ね返る…が、そもそも氷属性反射のじゃあくフロストにはダメージにはならない。

「私が居る事を忘れてもらっては困るなあっ！　異教徒おおっ！」

「くっ！」

（まずいよ。前衛だったみゆきさんが死んでるし私とじゃあくフロストちゃんだけじゃ流石にきつい…ここはお母さんと呼ぶしかないかな）

アリスは大樹を護らなければならぬし、かがみもつかさを護っている。

皆方は役に立ちそうも無い、状況は最悪だった。

しかし泣き言などは言ってもらえない、こなたは気を取り直しかなたを呼ぶ為に意識を集中させようとする　その時…

「呪われよ…呪われて呪われて呪われる。呪によって汝は滅び、滅びた後も呪によって苦しみ抜け。呪われ嘆き脅え…そして死ねっ！

！　憎悪真言！」

神父に向かって黒い骸骨の様な霧が襲い掛かる。

直ぐにマカラカーンを唱えて迎撃しようとしたが、その黒い骸骨は結界をすり抜け神父に直撃した。

「あががっ…こ、これは…呪いかっ！？ おのれ…貴様あつ！」

「神父様っ！ 今解呪をつ！」

「私の事は気にしてはいけません！ 今は異教徒をつ！！」

「え…あれは…？」

「またあれ呼ぼうとしたでしょ…馬鹿なんだから」

「か、かがみ…？ つかさはっ！？」

かがみがやれやれと言った表情でこなたを見ていた。

振り向くといつのまにかつかさは皆方が護っている。かがみはつかさを皆方に任せて援護にやってきていたのだ。

「それは後よ。みゆき…大丈夫なの？」

「アメリカちゃんのサマリカムなら平気だよ。問題は大樹君とみゆきさんが居ない状況で戦わないといけないうって所かな…所でかが

みんは前衛になつたとか？」

「んな訳ないでしょ。バリバリの後衛よ」

「そつか…期待してるよ？ かがみんの魔法」

「ええ、たつぷりと呪ってやるわ」

「おお…かがみんが黒い…… よっし！ やられた分はやり返すっ！
！」

「おうさっ！」

かがみ自身、今も尚人を殺す事に、殺される事に抵抗感が無いと言えは嘘になる。

だが、目の前で親友が殺され…蘇生は可能だが。大事な親友が自分の為の為に戦っている姿を見て妹可愛さにじつとなどしていられなかった。

実力は大いに下かもしれないが、それでも彼女は友達のためにその力を振るう事にした。

「何とおぞましい術を…貴様はそれでも人間なのですかっ！！」

「私だつてこういう術が使えるなんて思つてもなかったわよ。妹が攫われて神様を憎んだら何時の間にかね。ある意味ではメシアのせいなんじゃないの？」

「メシア教を愚弄するなあっ！ 死ね邪悪共っ！」

『そんな事言われちゃ…いつまでも後列でメソメソしてる訳にもいかないじゃない… 真理の雷ッ！』

目を覆うほどの雷撃が降り注ぎ投剣を阻む壁となる。

「アリスちゃんっ！！」

『大樹さんの様子も落ち着いてきたし、私も参加するわよ。それにしても結構ななんとかなるもんねえ…』

「まあ、今の所不意打ちでの死亡1と、通常死亡1だもんね。相手ノーダメージだけど」

「私の魔法が命中したじゃない…」

「あれで戦闘不能になるなら苦労しないよお」

こなたの吹き通り、神父は軽いダメージしか受けておらず呪いも既に回復している。

ダメージによって動きが鈍い筈のシスター・アンナもヒートライザの効果によって全ステータスが最大限に上昇されているのだ。

それでも此方がこの程度の被害で済んでいるのは、相手に爆発的な

火力がない所が起因しているのだろう。

『何にせよ…とりあえずはブーストね。 ラスタキャンディ』

「おーっ、体が軽いつ！」

「私もやりますか。 マル・カジャー!!」

『メ・ディアラマ。 戦いはこれからですっ!』

『僕も頑張るホッ!』

強化を終え再び3人と2体で隊形を整える。

「シスター。攻撃は総て任せますよ、思い切りやりなさいっ！」

「はいっ!! 終わらせましょう… 刹那五月雨撃ちっ!」

『何度も同じ手ばかり喰らう訳ないでしょっ! 吹き飛ばすついでに死んじゃえっ! メギドラオン!!』

眩い極光が投剣を飲み込みそのまま二人を覆っていく。

同時に響く爆音が扉を吹き飛ばしビルを揺るがせた

……

…
…

大樹の心の中

《目を開けなさい我が現し身よ》

(……………う…うこは)

《よお？ 目え覚めたかよ？ ったく情けねえな？ 俺の半身なんだからもう少しシャキっとしろや》

《仕方ないですよ。バクヤさん降ろしてたならともかく私でしたからね》

(リュウキツコウシュ…クー・フリーン。はいよるこんとんも)

完全に目が覚めると其処は何も無い空間だった。

いや、何も無い訳ではなく、単純に暗い場所だったのだが…

キョロキョロと辺りを見回すと大樹のペルソナが殆ど揃っていた。
居ないのは…そう、ナナヤだけだった。

《…たくよお。お前死に過ぎじゃボケっ！ お前が死ぬ度にハラハラする俺の身にもなってみやがれっ！！》

(悪いとは思うけど、僕は所詮普通の人間なんだから其処まで期待されても困るよ…横島)

《そりゃ甘えだろっがっ！ たかがテレポート出来ない位で焦るなよ。文珠とかあっただろっに》

(……そう言えばそうだ…僕はまた変な所でミスったか…)

色々経験して来たとは言え、大樹はそもそも普通の男子高校生だったのだ。

生温い世界で生きてきて、行き成り死が間近にある世界に入り込んでもほんの数ヶ月で完全に成長するかと言えば否だろう。

どれだけ悪意を知っても、どれだけ経験してきたとは言えそれ全てに完全に対応出来る訳が無いのだ。

生まれてずっと戦ってきたようなクー・フリーンや横島のような異質な体験を長く経験してきたなら兎も角、ほんの数ヶ月死を見てきた程度で人間が完成されるなら、戦争に行っている人間など全て超人だろう。

どれだけ自分が成長した、レベルが上がったと言っても出来無い物は出来ないし、突然の出来事には困惑してしまうものだ。

だが、その様な甘えが通用する様な世界に生きている訳では無い為大樹も今回の事を反省する。

反省したとは言えそれが完全に身になるかと言えば無理に近いのだが…

(成長したと思っただけど、僕は所詮、僕のままだな)

《人間は成長が早い…ですが、だからと言ってほんの数ヶ月で1から10まで覚えられるかと言えば否でしょう。今回の事は教訓になさい》

(ありがとうリュウキツコウシユ)

《てか今度はリュウキツコウシユ様かつ!? 何でお前のペルソナは可愛い子が多いんじゃないっ! 一人くらい寄越せっ!》

(相変わらずだね…外に居る小竜姫が聞いたらどうなるか)

《うぐつ…悪いな。俺の事はまだ知られたくねえんだよ…その為に
思考誘導させてもらった》

やはりか、と大樹は理解する。

小竜姫に横島の情報を隠そうとした時に感じた違和感の正体は横島
による思考誘導だったのだ。

（今は知る必要ないって事か…厄介な事じゃなければいいんだけど
ね）

《お、おう…そ、それよりもだっ！ いきなりまずい事になってる
ぞ》

（外の…状況だね。直ぐ聞かせて欲しい）

《ああ、まずはな…》

外の状況を聞き、まずい事になったと頭を抑える大樹。

既にみゆきが死亡し、こなたとかがみ、アリスが何とか抑えている
のが現状だった。

じゃあくフロストとシルキーはこなたを庇い既に死亡したらしい。

あちらもアリスのお陰でまだこなた達を殺す事は出来ていないが、

このままだと時間の問題だろうと言う状況だ。

(で、ここは例によって時間が止まると。まずいな…これは僕が戻って仲魔を呼んだ所で勝てるのか…?)

《其処で俺が来たって訳だ。まあ、一人は話すら聞きやしなかったがな》

(とりあえず横島。金文珠を使えるようにして欲しいんだけど…正直僕がレベル上がるより前に死ぬ様な気がしてきた)

《悪いが封印かけてるんでそりゃ無理だ。俺を呼び出せるようになれば開放出来るんで頑張ってくれ》

(…人生其処まで上手く行かないか……で？何か方法があるようだけど？多分リユウキツコウシユを一度だけ本来の力で呼び出せるのを期待してるんだらうけどそれだけじゃ無理じゃないかな…?)

《俺がそんな程度の話で呼ぶ訳ねえだろ。今回はな…》

横島の話聞いていく度に驚愕する大樹。

それはペルソナの理論を根底からぶち壊す様な方法だったからだ。

しかし…確かに出来る可能性はあった。

《一人でダメなら皆でボコる！以上っ！！っー訳で俺とお前の

力を使ってペルソナ全員召喚って荒業で行くぜ》

(いや…それ僕の負担がやばいんじゃない？)

《何度もやれば死ぬかもな》

(爽やかな顔して言うな…嬉しそうだな…おい)

《まあ、男じゃなあ。俺も思うぜ?》

クー・フリーンがそれに同意し、良い感じに逃げ道が消えていく。だが、横島の言う通り一体でも強力なペルソナを一斉に召喚出来るのは大きいアドバンテージだろう。

ミックススレイドも連続で使えるのもあり、この場を何とかするには最適の方法だった。

(どつちにしても…それで行くしかないか。出来るなら便利な能力だしね)

《だな。まあ、無理はいつもの事だろ? だが、出来るようになったからって連発はすんなよ? さっきも言ったが連発すれば死ぬかな? 蘇生も無理だぜ? 魂の消滅みたいなもんだし》

(僕だって死にたくはないし、出来る限り使わないようにするよ…やっても不良の時に使う位かな)

《一日に二度かよ…まあ、ぎりぎり大丈夫か…》

《では参りましょう我が半身よ…この戦いを終わらせる為に》

バクヤとカンシヨウが大樹の前に立ち強く頷く。

周りを見渡せば誰もが大樹を優しい瞳で見守っていた。

(行こう…これ以上死んでなんかいられないしね…)

大樹の魂が徐々に覚醒していく……………

必殺技：ペルソナ・オーバードライブを覚えた！！

ペルソナ・オーバードライブ

心に宿したペルソナを一部を除き、全てを召喚する技能。

召喚されたペルソナは一定時間存在し続け、ともに戦う事が出来る。

但し召喚中使用者は動く事が出来ず、絶えずMPを消費する。

一定時間立つか、MPが0になった時この効果は終了する。

魂を凄まじく酷使用する為、連続で使用すると死亡する。

どんなに使用しても一日二回が限度。

何度も使えるスキルでは無い為…普段は封印されている。

…
…
…

「ちつくしょー…流石に攻撃力が足りないか」

「はぁ…はぁ…」

『メギドラオンまで耐えるって何者よあいつら…』

アリスのお陰で即死は何とか防いでいるが、回復魔法や低下魔法、強化魔法に結界魔法まで使いこなす神父のせいで決定打を当てる事ができない。

そして時間を掛けてしまえば総合的にレベルの低いこなた達が疲弊

するのは当たり前だった。

ほんの数分間の戦いの中で、アリスを除く二人のHPとMPは限界まで磨り減っている。

大樹は未だ目を覚まさず、みゆきもダメージが多すぎる為に蘇生に時間が掛かっているせいでアメリカも戦闘に参加する事が出来ない。対して神父とアンナはまったく疲れた様子を見せず、余裕の表情でこなた達を見据えていた。

「侮ってましたよ貴方達を。まさかここまでやるとは…ですがどうやらそれが限界の様子。私達の有利は変わりませんね」

『うっさいっ！ 何があってもアンタ達を皆殺しにしてやるわよっ』

「うるせえよアバズレが。神の意思すら理解しない愚か共が、舐めた口聞くんじゃねえっ！！」

アリスの言葉にも先程と違って力が無い。

最上級の魔法を連打して居たせいでMPが枯渇しかけているのだ。メギドラオンも後1〜2回撃てれば良い方だろう。

（さって、どうしようかな。大樹君も蘇生したしある程度は冷静になっってきたけど…うーん、このままじゃやばいなあ…）

未だヴィクターと戦い続けている仲魔の疲労も限界に近い。

既にじゃあくフロストもシルキーも殺されCOMPに戻されている。

「…これで総て終わらせましょうっ！ 死になさいっ！ 異教徒共
」！」

アンナが止めとばかりに全力で投剣を振り被ったその時

「来い！ ペルソナアッ！！」

反撃の産声上がる ！！

魔界魔法録

テトラカ 魔界魔法・結界の種類。一定までの物理ダメージの威力を削る事が出来る結界魔法。

威力以下ならば総てのダメージを無効にする。
上位魔法：テトラカーン

いい加減に佐藤君は成長しないのかとコメントを頂きました。

あはは：ちよつと凹んじやまいますが仕方ないのです、まだまだ私
が表現力不足なのが問題ですねえ。

確かに毎回同じパターンで死んでますし、今回も覚醒はしませんが
した在必殺技？は覚えましたからねえ…

まだまだ実力が無い弊害ですね…もう少し上手く書きたいのですが、
全然だめのようにです。

少し浮かれていたかもしれませんね。

後、佐藤君焦りすぎではないのか〱と言われました。

でも…実際に生きてきてきてほんの数ヶ月程度で何でも完璧に出来る人
間はいないと思うのですよ。

もしそれが出来るなら誰もがヒーローになれますしねえ…

未だに良く死ぬし、悩むし、弱いし、ダメダメな佐藤君ですがそれ
でも頑張りますので、良かったら見てあげてくださいね。

チートの部分は消したほうがいいのかなあ…？

今日早めに休みます…やっぱり私は撃たれ弱いみたいです…にやは
は…

でもでも、この指摘を受けてもつと頑張らないとですね。

だめだめな白亜ですが、これからも出来る限り頑張ります。
ではでは、です。

あ、でも。このようなコメントを貰える以上は頑張れっ！ って意
味なのだと思ってますし。嬉しいのですよ。

良ければこれからもいろいろコメントを頂けると嬉しいです。

どうでもいいこと

焼肉。美味しい焼肉を食べたいなあ…

お給料日まで後5日、後ちよつとなのです。

死にかけるほどお仕事してきたので期待が持てるのですよー。
でも、それまではつつましく生きるのです。ほろほろほろ。

私は牛タンが好きですね。塩胡椒であっさりめが好きですよ。
タレをつけて食べるお肉は余り食べませんねえ…

皆さんはどの様なお肉を良く食べますか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するか否かは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ？キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位＝自動的にメインコミュ

2位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント
4位＝一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回＝1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常＝1票に付き『1票』基本はこれ。

優先＝1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優＝1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：59票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：13票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダツキ：54票（手助けフラグはON エンディングフラグ

まで後1）

通常：アリス：56票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：10票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：16票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：74票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：41票（????????????）

アンケート資格の変更

1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある

2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く
3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）

3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1～3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談）

Continue 113 〱 何処までも理不尽な世界で???) (前書き)

ペルソナ達の蹂躞が始まります。

うーん。上手く戦闘描写が書けません…更に言つとこれからちょっと出かけるので途中で切りました(汗

少しでも楽しんでもらえると嬉しいのですよー…

それは異様な光景だった

その場に居た誰もが目を奪われ、そして驚きに目を見張る。

突如として現れた悪魔や英雄達のその威容に気圧されたと言っても良いだろう。

そう…それは異様な光景だったのだ

槍を持つ稀代の英雄がシスター・アンナの前に立ち塞がりニヤリと笑みを零す。

今直ぐにでも飛び掛って行きそうな程の闘気が全身から溢れ出している彼の英雄　クー・フリーンがゲイ・ボルグを構えていた。

百戦錬磨と言っても過言では無い、彼女ですらその気迫に完全に飲み込まれているのが分かる。

『よお？　弱い者苛めするよりは俺と楽しもうじゃねえか。こいつ

でな？』

「貴様は……くっ、完全に蘇生したと言うのですかっ！？ ですがもう遅いっ！ これだけの騒ぎを起しているのです。此方に向かっている百を超える数の同胞達を貴方達程度の戦力が如何にか出来るとでも？」

『なあに。その程度だろ？ 高が百程度。アンタの様なメインディッシュに比べたら味気ねえが丁度良い運動程度にはなる……って既にアイツ等が向かってるか忠臣だねえ』

獐猛な笑みを浮かべ隙無く槍を構えるその様は、正に神代の英雄そのものだった。

「だ、大樹君のペルソナ……？」

『大樹さん回復したんだっ』

『おうよ貧乳の嬢ちゃん。もう安心だぜ？ ここは俺に任しておき……ってそんなに睨むなよ？ 可愛い顔が台無しだぜ？』

「むうう……これが大樹君のペルソナじゃなきゃぶん殴ってた所なのに」

『ううう、それほど小さくないもん……』

「佐藤君生き返ったんだ……って、あれ……？」

かがみが後ろを振り向くと、苦しそうに蹲っている大樹が見えた。

そして彼を護るようにしてダメージを受け後列に下がっていたパールヴァティとカンシヨウ、バクヤが剣を執り立ち塞がっている。

『サマナー様：御気を確かにですわあ……』

『パールヴァティさんっ、一緒に回復をっ！　　メ・ディアラマツ
っ！』

魂が引き裂かれ食い千切られて行くような苦痛に身動きすら取る事が出来ない大樹。ペルソナの一斉召喚は彼に凄まじい激痛を与え続けていた。

フォルトウナとパールヴァティが回復魔法を唱えているが、ダメージを受けている訳ではないので、その苦痛は終わる事無く大樹を苛んでいく。

ミックスレイドの時とは違い、複数体のペルソナを強制的に呼び出すと言う本来のペルソナ使いから逸脱した行為は、代償として魂を削り取り寿命を奪い去っていた。

横島が心の海で制御していてもこれだけの苦痛なのだ、何度も使える能力ではないだろう。確かに命を削る能力の名に恥じないデメリットだった。

気を失えばペルソナは直ぐ消え去り状況はあっという間に元通りに

なってしまう。自らの意識をしつかりと保ちつつ、立ち上がることは出来ないがこなた達に少しだけ微笑みを浮かべて見せた。

少しでも気を抜けば気絶してしまう程の苦痛の中では流石に会話する余裕など無かった。

「大樹君…？ ちょっ、回復は出来てる筈なのに…？」

『まあ、本来出来ねえ事を無理矢理やつちまってるからなあ…魂を削られるような苦しみに耐えて気絶せずに済んでるだけ御の字だろ』

「んな…直ぐにやめさせないとっ！ って、こなた何してるのよっ！？」

大樹に駆け寄ろうとしたかがみをこなたが引き止めた。

「…だめ…かがみ。そんな事したら大樹君がやった事が全部無駄になっちゃうよ」

「こなたっ！？ ……アンタ……」

銃を構え前を見据えるこなた。その表情は険しく、良く見ると唇から血が零れている。

彼女も出来るならば大樹を止めたい。だが、今の状況がこちらの有利になっているのは大樹が能力を使っているお陰でしかない。

ならばこなたに出来る事は敵を殲滅し大樹の能力を1秒でも早く終わらせる事だった。唇を噛み切り、痛みと共に駆け寄りたくなるのを我慢しアンナに向け銃を構える。

そしてその隣には

『漸く出られたぜ、たくよお…まあ、ここからはオレ等も参戦だ。そつちは100人以上居るんだろ？ 今更数体悪魔が増えても文句はねえよな？』

『ヒョーヒョーヒョー。結局はこうなったのう。なればこやつ等を皆殺しにすれば後顧の憂いは断てるじゃろ』

『はっ、相手が神の狗とは丁度良い。我が魔王の力存分に味わうが良いっ！』

『皆………うんっ、大樹さんが頑張ってるんだから。私達がアイツを殺すだけだねっ！』

ペルソナを呼び出すと同時に召喚した大樹の仲魔達が其々立っていた。

COMPの中で戦う事が出来ずに歯痒い思いをして居た分、全力で相手が出来るとキンキとオーカスが前に立つ。

グクマッツは何時でも攻撃や支援が出来る様に中衛の位置を確保していた。

『あー。こいつ一人にこの数は過剰……って訳でも無いが。オレ達はあの天使に回ったほうがいいな』

『ふむ……大天使程度で我のこの欲求不満を満たせるかどうか分からんがな。良かろうっ！！』

『うわあ……オーカス私の半径100万光年は近寄らないでね』

アリスが心底嫌そうな表情でオーカスを見る。

『そつちの意味と違うわっ！ くそっ、行くぞっ！！』

『ヒョーヒョーヒョー。さて、暴れるとするかのう！』

言うが早いかキンキとオーカス、グクマッツはこの場をクー・フリーンに任せヴィクター達が居る場所まで駆け寄っていく。

既にリュウキツコウシュは神父の方に向かっていているし、オオミツヌとはいよるこんとん、ヤタガラスは既にこの部屋には居ない。

となれば大天使は自分達で獲ろうと考えたのだ。力量や経験的にこの3人が加われれば如何に大天使とて苦戦するだろう。

「行かせませ……………っつ！！ 速い……！？」

投剣を投擲しようとしたその時、全身を覆うような殺気に身を翻しそのまま投剣を薙ぎ払う。

鈍い金属音と共に自分の目の前で剣に防がれる槍の穂先。凄まじい勢いで押ししてくるその腕力は正に悪魔か英雄そのものだった。

本来投擲用の投剣では耐久力が足りずピシピシと輝が入っていく。

完全に碎けると同時にその衝撃を利用して後方に飛び跳ねるアンナ。その表情は先程とは違い余裕が無い。

『おいおい余所見してるんじゃないよ…？ 油断してると…死ぬぜ？』

「ちいつー！！」

一瞬で突進をかけたクー・フリーリン。先程のは牽制を兼ねた挨拶代わりの様なもの。

此処から先は相手を殺す為に全力を尽くすだろう。

英雄達とシスター・アンナの戦いは激化する

……

……

…

正に異様な光景、と言つべきものだろうか

「な…なんなのだ…なんなのだこの悪魔共はああああああっ!？」

メシア教徒が絶叫を上げ、そのまま息を引き取る。

既にもう半数近くの同胞や天使達が殺されていた…それもたつた3体の悪魔にだ。

石のような肉体を甲冑で包んだ神　オオミツヌがその拳を振り上げる。

巨体を神通力か何かである程度まで抑えているが、それでもその攻撃力はなんら遜色無く、無慈悲なまでに教徒を叩き潰していく。

『 原初の暗黒ッ！！』

銀髪の少女が叫ぶと同時に辺りが真っ暗になり、そして爆ぜていく。何も無い闇の爆発に巻き込まれた人間は、まるで何かによって其処を抉り取られたかのようにポツカリと穴が開き絶命していった。

更にその爆発は徐々に大きくなり、容赦無く命を貪りつくす。

「なんと言うおぞましい魔法っ！？ 封じよっ！ マカジャマッ
！！！」

『おおっ！？ しかーし甘いつ！ ベリーベリーすいーと甘いですよっ！ これ私さんの親友のセリフですねっ という訳で宇宙CQC連続コンボ！ 原初の暗黒！！』

魔法封じすらものともせず、銀髪の少女 いや、はいよるこんとんが目にも留まらぬスピードで駆け抜けていく。

同時にその後ろから沸き起こる闇の爆発が天使も人間も問わず飲み込み消滅させてしまう。だが、それだけでは終わらない。

一度使えば威力を1段階上昇させると言う原初の暗黒。既に4〜5回連続で使っている為、威力が既に甚大級になっている所為で周りの被害が半端なかった。

恐らくはこの中で一番敵を殺しているのは彼女だろう。

『さあて。次は誰ですか。この私の必殺技パート21億3254万1264を受けて耐えられる人が居るとは思えませんが』

「ふざけるなああつ！ 同胞の仇っ！！ ジオンガッ！！」

テンプルナイトが全力で己の持つ最大の魔法を浴びせるが、彼女はまったく堪えた様子も無くその場に立っている。

『うおうっ！？ ちよいとバチつと来ましたね。ですがこの程度ではダメージはありません。英語で言うならノーダメージ』

「な、ならば死ぬまで打ち込むまでだつ！ ジオンガ！」

「援護するぞ同胞っ！ ガルーラ！！」

『私も参りましようっ！ ハンマ！！』

雷撃と疾風、そして聖なる光がはいよるこんとんに全て直撃する。

「気を緩めるなっ！ 撃て撃て撃てえっ！ ジオンガ！！」

「アギラオッ！！」

『これで止めです！ ザンマッ！！』

立て続けに魔法が降り注ぎ、粉塵があふれかえっていく。もうもうと煙が巻き起こる中天使達は勝利を確信し

『これでまずは一体……いやあああああああああ
あつ!? 私の手がつ!? 手があああつ!?』

『うーん。この程度じゃそんなにダメージ無いんですよ。では、同じ技ばかりで恐縮ですが。 原初の暗黒!!』

『ヒッ!?』

先程より巨大化した暗黒空間が、その場に居たあらゆる物を包み込み消し去った。

残ったのは抉られた内装と削り取られた地面、そして何故か不思議なポーズを取っているはいよるこんとんだけが存在している。

『いえ、本当は拳で熱い戦いと思ったんですけどね? いかんせん数が多すぎじゃないですか。という訳でさっさと決めようとして居ませんねー』

歩く大災害の様な少女にメシア教徒達は神の慈悲を…と神に祈るしかなかった

「ひい…ひいいつ!? 来ないでっ!? 来ないでえええええええええっ!?」

『ケエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

漆黒の鴉が三本の足で逃げ惑う女性教徒を鷲掴み…握りつぶす。

臓物や脳漿を撒き散らすその様は正に地獄の使者と言っても過言ではないだろう。

高らかに啼く漆黒の死の運び手が再び獲物を探しに飛び立つ。

(フム…ヤハリ横島殿ノ言ウ通りデアツタカ…コノ数ヲ、アノ者達ト一緒ニサセルノハ悪手ダナ)

ヤタガラス達3体のペルソナは、大樹が目覚める前に横島から自分達に頼み事をされていた。

多分アレだけ騒げば他の奴もやってくるだろ？ そっちはあんだ達に任せたいんだけど良いか？

そして予想通り、かなりの数のメシア教徒達が聖母の間近くにやって来ていた。

内部に居る大樹が心配ではあったが、今は彼等を一人たりとも中に入れないようにするのが彼等の役目なのだ。

「撃ち落せえええええっ！ 神の聖なる弾丸を受けよ悪魔っ！！」

幾つもの弾丸がヤタガラスにめり込み、小さくないダメージを負わせる。

弱点である物相性の攻撃は程度が低いとしてもそれなりにダメージになっていく様で、これを連続で喰らい続ければ存在を保つ事は出来ないだろう。

「ムッ…流石二弾丸ハマズイナ…恐レヨ！ 恐レヨ！ 恐レヨ！！
世界ノ終末ヲ聞キ絶望セヨ！ 終末ノ予言！」

「なっ…ああ…うわあああああっ！？ 嫌だっ！ 嫌だっ！？
嫌イヤイヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ……………」

「ど、どうしたんですかっ！？ って…ああ……………そ、そんな…聖母様が死…いや…いやあああああっ！？」

「ぎゃあああああつ!?!」

「うげっ…!」

オオミツ又の一撃がテンプルナイト数人を纏めて絶命させる。

防御する事も回避する事も出来ず、彼等は立ち塞がっては殺され、立ち塞がっては殺されていた。

その巨体はこの場に合わせるように小さくはなっているがそれでもその威風は失われる事は無い。

拳を振り上げる度、剣を振りかざす度血飛沫やマグネタイトが舞い命の灯火が消えていく。

「ええいつ、神の威光の前に滅びたまえっ! アーメンツ!」

『無駄だっ! その程度の軟弱な攻撃で我を倒せると思うなっ! おおおおっ! キルラツシュツ!』

「なっ!?! ギゃあああああつ!?!」

膺切りにされ絶命するテンプルナイト。後ろではメシア教徒達が銃を持ち射撃を続けているが物属性に耐性を持つオオミツ又には蚊が刺したほどのダメージも無い。

その防御力は見た目通り高く、彼等程度の攻撃力では足止めする事

も叶わない。

オオミツヌが動き回る度に、天使の、メシア教徒の、テンプルナイトの死体が作られていく。

怒れる巨神を止める術を彼等は持っていなかった

直ぐ傍でははいよるこんとんが一人の女性教徒を捕まえていた。

『さあて…痛くないですよ痛くないですよ？ 寧ろ気持ち良いかも
しれませんっ なあにちよこつと脳を弄らせてもらっただけですっ
て、ちよつとだけ、ちよこつとだけですから 』

「いやっ、いやああああああっ！？ あ…ああ…あひゃ」

『はい、人体実験開始』 ふむふむ。こうすれば魅了と言うか
洗脳も可能ですね、 英語で言うならブレインウォッシュ。これ
で無い事無い事他のメシア教徒に伝えてもらいましょっ！』

両手から伸びる細長い糸の様な物が鼻から入り込み脳を自分好みに
改造していく。

脳にまで達した糸を巧みに操りつつ、ふんふんと鼻歌を歌いながら
楽しそうに特殊な機械で脳を弄りだすその様は無邪気な悪魔そのも
の。

こうやって数人に洗脳を施し、メシア教徒の暴動を抑えようとしている……らしい。

もしかしたら単純に攻撃している可能性もあるが……それでもこれで10人近くのメシア教徒を完全に洗脳し支配下に置いている。

「ば……ばかな……我々は神の尖兵……何故、何故だ……」

『じ……邪悪なる悪魔共の策謀ですっ、神の子よ恐れてはなりませんっ……！っ……！っ……！っ……！』

アークエンジェルが剣を構え突撃の構えを取る前にヤタガラスの足が捉え握り潰す。

抵抗する事も出来ずにアークエンジェルはそのままマグネタイトとなつて消滅した。

余りにも圧倒的過ぎる戦闘力の差に天使達は完全に脅えていたがそれも仕方の無い事だろう。

決してメシア教徒やテンプルナイト達は弱くはない。それなりに場数を踏み、この場所を護るようにと神父に選ばれる程の戦士達なのは間違いないのだ。

しかしメシア教徒とテンプルナイト、そして天使達はどんなにレベルが高くてでも15レベルにすら達していないのが現状である。

シスター・アンナやメシア教神父、佐藤大樹達はハッキリ言えば異端…もしくは英雄クラスの能力者なだけであり、この世界の人間の平均で言えば彼等は熟練の強者なのだ。

だが、ペルソナの中では中堅レベルの彼等とは言え平均レベルは30〜40の存在、彼等にとっては相手にした事も無い大悪魔に他ならない。

勝てる見込みは薄い…だがそれでも彼等は聖母を護るべく、目の前の障害に立ち向かっていく。

その姿は敬虔な信徒の見本と言っても良いだろう。

『思想の違いとは言え、大事な物を護ろうとするその心掛けは立派だ。だが…お前達はそもそも、根本的な所を間違えているっ…!!』

「うおおおおっ！ どけえっ！ 悪しき悪魔よおおっ！ マハ・ラギッ！」

「絶対に聖母を護るのだっ！ ハマオンツ！！」

火炎と聖なる光がオオミツヌに命中する…が、やはりこの程度のダメージではオオミツヌが倒れる訳も無く、ハマオンはそもそも無効化してしまう。

見た目からは分かり難いが、彼は悲しそうな表情をしてメシア教徒達を見つめていた。

(宗教に狂う事無く真つ直ぐ物事を見つめる事が出来れば…いや。彼等は救いと安寧を求め過ぎてこうなったのだ…せめて安らかに眠らせてやるのが慈悲か)

『お前達は既に宗教本来の意味を逸脱し、目的と手段を履き違えておるっ！ 汝等全員、来世からやり直せいっ！！ ヒートウェイブッ！！』

慈悲の一撃が全てを薙ぎ払い、斬られたと同時に彼等は摩擦熱で焼き尽くされていく。

その衝撃は真後ろにまで影響し衝撃破となり、後方に居たメシア教徒と天使達を纏めて吹き飛ばした。

『だめじゃないですかっ！ オオミツ又さんっ！ そこは拳で殴りつつ『まっ！』って言わないと…！』

『汝はもう少し真面目にやれぬのか…情けない…』

『言ウダケ無駄デアルヨおおみつぬ殿。マア、ソレデモコノ中デハ一番動イテイルノダ。頼リニシテイルゾ？ 我々ニ八時間ガ無イノダカラナ』

『とと、そう言えばそうでしたね。このままじゃ私さんの危険がピンチでマッハ。さくさくっつと終わらせましょっつ！』

ペルソナ達の蹂躞は止まらない

神父VSリウキツコウシュ!

シスターVSクー・フリーン+こなた達!

ヴィクターVS大樹とこなたの仲魔達!

メシア教徒達VS新規ペルソナ3体!

で、大樹は動けません(笑) でお送りしました。

良い感じに寿命を削り取っているようです。

連続で使う事も可能ですが、物凄く命を奪われそうですねえ…

メシア教徒達に無双しているペルソナ達ですが、流石に次回の2人はそう上手く行かないですよ。

まずはどっちから表示しようかなあ…

どうでもいいこと

お給料日まで後4日! 待ち遠しいのですよっ!

何買おうかなあ……あれもいいなあ、これもいいなあ…

うーん。そろそろ新しい服も欲しいなあ…くっ、直ぐにお金がなくなってしまうゆ…

弟と一緒にレストランも行きたいし…おおお…貧乏が憎いのですっ!

レストラン、レストランと言えば色々な物がありますよねえ。

私はパスタ類を良く頼んだりしますが、皆さんは外食時良く食べるものはなんですか?

ちなみに弟は麻婆豆腐が大好きです

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

1話にまとめて短くするか、3話に分けて長くするかは決めてません。

正し、信頼度が上昇するかどうかは50票以上とった場合にしますね。それ以外の場合は単純なサブイベントです。

コミュ? キャラ一人追加です。とは言え彼はフラグが立つだけです。

2位くらいに残ればフラグは構築する予定です。

ちなみにゆつきーは次回1〜3位に入ったらフラグがたちます。

コミュイベント

1位⇨自動的にメインコミュ

2位⇨一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位⇨一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

4位⇨一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回＝1票に付き『1票』 正し、自動的にサブコミュが切捨てになる。

通常＝1票に付き『1票』 基本はこれ。

優先＝1票に付き『2票』 連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優＝1票に付き『3票』 現在該当者無し

通常：こなた：67票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：14票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダツキ：62票（手助けフラグはON エンディングフラグ

まで後1）

通常：アリス：62票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：11票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：20票（???なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：84票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：49票（????????）

アンケート資格の変更

- 1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある
 - 2：最低でも、1行でもいいです。お話の感想を載せて頂く
 - 3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）
- 3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承ください。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1～3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。
信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1〜3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談）

しよぼん……今日はちよつとテンション低めです。

大した事では無いのですが。今日は何の気無しに「私のお話はぐぐつたらでてくるのかなー?」と見てみた所。

「おー、あつた あれ……これは……? おおう……」

あつたのですが、ちよつとダメージを受ける部分がありました。

まあ、確かに風呂敷広げすぎで畳む気あるのかーと言われれば、

凄いとんでもなくなってますからねえ……

後は、前書きと後書きが長いっ! って書かれてました……自重するべきかなあ。

どうにもメンタルが弱い私です。

更にはそれを自ら見つけて来て凹むんだから始末に終えませぬー

(笑)

毎日行き当たりばったりで書いてますから(現時点でもプロットな

ど無し)え

話を加速したりするべきかなあ

って、ここに書くとまた叩かれたりしそうで怖いな……

『慰めて欲しいのか? オイ(笑)とか書かれそうだ(汗

いかん、いかんですよ……凹むとテンションと言うかモチベーション

が急激に下がるので何とかあげないと……

Continue 114 〱何処までも理不尽な世界で???

レベル差が激しい戦闘を巧みな連携と経験で渡り合ってきたフェニックス達だが、それにも限界が訪れる。

如何に此方が勝っているとは言え、レベルはヴィクターの方が圧倒的に高く、此方の全力はほぼ通用しない。

それでも攻撃しない訳には行かず、自分達の最大の攻撃を叩き込むがやはり通用しない。

攻撃は一度でも受ければ即死か瀕死は免れない為、数倍動き回らなければならず全員の体力を悉く奪っていた。

『はあ……はあ…… アギ・ダインッ!! ……!!』

何とか隙を見つけてアギ・ダインを唱えるのだが何も発動しない。遂に彼女のMPが尽きたのだ。

それは他の仲魔も同様で、タル・ンダとマカジャマを使っているオリアスとデイス以外のMPは既に尽きているし、その二人のMPも残り少ない。

これ以上ヴィクターを抑えるのが限界になって来ていた。

『遂にMPも切れたようですね。 散々梃子搦らせてくれましたが…』

…これで終わりですっ！』

『姐さんっ！？』

『……………ははっ…』

(まあ…ここまでやれば御の字でしょ。低レベルなりに頑張ったわよね…ごめんサマナー)

襲い掛かるヴィクターの前にほぼ全ての力を使い果たしたフェニックスは静かに目を瞑る。

『潔しっ！ そのまま地獄に送り返して差し上げましょうっ！ はあああああっ！』

『無駄に暑苦しいっ！ 避けられるものなら避けてみるが良い！
メルトダウンッ！！』

ヴィクターに向かってほぼ光球と化した猛火が襲い掛かる。

突然襲い掛かってきた魔法に虚を突かれたヴィクターだが、直ぐに察知してメルトダウンを回避した。

そのまま高らかに笑うとメルトダウンを唱えた相手を見据える。

其処には 魔王オーカスが両手に魔力を溢れさせたままニヤリと笑っていた。

『くははははっ！ 無駄っ！ その程度のスピードしか持たぬ魔法などっ！ ぐうっ！？』

当たればダメージは免れ得なかったがあの程度のスピードならばどうと言う事はないと剣を構えると同時に腹部に鋭い痛みを感じ振り向く。

『ちえりゃあああっ！ せいっ！』

『ごはっ！？ き…貴様…死に体では……ま、まさかっ！？』

『そのまさか。さっきの火炎は良い感じ私を癒してくれたわ』

『はーはっはっはっはっ！ 愚か者がっ！ この程度の謀り事も理解出来ぬとは底が知れようぞ大天使っ！ 所詮は神の狗かっ！ はーっはっはっはっ！』

オーカスが放ったのはメルトダウン…つまり火属性の攻撃魔法だ。

そして其処に居るのはフェニックス。フェニックスは不死性を持つ炎の霊鳥。勿論火炎は吸収する

オーカスとしてはヴィクターに命中しようが、それでフェニックスが回復しようがどちらでも良かったのだ。

どっちにしても此方が有利になる事は間違い無いのだから。

『うっわ、ずるくせえ…理解出来る戦法だけどさ』

『やかましいっ！ 策略と言えっ！ ふっふっふ。大天使よっ！
今度は我々が相手だっ！』

『さつきから一人で出しゃばってんじゃねえ。さつきから戦えなくてこちとらイライラが募りまくってるんだ。お前で解消させてくれよっ。』

『ぐっぐっ…雑魚共がぞろぞろと』

キンキとオーカスを睨みつけるヴィクター。

『雑魚かどうか…戦ってみて確かめて見なあっ！ オラオラオラッ
！』

『ぐっ！？ はああああっ！？』

レベル的には38。パールヴァティと同等のレベルしか持たないが、それでもその攻撃力は侮れないものがある。

巨大な斧を使っているのにその重みすら無視する高速の連続攻撃に必死に回避行動を取った。

顔を狙う斧をバックステップで回避し、そのままキンキが懐に入り込み全力で薙ぎ払うが、それを剣で弾き返し距離を取る。

しかし彼女の攻撃は止まらない。右斜めから振り下ろし、回避されればその勢いのままに一回転し全力で叩きつけた。

『っ!?!? なんと言う威力! 先程の雑魚とはやはり違うようですね…』

『雑魚雑魚五月蠅えよっ! オラアっ!』

『なんとと言う馬鹿力ですか!?!』

反撃すら許さないキンキの連続攻撃の前に、ヴィクターも防戦一方になっている。

出来るなら攻撃を受け止めて一度その勢いを止めて置きたいのだが、武器の相性が悪くそれが出来ず回避行動を取るしかない。

彼の持っている剣はその辺の名刀より数段上の強度と攻撃力を持っているが、これだけの重みを持つ攻撃を立て続けに受けてしまえば折れてしまう。

嵐のようなキンキの攻撃を剣を巧みに使い逸らし、受け流していく。

『はっ! 中々やるじゃねえかっ! でもよ…オレだけに構ってて良いのかよ?』

『…くっ！？』

ヴィクターとしても言われるまでも無いセリフだったが、キンキは余所見をしてどうにかなる相手ではなく、無視する事など出来はない。

だが、それが致命的な隙となる。

『アギ・ダイソっ！！』

『タル・ンダー！！』

『ごはああああああああああああっ！』

『マカジャマー！！』

ヴィクターの背後から襲い掛かる爆炎や息吹、低下魔法を回避する事が出来ずまともに喰らってしまふ。

装備していた銀色に輝く鎧は腐れ落ち、攻撃力はタル・ンダによって下げられてしまった。

『ヒョーヒョー。キンキにオーカスよ良くやってくれたわい』

『いやぁ…チャクラドロップってこんなに美味いんだなぁ…今度サ

「マナーに大量購入してもらおうぜ」

「そもそも売ってませんよこのご時勢じゃ…」

「き、貴様等っ!?! 何故っ!?!」

「何故も何も、無策で来る訳無かる? ワシの様なか弱い悪魔はこ
ういう回りくどい事をするのがメインじゃからなあ」

（（か弱いって…どのへんが?））

フェニックス、オリアス、デイスが同時に心の中で突っ込む。

直ぐ横では完全に回復したユルングと、見た目からは分かり難いが
笑っているグクマッツの姿が見えた。

ヴィクターの所に向かう前に、グクマッツは大樹の懐からいくつか
のマジックカードを失敬していたのだ。

そして、キンキとオーカスがヴィクターの注意を引き付けている間
に、HPとMP回復剤や支援魔法のカードなどを用いて他の仲魔の
状態を完全にしていた。

結構な量のチャクラドロップを使ってしまったが、最悪ガイアから
徴収出来るし、コピーすればいいので気にしていない。

回復剤などはこごぞと言う所で使うのだから褒められこそすれ怒ら
れはしないだろう。

という訳で、ヴィクターは合計7体の悪魔に囲まれる事になる。

4人程度に足止めされていたヴィクターに攻撃力が高い3体が追加された事でかなりの不利になった事は間違いないだろう。

だが、彼には二つの切り札があり、まずはその一つを切る事にした。

『は……ははははははっ！ 愚かなっ！ 本当に愚かなっ！ 時既に遅いっ！ もうどれくらい戦っていると思うのですか？ このビルには何十体もの天使達やメシア教徒達が居るのです！ 彼等さえ来てしまえば数は此方が上なのですよっ！……！』

『あー……それなんだけだよ』

『は……？』

『普通もつ来てるんじゃないかねえの？ 何で誰も来ないんだ、おい？』

『そ、そういえば……アレだけ激しい戦いしてたのに誰も来ないのはおかしいわよね……』

現在この部屋の外ではペルソナ達とその天使達やメシア教徒達を蹂躪している。

つまり 彼等に一人たりとて援軍は来る事は無い。

『貴様等……まさかっ！……！』

『いや、一人で納得してキレられても困るんだが…まあ…どっちにしろ、手助けは来ないって事だなっ！ 時間がねえんだ、さっさと死になっ！』

『悪魔どもがああああああつ！』

『はんっ！ てめえも人間からみりゃ悪魔だろうがっ！』

キンキの斧とヴィクターの剣が激しく打ち合い火花を散らす。

攻撃力を下げられたとは言え、一対一ではレベルの高いヴィクターの方がキンキのステータスを上回る…だが、彼女は一人で戦っている訳ではない。

『燃えよっ！ メルトダウンッ！！』

『合わせるわよっ！ アギ・ダイン！』

合体魔法・『灼熱極炎』！！

巨大な火柱が立ち昇りヴィクターを焼いていく。

『う……そ？ 何あれ…ただ火が合さっただけじゃないわよね…？』

『またしても合体魔法か…無意識的にだが、魔力がシンクロした様だな…』

『合体魔法…そう言えば話には聞いてたけど…まさかアンタとの合体魔法とはね…』

『酷い言い様だなっ！？ オイツ！？ ま、まあいい…兎に角あれは使えるな…くくくく…』

意図した行動ではなかった為、本来以上の火力を持つ魔法に驚いているフェニックスと、前にも合体魔法を発動させた事があるので余り驚いてはいないオーカス。

これからも上手く魔法を合わせる事が出切れれば強力な切り札になるだろうと、燃え盛る火炎を見つめていた。

容赦無くヴィクターを焼いていく業火は、メルトダウンやアギ・ダインの比では無く、甚大級のダメージとなって羽を肉体を焼き尽くし、立ち昇る極炎は天井を突き抜けていく。

『がああああああああつ！？ あああつ！？』

『おらよっ、おまけだっ！ 忠義の一撃っ！！』

全身を焼かれる痛みに耐えている所に轟音と共に繰り出される無慈悲な一撃がヴィクターの右腕を切り落とす。

『ぎいっ！？ フザケルナアアアアアっ！ 穢れ無き威光！』

全身を焼かれ右腕を切り取られてもその眼光は衰えず、彼は最後の切り札を使う！

『しまっ！？ 耐えろおおおおおっ！！』

痛みに耐えつつも放った極光がキンキ達を包み込む

光が収まると炎は消え、全身に大火傷を負ったヴィクターが肩で息をしながらもその場に立っていた。

聖属性が通用する相手を問答無用で即死させる穢れ無き威光によって、ゲクマツツとオリアスは完全に消滅している。

他の仲魔達は聖属性に耐性を持っているが、光と同時に放たれた衝撃破によって吹き飛ばされてしまった。

『はあ…はあ……私にこれを使わせるとは…おぞましい悪魔共め…』

本来ヴィクターには使用できないスキル 穢れ無き威光 なのだが、ガブリエルから受胎告知の代理を受けた時に一度だけ使用出来る力と許可を受けていた。

万が一にも使う事は無いと思っていたのだが、まさか彼自身雑魚だと思っていた相手に使うとは夢にも思っていなかっただろう。

『だが……はあ……これで、もう私を遮る悪魔共は……はあ……』

『まったく……落ちるかと思っただけ。こんなあっさり逝っちまったらサマナーに顔向け出来やしねえ』

『あ……ああ……ば、馬鹿なっ！？ 馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿なっ！？ 何故邪悪なる悪魔がこれに耐え切れるのですかっ！』

『いつつ……無傷って訳には行かないけどね……グクマツツとオリアスも倒されちゃったみたいだし……ってかこれ始めにやられてたら私達詰んでたわよね……』

『ダナ……我々八聖属性二耐性ハアルガ、カナリキツイモノガアル』

二人欠けてしまったものの、他の全員はほぼダメージ無くその場に立っている。

基本大樹の仲魔もこなたの仲魔も聖属性が効かない悪魔ばかり揃っていたのがヴィクターのミスと言えるだろう。

爆炎を消し、邪魔な悪魔を一掃するには一番都合の良いスキルではあったが、今回は運が無さ過ぎたのだ。

『あ……あああ……』

『今更1対複数は卑怯とか言わねえよな？』

『ま…待ちなさいっ！ 分かりました。貴方達は強い』

『…えーと、何これ？ 命乞い？』

『天使ニアルマジキ行為ナノデハナイノカ？』

先程の灼熱極炎とキンキの一撃で流石のヴィクターもかなりのダメージを受けてしまっている、これ以上の戦闘は難しかった。

そこで彼は一計を案じる。

『つまり交渉という訳か。はーはっはっはっ！ 見たか者共っ！ 天使が！ それも大天使が魔王に対して交渉だと！ 笑わせるっ！』

『てめーは黙ってる。で？ アンタからは何をしてくれるって言っんだ？』

『うむ。……誠に口惜しいですが。お前達を良き悪魔として認めてあげましょう。これからは善行を積むのですよ？ さあ其処をどきなさい、私は神父の所に行かねばなりません』

『……………』

『……………』

『……………それは何か？ ギャグか何かか？』

案じはしたがあまりにもふざけ過ぎた案だった、余りの内容に全員開いた口が塞がらない。

しかしヴィクターはこれ以上無く本気であり、大天使に認められたのだから褒められるべき事なのだと思うってさえ居る。

『我は色々な悪魔や人間を見てきたが…天使というのはアレばかりだな…我も遙か古代はアレだったのか…何とも情けない』

『さあ、其処を退くのです。私はこれから回復しなければなりません。貴方達も早く善行を積みに行きなさい』

『さっきの攻撃で頭でも打ったんじゃない？ 流石にこれは無いわよ…ねえ』

『どうしたと言うのですかっ！ 私が自ら貴方達の存在を許し見逃してあげたのですよっ！？』

『どうしたもこうしたもねえよ…強くて誰かに依存してる奴ってのは同じ事しか言わねえのか…？』

キンキが疲れた表情をしながら斧を構える。

それを見たヴィクターが驚いた表情で全員を見回すと、その場に居

た誰もが攻撃の準備を始めていた。

『なっ！？ 交渉は終わった！ 貴方達とはこれで終わりでしょうっ！？ 何故っ！？』

『もういい…もうしゃべるな。行くぜお前等っ！…！』

『や…やめろ…やめろ…私には使命が…使命があるのです…や…やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！』

全員の攻撃が一つ残らず命中する

大天使ヴィクターは怨嗟の絶叫を上げ…その身をマグネタイトに変え消えていった。

『はっ……てめえとオレ等じゃ潜ってきた戦場が違ったようだな』

キンキの呟きが開いた天井から吹き込む風に乗って消えていく…

………

大天使ヴィクターを倒した！！

へタレっばいんだから何所までもへタレよう。

そんな訳で最後は締まらずにボコられたヴィクターでした。

余り沢山書くとか何かありそうなのでこれからは短めに…。

でも下のアンケート票などで結局は多くなるんですよ(笑)

重要

コメントいつも有難う御座います。

いつも返しが遅くなってすいません、色々やる事があって遅れてます(汗)

後、今回からは『返信希望』か『返信不用』かを書いてもらえると助かります。

ほぼアンケートだけっばい感想もあるので…(汗)

どうでもいいこと

カツオのお刺身を食べました。美味しかったですよ

この時期はお刺身とかあっさり系が良いかもですね。

皆さんはお刺身だと何を良く食べますか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

次回コミュ対象者などの新規アンケート受付中です、良かったらお答えくださいね。

コミュイベント

1位=自動的にメインコミュ

2位=一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント

3位＝一定数以上でメインコミュ、そうでなければサブイベント
4位＝一位が前回のコミュ対象者な場合、此方の判断で一位を破棄し繰り上げ。

その場合は二位がメインコミュになる。

次回コミュ話対象キャラ表

メインコミュを取ったキャラは自動的に、次回は入選してもサブコミュのみ。

サブコミュを取ったキャラは次回も変わりはない。

『優先』はコミュを取った時点で消去。『前回』の属性になる。

アンケート属性

前回＝1票に付き『1票』正し、自動的にサブコミュか切捨てになる。

通常＝1票に付き『1票』基本はこれ。

優先＝1票に付き『2票』連続で取れていないキャラ対象。サブコミュでも通ると消去

最優＝1票に付き『3票』現在該当者無し

通常：こなた：74票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

前回：みゆき：15票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

優先：ダツキ：70票（手助けフラグはON エンディングフラグ

まで後1）

通常：アリス：69票（個別エンドフラグまで信頼度が後1）

通常：パール：11票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：フォル：24票（????なフラグが建つ?まで後1回）

優先：雪之丞：90票（再戦フラグまで後1回）

通常：皆方武：53票（????????）

アンケート資格の変更

1：お話が更新された時にお一人様1回のアンケート権がある

2：最低でも、1行でもいいですのでお話の感想を載せて頂く
3：できれば『どうでもいいこと』についての返信を載せて頂く（これは強制では有りませんが、有った方が『お話を見た』と分かりやすいのでいい区別になるかもしれません）

3番を除きこれらが一つでも反映されていないアンケート投票は申し訳ありませんが

無効票とさせて頂きます。申し訳ありませんがご了承下さい。

コミュキャラの投票に対する変更

基本は1～3位までがコミュ対象。

正し、2位3位は一度でもメインコミュをとっている場合50票の投票が必要。

それ以外のキャラの場合は自動的にメインコミュ扱いとなる。

信頼度が5、エンディングフラグが整っているキャラは基本除外される。

1：前回、コミュを取ったキャラは1位をとっても次回は自動的にサブコミュに回るか、エントリー外になる。その場合は4位までがコミュ対象となる。

2：1～3位以内に入った、一番メインコミュをとっていないキャラは自動的に信頼度が増えるメインのコミュになる。

3：コミュを取れなかったキャラは優先権（1票で2票分）がつく。

4：白亜は燃えないゴミですので金曜日に捨てる（最後冗談

Continue 115 何処までも理不尽な世界で???? (前書き)

追記情報 -

アンケートは新しく『アンケートについて』に作り直したので其方をご覧ください。追記もあるのでどうぞご活用を

ではでは神父戦闘その1です。

え？ はい、1話じゃ終わりませんでした。

ではではどうぞなのですよ。

1話全部戦闘：なのに全然上達しないのが泣けてきます。

「な、何だと言っただ貴様等は…」

『ふむ…強いて言えば人の心の具現化…と言っべきものだな』

突如死んだと思っていた人間より湧き出てきた悪魔を見て驚きを隠せない神父。

その半透明な姿と言い、通常の悪魔よりも澄んでいる魔力といい、彼が見た事がある悪魔の中には存在しない強力な存在だった。

それもその筈だろう。ペルソナとは言え彼女は仙人の中でも特に上位の存在なのだから。

ペルソナとして存在していなければ、もっと高位の悪魔に他ならない。

今現在はその力を完全に解放させているとは言え、本来存在している彼女には遠く及ばない。

『時間が無い…直ぐに終わらせよう』

「抜かせっ！ てめえらみたいな邪悪に負けるほど正義は弱くはないっ…！」

『正義…か…』

「何がおかしいっ!?!?」

『おかしいとは思っておらん。汝等には汝等の正義があり、我等には我等の目指すべき道がある。完全に分かたれた道を進む者に説いたとしても伝わらんよ』

「ペラペラペラペラ五月蠅いわっ! 滅びるが良い! ランダムイザツ!」

先制とばかりに低下魔法を掛ける神父。

強制命中の低下魔法によつてステータスを下げられる彼女だが、真剣な瞳で神父を見つめながらその場に飛行し続けている。

『では、行くぞ? 永遠の氷河によつてその魂まで凍て付かせよ。』

ニヴルヘイム』

「っちい!?!?」

彼女が軽く手を翳すと周辺の空気が一瞬で凍て付き、冥界の吹雪が巻き起こる。

絶対零度に果てしなく近い凶悪な空間から神父は猛スピードで脱出を図るが、完全には間に合わず左手が完全に凍りつく、少しの衝撃でも加われればその手はあっさり破壊されるだろう。

腕を完全に凍らされた激痛にも彼は顔を歪める事無く、移動しつつも自らに支援魔法を掛け投剣を投擲していく。

『っ…霧露乾坤網よ。防げ』

「その程度で防げると思つかよっ！　らああああああっ！！」

『ぐっ……流石に……低下魔法は面倒だな。かはっ！』

降り注ぐ投剣を霧露乾坤網の水で逸らしていくが、ランダマイザによつて身体能力が著しく低下している彼女が全てを防げる事など出来ず、幾つかは体を掠っていく。

耐久力が人並み以下の彼女はそれだけでも大ダメージになってしまふのだ。

片手だけで投擲しているお陰で、攻撃にある程度隙があるのが不幸中の幸いと言う所だろう。

しかし彼女もそれだけで戦闘不能になってしまうほど弱くはない。

直ぐにディアラハンで回復を施し相手の射線を巧みに避けつつ攻撃を開始する。

『……………死の国に誘おう……マハ・ムドオン』

「はっ！ その程度の即死魔法がっ……なっ!?」

彼女が使うマハ・ムドオンは、ヘルから継承したムドハイブースタと黄泉の女王が極限まで底上げしている。

例えどのような相性を持っていたとしてもスキルなどで無効が無い限りは確実に相手の息の根を止める事が出来る

通常の即死魔法とは違つと長年の経験から来る勘で、危険を悟り彼は懐から魔反鏡を取り出す。

「跳ね返せっ！ 貴様が喰らつて死にやがれやあっ!!」

死の魔法は魔反鏡によって反射され、リュウキツコウシュ自身を襲う が、彼女にはその即死魔法を無効化するスキルがある。

反射される可能性は考慮していた為、彼女は別段焦る事無く次の手を打つ。

『ならば!』

「早々先手ばかり取らせるかよおおおっ!! マカトランダ!

!」

『むっ……魔力が吸い取られていく』

ランダマイザによって全身が重くなっている上に、更にそこから全身が軽い虚脱感に襲われる。

紫色の靄となつて彼女から溢れ出すのは彼女のMPであり、それはそのまま神父に吸い取られている。

魔力吸収の魔法　マカトランダによってかなりのMPを吸収されてしまった。

「ちっ！　くそ気持ち悪い魔力だ…だが、これで終わりだと思ふなよっ！　断罪せよっ！！」

神父が高速でリュウキツコウシユの周りを動き回りながら投げつけてきた。

危険を感じた彼女は直ぐに相殺しようとして魔法を唱えるが、投剣が四方八方からタイミングをずらし襲い掛かって来る。

メギドラオンで一掃しようにも凄まじいスピードで動き回り色々な角度から投剣を投擲してくる為、その全てに対応する事は彼女にも不可能だ。

(間に合わぬか。ならば…)

其処で彼女は今出来る最善の手を打つ。投剣が命中してしまえばか

なりのダメージは免れない、いや寧ろこの姿を維持する事も出来な
いだろう。

どうしても回避が出来ないならば…そう、回避しなければいいのだ。
メギドラオンでダメならば違う方法を用いて回避すればいい。

それが出来る方法が彼女にはまだ残っている。

「これで終わりだあああああつ！ 滅びよ悪魔っ！ メギドラスト
ーン！！」

ダメ押しとばかりに魔法石すら投擲する神父。

石は直ぐに砕け破壊の衝撃を巻き起こしながらリュウキツコウシュ
に迫る ……！！

それでも、彼女は冷静に今の状況を覆す魔法を唱える。

『 ニヴルヘイム 』

彼女を中心として再び現れる死の吹雪。

その吹雪が剣を凍て付かせ、自らの衝撃と吹雪の結晶によって破壊
されていく。

メギドラの爆発もそれを上回る絶望の吹雪の前に威力を削られてし

まった。

「馬鹿か、自爆……………いや、相性かつ!!」

「その通りだ神父よ。それでもメギドラの衝撃には肝を冷やしたがな…」

氷の属性を吸収出来る彼女にとってニヴルヘイムは自らを癒しながら投剣に対しての結界となる。

メギドラの衝撃もニヴルヘイムによって回復しつつダメージを受けたので大ダメージ級の威力にまで下げられている。

つまり…彼女のダメージは軽微だ。

「次は私の番だな？ 惑え… 雇気楼」

彼女が両手を掲げると同時に数十体のリュウキツコウシュが神父を取り囲むように現れる。

一瞬驚いたが、焦る事無く彼は十字を切りながら魔法を唱えた。

「無駄…全てを不浄を清めよっ。 デイル！」

幻術を見破る看破の魔法が幻影のリユウキツコウシュ全てを消去していく。

残ったのは本体であるリユウキツコウシュだけ。

『…ほう。幻術解除の魔法か。人にしては珍しいものを使うな』

「我が力は神より賜った不浄を雪ぐ力。この程度の幻術など何の意味もねえんだよっ！ このビッチがつ！！」

『む…成程、流石に一人ではまずいかもしれんな』

神父は支援系の能力者だが、決してそれ以外が弱い訳ではない。

単純に攻撃魔法等の手段を余り持ち合わせていないだけで、他は平均以上のステータスを誇っていた。

リユウキツコウシュは基本後衛での支援及び火力であり、1対1で戦うには防御力が拙いのが難点だろう。

その点で言えば、クー・フリーンとこなた達が戦っているので何人か此方に回してもらいたいとも思っているが、あちらのシスターは完全に攻撃に特化している為、後ろで動けない大樹のカバーをしてもらわなければならない。

この状況を打開する方法はあるのだが、外されてしまえば多大な隙を見せてしまう事になる。そうなれば負けてしまうのはこちらだった。

『ならば、此方も小手先ではなく全力で行こう。　　メギドラオン』

「おおおおっ！！　テトラカ！！」

部屋を揺るがすほどの大爆発が神父を中心にして巻き起こる。

しかし、直撃を食らう前にテトラカによって結界を作り上げる事で、直撃を避ける事は出来た…が。

『それで、終わりだと思っな？　　メギドラオン。　　メギドラオン。　　メギドラオン』

「おおおっ！？　神よっ！　我が身を襲う邪悪より我等を護りたまえっ！！」

立て続けに巻き起こる大爆発に流石に耐え切る事が出来ず、全ての魔法が直撃した。

けたたましい爆音を奏でても尚彼女は淡々と無表情にその先を見詰める。

如何にメギドラオンの魔法であろうと、あの神父ならば耐え切る可能性はあるからだ。

『あちらも…動いているようだ。悪い予感はお外れてくれて何よりだ』

壁などがその衝撃で崩れ部屋の外が見える。その先には積み重なるように死体が放置されている。

オオミツ又達が殺したメシア教徒やテンプルナイト、そして天使達であろう。

彼等の姿が見えないのは残党を排除しに行っているのかもしれない。

『さて…あの程度では大して堪えていないのだろう。私に不意打ちは意味が無いぞ？』

「かつ！ かかかかかかつ！ くははははははつ！ ……まさかこれほどの悪魔が現実世界に存在しているとは。お陰で冷静になれましたよ…ええ。我等が同胞をここまで無残に殺していくとは…流石は悪魔っ！」

全身がボロボロになりながらも神父はその場に立っていた。

あのメギドラオンの直撃を自分に結界魔法、魔法防御上昇魔法、回復魔法を掛け続ける事で即死を耐えたのだった。

それなりにMPを消費してしまったが、服がボロボロになっている以外は問題無く戦えるだろう。

先程までの狂気はナリを潜め、元の冷静な状態に戻っている。今日の前で戦っている悪魔は、生半可では勝てる相手ではない

持ち得る経験を全て使って勝たなければならない存在なのだと怒りを胸の奥にしまいこみ冷静に怒りを燃やしていた。

『…返す言葉も無いな…確かに広い定義で言えば私もまた悪魔なのだろう…だが、それはお前にも当てはまる言葉だな』

「なん…ですと…？　今貴方はなんと仰いましたか…？」

『人には本来持つことすら出来ないほど強靱な肉体に、強力な魔法並の人間なら爆風だけで死ぬような強力な魔法が直撃してもまだ生きているお前が人間とは私には思えんよ』

肉体が、生まれが人間だっただけで今の神父は既に悪魔のカテゴリに入ると、冷静に告げる。

レベルが30を超えるような人間が、只の人間な訳が無いと言われればそうだろう。

リュウキツコウシュとて、仙人という種族。その実体はどこまでも人間に近い所がある。

神父やシスター、大樹達も強いて言うなれば、死んでもマグネタイトにならずに死体だけが残る悪魔の様な物だ。

「何を戯けた事を、私はメシア教の神父。人間でありながら神の使徒。その様な物はどうでもいいのですよ」

『そうか：そういう意味では人も悪魔も天使もそう変わらない物だと思っただけだな』

「馬鹿にしないでもらえますか？ 我々が異教徒や悪魔と変わらな
い？ ありえないっ！ ありえませんが！ そんなふざけた事は
ありえないっ！ 人間の欲を：異教徒の欲望を。悪魔の心を見た事
があるかっ！？ 人は人を容易く妬み、憎み、羨み、犯し、殺す！
悪魔は人を陥れ、欺き、操り、墮落させる！ 我々は救済を与え
ているのです。そのような愚かしい人類に、邪悪なる悪魔共に。我
々が立たなければっ！ メシアが我々を導かなければ！ 世界は墮
落し終わりに近づいていく！ 人間と悪魔の悪意によつて世界は滅
ぼされてしまうのだっ！ 分かるか！？ 私達が導かないといけな
いんだよっ！ 天使様の神の愛の下！ 法の下に！ 清く正しく！
そうっ！ それこそがこの星に！ 我々のあるべき姿！ その為
にはこの世界のあらゆる不浄を取り除かなくてはならない！ 神の
火を落とし、世界を浄化しメシアの導きの下我々は神の国で法の下
に生きる！ それを変わらない？ 変わらねえだどっ！？ ふざけ
るのも大概にしろっこの悪魔如きがっ！ 神の愛を１ミリ足りとも
理解できないでめえらに何が分かるっ！ 何が分かるっ！ 何が分
かるんだあっ！！」

『……………狂っている…いや、お前はそれで正常なのだろうな』
悲しそうな瞳で神父を見つめる。

既に彼は完全に理想に狂っているのだらうと、彼女はあの口上と恍

惚とした表情、そして目をみて確信した。

何があったのかは知らない、だが、余程の事があったのだろう。そして自分の全てを神に捧げてしまったのだろう。

戻る事は不可能で、止まる事も無い、殺すしか彼を止める方法は既に無い。知ってはいたがそれでもリュウキツコウシユはその事に胸を痛める。

彼は間違ってしまっただけで、清く正しい人間なのだろう。信徒には優しく頼り甲斐のある立派な神父なのだろう。

宗教の違いが戦争を生む…その証明の第一人者が彼なのかもしれない。

「……はあ……はあ……貴様の様な悪魔に言っても無駄かもしれませんね。ですが……最後は神の偉大さを全身で感じて滅びなさいっ！」

「ぐちゃぐちゃと何を言っているかさっぱりなのですよ！　ダムドラオンツッ!!」

「っ！　この程度っ!!」

遠方から襲い掛かってくる暗黒の爆発をあっさりと回避し其方に向かって連続で投剣を投擲する。

だが、それらの剣は全て鈍い金属音と共に薙ぎ払われた。

『汝等…』

「遅れて申し訳ありません…えーと、どちら様かは存じませんが恐らく佐藤さんのペルソナですよね…?」

「ご主人様の波動がするのですっ！ だから味方なのですよっ！」

リュウキツコウシュの前に蘇生したみゆきとアメリカが駆けつけた。彼女が目覚めた時、既に戦いが3つに分かれていたのだが、そこで1対1で戦っているリュウキツコウシュを見てこちらに回ってきたのだ。

アメリカとしては復活しているのに苦しそうな大樹を見て其方に駆けつけたかったが、戦っているのが大樹のペルソナだと直ぐに理解し援護にやってきた。

『血を流しすぎているな…大丈夫なのか?』

「ここで下がっているよりはマシですから…それに小竜姫も力を貸してくれています」

マグネタイトの供給で今は保たせていますが、本来なら立っているのも辛い筈です…

HPは完全に回復したが、それと血の足りなさや疲労は別問題であ

る。

戦闘に参加できるように小竜姫がマグネタイトの供給をする事で彼女は戦う事が出来ているだけの状態だ。

回復しているとして、本来なら最低でも半日は休まないといけないほどのダメージを受けていたのだから。

「あちらでは天使と仲魔の皆さんが戦っていますし、泉さんやかみさんも戦っている。私だけが下がっている訳には参りません」

『：強いな、汝は。では正面は任せる。霧露乾坤網』

そう呟くとみゆきとアメリカの体に彼女と同じ水の粒子が出現し二人を取り巻いていく。

『これで炎と氷は吸収する事が出来る、何があるかは分からないかな…とりあえず奴を足止めしてくれ。完全に動きを止めれば私が止めをさそう』

「ふに…らじゃーなのですよっ！」

「足止めですね…私で何所まで出来るか分かりませんが…お任せください！」

貴方には龍神の加護があります、行きなさいみゆきさんっ！

彼女達が見る先には神父が狂気に染まったような表情で武器を構えている姿が見える。

戦いはまだ始まったばかりだ……………

Continue 115 〱何処までも理不尽な世界で??〱 (後書き)

みゆきさん復活とアメリカ参戦です。

やっぱりリュウキツコウシュだけじゃ難しかったようですねー。

二人とも良い戦いしてるかなー？

神父さん手凍ってるし、寧ろ勝ってるかなー？

次回も頑張ろうー…次回辺りで終わりたいなー神父戦

どうでもいいこと

ピーマンは生で食べても美味しいです。

という訳で今日のお夕飯にピーマンと紅しょうが刻みとか食べました。

あっさりして美味しいですよ。

苦いとか良く聞きますが私はこのお野菜大好きですよ。

皆さんはどんなお野菜が好きですか！(メロンとスイカ除く)

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

アンケート投票の場所について

アンケートの説明や投票数などは『アンケートについて』と言う場所に移動させました！。

COMPステータスの直ぐ近くにありますが。次回からは此方を参考にしてくださいね。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

無理矢理終わらせた感じがある神父戦2回目！ なのです。

戦闘描写…難しいう (涙 少しは上手くなってるのかなあ？

何時も通りの長さですが、良かったら見てあげてくださいね。

Continue 116 〱何処までも理不尽な世界で???

「デク・ンダ！ デ・カジャ！ なのですよ！」

アメリカが低下魔法と強化魔法を同時に解除していく。

基本、目視範囲内に存在すれば絶対に発動するリセット魔法。直ぐにリュウキツコウシュに掛けられたランダマイザ。神父が自分に掛けたヒートライザが消去されていく。

魔法が解除されたお陰で、体が軽くなるリュウキツコウシュ。彼女と言えどあれだけの低下魔法に体を侵されたまま戦うのはきついのがあった。

そして強化魔法によって身体能力を底上げしていたのを解除された神父が舌打ちする。

「ちっ…面倒な輩ですね。完全魔法特化型ですか…面倒な」

「ふふふーん アメリカはご主人様特製の造魔なのです。お役に立つのが基本なのですよー！」

大樹が生きている事で調子を取り戻した彼女は、何時も通りの天真爛漫…と言つか無邪気な笑顔で神父を見つめる。

回復魔法が無い以外は様々な魔界魔法を操る事が出来る彼女はとも優秀な後衛サポートと言える。

其処に前衛のみゆきと、火力、支援後衛としてリュウキツコウシユがいるこの即席パーティはかなりの戦闘力を秘めているだろう。

今の内にみゆきは小竜姫の剣を構えたまま冷静に神父を分析し始めた。

少しでも相手の動き方や癖などを見極め、それを利用し攻撃しなくてはならない。オートアナライズによりある程度のステータスと相性は分かったが能力等は探れていないようだ。

（使ってきたのはあのシスターと同じ投剣…他に接近用の武器は見た感じでは無さそうですね。暗器の類を持っているようには見えませんが…となれば中々遠距離系…）

良く見れば神父の片手は完全に凍り付いている。あれでは回復魔法を施したとしても完全に動くようになるまで時間がかかるだろう。

それに対して此方はリュウキツコウシユを加えれば3人。自分の状態が最悪に近いとは言え、数の点では有利に立っている。

このクラスの相手に自分程度が何所まで追いつけるかは分からないが、それでも戦力にはなるだろうと見ていた。

「アメリカさん。罠を作ってもらえますか？」

あるものは爪で、あるものは毒の息吹で、あるものは全てを奪う手で攻撃を仕掛けていくが、その全てを簡単に回避されてしまう。

「邪悪なネクロマンサーめっ！ 恥を知れっ！！」

「?? ほえ？」

投剣を投擲し確実に1体ずつ悪魔を滅ぼしていく。そのスピードは恐ろしく速く、襲い掛かったあの一瞬の内に半数以上は殺されてしまった。

だが、それにより多少なりとも隙が出来てしまう

そしてその隙をみゆきとリュウキツコウシュが見逃す筈が無い。

「その隙！ 貰いました！ 奥義一閃！」

『全てを飲み込め…… メールシュトローム』

自らにタル・カジャを掛け飛び込み全力で剣を振るうみゆき、それと同じタイミングでみゆきごと全てを飲み込む渦潮が神父を飲み込んでいく。

激しい激流に飲み込まれながらも霧露乾坤網に因って無効耐性を得ている為、彼女には何の影響も与えない。

そのまま高速で駆け寄り剣を一閃する…が。

(手応えが…無いっ!?　っ!)

みゆきさん防御をっ!

声に導かれるままに身を翻し急いでその場を離脱すると、その数瞬後に先程まで自分が立っていた場所に6本もの投剣が突き刺さる。

みゆきは身を感じる寒気に従い全力でその場を離脱した。

この間にも一人でも殺そうと投剣が襲い掛かってくるのだが、防御に専念しているみゆきの前に投剣は全て迎撃されていく。

「はあ…はあ…そう易々とは行かないようですね…っ!　はあっ!
!」

完全に離脱した後、みゆきは二人の前に立ち援護に回った。神父の攻撃はまるで機械の様に休む事無く続いているのだ。

「まさか悪霊まで使うとは……てめえらの性根が腐ってるのは良く分かったよ…慈悲なんざいらねえって事がなっ!!　堕ちた聖母と邪悪な悪魔共に永遠の地獄を!」

「???　でもこの魔法、コスト低いし使いやすいですよー?」

「い、いえ。アメリカさん、彼はそう言う事を言っている訳では…」
神父の言葉を素っ頓狂な言葉で返すアメリカ。みゆきも流石に意味が違うのだと教えるのだが彼女はぼけつとした表情のままだった。
アメリカが暢気にしているのは、みゆきが前に立っけてくれているのと呼び出した悪魔達を壁にしているからである。

とは言え、召喚した悪魔達の9割は先の一瞬で完全に壊滅してしまったので、これ以上は再び呼び出さなくてはならないのだが

(あの隙は…誘われてしまったようですね…情けないです)

リュウキツコウシュと対等以上に戦っていた神父が、たかが低レベルのアンデッドをけしかけた位で簡単に隙を見せる訳が無い。

みゆきとリュウキツコウシュは神父によって誘い込まれていたのだ。自ら隙を見せる事によってみゆきかりュウキツコウシュのどちらかを落とす為に。実際はメイルシュトロームの威力と範囲が尋常ではなく回避に専念せざるを得なかったのだが

『ほう…見事だな。まんまと乗せられてしまった様だ…私一人ではやはり荷が重かった様だな』

（一撃で斃す方法はあるが。あの宝貝は今の状況では一度しか使えん。失敗すれば私は恐らくこの姿を維持出来ずに心の海に戻る事になる…どうにかして絶対に命中する方法を作らねば…）

『高良みゆき、頼みがある…悪いがそのまま聞いてくれ』

「は、はい。何でしょう？ つっ！！」

『奴の動きを2〜3秒で良い、止めてくれ。そうすれば私達が勝つ』

「2〜3秒ですか…あの超人クラスに私がそれだけの時間を稼げるかと言われると難しいですが…そうしなければ勝てないのでですね？」

決まりさえすれば確実に勝てると言う自信はあるのだが、命中に関してはあのスピードで動き回られると回避されてしまう恐れがあった。

広範囲に発動させると言う手もあるのだが、この技は敵味方を識別出来るような能力は勿論付いておらず、そんな事になれば敵はおるか味方も完全に殺してしまう。

部分的に技を発動し、その範囲内に止めなければ被害が尋常では無くなってしまうのだ。

だが、リュウキツコウシュでは相手を止める事すら難しく、其方に力を割いている暇は無く。ならば仲間にそれを任せて自分は自分に出来る事をするだけ…。

その為には接近戦を得意とするみゆきと、様々な魔法を使いこなすアメリカの協力が不可欠なのだ。

『頼めるか？』

「確約は出来ませんが…ですがその間貴方が一人に…」

その通りです。かなりのMPを消費しているのでしょうに…限界が近い筈ですっ！

『だからこそだ…何、私は消えても現し身に戻るだけだ、気にする事は無い』

リュウキツコウシュを見て、小さく頷くみゆき。

アメリカも打開策が出来たのだと理解し、早速準備を整えていく。

「スク・カジャ！ いつでもいけるのですよ！。最悪は盾になるのです！ アメリカは造魔ですから死んでもCOMPに戻るだけですよ」

「出来ればさせたくありませんが…支援宜しくお願いしますねっ！
参ります！！」

強化魔法によって身体を最大限にまで強化し、まるで弾丸の様に飛び込んでいくみゆき。

「脳足らずがつ！　ランダマイザ！！」

飛び込んできたみゆきに向かって再びの低下魔法を掛ける神父だが、一度手痛い目に合ったみゆきが無策で飛び込んでくる筈が無い。

魔法が発動すると同時にポケットから魔反鏡を取り出し発動させる

！！

本来みゆきを襲う筈だったランダマイザは方向を180度変換し、神父に襲い掛かった。

「同じ手は二度は喰らいません！」

「堕ちた聖母如きがあっ！！　デクンダストーン！！」

「はああああああっ！」

デスバウンド！！

自身を襲った低下魔法を直ぐにキャンセルし、直ぐに後ろに跳躍する。

その地点にみゆきが小竜姫の剣を全力で叩きつける　！

あと少しで再び殺される所だったが、アメリカからの援護攻撃で難を逃れる。

その勢いのまま攻勢に回り、神父に攻撃を仕掛けていくみゆき。

「ちいっ！ 神を冒瀆した悪魔人形がつ！ 死ねっ！！」

それでもレベルと経験の差が激しく、攻勢に回っているみゆき一人では後ろを支える事が出来ない。

一瞬の隙を突き投剣を投擲する。悪霊達がカバーに入るがその一撃は破魔の効果も持ち合わせており壁になる事も出来ず消滅してしまふ。

尚も勢いを弱めない投剣に対し、基本的な身体能力が低いアメリカではそれを回避する事が出来ず、腹部に剣が深々と突き刺さった。

「じふっ……あ……」

「アメリカさんっ！ っ！！ はああああっ！！」

「余所見とは余裕だな堕ちた聖母おおおっ！！」

一瞬でも気を抜けば殺される空間では、一時の気の迷いすら己の死

を運ぶ刃に変わる。

今は彼女の心配をするより先にリュウキツコウシユの頼みの通り彼を完全に拘束させるのがみゆきの使命

「げほっ！ えほっ！！ ……これは…致命傷ですね…」

口から血を吐き出すアメリカ。

たった1本とはいえ、強力な聖属性の力 最早呪詛に近い でエンチャントされた攻撃は彼女のHPを著しく奪っていた。

『持ちこたえよ、直ぐに回復魔法を』

直ぐにリュウキツコウシユが駆け寄りメ・ディアラハンをかけようとするが、彼女の目の前に掌を突きつけふるふると首を振る。

「いらぬい…の…です…げほっ！ ごほっ！ ごぼっ…血は赤いですよお…えへへ…ご主人…様と…一緒…うれし…い…です。私に

…構わず……あいつを…殺す…ごほっ で…げほっ！ すよ！
ご主人…様の…ために…アメリカ…は……それが……幸せ……
……」

微笑んだ後、リュウキツコウシュをキツと睨みつけるアメリカ。

彼女にとって自分が死ぬのは計算内であり、どうなるうと構わないとも思っている。

全ては大樹の為に。自分のマスターであり、父であり、兄であり、大切な人の為。その為ならば何をしても、何がどうなるうともどうでもいいのだ。

そして今は自分の命惜しさにリュウキツコウシュに余分な力を使わせるべきではないと考えた。どうせ造魔である彼女は直ぐに蘇生が可能なのだから、と。

自分に構っている暇があれば、少しでも神父を殺す為の力を蓄え、タイミングを見逃して欲しくなかったのだ。

『その思い…確かに受け取った。今はただ眠っておれ…高良みゆきよ…頼んだぞ…？』

「残るは貴様等二人いいいっ！」

「くっ…」

左に避けなさい！

小竜姫の言葉に従い左に避けるとその直ぐ横を音も無く刃先が通り抜けていく。

回避しなければ綺麗に一刀両断されていただろう。

「たああああっ！！」

「遅い！ 遅い！ 遅いわぁっ！」

どンドン追い詰められていくみゆき。

アメリアの援護も無い今、彼女は限界に近づいていた。しかし…それでも彼女の眼は諦めてはいない

最後の一手の為に、ただ我武者羅に『見える様に』剣を振る。

（右からの薙ぎ払いは、投剣で受け流され、その勢いそのまま一回転し此方を攻撃してくる筈。それに対しては三日月斬りで相殺させ、其処から月影を放ち距離を狭める…）

彼女の想像通りに彼女の薙ぎ払いは受け流され、その勢いのまま斬りつけてくる。

予想より早い一撃に焦りを感じるつつも、それも想定内なので直ぐに三日月斬りで相殺する。

剣と剣が打ち合う強い衝撃で手を傷めるが、構わず月影を放ち距離を詰める。

(相手は出来るだけ距離を取ろうとする。つまりこの攻撃に対してはバックステップで回避し剣を投擲するでしょう。今の私ならばぎりぎり回避出来るスピードなので、それを避け攻撃に入る…そうすれば…)

「おおおおおおっ!! これで終わりだっ!!」

『予想通り』彼は剣を投擲する。

想像以上のスピードに流石に避ける事が出来ず、右の脇腹を刃が掠り血を噴出し、左の太ももに深々と突き刺さる。

致命傷ではないが、これ以上の戦闘は不可能な状態になってしまった。

しかし、みゆきは強い瞳を湛えたまま勝利を確信する！

「いいえ…これが貴方の『終わり』ですっ!!」
ランダムイザ!

「！」

「なっ！？　　がああああああっ！　　き、貴様あああっ！！！」

一度目　みゆきがランダマイザを受けた時、彼女はその魔法をラーニングしていた。

今の今まで使わなかったのはステータスを下げた所で、自分達では五分五分でしか戦えないと分かっていたからだ。

ならば、使える時に最大限に使う事にしたのだ

急激にステータスが下げられた事によって、先程のみゆきと同じく動きを僅かながらに止めてしまう神父。

その間……………　僅か2～3秒。彼にとっては致命的かもしれないがぎりぎり何とかできる時間でもある。

だが、その数秒はみゆきが頼まれた時間でもあるのだ　　！

『よくやった……………　堕ちよ……………　　！　　寶貝　　盤古旛』

リュウキツコウシュが掲げたのはポコポコと泡立ちながらその数を増やしていく不可思議な黒い球体の様な物質。

完全に範囲を特定し、その能力を発動させていく。

死の危険を感じ神父は直ぐにその場を逃げようとしたが、足が鉛になっただかのように動かない。

いや、足だけではない。全身がまるで何かに抑え付けられたかのような感覚に囚われる。

「な、何を！？ 何をしたのだ貴様あ！」

『何の事は無い。単純に重力を操っているだけだ』

「重力…ですか」

太ももに刺さった剣を引き抜き、脇腹などにディアラマカードを使い回復を施しながらリュウキツコウシユの話聞いてみるみゆき。

彼女の言う言葉にこの後どうなるか全てを理解する。

『宝贝・盤古旛。存在する宝贝の中でも最上位に存在する物…その効果は重力を自らの意思で操作する事が出来る。私の力でも1000G程度ならば可能だ』

「せ…1000G…」

1000G Gとは重力の単位であり加速度の事を示している。ちなみに1Gは9.807m/s²と計算されている。

1キロの物体が1Gの加速度を受けると9・807Nニュートンの力を受けることになる、これが所謂1キロ重の力と言う。

地球上ではあらゆるものは重力(=1G)を受けているので、1キロの物体は1キロ重、10キロの物体は10キロ重の下向きの力を受けているのだ。

そこに重力とは別に1Gの力を受けるということはその物体キロ重の力を受ける事と同じになるのだ。

ならば簡単だろう。1000Gの重力の付加は言わば単純に重力が1000倍されているのと同じ。

神父の体重が70キロと仮定しても70トンと言う重圧が押し掛かることになる！

「が…ああああ…がああああつ！！ 死ねない！ 死ぬ訳…には！ 救世主が…この世界を…清き…世界に…する為にはああああ…！！！」

『汝が望むものは理想よな。純粹で、何所までも純粹で…その点で言えばそこな少女にも言える事でもある』

死亡しているアメリカを優しく見つめる。彼はアメリカに似ている、何所までも純粹に神を愛し、神の道を説き、神の御心のままに動く。

アメリカは何所までも純粹に大樹を慕い、大樹の道を共に歩き、大樹の為だけに動く。

単純な道の違い…それだけでしかないのだ。

『さらばだ…汝は神代の英雄にも、我等仙人にも劣らないほどの戦士だった……』

「おおおおおおおおおおおっ！！ 神よおおおおお
おおっ！ 罪深き存在達に断罪をおおおおっ！！」

断末魔の叫びを上げる神父にリュウキツコウシュは無慈悲にいや、戦士に礼を尽くす意味で力ある言葉を紡ぐ。

『重力…千倍』

グシャッ……………

水っぱい音と共に…神父はその生涯を終える

メシア教過激派はこの時を持って完全に崩壊した。例えばシスター・アンナが生き残ったとしても散発的な暴動程度しか起す事は出来ないだろう。

救世主誕生計画は潰えた……

「う…にゆ……終わったですか？」

「ええ、私達の戦いは終了です。流石にこれ以上は動けません…」

「うー…後一人なのに。ご主人様のお手伝いが出来ないですよ」

全ての力を使い果たして座り込むみゆきと、動けない事がもどかしいと手をばたばたさせるアメリカ。

こなた達の戦いも佳境に入っている。手助けに行きたいが、今の自分達が行っても邪魔にしかならない事を理解している。

今は少しでも体力を回復させ、この後の戦いに備えるべきだろう。

「あの…有難う御座います。佐藤さんのペルソナ…ですよね」

『うむ。その通りだ…出来るならば茶でも交わしながら雑談をした所だが、私自身そろそろ限界でな…現し身も限界に近い、私は戻

らせてもらおう』

「……………有難う御座いました。貴方が居なければ私達は死んでいたと思います」

「感謝なのですよー」

『それは我が現し身に言っでやるといい。では…さらばだ』

徐々に姿が透けていくリュウキツコウシユ。

自分達を顕現させる為は無茶をしている大樹を心配しながらも、自分達を今尚顕現させる事が出来ている事に驚きと喜びを感じながら、消えて行く。

『役目は果たしたぞ。我が現し身よ』

優しく微笑む彼女は…どこまでも美しかった。

……………

……………

……………

みゆきはランダムマイザをラーニングー！

重力云々は、色々検索して説明があつた部分を引用させてもらいました。

うん、頭の悪い私には重いのは凄いやー程度しか分かりません！

実はランダマイザ覚えてたみゆきさん、一番使える部分で使い勝利をもぎ取りました。

普通に使っても良かったのですが、それだと切り札としては使えないですし、今回はこうなりましたー。

全然上手くなつた気がしないぜ…誰か技量を下さい…1個10億ジンバブエ・ドルで買い取りますので(涙)

今回は漸くクー・フリーンとこなた達ですねー1〜3話予定です。

3話ってなんぞ…(汗)

どうでもいいこと

昨日はぼけーっとしてて同じ事を二回も聞くという御馬鹿な事をした白亜が通りますよ(汗)

今日はお昼ごはんにアンパンを食べました。ほんのり甘みが良いですよえ。

飲み物はバンホーテンココアなのですよっ！甘くて疲れが取れるのです。

ココアは美味しいですよえ。

私はミルクココアも好きですがお砂糖控えめのビターな感じのココアも好きですよえ。

皆さんはココアのみますか？

ちなみに私は未だに『ミロ』が何なのか良く分かってないです（笑）
買う事ないですからねえ…美味しいのかなあ？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 117 〱何処までも理不尽な世界で???) (前書き)

うにゅあー……何も思いつかない!?

大変です何も思いつきませんでした、という訳で結構なあなあ進行です。

むう…此処まで遅くなるとは、構想力が欲しいのですよお。

戦闘描写が難しいのが遅くなった原因ですねっ!

今日は全体的に納得行かないのです…えぐえぐ…

そろそろ1日1話書くのは難しくなってきたかなあ…

何故

アンナの頭の中ではその言葉が巡り続けている。

何故、この人間達はつかさを奪い去ろうと言うのか？ 救世
主の誕生はこれからの世界に必要な事だと言うのに

何故、このような愚かしい真似をしようとしているのか？ こ
のままでは世界は邪悪な念に塗り潰されてしまうのに

彼女にとってはどれも理解出来ない事だった。

小さな頃から世界は神の物で、神の愛を一身に受けるメシアに導か
れて平和な世界を目指す。そう教えられてきた。

両親に捨てられた悲しみも全て、メシア教が拭ってくれたのだ。

彼女は神を信仰し、天使を信仰し、メシア教を愛し、メシアを愛し、
信徒を愛し…聖母も愛している。

「何故貴方達はっ！ この世界の憂いを理解しないのですかっ！」

『憂いだ？ はっ！ そんな事はどうでもいいさ。俺は強い奴と戦
えれば満足なんだよっ！！』

嵐の様な攻防

神速の突きを巧みに回避し合間を縫って攻撃を仕掛けるアンナだが、その程度の力の籠っていない攻撃などクー・フリーンは意に介さない。

接近戦では分が悪いのだろう、頻りに距離を取ろうとしているがそう容易く彼が逃がしてくれる訳が無い。

少しでも迷えばあの槍は間違はなくアンナの心臓を貫くのみだから。

「断罪せよっ！ 刹那五月雨撃ちっ！」

両手に4本ずつ投剣を構え腕を振り被り連続で打ち込んでいく。距離を取る為にまずは手数で牽制を仕掛ける事にしたのだ。

勿論、これでどうにかなるとは彼女も考えていない。クー・フリーンは彼女が最も苦手とする接近戦のスペシャリスト。

このままでは確実に分が悪い、まずは槍の範囲から離れなくてはいけないのだ。

予想通り攻撃は容易く迎撃されてしまう。

『その程度かよ、^{テオマニア}宗教狂さんよっ！！ もっと全力で来いよ？ で

ないと……死ぬぜっ!!」

その言葉と共に凄まじい殺気がチリチリと自分の胸元に突き刺さるのを感じるアンナ。

同時に地面を強く踏み込みながらクー・フリーンは渾身の突きを繰り出してきた。

彼の放った一撃は空気を裂き一筋の閃光の様にアンナの心臓目掛けて打ち込まれる。

「この程度っ!! 悔い改めなさい! 邪悪な悪魔めっ!」

襲い掛かる死の一撃を全身のバネを使い身を捻る事で回避する。

そしてその反動を利用して竜巻の如く回転しつつ投剣をまるで弾丸の様に連続して投げつけた。

一本一本がそれだけで致命傷になるほどの剣群がクー・フリーンに向かって牙を向いた!

必殺の意志が込められた剣の弾丸を獣の様な表情で笑いながら彼は動く。

『甘えよ……』

避ける隙間など無いと思われた剣の雨を彼は研ぎ澄まされた勘と経験を持って回避し、避けられないものは槍で撃ち落していく。

ゲイ・ボルグの先端と投剣の先端がぶつかり合い、衝撃に耐え切れず投剣は粉碎される。

本来、高速で飛来する剣の先端に向かって槍を確実に突き立てるなど常人には不可能だろう。しかし英雄である彼はそんなありえない事を『当たり前』の様にこなしていく。

伝説の槍を持つ英雄だからこそ出来る芸当と言えるだろう。

やがて全ての投剣を回避した彼。今度は此方の番とばかりに連続して突きを繰り出すが、直ぐに彼女は槍の横を剣で弾き返し事無きを得る。

「つつ！ この悪魔めっ！！」

『くっ、はははっ……いいぜ、いいぜっ！ そうでなくちゃな、そうでなければ面白くねえっ！』

手加減などはしていない、する訳が無い。

それなのに彼の突きは全て避けられていく。英霊でも、悪魔でも無い人間の女性が自分の本気の突きに対抗しているのだ。

それがどれだけ凄まじい事か、その力がどれだけ異端なのか彼女は

分かっているだろうか？

クー・フリーン　クランの猛犬と評されるアイルランドの大英雄。その彼が放つ攻撃をここまで捌ききれぬ輩などそうそういる訳が無い。

だからこそ彼はとても楽しく、そして嬉しかった。

強さとは突き詰めれば最後には孤独になってしまうものだ。

突き詰めてしまえば残っているのは自分だけになってしまふ、その無常のなんと哀しき事か

対等に戦う事が出来る相手との殺し合い程、彼の心を震わせる物は無いのだろう。

大樹のペルソナとは言え、彼は彼の意味を持ち自分の信念で戦っている。今は少しでもこの戦いを楽しみたかった。

『さあ、行くぜ？　どちらが強いかとことんまで遣り合おうじゃねえか』

困惑するしかない、と言った所だろうか。

「…えーと、どうすりゃ良いんだろうかな、あれは…」

「私に言われても分かんないわよ。介入しようにも出来ないじゃないの」

達人…いや超人同士の激しい戦いにこなたとかがみは援護に加わる事が出来なかった。

高速で動き回る二人に対し援護どころか支援魔法を使用する事すらまったく出来ないのだ。

かがみに至ってはあまりの高速戦闘に何をやっているのかすら理解出来ない時もある程である。

レベル的に離れているとは言え、この戦いは余りにも凄まじ過ぎたそれも仕方ないかもしれない。幾ら強くなつたとは言え、こなたもかがみも彼等の様に前衛で戦うタイプでは無い。

こなたは前衛も出来るが達人クラスで止まっている上、メインは射撃とデビルサマナーなのだ。アレに今割り込めると言ったら人間な

らばみゆき位だろうか

達人である時点でこなたも十分人外に近いのだが、今戦っている二人はその遥かに上にある超人の域　一介のレベルでは追いつけるレベルではない。

とは言え絶対に勝てない訳では無い、要は単純に土俵の違いがあるのだ。

いかに超人とは言え数千メートル先からほぼ100%命中する弾丸を永遠に避け続ける事など出来はしないだろう。

こなたが得意とするのは遠距離狙撃と射撃の腕、サマナーとしての腕と連携を持って相手を倒す。

上手く嵌れば大樹の様にあのシスターも降す事が出来るだろう。だが、あのような接近戦になってしまえばあっという間に殺されるだけだ。

自分の戦い方を万全に用いる事が出来ればこなたもかがみも勝てる可能性はあると言った所だろう。

「凄まじいわね…あれも佐藤君のペルソナでしょ？」

「だね。昨日使ったのを見たよ。一瞬だったから直ぐ消えちゃったけど凄い能力だった。本体が動くとおんな感じなんだね…」

流石に彼でもケルベロス相手は難しいかもしれないが、前衛での囷

や壁としてならかなり使える英雄だろうと考える。

クー・フリーン以上のデタラメな悪魔を既に見ている為、こなたの方は幾分か冷静である。

介入出来ないなら、今の内に相手を如何にかする手を考えるべきだろうと思考を開始する。

「何にせよ今は待ちかな。かがみは何かあれば直ぐ支援する方向で
ヨロ」

「分かってるわよ。さっさとこいつ等を如何にかしてつかさを助けないと」

「だね…」

観の目を持って全体を把握するこなた、周りでは仲魔達やみゆき達が戦っている。

ヴィクターと戦っている仲魔の方は手出しは要らないだろう。4人で抑えていた所に、キンキ達が混ざったのだから負ける道理が無い。問題はみゆき達の方だ。先程みゆきが完全に蘇生しアメリカと共に大樹のペルソナの支援に向っているのが見えた。

「私達の相手はあのシスター。なら確実な手を考えないとね…」

ここでばけつとしている位なら他の場所に回った方が良いとも考え
たが、万が一クー・フリーンが負けてしまえば大樹が隙だらけにな
ってしまう。

そうなれば状況はあつという間に覆ってしまうだろう。援護しよう
にも動けないのが現状なのだ。

「あのペルソナだけでどうにかならないの？ 見た所押してる様に
見えるけど」

「確かにね。でも問題は時間だよ。ああやってペルソナが戦えるの
は大樹君が無理してるからだからね…ところでガイアの隊長は…っ
と？」

つかさを護っていると聞いてはいるが、何かあつた場合彼女を人質
に取る位はするだろうと危惧している。

かがみはどうやら安心して任せているようだが、こなたは信用でき
なかつた。

彼は現在ありつたけの防御用の魔法石を用意してつかさと共に後方
に下がっている。実力的にも確かにそれが一番なのだが、彼の様な
男が時間があるこの状態で無策でいる訳が無い。

（もし、つかさに何かしようとしたら…覚悟しておく事だね。私は
親友を傷つけられて黙ってるほど優しくくないよ）

「こなた？ どうしたの？」

「いんや。何とか隙を見つけて狙撃するしかないかな…あまり時間は掛けられないよ」

尋常ではない大樹の様子に時間はあまり無いと感じている。

「今は待つしか出来ない…か。もどかしいよ…」

大樹が苦しんでいる、つかさがおかしくなっている。それなのに自分分は英雄と超人の戦いを見守ることしか出来ないでいる。

ギシリ…と歯軋りをしながらこなたは前を睨みつけた。

「こなた…」

銃を握り締めているこなたの手にかがみが優しく手を添える。

感じる体温にかがみの方を見るこなた。

「らしくないわよ？ あんたはもう少しお気楽でしょ？」

「ん…あはは。そだね　ありがと、かがみん」

「かがみ言うな…もう少し真面目にやりなさいっ！」

（かがみが焦ってるから危ないかもって思ってたのに、私が似たような状況になってちゃ世話無いよね…ありがと、かがみ）

かがみの精神状態を危惧して居た自分自身が焦っている事に気付かされるこなた。

土壇場で自分以上に落ち着いているかがみに感謝しつつ笑顔を作る。

（ほんと…親友ってのは、得難いもんだよね……………大樹君。さっさと全部終わらせて、また皆で遊びたいよ）

彼も冷静を保つのは難しい状態だった。

状況は確実に此方が有利と言えるだろう。大天使は仲魔達に押されているし、神父も突如現れた悪魔 ペルソナ に押され始めている。

大樹を殺したシスター・アンナも悪魔が対等以上に戦っている。そう…対等以上に戦っているのが問題なのだ。

今クー・フリーンが戦っているのは死んでしまっただろうと思っていた娘 杏奈に他ならない。

(……俺もまだまだって所か。たったこれだけの事で心が掻き乱されているんだからな)

かがみがかさを心配している姿が自分と重なる。

彼も昔は娘の為に必死になっていたのを思い出す。まさか自分がこの歳になって再び焦燥感に悩まされるとは思っていなかっただろう。致し方無いかもしれない。目の前にあれほどまで捜し求めた自分の娘が居るのだ。寧ろ騒ぎ出さないのがおかしいとも言える。

(まあ、最悪殺された場合でも何とかする方法はある…出来れば生

かしたまま連れて帰りたいが…ね)

余程の損傷が無い限り、彼には反魂香と言う切り札がある。それが焦燥感を抑えている一因なのかもしれない。

今は娘の事より優先しなければならぬ事があるのだ。彼は努めて冷静を保ちながら、戦況を再確認していく。

(大天使は確実に押されてるな、あれは問題無いだろう。神父の方も高良みゆき嬢が加わってから勢いを取り戻している。まさかこれほどの戦力を有しているとはな……)

これだけの人数でメシア教過激派と対等以上に戦っている時点で大樹達の強さが想定以上だと感じていた。

強いとはかがみから聞かされていたし自分達が初めて見た時は改造悪魔である狂神オグンに負け掛けていたのを覚えていたのが印象に残っている。

アンナとメシア教を撃退したと聞いた時はたった3週間 実際は大樹達にとって2日程度の時間でしかないが、ここまでレベルが上がっている事に興味を持ったものだ。

万が一神父達と戦う事になったとしても、逃げる位の時間は稼げるだろうと考えていたのだが、その予想はあっさりと真逆の方向へ覆された。

大天使は仲魔達に押されているし、神父はたったの3人に抑えられ、アンナに至っては悪魔一人に抑えられているのだ。

(これは敵に回すべきじゃないな…もしあの力が此方に向けばただじゃすまん…如何にかして協力体制をとるべきかもしれんな。となれば…柊つかさ嬢を殺すという選択肢は消える…か。この後の状況によって考えるべきだな…さて、どうするか)

「……………あー……………」

しきりにかがみの方に向かって手を伸ばすつかさ。

壊れても尚、自分の姉であるかがみの事は記憶の片隅に覚えているらしい。皆方が抑えていなければそのまま彼女の下に這ってでも向かって行きそうだった。

「おおっと、少し待っててくれよ。なあに、君のお姉さんと友人達はおじさんが驚く位強いからな。直ぐ君の下に来てくれるさ」

「…あう……………あー……………」

「さて…これからどうなるかね」

戦況を見定めながら彼は彼に出来る事をしている

Continue 117 〱何処までも理不尽な世界で??〱(後書き)

英雄VS超人の高速戦闘、あまりのスピードでこなたとかがみは何にも出来ないという事態に。

いつそクー・フリーン巻き込んで攻撃するしかないかもですね(えー
激しく立ち回るから魔法や銃撃だとクー・フリーンを誤射してしま
うせいかもですね…

彼に味方と共闘する〱と言う考えがあればもう少し違つかもですが、
戦闘楽しんでますし(笑

まあ、次回辺りこなたとかがみが動きますよ〱!

どつでもいいこと

お給料日! お給料日ですよ! ちゃちゃーん

明日は豪勢に行くですよ〱。

今日は特に何も無いにゃあ…普通の一日でした(いつもは違つか
…?)

みなさんは暇な時は何をしていますか〱?

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 118 〽何処までも理不尽な世界で???? (前書き)

大樹君たちは〽のお話とこなた達のお話です。

ラストはやはり次回になりそうですねえ……ではではどうぞ。

ちよこつと重要。

何時も感想有難う御座います。

良ければ『返信希望』か『返信不要』を入れてもらえると嬉しいですよ。

無い場合は『どうでもいいこと』が書かれている感想を返信しますね！

大樹は意識を失わない様にするだけで精一杯だった。

例えようも無い全身を鑢か何かで削られている様な激痛が絶えず襲い掛かってくるのだ、これで気絶出来ないのはある意味拷問に近いだろう。

奥歯が砕けてしまうほど歯を食いしばり、唯只管耐え続けるしかない。

これを使うまでは、最終手段にもう一度使うかもしれないと考えていたが、はつきり言って二度と使いたくないと心の奥で愚痴る。

内部から…いや心の海から聞こえてくる横島の声もかなり弱っているのが感じ取れた。

(な、んじゃこりやつ!?!? …予想してたより遥かにやべえ…!?!?
おいっ! 意識はあるか?!?!? 返事しろ!)

苦しそうにしながらも此方を心配して頻りに話し掛けてくるが、それに応える余裕はまったく無い。

最早思考する事すら限界に近く、全てが終わるのをただ待つしか出来なかった。

(こいつは…ぐうう…そう何度も使えるもんじゃねえな…)

人間である以上、大樹には勿論限界が存在する。

自分の心の仮面であるペルソナだとしても、一体出ただけでかなりのMPや精神力を奪われる彼等を全員同時に召喚し、現世に一時的とは言え顕現させる事は基本的に無理な話なのだ。

如何に不可能を可能にする英雄 横島の力添えが有ったとしても、それで全部何のデメリットも無く能力が扱えるなら初めから使っているだろう。

文珠然り、マジックカード然り、ペルソナ然り、その特異で有益な能力に目が行き過ぎて忘れがちだが、それらの能力にもデメリットや不可能な事が確実に存在する。

これはその不可能を…本来それだけでも凄まじい力を持つ能力を無理矢理捻じ曲げて発動させている。

簡単に言えば、一定量の水を流す蛇口を改造し極端に大きくさせて水を流していると言った感じだろうか。

そうすれば確かに水は多く出る事になるが、改造してしまった蛇口はもう元には戻らないし、溢れ出る水を受け止める容器の大きさも変わりはない。

ただ出来る様になった だけであり、安全性など欠片も保障はされていない…それが今の大樹の状態なのだ。

これは横島のミスとも言えるだろう。彼自身が特異な存在であり、理不尽にも不条理にも問題無く対応してきた…だが、それが問題だった。

彼も本来ならばこんな事は誰にもさせはしないだろう。一つ間違えたら死んでしまう様な方法を彼が他人に取らせる訳が無い。

ならば………何故大樹は？ と問われれば、横島は大樹の『ペルソナ』だからだろう。要は横島もまた大樹の心の一部に他ならないと言う定義になる。

そう…横島は大樹を『自分』と同じ様に見てしまった為、見誤ってしまったのだ

自分と大樹では、そもそもの土台が違うのだと言う事を横島は失念していた。

今は少しでも大樹の負担を抑えるために、自分の出力を上げ続けていくしかない

『カンシヨウ…私達だけでも戻って負担を軽くするべきでは無いでしょうか？』

『お前も考えていたか。だが、我々が居なければ半身を護る者が居なくなる。仲魔方は半身の回復を行っていてそれ所では無い上、場所が悪い。………ふんっ！！』

飛んできた投剣を打ち払う。

あれだけシスター・アンナが投擲を続けているのだ、此方まで飛んで来ない方がおかしい。

こなたとかがみも時々襲ってくる剣を迎撃したり回避したりしつつあの場所に留まっているのだ。

彼女達を大樹の護衛に回す手も考えたが、万が一クー・フリーンが倒されてしまえば、あの二人が戦わなくてはいけなくなり、その場合大樹を護る術が減ってしまう。

更に言えば、例え二人が戻ったとしても低レベルのペルソナである二人では焼け石に水でしかない。

リュウキツコウシユもヤタガラス達もまだ戦いを続けている以上、大樹はまだこの激痛に耐え続けなければならないのだ。

『ディアラハンっ！ 駄目ですわあ…何をどうすれば良いんですのぉ…？』

『分かりませんっ！ すみません、これは一体どうなっているんですかっ！？』

『ペルソナの一斉召喚による弊害…だな。本来ミックスレイドの様な特殊な能力以外ではこれだけのペルソナを同時に召喚、維持する事など出来ない』

二人が大樹に回復魔法を掛け続けるが一向に良くならない事に焦りを感じている。

其処に大樹の今の状態を詳しく理解しているカンシヨウが、二人に答えていく。

『え…と…？』

『恐らく代償にMPではなく魂を削られているのだろう…回復魔法は肉体を癒す魔法。魂を回復させる事は出来ない』

『そ…そんな…！？ ご主人様！ 今直ぐおやめ下さい！ こんな事をしてしまえば死んでしまいますっ！』

フォルトウナが小さな掌を大樹の頬に当て泣きそつな表情で言う。

だが、ペルソナは消えず変わらず苦しんでいる姿を見て、彼女は胸が張り裂けそうになる。

自分が本来の姿であれば気絶させても止めさせたいのに、この小さな体ではそれさえも出来ない。

『フォルトウナちゃん…だめよお。サマナー様が今それを止めたら今度は此方が大変な事になるわあ』

『だからと言って、何故ご主人様がこのような事を！ 魂を削られて

死亡すれば蘇生など出来ない！ 完全な無になるのですよっ！？」

「……それでもサマナー様は止めてないわぁ。なら私達が出来る事はこの方を守り通す事じゃないかしらぁ？ どんなに辛くても……ねえ？」

「パールヴァティさ………！ あ……」

何時も妖艶な笑顔を見せていたパールヴァティの表情が貼り付けたような笑顔になっていた。

彼女も大樹が苦しんでいるのを見るのは嫌なのだ。彼女も大樹の嬉しそうな顔や楽しそうな顔、痛みでは無く快樂に歪んでいる顔を見る方が良いに決まっている。

だが、この苦しみを自ら耐えているのならば、仲魔として彼を見守り、護る事こそが必要だと考えていた。

「今は…待ちましよう？ でもお、後でたあくさん怒らないと行けないわねえ」

顎に指を当ててクスリと笑うパールヴァティ。

今は少しでもフォルトウナを落ち着かせる事が先決とばかりに何時も通りの行動を取る。

その様子を見て、フォルトウナも小さな手を大樹の手に乗せ心配そ

うな表情をしながらゆっくりと撫でていく。

『ご主人様……どうか、これ以上ご無理はなさらしないで下さいまし……』

ぼたりと大樹の掌に滴が落ちる。何も出来ない不甲斐無さに涙を溢すフォルトゥナの涙がぼたり、ぼたりと大樹の手の甲に落ちていく。

初めは敵だった。自分は傲慢な天使で、大樹は人間。無理難題を吹っかけ殺そうとした時、逆に即死魔法で殺されかけ、命令の如く仲魔にさせられた。

その時は人間如きに従わされると言う事が物凄く屈辱だったし、いつ命を奪われるかもと言う恐怖に身を震わせていたのも覚えている。しかし、少しずつ彼と触れ合い、墮天使になり。彼の銃になり、女神であると同時に彼の愛銃となり今も尚彼女はその居場所に居続けていられた。

臆病で、気弱で、ネガティブで。現実を諦めていて、人間として何かが致命的に足りない人間

それでも仲魔には優しい態度で接し、漸く出来た友人の為に何だかんだ言いながらも命を賭ける彼の仲魔になれて誇らしいとも感じていた。

目の離せない弟の様な、何所までも皆を引っ張っていく兄の様な、両極端な印象を持つ彼に惹かれている。

恋愛感情という訳では無い、単純な仲間意識でもない。この感情は……そう。家族を心配する様な気持ちだろうか。

『……………力が…欲しいです。ご主人様がこのような事をしなくても良くなるほどの強い力が…』

『フォルトウナちゃん…そうねえ…………強くならないと…かしらねえ』

張り付いた笑顔を崩し、優しく微笑みながらパールヴァティは大樹ごとフォルトウナを抱きしめた。

行き成り抱きつかれ驚くフォルトウナだが、その暖かさに少しずつ身を預けていく。

『今私達が出るのはこれだけよあ…でもあ…これは今私達にしか出来ないわあ。ね』

『そう…ですね。ご主人様…感じますか？ 私達の体温…今はこれしか出来ませんけど…きつと…』

貴方の為に強くなりますから。

少しだけ…ほんの少しだけ大樹の苦しみが和らいでいるような気がした

…
…
…

戦いは更に加熱していく。

まるで舞踏を見ているかの様に、芸術性すら醸し出す英雄と超人の戦いを見守る事しか出来ないこなたとかがみ。

だが、こなたはすぐ自分の持っている力に気づき、心の中で会話を始める。

自分のガーディアンであり、母親でもある大天使・アムルタートの化身・泉かなたに。

(ねえ、お母さん？ お母さんもあれクラスの戦闘力があるの？)

（私は無理かしらね。魔力が高くて…丁度、そう…あそこの大天使の様なタイプだと思うわ、種族的にも似てるし）

（あれと似てるって何か嫌だね…一応見えてはいるのかな？）

（ええ、何とか見えてるわ。こなた…？）

見える、かなたがそう言うところあなたは指をパチンと鳴らしかなたに向かって微笑む。

（オーケイオーケイ。私にはお母さんという切り札があったよ）

（もしかして…私に眼になれって言うのかしら？）

（そのまさかだよ。私じゃ追いきれなくてもお母さんなら行けるよね。後はお母さんを信じて私は撃つだけだよ）

母親であり守護天使でもある彼女ならばこなたは全幅の信頼を寄せられる事が出来る。

後は自分の腕を信じ、シスター・アンナを狙い撃つだけである。

（でも、良く考えたわね。私を召喚するかもしれないとは思ってたけど。其方の使い方なんて考えて無かったわよ？ お母さんとしては召喚されなくて良かったけど）

（私も出来るなら死亡フラグは踏みたくないからね。でも折角会話できるんだし、それを使うのは当然当然っ！ 強いて言えばロックオンサイトと言う奴かな）

（な、何言っているか分からないけど…うん。今度そう君に問い詰めたいわ…）

（何にせよ、これで何も出来ない何ていうジレンマから解放されたよ。後は相手に注意して攻撃だね）

こなた自身、何か出来ないかと模索している間に気付いたのだ。彼等以上のレベルを持つこなたなら、あの戦闘を見極める事が出来るのではないかと。

後は自分と繋がっている彼女の指示に従えば攻撃は出来るようになる。

命中精度を少しでも高める為に両手で拳銃を構え射線を計測している。クー・フリーンとアンナは縦横無尽に動き回っている為、今のこなたでは視認するのが難しい。

其処をこなたの指示の下に射撃する事が出来るならば、シスターを攻撃する事も可能だろう。

「こなた？ まさか撃つ気？ あれじゃ流石に」

「ん、まあなんとかするよ。かがみは何かあった場合のフォロー宜

しく。とりあえずスク・カジャカードと」

「……それじゃ少しでも確率上げておくわ。今全てに置いて誓う……復讐を糧に、怨嗟を糧に……全てに反逆すると！　リベリオンッ！　！」

スク・カジャカードを使用して命中率を底上げしつつ、嵐の様な状態の二人に向け精神を統一し始めた。

そこにかがみのリベリオンが発動し、クリティカル率が上昇する。

時々飛来する投剣はかがみでも対応する事が出来るので、魔法攻撃で排除し、こなたを守る形を取る。

「私じゃ無理だし、あんたに任せるわ。あのムカつく女をぶっ飛ばしちやいなさい」

「おーらい。全力でKILLするよ」

軽く相手を殺すと告げるこなたにかがみは少し表情を硬くし、こなたに問いかける。

今聞く事では無いのは分かっているが……今納得しておかないとずると引き摺ってしまうかもしれない。ならば今の内に聞こうと思っただのだ。

「……………こなた…もしかしてこなたもみゆきも、人殺した事…あるの」

「……行き成りだね？　もし、そうだよって言ったらどうするの？　かがみ」

表情を変えずに答えるこなた。いつか聞かれるとは思っていたので冷静に対処する事が出来た。

こなたは嘘については居ないのだろう、つまり彼女達は既に人を殺めている　それを知ってもかがみは、其処まで心を乱されなかった。

かがみ自身、何となく確信していたからだ。彼女は努めて冷静にこなたに答えを返す。

「…何にも。ああ、そうなんだって感じだと思つ。この世界は……私達に優しくないから」

「そだね。時には人を殺す事も必要だよ。誰かを守る為には…日本だから何ていうのはもう通用しないんだ…だから私は」

狙いを定め、こなたは銃を強く握り締める。

「こつやって戦つよ。これからもずっとね。他人なんかよりなりに、大樹君が、みゆきさんが、かがみが、つかさが、お父さんが、

ゆーちゃんが…皆が好きだから」

「……………そう。こなたの覚悟は分かったわ。ごめんなさい変な事聞いて」

「気にしないで。こういうのは感情や何かで何とか出来るもんじゃないしね。でも…信用して？ 私はかがみや皆を裏切らない」

「…うん。今の私にはそれに答える事は出来ないけど…だから。っ！ ガルダイン！！」

自分達に向かって来た投剣を疾風魔法で逸らした。逸らされた投剣は勢いを弱め少し離れた場所に音を立てて落ちる。

かがみはこなたの直ぐ隣に立ち、何時でも対応出来るように魔法の準備を整えていく。

「あんたを守る、それだけは約束するわ。あんたはあんたに出来る事をやりなさいっ！」

「ありーっ かがみっ！」

（大体の行動パターンは見えて来たわね…こなたもう少し銃を右に寄せて）

（うん、この辺かな？）

（それで良いわ。後は私が言ったら引き金を引くのよ？）

(了解だよ！)

あなたはアンナを見つめ、撃つタイミングを計る

(……………今よっ！！)

「いつ……………けえええええええええっ！！」

「やっちゃえ！ こなたあーっ！！」

かなたの声と共に、至高の魔弾「ピ」を撃ち出した……………

…！

深い恋愛をする者達が示した…

他者と心が通じ合う…その喜びと素晴らしさを…

Continue 118 〽何処までも理不尽な世界で??〽 (後書き)

フォルトウナちゃんにフラグ? が建ちそうな感じでした。

こなたはお母さんの目を借りて射撃するという裏技に近い方法を取り射撃開始! なのですよ。

で、かがみが知りたかった殺し云々。

納得はしているようですが、だからと言って割り切れているかは今の状態ではわからないですねえ。

さあ、今回はこの続きからですよ!。頑張れ私!。

どうでもいいこと

ケンタッキーを買ってきました!ー

私は普通で家族には辛いレッドホットチキンですよ。

ハラペーニョボンスは皆食べてましたが、皆して『辛くない』って言ってたので食べました!

ふふ…泣きそうなほど辛かったです(涙

皆さんは辛いもの大丈夫ですか?ー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 119 〱何処までも理不尽な世界で???) (前書き)

戦闘終了とアフター編かなー？

いやあ…もう10年分位戦闘描写書きましたよ…暫くは書きたくないな…

でも次の戦いではもっとと激しい戦闘描写が…げふう… (ころり

クー・フリーンが放つ怒涛の突きをアンナは紙一重で避け続けている。

一瞬の隙を突く事すら出来ず、彼女はどんどん追い詰められていた。本来得意とする攻撃方法は中々遠距離からの相手の攻撃を許さない程の連続投擲が彼女のスタンスであり、これほどまでの超接近戦は今まで体験した事が無い。

それでも英雄が放つ致死の一撃を回避し続けられているのは、長年の経験と天使による加護のお陰だろう。

しかし、彼女は人間。どれだけ強くても悪魔の様に何時までも体力が続く筈も無く、徐々に息は乱れ、集中が途切れかけてきていた。満足に攻撃する事も出来ず、攻撃しても容易く見切られそれ以上のスピードで襲い掛かってくる攻撃を回避すると言うのは、彼女に多大なストレスを感じさせている。

後一つ、何かが起きてしまえば瓦解してしまいかねないほど、アンナは追い詰められていた。

(どうか距離を取らなければ・・・このままでは相手の思つ壺です。しかし…っ！ 急いでつかさ様をお救いしなければ…っ！)

気持ちだけが先走っていく今の感情を無理矢理押さえつけ、何とかして目の前の敵を倒す方法を考えていく。

先程から投擲している投剣は打ち払われるか、回避されるだけで彼にダメージを与える事が出来ない。

（通常攻撃だけでは大してダメージを与える事は出来ない…ならば、使える手は全て使わなければっ！）

彼女は魔法が使えない…だからと言ってそれ以外の方法が無い訳ではない。

「受けなさい！ 刹那五月雨撃ちっ！！」

『何度も見た只の乱れ撃ち程度が俺に効くとも思ってるのかっ！』

クー・フリーンの言う通り、襲い掛かる剣群を高速の突きで撃ち落していく。

あっさりと全ての攻撃は無効化されようとしていたが、飛んでくる投剣の中に礫の様な物が混じっていた。

直感的に危険を感じ、その礫の様な物を撃ち落そうとするが、それよりアンナが行動する方が早い。

「発動しなさい！ シバブーストーン！！」

『なっ！？ がああああっ！ か、身体が動かねえ…だっ！！』

槍が礫 シバブーストーンを叩き割るより早く効果が発動される。

相手を金縛り状態にしてしまう魔界魔法シバブーを封じ込めた魔法石を投剣に紛れ込ませていたのだ。

普通に発動させようとしても、あれほどのスピードの持ち主には回避されてしまう可能性の方が高い。ならば回避できない状況を作り出せば良い

刹那五月雨撃ちの投剣群に紛れ込ませるようにシバブーストーンを投げつけ、後は避けるより、打ち壊す事を優先させたのだ。

勿論、その前に壊されてしまえばこの策は無意味になってしまう。彼女は賭けに勝ったと言えるだろう。

クー・フリーンは禁属性に耐性を持っていない。シバブーは言うなれば低レベルの束縛魔法だが、それでもまともに喰らってしまえば動きを止められるのだ。

だが相手はペルソナであり更には英雄であるクー・フリーン、この程度の束縛など直ぐに解除出来るだろう。

問題はその時間を彼女が許してくれるかどうかだが

「掛かりましたね悪魔！ これで終わりですっ！ その隙逃しません！ 刹那！」

全身の力と魔力を練り上げ投擲の構えを取る、一撃で殺す為に一瞬だけ力を溜め全力の一撃を放とうと

いつ……………！ けえええええええええっ！

「なっ！？ きゃああああああっ！？」

それがこなた達にとっては絶好のチャンスだった。

放たれた至高の魔弾コピィーは攻撃の為に硬直してしまい、回避する事が出来ない彼女の右肩を文字通り粉碎し吹き飛ばす。

その衝撃と共にアンナは吹き飛び壁に激突する。その時に頭部を強く打った様で、彼女はそのまま気を失ってしまった。

吹き飛んだ右腕が血飛沫を撒き散らし、回転しながらその場に落ちていく。

あれだけのダメージにも関わらず未だに彼女は生きているようだ

『ちっ…まあ、仕方ねえか。どっちにしてもありゃあ俺の負けだし

な…』

シバブーの効果を無理矢理打ち破ったクー・フリーン。

真剣勝負を邪魔されて少し機嫌が悪かったが、そもそも自分達は援護にやってきた事を思い出し、納得しておく。

『どうやら、他の場所も勝負がついたようだな』

彼の言う通り、仲魔達によってヴィクターは倒され、神父もたった今リュウキツコウシユによって殺された。

部屋の外から聞こえてきた振動音や声も既に疎らになっている。

本来つかさを救出して逃げ出す、と言うプランだったのだが、かなり苦労はしたもののメシア教過激派を叩き潰したのはこれからかなりのアドバンテージになるだろう。

「いよっし！！ 後は止めだねっ！」

こなたが倒れているアンナに止めを刺そうとした時、まったく違う方向から彼女に銃弾が撃ち込まれた。

「んなっ！？ 最後に美味しい所持つてくとかずるくない？」

こなたがそう言って振り向くと銃を構えていた皆方の姿を捉える。

「なあに、このままだと忘れられそうだったんだでな」

銃をしまいつつ、何時も通りのポーカーフェイスのまま皆方はこなた達に近寄ってきた。勿論万が一の為を考えてつかさも連れて来ている。

「つ、つかさっ！！」

「あ……あー……」

「つかさあ……良かった……」

改めてつかさに駆け寄り抱きしめるかがみ。精神的に壊れてしまっただとは言え、大事な家族であるつかさが生きていてくれた事が嬉しかった。

元に戻るかどうか心配だが、それでもまずは助ける事が出来た事を喜びつつつかさをより強く抱きしめる。

『感動の再会って奴が、良いもんだな……で』

そんな中クー・フリーンが目つきを鋭くし、皆方を睨みつける。

少しばかり怯んだものの、皆方は真正面からクー・フリーンに相対する。

英雄の殺気を間近で受けて尚、平静さを失わずに居られるのは彼もまたかなりの修羅場を経験しているからだろう。

『どういつつもりだ？ あの女殺してないだろ？』

クー・フリーンの言う通り、銃で追撃されたにも関わらず未だにア
ンナは生きていた。

先程皆方が発砲した銃弾は通常弾では無く、睡眠効果のあるガイア
教特製の麻酔弾だった。

主に相手を殺さずに確保したい時につかう弾丸である。

「え……？ どういう事……？ 事と次第によつちや、ちよつと痛い
目みるよ？」

「おいおい、物騒だな。勿論これからの事を考えての捕虜だよ。殺
すより数倍使えるだろう？」

『……成程。確かに常套手段だなそりゃ』

「うわ…汚い、ガイア教汚いよ」

その言葉にクー・フリーンは少しいぶかしみながらも納得し、こなたは皆方のやり方に対して少し否定の言葉を並べる。

こなたも確かにその有益性は理解しているが、堂々とそんな事を言う皆方に多少呆れていた。

「まあ、否定は出来ないが…だけどな？ 核を降らそうとしているのは天使とメシア教なんだ。もしかしたらコイツが情報を握ってるかも知れないだろ？ 彼女も幹部だからな」

「あ…そか。上手く行けば核を止められるって訳かあ…良く其処まで思いついたね、この戦闘中に」

「それが俺の仕事だからなあ。やれやれ、ただ見守るだけってのはしんどいぜ、一気に老け込んだ気分だ」

「そのまま老化すれば良いのに」

それでこの話は終了する。

上手く行った 皆方は心の中で安堵した。色々有益な事を並べたが、はつきり言って賭けに近かったのだ。

アンナは一度大樹を殺している。その為こなたが冷静ではなかったら、確実に殺されていただろう。

（何にせよ、目的は達成。此方の被害はほぼ0でメシア教過激派は事実上壊滅か。アンナも確保出来たし憂いは幾つか無くなったな。しかし俺も珍しく焦ったか、仕方無いと言えば仕方無いんだが…。だが、ガイア教の隊長としてはこの体たらくはさらせんな）

こなたがアンナを撃った時、全身が冷たくなるような感覚に襲われたがそれを無理矢理自制し成り行きを見守った。

あれだけの攻撃を受けてもまだ死んでいないことにホっとしつつ、頭を撃たれた訳では無く、腕を打ち抜かれ気絶した事に安堵と怒りを緋い交ぜにしながら。

「さて、このまま死なれたら意味が無いし最低限の回復はしておくか」

そう言うのにアンナの下に歩み寄り症状を見る。

麻酔弾を打ち込んだ為、今は寝ているようだが、表情がかなり悪くなっていた。

千切れとんだ腕を回収し、今も尚血を流す肩部分に回復の魔法石を使用する。じわじわと傷が塞がっていくがやはり吹き飛んだ腕を繋げる事は出来なかった。

隻腕になってしまうと考えると遣る瀬無く感じる皆方だが、それで

も生きていただけマシだと無理矢理納得する。

「さて、こんなもんかね。後は能力を封印させて束縛して捕虜として扱うか」

全回復には流石に程遠かったが血は止まり顔色が多少は良くなっていった。

死亡する確率は減ったので、後は治療班に任せることにする。勿論その時も最大限の束縛は必要になるが。

（死ぬなよ…アンナ…）

先程彼が言った捕虜云々は方便ではなく勿論事実だ。

メシア教の幹部でもある彼女、少なからず大天使との繋がりもあるのだから核についての情報も持っているだろうと考えている。

出来ればアンナの他に神父も生け捕りたかったが、本来は直ぐに逃げる事を想定して居たので、この状況はガイアにとっても彼にとっても最善ではないがベターの結果だろう。

死にかけているとは言え娘を確保できたし、聖母は無事でメシア教過激派はほぼ機能停止している。

作戦は予想以上の成果をあげ、大成功と諸手を上げて喜んで良い

状況なのだから。

『とりあえずリュウキツコウシユも消えた事だし、俺も行くぜ。あいつがそろそろヤバそうなんだな。じゃあな嬢ちゃん達、強かったぜ？』

「一応ありがとって言って置くよ。早く戻って大樹君の負担を消してくれる？」

『おお、怖え怖え。気の強い女は好きだぜ。それじゃあな』

からから笑いながら言うところ、フリーンは大樹の心の海の中に戻っていった。彼も一応は大樹を心配している様で、特に何も言わず消えていく。

それを確認しカンショウとバクヤも心の海に戻ろうとしたが、その前に最後に力を解放した。

『どうやらオオミツ又達も戻って来た様だ、最後に一仕事終えて戻るとしよう』

『ええ………戦士達よ、良く戦いました。しかし、まだ貴方達の戦いは終わっては居ない……あなた達に癒しを……』

ミックススレイド【魂捧げの祈り】

大樹達を暖かな光が包み込んでいく。

同時に疲労感が消えて行き、HPとMPが大幅に回復していった。

消耗の激しいみゆきは全快には届かなかったが、その場に居た全員が直ぐに戦闘可能になるほどの活力が湧いてくる。

「これは…凄いですね。問題無く戦えそうです」

「私とかがみはそもそも其処まで戦ってないしねえ。皆はどう？」

『こつちも問題無いわね、直ぐにでもいけそうよ』

「戦闘不能のシルキーとじゃあくフロストは…流石にだめか。アメリアちゃん、後でサマリカームお願い」

「らじゃーです。でも、ご主人様が…」

『問題無い、後は我等が戻れば直ぐに良くなる筈だ…しかしこれ以上の無理は出来ればさせたくは無いがな』

『んじゃ、とつと戻れ。サマナーもそろそろやばいんだろ?』

少し苛立ちながらキンキがカンシヨウに言う。

『無論だ。戦いはまだ続く…戦士達よ、常に我々は汝等を見守っているぞ……………」』

カンシヨウとバクヤがゆつくりと消えていく。

完全に姿が消え…それと同時に大樹はその場に倒れる。

駆け寄るアリスとこなた。直ぐに様子を調べたが……………」

『よかったあ…眠ってるだけだよ…』

「うん…大樹君無理しすぎだよ……………」ところでアリスちゃん。さっきまで居なかつたっばいけど何所に居たの」

『ずっと居たじゃない! 飛んでくる投剣の殆どは私とかがみで防いでたんだからっ!』

こなたとかがみが真剣に会話している所を流石に邪魔する訳にも行かず、アリスは少し後方に離れながら大樹とこなた達を守る事に専念していた。

MPは大半を使い果たし、アンナと戦うには色々と心許ない為、
敢えて援護に回っていたのだ。

戦力的にはクー・フリーン一人に任せておけば問題無い上、其処に
こなたとかがみが居たので自分は大樹をメインで守り、相手の攻撃
に対する盾の役割をこなしていたりする。

後、万が一の為に増援の事も考えていたが、其方は問題無く倒し終
わったので気にする事は無かったが。

『あんだね…漫画か何かの『存在忘れて途中でハブかれてました』
とかじゃ無いんだから…』

「じよ、じよーだんだよじよーだん。でも……はあ、これで漸く片
方終了だよ」

『もう10年位戦いたくないわよ、私だって…大樹さんとゲームし
たいなあ』

「私も…とりあえず少し休んで…」

「つ、つかさつ！？　つかさつ！！　どうしたの！！」

二人が休憩を取ろうとした時、かがみの切羽詰った声が聞こえてき
た

戦闘終了!!!

大樹はレベルが4上がった!!
こなたはレベルが7上がった!
みゆきはレベルが7上がった!
かがみは成長限界により成長しない!
仲魔達はレベルが5上がった!

大樹の成長限界が間近に迫っている.....
こなたの成長限界が間近に迫っている.....
かがみが覚醒しかけている.....
フォルトウナが進化の兆しを見せている.....

Continue 119 〱何処までも理不尽な世界で???(後書き)

アンナさん捕獲成功！ でも腕はダメのようです。戦力にはならな
いかもですねー。

佐藤君もペルソナが撤退して漸く一息、でも一つもセリフが無い！

いやあ…

頑張れ主人公(笑)

そして…つかさはどうなったのでせうかっ！ 次回をお楽しみにで
す！

でも期待されると困ります(え

どうでもいいこと

そう言えば漸く我が家も地デジになりましたよー。

流石にTVを買うほど私に余裕はありませんのでチューナーですが！
しかしTV見てないという私。朝のニュース位かなあ

皆さんが良く見る番組とがありますか？ それ見てみようと思ひ
ます！(マテ

Continue 120 〱何処までも理不尽な世界で?????〱(前書き)

のんびり出来ないアフターとはこれいかに、ですよー。

短めですがどうぞ！

んー……頭が痛いにや……最近調子が悪いなあ……寿命かなっ！(マテ

今日のお話は自分的に微妙です(汗 むむむむ……上手く書きたいな

あ

「っ、つかさっ!? つかさっ!! どうしたの!!」

急につかさが苦しみ始めたのを見て慌てだすがみ。

彼女は何かに耐えるように目を瞑り必死に腹部分を押さえていた。同時にそこから神々しい波動がつかさから溢れ出して来る。

その波動は徐々にだが強くなって来ているのが分かる。

「……………ああ……………ああああああ……………」

「つかさっ! しっかりしてっ! つかさ!」

「悪いが柊ちゃんどいてくれ!!」

かがみを押し出す様にして皆方がつかさを調べ始める。

重点的に腹部を調べ、持っていた機械を当て経過を調べていく。

『何所にそれ持ってたの? って野暮はどうでもいいとしてどうな

ってるのよっ。』

「まずいな…こりゃ」

「何が…何がまずいのよっ！ どうなってるの一体！！」

「どうなってるも何も、間違いなくメシアを孕みかけてる」

「なっ…！？ ど、どう言う事？」

「俺にも詳しい事は分からん…が、どうやらこの症状は彼女の中でメシアが誕生しかけているのを何か特殊な力が防いでいる様で、その力が弱まってきてる所為で互いに反発しあってる状態だ」

ガブリエルからの命を受けてヴィクターが施した受胎告知の効果は何らかの効果で防いでいた。

しかしその効果が弱まり、メシアを孕ませようとしていた力が選り深くつかさを侵そうとしており、それに対して抵抗する何らかの力が相反する事でつかさを苦しめている、と言うのが皆方の見解だった。

彼の考えている事は正にその通りで、今まで受胎告知を防いでいたのは万が一を考えてつかさが飲み込んだ文珠の【防】の効力である。能力が高くとも一定時間経てば効果が消える文珠が何故今まで保っていたのかと言うと、それは実に単純な理由だった。

文珠はつかさの内部で霊力の膜となり、つかさ自身のMPなどを供

給する事で防御膜を張り続けていた。

しかしそれにも限界が訪れる。つかさが廃人となり、本来与えられる筈のMPや精神力が供給されなくなっていた。

それでも横島忠夫の霊力で作られた文珠は【防】の役目通りたった今まで彼女を守り続けてきたが、遂に限界が訪れる。

日に日に強くなるメシアの魔力が、供給の切れた文珠の防御を突き破りかけているのだ。そしてそれを防御する為に文珠が残った全てのエネルギーを暴走させる事で抵抗をしている…

その為霊力同士がぶつかり合いつかさの魂と肉体を傷つけていたのだ。

「じゃ、じゃあそれをなんとかすれば！」

「何とかしたら彼女は完全にメシアを孕む事になるな。それ自体が強力な神の使徒とされるメシア…そんな強大な力を持つ存在を孕めば、ここまで精神的に深いダメージを受けている以上、恐らく彼女はもう永遠に元には戻らんかもしれん」

「んなっ！ どうすりゃいいのさっ！」

こなたが皆方に食って掛かるが、彼としても流石にどうする事も出来ない。

『メシアって奴の魔力を消せば良いんじゃない？ 防御してる方は多分有益な能力なんだろうし』

「簡単に言ってくれるけどな。そうそう如何にか出来るもんじゃないだろうこれは…」

「確かにそう上手くいく可能性は低いですね。でも、何とかしなければつかささんが…っ！」

『次から次へと、運命って奴は余程オレ達が嫌いかね…ちっ…気に食わねえ』

メシアを身籠ったとしても、それを導く天使もメシア教の幹部も既に居ない為、身籠ったとしてもそう大した問題は無いと考える皆方最悪は流産させてしまえば良いし、万が一産むとしてもその後殺す方法なら幾らでもある。

だが、それはメシアに対する手立てであり、今現在苦しんでいるつかさを如何にか出来るか？ となると話は変わってくる。

「どちらにせよ、このままだと母体である彼女にかなりの負担を掛ける事になる。どちらかが完全に収まらない限り彼女は内部の力に耐え切れず死ぬ…で、可能性としては守っている力が消える方が濃厚だな」

「そ……………んな…嫌よ…嫌よ…嫌よっ！ 何でつかさが、つかさがこんな目に合わないといけないのよ！ 私達姉妹が何したって言う

のよおっ!! つかさあああああっ!!」

「かがみさん……小竜姫、何か手立ては……?」

「すみません……私は武神ですから其方の方面は……」

「かがみ……他に方法は……」

何か手立ては無いかと考えるこなた。

今現在使えるもので、つかさをメシアから守り救う方法を考えているが混乱しかけている今の状態では良い方法が思いつかない。

(お母さん。何か方法無いかな……?)

(ごめんなさい。回復魔法なら出来るかもしれないけど、多分意味が無いでしょうし、その為に私を呼ぶなら違う人が使えばいいし……)

「いや……さてよ? 方法が無い事はないね……だが、それを受け入れられるかだが……。可能性も低いが上手く行けば安全に彼女をメシア誕生の脅威から救う事が出来る」

「本当ですかっ!?! え、でも受け入れるって……?」

つかさの様子を見ていた皆方がかがみにそう告げる。

今の状態を鑑みて、自分達に今出来る唯一の方法を思いついたのだが、しかし、それをかがみが受け入れられるかどうかは難しいのだが

『ああ、成程な。確かにそりゃ上手く行けば御の字だけだよ？ そ
うそう上手く行くのか？』

「ど、どういう…事？」

皆方の考えた案をキンキとグクマツツ、そしてオーカスは理解して
いる様だった。

そして、それが上手く行けば確かに彼女は救われるかも知れないと
言う事も、しかしかなりリスクな方法の為に皆方は少し口籠って
しまう。

『我が話してやろう。どちらにしても時間が無いのだろう？』

「お願い……するわ…」

かがみが知っている皆方は、余程の事が無い限りはズバズバと物を
言うタイプだ。その彼が口籠ってしまう程の内容。

つまり自分とつかさにとって碌でも無い内容なのだという事は理解
する。

その上で敢えてオーカスの言う話を聞く事にしたかがみ。

しかし彼の口から出て来た言葉は槍の様に鋭くかがみの胸を貫いていく

『この世界で生きていれば容易に思いつく単純な方法だな。其処にいる小娘を殺してしまえば良い。流石に死体にはメシアも宿れんだらうっ？』

「まったくもってその通りだよ。現時点ではこれしか方法が無い」

柊つかさ嬢を殺す事でメシアの受胎を防ぐ

それを聞いた瞬間かがみが感情を爆発させた。

「!?!? ふ、ふざけるんじゃないわよ！　つかさを死なせたくないから悩んでるのにつ！」

『…成程ね。アンタ達の言う通り名案と言えば名案だわ』

フェニックスが納得したように手をポンと打つ。それを見てフェニックス達をキッと睨みつけるかがみ。

それを見てもオーカスはまったく気にした風も無く会話を続けていく。

『戯け。それで終わりならそもそも名案な筈があるまい。要は一度殺して蘇生させれば良いと言う話だ。丁度アメリカがサマリカームを覚えているしな』

「あ……」

「人間の死亡にもサマリカームは効果があるですよ。ちょっと疲れてるのでMP回復剤が欲しいですがっ！」

「で、でも……だからって殺すのは……それじゃ私何の為に……」

一度殺してから蘇生を施してメシアの誕生を防ぐと言う考え……確かに間違っていない方法だろう。

命を軽視するような案ではあるが、蘇生魔法が存在するこの世界ならば理に叶った方法でもある。

リカームもサマリカームも遺体が酷く損傷していなければ、魂が完全に消えていなければ蘇生は可能だ。痛み無く殺し、メシアの誕生を防いでから蘇生させるのも案としては問題無いだろう。

だがそれでも、かがみには自分の妹を一度殺して蘇生させるというある意味本末転倒な事をするのは躊躇われた。

「だが、現時点で一番可能性のある方法だぞ？ このままじゃどっちにしても柸つかさ嬢は死ぬ。それも唯の死じゃない、これは魂の死かもしれない」

『魂が消えれば蘇生しても、残るのは唯の肉塊じゃからのう。悪い話では無いのう』

『受け入れねば…カ。ダカラト言ッテスグニ実行ニ移セルカドウカ
八別問題デアロウ』

「……………」

（他に方法があるとすれば……………大樹君がくれたこの文珠と、拾ってまだ返してない文珠の合計3つだけど…これでどうすればいいんだろ…）

大樹がくれた金文珠の他に残っている文珠が後2つほど残っている。

これを連続して使えば上手く行けばメシアの誕生を食い止められる可能性があった。こなたも現在つかさを守っている力が文珠か何かだと言う事は大体理解している。

1個だけでメシアの誕生を今まで防いでいたのだから、この3つを使えば完全に誕生を阻止できると踏んだ。

（問題は…この後の切り札が消えちゃうって事。つかさも大事だし何とかしたいけど、この後の変態との戦いを考えると切り札を失うのは痛いよ…）

つかさを助けたい、しかしその為にはこの後の戦いの為に必要な切り札を使ってしまう事になる。

命の掛かった戦いになるのは間違い無く、その為には最悪の事を考えて置かなくてはならない。

(悩んでる暇なんて…無いのに…私はっ！ 待っててつかさ、今助けるからっ)

拳を握り締めるこなた、直ぐに文珠を取り出そうとした時、歪な形の短剣が目につく。

それは金剛神界でエンノオツヌから受け取った魔力を持つ短剣だった。戦闘用には使えなさそうな怪しい光を放つ短剣を見てこなたは思い出す。

(あ…これは…)

何れ必要になる時が来る。それを使うかどうかは汝自身だ…しかし努々忘れるな、それを使う時…汝は究極の選択を迫られる事になる

絶望するかも知れぬ、憎悪に身を焦がすかも知れぬ……だが覚えておくといい、それは汝にしか出来ない事だ

エンノオツ又の言葉を思い出したこなた。これがいつか必要になる時が来ると彼は言っていたのだ。

もしかしたらエンノオツ又はこの時の事を言っていたのかもしれないと感じる。

ならばこれはつかさを救うアイテムになるかもしれないと考え、かなたに聞いてみる事にする。

(ねえ、お母さん。この短剣、何だか分かる？ あの時エンノオツ又がくれた短剣なだけだよ……)

(…これは。私にも分かる位強い呪詛が込められてるわね。うん、上手く使えば結界や聖なる力とかを破壊出来るかも知れないわ)

アムルタートの化身になっているかなたは、本来のアムルタートの経験や知識を有している為、ある程度のマジックアイテムを調べる事が出来る。

彼女が見る限り、こなたが持っているこの短剣は殺傷能力すら皆無に近い物の、このマジックアイテムに込められている怨念の様な物が歪な力を持っていた。

その効果は強力な怨念が呪詛と化し、他の力に割り込む事でウィルスのように他の能力を破壊する事が出来るかもしれない事が分かった。

つまり様々な結界や能力を無効化、もしくは破壊出来る能力があるのだ。

(それじゃ、これをつかさに使えばっ!?)

(可能性…ううん、これだけ強力な呪詛ならつかさちゃんを蝕むメシアを防ぐ事も出来るかもしれないわ)

(いよっし! 運が向いてきた!! エンノオツヌも偶にはまともな事をするもんだねっ!!)

(でも…本当にこの時の為に手渡したのかしら…あの人の事だからもしかしたらもっと違う時の為にこなたに渡した可能性もあるわ…)

(あ……)

絶望するかも知れぬ、憎悪に身を焦がすかも知れぬ……だが覚え
ておくといい、それは汝にしか出来ない事だ

それを使う時……汝は究極の選択を迫られる事になる……

それを使う時……汝は究極の選択を迫られる事になる……

それを使う時……汝は究極の選択を迫られる事になる……

(私は……………!!)

選べ……………汝等の求める救いの道を……………

1……?????????を使う

2……持っている金文珠をありったけ使う

3 一度殺してサマリカームとせる

文珠君ギリギリでも頑張ってるようです、でもそれとメシアばわーがぶつかり合ってつかさを傷つけているという悪循環。
こなたは一体どのような答えを選ぶのでしょうか！

という訳で再度選択肢なのですよー。

基本的に???も文珠も使えば無くなります、デメリットが無いのは殺して蘇生でうすねー。

良かったら投票お願いしますねっ！

注) 今回の感想、もしくは『どうでもいい事』のどちらかが書いて下さい。

単純なアンケートだけの投票は申し訳ありませんが無効票とさせて頂きます、ご了承下さい。

どうでもいいこと

今日は朝から何にも食べてないです…微妙に食欲が無くて…
せめておかゆ〜と思ったのですが、だめでした…うげふ…
今日はそろそろ寝るのですよ〜

所で！ 皆さんがコレクションとかしてるものありますか？

私は未だにマジック・ザ・ギャザリングのレアカード保存してますよ〜

後はアクエリアンエイジかなあ…

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

皆さんアンケート本当に有難う御座います！

という訳で16時までで締め切りになりました。次回からは制限時間書かないとだめかな(汗

沢山のアンケート本当に嬉しいですよ。

今回はこのようになりました。

総計35票+時間オーバー2票

1：05票：バッドエンドフラグ構築(回避不能)。つかさ、かが

みコミュ回復

2：19票：バッドエンドフラグ構築(回避可能)。つかさ、かが

みコミュ回復

3：10票：つかさ覚醒フラグ構築(L/N)。つかさコミュ回復、

かがみコミュ抹消

4：01票(汗：HPで書くフラグ(笑

さて、そろそろコミュアンケート終了の時間が近づいています。

このまま決まってしまうのでしょうかー。

まあ、ヒロインが決まったとしてもルート変更とかはないですが(汗私の技術力じゃ無理です…

でも個人のエンディングとバッドエンディングは用意してるですよ。

Continue 121 〱何処までも理不尽な世界で????

「つかさぁ…どうして…どうしてよぉ…!」

「かがみ、悪いけど退いてくれる?」

「こな…た?」

「アリスちゃんにキンキ姉さん悪いけどちょっと其処の隊長を頼むよ」

「お…? どういうこつた? 泉嬢?」

「はいはいはい。見られたくないって奴よ。それとも何? ガイア様は女の子恥ずかしい事を覗き見るのが趣味?」

「まあ、妥当な選択だな。ほれ、さっさと行くぞ、残党が残ってるかもしれないからな。警戒ついでだ」

『ならワシも付いていくかのう。ヒョーヒョーヒョー』

仲魔達に引き摺られる形で皆方は部屋から強制的に追い出された。

終始不思議そうな顔をして居た様に見える皆方だが、何か打開策があったのだらうと睨んでいる。

恐らく切り札的な物を持っていて、それを自分に見せたくは無いのだと言う事は分かったので大人しく連れて行かれる事にした。

騒いでも意味が無いのは分かってるし、切り札を見せたくないのは理解出来るので致し方無いと考える事にした様だ。

皆方が部屋から離れたのを確認したあと、懐から小さな袋を取り出す。

「迷ってる暇なんて無いしね…ごめん大樹君」

取り出したのは黄金色に輝くビー玉サイズの珠 金文珠。

それが3個あなたの掌に乗っていた。

(この場合はどういう文字が良いのかな。【墮胎】？ 【抹消】？
後者だったらつかさも消えそうではいいし、墮胎って言ってもそもそもまだ宿ってないし…)

つかさを助ける為に必要な文字を考えていくあなた。

しかし、彼女は一つだけ知らない事がある……文珠の連結が可能なのは主に大樹だけなのだ。

こなたが文珠を連結させようとしても、それを連結させて効果を上昇させる事は不可能である。

「それは…佐藤さんの文珠。成程、その手がありましたねっ！」

「まーね。これを使えばきつとつかさも助かるよっ！」

「こなた…でも、それ…」

「あ、かがみは知らなかったかな…？ これは文珠って言って、単に言えばスーパードールアイテムだよ。文字を込めて発動するとその通りの効果になるって言うね」

「そっか…だからあの時…つかさを守ってるのももしかして…」

「ええ、恐らく…いえ確実につかささんにお渡しした文珠だと思います。なのでこれを使えば受胎を防ぐ事も可能…ですな小竜姫」

用途によっては神や悪魔も退けられる現代の神具ですからね、メシア程度の霊力なら問題無く追い払えると思います。

「でも…これ大事なんですよ？ 次の戦いでも…」

文珠の利便性や効果を聞き、驚きの表情を見せるかがみ。

だからこそ、これから直ぐにこれ以上の戦いになるかもしれない事が分かっているのに、こなたに文珠を使用させるのは流石に躊躇われた。

「へーきへーき。今はとりあえずつかさを救う事が先決だよ！ 私達が戦ってるのは家族や友達、仲魔の為なんだからそれを見過ごし

「ちゃ本末転倒だし、ね」

「こなた……………ありがとう…ありがとうっ！」

こなたの手を握り涙を溢すかがみ。

そんな彼女にこなたは優しく微笑み、開いている方の手でかがみの頭を優しく撫でていく。

「お礼は大樹君に言ってね。これ実は大樹君に返し忘れた奴だし」

返し忘れたお陰でつかさを助けられるのは皮肉な物だなと思いつつも、今は使わせてもらおうと文珠を握り締める。

そして、本題に入る事にした。

「という訳で何か良い文字は無いかな？ みゆきさんとかがみん」

「だぁあっ！？ 考えてなかったんかいっ！？」

思わずつんのめるかがみ。

シリアスが一気に吹っ飛んだ感じがしつつも、呆れた顔でこなたを見ている。

実は小さく笑っているが…

「私が頭良さそうに見えるかね、かがみんや」

「威張って言うな」

「そ、そうですね…基本的には【墮胎】が良いかもしれませんが…宿っては居ませんから意味無く消えてしまう可能性もありますね。そうなるかと…」

「そうだった！ 【無】はどうっ？ メシアを無に変えちゃえば消えるかも！」

『良い考えかもしれないわねえ』

「となれば1個でいいから二つ余るけど…そうだ！ 【回帰】とか【回復】でつかさの精神の回復出来ないかな？」

「……な、なんか色々なんでもありね」

文珠の利便性はある程度理解出来ていたが、ここまで来てしまうと流石にかがみもコメントし辛い様だった。

それが文珠の恐ろしい所です。ところでこなたさん、すみませんが貴方も文珠の連結が出来るのですか？

「へ…？ 出来ないの？」

キョトンとするこなた。

小竜姫もこなたが普通に複数繋げる事をメインとして会話していたので、一応聞いてみたようだ。

連結して使えるなら問題は無いのだが、失敗すると文珠が無意味に消滅してしまう可能性もあるので問い質してみたのだ。

途端に挙動不審になるこなた。まさか繋がられない可能性があるとは思っても居なかった様子で、文珠をまじまじと見つめながらどうしようと思ひ出す。

「ど、どうでしょう……とりあえず【無】は一字ですし、これだけでもいけると思うのですが」

そうですね。この文珠は佐藤さんの能力な筈ですし、佐藤さんが目覚めれば連結も可能な筈です。彼に頼むのが一番かもしれませぬ。まずは彼女を救いましょうっ！

「そだね、かがみも良いかな？」

「うん……お願いこなた」

「任せてよ。いつも元気なつかさが私達も大好きなんだからさ」

では、私はそれを補助しますね。まずは文珠に念を……

小竜姫に言われるままに金文珠に【無】の文字を刻み込む。

文珠を使うのは文字とイメージが大事と聞いていたので、こなたはメシアが無に帰す事を強くイメージしつつかさの腹部に押し当てていく。

「お願い……つかさを助けてっ!!」

大きな光がつかさを包み込んでいく

……

……

……

「……………」

呻き声と共にゆっくりと大樹が上半身を起こす。

目覚めたばかりで歪んでいる視界が元に戻ると、直ぐ隣に座っているこなたとかがみが見えた。

その直ぐ近くではつかさが静かに寝息を立てている。

「大樹君っ！ 良かったあ……………」

「佐藤君…良かったわ」

大樹が目覚めた事で喜びの表情を見せるこなたとかがみ。

直ぐ近くには涙を流しているフォルトウナが居るだけで、周りには他に誰も居なかった。

「……………」こなたに柊さん、それにフォルトウナ…あれ？ 他の皆は一体…？」

「今は警戒と探索中。かなり消耗が激しかったしここにある回復剤とか貰ってる途中だよ。私達は休憩」

「そうなんだ……………」

「あんまり無理しちゃだめだって!!」

「そうよ？ 魂削る技だなんて、佐藤君は少しやりすぎだと思うわ」

全身の倦怠感と、頭痛でふらふらとしているが気を失う前の大体の事は覚えていたので確認を取る事にした。

「メシアの幹部は、どうなったのかな？」

「神父は死んで、大天使も死んだよ。核の情報を得るためにシスタは捕まえておいたけどね。今はガイア教の下っ端が搬送中」

「周りに居たメシア教も全員居なくなってたから、問題無く探索出来てるらしいわ」

「みゆきさんも警戒に行ったよー。みゆきさんも大樹君の事すごく心配してたんだからね？」

メシア教徒達が居ないと言っより、実際はほぼ全員殺されているだけだったりするのだが。

ちなみに人体実験により洗脳されたメシア教徒達は、はいよるこんとんの命令で既に他のメシア教のシエルターに誤情報を流しに行っている。

オオミツ又達の活躍により、既にこのビル内の全てのメシア関係者

は全滅していた。

今現在はガイア教徒達が物資を強奪している最中である。

シスター・アンナについては武装を解除し嚴重に力の封印を施した上で、ガイア教徒の基地に連行されている。

『ご主人様っ！ どこか痛い場所などはありませんかっ！？ 私… 私、心配で…』

大樹の周りをピコピコしながら飛び回るフォルトウナ。

先程までは大樹が起きたら叱る、などブンブン怒っていたのだが、大樹が目覚めたと知るや彼の身を心配して世話を焼こうとしている。

大きさの問題で出来ない事ばかりなのは言うまでも無いが。

「ごめん、フォルトウナ。僕自身まさかあそこまでキツイとは思ってなかったんだ…うん」

（今度横島に会ったら、僕は彼を全力で殴っても良いと思う…まあ、お陰で助かったただけだね…出来れば二度と使いたくないな…）

魂を削られるような激痛を耐えながらの召喚は流石に大樹も堪えた様だ。

余程の事が無い限りは永久に封印しておきたいものだ、溜息をつく。

そこで漸くつかさの事を思い出し、がばつと立ち上がろうとする大樹だが、疲労が限界まで来ていた為、直ぐに倒れこんでしまう。

「だめだつてば！ 少し休まないと…時間はメシア教潰したお陰で余裕あるんだし、少し休もうよ」

「それがいいわ。後は異界だけなんだし、今は休んで核の事を聞いたりする時間とかを取った方が良くわよ」

「いや、そつちも大事だけど、妹さんは大丈夫なのかな…つてね」

「あ…それなんだけど…つかさは何とか無事よ。さっきまではかなりやばかったんだけど…佐藤君の能力のお陰で今は落ち着いてるわ」

「僕の…？ こなた、もしかして？」

「うん。アレ使っちゃった、ごめん」

「いや、別に良いよ。どつちにしても文珠は必要だつて考えてたからね…つてガイアの隊長は？」

ぼろつと文珠の言葉を出してしまった後で、皆方の事を思い出し焦ったように辺りを見回す大樹。

そんなうつかりな所を見てクスクス笑うかがみとこなたが皆方は外

でガイアを指揮している事を教えると、頭を押さえて良かったと言わんばかりにホっとしていた。

「いやあ、大樹君はすっかりさんですなあ　　一二三一二三」

「その顔やめなさい。で…実は」

「ん？」

大樹につかさの症状を話していく。

こなたが大樹が落とした文珠を拾っていた事に驚きはしたものの、それがあれば回復させる事が出来ると聞かされる。

現在の大樹は5つ文珠を連結して使う事が出来る為、【回歸】程度ならば直ぐに行える事を伝えるとかがみは輝かんばかりの笑顔を見せた。

「じ、ごめんね今まで返さなくて…その…」

盗んでいたと言っても良い状態なので、もしかしたら大樹に嫌われるのではないかと、今になって震えているこなた。

大樹としてはオグン戦闘時に使おうとしていた【脱出】の文珠。更に言えば湯水のように使える時に無くした文珠であり、そもそも無くした事も忘れていたので気にしてなかったりするが。

「いや、寧ろよく拾ってくれたね。ガイアに回ってたらと思うとゾっとしないよ。それに今ある2つがあれば僕の分を消費しないですむし、ラッキーとも言えるね」

「あ、うん」

「ほうほうほう」

「か、かがみん変な顔しないでよっ！ と、とりあえず返すねっ！」

「どうも…さて、それじゃ早めに終わらせようか。妹さんをこのままにしておけないしね」

【回帰】と文珠に文字を入れ、大樹は文珠を発動させる。回帰させる時間は大樹達のみゆきの家で別れたあの時まで。

人間一人の時間を巻き戻すと言うある意味神の所業、明確なイメージが無ければ何の効果も無いまま終わってしまう。

「悪いんだけど、こなた、柊さん。僕の手…正確には文珠なんだけど、それに触れてイメージしてくれないかな？ 普段の妹さんを、制御の方は僕がやるけど、妹さんを深く知ってるのは二人だし」

「おっけー！ 任せてよっ！」

「分かったわ。こ、こうでいい？」

「おおお？ かがみん顔が赤いよ？」

「う、うっさいわねっ！ 男子にこうやって触れるなんて滅多に無いから…その…」

「行き成りで悪いけどさ…うん。妹さんの事を思って我慢して欲しい」

「私は実は役得だったり なーんてね…さて、本気でいこっか」

「ええ…つかさ…」

大樹はあの時に見たつかさの笑顔などを思い出しながら、こなたとかがみは今までのつかさを思い出しながら、文珠にイメージを送っていく。

金文珠はイメージを受け取り、淡い光を放ちながらつかさを覆っていく………

ゆっくりとつかさを包み込んだ光が収まっていった。

文珠は役目を果たして消え去り、後は経過を待つだけになる。

「後は、目が覚めるのを待つだけ…だね」

「つかさ…」

「……………お願い…お願いっ!！」

「……………バルサミコ

酔)……………」

「「だああっ!?!」」

よく分からない寝言に思わずずっとこけるこなたとかがみ。

大樹はそう言えばこんな寝言も言ってたなあと、漫画で見た事を思い出していた。

「こ、これって…治ったのかな」

「わ、分からないわ…でも、こんな不可思議な寝言、つかさしか言わないだろうし……………あれ……………また…涙が……………ふ…う…う…う……………」

「かがみ…ほりゃっ」

「!?!」

笑いながら涙を流すかがみを抱き寄せるこなた。

かなたの様な慈愛の笑みを浮かべながら、抱き寄せたかがみの背中を優しく撫でていく。

「今は泣いた方がよいよ、胸無いけど貸したげるから」

「ば……か………うううう………あああああ………あああ
あああ………」

こなたの胸の中で泣くかがみ。

彼女は子供の様に泣きじゃくるかがみを優しく抱きしめながら、同じく涙を流していた。

それを見守りつつ、ゆっくりと立ち上がる大樹。友人を救えた実感を噛み締めつつ、残りの問題についてまた考えていた。

……こなたは金文珠を全て消費した。

かがみが大樹とこなたに深い友情を感じている……
つかさの精神状態が回復した。

という訳で、やきもきさせる事無くつかさが回復ですよー。

寝言がバルサミコ酢なのがつかさかと思ひまして(えー

???)の場合は同時に壊れていた精神も治つてました。

殺して蘇生の場合は壊れたままでコミュ開始(療養を見守る〱)でしたね。

かがみは仲間から外れてしまいましたが(つかさを看る為に)。

あと1〱2回でコミュパートに挟むかも知れません。

もう少し感想返しはお待ち頂けると嬉しいです。よーし明日は忙しいから寝ないとー。

どうでもいいこと

んー、あんまり回復しないです。

明日はかなり仕事忙しくなりそうなので、補給が重要ですね！

という訳で弟にカロリーメイトをかってきてもらいました。

もぐもぐ…もぐもぐ…美味しいけど喉が渴きますねえ…

皆さんは栄養補給食品とか買いますかー？ うう…喉が…(パタリ

その後白亜を見た者は居なかつた……………(えー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 122 〱何処までも理不尽な世界で????〱 (前書き)

ご心配おかけしました。何とか体調も開放に向かってきたですよー
本当はもう少し休もうかと思いましたが、気が付けばPCの前にい
る私が居た(笑)

という訳で、生きてるです…生きてるですよー。

まあ、まだ微妙にふらふらするですが(笑)

今回は短い幕間…と言つか久しぶり? の 視点をどうぞですー。

Continue 122 〱何処までも理不尽な世界で????〱

メシア教本部ビル内休憩室

佐藤大樹視点

僕達は現在、全員基地潜入前に身体を休めている。

このビル内に居た全ての天使やメシア教徒達は既に殲滅済みな為、ゆっくりと休む事が出来るんだけどね。

はいよるこんとんが洗脳したメシア教徒は他のシエルターに回つて
る為、此処には僕達とガイア教徒しか居ない。

本当は直ぐに移動するかガイア教徒のシエルターで休みを取る事も
考えたけど、僕の疲労がかなり酷い所為か、ここで強制的に休む事
になった…まあ、妹さんも居るし仕方ないかもだけどね。

妹さんは柵さんが個室で見ているから特に問題ないだろう、未だ目
覚めてないのはそれだけ疲労が激しかったのか分からないけど…出
来れば早く元気な姿を見たいと思う。

それにしても…予想とは大幅に食い違ったけど、これはこれで結果
オーライなのかもしれないな。

メシア教はこの異界内においては幹部は全滅。シスターはこれからの情報を取得する為に捕虜にとつて居るらしいし、最悪【覗】の文珠で記憶を覗き見れる。

本来なら此処を直ぐ脱出して基地に向かうから時間が物凄く無かつたけど、そう急ぐ必要も無くなったから少しホっとしてる。

流石にこの激戦 まあ、僕は早々にダウンしてたけど の後直ぐ攻めるのは精神的にも体力的にも限界がある。

特に僕は、あのペルソナの多重召喚でかなり無理してたからね…：召喚し続けていた時の事はあんまり良く覚えてないけど、かなりきつかったのは覚えている。

出来れば二度と使いたくないよアレは。じわじわと自分を削られていく感覚って言うか…何と言うか拷問だしね。

メシア教が襲ってくる脅威は取り除けたし、後はこの異界と核問題か…：ガイアは後回しにしよう。今の所は共闘してるからね…：今の所は。

核が降り注げば恐らくニユクスが出てきて生物は絶滅する、そうやってしまえばおしまいだ。

異界に逃げ込むと言う手も考えたけど、そんな生易しい存在じゃないだろうし、その時は色々大変な事になりそうだ。

だから如何にかして核を発射させないようにしないといけないんだけど…：こればかりはシスターからの情報が鍵か。

核さえ此方で押さえてしまえば世界の破滅はとりあえず抑える事が出来る… んだけど、問題はこの異界の外がどれだけの時間が過ぎて
いるかって事だよね…

僕達が金剛神界に飛ばされた日… その次の日が決行日で、その次の日曜日に核が降り注ぐ。と言う事はもし時間が経っていなかったとしても、僕等の時間は1日程度しかない。

これで、日本の裏側にありますなんて言われたら詰むなあ… 文珠があればどうにかできるけど、二日に1個じゃどう考えても時間が足りない。

あえて異界の世界を引き伸ばす？ シェルターに居る限り悪魔はクズノハや自衛隊がどうにかしてくれるけど、それにも限界があるし、そもそも彼等のストレスの問題がある。

暴動が起きたらまずい事になるし… いつそ知り合いだけをどこか安全な場所に確保… そんな時間は無い。

「はあ…… 良い案が思いつかないな」

『何がだよ？ ほれっ、飲み物あったぜ？』

「キンキか。うん、ありがとう。丁度喉が渴いてたんだ」

考え事をしている内にキンキが部屋に入って来てたみたいだ… 全然気付かなかった。

彼女から貰った缶ジュースを飲んで喉を潤す。

直ぐに空になるジュースの缶。余程喉が渴いてたんだな僕は…

『で、何が思いつかないんだ？』

「あー……核の事だよ」

『この街に核を誘導する基地にあの阿呆を殺すついでに行くんじやねえか。それ以上に何かあるのか？』

「……まあね。詳しくは言えない、僕もまだ確信が持ててる訳じゃ無いから。でも僕の予想が正しいとしたら、この街を核から守るだけじゃ僕達は生き残れない」

『また何かあるのか…この世界はなんなのかね』

「さあ？ 僕が聞きたいよ。寧ろ神はこれを知っててやっているのか聞きたいな」

多分知らないんだろうけどね。知ってたらそもそもメシアを誕生させようなんてしないはず。

まさかメシアがニユクスに対抗出来る訳無いしね…あれは『死の概念』そのもの、それを覆してしまえば困るのは神々の方だ。

と言つよりそう易々と覆せる訳が無いんだけど。

『ハプニングとは言え、メシアは抑えて残りは後2つだと思ってたんだがなあ…で、何をどうするつもりなんだ？』

「それがさっぱりだよ。僕一人じゃ、いや数百人体制でもどうなるか分かったもんじゃない。レイ・レイホウにコンタクトを取っても上手くいけるか…かな」

彼女のコネや行動力を期待して、動く手もあるけど彼女がどこまで手を伸ばしてるかによって色々変わってくる。

そもそもこの異界を元に戻せたとして、直ぐに会えるか？ と言う話だ。携帯番号は抑えているから連絡は取れる可能性はあるけど。

あー…だめだ、頭痛くなってくるなあ。

「僕はそもそも其処まで頭が良くないんだよ…こういつ時にブレインが欲しいなあ…」

『高良みゆきが居るだろ？ そいつに話してみれば良いんじゃないのか？』

「確かに最悪は彼女を頼らざるを得ないね…でも、みだりにこの情報を流して、混乱させるのはこれからの事を考えると悪手だよ」

『そんなにやばい情報。触りとは言え、オレには話しても良かったのか？』

「キンキはそう言う事、人にペラペラ話さないしね。信頼してるよ」
『……………はっ。相変わらず身内にゃ甘いな』

そつぱを向くキンキ。微妙に顔が赤く見えるのは照れてるからなのかもしれないな。

まあ、仮に誰かに聞かれていても、肝心の内容を話してはいないから困る事は無い。というか誰かが聞き耳を立てていればキンキが気配を察知してくれるから問題は無いけど。

あの隊長が盗聴器を仕掛けている可能性はあるけど特に問題は無いさ、何の事だか分からないだろうしね。

ちなみにこなたと高良さんも今は妹さんを見ているはず。アリスとアメリカも付き添いで向かってる。

他の仲魔達はガイア教徒と一緒に辺りを警戒中だ。

『ところでよ、合体したてで何なんだがな…オレをまた合体させてくれないか？』

「…時間はあるけど。ああ、そうか僕もレベルが上がってるしもう少し強い悪魔になれるかもしれないね」

『ああ。今のレベルじゃ多分次の上位の悪魔が相手だとかかなり分が悪いからな、丁度良くサマナーもレベルが上がってるし良い頃合だろ？』

「たった数日で39レベルだしね…レベル20が限界だった頃が懐かしいよ。僕も十分人外になってきてる気がする」

『の割にやあ、弱いけどな』

「僕は平均的なタイプだからね。何所も特化してないけど基本色々出来る様になってるし」

正直言えば正面から挑むと同じレベルのこなたや高良さんにすら勝てる気がしない。

柊さんはレベル差もあるから押し込めるかも知れないけど、攻撃力の時点で僕は負けてる。

ペルソナやハーモナイザーの補正でステータスがアップしてなければ正直唯の雑魚だよな、僕は…スキルで戦うにしても地力が無さ過ぎる。

その分魔法銃やペルソナ召喚、文珠等があるんだけど。

『ま、サマナーが弱いならオレ達が戦えば良い訳だ。あんまり気にすんな』

「言ったのはキンキだけだね」

『意外に根に持つな』

「冗談だよ、冗談。それじゃもう少し休んだら邪教の館に向かおう。時間が空いてるっていいなあ……」

『ははっ、違いねえ』

「さて……僕はもう少し考えてみるよ。キンキは？」

『そうだな……オレも此処で少しのんびりさせてもらおうわ』

そう言うとソファに横たわるキンキ。

こうして見ていると、ただ角の生えた気の強い女性にしか見えないのがまた不思議だね。

そんなどうでもいい事を思いながら僕は、答えの出ない迷路の様な思考を再開した………

………

………

………

佐藤大樹視点解除

???

機械で埋もれた部屋に一つだけ、歪な形で作られた巨大な玉座の様な物がある。

深々と腰を下ろし足を組みながら、首を左右にゆっくりと動かしている。

彼は機嫌が悪かった。

何の事は無い、唯単に機嫌が悪かっただけだ。

威風堂々とした態度で、目の前に跪いている悪魔を感情の無い様な目で見ている。

「ふーん…で？」

『は…はい…ど…どつやらメシア教団が壊滅した様で…』

ガクガクと震える悪魔。

何かあれば逐一報告を入れると、言われていた為何時もの様に報告をしに来たのだが、彼はその玉座で目を瞑り休んでいたのだ。

しかし定刻通りに連絡を入れなければ殺される 前の連絡係は『1秒遅かった』と言う理由で殺されたので、何時も通りに報告を開始する。

だが、彼が目覚めると同時に恐ろしいほどの霊力…いや魔力を放出していく。

強大な魔力に気圧され、悪魔は脅えながらその場に頭を垂れる事しか出来なかった

「……………だから何だよ？　なあ？　そんなくだらねえ用事でこの俺の安眠を妨げたって言うのか？　なあ？　おい…？」

『ひっ！？　お、お許しを…お許しをつ…！』

「なあ？　テスカトリポカ、お前はどう思うよ？」

『あひゃひゃひゃひゃ　命令通りに守ったのは偉いよお、偉いよねえ　ここは褒めてあげようかあ』

「へえ？　じゃあツイツイミトルはどうよ？」

『うふふふふふ　褒章物よお　そうそう！　褒章をあげな

いと！ あげないとねえ！ ねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえ！』

「じゃあ、決まったな？ 良かったな雑魚悪魔。俺達は優しいからよお…お前は」

『『「死刑だ」』』

『そ、そんなっ！？ そんなっ！ どうか！ どうか御慈悲を！？』

笑いながら言う彼 人修羅と、魔王と狂神。

悪魔は命令通りに報告をただけ、ならば何故殺されるのか？

安眠を妨げた、それも入るだろう。だが…彼は単純に機嫌が悪かっただけなのだ。

ゆっくりと腕を胸の前で交差する、それだけで尋常ではない魔力が湧き上がっていく。

「じゃあな。きひひひひっ！ 地母の晚餐っ！！」

『い…いやっ…嫌だあああああああああああああああああつ！？ つぎやあああああああああああつ！？』

クロスした腕を広げると同時に逃げようとしていた悪魔の足元が崩れ、閃光が巻き起こる。

眩く輝く光が悪魔をあつという間に飲み込み、全てを分解していく。物の数秒で逃げようとしていた悪魔は完全に消滅した。

アレだけの地割れや衝撃にも関わらず、悪魔が先程まで居た場所は何所も壊れておらず、辺りには何の衝撃も与えていない。

「ふう。いやあ、いいなあ。『雑魚が逃げ惑いながら死ぬ瞬間ってのは』なあ？」

「いひひひひっ！ そう、そうそうそうそうそう！ 漸く慣れしてきたようだねえ！ 人修羅！」

「お前は貴方は貴様は貴方様は君はっ！ この世界を好きなように出来る存在になったんだよお 嬉しいかい？ 嬉しいよねええええっ！」

「あーっはははははははははははは！ そうさっ！ このままこの異界を広げていつて全てを俺の世界に変えてやる、変えてやるのさっ！ そしてえええ！ 佐藤！！ あいつは俺が全力で持て成してやらないとなあ！！」

大樹の絶望した顔が見たい為に、ここまでの企画を用意した。

既に完全に人から外れ、人修羅と言う悪魔に成り果てても尚、他人に対する恨みや妬みは彼の中に残っていた。

そう言えば元の世界に戻っても、猶予は1日しかないんですねー。
うん…普通に考えると詰んでますよね。ここからどうするかーです
よー。

そして機嫌が悪い不良君。人修羅でも寝るんですねー(えー
もう少し幕間を引っ張ってからコミュですねー。
隊長コミュ追いつけるかなー？

どうでもいいこと

ベッドでころころしてるだけだどつまらないですねえ…
なので、今日はアメリカを書いてました。

うん…だめだこれは人に見せられるレベルじゃない…(汗
という訳で消しちゃいました、あはははは。

絵はどうにも苦手ですよー、最近書かなかった所為で手も書きにく
くなってましたし…

だ、だれか絵を描いてくれないかにゃ(じ〜

とまあ、こつという訳で(どつという訳だ)皆さんが得意な事はあるま
すか〜？

私は！ ぼけーっと歩きながらも半分寝られるのが得意ですよ〜(
それは危険だ

Continue 123 〱何処までも理不尽な世界で????〱 (前書き)

幕間その2? ですよー。

今回はこなた視点と漸く登場つかさ視点です。

ではどうぞー。

んー、ぽけーっとして何も思いつかないぜ…暑いせいかなあ。

安全が確保できてないんじゃないか? と言っ事でこなたの地の文に追記を入れました。

Continue 123 〱何処までも理不尽な世界で????〱

メシア教本部ビル内仮眠室

泉こなた視点

「おはようこんにちはこんばんは、いつもニコニコ貴方の隣にオタクな少女、泉こなたです」

「……………それは何、突っ込んで欲しいのか？」

「いや、唯何となくねえ。それにしても先程までの状態から一変して幸せそうに眠ってるねえ、つかさは」

「早く無事を確認できると良いのですが」

『大丈夫じゃないの？ 大樹さんの能力が効かないって余程ヤバイと思うし』

上手い具合に出来た時間を使って現在休憩中な私達。

時間との勝負だったんだけど、メシア教をほぼ壊滅状態にしたお陰でかなりの猶予が出来たんだよねえ。

ちなみに探索は終了したよ。流石に本拠地、中々良い装備とかあったから今度からこれを使わせてもらおう予定。

どうやら大樹君のペルソナ達が頑張ってくれたお陰でテンプルナイトや天使達はもう居ないみたいだね。

内部に隠れてるかもしれないメシア教徒とかも考えられたけど、ガイア教徒が見回りしてくれてるから安全かな。

万が一ってのがあるからこうやって固まってるけどね。

仲魔の皆は部屋の外で警戒してくれてるから何かあれば直ぐに分かるし安全だよ！

それよりも…次はあの変態との戦いだし、出来る限り休みを取って体調を万全にしておかないとね。

つかさも何とかなったし、後の問題は二つだけかあ。それが終われば…後は野となれ山となれ、かな。

「んー…んー…」

「ん？ どつたのアメリカちゃん？」

「おなか空いたのです、あー」

『あ、こらっ！ 地面でころころしちゃだめでしょっ！』

「おーなーかーすーいーたーのーでーすーっ！」

じたばたと駄々っ子の様に床で転がるアメリカちゃん。

うおう…こいつは大きなお友達が見たら吐血ものかもしれないね。

そう言えば結構時間経ってるしねえ、私も小腹が空いてるかなあ。

「アメリカさん。床で転がると汚れちゃいますからやめましょうね？ 直ぐに用意しますから」

「おー やったのですっ！ ごーはん、ごはんなのですよ
ご主人様も呼んで皆で食べるのですっ！」

『って、アメリカ何所行くのっ！？ もう…私ちよっど行ってくるわね』

「ほいほい。大樹君の場所に行ったと思うし、私達も後で行くよ」

『おっけー。それじゃ…って、アメリカ早っ！？』

ぱたぱたと走っていくアメリカちゃんを追って走っていくアリスちゃん。いやあ、微笑ましいよねえ。

なんと言うかロリ妹＋ロリ姉って感じで、うん。私いい事言った気がする。

「なんと言うか…アレだけの後なのに、もう自分達のペースで居られるって、凄いわね」

「まあ、此方も色々ありましたから」

「あの二人の場合、悪魔だつても関係してるかもだけどねえ」

「冷静に考えると、人がこんなに大勢死んだ後なのに、私もここまです落ち着いてるのが不思議だわ…」

大樹君とみゆきさんが一度アボンして、その後に神父と大天使が死んだからね…

よく考えると人死にが多いよねえ、慣れてきてるのは精神が壊れてきてるとかじゃないのを切に願うよ…私も流石に性格破綻者にはなりたくないし。

この数日で敵を殺す禁忌も無くなって来たし、ダークサイドに堕ちないようになきゃ。

人は慣れる事が出来る生物と言われていきますからね。

「でも、慣れすぎではいけません。人の心は容易に壊れてしまうものなのですから…」

「そう、ね……………それにしても幸せそうにして寝てるわねつかさの奴」

「そうですね。早くいつものつかささんと色々お話したいです」

「そだねー」

何だかんだ言いながら嬉しそうにしてるかがみとみゆきさん。

私も早くつかさの無事を確認したいよ。

幸せそうにすやすや眠ってるつかさ。本当に寝坊助さんと言つかなんと言つか。

「早く起きて皆を安心させてよね」

「…？ どうしたのこなた？」

「うんにゃ。バルサミコ酢の次はサルサソースとか言わないかなー
って」

「あんたは私の妹を何だと思ってるんだ…？」

「え？ つかさだと思ってるけど」

「……………」

「……………あはは。よし、其処になおれ」

「おおっ！？ かがみの目がマジだっ！？ みゆきさんっ、小竜

姫ヘルプっ!!」

少しずつかがみも何時もの調子を取り戻せてるみたい。このまま上手く行けばガイア教も辞めさせてあげたいけど、そろそろ上手くいく筈が無いよね。

近い内に一度かがみを調べておかないと何かありそうで怖いよ。

ガイア教は完全な味方じゃない。今は共闘してるとしても後でどうなるか分からない。

あの隊長は悪い人…って感じはしないけど、仕事人って感じがするし、何かあれば容赦無く此方に敵対してくる筈。

そうなると私達のウィークポイントであるかがみを使ってくる事は間違いないよね。

「こらっ！ こなた待ちなさいっ！」

「ふっふっふ。待てと言われて待つ奴はいないよっ！」

「あらあら…お二人とも元気ですね」

そうですね。

「なんか、あそこだけ世界が違くない？」

「超然としてると言うか何と言うか…まあ、みゆきだし」

「みゆきさんと小竜姫だしねえ」

「え…？ ええ？ えーと…？」

突然振られて慌てるみゆきさんテラかわゆす。

こんな萌えの塊が私達の中で唯一の完全な前衛とか信じられないよね。

なーんて馬鹿な事をしてた時

「……………ん……………う……………おはよう。おかーさん…おなか空いた」

「つか…さ…？ つかさっ！！」

「っ！ つかささんっ！！」

「大丈夫つかさっ！？ 何所か変な所無いっ！？」

一斉につかさに駆け寄る私達。

行き成り大声出した所為か、つかさがビクっとして私達を見る。

「はれ…？ お姉ちゃんに、こなちゃんに、ゆきちゃん？ 如何し

たの？」

「つ、つかさあああああっ！」

「わぶっ！？ お、お姉ちゃん？ ぎゅって…？ えへへ…」

何時も通りのつかさな筈なのに、それが…それだけでこんなに嬉しいなんて…

今は二人をそつとして置いてあげようかな。無駄に茶化すと私が泣きそうだし…ね

泉こなた視点解除

柊つかさ視点

ふわふわだったの。

凄くふわふわで、何にも無くて、それが凄く寂しくて。でもね？ 苦しくは無かったんだよ？

だって、物凄くふわふわだったから…えへへ。何言っているか良く

分かんないね。

でもね？ 今は違うよ。

消えていた皆を思い出したの、夢の中で。

ゆきちゃんがね？ 何時も通りの優しい笑顔でお話してくれたんだ。

すつごく嬉しかったよ。高校を卒業して、これからはもう毎日の様に会えないんだなあって思うと悲しかったけど、でもゆきちゃんは優しいから良く来てくれたんだ。夢の中で。

消えてたけど、戻ってきてくれたんだよ？ 暖かい光の中から。

ちよつと悲しかったのは、何時も優しい笑顔のゆきちゃんが泣きそうな顔してた事かなあ。

次に現れたのは佐藤君。

すつごく強くて、ぶつきらぼつさんだけど実は皆と一緒に居るのが大好きな人なんだよね。

何にも無いまつしろな所で泣いてた私をね、言葉は少なかったけど導いてくれたんだ。

隣にはゆきちゃんも居て、何にも無くて、消えちゃってた世界が動いた様な気がしたよお

探してたって二人とも言うから、私が何で？ って聞き返したらね？ 直ぐに分かるって言うてくれたの。

そして次にやってきたのはこなちゃんだった。

いっつも元気なこなちゃんが、悲しい顔してたから、そんなの嫌だから直ぐにこなちゃんを呼んだの。

そしたら凄い笑顔になって私に抱き付いてきたんだ　　えへへ……ちよっと恥ずかしかつたけど嬉しかったよ。

初めは何も無くなっちゃったけど、こうしてまた皆に会える夢だったら偶に見るのも良いかな。

ゆっくりと歩いていく私達、お姉ちゃんはどこなのかなーって探してたら奥の方がピカピカピカピカって光ってたの。

すっごく眩しくて目が開けられなかったけど、そこからお姉ちゃんの声が聞こえてきたんだよ。

「つかさ」「つかさ！」って凄く切羽詰った様な声。

何時も優しくして自慢のお姉ちゃん……そのお姉ちゃんが悲しい声を上げてるのが嫌だから、私は皆を見た。

すると皆はゆっくりと頷いてくれたんだ。

急いで駆け出す私。前が眩しくて見えなかったけど、お姉ちゃんの声を頼りに、私は走った………

ねえ、お姉ちゃん。直ぐ行くからねっ！！

…
…
…

「つていつ夢を見たの」

「そこでどうしてバルサミコ酢やお腹空いたって話が出てくるのよ… あんたは」

「えへへへ…」

「まー、多分それは大樹君の能力のお陰じゃないかなあ」

「わ、私凄い事になってたんだね… 私も子供好きだけど、そういうのは嫌だよお」

さつきまで皆泣いてて吃驚したけど、話を聞いてもつと吃驚しちやった。

聖母候補つてずーつとゆきちゃんの事だと思つてたのに、私も実はそうだったんだつて。

それで攫われて、薬でおかしくされてたらしいんだけど…その薬のせいなのかなあ…？ 記憶が曖昧でよく思い出せないよ。

ゆきちゃんは、思い出さない方が良いつて言つてたからこれで良いかも。

「うー…3週間以上もかぁ…世界はどうなつてるの？」

「ああ、それを言つてなかつたねえ。実は……………」

そう言つとこなちゃん達が色々説明してくれたんだ。

行き成り色々言われて混乱しちゃったけど、どうにか私にも分かつたよ

今この町全部が変な人が作つた異界になつて、時空が切り離されてる可能性があるんだつて。

私あんまり頭良くないから、詳しい事はよく分からないけど…とりあえず悪い人を倒すと同時にその基地を破壊すれば核は落ちてこないんだつて。

お父さん達はもう安全な場所に避難してらつて言つし、良かったよ！。

「そつか…ごめんね私の所為で」

「何言つてるのよ。悪いのはメシア教でアンタは悪くないわよ」

「そうそう。寧ろ不幸だー！　って感じで騒いでも良い位かなっ！」

「うん。ありがとうお姉ちゃん、こなちゃん」

「とりあえずはまだ体調も完全では無いでしょうし、シエルターに避難して置いた方が良くも知れませぬね」

「そっかー…私じゃ色々無理があるのかなあ？」

お姉ちゃんもそうだけど、ゆきちゃんやこなちゃんのレベルが30台後半って聞いて吃驚しちゃったよ。

そんな高レベルの人なんて滅多に居ないし、居てもこういう場所で戦う様な人じゃないって聞いた事あるから。

私はまだレベル12程度だから、居てもお邪魔になっちゃうだけだもんね…

「つかさの魔力は凄く高いし、頑張れば即戦力なんだけど、今は時間が厳しいからねえ」

「じゅめんね皆」

「まあ、アンタの代わりに私が行くから安心なさい。異界を作ったアホともどもギッタギタにしてやるわ」

「おお…凶暴かがみんが1体現れた」

「誰か凶暴だっ！」

「ひゃー。助けてつかさー」

「あはは。今のはこなちゃんが悪いよ」

私にとってはつい先日のようなやり取りなんだけど、お姉ちゃん達にとっては1ヶ月ぶり近いやり取りだったんだなあ…って思うだけなんだか凄く申し訳無い気がするよ。

一緒に戦うのは無理かもしれないけど、せめて皆の役立てるようにしないとっ！

私がそうやって心の中で一大決心をしてみると、誰かが部屋に入ってきた。

「おお。目が覚めたようだなあ、これなら早く行動を再開できるか」

「あ…どうしたんですか？ こっちまで来て。作戦の準備があったはずじゃ？」

「ああそれなんだがな」

「ねえ、こなちゃん？ あのどこかで…？」

うーん…どこかで見た事ある気がするけど思い出せないよ。

「あの人はね4丁目の伊藤さんだよ。タバコ売ってたでしょ？」

「そっかあ。伊藤さんなんだ」

「おいおい。誰だよ伊藤さんって…と云うかつかさ嬢も納得しないでくれないか？ まあ、前に一度会ったのは間違ってるぞ？」

「こなた。アンタがしゃべると話が脱線するから黙ってなさい」

「うーい」

「じゃあ、紹介するわよ。この人は皆方さん。ガイア教の隊長よ」

「ほえ〜。ガイア教なんだあ……………え？ ガイア教って？ あのガイア教？」

「他にはガイア教は無いでしょうね…一応現在は共闘と言う形を取ってます。つかささんが此処に居ると言う情報を提供してくれたのも彼等なんですよ」

「ここはメシア教だし、この人はガイア教なんだ…なんだか私淒い所に居たんだなあって、今更驚いちゃってるよ。」

「この町を異界から開放する為と、私をメシア教から救出する為に手を組んだらしいけど、お姉ちゃんは何かあるのかなあ…？」

「さて、結界についてなんだが。予定通り後2時間ほどで解除出来

る筈だ、後は其処から攻めればいいんだが、今の状態では体調的に無理があるし、暫くは様子を見る。懸念していたメシアからの追撃は此方でぶち壊したからな。そういう意味では多少時間があるし、休ませないといかん。特に佐藤大樹は疲労が激しいからな」

「佐藤君…大丈夫なのかな？」

「今の所はね、でもあんな真似はさせないようにしなきゃ。流石に心臓に悪いよあれは…」

「見ている分には凄まじかったけどな…って、悪かったって泉嬢。そんな睨むなよ」

こなちゃんが怖い表情で隊長さんを睨んでた…ちょっと怖いかも。

「何にせよ、今は英気を養っておいてくれ。次の戦いはもっと激しい事になりそうだからな」

「分かりました。其方も後方支援宜しくお願いしますね？」

「OK」

………まだ、戦いが終わらないんだね、私も何か出来れば良いんだけどな。

終つかさ視点解除

つかさが覚醒しかけている……………
かがみが覚醒しかけている……………

アメリカで萌え死ぬが良い！(黙れ

とまあ、今日は何も思いつかないので、適当にのんびりさせてお茶を濁す大作戦でした。

視点〓〓は今回で終了して、次回は合体に行こうかなーと思います。

合体…何が良いんだろうか…(汗

姐さんは何にしたらいいかなあ…

どうでもいいこと

あぢゅい…あついですう……だめだ…溶ける。

我が家にはクーラーなんて言う文明の利器は無いのですよ、貧乏人だもんっ(涙

こういう日はカキ氷ですよねえ。

しゃくしゃく食べると美味しいです！

皆さんはカキ氷には何をかけて食べますか？

私はイチゴかブルーハワイをかけるのが好きですよ

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

先生。パソコンが完全に死にました(涙)

今は弟のパソコンを借りて書いていますよ。

とりあえずデータはどうにか引つ張れたので問題は無いですが、

暫くはパソコン無しで頑張らないといけません。

修理に出すよりは安いのを買おうかなあ、と思っってますが貧乏な私にはそれが何時になるのか分かりません…(涙)

一応弟のパソコンで書かせて貰ってるので大丈夫ですけど、更新は遅くなるかもしれません。

感想返しも流石に遅れると思いますのご容赦をです。

うう…去年も壊れましたし(その時はドライバの所為で私は無実…)
呪われてるのかしら…えっぐえっぐ。

とりあえず出来る所まで書くのであまり期待しないままお待ち下さいですよー。

では、短いですがどうぞ！

Continue 124 〱何処までも理不尽な世界で????

邪教の館に向かう途中

「わー。人が少ない街ってこんな感じなんだねえ」

「人が居ない分悪魔が増えてたりするけどね。こうしてみるとあんまり居ない様に感じるけど」

窓から覗き込む様に、流れていく街並みを見渡しながらかさが言う。

そんな無邪気な様子を見ながら苦笑しているかがみ。何の後遺症も無い様でホッとしているのもあり、彼女の精神は非常に安定していた。

「時間的に余裕が出来たから邪教の館か。確かに戦力が上昇するのは良い事だからな。俺達も相手側とコンタクトが取れて万々歳と言う訳だ」

メシア教ビルで2時間ほど休憩を取った大樹達は、そのままガイア教の大人数を収納できる特殊装甲車等で邪教の館に向かう事にした。

先程の戦いで大樹もこなたもレベルが大幅に上がった為、そのまま基地を攻める前に仲魔の強化をする事にしたのだ。

特にこなたの仲魔はレベル的にこれから戦う敵に対しては厳しいと言う事で、優先的に合体をこなさなくてはならない。

同時に皆方も邪教の館とコンタクトを取りたいと言う事で、ガイア教の防御力が高い装甲車を利用させてもらいながら移動している途中だ。

今回はつかさとかがみも一緒に同行する事になっている。流石にガイア教に任せてシエルターに送るのは信用出来ない為なのだが…

メシア教のビルに関しては引き続き幾人かのガイア教徒がメシア教徒の振りをしつつ、警護に当たっている。

あのビルには様々な物資などが残っている為、補給地点として使う事にした様だ。

「あはっ　　こうして皆で行動するの久しぶりだねえ」

すっかり元気を取り戻したつかさが、嬉しそうにニコニコ笑っている。

ほんの少し前まで心が壊されていたのが嘘の様に、回復していた。

皆方もそれについて聞きたい事は山ほどあるのだが、無言の圧力で封じられている為今回は諦めている様だ。

「つかさは暢気で良いなあ。ま、悪い気はしないけどね…一人余分の混じってるけど」

「おいおい、佐藤大樹君。呼ばれてるぞ？」

「……………なんで僕なのかな…？」

こなたの辛辣な言葉を華麗にスルーしつつ、皆方は車を走らせている。

特殊装甲車の為、ある程度のレベルの悪魔では傷一つつける事が出来ない為安心なのだが、流石に空調は効いておらず暑いと言う問題があった。

序でに女性なので、臭いにも敏感な為結構な苦行に近いものがある。

「マスク持ってきた方が良かったかしらね」

（流石にここで【無臭】とか馬鹿な事するつもりは無いけど、確かに汗臭いな…ガイア教徒の装備が装備だから仕方ないかもしれないけど）

私は剣の状態なので良く分かりませんが、大変ですね。

《そしてCOMPの中に入っている私達は勝ち組よね》

「くそう、少しだけアリスちゃんが羨ましいと思った…」

《はああ…男臭い臭いは大好物ですのにいゝ　酷いですわぁサマナー様あゝ》

「目の毒だから止めて置いてくれ、後物凄く自重して欲しい。僕が物凄く恥ずかしい」

《サマナー様のいけずうゝ》

少し顔を赤くして俯く大樹。

何時もながらオープン過ぎるエロ女神が騒ぎまくるのは流石に恥ずかしいらしい。

今更と言った感じがあるが、それはそれ。目の前の知り合い以外つまりはガイア教徒達、それも『なんで召喚しないんだ！』と言う目で見ている　の所為だったりするが。

「そう言えば車で移動したら危険〜とか言ってたけどたった一日で普通に車に乗ってる辺り私達って生き急いでるよねえ」

「そうなんだー。おばあさんになるのはやだなあ」

「そついう意味じゃないわよつかさ」

「ほへ？」

「あーもう、この天然っ子は！」

つかさに抱きついてグリグリし始めるこなた。

苦笑しながらもこなたが抱きついてくる事が少し嬉しいつかさだったりする。

「そろそろ着くね。ラリヨウオウが居る筈だから悪魔が攻めて来ても問題無いけど、やっぱり少し気になるかな」

こなた達以外では唯一と言って良いほど気を許している人物である、面識が合体時程度しかないとしてもやはり多少は気になるものらしい。

「隊長、そろそろ目的に到着します。如何しますか？」

「あーそうだな、あんまり悪魔に刺激を与えるのもあれだし近くで降りる事にする。お前達は待機していてくれ」

「分かりましたっ！」

近くの店の駐車場に車を止め、其処から歩いていく事にした。

大樹達であれば攻撃される心配は無いが、行き成り装甲車で向かってきたら流石のラリヨウオウも警戒してくるだろう。

それだけなら兎も角先制攻撃でもされれば厄介なので、此処からは

歩いていく事になる。

とは言え、大樹達が居る地点からはほんの百メートル位なので、直ぐに着くのだが。

「百太郎に反応は無し。直ぐにいけるよ」

「二人の護衛も居るかな、召喚」

こなたが直ぐに百太郎を使い、辺りに悪魔が居ない事を確認した後、直ぐに仲魔達を呼び出す。

キンキが前衛を張り、オーカスとパールヴァティ、アリスがかがみとつかさの護衛に回った。

『ヒョーヒョー。ワシが殿じゃのう。宜しく頼むぞ人間よ』

「アンタで十分だと思いがね…とりあえず食べないでくれよ？」

『ヒョー。さて、それはどうかのう』

しわがれた鶴独特の笑い方はグクマツツになってもそのまま受け継がれている。

通常の悪魔合体とは違い、意志が残っている名残とも言えるだろう。

巨大な竜の姿をしているグクマッツが後ろに居る事で、流石に少し緊張している皆方。完全に仲間と言う間柄では無い為、何かあれば直ぐに殺される位置に居る所為で少し胃が痛かった。

何はともあれ、準備は整い歩き出していく一行。

「そう言えば私、邪教の館初めてだよ」

「私もそうね。どんな所なの？」

「魔法と科学が入り混じった所かな。合体施設は魔法陣の様な物が立ち並んでるし、合体用のカプセルもあれば基本はパソコンで制御するらしいからね」

「COMPがそんなものだしねえ。よくよく考えると超常現象万歳って感じだけど、今更言う事でも無いか」

既に魔法や特殊能力、ガーディアンやペルソナ等を使っている時点で超常現象も何もあったものではないだろうと、両手を上げて首を振るこなた。

ほんの数年前までは魔法や悪魔などはゲームやアニメの世界だと信じて疑っていなかった為、今の現実には笑いが漏れてしまう。

大樹も前世の記憶を取り戻すまでは 前世も含め こなたと似たような思考だったので、似た感情を持っていたりする。

「世の中の裏側：私達は今其処を生きているのですね。思えば不思議な物です」

私達はそもそも存在が其方側なのでなんとも言えませんけどね。

『おいおい、今更そんな話してるんじゃないよ。ほれ、見えてきたぞ。飽きもせずによくまあ同じ場所に立ってられるな』

キンキが指し示す方向を見るとラリヨウオウが此方を見ていた。一度会っているのもあり、警戒はされていない様だ。

直ぐに大樹が近寄り話しかけていく。

「数日振りかな…ラリヨウオウ、ここを通してもらえるかい？」

『佐藤大樹殿か。汝等は構わないが其処の人間、貴様は通す訳にはいかん』

「おおっと。やっぱり覚えてたか…やれやれだ」

『ああ、そっぴやガイア教が攻めてきたって言ってたしな。で？ どうするよサマナー？』

「待ってて貰おうか。そう時間は取らないつもりだし」

「おいおい。そりゃないだろ、共闘の一部に邪教の館のコンタクトについての事も入れてたんだから」

「冗談だよ。ごめんラリヨウオウ、如何にかならないかな？」

『ふむ……何かあるようだな。話を聞こう』

「助かるよ、実は……」

今までの事をラリヨウオウに話していく。

ガイアと共闘した事やこれからの事についての事を説明していくと、少しは理解を示してくれた様だった。

『成程な…だが、我が単独で許可する訳には行かぬ。だが、我が主人に許可を取るのであればその限りでは無い。佐藤大樹殿、汝が我が主人と交渉すると良い。それまではガイアの人間を護衛する事にしよう、汝等もそれで良いな？』

「ガイア教と一緒に居るから入れさせない…ってなったら目も当てられなかったけど、それじゃしょうがないね。そっちもそれで良いでしょ？」

「まあ、交渉する余地が出ただけ御の字とするか。それじゃ頼むぞ佐藤大樹君」

「一応聞くだけ聞いてみますよ。それじゃ、皆行こう」

『おーっ』

こうして皆方一人を置いて大樹達は邪教の館に入ってしまった。

入り口は見た目雑貨屋にしか見えない所為でつかさとかがみが不可思議な顔をして居たが、そもそもサマナー関連の店はこういうのが多いのだとこなたが伝えると直ぐに納得した。

奥の階段を降りていくとどんどん風景が変わっていき、その度につかさが少し脅えた様な表情になる。

「お、お姉ちゃん。何か怖い…」

「今更それを言うかアンタは」

「さて、着いた。こんにちはおじいさん」

「ん？ おお、坊やではないか、がーるふれんどが沢山じやのう。
はっはっはっは」

「いやん 其処は彼女と言って欲しいですねっおじいさんっ！」

「冗談はともかく、今日は合体をお願いしたいのですが」

「うおう、大樹君のスルーっぷりがばねえ…あ、私も合体お願いしますっ」

大樹とこなたが直ぐに合体の作業に入りながら、同時に皆方について話す事にした。

流石にガイア教と聞き少し渋ったのだが、最終的には許可を得る事に成功する。

それを聞いたかがみとみゆきが、皆方を連れて来る事になった。

「メシア過激派を潰したとはのう…流石にワシも吃驚したわ」

「本当は直ぐに逃げるつもりだったんですけどね…まあ、ある意味結果オーライと言う事で」

「下手すりゃ全滅してたからねえ。ちょっと頭に血が上がってたけど、冷静に考えると凄い事したなあって思うよ、うんうん」

「となると残りの脅威は、異界と核だけじゃのう。ガイアとは共闘らしいが、何所までなのかな？」

「一応は街を異界から開放するまでですね。共闘終了後に此方を襲わないという約束は取り付けましたが…どこまで守ってくれるやら、ですね」

異界からの開放と誘導基地の破壊は同タイミングで行われるので、終了した時点で共闘は終了する。

勿論大樹はその後、世界中の核を如何にかしななければならないという無理難題が待っているが、流石に其処まではガイア教…いや、皆方も協力してくれる可能性は低いだろう。

寧ろガイア教と行動同じくするのは、色々と面倒なのでさっさと終

わらせたいとも思っているが。

「成程のう…まあ、ワシもガイア教の科学力には興味があるからの、
精々搾り取ってやるとするわい」

「おお、おじいさんがカッコいいね」

「だねー」

「じゃあ、合体お願いします。カードはこれとこれを…後は悪魔全
書から………」

そうして悪魔合体を開始した。

特に合体事故等も無く、スムーズに合体は成功し、時間が過ぎてい
く………

………

………

………

注) カードは基本的に購入しています。

注) 御霊はカードが存在します。

注) 悪魔全書の悪魔は基本的に意志薄弱なので乗っ取られる可能性はありません。

注) 悪魔全書の登録は『一度見た事がある』『カードを獲得した事がある』

『合体で出来た』『仲魔にした』『ペルソナとして作り上げた』『守護霊や憑依した悪魔』も対象になります。

合体後

アリスは御霊合体した！

力+2 知+3 魔+3 体+1 速+2 運+1
スキル『魔人』を取得！

キンキは鬼神『コウモクテン』に変化した！

合体：妖鬼キンキ+龍神グクマツツ(悪魔全書) || 鬼神コウモク
テンLv47(信頼によりレベルオーバー許容)

スキル『勇者の精神』 スキル『全門耐性』 スキル『戦神の加護』を取得！

パールヴァティは夜魔『サキユバス』に変化した！

合体：女神パールヴァティ＋墮天使オリアス（悪魔全書） 〓 外道
ドツペルゲンガーLv25

合体：外道ドツペルゲンガー＋妖魔シワナ（悪魔全書） 〓 夜魔
キウンLv34

合体：夜魔キウン＋精霊アクアンズ（カード） 〓 夜魔サキユバス
Lv47（信頼によりレベルオーバー許容）

スキル『万能耐性』 スキル『神経吸収』取得！

フォルトウナは魔銃『スカアハ』に変化した！

合体：精霊エアロス（悪魔全書）＋精霊エアロス（悪魔全書） 〓
精霊シルフカード

合体：魔銃フォルトウナ＋精霊シルフ（カード） 〓 魔銃『スカア
ハ』Lv43

攻撃スキル『至高の魔弾』開放！

スキル『????』取得！

グクマツツは妖獣『マンティコア』に変化した！

合体：龍神グクマツツ＋魔獣オルトロス 〓 妖獣マンティコアLv
45（契約によりレベルオーバー許容 基本レベル更新Lv46）

スキル『同族の心得・防』取得！

オーカスは邪神『パチャカマク』に変化した！

合体：魔王オーカス＋死神ヘル（悪魔全書）『ペルソナの記憶から
引継ぎ』 〓 邪神パチャカマクLv48（信頼によりレベルオーバ
ー許容）

スキル『信頼』 必殺技『ダークマター』取得！

アメリカはレベルが5上がった！

スキル『素体強化』がLv3にランクアップ。スキル『忠誠』が
『永遠の親愛』にランクアップ。

魔法『ヒートライザ』取得！ 『タル・カジャ』 『スク・カジャ』
『ラク・カジャ』 消去！

スキル『オールリセット』取得！ 『デ・カジャ』 『デク・ンダ』
消去！

フェニックスは妖魔『ヴァルキリー』に変化した！

合体：霊鳥フェニックス＋地霊ドワーフ（カード） 〓 妖魔シワ
ナLv37

合体：妖魔シワ＋精霊フレイミーズ（カード） 〓 妖魔ヴァル
キリーLv45（信頼によりレベルオーバー許容）

魔法『トリスアギオン』 スキル『衝撃無効』取得！

ユルングは神獣『カイメイジユウ』に変化した！

合体：竜王ユルング＋幻魔タムリン（カード） 〓 神獣カイメイジ
ユウLv43（信頼によりレベルオーバー許容）

スキル『食いしぼり』取得！

オリアスは破壊神『トナティウ』に変化した！

合体：堕天使オリアス＋精霊サラマンダー（カード） 〓 堕天使オ
セLv41

合体：堕天使オセ＋魔神トート（悪魔全書『みゆきに憑依してい
る魔神トートが全書に登録されている』） 〓 破壊神トナティウLv
45（信頼によりレベルオーバー許容）

スキル『真・斬撃見切り』 スキル『無限の闘志』取得！

じゃあくフロストは魔王『キングフロスト』に変化した！

合体：邪鬼じゃあくフロスト＋天使ドミニオン（悪魔全書） 〓 邪
龍バジリスLv35

合体：邪龍バジリス＋邪鬼じゃあくフロスト（悪魔全書） 〓 魔
王キングフロストLv40

スキル『氷結吸収』 スキル『火炎耐性』 スキル『格闘ブース
タ』取得！

シルキーは鬼女『ラケシス』に変化した！

合体：妖精シルキー＋天使ドミニオン（悪魔全書）
Lv36 〓 天女センリ

合体：天女センリ＋魔神トート（悪魔全書）
Lv43（信頼によりレベルオーバー許容）
〓 鬼女ラケシスLv

補助スキル『ラストキャンディ』取得！
回復ハイブースタ
にランクアップ！

デイスは地母神『ハリティー』に変化した！

合体：地霊ドワーフ（悪魔全書）＋精霊ノーム（カード）
Lv44（信頼によりレベルオーバー許容）
〓 地霊
テイターンカード

合体：妖魔デイス＋地霊テイターン（カード）
Lv44（信頼によりレベルオーバー許容）
〓 地母神ハリテ

スキル『地母神の祝福』 スキル『氷結ブースタ』 スキル『マ
ハ・スクカオート』取得！

大樹達装備品大幅変更

大樹：魔貨35000消費 精霊カード全消費 現金40000
円 消費

こなた：魔貨30000消費 現金700000円 消費

アリスが進化の兆しをみせている……………

アメリカが進化の兆しをみせている……………

邪教の館〱!

仲魔、とくにこなたチームが大幅強化です!

でもこれでもかなり辛いかもしれませぬえ…: 〱なることやらですよ。

次回は合体後の云々かな。

それが終わればコミュにしようと思います、丁度良いし。

このコミュは1話完結じゃないかもしれぬ…: だつて1位が再戦フラグですしねえ (笑)

どうでもいいこと

あまり気落ちしてても仕方ないので、気を取り直すために携帯ゲームで遊んでいます。

ドリランドとかポケ・コレとか楽しいですよ

知り合いを招待したら貰えるカードとか欲しいですが…: そんなに呼べる友人居ないや (涙)

と言つ訳で皆さんが最近ハマっているものはなんですか?

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

パソコンがたーかーいー (涙)

ふふ…私のお給料じゃ何時買えるか分かったものじゃないですね！

(えっへん

さてて…

次回からコミュパート?になります。

?なのは1位がゆっきーだからなのですよ！

では〽これが今回のアンケート結果です！

1位：雪之丞

2位：アリス

3位：こなた

消去コミュ：『こなた』 『アリス』 『雪之丞』 『皆方』

これらを交えてコミュパートっぽくしていきますね〽。

Continue 125 〱何処までも理不尽な世界で????〱

基地を覆う結界地点

「よしっ！ この調子で行けば後1時間で解除出来るな」

「それは良いんですけど、俺等めっちゃ腹減ったんすけどね…限界ギリギリまで力を使うのはしんどいっすよ…」

「それがお前の仕事だろ？ 俺は監督する係、お前仕事する係。オケイ？ ああ、珈琲が美味しい」

「くそっ、憎しみで人が殺せたら」

「それ、仮にも上司に言うセリフじゃないよな」

「え？」

「え？」

様々な中和装置や、彼等ガイア教の中でも数少ない魔法使い達が集まり基地を覆う結界を解除している途中である。

出だしから順調であり、このままスムーズに行けば残り1時間程で完全に結界を消去する事が出来るらしい。

しかし、朝から交代でやっているとは言え絶えず魔法を使う作業をするのは結構辛い物があった。

「お前覚えておけよ？ 今日のお前の晩飯だけレーションにしてやるからな」

「地味な嫌がらせっスねっ！？ 普通のあるじゃないですかっ！！」

「大丈夫だ問題ない」

「問題しかねえよっ！？ やだもっこの上司っ！！」

「賑やかだなあ、周りに悪魔が居るってのにこの二人は」

「お前は働けよっ！？」

「俺はさっきノルマクリアしたからなっ！ いやあ、鳥のから揚げが美味いぜ？」

「ちくしょうっ！？ 1個で良いから寄越せっ！」

「すまん、今ので最後だ」

「どちくしょおおおおおっ！！」

「おお、出力が上がった。よし、お前今日は一日飯抜きな。その方が効率出そうだし」

「あんたら全員悪魔かつ!？」

「いや、ガイア教徒だな。お前も同じだけど」

賑やかにしているのに悪魔に狙われないのか、と言われれば大いに襲われる可能性があるのだが、其処は彼等も重々承知している。

それでもこうしていられるのにはちゃんとした意味があったりする。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!

奥の方から聞こえてくる咆哮。それと同時に銃弾の音や魔法の音が轟音となって彼等の居る場所まで響き渡る。

答えは単純で、戦っているのは声に引き寄せられて来た悪魔達であり、それに立ち向っているのは指揮官に先導された改造悪魔達である。

彼等の周りには10体以上の改造悪魔が配備されており、結界消去班をガードすべく戦っていた。

更に言えば悪魔との戦いは改造悪魔達に経験を積みさせる意味もある。

「いやあ、派手にドンパチやってるなあ。俺はこっちで良かったぜ」

「この辺の悪魔は倒すのにも一苦労だしなあ…俺なんて死ぬかと思

「たぞマジで」

「ま、仕方ないだろ。俺達のメインの仕事は改造悪魔の状態を完全にする事がメインなんだし、荒事は他にやってもらえば良いさ。ほれ、あの子供達とかな」

「あー…俺の妹も大体アレ位なんだよなあ」

「ん？ 井上の妹って結構可愛くなかったか？ 今度紹介してくれよ」

「だまれロリコン。なーに夢見てるんだよ。現実の妹なんてそんな良いもんじゃねえよ」

物凄く感情が籠った言葉にドン引きする彼。

思春期も合さっているのもあり、毛嫌いされている事が多いらしい。今はガイア教に入っている為、早々会う事は少なくなっているのだが。

「アーアーキコエナイ。で、副隊長。隊長はどうなったんですか？ さっきの情報だとメシア教ぶつつぶしたとか何とか」

「そう言えば聞いたなあ。予定じゃあの娘の妹さんかさらってこつちまで逃げてくる予定だったんじゃない？」

「何と言うかハプニングらしい。逃げる所をメシア教幹部に見付かったらしいんだ」

「マジっスか…隊長一人なら逃げれるかもっスけど…ってぶっ潰したってマジ？」

「正確にはメシア教過激派を潰したのはあの少年少女達なんだが…こうして改めて聞くと、何所の映画か熱血アニメかって言いたくなる」

「ですよねえ…俺達大人が精一杯頑張ってこれしか出来ないってのに、メシア教叩き潰すとか、お前等は勇者かって感じですよ」

彼等が小さい頃憧れた、特撮やアニメのヒーローならそう言う事が出来るかもしれない。

しかし彼等は20年以上生きてきて現実を知っている。

人間は行き成り其処まで強くなれない事も、自分達が何所まで鍛えても限界があると言う事も。

理不尽に理不尽を重ね、不幸と言うトッピングを混ぜ絶望というパズルに挟んだような、『今』と言う現実を生きてきて直面し理解した事である。

自分達は主人公でもヒーローでも無い。

正義と悪に別れているなら簡単だったかもしれない。

自分達はガイア教で悪、メシア教は正義のヒーロー。表向きはそう
なっているのだろう。

救いの手を差し伸べる天使達に縋る人間が居ないとは言えない。大
多数の人間が、絶望に陥った時、不幸に身を竄している時、荘厳な
光を称えた天使が現れたらのめり込むのも仕方ないだろう。

そうして出来上がる『正義の集団』メシア教。

それに対抗するのは『あらゆる種族を平等に扱う』ガイア教。

その理念は歪に歪んでいるとしても、彼等は其処に希望を求め入団
した。どうせ悪になるならば『生き残る』為に悪になってもかまわ
ないと。

だが……それだけだった。

何も変わらない 変わる筈が無い。

メシア教に入ろうがガイア教に入ろうが、目の前に待っているのは
変えようのない現実で、どれだけ頑張ってもどうしようもない事は
理解していた。

悪魔を倒した、悪魔を殺せる。天使を倒した、天使を殺せる。だか
らと言ってそれで何かが変わる事は無かった。

劇的に戦い、勝ち続け未来をあっという間に変えてしまう……そんな
事は出来ない。

彼等にとって、現実と言うのは所詮その様なものでしかない。

其処に現れた、ヒーローの存在。

勿論彼等…いや大樹達はそんな事を考えている訳も無く、ただ…生き残りたいから、守りたいから戦っているだけかもしれない。

それでも大樹達は彼等に出来なかった事を簡単に成し遂げた。そう…成し遂げてしまったのだ。

「ま、腐っててもしょうがない。俺達は俺達に出来る事をする、それしかないだろ」

「そんなんすけどねえ…って、副隊長何食ってるんですか？」

「ん？ これか？ 最近発売されたカップ焼きそばなんだが、結構美味しいぞ？」

「……………腹減ったってさっきから言ってるでしょ？
ようがあああああああつ！！！」

「何て食い意地の張った奴なんだ。ほれ匂いでも嗅ぐか？」

「うがあああああああつ！」

「おお、また出力が上がったな。これだと後50分でクリア出来そうだ……………な、なんだこの魔力波はっ！？」

「副隊長！ 結界が…結界が消えて行きます！！！」

その言葉を聞き直ぐに副隊長が結界を見ると、後1時間弱は掛かるうとしていた結界が徐々に消えて行くのが見えた。

自分達の結界破壊の能力で消えて行く訳では無く、その様子はまるで結界を張った誰かが消去させた、と言う感じが一番らしいと言えるだろう。

突然の出来事に全員、直ぐに動ける準備を開始する。

もしかしなくてもこれは相手側に気付かれた可能性が高いのだから。

「全員集まれっ！ 敵の奇襲を受ける可能性がある」

「あーもっう！！ さっきのは死亡フラグかよっ！ おいつ！」

「そっいや…さっきから静かになってないか…？ 副隊長、改造悪魔の指揮をしているのは山田達ですよ？ 戦闘終了の連絡は？」

「確かに…今聞いて見よう……………」

直ぐに無線機を使い仲間である山田と連絡を取り合おうとするが、何の反応も無い。

「くっ！ 直ぐに隊長に指示を仰ぐ！ お前達は何時でも逃げられる準備をしておけ！ 命が最優先だっ！」

「分かりました！ あーくそっ！ ついてねえなあ！！」

「逃げるのは得意っスよ！ ちっ…山田達も逃げ切れてれば良かったんだがなあ…」

何時襲われるとも知れない状況の中でも彼等は何時を通りに不敵に笑っていた………

………

………

………

『かなり強くなったもんだなオレ達も。今ならオルクスにもタイムで勝てる気がするぜ』

『私は御免蒙りたいけどね、さつて準備も終えたし後は基地を如何にかするだけねっ！』

「そつだね、早くこつという面倒な事は終わらせたよ」

悪魔合体も終了し、大樹達は直ぐにでも基地に向かう準備を整えていた。

今回の強化で、仲魔全員が満遍なく強化された為、劇的な成長と言つても過言ではないだろう。

彼等一体一体は確かに実力的にはヴィクターには劣るかもしれないが、それでも尚勝ち残る事が出来るかもしれないほどに強くなっている。

「じゃあくフロストちゃんがキングになった件について。いやあ、このカールがキモ可愛いねえ」

『ホー　こなたくすぐつたいホ　』

「あーっ、こなちゃんこなちゃん、私にも触らせて〜　うわあ、凄くひんやりしてるっ。夏に傍に居ると嬉しいかも〜」

「アンタはもう少し…ねえ…」

苦笑しながらつかさの行動を見ているかがみ。その様子が何所と無く嬉しそうに見えるのは、つかさが元気で居てくれるからだろう。

出来ればさっさとこんな事は終わらせたい。かがみは強くそう思っていた。

「……悪いがお前さん達、直ぐに用意をしてくれ。ちょっと面倒な事になった」

「皆方さん？ どうしたんですか？」

先程まで邪教の館の主人と色々にごやかに会話していたとは思えないほど、いや、いつもの彼には似つかわしくない硬い表情のまま話しかけてくる皆方。

流石に不思議に思いかがみが聞き返すが、返ってきた言葉はこの場に居た全員に緊張を走らせる。

「とりあえず結果は解除された。それは間違いない…だが、あそこをやっていた俺の部下全員が殺された。やったのは見たことも無い悪魔だそうだ」

「！！ それって…まさか……」

「こっちの情報は筒抜けだったと言う事だね。まあここは奴が作った異界だし、可能性はゼロじゃないけど」

仲魔と大樹を除く皆が辛そうな表情をする。

共闘しているだけの相手とは言え、知った人間が殺されるのはそれなりに辛いものがあるからだ。

特に皆方にとつては家族とも言える大切な部下達が殺されたのだから、その怒りは頂点に達しようとしている。

それを冷静に押さえ、最後に副隊長が残した言葉を伝える。

「うちの副隊長から聞いた、悪魔からの言伝だそうだ。佐藤大樹君」

「聞きますよ。大体内容は分かりますけど」

「そうか……………」『あまりにも遅くて興奮めだ、早く来い佐藤。楽しいパーティーの始まりだ。近くに居た蠅はケーキに集ると邪魔だから殺しておいた、喜んでくれるか』だそうだ」

「さいつてえな奴だねあの変態…」

「佐藤さん…………」

「柊さんと妹さんはシエルターへ送る。あっちが呼んでるんだ行かせて貰うさ、僕達としては丁度良い展開だしね」

大樹としてはメシア教に続きガイア教にもかなりのダメージが入っ

た事で、得したかもしれないとは思っている。

彼等に対してまったく、何の感情も示していない為。ガイア教徒達が死のうが生きようがどうでもいいのだ。

寧ろ、これでこなたやかがみ達に回る手が少なくなつて良かったとも思っていたりする。

「そうか。それじゃそれは俺の部下にやらせよう。何、攫うとかは流石にしないから安心してくれ。正直そんな事している暇があるなら、そいつを如何にかしなないといけないからな。そうでもしなければ俺が副隊長にどやされる」

「あ、あの…私も」

「かがみんとつかさは待つてよ。どっちにしても今の二人じゃきつ過ぎるだろうし、私達も最悪カバー出来ないかもしれないから」

「……………ごめんね皆」

「分かったわ…でも、皆死ぬんじゃないわよ…死んだら承知しないんだから…」

「僕はもう何度も死んでるから怖いなそのセリフは」

大樹がそう茶化すと、強張った顔をして居たかがみとつかさがキョトンとして、静かに笑い出す。

「待っていてくれるのも、僕達としては嬉しいしね。とりあえずは両親に謝った方が良くよ柊さんは」

「うぐ…痛い所突いてくるわね…うん。ありがとう皆」

『それじゃ、行きますかっ』

『こついう下らねえ戦いは最後にしたいもんだぜ、まったく』

アリスが元気に腕を上げながら言い、コウモクテンがやれやれと首を振りながら出る準備を整えている。

皆方はさっさと行ってしまったので館の主人に大樹は最後に挨拶する事にした。

「じゃ、有難う御座いましたおじいさん」

「うむ…絶対にまた此処に戻ってくるんじゃないよ？」

「はい。じゃあ失礼します。……………行こうか皆」

おおっ！

全員の声が木霊した……………

……………

…
…

店の前から離れ皆方がタバコに火をつけて立っている。

大きく吸い込み、自分の中で燃え滾る感情を押さえつけるのに必死だった。

「ふう……………因果な商売だな。まったく…」

ラリヨウオウから離れている為、呟いた程度では声は届かず、その言葉は風に流れていく。

（隊長…ごぼっ……………聞こえますか…）

（ああ…どうした副隊長？ ノイズが走ってるのか？ 声あまり聞こえんが）

（はは……………もしかしたら…壊れたかも、しれません…ね。き、緊急

連絡を……自分がまだ……生きてる内に……)

(どうした……！ おいっ！ 新城っ！ 応答しろ！)

(結界……の破壊……は失敗……ですが結界自体は解除されました……部隊は全滅……自分も致命傷です)

(何があった……新城っ！)

(結界の中から……悪魔が……必死に戦いました……が……相手はあまりに強くて……預かった……ごほっごほっ……改造悪魔は……すいません……全滅しました)

(そんなものはどうだって良い！ 無事な奴は居ないのかっ！)

(自分だけ……が逃げ切りました……が……腕を食われて……脇腹を抉られました……恐らく反魂香も効きません……最後に悪魔からの伝言を……)

(……分かった。聞こう……いいか、それまで死ぬなよ)

(手厳しい……ですね……)

「何で俺からじゃなくて部下から死ぬんだろうな……いつも生き恥を晒してるのは俺だけか。なあ、杏奈。父ちゃんは隊長としては最低かもしれん」

ぎゅっと拳を握り締め、空を見上げる皆方。

世界が異界に飲み込まれている筈なのに、空は普通に青かった。

「私情で動きまくりだからなあ……もう少し待っててくれや。父ちゃんやる事出来ちまったからさ。俺なんかにもつたいない部下達の弔いをしてやらないといけないからな」

大樹達の声が聞こえてくる。

彼は吸っていたタバコを捨て、足で踏み潰し彼等が来るのを待つ。

「部下を殺ってくれた落とし前はつけさせてもらうぞ？ 腐れ悪魔が」

その目には剣呑な光が宿っていた……

NEXT……………COMMUPART……………ERROR
R!! ERROR!! ERROR!!

Continue 125 〱何処までも理不尽な世界で????? (後書き)

今回で再びアンケートを中断します。

具体的にはここから不良君編終了までですねー。

不良君編が終われば残りは後少し…？ いやそれでも大きいのが2つあるのか…

核の火と佐藤君の謎が…でもこれが終われば折り返し地点！
頑張れ私ー。

次回からはコミュ？を交えたストーリーを展開します。

なのでアリスとこなたがアタックするかもですよ！ どのなるやら…

どうでもいいこと

感想返し遅れててすいませんー(涙)

弟のを借りてるので、直ぐに投稿しないとなのですよ…

開いている日にやりますのでお待ちくださいね！ あ、携帯で全部見えますよ。

携帯で書く手もあるけど、実は携帯は苦手だったり(汗)

という訳で(どういう訳だ)皆さんが苦手なものってありますか？
私は虫がだめです…泣きます、泣きますよっ!?

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 126 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化〽 (前書き)

という訳でコンピュータ?を交えた新章スタートですよー。

まずは1位のゆっきーからのストーリーですね！

ではでは短いですがどじごじ。

Continue 126 愛情と憎しみの狭間で踊る道化

第2幕最終章

愛情と憎しみの狭間で踊る道化

伊達雪之丞視点

ちっ。まさかここまで霊核にダメージを受けちまうとはな、お陰で
肉体を再生するのにも時間がかかった。

今は漸く動ける様になったが、それでも全盛期の7／8割って所だな、正直俺一人じゃあのアホ共をどうにか出来る可能性は低いか。

別に正義のヒーロー気取る訳じゃねえが、こんな下らねえ餓鬼の癩癩で作られた世界なんぞ真っ平御免だからな、ぶっ壊させてもらうぜ。

その為には仕方ねえが味方が必要になる、か。全盛期の俺でも流石にあいつら3体を相手にするのは難しい。

となりやあ、候補はあいつ等位しか居ねえだろ。

あの時も来てたみたいだが、俺も戦いで忙しくて話す時間も無かったからな。結構強くなってたみたいだし、出来れば勝負したかったんだが。

何にせよアイツ等と会って、力を試させてもらうとするか。今の俺に勝てないようじゃ味方にする意味すらねえ。

んじゃ、とつとと行くとするか。

何時ものコートと帽子を被り、結界がある場所まで歩いていく。

灯台下暗しってな、近くで隠れてると見付かり難いもんなんだぜ？

特に自分に酔ってる馬鹿共の足元は絶好の隠れ家って所よ。

ついさつきかなり強力な魔力を感じた。多分俺と戦ってた悪魔の片割れかなんかだろうが、何故今になって結界を解除しやがった？

どっちにしてもどっかの軍隊みたいな奴等が結界を破壊しようとしてたんだから、殺しに来たんだろが、それなら態々結界を消す意味がねえ……狂人の考える事は流石に理解出来ねえな。

『……………ちつ、胸糞わりい』

死体、死体、死体、死体、死体。

恐らくはガイア教団って所の奴等なんだろうが、一切合財皆殺しかよ。

悪魔だしそりゃ分かるんだが、どうしてこつも態とらしく死体を放置するんだか。相手に恐怖心を抱かせる？ いや、怒りを持たせるって所か。

槍の様な物に串刺しにされているやつ、四肢を切り飛ばされ銃弾を全身に浴びてる奴。

臓物が辺りに散らばって死んでる奴と凄惨さには事欠かねえ、今時猟奇殺人者でも此処までしねえぞ。

「……………」

その中で唯一……つっても良いのか分からんが、右手と左足が食い干切られただけの人間が呻いてやがった。

そいつに歩み寄り容態を調べる事にする。

「……………だれ……………か……………其処に……………居るの……………か……………」

『まだ生きてる……………いや、もう手遅れだな。言いたい事が有れば言いな。叶えてやれるか知らねえが、俺で良ければ聞いてやる』

「……………感謝……………する……………少年……………達と……………隊長に……………悪魔の……………弱点……………奴は……………氷結に……………弱い……………と……………」

それだけ言つと満足したように死の眠りについた男。

隊長つてのが誰だか分からんが、てめえの伝言は聞き届けたぜ。

後はゆっくり死んでおきな。

少年達、か。可能性としてはアイツ等かも知れねえしここで待たせて貰う事にするか。

こいつ等が先ほどまで生きてたつて事は、そいつ等も直ぐに此処に来るんだろっしな。

『だからよ……………ハイエナみたいな真似は止めときな。程度が知れるぜ……………?』

『バレていたか……………だが、ハイエナ結構！ そうでもしなければ此処はマグネタイトが少な過ぎるのでな……………生きる為には人間を食わねば

ならぬのだ…死体と言えどなっ！』

血の臭いに引き寄せられて来た悪魔が数体、どいつもこいつも雑魚ばかりだが、更にその存在感が薄くなってやがる。

確かにこの異界は普通の異界と違ってマグネタイトの供給率が異常に低い。だから大ダメージを受けたとは言え俺も此処まで回復に時間が掛かったんだが。

更に人間は奥に引っ込んでやがるからどうしてもマグネタイトが少なくなつてやがる、俺なら兎も角こいつ等にとっては死活問題なんだろうさ。

恐らくこの異界を作った阿呆が、意図してかそれとも分からずに異界を無理矢理作り上げたせいだろうな、どこか歪でおかしくなつてやがる所為だろう。

ちなみに天使は人間から信仰されればそれだけでマグネタイトが補給出来るそうだけ。便利な世の中って奴だなあ、おい。

『はっ、悪魔が聞いて呆れるぜ。つまりは人間に依存しなきゃ生きていけませんって言うてるのと同じじゃねえか』

『何とでも言え…我々がただ何もせず此処に存在していると思っ
ているのか…？』

『そんなもん知らねえよ、俺が分かっているのは恥も外聞も捨てた悪魔が浅ましく物言わぬ死体を食おうとしてるのが気に食わねえだけ

だ』

人間が肉を食うように、悪魔が人間を喰らうのにケチをつける気はねえさ。

だがよ、その辺に散らばってたとは言え、死体を喰らうのは流石に常識知らずだと思うぜ。

悪魔に常識を求めるなってか？ そうだとしても俺の中では看過出来ねえんだよ、こいつらから伝言を受けた身としてはな。

『我等とて、このような浅ましい真似などしたくは無い。だがな、こうでもしなければ我々はこの異界に存在出来ぬのだ！ 思考も何もかもかなぐり捨てて人間を食わねばっ！』

『なら現界してこなければ良かったじゃねえか、そういうもんだろ？ 此処に現れたためえらの落ち度つてもんだ。人間食いたきゃ、生きてる奴を狙いな』

『それが出来れば苦勞などせん……其処をどけ、如何に貴様の様な悪魔といえどこの数を相手に勝てるとは思っておるまい』

奴の言う通り、後ろには20を超える悪魔が居やがった。

そのどれもが、本来の形を留めてねえ……体の一部、下手すりゃ半身がゲル状になりかけてやがる。所謂マグネタイト不足って奴だな。

ああなっちまうと、余程のマグネタイトを補給しない限り元には戻れねえな。まだその一歩手前なら多少のマグネタイトで済んだんだろうが。

こいつ等全員の分のマグネタイトをこの数人の死体から取れるとでも思ってるのかね。

『ああああ…ああああああ…
AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA』

『おおおおおおおおおおおおお』

『既にこいつ等に自我など無い。マグネタイトが足りなければこうなり、最終的にはスライムだ。我等が我等として生き残る為にはその死体頂かせてもらおうっ！』

『はあ……忠告はしたぞ？ どうしてもこいつ等を食いたけりゃ、俺を殺してみせるんだなっ！！』

『ならば貴様のマグネタイトも奪ってくれようぞっ！』

『やれるもんなら……やってみやがれっ！ オラオラオラオラオラオラッ！！』

奴等が動く前に両手に靈力を溜め、靈波砲を連続で撃ちまくる。

行き成りの強襲で悪いんだが、これで雑魚は蹴散らさせてもらっぜ。

1つ1つの靈波砲は威力が低いと言っても、この程度の雑魚になら掠っただけでも十分致死量のダメージを与えられる。

その証拠に

『ぎゃあああああつ!?!』

『AGYAAAAAアッ!』

『くっ! 全員分散して襲いかかれええつ!』

ここで戦えば死体を巻き込んでしまうしな、とつと潰しておかねえと。

まずは全力で踏み込み、リーダー格の悪魔を殴り飛ばす。

全力を込めた一撃は腹を貫通し、一撃で吹き飛ばした。ん…死んだか?

『がああああああああああああああああつ! がはっ…がはっ…デイ…ディアラマっ!』

『ほう? 早々簡単に死なねえとは思ったが、よくあの一撃を耐えたな?』

『な…なんという…力…ここまでマグネタイトが薄いこの異界でよ

く其処まで……の……』

『御託は良い、とつとと終わらせようぜ？ 行くぞっ！』

『お前達、壁になれっ！ 奴を阻むのだっ！』

既に自我もねえんだろうな、命令通りに正に肉の壁になる悪魔共。

せめてもの情けだ、一撃で送り返してやるよ。

『おおおおおっ！！ ゴツドハンドッ！』

霊力を込めた一撃が壁となった悪魔達を薙ぎ払っていく。衝撃に耐え切れずマグネタイトになって消えていった。

だが、俺のゴツドハンドの衝撃はそれだけじゃ終わらねえ。

目視出来るほどの質量を持った巨大な拳状のエネルギーはそのままどんどん悪魔達を飲み込んでいく。

絶叫を上げ消えていく悪魔共が居る中、唯一リーダー格の野郎だけは、仲魔を盾にして回避する事が出来た様だな。

それでもかなりの魔力を持っていかれたんだろう、肩で息をするのがやっとって所か。

『数がどうしたって？ この程度なら壁どころか障害にもならねえよ。後はてめえだけだ』

『う…ぐ……………何故其処まで力を使って貴様は平気なのだっ！？』

『単純だ、マグネタイトを十分持つてるからに決まってるだろ』

『このマグネタイトを補給しにくい場所で、そのような真似が…いや、貴様ほどの悪魔なら人間を探して獲って食える訳か…』

『おいおい、俺を勝手に人食いにすんな。俺はそっちの趣味はねえ』

俺がここでも普通に存在してられるのは、あの時戦った奴から奪ったマグネタイトのお陰なんだがな。

かなりの量を補給させてもらったんで、後数ヶ月は余裕で存在してられる。

足りなくなればまたサマナー辺りをぶっ飛ばして、補給させて貰う予定だ。

『く…くははははははははははっ！ 我が身はこれでお終いと言う事か……………殺せ。このままスライムに成り果てるつもりは無い』

『殊勝な心掛けじゃねえか。言うておくが俺に不意打ちは効かんぞ』
『？』

『一人で貴様に勝てるとは思って居ない。どうせこのままならマグ

ネタイトが枯渴してスライムになるだけ、そのような辱めを受ける前に殺された方が本望だ』

『そうかい。んじゃ、そうさせて貰うぜ』

『この異界はあまりにも歪だ…本来満遍なく異界内に満たされる筈の最低限のマグネタイトすら一箇所に送り込まれている…ここに現界したのが我々のミスか…』

『それだけ分かれば十分だろ。ま、今度は違う場所に出てこいや』

『そうさせてもらおう…貴様の事は本体に還っても覚えておくぞ』

ニヤリと笑う悪魔、はっ、上等だ楽しい戦いは俺の望む所だからな。

『そりゃあいい。俺とてめえの本体、どっちが強いかわ分に遣り合いたいもんだぜ』

『我が名は邪鬼ラクシャーサ。貴様は？』

『人呼んで伊達雪之丞だ、元の世界に帰っても覚えておけっ！』

顔を叩き潰して悪魔を完全に滅ぼした。

残った残り滓のマグネタイトは、貰っておくぜ？ てめえとの再戦の為にな。こんな下らねえ戦いよりは楽しめそうだ。

『さて…と、丁度良いタイミングだな、お前等』

本当に丁度良いタイミングだぜ、今ので軽いウォーミングアップは終了したからな。

今度は本格的に戦わせて貰うか…

『覚えてるよな、あの時の約束をよっ！ デビルサマナーと悪魔共
っ！』

あの時ぶっ倒したデビルサマナーとその仲間達が俺を見ていた。

ゆっきー再戦フラグですよ。

さてさて、どれくらいリソースを削る事になるやら、ですね。

皆さんのパソコンの情報感謝なのですよ！

私が欲しいのは最低でも3D系のMMOがスムーズに出来るタイプですから…

かなり高くなりそうですね…

秋葉原とかは…北海道の片田舎に住む貧乏人には行けない世界なのですよ(よよよ

今年の終わり頃に買えるかなあ…まずは最低でも安くていいのでノード買わないと。

どうでもいいこと

暑かったり寒かったりと北海道は毎日忙しいです。

昨日はかなり寒かったですし、今日はかなり暑いのですよ。

風邪引いちゃいそうだ…

こういう時はのんびりベッドで転がるのが一番かもですねえ

さて(え)最近皆さんがハマっているアニメとかドラマとかありますか？

私つい先日『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない』を見ました。

泣きそうになりました…

『みつかつちゃ…ったあ…』

ほろほろほろ…なのですよ。こんな感動的なお話書いてみたいなあ。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 127 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化?〽 (前書き)

短いですが書き上げましたー。

どうやって大樹君チームVSゆつきーにするかでかなり悩みましてこんな感じになりました。

全員で掛ければ早いのにーと…まあ短いですがどうぞなのですよー。

うー…なんなんだろ。

朝から耳に水が入ったかのような感じに囚われている私です。

ちなみに未だに治ってません、気持ち悪いよう…

惨状の中の悪魔、これが彼を示すのに一番相応しい言葉と言えるだろうか。

黒いトレンチコートに身を包んだ人間の様な悪魔 英雄・伊達雪之丞が其処に居た。

周りには人間：皆方の部下であるガイア教の死体がまるで見せ付けるように散乱している。

そんな中で一人立っている悪魔に疑いを持たない筈が無い。

「でだ、こんなあからさまな場所に居ると言う事に、言う事はあるか悪魔？」

気の弱い相手なら気絶してしまうほどの威圧感を込め、射殺す様に雪之丞を睨みつける皆方。

部下達が殺されたのは変えようも無い真実で、この様な死に方をいつかするとは思っていたが、それでもやりきれない思いがある。

周りにバラバラになった大切な部下達が転がっていても尚、その感情を押し殺し皆方は冷静に相手を観察していく。

見た目20前後の小柄な男性だが、そんな彼から感じる強大な魔力
雪之丞からすれば霊力だが はまるで飢えた巨獣を思わせた。

『あん？ アンタこいつ等の仲間か何か？』

大樹の方に集中していた雪之丞だが、皆方が殺気を込めて此方を見
ている事に気づき、もしかしてと思ひ尋ねる。

「だとしたら如何するかね？ 流石に俺も部下が無残に殺されて笑
顔で応対は出来ないんだ、言いたい事があれば聞こうか」

『おいおい、こいつは 』

雪之丞が答えようとした時、それを遮るような大声がみゆきの方か
ら聞こえてきた。

あ…あなたは……雪之丞さんっ！！

「うえっ？ 小竜姫あの人知ってるの？ 百太郎にすっごい反応あ
るから悪魔だとは思っけど…」

あの人…！？ 私が探している横島さんの友人で伊達雪之丞さ
んですっ！ 雪之丞さんっ！ 私ですっ、小竜姫ですっ！！

突如小竜姫の剣が興奮した様に叫ぶ、彼女の声が聞こえた雪之丞も不思議そうな顔をしてみゆきを見ていた。

直ぐに彼女が持っている剣の形に気付くと掌に拳をポンと乗せ、剣の正体に気付き気安く話し掛ける。

『誰かと思えば小竜姫か。今回は角じゃなくて剣なんだな？ まさかお前も居るとは思ってたな』

何故この場所に…と言うよりこの惨状は…いえ、雪之丞さんは戦うのは好きですが、相手を甚振る趣味はなかった筈です。

『まあ、弱い奴を倒しても詰まらないからな。俺が此処に着た時は一人残して死んでたぜ。まあ、残りの一人も伝言を受け取ったら死んだがな。多分あんたがこいつらの隊長だろ？ 預かってるぜ伝言』

「ふう…聞かせて貰おうかね？」

相手に殺気が無い事もあり冷静さを取り戻した…いや、怒りを胸の奥で燃やす事にした皆方。

恐らく伝え切れなかったのであろう、部下の最後の伝言を受け取る事にする。

『んじゃ、簡単に言わせてもらっぜ？』悪魔の弱点を見つけた、奴は氷結に弱い』とさ。良い仲間じゃねえか。死ぬ間際まで情報を

伝えようとする何ぞ滅多に出来ねえ』

「それが俺の部下なんぞな。伝言感謝しておくよ」

噛み締める様にして部下の遺言を聞き届ける皆方。何時も通りの軽口を叩くが、それでも辛い事には変わりはない。

『あいよ。俺も直ぐに伝えられてスッキリしたぜ。長い間預かってるのは面倒だからな』

それで、雪之丞さん？ 何故此処に居たのです？ 貴方は既に死んだ筈では…

『そういうあんたも、ってそんな事はどうでも良いか。何々だから、なんてのは性に合わねえ。俺が此処に来た理由：分かっている？ デビルサマナー？』

「出来れば忘れていて欲しかったけどね」

「大樹君、この悪魔と知り合いなの？ 小竜姫も知り合いみたいだし…」

「ですが、友好的とは行かなさそうですね」

みゆきとこなたが武器を構える。

しかし、COMPから聞こえてきた声がそれを制した。

《お前等はこの後本気で戦うんだから、ここは休んでな。こいつは因縁のあるオレ達が》

《相手をするからさっ！》

「全員召喚。来いっ！」

COMPを起動しダツキ以外の全ての仲魔を召喚する。

グクマツツ、いやマンティコアを除けば全員が因縁のある相手、更に言えばアリスとコウモクテンは見逃してもらったと言っ屈辱もある。

それもあってか全員がやる気を見せていた。

『サマナー。悪いけどこいつ等はオレ達だけでやらせてくれ、頼む』

『契約の一つだからね。私は出来るなら皆でフルボッコにしたいけど』

『あの時の英雄かっ！！ 我を雑魚扱いしたこの恨み忘れてはおらんぞっ！！』

やる気を見せるコウモクテンとパチャカマク。アリスはどちらかと言えば全員で倒したいと考えているが、あの時見逃してもらった時

の約束を考えると無碍には出来ない様だ。

この後人修羅達と闘う事を考えれば、一気に蹂躪すると言う手が一番なのは分かっているのだが、コウモクテン達は出来るなら自分達で方をつけたいと考えている。

更に言えば相手は強力な英雄、あの時のままならば寧ろコウモクテン一人でも勝てるかもしれないが、感じる魔力はあの時以上になっている。

もし全員で掛かったとして、その全員が疲労してしまえばこの後の戦いが不利になる。

時間を掛けてしまえば今度はシエルターを襲われる可能性もある為、急がなくてはならないのだ。

『ご主人様……』

「アメリカはご主人様に従うのですっ！」

「……………分かった。ここで全員が動くよりは確かに後の方に余力を残せるし、ベターな方法かな。とりあえずこなた達は下がって欲しい、ここで無駄に疲労するのは僕達だけで十分だよ」

『まあ、それが妥当ですわねえ』

『ワシは因縁無いからどうでもいいんじゃないのう』

大樹も雪之丞の能力は嫌と言うほど思い知っている。

ここで全員がリソースを切るよりは、大樹と仲魔達で何とかする方がベターと考えた様だ。

後は大樹一人なら最悪、残っているソーマで回復も可能である。仲魔達はマグネタイトを補給すれば何とかできるので、コレが一番安全な方法だった。

問題は勝てるかどうか、と言う話になるが、雪之丞を倒せない様ではあの悪魔2体や人修羅に勝てる可能性などある訳が無い。

強いて言うなれば前哨戦とも言えるべき戦いとも言えるだろう。出来ればスルーして先に進みたいと考えてもいるが。

「ですがっ！ 相手が強い位、私達にも分かりますっ！」

「だね、大樹君は要なんだし寧ろ此処で大樹君達だけに任せて置けないよ」

「いや。ここは彼に任せておこうじゃないか二人とも」

大樹の事を心配して戦闘に参加しようとする二人を皆方が止めに入る。

強い視線をぶつけるみゆき達にもまったく堪える事無く彼は続けた。

「ここで全員が動けば確かに直ぐ勝てるかもしれないが、それは所詮可能性だろう？ 小竜姫さんで良いかな？ 相手はどれ位強いんだ？」

彼の言う通りかもしれないね。私達全員で掛かっても逆に邪魔にしなければならないでしょう。寧ろ数が多い分だけ此方が不利になります。

「数の暴力じゃダメって事？」

雪之丞さんは数で押せば勝てる相手ではありません。寧ろ戦力に慢心してしまえば負けてしまうのは此方でしょう。

「そんな事はない…とは確かに言い切れませんね。数で押せば勝てるかも知れないとは少し考えてしまいましたので」

雪之丞のクラスにまで強くなれば生半可な戦力や戦略では押し通す所か踏み潰される可能性の方が高い。

全員で掛かれば負ける事は無いだろうが、その戦闘でどれだけの被害が出るか想像も出来なかった。

彼を倒してそれで終わりならば余力を使い切るつもりで全員が掛かれば確かに被害少なく倒す事が出来るかもしれないが、事態はそれを許してはくれない。

雪之丞自身も興味があるのは大樹とその仲魔達だけであり、態々被害を増やすのは愚策とも言える。

「……うん、分かったよ。下がるうみゆきさん」

「分かりました。ですが、気をつけてくださいね……」

渋々受け入れるこなた達。彼女達も雪之丞のレベルが凄まじい事を肌で感じている。

ならばこそ共に戦いたかったが、問題はこの後の戦闘に疲労を蓄積させる訳には行かないと言つ事で下がる事にした。

それでも何かあれば乱入するか狙撃しようと考えているこなたなのだが。

「という訳だ、任せるぞ佐藤大樹君。出来れば急いで勝利して欲しいね」

「無理難題をあっさりと言わないで欲しい。僕だって出来れば全員で戦いたいよ………待たせたね、英雄・伊達雪之丞」

『別に全員で掛かってきても構わねえんだぜ？ 俺としてはそつちも十分に楽しめそうだからな』

トレンチコートを脱いで戦闘態勢を取る雪之丞が獰猛な笑みを浮かべて大樹達を見ている。

先程戦つたメシア教達を思わせる強い殺気が襲い掛かるが、それを

何とか耐え切り前を見据え魔銃・スカアハを構える。

『馬鹿言うな、てめえを倒すのはオレ達だけで十分なんだよ。あの時は世話になったな…借り、返させてもらうぜ？』

『あの時の悪魔か、ほう？ 中々の魔力じゃねえか。良い戦いが出来そうだな』

『あんまり舐めてると痛い目見るだけじゃすまねえぞ？ オレ達をあの時のままだとは思って無いんだろ？』

コウモクテンの言葉にニヤリと笑う雪之丞。

『たりめえだ。強くなった奴等と戦うのが一番の楽しみなんだからな…寧ろお前等直ぐに倒されるなよ？』

『上等だ……………行くぜっ！』

『おおおおおおっ！ 魔装術っ！！ ハナっから飛ばして行くぜええええええっ！！』

黒い鎧の英雄と化した雪之丞の拳とコウモクテンの巨大な戦斧がぶつかりあう ……！！

んー、今回のお話は正直無理矢理感が強いなあ…

全員で戦えば勝てるのは確かかって分かってるのに、態々大樹君パーティのみという…

まあ、リソースの問題もありますしコレも選択の一つなんですけどねー。

この辺をプロの人は上手くまとめるんだから凄いですよねえ…私も頑張らないとなあ。

という訳で次回はゆっきーとの戦闘です！ 2〜4話予定ですよ。

どうでもいいこと

TRPGがやりたいなあ…という訳で昨日は外食の後、TRPGを皆でやりました！

楽しかったなー。私がGMでガチで殺しに行ったのに負けちゃいました(よよ

でも、出来れば沢山のメンバーでやりたいですよええ。

今はオンラインでもTRPGが出来るので、だれかー一緒に遊びませんかー(切実

大募集なのですよ(割と本気。

メールとか、コメントでお待ちしてたり〜

という訳で。皆さんはTRPGではどれが好きですか？

私は女神転生と、アリアンロッド、ナイトウィザードが好きですね。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

戦闘開始1ターン目です。

ああ…戦闘描写は苦手です、情景が上手く書けてないなあ。

どうにも戦闘中に他の視点に回るのが難しいです。

どうやって視点を違和感無く変更出来るかが、戦闘描写を書く上で
の基点になりそうですね。

頑張らないとー。

ではは、短いですがどうぞ。

でも、ちょっとだけ、上手くなった様な気がしないでも…ないかも
？(汗)

魔装術のステータス上昇を25から15に下降しました

究極まで霊力を込めた魔装の拳は鋼すら凌駕する程の硬さと威力を持つ。

重量的な問題でコウモクテンの剛力で叩き付けられた戦斧と拳では本来、斧が勝る筈だ。

しかし…そんな常識を打破してしまうのが英雄・伊達雪之丞である。

その場でギチギチと音を立てながら鏢迫り合いをしている二人。お互いに獣の様な笑みを浮かべている。

『ハハツ！ 俺の拳で貫けないとはなっ！ やる様になっただじゃねえか。だがまだまだ力が足りてない様だな』

徐々に押され始めるコウモクテンの戦斧。

合体し強くなった彼女の力すら雪之丞は難なく受け止め、それどころか押し返してしまう始末。

『そりゃ悪かったなっ！ ぜりゃああああああっ！』

『おっっっっ！』

全力を振り絞り、拮抗していた斧を振り切ったがその程度のスピードで彼を捉える事など出来ない。

空を切る音も無く斧は誰も居ない場所を切り裂いていく。

それと同時に爆音が響くと、コウモクテンの間合いを突き抜け拳を打ち込む雪之丞。

弾丸よりも速い速度で襲い掛かる一撃をスウエーで避け、その勢いのままサマーソルトを放つ。

高速の蹴りを少し下がる事で回避して蹴りを打ち込むが、既に体勢を整えてその攻撃を戦斧の腹で受け止める。

轟音の少し後に腕が痺れるほどの衝撃が伝わる。

『はっ、この程度かよ英雄さん。なら次はオレの番だっ！ おお
おおおおおっ！！』

チャージで力を溜めるコウモクテン。

莫大な魔力が彼女に集まっていくのを感じた雪之丞は嬉しそうな表情をしながら同じく力を溜めていく。

数秒の沈黙の後、お互いが全力の一撃を放つ。

『おおおおおおおおおおおっ！！』

『はあああああああああっ！！』

忠義の一撃！！

ゴッドハンド！！

お互いの一撃が唸りを上げ、叩き付けられた。

同時に二人を中心として巻き起こる凄まじい衝撃波が周囲の建物のガラスを悉く割っていく。

その場に居たこなた達も、吹き飛ばされないようにするのが精一杯の様子だった。

もうもうと煙が巻き起こり二人の様子が見えなくなる。

その間にも大樹はアナライズを続け、仲魔達は其々支援魔法を掛けあっていく。

『凄まじいわねえ、一体どうなってるのかしらあ』

煙の中から聞こえてくる金属音が二人共あの攻撃を耐え切り、尚且つ戦闘を続行している事を示していた。

『油断は出来ないよ。多分コウモクテンのパワーじゃ押し負けてるかもしれないし』

「煙が…晴れていくですっ」

風に煽られ徐々に二人の姿がおぼろげながら見えてくる。

其処には激しく全身が傷付いているコウモクテンと、見た目も動きも何等変わっていない雪之丞が居た。

彼女の放った最高の一撃は基本防御の高い雪之丞には軽度のダメージジしか与える事が出来なかった様だ。

しかし、雪之丞の一撃はコウモクテンに無視出来ない程のダメージを負わせていた。

それでもそのスピードを変える事無く打ち合っていく二人。

『ちっ、流石に化け物だなてめえはっ!!』

『何言つてやがる。俺の魔装術の一部を一瞬とは言えぶっ壊したんだ、そっちも十分化け物だろうよっ！ オラオラオラオラオラッ!』

振り下ろされた斧の一撃をバックステップで距離を取りつつ回避し、そのまま両手を突き出し掌から連続で霊波砲を放つ。

高速で迫る靈波砲。ダメージを受ける前ならば回避する事が出来たかもしれないが、今の状態ではスピードが足りず、腕を交差し防御の姿勢を取る。

今までの彼女ならば、防御する事も出来ずに倒されていたかもしれないが、今は全門耐性を得ているお陰でダメージを半減させる事が出来ていた。

轟音と共に襲ってくる衝撃に耐えながら、彼女は相手の隙を探す。

『ぐぐぐぐぐぐ！！』

『オラオラオラオラアッ！！』

何十発も襲ってくる靈波砲だが、流石の雪之丞とて連続での靈気の放出は疲労が溜まる。

一撃一撃は通常の靈波砲より弱い為、このままではコウモクテンを押し切る事が出来ないと考えた彼は、連続靈波砲を止めて突撃を掛けた。

攻撃を耐え切った彼女がその突撃に対して全力の一撃を放つ！！

『ああああああっ！ 捉えたあっ！！』

弾丸の様に突撃してくる雪之丞にタイミングを合わせ、全力で斧を振り下ろした

『見え見えなんだよっ！ おらあああああっ！』

『くっ！』

だが、その一撃は土壇場で雪之丞が動きを止めた為あっさりと、空を切る。

完全に無防備になってしまった彼女に止めの一撃が放たれ

『これでまずは一人っ！！』

『メルトダウン！！』

様とした瞬間。コウモクテンを避ける様にして襲い掛かってきた青色の猛火が雪之丞を完全に捉えた。

全てを焼き尽くす様な炎が雪之丞の魔装の鎧を焼いていく、チャンスとばかりに一度下がり、アリスからディアラハンを掛けて貰う。

『ふう、冷や冷やしたぜ』

『もっっ！ 一人で突っ走らないでよねっ！ 激しく動き回るから

攻撃出来なかったじゃないっ！』

怒鳴りながらも回復魔法を掛け続けるアリス。

お陰で雪之丞から受けた全てのダメージは全て回復する事が出来た様だ。

対して雪之丞はパチャカマクの放ったメルトダウンを受け、流石に後方に下がった様だがあまりダメージは無い様に見える。

雪之丞が使う魔装術はあらゆる属性に耐性を持つ為 極大級でも下手すれば中級にまで威力が下がる そう易々と傷つける事は出来ない。

しかし、炎で目を封じられそうになったので一度下がったのだ。直ぐに靈力を開放し自らを焼く猛火を吹き飛ばす。

『！ ちい……………やるじゃねえかてめえ』

『あの時の恨みは忘れておらんぞ。英雄よ！！』

『……………あー。誰だっけお前？』

『あの時のモラクスだっ！！』

怒鳴りつけるパチャカマクだが、あの時とは姿が大いに変わっているのだからないのは当然かもしれない。

寧ろモー・シヨボーの時に会っていたら生暖かい目で見られた事
だろう。

「あの時とは違つのですよっ！ コウモクテンにヒートライザなの
です！」

『おお、こりゃあ良いな』

「さて……………如何攻めようかな。予想してたけど前より厄介になっ
てるし…と言うか僕達で勝てるか不安になってきた」

『じ、ご主人様ふぁいとですっ！』

コウモクテンが攻めている間にアナライズを仕掛けていた大樹だが、
判明した能力を見てゲンナリしている。

前の戦いの時はレベル25にまで弱体化しても尚、あそこまで強か
ったのだが、現在はそれ以上に強化されている上に、それでもまだ
弱体化しているとなっている。

(レベル65で、ハムド無効、低下魔法自動除去、ステータスが
軒並み高くなって…これはレベル90台って言われても信じられ
るステータスだよ…)

基本耐性は軒並み半減で、其処から更に魔装術で半減されている。

その分攻撃力は若干低く、高くても『極大』級　それでも十分脅威
と言える　なのだが、あの攻撃力で打たれればどの道即死に変わり
は無かった。

強いてあげれば回復魔法が無いのが不幸中の幸いと言えるが、焼け
石に水のような感じがした。

(雪之丞はアイテムも使ってくる可能性も有るから僕は支援に徹し
て……いや、まてよ……？　クー・フリーン、行けるかい？)

(いつでも行けるぜ？　ってかよ俺もあいつと戦いたかったぜ、か
あつ！　良い殺し合いになると思ったのによお)

妙案を思いつき、直ぐにクー・フリーンに問いかける。

彼の持つ必殺技を使えば一発逆転の可能性があるので、その為には
詰め将棋の様な戦略を求められるのだが。

「 Kouモクテン！　マンティコア！　雪之丞の動きを止めてくれ！」

『 応よつ！　行くぜえ英雄つ！　第2ラウンド目だつ！』

『 ヒョーヒョー。こつまで相手が強いと、まったく強くなった気が
せん。う』

大樹の指示の下、二体が全力で雪之丞を押さえに掛かる。

向かって来るコウモクテン達に対してその場に立ち止まって攻撃を捌いていく雪之丞。

レベル的にも実力的にも彼の方が数段上だが、それでもどうにか彼女達は追隨していく事が出来ていたが、それも時間の問題だろう。

二人が稼いでくれている時間を使い仲魔に相手の情報とこれからの対策を伝えていく大樹。

「皆聞いてくれ、敵の耐性は万能魔法も含めて殆ど半減する。特に即死魔法は基本無効になつてゐるみたいだ。低下魔法は自動除去だし其処から防御力が2倍になつてゐるね」

「前も聞いたけど、其処からまた凶悪になつてゐるね…うあああ、面倒臭いなあ」

「でも、何とか出来る様ですわねえ？」

「可能性…と言うかこれが決まれば勝つ事は出来ると思う。けど、前の様に反射される可能性もあるから如何にかして必中させる方法を探さないといけない」

相手の実力を考えれば余力を残して勝利する事は不可能だろう。

ならば、全力を持って相手を策に嵌め、実力を出し切らせる前に倒すしかない。大樹は策を練っていく。

戦いはまだ始まったばかりだ。

現在累積ダメージ：1865
現在消費MP：386

「名前」：ダテユキノジョウ 「種族」：英雄
「現在LV」：65 「属性」：N-C 「召喚MAG」：
?????
「LVUpに必要なMAG」：?????MAG

「ステータス」括弧はボス時ステータス
HP：865(10654) MP：564(3500)
力：65 知：41 魔：41 体：46 速：63 運：42
「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：
魔： 心：× 禁：× 聖：× 呪：× 状：× 万：

「所持スキル」
・弱体化 ・格闘ハイブータ ・斬撃ハイブータ ・真・達
人の感

・怪力乱神 ・物理攻撃貫通 ・ムド防御 ・ハマ防御
・オートデクンダ
「スキル」

- ・チャージ 次ターン、物理威力を3倍にする。
- ・霊波砲？ 敵単体に万能属性極大ダメージ
- ・連続霊波砲？ 敵単体に万能属性特大ダメージ 7〜1

2回攻撃

- ・霊波盾？ あらゆるダメージを3段階軽減する。
- ・モータルジハード？ 敵全体に剣属性極大ダメージ
- ・ゴッドハンド？ 敵全体に技属性極大ダメージ
- ・狂気の粉碎？ 敵全体に技属性極大ダメージ 1〜4回

攻撃

- ・魔装術 自分のHPが4倍 全ステータスを+1
- 5上昇。 受けるダメージを全て半減 攻撃力が常に2倍

弱体化：顕現するのに必要なマグネタイト量が足りない為
あらゆるレベルやステータスが軒並みランクダウンしている。

斬撃ハイブースタ：『剣』属性の威力を1.5倍する

格闘ハイブースタ：『技』属性の威力を1.5倍する

真・達人の感：あらゆる攻撃などに対する回避率を大上昇させる。

怪力乱神：通常物理攻撃、格闘系のスキルの威力を1段階常に上昇させる。

物理攻撃貫通：剣、物、技の相性が【-】【+】【×】【】でもそれを無効化して

通常に物理ダメージを与えることが出来る。

ムド防御：相性などを無視されてもムド系魔法を完全に無効化する
ハマ防御：相性などを無視されてもハマ系魔法を完全に無効化する
オートデクンダ：低下魔法の対象になった場合、タイムラグ無く
即座に回復する。

コウモクテンVSゆっきーのガチンコ勝負はゆっきー圧勝で終わりました。

次回は佐藤君が頑張りますよー。具体的には如何頑張ろうか(汗作戦なんて…なんて…助けて太公望っ!!)(えー

どうでもいいこと

皆さん結構TRPGが好きみたいですね

とても嬉しいのですよ！ となるとオンラインセッションはやってみたいですよえ。

今、私も大体毎週土曜日の夜に4〜6人でオンラインでやっています。私達個人でやってるので、人が少ないのが難点ですええ。

もし興味があれば一緒に遊びませんか！

良かったら『なるつ』のメールか感想に書いてもらえると嬉しいなーとか(汗

今日は蒸し暑かったう…

こういう時は冷たいものがないなー、と言う事で冷やし中華はじめました。

じゃなくて食べてきました。あの酸味が結構好きですよ。

夏の定番って感じがしますよね。

皆さんの夏の定番！ はなんでしょうか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue129 恋愛と憎しみの狭間で踊る道化?? (前書き)

戦闘描写!? そんなものがスムーズに書けたらプロになれるのですよ! (涙)

と言う訳でゆっきー戦闘2話目なのです。

ぜんぜん上手にならない私に涙目なのですよ。
では、短いですがどうぞー。

（流石大樹さんと言うかなんと言うか。確かにこれなら上手く行きそうよね）

大樹からの作戦を聞いた後、其々がその作戦通りに動き出した。

此方も強くなったとは言え、雪之丞相手には地力が違い過ぎる為、まずはアメリカがヒートライザで前衛の仲魔を強化して行く。

全てのステータスを最終段階まで上昇させる事で、かけ離れている実力の差を少しでも埋めていくのだ。

とは言えそれで此方が完全に上回れる筈も無く、パチャカマクが前衛に加わる事でどうか抑えているのがやっとと言う状態である。

コウモクテンとの戦いでは、お互いに相手の能力を探りながら戦っていた事もあり、対等では無いがぎりぎり戦えて居たが、雪之丞も少しずつギアを上げてきている。

『吹き飛ばす！　　万物流転っ！！』

パチャカマクが左手を下から勢い良く胸元に動かすと、雪之丞を中

心に竜巻が巻き起こる。

ハリケーン以上の威力を持つ風の魔法が雪之丞を切り刻み、動きを止めた……が。

『うおらあああああああああああああああつ！！ はあつ！！』

『魔法を気合で吹き飛ばしたとっ！？ 大概にしろっ！』

『へへっ、良い魔法じゃねえか。魔装術を使つてなかったら多少は痛かったかもしれねえな』

咆哮一閃、靈力を極限まで高め開放する事で内部から万物流転を打ち破った。

予想もしていない相手からの思わぬ攻撃に野獣の笑みを見せる。

相手が強ければ強いほど、叩きのめした時の爽快感が高まっていくのだ。雪之丞にとっては最高のスパイスとも言えるだろう。

『今度は俺から行くぜっ！ おらあっ！！』

大地を強く踏み切り飛び込んだ。

あまりの速さにパチャカマクには消えた様にしか映らず、同時に腹

部に強い衝撃を感じた時には吹き飛ばされていた。

一瞬の内に懐に入り込んでのミドルキックが綺麗に命中してしまう。

『ごああああっ!?!』

『そのまま終われっ! うらあっ!?!』

『ヒョー! 敵は一人では無いぞいつ! ごはあああああっ!』

『っ!?!』

吹き飛ばすパチャカマクに駆け寄り止めの一撃を叩き込もうとした時にマンティコアが突撃して来た。

同時に吐き出される溶解プレスが雪之丞の顔面に吹き付けられる。

横からの全力の突撃を受け後方に飛ばされたが、ダメージは浅く溶解プレスを受けた顔面は何所も腐食していない。

『ヒョーヒョー…! 理不尽じゃのう。じゃが、その隙もらったぞい』

『メギドラオン!』

『メギドラオンですわあ』

『ダムドラオンなのですよっ!』

巨体を誇るマンティコアの後ろから飛び出すようにアリス、サキユバス、アメリカが三方向から『絶大級』の魔法を放つ。

真白き二つの極光と、漆黒の爆発が逃げ道を塞ぐ様な形で雪之丞に襲い掛かる。

流石の雪之丞とて、この魔法を受ければダメージは免れないのだが、それでも彼は焦らず次の手を取る。

『ははっ、これだよこれっ！ このギリギリの戦いが俺を更に強くする！ もっと上に！ もっと誇れるように！ 俺を産んでくれたママに報いる為にっ！』

両の掌に亀甲型の靈波の盾を作りあげ、それを極光に投擲する。

空気抵抗が無い靈的物質の盾は高速で飛んで行き、魔法の光にぶつかる直前で、辺りを揺るがす大爆発を起こす。

その衝撃で魔法の進行と威力が抑えられてしまう。直ぐにもう一枚の靈波の盾を作り、唯一威力が抑えられて無いダムドラオンに叩きつける。

魔法と盾が接触するとその場で大爆発を起こし霧散してしまう。

『今です、ご主人様』

「捉えた。行くよスカアハ」

爆発の中、雪之丞から視点を離さず隙を伺っていた大樹。

両手で魔銃・スカアハを構え、狙いを付け 撃つ。

至高の魔弾・コピ―

強大な破壊力を持った弾丸が寸分変わらず彼の脳天目掛けて発射される。

霊波の盾を使い防御した所為でほんの僅かだが隙が出来ていた。大樹はこれを狙っていたのだ、『予想通りに』

後僅かで命中する刹那の瞬間、雪之丞の姿がブレる。

弾丸は彼ではなく地面を貫通し、小さなクレーターを作り上げた。

「うそっ！？ あれも避けるのっ！」

襲ってくるメギドラオンなどの魔法の衝撃に両手で顔を押さえながら戦いの行く末を見守っているこなた達。

相手の余りの強さに驚きと強い不安を感じていた。

「メギドラオン級の魔法を囿にして硬直時間を作り上げ、本命の一撃を狙った筈なのですが…凄まじい反射神経ですね」

彼の戦いのセンスは生きていた頃からズバ抜けていましたからね。英雄となつてからは更に修練をしていたようです…私が全力で掛かっても今の彼を倒すのは難しいでしょう。

超加速を使えば余裕で勝つ事は出来るだろうが、武神として剣のみで戦つたならば今の雪之丞を倒すのは難しいだろうと見ている小竜姫。

こなたとみゆきは息もつかせぬ連続攻撃を完全に防いだ雪之丞を見て呆然としている。

「こいつはもしかしなくてもメシア教の奴等よりも強いかもしれんな」

皆方が冷静に先程戦つたメシア教の神父達を思い出しながら言う。

正直に言えば雲の上の様な戦いの為、さっぱり何をしているか見えない時の方が多かつたりするが、それでも何かの経験になるだろうと戦いを観察していく。

ええ、間違い無く雪之丞さんの方が強いでしょう。更に彼は『悪

魔』として今も尚成長をし続けていますし、このまま強くなっていけば私と同等になる可能性も否めませんね。

「って、小竜姫って本来はあの悪魔より強いのか…?」

「それでも龍神の端くれですからね。」

「龍神ねえ…パトリムパスも龍神だけど…まあ、レベル高いとそうなるかな」

「何にせよここからが正念場ですね」

この後の戦いに活かす為に、全員の一拳手一投足を見逃すまいと刮目するみゆき。

大樹の事が心配で無い訳が無い、彼女もこなたも出来るならば一緒に戦いたいと考えているが、アレだけの防御力とスピードを持つ相手に乱戦を挑むのは無謀と言えた。

先程からこなたが狙撃しようとしていたが、どうやら雪之丞はその気配にも気付いている様子だ。

(大樹君…がんばれっ!!)

(佐藤さん、どうかご無事で…)

戦いは徐々にヒートアップしていく。

乱れ交う魔法や銃弾の嵐、激突する拳と武器、それはまるで戦場……いや修羅の世界と言った方が良いだろうか。

既にコウモクテン、マンティコア、パチャカマクはかなりのダメージを受けている。

打って変わって雪之丞の方は、魔装術の防御力もありダメージ所が疲労さえもしていない。

それでも大樹は指示を出し、雪之丞に向かって攻撃を続けていく。

「一瞬も休ませちゃダメだ！ 攻撃を続けて！」

『了解っ！ 真理の雷！』

辺り一面に降り注ぐ雷撃。流石に範囲が大き過ぎて避ける事が出来ないが、この程度のダメージでは動きを止める事さえ出来ない。

一瞬の隙を狙い、メギドラオンやダムドラオン。至高の魔弾コピ一等を使っていくが悉く回避されていく。

手数では圧倒的に有利に立ってはいるが、戦況は完全に雪之丞のペーペースだった。

（俺を休ませないで回避させ続けるのは確かに良い手だが、その前

にあいつ等の方が枯渇するだろ？ 何かを狙ってやがるのか)

攻撃を回避し続けながら雪之丞が思案する。

先程なにやら会話をしていた大樹を見て、何か奇を衒った行動を起こすかと考えていたのだが、やっている事は手数に頼る力任せの攻撃ばかり。

当たれば確かに魔装術を使っている雪之丞とて無視出来ないダメージになるのは確かだが、あまりにも無謀と言えるだろう。

(あん時は確か即死魔法を使って来やがったよな、あいつはなんか隠し玉を持つてるに違いねえ。それが何だかは知らないが、良いぜ？ 俺を楽しませてみる)

『何考え事してやがるっ！ たあああああっ！』

『おっとっ…見え見えなんだよっ！ うらあ！！』

『いじぢやっ！？』

コウモクテンの一撃を回避するとその反動を使い、背後から迫ってきたマンティコアを回し蹴りの要領で蹴り飛ばした。

コンクリートの道路が砕け散るほどの衝撃と共に何度もバウンドしながら大地に叩き付けられるマンティコア。

何とか即死はしなかったようで直ぐに回復魔法を使ってもらい戦線に復帰する。

それを見た大樹は今の様子を冷静に見極めていく。

(今の所は『順調』かな。雪之丞は多分僕が隠し玉を持っている事を見切ってるはず。それに付け込ませて貰う)

「スカアハ。行けるかい？」

『いつでも行けますご主人様っ！』

「タイミングが重要だから、頑張って合わせて欲しい」

『お任せ下さいっ！』

ぐっと小さくサムズアップするミニスカアハ。

彼女に全幅の信頼を寄せ、大樹は作戦を詰めていく。

「撃って撃って撃ち捲くるんだ！ 雪之丞に反撃のチャンスを与えるなっ！」

「ラジャーなのですよっ！ 神空破っ！」

(えーと、えーと。ここをこうして、これでいいのですっ！)

大樹から受けた指示通りに魔法を使っていくアメリカ。

神すら吹き飛ばす疾風が雪之丞に向かっていくが、容易く避けられてしまう。

「まだまだ行くのですよっ！　　メルトダウン！」

『指示通り』に魔法を立て続けに唱えていくが、やはりそれも容易く回避される。

それも気にせず彼女もサキユバスもアリスも魔法を連発していった。

（さて…そろそろ焦れて来た頃かな。悪いけどダンスを踊ってもらおうか、雪之丞）

「至高の魔弾コピ―！！」

隙を見つけ、破壊の銃弾が雪之丞に迫る　　！！

現在累積ダメージ：4531

現在消費MP：564

さて、佐藤君は何を指示してるんでしょかつ！

それは次回のお楽しみなのです、後2話位で終わりたいなあ。

それにしても描写は難しいなあ、頑張つてこの辺をモノにしたいです。

どうでもいいこと

いやあ…暑かったなう…熱中症になりかけ一歩手前でしたよー。

塩キャンディとお水が無ければ私は死んでいたにゃ…

でもお仕事を頑張つた私にご褒美がっ！

なんと『鮭とば』を頂きましたっ！

北海道ではメジャーな食べ物ですよ、他の場所でもきつと普通にあるはず(多分

丁度良い硬さとうまみと塩加減が絶妙なのです！ 美味しいよ

という訳で(どう言う訳だ) 皆さんお仕事の後や学校の後の楽しみ
と言えは何かありますか？ 私は弟をモフモフするのが生き甲斐
です。モフモフです。

モフ～ でも時々投げ捨てられます(涙

ちよこつと重要

TRPGオンラインセッションに興味のある皆様へ

『なるう』にあるメール投稿機能からのメール送信か

私のHPにあるGメールをどうぞご活用下さい。

セッション以外でも、チャットでのんびりとお話するのもおつけ
ーです。

基本は『チヨコア』や『ライムチャット』を使った個人の部屋で遊
んできます。

サーバーや部屋名。

チヨコアって何ぞ？ と言っ方はご一報下さい。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 130 ～愛情と憎しみの狭間で踊る道化？～ (前書き)

バトルシーン3話目：あれ？ 予想の区切りまでたどり着かなかつた。

ちくせう、所詮行き当たりばったりでは上手くいく事は珍しいのですか (涙)

あ、ちなみに今回は彼女(誰)の初のサービスシーンがあるのかなんとか(えー

バトルの中に少しだけ清涼剤を混ぜてみたり…？

TRPGに付いてのメール返信について

遅くなって申し訳無いのです、ちょっとお風呂行ってきたりするのでもう少しお待ち下さい。

IRCで私と握手！ (出来ないよ)

『じゃらくせえっ!!』

僅かな隙を突き放たれた至高の魔弾コピーをが雪之丞の頭部に喰らいつこうと襲い掛かる。

バランスを少し崩してしまった所為で、このままでは確実に命中してしまう為、緊急の措置で左腕に靈力を込め、向かって来る光を放つ弾丸を撃ち払う雪之丞。

左腕を覆っていた黒い鎧が爆ぜ、赤い血がポタポタと零れ落ちていく。

片手だけとは言え初のクリーンヒットに身を乗り出すあなた達、このまま行けば勝つ事も可能だと考えていた矢先、雪之丞の怒涛の反撃が始まった。

『今度は俺の番だなっ!』

直ぐに魔装術を修復し、大樹に向かって凄まじいスピードで突撃を仕掛かる。

しかし、その突撃よりも大樹の方が一手早い。

「来いっバクヤツ！」

『その苦痛、己が身で味わうが良い！ テトラカーン！』

『しまっ！ うおおおおっ！？』

大樹の隣に顕現したバクヤが全ての物理攻撃を反射する結界を作り上げる。

攻撃反射の結界に突っ込んでしまった雪之丞は本来敵に与える筈の衝撃が反射され吹き飛んでいく。

達人の勘のお陰か、すんでの所で加速を抑えた為威力は殆ど無いのだが、吹き飛ばされた事で距離が開いてしまった。

好機と見たマンティコアが追撃を掛けようと飛び出していくが、霊波砲が幾つも襲い掛かり攻める事が出来ない。

『やべえやべえ。そっぴや色んな能力があるんだったなお前は。なんっーか性格は真逆なのに能力は俺のダチと似てやがる』

直ぐに着地し、再び十八番とも言える連続霊波砲を撃ちまくっていく。

基本的に霊波砲は弾丸などと同じく直線にしか射線が無い為、馬鹿

正直に当たるほど今のコウモクテン達は弱くは無い。

流石に前衛系ではない大樹やアリス、アメリカなどは回避するのがやっとなったりするが。

「ひゃわわわ…はうっ!？」

霊波砲を回避しようとジャンプで避けたアメリカが足を滑らせて見事にずっこける。

履いているのがスカートなので、盛大に下着が見えているのだが、所詮くまさんパンツにそこまでの破壊力など無く、誰もが普通にスルーしている。

こなた辺りは別の事に戦慄していたりするが、流石にそれを今言うほど空気が読めない彼女ではない。

「マンティコア! アメリカのカバーを!」

『ヒョー!! 悪魔使いが荒いのう! ぐっ!!』

アメリカに襲い掛かる霊波砲をマンティコアが身を挺してカバーに入る。

一撃一撃は通常の霊波砲に比べて軽いとは言え、英雄・伊達雪之丞の連続霊波砲は『特大級』の威力がある。如何にマンティコアがタ

フとは言え受け続けるのは無理がある。

直ぐに身だしなみを整えて起き上がるアメリカ。直ぐに移動を開始するとマンティコアも防御を解き回避に回る。

「あー。助かったのです！ 直ぐに回復するですよ！ ディアラハンカード！」

『頂いておくかのう。それよりも足元に気をつけるんじゃない？』

「ラジャーなのですっ！ ヒートライザ！ そして、壁量産なのです！ グレイブ！」

支援魔法を再度掛けなおし、アメリカは攻撃の阻害に回る事にした。

20を超える悪霊軍団が至る所に召喚され、味方を攻撃から守る肉壁になる。

中でもとりわけ耐久力の高い幽鬼グールなら2発程度までなら耐えられる為、かなり使い勝手が良かった。

『おいおい。やってる事が魔族寄りだな。だがこの程度の雑魚で俺の攻撃を止められると思うなっ！』

「止めようなんて思って無いのです。要は少しの時間さえ稼げれば良いのですよっ！」

アメリカの役割は『攻撃』する事ではない。

勿論攻撃する時もあるが、そちらはある意味では補助と何等変わり無いのだ。

つまり

(時間を稼ぐだけで良いのです。攻撃を『当てる』必要も無ければ、やることなんて沢山出来るのですよ)

狙っても当たらない、当たっても余り効果が無い、ならば『当てる』と言う要素を初めから排除すればいいのだ。

これが大樹の作戦の一部である。アリスとアメリカ、パールヴァテイは先程の作戦でこう言われていた。

(「回避力が高い相手に向かって態々攻撃を当てる必要はないよ。ならダメージの高い魔法を撃つ事で『相手を誘導すれば』良い」ね、正直デタラメに撃つても構わないんだもん、楽な物よ)

『狙いを付けた』振りをしてメギドラオンを放つアリス。

当たるか当たらないかギリギリのラインを見極め打ち込むと、相手はそれをあっさりと回避し『望んだ場所』に移動する。

相手が達人であればあるほど、この策が嵌りやすい傾向がある。

此方は『命中させよう』と狙いをつけて攻撃するが、実際は当たらなくても問題無い。

簡単に言えばフェイントの様な物なのだが、フェイントと少し違う所はその全てが命中率に関係無く必殺である事だろう。

直撃さえすれば大ダメージは免れない強力な魔法すら囮に使う。消費MPが激しいのが難点だが、それは回復剤でどうにか間に合わせる事が出来るので、使える手だ。

(大樹さんが言うには最大で『3つ』罫を隠してると言うけど、一体どうなるのかな？ ま、私は大樹さんを信じるだけなんだけどね)

『メギドラオンツ！』

『メギドラオン あらら、避けられちゃったわあ。さあて、次はどうしようかしらあ？』

サキュバスはサキュバスでどうやって攻めて行くのか考えていた。

既に大樹から相手に魅了系が効かない事は知らされている為、ファイナルヌードは自重している。

普通に攻撃しようとしても、攻撃力はアリスよりも低い上にそもそも物理系のスキルが無い。

魔法力に関しては、通常のサキュバスに比べれば十分高いものの、アリスやアメリカと比べると見劣りしてしまうのが現実である。

流石にメギドラオンを使えばダメージはあるのだが

(正直もうMPがきついよねえ。うーん、こういう時に中途半端なのが重く押し掛かっちゃうわあ)

サキュバスの真価は相手を魅了し操る事にある。

墮落させ、魅了し、愛欲に溺れさせる事がメインの能力である彼女。そもそも攻撃などは苦手な行動でもあるのだ。

相手にまったく自分の能力が効かないとなると、彼女は戦力的に厳しくなると言えよう。

『いつそ脱ごうかしらねえ…』

『あんだね…ほらっ、チャクラボトル。飲んで直ぐに攻撃しなさいよっ』

『あの子、』ママ』って言ってたからきつと母性に飢えてると思うのよ。だ・か・らあ、可愛がってあげたくならなあい？』

『つまりマザコンでしょ？ どうでもいいわそんなの。 メギド
ラオンッ！！』

心底どうでも良さそうな表情をしながらも、攻撃の手は休めないアリス。

此方に向かって来る霊波砲は自分達で迎撃し、前衛はコウモクテン達が何とか抑えている。

『女は度胸、何でも試してみるものよあ もしかしたらサマナー様が釣れちゃうかもあ なあんで…じよ、冗談よあ。だからメギドラオンをこっちに向けないで欲しいわあ』

『私だつてまだなのに、そんな事したら…撃つわよ？』

『お、おーけいよあ』

(い、言えないわあ…実は……似た事を既にしてるなんてえ)

『ま、それよりも。分かつてる？』

『ここで戦場を見極めながら攻撃してるのよあ、気付かない方がおかしいわあ。あの子そろそろ焦れて来てるわねえ』

雪之丞が先程突撃を掛けた様に、どうやら此方を完全に攻めきる事が出来ず、無意識ながらに焦ってきている様に見える。

それがフェイクの可能性はあるが、それならばそれで罠の一つを切るだけで済む話である。

戦況は大樹が考え予想し願った通りに動いていた。

『ここからが正念場よね。はあ…この先にも強敵が居るのに厄介過ぎるわ、あの英雄』

『ならあ、効かなくても動揺だけ誘ってみましょうかあ　サキユバスの真価見せてあげるわあ　』

『あーはいはい…何よ、私だって脱いたら凄いんだから…』

言うが早いか飛び出していくサキユバス。

そもそも服と言えるかどうか怪しい衣服の時点でアレなのだが、走りつつそれらをはだけさせて行く。

『ちい…こんだけ全員で戦って未だに互角かよっ！』

『前は戦いにもならなかったんだ、十分強くなってるぜっ！　ゴッドハンド…』

『てめえが言うど嫌味にしかならねえんだよつ！ 忠義の一撃！』

何度目かになるお互いの最大の一撃がぶつかり合う。

『ゴッドハンド』は『極大級』なのに対し『忠義の一撃』は『絶大級』にまで強くなっている 特大 極大 絶大 甚大と、段階毎に隔たりが出来るほど強くなる のに、お互いの攻撃は共に打ち消しあう。

いや、寧ろゴッドハンドの方がやや押している様にも見えた。

答えは簡単でスキル『怪力乱神』の効果で格闘系のスキルの威力が一段階上昇補正を受けている為である。

ならば後はブースタや地力での争いになり、地力においてはコウモクテンより雪之丞の方に分があった。

お互いにスキルを放つと今度はマンティコア、パチャカマクが混ざり三対一の格闘戦に発展する。

こうなると範囲の大きいメギドラオンなどは巻き込んでしまう為に撃つ事が出来なくなるので、出来れば避けたいのだが、それはアリス達の都合であり、雪之丞がそれを許してくれる筈が無い。

まるで阿修羅の如く腕が6本あるかの様に、三体を相手にしても一歩も引かない所かやや有利に回っているのが恐ろしい所だろう。

『おのれっ！ おのれええっ！ まだ、まだ届かんのか！ 我は…』

我はっ！』

『てめえも強くなったが、正直まだまだだなっ！ 先に落ちてやがれ！』

『させぬわいつ！ きしゃあああああああっ！』

パチャカマクを攻撃しようとした雪之丞より先にマンティコアの麻痺毒を持つ巨大な腕が叩き付けられる。

咄嗟に腕をクロスして攻撃を防いだが、その所為で隙が出来てしまっう。

『いけっコウモクテンっ！ ぬうう… コンセントレイト！』

『喰らえっ！ おらあああっ！』

狂気の暴虐！！

縦横無尽に振り抜かれる戦斧での蹂躪。

威力では無く多数の連続攻撃による、相手の行動の阻害が目的である。

しかしこれも相手が雑魚ならば余裕でオーバーキルしてしまうほどの威力なのだ。

同時に直ぐに体勢を整えたマンティコアが全身から放電し、雪之丞に狙いを付ける。

四方八方から襲い掛かる斧と電撃を何とか捌いていくが、その近くで巨大な闇が作られている事にも気が付いていた。

『それが隠し玉かつ！』

『気付いてももう遅いっ！ 避けきれれると思うなっ、全てを虚無に変えよ魔王の一撃っ！ ダークマター！！』

漆黒の反物質の球体が辺りの地面をガリガリと削りながら雪之丞に命中する。

『ぐ…おおおおおっ！？ があああああああああああああああああああっ！』

『物質と反物質は合さると対消滅を起こすっ！ そのまま原子の闇に消えよ英雄っ！』

黒い球体は雪之丞の身体を完全に飲み込んでいった

現在累積ダメージ：4531 6579 ????

現在消費MP : 564
876

所詮くまさんパンツよ。なのでですよ（えー

ちくせう、くまさんだつて絵柄が可愛いじゃないか（マテ

ファイナルヌードじゃないのか！　と言う無粋な突っ込みはスルー
なのです。

多分明日辺りやらかしそう（えー

サキュバスさんが前に何をやらかしたか…それは彼女のコミュをと
つたときに判明するかも…しないかも？

あれ…？　魔王（笑）が活躍している。

これで終わるのか！　さあ、皆さんと一緒に次のセリフをどうぞな
のですよ。

白垂「やったかつ！？」（えー

どうでもいいこと

わーい　今日のデザートはメロンなのでした！　美味しいですよ

今日はお仕事が大変だったので、これで報われたのです！

明日も忙しいから頑張らないとなあ～

皆さんも次の日がお仕事とか学校とか用事とかがある日は大変です
よね？

そんな時、どうやってテンションをあげてるのでしょうか？

私？　私は弟をモフります。時々踏まれますが（涙

後は感想を読む事かな～　頑張ろうって元気が出てくるですよ！

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 131 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化?〽 (前書き)

戦闘終了回です！

が、頑張ったなう…最後まで気が抜けませんね！。

Continue 131 ～愛情と憎しみの狭間で踊る道化？～

全身を磨り潰そうと黒いエネルギーが雪之丞を苛む。

その威力は凄まじく、所々魔装の鎧が弾け飛んでいくのが見えた。

重力の魔法とは違い押し潰すのではなく、存在を消滅させてしまう特異なエネルギーがじわじわと体力を削り取る。

『が…ああ…ああああああああああああっ！』

『解除などさせるものかつ！ぬっっっっっっっ！』

『援護するかのう。アギダイncカード！』

『ちっ、殴ると斧も砕けそうだな。ジオダイncカード！』

全力を振り絞りダークマターを破壊しようとする雪之丞。だが、それを易々とやらせるほどパチャカマク達は慢心していない。

消去されないように魔力を込め、コウモクテン達はここぞとばかりに追撃を掛ける。

猛火と電撃がダークマターに耐えている所に容赦無く襲い掛かる。それぞれのダメージは魔装術のお陰もあり低いものの、それでも少なからずダメージになり集中を阻害される。

正に絶好のチャンスと言えた。

「好機っ！ 来いクー・フリーンっ！」

天空に高らかに手を伸ばし英雄の名を叫ぶ大樹。

それと同時に頭上には槍を持つ英霊　クー・フリーンが顕現する。

本来召喚される筈の通常のクー・フリーンではなく、『英霊』としての力を持つクー・フリーンは、通常のペルソナとは違いステータスが軒並み高い。

『お膳立ては出来てるってか。んじゃまあ…仕事するかねっ！』

真紅の槍を腰だめに構え呐喊する。

弾丸を思わせるようなスピードで走りつつ彼は魔力を槍に込めていく。

『悪く思うな…？　その心臓、貰い受ける！』

呪力を完全に開放し、彼は力ある言葉を紡ぐ　！

『 刺し穿つ死棘の槍！！』

心臓を貫く因果逆転の牙が雪之丞の心臓を捉え

『 つぎけるなあああああああああっ！！』

『 ！？ なっ！？ 何だとおっ！？』

る事は無かった。

心臓を貫く筈の伝説の槍は雪之丞の心臓ではなく、彼の左腕を掌から食い破っていた。

掌を貫き、腕を骨を砕きながら貫通し肉を削ぎ落とし爆ぜさせる。

彼の肉体はマグネタイトで構築されている為、血飛沫が舞う事は無いが、左手は完全に砕け散っていた。

しかし、雪之丞は死ぬ事無くその場に立っている！！

『 ちっ…痛てえなんてもんじゃねえな。こいつは蘇生魔法じゃなきゃ無理か』

ダークマターの効果も既に消えている為、完全に自由になっている

が流石にダメージが大きい様だ。

『何にせよ、戦闘続行だなっ！ てめえらっ！』

「…死の因果を逆転させた…」

切り札の一つが効かなかった事は予想していたが、何かして居た訳でも無いのにゲイ・ボルクを防いだ雪之丞に改めて驚愕する大樹。

そして

『てめえ…どうやって俺の槍を防ぎやがった……！』

常人なら発狂してしまいかねない、裂帛の殺気を叩き込みながら雪之丞を睨みつけるクー・フリーン。

しかしその程度の殺気など、最上級クラスの魔王を相手にした事のある彼にとってはその辺をそよぐ風程度にしか感じない。

ゲイ・ボルクには『確実に心臓を貫き殺す』と言う、因果逆転の呪いが込められている為、一度発動してしまえば余程の幸運を持たない限り回避する事は出来ない。

更に言えばダークマターや魔法攻撃で身動きを止められて居る所に回避出来ない一撃を叩き込んだ筈なのに、彼はダメージを負ったもののその場に存在し続けている。

英雄として、殺すと決めた相手に宝具を使い、お膳立てすら整えられていたのに殺す事が出来なかった事に、激しい怒りを感じていた。

『んなもん知るかよ…っ！ 人間気合があれば何でも出来るもんだっ！』

実際雪之丞が言っている事は的外れではない。

彼の持つ悪運と、超人的な戦闘センスが無意識に身体を動かす、心臓を完全に貫く前に『腕を貫通させた』と言う事実を作り上げたのだ。

お陰で腕一本犠牲にはなったが、彼はこの場に立ち続ける事が出来ている。気合と言うよりは理不尽とも言えるのだが。

『てめえは悪魔だろうがっ！』

『何にせよ、やってくれたなっ！ コイツが切り札だったんだろっが次はもう撃たせねえ！』

動こうとしたクー・フリーンの体が強い力で引き寄せられる、一瞬の内に右手で槍を引き寄せられたのだ。

そのまま雪之丞の蹴りがクー・フリーンを打ち砕こうとした時、彼は即座に消えさり蹴りは宙を切った。

『ちっ！』

『よそ見してるんじゃない？ねえよっ！』

『ヒョー！ー！ー！』

両サイドからコウモクテンとマンティコアが駆け抜け様に一撃を与える。

当たれば徒では済まないコウモクテンの一撃は魔装の腕で何とか受け止めたものの、マンティコアの一撃は防ぐ腕が無い為に直撃する。重い一撃が雪之丞を捉え、そのまま振り切る感じで地面に叩きつける。

踏み潰す勢いで全力で前足を踏み降ろすと、地面が凄まじい勢いで陥没しコンクリートが砕ける音が鳴り響く。

『このまま潰れよっ！ はあああああっ！』

『誰が…獣臭い足で俺を踏み潰せると、思ったかあっ！』

『ぐがあああああっ！？』

メキメキと全身が砕ける様な音と痛みを感じながらも空いている腕

でマンティコアの前足を抉り取る。

全力を前足に込めていた為バランスを崩してしまう、マンティコア。危険を感じ回避しようとした所で彼の意識は其処で途絶えた。

『じゃああああああっ！』

狂気の粉碎ッ！！

片手だけになつてゐる為威力は少し落ちるのだが、それでもマンティコアを殺すには十分の威力を誇る連続攻撃が命を刈り取っていく。胸を穿たれ、顔面を貫かれ、胴体を真つ二つにされたマンティコアはその場に倒れた。

荒い息をつきながら、コウモクテン達に狙いを付ける雪之丞。

満身創痍な筈なのに、まったくと言っていいほど倒せるヴィジョンが浮かんでこない。

「何であれで生きてるのかな。英雄つてのは悪魔以上かもしれんな
…」

「腕が潰されてる上に、あれほどのダメージを受けてるのに彼女達と互角以上に戦ってるのが凄いよ。確かにあれじゃ数で攻めても難

しいね…」

昔以上に強くなっていますね、ダメージを受けて下がるところか
ますます気合が高まっているようにも見えますし

「つまりあれだな？ バトルマニアって所か」

「寧ろアレだけ戦いを望むとなればジャンキーと言っても過言では
ないかも知れませぬね」

流れを完全に奪ったと思った矢先の逆転劇。

必殺の一撃は止められ、仲魔は一人倒されてしまった状況を重く見
ているこなた達。

今直ぐ乱入すれば勝てる可能性があるかもと多少考えていたが、あ
そこまでのダメージを受けて尚、戦闘力が落ちるところが高まって
いる雪之丞を見て自分達が混ざっても難しいと再確認する。

どれだけ強くなっても、上には上が居る為に慢心する事は無いが、
自分が何所まで成長しているのか分からないと感じてしまう弊害も
ある。

要するに『自分は弱い』と思い込んでしまう事だ。今はその兆候は
無い物の 大樹はそのクライがある もしそうなってしまえば全力
を完全に活かしきれなくなる可能性がある。

「強いね。強いけど人間と悪魔じゃ地力が違うのも当然かな…でも

絶対に勝てない相手じゃない、か」

「どんなに強くてもそれには限界があります。無敵や最強と言っ言葉は有って無い様なものですよ。」

「そんなもんだろ。普段の世の中だつて色々な差があるもんだ、それに負けるよりかは前を見る方が建設的だな」

（部下が死んでも俺にはやる事がある、弱いからと、憎いからと其処で燻るよりは前を見て戦い続けなくちゃいかんのさ俺は）

「……確かにそうですね……」

「あつ！ あれつて…サキュバス？ ちよつ！？」

「おお、眼福だねえ」

「は…はわわ…！」

雪之丞達に注目していた為に、其処に向かっていくサキュバスを見つけるのが遅れたこなただが、一瞬にして目を丸くしてしまう。

みゆきは両手で顔を隠し、皆方はそれはもう嬉しそうな表情でその様子を見ていた。

（切り札一は消滅ですの、でも流れはまだこつちにありますわあ
と言っ訳で全力で行かせて貰っわあ）

蓄積された疲労はかなりたまっている筈、其処に付け込もうと考えるサキユバス。

如何に無効化されるとて、一瞬でも気を引けばこちらの有利になるのだ。

その為には此方を見て貰わなくてはならず、その為に直ぐ間近にメガドラオンを放った。

爆音がまったく関係ない所で響いた為、一瞬誰もが其方を向いてしまふ。

普段なら殺気が無ければ気にしない雪之丞だが、流石に今の状態では集中力が疎かになっている為、其方を向いてしまふ。

其処には

『うふふ…くすくすくす　　さあさと御覧なさいなあ………どうか
しら私の…カ・ラ・ダ』

ファイナルヌード！

服を脱ぎ去り四つん這いの姿勢で美しい己が裸体を存分に見せつけるサキユバス。

全てを魅了する、淫靡さを併せ持つその美貌と裸体。そしてサキユ

バスとしての魅了の力が雪之丞を捉えていく。

四つん這いの状態から上半身だけを起き上がらせたわわに実った胸を両腕を下で組み、持ち上げながらクスリと淫らかな表情で嗤う。

ちなみに大樹はそんな男性垂涎のサーブシーンに見向きもしておらず、雪之丞の隙を一瞬たりとも見逃すまいと注視していた。

そしてその痴態を完全に見てしまった雪之丞は

『…マ…ママに似ている…っ!?!?』

『やべえ、こいつ本物だ』

『ちっ！　だが俺がこの程度で混乱するとても思ってたかつ!』

バツチリと動揺しているが、それを押し殺し再び戦闘態勢を取ろうとするが、その時尋常ではない致死の気配を感じた。

「その隙…貰ったよ。魔法銃・エレメンタルレイド!」

二つ目の切り札を切る大樹。

魔法銃のレベルが高くなると使える上位スキル『エレメンタルレイ

ド』

火、氷、電、風の4属性がお互いに相乗効果で高まりあい凄まじい攻撃力になっている魔法射撃の特化技術である。

その威力は至高の魔弾コピーにも負けず劣らず、弱点があれば更に威力が増すと言う利点もある。

勿論その為無効や吸収があれば、威力ががた落ちしてしまう難点もあり、使用前に相手を調べる必要が有るのだが…

「当たれええええええつ！！」

『まだだつ！ まだやられねえぞつ！ おおおおおおつ！！』

向かって来る弾丸に全力の霊波砲を打ち込む雪之丞。

放った霊波砲とエレメンタルレイドがぶつかり合い、辺りを凄まじい衝撃が襲っていく。

暴風のような空気の波が辺りにあるものを根こそぎ吹き飛ばした。

『パチャカマク！ マンティコアを抑えとけつ！』

『ちい、仕方があるまいっ』

辺りにあるもの、それは死体も含まれる。

巨体とは言え、これほどの衝撃に抵抗する事は出来ず吹き飛ばされそうになるが、それをコウモクテンの指示の下パチャカマクが押さえにかかると。

『ぐっぐっぐっぐっ！』

ビリビリとした衝撃を耐えながら、次の一手を待つ雪之丞。

エレメンタルレイドは完全に霊波砲と相殺し合い、ダメージを与えないに至らなかった。

だがそれも大樹は最悪の方向として考えており、其処で最後の手段を使う事にする。

『本気で吃驚箱だなんてめえは。つたく、俺が本気出せりやもう少し楽しい戦いが出来るのによ』

「そりやどうも…！ さあ、今だアリス止めをっ！」

『！？ ちいつ！ あれも囷だつてのかつ！』

勝利を確信したかのように高らかに宣言する大樹、その言葉に直ぐに雪之丞が構えを取りながらアリスの方向を向く。

『…えっ？ ええっ！？ 私っ！？』

『はぁあっ!?!』

行き成り振られたアリスだが、先程の作戦ではそんな事など一切言われていなかった。

伝え忘れた訳でもない、ならば。

『しまっ!?!』

「遅い! 叩き潰せ 巨神と女神の降臨!」

『うおおおおおおおおおっ!?!』

それがブラフだったと言う事に気付くより早く、巨人の拳が雪之丞を捉えた。

様々なバッドステータスを『強制的』に与え、甚大ダメージを与える必殺技 但し殺す事が出来ない をアリスに気を取られていた所為でまともに喰らってしまっ。

勝利は、この時点で大樹達の手に齎された。

「ず、ずっこい…いやまあ、作戦なんだろうけど」

「と言うか騙されるんですね…」

やり口が何所と無く横島さんに似てますね…あれは

「ま、勝利は勝利だろ」

微妙に呆気にとられているこなた達。

大樹としてみれば結果的に大勝利だったりする。

「勝てば官軍、負ければ賊軍って所だね。今回は僕の勝ちだ英雄」

ゆっくりと息を吐きつつ、大樹は呟いた

戦闘終了！！

Continue131 愛情と憎しみの狭間で踊る道化?? (後書き)

横島君ばりの卑怯戦法で勝ちました佐藤君。

うん、これが作戦でした。

ゲイ・ボルクだめなら、至高の魔弾かエレメンタルレイド。それでもだめなら

疲労した所にだまし討ち。

なんとか上手くいったようですよ

どうでもいいこと

今日はTRPGの日です！

何時も感想を頂いている人の中からお二人ほど来てくれていますよ

という訳で、待たせてるので頑張ってください！

がんばーるぞー！

あ、ちなみにIRCに入れる方、興味があれば部屋とサーバ名ここに書いておきますので、見学どうぞー

サーバ名

irc.cokage.ne.jp

部屋名

#女神転生TRPG雑談

#女神転生TRPGメイン

#女神転生TRPGデータ置き場

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

うう…具合が悪いです。

全然良くならない…でもお仕事しなくちゃ。

仕事中意識を失いかけた(失った?)白亜が通りますよ。

熱中症とかじゃなくて、単純に具合が悪いただけなんですよねえ…

なんだろう…風邪じゃないみたいけど…

頭はふらふらするし、吐き気はするしと大変です…

さて、戦闘終了後の幕間をどうぞですよー。

「これで起き上がってきたら、流石に全員で掛かるのかな…」

消えていくはいよるこんとんとオオミツ又を見送りながらボソツと
呟く大樹。

最後は騙し討ちで勝利を収めたが、勝ちも勝ち、文句を言わせるつもりはない。

寧ろこの攻撃に耐えて襲い掛かって来た時の事を考えていたりする。
抉れた地面から更に陥没している雪之丞。巨人の一撃は見事彼を打ち
抜いていた。

様々な状態異常が魔装術の抵抗を打ち破り、体を蝕んでいく。流石
の彼も全身を様々な状態異常が駆け巡っては戦う事も出来な
かった。

『ふいふ。さっきは何事かと思ったけど勝利だねっ』

『マンティコアが死んだがCOMPに戻されて無い以上直ぐ蘇生で
きるな。アメリカ頼んだぜ？』

「あいなのですよっ！」

とととととマンティコアまで走りよりサマリカームを唱え始めるアメリア。

かなりのMPを消費はしたが、まだ問題無く戦闘続行は出来る様だった。

「お疲れ様大樹君っ！ 大勝利って所かな？」

「あああなた：有難う。相手がフル状態ならどうなるか分からなかったけどね。見た限りでは消耗は少ないかもしれないけど切り札も使ったし、きついかなこれは……」

緊張感が抜けその場に座り込む大樹。

一つの間違いも許されない状況のまま、最大の一撃を叩き込む事に神経を使い続けた為、かなり疲労している様だ。

少し休まねばこの後の戦いに支障をきたす事になると、休憩を取る事にする。

時間が無いので休んでいる暇は本当は無いのだが、それでも此処まで激しい戦いの後に連戦すると言つ無謀な事をしている為、少しでも休みたかった。

マジックカードから魔石やチャクラドロップなどを取り出して回復

に入る。

『我等全員で漸く倒せる相手…か。くそっ…これでは魔王（笑）と言われても仕方ないのかも知れんな』

『戯け。個人で全部何でも出来る訳ねえだろうが』

『知っているっ！ だがな気持ちに納得したくないのだ』

『ま、気持ちは分かるがな。どれだけ強くなっても上が居るとなりや腐りもするさ』

合体し強くなってもまだ英雄に個人で勝てる事が出来ず悔しがるパチャカマク。

それを見ながらコウモクテンが自分の昔を思い出しつつフォローしていた。

彼女自身、初めは強くなる為だけに大樹の仲魔になったのだから。誰よりも強くなって、そして強い相手と戦いたくて彼女は仲魔になった。

今でこそ仲魔と大樹を守る事を目的としているが、それも個人では達成できない事は重々理解している。

ならば如何するか、強くなればなるほど遠くの頂が見えないのならば、見えるまで戦い続けるのではなく、全員で共に戦う事を決めていた。

「凄まじい戦いでしたね。私では逆に邪魔にしかならなかったかもしれません」

相手は雪之丞さんですからね。それにしても頑張りましたね佐藤さん。

「出来ればこのまま家に帰って寝ていたい…かなり疲れたよ」

「まっ、そうしたきゃさっさと全部終わらせるしかないな」

タバコを燻らせながら皆方が歩いてくる。

その表情は何時も通りに見えるのだが、どこか陰があるように見えた。

「いや、な？ 戦いが激しいのは分かる、分かるんだが…場所を少し考えて欲しかったね」

「え…？ あ……………」

「そ、そう言えばガイア教徒達の遺体は…？」

「見事に吹き飛んだよ、そりゃもう盛大にな。既に遺体、これ以上傷つき様も無いんだがね」

そ、そう言えば……………」

誰もがすっかり忘れていたが、大樹達が戦っていた場所は先程の凄惨な現場からまったく離れていない。

その所為で、先程から度々発生していた衝撃波や暴風の所為で、機材やガイア教徒達の遺体がそれはもう凄まじい事になっていた。

五体満足な遺体もかなり損傷が激しい様だ。まあ、ゾンビにならないだけかもしれませんが。

「…先に動いたのは雪之丞だし、僕は悪くない」

「うわあ、めっちゃ強引に人の所為にしたなー…」

「と、とりあえず私達で何とかしましょうー！」

既に死体など見慣れてしまった 居る為、自分達で片付けを提案するみゆき。

皆方もそれに賛成し、こなたとみゆきは使える器具などの収集、こなたの仲魔が遺体を集めて焼く事になった。

…
…
…

「せめて来世は幸せに、か。そもそも未来があるのかどうか疑問だが、ゆっくり休め、お前達」

パチパチと燃えていく、燃えていく、燃えていく彼等。

無念も後悔も希望も纏めて火に宿し、休ませる為に火で浄化する。

メンバー全員のドックタグは既に集めきり、それを眺めながら昇っていく煙を見つめている皆方。

メシア教過激派も殆ど壊滅したが、自分達ガイアも行動するのが難しい人数になってしまっていた。

この異界から抜け出す事が出来れば、人員の補充など簡単だが、事態はそんな状況さえ許してくれない。

更に言えば、皆方達は所詮末端である為、何かがあつた場合あっさり切り捨てられる可能性の方が高いのだ。

「今思うと街中で死体をキャンプファイアの如く燃やしてるって、常軌を逸してるよねえ。うーん、世界が平和になった時は感覚元に戻さないと大変かも」

「世界が元に戻ったら…か、確かにね。日本は殺しはご法度だからね…今は異常事態だから普通にこなしてるけど」

『それは良いんだけどよ、あれは良いのか？』

「よ、良いのではないでしょうか…」

コウモクテンの問いに微妙に冷や汗を流しながらみゆきが頬に手を当てつつ述べる。

ゆっくりと振り向くと、ロープなどでぐるぐると巻かれ首元からは『僕はマザコンです』と書かれた札をぶら下げた雪之丞が座らせられていた。ちなみにぶら下げたのはアリスである。

意識はしっかりとしている様だが、様々なバッドステータスの混合効果で、満足に動けないのでこのままだったりする。

「僕達が勝ったんだし、まさか此処から暴れる事は無いと思うよ」

『良く分かってるじゃねえか。どうせならこの状態異常も直して欲しいんだがな…ちくしょっ、頭がふらふらしやがる』

(ふっふっふ　当然当然当然ですよっ！ 私とみっちゃんのスーパーコンボは早々簡単には治せませんっ　)

(誰がみっちゃんだ誰が…)

心の海の中でVサインを決めているはいよるこんとんに、力無く突っ込むみっちゃん事オオミツヌ。

そんな二体のやり取りを出来る限り無視して、雪之丞に話しかける事にした。

「さて、僕達が勝った訳だけど。この後の事は分かってるよね？」

『真剣勝負で負けたんだ、例えどんな手であろうとな。とっとと殺せ』

「冗談言わないでくれないか？ 何が悲しくて折角の手札を消さなきゃいけないんだい？」

『…俺を使おうつてか？ 確かに負けたのは俺だし、生殺与奪はてめえにあるな。だが、てめえの力量で俺を扱えると思ってるのか？』

『むっ！ 大樹さんは強いんだから！！』

「まあまあ、アリスちゃん落ち着いて。要は負けた事は確かだけど、実力は足りてないって事なんですよ？」

雪之丞のレベルは60台。信頼も持っていないので本来は仲魔にする事すら出来ない状態だ。

しかし相手はある程度話の通じる英雄で、此方が勝利した為交渉の余地がある。

『まあ、そう言う訳だ。後俺は基本的に人に指示されるのは嫌いな

んでな』

「性格からしてそれっぽいからね。でもずっと仲魔になれって訳じゃないし、君にとっても都合が良い話だと思うよ。」

『あん？』

これからの事に付いて説明していく大樹。核の話や雪之丞が戦ったあの上位クラスの悪魔が居る事などを事細かに伝えていく。

その話を聞いていく度に、雪之丞はその表情を硬くしていく。全てを話し終える頃には獰猛な顔を曝け出している雪之丞が居た。

「という訳だよ。正直に言えばこの戦いの所為でかなりのロスと切り札を切る事になった。そこで負けた君を殺す代わりに手伝って欲しい。それに因縁があるだろう？ 君にも…英雄・伊達雪之丞」

『成程な、良い話を聞かせてもらったぜ。ああ、てめえらなら十分だ』

雪之丞としてもあの悪魔を倒す為に味方を探していた事もある。

大樹の言葉は渡りに船と言った所だった。

予想していた以上に大樹達は強くなっていた上、まだいくつかの切り札を持っていると見ればかなりの戦力になるだろうと考えた。

大樹は大樹で、此処まで強い優秀な前衛が一人いればとても助かる上に、最悪人修羅にぶつけようかと考えていたりもする。雪之丞なら嬉々として飛び込んでいくとも思っているが。

『今回は手伝ってやるよ。だが勘違いするな？ お前の力量じゃまだ俺を扱いきれんし、俺もお前に付いて行こうとも思わん。俺を仲間にしたけりゃもっと強くなるんだな』

「…今回手伝ってくれるなら十分さ。じゃあ宜しく頼むよ、英雄」

『俺を英雄と呼ぶんじゃねえ。そうだな…雪之丞で構わねえぞ』

キラリと彼の目が輝いていたが、ぶら下げられている『僕はマザコンです』の所為で格好が付いていなかった……………

大樹のレベルが1上がった！

大樹のレベルが限界値に達した……………これ以上レベルは上がらない。

ナナヤシキのフラグが成立しました

伊達雪之丞がこの戦いの時だけ仲魔になった！！

ゆっきーが一時的に共闘してくれる事になりました。

そして佐藤君レベル限界値に到達。次の覚醒はいつかにやー！。

さて…次回はどうしようかなあ…幕間っばいのでいいかなあ。

どうでもいいこと

何も食べる気がおきません、おかゆもだめです(汗

おなか空いたけど何も食欲が湧かないという悪循環ですよ。

ううー。明日には良くなってるといいなあ。

皆さんはおなか空いても食欲が湧かないというよく分からない時は
どうしてますかー？

Continue133 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化〽 (前書き)

という訳でお話の視点を急遽切り替えての幕間です。

ですが…これは結構重要なお話かも…？

では、短いですがどうぞ。

かがみ・つかさSide

「皆無事かなあ…心配だよ」

「そうね…本当なら私達も手伝いたいけど、足手纏いなのはどうしようもないし」

現在かがみとつかさを乗せた特殊装甲車はガイア教徒のシエルターに向かっていた。

回復したとは言えつかさはまだ目覚めただばかりな上、もしかしたら薬の副作用が出る可能性も0では無いので設備のある本拠地で調べる事になったのだ。

実はもう一つの理由があり、味方が殺された為シエルターの防備に残りのメンバーが当てられたと言う事もある。

かがみとしては両親が居るシエルターにつかさを連れて行きたかったが、緊急事態なので文句を付ける訳には行かない為黙っている事にした。

つかさの方も回復後、何等問題なくしているのでシエルターに戻ったら簡単な検査で終わるだろうと、聞いていたのでホッとしていたかがみではあったが。

そうになると心配になってくるのは大樹達の事だ。

如何に強くなつたとは言え、これから向かうのはある意味最終地点とも言える場所、あっさりと崩せるような場所では無いと二人は思っている。

「でも、私が捕まってる間に色々変わっちゃったね…この辺こなちやんの家が近いし、前に行った時は賑やかだったのになあ」

装甲車に取り付けられている防弾ガラスの窓越しから、流れていく街並みを見渡していくつかさ。

聞こえて来るのは車の走行音だけで他には何も聞こえず、周りには人っ子一人居ない。

悪魔が出てくる場所を好き好んで歩く愚か者は少ないので当然とも言えるが、知っている場所がゴーストタウンの様な感じになっている所為でつかさは寂寥感を感じていた。

かがみは少しでも元気付けようと茶化しながら話しかけていく。

「今は悪魔の所為で十分賑やかだけどね。何にせよ佐藤君達が何とかしてくる事を祈るしかない…か」

「うーん……何だか佐藤君ってゲームに出てくる主人公みたいだね。こなちやんがよくやるRPGとかのっ！」

「そう言われればそうね」

(どっちかと言うとダークヒーローって感じがするけどね彼は)

大樹の考え方や戦い方を見ていると、正義のヒーローとはかけ離れた姿なのは今更だろう。

勿論大樹もそんな事欠片も考えて居ないので気にしては居ないだろうが。

だが確かにつかさの言う通り、大樹の今の立ち位置は正に英雄と言っても過言ではない状態だ。

シエルターを襲った敵を倒し、悪魔を倒し、今はこの街を開放する為に戦っている。表面だけを見ればこれ以上の正義の味方や英雄は居ないだろう。

そして大抵の人間は都合の良い方ばかりを見てしまう。

シエルターで救われた大多数にとっては大樹達は正に正義のヒーローなのだ。例えその思惑が全く違っていたとしても、結果はそう導かれている。

「後で祭り上げられなきゃいいけど…ね」

「あ、そか…もしTVとか回復したら厄介な事になりそうだしね」

「それもあるけど、問題はこの街を開放した後よ」

「……………??」

「いや、まあつかさの事だし、時間も経ってるから忘れてるかもしれないとは思ってたけど…良い？ もしこの街を開放しても次は世界中に核ミサイルが降って来るの忘れた？」

「あつ！ そつか…………」

「メシア教の過激派は潰れたから、救世主云々は出来ないし、そうならば普通の人間は誰に救いを求め始めると思う？」

「………… 佐藤君やこなちゃん達………… でも、それって」

「そ。彼等にとっては大迷惑も良い所だわ、自分達でも精一杯なのに他の人間を守る余裕なんてまったく無い。でも放置しておけば暴動になる、だから出来るだけ自立させたたくないのよ」

とは言えかがみも其処まで危惧しては居ない。シエルターでの戦闘を見ていたのはクズノハと自衛隊だけなので、彼等が漏らさなければ大樹達が街を救った事もバレはしないのだ。

今や大樹達はガイア教にもメシア教にも 此方は殲滅したのでばれない可能性のほうが高いが、そして、クズノハや自衛隊にも名前が知られている。

世界に何か起きた後の偶像として使うにはもってこいの人材ばかりだろう。

元聖母候補に、この街を救った正義のデビルサマナー。世界が崩壊してしまえばそのネームバリューは凄まじく高まる事だろう。

「まあその辺は全員考えてるでしょうし、私達がどうこう言う意味なんて無いんだけどね」

「うん……………ねえ、お姉ちゃん？」

「ん？ どうしたのつかさ？」

「私達…前みたいに……………戻れるかな」

「……………」

「皆でわいわいお話したり、皆で海とかにお出かけしたり、沢山遊んだり……………戻れるのかな……………」

「戻るわよ……………戻らなきゃ……………。信じましょ、佐藤君やあなたやみゆきを。後性格が軽いけどそれなりに頼りになる人も付いてるし」

こなた達の事は勿論の事、皆方の事もこの数週間で信用に値する人間だと信頼していた。

勿論、信用は出来ても信頼は出来ないのです、根が生真面目なかがみとしては気が苦しいと日々感じているのだが。

寧ろこの異界の中で最強と言っても過言では無いあのパーティが負けると言う事があるとすれば、この異界に生きる人間達は永遠に閉

じ込められるだろう。

その後の核問題は正直途方も無さ過ぎて何も言えないのだが、それでもどうにかなると信じて居たかった。

「うん…そうだ…ねっ!？」

「つかさ…!?　つかさっ!?　どうしたのっ!?　ねえ、ちょっと!！」

かがみの言葉に笑顔で頷こうとした矢先、つかさが急に頭を押さえ呻き始めた。

「な…に…これ…こんなの…いや…嫌だよ…」

「つかさっ!?　何かを…見てるの?　でもつかさにそんな能力は…」

頭を両手で押さえ辛そうに震えているつかさ。

彼女の脳裏では様々な映像が幾つもフラッシュバックして居た。

見たくも無い未来、幸せな未来、おぞましい未来、絶望の未来、希望の未来。それらが代わる代わるつかさの脳内で映し出され激しい頭痛に呻く事すら出来なくなる。

「あ……ああああああ……だめっ……こなちゃん……アリスちゃん……嫌っ、だめだよっ！ 嫌あああああっ……！」

「っ、つかさっ！？ しっかりしなさいつかさあっ！」

その過負荷に耐え切れずつかさは意識を失ってしまった。

……

……

…

ゆっくりと意識が覚醒していく。

少しずつ目を開けると、其処には泣きそうな表情をしたかがみが見えた。

「あれ……お姉ちゃん……私は……あれ……」

「つかさっ！ 平気？ 何所も痛くない？」

「う、うん……私…変なのが見えたの…凄く幸せな未来と、凄く怖い未来と、凄く恐ろしい未来が…」

「未来…？ それは今も見えるの？」

「ううん…急に見えてそれが延々と流れて怖くて、悲しくて、耐え切れなくて…」

つかさ自身何を言っているのか分からなかった。

だが、先程脳裏を駆け巡って行ったのは、間違いなくこの先の未来なのだろうと確信している。

それほどまでに映像は鮮明で、幸せそうで、悲しそうで、そして…
…狂っていた。

「まさか…未来視…！？ でも…あ、そうか…もしかしたら…」

つかさが見た物を未来視だと当たりをつけ、何故それが使えるようになったのか道筋を立てて思い出ししていく。

彼女が持つスキルは基本的に魔法系と神道系であり、未来視はそのどちらにも属さない超能力に関するスキルだ。

そして超能力が発現する切っ掛けは、大体に置いて2種類に分けら

れる。

一つは深刻なトラウマや恐怖症を抱える事によって、精神が異常を来たす事により発現する。

そして、もう一つは………

(強力すぎる様々な薬品を投与する事によって脳に異常な負荷を掛けて発現を促す事…それじゃつかさの精神を壊す為に使った薬品がつかさを…?)

薬品の強制投与による人格崩壊が覚醒を促したと考えると辻褃が合うのだ。

そしてつかさの覚醒はかがみの想像通り、薬によつての強制覚醒だった。

「幸か不幸か…って言えば不幸なんでしょうねこれって…でも…」

「お姉ちゃん…私。こなちゃん達の所に行きたい…うっん、行かないきゃ駄目なのっ!」

「つかさ…? でも私達じゃ何の役にも」

「だめなのっ! そうしないとこなちゃんが、アリスちゃんが…佐藤君が死んじゃうかも知れないんだよおっ!」

つかさが見た未来は幾つかあり、幸せな未来が見えた時であれば、目を覆いたくなるような絶望の未来も見えた。

そして絶望の未来は2つあり、そのどちらもつかさとかがみが居ない事で起きていたのだ。

これが未来視ならば、二人が出向かなければ待っているのは絶望だろう。

大事な親友がそんな道を歩むのは我慢できる筈が無い。

涙を流しながらかがみを見るつかさ。その力強い瞳を真っ向から受け止めるかがみ。

やや暫くあつて、大きな溜息をつくとかがみは腰に手を当てながら苦笑いを浮かべて答える。

「つかさは、基本ほえほえしてる癖に、何か大事な事があればテコでも動かないわよね」

「……………」

「はあ…私だつてこなた達が死ぬのは寝覚めが悪いに決まってるわ。良いじゃない、思いつきり暴れてやりましょ！」

「… うんっ！ 一緒に頑張ろうお姉ちゃんっ！！」

絶望の未来を壊す為に、彼女達が動き出す
！！

力強い戦車は示した…目標に向かって跳躍するその力こそ人が
命から得た可能性である事を…

つかさは覚醒した！
力 + 1 知 + 3 魔 + 5 体 + 1 速 + 1 運 + 5

スキル：ESPを取得した！
補助スキル：プレコグニションを取得した！
補助スキル：レトロコグニションを取得した！
補助スキル：クレヤヴォヤンスを取得した！
補助スキル：テレパシーを取得した！
補助スキル：ヒプノシスを取得した！

Continue 133 愛情と憎しみの狭間で踊る道化？（後書き）

つかさが覚醒しました。『薬物によるトリップ』での覚醒ですね。

攻撃力は皆無ですが、覚えると便利なESPが早速役に立ってるようです。

さて……次回は……！

アリスかこなたのエンディングが始まりますよ。

とは言え、これは『EF』のお話なので、ちゃんと本筋は進みます。

さて……どのようなエンディングになるのでしょうか……

ヒントは、今回のお話の中に混ざってるかも？

どうでもいいこと

ちよこつと復活です。

とは言え、あんまり食べられないのですけどね。

おかゆが染み渡るにやっ！（ほわわわ）

ちよこつと幸せです　でも明日も忙しいから幸せは少しだけ（涙

皆さんが幸せくな時はどんなときですか？

私は感想頂いた時ですね

重要な選択肢ルート確定　【無心の心】現在進行中

〜Ending 01〜（前書き）

要注意〜要必読〜

このエンディングは『バッドエンド』です。

鬱成分が多分に含まれてます。

読んだ後に、不快になる可能性も有りますので、そういうのが苦手な方は

スルーを推奨いたします。

本編のエンディングの1つなので、読み飛ばしても構いません。
お気をつけ下さい。

では……………ごつぞ……………

～Ending 001～

～Ending 001～

3年後・某所

あの戦いから3年、世界は平和になっていた。

所々異界などは現れたりするが、それ以外は平穩そのものである。

核の脅威も神や魔王の脅威も去り、人々は人生を謳歌していると言えるだろう。

そして……………彼女もまた、その平和を謳歌していた。

「ふーんふんふふふ」

フライパンで目玉焼きを焼く女性。

青色に近い長い髪をポニーテールにし、リボンで固定している。21歳というまだ現役の若さを持つ彼女。

最近身体もそれなりに成長し、コンプレックスでもあった胸もB位にはなってきたと喜んでいいる。

「いよっし 半熟の完成」

にこやかな笑顔で出来上がった半熟卵を2個皿に載せる。

今日の朝食は半熟卵に、シーザーサラダ、カリカリに焼いたベーコン等の少し洋風の感じで攻めてみたらしい。

そう言う訳で何時も通りの二人分の朝食を用意していた。

「旦那様ってばお父さんと同じで半熟が大好きだからなあ」 うんうん、今日も良い出来っ！ おーい、大樹、朝食できたよ」

夫である大樹の名を呼ぶ女性 泉こなたは、何時もの様に笑顔で朝食を運んで行った。

「いやあ、しっかし今日も暑いねえ。誰がプチ氷河期が近づいてくるって言ったんだか」

ウインナーを摘みながら茹る様な暑さに愚痴をこぼすこなた。

最近では温暖化も更に激しくなってきた感じで、世界が平和になっただとしてもその辺は大して変わりはない。

世界を救ったといっても、それを知るのは所詮一部の人間でしかなく世界は何も分からないまま、理解しないまま流れていくだけなのだ。

「うー、そんな事言ってもさあ。あつついものはあつついよ。うー、これじゃ抱きつく事も出来ないじゃないのさ」

流星にこの状況で大樹に抱きつけば更に暑くなる事は間違いないだろうと、残念そうに口を尖らせる。

実に色々とやっては来たが、真夏のドロドロプレイは流星に遠慮したいようだ。

「んふふ　　にやけてるねえ。ほっほっほ、今日の夜はしっほ

り行きますかっ！ 寝かさないぜっ！」

20歳を過ぎようとも、性格は其処まで変わりはない。結構自分では落ち着いてきたと感じているこなただが、周りから見ればやましいのはいつもの通りである。

時も過ぎれば世界も仲間達も変わっていく。

こなたはデビルサマナーを廃業し、残っている財産と副業でのんびりと主婦をやっていた。

彼女の仲魔は色々あって別れる事になり、今は何所で何をしているのか彼女自身分からない。

恐らくあの賑やかな仲魔達の事、元気でやってるのだろうと気楽に考えていた。

みゆきはその能力を活かし、表は医師を目指し、裏ではかがみ達と共に異界を潰す仕事をしているらしい。

らしい、と言うのはこの暮らしをしてからはかがみ達には会っていないからだ。

会おうと思えば何時でも会えるのだし、それよりも幸せな夫婦生活を満喫したいとこなたは考えている。

因みにそうじろうは実家でのんびり暮しているようだ。時々と言うかしょっちゅう電話が掛かってくるので少し辟易もしているのだが。

「ごちそうさま」　　おー、全部食べてくれたんだ。はっはっは、私の料理はそれなりのものですからにゃ！　あ、そだそだ、後でさゲームの狩り手伝ってよ」

などと、今日一日を遊ぶ事に決定するこなた。

そんな時、インターホンが鳴り響いた。

「おや？　だれかなこんな朝早い時間に。ちよっど行ってくるね、はいはい。今行きまーす」

パタパタと玄関に向かい、鍵を閉めていたドアを開けると其処には、とても懐かしい顔があった。

「おや？　かがみんじゃんっ　　おひさ〜　　そうか私が居なくて寂しかったのねっ！　あいらびゅっ!」

「相変わらずね、元気そうだなによりだわ」

「そりゃあ、それが私クオリティだからね〜　　ってか、かがみ大
学は？」

「今日は休講。たまにはあんたに会いに行こうって思ってね。元気で…嬉しいわ」

本当に嬉しそうに言うかがみにこなたはハテナ顔で首を傾げる。

確かに数年会っては居ないが、ニートにでも思われていたのだろうか
かと少し落ち込んでしまふこなた。

基本は家に居るが、それは家を守る主婦として当然の事なのだ
と、理論武装も完了し気を取り直す。

「ん、まああがつてよ。旦那も居るけどね。」

「えっ！？ あ、あんた結婚したのっ！？」

「え、なにそれひどい。私が結婚しちゃだめというかーっ！！」

「そ…そんな事は無いけど…それで、誰？」

「何いつてんのさ？ 大樹だよ？ おかしながみん」

「……………こなた？」

「ほれほれ、はいりなさい。大樹！ かがみんが来たよ！」

手招きをするこなたに導かれるままにリビングに入るかがみ。

綺麗に片付けられた、清潔感漂う開放感のある部屋だった。

「ね、ねえ。こなた…?」

「んー? 何? あ、私食器片付けてくるから、大樹と話してよ。大樹、かがみんの事宜しくね。綺麗になってるからって、襲ったらぶつとばすぞ」

「ま、待ってこなたっ!」

「んー? お腹空いたのかねかがみんや?」

そう言つて食器をキッチンへ運んで行こうとするこなたをかがみは呼び止める。

かがみは終始不思議そうな表情をしているこなたに空恐ろしさを感じていた。

「こなた……あなた……何…やってるの」

「何って、食器を片付けに行こうとしてるけど…? ま、まさかその歳で若年性痴呆症?!? まずいよかがみんっ! ここは私の愛でっ!」

「何してるのよっ! 何なのよこれは!」

錯乱したかのように大樹のいる方向を指差すかがみ。

その指はがくがくと震えていた。

「何なのよ〜って、本気でどしたのかがみん？ 大樹は大樹じゃん。ねえ、大樹〜」

「こなた…あんたまさか…これ…が…『これ』が佐藤君だって言う気なの…」

「はて…？」

かがみの言葉をさっぱり理解出来てないこなた。先程から何言ってるのだろ〜と首を傾げている。

かがみはかがみで、今のこなたがまったく理解出来なかった。

そこに居るのが『大樹』だと言うこなたに恐怖と絶望を感じている。

其処には

「この……………この『頭蓋骨』の何所が佐藤君なのよこなたっ！〜！」

絹を引き裂くかのような叫びだった。

そう…其処には白い頭蓋骨だけがテーブルの上に乗せられていたのだ。

それは…大樹の頭蓋骨…あの時死んだ、大樹の遺骨がテーブルに置かれていた。

「佐藤君は…佐藤君はね…こなた…もう…死んでるのよっ！ ねえっ！！」

「……………え？」

そう…大樹は既に死んでいた

大樹が死んだのは異界を作り上げた人修羅と闘った時…全員で人修羅相手に戦い、ダツキまで召喚し激闘を繰り広げた大樹達。

しかし、それでも人修羅の方がレベル的に一枚も二枚も上手だった。

攻めきれず死んでいくアリス、アメリカと言った仲魔達、更には皆方もかみを庇い死んでしまう。

こなたの仲魔も復活すら出来ないほどに殺しつくされ、残ったのは大樹、こなた、みゆきの3人だけだった。

それでも大樹はこなた達を救う為に、自分の命を捨てる覚悟で文珠を全て使い、更にはペルソナの暴走を引き起こす。

『永遠存在』と言うふざけた文珠の効果によって本来以上の実力を持って召喚されたペルソナ達が、己が身が消え去ろうと人修羅と戦い、そして…降す事に成功した。

だが、限界以上に魂を磨り潰した大樹はそのまま息を引き取る事になる。

魂の消滅は蘇生すらも不可能とし、その時『佐藤大樹』と言う人間は完全に消滅してしまった。

蘇生を試み、大樹が蘇生できないという事実を知り絶望したアリス達は後追いするように自殺し、コウモクテン達は己の不甲斐無さに怒りを顕にし何所かに消えて行った。

ダッキも悲しそうな表情をしながらその存在を消すように消えていく。そして…その場に残ったのはかがみとこなたの二人だけだった。

核の問題については…『なんとかなった』

色々あったりはしたのだが、その時こなたは既に再起不能の状態で、何も覚えていないのだ。

「な…に…いつてん…のさ…ここ、ここに居るじゃん…大樹は…ここに…ほら、ここに…」

「こなた…」

「何言ってるのさ!! かがみこそおかしいよ! 大樹は! ここにちゃんと! ちゃんと居るんだっ! 居るんだよっ!」

持っていた食器を床に落とし、それにも気付かずこなたは大樹の頭蓋骨を必死に抱きしめ語りかけていた。

その瞳はどこまでも純粹に…濁っている。

あの後、大樹が死んだと言う事実には耐え切れなくなったあなたは、心が壊れ、そして心を閉ざしてしまった。

その時にはあなたの声も届かなくなり、あれ以来あなたの声は聞いた事が無い。

そして…大樹の遺体を焼くその時、あなたは死んだ大樹から手に入れた文珠を使い首だけを棺桶から奪う事に成功した。

勿論後で頭の部分の灰が無いとばれないように首の部分の別の悪魔の頭蓋骨と入れ替えた上で。

そして、大樹の頭を誰にも見付からないように隠し持ち、表面上は沈んでいるが元に戻ったかのように見せかけ、一人暮らしを始めた。

後は壊れてしまったあなた、大樹を幻視し狂った生活をして居たという事になる。

「生きてる、生きてる意気テル生きてる行きテル行きてる生きてる生きてる…生きてるよ、大樹は生きてるの、生きてるんだよ…あれは夢、夢なんだよ…ねえ、かがみ…かがみ!!!」

「ひっ!?!」

「何で変なこと言うのさ? おかしいよ? ねえ、おかしいよかがみ? 何でありえないこと言うの? 私と大樹は愛し合ってるんだ

よ。夫婦なんだよ…？ 毎日睦みあつて愛し合つて、幸せを謳歌して
るんだよ？ それを事も有るうに『大樹は死んでる』？ ねえ？
ふざけてるの？ ふざけてるんでしょ？ じゃなきゃ冗談？ 性
質の悪い冗談だよ、ありえないよ。かがみだつてそんな事言われた
ら怒るでしょ？ 私だつて人妻だもん怒るよ？ 好きな夫を目の前
にして死んでるのよそれ、ははっ、何て言われたら怒るんだよ？
ねえかがみ？ よく見てよ？ 大樹も怒ってるよ？ ねえ大樹？
え？ 許してやろうつて？ もう、大樹は女の子に弱すぎだよ。事
も有るうに死ンデルツテ言うんだヨ？ いくらかがみが親友つて言
つても限度ガアルヨ。性質が悪い性質ガワルイよね。まったく大樹
に謝つてヨ？ かがみ？ それで許シテアゲルカラサ。モウ変な事
イワナイデヨネ？」

「あ…… ああ…… こな…… た…… こなたあ……」

「ナニサ？ オカシイヨかがみ？ ドウシタノ？」

「い、いやあああああああああああ……」

「何が嫌ナノサ？ もう…… 帰つてヨ…… 気分悪いヨ…… 帰れ…… 帰れ帰れ
帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ帰れ……」

「…………… カエレッツ！！！！」

……………

……………

……………

「なあ…これは有りなのか？」

「結局は先延ばしでしょ？」

「胸糞悪い終わりだっつーのっ！俺はこんな事の為にあいつに力を貸した訳じゃねえぞっ！」

「きっかけはアンタでしょ…私の大樹が…ふんっ、どうせこれは『数ある世界』の一つよ…私はもう行くわ」

「お、おいつ、待てって！！……ちくしょうっ！これで世界は救われた？ねえよ！ありえねえよっ！！俺はこんな結末認めんぞっ！！！」

時は巡り…繰り返す………

この世界は安寧を得たのかもしれない…

しかし…まだ道は永遠に広がっている………

～Ending 1～（後書き）

という訳でこなた狂気バッドエンドでした。

ふふ…こういう終わりもあると言っ事ですな…（汗
精神的にバッドは書くの辛いにゃあ…

でももしかし！ 明日はエンディングその2！ こなたグッドエ
ンドですよ。

明日はほこほこして下さい！

どうでもいいこと

ふふ…おかゆが美味しいぜっ！

という訳で結構回復してきた白亜ですよー。

早く回復したいなあ…今日も早めに寝るですよ。

所で！（落ち着け 皆さんがお勧めする二次創作のお話があります
か？

私も色々読みますが、皆さんがお勧めのお話も見たいですね

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

〜Ending〜（前書き）

テンションがぐくくと下がったバッドの次は！
ほんのりふわふわグッドエンドですよ〜

では短いですがどうぞなのですよ。

感想返しが遅れています、もう少しお待ち下さい（汗

～Ending 2～

「くと言う夢を見たのだよ。いやあ…人生色々だねっ！」

「そんな簡単に僕を殺さないで欲しい」

『ってか、私が後追い自殺なんて考えられないからっ！　そう、もし私がそんな事になれば…魔神になって魂の創造とかをやるかもっ
』！』

「ほへー…アリスは凄いですねえ」

のんびりと朝食を食べながら行き成りバイオレンスな話を振られて
テンションががた落ちする大樹。

アリスは寧ろそれ以上の事をすると思気込み、アメリカは良く分か
つていなかった。

とりあえず気分を高めようと好きな食べ物である半熟卵を頬張りな
がら今日の予定を考えていく。

「あー…今日の仕事は」

「んーとね。　町に異界発生だって、其処を潰す事になったよ。」

平均レベルは10〜15。私達にしてみれば雑魚だけど一般人にはそうじゃないからねえ」

「成程ね。あ、その醤油取ってくれる？」

『はい、大樹さんっ お醤油っ』

「ありがとう。うん、美味しいよこなた」

「はっはっは そりゃ私の特技の一つだからねえ」 今日ち美味いよ来たもんだ」

今日も上手く出来たと自画自賛しながら食事を取るこなた。

基本的に朝食はこなた任せになっている。その点においては大樹は全く頭が上がらないと言えよう。

因みに昼はアリスかアメリカ。夜は全員で 大樹は皿を並べる 調理と言う感じだ。

「それにしても…やっと平和になったと思ったのに、やってる事はデビルサマナーのままなんだなあ。まあ、将来のビジョンとして考えていたけどさ」

「悪魔は絶滅なんてしないしねえ。核は防いだしとりあえず世は全て事も無しだよっ！」

『世界を救ったんだからお金くらい欲しいわよねえ。ってまあ、捨

てるほどあるから今更欲しいとも思わないけど』

「ふっふっふ。MMOの課金が良いだけ出来るってのは素晴らしい事だねっ！ そうは思わないかなアリスちゃん！」

『それには大いに同意するわっ！ だから私も大樹さんとセツ』

「はい、それはだめ〜」

『ちくしょう…側室だっ…ていいじゃないっ！』

両手で×印を作るこなたを見て悔しそうに呻くアリス。

世間的に言えば、こなたは妻で大樹は夫、アリスとアメリカは…年の離れた兄妹だろうか。

佐藤大樹21歳、佐藤こなた21歳。人生はまだまだ始まったばかりである。

『悪魔は摂理や常識に囚われないのよおおお…うう、大樹さん〜私も、私もおおお』

「暑いからあまり引っ付かれると辛いんだけど」

『辛辣っ！？』

「アメリカはご主人様の娘ポジションなので安泰なのです。禁断の親子の愛とかも絶賛期待なのですよ」

「あの純粹無垢なアメリカちゃんはどこぞに行ったんだらうね…」

「まあ、120%サキユバスの影響だらうね。うん」

大樹の仲魔もこなたの仲魔も一部を除き今も尚彼等に力を貸していた。

但しこなた側からはハリティーがみゆきの傍に、大樹側からはパチヤカマクとマンティコアが離脱している。

ハリティーはアプサラスの時にみゆきを守れなかった事を未だに引き摺っており、その為こなたよりみゆきを守る事を選んだのだった。

こなたもそれを了承し、みゆきにハリティーを預ける事にしたのだ。

今は表裏共に彼女のパートナーとして存在しているらしい。

「そう言えば今日の仕事にはみゆきさんが混ざるって言ってたけど…なんか最近みゆきさんと組む事多いよね」

「確かに。医師の勉強は良いのかな？ 裏の仕事ばかりに感けてたら…って彼女に限ってそれは無いか」

「なんかー…嫌な予感がするよ？ るよ？ 乙女センサーにピンピン来るねっ」

『20過ぎて乙女センサーって死語だと思っな私』

「ぐさっ!? ちくせう、この永遠ロリーめが。ふっふっふ! しかししかあゝゝし、私の胸は遂にこの大台に突入! いやあ沢山揉まれましたからねえ ニヤニヤ」

「ごっふっ!? ごっほっ、ごっほっ!」

「な、なんだってーっ!? だ、大樹さん! こうなったら私も! そしてそのままゴールインとかっ!」

「ならアメリカも混ぜるのです」 サキュバスに色々教えてもらいましたよ」

「教えてもらったって何をつ!?」

こなたとアリスが同時に突っ込む。

サキュバスはやはり情操教育上宜しく無い事ばかりを教えて居る様だ。それが存在理由とは言えよりにもよってアメリカに教えている所が致命的とも言えるが。

大樹は頭を押さえてこの後サキュバスを如何してやるうかと考えていた。

「と、とりあえず朝っぱらからする会話じゃないから、落ち着こうか3人とモ」

『夜なら?』

「夜は夜で忙しいからダメかな」

『によるーん…』

「おつとお、スモークチーズは無いよ？」

こんな感じで何時も佐藤家は賑やかだった。

守護天使であるあなたが少し辟易してしまうほど騒がしく、そして
幸せなのを言うまでも無い事だろう。

…

…

…

深夜

キングサイズのベッドで二人並んで寝ている大樹達。

今日も一日が終わり、後は二人だけの時間がやって来る。

「今日も頑張ったね。お疲れ様、大樹」

「戦うより何より、あの異界の中が暑かったのが一番堪えたよ。火属性無効のペルソナでも暑いものは暑いんだと最近無駄に悟ってきた」

「ふふ、人生はそんなに甘く無いのだよ。キングちゃんのブフ系魔法が大活躍だったもんねえ」

「低レベルのブフでも十分なんだけどね、絶対零度は流石に死ぬからやばいけど」

「てかさ、レベル10前後の悪魔にダイソ系魔法って苛めだよね」

「寧ろ高良さんの無双が凄まじかったよ。うん…」

「あれは多分にストレス発散も兼ねてるよねえ。医師の勉強で何かあったのかな？」

「さあ…まあ、凄く楽しかったけどね」

今日の仕事で組む事になったみゆきとハリティーのペアなのだが、大樹達のやる事が無くなるほど凄まじい活躍だった。

それこそスライムに挑むレベル99の勇者の如く悪魔を駆逐するみゆきの姿は凄まじいと言うより、空恐ろしいと感じてしまう大樹達だった。

程なくしてあっさり異界の主も倒しきり、異界に潜入していた時間は正味一時間にも満たなかったりする。

その後は全員で飲みに行く事になり、大いに騒ぎ先程戻ってきたのだ。

「今度応援しに行こうか、何だか凄く愚痴ってたし…うん」

「それがいいかもだね。となれば近い内に暇を作らないとな…」

これからの予定を組み替えて行く大樹にこなたが擦り寄りながら話しかけて来た。

「ねえ」

「ん？」

「なんかさ、すっごく幸せで、幸せ過ぎて時々怖くなる時って、無い？」

「うーん。どうかな…確かに今の生活は充実してるし、幸せだと思っけど。こなたは何が怖いの？」

「私も良く分かんないや…お父さんも元気だし、お母さんとも話せるし。かがみもつかさも、みゆきさんも居るし。知り合いは皆無事で平和に生きてる…でも…さ」

今日見た夢を思い出し、小さく震えるこなた。

幸せを謳歌している所に、壊れてしまうほどの絶望を見てしまったのがこなたの心に小さな陰を落としていた。

今見ているこの現実こそが夢で、本来の自分は死んだ大樹が信じられず壊れてしまっているのではないか、これは夢なのではないかと考えてしまう。

人間、幸せな時の方が恐ろしく感じる時があるというが、こなたもそのような状態になっているのかもしれない。

そんな彼女を暖かく優しい香りが包み込んだ。

「ふわ…あ…大樹…」

抱きしめられたこなた。

大樹の方向を見ると、少し恥ずかしそうにしてそっぽを向いてはいるが、そのまま優しく語り掛けてくる。

「夢じゃない、夢じゃないさ。僕はここに居るし、皆には何時でも会える。それでもまだ怖いって言うなら。その恐怖が消えるまで抱きしめてあげるよ」

「うん……………ありがとう…大好き…」

飛んでしまいそうな程の幸福感を感じつつ、深く抱きしめ返すことな
た。

ゆっくりとこなたの方を振りむく大樹と、ゆっくりと近くなってい
く二人の距離。

どちらからともなく二人の唇が重なり合った。

「ん… ふふっ ね… 今日もがんばろ？ お母さんもお父さ
んも子供が早く見たいって」

静かな部屋から聞こえてくる衣擦れの音。

そして…二人の影は重なり合う……………

……………

……………

…

二人の物語はこれで終幕ではない、寧ろここからがスタートに
なるだろう。

だが大樹もこなたも何も恐れる事は無い、これから先待っているのは、確実な幸せなのだから……………

柊かがみ

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

目標だった司法試験に合格、弁護士の資格を取る。

その傍ら、裏ではデビルバスターとして今も尚現役で戦い続けている。

最近はある男性と良い仲になりつつあるが、それが上手く行くかはまだ分からない……………

柊つかさ

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

20歳の時に、同じ学校の同級生と結婚。

何時の間にもその様な仲になっていたのかはかがみですら知らず、付き合いだしたと知った時は大いに驚かれた。

今現在は双子を出産し、育児に精を出している。

ESPの暴走は見られず、時々かがみにその能力を当てにされたり、大樹達に当てにされたりと結構忙しい時間を送っている様だ。

高良みゆき

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

医師を目指す傍ら、大樹達と共に裏の仕事に関わっていく。

未だに少し大樹に未練があるのか、大樹と一緒にの仕事の時はかなり張り切っているらしい。

表も裏でも大人気な彼女だが、未だに浮ついた噂は一つも無く、多分これからも無いだろう。

泉こなた

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

その後直ぐに大樹に告白し結婚を前提に付き合い出す。そうじろうと大樹のちよつとしたやりとりもあつたがなんとか合意に達する。

とは言え直ぐに何かが変わる訳でもなく、友達のようなそんなのんびりとした関係で二人の仲は良好だった。

20歳の時に結婚。様々な人達と、守護天使であるかなたに見守られ、幸せな人生を送る。

今現在は…お腹の中に新たな命が……………

佐藤大樹

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

こなたと共にデビルサマナーの仕事をこなしつつ、生計を立てる。

コミュ障も殆ど解消され、今では新米デビルサマナーの教育なども行っているらしい。

性格は変わらず冷静で冷徹なので、結構恐れられていたりするが本人は大して気にしていない。寧ろ気にすると落ち込みそうになるのが無理矢理気にしない事になっている。

この先もこなたや仲魔達、そして親友と共に生き続けるだろう。

だが……………これは数ある終わりの内の一つでしかない。

この幸せも、何かが崩れてしまえば簡単に崩壊する。

ここの大樹は真実に辿り着く事が出来なかったのだ。

それでも、彼は幸せなのかもしれない。

Ending 02 〈歩み出す二人〉

こなた編『グッドエンド』

「これはこれでムカつくんだが…」

「あーはいはい。どっちにしても騒いでるのねアンタは」

「まあ、あんなバッドエンドに比べれば幸せだろうさ。後は…」

「何にせよ私達は『真実』に向かうだけよ…」

「それが幸せなのかは誰にも分からんけどな。まったく、やってられねえ。俺のキャラじゃねえよこれは」

「あんたバカだもんねえ…とりあえず私は『あの時』に戻るわ」

「あいよ…んじゃ、俺は『終わり』まで見守る事にするかね…羨ましいんだか、羨ましくないんだか…お前はお前で佐藤しか見てねえな…『ダツキ』」

♪Ending 2♪ (後書き)

こなたんグッドエンドでした！

21歳ともなると色々成長するようです…というかみゆきさん何が
あつた…？(汗

数あるエンディングと言う事なので、他のエンドも色々あります。
基本的にCOMMIXの異性キャラはバッドとグッドが出てきます
よ。

みゆき、つかさ、かがみ達は次の章に期待ですね。

でも、それは『各キャラクターのエンディング』であり『本編のエ
ンディング』じゃ

ないんですよ。本当の最終回はどうなるんだろう…と言うか其処
までいけるのか…

頑張らないといけませんね。

さて、次回はアリスの『バッドエンディング』です。

鬱成分はやはりありそうなので、読むときは要注意ですよ。

どうでもいいこと

今日は熱中症になりかけた白亜が通りますよ。

なんか目の前がふらふらするので…(笑

でもネタが出来たので書き上げました。私ってもしかしくなくても
馬鹿かもしれないぜ(えー

仕事で意識を何度失い掛けた事か。今日も早く休まないですね
え。

という訳で！(えー 皆さんが心に残った名台詞とか名シーンはあ
りますか？

私は色々ありすぎて書ききれないですぜ…にゃはははは

重要な選択ルート確定 【無心の心】 現在進行中

〜Ending〜（前書き）

アリス編バッドエンドです。

鬱成分は少ないかな？ でも狂気は混じってると思います。
悪魔だからこそ出来る、理解しがたい世界をどうぞ。

感想返しがまだできていません、どうかご容赦を（汗
後明日は、更新できないかもしれません。ご了承下さい。

～Ending～

『世は全て事も無し…ね』

「ま、この町は平和ですよ。他はどうか知りませんが」

『随分と辛口になったわねえ…アメリカ』

造魔合体を繰り返し18歳相当の姿にまで変化しているアメリカが酷薄な笑みを浮かべてアリスに答える。

一方アリスの姿は昔のまま、特に変わっている所は見られない。

窓から顔を覗かせ周りを見回す。

人間達が今を精一杯生きようと頑張っている姿がここからでも見る事が出来た。

それを見て大して面白くも無さそうに本題に入る事にする。

『で、その話本当なの？』

「子飼いの情報屋からの確かな情報ですよ。で、どうするんですか？」

『そうねえ……出来るなら同じ趣味の元友人、放置しても良いんだけど……邪魔なら……』

「多分間違いなく邪魔になるですよ。私達の『今』を壊す、ね」

『嬉しそうな表情してるじゃない。そんなに憎いの？ 悪いのはアイツ等じゃないのに』

「憎い？ ふふっ、もうそういう感情はその辺のドブに投げ捨てましたよ。アメリカは唯、彼の為に生きるだけです、今も、そしてこれからも」

『そうね、私もそんな感じかしら。そう言えば彼は？』

「昨日は激しかったですし、まだ寝てるんじゃないでしょうか？ ふふっ」

『あーはいはいお盛んですね。今日は私の番と行きたいけど、まずは面倒な事から片付けないとねえ。ゲームでもして遊んでたいなあ』

両手を上げてふるふると首を振るアリス。今日は『彼』との逢瀬の日なのに、面倒な事になりそうだと言息を吐いてしまいそうになる。しかし、漸く手に入れた平穏を壊されてはならないと、ここに向かっている相手に対して如何しようか考えていく。

『ま、』 『彼』にも友達は必要よね。それが元友人なら尚更って感じ

かなっ、アハッ
』

その表情はどこまでも歪んでいた。

……

……

…

彼はむくりと起き上がった。

辺りには既に誰も居らず、ゆっくりと首を傾げる。

「あれ…誰も居ないのかな…?」

いつもならアリスかアメリアのどちらかが彼が目覚めるまで傍に居てくれるのだが、今日に限ってそれが無かった。

途端に強い寂しさに震えてしまう彼。何時も傍にいてくれる大切な

人が居ない、それだけなのに心が砕けそうなほどの重圧が押し掛かってくる。

「あ……僕が起きたのが遅かったのかな……仕方ないか、仕方ないね」

彼女達が自分を嫌う事は無いと信じ、まずはシャワーを浴びる事にした。

昨日はアメリカから激しく愛されたので汗の臭いなどがかなり気になってるのだ。ゆっくりと起き上がりふらふらとした足取りでシャワー室に向かう。

備え付けられたシャワーを浴びながらこれからの事を考えていく彼、最近とても興味を持っているものがあつた。

何故かアリスもアメリカも近くに居ないので今日は自分のやりたい事をやるうと考えて居る様だ。

「そう言えば……僕には友達が居ないな……友達が欲しいかも……うん。友達が欲しいよ、なら……探しに行こうかな」

身を清め終わった後、彼はその思いのままに外に出る事に……

……

「うん。今日も空が良く見えないなあ…いつもはアリスもアメリカも外にでちゃだめだって言うから、こういう日を有効活用しないかね」

暗く澱んだ空を見上げながら一人ごちる。

彼に対してはアリスもアメリカも過剰と言わんばかりに過保護な為、外に出してもらおう事が滅多に無いのだ。

有ったとしても必ず隣にアメリカかアリス、そして護衛が付いてしまうので友達を作る事が全く出来なかった。

しかし今日は初めてとも言える一人の日。これを有効活用して早速友達を作ろうと歩き回る事にする。

「ふーん。何時も盛況だなあ…」

町の中はとても賑わっていた。このご時世食べ物に難儀する人間が多いというのに、この町だけはそんな事関係ないとばかりに賑わい続けている。

とは言え、彼がこの町を出た事は無いので貧しいと言われてもさっぱり訳が分からなかったりするのだが。

キヨロキヨロと辺りを見回した後、まずは何所から行くかと思案する。

友達を作るうにもまずはその友達となる対象を探さなくてはならないのだ。これが結構大変だったりする。

「って、ヒランヤだ…へえ、良いなあ」

直ぐ近くの道端売りをしている所でヒランヤを見つけた彼。

そう言えばサイフを持ってきておらず、欲しいと思ったのだが手に入らず落ち込んでしまう。

だが直ぐに目的を思い出した彼は気を取り直し、その場を後にした。

「さあて、と。今日は友達を作れるかな？」

アリスやアメリカが居るとは言え、この町で一人の友達も無く生き続けるのは寂しいものがある。

出来れば気を許しあえるような友人が欲しいと思っていた。

彼女達には出来ないような相談も、友人となら気兼ねなく話せると思うし、きっと楽しいに違いないだろうと思っている。

そんな他愛も無い夢を想像しながら、何時もなら誰かと歩く街並みをたった一人で歩いていた。

「あれ…？ 見た事無い人達が居るな。どうしよう、友達になつてくれるかな？」

当ても無く辺りをぶらぶらと歩いていると、この街では見られない姿の人間達が歩いているのを発見した。

その数は4人で、見た所20歳前後と言った所だろうか。周囲をこまめに確認しつつ歩いている姿は少し滑稽に感じる。

不思議と言えば、彼等の格好だろうか。

ゴテゴテとした鎧の様な物を着込んでいるのも居れば銃を持って居る人も居る。

赤と白の薄い服装に身を包んだ感じの人も居るし、ライダースーツを着込んで居る人も居た。

総じて皆女性だったが。

「女の人かあ…僕は男性の友達が欲しいんだから、どうでもいいかな。さあて、次は何所に行こう…」

「ちよ、ちよっと待って!!！」

「ん？ 何か用？」

彼が見ている事に気付いた4人組が驚いた表情をしながら此方に向かって走ってくる。

衝動的に逃げたくなつたが、流石に尋ねられて逃げるのは変だなと感じて話を聞く事にしたらしい。

目の前に走りよつて来たのは、見た目的に少女と言える様な女性だった。

「あの…さ…君の…名前教えてくれる…？」

「人に名前を尋ねる前には、自分の名前を言いなさいって言われなかつた？」

「あ…うん…わ、私は泉こなた、君は？」

泉こなたと名乗つた女性は信じられないと言つた表情で、彼を見つめている。

よく見れば他の三人も驚き方は違うが、似通つた表情をしていた。

行き成り現れて変な顔をされても困ると、どうしていいかわからなくなる彼だったが、相手が名前を言つたので答える事にした。

「僕は『佐藤大樹』。で？ 話はそれだけ？ 僕急いでるんだ、それじゃ」

「ま、待って！ 聞きたい事が有るんだよっ！」

「だから、僕急いでるんだって……うーん、そうだなあ……其処まで言うならお願い頼んでもいいかな？」

「お願い……ですか？」

大樹と名乗った少年の言葉に答えたのは眼鏡を掛けた優しそうな女性 高良みゆき。

彼女も大樹を見て、嬉しそうなそして複雑な表情を隠す事が出来ない。

「そ。この先に露店を開いている人が居るんだけど、其処にヒランヤが売ってるんだ。それを買ってきて僕にプレゼントしてくれたら聞いてあげるよ」

「ヒランヤ……ヒランヤって言うとのの？」

「ヒランヤにどんな種類があるか知らないけど、そのヒランヤだと思っよ？ じゃあ僕はここで待ってるから」

「う、うん。買って来たらお話聞いてくれるよね？」

「いいよ、お姉さん達」

「分かったわ。其処で待っててね！ 行くわよこなたっ！」

「うんっ！ 絶対に待っててね、絶対だよ！」

「しゅっこいなあ。大丈夫だよ、僕は約束ちゃんと守るから」

やる気無さそうに手を振ってこなた達を見送る大樹。

労せずしてヒランヤが手に入るかもと実は結構ホクホク顔をしているのだが。

そして…こなた達は先程大樹と名乗った少年の事を考えていた。

「ねえ…あの子って…もしかしなくても…大樹君じゃ…でも…」

「名前も同じで、見た目も幼くなってる以外は変わり無し…確かにそう考えると佐藤君だわ。でも、それはあんたが一番良く分かってるんじゃない…？」

「うん…大樹君はもう居ない…もう居ないんだ…」

全てはあの時終わりをつけた。

人修羅を倒す事が出来た大樹達だったが、その時に受けた傷は確実に大樹を蝕んでいた。

異界から開放された大樹は、急いで核を如何にかする為にクスノハと連絡を取る。

しかし…彼等は後一步間に合わなかった。

世界中に降り注ぐ核の炎は世界を、そして日本を焼き尽くしてしま
う。

人の文明が終わりを告げ、悪魔が蔓延る地獄の様な世界が作られて
しまった。

そしてそうなればニクスが現れあらゆる生命が死に絶える事を知
っていた大樹は、自分に残された時間が少ない事を理解して一番最
善の行動を取る事にしたのだ。

金文珠を全て使い『究極封印』を発動させ、ペルソナのユニバース
の能力『大いなる封印』の代わりとなったのだ。

だがその代償は大きく、本来なら意志は残りニクスを見守る筈だ
った魂は、足りないコストを補う為に全てを使い切る事で能力を発
動させた。

世界を死の運命から遠ざける事には成功したが、大樹自身は転生さ
え出来ぬ魂の消滅により、その生涯を閉じた。

ニクスの存在をその時間かされたこなた達は、大樹の死に嘆き悲
しみはしたものの、彼の想いを受け継ぎ崩壊したこの世界で生きる
事を決意する。

だが……それを認められない者も居た。

それが

「ここには恐らくアリスちゃんとアメリカちゃんが居る。何でこんな町を作り上げたか知らないけど…やっぱあの大樹君の為なのかな…」

「肉体と脳さえあれば記憶は作り直せる、ほんの僅かでも魂があれば私はそれに掛ける…でしたか。やはりあの子は佐藤さんなのでしようか」

「もしそうだったとしても、あれは佐藤君じゃないわ。記憶を持っていたとしても、性格も同じだとしても…佐藤君と言う存在はあの時世界を守る結界になっただから」

「そうだね…でも、そこまでしてあの二人は佐藤君に生きていて欲しかったんだと…思うな」

「虚構の町…か、生きてるように見えるけど、ここに居る人達、全員ゾンビだね。恐らくアメリカちゃんのグレイブとかネクロマかな…凄まじいレベルになってるよ…」

こなた達がここを訪れたのは、崩壊後の世界でデビルサマナーと仲間達として活動していた時に、崩壊前そのままの理想郷があるという情報を掴んだからである。

この町はかなり有名で、入るのは簡単だが出て行く事は出来ない悪魔の町だとも、余りの快適さに出る気がおきない理想郷と言う情報

等が流れている。

情報通りに悪魔に支配された町だったならば、これ以上大きくなる前に排除する予定で、逆にここが本当に理想郷ならば此処に住む事も考えていたのだが。

百太郎の悪魔の存在を示すマーカーがあちこちに張り巡らされている事から、此処の話は前者通り悪魔の住む町…いや正確に言うならばアリスが支配する町と言えよう。

「何にせよまずはヒランヤだね」

「ここまで普通を再現してるって…アメリカって何所まで強くなってるのかしら…」

「何はともあれ、これで情報は掴めました。後は彼に案内をしてもらって本人から全てを聞かせてもらいましょう」

「……アリスちゃん。これが君の望んだ事だったのかな…」

彼女達はヒランヤを売る露天商の居る所まで歩いて行った。

……

……

…

「ありがとう、嬉しいよ。優しいんだねお姉さん達って」

「い、いやいや。それほどでもあるのだよっ！」

「どっちななのよ……」

「うーん……君達でも良いかな」

「ほえ？ 何かね何かね？ お姉さんが何でも聞いて進ぜようぞ〜」

「僕、友達居ないんだ。大切な家族は居るけど、友達はまだ、だから……僕の友達になってくれるかな？」

「……………うんっ！ 良いよねこなちゃんっ！」

「そだね……そうだねっ！ 宜しくね大樹君！」

「やった それじゃ友達になる為に必要な事があるから、ついて来てよ」

嬉しそうに駆けて行く大樹を、追いかけるようにしてこなた達は走っていく。

大樹と友達になると言う事に嘘は無い、だが……その前にこなた達にはやらなくては、聞かなくてはいけない事がある。

それを問い直す為に、彼女達は大樹に付いていった。

やや暫くして、大きなビルに辿り着くと大樹が立ち止まり、この中で待っていると先に入っていく。

追いかけてよとしたが、そのすばしっこさは相当な物で、直ぐに姿が見えなくなった。

「とりあえず、いこっか」

「そうね…」

「ここにアリスちゃんとアメリカちゃんが……話し合いで解決、出来ないよねやっぱり」

「難しいでしょうね…昔ならばいざ知らず、今の私達と彼女達の間には深い溝がありますから…」

『良く分かってるじゃない、久しぶり、と言った方が良いのかしらね』

突如聞こえてきた声に急いで振り返ると、其処には大樹を連れたアリスが無表情のままこなた達を見つめていた。

咄嗟に身構えるが、当のアリスは至って平穏な物だった。

『行き成り戦闘態勢って酷いんじゃないの？　それが仮にも元仲魔に対してする態度？』

「そんな殺意バリバリで言われてもね……久しぶりだねアリスちゃん。色々聞きたい事はあるけど、まず一つ聞かせて欲しいな。『大樹君』はどうして其処に？」

『前に言ったでしょ？　魂が無くても肉体と記憶媒体さえあれば、残り滓の様な魂でも加工出来るって、ここに居るのは私の最も愛する子供であり、家族であり、旦那であり、主人である……佐藤大樹そのものよ』

「変なアリスだね？　僕は僕だよ、それは変わらない」

『うんっ　　そうだよね。でも大樹さんこの子達を連れてくるなんて吃驚よ。と言うか起きてたのね……寂しくなかった？』

「少し寂しかったけど、そう言う事もあるって納得して外に出たんだ。それより聞いてよ、彼女達が僕の友達になってくれるんだ。これで漸く友達が増えるよ」

『むー……彼女達がねえ……』

「だからさ……お姉さん達……『死んでくれる』？　生きてたら友達になれないんだよ」

何所までも純粹に『佐藤大樹』を材料にして作られた『佐藤大樹』は微笑んだ。

それを嬉しそうに見守り、アリスはこなた達を見る。

『大樹さんの友達になれるんだもの、喜ばしい事でしょ？ さあ、一緒に…堕ちましよう？ どこまでもどこまでも…』

かつての面影は其処には無く、唯、愛しい人の代替を作り出し愛する狂った情愛が彼女を突き動かす。

止まらない、止まる事は無い、彼女達の愛は永遠に存在を変えても続いていくだろう……………

Ending 03 〈赤お姉さんと黒お姉さんの作った虚構〉

「……………冷静に狂ってるな。おい…」

「悪魔も所詮はマグネタイトを媒介にした存在だしね、肉体と記憶があれば魂は僅かでも本人って訳か。狂ってればそれでも良いと思うのかしら。私は絶対に御免だけど、所詮究極の人形遊びじゃないの」

「地味にきつついなお前：タマモの1・25倍位」

「巨大なお世話よ。この世界はもうだめね、大樹が守ってても基本が壊れてきてるわ。メシアもガイアも消えてるし緩慢に滅びるだけか。それはそれで構わないけどね」

「どっちにしろ、あの二人が間に合うか間に合わないか、切り札を切るか切らないかで変わるって訳か。ペルソナー斉は負けフラグだな」

「後はあの二人が如何動くかね…はあ、こういう時に全知全能って存在が羨ましいわ。居ないけど」

「万能が無いから…全能が無いから、あいつが無駄な重荷を背負う事になるんだろ、俺達はこんなものばかり見続ける事になるのかね」

…」

「それを止める為にあんたがいるんでしょ。私はいつの『心』を守る為に来てるだけ、それじゃ…そろそろ行くわ」

「あいよ……ったく。勝つても負けても辛いだろうに……アメリカちゃんも……はああ、本気で鬱になるっつーの」

～Ending 3～（後書き）

知っている人は知ってお話です。

真・女神転生をやるとわかるかもですよ。

アリスと赤と黒が分かるかも？？

こう考えると、実際にはまり役のアメリアでした。

ちなみにこの後の戦いの結末はご想像にお任せします。

どうでもいいこと

ばーうむっ！ くーへんっ！！

という訳で（どういう訳だ）バームクーヘンを食べました

久しぶりに食べると美味しいですよ　　ここはやはり紅茶と一

緒に嗜むのが

一番ですよねえ。最近は色々なバームクーヘンがあるので悩みますが、

私は一番シンプルなのが好きですよ

皆さんはバームクーヘン好きですか？

重要な選択肢ルート確定　【無心の心】現在進行中

～ENDING～(前書き)

アリスのグッドエンドです。

のんびりした日々をどうぞですよ。

感想返し終了です！ いつも感想感謝なのですよ！

～Ending 4～

『はい　有難う御座いました』　あ、そっちを3部ですね、
1500円になります』

「2000円のお預かりなのですっ！　えーと、500円のお返し
なのですよっ！」

熱気、熱気、熱気。

老若男女問わず、大好きな人は大好きな祭典、戦場の有明で彼女達
の戦闘は始まっていた。

目の前には呆れるほどの長蛇の列。

新進気鋭と言うのもあるが、ハードな18禁止のストーリーをこれ
でもかと言うほど可愛い萌えキャラを使って書き切るその姿勢が受
けており、更にはそれを書いているのが目の前に居る美女群ならば
当然と言えるだろう。

「何で私がここで売り子しなきゃいけないのかしら…」

そんな中疲れたような表情で看板を持っている女性…柊かがみが愚
痴り始める。

熱気にやられているのもあるが、客の男性の舐る様な視線に辟易として居た。この辺アリスとアメリカには全く効果が無かったりするが。

『はいそこかがみんっ！ もっと笑顔で！』

「かがみん言うなっ！ っってお前もか！」

「そうそうかがみも頑張つてよ。かがみの笑顔で私達『らつきーすたーず』の売り上げが変わるんだからねっ！」

直ぐ近くでは『ロリ要素その2』と言う事でこなたも参戦していたりする。

お客の入りは彼女達のお陰で上々だろう。

男性はかくも女性に弱いと言う所がはつきりと感じ取れた。

「くうう…騙されなければ、あの時騙されなければああ…」

あの激しい戦いから既に1年が過ぎていた。

絶望しか見えなかった日々を生き残り、街を異界から救い世界中に落ちるはずの核を防いだのは記憶に新しい。

もう戦う必要も無くなった彼女達は日々を全力で謳歌していた。

勿論普段の暮らしの為にデビルバスターをやっていたりもするが、かなり強力な異界などでもレベル30前後が良い所、これまでの戦いを生き抜いてきた彼女達にとってはヌルゲーの様な物だ。

しかしそればかりでは色々荒んでしまうのも事実、折角悪魔や核の脅威の無い世界に戻ったのに、それでも尚戦い続けるのはどうだろうとこなた達は考えた。

そこでアリスが目を付けたのが同人活動だ。元々ゲームやアニメが好きでこの世界に来た事もあり、こなたと言う力強い同志 絵は壊滅的に駄目だったが も居り、練習に練習を重ねた結果今がある。

お陰で売り上げや人気はうなぎ登りと言える、一度だけサキュバスがやってきた時は色々惨事に 18禁止的な意味で なりかけた為アリス達の方で出禁になっている。

ちなみに大樹は来ていない。急遽発生した異界を封じに仲魔達やみゆきと共に向かっていたりする。

こなたもアリスも第一線は未だに引いては居ないが、急遽発生したと言っても所詮はレベル20台。大樹一人でお釣りすら来る。

後は今回のイベントをアリス達が非常に楽しみにしていたのもあり、こちらに来る事を許可したのだ。

かがみも異界の方に回る予定だったが、こなたの口車に乗せられ某ツンデレ娘のコスプレをしている最中だ。

『いよつし！ 完売っ！ かがみ少し休んでいいよ〜』

「おっとお、それじゃ私他見てくるね〜 良さげなのをゲットしてくるぜっ！」

「あんたはタフね…私は少し休ませてもらっわ。熱気が凄すぎ」

「んー？ アギの魔法よりは涼しいですよ？？」

「いや、そういう意味じゃなくてね？ と言っかこの子此処に連れて来て良いの？ さっきからお客の見る目が異常に怪しかったんだけど…」

『問題ないないっ！ 寧ろその辺の相手にアメリカが負けるわけ無いでしょ？』

「寧ろ加害者側よね…うん」

こんな人ごみで魔法など打とうものなら大惨事は免れないだろう。流石に其処までする気はアメリカにもアリスにも無いのだが。

「いやあ、つかさも来れば良かったのにねえ」

「つかさを不思議な世界に巻き込むなっ！ ったく…今頃はデー卜なんでしょ。何であいつなんかと」

「あー、あれは吃驚だったよねえ」

『それ良く聞くけど、そんなにつかさちゃんに似合わないの?』

「それはないけどー…まあ、同級生だったしね。よくよく弄ったものさあ」

「本当にアンタは誰にでも自重しないな」

「私が自重する相手は大樹さんだけと決まっておりますので、ふふんっ」

『むむっ！ 大樹さんは私と付き合ってるんだからねっ!?!』

アリスの言う通り、戦いの後大樹はアリスを愛するようになり、アリスは心から大樹を愛する事に決めた。

人間と魔人と言う決定的な存在の差はあるものの、大樹は死ぬその時まで彼女は永遠に傍に居ると誓約したのだ。

悪魔：それも魔人である彼女に寿命などと言うものは存在しない、つまりいつかは大樹が彼女を置いていってしまう。

しかし大樹はその辺如何にかできる能力がそれこそ山の様に有るので、将来的には分からないのだが。

こなたに関しては『悪魔の嫁はアリスちゃん。ならば人間の嫁は私でしょ!』と、堂々とアリスと大樹に宣言し、主に大樹を悩ませている。

日本で普通に暮していた以上、両方を愛すると言つゝ一夫多妻の考えは大樹には無い。

一度はちゃんと断りを入れたのだが、「こんな裏の世界に生きてるのに表の法律に縛られちゃいけない！」とばかりに猛烈にアタックを続けている。

それはみゆきもそうだったりするのだが、彼女の場合は押しが弱いので大樹に気付かれていないが。

「ふっふっふ。表の夫婦は私と大樹君が良いと思わないかな？　かな？」

『くっ…こうなれば戸籍でも購入するしかっ…』

毎日こんな感じでやりあっているが、アリスは別に一人だけで大樹を独占したい訳ではないので、こなたが本気ならば別に構わないとも思っている。

悪魔である彼女がその辺の倫理を律儀に守る必要も無いのだから。

アメリカはまだその辺の事はよく分かっておらず、これからの成長によっては変わってくるだろう。

「っと、メールだ………あ、大樹君達終わったって。夜どこかに食べに行かないかーって言うてるけどかがみはOK?」

「んー、そうね。これだけ疲れたしご馳走になっても文句は言われないわよね。参加するわ」

「あいよ。それじゃ泉こなた上等兵呐喊するであります！」

『うむっ！ 吉報を待ってるぞ！』

「ラジャーッ！！」

ピシッと敬礼をして宝物巡りに向かうこなたを見送り、かがみは開いている席に座り一息つく。

アメリカが冷やしていたジュースを手渡してくれたので、それで喉を潤した後、改めて辺りを見回す。

「此処に来るのももう数回目だけど、この人達ってこれだけのエネルギーどこから出してるのかしらね」

『楽しい事は疲れないし元気が出るものよ。コウモクテンだって戦闘中は楽しそうだし。サキュバスはあれはあれで楽しそうだし…畜生、あの胸は敵よね』

「それじゃあ、パチャカマクは笑うのが好きなのですねー」

『多分違うけど、まあ、どうでもいいわ魔王（笑）だし』

「相変わらず地位のピラミッドの最下層に居るわねあの悪魔」

『それがアイツのクオリティだから。でも結構馴染んでるし良いと思うけど』

「根っからの下っ端属性なのですよ！ サキユバスが言ってたのです！」

『「あー」』

あること無いこと言われているパチャカマクだが、不思議と嫌われている訳ではない。

寧ろおじいちゃんのようなマンティコアよりは親しみやすい所があると言えよう。マンティコアはもう『お隣のおじいさん』と化しているので割愛する。

『それにしても…平和だね』

「そうね、1年前が嘘の様だわ。私達が世界を守ったって…誰も信じないし、分かって無いでしょうね」

「でもでも、ご主人様も皆も頑張ったのです！ えへへ…」

『そうだね…一生懸命足掻いて、戦って…辛い事ばかりだったけど、懐かしい思い出…かな』

大樹と初めて出会った時も、悪魔とのいざこざの時だった。

人間の世界に興味を持ったピクシーが人と暮らして行く事で、愛を知り、夢を知り、そして未来を救った。

世界を救うつもりなど無く、自分達が生き残る為に、大切な人を守る為に：傍に居る為に戦い、傷ついてきた。

それを後悔する事は未来に置いても無いだろう、辛く苦しい時間だったとしても、それが大樹とアリスの未来を作ったのだから。

平穩はやってきたばかり、この後も色々面倒な事が起きたり、楽しい事が起きたりするのだろう。

その時も彼女は大樹の傍で、仲魔や仲間と共に困難に立ち向っていく筈だ。

それが：彼女が自分で選んだ道なのだから。

『さつて！ 今日はこちらくん大樹さんに甘えちゃおう』

彼女達の物語は これからも続いていく……………

泉こなた

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

今は父親と居候の小早川ゆたかとの三人で暮している。

デビルサマナーの仕事の傍ら、同人活動も活発に行っているようだが、絵の方は未だに壊滅的である。

しかし突飛な想像や自分の経験を生かしてのストーリーは中々に売れているようで、そうじろうの作家としての才能を受け継いでいるようだ。

今も尚猛烈に大樹にアタックを仕掛けている為、大樹も結構悩んでいるように見える。

2870

柊かがみ

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

目標だった司法試験に合格、弁護士の資格を取る。

その傍ら、裏ではデビルバスターとして今も尚現役で戦い続けている。

最近はある男性と良い仲になりつつあるが、それが上手く行くかはまだ分からない……………

柊つかさ

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

20歳の時に、同じ学校の同級生と結婚。

何時の間にもその様な仲になっていたのかはかがみですら知らず、付き合いだしたと知った時は大いに驚かれた。

今現在は双子を出産し、育児に精を出している。

ESPの暴走は見られず、時々かがみにその能力を当てにされたり、大樹達に当てにされたりと結構忙しい時間を送っている様だ。

高良みゆき

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

医師を目指す傍ら、大樹達と共に裏の仕事に関わっていく。

未だに少し大樹に未練があるのか、大樹と一緒に仕事の時はかなり張り切っているらしい。

表も裏でも大人気な彼女だが、未だに浮ついた噂は一つも無く、多分これからも無いだろう。

佐藤大樹

世界を救った知られる事の無い英雄の一人。

世界がおかしくなる前から考えていたデビルサマナーの仕事をごな
しつづ、生計を立てる。

アリスとの異種族の恋愛に禁忌する事は無く、深く愛している傍ら
こなたやみゆきに言い寄られたりと
人生を満喫しているようだ？

この先もアリスや仲魔達、そして親友と共に生き続けるだろう。

アリス

英雄の傍らに何時も居た可憐な少女。

数年後人間と魔人の血を受け継ぐ子供を儲ける事になる。平和な世
界を満喫し、大樹と共に幸せを謳歌していた。

数百年後、彼女は異界に住処を構えそこで静かに暮らす事になっ
ている様だ。そして彼女の傍らには一人の男性の他に誰かが居たと
言う噂があるらしい。

それが大樹やこなたなのかは分かっていない。

平穩が築かれ誰もが知らないまま平和を過していく。

だからこそ気付けない、気付かない、分からない。

それが仮初の平和である事を。

この世界は平和だとしても、ふとした切っ掛けで消えてしまふ
と言つ事を……………

Ending 04 〈未来へ進む小さな妖精〉

アリス編『グッドエンド』

「んーまあ…核心までもう一歩って所だったんだがな」

「これはこれで幸せそうだから別にいいわよ。大樹が幸せなら私はそれで構わないし…ね」

「真実を知る事になったらどうなるやら…俺だったらとりあえずキーヤンを殴りに行くな、ああ」

「それでどうにかなるなら私はそいつ等を全力で抹消するわよ。どうにかなれば、ね」

「とりあえずターニングポイントまで戻るのか？俺はこれを一人で見守るのはすげえ腹立つんだが…くそっ、顔の造形レベルは俺とどっこいどっこいの癖にっ！何で俺はモテんのじゃあああっ!？」

(こいつ、これ本気で言ってるのかしら…ま、どうでもいいけどね)

「それじゃ私は行くわ。あんたは其処で地団駄踏んでなさい」

「酷くねえかつ!？出来ればその豊満な胸で泣かせてっ!」

「死・ね」

「あぶるぼっ!?!」

「おー、よく吹き飛ばわね。さて…行きますか」

時は巻き戻る……………あの時へと。

〜Ending 04〜（後書き）

佐藤君1コマも出てきませんでしたエンドです（笑

アリスとこなたならありえたエンドかなーと。良い感じに人生を謳歌しているようです。

さあ、今回は本編に戻って人修羅とのラストバトルですよ。

2章も良い感じに節目になってきましたね。

よくもまあ続いているもんだと私自身驚いています。

明日も頑張りますよ〜

どうでもいいこと

生ハムの切り落としを獲得しました！

実は結構好きなんですよ〜。サラダに混ぜたり、おつまみしたり！

（でもお酒は一滴も飲めない

あっさりしたラックスハムの味わいが大好きです。

ちなみに生ハムメロンって食べた事無いですが、美味しいのかなー？

皆さんは生ハム好きですか！？ もしくは普通のハムは好きですか！

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue134 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化?〽 (前書き)

や、やっとかけたー…

いやあ、此処まで来ると何を書いていいか分からなくなって困りますね(笑)

という訳で、現在移動中〽のお話です。

短いですがどうぞっ！

『で、どういう分配にする予定なんだ？ 勿論俺はあの二人相手にやらせてもらうが』

「当初の予定だと、僕と高良さんがあの男を相手にして、こなたと仲魔、そして其処のガイア教の人に戦ってもらう予定だったよ」

「其処のガイア教の人って酷くないか？ もう少し優しさが欲しいぞ？」

「果てしなくどうでもいい。でも雪之丞が来てくれたからこなたの分の負担がかなり軽減されるはずだね。基本はそのまま、雪之丞が其処に混ざって欲しい」

『おう。それで良いぜ』

基地に向かう途中で雪之丞を踏まえた場合の戦闘隊形を再度詰めていく大樹達。

過剰とも言って良いほどの戦闘力を持つ彼が一時的にでも加わった事で、戦況は大きく傾いたと言ってもいいだろう。

人修羅もそうだが、彼の所持する仲魔もかなり凶悪な悪魔な為、こなたと仲魔達では不安があったのだ。

其処に雪之丞が加入した事で大幅にこなたの負担は減る事になる。

一人で戦っていた為、押されては居たが何とか同等に戦う事が出来た彼に片方だけでも任す事が出来れば勝率はかなり上昇するだろう。

その場合でも大樹と仲魔達、そしてみゆきが人修羅に立ち向わなければならぬのだが…

「相手を倒して余裕があれば僕達の方に手伝いに来て欲しい、多分あいつはあの二体より強い可能性があるからね」

『更に言えば、周りのマグネタイトをどんどん奪い取ってやがる、時間を掛けすぎるとまずいぞ?』

『うげっ、制限時間もあるのお? って、それは元々かあ…敵の本拠地に向かうって事は畏もありそうだし嫌だよね』

「あー、お約束だよ。でも宝箱は終ぞ見た事が無いよ」

「そもそも宝箱って言う代物が有る方がおかしいけど。何で無造作に宝箱が置かれてるのか不思議でならないよ」

「大樹君、それがお約束って奴だよ。うんうん」

色々なゲームにある宝箱の存在を改めて考え理不尽だと唸る大樹。

これから命を掛けた戦闘があるはずなのに、どこか緩い感じがする

のは、成長した証なのか単純に何も考えていないのか。

雪之丞さんには会えましたが、肝心の横島さんは何所に居るか分からないですよ。

『ま、あいつの事だし、生きてたとしても悪魔になつてたとしても飄々と生きてるだろうぜ』

「今は…それよりもこの異界を何とかしないとだね」

横島については触れられると面倒なので無理矢理話を戻す大樹。

何故彼が小竜姫達に自分の事を伝えたがらないのかはよく分からないが、今はそんな事を話している暇も、考えている暇も無く直ぐに思考は其方に誘導される。

「ガイア教を襲った奴がまた来るかな」とは考えてたけど流石にそれは無いから」

「個別で来てくれたら楽なんだけどね、流石に其処まで馬鹿じゃないか」

「やっている事は馬鹿みたいだがね。あんなのと知り合いとは君も不幸と言つかなんというか」

「言わないで欲しい、遣る瀬無くなるから」

軽い感じで会話する皆方、移動する前に感じた硬い表情は既に無く、いつもの彼になっていたが、それは怒りを思考力や戦術に回しているからである。

大樹と異界の主が知り合いと言う事に驚いてはいるが、それよりなにより自分の大切な部下を理不尽に殺された事に怒りを通り越して憎しみすら感じているのだから。

結界を破壊しようとしていたガイア教徒を殺す、それだけならば皆方も理解出来るが態々結界を消した後で皆殺しにするという子供の癡癡の様な行動に呆れ、怒りを感じる。

恐らく自分があの場合に向かっても、部下達の様にあっさり一捻りにされるのがオチだろうが、皆方には力は無くとも長年の経験とそれに伴う知識がある。

大樹達は強いといっても未だに素人が見せる隙などが見え隠れする。其処を上手く指導し作戦通りに導くのが彼の役目と言えるだろう。

彼等から聞いた情報を元にこれからの戦闘を想定して行く皆方。

（やれやれ…改造悪魔の性能を調べて、暇があれば聖母候補を探すと言うだけの取るに足らない任務だったんだがな…そんな任務の所為で若い命を無駄に散らせたなんざ馬鹿も良いとこだ。もし死んだとしても部下どもに馬鹿にされない程度には頑張らないといかな…って、流星にまだ死ねないがね。

漸く娘に会えたんだ、刷り込みでメシアに傾倒してて俺の事何ざ欠片も覚えてないどころか憎まれている可能性すらあるが、それでも

やり直せる可能性が出来たんだ、まだ死ぬ訳にはいかんさ。

その為には、どうやって此方に都合の良い展開に持っていかだか
…人を止めた悪魔人と上位の邪神が今回の敵だが、態々正面から乗
り込む必要も無いだろう。となりや…)

「と、悪いんだが俺を戦闘パーティから外してくれないか？ 少し
別行動を取りたくてな」

『は？ 何でまた？ まあ別に役に立たないし良いけど？ どうし
よっか大樹さん？』

「今更逃げる気なんて無いだろうし、何か思い付いたのかな？」

「そんな所だ、後悔はさせんし上手く行けば此方に大幅に有利にな
るがどうだい？」

「でも、一人では危険では有りませんか？」

「みゆきさんは優しいなあ…で？ どんな作戦？」

「なあに、人間の小賢しさが良く出た簡単な作戦だよ。丁度良い具
合に悪魔も出て来ない様だし、俺一人でも何とかなるさ」

ニヤリと笑う皆方。上手く嵌れば大樹達がかなり有利になるだろう
妙案を考えついたらしい。

万が一の為に機材は全部用意していたのがプラスに働いたとも言え
るだろう。

大樹は大樹で皆方の作戦が此方の有利に働く可能性を考慮し、考えていく。

皆方のレベルは20にも満たない普通の人間としての一流、二流程度ではない。今から戦う悪魔にしてみれば唯の的であり、大樹達にとっては肉の壁程度にしか使えない。

指揮などが得意だとしても、真つ先に狙われてしまえば所詮それで終わりだし、実を言うともあまり期待をしていなかったりする。

ならば此方で戦わせるより、こちらの有利になると言う作戦を実行して貰った方が良く考えた様だ。

「それじゃお願いするよ。出来るだけ急いで欲しい」

「任された。そつちもそつちで頑張ってくれよ？」

『つて、此処で離れるの？ 何する気？』

「言つても構わないんだが、何所で情報が漏れてるか分からんからな、俺程度など相手は何にも感じてないだろうが、もし作戦がばれて邪魔されたら敵わんし」

「確かにね…とりあえず通信機は持つて行くよ。何かあれば直ぐに連絡して欲しい」

「了解。んじゃ頼んだぜデビルサマナー？」

「そつちもねガイア教」

お互いに軽く笑い合つと、大樹達はそのまま基地を目指して行く。

一人残つた皆方は直ぐに行動を起こす事にした。

「さあて……ガイア教はガイア教なりに自由に混沌に動かさせてもらおうか。化け物、お前がただけ強かろうと、それを切り崩す方は幾らでもあると知っておくべきだつたな」

持っていた専用の通信機を使い、残っている部下に連絡を取る。

《聞こえるかお前達、『アレ』の準備を急げ。戦場に散つた仲間達に対する弔いの花を咲かせる事にしようか》

《はいっ！》

《いよっしゃああ！ やってやりますよ隊長！ 仲間達の仇は俺達がかかりますっ！》

《此方何時でも動けます！》

聞こえてくる部下達の声。その声は沈んでいるどころかこれから皆方がやるうとしている事に大いに盛り上がっていた。

仲間を殺されて怒っているのは何も皆方だけではないのだ。同志で

もあつた彼等にとつても、死んだ仲間達は大事な友人であり、戦友だつた。

それを無残に殺されて、彼等が何も思わない訳は無い。自分達に出来る事は作戦の命令を実行する事だけだつたとしても、それで敵を一泡吹かせる事が出来るならば、と彼等は意気込みを顯にする。

《悪いな、お前達にはいつも苦勞ばかり掛ける》

《何言つてるんですか隊長。老けました？》

《死亡フラグつスよ隊長。なあに、何時もの事ですつて》

部下達の軽口が皆方の心の奥に染み込んで行く。

大切な部下を失つたのは辛い、それでも自分を慕う部下達が生き残っているし、彼等もこの状況を打破したいと考えている。

部下達も皆方を慕い、共に行動を続けていたのだ。彼の為に死ぬ事は本望で、彼の為になるなら弾除けの盾にすらなってもいいと考えている者も居た。

《よし、それでは各員行動開始》

《つと、ちよつと待ってください隊長》

《ん？ どうした？》

《どうやらあっち側でトラブルです。保護対象の柵かがみと柵つかさが装甲車を飛び出し其方に向かっていている様です。如何しますか？》

《なんと言うお嬢さんだ…まあいい、彼女達がそれを望むなら望む様にさせてやろう。既にメシアの脅威は無いからな》

彼女達も弱くはない。この辺の悪魔クラスならばかがみ一人でどうとでもなるだろう。

どうやらそのまま二人だけで安全な場所に向かうのが嫌だったのだろうと考えるが、無茶な真似をしたものだとして少し呆れてしまう。

とは言え、部下は約束通りに安全な場所に連れて行くこととして、それを破ったのは他ならぬ彼女達ならば大樹達も文句は言えないだろうと、その話は切り上げる事にした。

《了解しました。あ、隊長、どうせなら良い感じに激励してくださいよ》

《お、そりゃいいっすね。これから戦地に行くんだし、良い感じだと思えますよ》

《ばーか、此処は既に戦場だつての》

《違いねえや！ あはははははっ》

《まったく……それじゃ、さっさと終わらせて行動するぞ？》

《ラジャー！！》

行き成り振られて溜息を吐きそうになるが、確かにこの状況で鼓舞するのは良いと笑みを浮かべる

そして…皆方は彼等の想いを高まらせようと慣れない鼓舞を開始する

《さて、これからお前達は死地に足を向ける事になる。どうだ、楽しいか？》

《《《Sir！ Yes、Sir！！》》》

《良い返事だ。こいつを使うとは俺自身思っても見なかったが、今の俺達なら命を顧みず行動する事も出来るだろう》

誰もが皆方の言葉を一言一句聞き逃さないように耳を傾ける。

少しずつ興が乗ってきた彼は、声のトーンを上げ、力強く全員を鼓舞していく。

《この作業中に悪魔に殺されるかもしれない、味方を殺した悪魔に遭遇するかもしれない。何か危険な目に合うかもしれない。だが…だがそれでもだ！ 俺達は生き残り、未だ動く手と足がある！ 知能が有る！ 経験がある！》

Continue 134 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化?〽 (後書き)

皆方さん達が盛大に死亡フラグを建てました(えー

皆さんが言う『アレ』とは何なのでしよう…後で考えます(マテ

次回は〽、基地潜入かなー…うーん、ネタが無いぞぞぞ…(ガクガク

どうでもいいこと

ホットミルクが美味しいです

疲れたときにお砂糖を入れたホットミルクは疲れも取れるしホッと

一息なのですよ〽。

ココアにしても良かったけど今日はミルクの気分でした!

皆さんはミルクはどういう風にして飲むのが好みですか?

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue135 恋愛と憎しみの狭間で踊る道化?? (前書き)

ふっかーっ!! は実はしてません(昨日は死にかけましたし、今日は頭痛が酷いの…)

でもでも約束は守るものですよ! という訳で再開なのですよ
)
ネタは相変わらず無いので、楽しんでもらえるか悩み所ですが(汗
ではではどうぞなのでですよ!

「んーまあ、日本だしこんなもんだよね。でっかい城とか全体の色が灰色とかの空間を認識してた私ワロス」

目の前にある小さめの工場を見て小さく溜め息を吐くこなた。

彼女の脳内予想ではホラー感バリバリの悪の居城を予想して居たらしいが、目の前にあるのは何の事は無い小さめの工場だった。

異界の中にあるので中身も同じとは言えないのだが、見た目は平凡な作りそのものである。

『いや、そんな怪しさバリバリの物作ってたら警察来るんじゃないの?』

「ですよねー」

目の前にある何所にでもありそうな工場 を模した核誘導基地 に到着した一行。

主にネジなどの小物を作る会社らしいがそれは表向きの事で、裏は

クズノ八達が手に入れてきた情報通り核ミサイルをここを基点に落とすと言つ誘導基地の一つである。

入り口を守るような悪魔も居らず、明らかに誘われている感じがあ
るものの、進まなければならぬと念入りに罠などを調べていく。

「とりあえず目に付く場所に罠とかは無いな、こなた、高良さんそ
うちはどう？」

「こつちはないよー」

「此方もありませんね、余程の自信があると言つ事なのでしょうが」

「やっぱりか…態々自分から結界を消してくるほどだからね…馬鹿
と言つか何と言つか」

馬鹿にしているのもあるだろうが、其処まで考え付かないという可
能性も考慮できる。

力ばかり強くなっている感じが強かったので、其方の方にまで気が
回らないのだろうと無理矢理納得する事にした。

大樹達にとっては無駄な消耗も無く、有利だったりするので寧ろ有
り難いと感じていたりするが。

『その分楽だからいいじゃねえか。んじゃ行くこうぜ』

ずんずんと罨があるかどうかも気にせず雪之丞が内部に侵入して
く。

その足取りに躊躇や警戒心など微塵も感じられない。彼にしてみれば罨は踏み崩すと言っ感じなのかもしれないが、他の仲間にとつては色々気が気ではない。

『ちよっ！？ 待ちなさいよもっ！ 大樹さんどうする？』

「まあ、行くしかないよね」

「では、参りましょうか」

「うえーい。ほんじゃさくさくつと終わらせようかっ！ いざラス
ダンに出撃っ！ でも見た目工場だけど」

その様子を呆れた表情で見つめながら大樹達も中に入っていった。

.....

.....

...

工場の中はTVなどで良く見る様な普通の工場だった。

中身が肉の塊などで出来ている、等と言う事は無い。そもそもここはメシア教と天使が作り上げたものなので寧ろ神聖な神殿になっているかもしれないとこなたは考えていたが。

「見た感じは何所にでもある工場だねえ。悪魔の気配も何も無いし」

『うー…馬鹿にしてえっ！ 後悔させてあげるんだからっ！』

「僕としては無駄な戦いが無い分凄く楽だけだね。それでなくてもさっきが激戦だったんだから」

『はっ、あの程度じゃ全然満足出来ねえよ。まだまだ暴れ足りねえぜっ！』

『オレも戦うのは嫌いじゃねえけど、こいつには負けそうだな…』

（寧ろ『コレ』と同レベルだと僕が困るけどね。さて…まさかこんな目に付く場所に用意する筈が無いし、あるとすれば隠し部屋か地下かな）

百太郎を頼りに悪魔が居る場所を探していく大樹。

ほぼ確実に目的の場所に人修羅が居ると睨んでいるので、他の雑魚悪魔が居ない以上大きな反応が2つ以上ある場所が目的地と睨んでいた。

と言うより、それはこの場に居る誰もが知っている為、こなたの方でもそれを主に探していたりする。

『ごとういう場合は大抵地下だろ？ そつちを探した方が良いんじゃないのか？』

『そつちは私達の仕事よ。言われなくても分かっているんだからっ！』

『微妙に棘棘しくねえかお前？』

『あんた…一度でも大樹さんを殺した相手ににこやかに話せるわけないでしょ…』』

『ははっ、そついやそうだったな』

あの時は盛大な自爆と言っても良かったのだが、確かに雪之丞の所為で一度大樹が死んだのは確かな為、アリスの雪之丞の対する感情は底辺に近い。

お互いに殺し合って居たので雪之丞が文句を言われる筋合いは全く無いのだが、そこが個人の感情の難しい所である。

それでも今は貴重な戦力なので、正面から文句を言ったりはしないがそれでも完全に気を許す事が出来ないのは仕方ないのかもしれない。

みゆきを含む仲魔達は拳って下に通じる階段や通路などを探す事にした。

「うーん、反応無いなあ。ジャミングとか掛かってたりとか…もしや異空間を作って！ はないよねえ」

「あまりに遠かったり、分厚い壁があったりすると認識できないし、もしかしてそれかもしれないけどね」

「此方にはそれらしい物は見付かりませんでした。一体何所にあるのでしょうか…？」

「メシア教の人間でも連れてくれば良かったかな…って、流石に幹部なら兎も角末端じゃ分からないか」

幹部であるシスター・アンナは既にガイア教に捕らえられているので情報を聞きだす事は出来るかもしれないが、時間が掛かりすぎる。今出来る事は全員で人修羅の居る場所に行く道を探す事だけだった。

強大な魔力なら普通見当が付き易いのですが…何か不思議な力で拡散されている様な気がします。

「何にせよ他に雑魚の悪魔は出てこないし確り探す事にしよう」

「あいさー！ さくつと見つけ出してあの変態をボコボコにしてやんよ」

シュツシュツとシャドーボクシングの真似をしつつ探索に戻るこ
た。

みゆきも小竜姫の剣を構え直して地下を探しに行った。

「……………さて、と」

これからの戦いが一番の戦いになる事は知っているが、大樹はその
後についても深く悩んでいた。

世界中に核が落ちる可能性、そしてそれによる人類の大幅な減少と
それによる死を望む声……そう、ニユクスの降臨について考えてい
た。

この異界を解除した後、制限時間はたったの一日しかない。

時を止める事など神ならぬ……いや神であっても不可能に近い状況で
文珠を使えばいくらかは可能だが持つても数秒程度である 何が
出来るかを思案する。

正直に言えば止める手立てなど何も考えついていない。この戦いで
すら負ける可能性があると言つのに、核の事まで気が回らないのは
仕方無いだろう。

唯一希望があるとすればレイ・レイホウがこの異界に居ないと言っ
事だ。

彼女ならばもしや世界中に降り注ぐ核を如何にか出来る手立てを見

つけたのかもしれないと思っている。

勿論彼女が最初に言った世界中の核誘導施設の破壊が上手く行けば人死にも少なくなる可能性はあると思っているが。

（時間が無い、と言うよりは初めから詰んでるよね。この異界の状況もベストとは言えないけど…もし世界が滅んだとしてもこの異界があれば僕達はニユクスの目を誤魔化せるのかな…）

存在自体が『死の概念』と言うニユクス。彼女自身に全てを滅ぼそうという気が無いとしても、彼女の降臨はあらゆる存在の死を意味している。

例えどんなに強かるうが、無敵を誇っていようが、よしんば死を超越しようとも『死』と言う存在の前には意味を成さない。

彼女の降臨＝全ての終わりなのだから。それを防ぐ為には人々がニユクスを…つまり絶望と死を望まなければいいのだ。

それを防ぐ単純な方法が、降り注ぐ核を如何にかする事…そしてそれを如何こうにするのはほぼ不可能な事だと言う事も分かっている。

（僕は如何すれば良いんだ？ 神じゃあるまいし僕に出来る事なんてたかが知れてる。ゲームで言えば残り時間10秒で残機1、ゴールまで先が長いと言う状況だよね。詰み過ぎてる…）

（あんまり悩みすぎるとも身体に毒ですよ私さん？）

(はいよるこんとん…?)

(汝ガ全テヲ抱エル必要八何所ニモナイダロウ…気休メニモナラン
カモシレンガナ)

(僕もね…何でこんなこと考えなくちゃいけないんだとつくづく思
うよ…)

(何とかしねえと全員死亡か、色々理不尽な目には合ってた来だが、
コレは極め付けだな。終いによ、相手が出てきたら終わりってのが
ふざけてるぜ)

ペルソナ達が悩みすぎている大樹のフォローに回る。

彼等も大樹の一部である以上、大樹の悩みも記憶も知っているのだ。
それ故に大樹の悩みがどうしようもない事も重々理解している。

(正直、僕はこの日本が…いや、僕達さえ平和ならそれで良いと思
ってた。勿論それは今でもそうだ。でも…)

(その考えは神として聊か同意は出来ぬが、一人の人間に全てを救
えという方が無茶であるな。汝の想い、痛いほど分かるぞ)

(世界を救わなくちゃ全員死亡。つまりは自動的に世界を救わない
と行けないって事だ…この世界は、どこまでふざけてるんだか…)

(我が現し身よ、少し良いか?)

(リュウキツコウシュ?)

(その割にはあまり焦っている様子が見られないのだが…? もしかして何か策でもあるのだろうか? 我々は貴方の一部だが、記憶を全て共有している訳ではない)

彼女の言葉に大樹が少しだけ思考を止める。

策…世界を救う策は今の所大樹には思いつかないが、最低でも…そう『最低でも』こなた達程度ならどうにか救えるかもしれないという策はある事はあった。

だが、それは所謂最終手段であり、コレをしてしまえばこなた達に恨まれてしまう可能性もあるので、出来るならば実行には移したく無かったのだが。

(一応ね…『僕達』だけならば普通に暮していける可能性はある。要はニユクスの降臨の時に僕達が其処にいなければ良いんだから…ね)

(!?!? な、成程。それならば確かに…半身は凄まじい手を考え付きますね)

(裏技と言つか何と言つか…でも、それは…確かに)

カンショウとバクヤが大樹の策を把握し、納得する。

そしてそれはクー・フリーン達も理解出来たようで、少しばかり表情を硬くした。

（まあ、確かに最終手段だわな…でも気に食わねえ…）

（僕も出来る事ならしたくは無いですよ。でも生き残る可能性はこれしかないからね。最悪の場合は迷わず使う）

（仕方がないですよねぇ）。私さんも悩んで悩んで出した答えなのですから私は賛同しますよ？ なんなら私の星に行きませんか？ 私さんならいつでもウエルカムですよ）

（絶対に断る。僕は精神が弱いんだから直ぐに発狂しそうだ）

（そう…か…何にせよ、我々は現し身の一部でしかない。そして貴方の為に力を振るおう…貴方の未来の為に…な）

（ま、そういう結論になるよな。まずは今の敵に視線を合わせるか。こいつを如何にかしなきゃ核云々って話じゃ無いしな）

（アア…汝ヨ。汝ノ想イノママニ我等ヲ呼ブガイイ。我等ハ汝ガペルソナ。必ズヤチカラニナロウゾ）

（有難う皆…）

『大樹さんっ！ 地下に通じる階段見つけたよっ！』

「おおっ！ アリスちゃんやるうっ！」

ペルソナ達との会話が終わると同時にアリスが地下に通じる階段を見つける事に成功した。

この階段を降りていけば人修羅の下まで直ぐ其処だろうと、全員気を引き締めていく。

そして…大樹も。

(今はあれこれ悩むより、あの馬鹿を如何にかする方が先…だね。この先どうなるか分からないけど…僕はやる事をやるだけ…だよね)

「行くうか…終わらせよう。これで全部」

「おおっ！…！」

(終わらせる…か、僕は何所までも嘘つきだな。まあ、今更だけだね)

終わらない負の連鎖を断ち切る為に、まずは『最後で最初』の難関を突破しなくてはならない。

大樹達は階段を降りていく……………

絶対なる正義が示した…何もかもが不確か故に、正しき答えを導かねばならぬ事を…

世界は何時だって理不尽なのです。

この街を異界から救っても、世界の終末を防ぐ時間はたったの1日。失敗すればニユクスさん降臨です。

でも、それを何とかできなくても自分達だけは逃げられるという手が…

はてさて、何なのでしょう！　察しの良い方はわかるかやー？

どうでもいいこと

カキ氷がキーンと…美味しいですが急いで食べるものではないですね！

さあ、お盆の時期がやってまいりました！

皆さんもお墓参りとかで忙しそうですね～。

皆さんはこの時期はどうやって過してらっしゃいますか？

私はやることやったらころころしてますよ！（えー

重要な選択肢ルート確定　【無心の心】現在進行中

みー… ゆっくりじっくりとお話が進んでますねえ。

今日は直前まで！ 見たいな感じですよ。ではでは短いですがどうぞ

感謝御礼

なんと… お気に入り登録が1,500件を突破しました。

こ、こんなお話に1,500人の方がお気に入りしてくださるとは… 感謝が絶えないですよ（感涙

PVも3,000,000、ユニークも370,000を突破して
ました…

おお… あり難い事です。

まだまだ至らない点ばかりですが、これからも頑張りますね！

核誘導基地・メインルーム

「来るか。ひひっ…なあ、長い様で短いよなあ俺達の関係もよお」

椅子に座りながら人修羅は一人呟く。

ほんの一月前まではこの様な裏も知らない唯の一般人だった彼。

大樹は彼にとって絶好のストレス解消の相手であり、それ以上でもそれ以下でも無かった。

自分より弱い相手を蹴り甚振る事で喜びを感じ、それを提供してくれる大樹には感謝してもしきれないほどだった。

そう…人修羅にとって、自分は絶対の存在であり、大樹はそれ以下の存在でしかなかったのだ。

人を殺したいという欲求は無かったものの、人を苛めてスッキリしたい、楽しみたいと言う暗い欲望が人より強かったのが特徴と言えるだろうか。

それ故に、自分より下の存在だと思っていた大樹に良い様にやられたのは許せる事ではなかった。

言うなれば飼犬に手を噛まれたと言った状況だろう。そしてその飼犬は猛獣だった、自分を軽く食い殺せてしまっほどの。

「てめえのお陰で俺はこんなに強くなれた、最高の気分だぜ？ だからよ、たつぷりと遊んでやる。泣いて殺してくださいと言っまでたつぷりとなあ！ いや、まてよ？ 目の前であの女共を寝取ってやるのも良いかも知れないなあ ひひっ！ あのチビは兎も角攫ってきた巨乳は、犯し甲斐があるってもんだ」

『いいねえ〜いいねえええ〜 その暗い感情、欲望、憎悪、どれもこれも素晴らしいいよおおおおお』

『享樂の宴を開こうよっ！ 開いて犯して犯して犯して犯して犯して犯して、壊そうかつ！ 壊して壊して壊して壊して………ぜえええええええええんぶっ！ 狂わせよううう！』

突如現れた二体の悪魔が人修羅の言葉に賛同する。

最早人修羅にとって彼等は唯の部下でしかなく、恐怖も畏怖も感じる事はない。自分の方が強く相手は自分に媚び諂っているのだから。

口調こそ変わり無い物の、人修羅に縋ろうとしている態度は彼自身笑えるほど気持ちの良いものだった。

いよおおお
』

『お任せ、任せて？ 任せて、任せて、任せてよ 楽しい楽しい
楽しいiiiiiiiiく、苛めてあげるよおおおお 』

「くくく…きひひひひひ…来いよ…来いよ来いよ来いよおおお
おおおおおおおっ！ 完膚なきまでに殺し、潰し、磨り潰し
てやらあー！」

人修羅の声が部屋を包み込んで行く……………

……………

……………

…

そうそう、そうそうそうそうそうそうそうそうそうそうそう
そうそうそうそうそう。憎んで恨んで、壊そうよ。

そのためのためめめの君、君なんだからららら。

壊そう、全部壊そう、世界も、人間、悪魔も…何もかも、そう、
何もかも全て。

君にはその力がある、上げた力がある、貸した力がある、捧げた
力がある。壊そう壊そう、全部を。

その為に…そう、その為に君を選んだのだから。

壊さないといけないんだから。

壊すべきなんだから。

そうしないと、そうしないとけないんだから。

だって……………それが必要なんだから。

流石に狭い空間を大人数で降りていくと言う愚行はする訳にはいかない。大樹、アリス、アメリカ、こなた、みゆき、雪之丞の6人で降りている。

呼び出し時にマグネタイトを結構消費するとは言え余裕はかなりある為、この様に大判振る舞いできる。

それぞれが武器を構えて降りていく中、雪之丞だけが先行して歩いていた。

「辺りに靈力や魔力は感じねえ、はっ、とことん虚仮にしてるってか」

「そういう性格っぽいしね。楽なら楽で良いけど……ん？ 雪之丞ストップしてくれないか？」

「ん？ どうしたんだよ」

「奥に微弱だけど悪魔の気配がある、数は二つだね」

「あ、本当だ。微弱過ぎて気が付かなかったよ。これって…隠密性が高い悪魔なのかな…？」

百太郎が近くに居た悪魔を発見した事に気付いた大樹が雪之丞を呼び止める。

二体という点に不審を感じ、もしかしたら人修羅配下のあの悪魔なのではないかと疑いを持った様だ。

最後の最後で強敵に不意打ちされる可能性もある為、一時も油断は出来ない。

『あん？ この先で待ち構えてるって事だろ？ なら好都合じゃねえか。俺があいつ等の相手をするからためえらは因縁の相手をぶっ飛ばせば良い』

「見事な脳筋発言。いつそ清々しいねえ…行くしかないんだけどさ」
雪之丞の言葉にはあっと溜め息を吐くこなた。

協調性が無い事は構わないのだが、もう少し自重して欲しいと思っている。

「何か嫌な予感がします…皆さん気をつけてくださいね」

みゆきさんの言う通りです。雪之丞さんも気をつけて下さいね？

『分かったよ。流石に俺も強襲されたらやばいかもしれんからな』

（やっぱり神族で知り合いの小竜姫の言葉ならある程度聞いてくれるみたいだね。ストッパーが居ない分彼の行動を止めるのは難しいか…）

もし、彼の親友である横島や、明らかに格上の存在である美神令子

ならば話を聞いてくれるのだろうか、大樹達ではそれも無理だ。

横島を召喚する事はレベル的に出来ないし、そもそもここで呼び出してしまえばややこしい事になるのは間違い無い為どうしようもない。

これが仲魔とそれ以外の存在なのかと、改めて雪之丞の操り難さに頭痛を感じてしまう。

とは言え、居ると居ないでは大幅に戦力に差がある為、付いて来てくれているだけで良しとしておく事にした大樹。

『んじゃ、行くか』

雪之丞を前衛のままに、階段を下りきる一行。

其処は全体がSFにあるような通路の様で、まるで未来に来たのではないかと錯覚してしまうほどだった。

これを天使とメシア教が共同で作っていたと考えると、信仰とは全く逆の方向なのではないかとみゆきは考えてしまう。

奥が暗く見えにくい為、持っていたライトを使い歩いていく。

「もう少し光源何とかして欲しいよねえ。って、流石に其処まで融通は利かないか。あ、アメリカちゃん其処危ないよ?」

「はにゅっ!?! おおお…転ぶ所だったのです。感謝なのですよ」

「よいよい」

『大樹さんも気をつけてね? この辺なんか足場悪いし』

「通路なんだからもう少し整地して欲しい所だね。さて…反応まで近づいてきてる。皆何時でも戦えるようにしておいて」

仲魔を召喚したいのだが、流石に狭すぎる為これ以上呼び出してしまえば逆に邪魔になりかねない。

ここに居るのが2体のあの悪魔ならばあなたと雪之丞に任せて、奥に進めば後は人修羅との戦いが待っている。

其方で仲魔を展開すれば良いと考えていると、声が奥から聞こえてきた。

……………あ

……………う

『んー? 何か魔力弱くない? あの邪神達が力を抑えてるって感じがないんだけど…?』

『つまり雑魚かよ? そんなのを門番にするほど手駒に困ってるって訳か?』

「どうだろうね…行けば分かるよ。他に通路は無いみたいだし…いつその事此処でスナイプしようかって、流石に暗すぎるか？」

「おお、大樹君パネエ…うーん、流石に見えないね、暗視スコープでもあればよかったなあ」

「んー。なら強化していくですよ！ ご主人様っ！」

「そうだね、頼むよアメリカ」

「あいつ！ お任せなのです！ ヒートライザ！」

進む前に基本的な強化を済ませておく事にする。

アメリカのヒートライザは一度で全てのステータスを最大限に上昇させる事が出来る為、時間をあまり取られる事が無いのが利点だ。

残念ながら単体にしかかけられない強化魔法だが カジャ系は一度で全員に掛けられる為、一長一短である。その能力は折り紙付である。

「よし…前衛は雪之丞と高良さんに任せるよ。僕達は後列からだね、行くっ」

「分かりました！」

『あいよ…へへっ、行くぜっ…！』

駆けて行く二人を追いかけるように4人が走る。

徐々にはつきりと聞こえてくる声、それは男性と女性の呻く様な声だった。

そして…その声を大樹はどこかで聞いた事がある様な気がしている。

(まさか…ね…)

「見えましたっ！ あそこに悪魔がつ！ ……………え…？」

「んな…嘘でしょ…？」

『あん？ 知ってるのか？ あのゾンビども？ ちっ、アイツラじやねえのか。それも雑魚だしよ』

「…………… やってくれるね、あの不良…と言っかこれは心理攻撃のつもりなんだろうか？」

『大樹…さん』

其処には全身が腐りかけているものの、マグネタイトによってその存在を維持しているゾンビが居た。

それは大樹が一番良く知っており、知らない筈が無い存在だった。

『ああああああ、だ、大樹いいいい』

『たす…け…助けてええええ…痛いのよおおおお』

「……………これがあいつの次の手って訳か…」

絶望の叫び声をあげる、大樹の両親が其処に居た

不良君がご両親をゾンビにして配置！ とうなる佐藤君！！

なーんとなく展開が読めるかもしれませんが、突っ込んではいけません（えー

そろそろ2章最終戦が近づいてきましたよう… ネタが無い、ネタが無いの…

誰か…私に元気を下さい！！

どうでもいいこと

今日はお休み、ゆっくりと休んでました？

最近はグリーの『戦国ポケッツ』に嵌っている白亜ですこんばんは（えー

強いカードが欲しいけど、人を招待しないともらえないなんて… 酷いのです。

ラブとバンフーが欲しいにやあ… しくしく。

ま、そんな訳で皆さんは欲しいものが手に届きそうじゃなかった事がありますか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

VS両親なのですよ！

難産…と言うか何を書けばいいかさっぱりなのですよ（汗

しかし…この辺が上手く書ける人が羨ましいのです……………

ここを上手く書けるようになれば、プロになれるのかなあとしみじみ感じてしまいます。

時間を掛ければもう少し上手く書けるのかなあ…でも無駄に時間を掛けても…なんですよねえ。

でもでも、頑張らなければっ！ ではどうぞなのですよ！

「あの…佐藤さん。あの方々は……」

「確か…私、前に…見た事ある。あれは、大樹君の両親じゃ…」

こなたは前に大樹を調べる時に家族構成などを調べていた事もあり、更にはもう何度も大樹の家に行っていた為、両親の顔は知っていた。

この中で唯一大樹の両親を知っているのは彼女だろう、勿論大樹の両親に対する感情も。

人修羅が何を考えてこの場にゾンビと化した彼等を配置したのか理解出来ないこなたと大樹。

「…悪魔になつても邪魔なんだね、あの二人」

「アリスさん…?」

「あああああ…助け…助けてええ…許してくれえええ…」

「大樹いいいいいい…」

「まあ、よく分からないイベントだけど、邪魔だから排除しよう」

「佐藤さんっ!？ 屍鬼になってしまったとは言えそれは流石に非情過ぎるのでは…」

『んーまあ、大樹さんの両親を知らなきゃ言える言葉だよ。言っちゃ何だけど、あんな奴等に掛ける情けなんて何一つ無いわよ』

蔑むような表情でゾンビを見ながら言うアリス。

流石に狭い通路で広範囲の魔法を唱える訳には行かないのでアギ・ダイスが収納されたマジックカードを取り出している。

そんな傍目から見れば非情とも言える行動を取る大樹とアリスを見たまゆきは止める事無く二人を見続けていた。

今までの彼女ならば確実に止めたかもしれない。如何に人間で無くなってしまったとは言え、元肉親をそんな無感情で排除しよう等と言う事は彼女には許せない事なのだから。

しかし、今の今まで大樹と共にあり、彼の人となりを知った今はその様な事を簡単に言う事など出来なかった。

確かに敵に対しては全くの容赦を持たない彼ではあるが、友人や仲間に対してはそっけないながらも優しさを見せている事を知っている。

その彼が悪魔になっていたとしても両親を何の憂いも無く『排除』と言う言葉を使ったのは

(佐藤さんの中であのお二人は、『家族』と認められていない…と
言う事なのでしょうね。泉さんは知っていらっしやるのでしょうか
…知らないのが悔やまれますね…)

あの時期は大樹を少し羨み、そして危険視していた。

こなたはその時から既に大樹を信頼し、友情を育んでいた。みゆき
が知らない情報をこなたが持っているのは仕方の無い事だろう。

男性として気になる存在になっている彼の事を自分より詳しく知っ
ているこなたが少し羨ましいと感じてしまった。

「あの…出来れば、浄化魔法で。周りに被害を与えてしまっては…
その、後が大変なので」

ここで下手に軋みを生んでしまうのは碌な事にはならないし、みゆ
きとしては大樹を嫌いたくは無い。

彼女が出来る事と言えば出来るだけ平和的に浄化を促す事だけだっ
た。

大樹としても此処で高威力の攻撃魔法を撃つのは無駄な事は分かっ
ているので、彼女の促しに頷く。

「そう言われればそうだね。じゃあマハンマオンで良いかな」

「ま……待つてくれえええ……頼む……死にたく……死にたくないんだああ
ああ……」

「いや……いや……嫌よおおお。息子……でしょおおおっ……助けてええ
えええ」

「……………助けて……ね」

目の前で腐っていく両親を見ても大樹は眉一つ動かさない。

憐憫の感情を向ける所か、見た目からして完全にゾンビな二人を見て
気持ち悪いとさえ思っている。長く戦ってきたとは言え怖いものは
今でも怖い程だ。

彼等がもし大樹に愛情を抱いていたならば、ほんの少しでも優しさを
かけていたならば彼は文珠を使ってでも何とかしたかもしれない。
だが、彼等は大樹を全く愛して居なかった。寧ろ邪魔者扱いし、父
親に至っては自分の欲望の為に利用しようとしたほどだ。

「……僕は貴方達に一度でも助けて貰った事はない。僕を義務とは言
え此処まで育ててくれた事は感謝しないでも無いよ。でも……」

「ご主人様……」

「……わ、悪かったああ……これから……は、これからはあああっああ」

『愛するからああ…だからああああ』

「……………最後までそれか。自分の為、自分の為、確かにそれは良く分かるよ。僕も似た様な物だ。その点では…間違い無く二人の子供なんだろうさ」

『……………あ……………』

大樹自身、他人よりは自分を最優先させる所があると思っている。

その所為か両親の血を確実に引いている事を否応無く感じてしまい、憂鬱を感じてしまうが、そんな陰鬱な感じに囚われている暇など無い。

直ぐに終わらせようとマジックカードを取り出すと小さな手が大樹の手を取った。

「スカアハ…？」

『ご主人様の手を煩わせる必要もありません、ここは私にお任せ下さい』

ふよふよと、小さな姿をしたスカアハが首をゆっくりと振った後大樹を見つめる。

確かに大樹には彼等を殺したとしても心傷つくと言う事は無いだろう、だがそれでもスカアハとしては彼に親殺しをさせたくは無かつ

た。

自分の背丈もあるマジックカードを両手にしっかりと抱え大樹に進言する。

『どうか私にお任せ下さい！』

「いや、良いけど…重く無いのかい？」

『じ、この程度、も、問題ありませんっ！！』

マジックカード自体そこまで重いものではないが、小さい彼女が持つには色々嵩張りすぎて居る為ふるふるしていたりする。

それでも健気にぱたぱたしている彼女を見て、両親と出会った所為で濁った感情がスッと消えていった。

(やれやれ、心理攻撃(笑)に違う意味でやられそうだったね。テーションががた落ちしそうになってたよ。ありがとうスカアハ。君のお陰で何時も通りの僕で居られそうだ)

「ふう…それじゃあ任せるよスカアハ」

『お任せをっ！ マハンマオンカード！』

両手でマジックカードを掲げながら満面の笑顔でカードを発動させ

カードロックが掛かっている未来にあるような扉の向こう。其処に人修羅とその仲魔、そして核を誘導する装置がある。

静かに深呼吸し振り向く大樹。

「さあ、行こうか。この奥にあいつらが居る」

『いよっし！ 頑張ろう大樹さんっ！』

「ハイなのですよご主人様っ！」

『そうですねっ！ 私もご主人様の銃として精一杯頑張りますっ！』

『終わったのか？ んじゃ行こうぜ。母親にも色々いやがるんだな、俺のママがあんなのじゃなくて良かったぜ』

後ろで見ていた雪之丞が扉の前に近づいていく。

アリス達も大樹の傍に駆け寄り、準備は完全に整ったと言えるだろう。

「そだね。これでこんなふざけた因縁を終わらせようよ大樹君っ！」

私も及ばずながら力を貸しましょう。みゆきさん、私を存分に振るって下さい。

「はいっ、お願いしますね小竜姫」

「それじゃ……召喚！」

「いえいっ！ 皆出ておいでっ！」

COMPから仲魔を呼び出していく。

流石に狭いとは言え、人修羅の前で仲魔を呼び出している暇は無い
と思い、全員を此処で呼び出していく。

コウモクテンがヴァルキリーが、マンティコアがキングフロストが、
全員がその場集った。

「これで終わり…とは言えないけど、この街を異界から救う最後の
戦いにしよう。この街には核は降らせない、異界にもさせない。そ
うだる皆？」

「おおっ！ 勿論だよっ！」

「はいっ！ これ以上悲しい連鎖は作ってはいけません！」

（さっきので士気が落ちたかもしれないとは思ったけど、大丈夫み
たいだね。これで終わりじゃないのはかなり精神的にクルけど、そ
れでも大きな悩みは一つ消える。か）

『んじゃ、行こうぜサマナー？ とつとつこの薄気味悪い所を出よ
うやっ。』

「そうだね…それじゃコウモクテン…頼むよ」

『あいよっ！ 忠義の一撃！！』

扉に全力の一撃を叩き込むコウモクテン。

凄まじい音を立てて扉が周りの壁ごと吹き飛んだ。そしてその先は薄暗いが様々な機械が見えている。

それと同時に凄まじい魔力が溢れている事も。

「うっわ。百太郎がすごいい反応してるよ。本命に到着、だね」

「相手も待ってる。それじゃ行こう」

部屋に入ると、直ぐ其処には椅子に座ってニヤニヤしている悪魔の姿をした男…人修羅と、その両隣におどけた様な表情で此方を見ている二体の悪魔が待ち構えていた。

人修羅は嬉しそうに笑いながら大樹に話しかけてくる。

「よお？ どうだった？ 俺様の最高のショーは？ 嬉しかっただろっ？ 両親と会えてよお」

「馬鹿か君は。はっきり言って何がしたいのかさっぱり理解に苦し

むよ。僕が両親と不仲なのを知らなかったのかな？」

「きひひひひっ！ お前が両親と仲が良からうが悪からうがどうだっつていいんだよ。お前に親殺しをさせたかった、それだけさあ！ 楽しかったか親を殺すのはよおっ」

『あ、ご愁傷様です。あの二人を葬ったのはこの私なので、貴方の目論見はあっさりと消えてなくなりました。ご愁傷様です』

「大事な事なので二回言いましたって、感じだね。ってかそれよりも更に重度の厨二を煩ってるみたいだね」

「うるせえよガキ。俺様は今こいつと話してるんだ、邪魔するなよ？ 殺すぞ？」

「だ、大樹君！ あいつからすぐ離れるんだ！ あいつは…あいつは…！ 男色家だああああああっ！」

「……………よし、僕の半径200光年は離れてくれないか？」

「……………き…きひひひひ。殺す、今殺す、直ぐ殺す、絶対殺す！ テメエら全員皆殺しだあああっ！！」

立ち上がって咆哮をあげる人修羅。

こなたのストレートな精神攻撃が見事に命中したようだ。

「こ、こんな開始で良いんでしょうか…」

先程のシリアスが消えましたね。まあ…相手が冷静に動くよりは
楽ですけどね。

『何でも良いぜ、待たせたなあ！ テメエらああああっ！！』

何故かグダグダなまま、人修羅達との最後の戦いが始まった。

あそこまで愛が無いのは珍しい…のかなあ？

書いてて両親に思ったのは、本気で何で産んだのさ？ と言う事でした。

そんな両親を倒したのは佐藤君ではスカアハでした！

ぶるぶると自分と殆ど同じおおきさのカードを持って戦う初めての戦闘でした！（えー

そして…メンタル実は（と言うかやっぱり）弱い人修羅あっさり切れました。

いやあ…駄目修羅だなあ（汗

次回から2章最終戦闘です、頑張らないと！

どうでもいいこと

しとしと雨でした、暑さも控えめでしたね。

雨は見るのは好きですよ。でも晴れも好きです！
丁度良い陽気にならないかなあ。

皆さんは雨の日と晴れの日どちらが好きですか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 138 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化？〽〽 (前書き)

ね…眠いじゃあ…

という訳で戦闘開始なのです、まずは〽お話をどうぞなのですよ！

色々忙しくて、感想返しが出来てませんがお待ち下さいなのです

よ(涙

「……き……きひひひひ。殺す、今殺す、直ぐ殺す、絶対殺す！ テ
メエら全員皆殺しだあああっ！！」

『殺そう！ 殺そう殺そう〜！ ひやははははははははははっ！
』

『きひひひひっ！ 遂に遂に遂に遂に遂にっ！ そう遂にっ！ こ
の時が来た、来た来た来た来た北北北キタわあああっ
』

椅子から立ち上がり魔力を立ち昇らせる人修羅。

おぞましい怨念の様な濃密な魔力が周囲に撒き散らされ、それだけ
で辺りがギシギシと歪んでいく。

荒れ狂う暴風と凄まじい重圧に雪之丞を除く全員が吹き飛ばされそ
うになるのを耐えながらも全員が武器を構えて立ち塞がる。

そんな大樹達の様子を傍で二体の悪魔がニヤニヤとした表情でその
様子を見ていた。

ゆっくりと溢れる魔力が徐々に収まり、首をぐるりと回し両手をを
肩の上まで上げながら大声で叫ぶ。

「それじゃあ…始めようか？ 佐藤おおおおおっ！！！」

「っ。魔力だけは凄まじいね、全員行くよっ！」

「分かりましたっ！ 泉さんは作戦通りに！」

「あいさー！ 行くよ皆っ！」

『おおっ！』

『一番槍は貰ったあああああっ！！』

その声と共に雪之丞が魔王達に向かって突撃していく。

一瞬にして魔装術を発動し全力を込めた蹴りを悪魔の一体、魔王ツイイミトルに仕掛けた。

だがしかし、ツイイミトルはそれを予見して居たかのようにと回避し、後方に跳躍する。

二人の距離は大体3メートルほど。この部屋は様々な精密機械を置いてある為、それなりに広く取ろうと思えば簡単に距離を取る事が出来る。

『きひひひひひっ 危ないねえええ？ あの時の復讐？ 復讐？

復讐復讐？ 怖いねえ、いやあ怖い怖い』

『復讐…？ ちげえよ。単純な話さ…』

構えを取り、マスク越しに雪之丞は笑う。

負けた事に対する 終始押され気味だったが負けた訳ではないが、彼としては負けと同じ 復讐などは考えても居ない。

単純にあの時の続きを…そう再戦を望んでいたのだ。

今度は勝つ為に。

『あのままやられっぱなしなのは俺の性分が許さねえ！ 唯それだけだっ！ うおおおおおおお、喰らえ連続霊波砲！』

『きひひひひっ！ メギドラ！ メギドラ！ メギドラ！』

襲い掛かってくる霊波砲の雨をメギドラで相殺していく。

威力的には全くの互角で、霊波砲とメギドラがぶつかり合う度に光を発している。

ちなみに逸れた霊波砲が壁や機材などに命中しているのだが、強力な結界か何かで守られているらしく傷一つ付かない。

尚も連続で霊波砲を打ち込みながら、雪之丞は次なる手を考えていた。

（ちっ、やはり互角か。打ち合いじゃ俺の方が分が悪いようだな…。
となれば接近戦だが…上手い具合に隙を探さねえと…）

得意とする霊波砲だが、雪之丞の真価はその魔装術の攻撃力と防御力を生かした接近戦にある。

前回の時は自分と同レベル以上の2体を相手にした為に懐に入る事が出来ず終始押されてしまっていたが、今はこなた達がもう一体を抑えている。

欲を言えばもう片方とも遣り合いたかったが、それが出来ない事は重々承知している為、目の前のこの悪魔に集中しなくてはならない。

（前戦った時もそうだったが、こいつは俺とは違う遠距離タイプ。火力が高いが動きは鈍い典型的な奴だった、となりゃあ懐に入り込めれば俺の有利なんだが…）

『ちいいっ！ なんつーコントロールだ。的確に俺の霊波砲を打ち返してやがる…はあああああっ！』

アリス達のメギドラオンと違い威力は控えめなもの、その精度は凄まじく確実に霊波砲に向かって魔法を唱えてくる。

その為、下手に動けば回避不能な攻撃を連続で叩き込まれてしまう可能性があった。

このメギドラ程度ならば数発喰らっても大した事は無いのだが、こ

れだけの魔王がメギドラ程度の魔法しか持って居ない訳が無いと睨んでいる。

動けなくなった所にメギドラオンを連続して喰らえば雪之丞とて耐え切れる物ではないのだ。

アナライズして貰えば一番早いのだが、それは雪之丞のプライドが許さない。自分だけが相手の弱点を知っていると言う自分だけ有利な状況は願い下げだった。

(今はまだ打ち合いで様子を見るしかねえな。相手は魔王、言動が狂っているとは言え自分と同等に戦っている奴がいれば本気を出してくるだろうしな)

『きひひひひひっ　ほらっ、ほらほらほらほらっ！　どうしたのかな？　どうしたの？　ねえねえ？　こっちに来ないのかい？　きひひひひっ！』

『うつせえよ…何を狙ってるかしらねえが、行き成りメインディッシュはつまらねえだろ？　もう少し楽しもうぜ、なあ！』

緩急をつけて靈波砲を放っていくが、そのどれもタイミングを合わせて相殺される。

それ所か、こちらの方が徐々にだが押されて来ている部分もあった。

(やはり打ち合いじゃあっちの方が上か。どうする？　このままじ

やジリ貧、相手もそれが分かっているから余裕かましてるんだろっが、
どうにか攻める手段を見つけないとな)

一瞬で距離を詰められれば良いのだが、流石にそんな都合の良い能力は持っていない。

これが横島辺りならば文珠などを使って容易く行動出来るのだろうが、正当派の能力しか 魔装術除く 持たない彼には無理と言える。

(相手はまだまだ余裕って所か、流石は魔王って奴なんだろうな)

『オラオラオラオラオラオラオラッ!!』

攻撃を続けながらも少しずつ距離を詰めていく雪之丞。

ツイツイミトルはそれに気付いているのか居ないのか、終始耳障りな笑い声を上げながら霊波砲を撃ち落していく。

『おおお〜〜 怖い怖い怖い怖い怖いねえ〜 当たると死ん

じゃう、死んじゃうよおお〜 きひひひひひっ!』

狂った様な笑顔を隠す事無く、疲れも全く見せずに雪之丞の攻撃を捌いていくツイツイミトルだが、彼女も 性別があるのならば女性型である 次の攻撃を予想していく。

魔王と言う種族上、基本的な能力はその辺の悪魔より数段高いのだが、それでも本領は遠距離攻撃にある。

それでも尚、雪之丞と互角の打ち合いをしているのは単純に遊んでいるからなのか、これで全力だからなのか、その笑い顔からは全く予想する事が出来ない。

『うおおおおおおっ！』

『きひひひひひっ！』

二人の戦いはまだ始まったばかりである。

「あつちはあつちで派手だねえ。んでもってこれはこれで嫌だ」

『あれ相手にタイムンとか…ホントに元人間なんかあれ…？俺自信無くしそつ』

『アレハ…気ニシタラ負けダ』

『はいはい、どうでも良い事はそれまでよつ、昨日戦ったあの天使の比じゃないんだから、あの悪魔もっ！』

ツイツイミトルは雪之丞が、人修羅は大樹とみゆき、そして大樹の仲魔達が相手をし、こなたと仲魔達はもう一人の悪魔、狂神テスカトリポカと相對している。

感じる重圧は前回戦ったヴィクター以上で、ケルベロスに迫る勢いがある。

それでも、ケルベロスと戦った彼女達にはまだ余裕で耐え切れるレベルだった。

『うひひひひひひ 私の相手は君達かあああああいい？ たのしたのしし、たの屍そつDAねええええ？』

「うっわ…マジレベルのキ ガイさんだぜこいつあ」

『怖いホ…こなたアレ怖いホ…』

「うんうん、それじゃ…とつとと叩き潰そつかつ！ 皆行くよつ！」

COMPと拳銃を構えるこなた、そして彼女を守るようにキングフロストとカイメイジユウが立ち塞がる。

相手が格上である以上、下手な攻撃は敗北に繋がってしまう為直ぐにアナライズを開始していく。

『いい！？ サマナーには近づけちゃだめよっ！ 全員牽制攻撃！』

『おおよ姐さんっ！』

『誰が姐さんだあああっ！』

ヴァルキリーとトナティウがテスカトリポカに剣を持って襲い掛かる。

勿論全力ではなく、相手の相性を調べる為の牽制攻撃なのだ。

『うひひひひひっ 虚空爪激』

『うぐっ！ やっぱっええっ！？』

『きゃあああっ！？』

二人の攻撃をあっさりと一蹴するテスカトリポカ。

吹き飛ばされはしなかったものの、先程の一撃で相手の力量をある程度だが理解出来た。

『トナティウ！ 近づき過ぎちゃ駄目よっ！ 一撃で落とされる可能性の方が高いわっ！』

『あいよっ！ んじゃこれだ！ マハ・タルンダ！』

『うひひひひ デク・ンダ』

『んなっ！？ ずりい！？』

攻撃力を下げようとマハ・タルンダを唱えたが、一瞬にして消去されてしまい逆に隙を晒してしまう。

其処にテスカトリポカの追撃が襲い掛かる！

『ちよ、ちよまっ！？ ヘルプッ？！ ヘルプー！！』

『伏せなさい！ 妖華烈風！！』

『どわわわわっ！？』

ハリティーの風魔法がテスカトリポカの攻撃をギリギリ逸らす事に成功した。

咄嗟に伏せたトナティウだったが、直ぐに体勢を立て直し武器を構える。

その時こなたの声が聞こえてきた。

「アナライズしゅーりょーっ！ 火電耐性 風呪無効で氷が弱点だよ！」

『…成程。火が効き難いって言っても、こっちには、ね！』

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！ 火炎ガードキル！』

『おほほほっ！？ こりゃあまーずいかなああ？ うひひひっ』

カイメイジュウの火炎ガードキルがテスカトリポカの火炎耐性を一時的に取り払う。

すかさずこなたが全員に指令を出した。

「いよっしゃ！ 全員全力攻撃っ！！」

一瞬で四方八方を囲み、全員で持ちこたえる最強の魔法を唱えていく！

『OK！ 行くわよっ！ トリスアギオン！』

『んじゃまあ、行きますかつ！　　メルトダウン！』

ヴァルキリーとトナティウが全力で火炎魔法を放ち

『繋ぎます！　　絶対零度！』

『同じく！　　コキュートスペイン！』

『いくホ〜　　コキュートスペイン！』

ラケシス、ハリティー、キングフロストが氷結魔法を叩き込む。

その全てが火炎ガードキルを受けて体勢を崩した所に命中した　　！

「初手は成功。これじゃ終わらないでしょ？　皆一瞬も気を緩めちゃだめだよっ！」

『分かってるわよっ！　普通これだけ受けたら即死しそうなもんだけど』

『フラグだろ姐さん。ケルベロスの時の二の舞は嫌だぜ俺』

『だから姐さん言つな！！』

軽口を叩き合っているように見えるが、その瞳は一瞬たりともテストカトリポカが居た場所から離していない。

その間も火炎と氷結によって発生した水蒸気がもつもと立ち込めていたが、それも徐々に収まっていく。

うひ… うひひひひひひ

『うあー… やっぱりかよ』

『マア、ソナ簡単ニハイカヌダロウヨ。気ヲ引キ締めヨ』

其処にはある程度のダメージを受けているものの、殆ど無傷に近いテストカトリポカが居た。

ゆらゆらと動くその姿は疲労している様子さえ見せていない。

『ちよこ〜〜と、痛かったよおお？ うひひっ、うひひひひひ
』

「ま、予想済みだよ！ ダメージは通る！ なら…倒れるまで打ち込むだけさっ！！」

こなた達の追撃が始まる！

対等に戦うゆっきーと、合体しても頑張っても火力が足りない仲魔達。

此処からどう巻き返すかですね！

ぼけぼけしてるので何を書いているか〜と悩みまくりなのです。

次回も頑張らないとですねえ〜。

どうでもいいこと

むー…だるいのです、だるいのです。

夏ばてなのかなあ？ 皆さんも暑さにやられないように気をつけて

くださいね！

という訳で皆さんもスタミナの付く美味しい料理を食べましょう。

皆さんはこの時期どんなスタミナ料理を良く食べますか！？

戦闘その2なのですよ！

今日はちよこつとだけスムーズにかけたかも？

このペースで書けたらいいのになあ。

ではどうぞなのです！

私はこれからお風呂にく…覗いちゃだめだよ（んな奴いねえ

感想返し終了です！　お待たせして申し訳無いのですよ！

「随分あっさりとは分断を許したね、僕達としては願ったり叶ったりだけど」

「きひひひ。お前を殺すのを邪魔されちゃ適わねえからなあ。其処の女は良い女だし、お前をボコった後に狂うまで犯してやるよお」

「っ！」

人修羅としては全員相手にしても構わないのだが、それでも甚振るには数が多くて面倒である。

そういう点では、この別れ方は彼も望む配置になっていた。

唯殺すのは彼にとって許せるものではない。死ぬ直前まで痛めつけ、大樹の仲魔を全員殺し、その後でこなた達を寝取り絶望を味わわせてからゾンビに変えて永遠に甚振る。

その為にはまず大樹を自分だけで甚振らなくてはならない。

おぞましい…貴方は本当に人間だったのですかっ！

「ああん？ 人間だよ。俺は人を超えても人間さあ！ 人間だからこそここまで欲深いのさあああ！」

「人間か、まあ悪魔より罪深い事は確かだろうさ、君の場合は違う方向に欲深いけど」

『同意〜。人じゃなくなってるのに性欲だけ人一倍とありえないよなっ』

『あらあ？ 性欲は悪魔でも男女性別問わず大好きなものですわあ』

『揚げ足取るなっ！』

強敵相手に萎縮するどころか今までの様に会話するアリス達。

例え人修羅が自分達の数段上に存在する相手だとしても、今更それで脅える訳が無い。

彼女達も…そう大樹達は今の今まで殺し殺されの世界を生き抜いて来たのだから。

この戦いに勝てば下らない異界を滅ぼす事が出来る。平穩へと続く明日を手に入れる事が出来る。

『何にせよ…オレ達を舐めるなよっ！ 化け物がっ！』

「きひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ 悪魔が俺様を化け物だと？ おかしい、おかし過ぎるぜ！ 化け物がっ！ それじゃあ始めるかあ

ああ！ 受ける！ 地母の晩餐！…」

「!? はいよるこんとんっ！ 来い！」

人修羅が腕を前で交差する瞬間に凄まじい寒気を感じはいよるこんとんを呼び出す。

腕を広げ終わるのははいよるこんとんが現れたタイミングはほぼ同時だった。

大樹達の足元が崩れ、凄まじい閃光が飲み込もうとするが

『はーはははははは！ 無駄無駄無駄無駄ですよ！ 宇宙CCCハイパー奥義！ インフィニティ！』

いくつもの閃光が槍となって大樹達に襲い掛かるも、全員を囲う様に張り巡らされた金色の空間がその全てを跳ね除けていく。

あらゆる攻撃を無効化する最強の術『インフィニティ』が一瞬早く展開されて居た。

その光景に目を丸くする人修羅。自分の力に自信を持つ彼にしてみれば信じられない光景だった。

全ての閃光が光の壁に防がれた後、金色の結界は役目を果たしたかの様に消えていく。

『まだまだまだあつ！ 私のバトルフェイズはまだ終了してませんよ！ ドローモンスターカード！ じゃなくて、原初の暗黒！』

彼女の持つスキル『宇宙CCC』により本体を無視して連続で攻撃をしかけるはいよるこんとん。

全てを吸い込む様な漆黒の闇を全身から溢れさせてスプリンターの如く人修羅に向かって走っていく。

その余りのふざけた光景に思考停止に陥った人修羅は、彼女の突撃をもろに受けてしまった。

「うはっ！？ て、てめえ！！」

『おおっと、大したダメージにはなりませんでしたが。しかししかし、私のスーパーウルトラハイブリットエレガントブリリアントスペシャルアタックは喰らえば喰らうほど威力を増す技！ 何処かの聖闘士の様と同じ技は二度は効かない！ を悉く無視するのです！ アイムオーケイ？』

「やかましいっ！ ごはあああああっ！！」

ドヤ顔でちゅちゅちゅと口で言いながら人差し指を振るはいよるこんとん向かってファイアブレスを吐く人修羅。

だがそれよりも早く彼女は大樹の中に消えていく。

火炎はそのまま彼女がいた場所をすり抜けて機材などに命中するが、結界の所為か何所も壊れていない。

「全てにおいて半減耐性。弱点は無いけど、吸収も反射も無いか。まあ問題無いね」

「んなあつ!? てめえ何時の間に!」

「何時の間にも何も、先程の攻撃の時だけだね。アレだけの時間があつて君が動かなければ容易く調べられるよ」

あの一瞬の攻防の間にも大樹は冷静に人修羅をアナライズしていたのだ。

調べられない可能性も考慮していたが、それは杞憂だったようでホっとしている。

寧ろ初めに会った時に言っていた『人修羅』と言う言葉と、今の地母の晚餐を使つて来た時点で彼が女神転生?に出てきた人修羅の同種だとは予測していたのである程度弱点などは分かつて居ただが。

(とりあえず『マサカドウス』 万能系以外を無効化する装備アイテムの様なものが無いだけマシか…それでも凄まじいねこれは…どうやって切り崩したら良いものか)

力量的に完全にケルベロスすら圧倒している人修羅。

それでもここまで普通に戦えているのは相手が元人間だからなのか、それとも相手が余裕を見せているからなのかは分からない。

（お前が何を考えてるか分からないけど、絶対に負けられないんだよ、今回ばかりはね）

大樹にとっても彼との戦いは過去との決別を意味していると言ってもいいだろう。

苛められっ子だった大樹が今も尚強く残している恐怖と言う感情や溜まった鬱憤。それを晴らす絶好のチャンスでもある。

彼に勝てばその暗い過去を切り捨てられるのだ。勿論それは大樹にとつて本題で無いのだが

「ふざ…ふざけ…ふざけるなああああつ！ てめえは黙って鬨られてりゃ良いんだよ！ 何様だてめえつ！…！」

「人間だよ。君の言う欲深い人間さ。だからこそ目的の為にはどんな事でもする」

「佐藤おおおおおつ！ がっ！？」

『余所見してんじゃねえぞっ！ おらあつ！…！』

『我の力特と見よ！ ダークマター！…！』

「ならばこれです！　ランダマイザ！」

「ぐっ！？　きひゃひゃひゃひゃ。低下魔法かよ、この位なら丁度良いハンデだぜっ！　ふんっ！！！」

ランダマイザを掛けられて尚、余裕の表情の人修羅。気合を込めると同時にダークマターが破られてしまう。

『甚大級』の威力を持つダークマターを受けてもダメージは軽微でしかなく、よくよく見ればダメージが回復しているほどだ。

『絶大級』の魔法を受けても尚、全くダメージが見られない人修羅を見ても尚大樹は次なる手を思考していた。

（これが通用しないのは分かりきってたけど、まさかメギドラオンまでがノーダメージとはね。腐っても人修羅って所か。となれば後は甚大級と死亡級だけ…）

この時点で基本的に仲魔達でダメージを与えられる可能性があるのは忠義の一撃を持つコウモクテンと至高の魔弾が使える大樹のみとなる。

防御力が下がっている為、『絶大級』の魔法を当て続ければダメージになるかもしれないが、無駄にMPを消費するのは悪手に近い為、この考えは切り捨てる。

（アリスとサキュバスは回復に回ってもらえないか。マンティコアとパチャカマクで相手の牽制。アメリカは死亡した仲魔の蘇生と強化。高良さんと僕とコウモクテンがメインになる…か）

「皆パターンDで行動開始！」

『あうう、戦力外かあ。でも回復は任せて大樹さんっ！』

「ラジャーなのですよっ！」

大樹の指令通りにアリス達が後方に下がり、コウモクテン達が前に出る。

パターンDは所謂、長時間戦闘に重きを置いた戦い方になる。

相手の方がレベルが高く、満身に攻撃が通用しない場合や、相手の攻撃が尋常ではない場合に回復と支援をメインとして動くパターンだ。

この時の火力は完全戦闘系のコウモクテンと、ペルソナや色々な手札を持つ大樹が担っている。

「高良さんとコウモクテンが鍵になる。行くよ皆っ！」

「はいっ！」

みゆきの攻撃力は低い方だが、それでも小竜姫の剣によってそれを

十分カバー出来ている。

逆にコウモクテンは威力の低さをスキルでカバーしており、防御を下げられている人修羅ならば十分にダメージが通ると睨んでいる。

アナライズをした結果、彼はデク・ンダや低下解除の魔法を持っておらず、完全な攻撃特化タイプなため、低下魔法は十二分に効果があるのだ。

しかし万能に見えるランダマイザだが、相手の魔法防御力までは削る事は出来ない為、必然的に物理主体になる。

（ と思ってるんだろうなあ。佐藤の奴はよお。きひひひひひつ！俺が黙って全部調べさせる訳ねえだろうが。も・ち・ろ・ん色々隠し玉があるんだぜえ？今は花を持たせてやるよお。希望を持って俺を攻撃しろよ。そしてその希望を全力でぶっ壊すのが…快感なんだからよお！）

『ボケっとしてんじゃねえっ！ 忠義の一撃！！』

「はっ！ その程度効くかよっ！ きひゃひゃひゃひゃ！ ゼロスビート！！」

忠義の一撃を容易く避けると同時に回し蹴りの体勢を取り、全体に麻痺効果のあるゼロスビートを発動させる。

幾つもの光り輝くレーザーの様な物が前衛に居るコウモクテン達を傷付けていくが、この程度のダメージでは倒れる事は無い。

何とか耐え切った所にアリスとサキュバスのメディアラハンが飛んでくる。

「助かりましたっ！ お返しです。 奥義一閃！」

汝が欲望断ち切らん！

「ひやはははっ！ いらねえよっ！ そのでけえ胸なら大歓迎だけどなっ！ 死亡遊戯！」

全力で小竜姫を振り切るみゆきに合わせるように光り輝く魔力の剣を叩きつける。

威力はランダマイザで攻撃力を下げられていても人修羅の方が上手で、みゆきは衝撃によって吹き飛ばされていく。

「きゃあああっ！？」

『ヒョーヒョーヒョー。相手の方が一枚上手じゃのう』

「た、助かりましたマンティコアさん」

『なあに、ワシ等の攻撃力では意味が無いし、お嬢ちゃんに任せられないからこの程度のフォローは当然じゃよ』

吹き飛んだみゆきをマンティコアが助け直ぐに地上に降ろす。

軽く礼を言い、前線に戻るみゆきを見ながらマンティコアはぼつりと呟いた。

『遊ばれて居るのう…これは流石にまずいかもしれん…』

その呟きは誰にも届く事は無く、今尚激しい戦いが続いていた。

現在累積ダメージ：325

現在消費MP：68

「名前」：井上裕也 「種族」：人修羅

「現在LV」：99 「属性」：D-C

「ステータス」

HP：18000 MP：18000

力：86 知：65 魔：84 体：75 速：91 運：78

「相性」

剣： 物： 技： 火： 氷： 電： 風：

魔： 心： 禁： 聖： 呪： 状： 万：

「所持スキル」

・リジユネレーション？ ・ムド防御 ・破魔防御

「スキル」

・造魔焼却 造魔一体を自動的に消滅させる。クリティ

カルするとドリーカドモンに戻る

・原色の舞踏 敵全体を超高確率で混乱

・破邪の光弾 敵単体に聖属性極大ダメージ

・ゼロス・ビート 敵全体に魔属性特大ダメージ。高確率で金

縛り

・鬼神楽 敵全体に剣属性極大ダメージ

・死亡遊戯 敵全体に剣属性甚大ダメージ

・マグマ・アクシス 敵単体に火属性甚大ダメージ

・ジャベリンレイン 敵全体に魔属性特大ダメージ。必中 中確

率で封魔

・螺旋の蛇 敵単体に万能属性甚大ダメージ

・地母の晚餐 敵全体に万能属性超絶ダメージ

・至高の魔弾 敵単体に万能属性死亡級ダメージ

・ ??? ? ? ?

・ ??? ? ? ?

リジユネレーション？：一定時間毎にHPとMPが回復する。

ムド防御：ムド系瀕死・即死魔法にかからなくなる
破魔防御：破魔系瀕死・即死魔法にかからなくなる

レベル99とかチートですよね？ 貴方？ レベルの人修羅さんです。

でも知力このステの中で低いのはご愛嬌ですよ。

さて、これはハッキリ言って詰みですが、ここからどう巻き返すのでしょうか。

でもここまで強くないと増長しませんし、こんなものかなー。

コレを切り崩す鍵は隊長とかがみんとつかさが握ってます。

今回は何所から書こうかなあ。

どうでもいいこと

お風呂～お風呂～、お風呂は心と体の洗濯なのですよ！

気持ちいいですよねえ。

私は大体2時間近くのおんびりしますが、皆さん遅いって言うですよ

（汗

普通だと思っただけだなあ…？

後時々寝ちやいそうになります、アレは寝てるんじゃないって気絶してるんだそうです。

皆さんも気をつけてくださいねっ！

所で皆さんは熱いお風呂と温めのお風呂、どちらが好きですか？
私は熱すぎるのは苦手です。

Continue 140 ～愛情と憎しみの狭間で踊る道化？～（前書き）

戦闘開始その3～。

でも場面変換です、次は何所に場面変換するかなあ。

戦闘：何話で終わるか分からなくなってきたう。

が、頑張らないと！

基地周辺

ダビデの星について考えてみよう。

ダビデの星とは所謂『六芒星』^{ヘキサグラム}の事を現している。

正三角形と逆三角形を組み合わせた図形で、上向きの三角形は『能動的原理』を表し、下向きの三角形は『受動的原理』を表わしているとされる。

そしてこれらは陰と陽、光と闇、プラスとマイナス、上昇と下降、柔と剛、火と水、創造と破壊、拡張と収縮、右回転と左回転。

顕在意識と潜在意識、男性性と女性性：と言った相対するエネルギーの象徴である。

言わば道教の大極と似ている…いやそのものと言っても過言ではないだろう。

これら2つの三角形『と』が合体した『六芒星』は、『相対するエネルギーの調和』という意味合いを明確に表現していると言わ

れている。

日本では箆目かこめとも呼ばれ、魔除けに使われたり様々な術に使われたりとメジャーな存在であると言えよう。

言わばダビデの星は究極の魔術材料と言っても良いだろう。

古くは悪魔召喚の召喚陣に使われ、魔法を唱える時にも六芒星を印に組み込み威力などを高めていたとされる。

反対に魔除けとしての能力も高く、召喚陣に使われたのはこの能力を使い悪魔の能力を弱める事でスムーズに交渉する為に使われたと言う。

使い方によっては魔の力を強化したり、逆に弱めたりと、汎用的な魔術図式と言える。

ならば、それを大々的に使ったとなれば、それはどれだけの力を持つのだらうか？

……

……

……

皆方の目の前には数人のガイア教徒達が拳つて地面に特殊な機材を使つて何かを引いたり書いたりしていた。

あれから直ぐに残っている部下を最低限だけ残し総動員させていた。改造悪魔を使える分だけ配備し警備を任せ彼等は皆方の指示通りに核誘導基地が中心になるように六芒星をモチーフとした特殊な魔法陣を作り上げていた。

この魔法陣はガイア教が得意とする、この魔法陣内の悪魔の生体マグネタイトを歪め、無理矢理放出させる効果を持つ特殊な結界陣である。

この中に存在する望んだ悪魔の存在する為に必要な生体マグネタイトを急激に放出させ、その能力を極限にまで弱める事が出来る効果があつた。

前に改造悪魔として捕まえる事が出来た狂神オグンも、この結界陣を用いて弱めた後に捕獲していたのだ。その効果は折り紙付きだ。

この魔法陣には特殊な水銀やケーブルなども使われており、現代の科学も総動員し魔法と合成することで、対象をパソコンなどで指定する事を可能にしていた。

とは言え発動すれば無敵という訳ではなく、あまりにも強い悪魔に対してはその能力の10〜30%でも削る事が出来れば御の字なの

だが。

皆方が大樹達と共に戦いに参加した所で邪魔になる事は目に見えて
いる、ならば効果をあまり期待できなくても、少なからず敵を弱め
る事を考えたのだ。

「ふう、術式は8割方完成って所か。時間的に余裕は無いな」

「隊長。C班とD班は完成した模様です。現在は改造悪魔を使って
魔法陣に近づいて来ている悪魔を掃討している様です」

「そうか…最早改造悪魔も残り数体。やれやれジリ貧だな」

「改造悪魔がダメになっても俺達が戦いますよ。居ないよりはマシ
でしょうし」

「すまん。俺はお前等に『死ぬ』と命令する事しか出来ない」

ガイア教徒達は2〜3人でチームを組み6班で魔法陣の作成作業を
している。

動員出来る限界の人数がこれしか居なかったのだ。更に言えば改造
悪魔は低レベルの物が5体程度しか用意できず皆方のチーム以外に
1体ずつしか配備出来ていない。

その改造悪魔が殺されてしまえば後は自分達が戦うしかないのだ。

それなりの訓練を受けて居るとはいえ、彼等は特出した能力を持つ

ていない。1〜3体なら倒す事が出来てもそれ以上は耐える事は不可能だろう。

最悪の場合を考え各班に特殊装甲車をつけているが、それでも何所まで立ち回れるか疑問だった。

しかし、現状現れる悪魔は何故か大幅に弱体化しており、其処まで苦戦する事無く殲滅出来ているのが幸いと言えよう。

これは人修羅が無理矢理この異界中のマグネタイトを集めている所為なのだが、それが彼等の追い風になっているとは誰も分からなかった。

「いつもの事ですよ隊長。それに俺達の班が一番楽じゃないっすか。なんせ隊長が居るし」

「そうそう。最悪悪魔が来たら隊長盾にしますから」

「よし、良く言った。お前を真つ先に盾にしてやる」

「ひいっ！……………はは、まあこんな因果な商売してるんですし、覚悟してますって。それに仲間の仇も討ちたいですしね」

「やれやれ、本当に俺の部下は人情にばかり溢れやがって、俺達がガイア教って事忘れてないか？」

「それは隊長にこそ言いたいですよ。なあ？」

「だな、あはははははっ！」

「ったく。上司を弄って何が楽しいんだか……後は技術部の仕事を待つのみか」

必要な機材は全てセットし、魔法陣も粗方完成した。

残りの班も9割方完成しているとの連絡を受けているので、後は対象を指定する為のプログラムを完成させるのみである。

これが上手く行かなければ、下手すると人修羅では無く味方の悪魔達を指定してしまう可能性があるのです、一つのミスも許されない。

「ん…俺だ。そうか…なら引き続き警備に当たってくれ……………」
… E班も作業終了か、急いでやらんとな」

「隊長。柊姉妹を逃したメンバーがこっちにヘルプに回りたと言ってますが、どうしましょうか？」

「数は多い方が良い、直ぐに回してくれ」

かがみ達を逃がしてしまった装甲車を運転するメンバーが此方に来ればそれなりの戦力になる。

現状の人数の頼りなさを思えば十分な援軍と言えるだろう。

だが…それよりも先に皆方達に嬉しくない先客がやって来た。

「全員！ 発砲！ 撃ち尽くせ！！」

「ラジャーッ！！」

最早声にすらならない天使だったものの絶叫が響き渡る。

皆方達は一瞬で戦闘態勢を整え持っている銃を乱射した。

避けるという考えも消えてしまったのか、全部の弾丸をまともに喰らってしまう天使だったもの。

肉が削げ、ゲル状の体が吹き飛びその場に倒れ込む。しかしそれでも呻きながら此方に襲い掛かろうとする悪魔だが、情け容赦無く銃弾は倒れている悪魔に襲い掛かる。

『ぎゃあああああああああああああつ！！ あぎゃあああああああぎゃぎゃぎゃぎゃつ！ ぎゅええええつ！！』

「よしっ！ 奴等を一步たりとも近づけるな！ これでも喰らうとけっ！ 化け物っ！」

懐から魔法石を取り出して投げつける皆方。

光を放ち、その数瞬後業火を撒き散らし悪魔達を焼いていく。投げつけたのは『マハ・ラギオンストーン』である。

皆方の魔力は殆ど無いに等しいが、それでもこれだけの熱量と相手の弱体化も上手く合わさりかなりの大ダメージを与えられている。

更には火炎が炎の壁となり、悪魔達が此方に向かうのを阻止していた。

その間にも、休む間も無く撃ち続けられる銃弾の雨。

人間ならばとつくに蜂の巣…いやミンチになっていてもおかしく無いほどだろう。

しかし天使は弱点も相まってダメージを与えているものの、完全にスライムと化している悪魔には大してダメージを与える事が出来ない。

その分炎で焼いて居る為、今の所は侵入を許しては居ないが、これ以上悪魔が増えてしまえばこの3人では抑えきるのは難しいだろう。

「くそっ！ 焼夷弾持つてくりや良かったっ！ そっちはどうよっ！？」

「天使型はそろそろ落とせそうだが、スライムがヤバイっ！ 隊長なんかありませんかっ！？」

「そのまま左右に分かれつつ射撃を続ける！ 銃弾が効き難くても通るならあれを使うだけさ」

「ヒューー！ 任せましたぜ隊長！」

「はいよっ!」

直ぐに近くに止めてある装甲車に飛び乗る皆方。

主装備として備え付けてある12・7mm重機関銃M2を悪魔に向ける。

部下達はサブ・マシンガンを連射しながらも素早く射線から逸れていく。

「それじゃ…行ってみようかっ!」

通常の機関銃の数倍以上の威力を持つ、死の雨が降り注ぐ。

この機関銃に装填している弾丸は通常の弾丸ではなく、対悪魔専用
に作られた銀の弾丸を使用している為、スライムと言えど耐え切れ
るものではない。

10数秒耳障りな音が響く……

「ふう…他には…居ないな」

「此方クリア!」

「此方も同じく! 四方に悪魔の気配はありま………隊長っ!」

「…他の場所でも似た様になってやがるか…こいつはまずいな…」

インカムを通じて部下達の声が響いてくる。

そのどれも、スライムになりかけの悪魔やスライム達が襲いかかって来ていると言う連絡だった。

そして皆方達の目の前にも、10を超えるスライム達が不気味な唸り声を上げながら迫ってきている。

「あ…多分、あの基地で何かあったんだろうな、引き寄せられたんだかなんとか知らんが…面倒なことばかりしてくれる」

「ははっ、こいつぁ遣り甲斐があるってもんですよ。銃弾はまだまだあります、応援が来るまで持ち堪える位はいけますよ」

「うっわ、グロ。こうなっちまうと悪魔つても唯の化け物だな、SFホラー思い出すぜ」

「うちの部下はホンキで頼りになるね…今技術班より連絡があった、後数分でプログラムは完成、それと同時に魔法陣を起動させる。俺達の役目は魔法陣を守り抜く事だ！ 全員、呐喊！」

「ラジャー！！」

彼等にとって絶望的な時間稼ぎが始まった

数は戦力、でも数が無ければきつい、と言う感じのお話でした。

周囲のマグネタイトを何故か奪ってる人修羅君。何か意味があるんでしょうか。

その所為でゾンビ化した悪魔やスライムになっちゃった悪魔がマグネタイト求めて

基地に向かってます、放置しておくとも魔法陣壊されちゃうので死んでも死守なのですよ。

でも改造悪魔も少ないし、人数も少ない。そんな絶望的な中で希望はあるのかな…

頑張れ隊長！

どうでもいいこと

グラタンが食べたい…

私グラタン大好きなんですよ。でもコンビニで売ってるのも高いし、

お店で出してるのはもっと高い…冷凍品は水っぽいやっぱり高い…はあ…貧乏人は辛いのです。

所で皆さんはグラタン好きですか？

好きならば私と同志にゃ！！（えー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 141 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化?〽〽 (前書き)

という訳で戦闘中です!

今回は皆さんの予想通りかがつかターン。結構爽快な感じかも…
そして彼女達はやはり主人公なのかなーと言う感じで進みます。
短いですがどうぞ〜

静かな街にけたたましい銃声が響き渡る。

その度に聞こえてくる、おぞましい絶叫と、粘着質な音。

地獄の様な光景が、彼女達の前で繰り広げられている。そしてその地獄を展開しているのは、彼女達 そうかがみとつかさだった。

目の前に身体を維持するマグネタイトと自我を失い唯本能のみに突き動かされ襲ってくる悪魔達にかがみが銃弾の雨を降らせている。

しかしその数は膨大で彼女達二人だけでは到底持ち堪えられる状態では無いのだが、戦況は彼女達が有利だった。

「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時
照見五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子 色不異空 空不異色
色即是空 空即是色 受想行識亦復如是 舍利子 是諸法空相……」

銃弾が奏でる旋律と共に聞こえて来るのは、全てを救う様な優しい声から発せられる破魔の声。

その声を聞いた悪魔達はその身体に著しいダメージを受け、動く事も出来ない。

マントラのスキル『般若心経』は聖属性の中威力MPダメージの効果果なのだが、目の前に居るスライムになりかけている悪魔達は天使なども居る。

しかし、その存在を維持する事が出来なくなり、アライメントがダークに偏ってしまいその所為でダメージを受けているのだ。

MPダメージ マジックポイントともマグネタイトパワーとも呼ばれる を受けた悪魔達は聖なる力とその威力に耐え切れずその場でもがき苦しんでいく。

其処にかがみの持つマシンガンが唸りを上げるのだ。

「数が多いっ！ って、一体何が起きてるのよっ！」

この数週間悪魔を見てきたかがみにとってこの状況は異常とも言えた。

確かに悪魔は沢山この町に存在していたが、そのどれも普通の姿をとっており、この様なスライムになりかけやスライムなどは見た事が無かったのだ。

それもそのはずで、大樹達が現れるまでは人修羅は異界内に存在するマグネタイトをここまで強引に一箇所に纏めて置かなかったからである。

存在する為に必要なマグネタイトすら奪われた悪魔達は混乱し、そして人間を襲う事でマグネタイトを得る事も出来ずスライム化して

ザン系魔法と違い、同じ風属性でも『切断』に特化しているこの魔法ではスライム化しかけている悪魔には効果が薄い。

耐性がある訳ではないが、それこそバラバラにしない限り動く事を止めないからだ。

火炎系や同じ風でも『衝撃』を叩きつけるザン系魔法ならかなりの効果が期待できるのだが、彼女の持つ範囲魔法はガル系とムド系しか無い。

現在得意とする呪の相性を持つ能力は、これらの様な存在には効果が薄い。

逆につかさの持つマハンマオンならば効果が見込めるのだが、彼女の今のレベルでは成功率が低い為、ジリ貧となってしまう。

「ここで、火炎系の魔法石使う訳には行かないし、マジックカードは攻撃系じゃなくて回復系ばかり、嫌になるわね」

「お姉ちゃん、まだ来るよ！」

「恐らく佐藤君達が戦ってる所為なんでしょうけど、これじゃ何時になったら行けるかわかったもんじゃないわ。って寄るな！ アギダイン！」

『GYAAAAAAAAAAAA!?!』

風魔法を潜り抜け襲い掛かってきた悪魔に容赦無く、アギ・ダインを叩き込む。

粘液が燃える嫌な臭いと共に悪魔は完全に燃え尽きた。

それでも悪魔の数は10を軽く超えるだけあり、此方に向かって襲い掛かってくる。

「何所のバイオハザードかしらねこれは…ああもっつ！」

「お姉ちゃん落ち着いて〜〜！」

「ご、ごめん。とりあえず、自我が無い様だし、移動も遅いのが助かるわね。いつそ火炎で焼いて道を作って駆け抜ける…いや、奥にこれ以上居たら詰むわね。でも相手にしてる時間も無い…」

「私のマハンマオンじゃあまり効果がないし…」

「そういえば、つかさの新しい能力って此処で使えるの無いの？」

「えーと…ヒプノシス位かなあ…でも単体にしか効果無いし、そもそも効かなさそうだよね」

つかさが覚醒し新たに得たESPはそもそも攻撃用の能力が殆ど無い。

使い所が上手く嵌ればこれ以上ないほどの強力な能力だが、直接的な火力は無いに等しかった。

「こなたやみゆきや佐藤君が待つてるって言うのに…つかさを助け
てくれたお礼をしないとイケないに…」

「お、お姉ちゃん…?」

「何で邪魔するのよ、このトンチキどもは。分かる？ 時間が無い
のよ、早くしないとつかさが見た嫌な世界になるって言うのに、あ
んたらは、あんたらって奴は…」

「お…お姉ちゃんが怖い…」

考えていたら怒りが湧いてきたらしく、ぶつぶつと文句を言い始め
るかがみ。

その様子を見て一歩引いてしまうつかさだが、かがみはそれも気に
せず更に怒りを燃やしていく。

「大体ねっ！ 存在出来ないとかマグネタイトが足りないとか言う
なら出てこなければいいのよ！ あんたらは！ それを勝手に自我
崩壊して！ 馬鹿じゃないの！ ねえ！ 馬鹿じゃないの！」

『ooooooooooooooooooooo』

「おおおっじゃないわよっ！！ あったまきた！ 本当に頭来た
わ！ とりあえず…ぶっ潰す…！！」

カチリ、と何かか嵌まる音がし、それに導かれるままにかがみは大

声で叫ぶ！

「あんた等全員！ 来世からやり直せええええええつ！！
ことめじり言神呪！！」
十と

天空から眩い光が悪魔達に降り注いでいく。

それは太陽を神格化した神 あまてらまのおみかみ 天照大御神の威光。

あらゆる不浄を浄化し、存在を禁ずる聖なる光が辺りに居た全ての悪魔を飲み込み浄化させていく。

苦痛も無く、寧ろ自らその光に向かうほどの浄化の光がその場に居た全ての悪魔を全て消去するのに時間は掛からなかった。

その光景を見て信じられないと言った表情のつかさと、両手を上げて怒鳴る体勢のままその威力に目を丸くするかがみが居た。

「え……何これ、私がやったの……？」

「ど……どんだけ……」

周囲には全くと言って良いほど悪魔の存在は無い。

今の内ならば問題無く大樹達の下に向かえるだろう事は簡単に想像出来たが、自分がやった事に完全に呆けてしまっているかがみ。

「も、もしかしてお姉ちゃん怒りすぎて覚醒したのかな……」

「それって…有りなのかしら…な、なんか容易い気がするんだけど」

と、思い返してみれば神を信じられなくなった所為で覚醒したので今更と言えば今更なのだが。

更には捨てた筈の神の力 神通力に目覚めるとは何と言う皮肉なのかと乾いた笑いが出てしまう。

「信仰心を捨てた私に神通力って…世界の神様って余程私達を馬鹿にしてるわね。まあ、何にせよ使えるなら利用してやるわよ。行きましょつかさ！ 出てくる悪魔は私に任せなさい！」

「う、うんっ！ 頑張っつて間に合うようにしようねっ！」

「おうよっ！ 待ってなさい皆！！ つかさが見た未来なんて、私が許すもんですかっ！」

かがみ達は疾走する ……！！

かがみのレベルが8上がった！
つかさのレベルが14上がった！

かがみは覚醒した！

力+3 知+3 魔+3 体+3 速+2 運+0

スキル：神通力を取得した！

技能：霊縛を取得した！

技能：雄叫びを取得した！

技能：使鬼を取得した！

技能：奥の座を取得した！

技能：神風を取得した！

技能：建御雷を取得した！

技能：十言神呪を取得した！

キレて覚醒って滅多にないにゃーと思う今日この頃です。

でも、これがかがみっばいかなーと言う事で土壇場で覚醒ですよ！
で、神様捨てたのに覚えたのが神通力、ウイットに飛んだジョーク
みたいですね。

でもこれはカオス属性でも覚えられるスキルで結構優秀だったり。
ロウなら神様をお願いして～～ですが

カオスなら神様の力を無理矢理使って～～と言う感じですよ。

『十言神呪』は神通力の中で最強の威力がある最大技能、これが切り札になるかっ！ですねー

どうでもいいこと

普通のポケ コレ（グリーのゲーム）をしてて、嬉しい事が！

ランク6（1から6まであり6が一番レアリティ高い）のカードを
2枚ゲットです！

今まで頑張ってもランク5しか無かった私に救世主の様なカードな
のですよー

嬉しいなあ。 ついでに招待で貰えるランク6があれば言う事無いの
に（無理

という訳で、 此処最近で皆さんが嬉しかった事などはありますか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

さてさて再び場面転換！ 全然進まないにゃ！？
とりあえずどうぞなのですよー。

近況

先生…忙しくて書いてる時間がありません。
更に言つと明日も帰りが遅いです、多分20時過ぎかなあ。

明日は多分書けないと思います申し訳無いのですよ。
うう、急な仕事とかいやだよ（涙）

基地内部

戦況は膠着していた。

と言うよりは大樹達が遊ばれていると言った方が正しいだろうか。

大樹達は人修羅にダメージを満足に与える事も出来ず、対象の痛手も直ぐに回復してしまう。

対して人修羅は、大樹達が必死に戦っている姿を見て、高笑いしながら余裕の表情を見せているほどだ。

こなた達の方も苦戦している。此方はダメージを与える事は出来るのだが、それ以上に相手の火力が高く、回避するだけで精一杯だった。

時間を置けばやはり回復されてしまい、苦しいたちこつこつが続いている。

流星にこなたの狙撃には警戒を強めて居る為、彼女の攻撃が通れば道が開ける可能性もあるのだが、その為には相手の猛攻を潜り抜けなければならぬ。

この中で唯一善戦出来ているのは、雪之丞だけである。

それでも現状五分五分の状態であり、一瞬の隙が致命的になるとい
うギリギリの戦いをし続けていた

『おおおおおおおおおっ！！』

霊波砲の撃ち合いから得意とする接近戦に持って行った雪之丞だが、
相手も付かず離れずの距離を上手く取って居る為、有効打を与える
事が出来ない。

自分から攻める様子も無く、回避ばかり続ける相手に対し苛立ちを
感じ始めるが、何とか冷静を保ち攻撃を続けていく。

目にも留まらぬ様な連続攻撃、そしてその攻撃をギリギリとは言え
かわし続けるツイットル。

上位者同士の戦闘と言う物の激しさをまざまざと見せ付けるような
戦いだっただ。

雪之丞が、相手の数手先を予測し攻撃を仕掛けるのに対し、ツイッ
ットルの方もその後を先読みして回避していく。

正に達人同士…いや伝説の悪魔と英雄の戦いそのものと言えよう。

『喰らい…やがれえっ！』

『おおおおおっ！ 危ない危ない、あぶなあい きひひひひひっ

メギドラ
『

『んなもん効くかあっ!』

雪之丞が放つ渾身のストレートをギリギリで回避し、返し様にメギドラを腹部に叩き付ける。

しかしその程度の威力の魔法では防御の極みに到達している魔装術を貫通する事など出来はしない。

全く怯んだ様子も見せず、ツイツイミトルの顔面を両手で鷲掴み頭突きを叩き込む。

『ぎっ!?! きひ…きひひひっ』

強烈な一撃で蹲るツイツイミトルだが、雪之丞は追撃を仕掛けない。それ所か、ガラガラとした目つきで相手の一挙手一投足を確りと捕らえていた。

『下手な芝居は止めやがれ、どうせ大したダメージじゃないんだろ?』

『きひひひ…よおおおうく、よくよくよくよく、よおおおつく分かったねええええええ 惜しい! 惜しいなあ! 惜しいよっ! もう少しだったのにねえ』

『見た目はなよなよしてやがる癖に、流石は魔王つて所か。ま…それでも』

アシユタロスより、威圧感も無ければ脅威も感じねえ。

自分より圧倒的に格上の存在。魔王アシユタロスと戦った事がある彼にとつて、ツイツイミトルなど魔王の名を持っている程度の悪魔でしかない。

何故ならばダメージは其処まで通らずとも、此方の攻撃は当たる、敵の攻撃は防げるのだから。

人間だった時の数倍以上…恐らく、今ならばメドーサ相手でも軽く倒せる自信がある今でも、アシユタロスには毛ほどのダメージを与えられる気がしない。

しかし、雪之丞のライバルは、親友はそのアシユタロスを倒したのだ。

いつかそいつに追いつく為に、そして抜き去る為に彼は今も尚鍛え続け、戦っているのだから。

『てめえ等ごときに躓いてる暇何ぞねえんだよっ！ 三下あつ！』

『きひひひひひっ！…！』

吠える雪之丞に対し、どこまでもその表情を一つも変える事が無いツイツイミトル。

狂っているのか、それとも余裕を見せているのか分からないがその様子に変わった所はみられない。

『へらへらと随分余裕じゃねえか、その薄ら笑いが何時まで持つか……試してやる』

『おうおうおおおう　　怖いねえ、怖いねえ。だから……こうしようかあ　　イルク　　イルシオ』

『何をしようがっ……！？　　な……横島……何故此処につ……！？』

目の前からツイツイミトルが消えると同時に、其処にはかつての親友であり永遠のライバルである横島忠夫が立っていた。

彼が見間違える事は絶対に無い、それだけの強い友情と絆で結ばれた男なのだから。

だからこそ……それだからこそ、雪之丞は横島を強く睨みつける。

『んだよっ！？　　行き成り現れて何で睨まれなくちゃならんのじゃーっ！？』

『そうそう、そっくりそのままだなてめえ』

『当たり前じゃ！俺が俺以外の何だって言うんだよ！このバトルジャンキーがっ！』

心底迷惑そうに絶叫する横島。

強い癖に戦うのが心底嫌いで、女好き。卑怯外道なんでもござれと言う色々と問題のある人間だったが、雪之丞自身人の事は言えないので気にはしては居ない。

寧ろこの様なやりとりこそ、彼が望んだ未来の一つだと言えるだろう。

『何のつもりか知らねえし、どうして横島の事を知ってるのかも分からねえが…てめえはやっちやいけねえ事をした』

『何ぶつぶつ言ってるんだ、トイレか？』

『俺の目の前に！あいつの偽者呼び出すんじゃねええっ！
うおおおおおおおおおっ！！』

必殺の気迫を込めた霊波砲が驚きの表情を見せる横島を貫く、が

『成程な…俺の知ってる幻影を見せる魔法か…最悪これで隙を突くつもりだったんだろが、舐めすぎだぜてめえ』

彼にしてみれば、相手がどんな考えを持って何をしようと思わないのだが、この悪魔が望む事に呆れと苛立ちを感じてしまう。

悪魔だろうが人間だろうが、存在している以上、究極的には無になるのは決まっているとしても、霊には転生があり、神魔にも復活がある。

この世界もあらゆるものが巡り、そして存在しているのに、その全てを拒絶しようとする子供の様な思考を持つこの悪魔の考えは理解する事も納得する事も出来ない。

『なんつーか、てめえと戦う理由がもう一つ出来たぜ。テメエ等は先程までは乗り越えるべき壁だった。俺が更に強くなる為の布石としてな』

雪之丞の纏う霊波…いや魔力が更に増大していく。

それはまるで暴風のように吹き荒れ、目の前のツイツイミトルに向かって襲い掛かる。

濃厚な殺気と共に叩き付けられた魔力の奔流を受けても尚、狂った悪魔は何等変わる事無く雪之丞を見つめている。

『俺はよ、世界がどうなるかが、悪魔や人間がどうなるかが知った事じゃねえと思ってる。最後にや強い方が勝つんだろっしな。だがよ、てめえには…テメエ等にはそっこのがねえんだな。』

無になりたいとほざく悪魔二匹にガキの様な半人前が一匹。丁度良
い、俺が全員矯正してやるぜ！ 元ゴーストスイーパー伊達雪之丞
がテメエ等全員極楽に送ってやらあ！！』

英雄が咆哮する ！！

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：8790

現在消費MP：357

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：1827

現在消費MP：189

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP：100

虚無を望む悪魔と、強さを望む悪魔。

道が分かれてて、更には何も無い世界を望むのはゆっきーには許せない事なのですよ。

大事な親友は大切な彼女を死なせてまで世界を救ったのに、それを虚無にしようと言われれば怒りますよねえ。

さて、次回はどうなるのでしょうか！ どうしようかなあ…と言うのが明日は書けるのかなあ…

どうでもいいこと

だるい、ねむい、つらい。とまあ、実は結構疲れモードです。

風邪引いた訳でも無いのですが、単純に仕事疲れが取れてない模様です。

気をつけないと。コレからが仕事の本番なので頑張ってる稼がないとです！

貧乏暇なしなのですよ！

という訳で、今皆さんが一番頑張っているものは何ですか？

私は小説と戦国ポケッツですね！（えー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

Continue 143 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化?〽〽 (前書き)

という訳で再び場面転換なのですよ!

短いですけどござります〜。

(おかしい…幾らなんでも回復力が早すぎる。此方の攻撃があまり効いてないとは言え、それでも確実に痛手にはなっているはずだ)

先程から全力で攻撃を続けている大樹達。しかし与えた傍からリジエネレーションによりあっという間に再生していつてしまう。

この中で一番の威力を叩き出せるコウモクテンの一撃ですら、もの数秒で回復してしまうほどだ。

此方からの攻撃をあえて受けて見せ、その上で余裕の表情を見せる人修羅。

今現在もアリスが、サキユバスが、仲魔達が連続で攻撃を仕掛けていくが、それも直ぐに回復していく。

幾ら人修羅が強いと言っても、ステータスの能力に書かれているリジエネレーションのレベル程度では此処まで回復はしない。

『酷いチートを見てる気がするわ…ええええいつ！　　メギドラオ

ン！』

極光が腕を組み動こうともしない人修羅に直撃する。

轟音と爆風が吹き荒れるその威力は並の悪魔ならば即死だろう。それこそ直撃さえすればケルベロスにすら痛手を与えられるクラスだ。しかし、その爆風の中心にはニヤニヤと笑い続ける人修羅が殆ど無傷で、いや。あつという間に全快していく。

その再生速度はまるでテレビの巻き戻しを見ている様に感じられるほどだ。

「…何か仕掛けがある…か。それを見つけない限りはどうしようもないね。相手は嬉しい事に何もしてこないし、僕が見つけるしかないか…。全員攻撃を緩めないで！ 相手に行動をさせたらだめだ！」

『……………おうよっ！ 行くぞお前等！ オレに付いて来いっ！』

『ヒョーヒョー。悪魔使いが荒いのう』

「きひひひっ！ おうおう、頑張ってみるや？ その程度で俺を何とか出来ると思ってるならなあ…！」

大樹の指令通りに攻撃を更に激しくしていくコウモクテン達。

微かにだがこくりと彼女が頷いたのを確認し大樹は一人違う行動を取る。

彼女達に任せたのは相手の目を逸らさせる事、そしてその間に人修羅が回復していくカラクリを解き明かすつもりなのだ。

スカーア八を構え連続で撃ちながらも、くまなく辺りを確認する大樹。よくよく見れば、何所もかしこも強力な結界によって守られているのが分かる。

核ミサイルの誘導施設は彼にとっても人質の様な物なので、守っているだけでも考えれるが、それ以上に何かあるのかもしれない目を光らせていく。

（恐らく何か特殊な機械か魔法とかで再生能力を高めているんだろうけど……ダメだ、早々簡単に分かるなら苦労はしないか）

天才でも推理の達人でも無い大樹には、相手が隠しているかもしれない何かを探す事は困難だった。

文珠を使うにしても何をメインに探すのかを深くイメージ出来なければ無駄に発動してしまうだけである為、迂闊には使えない。

いっその事【回復阻止】でも叩き込んでやろうかと、考えてしまっただが結局は意味が無い事なので建設的に物事を考えていく。

（あいつが何時本気になって掛かってくるか分からない。レベル的にも実力的にも全く違いすぎる状態で、相手に自動回復付きと言うのは気分が滅入るよ）

（私が全力を出せばまだいけたかもしれないのだが…）

心の中からリュウキツコウシユの声が聞こえてくる。

今現在彼女の能力は大樹のレベルに合わせて低下している状態であり、必殺技も殆どが使えない状態になっている。

更に言えば、先の雪之丞戦ではいよるこんとん達のミックスレイドやクー・フリーンのゲイ・ボルク、魔法銃の必殺スキルであるエレメンタルレイドも既に使用している。

（何か秘密があるはずなんだ。ダメージ自体は通ってる以上、どこが見落としている部分があるはず…其処を何とか見つけないと）

だが、現実是非情であり、容赦も無かった。

大樹の苦悩している表情を見た人修羅が、ニヤリと笑いゆつくりと語り出す。

「さあて、絶望に嘆く時間は終わったか？ そろそろ俺主催の殺戮パーティーの始まりとしようか。なあ、さ・と・う・く・ん」

「くっ………！」

「安心しろよ、直ぐには殺さないからよお。とりあえずてめえの女を寝取って、お前の目の前で犯してから殺してやるよ。その後お前に食わせてやるのもいいな、きひひっ」

『外道…っっていうか此処まで来ると唯の狂人だね。馬鹿じゃないの』

「口だけは達者だなあ？ 雑魚。てめえも後で壊してやるから安心しろよ。ひひひっ、死ぬ前にヒイヒイ鳴かせてやるから悦びな」

『誰がつ！』

射殺さんばかりの殺気を込めて人修羅を睨みつけるが彼には全く効果が無い。

レベル的にもアリス達の数段上を行っている人修羅にはその程度の殺気などそよ風と同じ様なものなのだろう。

一歩ずつ大樹達に向かって歩み寄る人修羅。

ジリジリとコウモクテン達が間合いを取っている中、それすらもあつさりと無視して歩いてくる。

その様子をテスカトリポカと激しい戦闘を行っているこなたが見ているのだが、流石にヘルプに回る事も出来ずにいる。

「しかしまあ、これもまた運命だろ？ お前は生まれた時から俺にこうやって苛められて殺される運命だったって訳だ。そう思うと感慨深いよなあ」

「……………」

「俺もまあ、こんな風になっちまったけど後悔はしてねえぜ。最強の存在、それが今正に俺の事を示している訳よ。そしててめえは勇者に群がるスライムって所か、なら勇者に殺されないとなあ？安心しろよ。二度と蘇生も転生も出来ない程に魂まで完全に滅ぼしてやるからよ。そうすりゃ二度と痛い思いをしなくてすむぜ？俺に感謝しろよ？絶望と苦しみを味わうだけで、こんな素敵な事をしてもらえるんだからな。なあ？佐藤君よお　きひひひひひひっ
！」

興が乗った様で、饒舌に語り出す人修羅。

その様子は、自分の好きなものを最後に取っておき、それを食べる直前と言った至福状態を感じさせる。

この後の事は考えずとも予想出来た。

(これは…核がニユクスがどうとか言う前に全滅しそつだな…逃げる準備はしておくけど、どこまで上手く行くか)

意識下に文珠を用意して置き【全員転移】と込めておく。

転移場所は二つほど候補に上げておき、その時の状態によってどちらかを選ぶ予定でいる。

「ご主人様……」

「最悪逃げるさ、何所までもね。僕にとって本当に大事なものの以外は切り捨てる覚悟もある。恨まれるのは…怖いけどね」

選んだ候補の内、確実に命が助かる場所を選べば最悪、こなたやみゆきに恨まれてしまう可能性もあった。

それでも、大樹にとって初めて出来た友人達をこのまま死なせる事は大樹には出来ない相談である。

その為にならアメリカに言った通り、全てを捨てる覚悟も出来ていた。

後ろ向きな考えとも言えるが、相手の弱点も何も見えないままケルベロス以上の実力を持つ人修羅を相手にするよりは常識的な考えとも言えるだろう。

「んじゃ、念仏でも唱え終わったか？ そろそろ始めようぜ、俺の俺による俺の為の佐藤大樹公開リンチをよおっ！」

「唯でやられるつもりはないっ！ 全員もう少しだけ頑張ってくれ！」

『当たり前だっ！ この化け物はオレ等が殺すっ！ サマナーを殺すだあ？ やれるもんならやって見やがれっ！』

『我を差し置いて、最強だと？ 魔王と言う存在の本当の力も知らぬ小童ごときが！ 身の程をしれいっ！』

巨大な斧を振り翳すコウモクテンと、続けざまに魔法を叩き込むパチャカマク。

だが、それでも人修羅の動きは止まらない。

そして二人を支援するように、後ろから攻撃魔法が次々に叩き込まれていく。

『私は基本男なら全員大好きなのよねえ。特に逞しい男性やサマナ様にはサービスしちゃうわあ。でも。貴方はだめねえ、正直言っただけが震えないわあ。私が男相手に欲情しないなんて珍しいわよお……とりあえず一言言わせて貰えばあ……あんたウザいわあっ！』

『私の初めては大樹さんに上げるって決めてるの！ あんたみたいなブサイクお呼びじゃないのよ！』

サキュバスが珍しく苦い表情で人修羅を睨みつけ、アリスがとんでも発言をこの土壇場で叫ぶ。

顔の造形で言えば、変な文様が顔についている以外はそれなりの顔つきなので、ブサイクはどちらかと言えば大樹の方なのだがアリスにとっては違うようだ。

『強き者は何をしても許される。正に至言じゃのう。それこそ正に悪魔じゃよ……じゃがな？ 外道にまで落ちてしまふのは頂けん、ワシも極悪な悪魔と呼ばれた事はあるが、終ぞ外道とまでは言われな

そうね。こいつらが雑魚なのは否定しないわ。

「あん…？ 誰だ？」

「……ダツ…キ…？」

戦闘中に聞こえてきた、緊張感のまったく感じられない無味無味とした声が響く。

大樹達の仲魔の一体で、今の今まで一度も手を貸した事の無い大悪魔の聲が高らかに聞こえてくる。

ダメダメねあんたは、戦闘の才能ってのが全く無いわ。まあ、それでも戦おうと言う意志程度なら少しは認めてあげてもいいわよ

「隠し玉って奴かよ。はっ、所詮そいつも雑魚なんだろうがよっ！
けっけ、声からして女だし俺が可愛がってやるよ！」

煩いわね、歩く猥褻物。物体の癖にピーピー叫ぶんじゃないわよ、近所迷惑って言葉知らないの？ 幼稚園児でも知ってるわよ？ はあ…所詮は知能遅れって所かしら。

「…いちいち煩いな…出てきやがれ！ この雌豚がっ！」

相手の神経を逆撫でする様な毒舌に怒りを顔にする人修羅。

その声が大樹から、正確には大樹の持つCOMPから聞こえてくるのを知り、睨みつけた。

「良く分からないけど、手伝ってくれるのかい…?」

ま、あの時言った手前はね。それじゃ…呼び出さない、あんたが、私を、あんたの声で。

すうっと入ってくる彼女の声に導かれるままに、大樹はCOMPを起動する。

「召喚。ダツキ！」

通常の召喚とは違う、大樹の目の前に黒い召喚陣が走り、そこからゆっくりと存在が浮かび上がっていく。

そして

『喜ばなさい？ あんたは世界で一番美しい女に会っているのよ。
ねえ、歩く猥褻物』

最強の夜魔がここに降臨した
！！

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：10286

現在消費MP：524

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：2575

現在消費MP：255

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP：0

フラグというか風呂敷回収！

遂にダツキ参戦です！ レベル的には負けてますが彼女のあの余裕は…？

私にもわかりません（えー

旧いデータなので、実は能力が増えてるかも？ 増えてないかも？ とまあ、次回は違う人に場面転換なのでダツキの出番は少し遅れそうですね（笑

どうでもいいこと

戦国ポケッツを必死に頑張っている私。

しかし欲しいカードは人を後27人招待しないといけないという…だ、誰か手伝ってください（涙

（もし手伝ってもいいよ）言う方が居たらメール貰えると嬉しいです）

さて、自分のどうでもいい近況はともかくとして…

今日は仕事の都合上雨に濡れっぱなしで、大変でした。

今現在、喉が痛いし、頭が痛いし、咳が止まらないと3拍子揃ってます。

しかし、連続で休むわけには行きません！ という訳で頑張りました！。

ボーっとしている以外は結構余裕ありそうです。

皆さんは体調悪いのに、何故か元気に動ける不思議な状態になったことありますか？ 今の私がまさにそう（笑

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 144 愛情と憎しみの狭間で踊る道化？？？（前書き）

テンションは回復！

元気はぐぐ40%上と言った所です。

色々仕事なども忙しくて休む暇がありません（でも遊ぶ私

今日は珍しくお休みだったので、ぐっすり休んでたら起きたら夜の

18時・・・

余程疲れてたんだなあと吃驚してます。

序でに言えば、今尚眠い・・・（笑

ではでは場面転換！ みんなはみんな！ 自分自身の主人公！（落

ち着け

ゲル状と化した悪魔の腕がガイア教徒の胸を貫いた。

余りの激痛に目が霞み、意識が途絶えそうになりながらも口らしき場所に銃口をつきつけ銃を乱射する。

内部から炸裂弾をまともに喰らった悪魔はそのまま弾け飛ぶように消えていった。

しかし、彼がつけられた傷までが消える事は無く、また一つ命が消えて行くこうとして居た。

(はは…目が霞む…ぜ。こんな終わりつてのは…しまらないよなあ)

心の中で愚痴りながらガイア教徒 山田栄二はにこやかに笑う。

この世界に主人公なんてものが存在するのなら、それは本人達自身の事だろう。彼もまた彼の物語の中では主人公であった。

口や胸からあふれ出す血を眺めれば、もう助からない事は目に見えて分かって居る為、じたばたする事無く未だ戦い続けている仲間達を見やる。

(おいおい…押されてるんじゃないか…まあ、仕方ねえか改造悪魔は殆ど殺されちゃったからな…はっ、情けねえ…結局はガキ頼りにしなくちゃいけないなんてな)

彼がガイア教に入ったのは、特に深い理由はない。

この世界に生きていればごくごく当たり前の様な内容、恋人を悪魔に殺されたからである。

何も出来ないまま目の前で恋人を犯され、殺されたあの絶望の底から力を望み這い上がってきた。

皆方にその力を見出されるまでは、ガイア教の中で最も多いとされ、誤解されてしまっているそのままのチンピラのように生きていた。

しかし、皆方の思想を知り、人となりを知った今では彼を深く尊敬し、父親の様な感情を抱いても居る。

恋人を失った悲しみは未だ癒える事無く、力に対する渴望は今もあれど、それを抑え命令を遂行する兵として生まれ変わる事が出来た。

(そんな顔してみてるんじゃないよ。そりゃ前の飲み代払い忘れたけどよ、ま…その辺は俺のサイフから持って行けって)

辛そうな表情で栄二を見る仲間達だが、その手は緩む事はない。

栄二を助ける時間は彼等には無いのだ。この魔法陣を命を賭けて守らねば目的は遂行出来ない。

この悪魔達が魔法陣を無視する可能性もあるといえはあるのだが、そんな不確定要素に縋る訳にも行かず戦い続けているのだ。

頻りに響いてくる通信機にはまるで戦争でもしているような怒号や銃弾の音が絶え間無く聞こえてくる。

自分が死んでも世界は回り続けているのだと、栄二は柄にも無い事を考えてしまっていた。

徐々に痛みも麻痺し、自分が立っているのか倒れているのかも分からなくなってきた。

気がつけば目の前は真っ白になり、あれほど聞こえてきていた音も聞こえなくなっていた。

（あー…死ぬってこんな感じか。最後はあんまり辛くないな。呼吸は…してるのかわかんねえけど辛いし、これなら天国は無理でも地獄は行きそうに無いな、ってか天国とか地獄ってあるのかな？）

最後の最後まで絶望する事無く、自分の行動に誇りを感じ彼は今逝こうとしている。

（隊長、すいません。俺先に行きますわ。なあに、直ぐ会えますよ。そんなとき俺の恋人紹介しますから、ノロケに付き合ってください

や)

「ああ……世界が……白い……な……」

ことりと手が地面に落ち、山田栄一と言う人間の物語は終わりを告げた。

それでも銃弾や怒号、悪魔の進軍は止まる事無く続いていく。

誰もが世界の主人公でありながら、誰もが世界の脇役なのだから。一人死んだ位では世界は何も変わらないのだろう。

それこそ……世界の核になる物でなければ

……
……
……

「まずいな……想像以上に悪魔が多すぎる。一体あの基地で何が起きているんだ？」

皆方が機関銃を乱射しながらまるで波の様に襲ってくる悪魔達を見

渡した。

もう殆ど意識も形も無くしてスライムに変わり果てている悪魔達の様はまるで地獄に這いずる亡者の様にも見える。

しかしこれは現実であり、これらの悪魔を防がなくては大樹達に勝利は訪れないだろうと考えていた。

《発動までの時間は後どれくらいだっ!?!》

《後10分です!》

《遅い! 後7分でやれっ! こっちはそろそろ限界だ!》

《ラジャー!》

技術班に通信を繋げて魔法陣起動の時間を早めさせる。

魔法陣さえ起動してしまえばその範囲内の悪魔程度ならどうにかするので、急いで完成させなければならぬ。

正に、自分達と大樹達を助ける命綱の様な物と言えるだろう。

「隊長! そろそろ銃弾が切れそうです」

「何を言ってる、俺もそろそろヤバイ」

「何爽やかに言っちゃってるんですかあああつ!? それも無駄に笑顔で!」

「アホな事でもやってないとやりきれんだろ? 俺ももう達観したよ」

「おおーいつ!? 帰ってきてください隊長!」

H A H A H A H A H Aと両手を上げて外人の様に笑う皆方。

気を紛らわす冗談であり、この場に居る全員馬鹿な事を言いつつも手は一切休めていない。

それでも此方には改造悪魔が居ない為、他の場所より苦戦を強いられているのだが、そんな感じがしないのは皆方のフォーローに因る物だろう。

だが、気は落ち着いていても状況はさっぱり変わっていない。

後10分程度と言っていたが、それまで持つのかすら怪しい所だった。

「まずいな…何か手は」

「いつちよ特攻かけましょうか? 一度やってみたかったんですよ。ダイナマイト抱いて呐喊って」

「戯け。そんな感動的なドラマになんぞさせんよ。なあに…ここか

「俺の素晴らしい策が………あつたらいいな」

「まあ、思考能力が殆ど無いのが幸いですよね、これで頭使われたらもう俺達なんてあつという間にやつ等の腹の中ですよ」

「だよなあ。どんどんスライム化していくし。と言うか早くないか流石に？ どうなんです隊長？」

「大方、基地の方で何かあつたんだろうよ。奴等の様子を見れば大体分かるな。恐らくこの辺りのマグネタイトが吸収されているかなかだろう」

「うげっ…そんな事すればこうなるのは当たり前か。ってかそんな事出来る悪魔とあのガキどもが戦ってるんスか…俺一般人でよかつたな」

「ガイアに居る時点で一般人じゃねえよ」

「うるへー」

手は殆ど残されていない。

彼等に残っている最後の武器は今もって居る武器だけであり、それが無くなればスライム達の波に飲み込まれて死亡と言う状態だった。

皆方が必死に手立てを探すも、単純な物量で襲い掛かってくるだけの相手を如何にかするには人数も時間も圧倒的に足りない。

この手の手合いは何度も相手にしてきた事はあるが、状況が絶望的

な状態で戦った事は無いのが痛い所だった。

そもそも、人間は悪魔より弱い。

ステータスで勝つていようと、結局人間より悪魔の方が単純な力は強いのだ。

それを人間は知力や技能を使って戦う事で、漸く悪魔を倒す事が出来る。

ならばどうするか…答えはとても単純であり、あらゆる準備を整えて勝てる万全の用意や策を整えてから初めて戦いを挑む。

こうする事で人間…いや、皆方は悪魔達に勝利してきた。

だが、今回の突然の悪魔達の襲来、資材不足、仲間達の大幅な減少によって満足に用意を整える事すら出来ていない。

「まったく。貧乏くじ引いたかね…ってどっちにしてもあっちに向かえばスライムが押し寄せてくるか。サイドアタックなんぞされたら経験の足りないあいつらじゃ無理があるだろうしな」

「実力に経験が追いついてないって奴ですか」

「ああ、だから時々かなりの隙を見つける事が出来る。勿論それは人間達だけで仲魔達は探すのが難しいがな」

大樹と直接戦えば皆方はあっという間に殺されるだろう。

ならば皆方は大樹に勝てないのか、と問われればそれはNOである。寧ろかなりの勝率を誇れると言ってもいいだろう。

人質を取っても良いし、食べ物に青酸カリを混ぜるのも良い、住んでいる場所に爆弾をセットするのもあれば、遠くからの狙撃なども有効だろう。

殺そうと思えば人間一人程度、皆方には造作も無い。勿論その後の報復を考えれば無謀だし、やるつもりもないが。

つまり大樹やこなた達は経験を積んでいても、どこかで一般人の様な癖を持っているのだ。だからこそ、その気になれば引き返せる場所にいるのだが。

だが、このような場所においてそれは唯のウィークポイントではない。

大樹達の弱点はその辺にあると言えるだろう。

「どの道俺達は此処に貼り付けて訳だ……………ちっ、弾が切れたな。お前達装甲車に乗って今向かって来る援軍を連れてこい」

「なあに戯けた事言ってるんですか、それは無謀ですよね？俺達を舐めてもらっちゃ困りますよ」

「銃が無いなら物理で行くだけですよ！」

遂に装甲車に備え付けられていた機関銃の弾が完全に切れた。

部下達の銃もそろそろ弾が切れかけていた。腰に備え付けられている大型のナイフを取り出し構える部下達。

あわよくば二人だけでも逃がそうと考えて居た皆方だが、小さく息を吐くと力強い表情で彼等を見る。

「んじゃ、残り6分弱、死ぬ気で気張るか」

「りょーかいつ！　んじゃ死んで花道飾ろつかっ！」

「てめえは極道映画見すぎだ…っ。間に合ったか！」

後方から凄まじい音を立てて悪魔達が飛び散っていく。

タタタと規則正しい音と、轟音が鳴り響きその奥には、もう一台の装甲車　かがみ達を護送していた車両　が救援に駆けつけていた。

『うっし！　隊長達発見！　まだ生きてるぞっ！　今援護に入ります！』

『おらおらおらっ！　ひき殺すぞ雑魚どもっ！』

マイク越しに聞こえてくる部下達の頼もしい声で、少しだけ安心する皆方。

だが、全てが終わった訳ではない。直ぐに装甲車を運転している部下に指令を送る。

《聞こえるか？ 直ぐにこっちに向かい物資の補給を。お前達はその後直ぐに悪魔の掃討だ。俺達はその間に武器等を補給する》

『ラジャー！！』

「本当に、俺の部下は頼もしいね。残り時間まで後数分…死ぬ気で持ち堪えてやるぞ！」

「「おおっ！！」「

魔法陣発動まで・・・残り4分

申し訳ありません。

かなーり遅れました、そして仕事が本格化してるのでこれからもちよつと遅くなりそうです、どうかご容赦を。

流石に感想返ししている時間も無いのが辛いにゃあ・・・

もう少しお待ちくださいね（涙）

非情に男らしい戦いをしているガイア教。

此処だけ見てるといい人ゝとかに見えますが、悪魔を改造したりと本社はいい人だけとは限らないですよゝ（えー

メシアにもちゃんといい人は居る筈なのですよゝ。

さあ、隊長達は魔方陣を起動できるのか！

どうでもいいこと

今日は貴金属買取屋さんが来ました。

持っていたプラチナ製品を売った所2万円程度になりましたよー。思わぬ臨時収入にほこほこなのです！

という訳でおかず買って来ました！ ふふ、遊びに使うお金なんて無い！（涙）

という訳で皆さんは突如のイベントでお金を手に入れたときとかどうしてますか？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

ねーむーいーにゃー

という訳でころころと場面転換です。

今回は〽〽ここだっ!

あれ…いつになったらバトル終わるんだろう? (汗)

感想返しが遅れております。

現在、あまり纏まった時間も取れず感想返しが出来ません。

更に言えば誤字も直せてません (涙)

もう少しお待ち下さい…よよよよよ

Continue 145 　　く愛情と憎しみの狭間で踊る道化？く

壊れた少女が言葉を紡ぐ。

時は迫り、終わりを迎えようとしている…それを覆す事が出来るのは、まだ誰にも分からない。

「思慮深き隠者が示した…時に己を見つめ、自らの意思で道を決する勇気を…」

……

……

…

シエルター内

「ねえ、何か様子がおかしくない？」

「そういえば…自衛隊の人もクズノハの人もさっきからピリピリしてるし…」

柊まつりといのりが、内部に居る自衛隊員達の様子がおかしい事に気付いた。

よく見れば他の避難している住民達も、心なしか不安げな表情を見せている。

「うん。何かあったのかもしれないね」

「あなた…どうします？」

「そうだね。僕が様子を見てこよう。みきは皆を見ていてくれるかな？」

「はい、あなた」

何かあってからでは遅いと柊ただおが自衛隊員達の場所に向かおうとすると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこにはこなたの父、泉そうじろつが真剣な表情でただおを見ている。

「えーと、確か」

「こなたの父です。何時も娘がお世話になりました」

「あ、いえいえ。うちも娘が」

「父さん、世間話してる場合じゃないんじゃない？」

「そ、そうだったね。すみませんが詳しい話は後で」

「何かあった…で、宜しいんですかな？ いやかなり切羽詰っている状態かもですな」

行き成り核心を突く言葉を投げかけられ、少し表情が強張るただお。

そうじろつは一般人であり、能力者ですらないレベル1の愚者ではないが、それでも作家と言う職業柄、相手の気持ちちをある程度だ
が読む事が出来る。

それだけでなくも先程からせわしなく動いている彼等や、今のただお達を見ていれば大体予想が付くと言う物だった。

勿論そうじろつが内容を知った所でどうにか出来る訳ではないが、最低でも人の誘導位はこなせる。せめて情報だけでも知っておきた

かったのだ。

外で今も尚何かと戦っているこなただけに全てを任せたくは無いと彼は心で強く思っている。

「恐らくは…ですがこれをみだりに話せば内部の人達が混乱してしまいます。ですので」

「ええ、でも何も知らないままで、手遅れになるのは頂けませんしね。逃げるにしても避難するにしても、でしょうか？」

「確かに…では」

ただおとそうじろが詳しい話をしている中、みなみ達も体調を悪くして休んでいるゆたかを看病していた。

ゆたかは体が弱い上に常にストレスが溜まるこの空間で約一月暮っていたツケがやってきていたのだ。

こなたが出て行った後で、急に体調を崩したゆたかは今、このシエルトーにつれてこられたみなみやひより、パティ達に見守られながら眠っている。

本来ならば治療室で休ませてあげたかったのだが、現在其処は怪我をした自衛隊員達で埋まりきって居る為、この場で休ませるしかなかったのだ。

医療器具などはちゃんとあるし、この場に柊家族が居た事も幸いし

回復魔法がある為それを使用した。しかし気付かれない様にだが症状は落ち着いている。

「……ゆたか」

「大丈夫っスよ。ゆーちゃんもみなみちゃんが来てくれて嬉しそうだったし、直ぐ元気になるっス」

「ソウです！ ひよりにはみなみがついてるネ！ スグにゲンキにナリマスヨっ！」

「うん……」

荒い息を吐きながら眠り続けるゆたかを心配そうな表情で見守り続けるみなみ。

此処に来て以来彼女はずっとこの調子であり、逆に倒れてしまうのではないかとひより達は逆に彼女の事を心配しているほどだ。

「冷たいお水貰ってきたよ。何か騒がしいし、皆も何かあったらすぐ動けるようにしておこうね」

「おーい、そろそろ休めよ？ 皆してバテちまったら元も子もねえし」

「おっ、峰岸先輩大感謝っス。そうなんスけどねえ」

そう、マグネタイトが足りずゲル化した悪魔達は本能のままにシエルターすらも襲ってきたのだ。

外で戦っていた自衛隊員も半分以上が既に殺され、隔壁を降ろしながら此処まで下がってきたが、遂に限界が来ていたのだ。

そして、この状況はこのシエルターだけではない。

メシア教のシエルターもガイア教のシエルターも、もう一つのシエルターにもスライム達はマグネタイトを求め襲い掛かっていた。

「あ、あわわわ…そ、そうだった！ 直ぐにゆーちゃんを連れて逃げないと！」

「それは私達がやるわ。皆は直ぐに避難して頂戴？」

「え…あ、はいっす！」

ゆたかを連れて逃げようとした時、ゆかり達や他の親類縁者達が手伝ってくれる事になった。

今の内に自分達も逃げようとするのだが、周りが大パニックを起し逃げようにも上手く逃げられない。

このままでは、スライム所か人間に潰されてしまいかねない状況だった。

「これが懸念してた事ですか…まさに最悪だ」

「まさかここまで…それもマグネタイトが足りずにスライム化している…これだけなら兎も角…泉さん。少しばかり頼みがあるのですが？」

「何ですかね？ 正直俺ももう、腹を括りましたよ。このまま死んでしまったら娘にどやされそうですしね」

「それは心強い。後ろに居る子達を御願います。まつり、いのり、行けるかい？」

「ブランクはあるけど…まあ、この程度のスライムなら…ね。かがみ達がいれば余裕だったけど」

「やるしかないでしょ。何所まで持つか分からないけど、逃げ道ないんだから」

「私は後ろで援護に回るわね、あなた…まつり、いのり。気をつけて」

その言葉に力強く頷くただお達。

そして今尚迫り来るスライム達向かって両手をゆっくりと合わせる。

「……………不浄よ、退けっ！！」

騒ぎ立つシエルター内に不思議なほど大きな手を打つ音が響いた。その音の中心は終ただおであり、彼は合わせていた両手の内右手をゆっくりと離すと、スライム達を見つめ再び掌を打った。

「ぱぁんと、このシエルター内部ではあからさまにおかしい音量が響き渡り、それと同時にスライム達がブルブルと震え、消滅して行く。

「久しぶりだけど、行けたみたいだね」

神通力の技能の一つ『拍手被い』

神社などでお参りする時に行う拍手の事であり、これには魔を払うという意味合いを持っている。

身を清めると同時に、周りの不浄を被うと言つ簡易的な能力だが、ただおの様な能力者が使えばそれだけで簡易的な悪魔を消滅させるには十分な威力を持つ。

「な、なんと……！？ 内部にもまだ能力者が！ 助かります！ 皆スライムを一般人に近づけさせるな！ 自衛隊魂を見せ付けてやれっ！」

「おおっ！」

下がってきていた自衛隊員達も思わぬ援軍に奮起し、スライムに向かって弾丸をばら撒いていく。

最早意志も自我も消え、本能のみの存在と成り果てた今、彼等に回避するという知能は無く全弾面白い様に当たっていく。

とは言え、ゲル状の悪魔に銃弾は効き辛く、更にシエルター内部では火炎放射器なども使えないのでジリ貧なのだが。

「今度は私ねっ！ よかったあ、弓持って来てて」

「其処で忘れたらいのり姉さんって役立たずだしね」

「うるさいって。それじゃ…行くよ！」

矢を番えずにいのりは弓の弦を思い切り鳴らす。

それと同時に発生した聖なる波動が、襲い掛かってきたスライム達を根こそぎ排除していった。

「久々の弓鳴りの儀だったけど、上手く行ったみたいね」

「最後は私か。それじゃ前衛努めさせてもらおうかしらっ！ はあ
あああああっ！ せいっ！！」

万が一の為に持ってきておいた自分の獲物を振り回すまっすり。

その武器はまるで蛇の様に正確にスライム達を打ち払っていく。

長さ数メートルの長鞭、それが彼女の武器だった。まつりはいのりやただお、かがみやつかさと違い魔力が低く、その為自然に武器を持って前衛で戦う技能を身につけていた。

プロ級とまでは行かないが、低レベルの悪魔程度なら彼女一人で十分立ち回れるだけの実力がある。

其処に後方から、みきに因る支援魔法や回復魔法が飛んでくる。

「よし、このペースで行こう。最悪何時間戦うか分からないからね、皆体力や霊力には十分気をつけなさい」

「はいっ!!」

ただお達が前面でスライムを押さえつけている中、未だパニックを起こしている全員を落ち着かせる為にそうじろう達が動いていた。

しかし、状況は芳しくない。あれほどまで悪魔の脅威に晒され逃げ惑い続けていた所にスライムの来襲。

全員が発狂しないだけでもまだマシと言えるのだろうが、このままでは大変な事になる。

「皆さんっ！ 落ち着きなさい！ 落ち着いてっ!!」

「参りましたね、このままじゃ何が起きるか分かったものじゃない」

「集団心理が働いてるのもあるなあ…どうしたものか…えーと？」

「高良ゆかりの夫です。今はそれよりも」

「あの子達は既に下げて貰ってるようです、それじゃ俺達は俺達に出来る事をやりましょうか」

「はい、行きましょう」

このままでは自暴自棄になった人間達が何をするか分からない。

そうなってしまうえばスライム以上の災害を巻き起こす可能性もあるため、彼等は動き出す。

目指す先は放送室

(こなたっ！ お父さん達は最後まで諦めんぞ！ だからお前達も出来る事をやりきりなさいっ！)

彼等にとっても最後の戦いが始まっていた

スライムー正直倒すのが一番面倒な悪魔ってスライムだと思うです。単体なら兎も角集まって巨大になったら本能のある液体のプールですしねえ…

でも、頑張ってます。柊家総出で最後の戦いですよ！

彼等が負けたら全員死亡ですね…うん、ふぁいとー。

異界が解除されない限り勝負が付かない戦い…絶望以外の何者でも無いですよね。

どうでもいいこと

台風が来ていますが、皆さんご無事でししょうか？

私は北海道なので、台風は滅多に関係ないですが、それでもあの脅威は

みているだけで恐ろしいものがあります。

ここで案じる事しか出来ませんが、皆さん気をつけてくださいね。

皆さんは遠い場所にいる誰かを案じた事とかありますか？

私はお婆ちゃん元気にいるようにと何時も考えてます。

また、会いに行きたいな…

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

……戦闘何時終わるのかわからなくなってきた!?

少し前までバトル描写苦手とか言ってたのに: いやまあ苦手だから長くなってるのかもですが(汗)

まあ、クライマックスですしいいかな!

という訳で場面転換です! 多分ここから最終局面まで突き進みますよー。

予想通りに世界が回っている。

後はこのまま勝つなり負けるなりすれば良い。

種は蒔いた、後は芽吹くのを待つだけ。

その時こそ、我々の望む世界が来る。

あの方が望む世界が、あの方とあのお方が待ち望むその人だけの世界が。

ならばこそ、我々は道化を演じよう。

狂い、狂おう。それさえも正気として受け止めて、私達は命じられたままに動くのみ。

それこそが、我等が忠誠、愛情、友情、親愛、家族愛。

我々はただ、あの方の望むままに……………

あらゆるものに、絶望を与えよう。

踊り狂え亡者達。

汝等が歩むは絶望への道。

足掻いて足掻いて、足掻いた後に希望を見せ、それをゴミを潰すように擦じ伏せよう。

あらゆるものに、絶望を、虚無を、無常を与えよう。

その為には、この器すら材料に使おうじゃないか。

我々は……………

そう、我々は、あの方の願いの遂行者。

「っ…そこをどいてよ！」

凄まじい速さで銃弾を撒き散らすこなた。

しかしテスカトリポカは流れるような動きでその全てを回避している。

余りの超人的な戦いに、かなたの目を持ってしても追い切る事が出来ず、攻撃を当てられないで居た。

仲魔達も似たり寄りたりと言えるだろう。

元々が自分達より高レベルの悪魔には自分達の攻撃もあまり通用しない。

『もしかしてさ、強化した後戦うってフラグなんかな。合体後に満足に勝った試しがねえ…ってあぶなっ！？ 掠った、今掠ったぞっ！？』

『馬鹿やってないで動きを止める事に集中なさいっ！ 銃弾を避けるって事は当たるとまずいって事よ！ サマナーの銃弾が通れば光明が見えるわっ！』

『委細承知！ カアアアアアッ！』

カイメイジュウのアイスブレスが所構わず暴れ狂う。

周りの機材に気を向けなくても良い分、彼も全力で攻撃出来るのだ。直ぐ近くにキングフロストが居るが、彼は氷属性吸収なので何の問題も無い。

テスカトリポカにとって冷気は弱点ではあるが、カイメイジュウ程度のレベルで放つアイスブレス程度では動きを止める事すら出来ない。

『一瞬デモ動キガ鈍レバ十分！　らけしす！！』

『今ですっ！　範囲内確保！　コキユートスペインっ！』

『威力を底上げしましょうっ！　妖華烈風！』

ラケシスのコキユートスペインが範囲内のテスカトリポカを完全に捕らえる。

其処にハリテイーが放った妖華烈風が暴風を巻き起こし、コキユートスペインの威力を底上げする。

あっという間に全身が氷付けになるテスカトリポカ。

「いよっし！　ナイス援護！　捕らえたあああっ！」

至高の魔弾コピー！

持っているMPを全部払うかの様に全力で至高の魔弾コピーを放つ。轟音を放ち青色のレーザーと化した弾丸が完全にテスカトリポカを捕らえる。

「決まれええええっ！」

『て、てめえええええつ！ 返しやがれっ！』

『化け物めえええつ！』

『おおおっ！？ 返す、返すよおお お はいさっ』

『なっ！？』

無造作に投げ返されたこなたの足をしっかりとキャッチするヴァルキリー。

だが、それと同時に何か彼女の胸を貫いた。

激痛を感じながらもテスカトリポカを見ると爪が槍の様に伸びて自分の胸を貫いている。

しかし致命傷では無い為、持っている足を後ろにいたラケシスに投げ渡す。

『ごほっ…！ ら、ラケシス！ ハリティー！ 直ぐに切断面を回復してっ！ 今なら直ぐ繋がるから！』

『わ、分かりました！』

足を受け取ったラケシスがハリティーと共に蹲るこなたに足を取り付けメディアアラハンを唱えていく。

しかし、メディアラハンはあくまで回復魔法であり、失った四肢を再生する事は出来ない。

可能なのはケルベロスが使ったような高威力のサマリカムなのが、彼女達にはそれが使えない。

唯一使えるのはヴァルキリーなのだが、彼女自身大ダメージを受けてる上、彼女まで離れてしまっただけではテスカトリポカを抑える事が出来ない。

『御願いつ、繋がって!!』

「……こ、こんな所で、私終わるの…やだ、やだよっ！ まだ大樹君を助けても居ないのに！」

『大丈夫です！ 私達がきつと貴方を！』

痛みはメディアラハンによって癒されていくが、未だに足は繋がる事はない。

このまま回復しなければ二度と切断された足が回復する事はないだろう。

こなたが絶望しかけたその時

(ごめんなさいね…こなた。貴方の運命をまた奪ってしまうお母さ

んを許して)

「え…？ お母さん…？」

守護天使降臨！

こなたの上空に純白の翼をはためかす聖女…いや大天使かなたが降臨した。

守護天使の降臨はこなたに宿命を刻み付ける事で行われる。

これで2度目の召喚であり、残り8回彼女を召喚した場合かなたの意志に関わらずこなたは天界に連れて行かれてしまうのだ。

「お、かあさん…？ 私、呼んでないのに…？」

『時間はないわ…二人はこなたに回復魔法を御願いします。失われた四肢を癒す力を… サマリカーム…！』

大天使の力を持つかなたのサマリカームが徐々にだが切断されたこなたの足を繋げていく。

しかし彼女の魔力をもってしても再生には力が足りず、徐々にしか再生していかない。

其処にラケシス達が全力でメディアアラハンを掛ける事によってサポートしていた。

「ありがとう、お母さん」

『ごめんなさいね、お母さんなのにこの程度しか出来ないなんて』

「そんな事無いよ。障害者になる所だったんだから。こんな風に回復出来るんだから嬉しいって」

『ありがとう…今回は貴方を無視して出てきたけど、出来ればこう言う事はしたくないし、こなたにも出来るだけ私を召喚しないでほしいわ、出来ても後2〜3回にしてね』

「あー…連れて行かれる、だよな。うん、肝に銘じておく…所でさっきのテスカトリポカだけど…？」

『お母さんにも分からなかった…でも間違いなく幻術を掛けられたのかもしれないわね』

COMPと言えど万能ではない。

寧ろ出来ない事の方が多いのだ。今回のアナライズにしても全てを調べる事が出来なかったのかもしれない。

その中に自分達に幻を見せる魔法があったのかもしれない。

一体何時使ったのかも分からないが、更に注意しなくてはならなく

なった。

「まずいね…この中で善戦してるのってあそこの脳筋だけじゃん…大樹君達に至っては遊ばれてるし」

『……私達が力不足で』

「うんにゃ、ラケシスもハリティーも皆も頑張ってくれてるよ。でも…あいつ等はそれ以上に強いつて事が…やるせないね」

『何とかできなくもないわ…でもその為にはあなたにまた辛い思いをさせないといけない…』

「お母さん…？ 何か手があるみたいだね？ もう十分辛い思いしてるんだし、今更だよ、今サラダ。うん、私上手い事言った」

『それは…ギャグかしら？ ……分かったわあなた。貴方がそこまで覚悟を決めているのなら…行きましよう、あの時の海へ』

「それってもしかして…三途の川…スか？ おおう…？ もしかして!？」

『お母さんの力じゃもうこれから先役に立てそうも無いわ…だからこそ、貴方には新しい守護霊が必要よ』

「で、でもそれってお母さんが消えちゃうって事じゃ!？」

漸く合えた母親と別れる事に強い拒否感を出すあなた。

それだけでなく彼女も本来物凄く寂しがり屋なのだ、普段のおちゃらけた雰囲気や無駄に明るい部分などこの寂しさを紛らわせて居る為にある。

会う事は無いと思っていた母親との再会、それをまた失ってしまった。彼女の心は深く傷ついてしまっただろう。

しかしあなたは優しい笑顔で首を振りこなたの頭をかき抱いた。

『大丈夫、お母さんはずっと貴方の傍に居るわ。今回も私が新しい力を借りに行くだけ…』

「嘘じゃないよね…？」

『お母さんが貴方に嘘をついた事がある…って言いたいけど、それは難しいわね。でも大丈夫、信じてほしいわお母さんを』

「…ん…信じる」

『ハリティーさん、ラケシスさん。少しの間こなたを御願います』

『分かりました、サマナーの事は私達にお任せ下さい』

『きつと守り通して見せましょう！』

『良い仲魔に恵まれたわね、こなた』

「そだね。ありがたいよ…それじゃお母さん、行こうかっ！」

『ええ…貴方が新しい力を得るために。 穢れなき威光』

優しい光があなたを包み込んでいく。

彼女の魂は再びあの海に向かっていった 今度は自分の意思で、新しい力を得る為に。

そして、彼女を守る為に、仲魔達は戦っていく。

『てめえっ！ あんな小さい子を傷つける何ぞ悪魔の風上にもおけねえっ！ 重大な損失だぞっ！』

『あなたを…あなたを苛めるなホっ！』

『コレ以上八進マセン！！』

『どうやらサマナーが何か逆転の手を探してるみたいだし。死んでもあんたをここに縛り付けてやるわよっ！！ あんた達全力で行きなさい！』

『おつよ姐さんっ！！』

こなたが戻ってくるか、それとも全員が殺されるか。

時間制限のある戦いは始まったばかりだ。

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：12286

現在消費MP：767

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：4761

現在消費MP：321

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP：0

こなた臨死体験中

テスカトリポカ強いなあ…

足が見事に切断されたこなたんですが、お母さんパワーで何とかなりました。

まあ直後にわざと臨死体験に行きましたが!? (えー

新しい守護天使は何がいいかなあ…? 思いつかないので皆さんに任せようかな (マテ

今回はこの続きか、ツイツイミトル編にしようかと思えます。

どうでもいいこと

戦国ポケッツに最近傾倒している白亜です。

現在『インブルー』と言う招待で貰えるカードがほしくて他の事に集中できません (えー

後4人招待すれば、もらえるのでその後は小説頑張ろうかな! とか考えてます。

いやあ…私集中するとそれしか出来ないタイプで…

誰かグリーやつてる人手伝ってくれないかなあ…とか (えー

今日はサンドウィッチ作りました!

家で取れたお野菜とマヨネーズでお手軽サラダを作ったの野菜サンドですよ!

美味しかったです

皆さんは自作でサンドウィッチとか作ったことありますか?

昨日は活動報告にお休みする旨を書くのを忘れてました(汗
何も無いままお休みして申し訳無いのですよ。

では、こなた編の続きです！

こなた編が終わるまでは次の場面転換しないかもですよ。

修正

最近読者に頼りすぎとの感想を頂いたので。
ヴァルキリーの進化スナイプを消去します。

ご迷惑お掛けしました、暫くはアンケートも募る予定はありません。
ゲームブックっぽくやってみるつもりでしたが、ご迷惑ばかりお掛
けしていた様で。

最悪撤退も視野に入れております。どうぞご容赦を。

3065

戦国ポケッツ、三国志ポケッツ協力大感謝

複数の方からお手伝いしても良いと、招待を受けて頂きました。

この場を借りてお礼させて頂きます！

そして、未だに募集中(えー

ヴァルキリー視点

強い。圧倒的に強い。

私達も強くなった筈なのに、それでもこの悪魔には及ばないのね。

隙を探して斬り付けても避けられてしまうし、攻撃魔法なんて殆どノーダメージの様なもの。

私達が今出来る事は何としてでもこの悪魔はこの場に縫い付ける事。

その為には

『 トリスアギオン!! 』

火炎耐性とは言え、最大級の火力にブースタまで乗せた攻撃。当たれば多少のダメージにはなるでしょ。

とは言え簡単に当たらないのが悔しいんだけどね…それでも、それでも私達はコイツを止めてみせる。

私の全力で押さえつけてやる！ 例え…蘇生不可能なほどに殺され

てもね！

何時だったかな？

何時頃だったかな？

私があの手マナーを大事に思う様になったのは。

守ってあげたいって思う様になったのは。

初めは単純に殺されるのが嫌で仲魔になったただけだった。

もしかしたら合体で強くなれるかもって言う打算もあったからサマナーの仲魔になっただけ。

そしたらもう…サマナーが強い何のって。

いえ、あれは強いというか理不尽だったわ。

相手が気付かない所から、一方的に狙撃って色々卑怯だと思つもの。

にゃはは。これが戦略と言うものだよワトソン君

誰がワトソン君よまったく。

いつも馬鹿みたいに笑って、動いて、そして私達を引き連れていた子。

何時の間にかしらね…あの子がサマナーじゃなくて、仲魔じゃなくて、主人じゃなくて…妹みたく思えたのは。

悪魔の私に家族なんているわけ無いし、何となくこんな感じなのかって、程度だったけど、私が始めて強く思った感情だった。

この子を守ってあげたいって。この子の悲しむ顔は見たくないなって…ね。

でも、無力だった。

どれだけ強くなっても上には上がいて、私達はあっさりとやられて、戦うのはサマナーとその友人達。

私達は弾除けの盾にもなれず終いで…歯痒い想いばかりしてたわ、流石にそんな様子は見せられなかったけど。

そして極めつけはこれ…テスカトリポカ。

私達の数段上の大悪魔、さっきもサマナーの足を…足を…！！

『避けるんじゃないわよっ！ 燃え尽きなさい！ トリスアギオ

ン！！！』

『ヒュー、姐さん飛ばしてるなっ！俺も続くぜ！妖華烈風

』！』

私のトリスアギオンの炎がトナティウの風の魔法で広範囲に広がっていく。

合体魔法だっけ？それに似てるけど正式には全然違うコンビネーションの魔法がテスカトリポ力を覆っていく。

流石に避け切れなかったみたいね、良い感じに焼かれてる…けど、耐性がある時点でダメージなんて大して期待出来ないのが辛いわね。カイメイジュウの火炎ガードキルは流石に警戒されてて全く当たってくれないし、これじゃ攻めてもダメージになりはしない。

『カアアアアアアッ！』

動きを止めている所にカイメイジュウのアイスプレスが飛んでくる。炎の中に氷じゃ悪手だと思うでしょ？でも、強力な氷の魔法は炎すら凍らせるのよ。

私のトリスアギオンが負けるって事じゃないけど、妖華烈風で散らされてる分火力は控えめになってる。

其処に集中させた氷の息吹でダメージを与えるのが目的。

凍らせるのは先程みたいな幻術があるかもしれないから弱点で少しでもダメージを与えていく方針で行く事にしてる。

『おおおお〜？ おおおおお〜！ 冷たいねええええ。冷たい冷たいつめたあああい』

『くつそムカつく！ あいつダメージ受けてるのか分からねえ！？』

あんたに同意よトナティウ。

こいつ等本気でやる気あるのかしら…確かにさっきはサマナーの足を切り裂いたし、攻撃する気はあるみただけど…

何ていうか…

『…遊バレテイルナ。我々ハ』

カイメイジユウの言った言葉が正にそう…

私達は遊ばれている、相手にすらしてもらえてないって事…？

ふざけるんじゃないわよ…本気で…本気で舐めてるのね…いつ…
つまりサマナーの足を切ったのも余興？

やる気になれば何時でも殺せた…？ ふざけんな、ふざけんなっ！！

『ふっざけるんじゃないわよっ！！』

『ふざけてえええええいよおお。うひひひひひ』

『ぶっ殺してあげるわっ！ 其処動くなっ！！』

『落ち着けてっ姐さんっ！ 相手の挑発だっ！ 俺達じゃ闇雲に向かつて逆にも殺されるだけだっっのっ！！』

『知ってるわよ！！ こんなのに…こんな奴にっ！！』

何で…何で私はこんなに弱いのだよ！ 何で何も出来ないのだよ！

決めたのに！ サマナーと戦うって！ 守るって決めたのに！ 弱い悪魔だから…だからそれも守れないって言うの！？

なら…なら…

『なら…今強くなれば良いじゃないのっ！！』

『！？ ばるきりーっ！？ 何ヲ！！』

失敗すれば死ぬ…？ 知った事じゃないわ。ここでサマナーを守れない様じゃ私の生きてる意味なんて無い！

守ると決めた相手を守れないなら、いつそスライムに変わり果てた方が余程マシよ！

サマナー：悪いけど、アンタのCOMPからマグネタイト貰うわよ！

『マグネタイトの過剰供給！？ やめる姐さんっ！ んなことしたらマグネタイトが暴走してスライムになるか爆発して蘇生不可能になるぞっ！』

私達悪魔は、存在する為に、そして強くなる為にマグネタイトが必要。

レベルを上げるのも勿論マグネタイトで、それを一定量の感覚で吸収する事でレベルアップしていく。

だけど、無理矢理過剰に補給すれば上手く行けば大幅な強化が見込める時がある。

勿論これはデメリットの方が強くて、良くてスライム。下手すりゃ蘇生不可能なほどに爆発してオシマイ。

でも、それが何よ……私の決めた誓いはね……

『この程度で終わるほど！ 軽くなんて…無いっ！！』

『っひっ……っ』

サマナー！ 私に力を！！

ヴァルキリー視点解除

黄泉

ヴァルキリーがマグネタイトを過剰補給する、数分前

気がつくところあなたはあの時の場所に戻ってきていた。

直ぐ隣にかなたも立っているのが前回と違う所と言えるだろう。

辺りは青々とした草原が広がっている。先程まで殺伐として居た戦いをして居たこなたにとっては何とも不思議な気分させられる場所だった。

「うん、これで二度目だね。生きて…いや、死んでるんだけどこんなにはつきりとした意識を保ったままでここに何回も来る人って多分私位だよな」

『確かに普通に生きていけば無いでしょうねえ…2回目は意味のある死亡とは言え、私がここに送ったし…』

「まあ必要だったししょうがないよ！ 気を落とさないでねお母さん」

『そうね、建設的に考えましょう』

「それじゃ歩いて行こうか。そういえばここって時間の概念ってあんまり無いんだよね？」

『現実世界とは多分違うし、そうだと思うわよ？ お母さんも詳しい事は分からないけど』

「ん、じゃあゆっくり行こうか？」

『そうね、魂だけでも少し休ませるのは良いかもしれないわ。』

そう言いながらこなたの手を握り歩き出すこなた。

こなたの手に触れて驚いた表情をするこなただったが、直ぐに嬉しそうな表情でその手を握り返し草原を歩いていく。

黄泉の世界とは言え、現実世界でも出来なかった二人で手を繋いで

歩くと言っただけの事に、こなたは涙が零れそうになる。

「あ、あはは、ダメだな私。皆一生懸命戦ってるのに、私一人嬉しくて…泣きそうで」

『私もよ、こなた。私も不謹慎だけど凄く嬉しいの。大きくなったこなたとこうやって唯歩いていく事が』

それはかなたも同じだった。

生きている間には叶う事が無かった、こなたと手を繋いで歩くという現実。

それをこの様な場所とは言え、叶えられた事に幸せを感じていた。

「それじゃ、もう少し…って、早っ!? もう見えてきたんだけど!? 前は結構歩いたと思ったのに!？」

『それだけこの場所に慣れてしまったのかもしれないわね…行きましようかこなた』

「え、それってもしかして私常連になるフラグですか…おおい」

一抹の不安を抱えつつも二人で先の方に見えた海…いや三途の河に向かっていく。

時間的には数分もしない内に二人はあの時の場所に戻ってきていた。そして其処には、あの時と同じ様に三途の河の渡し守、カロンが宙に浮かびながらこなた達を見つめていた。

『……………再び舞い戻ったか汝よ』

まるで分かっていたかの様に話すカロン。

こなたとしては話が早いのは好都合なので、そのまま会話を繋げていく。

「ん、まーね。死んだらここに帰ってくるってもしかして私永久ループとかなのかな？ まあ、今回は狙った訳なんだけどね」

『貴方が人生を全うに謳歌すれば、その時は普通にこの海を渡る事になるわ。カロン様、あの今回は…』

『知っている。客人よ、汝の魂の輝きは強く、更に光を放っている。そして…その光に導かれ汝に新たな力が宿ろうとしている』

「あ、それストップで…私は出来れば、と言うか絶対にお母さんじゃないと嫌なんで」

漸く会う事が出来た母親をまた失う位ならこのまま帰ろうかとも本気で思っているこなた。

だが勿論それでは勝てない事も分かって居る為に交渉に入ろうとするのだが、それより先にカロンが口を開く。

『ならば強く願うが良い。汝を守りし新たな強き者を自分の力で呼び寄せよ…それこそ強き魂を持つ者の特権である』

「強く…願うね。その辺は大丈夫っ！ 私の大樹君やお母さん、皆に対するラブパワーは無敵だからねっ！ お釣りはいらさないぜっ！」

『もう…こなただったら……うん、お母さんもこなたの守護天使を続けられる様に頑張るわ…だから、こなたも頑張っつて、ね』

「勿論っ！ 私が目指すのはハッピーエンドって決めてるんだからさっ…」

両手を組みながら新しい守護天使にかなたが再び宿る事を願うこなた。

魂だけの存在と化している彼女の力は肉体を離れた事により、強く美しく光り輝いていた。

それと同時にアムルタートの姿を取っていたかなたの姿がゆっくりと掻き消えていく。

そして…カロンの隣。三途の河のほとりに強い光を放つ何かかゆっくりと姿を現している。

(こんな所じゃ終われない。まだ大樹君とちゃんとしたデートしたいし、色々遊びたい。お父さんにお母さんを会わせたいし、お父さんに大樹君を紹介したい…かがみ達と皆で…まだ…まだやりたい事が沢山あるんだ。世界の平和なんてこの際どうでもいいよっ！私は私が守りたい人と場所を守る！だからお母さん私に力を貸して！)

即物的、自分勝手とも言えるこなたの願い。

しかし人間である以上、これほど強い願いはないだろう。そして強い願いは願いは奇跡と言う名の恩恵を彼女に齎す。

『目を開けよ…汝が奇跡は果たされた』

「……………あ…」

こなたがゆっくりと目を開け、目の前に現れた存在を見つめる。

美しい女神が其処に存在していた。

見る方向で、彼女の姿は様々に変わって行く。

柔らかな笑顔を浮かべる優しそうな女性。

好戦的な表情を見せる、気の強そうな女性。

氷の様な無表情を貫く、幼い顔の女性。

そして……彼女が見慣れた彼女の姿、そう。泉かなたの姿がはつきりと見えていた。

『我が名はノルン。世界に『時間』を齎した運命の女神。現在、過去、未来……神ですら覆す事の出来ない運命の力、貴方の為に奮いましょう。そして……ただいま』

「うん……お帰りっ！」

ゆっくりと両手を広げるノルン……いやかなたに抱きつくこなた。

暖かな感触に身を包まれながらも、こなたはある一部分を注視していた。

「お母さん……」

『何かしら？』

「お母さんに胸があるのは非常に納得行かないんだけど」

『ノルン様の仕様よ。と言うか開口一番それって酷いと思うわ……』

「お母さんの裏切り者っ！ ナイチチーズを結成しようとしてたのにつ……！」

『ど、どの辺から突っ込めば良いのかしら……そう君、本当にこなたにどんな教育したの……?』

「ある意味でスパルタ、ある意味で非常に心温まる教育です。だからこんな立派に!」

『違うでしょっ!』

自慢げに胸を張るこなたにお説教モードのかなただが、年齢を18も過ぎてしまえば今更矯正するのは不可能と言えるだろう。

物凄くそうじろつに詰め寄りたいた衝動に囚われるかなただだったが、本来の目的を思い出しこなたを改めて見つめる。

こなたも直ぐにテンションを戻し、戦闘前の状態に自分の意識を切り替えていく。

「よし…大体把握したし…行こうかお母さん。皆を助けにつ! それじゃ! 二度と来たくないけどまた来るかもなんでその時は宜しく!」

『ええ、行きましょうこなた。では失礼します』

カロンに別れの言葉を交わし現実世界に戻っていくこなた達。

そして丁度その頃、ヴァルキリーの過剰供給による変化が始まって

いた ！！

守護天使変更 大天使アムルタートから女神ノルンへと守護霊が
変化した！

Lv63 女神ノルン

こなたの覚醒が近づいてきている……………
ヴァルキリーが異常進化を行っている（成功率50%）

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：13486

現在消費MP：787

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：5561

現在消費MP：345

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP：0

アンケート…と言うかスナイプ狙いの提示と言う。
正にゲームブック化してきてますね(えー

という訳でヴァルキリーが進化するか死亡するか瀬戸際話でした
！。

何にせよ次回はこの続きからです！

テスカトリポカ戦も漸くラストかなあ、でもツイツイミトルも居るし
人修羅はノーダメージと言う(笑

どうでもいいこと

戦国ポケッツ。『インブルー』を獲得しました！

これも偏に皆さんのお陰なのですよ！

なので、暫くは小説に専念できそうです！ 頑張ってくださいよ！。

と、そう言えば今日はカレーパンをかってきました。

たまに食べると美味しいですねえ、とは言え数は食べられないので
すが(汗

皆さんはコンビニなどで買う好きな食べ物などありますか？

私はプリンかな…ええ、プリンは良いですよ。うん、だれか買って
ください(えー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

遅れましたー。

いやはや…書くのが遅くなるのは大変だ…ネタはあるんですけどねえ。

と言うより二章は終わりまで大体構想が出来てるので楽(えー

後は文章にするだけですが、その時間が無いという(でも遊んでるのは内緒

ではでは短いですがどうぞです。

過剰過ぎるマグネタイトの供給は急速にヴァルキリーの意識を途切れさせて行く。

確りと自我を留めておこうとするが、まるで重度の酔いが回っている様な状態で、何とか意識を保たせていると言つのが現在の状態だった。

このままではスライム所か、マグネタイトの暴走で大爆発すら起こしかねない状況に陥っている。

(い……しき……を……だめ……このまま……じゃ……あの子……に顔向け……)

どんどん薄れていく意識と、体中が焼け付くような感覚が絶えず襲い掛かり、彼女の限界はもう直ぐ其処まで来ていた。

その様子をテスカトリポカはニヤニヤといやらしい表情で見つめている。

「ばああああかだねええええ 奇跡？ 奇跡奇跡軌跡鬼籍奇跡に賭けた？ そんな事起こらないから奇跡なんだよねえええ う

ひひひひひっ』

『うるせえっ！ 姉御っ！ しっかりしろって！ あんたが死んだらサマナーがどんだけ悲しむかっ！』

『……………落ち着ケ！ 我々ノ役目ハコノ悪魔ヲココニ縛リツケル事ダロウ！』

『っ！ 分かってるよっ！ うおらあっ！』

ヴァルキリーの事は気になるが此処を任されている以上、こなたと彼女を守る為にテスカトリポカを抑えなくてはならない。

この間もキングフロストが氷結系の魔法を使って足止めしているが、大した効果は期待出来ない。

それでも今の所ここに縛り付けている…いや、ここに『ワザと』留まっているので何とかなっている状況だ。

テスカトリポカが何を考えてここに留まっているのかは分からないが、彼等にとっては好機でもある。

『ううう、悔しいホっ！ コキユートスペイン…！』

全てを凍て付かせる絶対零度、そして弱点でもある攻撃ですら軽い足止めにはかならない。

はっきり言えばレベルが違い過ぎる所為だろう。平均レベルが40前後の彼等に対し約2倍以上のレベルを有しているテスカトリポカが負ける道理などない。

其処をどうにかして戦うのが人間とサマナー達の戦いなのだが、今の彼等には荷が重すぎた。

そして、その間も暴走したマグネタイトを押さえつけようとヴァルキリーが意識を繋ぎ留めようとしている。

しかし彼女の限界は直ぐそこまで来ていた。最早自分を認識するのにも限界であり、1分も経たない内に彼女は爆散するかスライムに成り果てるだろう。

(何……よ……笑っちゃう……わね……所詮……私は……この程度……か……
……ごめん……サマナー……私……)

悔しくて涙を流す彼女。

最後に笑ったこなたが見たかった、と意識を手放そうとした時
声が、咆哮が聞こえた。

「ソロソよ！ 私は帰ってきたあああああああああああああああ
ああああああああああああつ！！ って、あれ？ 何？ どう
なってるのこの状況？」

両手を上に突き出してよく分からないポーズを取りながら、やはり訳の分からない事を叫んでいる彼女のマスター、泉こなたが立っていた。

『……………あ、アホかああああああつ!? って…はあああああつ!』

手放しかけた意識が一瞬で戻り、つい突っ込んでしまおうヴァルキリィ。

あまりにも情けないが、こなたの下らないギャグのお陰で一瞬だが完全に意識を取り戻したヴァルキリィが再びマグネタイトを制御し始める。

『ぐっぐっぐっぐっ!! あんた…ねっ! こっちがどれだけ心配したとっ!』

「いやぁ…って、ヴァルキリィこそ何してるのさ!? うわっ、こっそりとマグネタイト減ってるんだけど!」

『とりあえず、私をCOMPを使って制御して! 正直私だけだったら無理っばかったみたいだからっ! 急いで! また意識がヤバっ!』

「よ、良くわかんないけど、とりあえずやってみるよ!」

復活して早々さっぱり理解不能な状態になっているこなただが、目の前でヴァルキリーが苦しんで居る為、直ぐにCOMPのナイチンゲラーを起動させる。

召喚した、もしくは送還するときにはバッドステータスを幾つかとHMPを回復させる事が出来るCOMPソフトだが、勿論それ以外にも使い道がある。

マグネタイトを安定させて、回復を促すと言う能力もナイチンゲラーにはプログラムされて居る為、現状暴走しかけている彼女のマグネタイトを少しでも安定させる事が出来るのだ。

徐々にだが、ヴァルキリーの体が白く発光しているのが見える。

暴発やスライム化しないで進化する場合に発生する光なのだが、そんな事を知る筈も無いこなたは慌ててナイチンゲラーの出力を上げていく。

「ちよっ!?　なんか白いんですけど!　さあ戦うぞって時に行き成りやるのがこれっ!?　ヴァルキリー自重っ!」

『う、うっさいわねっ!　私だって色々考えて……!?　避けなさいサマナー!』

「うわっとうっ!?」

ヴァルキリーの声と勘を頼りにその場から飛び跳ねるこなた。

その一瞬後に先程ヴァルキリーを貫いたテスカトリポカの爪が突き刺さる。

『ちっ！ スマンサマナー！ 悪いがコレでも抑えてる方なんだっ！』

『こなた気をつけるホっ！！』

「あいよっ！ んじゃ悪いけどハリティーにラケシスは私の援護ね。任せたよ」

後ろで回復魔法を準備していたラケシス達が力強く頷き、こなたの前に出る。

その表情はとても美しく、そして力強かった。

『任せて下さい、これ以上はさせません』

『と、100%言えないのは辛いですけど、最低でも貴方は守りますよサマナー』

「ありがと、私もヴァルツ子を如何にかしたら直ぐに参戦するからさ」

（良く分からないけど、あのヴァルキリーが何の算段も無く変な真似する訳無いし…これは上手く行けば戦力UPかな。何とか頑張らないと）

(こなた。私を呼ぶ時は最大限の場面だね？ 後は1回だけ普通に呼び出してもいいけど、出来れば…)

隣に居るかなたの声がこなたに届く。

ノルンとなった彼女、能力的には凄まじく上がっているのだが、呼び続ければ天界に連れて行かれるのは変わっては居ない。

その為彼女を顕現させる回数は自然に決まっていた。

後問題無く呼び出せる回数は多くても5回、それ以上は呼び出す度に連れて行かれる事を覚悟しなければならぬ。

こなた自身、天界に連れて行かれるのは勘弁願いたいと考えているし、大切な母親にその様な真似をさせたくはない。

切り札として使うには最大限有効的に使える時を選ばなくてはならないのだ。

(モーマンタイだよお母さん。それよりも問題は…って、もっと光り輝いてるんだけど?)

『あ…あああ…あああああああああああああああああ
—————っ!』

最早全身が白く発光しているヴァルキリー。

その光の中で彼女は新しい存在に生まれ変わるうとしていた。

『姉御っ！！ 上手く行ったのか！？』

『分カラヌ！ ダガ、奴ヲココデ食イ止メルノミダ！！』

『うーん、すこおおおし、厄介かもねええええ 邪魔してやろう
かなああ。うひひひひひっ』

『ソウハサセヌ！ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン！！』

終始態度を崩しては居ないが、流石にヴァルキリーの状態を危惧し
たらしく、凄まじいスピードでヴァルキリーに攻撃を仕掛けようと
する。

だが、それをカイメイジユウが全力の突撃を仕掛ける事で何とか防
ぐ事に成功した。

しかしそれは彼に大きな隙を与えてしまう。

攻撃を防ぎ体勢を整えようとした所で、全身に激痛が走ったカイメ
イジユウ。

テスカトリポカの10本の爪が彼の全身をくまなく突き刺していた
のだ。

『ばぁん』

『ッ！ ばるきりー！ 後八頼ン…！！』

最後まで彼は言葉を紡ぐ事が出来ずに内部から爆発させられた。

飛び散った肉片はそのままマグネタイトとなってCOMPに収納されていく。蘇生も暫くは不可能なほどオーバーキルされてしまい、完全に戦線から離脱してまった。

それでもテスカトリポカの動きは止まらない。グネグネと動く爪が再びヴァルキリーに襲い掛かる！

だがその爪はヴァルキリーを貫く事は無かった。

『邪魔…だなあ〜？』

『へ、へへへっ、カイメイジュウばかりに良い所は見せらんねえだろ』

『うう、痛いホ。でも、この爪は捕まえたホっ！！』

防ぐ事は出来ないが、変わりに受ける事は出来る。

トナティウとキングフロストが取った行動は自らの身を盾にして攻撃を防ぐ事だった。

勿論このままならば無駄死にであるが、勿論その様な事は先刻承知の上である。

貫かれたままテスカトリポカ向かった強引に突き進むトナティウ。マグネタイトで構築されているとは言え、存在している以上、姿を保っていれば血も出るし肉は削げる。

痛みを堪えつつ、必死の形相でテスカトリポカにしがみ付いた。

あまりの苦肉の策にそのまま突き破る事を忘れ一瞬だけ呆けてしまふ狂神。

『これで…動けないだろ！！ 姉御！ 後は任せるぜ！ キングフロスト、いくぞおおおおっ！ 妖華烈風！』

『了解だホ！ ボク達を氷像に変えて！ コキユートスペイン！』

妖華烈風の風によって威力を増強させたコキユートスペインがキングフロストとトナティウを飲み込んでいく。

見る見るうちにトナティウが完全に凍り付き息絶えるが、その両手は確りとテスカトリポカの身体を掴み離さない状態だった。

そしてコキユートスペインをそのまま身に受けるキングフロスト。

氷結魔法は吸収の為、どんどんHPが回復していく。

『ボクの魔力と生命力が尽きるまで、お前をここに縛り付けてやるホっ！』

『っ！ 邪魔…だよおおおお！』

流石のテスカトリポカも威力が低いとは言え、直撃に近い弱点の魔法を受け続ければ苛立ちも溜まる様だ。

何とか振りほどこうとするがトナティウは勿論、キングフロストを貫いた爪も彼等を切り裂く事も爆発させる事もできない。

常時コキュートスペインで回復と氷結を続けて居る為に、キングフロストを突き破れないのだ。

既に死亡しているトナティウも爪を肉体と腕で押さえつけた状態で氷結し、その氷結はコキュートスペインが放たれる毎に硬くなっている為、上手く動かす事が出来ない。

テスカトリポカが氷結を弱点にしてなければここまでしても無理だっただろうが…これもまた捨て身の戦略と言えるだろう。

そして……ゆっくりと光が収まっていく。

『悪いわね…アンタ達。でも…これで一矢報いられそうだわっ！！
アンタにとっては忘れられないでしょうよ！ この姿…！』

純白の翼を称えた巨大な蛇 ケツアルコアトルが雄雄しく吠えたけ
た！！

ヴァルキリー昇格進化成功 L V 6 9 龍神ケツアルコアトル

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：13817

現在消費MP：802

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：6776

現在消費MP：379

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP：0

カイメイジユウとトナティウがお亡くなりになり、多分ヒーホー君も限界でしょう。

でも変わりにほぼ70レベルのケツアルコアトルさんが登場いたしました。

テスカトリポカに対するカウンターとしては最高クラスかと。

あ、今は蛇の姿ですが、一応は龍神なので人の姿もとれます(だからなんだ

さあ。後1〜2話でテスカは倒せるかなあ。

どうでもいいこと

携帯ゲームにハマって居る私。うん、面白いんです…

お陰で他のゲームなんて全然やってないですよー(笑

その分招待とか大変なんですけどね…ああ…後10人とか遠い(汗誰か手伝ってください！(えー

という訳で。ここの所趣味以上にハマってしまっているものなどありますかー？

私は先程の通りですね！

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

戦闘が長いのは勘弁してあげてください(涙

まとめるのは難しかったです。一応これも勉強になるので、見逃してもらえると嬉しいです。

という訳で次回でこなた達VSテスカさんが終了です。

ゆっきー編は1話程度で終わるから楽でいいや…

人修羅編がちょっと長くなりますがメインなので、許してあげてください。

純白の翼を雄雄しく羽ばたかせるケツアルコアトル。

ギョロリと威圧する様にテスカトリポカを睨みつけるその姿は正に悪魔と言った所だろう。

『ふうん……あんた目つき変わったわよ？ 流石に私のこの姿の前じゃ冷静で居られない様ね』

「あ……笑ってない。あいつ……」

ケツアルコアトルの言う通り、終始笑みを絶やさなかったテスカトリポカが彼女の姿を見た事で初めてその表情を変える。

苦々しい……いや、憎悪を称えた瞳で彼女を睨み返していた。

『うひひひひひ……うひゃひゃっひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ ム力つくねええええ。その姿！ 表情！ 目つき！ 全部全部ぜえええええんぶつ！』

『あら奇遇ね。私もアンタを見てると苛立ってくるわ。ケツアルコアトルである私がアンタを憎んでるし、私も好い加減アンタにムカ

ついでるのよ』

神話においてケツアルコアトルとテスカトリポカは宿敵とされている。

ケツアルコアトルは善神、テスカトリポカは悪神として謡われる事が多く、彼等は何度も戦い続けてきた。

世界を支配する戦いで、お互いを倒しあつたと言つ。

更にはケツアルコアトルが人身供犠を辞めさせた事に怒り狂つたテスカトリポカは最悪の行動を取る。

呪いの掛けられた酒をケツアルコアトルに飲ませ自分の妹との姦淫の罪を犯させ、アステカの地から追いやるなど、お互いを深く恨み続けている存在なのだ。

元ヴァルキリーである彼女はその記憶を少し受け継いでいるだけである。ケツアルコアトルは男神として存在している為、彼女は分霊の様な物である。が、

目の前に居るテスカトリポカは本体かそれに近い分霊なのだろう、目の前に宿敵が居る事でその怒りは頂点に達している様だった。

見た目は…だが。彼が一体何を考えて居るのかはその様子からは全く予想も出来ない。

『むむつ、無視するなホつ！

コキユートスペ…！！』

『つるさあ い』

『あ…う…痛い…ホ…』

「フロストちゃんっ!？」

目の前で抑えている自分を無視された事に腹を立てたキングフロストが再びコキュートスペインを唱えようとするが、その前に全身からテスカトリポカの爪が飛び出てくる。

そのままその爪はまるで生きているかのように蠢きキングフロストをバラバラに引き裂いた。

同時に凍り付いていたトナティウも音を立ててガラガラと崩れていく。

『そろそろく、邪魔なんだよおねえええええええ。 お遊びはこ・こ・ま・でええええええ』

弱点であるはずの攻撃を受け続けても尚、大したダメージにはなっていないテスカトリポカ。

どうやら、先程捕まっていたのも彼にしてみればお遊びの様なものだったらしい。

そのまま殺すよりはある程度の希望を持たせたから殺した方が、何

倍も絶望を抱いて死んでくれるから、と言つ簡単な思考から行つて
いる行動だろう。

あまりにも常識からかけ離れている行動だが、彼にとってはこれが
通常なのだろう。

そのお陰で今こうして戦う事が出来る、死んでも守り通してくれた
大事な仲魔と今回ばかりはテスカトリポカの気まぐれに感謝しなけ
ればならないとこなたは考え、行動を開始した。

「っ！ お遊びね……良いよ。その顔泣くまでぶっ飛ばしてやる。
お前が遊んでいた事を後悔するまでねっ！」

『よく言つたわサマナー！ アイツ等が稼いでくれた時間、ここで
無駄になんかしない！』

「ハリテイーとラケシスは私と一緒にケツアルコアトルの援護！
ブースト切らさない様にねっ！」

『了解しました！ ケツアルコアトル行きますよ！ ラスタキャ
ンデイー！』

『まずは回復を！ メディアアラン！』

ハリテイーのラスタキャンデイーがケツアルコアトルの能力を向上さ
せる。

レベル的には70台のケツアルコアトルでは80台のテスカトリポ

力と正面から戦うには自力が少しばかり低い。

その分を埋める為にハリティー達が支援と回復に回る事になった。

こなたはかなたの召喚の使い時を見極めつつ、持っている銃を構える。

「あいつはデク・ンダ持ちだけどデカジャは無いからねっ！ ケツアルコアトル前衛は任せるよ！」

「切り札はあるようね。ま、使わせないようにしないと…後ろは頼んだわよ、サマナー？」

「おうさっ！ さっさと倒して大樹君のヘルプに行くよ！」

『はいはい…それじゃ！ 行きますか！ 覚悟なさいなっ！ メギドの雷火！』

巨大な顎が開くと同時に辺りに凄まじい轟音と共に雷が降り注ぐ。

逃げる場所さえ完全に塞いでしまう様な雷撃がテスカトリポカに襲い掛かった。

流石にこれだけの雷撃を避ける事は出来ずまともに喰らってしまう。

全力で攻撃を繰り返しても大したダメージを与えられなかった先程までと違い、この一撃はテスカトリポカにかなり痛手を与えていた。

体の所々が焼け焦げているのが分かる。

『うひっ…うひひひひひっ！ いたあい…いたいよおおおお！
よおおくもおおお』

『声は笑ってるけど、顔は笑ってないわねっ！』

『うひひひひひっ！ きいいいいしゃああああああっ！
メギドラオン！！』

「行き成りキター！？ 皆防御専念っ！」

遂に本気を出して来たテスカトリポカがメギドラオンを唱えて来た。
襲い掛かる極光に全員が防御の体制を取るが、その前にケツアルコ
アトルがメギドラオンに突っ込んできた。

『その…程度でええええええええっ！！』

たった一体でメギドラオンの直撃を受けるケツアルコアトル。

着弾の衝撃がこなた達に襲い掛かるが、それは大したダメージには
なっていない。

衝撃が来ない事に気づいたこなたが直ぐに前を直視すると、ボロボ

口になっているケツアルコアトルの姿が見えた。

翼はボロボロで体の至る所から血が溢れ返っているが、即死もせず
に生き残っている。

「ちよっ!?! 何一人でやってるのさっ!?!」

『いつつ…こりゃ。この姿じゃなきゃ死んでたわね……』

「ハリティー直ぐに回復を頼むよ!」

とは言え、樂觀視出来る状態でも無い為、直ぐにハリティーにメデ
イアラハンを指示するこなた。

一瞬切り札を使おうとかも考えたが、流石に今のタイミングで使う
のは悪手でしか無い為、それは思考の脇に避けておく。

だが、それよりも早くケツアルコアトルが動いていた。

『元々がフェニックスだったお陰で体力もまだあるし、今の私には
こんなもあるのよ。メシアライザー!』

暖かな光がケツアルコアトルから放たれた瞬間、体中の浅い傷など
があっという間に回復していく。

そして彼女自身も致命傷に近かった傷が、巻き戻されているかのよ

うに塞がっていった。

『メシアライザー』ディア系の回復魔法の中でも最大級の魔法であり、あらゆるバッドステータスを癒し、同時に怪我なども完全に回復する。

さらにはメデイラアハンとは違い、回復が即効性と言う所が利点だろう。

回復魔法などは使うと回復するまでに若干のタイムラグが存在する。リカーム系などはその際たると言えるだろう。

蘇生魔法は完全に蘇生するまでに時間が掛かるし、回復魔法は致命傷などは回復に時間が掛かる。

だが、このメシアライザーはそのタイムラグが殆ど無いのだ。一瞬の内に全回復したケツアルコアトル、ニヤリと蛇の顔のまま笑うその姿は、ある意味ホラーだろう。

「なんてチート。死んで無ければ一瞬で体勢も回復できるって訳か…こりゃ私の切り札使わないかな？」

（使わないならそれで良いのだけれど、過信は禁物よこなた？）

「大丈夫、慢心なんて出来るほど私は強くないからね。よしっ！ハリテイーは時々攻撃も織り交ぜて動いて！ラケシスも氷結魔法を使いながら牽制！」

言うが早いかこなた達は全員攻撃を開始する。

まずはこなたが動きを止める目的で銃弾を打ち込み、其処にハリテ
イーとラケシスの氷結魔法が襲い掛かる。

二人の魔力程度の攻撃魔法では大したダメージにはならないが、こ
こで凍り付いてしまえば目の前にケツアルコアトルが居る事を考え
ても不利。

その為、大きく回避行動を取るテスカトリポカ。

しかしそれがこなたの狙いだった。直ぐにケツアルコアトルに指示
を出す。

「掛かった！ ケツアルコアトル！」

『任せなさいっ！ 行くわよ！！』

巨体を躍らせて突っ込んでいく彼女。

荒れ狂う暴乱！！

『これはあああ、きけえええん！ 逃げっ！ がふあ！？』

目の前に迫ってくる巨体を避ける為に逃げようとしたが其処にこな

そんなことをすれば自分も大ダメージは免れないのだが、このままではどちらにしても殺されてしまうだろうとふみ敢えて行動を起す。

爆音と共に二人は吹き飛び、お互い逆方向の壁に叩き付けられた。

『っ…やるわね…』

『今回復します！　メディアラハン！！』

タイミング良くハリティーのメディアラハンがダメージを受けたケツアルコアトルを癒していく。

それに対し、テスカトリポカは自分の傷を癒す事もせずゆっくりと立ち上がった。

「まあ、当然だよな。回復魔法は無いんだし。寧ろあつたら私達詰んでるけど…さて…」

彼女達のお陰で、現在はかなり此方に追い風が吹いていると考えているこなた。

しかしあれだけの悪魔がこのまま簡単に倒せるとは考えていない。

そもそも一撃一撃は此方よりテスカトリポカの方が数段上なので、一歩間違えればあつという間に崩される、強いて言えば砂上の楼閣

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：14325

現在消費MP：887

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：8937

現在消費MP：586

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP：0

ケツアルコアトル

合体順：カハク ペレ フェニックス ヴァルキリー ケツアル

コアトル

「名前」：ケツアルコアトル 「種族」：龍神（異種）

「現在LV」：69 「属性」：L-C 「召喚MAG」：

1400

「LvUpに必要なMAG」：277500MAG

「ステータス」

HP：587 MP：456

力：49 知：42 魔：52 体：45 速：45 運：41

「相性」

剣： 物： 技： 火：+ 氷： 電： 風：
魔： 心： 禁： 聖： 呪：× 状： 万：

「所持スキル」

・ 火炎ハイブースタ ・ リジユネレーション？

・ マハ・タルカオート ・ 親愛 ・ 衝撃無効 ・ 火炎吸収

・ 身体変化

「スキル」

・ トリスアギオン？ 敵単体に火属性絶大ダメージ。 防御貫通

・ メギドの雷火？ 敵全体に電属性極大ダメージ。

・ 地獄の業火？ 敵全体に火属性極大ダメージ。

・ ファイアブレス？ 敵複数に火属性特大ダメージ。 7～12

回攻撃

・ 荒れ狂う暴乱？ 敵全体を剣属性極大ダメージ。 3～5回

攻撃

・ メシアライザー 味方全体のHPと状態異常全回復。

・ サマリカム？ 対象の死亡、昏倒を回復。HP回復：特大

火炎ハイブースタ：『火』属性の威力を1.5倍する

斬撃ハイブースタ：『剣』属性の威力を1.5倍する

マハ・タルカオート：戦闘開始時、味方全体にタルカジャ？をか
ける。

リジユネレーション？：一定時間毎にHPとMPが回復する。

親愛：対象を強く想っている。高確率で対象をカバーする。

衝撃無効：風属性を無効化する。

火炎吸収：火属性の攻撃を吸収する

身体変化：全身を自由自在に変化できる。

怒っている？ テスカトリポカ。

何にせよ大ダメージを受けてしまったようで、余裕が無さそうですね。

こなたの切り札は次回当たり出せるといいな！。

はてさてどんな切り札でしょう！ 当てた方には！ 特に何もありません（えー

どうでもいいこと

仕事が大変です。

いえ、お仕事自体は楽なんですけど、終わる時間と体調に問題がありますよ！。

いやぁ… ほぼ24時間寝ても疲れが取れないとか、余程疲れてるんだなあ（笑

だれか労わってあげて下さい（えー

という訳で、皆さんは疲れが取れないとか言う時はありますか？

そんなときはどうしてますか？

栄養剤は私のお友達です（みー

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

Continue150 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化?〽〽〽(前書き)

祝150話!!

無駄に長く続いてますねえ、楽しんでもらえてると良いのですが。

かなり遅くなりました。

仕事も色々忙しくなってきたのと、疲れがありまして(言い訳
むむむ、が、頑張ってますよ!)

では、TESLA編ラストどうぞ!

メギドラオンとトリスアギオンがぶつかり合う。二つの魔法はその場で反発しあいながら闘ぎあっていた。

少しでも力を緩めれば自分の魔法共々、己の身を完全に消滅させるだろう。

火炎魔法を吸収出来る彼女ならトリスアギオンは平気だろうが自分のトリスアギオンと拮抗している様な威力のメギドラオンの直撃には耐え切る事は出来ないと踏んでいる。

お互いに魔力を高め、押し切ろうとするケツアルコアトルとテスカトリポカ。見た目的には拮抗している様に見える。

しかし

（つう…私の方が少しだけ押し負けてる…純粋なレベルの差…後は魔法の差ね…）

徐々にだがトリスアギオンの方がメギドラオンに押されていた。

以下に宿敵同士とは言え、力量が全く同じという訳ではない。ケツアルコアトルのレベルは69でテスカトリポカは81レベル。

10レベル差を個人で如何にかするのは難しいと言わざるをえないだろう。

それでも何とか拮抗しているように見えるのは、彼女の魔力が本来以上に高いからに他ならない。

『ぐっ……っ……っ！』

『うひひ……ひっ……』

余裕の無い表情のケツアルコアトルに対しニヤリと笑うテスカトリポカ。

このままなら確実に押し切られてしまうだろう。

だが、ケツアルコアトルは一人で戦っている訳ではない

「という訳でその隙貰ったって所だねっ」

『っ！？ ぎっ！！ ぎいいういっ！』

魔法の撃ち合いで動けない所に至高の魔弾コピーを放つこなた。

少しでも魔力を緩めれば魔法に飲み込まれてしまう為、回避行動も取る事が出来ず直撃を受けてしまう。

弾丸は魔力の余波に煽られ本来狙った頭部より大幅にずれたものの、肩を完全に打ち貫いた。

その所為で魔力を送る力が弱まりトリスアギオンがメギドラオンを押し返していく。

「ケツアルコアトルツ！ 気にしないで全力で良いよっ！ 足りない分は私が補うからねっ！」

（ふふ…本当に頼りになるわね、サマナーツ！ アンタの期待、答えてやるうじやないのっ！）

こなたの援護に感謝しつつ、彼女は全力で魔力をトリスアギオンに込めた。

今度はトリスアギオンがメギドラオンを徐々にだが押し返していく。直ぐに体勢と整えようとするテスカトリポカにこなたが攻撃しそれを許さない。

戦況は確実に彼女達に向いていた。

向いている様に見えた

『うひ…うひひひひ…それじゃあああああ…これはあああああ
どうかなああああああっ！　　メギドラオン！』

『…なっ！？　が、があああああああっ！？』

魔法を唱えて拮抗している中で、再度メギドラオンを唱えるという荒業をやったのけるテスカトリポカ。

少しでも制御を間違えてしまえば、暴発しそのまま消滅する可能性があったのに彼はそのリスクを無視して再びメギドラオンを放ったのだ。

こなたのCOMPでも調べる事が出来なかった隠しスキルのお陰なのかは分からないが、2発分の魔法がトリシアギオンを多い尽くしていく。

あまりに一瞬の出来事で避ける事も出来なかったケツアルコアトルに極光が襲い掛かる。

(ちょ…そりゃ…ないでしょ………………ごめん…サマナー)

進化しても結局はこなたの役に立てなかった事に情けなさや悔しさを感じながら彼女は心の中で呟く。

メギドラオン2発とトリシアギオンの炎。直撃してしまえばマグネタイトも残さないほどオーバーキルされてしまうだろう。

スローモーションの様にゆっくりと襲い掛かる極光を見つめながら彼女は最後の時を待った。

こなたの魔力とかなたの魔力の強さによって加速出来る時間は変わるが、今のこなた達は1秒が20秒や30秒に引き伸ばされている。代償としてこなたの宿命と、この能力が終わると同時に生命力と精神力が大幅に奪われてしまいがそれでも勝つ為には必要な能力だろう。

『こなた、あまり時間は無いわ。ここで決めちゃいましょう』

「おっけー。と言う訳で、諦めかけてたケーちゃんに指令を出しますー！」

『誰がケーちゃんよっ！ ってまあ…言われてもしょうがないわね。時間が無いんでしょ、何すれば良いの？』

魔法が直撃する直前にこなたの言う通り諦めてしまっ居た彼女に、こなたのつけた渾名に云々つけられないとスルーし彼女の指示を待つ。

「いよっ！ どっちにしてもこの後戦闘不能なんだからバッチリ決めようかっ！ ここで出来る限りの全力叩き込むよっ！」

『分かりやすくいいわね。了解したわサマナー』

「あ、そうそう。ついでにね」

『何ん？』

「全部終わつたら人の姿になってね、その格好のままじゃ外出たら色々あれでしょ？」

『はいはい。と言うか私は悪魔なんだから、今更でしょそれ？』

「ほっほっほ。ツンデレ系おにやの子が蛇になんてなつたら世界の損失だよっ！」

『……………んじゃ行くわよ』

「スルーっ！？ 流石だよケーちゃんっ！」

馬鹿なやり取りのお陰かりラックス出来たケツアルコアトル。

こなたがこれを狙っていたのかは分からないが、それでも心の中で感謝していた。

ゆっくりと通り過ぎていくメギドラオンの横を二人で駆けながら、こなたは銃をケツアルコアトルは両手から炎を呼び出す。

奥でスローモーションの様に動くテスカトリポカ、此方が光速で動いているように見えるのだろう、何とか逃げ出そうと動き出すが二人にはゾンビが歩くより遅く感じている。

実際に彼女達が早くなっている訳ではなく、時間があなたの能力で加速しているだけなのだが、相手には似たようなものだろう。

強いて言えば、小竜姫が使う『超加速』と似ている、と言うかその

ままとも言える。

あつという間に逃げ道に回り込み銃口を向けるこなたと、巨体を唸らせ相手を睨みつけるケツアルコアトル。

「いくよん、ケーちゃん」

『はあ、もう良いわよそれで。だけど…私も言わせて貰うわよ。…
………トチるんじゃないわよ、「こなた」！』

初めて自分の名前を呼んだケツアルコアトルに驚いた表情を向けるこなた。

だが、直ぐに嬉しそうな表情になり、銃をテスカトリポカに向け、彼女は叫ぶ！

「行くよ！ この一撃に…じゃなくて！ 銃身が焼け付くまで撃ち続けてやるっ！ 至高の魔弾「コピー」！」

『おーけー。こなたっ！ 燃え尽きなさい！ その全て！ トリ
スアギオン！！』

爆炎と光の弾丸が同時に放たれ、寸分変わらず弾丸は悪魔の頭部を、火炎は全身を焼き焦がしていく。

だが、それだけで終わる事はない。

こなたが先程叫んだ通り、自分のMPと弾丸が続く限り至高の魔弾コピーを撃ち続けるこなた。

そしてメギドの雷火やトリスアギオンを交互に唱えテスカトリポカを攻撃し続ける。

『……………！！……………う……………ひ……………！！？』

激痛に身を振っているのか、逃げようとしているのか分からないがゆったりとしたスピードで悶えているテスカトリポカ。

その間も連続で銃弾と魔法が襲い掛かる。

「これで　！！」

『ラストオっ！！』

最後の一撃がテスカトリポカに命中した瞬間、二人は立つ事も出来ない虚脱感でその場に倒れ込んだ。

オーヴァードライブがその効果を終了し、代償として生命力と精神力を根こそぎ奪っていったのだ。

起き上がる事も出来ずに、倒れながら目の前で炎に包まれながら踊っているテスカトリポカを見つめる。

『ぞまあ…みなさいよ…』

「つうう…小 が… 錦が…これで倒せなかったらチートって呼んでやるう…」

(…こなた…)

このまま相手がまだ戦える状態だった場合、動けない二人はそのまま嬲り殺しにされてしまうだろう。

雪之丞も未だに戦っているし、大樹達は人修羅との戦いで此方に近寄る事も出来ない。

最悪の場合、もう一度無理矢理降臨して攻撃をとかなたが考えていると、炎の中から声が聞こえてきた。

『うひひ…ひひひ……………』

「っ！ こいつ…まだ…」

動かない身体を無理矢理起こそうとつするこなただが、思うように動かせず自由になる顔だけで炎の中で笑うテスカトリポカを睨みつける。

ケツアルコアトルに至っては、ある意味殆ど戦闘不能と言っても過言ではない。暴れ狂うマグネタイトを抑えつけていた所為で全身に負荷が掛かりこなた以上に動く事が出来ない状態だった。

出来れば直ぐに大樹とみゆきのヘルプに回りたいと考えているこなただが、それは難しいと言える。

他に大樹のヘルプに回れそうなのは、ツイツイミトルとタイムマンで戦っている雪之丞なのだが。

「…あつちもそろそろ、かな。頼むよ、私も直ぐ行くから、大樹君達を…!!」

願うようにこなたが雪之丞の方を見てみると、あちらもそろそろ決着が付きかけていた

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：17832

現在消費MP：887

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：19800 / 19800

撃破

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP:0

実は仮面ライダーカブトは全然知りません（汗）
クロックアップと言うか超加速を自分と味方に与えるというチートスキルを

使ったこなた+かなた、そしてケーちゃんの人で漸く撃破です。
本当はタイムツイスター（HPMP全回復）に使用と思ったのですが、それはあえて

通常スキルにしておきました（えー

さて、今回はゆっきー編ラストです（えー

それが終われば残りは駄目修羅君VS佐藤君チーム、そしてかがみん達の出番

2章ももう直ぐ終わりそうです。

どうでもいいこと

今日は焼きプリンを食べました。

あの独特な感触が美味しいのですよ～。ちよつと割高なので私には高級品なのですけどね（涙

でも、たまには豪勢にしてもいいですよねっ！（えー

皆さんのちよつとした贅沢はどんなものですか？

あ、ついでに私に奢ってください（黙れ

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

Continue 151 へ愛情と憎しみの狭間で踊る道化???? (前書き)

ふふ…書く時間がありません。

お休みが欲しいなう…でも休むと生活が…(涙

頑張って書かないといけませんね。ではではどうぞです。

Continue 151 〱愛情と憎しみの狭間で踊る道化？？？〱

雪之丞サイド

『はっ！ あいつら中々やるじゃねえか』

テスカトリポカを降したこなた達を見て笑う雪之丞。

正直に言えばこなた達では足止め程度しか出来ないと考えて居たらしく、この結末は彼にとって意外であり、同時に興味の沸き立つ結末でもあった。

目の前に居るツイツイミトルと同等のレベルの悪魔を殺しきる事が出来たこなた達といつか戦ってみたいと考え、その前の目の前の悪魔を倒す事に集中しなおす。

『きひひひひひ。やあ〜れやれえ、だねえ〜。まさかあんなのに倒されるなんてええええ』

『うるせえよ無個性が。正直口調が同じな所為で、同一の存在かと突っ込みたくなるじゃねえか』

テスカトリポカが殺された事に何の感情も見せる事の無い彼女？
ではあるが、その姿は既に満身創痍だった。

それは雪之丞も同じであり、どちらも戦える時間はあと僅かと言っ
た所だろう。

こなた達が全力を尽くし漸く倒す事が出来た悪魔と同等のレベルを
相手にたった一人で互角に戦えるのが異常なのだが。

『さあて…そろそろ最後と行こうじゃねえか。なあ？ 俺はてめえ
如きで躓いてる訳にはいかねえんだよ』

『最後ねええええ、きひっ、きひひひひひひひひひ』

残っている全身の魔力を右の掌に集めていく。

右手が猛烈に光輝き、暫くすると其処には無色透明で六角形の盾の
様な物が現れる。

サイキック・ソーサー

彼の最高の親友であり、最大のライバルが使っていた最初の技能：
いや霊能力の一つ。

本来は相手の攻撃を防ぐ盾の役割を持つ初級の霊能なのだが、相手
に叩きつける事で内抱している霊力が大爆発を起こし相手にダメー

ジを与える事が出来る。

使い方によっては攻防一体の効果を持つ技能だ。

『こいつは俺のダチから教わった技だ。これにギリギリまで蓄えた俺の魔力とマグネタイトが込められてる。分かるな？』

『きひっ……………ばらしても、いいのかなあ？ 避けるよ？
防ぐよ？ 無効化するよお？』

ツイツイミトルが言う様に、フェイントの様に使えば命中させる事も容易かっただろう。

だが敢えて雪之丞はそれを相手に伝えた。

確実に当てると言う絶対の自信がある訳ではない、策がある訳でもない。

だが…

『馬鹿野郎が、コイツを正々堂々テメエに叩きつけてこそ、俺の勝利だろ？ まあ、俺のダチなら余裕でやりかねえが、俺は俺の強さを示さなくちゃいけねえ』

その為には自分の全力で、最後の一撃を叩き込む必要があった。

どこまでも貪欲に実力を示しての勝利を求める彼、悪魔なつた今でもそれは何も変わらない。

そして、そんな雪之丞を笑いながら見つめているツイツイミトル。

彼女が何を考えているのかはその笑顔からは何も見極める事は出来ない。

相棒の様な存在であったテスカトリポカが死んでも心乱す事無く、いや…全く気にせず雪之丞を見て笑い続けている。

(思い通りに進んでいる。嬉しいねえ、嬉しいねえ、本当に嬉しいねえ、このままぜえええんぶ、進めようかああああ　そ・の・た・め・に・は　)

そう、この状況は彼女にとって最高とも言える状態だったのだ。

自分が死ぬ瀬戸際だと言うのにそれさえも気にしてはいなかった。

種は既に蒔き、準備は整え、仕上げは近づいている。

(絶望は直ぐ其処、もう其処、そして、最後の絶望の種は今蒔ける、さあ、さあ、絶望してもらわないとねええええ、絶望が必要なよ、必要な、ニユクスじゃだめ、あれじゃだめ。

もっともつと深い絶望を感じてもらわないと、絶望に甘えて、絶望に抱きついて、絶望に堕ちて、絶望に酔いまして、)

彼女は笑う、晒う、嗤う。

目的が近づいているから、その為に準備はした、用意もした、お膳立てもしたのだ。

後は最後の一手が必要。しかしそれも直ぐに終わる。

『……………行くぞっ！！　おおおおおおおおおおおおお
おっ！』

『　ジハード　』

高速で突っ込んでくる雪之丞向かって、ツイツイミトルの持つ最大のスキル『ジハード』で迎え撃つ。

メギドラオンすら超える大火力がそのまま直撃する。

全てを崩壊させてしまうほどの衝撃が雪之丞の纏う魔装術を少しづつ削り取っていく。

『きひひひつ　ばああああかだねええええ　何自分から突
撃してるのさあああああああ』

『ぐっ、っおおおおおおおおおおおおおっ！　この程
度おおおおおっ！…！』

『!?!』

ジハードの直撃を受け、魔装術が剥がされ生身の肉体すら削られても尚、正面にサイキック・ソーサーを展開させながら突き進んでくる。

全身から血…いやマグネタイトが噴出しているが、サイキック・ソーサーを展開している右手と正面だけは傷ついても居ない。

『どつちにしろ、お互いに後一撃…なんだろ？ ならばそれを突き破って、てめえをぶっ殺してこそ、俺の勝利が輝くんだよっ!』

『馬鹿じゃないのおお?』

『馬鹿だろうが何だろうが…これが俺の決めた道だあああああああああっ! うおおおおおっ!』

咆哮を上げる雪之丞。

『抜けたぞおらあああああああああっ!』

『!?! きひっ! ジハー』

『遅えええええええっ!』

ごとり、とツイツイミトルの首が落ちると同時に、その姿はサラサラとマグネタイトの滓になって消えていく。

これで……道は……完全に……定まった……
……絶望へ……ようこそ……愛しい方

最後に微かに彼女の声が響き渡り、ツイツイミトルは完全に消滅した。

その消え去った場所を険しい眼差しで見つめる雪之丞。彼は最後に響いた声を彼は完全に聞き取っていた。

『ちっ…もしかしてあの野郎初めからこうするつもりだったのか…？』

無事な左手をきつく握り締める雪之丞。

彼の考えている事が当たっているならば、今回の戦いははっきり言って出来レースの様な物になってしまふのだ。

全力で戦っていた雪之丞にとってそれは許せる内容ではなかった。

『まんまと良い様に操られてたつて訳かよ。何を施したんだかしらねえが、俺がためえに本当に勝つ為にはそれを防ぐ事が必要らしい

な
』

そう呟くと白地のシャツの胸ポケットに収められていた、宝玉を取り出し左手で握り潰す。

それと同時に全身を襲う激痛と右手の感覚が元に戻っていくのが感じられた。

HPを全回復する虎の子のアイテムだが、完全に回復する事は出来ていないようで、右手がまだ若干麻痺している。

『8割って所か。まあ、この程度なら十分なハンデだろ』

そう言うのと視線を奥の方に向ける。

今も尚ダメージを満足に与える事が出来ていない大樹達と終始いやらしい笑みを浮かべている人修羅がその瞳に映った。

大樹が指示を出し、それに忠実に仲魔達が。そして相手の隙を見つけてみゆきが飛び掛っていくが全くダメージを与えられていない。

その様子に若干おかしさを感じるが、それでも彼が出来るのは単純でありたった一つ。

『はっ、これだけ動けは十分だ。それじゃあ…今度は俺が勝つ為に、目の前の邪魔者をぶっ飛ばすかっ！』

マグネタイトは限りなく消費し、魔装術すら纏う事が出来なくなっているほど消費しているが、その程度で彼の覇気は消える事など無い

凄まじいスピードで飛び出しながら人修羅向かって彼は駆けた !

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：20455 / 20455
撃破

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：19800 / 19800
撃破

人修羅

現在累積ダメージ：0
現在消費MP：0

がんばったこなたん達に対したった1話で終わりを告げたゆっきー戦。

そして、ゆっきー君が感じた出来レースや、ツイツイミトルが呟いた意味深な

言葉は何なのでしょうねえ(えー

さあ…そろそろ最終局面です。

流れるように2章終わりに持っていきたいですねえ。

どうでもいいこと

お仕事が忙しいです(汗

具体的に言うとお昼休みすら無くなりました(汗

ご飯食べる時間すらないほど忙しいとか…正直しねるのです…

朝4時半には起きて、帰りは18時過ぎで色々なので、大変です

よう…

誰か元気を分けてください！

でもちよこちよこ携帯は弄ってる私。

といますかこれが無ければ多分私泣いてるかも(えー

さあ…新しい招待を後二人呼ばないとです！ 誰か助けて！。

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

Continue152 〽愛情と憎しみの狭間で踊る道化? ? ?〽 (前書き)

巻きますよ〽巻いていきますよ〽

という訳で、佐藤君達のサイドが漸くです！ もう少しで二章も終

わりだ…

時間が欲しいなあ…

ではではどうぞです！

大樹・みゆきサイド

誰もが見惚れてしまう程の美人とは正に彼女の事を言うのだろうか。

金色にたゆたう九本の尻尾を揺らめかせ、自信に満ちた、そして蔑んだ表情で人修羅…いや井上の前に立ちはだかる大悪魔・ダツキ。

大樹の所持する仲魔の中でも最強の力を持つ彼女が不敵な笑顔で笑っている。

「な、何だよ…てめえ…!! 雑魚が何人増えた所で俺に勝てるんでも思ってるのかあ!？」

突如現れたダツキに向かって叫ぶ井上。

明らかに大樹達より格上の存在が現れた事で驚きの表情を見せていたが直ぐに自分を取り直し構え始める。

そんな中ダツキは一人気だるそうに首を振っていた。

「何だよ…おいっ!?!? 俺を馬鹿にしてるのかその態度はよおっ!」

『ふう……格が知れるわねアンタ。そうやって凄めば相手が脅えると思っっているのかしら。人間じゃあるまいし』

「んだと…俺を馬鹿にしてるのか、このアマっ!?!」

『馬鹿にする? する訳無いじゃない』

ダッキが言った言葉にキョトンとした表情になる井上。

だがそんな事を全く気にせずにダッキは言葉を続ける。

『それ以下の存在、蛆虫以下に馬鹿だなんて勿体無さ過ぎよ。その辺理解できないなんて、本当に人修羅なの? 五流以下ねえ』

「っ!! 流石あの佐藤の仲魔だなあ…こんな雑魚で雌豚程度がここまで俺をコケにするんだ…てめえは犯す価値もねえ!! 八つ裂きにしてやるぜええ!! 至高の魔弾!!」

ダッキの辛辣な一言によりブチ切れる井上。凄まじい形相で口を開きマンティコアを殺した時と同じ至高の魔弾を打ち込む。

しかしダッキはそれを少し身体を動かす事であっさり回避してしま

う。

自分の最強の技があっさり避けられた事に驚きを隠せない彼だったが、追撃が来ないように直ぐに攻撃態勢を整える。

だが

『何やってるのよ、アンタ。馬鹿見たいねえ、あ、御免なさい。それは馬鹿に失礼だったわ』

掌をヒラヒラさせて馬鹿にした態度を取り続けるダツキ。

攻撃から身を守るために姿勢を整えていた井上にコレでもかと言うほど馬鹿にした様な言葉をぶつけていく。

『所詮その程度よねえ。実力が足りてないんじゃない？ お・ば・か・さ・ん』

「ぐ…ぐあああああああああああつ！ 殺す！ 殺す！！
てええええめええええええええええつ！」

「っ！ ダツキ！ 全員彼女の援護を！！」

猛スピードで襲い掛かってくる井上に対し大樹が仲魔達に指示し援護させようとするが、それより何倍も彼の方が早い。

そしてそんな中、ダツキは不敵な表情を崩さず、そして攻撃を避けようともせずその場に立ち尽くしている。

「しいいねええええええええつ！」

「ダツキっ！！」

『ばかねえ。面白い位にハマってくれちゃって』

井上の放つ全力の一撃がダツキの顔面を捉えるその瞬間 !!

『オラアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

「ごっ！ ああああああああああああああつ！！？」

横から思い切り殴りつけられ吹き飛ばされる井上。

あまりに突然の事で回避も受身も取る事が出来ず壁まで吹き飛ばされた。

本来なら壁を突き抜けるようなほどの衝撃なのだが、この部屋は特殊な結界で護られて居る為、壁を突き破る事無くそのまま激突するだけに留まる。

『おいおい、あの程度も避けられねえのかよ。タフさ以外は大した

事ねえヤツなのか？ おい』

『あら、助かったわ。ありがとう』

『はっ、何言つてやがる。俺が向かって来るのを知つててアイツを煽つたんだろ？』

「雪之丞…成程、だから」

井上を吹き飛ばしたのは、此方に向かつてきていた雪之丞だった。

此方に雪之丞が来た事で、改めて余裕が出来た大樹はこなたが居た場所を見る。

其処には倒れているものの、しっかりと生きているこなたの姿を捉える事が出来た。

大樹が見ている事に気づいたこなたは、辛そうに身体を動かしながらも笑顔でサムズアップしている。

「そつか…あの二体は。全くとんでもないね」

「そうですね、流石は泉さんです。後は私達が頑張らないと」

『はいはい、会話は其処まで。あの程度で倒せるなら苦労しないでしょ。大樹、アンタは人修羅の周りを良く調べておきなさい。多分アイツの謎が分かるから』

「謎…か。それにしても随分と余裕の表情だね、勝算はあるのかな？ 僕としてはそれだと嬉しいんだけど」

レベル的に大樹を大幅に上回っているとは言え、人修羅と化した井上のレベルには到底追いついていない。

それでも尚、自信も態度も崩す事の無いダツキを見て勝算があるのではと考えてしまう大樹だが、ダツキはあっさりと首を振る。

『アンタね、絶えずメディアラハンかけてる様なチートキャラをどうにか出来る訳無いでしょ？ アイツを何とかしたけりゃアンタがその謎を見つけるのよ』

『うわー、あっさり言っただけだね。自信たっぷりに出て来ておいて『勝てません』って、出てきた意味無いじゃん』

あまりダツキの事を好いていないアリスが、少しばかり棘のある言葉を吐くがダツキは全く気にする事無く倒れ付している人修羅を見ている。

『む、無視とっ少しばかり強いからってええええええ！』

『ま、まあまあアリス様。ダツキ様の事ですからきつと何かあると』

激昂するアリスをなだめる様に周りてふよふよしているフォルトゥ

ナ。

どうやらアリスとダッキの相性は最悪の様だった。

『くつちゃべるのは終わりだ、アイツかなり切れてるぞ？ 構えな』

言葉を紡ぐと同時に前に立つコウモクテン。

アリス達も気持ちを直ぐに切り替えて何時でも動けるようにしている。

ゆっくりと起き上がる井上、ダメージは最早完全に回復している。

しかし表情は怒りによって恐ろしい程に歪んでいた。

『強い強い言ってる割には大した事無いわねえ。力に振り回される様じゃ、実力だなんて言わないわよ？ ひ・と・しゅ・ら、君？』

「こんな程度：俺に：俺に：効くと思つてやがるのかよ…！ 俺は！ 俺は人修羅なんだ！ 人間も悪魔も超えた存在なんだぞっ！ てめええええらああああっ！」

『よく吠えるわねえ。声が枯れないのかしら？ で？ 次はどんなおままごとをしてくれるの？』

劈くような叫びを上げ、ダッキを睨みつけるが全く意に返さない彼女。

それを見て更に怒りを燃やすが、過剰な怒りは集中力を奪うものである

「この雑魚がこの俺をつ！　っ！？　ちいいいっ！！」

『ほう…？　流石に避けたか。なら、どんどん行くぜっ！』

首を刈り取る様に横から叩き込まれた蹴りを回避する井上。

其処には不敵な笑みを溢す雪之丞が居た。

避けられても気にする事無くラツシュを続けていく。

常人には最早何が起きているか理解する事が出来ない程のスピードで苛烈な連続攻撃を叩き込むが、その全てを彼は捌いて行く。

「てめえは後だ！　邪魔するんじゃないやねえよっ！」

『アホかテメエは！　そんな都合知ったことかよっ！　オラオラオラオラオラッ！！』

「ちいいいっ！　雑魚の癖につ！！」

自分を馬鹿にしたダツキを先に殺したい井上に対し、そんな都合など知った事では無いとばかりに攻撃の手を緩めない雪之丞。

先程まで全力を賭してツイツイミトルと戦っていたとは思えない位に疲れを見せる事無く攻撃している。

宝玉で回復したとは言え、彼自身が呟いた通り本調子には程遠い状態なのだが、そこは英雄・伊達雪之丞、疲労などあっさりとは無視してのけていた。

『楽ねえ。ほら、今の内に色々調べなさいよ。後数分は持つでしょう？』

「…楽勝ムードになってるけど、実際はそうでも無いんだよね…と
言うかダツキ。君さっきから何にもしてないよね、あいつを馬鹿にするだけして」

召喚されてから一度も攻撃していないダツキ。

能力的にも十分脅威のスキルを持っているにも関わらず、先程から彼女がやっている事といえば、井上を馬鹿にする事だけだった。

主に攻撃しているのは乱入してきた雪之丞であり、彼女ははっきり言えば何もしていない。

『私の様な弱い悪魔がそんな野蛮な事出来る訳ないでしょ？ ま
たく失礼しちゃうわね』

『何あれ、突っ込み待ちなのかな？』

「あ、あははは…凄いい方ですね」

確かに…

「何にせよ、ダッキの言う通りだね。今の内に調べさせて貰おう」

COMPを使い辺りを隈なく調べ始める大樹。

何か見落としている部分はないかと、懸命に井上を含めて調べていくが、それらしいものは未だに見付からない。

もしかしたら調べ切れていない能力に隠されているのではないかと、より深くアナライズしていくが早々上手く行く訳も無かった。

(さあて、あのペースなら持って1〜2分つて所かしらね)

何もしていないと思われるダッキであるが、彼女自身現状を打破すべく思考していた。

現在は雪之丞が井上を抑えて居る為に時間があるが彼女の予想通り、雪之丞が押され始めてきた。

そもそも本調子ではない雪之丞と、明らかにステータスも格上であり常時回復している井上とではどちらが上かは自明の理と言える。

この間にもダッキは次なる手を考えて居た。

(上手い具合に興奮してくれてるし、馬鹿は扱いやすいわね。これで冷静さは奪った、となれば次は余計な事を考えさせない為に思考を集中させる事だけど、これも私に狙いをつけさせる事で如何にか出来たわね。後は時間かしら、ま、多少なら踊ってあげるわよ)

『ダツキ…様？ 何故そんなに余裕そうなのですか？』

ふよふよとフォルトゥナが近づいてダツキに話しかける。

詰みに近い状態だと言うのに全く焦る事もしていない彼女を見て不思議に思っていた。

何か起死回生の一手を持っているのかと淡い期待を持ちつつ。

『潜ってきた修羅場が違うのよ修羅場が』

『さっきか弱いって言ってた癖に』

『やかましいわよ永遠ロリー』

『んなっ！ 成長するわよきつと！ アリス舐めないでよねっ！』

「アリスは永遠の少女なんだけど、突っ込む所じゃないか…」

ガーンと怒り出すアリスを無視してダツキは続ける。

『何で余裕かってね、単純よ単純。たかがレベルが高いだけのお子様
様に私が負けるとでも思ってるの?』

『だがよ、あんな常時回復野郎をどうにか出来るのか? あんたでも』

『さあてね。そもそも私は戦う悪魔じゃないの、私がなんだか忘れた?
ダツキよダツキ。金毛白面九尾の狐。その真価は戦い何かじゃないわ』

ココよ、と人差し指で頭を数回突く彼女。

その自信に満ち溢れた表情に、大樹やみゆき、仲魔達も少しずつ士
気を取り戻していた。

だが、それとは裏腹に雪之丞と井上の戦いは完全に井上のペースに
なっている。

初めこそ押していた雪之丞だったが、ここで力量の差と疲労が襲い
掛かる。

「きひひっ! どうした? どうしたどうしたどうしましたあ?
スピードが落ちて来てるぞ雑魚さんよおっ!」

『ハッ! まだまだこれからだぜっ!』

(とは言ったものの、やべえな…このままじゃ間違いなく競り負ける。ちっ…)

常に全力で攻撃を続ける雪之丞だが、井上にとってこの程度の攻撃など余裕でどうにか出来る程度でしかない。

ダッキを殺すのを邪魔された分、目の前に居る雪之丞で腹いせをしようと、態と雪之丞の攻撃に合わせていた。

それも全くの互角ではなく、少しずつ自分が勝るように鬺るようにペースを上げていく。

「弱いなあ!? きひひっ! 弱いのは罪だぜえ!? この程度で俺に戦いを挑む何ぞ100兆光年はええっ!」

『光年は距離だっつーのっ!』

「う、うるせえっ! 少し間違えたただっ! そろそろ死ね! ゼロスビート!」

普通に間違えた事を、こともあるつに脳筋そのものに見える雪之丞に指摘された事が悔しかったのか行き成り全力を出してくる井上。

今まで遊んでいた為使わなかったスキルをここぞとばかりに放つていく。

現状押されている雪之丞にその攻撃を回避する事は出来ず、悉くが

命中していった。

『がはっ！ き、効かねえなっ！ てめえの様な甘ちゃん攻撃なんぞよおっ！』

「きひひひっ！ なら効くまで続けてやるよっ！ マグマ・アクシス！ 螺旋の蛇！ ついでに喰らいなっ！ 至高の魔弾っ！」

『うっ！ ぐふっ！ ぐああああああああああああっ
！！』

立て続けに放たれる即死級の攻撃をまともに喰らってしまい吹き飛ばされる雪之丞。

壁に激突しずると落ちて行くが、その姿は上半身しかなかった。

あまりの衝撃に胴体を突き破られたのだ。

下半身は先程まで立っていた場所にあるが、徐々にマグネタイトと
なっって消えていく。

「おおおっと、悪い悪い、少しばかりやり過ぎたなあ。きひひっ、完全に消滅かあ？ オイ？ 所詮唯の雑魚が粹がるからこうなるんだよ？ 俺を誰だと思ってるんだ？ 人修羅様だぜ？ さっきまでテメエが戦ってた様なクズで雑魚な悪魔とは格が違うんだよ、か・か・が！ おいおい分かりますかあ？ 日本語分かってますかあ？」

馬鹿にしたように雪之丞に指を指しつつ下卑た笑いを漏らす井上。
上半身だけでその場に崩れ落ちている雪之丞を思い切り馬鹿にしていく。

聞くに堪えない程度の低い罵詈雑言が延々と並べられて行く中、必死に戦った彼を馬鹿にする井上にみゆきが強い不快感を示す。

「酷い…何故あそこまで言えるのですか…!!」

拳を強く握り締め見ている事しか出来ないみゆき。

自分が雪之丞を助ける為に飛び込んでも返り討ちに会う事が分かりきって居る為だ。

気を良くした井上は雪之丞の頭をグリグリと踏みつけて笑っている。

「……………」

「佐藤さんっ！ 何故黙ってるのですかっ!!」

「……………アイツにそんな良心に訴えても無理だよ。そんな事している暇があるなら雪之丞が稼いでくれた時間を有効に使っ」

大樹にも思う所が無い訳ではない。

雪之丞は協力しているだけの間柄とはいえ、彼の事は知らない訳ではないのだ。

漫画で見た彼は、とても熱く強く、立派とは言えないがここまで言われる男ではない。

心の海の中ではペルソナ達が怒りを顕にしているのも分かる。そして…何よりも怒りを覚えているペルソナも…

(あの野郎…確かに雪之丞はアホでバカでバトルジャンキーでどうしようもなく、チビでマザコンでどうしようもない奴だけだよ！
テメエに言われたくねえよっ！)

(ドチラカト言エバ、汝モ十分酷イガナ)

(どうしようもないを2回言いましたねえ。大事な事なので2回っ！)

(自重しろ汝等…)

(気持ちは分かるけど今は雪之丞に構っている暇は無い……漸く見つけたよ、これで活路が切り開けそうだ)

そういうと不敵な笑みを漏らす大樹。

COMPは井上の…人修羅の首元から生えている突起を示していた。

「雪之丞、感謝するよ。僕達はまだ何とか戦えそつだ」

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：20455 / 20455

撃破

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：19800 / 19800

撃破

人修羅

現在累積ダメージ：0

現在消費MP：0

ゆっきー戦闘不能!

嫌な敵、嫌な敵と書いてたら本気でいやな敵になりつつある人修羅こと井上君。

世界中の井上さんごめんなさいと謝りたいくらいなのです(汗)

そして人修羅君の首の後ろにある突起物に何かを見出した佐藤君! どうなるかなあ、因みに魔法陣も起動してますしどうなるかーですね。

所で、あの突起物って寝る時邪魔ですよな? どんな感じなんですよ…

どうでもいいこと

今日はお給料日! でもでも生活が苦しいので8割ほどは生活費などに回りました。

ほろほろ…美味しいもの食べたいなあ…

きりたんぼ美味しかったです! いやあ…初めて食べましたきりたんぼ!

また食べたいなう…

だれか名産おくれー(黙れ)

という訳で、皆さんが今月に入って一番美味しかった食べ物は何でしょうか?

にゅおおおお…来月は来月こそは美味しいものを…

ああ、おなかすいたなう…(ほろほろ)

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】現在進行中

毎日更新できた時が懐かしいなあ。

色々あって遅くなって申し訳ないですよー。

さて…そろそろかがみん達も出て来れそうかなあ。

という訳でどうぞです。

返信出来なくて申し訳ないです。

いつも沢山の感想ありがとうございますよー。そのお陰で頑張る気力が
出きます！

頑張りますねー！

(COMPが示しているのはあの突起。確かにあそこに凄まじい勢いで周囲のマグネタイトが集まっているのが分かる。となればあそこを集中して攻撃すればあの回復力を抑える事が出来る筈だ)

井上が持つ異常過ぎる回復力の元を漸く見つける事が出来た大樹。

しかし、其処を攻める為には幾つか絶対的に足りない事があった。

(問題は二つ…慢心してるとは言え、相手は人修羅と化している、前衛を疎かにしてしまえば僕達があつという間に殺される。そして…あの突起を叩き壊すには破壊力が足りない)

魔法では威力が分散してしまう為、あの突起のみを狙って攻撃する事が出来ない。

となれば物理攻撃に頼らざるを得ないのだが、現在一番威力の高い物理攻撃を持っているのはコウモクテンだけであり、その彼女ですら威力が足りていない状況だった。

更には言えば前衛を守っている彼女を攻撃に回してしまえば、大樹達後衛が隙だらけになってしまう。

ダッキは彼女自身が言う通りに戦闘系では無い為そのような真似は

出来ないだろう。

直ぐに意識を切り替えて心の海の中のペルソナと意識を繋げていく。

(クー・フリーン、いけるかい?)

大樹が持つペルソナの中で、一番物理攻撃力が高いペルソナであるクー・フリーンに話を持ちかける。

が、色好い返事は帰ってくる事は無かった。

(悪いな、今の俺じゃそこに居る姉ちゃんと同程度程度の威力しか出せそうにねえ。ゲイ・ボルグは心臓を狙う宝具だしな)

(やっぱりか…オオミツ又は、切り札を雪之丞戦で使ってしまったし、アレ以外の威力はあまり意味が無い)

(すまぬな…)

(何か…何か手は……………)

そう考えながら井上の方を改めて見る大樹。

井上は高笑いしながら半死半生と言った状態の雪之丞を甚振っていた。

上半身のみ状態で既に満足に動く事も出来ない雪之丞だが、それでもその瞳は死んでおらず今にも喉笛に噛み付かんとする表情は大樹に恐怖を与えてしまうほどだ。

（雪之丞……あんな状態になってまで、まだ勝つつもりで……どれだけ勝利に貪欲なんだろう。バトルジャンキーというかバトルフリークなんじゃ……！？）

そこでハツと何かを思いつく大樹。意識化から二つの文珠を取り出し念を込めていく。

（雪之丞、悪いけど僕達が勝つ為に利用させてもらう。君もここで死ぬつもりはないだろう？ なら……無理矢理でも受け入れてもらう！）

「全員。聞いてくれ、あの不良を少しだけでも良いから止めて欲しい」

「ハツ、何か思いついたようだなサマナー。その作戦はいけそうなのか？」

「どうだろうね、可能性が0%から1%に変わった程度かもしれない。けど何もしないよりはマシさ」

「任せてっ！ 大樹さんは私達を守るからっ！」

アリスの言葉に頷く仲魔達とみゆき。ダツキは軽く溜め息を付いた後口を開く。

『何にせよ早くしなさいよ？ 少し程度なら手伝ってあげるわ』

「ああ、これは君の力が必要だダツキ。僕に力を貸してくれるかい？」

『…ま、手伝うって言った手前、手伝わない訳には行かないでしょ。で？ どうすればいいのよ？』

「僕がこれから行う行動の後直ぐに招来の舞踏を踊って欲しいだけだよ。頼めるかい？」

真剣な表情でダツキを見つめる大樹。

そんな大樹をじっと見つめる彼女だったが、ゆっくりと向き直ると軽い口調で答えた。

『やれやれ、そういう訳ね。あんたダークの素質あるわよ？』

「凄まじく嬉しくないね。で…答えは？」

『女の艶やかな踊りが見たいだなんて、結構スケベなのねアンタ』

『ちよっ！ 大樹さんはそんな人じゃないわよっ！ てか少しは真面目に！…！』

きたけど最後は締まらねえな…なあ、横島？ 直ぐにそっちに行くぜ。そんなときや久しぶりにバトルでもするか…)

諦める気はないが、現状において自分が助かる術は何一つ残ってない事を理解している雪之丞。

最後位は喉笛に噛み付いてやりたいと思っていたが、それも叶わぬほどにマグネタイトも体力も失われていた。

「んじゃ、死ねよ」

簡潔な言葉と共に雪之丞の顔を踏み潰す。

湿っぽい音と共に、砕かれた顔面はゆっくりとマグネタイトに変換され

「それを…待っていたっ！」

同時に大樹が文珠を発動させる！

使う文字は【引寄】。対象は経った今死亡し、マグネタイトに変わっていく状態の雪之丞。

「んなっ！？ 何をする気だテメエっ！ 死亡遊戯！！！」

魔力で作られた鈍く輝く剣を長く伸ばし、一閃する井上。

だが、その前にコウモクテンが立ち塞がり防御の体勢をとり、光る剣を斧で受け止める。

徐々に押されて行くが、そこにアメリカの強化魔法がコウモクテンに放たれる。

「ヒートライザなのですよっ!」

『おおおおおおおおおおおっ!! おらあぁっ!!』

金属同士が奏でる耳障りな音と共にコウモクテンの斧が死亡遊戯の剣を打ち払った。

そしてその間にも引き寄せられる雪之丞の遺体。

それに合わせて、ダッキがゆっくりと舞い始める

「そんな死体を手に入れてどうするつもりだっ!?! あぁっ!?!」

『んなもん、てめえが知る必要何ぞねえなっ!』

「そうかよ…ならばっ殺して聞いてやるっ! 破邪の光弾!」

井上の右手から放たれる光の弾丸を全力で防御するコウモクテン。

しかしその威力は凄まじく、吹き飛ばされる事こそ無かったものの一撃で瀕死に陥ってしまう。

実際には一度完全に死亡し、不屈の闘志で立ち上がったが継続的なダメージを受け続けて居た状態だ。

『が…はっ!?!』

『メディアアラハンですわあ』

『同じく!　メディアアラハン!』

倒れかける前にサキュバスとアリスがメディアアラハンで回復している。

直ぐに立ち上がり、襲い掛かってくる井上を迎撃するコウモクテン。

「おらっ!　とつとと死にやがれっ!」

「させませんっ!　はああああああっ!」

トリプルエッジ!!

横から躍り出たみゆきの三連続攻撃が全て井上に命中する。

確実に首を狙った三連撃だが、威力が足りない所為で傷一つ付く事は無い。

それでも相手を一瞬止める事は成功し、体勢を立て直したコウモクテンが全力を一撃を放つ。

『吹き飛びなっ！！ 忠義の一撃っ！！』

「ちいいっ!?!」

彼女が放つ全力の一撃を受け吹き飛ばされる井上だが、やはりそれもダメージにはなっていない。

だが彼女達が頼まれた役目は確実にこなしていた。

そして完全に大樹の下に引き寄せられる、雪之丞の死体。

「悪いね雪之丞、君の意思は全部無視させてもらう」

言うが早いか消滅しかかっている雪之丞をCOMPに詰め込んだ。

同時にCOMPを操作していく大樹。

それを遠めで見ていたこなたが大樹が何をやっているか理解していた。

『あ、あいつ何やってるのよ…あんなことしてる暇があれば攻撃すれば良いじゃないっ』

「きつと、あれが必要な事なんだよ」

『あれが…？ サマナーだから遠い目で見てるって訳？ ああもうっ！ 体が動けばぶっ飛ばしに行くのにつ…！』

ケツアルコアトルには大樹が戦闘中にどうでもいい事をしているように見えたらしく激昂しているが、それをこなたが止める。

こなたにはこれから大樹が何をしようとしているか漠然と理解できていた。

「そか…そういう手もあるよね、意思を無視するのは、あれじゃ言う事気かなそうだしねえ…何にせよ大樹君は何かとんでもない手を考えてるよ」

『本当に心酔してるわねえ』

「あはは。惚れた弱みかな…でも、それ以上に…私は大樹君を信じてるんだ」

『こなた…はいはい、お暑いわね』

「ふふーん。今の所私がリードだしね、こんな所で終わってられないよ。イベント的にもこれが終わればR - 18的なイベントがむっふっふ」

(こなた…?)

「おおう、お母さん顔が怖いです、怖いです。ちょっとしたジョークだよ」

戦闘中に何をしてるのと言わんばかりのかなたの表情に汗ダラダラのこなた。

こなたとしては気分を和ませるジョークであったのだが、実は本音が7割ほど含まれていたりする。

『何にせよ…私達に出来る事はもう無い…か』

体が動けば助けに行きたいが、先程の反動でまともに動く事が出来ないこなた達。

「だね。せめて邪魔にならない様にここから応援するのが関の山だよ。という訳でこっそり応援しよう」

『あんたね……ま、賛成よ』

呆れたようにため息をつくケツアルコアトル。

こんな時でも諦めた様子も無く冗談も飛ばせるこなたを見て自分も安心してゐる事に彼女は何となく気づいていた。

「……………頑張れっ、大樹君」

彼女達が出来る事は大樹と仲間達を信じる事だけ。

だが、想いと言うものは、とても強い古代からの呪術でもある。彼女達ほどに強い能力者の念ならばそれも一つの術として、手助けになる可能性があった。

艶やかに舞い続けるダッキ。

その踊りはあらゆる物を引き寄せ、魅惑してしまうほどの美しさがあった。

ゆっくりと華麗に舞う度に、彼女の周りのマグネタイトが活性化しているのが分かる。

そしてそのマグネタイトはゆっくりと大樹に…いや、大樹のCOM Pに流れていく。

膨大な量のマグネタイトが大樹に集まっている事に井上は気づいてしまう。

「ひやはっ！ 何楽しそうな事してるんだてめえ…俺が邪魔してやるよおおおおっ！！」

『させるかあっ！ 喰らいなっ！』

「しゃらくせえっ！ ジャベリンレイン！」

コウモクテンの攻撃を容易くないなし、後ろ回し蹴りの要領で魔力の弾丸を放つ

一撃一撃が特大威力クラスの魔力レーザーに全員が防御に回らざるを得ない状況に陥る。

だが、そんな中コウモクテンだけは直撃を受けつつもダツキの方に向かう井上に食いついてきた。

『「」は通さねえって、言ってるだろっがあああああっ！』

高らかに雄叫びを上げると、全力で斧を振り被る。

後ろから首を叩き落とさんと振り落とす　　！！

だがその一撃は首下の突起物に容易く防がれてしまっ…

「！！　てんめええええええええっ！　死ねっ！　てめえは殺す
っ！」

首を攻撃されて怒り狂った井上がコウモクテンの方向に振り向き口を大きく開く。

途端に集まる強大な魔力。再び至高の魔弾を放とうとして、その時

『目覚めなさいな、我が演舞で、さあ…いらっしやい。　招来の舞
踏』

「回復終了…さあ、来い！　英雄・伊達雪之丞、召喚…！」

COMPから光を放ち飛び出してくる悪魔。

それがダツキ達の前に降り立った。

「な……て、てめえ……てめえ何で生きてやがる!!」

至高の魔弾を急遽取り消し、ありえないものを見るような表情で叫ぶ井上。

そこには

『そんなもん、俺が知るかよ。分かっているのは………てめえを全力で！ぶつとばせるって事だけだっ!!』

全身に魔力を宿し、黒い鎧を身に纏う英雄・伊達雪之丞が、不敵な表情で立っていた。

ツイツイミトル

現在累積ダメージ：20455 / 20455

撃破

テスカトリポカ

現在累積ダメージ：19800 / 19800

撃破

人修羅

現在累積ダメージ：1

現在消費MP：1

人修羅の一部分に軽い罅が入っている様だ……………

人修羅の回復力が落ちてきている……………

周囲のマグネタイト量が少なくなってきた……………

英雄・伊達雪之丞を無理矢理仲魔にした。

死亡した仲魔をCOMPから召喚する、ダツキのスキル。

という訳で、死ぬまで放置で其処から文珠で引き寄せました。

これで通常文珠は無くなりましたが、良い使い方かなーと思っ
たり。

今回は相手の弱点を知ったユツキーが暴れますよ。

かがみん達も出てこれるかなあ。もう直ぐおわりだ！

どうでもいいこと

全身がだるい…お休みが欲しいなう（涙

明日から朝早い上にまた帰りが遅く…まあ、流星に23時とかには
なりません

20時とかはザラになりそうですね…生き抜け私！

そう言えば日曜日に弟と和食屋さんに行きました！

ちよこつと豪勢にうな重セットを頼んだのですが、中身がしょぼか
った…

え…なにこれ…大きな重箱の中にしっぽの部分のうなぎさんがちよ
こんと

のってるだけ…え…？ これで1600円…？

ふふ…もう行かないよ…えぐえぐえ。

皆さんはお店屋さんに行ってショックを受けたことなどありますか
ー？

重要な選択肢ルート確定 【無心の心】 現在進行中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7236r/>

女神異聞録～違術使いの召喚士～

2011年10月19日00時10分発行